魔術学院の平和主義者

マニマニ

あらすじ：
とある国のとある魔術学院の教師。シールは今日も平和を楽しんでいた。
しかし、まるで彼の平和を打ち砕かんとするように、百歳オーバーな美少年学院長と超絶鉄面皮女教師、そして厄介すぎるトラブルを抱えた生徒達が彼に襲い掛かる。

平和を愛するシールが、自らの平和を守るために戦う学園ファンタジー

掲載ページ:
https://ncode.syosetu.com/n2457j/

序章

第零話 はじまり はじまり

　おおよそ、五百年も前の事
　未だ、マナの本質を、魔力の根源を理解できずにいた時代の事
　未開の地多く、それ故に豊かであった時代、人は、魔の者達との争いを続けていた
　魔の者、冥府の神より魅入られた力は圧倒であり、それ故に人々は劣勢を強いられた
　魔はマナを支配し、己が眷属を産み、人々を容赦なく喰らい、そして殺した
　人々は襲われ、喰われ、住む土地を奪われ、追われた。
　苦難の年月は続き、遂には人々は小さな土地に追いやられ、魔は繁栄を極めた。
　人々は、自らの破滅を悟り、そして絶望した。最早此処までだ、と。
　しかし、そんな絶望の最中、一人の少年が、幾多の神々の寵愛を受ける――

「せんせー!!」
「はい？」

　此処は、草の根一つ残らない荒れ果てた荒野ではなく、闇が蠢く魔の城でもなく
　暖かな陽の光が斜から差し込む、暖かな勉学を学ぶ為の学び舎の一室。
「じゃあさ！ じゃあさ！ そのカミサマのちょーあいってのを受けたのが」
「そう、君たちも良く知るベルレイン様、勇者様とも言われているね」
　部屋には一〇、一一才程の幼い子供達が三〇人程、世代交代の度に傷を残されいろんな落書きの残った机の前に並んで座り、眼前の教師の言葉に耳を傾けている。

そしてその教師、今、子供達に古き歴史を語り、伝えている男。黒が色褪せた様な灰色の頭と、何処か気の抜けたような微笑を続ける若い教師は、朗々と言葉を続ける。
「ロロ、楽しみなのはわかるけど、僕の話は最後まで聞いてね？」
「はーい」
　元気よく掌を上げた少年は、意外にも聞きわけ良くそう頷いて席に付く。朗読を続けていた灰色髪の青年教師はニッコリと笑みを浮かべると、そのまま言葉を続けた。
　勇者が国からの命を受け、魔王を退治する旅に出た話、
　道中、様々な危機を乗り越え、仲間を集めていく話、
　最後、魔王と対峙し、見事に魔王を打ち破った話、

　――こうして、神々の力を授かり魔を討った者を勇者と呼ぶようになりました、とさ」
　さて、と言葉を区切った。
「何か質問はあるかな？」
「せんせー」
「なんだいパーム」
　パーム、と呼ばれた少年は瞳をキラキラ、というかギラギラと輝かせながら、大きな声で
「今はもう魔王っていないの!?」
　期待のこもった彼の質問に対して、教師の青年─シールは素っ気なく首を振った。
「居ないね。五百年前に勇者に倒されて、それっきり」
　しかし、パーム少年は挫けず、
「じゃ、魔族は!?」
「元々数は少ないし、生き残った魔族たちは人々と平和条約を締結したよ」
　容赦のないシールの追撃に、それでも少年は諦めない。
「な、なら、勇者は？」
　と、その質問に対してはシールも、ふむ、と一度息をついて

「一応、末裔の方達は今も生きてるよ。同じく五百前に神々から授かったと言われる聖人の力を今もその身に秘めているし、国からも認められているよ」
　パームは気力を取り戻し、再び瞳に輝きを灯して
「じゃあ、じゃあその力で！」
「うん。農場でとても素晴らしい農作物を生産しているよ。貴族御用達」
　パームはおろか、クラスの子供達は一斉にずっこけた。
「なんでだよ！」
　パームが代表で突っ込む。そのあまりのオチに。
「なんでっていわれてもね……戦争利用とかよりもよっぽど平和だよ？」
　シールは不思議そうに首を傾げた。
「もっとこう、強大な魔物と戦ってるとかさあ！」
「ああ、そう言う場合は流石に出撃したりもするらしいけどね」
「伝説の剣を片手に!?」
「いや、伝説のクワを片手に……どうしたんだい、パーム」
　パームは沈黙し、震え、そして叫んだ。
「かっこわるい！」
「かっこわるいって……」
「勇者とか魔王とかさ！ もっとカッコイイのねえのかよ！ つまんねえよ！」
「君達は恵まれているのさ。血なまぐさい戦も無い、国家間同士の醜い争いも一先ずは終結したし」
「俺はそっちの方がよかった！」
「そう？　パームのお父さんやお母さんや友達がどんどん死んでいっていいのかい？」
　しん、と、パームも、そして彼と一緒に好奇の瞳を向けていた他の子供達も、一斉に言葉を噤み、俯いた。
　シールはうん、と頷く。こういう事がちゃんと理解できる子供達の真っ当な感性に安堵した。そしてだからこそ彼らに向けて、シールは更に言葉を続ける。
「君達は平和な時代に生まれた。確かにそれは今を生きる君たちには理解しにくいものだろうし、退屈だと感じてしまうのも、分かるよ」
　彼ら一人一人に目を向けて、シールはゆっくりと、言い聞かせるように、

「でも、理解しなきゃいけない。今の平和がたくさんの人たちの苦労の上にあるってことを」
　穏やかで、だけど熱のこもったその言葉をシールは続け、だけど最後には笑顔で、
「その上で、この平和と幸せを噛みしめて――」
「シール先生」
　締めくくりの言葉を遮る部外者に、シールは閉口した。
　彼の言葉を遮った部外者、それは彼と同じく教職員の制服を身に纏った、彼と同じく若い女性だった。その見目は美麗であり、スレンダーな体で地味な制服を着こなす、鋭い視線が特徴的な彼女は、シールに向かって無言で近づいて行く。
「……なんでしょう、リーン先生」
　シールの質疑に対して、その女教師、リーンは平然と口を開いた。
「勇者の子孫が謀反を起こしました」
　つい今さっき掲げた『平和』と『幸せ』が音を立てて崩れていく音が彼には聞こえた。
「……何で？」
「勇者がつくっている【キャロットＺ】の取引値を巡って市場の方々とトラブルに」
「……最近雨、少なかったもんね……で、何で僕が呼ばれるの？」
「学院長が、「面倒だからよろしくー」と、」
「……」
「ちなみに今、勇者の子孫は「家の野菜は世界一なんじゃぁああああ！」とか言いながら騎士団一個小隊をボコボコにしてます。若干酔っぱらってるっぽいです」
「……あれだけお酒は抑えてと言ったのに」
　目頭を揉むように抑えるシールを尻目に、リーンは、彼の肩をしっかり握り
「それでは行きましょうか」
「嫌です。そんなトラブル当事者で解決してください」
「複数の神々の寵愛を受けた【勇者】の血統がどれだけ厄介か貴方も分かっているでしょう」

「だから嫌なんですよ、この前、暴れる【魔王】の子孫抑えて死にかけたんですよ？」
「今回も死にかければいいじゃないですか」
「鬼ですか貴方は……嫌だ、僕は嫌ですからね。学院長にそう伝えてください」
　シールはそう言い切って、リーンに背を向けた。リーンは「わかりました」と、頷いて、
「【雷撃よ】」
　雷呪文を唱えて
「せい」「オ フゥ!?」
　シールを電撃で沈めて、気を失った彼の手を触れ、
「【彼の地へ運べ】」
　転移呪文で、その場を去って行った。
　残されたのは虚しく地面に転がる歴史の教科書と、大人しく二人のやり取りを見守っていた三十人程のシールの教え子の子供達。
　何を言うべきなのか、誰もが言葉失う中、シールと質疑を交わしていたパームが、
「平和って……大切なんだな」
　彼の呟きに、クラスの全員が等しく頷いて見せる。
　因果な事に、シールのその不幸が、彼らに平和の大切さを教えてくれたようだった。

　これは
　勇者と魔王の戦争も無く、国家同士の争いも一先ずの収束を見せた平和な世界で、
　それなのに何の因果か平和に恵まれない、平和を愛する魔術学院教師のお話。

六／一九
なんと、今更ｏｐ追加、おそいね！

魔術学院の平和主義者

エレナ編

第一話 シールとリーンと校長と

　ガイディア王国、王都ガイディア。
　アスファル大陸の中心からやや南に存在する平地に構える大都市。人口万人規模の大都市。既に数百年の歴史ある大国だ。近年、他国との戦争状態にあったが現在は終結し、落ち着きを見せている。
　そんなガイディア王国において最も大規模な魔術研究施設にして研究施設。オルフェス学院、オルフェス学院教師に与えられる宿舎の一室。
「……ああ、平和だ」
　オルフェス学院初等科クラス担任教師にしてこの部屋の主であるシールはそう言ってのんびりと息をついた。見るだけで気が抜けるような穏やかな顔立ちから零れる笑みは、彼に対しての緊張を根こそぎ持っていってしまうようなほど、なんとも間の抜けたものだった。
　遠めには灰色にも見える白と黒の入り混じった髪を揺らして、彼は良い香りのするお茶を置いて、手に収まった本のページを読み開く。
「…………ふぅ……ん」
　この国一の蔵書量を誇る学院の図書館で発見したこの本は、【魔術】、つまりシール含めた魔術師達のルーツを探る論文で、飛躍した文も多々あるものの、
中々興味深い観点からの調査を進めていて、シールの興味を惹かせていた。
　面白い
　主流となる現在の魔術師のルーツをぶち壊すような、豪快な論説だ。自身の説を信じて疑わない自信、それを立証する為の血の滲むような研究成果の数々、傲慢ともとれるその強気な論舌はシールには心地良かった。コレを読んだのが本格的な研究者であったなら、その傲慢さは鼻についたかもしれないが。
「……だから蜘蛛の巣を被ってた、のかもね」

こうした異端とも言える言葉を唱えると、政治色も入り混じる学問の世界は大抵、排除されがちだ。故に大きく学会では取り上げられず、片隅に忘れられたように保管されていたかもしれない。
　だからこそこうしてシールの掌に今、収まっている訳だが。
「…………ふぅ」
　著者の熱論にも力が入ってきたところで、シールは息をついて、カップに収まっているお茶を口に含む。軽い保温魔術をかけていたため、心地良い暖かさと良い花の香りがシールを包んだ。
　ああ、平和だ
「……ん、と」
　と、窓の外から声がする。聞いているだけで元気になれるような子供達の声だ。
　窓から覗いてみると、此処からも見える広い校庭で子供達が楽しそうに笑いながら駆け回っている。手には魔術の補助具である杖を使って、地面の土を利用した泥水を生成し、ぶつけ合って、泥んこになっている。
「これはまた、他の先生から苦情が来るかもしれないなあ」
　あの魔術を教えたのはシールだ。怪我をしないで済む上、魔術の練習にもなると思い教えたのだが、思いの外子供達に好評だったらしい。最近はしょっちゅう泥だらけで遊んでいる。
　今度は浄化魔術も教えなきゃなあ
　そう思いつつ、シールはその顔を緩ませる。こんなくだらない事で悩める自分がいるという事も、平和という証拠だ。それがシールには嬉しかった。
　いつまでもこんな日々が続く事は、きっととても素敵な事だ。
　シールはそう思って笑い、そのまま再び読書を再開しようと本に手をかけて……
「シール先生」
　背後からの呼びかけに、表情を強張らせた。
「……えーっと」
　振り返る。知った声だ。振り返らなくても誰かは分かっている。
　扉の前にいつの間にか立っていたのは、とても、そう、とても端麗な女性だっ

た。白磁のように白く、滑らかな肌。あまりに細い身体に、澄み切った瞳にスッと伸びた鼻、潤んだ唇。
　何より特徴的なのは、長く伸ばされ、頭の後ろで括られたその蒼の髪。瞳と同じその蒼の髪は僅かに自ら光って見える程に美しく、端麗な彼女の容姿と合わせて見ると最早この世のものとは思えぬほどだった。
　そんな、絶世の美女を前にして、シールは僅かに表情を引きつらせ
「うわぁ……リーン先生」
「うわあ、とはなんですか」
　失礼すぎる呼び方に、リーン先生と呼ばれた彼女は無表情に返した。
　別に彼の物言いに腹を立てているわけではない。彼女は常に無表情だ。どれだけ予期せぬ事が起ころうとも、彼女の表情は変わらない。学生達からは鉄面皮なんていう仇名まで付けられているとかなんとか。
　そんな彼女とシールとの関係は、決して悪いものではない。無いのだが、こうして彼女が自分を呼びに来る時は、大抵
「学院長がお呼びです。はやく来てください」
　リーンのその一言に、シールは頭を抱えた。やっぱりか、と。
　オルフェス学院学院長、ミスト。彼の〝お呼び〟がかかったのだ。
　そしてこのパターンは、十中八九、というほぼ一〇〇パーセント、確実にシールの望む平和な日々をぶち壊すような〝頼みごと〟を持ってくるのだ。果たしてそれがどんな内容かまでは分からないが、しかし厄介事なのは確定だった。
「……行きたくないなぁ」
　行きたくなかった。物凄い行きたくなかった。何故あの男はこの上なく平和を満喫していた今正にこの時に声をかけてきたのだろう。
「私も行きたくありません」
「じゃあ、何で学院長のお使いやってんですか」
「死なばもろともです」
「性格悪い！」
　シールは撃沈し、頭を伏せた。が、リーンはその冷たい視線をシール注ぎ続ける。シールは僅かに汗を掻いた。逃げれる気がしない。別に完全に拒否するつもりは無い。そういう勝手をしていい話じゃないのもわかっている。が、流石にも

う少しだけ、この一時を享受していたいのだ。折角の休日なのに。
　そっと、ポケットの魔導機に触れる。中には転移術式が込められていて、起動すれば即座に発動すれば、逃げれる「【転移】」だろうか……て、
「え？」
「やあ、シール先生。調子は良好かい？」」
　顔を上げれば、何故か目の前にはこの学院の学院長がいた。
　シールが無言で横を見るが、リーンは知らぬ顔だ。が、間違いなく彼女が犯人だ。【転移魔術】でシールごと此処へと運んだのだ。
「……リーン先生？ 転移術を勝手に発動にしないでください」
「使わなきゃ逃げるでしょう」
「物事は決め付けるものではありません」
　逃げるつもりではあったけども。
　シールは溜息をつきつつ前を見る。豪華な意匠の施されたソファーには幼い子供──に見える男、ミスト学院長がニコニコと笑みを浮かべながら座っている。
　短く綺麗に切りそろえられた紺色の髪にクリクリとした瞳、背丈も低く見た目は一〇歳くらいだろうか。しかしその実、既にその年は一〇〇年をとっくに超えている、正真正銘の古狸の妖怪だ。
　そんな彼がこうしてニコニコ笑みを浮かべている。嫌な予感しかしなかった。
「……それで、今日は何のようなんでしょうか？」
　シールは半ば覚悟を決め、もう半ば逃げ腰になりながら、ゆっくりとそう尋ねた。するとミスト学院長は笑みのまま、
「うん、実は〝ちょっと〟頼みたいことがあってね」
　ほらきた。
　予想できた事なのだが、いや全く、本当に当たって欲しくなかった。こんな予想。
「実はこれから用事が……」
「部屋でお茶飲んで論書読んでにやつくことは用事とは言わないよ」
「なんですか、人の生活を監視でもしているんですか」
「いや、君の行動パターンが単純すぎるだけ」
　はっはっは、と学院長が笑い、それにつられてシールも乾いた笑い声を上げげ

た。そして次の瞬間、シールはポケットの魔道機械に魔力を注ぎ、呪文を発動した。
「起動せ──」
「【自壊】」
　──発動した、つもりだった。だが気が付けばシールの手の平に隠されていた魔動機は粉みじんになって砕けた。静かに横を見ると、リーンが指先で杖をクルクルとさせて遊んでいた。
「……酷いじゃないですか。作るのけっこう大変だったんですよ？」
「逃げようとするからです」
「休日なんですよ。僕」
「私だって午後までは休みでした」
「なら一緒にお茶しません？ これから」
「じゃあ僕も一緒に行こうかな」
「「やめてください」」
　二人は綺麗に声をそろえて拒否した。こういう時は二人とも息は合うのだ
　ミストはそれを聞いてわざとらしくおいおいと泣きだした。見た目は子供が泣いている姿なのだが、どうしようもない胡散臭さが全く拭えていなかった。
「……で、何なんです。その〝ちょっと〟っていう頼みごととは」
　するとミストはぴたりと泣くのを止めて、顔を上げる。そしてぴらりと一枚、射影機と呼ばれる
「はい、これ」
「……なんです？ うちの生徒ですか？」
　その映っていた学生、金髪の少女を一目見てシールが抱いた感想は『綺麗だ』というものだった。別にシールは少女趣味では無いが、そう素直に思えるほど、どう考えてもまだ子供、だというのに非常に整っていた。熟しきっていない幼さすら可憐と見れるくらい、整いきった姿をしていた。
　だったのだが、しかしそれがどうしたというのか。
「その子が今回の依頼だよ」
「はい？」
　言っている意味が分からず首を傾げるシールに、ミスト学院長はにっこり微笑

み

「その子を、叩きのめして欲しいんだ。君に」

初投稿、おかしな所があれば指摘願います。
八／一〇、
改稿完了、ストーリー的には変化ないですがこまごまとした所では変化してます。
エレナ編は荒い所多いから全文改稿しておきたいなあ
二〇一二／五／二八
再改定

第二話 エレナという少女

「叩きのめす、ですか」
「そう、叩きのめす」
　学院の学生に向けるにはあまりにも物騒なその言葉に、シールは僅かに眉をひそめた。目の前の男が、ミストが此方にわざわざ依頼をする時点で決して楽な依頼が飛び込むとは思えない。
　とはいえ、流石に此処まで突拍子も無い依頼というのはあまり覚えが無い。
「じゃ、よろしくお願いね」
「いや、ちょっとちょっと」
　勝手に話を終わらせようとする学院長にシールは手を振った。
「ちょっと待ってください。もう少し具体的に、指導しろと？」
「それでも良いよ？ 兎に角その子を〝何とか〟して欲しい」
「何とか……って」
　曖昧過ぎる。なんなんだそのほわほわとした依頼は。
「ま、実際話してみれば何が問題か分かると思うよ……ただまあ」
「ただ？」
「少なくとも、〝君に依頼する程度のモノ〟だと言う事は理解しといてね」
　ミストの声は子供のように明るいソレとは違い、何処か老練な、彼の本性を現すような暗い色の付いたものだった。シールは溜息をつく。
「……どんな問題が」
「【加護持ち】かもしれない。確定ではないけど」
「……物凄いヤバイじゃないですか。それ」
「ヤバイよ。だから君に依頼している」
　シールは重ねて溜息を吐きだした。分かっていたが、どうしてこの男はこうも

厄介な問題を何処からともなく持ち込んでくるのか。しかも今回は学院から。まあそもそも、国内最高の魔術教育及び研究機関、問題の無い日々、という方が珍しいのはよくあることではあるのだが……
「それで、この子の名前は？」
　半ば、本日の休暇含め数日分の余暇が吹っ飛んだと覚悟して、シールは問うた。ソレを理解したのか、学院長はニヤリと笑い、そして写真を指差して、
「エレナ・ロズ・ゲルター。この国で最も名高い貴族、ゲルター家の長女さ」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　オルフェス学院・中庭。長い歴史あるこの学院は、かつては高い魔術の素養があり、且つ高名な貴族しか入学の許されなかった為かその景観も優れている。巧みな職人達によって手がけられ、木々の自然と噴水などの人工物の入り混じったその景観は、時間の経過した今も学生達にも、教師達にも親しまれている。
　そんな、日向ぼっこに丁度いいような平和な場所の木影にて、
「……鬱陶しい」
　エレナ・ロズ・ゲルターは陰鬱な溜息と共に、そんな風に愚痴った。
　鬱陶しい　退屈だ　不愉快だ。
　陰鬱な気が体中を纏わり付いてる。まるでお腹の中にでかい石を詰め込まれたみたいに身体が重い、何かをする気も何かを考える気も、起こらない。
「つまら、ない」
　退屈、ただそれだけのはずなのに、どうしようもなくエレナの心は、身体は重かった。病に犯された病人のように、意思すらなく空を仰ぎ、ほとほとに堕落しきっていた。
「……っは、ぁあ」
　身体を縛る重い鎖を断ち切るように、エレナは原っぱに顔を埋める。
　土の香り、草の青臭さと瑞々しさを、そこから仄かに溢れてくる優しいマナに唇で触れて、取り込んでいく。体中に広がる毒気を払うように。
　すこしずつ、静けさを取り戻していく心と身体。彼女は息を吐き、そしてその

まま、草原の優しきマナの心地良さに身体を委ね、眠ろうとした。
だが、
「エレナ様！」
そんな彼女の眠りを妨げ、穏やかな時間を壊す無粋な声。
エレナは憂鬱気に瞳を開き、身体をゆっくりと起こす。視界に入ったのはエレナと同じくらいの年の学生達。まるで貼り付けたような薄っぺらい笑みを顔にくっつけて、こっちに近づいてくる。
「……鬱陶しい」
エレナはソレを確認して、うんざりとした口調でそう言葉にした。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

エレナ・ロズ・ゲルター一五歳
王家との縁も深い、最大の権力を有するゲルター家の長女。幼少期から極めて優れた魔術の才能を持っている事が分かり、オルフェス学位への入学を果たした。平均的な魔術師よりも遥かに膨大な量の魔力を保有しており、また、魔術術式を構成する為の平行思考や、必要知識を詰め込む学問など、あらゆる面で優秀な成績を示した、まさしく生まれながらにして全てを与えられた天才児。
シールとて、彼女自身は見た事が無くともゲルター家の優秀な娘、という話は流石に耳にした事はある。今回の件があるまでは忘れていたが。持って生まれた人間というのはいるものだ、程度の感想しか抱いてなかった……が、
「これはまた……中々酷いもので」
中庭の木陰で集う学生達。エレナと、その同学生を見てシールは頷く。
学友同士の親しげな交流、と見えなくも無いが、しかしよく見ればその状況に著しく不自然な所がある。学友たちの中心となっているエレナ、その彼女がまるで一切笑顔を見せていない。そして周囲の者達はそんな彼女を無視するようにのべつ幕無しに喋り続けている。
「エレナ様。今日はどういたしましょうか」
「エレナ様、ご気分は如何ですか？」
だが、声をかけてもエレナは反応をよこさない。しかし彼らはそんなことお構

い無しだ。エレナに声をかけているのに、そのエレナの事を彼らは無視している。
　なんともはや、異常だ。正直な所、気味が悪い
「……あれ、なんです？」
「エレナの学友ですよ。見ての通り」
「見ても僕には分かりませんけどね。正直相当気持ち悪い」
「正確には、ゲルター家の権力に引き寄せられた、学友達です」
「そういうのは学友とはいいません……」
　貴族の子達にとって、この学院生活は高度な魔術を学ぶ機会の場であると同時に、学び舎を共にした貴族の子供達と交流し、貴族同士のコネを作る場所でもある。この国の貴族の定義は魔術師とイコールではないが、高い地位を持つ者は魔術的素養を持つものが多い。魔術社会と呼ばれるこの世では魔術的素養は強力なアドバンテージだ。
　それはシールとて理解してはいた。しかし、
「学業が本分なのに子供が何してるんだが……今中等クラスは授業中では？」
「サボりでしょう。頻繁なようで、最近ではあの取り巻きの子供らも同じように授業を抜け出す事が多くなっているようです」
「……担任の教師の方は？」
「新任のリナが。散々取り巻きの子達に暴言を吐かれ既にグロッキー状態です」
　酷い状況だ。シールは顔に手を当てて呻いた。
　学院長の口にした【問題】を別として、普通に職員会議レベルでは無いのか？
「ゲルター家の存在が余計に複雑化させているようです。最近も、エレナが教室で魔術を暴発させ教師を傷つけたようなのですが、ゲルター家からの介入が」
「……ゲルター家はまともな家の筈では？」
「どうやら子供に関してはそうではないようです」
　オルフェス学院は基本、貴族と平民との間に格差を設けていない。貴族同士のコネクション構築などまでは否定しないが、流石に実家が介入してくるのはルール違反だ。
「ソレを言えば、あの取り巻きの子達もですけどね。最近ではゲルター家の名をいいように使って脅して好き放題しているそうです」

「好き放題？」
「女子学生に暴力を振るいそうになったとかなんとか」
「……」
　頭が痛い。どうしてこうなるまでほっておいたんだ。
「悪化したのは最近です。多分エレナの教師事件でタガが外れたのでしょう」
「学院長の依頼云々以前に、まずはそこから何とかしないといけませんねえ……」
　果たしてそれがシールの仕事なのか、疑問なのだが。別学年の別クラスの生徒は管轄外、なんて冷たいことを言うつもりは無いが、こうまで泥沼になってしまった問題のリカバリーは、当然ながら大変だ。
　せめて、他の先生たちから色々と話を聞いてから、動きたいなー
　なんて事を、いまだしつこくシールが先延ばしを考えようとしたのだが、
「いいから行きますよ」
「え、いや、ちょっと」
　シールが何かを言おうとする前に、リーンの転移が発動した

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　気持ち悪い。
　エレナは先ほどから変わらず木陰に身体を預け、静かに目を閉じている。先ほどと違うのは、彼女の周囲に、取り巻きたちがなにかしらを喚きながらうろうろしている事だ。
　彼らは此方が何も反応していないのに、先ほどからキャンキャンと喚き続ける。
　なんだって、こいつ等はこんなにも五月蝿いのだろう。いや、そもそも何時からこいつ等は私の周りを纏わり付き始めたのだろう。エレナは思い返してみるが良く覚えてはいない。気が付けばそこにいたような気がする。虫か何かが沸いて出るように。
　そもそもエレナはゲルター家の長女である以上、こういうハイエナたちは常に存在した。だから何時もの事だった。何時ものように、不愉快で、鬱陶しかっ

た。
「……」
　反応すれば余計に調子に乗る。だから無視する。耳を塞いで地面に転がって、外の世界の情報を一切遮断する。内に閉じこもっていれば、何が起きても気にならない。眠って、忘れてしまおう。
　そう思っていたのだが、しかし、その直前に
「……ん？」
　肌で感じる予兆、マナの乱れ、そして近場に現れるマナの光。唐突な光に驚く取り巻き達を無視して、エレナはじっと光の中を観察した。
　現れたのは二人の影、一人はエレナも知っている。リーン、術式構築の授業を担任する教師だ。術式詠唱、構築術は一流以上。王直属の宮廷魔術師すら困難とする魔術を眉一つ動かさずに構築しきる、エレナから見ても天才的な魔術教師だ。
　そしてもう一人は……誰だろうか。白と黒の入り混じって灰色に見える頭。どこかのんびりとした印象の、平和ボケした顔。なんだか生徒達に一瞬で見下されて侮られそうな、そんな顔の男だ。
　第一印象で、どうでもいい男、とエレナは切って捨てた。
　問題なのはリーンだ。
　彼女の授業は何回か受けた事があるが、彼女は此方の事をまるで恐れるそぶりを見せない。取り巻きたちが授業中、我が物顔でベラベラ喋り始めたと思ったら、途端に彼女に爆発呪文をぶつけられた事がある、らしい。エレナは寝ていたので気が付かなかったが。
　そんな彼女が此方に近づいてくる。警戒する取り巻きたちを完全に無視し、エレナの前に立つと、開口一番、
「エレナ。話があります」
「嫌よ」
　即答した。別にリーンが何をいいだすつもりなのか全く分からなかったが、しかし唯々諾々と彼女の言葉に従うのは気に入らなかった。ただでさえ周りの馬鹿どもの所為で気分が悪いのだから。
　が、そんなエレナの拒絶を、リーンは全く表情を変えぬまま

「貴方の事情なんて知ったことではありません。いいから来なさい」
「……はあ？」
　エレナは睨みつけ、リーンはソレに憮然と視線を返す。二人の視線の間に火花が散り、平和で暖かな中庭の雰囲気が急激に寒々しいものへと変貌して言った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　……酷い状況だ。
　シールはソレを言葉に出さずに、ただ頭を抱えた。
「父に頼んで、学院にいられなくしてあげましょうか？」
「単位を落として学年を上がれなくしますよ」
　ろくでもない脅しあいが目の前で展開している。平然と家の権力を翳し、相手を脅迫するエレナもだが、その言葉に脅迫で返すリーンもどうなのか。というか教師の発言じゃない。どう考えても。
「貴様！　エレナ様になんという事を！」
「今すぐ謝罪しろ！」
　と、リーンの暴言に取り巻きたちが騒ぎ出した、が、
「【風雷爆撃】」
　次の瞬間、激しい爆発音と共に取り巻きの子供達は綺麗な放物線を描いて吹っ飛んでいった。一応、一応怪我はしない程度の魔術であるはずなのだが、しかし教師が生徒を爆発させるのはどうなんだろうか。怪我させていないからセーフだろうか。いや駄目か。
「貴方は教師の一人を魔術で傷つけたそうですね」
「虫を払ったことなんて一々覚えていないわ」
「一応、知識を詰め込む頭があるなら、自分がしでかした事がどういうことなのか、理解できるでしょう」
「分からないわ。どうなるのかしら、私は」
「その身を持って体験してみますか？」
　リーンが僅かに目を細め剣呑な光を宿らせる。シールは止めるべきか、と前に出ようとすると、

「鬱陶しいのよ」
　一言、エレナが口を開いた。
「鬱陶しい鬱陶しい鬱陶しい。私の前に立つな。視界に入るな。イライラする」
　まるで魔に誑かされた様にエレナは呟く。同時に彼女の体の内から魔力が、一流の魔術師をも遥かに超える膨大な魔力が溢れ、彼女の周囲を渦巻き始めた。
リーンは僅かに首を傾け、シールは眉を潜めた。
「目障りなのよ。今すぐ消えなさい。それが嫌なら今すぐ消してやる」
　空ろな響きを伴った声で、最後の警告をエレナは告げた。その瞳は濁った殺意に満ちていた。そんな彼女の心に合わせるように、魔力が不吉な色を発し、荒れ狂い始めた。
　重症だ、これは。シールはそう認識した。
　学院長の話云々や、子供達との関係ではなく、彼女の心が。
　これは、間を空けたほうがいい。シールはそう感じ、リーンを止めようとした、が、
「わかりました。では私は消えましょう」
　と、シールが声をかける前にあっさりと後ろに下がった。随分と物分りがいいな？　　とシールは意外に思っていると、リーンはそのままシールの肩を逆に叩き、
「では、後はよろしくお願いします」
「ちょっとまてい」
　シールは何時もの丁寧口調も忘れて、軽やかに転移魔術を発動させようとするリーンに突っ込みを入れた。流石にあんまりだ。
「なんですか？」
「煽るだけ煽った挙句ぶんなげで逃げないでください」
「彼女の惨状を理解できたでしょう」
「もっと優しい伝え方があると思います」
　何故わざわざ巨大な爆弾を設置していくのか。そして何故押し付けるのか。
「せめて宥めるのぐらい手伝ってください」
「私もこれから仕事です」
「なんの仕事です」

「かつて世界を支配していたらしい復活した古代龍の撃退です」
　シールは頭を抱えた。今度は別の意味で。
「……何あっさり死地に向かおうとしているんですが」
「何時もの事でしょう」
「ああ、何時もの事ですね……死なないでくださいね？」
「保障はしません」
「そこは必ず帰ります。とでも言ってください」
「根拠が無いことは言いたくありません」
「美味しいケーキを買っておきます」
「帰ってきます。必ず」
　そんなこんなでリーンは転移でその場を離れた。転移で発生するマナの光が消えるまで手を振っていたシールは息をついて背後を見る。そこには身体をゆらゆらと揺らしながらシールを睨みつけるエレナがいた。
「……」
「……」
　エレナから溢れ出た魔力が辺りのマナも支配して渦巻き続ける。濃厚な敵意の圧力の中で、シールは顔を引きつらせ、空を仰ぎ、頭を掻いて周囲を見渡して、その後大きく息を吸って吐き、前を向いて、
「お茶でもしない？」
「死ね」
　シールは綺麗な放物線を描き、吹っ飛んでいった。

八／一一
改定
二〇一二／五／二八
再改定

第三話 教育指導開始

　オルフェス学院初等クラス、魔導歴史担当教師シールがミスト学院長に、ゲルダー家長女エレナの〝指導〟を命じられて三日が経過した。その間、どのような指導が行われていたのかというと、指導一日目
「やあ、こんにちわエレナ」
「【爆散】」
「うぎゃぁあああああ!?」
　指導二日目
「や、やあ、奇遇だね」
「【邪魔よ】」
「ぎゃあああああああああ！」
　指導三日目

「「「……」」」
「え、皆、ちょっと落ち着いて、いや本当、まってったらぁああああ」
　エレナは、自分の従者気取りの連中に連れて行かれる男を呆れながら見つめていた。
　これで三日、三日連続であのシールという男はエレナに特攻し、玉砕している。魔術で吹き飛ばされ、叩きのめされ、挙句生徒達にリンチされようと今、連れ去られた。
　一体あの男は何がしたいんだろう。
　至極どうでもいい男と評価していたが、その異常なまでの粘り強さは不思議だった。大抵、エレナが力を行使すれば、大抵の人間はそれですぐに逃げていくのに。

そう、逃げていく。皆逃げて、畏れて、目を逸らす。

　寄ってくるのは、ゲルダー家の権力に釣られて目を濁らせた馬鹿どもだけ。

「エレナ様、申し訳ありません、あのような下賤な」

「五月蝿い」

　そう言って切り捨てると、従者気取りの少年はエレナの逆鱗に触れる事を恐れ、すぐに押し黙った。エレナはそんな哀れな少年をせせら笑った。くだらない。なんて下らない奴等だ。

　少しだけ沈黙が訪れる、しかし暫くするとすぐに、

「エ、エレナ様。ご気分が悪いのならお茶でもしませんか」

「待て！ 私が先にお誘いするのだ！ 順序を守れ！」

「そんな！ いつ決めたのだそんなこと！」

「□□！□！」

「□□！□□□！□！」

　何時ものように、勝手に馬鹿どもが話を進めて勝手に争いを始めた。全く持ってエレナの意思を無視してだ。何時もの事過ぎて、エレナは口を挟む気にもならなかった。

　だからこれまた何時ものように耳を塞いで、全てを聞き流す。眠ってさえしまえば、何も見る事も耳にすることも無い静寂が彼女を守ってくれる。

　だが、胸奥から沸く燃えるような不快感が、彼女の眠りを妨げる。

「……」

　チリチリと身体を焦す、押さえ難い不快感。同時に魔力が疼きす。不快なものを全て焼き尽くせ、破壊しつくせと謳い続ける。魔力は魔力だ。そんな声は幻聴に過ぎない。だがそれでも声はエレナの眠りを妨げるように、頭の中で響き続ける。

　破壊を、破壊を、破壊を！　全ての破壊を！

「五、月蝿い!!」

　耐え切れず、叫ぶと、幻聴は消えた。息を吐き、高ぶり続けた魔力を押さえつける。嫌な汗を拭い周りを見ると、此方を見て馬鹿どもが怯えた顔をして固まっている。どうやら自分達が罵られたと勘違いしたらしい。どうでもいい。

「【我を望む地平へと誘え】」

おさえ切れなかった魔力を転移術式に注ぎ込む。
　場所は何処でもいい。ただ、静かな所へ。
「【彼の地へと】」
　転移が発動する。自分の身体が自分の身体がバラバラになるような感覚と共に、自分の身体が何処かへと飛ばされていく。正しく場所を極めず転移魔術を発動するのは本来非常に危険なのだが、エレナにはそんなこともどうでも良かった。
　運良く、というべきか、あるいはエレナ自身の才能の賜物なのか、転移は成功する。周囲の乱れたマナを払い、辺りを見渡すと、そこは建物の中だった。学院に備えられている宿舎の片隅、まだ本来学生は授業中だったこともあって、とても静かだった。
「……」
　その静けさはエレナにとって心地の良いものだったが、かといってずっとここに突っ立っている訳にも行かない。何処か休める場所は無いだろうか。そう思い、辺りを見渡す、と、
「……ん？」
　目の前の部屋の扉が小さく開いた。部屋の主が鍵を閉め忘れたようだ。
　中を覗いてみても、誰も主は存在しない。シンプルな棚に貯蔵された古本の山、木製の机に重ねられたプリント、その横には茶器と御菓子。何処かエレナの心を荒ませるほのかな花の香りは、その茶器からの匂いだろうか。
「……」
　エレナは吸い寄せられるようにふらふらと、部屋の中へと入っていった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「いいか、二度とエレナ様に近づくなよ！」
　嘲笑の交った罵倒、エレナの取り巻きたちの声を聞きつつ、シールは倒れた身体をゆっくりと起こし、溜息をついた。
「やーれやれ」

泥を払い、ついでに身体状況を確認していく。体の彼方此方を殴られ、けられたが正直大した物ではない。どうやら取り巻きの少年達は、教師を殴りつける自分達に恐れを抱いている様だった。

そんな暴力は特に痛くもない。むしろ少しほっとした。暴力を振るう自分に酔うようなことになっていたら、それこそ対処を改めなければならない。

この三日でエレナの問題についておおまかには把握できた。

学院長の懸念とする問題とは別に、シールはまずはエレナの心をどうにかする必要があると考えた。学院長の問題は、エレナ自身も立ち向かう必要があるからだ。

エレナ、彼女は、どうやら悪徳を好むような、悪趣味極まりない人間とは違うらしい。授業こそサボり、教師に対しては酷く反抗的だが、静寂を好み、騒乱を嫌う。感性は極一般的だ。

それなのに彼女が暴走してしまっているのは、誰もとめることが出来ない膨大な魔力と、社会的地位のトップに君臨するゲルター家の力の所為に他ならない。特に後者はエレナの心を最も捻じ曲げてしまっている原因だ。

問題なのは、ゲルター家に関して、シールはどうすることも出来ないという事。もって生まれた家の地位などただの教師がどうこう言えるものではない。結局はその本人が自分自身と向き合わなければならないことだ。

で、あるならシールがすべきは、エレナがその問題と向き合えるだけの心を持たせてやる事。つまるところ、その心を癒してやる事だ。

解決するなら、やはりゆっくりと話をするしかない。取り巻きの子供達は邪魔だが、これぱっかり近道なんて存在しないのだから……とはいえ、

「……疲れたな、今日は」

今日したことといえばエレナに話しかけようとして取り巻きの連中に殴られただけなのだが、シールとて別に一日のスケジュールをそれだけで済ませているわけではない。初等クラスの子供達の授業と授業の合い間、貴重な休み時間を使って顔を出しているのだ。

そんな風に時間を作って会いに行くのに、その先で殴られ蹴られ罵られるのだから、疲れるに決まっている。

「まあ、今日はあと一クラスで終わるし、頑張るか」

終わったら、絶対部屋に戻って新しいお茶を空けてのんびりしよう。シールはそうやって自分を奮い立たせ、授業で使う資料を取りに行く為、自室へと向かっていった。

「……」
　そして、自分の部屋のベットでエレナがすやすやと眠りについてるのを発見した。
　シールは頭を抱えた。何故だ。部屋の鍵をあけっぱなしにしていた自分も無用心だが、なんだってこんなに丁度良くエレナが自分の部屋に居るのだろう。寝てるし。
「……えーっと」
　冷静に考えれば、これはチャンスなのだろうが。しかしシールはこれから授業で、流石にそれをサボる訳には行かない。さっさと起こして出て行ってもらうか？
　そう思った……が、
「……ふむ」
　エレナの寝顔を覗いてみる。安らかな顔だ。少なくともシールはこの数日間、エレナを見てきたがこんな表情をしていた時は一度も無かった。ああいう環境にいれば当たり前かもしれないが。
　……まあ、いいか
　別に、盗まれたり壊されたりしても困るものは……置いていないとはいえないが、進んで彼女も部屋のものを破壊したりはしないだろう。多分。
「おやすみ」
　エレナの身体に毛布をかけて、頭を撫でてやる。
　ほんの少しだけ、その顔に笑みが浮かんだように見えた

八／一八
改稿完了

五／二八
再改定

第四話 賞賛という名の暴力

　エレナは夢を見ていた。かつての自分を、夢という形で見ていた。

「エレナは私の自慢の娘だよ」

　父が笑いかけている。母が誇らしげにしている。そしてエレナは笑っている。

　幼き頃、エレナは自分の力にも、自分の家にも無頓着だった。勿論自分の家が凄いという事は漠然と理解していたが、それでも全く自覚は無かった。エレナにとって自分の暮らす大きな屋敷、そして時々訪れれる領地下の街が彼女にとっての世界の全てだった。

「凄いぞ、エレナ」

「さすがエレナね」

　生まれ持っていた魔術の才能はすぐに見抜かれ、専属の家庭教師が付けられた。そして教わった魔術を披露すると両親はとても喜んで、エレナを褒めてくれた。それがエレナ二はとても嬉しくて、自分でもどんどんと魔術を学んでいった。

　磨かれていく才能に伴い、エレナは可能とする事が増えていった。

　しかしそれと同時に、一つの事実を理解した。

「凄いぞ、エレナ」

「さすがエレナね」

　両親は何時も褒めてくれる。

　だけどそれはまるで条件反射のようなものだった。エレナがどれだけ努力をしたか、どんな工夫をこらしたか、そこはまるで見てくれない。ただ「自分の娘が」という、ただそれだけしか見ていなかった。

　エレナにはそれが分かった。彼女は賢かった。

　子供らしい愚鈍さを、不幸にも持ち合わせていなかったのだ。

父や母は駄目だ。それなら使用人ならどうだろう。だが話してみると、今度は両親よりも更に濁った瞳で此方を褒め称えてきた。瞳に僅かに恐れを交えながら。

屋敷の中は駄目だ。外に出なければ。外へ、外へ。

ある日、エレナは新たに覚えた魔術で姿を隠し、屋敷の外へと飛び出した。目指すのは領地に存在する小さな街。ずっと歩き続け、綺麗なドレスをドロドロにしながら街にたどり着いた。

その時期、ガイディアと他国で続いた戦争、及び王都で蔓延っていた悪政と不正の混沌とも決着が付いており、街並みは平和だった。そしてエレナはそこで自分と同じくらいの子供達と出会った。

エレナは嬉しかった。自分と同じくらいの子供と出会うのはこれが初めてだ。時々父は家でパーティを開くが、やってくるのは大人たちばかりだ。

「貴方だーれ？」

「ドロドロー、変なのー」

「遊ぼー」

誘われるままに、子供達とエレナは遊んだ。初めての事ばかりだった。子供達とはしゃぎ、駆け回り、笑いあった。教わった魔術を使って魅せると子供達は目をキラキラさせて喜んでくれた。

エレナは嬉しくてたまらなかった。

求めていた充実がそこにはあったのだ――だが、

「申し訳ございません!!」

すぐに、悲劇は訪れた。

エレナがいないと気が付いた両親が、すぐにエレナを捜索すべく使いを出したのだ。そしてエレナがすぐに見つかった。最悪の形で。

自分の子供と遊んでいた少女が、自分達の土地を治めるゲルター家の娘、それに気が付いた瞬間、悪鬼の如く表情で自分の息子や娘を殴りつけ、地面に叩きつけ、頭を下げさせた。

親から酷い暴力を受けた子供達は涙を流し、エレナに畏怖の視線を向けて、ただただ謝罪の言葉を口にした。先ほどまで、あんなに楽しそうに笑って、一緒に遊んでいたのに。

「違うわ！」
　エレナは首を振り否定した。違う。自分が勝手に出歩いて、何も知らない彼女達の誘いを受けたのだ。彼女達は何も非が無い。それなのに、そんな事をしないでくれ。だというのに、責められるのは子供達ばかり、エレナには誰も怒りを向けようともしない。それどころか、帰ってくると、エレナ、大丈夫だ。お前は何も悪い事はしていない。
　違う！
　良いのですよエレナ。そんなにも自分を責めずとも、悪いのはあの子達です。
　五月蝿い！　五月蝿い！　五月蝿い！　黙れ！
　どれだけ否定しても叫んでも、エレナの声は誰にも届かない。それどころかそうやって自分を責めようとするエレナを、逆に両親は賛辞しようとする。謙虚な子だ。優しい子だと。
　エレナが望んでいる事とは全く真逆の事を、エレナの周りは強いてくる。誰もエレナの言葉を聴こうとしない。誰もエレナ自身の苦悩を見ようともしない。ただただ褒めて、讃えて、そうすれば喜ぶと、勝手に思い込んでいる。
　違う！　違う！　違う！
　叫んでも、叫んでも、誰にも声は届かない。誰も自分を見てくれない。ならばと壁を破壊する。家具を叩きつける。魔術で人に当り散らす。断罪を求めて、エレナは悪行をつみ続ける。
　それなのに、声は誰にも届かない。それどころかエレナをとりまく賞賛はより強く、より醜悪になっていく。負のスパイラルだった。

　誰か、誰か誰か誰か、誰でも良いから――

　言葉は届かず、彼女の意識は悪夢に沈む。

：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「まだ寝ていたか……」
　歴史の授業を終え、シールが帰ってくると、エレナはまだ、自分のベットの上でぐっすりと眠っている。よほど疲れていたのかもしれない。
「こうしていると可愛いのにね……と、」
「……□□」
　顔を覗いてみると、依然覗いた時よりもその表情は優れない。何処か悪夢にうなされる様に、苦しそうな表情をしている。
「嫌な夢でもみてるのかな……」
　額に浮いた汗を拭ってやり、額を撫でる。何か空を掻く様にして悶えるその手を握ってやると、ようやくエレナの表情は少し安らいだ。
「……夢の中では安らかに」
　子供は、幸せな夢を見る権利がある。
　シールはそれを理解していた。だから、エレナの穏やかな安息を、ただ願った。

八／一八
改稿完了
五／二八
再改稿

第五話 二人のティータイム

　花の香りがする。
　何の花なのかはエレナには分からない。でも嫌いな香りではなかった。見目で人々を楽しませせるような派手な花ではない。整備されていない道端の草むらでひっそりと生きている、名もなき花たち。そんなイメージがエレナの頭に過ぎった。
　……どこから？
　疑問が呼び水となり、エレナの意識が覚醒していく。重くなった頭をゆっくりと起こした。ぼやけた視界に映るのは、夕日の光が差し込む暖かな部屋。自分の部屋じゃない。自分が今何処にいるのか、エレナは暫く混乱した。
　そしてふと、部屋の中に誰かがいることに気が付いた。
「おや、エレナ、起きたんだね」
　そこには何故か、何時も従者気取りの馬鹿どもに殴られてる昼行灯な教師がいた。
「……なんでいるの」
「此処、僕の部屋」
　確かシールという名前の教師は、良い香りのするお茶を啜りながら、のんびりと椅子に座って本を読んでいた。やたらのんびりと。ものすごい気の抜ける笑みを浮かべながら。
「……帰る」
「転移魔術は寝起きにするようなものじゃないよ」
　転移を発動しようとしたが、術式を詠唱する前に止められた。確かに転移は便利だが、意識が朦朧としている時に発動するものではない。慎重に使わねば大事故に繋がる繊細な術。エレナは溜息をつくと、そのままベットに寝転がった。

眠くは無かったが、目の前の教師が視界に入りさえしなければ問題ない。
そう思って目を瞑り耳を塞ごうとした、のだが
「どうぞ」
「……」
その前に目の前に綺麗な琥珀色の茶の注がれたカップが差し出された。断ろうかとも思ったが、お茶からの香りが、先ほどからエレナの鼻腔を擽るものだと気が付き、エレナはカップを手に取った。
「……」
口にしてみる。甘みの伴う仄かな渋みと、口に含むことで奥まで届く花の香りと暖かさ。エレナは息をついた。実家で飲むような格調高いものとは違うが、良いお茶だと思った。少なくともエレナは此方の方が好きだった。
「美味しいかい？」
「別に」
素直に言うのが嫌で、素っ気無く言うが、シールは特に気にしたそぶりは見せず、気の抜けるような笑みを浮かべて、読書を再開した。
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

窓の外からみえる、徐々に沈みこんでいく太陽。今の季節は陽が沈むのが遅い。どうやら随分と長い間眠っていたらしい。既に授業も全て終わっているだろう。だから目の前の教師もこうして自室でくつろいでいる……しかし
「あ、茶菓子が残ってた……食べられるかな？」
なにやら古い茶菓子を引っ張り出して首を捻る教師の男。
この男は、何がしたいんだろう。
「ねえ」
「ん？ 何」
シールは焼き菓子を無駄に真剣な顔で睨みつけながら此方に問いただした。なんだか口を利くのが馬鹿馬鹿しくなってきたが、何とかそれを堪えて、
「私の事、指導なさらないんですか？ 先生」
そもそもこの男はエレナを指導する為に何度もふっとばされ、殴られリンチさせられていたのだ。それなのに今この場になって、シールという教師は何もしな

い。さっきからじっと本を読み続け、時々お茶を飲み、今は明らかにヤバそうな茶菓子とにらめっこをしている。此方に視線すらよこさない。
「んー」
　するとシールは、少し考えるように首を捻ると、
「今日は……、うん、いいかな」
「何故？」
「疲れたから」
　あまりにもシンプルで、不真面目な理由に、エレナは気が抜けた。
　なんだそれは。教師の台詞か？
「もっと真面目に生きたら？ 教師なのに」
「君だって、授業をサボったりするじゃないか。エレナ」
「私はいいのよ。授業の内容なんて、全て覚えているもの」
　そう、別にエレナは、エレナの取り巻きたちと違い、勉強をサボっている訳じゃない。エレナは自分で知りたい内容は勉強している。既に知識量は現在学んでいる分野を超えている。勿論偏りはあるが。
「だから私は授業なんて受けなくていいの。他の連中は知らないけど」
「ふうん、じゃあ魔術師の起源とは何か、わかるかな？」
「はあ？」
　挑発か？　と思ったが、どちらかというとこれは幼子にクイズを出しているような感じだ。そういえばこの男は初等クラスの教師だっただろうか。
「世界を覆う万能物質、マナを知覚できる人類の出現でしょう？」
「じゃあどうしてその人類が出現したのかの原因」
「そんなの、まだ解明されていないじゃない」
「それを考え、調べるのが面白いんじゃないか」
　シールはニコニコしながらそう言う。此方を諭そうとしている、のではなく明らかに楽しそうな顔をしている。どうやら魔導歴史が趣味らしい。エレナも嫌いではないが、どうにも不明慮な部分が多すぎる為に、深く手を出すのを躊躇っていた。
「マナの影響を受け続けた人類が進化を果たしたっていうのは定説だけど」
「それにしては時期が一定であったというのは少々おかしいね。そもそもマナの

濃度は地域によっては違うじゃないか」
「マナの濃度では無く世代の繰り返しによって発生した変化って話もあるけど」
「それもまた苦しいなあ根拠以前に説得力が無い」
「じゃあ貴方はどう思うの」
「上位者による介入」
「それこそ根拠も説得力も無いじゃない」
「そっちの方が面白いじゃないか」
「学問にロマンを持ち込まないでよ」
「勉強には楽しさは必要だよ？」
「そういうもの？」
「そういうものさ」
　シールは頷き、リーンは首を捻った。エレナは何かを調べようと思うのは大抵、興味がわいた、ただそれだけの理由だ。だから一定量の知識さえ得られればそれ以上調べようとは思わない。だがシールはそういうのとは違うようだ。
　学者気質という奴なのだろうか。
「それにしてはこどもっぽ過ぎる気がするけど？」
「いいじゃないか。僕は研究者じゃない。これは趣味なんだし」
「趣味ねえ……」
　確かにそれを語るシールは楽しそうだ。いい大人なのに瞳を輝かせている。まるで好きな事を話している子供のように、いや、子供そのものだ。
「……で、何でその事を私に話したの？」
「え？ 趣味で話しただけだけど？」
　なんというか、教師だと緊張し、警戒していた自分が馬鹿馬鹿しくなった。この男は、ただのアホだ。あるいは物凄いのんきな男。分かってはいたが此処までとは思わなかった。
　無駄に緊張していた身体を崩して息を吐く。お茶を口にした。魔術でもかかっているのか心地良い暖かさは変わらない。
「エレナは好きなものとか無いの？」
「別に、せいぜい興味のあるものを調べるくらいよ」
「若いのに、人生を楽しんでいないね？」

「人生に、楽しい事なんてあるの？」
　エレナは楽しいと感じた事は無い。幼き頃、平民の子供達と遊んだのが最後の記憶だろうか。後は長い混沌と、短い静寂、それをずっと繰り返し続けてきた。おおよそ人の望む全てのものを手にしておきながら、エレナの心は何一つとして充実を得た事は無かった。
「生きていて、楽しい事なんて、あるの」
　エレナの声は、シールに向けられたものでもない。ただ空ろで、触れれば崩れてしまいそうなほどに不安定だった。
「私は──」
「はい」
　と、自己の泥沼の中に沈もうとしていたエレナに、シールは声をかける。差し出すのは花の形をしたクッキーだ。
「なに、これ」
「ああ、大丈夫だよ。これは新しい方だから」
「だから、何よ」
「食べないの？」
　エレナは僅かに眉を上げ、シールを睨み、それから暫くして溜息を付くと、シールの差し出したクッキーを齧った。甘さは控えめ、少し湿気てるが、これはまた嫌いな味じゃなかった。
「美味しい？」
「……まあ、美味しいわよ」
「じゃあよかった」
　そういい、シールは微笑み
「だったらエレナの人生には幸せはあるよ」
　エレナはシールの言葉に眉を潜めた
「クッキー齧ったくらいで幸せというの？」
「美味しいものを食べられるのは幸せな事だよ」
「世の中には食べたくても食べられない人が、とでも言うつもり？」
「もっと単純な話。美味しいものを食べたら嬉しいし、楽しいじゃないか」
　それは、確かにそうなのだろうか。エレナだって美味しいものを食べたら嬉し

くはなる。この学院の食堂は、あまり上手い料理が出る訳じゃないが、それでも時折学院の裏手の森に生える果実を齧ると、瑞々しい果肉の甘さにとても満たされた気分になる。
「でもそれしきの小さな快楽を拾い集めて、幸せといえるの」
「幸せとは積み重ねる事さ。日々の日常の中で」
　だから、小さな幸せを感じられるのなら、それを積み重ねる事も出来るさ。シールはそう言って笑った。だがエレナは笑わない。笑えない。何故なら、
「たとえ小さな幸せを得ようと、塗りつぶされるのよ。黒い色に」
　シールがあっさりと注げた言葉で覆るほど、エレナの闇は浅くは無かった。長く蓄積してきた負の感情、積み重なり、鎖のようにエレナの心を雁字搦めにしたそれは、最早呪いの様に、エレナを縛っていた。
　小さな幸せを見つけても、負の感情がそれを叩きのめす。
　どうしようもない、負の連鎖、それがエレナの心を殺していた。
「生きていたって……」
「だったら、まずは楽しい事を楽しい事だと感じられるようにならなきゃね」
　そう言って、シールはエレナの頭を撫でた。一瞬驚きその手を払うが、シールは微笑んだままだ。別に腹が立つ事は無かった。ただ、頭を撫でられたのが何時振りだったか、エレナはそんな事を思った。いや、そもそもこうして誰かとゆっくり、こんなにも心穏やかに言葉を交わした事だって、エレナには久しかった。
「何で貴方はそんな風に構うのよ」
「頼まれたからってのもあるけど……まあ、先生だしねえ、僕」
　保護者気取り、しかし、嫌ではなかった。少なくとも、何時も感じるような嫌悪感を感じることは無かった。奥底から湧き上がる黒い感情は沈んだままだ。
「せんせー！」
　と、子供の元気な声と共に、扉が激しく開かれる。現れたのはエレナよりも更に幼い子供達。初等クラス、シールの担当しているクラスの生徒達だった。
「やあ皆、どうしたんだい？」
「何言ってんだよ！ 今日は遊んでくれるってやくそくしたじゃねーか！」
　子供達はそうだそうだと声を上げ、シールは忘れていた、とうっかりした顔で頭を掻いて、子供達に笑われる。それはエレナには眩しい光景だった。眩しすぎ

て、少し、見るのが辛くなるくらいに。
「もう行くわ」
　エレナは小さく息をついて、転移術式を起動する。起動する魔術の光に子供達が丸い目をしているが、エレナは気にしない。
「ああ、エレナ」
　起動する直前、シールが言葉をかけてくる。転移術の最中なので声を出せずにいると、シールはあの気の抜けた笑みを浮かべ、
「また話そう、エレナ。お茶でも飲みながら」
　エレナはそれにやはり答えず、転移術を発動した。子供達の顔も、シールの笑みも光に消え、次の瞬間には自分の部屋のベットの上に転がり落ちた。着地が上手く決まらなかった。動揺していたらしい。
　ベットの上でエレナは目を瞑る。といっても十二分に昼寝をしたので、今は別に眠くは無い。ただ、今は暗闇のなかにいたかった。自分の心を静めるために。
「……また、話を」
　日の光を吸ったベットの上で、エレナはその言葉を噛み締めるように呟いた。

五／二八
再改稿

第六話 彼の失敗

　シールがミスト学院長からエレナの依頼を受けてから一週間が経過した。
　一週間。その間シールは目立った指導を行った事は無い。傍から見ればひたすらシールがエレナのところへと通い、そのたびに追い返される。ただそれだけを繰り返した一週間だった。
　しかし、ただそれだけで変化が全く無かった、という訳ではない。
「やあエレナ」
　昼休み、僅かな時間を縫って何時ものようにシールはエレナを尋ねる。するとエレナは魔術で吹き飛ばす、訳ではなく、近づいてくるシールに僅かに首を傾け、
「……貴方って暇なの？」
「失礼な。ちゃんと自分の時間を削って訪ねてきているのに」
「そこまでしてやる事がおしゃべり？」
「なんなら指導してあげようか？　ちゃんと授業に出なさい。もっとちゃんとした友達を作りなさい。魔術を無断で使用してはいけません」
「嫌よ」
「うん、じゃあしょうがないね。雑談しよう。今日は何を話そうかな」
　そう言ってシールは笑い、エレナは呆れた顔になった。しかし拒絶はしない。シールが嬉々として話し出した内容に相槌を打ったり、逆に問い返したりする。その話題はどうあれ、普通の会話が二人の間で成立していた。
　指導、という空気からはかけ離れているが、決して悪い空気ではなかった。少なくともシールはそういった穏やかな空気を作り出し、共有することには成功していたのだ。
「な、何をしているんだ貴様！」
「ああ、来たね。今日は早い」

「……」
　とはいっても、暫くすればすぐに従者きどりの子供達がとんでくるのだが。
「じゃ、またねーエレナー」
　無抵抗に子供達に引きずられていくシールを、エレナは半ば呆れた顔をしながら見送った。ああやって引きずられて、子供達にぶん殴られるのだ。あの男は何が楽しくてそんな役目を負っているんだろうか。
「エレナ様！ 大丈夫ですか！ あの男に何か！」
「別に、問題ないわ」
　エレナがそう言ってそっぽを向くと、従者気取りの子供達は焦るような呻き声を上げる。きっとシールが思った以上にエレナと親しく見えるのが恐ろしいのだろう。自分達が独占していたゲルダー家の力が奪われると、気が気でないのだ。そんな気持ちが手に取るようにわかった。だからこそエレナにはそれが馬鹿馬鹿しくてたまらない。
　好きなだけ困るといい。そっちの方が気分がいい。
　人の楽しみを邪魔にしたんだ。それくらい……
「……ん？」
　楽しみ？　とエレナは自分の頭に巡った言葉を改めた。楽しみ。楽しみ？　私はあの男との会話を楽しいと、そう捕らえたのか？
「……」
　エレナはそう至った己の思考回路に一瞬渋顔になり、その後幾らか考えを巡らせたのちに、馬鹿馬鹿しそうに溜息をついた。どうでもいい、ただの気まぐれだ。そう思うことにした。
「……ああ、そういえば」
　そのシールとの会話で、少し分からない所があった。完全に触れていない未知の分野であったために、話を聞くだけに留まり、何故か悔しい思いをしたのだが。
「……調べてみようかしら」
　これも気まぐれだ。誰にあてるでもない言い訳を胸中で呟きながら、エレナはこの国随一の学院図書館に足を向けた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　わたしのクラスには先生がいる。
　先生がいるのはあたりまえだけど、だけどわたしのクラスには先生がいる。
　先生はいつもわらっている。先生はいつもぼーっとしている。先生はヘンなかみの色をしている。先生はパームたちにいっつもばかにされてる。先生は、いつもやさしい。
　わたしは先生のことが好きだ。
　わたしだけじゃない。みんなだって先生のことが好きなはずだ。
　だけどそんな先生が、最近、いつもケガをしている。
　うでにすり傷を作ったり、顔にあざをつくったり、見ているととても痛そうだ。先生はそれでも笑っているけど、それでもそんな風にけがをするのは見ていていやだった。
　だからどうしてなのか知りたかった。だけど先生は笑ってばかりで、だけど。
『あのこだよ』
　声がした。生まれた時からずっといっしょにいる〝トモダチ〟の声。
　先生のへやに遊びに行ったときにいた女の子。上級生のなんだかとってもきれいな、お姫様みたいな女の子。
『あのこだよ』
『あのこがセンセーをいじめたんだ』
　クスクスとした声が聞こえてくる。あの女の子が、せんせいをイジメたのだろうか。そう考えると頭の中が真っ赤になった。ゆるせない。
『やめたほうがいいよ』
　そんな声も聞こえたが、止まらなかった。
　せんせいを助けるんだ。
　その決意をして、わたしは走り出した

；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；

　オルフェス学院、医療室。

「これで一週間連続ですね？ シール先生」
「いやあ、すみません」
　室長の女医術士、メリアの治療をシールは受けていた。といっても派手な怪我ではない、彼方此方に擦り傷を作っている程度だ。魔導研究期間でもあるオルフェス学院において怪我人は日常茶飯事、そんな場所の室長のメリアにとってその程度の怪我は朝飯前だ。
　朝飯前なのだが、メリアの機嫌は悪い。
「ひどい有様ですね。また校長の依頼ですか？」
「ええ、まあ、うん、そうですねえ……」
　シールがこの部屋で世話になる事はけっこう多い。
　というのも例によって例の如く、シールは学院長の依頼を聞くことが多く、そしてそのたびに多かれ少なかれ怪我を負ったりする。そしてその度に世話になるのだが、その度にメリアは良い顔をしない。
「そもそも私が医術を学んだのは、怪我で苦しんでいる人を見るのが辛かったからでしてね……これは前に言っていませんでしたか？」
「……ええ、聞いています」
「そんなわけで私個人は怪我とか病気とか嫌いなんです。ええ、物凄い」
「あっはっはっは」
「だからしょっちゅう怪我をするなといってるはずなんですけどねえ……！」
「イタイイタイイタイ、消毒液を擦り付けないで！」
　ぐりぐりと傷口を生地で塗りつけ、シールは身悶えた。
「全く、これ、子供達にやられたんですか？」
「ええ、まあ」
「はっきり言いますが、子供に暴力を慣れさせてろくなことになりません。それなのに自分の身体でその暴力に慣れさせてどうするんですか」
「……返す言葉がございません」
　シールとて自分がいいように殴られるということ事態が子供達の為になっていないと理解はしていた。ただ反撃しようにも、それがどの程度にすべきなのか、見極め切れなくて、結局いつも殴られてるだけになるのだ。
「勿論僕だって殴られたくは無いのですが……」

「ならさっさとできる事をやってください」
　メリアはそういい、溜息をついた。
　メリアとシールは知らない仲ではない。故にメリアもシールのその性格も理解はしている。しかしだからこそじれったくもあるのだ。
「まあ、今度は上手く……と？」
　シールが何か言おうとしてふと、首を傾ける。保健室の外から騒がしい声が近づいてくる。魔術などというとんでもない力を教え学び研究するこの場所で怪我人が出る事なんてしょっちゅうではあるのだが、その声はどうにも若い、というか幼い子供のそれだった。
「センセー！」
　扉が開かれ、子供達が雪崩れ込んできた。やはり幼い、というよりも、
「センセー!! やっとみつけた！」
「どうしたんだい？ パーム」
　それはシールの教え子だった。パーム、何時も元気で、にぎやかな子なのだが、今回は明らかに様子が違う。表情は何処か青ざめ、慌てふためいた表情でシールの元へと近づいてくる。そして、
「マリが怪我した！ エレナって女に！」
　その言葉を聴いて、シールは顔を強張らせた

五／二八
再改稿

第七話 いざこざと決意

　事が起きたのはオルフェス学院が保有する巨大図書館。
　あらゆる魔導書が蔵書されているとすら言われ巨大図書館。ここに住みたいなんて事を言い出すような研究者が現れるほどに、知識を学ばんとする者にとって天国のような場所だ。
　エレナはそこに用意されていた魔導書を読みふけっていた。
　タイトルは『術式省略化の法～第三十二章～』
　既に何度と無く繰り返されている既存説を多方面から検証、記載した研究書だ。正直見ていて楽しい代物ではないが、しかし自分の考える定説がどういった形から証明されているのか、なんて事を考えるには丁度いい読み物だった。
　周囲に従者気取りの連中が纏わり付いているのが鬱陶しいが、いるだけならどうでもいいから放置している。こちらが何も言わなくても勝手に人払いをしてくれるから、便利といえば便利だ。
「……ふぅん」
　エレナは本を閉じて、欠伸をした。知的好奇心は満たされたが、その代わりあまり読んでいて楽しくは無かった。眠気を誘うには非常に丁度良い代物だったが。
　さて、次はどうしよう、違う本を探してもいいし、そのまま昼寝でも構わない。
　そう思っていたエレナは、しかし、
「みつけた！」
　突如響いたその声に、エレナは瞬きする。図書館では静かにというルールをまるっきり無視したその子供の高い声は、まっすぐこちらに飛んできた。エレナが振り返るとそこにいたのは幼い少女。おかっぱ頭で紺色の髪、どこかお人形のよ

うな印象を与える少女。制服は初等クラスのものだ。
　エレナは首をかしげ、問うた。
「アンタ何よ」
「あなたたちでしょ！ シールせんせいイジメたの！」
　シール、という言葉にぴくりとエレナは反応した。という事はこの子供はシールの教え子だろうか。そんな事を考えていると取り巻き達が少女の前に立ちふさがる。
「おい、エレナ様に近づくな」
「あなたたちだってシール先生イジメたわね！」
　するととりまきの子供達はせせら笑った。
「あんなマヌケな教師、どうだっていいだろ？ 身の程を弁えない自業自得さ」
　次の瞬間、マリの顔が真っ赤になった。そして同時にパチパチと彼女の周りで火花のような光が一瞬散っていく。エレナはそれを目視し、そしてそれが何なのか理解した。
　妖精、マナから生み出される生命体の一種。酷く貧弱で、手で払うだけで掻き消えてしまうような儚い存在。しかし万物に影響されるマナの特性をもっており、時折遊び半分のように、周囲のマナを取り巻き魔術を引き起こす。
　あの少女の周りには妖精がたむろっている。
　妖精に好かれやすい体質。稀にそうした人間が現れると聞く。あの少女それならー
「……ゆるさない！」
　少女の声と共に響く強力な弾ける音。青白い閃光。魔術というにはあまりに拙く、故に危うい、妖精たちが生み出すマナの暴走。
「ひぃ!?」
「きゃあ!!」
　悲鳴が上がる。バタバタと逃げ出す従者達。
　少女の周りを閃く光の束が、大きく放射される。それはその中心にいるマリの怒りに従い、従者の子供達を追まわし、そしてエレナへと束なり、突き進む。
「っ！」
　流石にエレナも驚き、立ち上がる。

そして無意識の内、自分を守ろうと体が、その身に宿る魔力が動いた。目の前に火花が散れば誰しもそれを払おうと動くように、エレナから瞬時に生み出された魔力は敵意をもって襲い掛かってくるその閃光をなぎ払うように、放たれた。
その反応は自然のもの。問題だったのは、そんな反射でもエレナから繰り出される魔力は途方もないものだったという事実。
「【失せろ!!】」
瞬間、暴風が巻き起こる。圧倒的な魔力によって生み出されたその風は、通常よりも遥かに暴力性を伴い、周囲の図書や椅子机を吹き飛ばす。更なる悲鳴が巻き起こる。
「はっ、あぁ……」
エレナは息を整える。先ほどまで静寂と知の広間だったその空間が、マナの光で焼き焦げ、暴風に吹き飛ばされる。荒れ果てた空間、エレナの視線は一点に注がれる。
「……っ」
そこには机の下敷きになって、頭から血を流した少女の姿があった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

子供達によってつれてこられたマリは、頭から血を流していた。
別に、大した怪我ではない。頭の怪我は少し切って、派手に流れてきただけだ。一応メリアが検査を行っているが、骨が折れたりといった怪我は一切なかった。
「だから、せんせいたすけたくて」
「うん、ゴメンね。マリ。心配をかけてしまっていたね」
今は痛み止めの魔術で少しボーっとしているだけ。すぐによくなるとメリアは言ってくれた。だがシールはマリに笑みを浮かべながら、強くこの結果を悔やんだ。子供達に心配をかけてしまったのはシールの責任だ。自分を心配する周りの目があること、忘れたわけではなかったが、そこへの配慮を怠ってしまった。そう言う意味ではこの問題が起こったのはシールの責任だ。
だが何より不安なのは、この結果を生み出してしまったエレナ本人だ。
やるべき事をやらなければならない。シールはそう心に決めた。だからまず

は、
「だけど、妖精さんの力を使っちゃいけない。それは分かるよね」
「はい……ごめんなさい」
　マリはしょんぼりと顔をくしゃくしゃにする。マリは妖精に好かれやすい特異体質の少女だ。それ故に彼女の周りには小さなトラブルが耐えない。だからこそ彼女には妖精の制御を、自身の感情の制御を努力するよう言い続けてきた。
　それが出来なかったのはマリの失敗だ。だから、シールは自身の判断のミスとは別に、そうした所を注意しなければならない。教師として。
「それは僕に向かって言う事じゃないな。マリ」
「うん……」
　マリは頷く。シールは微笑み彼女の頭をそっと撫でた。自分は教師として不甲斐ないばかりだが、マリは優しくて、そして賢い子だ。自分が誰に謝るべきなのか、マリは良く分かっている。
　だから自分も、すべき事をしなければならない。シールはそう決意した。
「どちらへ？」
「もう一人の問題児を連れに」
　シールは何時も通り朗らかな笑みで、ただし、少しだけ引き締めた顔でそういった。

五／二八
再改稿

第八話 彼女の崩壊とそれを止める者

　気持ち悪い
　魔導歴史学の授業中、エレナはただ机の上に突っ伏していた。
　喉がカラカラで、なのにいくら水を飲んでも乾きは癒されない。手足の先から体の奥底まで、不快なヘドロが纏わり付いて、いくら身体を振るってもその不快感は落ちやしない。
　何故、こんな気分に。
　何時からかは分かっている。図書館で、シールの教え子であろう幼い少女を怪我させたあの時から、この状態は続いている。つまりはそう言うことだ。あの少女が不快感の原因だった。
　だったらあの少女を目の前から消し去れば、この不快感は止まるのか。
　だがそう考えた瞬間、更なる不快感がエレナを襲った。のたうつ様な不快感の波がエレナに襲い掛かり、エレナは思わず窒息しそうになった。わらからない。分からなかった。エレナはこれまでも沢山の人を傷つけた。自分の身勝手で、己が内にのたうつ衝動に任せて誰これ構わず傷つけた。
　だというのに何故、あの少女に限って、こんなにも苦しまなければならない。
　何故？　否、分かっている。
　あの男だ。あの少女が、あの男の教え子だからだ。
　シール、あの男を、私は気にしている。マリという少女を、傷つけたと彼が知ったとき、どんな顔をするのか、それを気にしているのだ。立った数日、それも短い間言葉を交わしただけの関係の相手に、あまりにもみっともないくらいに。
　怒る？　当然だ。
　軽蔑する？　されてもなにもおかしくない。

嫌われる？　好かれているとでも思っていたのか？ めでたい頭だ。
　自己否定が繰り返される。その度にエレナは身体が泥沼にでも漬かったような気分になっていった。そして繰り返されるたびに、体の奥底から魔力が疼く。まるで暴れるようにエレナの中で叫び続ける。
　破壊を！　破壊を！　破壊を！　全ての破壊を!!
「うる、さい……」
　否定しようと首を振るが、それはすぐに怨嗟のような衝動の叫びにかき消されてしまう。その叫びに抵抗する気力すら、萎えていく。意識を少しでも沈めようと、胸を押えて息を整える。
「エ、エレナ様？」
「大丈夫ですか、エレナ様」
　だが、落ち着こうとしているのに、従者気取りの馬鹿どもが一々それをかき乱す。
　何がしたいんだ貴様等は。私が気分が悪いと、そんなこともわからないのか。何故周りをうろつく、そうする事で私の気分が晴れるとでも思っているのか。鬱陶しい鬱陶しい鬱陶しい!!
「エレナ様、ご気分が悪いのでしたら」
「黙れ」
　私に構うな！　触れるな！　そうまでして媚を売りたいのか！
　だったら今すぐ消えろ！　それが嫌なら私が消してやる！

　ああ、それともひょっとして、消えたいのか？
　どうせ、何をしたって、誰も彼もがニヤニヤと気持ちの悪い笑顔を浮かべるだけだ。
　それなら消したって、ニヤニヤ笑うだけだろう？

「エレナ、さま？」

　従者気取りの少女が、僅かに怯えた声を上げる。だがエレナにその声は届かな

い。
　エレナは哂った。哂って、哂って、哂って、哂って、哂って、哂った。
　呼応するように魔力が吹き上がる。常識を遥かに超えた魔力が宙を渦巻く。膨大な魔力の塊は、空間を歪める。まだ平穏であった筈の授業が、一挙に不の気配に埋め尽くされる。
「な、何をしているのですか!? エレナさん!?」
「エレナ様！」
　遅れて反応する教師の声、だが既に襲い。魔力は巻き上がる。喚きつづけていた破壊の衝動は、遂に表に表れ、歓喜の産声を上げた。
　壊せ、壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ!!!
「あはは」
　罅割れたような、ひきつった声が漏れた。それは明確な狂気を伝え、周囲の者全てに危機を伝えた。目の前の少女は壊れていると、壊れてしまったと、否応無しに伝えてきた。
　膨大な魔力が更に歪む。明確な敵意と共に。
「壊れろ、全て」
　眼前の世界全てに向けた死刑宣告。
　エレナはその魔力を破壊に換え、一気に振り下ろさんとし、
「やあ、こんにちわ」
　その直前に、雰囲気をぶち壊しにするように、シールは扉から普通に登場した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　時間は少しさかのぼり、
「……あーあ、つまんねえなあ」
「本当暇。っつーかダリィ」
　事が起こる教室の外、廊下にて。
　エレナの取り巻きの少年等が二人、その場に立っていた。彼らは「不審者がエレナ様の側に近寄らないようにする為の護衛」という役目を担っている、という

風なお題目でいるが、実際彼らがしているのは単なるサボりだ。
　エレナという後ろ盾の下、彼らは自由気ままにルールを破り、平然とし、そして極端に思い上がっていた自分達は選ばれたものであり、勉学を学ぶ必要はないと。もし落第点をとっても、エレナの力がどうにかしてくれると信じていた。
　実際問題、エレナの力で万が一それが出来たとしても、彼ら自身の知識が実際に増える訳でもなく、困るのは彼らである筈なのだが、そうした当たり前の事実を認識できないほど、彼らは目が曇っていた。
　とはいえ、最近はその〝護衛〟の役目もあながち嘘ではなくなっていた。
　というのもだ
「……おい、またきたぜ、馬鹿が」
「うっわ、マジだよ。頭悪いなぁ」
　エレナの取り巻きたちは向こうからやってきた男、シールをみてせせら笑った。
　最近頻繁にエレナのところに顔を出す教師、彼を適当に殴り追い返すのが最近の護衛のもっぱらの任務になっていた。
　教師をリンチし追い返す、なんて常識で考えればしてはいけない事なのだが、彼らはその意識も無い。ゲルター家という名の力にとことんまで心酔し、頼りきっているのだ。それに、そうでなくとも、シールという教師に彼らは恐怖を感じない。どれだけ馬鹿にされ、殴られてもヘラヘラと笑うだけなのだから。今だって、
「エレナ様は授業中だ。失せろ馬鹿」
「また殴られたいのか？」
「それは嫌だな」
　シールは笑う。ヘラヘラといつものように、弛緩しきった、緊張感のまるでない動きだ。少年達は再び哂った。この男は、自分達よりも格下だと。だからなんの遠慮も無く拳を握り、彼の顔を殴りつけようとした
　だが、
「っあれ？」
　振るわれた拳はシールの顔を直撃することなく、からぶった。そして何故あたらなかったのか、という疑問が解けぬまま、少年はシールの姿を確認しようと首

を捻る。だが、身体は動かない。気が付けば地面が目の前に迫り、少年は地面に顔を強くぶつけた

「うっぎゃ!?」

「お、おい！　こ、この！」

　片割れが倒れこみ、もう一人の少年は慌てふためく。反射的に魔術の杖を抜き、構える。だがシールが見当たらない。

「駄目だよ。そう言うのを人に向けようとしたら」

　そして、自分の背後からシールの声が響いた。驚き慌て振り向くもその前に、ぽん、と頭に手を載せられる。そしてその掌に押されるようにして、杖を構えた従者の少年もまた、ぱたんと倒れてしまった。

「な、なん、で？」

　立ち上がろうとしても身体に力が入らない。意識はハッキリしているのに、体の力だけが全然入らない。自分が寝転がっているというだけが、よくわかる。なんだってこんな事になっているのか、意味が分からなかった。

「き、きさま、何を」

「【封じた】だけだよ。君達の身体を。暫くしたらもとには戻るさ」

　シールはいつものように穏やかに笑って、少年達の頭を叩いた。子供達はようやくその時になって、シールという教師の得体の知れなさに気が付き、怯えた。

　だがシールは気にしない。教室の扉に手を書け、そして軽く咳払いすると、

「やあ、こんにちわ」

　そう朗らかに声をかけながら、教室の扉を開けた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　そして話は戻る。

　あまりに唐突に、全く空気の読めていない風に登場したシールに、クラスにいた全員が、エレナも含めて呆気にとられていた。しかしシールは特にそれに気を止めた様子も無く。

「やあエレナ、随分と怖い顔をしているね」

　そう語りかけると、エレナは僅かに怯えるように一歩、後ろに下がった。対し

てシールは更に一歩進む。まるで表情は恐れを見せない。緊張も無い。ただ両手をぶらりとぶら下げて、自然体だ。
「シ、シール先生⁉」
「ああ、此処はお任せを。リナ先生は子供達を教室の外へ」
　シールがそう言うと、リナ教員は頷き生徒達を誘導させていく。大げさとはいい難い。エレナの身にまとう魔力は既に、子供の癇癪で済まされないくらいに膨大となっていた。
「ほら、君達も……って、もういない」
　従者気取りの子供達も避難させよう、と思ったが既にその場にはいなかった。なんともまあ、分かっていたが、そういう風に逃げてしまうのは寂しい事だ。今、エレナはたった一人でそこにいる。
　一人、そう、たった一人だ。両親に愛されながら、子供達を従えながらも、エレナはたった一人だ。だからこそ、シールはそう静かに頷き、エレナへと視線を向け、口を開いた。
「エレナ、マリと喧嘩した見たいだね」
「なに……を、」
　エレナは、ふらふらと身体を揺らしながらも、シールの言葉に答える。シールのほがらかな笑顔に対して、エレナのその表情は何かを恐れるように。
「それが、何、私には関係、」
「あるよ。エレナ、君はマリを傷つけた。それは事実だ」
　瞬間、エレナは手指を握りしめ、叫んだ。
「う、るさい‼」
　漂う魔力が凝縮される。魔術の詠唱を使わず、魔力のみで強引に凝縮し形を固め、とどめ、曖昧な攻撃の意思を練り上げる。めきめきと音を立てて、完成したのは巨大な火の玉、それはぐらりと揺れると、一直線にシールへと向かっていった。
　だがシールは笑みを消さず、ただその場で静かに片手を上げて、
「あぶないな」
　そんな軽口と共に手を振るう。次の瞬間火の玉はまるでその場になかったかのように、弾けて消え去ってしまった。誰かがその場にいても、何が起きたのか理

解できなかっただろう。目の前にいるエレナとて、そうなのだから。
「な……」
「エレナ」
　怯えるエレナへと、シールは更に踏み込んでいく。エレナは下がろうとするが、最早そこは壁だ。もう逃げる場所は存在しない。その代わり、更に魔力を強く放出し、瞳に憎悪を映し出す。
　シールにはそれが、畏れるが故の威嚇だと分かっていた。分からないのだ。今自分がどうしていいのか。未知を恐れ、故に攻撃の意思を見せ、全てを遠ざけようとする。魔力も、尋常ならざる殺意も、それを隠すための〝ちょっとした〟仕草に過ぎない。
「エレナ、怖くない。怖くなんて無いんだ」
「う、るさい」
「マリだって、何をしたらいいのか、もう分かっている。だからエレナ」
「うるさいって、いってるでしょうがぁあああ!!」
　瞬間、魔力が渦巻き、跳ね上がった。メキメキと音を立てて溢れかえった高濃度の魔力は辺りの机や椅子を吹き飛ばし、窓を割り、壁を砕いていく。衝撃で煙が舞い、シールは目を覆う。
　駄目か、とシールは眉を潜める。
　今まで誰一人、エレナを導く事も、共にいることも、後ろを支える事もしなかった。ずっと孤独であり続けたエレナの脆さが、此処に現れている。間違えた事を受け入れる事は、子供には難しい。エレナにはそれを教えてくれる大人がいなかった。共に学ぼうとする友もいなかった。
「なら、僕がやるしかないか……」
　シールはそう溜息をついて、前を向き、そしてもう一つの事実を理解する。
　ミスト学院長がシールにエレナを託した、その理由を。
「……これはまた、凄いのが出たね」
　思わず感嘆が漏れた。
　放出された膨大な魔力は、教室の壁を見事に打ち破り、大きな穴を開けた。だが、それだけではない。流れ出た強大な魔力は、宿主であるエレナを、まるで守るようにして包み込むと、一つの形を作り出していた。

竜のように荒荒しい鱗のような肌、鬼のように凶暴な四つの腕、全てを拒絶するように体から伸びた何本もの角、手足からは獲物を串刺しにするように爪が伸び、眼球を失った虚ろな頭蓋骨は物語に出てくる死神のそれに近い。

エレナのその様相は、最早勇者伝に出てくるような魔神そのものだった。

五／二八
再改稿

第九話 戦闘

　王都ガイディア、北東、コロル山脈頂上付近
　山の頂上に存在する広場のような平坦な場所にいる、二人の影
　そしてその二人の前に立つ、一匹の、巨大な、巨大な黒竜
「良いんですか？ あの男にあの娘を全てを任せて」
「んー？ いいんじゃないかな」
　リーン・エリクスと学院長ミスト。二人は広間の中央で、目の前の巨大竜を前にしてのんびりと言葉を交わす。その内容は学院にいるゲルダー家の娘、エレナについて。
「あの子、神の加護がついているのでしょう？」
「うん。神といっても邪神だけどね。邪神メナス」
　加護、とはミストがシールに漏らしていた言葉。
　そして神の加護とは、この世界における上位者、【神】が人類に授ける力だ。
　神の加護に前触れは無い。突拍子も何も無くある日突然、全く予期せぬ形で与えられる。誰が与えられるのかも分からないし、どういう基準で授けられるのかも分からない。ただ、授けられた者は、その身体に、魔術師ならその魔力に、その【神】が保有する属性を体現する。
【火神】であれば炎の力を、【水神】であれば水の力を。そしてメナスは
「【破壊神】物事に終焉を与える力。だから不吉で邪神って言われているねえ」
「そもそもそうした定義は、人間が勝手に作るものですが」
　リーンは、黒竜から繰り出される火炎を、防壁を張って防ぎながら、呟く。
　破壊神メナスは【神殿】において、悪とされている。凶悪な神、何よりも破壊を好み、世に災厄をもたらす邪神と。だが、破壊だから悪、という捕らえ方は人間の勝手が過ぎる。物事には終焉は存在する。それが悪というのは、終わる事を畏れて、直視できていないという事だ。

だからエレナの持つ力は悪い訳ではないのだ。ただ、強すぎるというだけ。
　問題は、それを保有するエレナの心が、酷く未熟だという事。
「どんな力だろうと、それを振るう人間が間違えたら元も子もない」
　ミストは魔術で大きく跳躍し、黒竜の巨大な足を避けて、そう語る。
　リーンは転移で黒竜の背後に回りながら、首を傾け
「だからシールを？」
「まあね。ゲルター家のお嬢様、しかもそんな爆弾を抱えられるのは彼くらいだ」
　ゲルター家、というだけで大抵の人間は萎縮してしまう。恐れを抱き、言葉を選んでしまう。もしそれができなくとも、今度はエレナの持つ飛びぬけた才能が邪魔をする。その上神の加護まで持ち合わせたとなっては、並大抵の人間ではどうにもできない。
　だからシールだ。少なくとも彼なら、上記の問題全てを超えられる。少なくともミストはそれを信じている。首を捻っているが、リーンとて、信じぬ訳では無いだろう。
　だからまずは自分の仕事を済まさなければならない。
「気がすみましたか？ 古代の覇王」
　鋭いステップで次々と降り注ぐ雷光を避けながら、ミストは目の前で魔術を手繰る黒の竜に話しかける。すると竜は、まるで人間のようにニヤリとその牙の並んだ口元を歪め、
『いいや、まだ遊んでもらうぞ。人間』
　そう、喋った。否、言葉ではない、ミストとリーンの頭に直接響く、魔の言葉だった。高い知性と魔術を統べる竜の技術だ。
「……遊びって、こっちは真剣なんですけどねえ」
『ほう。ベラベラと話しながら戦う事を真剣と言うのか？ 人間は』
　そう言い黒竜は喉を鳴らす。肩を竦めるような仕草は人間じみていた。
　ミストは息を吐き、
「口が減らないね。お年寄りは」
『貴様とて人の限界をとうに超えているだろうに。爺』
「どっちもお年寄り何だから黙っててください」

すると二人は、否、一人と一体は同時にリーンを睨み、
『気の強い女だ。嫁の貰い手を無くすぞ』
「容赦ないね君は。お嫁に貰えなくなるよ」
「余計な御世話です耄碌爺ども」
　そんな軽口を叩きながら、三人の戦闘は続行した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　その頃、シールは
「さーて……どうしようかねー」
　学院で、魔神と化したエレナと相対し、困った顔をしていた。
『……ァアアァアア』
　魔神の形をした魔力、【メナス】の魔力に完全に身体を飲み込まれたエレナは、教室の壁に空けたから外へと飛び出していた。シールがそのように誘導した。教室で暴れられては直すのが大変だからだ。
　魔神の狙いは明らかにシールだった。死神の頭から明確な殺意が、破壊衝動がシールへと注がれている。エレナは既にその破壊衝動に意識を乗っ取られているようだ。
「怖いなあ……」
　シールはのんびりとそう言う。両手には何も持たず、その姿も教師の制服のままだ。見た目は完全に無防備である。にもかかわらずシールは自然体のままだった。
　だが魔神はそれに何かしら気を使う事も無い。
　まっすぐにシールへと向かい、そして
『ガァアァアアアアアアア!!』
　拳を振り下ろす。魔力で構成された魔神の腕は、巨大な岩石をも打ち砕きかねないほどに暴力的だった。対して、シールは、
「だから怖いって」
　そんな風に暢気な声を上げながら、身体を捻った。小さな動き、見方によれば必要最小限の動きで、その攻撃を避ける。魔神の拳は地面にめり込んだ。

シールは姿勢をそのままに、右手をゆっくり魔神の腕に添え、
「【元素を取り込む器よ】」
短く詠唱、
「【封印】」
瞬間、魔神の腕が〝削げ落ちた〟。
『アァァァアア?!』
まるでシールの掌に吸い込まれるように消え落ちた腕。魔神が悲鳴を上げる。削げ落ちた腕の部分を押え、獣のような動きで背後に跳躍する。そしてシールを睨みつけ、唸り声を上げげた。
シールの姿は自然体のまま。彼が戦うのに最も優れたその姿勢を崩さない。
「まるで獣だ」
『ガァァアアアアアアアアアアア!!』
咆哮、だが今度はその場から動かない〝六つんばい〟になった魔神はその口を大きく開く。まるでドラゴンが焔を吐き出すように、口内に魔力を凝縮。凝縮された魔力は閃光となり、一気に放出される。
「【封印術式】」
しかし、それも届かない。閃光はシールに直撃する前に、シールの目の前に出現した赤色の〝魔術式の壁〟それに阻まれた。そして閃光が細くなると共に、術式は砕け散った。
『ガァア!!』
今度は魔神も動きを止めない。六肢を踏ん張り跳ねる様にして飛び上がる。宙へと身体を翻し、再び魔力を凝縮させせる。破壊の意思の孕んだ魔力は雷光となってシールへと降り注ぐ。
「【封印】」
シールは赤い術式、【封印】の術式を再び張る。雷光は術式に飲まれていく。だがそれで留まらない。宙へと上がった魔神が四つの拳を振り上げ、振り下ろす。だがそれでも、シールは魔神をしっかりと見据えその場に留まり、片手を鋭く振り上げ、唱えた。
「【封断四連】」
轟音、激突音。それは

『ガ、ガ、グガァ！』
　四椀を全て落とされた魔神と、未だ無傷でそこに平然としているシールの姿があった。
「さて……と」
　シールは息をついて、前を見る。
　魔神は身もだえ、倒れている。苦しそうに見えるが、その中心に取り込まれているエレナには怪我が無い。あっては困る、とシールは溜息をつく。
【封印術】シールが手繰るそれは、相手を傷つけない。その身体を危害を加えず、マナのみ奪い、刈り取る。従者気取りの子供達にして見せたのもそれだ。マナは全ての源。魔術師であろうとなかろうとマナは体の内に存在している。それが急激に失われれば、身体は身動きが取れなくなる。
　本来の【封印術】とはまるで使用法は違う。相手を抑える、なんて用法で使用しているのはこの世でシールくらいだろう。だがシールはその〝体質上〟、封印術を用いた戦い方が一番合っていた。
『ギィィイ……ァァァ!!』
　魔神は腕を落とされ、身悶える。
　痛覚は無いはずだが、恐らく存在を維持できなくなっているのだろう。
　魔神。神の力の【顕現】
　この手合いと戦った事は初めてではない。対処は一つ。魔力を削りきる事。力を尽きさせる事だ。神の力を人の身で【顕現】させ続ける事はできない。放置していても力尽きる。シールが出来るのはそれを早める事だ。
「削りきって引きずり出してあげるよ。エレナ」
『オ、オォォオオ……』
　シールはゆっくりと近づく。地面に悶える魔神へと止めを刺す為に
　シールに油断は無い。この手の手合いと戦う事に、規格外のバケモノとの戦闘にシールは慣れきっている。ミストの依頼ではこれよりも遥かにバケモノな相手と戦う事もしょっちゅうだ。故に油断も慢心もない。
　そう。油断は無い。だが、〝誤認〟はしていた。
　目の前の少女、エレナが、【神の力の顕現】〝程度〟の異端であると。神の力を持っているが、それのみが彼女を異端たらしめているのだという〝誤認〟。

【メナス】の存在に気をとられ、結果、彼女自身もまた、単独で異端たらしめる才能がある事を失念していた。

　その、結果

『ハハ』

「え？」

　油断も慢心も無い。だがそれは相手の能力を測り損ねていては意味が無い。

　痛みに悶え転がる魔神。ただただ消えゆくだけだ、そう言う風に見せていた魔神。その背後から、いつの間にか新たに再生していた一本の腕。それが視界に収まらぬ速度で伸び、

「――っぐ」

　シールの腹部を、深く深く、抉りぬいた。

五／二八
再改稿

第十話 叩きつける者と受け入れる者

　骨が砕ける音がした。腹底から血が上り、口から零れ落ちる。
　激痛が脳を叩き続け、意識が遠くなりそうだ。だがそれだけはと歯を食いしばる。口の中に溜まった血を吐き出し、気を取り戻す為に息を大きく吸い込む。瞬間、ぼやけていた痛みが明確になり、更に辛くなった。
　ぼやけていた視界が少しハッキリする。だが同時に目の前には
『アハハハハハハハァアア!!』
　先ほどまで弱りきっていた筈の、そして今、完全に回復しきっている魔神。
　伸びるのは、剣の如く伸びた爪
「っ【封断】！」
　瞬間、魔神の腕がその半ばで、突如発生した赤の術式に断ち斬られる。
『ア、ァァァアア』
　だが、その傷は即座に再生する。失われた腕の代わりに新たに生まれた腕が、

「……ゆ、だん、したね」
　シールはそういい、軽口を叩こうとして、顔が引きつった。
　ありえない。
　シールは衝撃を受ける。神の【顕現】は【魔術】とは全く違う。【魔術】は大気の【マナ】を、ソレを自身で取り込み己の意思を溶け込ませた【魔力】とを利用し超常を引き起こす。手法は多岐に分かれるが、根本的に、万能物質【マナ】を利用する事には変わり無い。
　だが、神の【顕現】はそうではない。
【顕現】とは、神に与えられた力を、そのまま発現させるという事だ。魔術ではどう足掻いても発現し得ない現象をそのまま身体に宿す。それは大気のマナは利

用できない。自身の魔力でのみそれを発現させ続けなければならない。
　予備も何も無い、補充もできない。だから持続もしない。その筈なのに。
『ア、ハ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!』
　魔神は、健在だ。あれほどまで封印術で削いだのにその欠損を補填している。
　それどころか、
『【我ガ神ノ力ヲ掌握ス】』
「……!!」
　先ほどまでの、理性無き声ではない。明確な意思ある術式の詠唱。
『【顕現掌握】』
　魔神の形が変わる。先ほどまでの、ただ破壊の意思をむき出しにしたような死神の姿ではない。より形を収縮し、凝縮する。まるで鎧のように。残るのは、今まで取り込まれていた、ただ衝動に飲まれていたと〝思い込んでいた〟、エレナ。鎧の如く神の顕現を纏った彼女の姿。
『ヒ、ハハ』
「……意識があるな？ この不良娘」
　シールは軽く毒づく。正確には意識が完全にあるわけではない。正気と狂気の混在した狭間の内で揺れているのだ。魔術の詠唱は無意識の内に、衝動に任せて発動できるものではない。
　素で神の力を維持する人外レベルの魔力を保有し、神の衝動に飲み込まれながらも、神の力を制御してみせる魂の強さ、なるほど。見誤った。エレナ・ロズ・ゲルダー。彼女は特級の傑物だ。
　神の【顕現】など、彼女の力を彩る特徴に過ぎなかったのだ。
「さて……どうしようか」
　封印術を体内に巡らせる。痛みを抑え、血を留める。封印術の転用。医術ではない。単なる応急処置だ。だが呼吸は楽になった。しかし、事態は決して楽になっていない。むしろ悪化した。
『……』
　魔神を完全に取り込んだエレナは、静かにその場で揺らめいている。隙だらけ、とはいい難い。自然体。シールのように。模倣している。油断なき構えを。事、戦いにおいても彼女の才能は発揮されている

そんな彼女を、傷つけずに押えなければならない。
　なんとも、頭が痛い話だ。後、骨が折れたらしい腹も痛い。
「それでも、なんとかしないと、ね」
　子供の癇癪を受けとめてあげるのが、大人の役目なのだから。
「【顕現開放】」
　シールは短く詠唱する。すると彼の体が僅かに青色の光を放ち、体の内から外へと魔力が溢れ出す。それはエレナと比べるべくもない量ではあるが、エレナのそれより遥かに静寂した、熟練された魔力だった。
　シールはその魔力を身に纏い、エレナを見て、少しだけ荒っぽく笑い
「おいでエレナ。遊んであげよう」
『アハ♪』
　エレナは嬉しそうに笑った。同時シールは両手に術式を構え、飛び出す。
　教師と学生、二人の戦いが再開した。共に笑いながら。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　平穏な魔術学院の中庭で閃光が飛び交う。
　光の中心にいるのは二つの影。片方は学院の教師の制服、それを改造したものを着込んだ男。もう一人は力強く胎動する魔力の鎧を身にまとう少女。二人は平穏であった学院の中庭で魔力と魔力を交差させていた、
『アアァアアア!!』
　神の魔力を纏った少女、エレナは獣のような、否、獣よりも遥かに増した速度で駆け出す。両手には破壊の力を孕んだ閃光の剣。その剣を男の首を刈り取るように振り回す。対して男、シールは瞬時に閃光を潜り抜け、少女へと手を翳し、
「【封印術式】」
　赤色に光る術式をエレナへと貼り付けるように、手を伸ばす。その動きは鋭く、傍から見ても初動がまるで掴めない。だが少女は
『ッシィ』
　その動きをまるで見切っているように、身体を捻り回避する。更に身体を捻り背後へと跳ぶと、今度は両の手、更に背中から新たに魔力で形成された義椀を二

本、計四本の手をシールへとむけ、
『【破滅ノ閃】』
　四の発射口から繰り出される四つの閃光。異常な速度で、しかもうねりのたうち生き物のようにシールを追尾し迫っていく。シールは跳躍、高く飛び視界の下に閃光全てを捕らえきる。
「【封印】」
　巨大な紅の術式を展開する。シールを破壊しようと迫る閃光は全てシールの生み出した術式に飲まれていく。あれほどまで暴れていた光は一瞬で消えてなくなった。
『【神ノ領域】』
　凌ぎきり、着地するシールを前に、今度はエレナは両の手を左右に翳す。術式が発動した瞬間、周囲を漂うマナが揺らめき、エレナへと集う。神の力は自身でマナを取り込んだ魔力でなければ精製できない。だが、マナを通常の魔術に転用するというのなら、何ら問題は無い。
『火雷連爆』
　瞬間、凝縮したマナが魔術と化し、大爆発を起こした。綺麗に整えられた中庭が吹き飛び、土が、石が、舗装された道が、何もかもが吹き飛ぶ。
　だが、その爆発の中でさえも、シールはエレナへと突き進む。体が吹き飛ばされようとも、ひたすらにエレナへと向かっていく。
　エレナは、笑った。笑って、笑った。
　ただ狂気に飲まれている訳じゃない。混濁する意識の狭間で、揺らめく彼女の意思は開放感に満たされていた。今の今までずっと貯め続けていたフラストレーション。それが全て、今この時、吐き出されていく感覚を感じていた。
　もっと、もっともっともっともっと、もっと！
　生まれてからずっと、そう言っても過言では無いくらいに溜め込み続けたその憎悪は、まだまだ彼女の心の内に溢れかえっていた。その全てをはきだすべく、エレナはこの戦いを求めつづける。それが神の力を維持し、更には力を加えていた。彼女の才能を十二分に引き出し、神の力を完全に統べていた。
　いつもなら、こんな風に力を振り回したら、すぐに相手は壊れてしまう。だが、目の前にいる彼は砕けない。壊れない。畏れない。此方を真っ直ぐに見つめ

て、ただただ、エレナを想い、戦ってくれる。それがエレナにはたまらなく嬉しかった。

　ああ、だから！

　エレナは飛び出す。まるで恋人へと駆け寄る少女のように。この先、全てをさらけ出したその先に何があるのか、それすらも分からぬまま、エレナはシールへと特攻していく。

第十一話 決着

　深く溶ける様な夕焼けの光が荒れ果てた中庭に差し込んでいく。
　オルフェス学院における憩いの広場だった中庭は既に無残な姿となっていた。至る所が大きく抉れ地面が露出し、整えられていた植木は圧し折れ、穏やかな天使を象った銅像は粉々に砕け散っている。
　そんな惨状の中心で、シールとエレナの二人は今尚相対を続けていた。
「……っは、……っは」
『あ、は、はははは」
　エレナは笑う。だが、僅かに引きつった笑いだ。身体もグラグラと揺れている。疲れている。当然だ。いくら莫大な魔力を保有する天才だろうと、ここまで長い事戦い続けていたら、疲労する。彼女は力尽きる直前だ。
　勿論、シールはシールで死に掛けている訳だが。
「……うっぺ」
　口に溜まった血を吐き出して、シールは息を吐く。既に全身が痛い。こちらはエレナを傷つけないように気を使い戦っているのに、向こうは完全に此方を殺しにきているのだから怪我くらいするに決まっている。
　だが、ようやくだ。ようやく、エレナの魔力に底が見えた。
　もう後は、押し切るだけだ。
　シールは大きく息を吸い、吐き出す。
「さあ、エレナ、もうそろそろ日が暮れる。子供は家に帰る時間だ」
『ハ、はハ』
　エレナはグラグラと身体を揺らしながら、最後の魔力を体のうちから引き出す。両手から魔力が溢れ、それを武器のようにして握り締める。
「この遊びも終わらせようか」

『は、は、ハハハハハハ!!』
　最後の突撃。エレナはシールへと一直線に駆け抜ける。更に直前で跳躍し両手で抱えるように凝縮した破壊の魔力を構える。
『シィィィイル!!」
　求めるようにエレナは叫び、両手の魔力を解き放った。最早フェイクも何も無い。ただただ真っ直ぐに繰り出された一撃だ。その光をシールは掻い潜る。破壊を司る光はシールの身体を掠め、皮膚は瞬時に裂けた。血が噴出す。
「【汝、事象を別つ剣なり】」
　だがシールは止まらない。魔力で片手に術式を形成する。生み出すのは封印術式で形成された二次元の剣。紙のように薄っぺらいその剣をシールは握る。
「【封断偽剣】」
　構えから放たれた一閃は小さく、鋭く、そして無駄が一切無い。周囲で見守る人々はシールの掌から紅の閃光がエレナの身体を奔った様にしか見えなかった。
　そして瞬間決着がついた。
「……あ、れ？」
　シールが振りぬいた剣は、エレナの魔力の根源を根こそぎ【封印】した。何とか持続していたエレナの神の鎧は次の瞬間あっさりと砕け散った。エレナはくらりと身体を揺らし、何処か呆気にとられたような顔をした。
　シールは倒れそうになったエレナを支えて、微笑みかけ、
「やあ、気が済んだかい？ エレナ」
　まるで朝の挨拶でもするように、気軽にそう話しかけた。

「――あ、」

　エレナは、静かに目を見開いた。破壊の神の加護を削りきって、ずっとずっと溜め込み続けてきた全てへの憎悪を吐き出して、残ったのはただの幼い少女だ。女の子を傷つけて、罪悪感に悶えただけの、ただの少女だ。
「――あ、あ、あぁあぁぁぁああああ！」
　エレナは暴れだした。両手を振って、足をばたつかせて、爪を立てて引っ掻いた。しかしそれらは全て子供の動きだった。シールは軽く避けて、エレナの手を

とって、動きを封じる。
「怖いのかい？ エレナ」
　問う。するとエレナは、涙の溜まった瞳を向ける。、
「だって、怒ってるんでしょう？」
　エレナは、畏れるように、震えるようにそう言葉にした。過ちを犯し、怒られる事を畏れる子供、そう、彼女は単なる子供だ。恐ろしいほどの才能と、どうしようもない環境が彼女の心を覆い潰してしまっただけで、彼女は子供なのだ。
　シールは、そんな彼女の心をようやく引き出せた。
　だから頭を撫でてやって、シールは微笑む
　怒ってる、といわれれば怒ってる。それは勿論、此処までボロボロにされて怒らない人間なんていやしない、が、今はそれはおいておく。大切なのは
「エレナ、じゃあどうしようか？」
「どうって……」
「相手に酷いことをしたら、誰かを傷つけたら、どうしないといけないのかな？」
　エレナはシールの言葉に静かに耳を傾ける。そして何度か苦しそうに息を整えて、
「ご、めんなさい、」
　喉を鳴らして、引きつるような声で、そう口にした。口にした瞬間から瞳から涙が零れ落ちていく。ぽろぽろと大玉の涙が零れ落ち続けた。そして
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいっ」
　何度も繰り返す。今まで貯め続けていた。
「ごめんなさぁい」
　生まれて初めて、過ちを謝罪する事を許された少女は、何度も繰り返し謝って、精一杯に泣き続けた。
「いいよ」
　シールはそんな彼女の頭を撫でて、エレナが落ち着くまでずっとそうしていた。
　かくして教師と生徒の大乱闘は終結を迎えた。

第十二話 彼女のひと段落

　オルフェス学院医務室。
「シール先生？」
「はい」
　シールは体中に治癒術式の書かれた包帯を巻き、ベットの上での上に寝かせられている。メリアはシールを眺めながら、何処か堪えるような溜息を吐いた。
「貴方は、子供の喧嘩を諌める為に、相手の子供を連れに出たのですよね？」
「ええ、まあ……」
　シールは少し引きつりながら頷くと、メリアは大きく溜息をつき、額に青筋を浮かべながらシールの耳を捻った。
「いたいいたいいたい」
「骨折個所合計一二。ヒビが二〇個所。全身打撲に裂傷に火傷に魔力枯渇……」
「いやあ……あっはっはっは」
「何をしにいったのですか！ 貴方は！」
　実際は、確かに最初に言ったとおり、喧嘩した子供を連れ戻しに言ったのだ。その手段と方法があまりにも常識外れであっただけで。
「強い回復魔術は危険で、寿命を削らぬように治癒するのは神経を使うんです」
「いやあ……あっはっは」
「ただでさえ今日は怪我人が多いのに、これは何かの嫌がらせですね？」
「……ごめんなさい」
「今日一日絶対安静。動いたら殺します」
「イエス・マム」
　どちらにせよ、ベットに縛られて全く動けない訳なのだが。
　あれから、シールもそのままぶっ倒れ、医務室に運ばれて現在の状況だ。マリが既に怪我の治癒を完了し、自室に帰っていたのが幸いだった。こんな姿を見せ

たらまた間違いなく心配するに決まっている。
　ちなみにシールと一緒にエレナも運び込まれたりはしたのだが、彼女も既にこの場にはいない。怪我自体は殆どしていない。封印術による〝返し〟なども使用したが、基本シールはエレナの魔力の源泉を封じただけだ。それもシールが解けばすぐに回復した。
　エレナは目を覚ましてから何も言わなかった。ただ回復をした後、シールを一瞥し、その後何も言わず、帰っていった。シールは言葉をかけなかった。彼女には一応、シールがやれることはした。後は彼女を信じるしかない。
　エレナは賢い。その賢さが今までは彼女を苦しめる鎖となっていた。
　だが今なら、その賢明さを、もっと正しい形で使える筈だ。
「後は、彼女を信じますか」
「ほう、随分な信頼関係ですね。いい様晒して」
　と、そこに聞き覚えのある声がした。
　リーンか、とシールは首をそちらに向け、
「リーン先生、酷いじゃない……で、す、か」
　そう言おうとして、リーンの姿をみて言葉を途切れさせた。
　リーンの姿はボロボロのシールから見ても、中々に酷い有様だ。シールと同じくらいにボロボロで包帯でぐるぐる巻き。裂けた制服の下から肌が晒され、更に僅かに火傷の跡。
「……えらいことになってますね」
「コレを仕留めるのにえらいてまどりました」
　そう言ってリーンが指先にぶら下げるのは、小さな黒いトカゲだった。微妙に普通のトカゲと違うのは、その背中に可愛らしい翼が二つ生えているところだ。
「……それなんです」
「古代を支配していた竜。徹底的に叩いて潰して小さくしました……疲れた」
　リーンは隣のベットに倒れこむ
「いやあ、大変だったねえ、二人ともお疲れ様」
「……学院長」
　続いてミスト学院長がひょっこりと顔を出した。頭にはかるく湿布を張っているが、それだけだ。二人と比べて彼は目立った怪我は全く無い。いたって健康体

だ。その姿をシールは半ば恨めしそうに眺め、
「さすが妖怪」
「何か言った？」
「いいえなにも」
　シールは溜息をついた。彼とて決して楽をしている訳はなく、シールやリーンと同じくらいの局面に立たされていた筈なのにこの姿だ。立ち回りの違い、経験値の違いとでも言うべきなのだろうか。
　と、思っていたのだが、よく見れば彼の頭にタンコブが一つ出来ている。
「……その頭は？」
「……メリアちゃんに殴られた。怪我人を増やすなって」
「「ざまあみろ」」
「こんな時だけ息が合うね二人とも」
　学院長は爽やかな笑顔を作りながらそう言うと、改めて、と二人に向き直り
「さて、まあ今回もこうして、この学院と国崩壊の危機からは救われました」
「おおよそ数ヶ月前に救ったばかりなのですが」
「なんだってこんなにこの国と学院は崩壊の危機に晒されてるんですかね」
　学院長からの依頼は頻繁に学院やら国やら世界やらを救う事に直結している。
「今時不安定なんだからしょうがないね」
「だったら人手増やしてください」
「君達以外の人事が増えたって役に立たないし、力不足だしねえ」
「僕達教師ですよ。一応」
「教師の仕事を続けたかったら頑張ってください」
「脅迫ですかこの最悪ジジイ」
「なんとでもいうがいい、はっはっは「患者を、刺激、するな！」
　メリアの拳が学院長に突き刺さり、連行されていった。そしてシールとリーンの二人はその場に取り残された。
「……」
「……」
　二人とも疲労困憊の状態だ。たとえメリアの治癒があろうと肉体の根本の疲労までは抜ききる事は出来ない。シールもリーンも心底疲れ果てていた。シールは

リーンに何か言葉をかけようかとも思い考えをめぐらせていたが、
「シール先生」
「はい？」
　リーンの方から声がかけられた。リーンはベットに身体を押し付けてこんこんと眠りながら、僅かにくぐもった声で、
「……怪我は、どうなんですか」
「別に、問題はありません。暫く安静にすれば元通りです。メリア先生もいますし」
「そうですか」
　その後、よかった、とも安心したとも言葉を作らず、再びリーンはベットに顔を埋めた。何時もの一本調子の声で、確認のように声をかけただけだ。しかしシールはそのリーンの言葉に、僅かながら安堵の色を感じ取っていた。
「……なんですか」
「いやいや、可愛いなあ、と」
　直後、リーンは備えられていた花瓶を握り締め、振りかぶった。
　シールは冷静に、両手を上げた。
「落ち着きましょう。まずはそれを下ろしましょう」
「そうですね。お花たちがかわいそうです。投げては」
「どうしてあなたはそう突拍子も無く致死レベルの暴力を振るおうとするんですか」
「キモイ事を言うからでしょう」
「ひょっとして照れ隠しですか？ かーわーいい「死ね」ごっぱあぁ!?」
　その後、メリアがキレて二人に鉄拳制裁を下すまで、この下らない痴話騒ぎは続いたそうだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

『ゲルダー家長女ご乱心事件』から数日が経過した。
　シール教員の担当する初等クラス

「先生さようならー」
「はい、さようなら」
　授業終わりの鐘が鳴り、子供達が一斉に教室の外へと飛び出した。事件のきっかけとなった少女、マリも今はすこぶる元気そうに、シールにめいっぱいの笑顔で手を振り、トモダチと共に外へと飛び出した。今日は一体、何をして遊ぼうか、そんな事を話しながら。
「……平和だなあ」
　教室を出て、中庭の見える渡り廊下を過ぎながら、シールは口にした
　外はまだ、前回の事件の痕跡がありありと残っているものの修繕は進み、再び学生達や学院の研究者達の憩いの場となっている。食事を楽しんだり、ゆっくりと身体を休めたり、誰もが各々の休息を満喫している。
「ああ、平和だ」
　シールは改めて呟く。やはり平和が一番だとそう噛み締めて。自分自身の世界が平穏無事に保たれている。これほどうれしいことは無いのだ。今日も今日とて、彼は自らの平穏なる日々を満喫していた。
　これから昼休みだ。さて、今日はどんな本でも読もうか、そう思いつつシールは自室へと足を踏み入れ、
「やあ、また来たのかい」
　先に部屋にいた人物に、にっこりと笑みを浮かべたそこには、陽の光のように明るい髪をした、そしてその髪に負けないくらいに素敵な笑顔をした少女だった。

エレナ編再改稿終了

魔術学院の平和主義者

課外活動編

第十三話 比較的平和な日常

「あー……美味しいなあ」

　今日も今日とて窓から流れる爽やかな風を受けながら紅茶を楽しむ。
　嗚呼、なんて優雅で贅沢なんだろう、と、うっとりとしてしまいそうになる。
　窓辺には小鳥が可愛らしくチュンと鳴き、平和と癒しを運んできてくれる。
　子供達の楽しげな歓声もまた、その緩やかな雰囲気を彩るＢＧＭとして耳を撫でる。
　このままずっとのんびりしたい。そしてそのままこの世の一部になって溶けて無くなりたい。それもいいなあ、などと、少々破滅的な事をシールは考えていた。

「本当に消えて無くなってしまいそうね。先生」

　と、そんな彼を現実に戻す声。

「エレナ。また授業サボったのかい？ 駄目じゃないか」

　エレナはあの事件以降結構頻繁にこの部屋を訪れていた。
　とは言っても特に何かおおごとを起こす訳では無く彼の部屋に収納されている書物を読み漁り、紅茶を飲んでは適当な時間にふらり帰るだけなのだけれど。
　彼女の事は嫌いではない。むしろ此方の話をすぐに理解し、的確な考察で持って答えを用意してくれているから好ましくすら思う。
　だけど、授業をさぼるのは正直いただけない。とシールはため息をついた。

「知ってる授業だったのよ。いたって時間の無駄」

　そう言いながら本棚から適当な本を取り出すと、ベットに寝転がり我が物顔で読み始めた。

「やれやれ」

　彼女は、あの暴走以降、精神は安定した。下手な事で癇癪も起こさないし、誰かを怪我させたりもしていない。マリの件にしたってその経緯は知らないが一先ず互いに謝罪は済ませている。
　とはいえ、決して彼女自身がちゃんと学院社会に復帰できたのか、と言えばそうじゃない。
　まだまだ、彼女の心は未熟だ。故にこれからこそが本番なのだ。どれだけ彼女の心を成長できるか。どれだけ心を人と通わせる事が出来るのか。

　しかし、その問題の行き先が自分の双肩にかかっていたりするのだから困ったものだったりする。

　普通こういうのは、それこそ両親や、担任が背負うべき責任の筈なのに。
　学院長曰く
「エレナちゃんの両親に話したんだけどさ。彼女のお母さんが、『エレナに暴力を振るったのは何処の教師なの！ 早く首にしてください!!』の一点張りでさー」
　との事らしい。彼女の過保護っぷりはどうやら母親にあるらしい。

　また、一応彼女のクラス担任であるユミ先生に話をすると
「も、申しわけありません！ わ、わ、私の力不足のしぇいでぇえ!!」
　と、泣かれ騒がれで会話にならなかった。年もシールよりさらに若く、経験不足な彼女には元から荷の重い問題だったらしい。

　と言う訳で、エレナの更生はシールに全て任されることになった。

「任されてもなー」

　エレナの細く長い指がページを捲る音を聞きつつも、シールはため息をついた。
　そもそも、シールとエレナは出会ってからほんの数日、一月もたっていないのだ。
　確かに普通の人よりもすんなりと仲良くできた。事件の結果、彼女の本心の一端にも触れられた。それは事実だ。だが、それでもやはり関わった日月が短すぎる。
　今も平和に会話を続けているが、果たしてこのまま良いものか。本当はもう少し広い世界を見つめさせるべきなのではないか。でもどうやって？
　彼女に今更教室で仲良くしろ、などと言うのはあまりに酷だろう。
　だからといってこのまま二人きりで仲良くなっても、果たして彼女にとって大きなプラスになるのか？
　と、再びジレンマに陥りそうになって、やめた。面倒くさい。

「さっきからなに一人で何ぶつぶつ言っているの？」

　首をかしげて此方を見つめるエレナの頭をぽふんと叩くと、シールは笑った。

「今から体験実習に行こう」

第十四話 野外授業

　オルフェス魔術学院の領地は広い。魔術と一言でも言ってもその分野は多岐に渡る為、それら全てに対応する施設を作っていく内にどんどんと広げざるを得なくなってしまった。と言うのが原因なのだが。
　そんなわけで、とにかく広いこの魔術学院の施設の一つに、森がある。
　森。そう。言葉そのまま森だ。オルフェス学院の裏口から始まり数キロまで続く木々の群生。それらは全てオルフェス学院の領地だった。
　此処では実験に必要な魔法薬の材料の採集や、簡易な魔術の訓練、子供たちの遊び場等、様々な理由で使われている。とは言っても、此処まで大きい必要は〝本来〟ならないのだが。

「と言う訳で、今日は魔法薬の材料になる薬草摘みをしよう。自分の知識を使ってポーションを合成する為の材料を探してみなさい。いいね？」

　そんな巨大森林の中に作られた広場の中で、シールは優しく目の前に並ぶ子供達に問いかけた。

「「「「「はーい」」」」」

　元気の良い返事。シールは嬉しそうに頷く。

「此処は学院の領地内だから、万一魔物が入り込まないように結界が敷かれている。結界から外に出たらいけないよ。出ようとするとびりびりするからねー」
「「「「「はーい」」」」」

「それでは、何か質問はあるかい？」
「はーい！」

　子供達の中でもひときわ元気な声。少しくすんだ金髪の、背丈の低い男の子が勢いよく手を上げる。

「はい、ロロ」
「せんせーの隣にいる姉ちゃんは誰ですかー！」

　いきなり馴れ馴れしく『姉ちゃん』と呼ばれた彼女は、自分の髪の毛を指ですきながら、露骨に面倒くさそうな顔をしていた。

「よく聞いてくれましたー。彼女は今日僕の助手を務めてくれるエレナさん。皆の上級生だから、とっても頭が良いので、分からない事があったら彼女に聞くように」
「「「「「はーい」」」」」

　やはり、元気の良い返事にシールは再び笑みを浮かべた

「それじゃあはじ」「ちょっと待ちなさい」

　直後、シールはエレナに首根っこを掴まれた。

「何、エレナ」

　若干圧迫された首を擦りながらシールは答える。

「体験実習って、初等部の？」

　授業の勉強を必要無いというのなら、他の勉強をしなければならないね。と

シールに無理やり連れられて、たどり着いた先に待っていたのは鼻を垂らした子供の群れ。始まったのは子供達が楽しみにしていた楽しい楽しい野外授業ー。
　意味分からん。エレナの心境はその一言に尽きる。

「今日は魔法薬を一人で作ってみようって題目でね。森の使用許可をようやくもらえたんだ」
「帰るわ」
「はいストップストップ。待って待って」

　ひょいとエレナの前に立ちふさがるシール。

「まあまあ、良いじゃないか。たまには息抜きでも」
「それを貴方が言うの？」
「君の教育の一環でもあるんだよ？」
「この地域一帯の動植物の名前一日かけて全部言ってあげましょうか？」
「その天才スキルを子供達の為に使ってみようか」

　普段ならあらゆる方面から押し切られる形で厄介事を押し付けられるシールにしては珍しく、エレナに二の句も告がせる間も与えず、

「それじゃあ、始め」

　ポン、と手を叩いて野外授業の開始を宣言した

「ねーちゃん。これ何？」
「レッドハーブよ。生物学で最初の方に習ったでしょう？」
「これは？」

「アオジロダケの亜種。食用だけど魔法薬には使えないわ」
「エレナさんエレナさん！ これはなんですか!?」
「クルムの実……自分で思い出しなさい。そろそろ」

　何故私がこんな事を、おねーちゃんおねーちゃんと、出会って数分の彼女に楽しそうに寄り添ってくる子供達を相手、エレナは大きくため息をついた。
　子供は嫌い、では無い。だが苦手だ。どう対応すればいいのか全く分からない。
　無下にあしらう訳にもいかないし、親しくするにはどうすればいいのかも全く分からない。
　分からない。分からない。全く分からない。だから立ちすくむしかない。

「……どうしろってのよ」

　ため息をつく。それと同時に、する事が無い為か、エレナは自分の現状を思い返す
　自分が引き起こした事件から数日、教室から完全に自分が孤立してから、取り巻き達が自分の周りから消えてから数日、両親から帰って来いという手紙を連日受け取るようになってから数日、エレナは事件が起こる前とそう変わらない生活を送っている。
　そう、事件の前と後で生活に愕然とした変化は、無かった。
　何時ものように授業の先生の声を右から左に流し、時にサボリ、時に真面目に授業を聞く。明確な違いと言えば勿論取り巻きが消えた事だが、元より不快感を感じているだけの存在が消えても、彼女としては清々した、くらいしか感想が無かった。
　残る違いと言えば、頻繁にシールの部屋を出入りするようになった、くらいのものだ。
　しかしその部屋の中においても、特にこれと言って特別な事をしている訳も無く、部屋内に置かれている少々風変わりな本を適当に読み、淹れられる紅茶を楽しみ、茶菓子を貰い、本の内容に関してシールと適当に討論する。以上。

本当に、これでもかというくらい何事も無い。あれだけの事を起こしたというのに。

「……まあ、そんなもの……なのかしら？」

では、と、エレナは考える。
私の内面、心には変化が訪れたのだろうか？ と、

「……」

事件の前と後、確かに自分の心が軽くなったような、そんな感覚はある。
今まで体中を纏っていた不快感が全て無くなり、リセットされた、そんな気分になる事がある。
とはいえ、やはりあまり変わっていないのではないのか、とも思う。自分の思考回路は事件の前後では何も変わっていない。今でも他の生徒達の事を愚鈍だと思う事がある。
教師の事を愚かだとも思うし、リーンの事は今でも苦手で、嫌いだ。
自分の思い通りに事が進まなければ不快に思うし、苛立つ。
自分は何も変わっていない。何も。そう思う

「……はあ」

そして、今の自分はそれを良しとは思えなくなってしまった。
変わらない自分への焦燥が、確かにあるのだ。その衝動がどこから来るのか、シールを傷つけてしまった罪悪感からなのか、自分のプライドから湧きあがるものなのか、彼女にはわからない。
だけど、何か変化を、否、成長を、求めていた。何処に向かえばいいのかわからないのだけれど
だというのに、

「エレナー。鬼ごっこしようぜー！」
「ねーちゃん美人だなー！ 付き合ってるやついんの?!」
「エレナさん！ 変な虫が出た!!」

　何故こんな子供達に囲われなければならないのか。
　自分の焦燥を無視するようなのほほんっぷりは何なのか。
　何故この子供達は薬草の採集を終えた後も私に纏わりついているのか。
　そして無理やり此処に連れ込んだあの男はなぜ陽だまりで昼寝をしているのか。

「……ああもう」

　諦めたような声が漏れた。もう、どうとでもなってしまえ。

　エレナは気がつかない。
　変化とは非常に緩やかで、しかし確実に進むものなのだと。
　エレナは気がつかない。
　変わらなければならないと自分で思えるその事が既に変化なのだと。

第十五話 マリとエレナ

　それは、大体、採集が始まってから一時間ほど経ったときの出来事だった。

「エレナちゃん。マリちゃんがいない」
「はあ？」

　いきなりそんな事を言われたエレナは、その言葉に首を傾げた。
　マリ、と言うのは、まあ間違いなく、あの事件で自分が傷つけてしまったあの少女だ。それは分かる。この辺りでは珍しい名前だったし、集合の際には彼女に睨みつけられたのを覚えている。
　その少女が、いない？　何故？

「……あの子と一緒にいたんじゃないの？ 貴方」

　目の前の、ちょっとぽーっとした感じの子と、仲良く採集に駆けまわっていた筈だ。彼女は。

「うん……でもマリちゃん、時々妖精さんと一緒にフラフラ何処かに行っちゃって。今日も気が付いたらいなくなってて……」
「妖精……」

　妖精、マナの結晶が意思を持った存在、と、言われているが、結局のところよく分かっていない。ただ、兎にも角にも悪戯好きで、好き嫌いが激しく、好ましいと思った相手にとことん尽くし、同時にからかうのを何よりの楽しみとする厄介な生物。

そしてマリは、その厄介な面白生命体に好かれているという。

「なんだって、よりにもよって」

　この森に敷かれた結界、と言っても結構な広さを誇る。すぐに帰れるように彼方此方に看板が敷かれているが、妖精がいたのでは意味が無いに等しい。

「【魔の標を我が前に示せ】」

　魔術を発動、瞬間、瞳にマナの動きのみで完成された世界が映るされる。
　視界を動かせば生命体、木々や草花がマナを溢れさせる姿が視界に浮かぶ。
　中でも人間の放つマナは人の持つ生命力と混じり合い、魔力に変異している為、分かりやすい。
　視界を巡らせる。物体の遮りが失われた為、視界は良好。意外に便利な魔術だ。これは。
　と、かなり離れた距離に、奇妙な動きをするマナと、その中心で奇妙な魔力を放つ人影を発見。

「……見つけた。何しているのよ。あの子」

　大方、妖精に誑かされたのだろう。妖精は危険が無い場合、仲良い相手をとことんからかうのだ。

「シール！」

　彼女を連れ戻してもらおうとシールを呼びかける。自分が行ったところで妙な小競り合いが起こりそうな予感がひしひしするから。
　ところが、

「……」

当の本人は、未だ陽だまりの中で眠りこけていた。

「……ロロ」
「何?! ねーちゃん！」

エレナは、何故か一方的に懐いて来た少年を呼びつけると、眠れる森の馬鹿を指差した。

「あの馬鹿に、可能な限りのラクガキを施しなさい」
「了解！」

エレナはマリとの事を思い返す。彼女への謝罪を思い出す。
事件が起こってから、その日の内にエレナはマリに向かって頭を下げた。ろくな謝り方も知らず、どうすればよかったのか分からなかった彼女は、ベットに座っている彼女に向かって深々と頭を下げた。
エレナの心には深い罪悪感があった。それが〝罪悪感〟だと気がつけたのはシールのお陰だったが。
彼女を、幼い子供を傷つけた罪。それをその子自身によって断罪してもらう為、彼女は謝罪した。
それを、幼子自身に強いる事はあまり良い事とはいえない物の、それは彼女なりの誠意だった。

「いいよ。私の方こそごめんなさい」

マリはそういった面では彼女よりもしっかりとしていた。
　彼女の罪をマリは許し、自らの罪を懺悔した。
　エレナはほっとした。こうして真正面から許しを請うのも、許されるのも初めてだったから、無事、許されることができて、ほっとしたのだ。
　私も許さなければ。
　そう思い、エレナは顔を上げた、のだが、

「だけどね」

　彼女を待っていたのは、むっつした顔でエレナをにらむマリの姿だった。

「だけど。先生の事は許さないから！」

　結局、彼女とは仲直りまでは達していなかったのだ。

　…………
　………………
　……………………………

「……謝ったわよ」

　誰に言うでもなく、森の中を突き進みながら、エレナは唇を尖らせた。

　謝った。確かに謝った。私は謝った。が、ならば私自身は納得しているのだろうか。
　納得しているというのなら、何故、心にモヤが生まれるだろうか？
　知っている。これは罪悪感だ。
　もしも私が納得しているのなら、こんなものは現れない。
　ならどうすればいいのか。謝罪以外に、私はそれを晴らす方法を知らない。

「……て、今悩んでも仕方が無いわよね」

　今は目の前の子の子、マリをさっさと連れ戻さなければ。

「マリ」
「キャ！ ……あ！」

　エレナに肩をたたかれ驚き、同時にエレナの姿に気がついた彼女は眉をキリキリと尖らせた。

「何よ！」

　いきなりケンカ腰。エレナは肩をすくめた。

「貴方が皆とはぐれているから迎えに来たのよ」
「はぐれてないもん！」
「はぐれてたじゃない」
「材料集めしてたの！」

　そう言いながら彼女は、自分が持っていた籠を見せつけるようにエレナに突き出した。
　エレナは適当な賛辞でも述べてやろうかと口を開こうとして――閉口した。

「どう？ すごいでしょ！」

　ふふん、と胸を張るマリ。エレナはそんな彼女を瞬きしながら見つめると、気を取り直すように首を振り、彼女の籠の中の真黒な木の実を取り出した。

「ブラックキャンディ。食べたら中毒症状を引き起こし、処置が遅れれば死の危

険もあり得る」

　次に、青く、美しく輝く野草を一つ取り、

「青骨草。その根に数百倍に薄めても人を死に至らす猛毒を所持し、害虫から身を守る」

　最後に、血のように紅い、美しさとおぞましさが同居したような奇妙なキノコを手に取り、

「ブラッディオーブ。たった一つで数百キロ分の麻薬を生み出す驚異のキノコ。これが市場に出回るだけで国の麻薬中毒者が数倍に増加すると言われる危険指定ランクナンバーワンを誇る裏社会の秘宝」

　淡々と説明し終えたエレナは、最後にマリに向かって困ったような、呆れたような顔を向けた。

「……貴方、ドラゴンでも殺す毒薬を作る気なの？」

第十六話 妖精のイタズラと森の泉

「何怒ってるのよ」
「怒ってない！」
「怒ってるじゃない」
「怒ってないもん！」

　現在、マリとエレナは森の中をひたすら突き進んでいた。
　と言うか、マリがエレナから離れようと，どんどん先に進み、やむなくエレナがマリの後を追いかける形になっているだけなのだが。

「何処行くのよ」
「知らない！　ついてこないで！」
「これで十分よ。帰りましょう」

　そう言ってエレナは籠をかざす。中には毒の実、毒キノコ、この地域に取れるありとあらゆる希少な毒物が勢ぞろいしている。
　よくもまあ、こうも狙ったように毒物だけを採集できたなと、エレナは感心した。
　しかし、だからと言って別に彼女を馬鹿にする気は無い。
　毒は薬にもなりえる。そしてこれらの採集物は非常に希少だ。今回の本来の目的とは大きく異なる成果ではあるが、これを真っ当な研究機関へと持っていけば魔法薬学の進歩に大いに役立ててくれる事だろう。
　そういう意味で、エレナはそう口にした。一応彼女なりに気を使ったつもりだったのだろう。が、

「ちゃんと探していたもん!!」

　マリはますます頬を膨らませて先に行ってしまった。彼女からすればその収穫物は失敗の証拠であり、見られたくない物でもあるのだった。それを突きつけられれば嫌な顔をするに決まっている。
　そう言った感情をまだ学ぶ途中にあるエレナには、その気もちがよく分からなかった。
　やっぱり子供は苦手だ。どう扱えばいいかわからない。エレナは胸中で呟いた。
　まあ、いい。別に仲良くする必要なんてない。兎に角この子を連れてシールの元へ……

「……て、ちょっと、此処、何処？」

　入り組んだ地形、複雑に絡まり合い、人の手の加えられていない無造作に成長した木々、鬱蒼とした茂み、日の光を遮る枝葉。どう考えても、今まで来た事も無い雰囲気を漂わせていた。
　マリについて行ったのだから、マリは知っているのかと彼女に尋ねたのだが、

「……あれ？」

　ところがそのマリもキョロキョロと辺りを見渡している。

「看板は……」

　出口の方面へと導く矢印の付いた看板を見ようとして……その看板が不自然に傾いているのに気がついた。

「……」

看板の、その背後を見やる。するとそこに、ぼんやりと漂うマナの塊がいた。

「あ！ 貴方達！ 駄目じゃない！」

　マリが叫ぶ。するとマナの塊はフラフラとエレナの前から飛び去りマリの元へと飛んでいく。
　妖精。マナの塊であり、それを視認できるものが限られる厄介な生物。エレナ自身にもその姿はぼんやりとしか映らず、深く意識を尖らせなければその存在すら認識できない小さな生命体。
　いや、今はそんな事はどうでもいい。
　不自然に動かされた看板、見知らぬ場所、妖精の悪戯、これらの要素を繋げれば最早考えるまでも無い。
　迷った。間違いなく。

「……【魔の標を我が前に示せ】」

　魔術で居場所を確認、しようとすると、何故か目の前いっぱいにマナの塊が広がる。

「……」

　エレナの顔面にへばりつく〝もやもや〟　妖精達が何故かエレナの視界を遮る。

「……うっとーしー!!」

　目の前をブンブンと振り回してみるが、触れられない。妖精には実体が無い。

「妖精さんに意地悪しちゃだめ！」
「だったらどうするのよ！ 私達このままだと遭難よ!?」

時すでに遅し、かもしれないが。
　まあ、妖精の事を誰かに問いただすことほど、不毛な事も無いとは思う。

「うぅ……でも、妖精さん、何処かに行ってほしいみたいなんだもん」

　マリは眉をひそめ、彼女の周りをフワフワと漂う妖精達の声を必死に聞き取ろうとしている。

「何処かって……何処よ」
「……あまりはっきりでは自分でも分からないみたい」
「……本当に、適当な生物ね。妖精って」

　どうするか、闇雲に進めば体力を使うし、余計面倒な事になりそうだ。
　ならば魔術を……遭難の時に扱う魔術って、なに？

「せめて、現在地が把握できれば……」

　自身のいる場所が一体どこなのか、ある程度理解できていなければ転移魔術も使えない。
　だが周りに目印になるようなものは無く、鬱蒼とした木々に視界が遮られる。

「……そうなると」

　空を仰ぐ。木々の陰に隠れて日の光が差す。その先にあるのは雲の無い綺麗な青空。

「飛翔魔術……」

　風属性、あるいは地属性の魔術を操れる魔術師が扱う魔術。

それを使って視界の晴れる空まで移動するか。
　風の飛翔魔術は扱った事が無いし、熟練の魔術師でも失敗しそうになるほど繊細な魔術だ。
　自信が無い。こんな混沌としたマナが溢れる森で、操作ができるとは思えない。
　地属性、重力を操る魔術。だが私自身、未だに重力を操る感覚は身につけていない。

「……重力。万物を大地に結び付ける力、大地の力」

　言葉にし、イメージを湧かせようとした、が、上手くいかない。形にならない。
　……発想を変える。思考を切り替える。自己能力を再認する

「……【特質顕現】」

　ズルリ、と、背中の中心から魔力の塊が抜け出る感覚が発生。
　私の背後で、形が定まらずにうねうねとのたくっている魔力。
　破壊神【メノス】の力を宿した私の魔力。属性は【破壊】。万物の崩壊。
　シールが説明してくれた私の能力。神が勝手によこした厄介な才能。
　だが、折角与えてくれたのだから、使わせてもらう。
　術式を組み立てる。イメージの、意識の海に自分を沈める。

「【操作・破壊】」

　大地の破壊。重力の破壊。自身を地面に縛り付ける鎖を粉砕するイメージ。
　宙へと浮かぶ自身の妄想。地面から解放される自分の肉体への想像。

「……わぁ」

マリの声で目を開く。既に自分の体は地面から離れ、宙へと浮かんでいた。
　此処からさらに想像。次は自在に空を飛ぶ自身のイメージ。
　必要なのは空を動き回る足、足、羽根、羽根、翼。翼。鳥、天使、天使の翼。
【特質顕現】の形を変える。翼に、最もイメージを受け入れてくれる形に。

「……よし」

　体の安定が増した。目を開き、意識の海から自我を引き上げてもそれが維持された。
　意識を周囲の視界に向けると、爽快感が胸を駆け抜ける。
　一切の障害が排除されたその光景は心地よく、美しかった。飛翔魔術が人々にあこがれの目で見られるその理由が今、理解できた。これは心地良い。
　だが、その快感は長くは続かない。やはり慣れない魔術。すぐにバランスが取れなくなる。

「現在地は……」

　落下する前にそれだけは把握しないと、と、周囲を見渡す。
　すると学院が目に入った。
　米粒の様な小ささの。

「……何時の間にこんな所まで」

　結界なんてとっくに通り過ぎてしまっているだろう。何処かに抜け道でもあったのか？

「っきゃあ？」

　少し気が抜けた、途端、グルンと体が宙で一転した。早くも現状を維持できなくなっている。

兎に角、方角だけは分かったんだ。そっちに歩き続けていれば何とかなる。
そう思っていたらもう一転、やっぱり飛翔魔術は操作が難しい……

「……うん？」

上下逆さまな視界の中、一瞬捉えた別の光景。
それは、まるで空の澄んだ青色をそのまま映したような、煌めく湖。

「何処行くの？」
「貴方のお友達が行きたがっている所よ」

エレナはマリの手を引いて、森の茂みを割って歩く。
「妖精達が何処かに行きたがっている」というマリの台詞。思い当たる場所は先程見かけたあの湖しかない。となれば、行ってみるしかない。幸い其処まで遠くは無かった。
妖精がマリを好いている以上、危険な場所ではないだろうし。
奇妙にねじ曲がった木の体を潜り抜け、目の前に群がる葉を退けて、視界を広げる。
そして、直ぐにその光景に巡り合った。

「すごい！」

ストレートなマリの反応。だがエレナの感想も概ね似たようなものだった。
一面に広がる澄み切った青、日の光を反射しキラキラと輝く泉。見下ろすと底まで見通せる程の透明度。現実感の無い戦慄するような景色だった。
それらを囲む木々は日の光と、泉からの反射光の両方を受け止め、その喜びを

表す様に見事な枝を目一杯に伸ばし、青い泉のキャンパスに多色な葉を彩っている。
　呼吸をすれば、まるでこの場だけ浄化されたような、そんな清らかな風が体の中まで巡る。
　現実のそれとはとても思えない、夢の様な光景が広がっていた。

「……こんな所あるなんて」

　学校の裏手の森。
　これだけ身近な場所にあるとは思えないような、俗世とは隔絶されたような空間だった。
　マリの方をみると、その近くの妖精達も嬉しそうに動き回っている。
　満足したようだ。それはよかった。
　此方の問題はいまだ解決していないが。まあ、よかった。

「……うん？」

　現実逃避に近い思考をし始めていたエレナだったが、ふと、泉の中心を見上げると

「……精霊？」

　妖精の上位種、マナの塊を自ら魔力に変えられる、生物とマナの中間を漂う奇蹟の存在。神と人の仲介者と呼ばれ、その容姿はつかさどる魔力の属性によって異なる。
　泉の中央にいた妖精は、その泉と同じくらい美しい、水の属性をつかさどる精霊。
　その精霊が、此方に向かって微笑みかけた。

『あら、メノス様の巫女だなんて、珍しい』

第十七話 精霊との対話と締まらない男

　エレナを見つめ，微笑む女性。水の属性を宿す湖の景観に見合う美しい容姿の精霊。
　精霊、そう、精霊。
　まるで液体が実体をもったかのような、そんな透き通った体。
　その体に重量を感じさせない衣をまとい、湖の中心で浮き上がるその姿は美しさと不気味さが同居したような、不思議な光景だった。
　正直なところ、どう接すればいいのか分からない。恭しく膝でも突くべきなのか？

「精霊様だ！ すごーい！」

　と、そんなエレナの躊躇をあっさりと追いぬいて、マリが精霊に手を振った。

『あら、貴方がこの子たちが話していた子ね。えーと、こん、にちは』
「こんにちは！」

　それにあっけなく対応する精霊。そんなポップな感じでいいものなのか？　精霊。
　所によっては神の様にまつられる精霊が、今現在女の子と一緒にキャッキャウフフと微笑み合っているのだから、なんだか冗談みたいだ。

『妖精達、此処で他の皆と遊びたかったみたいね。貴方も遊んであげてくれる？』
「うん！」

泉にいた妖精達と、マリの周りにいた妖精達が絡み合うように飛び回り、その中央でマリが楽しそうに駆け回る。もう、採集の事は忘れたみたいで、気楽なものだった。

それを見て、精霊はずっと微笑み続けている。いや、それしか顔には浮かべない。

笑みのほかに浮かべる必要が無いのだ。精霊は。

妖精よりも人に近く、しかしそれでもなお実体のない精霊。それ故に痛みを知らず、人の心を知れず、だから感情も殆ど断片的だ。生物としては不自然なレベルで。

何処かの学者が『精霊は、生物としては未完成だが、存在として完成している』とややこしく評していたが、実物を見るとその表現がしっくりと来た。

と、此方の視線に気がついたのか、その笑みを維持したまま此方に視線を向ける。

『あら、どうしたの。メナス様の巫女ともあろうニンゲンが、困った顔をしているわ』
「メナスの巫女って……」

巫女という言葉は知っている。

ヒトの身でありながら精霊と同じく、神に仕え、神に従事し、神の言葉を人々に伝える人々の事だ。

しかし自分はそんなものになった覚えは無い。

すると、エレナの戸惑いを察したように、水の精霊は頬笑みを返した。

『巫女と言う表現の方が貴方達にはわかりやすいからそう言っただけよ？　神に愛された人は大抵、神と人を紡ぐものとしてあがめられるものだから』

確かに、そういう話は良く聞く。自分はそうなるつもりはないが。

『……それにしても』

　精霊は、エレナをじっと見つめる。爪先から頭まで、まるで品定めでもしているかのように。

『なんて珍しいんでしょう』

　精霊は感嘆とした声を上げた。

「珍しい？」
『メナス様は自身の力がどういったものなのか理解されているから。容易に人に力を与えるようなことはなさらない方なのよ？　　それでも貴方に力をお与えなさったと言う事は、余程貴方とは波長があったのでしょうね』

　光栄なことね。と、精霊は笑みを浮かべる。
　確かに精霊の立場から言えば、人の身にして神の寵愛を受けると言う事はそれはそれは素晴らしい事なのだろう。確かに世間でも神の寵愛を受けた者は奇跡の人とたたえられる。
　だが、と、エレナは眉をひそめる。

「……」
『メナス様の力を嫌っているの？』

　心でも読んでいるかのように、エレナの沈黙の意味を読み取る精霊。そんな相手に対して言葉を選ぶのも馬鹿馬鹿しくなり、エレナはヤケクソ気味に笑い、ストレートにぶちまけた。

「破壊を好む人なんて、余程の狂人くらいよ」

　先程その力を利用させてもらったばかりではあるのだが、とはいえ、やはり厄

介な力だと思う。
　破壊、それは物質に限った話ではない。あらゆる存在、概念の破壊。
　最近シールの説明でその力を自覚したあたりからその属性の浸食が一気に加速した。今まで気づくことすらなかった【破壊】の属性、今では気を抜けば自分の周囲の物体が音も無く崩壊していく事がある。
　あるよりは無い方がいい。エレナの自身の力への認識はそんなものだった。

『その認識、間違ってるわ』

　だが、その思いを察したのか精霊は首を振り、そう言った。

「間違い？」
『破壊ではない、と言う事よ。メナス様の力の本質は、万物へ与える眠り、事の終焉よ』
「終焉……」
『事の終焉、最後の果て、生の対、魂の休息、それを与えなさるのがメナス様』

　聞いた事のあるフレーズが飛び交う。終焉。果て、生の対、休息、そういった言葉で評される神は一体。それも学問ではなく、人々のおとぎ話の中で語られる存在。

「……それって」
『メナス様は、貴方達の妄想する死神と同一の存在、素晴らしいでしょう？』

　恍惚とした表情の精霊、対してエレナはうんざりと頭を下げた。

「……余計扱いにくくなったわ」
『何故？　死は誰にも平等に、必ず与えられる安穏よ？　この世で最も優しい力だわ』
「誰だって死を恐れるものよ。獣でも、魔獣でも、人でも」

だから破壊神が邪神と恐れられ、死神と言う存在が、さも別に存在するかのように語られるのだ。
死に対して人々は無意識に目をそらす。神が近しいこの世界でも死を恐れるのは変わらない

『死が怖い……良く分からないわね』
「でしょうね」

分からないだろう。精霊なんて高位の存在では、人間の様な小さな生き物の抱く恐怖など。

『貴方は死が怖い？』

妖精達と楽しげに遊びまわっていたマリに、精霊は尋ねる。
子供に尋ねるにはあまりに重いその質問に対して、マリは困ったように首を傾げる。

「うーん……よくわかんない」

精霊と同じ答え。だがその意味は根本から違う

「私達には〝死〟そのものがどういうものなのか理解できないのよ。漠然とした理解しかない。怖い。恐ろしい。未知への恐怖。だから宗教も流行る。貴方にはわからないわ。精霊様」

死を漠然とした恐怖でしか認知できない人間と、死が何か確信している精霊達。
この差は果てしなく大きい。

『貴方は怖いの？』

　試すような、楽しそうな笑み。こっちはあまり楽しくない。弄ばれてる感がある。

「怖いわよ。当然」
『あら、少なくとも、貴方は人よりも死の真理に近しい筈なのに、おかしなことを言うわね』

　なんかとんでもない事を言われた。

「それは私がメナスの力を得ているから？」
『いいえ、元よりあなたは死の真理に近いの。人よりも高い力を持ち、強い魂を持つ貴方は、それ故に相反す死に対してより深く理解できる。だからメナス様の加護を得た』
「良く分からない。その説明」

　強い魂を持っているというのなら、それこそもっとメジャーな明るそうな神の加護を受けても良いような気がするけれど、説明が端的すぎる。

『命の希薄なものは死に近い所に立つだけで、理解はできない。対極にある者がその真理を得る』
「……ますます意味が分からないわ」
『理解しようとしていない様に聞こえるわね。その言い方。そんなにその力が嫌？』
「……別に」

　知ったような口ぶりがじわじわと苛立たせる。精霊だろうと腹が立つのは腹が立つ。
　そう思っていると、精霊の笑みが少し変化する。少し、嫌らしい笑みに。

『人と向き合えないのは力の所為では無いわよ？』

　いきなり、此方の悩みの中心に言葉の刃を突きつけられた。
　その唐突さに喉が痙攣する。言葉が出ない。
　精霊である彼女は人の心を容易く読み取り、一切の迷いなく、一直線に言葉をつきたてる。
　傷つく。普通に。

「……嫌な事言うのね。精霊様」
『ニンゲンって大変ね。集団の中でしか生きられないのに、その集団の中にいるだけで傷つけあって、苦しみ合う。何てジレンマ。私には理解できないわ』
「精霊様は気楽でしょうね。集団なんて必要としていないんだから」
『あら、本当に気楽だったら、私は此処にいないわよ』
「……？」

　意味が分からず沈黙を続けると、精霊は説明を再開した。

『元は小さな街外れの泉で暮らしていたのだけれど、その町の住民が私の事バケモノだって言いふらして、嫌がらせするようなったのよ。結果、この森までお引っ越ししたってわけ』

　特に気にしたそぶりもない、平然とした言い方だったが、その内容は偉く荒んでいた。

「厄介払いされたってこと？」

　精霊が厄介払い。知識の備わったエレナからすればそれはとんでもない話に聞こえた。
　精霊の力は辺りの環境にも干渉し、その流れの乱れを鎮静化させる。自身がす

ごしやすい環境を維持する為に。それはつまり干ばつや水害と言った天災を受けない、安定した土地になると言う事だ。そんな希少な存在を、街の人々は追い出してしまった。
　それが何を意味するのか、分からないエレナでは無かった。

「……その街はどうなったの？」
『さあ？』

　まるで他人事。
　いや、他人事なのか。彼女からすれば。
　彼女はただ、自分がすごしやすい環境を維持していただけ。それを感謝されるのならともかく、化物だと罵られてまでそこにいる必要はない。彼女は、ニンゲンよりも上位の存在なのだから。
　精霊を追いだした街は、今頃急激な環境の乱れで荒んでいるだろう。
　突如とした精霊の消失は抑えられていた環境の荒れを一気に噴出させるものだ。
　だがそれは、ないがしろにした人間の自業自得と言うべきなのだろうか。

『あら、同族の心配？ それなら大丈夫よ？』
「大丈夫って」
『あの男が、あの変な男が何とかしているでしょうから』
「変な男？」

　魔術学院には変な男はいくらでもいる。それはもう、無個性な人間などいないと断言しても良いくらい、山ほど存在する。
　存在するのだが、エレナの脳裏に浮かんだのはただ一人。

『ぼけーっとしていて馬鹿っぽい男。ちなみに私の引っ越しを手伝ったのもその男』
「……ああ、成程」

脳裏に浮かんでいたあのバカっぽい面と、その情報が完全に一致した。

あれから数時間、とにかく妖精とマリが遊び飽きるまで泉で時間を潰していた。
結果、夕暮れ時になり、マリは疲れて眠りこけ、彼女を背負って帰る羽目になった。

『マナの乱れを解いておいたから、半時もすれば此処から出られるわよ』

精霊はそう微笑みながら、不可思議な水の標で森に道を作ってくれた。
その道を辿り続け、ようやく、あの採集を続けていた中庭に到達した。

「……重い」

背中ではマリが気持ちよさそうに寝息を立てている。羨ましい。私も疲れているというのに。
既に日が沈みかけ、中庭には初等化の生徒達もいない。先に帰らせたのだろう。
人っ子ひとりいない広場が、何か寂しくも思えた、のだが、

「シール先生。そこにいるんでしょう」
「あれ、ばれた？」

声が響く。そう遠くない、何処か間の抜けた声。

「気配だだ漏れ。泉にいた時も魔術を使ってこっち見ていたでしょう」

「……エレナって、やっぱり何か格闘術でも習ってるの？」

　習った覚えはないが、一度覚えた魔力なら近くにいれば直ぐに察せる。
　しばらくすると広場の遊具の陰からひょこっと飛び出してくるひょうきんな人影。
　さあ、何を言ってやろうか。そう思って顔を上げて、

「……な」

　絶句した。

「大丈夫だったかい？ エレナ」

　爽やかな笑顔のシール。だがその顔は、壮絶を極めていた。
　ありとあらゆる個所に、いかにその相手が滑稽に見えるかを練りに練られた面白落書きの数々が目一杯書かれていた。しかもそれら一つ一つは互いに互いの良さを阻害しないよう、互いを高め合うかのような絶妙な位置に設置されており、既に一つの芸術として昇華しているかのような、

「……っく、な、な、によ、その、顔」

　何が言いたいかと言うと、笑い死にそうだった。

「いや、ロロが君の命令だって言ってたけど」
「こ、っち見ないで」

　何とか目をそむけ、痙攣しそうな腹を押さえながらそれだけ言う。頼むからこっち見ないでくれ。
　何あの顔。面白すぎる。ロロって子、芸術とユーモアのセンスがある。間違いなく。

「どうして～？」

　何処となく分かっているかのような物言いで私に顔を見せようとしてくる。
　何だこの野郎ケンカ売ってるか。

「こっちを見るな」

　命令。

「はい……」

　素直に沈黙。本当にこの男は教師なのか、疑いたくなった。

「で、今日はどうだった？」

　どうだった。特に前振りも何もない、曖昧な質問。
　だが、今日、何を思ったのか、何を考えたのか、何か得るものがあったのか、そういった質問のつもりなら、選ぶ言葉は一つしかない。

「疲れた」
「それだけ？」
「それだけよ」

　何があったのか、振り返ってみれば子供に振り回され、妖精に振り回され、精霊に振り回された。

それ以外どう言えと言うんだ。
　何を経験してほしかったのかは知らないが、私の感じたことと言えばそれくらいだ。

「まあ、それもいいか」

　ところが、それを強いた本人がこんな反応。なんだろう。納得いかない。

「貴方が納得したらダメでしょう」
「そう？」

　こんな所まで引っ張ってきた癖に、投げっぱなしなんて無責任にも程がある。
　いや、元からこの男はこれくらいいい加減な奴だったような気もするが。

「……何をさせたかったのよ」
「経験を積まないとねえ」
「子供の相手の？」
「違うよ。日常の経験」

　なにをいっているのか分からない。

「意味不明よ」
「ま、心の成長に、近道なんて無いってことだね」

　ぽん、と頭を子供にするみたいに撫でてくる。
　なんだか気恥かしくて払おうとしたが、背中のマリを支える為に手が出なくてされるがままになってしまい、腹立つ。嫌では無いと感じる自分にも。

「変わりたいと思うのは良い事だけど、そんなにすぐさま人は成長できないよ。大人になっても子供のままの人なんて幾らでもいるしね」

「貴方もね」
「それを言われると苦しいなぁ」

　指で頬を掻きながら、シールは続ける。

「誰かと話をして、振り回されて、馬鹿にされて、一緒に笑って、それが経験」

　それは普通の日常。誰もが当たり前に経験する事。だけど、エレナに絶対的に足りなかった物。

「それを積み重ねれば、心は変わる。それが成長かどうかまでは分からないけれどね」

　眠たそうに体をよじるマリの背中を撫でながら、シールは笑う。

「……その顔で言われても、締まらないわ」
「あっはっは、だよねー」

　顔面落書きまみれの、致命的に締まらない男と共にエレナもまた、笑った。
　こんな日も悪くない、と、そんな思いを抱きながら。

投稿と同時に力尽きました。長いですね。
ひとまず課外活動編これで終了です。

リーンの日常編

第十八話 リーン先生の比較的平和な一日 前編

　朝。
　田畑に精を出す者ならば既に外で地面を踏みしめ、地を耕し進め、商売に携わる者ならば開店の準備を終え、いよいよ店を開店させようと戸をあける、労働に努める者ならば既にその活動を開始している、そんな時間、

「……」

　リーンは、恐ろしく不機嫌な顔で、ベットから身を起こした。
　彼女の朝は遅い。
　元々低血圧な体質である彼女は、何事も無い日常の内であったとしても、その起床時間は遅い。前の晩などに仕事が長引いて夜通し机に向き合った時には、それこそ昼まで眠りこけることまである。
　普段の彼女は厳格を絵にかいたような存在であるだけに、そう言った一面を知った人々は意外性を伴った衝撃としてその事実を受け止める。
　こういった一面を可愛いと捉える特殊な男（某、ぐうだら教師）も、たまにはいるが、
　まあ、とにかくとして、彼女は朝に弱く、起床が他の教師と比べても随分遅い。

「……だるい」

　そして、そんな彼女は、目覚めの時、恐ろしく機嫌が悪い。
　この世の全てを憎むかのような、そんな淀んだ瞳で周囲を見渡した彼女は、一先ず目についた窓際で心地良い鳴き声で歌う小鳥を魔術で弾き飛ばすと――二度

寝した。

「……って、寝ちゃだめですよ。リーン先生。起きてください」

　そんな彼女を、何故か同じく部屋にいたシールが揺さぶり起こした。
　まぶたを開け、先ほどよりもさらに不機嫌そうな顔で、リーンは口を開く。

「……なんでいるの」

　その質問は非常に簡潔だった。

「昨日、リーン先生が酒に酔って酔いつぶれて、部屋に連れてったらしがみついて首絞められて、で、気絶してた。今まで。ちなみに今も貴方の手が僕の首に。よかったら離して」

　シールは、自らの首にかかった彼女の手を引き剥がそうと必死にもがいていた。

「……よいつぶれる？」

　リーンは首を傾け、靄がかかりまくった脳を働かせ、昨晩の記憶をよみがえらせる。
　昨晩は、年に数回催される教師陣による飲み会があったのだ。
　普段、こういった行事に進んで参加する事の無いリーンも、この飲み会の日ばかりは校長に連れ去られるようにして連れて行かれるのだ。
　そうして、教師陣全員で行われるその飲み会なのだが、ハッキリ言ってその内容は醜態を極める。普段の聖職者として勤める教師の顔など何処へやら、仕事の合間に今までのうっぷんを解き放つかのように、どの教師も酒を飲んでよ酔えや歌えやの酒池肉林が炸裂する。

今回もまた、その例にもれず、どころかそれを遥かに上回り、最早酒の場は混沌を極め、その宴会の場を提供していた酒場の店員まで巻き込んだ大混乱と化していた。
本来ならリーンは、そう言った暴走には加わらない。何時も彼女は適当に食事をとって帰宅するだけで済ませていた。彼女は基本的に大騒ぎする事が好きではない。
しかし、その日は何処かの悪酔いした教師が彼女の飲んでいたジュースに酒を混ぜて、それをまんまと飲んでしまっていたのだ。

「……おぼえてない」

ちなみに、そのアルコール入りジュースを飲んでから、リーンは記憶が飛んだ。
さらにちなみに、彼女は酒癖も悪い。すこぶる。

「ああ、酷かった。ええ。校長も最初は楽しんでたけど、珍しく後悔してたし。本当。二度と酒飲まないでください。絶対飲まないでください」
「……あー、……うん……」
「聞いてます？」

軽く二日酔いの入り混じった彼女の寝ぼけた脳髄は、頭脳明晰な状態の１％も起動していなかった。

「きがえる、どっかいって」
「ええ。分かってますよ？　だから、一刻、も、早く、手を、離して、苦しい、死ぬ」

＃＃＃＃

リーンの身支度は、女性にしては手早い方で、時には目覚めてから十分かそこ

らで、部屋を出る事もあるほどだ。ある程度しっかりとした教師の体面さえ保てればいい、という、何処となく男らしい考えの持ち主だったりもする。
　ちなみに、この話を保健室主任、メリアに話した所

「どうしてそれでそのお肌が維持できるのよ！ 妬ましいわ！」

　と、叫ばれた事があった。

「魔力の影響なんですかね……そのつるつるお肌」
「しりませんし、どうでもいいです。さわらないでください。セクハラです」
「本当、容赦ないなあ……寝ぼけてるのに」

　この日もリーンは寝ぼけまくった脳みそを半ば無理やり覚醒させ、ものの十分かそこらで身支度を整え、非常にスムーズに寮を出る事に成功したのだが、

「これ、確実に遅刻ですね」
「ええ。そうですね」
「貴方の所為なんだからもっと責任感じてください。リーン先生」
「ええ、ねむたいですね」
「……まだ、覚醒していない」

　既に、朝の職員集合時間から数十分経過しており、二人とも遅刻決定だったりした。

「もう、ほんとうに、ねむい」
「頑張って、歩きながら寝ないで！ 生徒達が変な目で見てるから！」

＃＃＃＃＃

数十分後、二人は職員室の扉をようやく開くことができた。
　が、流石に集会は終わり、教師人は皆、既におのおのの仕事についていた。数人、昨日のどんちゃん騒ぎの影響か、顔色の悪い人間もいたが、大方の教師は遅刻せずにはすんだようだ。
　そんなまじめな仕事場にこっそりと入ってきた遅刻組みの二人は、黙って席に着こうとして、ひどくゆったりとした声に呼び止められる。

「あら……随分重役出勤ですよ？ リーン先生。シール先生」
「「……すみません」」

　教師陣の主任を務めるナタリア先生は、遅刻して入ってきたリーンとシールを見て、温和に、しかししっかりと咎める口調で供えられた時計を指さす。

「確かに昨日、あれだけの騒ぎがあった後では、早起きするのも厳しいのは分かりますが、それでも私達は教師です。生徒達の模範になるよう行動しなければなりません」
「すみません」「申しわけありません」

　特に反論を返すでもなく、素直に頭を下げた二人を満足げに見つめていたナタリア教授は、ふと、得心いったとでも言うように頬を染めて、

「お二人とも若いから、長き夜を共に過ごしていたいと言う気持ちもわからないでも「「誤解です」」

＃＃＃＃

　それから、日も完全に上がり、お昼に差し掛かり、リーンも自身の本来の職務である教師としての授業が始まった。

「それでは授業を開始します。教科書の八九ページを開いてください」

　既に二日酔い＋朝ボケ状態から解放されている彼女は、既に厳格且つ、有能な教師に変身を遂げており、その授業風景は静かで、真剣に勉学に取り組む学生しか存在していない。
　リーンは常に授業を効率よく、素早く進める為、授業を受ける学生は取り残されることの無いように、予習復習は勿論のこと、授業中でさえ彼女の言葉一つ取り残さないように集中を余儀なくされる。それがそのまま彼らの学力向上につながると、リーンは理解していた。
　故に厳しく、そして取り残された生徒がいたのならその者には集中的な指導を叩きこむ。
　それがリーンの教育指導だった。
　反抗する者はいない。魔術師として天才と認められている彼女に歯向かう事が、どれだけ愚かで間抜けな事なのか、生徒達は既に理解しているのだから。

「次の問題、マナと魔力の違いについての定説を、ジーナ」
「……分かりません」
「勉強不足ですね。この問題は次の試験の基礎中の基礎です。泣きを見る事になりますよ」

　冷然とした言葉を浴びせられたジーナと言う少女は泣きそうな顔になる。しかし、それも必要な事なのだ。と、リーンは姿勢を揺るがせず、次の者を指定する。

「次の問題を……」

　ところが、席の順番に指定を続けていたリーンは、指定される筈の〝彼女〟の顔を見ると、若干、言葉を詰まらせた。

「……次の問題を、エレナ。答えてください」

〝彼女〟とは、以前、校長から依頼を受けて、シールが受け持った問題児。エレナだった。
　指定されたエレナは、一瞬、その細い眉を顰め、しかし何かを口にする事も無く、素直に立ちあがった。

「……地上に現存するマナは――」

　その美麗な容姿に負けないくらい澄んだ高い声で、スラスラと答えを論じていく。……論じていくのだが、その最中、エレナはリーンの事をじぃっと、含みのある視線を送り続けていた。
　同じく、リーンもまた、エレナに対して酷く個人的に、含みのある視線を送る。
　リーンはエレナの事を毛嫌いしていた。同時に、エレナもリーンの事が好きではなかった。
　教師と生徒、年の差もあり立場として大きく違う筈のその両者は、どちらか一方が嫌っているという教師と生徒の間柄では良くある関係では無く、何故だか対等に、まるで同級生同士のような心情で、互いを毛嫌いしているのだ。
　授業中でもその姿勢を崩さず、今の様に無言で互いにガンをつけ、
　廊下などで鉢合わせになった時は、互いに無言のまま一時間くらい睨みあう時もある。
　互いが互いを嫌う理由は様々だが、一番大きな理由としては、「気が合わない」だろう。
　そんなこんなで、今日もまた、不毛すぎるにらみ合いが続いていた。

「――それ故にマナと魔力はその性質の異質さとは異なり、非常に類似した構成を持つ傾向にある」
「はい、良く出来ましたね。エレナさん。大変素晴らしいです」
「ええ。ありがとうございます。リーン先生」

互いに安らぎのある受け答えだった。互いの表情が、まるで氷点下のように凍りついた無表情だった事を考慮に入れさえしなければ、優秀な生徒と教師の模範的な対話だったといえただろう。
　だが本来ならば、この後更に互いに一言、皮肉でも交えた底冷えするような受け答えが発生しており、この日はそれも無く、比較的平和な結果で済んだ事を他の生徒達は喜んでいたのは、此処だけの話。

「では次のページ、モルミヤ。朗読してください」
「はい、えーと」

　かくして、リーンの授業は比較的平和、且つ、順調に進んでいった。

第十九話 リーン先生の比較的平和な一日 中編

　順調だったリーンの日常、それが崩れたのは彼女が食事を終えた後の事だった。

「……猫？」
「うん、ネコ」

　オルフェス魔術学院、学院長のミスト。
　何時も何処からともなく厄介事を見つけては、シールに押し付けるなかなか外道なこの男は、時折リーンにもその厄介事を押し付けてくる。
　先日は古代の帝王黒竜の討伐、その前は悪のネクロマンサー退治。いったいどこからそんなもの持ってくるんだと言いたいくらい、とんでもない仕事を彼は持ってくるのだ。
　しかし、今日、彼が持ってきた問題は少々、今までのものとは違った。

「いやあ、どっかの馬鹿な貴族が面白半分で、怪しい商人から買い取ったらしくてね」
「猫を？」
「ネコを、ただね、」
　実はその猫が問題だったんだ。と、学院長は続ける。
　その馬鹿な貴族、両親の持つ財産を利用して珍しい物を買い集めるという悪癖があり、その猫もそのコレクションの一環として購入したものだったらしい。
　その猫は、曰く、非常に変わった品種だったらしく、

「毛色やら何やらも変わっていたらしいんだけど、何よりも、異常だったの

が、」

　魔力を、強大な魔力を有していたという点。
　その言葉を聞いた時、リーンは眉を顰めた。

「それは、魔獣だったという事ですか？」
「そうらしいんだね。これが」

　魔獣。野生生物の中でもマナを取り込み、己が糧に変えられるように進化を遂げた生物はこう呼ばれるようになる。特徴としては、非常に賢く、そして高い身体能力を得る、というのがあるのだが、正直言ってこれはあまりあてにならない。
　マナという力を得て、進化を遂げた生物は、その形態を大きく変える。それこそ、元の生物とは大きく逸脱した姿に。
　人の言葉まで解する者。肉体を大きく変貌させ、強靭になる者。マナに依存しすぎて、結果、精霊に昇華する者まで現れたという報告まである。
　種類も能力もバラバラ、同じ生物からでも全く別の変貌を遂げる事なんて珍しくない。それが魔獣。
　だが、一つ共通点がある。

「そのネコ、その馬鹿貴族のコレクション屋敷ごとぶっ壊して逃げ出したんだって。この学院に」

　人の勝手に出来るほど、容易い存在ではないという事だ

「厄介な事を」
「本当にね。その馬鹿貴族の親にきつく躾るよう言っておいたよ」

　学院長は、その表情は爽やかな笑みを維持しているが、言葉は何処か刺々しい。流石に苛立ちを隠せないようだった。

まあ、当然と言えば当然だろう。ただでさえこの学院は厄介な魔獣や伝説上の怪物を所持しており、少々危ういバランスの上に成り立っている所があるのだ。それなのに金持ちの道楽の所為でそのバランスを更に崩されたら、此方としてはたまったものではない。
　リーンは息をついた。

「……それで、まさかそれを私に探せと？」
「うん。問題を起こす前に保護してほしい。森に放すにしろ、一度は話をつけないと」

　想像通り。リーンはさらに大きなため息をついた。

「他の職員に探させてください」
「いや、勿論探させてるさ。ただやっぱり賢いらしくてね、中々捕まらないんだよ」

　魔獣は賢い。その知能の高いか低いかと言うのも千差万別だが、大体はマナを得て長命となっているのだ。故に、例えその知性にマナの恩恵を受けられなくとも、その長い経験値が生物としての動きを精練させるのだ。

「暇があればでいいから、探してくれない？」
「その程度なら、了解しました。ついでにあの馬鹿にも伝えておきます」
「あ、シールに全部押し付けちゃだめだよー」

　リーンは静かに舌打ちをした。見抜いてやがる、と。

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

『すまないが、新たな気配は感じない。少なくとも森に入ってはいないのではな

いか？』
「そう、ですか」

　学院裏の森。リーンはこの森の門番である白き獅子の魔獣、アルマに話を聞いていた。
　この学院の森には大地のマナが充満している。故に、そのマナを糧とする魔獣は此処に引き寄せられやすく、住み心地も良いと感じる。
　各地から厄介払いされた魔獣は、だからこそこの森に集められる。ただそれによって森のマナが変質し、非常に混沌とした状態になってしまっているのだが、
　アルマは、昔からこの森に住む魔獣で、人の言葉も解する程の高い知性を持つ者だ。
　学院長とも昔から交流があり、この森に迷い込んだ生徒を助けたりと、何かと此方の手助けになってくれる存在として、先生、生徒から慕われている。

　ネコの魔獣、魔獣であるのだから、この森に引き寄せられると思って、リーンは彼に尋ねたのだが、どうやらアテが外れたようだ。

『すまんな、役に立てずに』
「いえ、構いません。森に来ていない、と言うだけホッとしました。この森は広大すぎますから」

　そう言うとアルマはその綺麗な瞳を細めて、考え込むように口を開いた。

『ああ、そうだ。あの男に伝えてくれるか。既に森が限界に近いと』
「限界？」
『ああ。ここ最近、頻繁に強大な魔獣が連れ込まれている。彼らを〝救助〟するのは別段、私も悪いとは思わない。が、結果として森が混沌とし始めた。これ以上は危険だ。特に子供がな』

　確かに、この森は生徒達の植物採集の実習や、魔術の練習をするうえで、ほん

の入り口の辺りではあるが利用している。危険だと、彼が考えるのは当然だった。

「これ以上、魔獣はこの森に入れるな、と？」
『いや、何らかの方法でマナの混沌を沈める策を用意しておけと言う事だ。ミストの事だ、既にいくつか方法を考えているだろうがな』
「了解しました。それでは」
『ああ、また』

　そう言うと、アルマは颯爽と森の奥へと消えていった。

「さて、何処を探しますか……」

　今日は既に、自身の受け持つ授業は無い、とはいえ、余りこの猫探しに従事していられるほど暇でもない。リーンはこの日何度目かになる、ため息をつくと、学院の校舎へと向かっていった。

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

　人気の少ない食堂。昼時は既に過ぎ学生もほとんどいない食堂で、エレナは一人、静かに食事をとっていた。別に一人でいる事が楽しいという訳ではないが、人の多い場所ではやはりどうしてもエレナは好奇の目でさらされてしまう。
　それが避けるため、彼女は何時もこんな時間になってからようやく食事をとるのだ。
　其処までは何時も通り、だが、今日は些かその食事風景が異なる。
　彼女の目の前に、客人がいるのだ。

「……何よ、アンタ」

その客人というのは、美しい蒼の毛並みと珍しい紫色瞳を持った、ネコだった。
　そもそも食堂にネコと言うのは一種のタブーのようにも思えるのだが、そのネコは威風堂々、当然のようにエレナのついた机に登り、彼女をじっと見つめている。
　自分の食べている食事が目当てなのかと焼き魚を半分、ネコの前でちらつかせてみるが、反応無し。

「……何、芋の方が好きなの？」

　エレナは焼き魚を皿に戻すと、芋の煮込みをふりふりとネコに見せつける。が、やはり反応は無い。

「……何なの？」

　ただじっと此方を見つめるだけのネコを前に、エレナは立ちつくす。

「ナーゴ」
「何を言ってるのよ」
「ニャゴ」
「にゃご」
「ニニャア」
「ににゃあ」
「ニャー」
「にゃー……」

　ふと、我に返ると頭を抱えた。何やってんだ私は。
　魔力、このネコが他のネコとは違い、魔力を所有している魔獣であるのは、流石に察していた。とはいえ、どうするべきなのかまではエレナにはわからない。あの森にでも放り投げればいいのだろうか？

ああ、面倒な。このままじゃ食事もとれないじゃない。エレナは、そう思い、普段はあまり使わない杖を取り出した。この猫を安全に外に追いやる為にも、繊細な転移魔術を発動させる必要がある。
　呪文を呟き、魔力を放出、ネコを中心に転移魔法陣を出現させ、転移術式を完成させる。

「バイバイ」

　軽い口調で、転移魔術を発動、

「……あれ？」

　したのだが、何故か、ネコはその場にいる。転移魔術が発動せずに、途中でとめられている。何者かの介入によって。

「……そのネコを渡してください」

　聞き覚えのある声にエレナはしかめ、その声の方へと顔を向けた。
　食堂の入口からリーンが何故か、エレナの魔術を阻害する術式を組み、杖を構えている。何故ネコへの転移魔術を邪魔したのか。何故リーンがこの場にいるのか、様々な疑問が彼女の中で湧きあがったが、それよりもなによりも、リーンに命令されていると言う事にエレナは軽く、苛立った。

「何故渡さなきゃならないのよ」

　別に、そこまで彼女の命令の意味に興味がある訳ではない、が、何故か聞いてしまった。

「貴方には関係ありません。早く渡してください」

エレナのその質問、それは子供っぽい意地の様な物でしかなかったのだが、それはリーンも持ち合わせていた。妙な意地。別に秘密にする必要は無いというのに、何を隠そうとしているのか、リーンにもわからない。
だがそれがますますエレナを意地固にさせていく。

「嫌よ」
「変な意地を張らないでください。面倒な」

リーンの口調も徐々に刺々しくなる。が、意地を張っているのはリーンも同じ。

「い、や、よ」
「ふざけないでください」

徐々に杖を構えながらエレナに近寄るリーン。対してエレナもまた、杖を構え魔力をたぎらせる。一触即発。食堂に妙に重々しい空気が流れ、給仕を担当するおばちゃん達が何事かと二人を見守っていた。

「……ニャア」

が、そんな空気を引き裂くように、愛らしい鳴き声が一つ、

「「あ、」」

蒼き毛並みのネコはひらりと体を飛び上がらせると、開いていた窓から飛び降り、二人の気持など何処へやら、食堂の外へと飛び出してしまった。

「逃げた……」
「……」

取り残された二人は、茫然とその姿を見つめていた。
　とはいえ、リーンはあの猫見逃すわけにはいかない。ようやく見つけた魔獣。今捉えなければまた一から探さなければならない。

「あ、ちょっと！」

　駆けだしたリーンにエレナは呼びかける。が、反応も無く、リーンもまた食堂から外へと飛び出していった。一人残されたエレナは、しばらく考えるように虚空を見上げていたが、しばらくして、思い立ったようにリーンの後を追いかけた。
　やっぱり、なんとなく、何かは知らないが彼女に負けるのは気に食わない
　妙な意地の張り合いは、まだ続いていた。

第二十話 リーン先生の比較的平和な一日 後編

　リーンは、中庭の木の上で呑気に欠伸をする例の魔獣を発見した。
　眠たげに口を大きく開け、こしこしと器用に片手で顔を洗う、自分と同じく深い蒼の毛並みを持った魔獣。ネコそのもののその挙動はハッキリ言って、ムカツク。こっちが苦労しているのにケンカを売っているのかと。
　そのネコに杖を向け、魔力を解放する。

「……【捕らえよ】」

　短く、呪文を唱え、大気に働きかける。あのネコを大気の手で掴むようにと。瞬く間に大気はその色を変え、ネコを捉えんと動き始める、が

「ニャーン」

　魔術が完成する直前に、ネコはひらりと木の枝を飛び降り、大気の束縛から抜け出した。

「【大地よ】」

　すぐさまリーンは大地に魔術を向ける。途端、その蒼いネコが着陸する地点がぐにゃりと、多量の水を保有した泥濘に形を変える。降りてきた猫の身動きを封じるために。
　だが、

「ンニャオン」

甘いねえ。
　と、言う様なしたり顔で、ネコは器用に宙で反転すると、見事なステップワークで泥濘の端に足をとどかせ、ひらりとリーンの罠をかわしてしまう。

「ニャーゴ」
「……」

　一瞬の沈黙。

「【重鎖、風魔、火縄、地縛、結界、封断、風縛、水牢、金縛】」
「ニャニャニャニャニャニャニャニャニャニャニャニャニャニャ」

　神速の詠唱術、一つの呪文が発動したと思えばすぐさま次の術式が完成している。天性と言う表現がまさにふさわしいリーンの神技は、だがそのことごとくを自身の髪と同じ蒼き毛並みの魔獣にかわされていた。それはもう、尽く。

「……」
「ニャーン」

　呼吸が続かず息を吐くリーンをしり目に、ナゴナゴと喉を鳴らしながら、小馬鹿にするようにリーンの前から立ち去るネコ。その顔はとてつもなく此方を馬鹿にしているように、リーンには見えた。

「……ふ、」

　リーンは若干眉を潜めて、若干力の入った走りで自身を小馬鹿にした畜生を追いかける。

エレナは、学生寮の屋上にて、非常に気持ちよさそうに昼寝をぶっこいている魔獣を発見した。

「ゴロゴロ」

　明るい日差しと、その光で熱を保った地面の狭間でゴロゴロと、思う存分に日向ぼっこを続けるネコ。逆にそのネコを追いかけまわしていたエレナは息も荒く、その表情も軽く苛立っていた。

「さっさと、とっ捕まりなさいよ……」

　食堂から追いかけ始めて数十分。何故か事あるごとにその姿を見逃し、かと思えばフラリと目の前に登場する魔獣。此方をからかっているようにしか思えない。何なんだ。このネコは。

「【風よ。我が呼びかけに応じその姿を】」

　魔術を発動しようとして、ふと気がつく。
　このネコは魔力を所有する魔獣だ。と、言う事は此方の魔力を察知する能力ぐらいあると考えるべきじゃないのか？　思えば、今までとらえようと魔術を発動すると、その発動が完了する前に逃げられた気がする。
　……そうなると、

「【その姿を変えよ】」

　大気が歪む。それはリーンがこの魔獣に対して最初に使った魔術でもあった。
　当然、蒼きネコはその攻撃を軽々と回避する。まるで来る事が分かっていたかのように。

「ニャオン。ニャニャ」

　ネコは回避して、その場でぺろぺろと自分の毛並みを舐め、整える。まるでエレナの事など眼中にないというように。

「……このネコめ」

　流石にカチンときたらしく、エレナの頬が引きつる。
　だが、少し熱の入った頭の中でもこの魔獣を捉える策は巡らせていた。
　この魔獣は魔力を探知できる。それも発動する前に、相手が何をするつもりなのか、察せる。それが野生の感のなせる技なのか、魔力を所有できるようになったからなのか、はたまたその両方なのかは想像もできないが。
　だけど、察せると言っても、避けられない攻撃なら意味が無いだろう。

「【我が命に従い、空の覇者よ、具現せよ】」

　エレナは自身の膨大な魔力を存分に使い、この屋上を取り巻く全ての風に干渉する。魔力を保有し、形となった風は徐々にその姿を変え、巨大な人影に形を変える。上半身だけでこの屋上を覆いつくしてしまいそうなその巨体から伸びた両手で屋上の端と端から、徐々にその間隔を狭めていく。
　これならば避けられないだろう。と、エレナは笑った。が、

「ニャーン」
「え？」

　ネコは、慌てず騒がず、冷静に、エレナの〝頭〟に飛びかかった。

「きゃあ?! 何よちょっと！」

ブンブンと首を振ってもネコは振り落ちない。何がしたいんだ？
　と、考えて、気がつく。
　自身の発動した魔術、【空の覇者】の安全地帯は、即ち、魔術を発動した術者の周囲だと。
【空の覇者】は得物を逃し、更にその得物が自身の主の頭の上に乗っているものだから、困ったように動きを止める。体が大きすぎる分、繊細な動作には不自由している。もしエレナの頭のネコを捉えようとして、エレナを押しつぶしてしまったら、と思うと迂闊には動けない。
　そして、その隙をつくようにして、蒼き魔獣はエレナの頭を蹴りだし、空を舞う

「ニャオン、ニャニャ」

　もうちょっと考えてから行動しなさいな。ふふ。
　とでも言わんばかりのしたり顔で、ネコは屋上からひらりと、華麗に飛び降りていた。

「……あんのネコ！ 絶対捕まえてやる!!」

　残されたエレナは、久しぶりに脳を沸騰させて怒り狂った。

「……！」

　リーンは、軽快なステップで校舎内の廊下を進む魔獣を発見した。発見したと同時に杖を抜き去り、瞬時に呪文を唱える。

「【大地よ、命じるままに】」

術式発動。だがネコは動かない。それも当然。
　リーンの発動した術式は、ネコのいる〝周辺〟の重力を操作する術式だったのだ。魔力を感知する魔獣であり、魔術を発動前に察する事が出来るのなら、動こうとは思わない筈。エレナの時のように捉える前に隙をつく暇も与えない、速攻だった。

「捉えた」

　リーンは静かに勝利を確信した小さな笑みを浮かべる。仕事の達成感よりも、エレナを出し抜いた事よりも、今は人を侮りまくっているネコ畜生を捕まえられた事が何よりもうれしかった。
　このネコ畜生め、どうしてくれようか。
　などと、中々に大人げない事をリーンはメラメラと考えていた。のだが、

「ニャニャ、ニャーニャゴ」

　おやおや。そりゃ早計ってもんじゃないかしら。もう少し落ち着きなさいってね。
　と、でも言うように、重力の檻の中でネコは〝ニタリ〟と笑った。そして、笑った瞬間、〝フッ〟と、その場で彼の魔獣は姿を消した。

「……な？」

　次の瞬間、リーンは自身の頭上に見事に出現した魔獣に踏みつけられる。
　転移魔術。自身を目的の場所へと移動させる高等魔術であり、それを扱える術者が限られる程の高等魔術だ。それを、この魔獣は平然とやってのけたのだ。

「ニャニャ」
「……ほう」

リーンは、自分の頭に未だに乗り続け、にゃごにゃご鳴き続けるネコに対して、底冷えするような声を発した。それこそシールや校長にしか見せた事の無い様な顔で。

　いいだろう。そのケンカを買おうじゃないか

「【風よ】【大地よ】【水よ】」

　リーンは早口に呪文を唱える。それも同時に三つ。

　簡易な呪文を二つ同時に詠唱する妙技は確かに存在するが、複雑な高等呪文を三つ、それも同時にとなえる神業を扱えるのは世界広しと言えどリーンだけだろう。

　だが、その奇跡の業の使い道が、ネコを捕らえるというただそれだけに費やされているという話なのだから、その彼女の姿はハッキリ言ってしまえば、珍妙窮まりなかった。

「【【【捕らえよ】】】」

　三重に重なった束縛術式を、ネコは何処だか楽しそうに見つめながら、その場から姿を消した。

「……そう。やっぱりそう言う事よね」

　エレナは、裏庭の森で、目の前にヒュン、と〝出現〟したネコを見て、頷く。

　この目の前にいる蒼い毛並みのネコ。この魔獣は転移魔術を使っている。いや、正確には転移魔術よりももっと高度な能力だと思われるのだが、とにかく、この魔獣はその力を使って次々にその場から移動している。

　どうりで、追いかけてもすぐに見失う事になる訳だ。実際姿をくらましていたのだから当然だ。

「だけど、そうと分かりさえすれば」

　エレナは術式を刻み魔力を伸ばし、蒼き魔獣の周囲を包囲するように配置する。

「【大地よ、我が命じるままにその力を変化させよ】」

　まずは、リーンが先程やっていたように、魔獣の周囲を重力魔術で拘束し、逃げ道を失わせる。当然、転移魔術をあのネコは使おうと動き出す。が、そこがエレナの狙い目だった。

「【結界発動】」

　準備していた魔力に術式を刻みこみ、結界を発動させる。術式の効果は転移の無効化。大きさもギリギリ、持続だってできないが、ただ捉えると言うその一点の身考えれば、それで十分。

「さあ、どうしてくれましょうか。このネコ畜生」

　と、リーンと全く同じベクトルの思考回路に至っているエレナは笑う。結界の中で戸惑うように立ち止まるネコは逃げ道は無く、立ち往生するしかない。
　勝った！
　と、エレナは心の底からガッツポーズをとった。

「ニャニャン」

　しかしそれでも、事は魔獣の方が一枚も二枚も上手だった。
　一瞬、〝ニヤリ〟と魔獣は笑い、その次の瞬間〝ポム〟という軽い破裂音と共に、その姿を消した。

「え？」

　いや、消したという表現は正しくは無い。正確には、その姿を変えたのだ。それも、十二、三歳くらいの、小ぶりな顔にパッチリとした瞳の美少女に。しかも、何故か全裸の。

「結界って奴は、相手をその中に捉えないと意味がにゃいんだよ。お嬢さん」

　美しく伸ばされた蒼髪のその少女は、そうニヤリと笑うと、ネコサイズの結界をピョンとジャンプして軽々と抜けると、そのまま転移。その場から姿を消した。

「……」

　呆気にとられ、ぽかんと口を開けながら目の前から消えた少女のいた方向を見つめ続けるエレナ。
　だが、徐々に、徐々にその頬に赤みがかかり、両手をフルフルと震わせていく。自分が、あのネコに徹底的に小馬鹿にされているのだと気がついたのだ。

「ふ、ふふふふふふふ！」

　エレナは笑う。あの魔獣が人に変化した事も、今はどうだっていい。

「ぶっ潰す！」

　途端、彼女の背中から特性顕現した魔力が飛び出し、形を作る。屋上で生み出していた風の魔人よりも遥かに確固とした形の鬼神を。破壊神メノスの特性である破壊を表す万物に対する死神を。
　見るだけで人に畏怖の感情を抱かされるそれは、その用途が実はただネコを捕らえると言うそれだけの為だという事実があるだけで、間抜けにみえたそうな。

「うがあああああ!!」

　辺りに生い茂る木々をなぎ倒しながら、エレナは暴走する。

　その後、壮絶な怒りと共に縦横無尽に魔術を連続発動させるリーンと、魔力顕現によって鬼神を出現させた灼熱沸騰状態のエレナによって、主に周囲に多大な被害を与えた。
　結果、教室が三つ使用不可能になり、中庭の中央に飾られていた初代学院長の銅像が木っ端みじんに砕かれ、給仕室の鍋を複数ひっくり返し、老齢の教頭のカツラをも吹き飛ばし、挙句、学院長室の部屋を部屋ごと吹き飛ばす惨事にまで至った。
　怪我人がいなかった事が奇跡に近いが、当然、騒動を起こした二人は後に教師陣の主任のシルフィン教授に厳重注意を受け、破壊して回った残骸の後片付けを命じられる事となった。
　この件に関して学院長は「人選ミスだったねえハッハッハ」と、笑ってコメントしていたそうな。
　ちなみに、この騒動に関しての被害総額の全ては、事の発端である蒼き魔獣を学院に逃がした馬鹿貴族に負担させるという話で決まっている。
　更にちなみに、その、事の発端である蒼き魔獣はというと──

「……なんだか騒がしいなあ？」

　シールは、一人自室でお茶とお菓子を楽しみながら、のんびりゆったりと自分だけの一時を満喫していた。

今日は珍しくエレナも部屋を訪れず、授業も終わり、特に残している仕事も無かった。校長からの呼び出しでもあるのではないかと勘繰ったが、呼ばれなかったのだから大した用事でもないのだろう。と、シールは勝手に決め付け、今はのんびりと、のんびりを満喫中だった。
　ああ、何て心地良いんだろう。久しぶりだ。こんな一時は。外で何やら生徒達や先生達の悲鳴や絶叫が飛び交ったりしているみたいだけれど、多分気のせいだろう。うん。

「さて、新しい本でも読もうかなあ……おや？」

　本棚に積まれた未読本を探そうとしたその時、ふと、窓際に蒼い毛並みのネコが佇んでいる事に気がつく。

「やあ、また来たんだ。チェシャ」
「ニャー」

　このネコは数日前から良くこの部屋を訪れてくる客人もとい、客ネコだった。と言っても特に部屋を荒らすでもなく、食べ物をねだる訳でもなく、気持ちよさそうに日向ぼっこをするだけなので特に気にする事は無かった。
　ちなみに、チェシャと言うのは勝手につけた名前で、昔読んだ童話に出てきたキャラクターの名前をそのまま流用している。

「まあ、のんびりしておくといいよ」
「ニャー」

　何時も悪いねえ。
　と、ネコが言った気もしたが、まあ、そんな事は無いだろう。と、シールは考え直し、のんびりと、ゆったりとお茶を飲み、茶菓子をつまみ、読書を楽しむことを再開した。
　こうして、彼は今日も今日とて平和な時間を過ごしていた。

数時間後、何故か彼の部屋の前でぶっ倒れたエレナとリーンを発見するまでは。

呪いの村編

第二十一話 地獄と少女

　其処は暗黒。
　明確な事は何一つとして分からない。一切の光の無い暗黒空間。あらゆる救済を撥ね退け、神の慈悲をも退けた堕天使が最後に落ちる地獄。そう評しても変わりない程の、圧倒的な漆黒。
　もし人がそこにいれば、一日と持たずに発狂するだろう。この世界の黒は、生きとし生けるものの心を叩きのめすような邪悪さと、残酷さを秘めている。絶望の身で全てを埋め尽くし、安らぎは一片たりとも存在させない。此処はそう言った類の地獄だった。
　そこに少女はいた。

「……」

　少女は、自身が何時からこの地獄に身を落としているのか、何故自身が此処にいるのか、それすらも分からぬままに、救いを待つ事をも放棄して、ただ、この黒の中で沈んでいた。
　意識があるのか、ないのか、それすらも分からない。少女自身も、自分が現実にこの場に存在しているのか、それとも夢現のままに死に耐え、地獄に落ちたのか、分からないのだから。
　だが、それでも少女は聞いていた。
　声を。この地獄から溢れ出る声を。

　死ネ。

死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。死ネ。

　死ネ。

　死ネ。

　死ネ。死ネ死ネ死ネ。

　死ネ。

　死ネ。死ネ死ネ死ネ。

　死ネね死ネ

死ネエェェエェェェェエエエ!!!

「……ごめんなさい」
　それは誰に向けての謝罪だったのか。誰一人として知りえぬままに、少女は怨嗟の渦に沈む。

　：：：：：：：：：：：：：：：：：
　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「〝呪い〟とはなにか……ね」

　学院の授業が初等クラスも高等クラスも終わる夕暮ごろ。シールの部屋に、今日は今日とてエレナは遊びに来ていた。ただ部屋で紅茶を飲み、本を読むことを遊びに来たというのならの話だが。
　まあ、そうして何時ものように適当な雑談をしつつ、のんびりゆったりと時間が過ぎていたのだが、その時ふと、エレナがこの質問をしたのだ。
　それは授業中、ふと彼女に湧いた疑問だった。
〝呪い〟とは、一応は魔術の分類となされているものだ。昔は魔術を扱える者が使う術を問答無用で呪いと表現していたようだが、そう言った類のものとは別に、〝呪い〟は存在する。魔術の一つとして。
　しかしこれには他の魔術のように明確な術式が存在しない。本来魔術とは、呪文を唱え魔術を構築し、術式を結び、自身の魔力と外部のマナとを利用してようやく発動させるものなのだが、呪いにはそう言った手順すら存在しない。
　また、その呪いを発動させる術者は、必ずしも魔術師であるとは限らない。い

や、そもそも人間ですらない時もある。ハッキリ言えば、その現象は災害と評した方が近い。
　授業でその呪いの事が少しだけ上げられ、エレナはそこへ疑問が芽生えた。
　呪い魔術を科学として見るのなら、呪いは夢物語のそれに近い。故に湧く疑問。その好奇心を吐き出すようにエレナはシールへと質問した。
　対してシールは暫く、唸り、考えるように頭をトントンと指で叩くと、そのまま指を一つエレナに突き付けた。

「エレナ。じゃあそもそもマナってどういう性質をしているものかな？」

　そう問われ、しばらく考えるように首をかしげるが、すぐさまエレナは諦めたようにため息をついた。

「……全部上げていったら夜になるわよ。多すぎ」
「そう。多すぎる。いや、多いなんて言葉じゃ表現できない。マナはありとあらゆる事象、現象に一切の例外なく影響を与えている万能物質だ」

　シールは、自身の机の上に飾られた花を一輪、花瓶から抜くと、その花を掌で収束させたマナの上に乗せる。若干枯れかかっていたその花は、見る見るうちにその生気を取り戻し、そしてその後、凄まじい早さで枯れていった。

「だけど同時に、マナはそれらの事象現象に影響を受けてもいるんだ。あらゆる事象現象に対して、マナは能動であり、受動だ」

　シールはクルクルと人差し指を宙で回す。
　すると、その指の周りで仄かに光るマナが収束し、それが様々な色に、形に、姿を変える。

「マナは影響を与え続け、そして影響を受け続ける。そしてそれが人の感情という曖昧なものでも」

「ああ……なんとなく、分かってきたわ」

　そこまで説明を受けて、エレナも納得したように頷いた。

「まあ、まだはっきりしていない所も多いから研究中なんだけどね。これは」

　そう言いつつ、シールはエレナの腰掛るベットに寝転がると、彼女が読みかけていた本を勝手に読み始める。別にエレナも気にした風にはしなかったが、ふと首を傾ける。

「あまり興味なさそうね」

　何時もなら鬱陶しいくらいに言葉を続けるのに、今日は随分とあっさりとしている。そう思っての言葉だった。

「んー。呪いっていうか、マナって本当にファンタジーなんだよね。研究者も意欲を無くす程」
「……まあ、妖精なんてものが出来ちゃうくらいだものね」

　あんなものがあっさりと、至極当然のように存在されていたら、それは研究者達もやる気を失うだろう。学問の領域を超えている。

「偶然、奇跡、神魔といった類のものまで学問の範疇で学べる時代が来れば、解明できるようになるかもしれないけれどね」
「そんな時代が来る前に、人類は滅ぶわよ」
「だよねー」

　そんな感じに、えらく破滅的な事をハッハッハーと二人して笑いながら話していたりしていた。

「あら、随分楽しそうですねシール先生」

　其処にシールの幸せクラッシャーが登場するまでは。

「校長先生が呼んでます。来てくれませんか？」

　二の句も告がせてやるものか、と言う様な表情でシールを見つめるリーン。シールは、沈黙し、冷や汗を流しながらも、顔を引き攣らせながら口を開く。

「……いやで「セイ」ゴフゥウ!!?」

　スナップの効いた素敵な内臓パンチを喰らわして、リーンは身もだえるシールと共に転移する。本人の意思など既に関係無いらしい。
　ならなぜ聞いたのだと、エレナは彼女に問いたかったが、既に二人はその場から消えていた。

第二十二話 少女達の嘆き

　オルフェス魔術学院。学院長室。
　国が誇る最大の魔術学院の、そのトップしか着く事を許されないその場所で、シールは静かに息を吐き出しながら、お腹を押さえていた。
「どうしたのですか？」
「いえ。お腹がとてつもなく痛いんですよ。誰かさんの所為で」
「大変ですね。擦ってあげましょうか？」
「結構です。リーン先生」
　シールは顔を引き攣らせながら、目の前で広げられている書類を一枚手に取った。学院長に笑顔で提示されたその資料は、シールの顔を徐々に曇らせていく。
「なんなんですか？ ここ」
　その質問に答えるように、学院長であるミストは意味無く笑う。
「村だよ。ニルナック村。かなりの辺境だね。ちなみに村民の主な収入源は農作と牧畜。特に特徴がある訳でもない、普通の村なんだけど……」
　其処で一言区切ると、疲れたように、
「えらい事になっているみたいでさ」
　えらく大雑把な答えだなあと、シールは苦笑いを浮かべた。大抵、そう言った大雑把な答えが返ってきた場合は、かなりの危険が待ち受けている依頼だと、経験で知っているのだ。
「最近この村からの連絡が無くて、定期に食材の運搬も途絶えちゃって、それで兵士達が調査に行ったんだ。そうしたら」
「行方不明になったと。あるいは死体になって帰ってきたとか」
「おや、鋭いねえ。五人編成で村に向かって、三人は行方不明、二人は村へ向かう街道の途中で死体になって発見」
「大体分かりますよ。そりゃ」

そうでなければ調査は進み、もう少し此方に有益な情報が渡っている事だろう。
「でも。だったらこれこそ国の軍隊に調査を任せてくださいよ。何のために彼らが存在すると思っているんですか。戦争をする為だけじゃないでしょうに」
　何故教師の自分がこんな危険地帯に向かわされる事になっているのか。ブラックっているレベルじゃない。確か僕は教師って職業をしているんだよね？　隠密機動隊とかじゃないよね、と、シールは遠い目をして涙をこらえた。
「軍のトップはマジでそんなこと言ってたけどねえ」
「笑えません。世も末です。さっさと学院長の権力でクビ跳ね飛ばしてください」
「考えとくよ」
　ニヤリと学院長は笑い、しかしその後すぐに真面目に顔を変える。
「だけどまあ、国の軍隊も当てにはならないんだよ。今回は」
「何故」
　するとシールの目の前にピンと、二本の指が立てられる。そしてまず一本が折られた。
「一つ、実は、もう既に何回も、軍の兵士達が送り込まれたんだ。だけどその全員が行方不明、または死体となって帰ってくる。有能な魔術師がいたにもかかわらず」
　成程。と、シールは嫌々ながらに納得する。既に失敗しているのか。それも何度も。それなら確かにこれ以上、人材を失いたくないと軍が兵を出すのに慎重になるのも無理は無いだろう。
　ついで、そんなやばい所に送られるのか、僕は。と、嫌な汗が出たが、今は考えないようにした。
　シールが理解したのを見て、学院長はもう一本指を折る。
「そしてもう一つ。実はここと は別の地域で古代封印が解かれたらしいんだ。今度は超巨大なサンドワームだってさ。で、そこに人員を裂かれてて、人手が足りないらしいんだよ。ちなみにリーン先生にはこっちの手伝いに行ってもらう」
　その二つ目の理由に、リーンは割り当てられた自らの仕事にコックリ頷き、対してシールは、

「……〝また〟ですか」
　と、顔をしかめた。
「そう。また。これどう考えてもおかしいよねー」
　学院長もまた、何処かうんざりとした表情でソファーに倒れ込む。
　ここ数年、太古の昔に封印されていたモンスターが解放されると言う事件が相次いでいる。最初、それは丁度この時代が、太古の封印の解かれる節目で、それ故に何件か重なってしまっているのだろう、と考えられていた。が、ここ最近は異常だ。下手な時には数週間に一度のペースで封印が崩壊すると気がある。
　例えば、今回のように。
「どっかの闇組織が暗躍している、とかですかね？」
「ありそうな話だね」
　冗談めかしたシールの発言を学院長は真面目に受け止める。だが確かに、古代封印の解除なんて大事、もしそれが人為的なものであるのなら、大きな組織の一つでも関わっている考える方が自然だ。と、シールもまた考え込む。
「まあ、兎に角、リーンちゃん。君には古代封印生物の退治を。対話の通じる相手じゃないなら倒しても良い。シール、君にこの村の調査をお願いする。といっても、出来ればこの事件の原因そのものを取り除いてほしいんだけど。出来るかな？」
「嫌だっていっても無理やりやらせるんでしょう」
「世界の危機だからねえ。冗談抜きに」
　校長の冗談めかした笑みに、シールは再び苦笑いを浮かべた。

「……さすがに暇ね」
　エレナは一人、シールの部屋で勝手にごろごろとくつろいだりしていた。
　リーンにシールが連れ去られてからというものの、暇だ。話相手がいない以上、特にこの部屋ですることが無い。ごろごろと、適当に本も読んでいたのだが、やはり暇だ。

時折鬱陶しいとすら思えていたシールとの討論も、なくなってしまえば寂しいものだった。あれは丁度いい時間つぶしであり、頭の知識の体操だったのだと、今更ながら納得する。

「帰ろ」

誰にともなくそう言う。部屋に戻って、そうだ、紅茶の淹れ方の練習でもしようか。と、そう思い立ちあがって、

「「「せんせー！」」」

その直後、子供達が部屋の扉を突き破り、飛び出してくる。

ああ、前にもこんな事があったなあとエレナは妙に感慨深く思った。

ただ、前と違う所はある。

「あ、エレナだ！」

「エレナねーちゃん！」

「五月蠅いわよ貴方達」

「聞いてくれよエレナ！　きのう！　きのうパームがさあ！　……あれ、なんだっけ？」

「ロロ。あんた興奮すると言いたい事忘れるんだから気をつけなさい」

その子供達に、何故か懐かれまくっているという所だ。

あの課外活動から今日にいたるまで、彼らはエレナを見かけた瞬間にダイビングアタックをかまし、きゃらきゃらと笑いながらエレナに付きまとう。おまけにそれが他の初等生に伝達し始め、見知らぬ子どもからも指さされ、ねーちゃんねーちゃんと呼ばれる始末だ。

何故こうなった。そう言いたい。主にあの間抜けに

「何で此処に来たのよ。またあの馬鹿授業すっぽかしたの？」

「遊びに来ただけよ」

と、子供たちの中でひとりだけ、倭国の人間特有のサラサラの黒い髪を持つ少女。マリが頬をぷっくり膨らませてエレナに言う。どうやらまたこのシールの部屋にエレナがいた事にご立腹らしい。

「ねえ。シール先生は？」

「リーンに連れていかれたわよ」

ふくれっ面のままのマリの頬をむにむにと引っ張りながらエレナは答えた。い

や、あれは連れて行かれたと言うよりも連行されていったと言った方が正しいかもしれない。と、思いながら。
　だがそれを聞いた瞬間、マリはエレナへの不満など吹っ飛ばして、目を見開いて叫んだ。
「また?!」
「……またって、良くあることなの？ あれ」
　その答えに対して、子供たちは頷く。
「リーン先生に連れていかれると、いっつもその後先生いなくなるの。それでしばらくしたら包帯巻いて帰ってくるの……」
　マリの友達の一人、何時もボーっとしている少女。ミルネが心配そうに頷く。
「へえ」
「貴方の時もそうだったじゃない！」
「……ああ、成程」
　思えば、彼が私に急に絡んできたのも、学院長の依頼だったと考えると自然だった。
「……きっとまた怪我して帰ってくるのよ……先生」
　マリの顔は沈む。それもそうだろう。今までも、リーンにつれられた後、怪我をしなかった時など無かったのだ。心配にならない訳が無い。それは他の子供たちも同じだった。
「……」
　そして、そんな、何時もやかましいとすら思っていた子供達の沈んだ顔を、エレナはじっと見つめていた。

第二十三話 差し出された手は拒むべきか否か

　学院長の依頼をシールが受けた日から翌日。
　明け方に、シールは学院の正門の前で大きく伸びをしていた。
　服装は普段の教師の制服ではなく、戦場に立つ魔術師が着用するような魔術加工のなされた戦闘服。片手には簡易な旅の準備物を持ち、足元には入念な設定を成された転移魔法陣。

「さて、行くか」
「そうね。行きましょうか」

　その横で、エレナがシールと似たり寄ったりな格好で佇んでいた。

「……」
「……」

　短い沈黙。その後、シールは静かに息を吐くと、エレナの頭を小突いた。

「どうして此処にいるんだい？」
「別に。暇つぶしかしらね？」

　エレナは素っ気ない笑みを浮かべてそう答える。さも当然と言うように。
　だがシールは表情を硬くさせ、更にため息をつく。誰かに振り回され、勝手にされるのは初めてではないし、慣れている。だが、今回の件ばかりは受け入れる訳にはいかない。

「エレナ。僕はこれから学院長の依頼で仕事に行くんだ。遊びじゃないんだよ」
「知っているわよ」
「これから先に行くところは人が何人も死んでいる。この国の誇る優秀な魔術師だって何人もだ」
「知っているわ」

　軽い脅しを含めた言い方だったが、エレナには通じない。まあ、この程度の脅しは通じない事は分かってはいた、と、シールは首を振るう。そして今度はもっとはっきりと言葉を口にした。

「エレナ。今回ばかりは君の我儘は受け入れられないよ。大人しく待っていてくれ」

　シールは、エレナが傷づく所は見たくは無かったし、傷つける訳にはいかなかった。
　彼女が強く、有事の際頼りになる存在であったとしても、彼女が学院の生徒であり、シールの生徒であり、良い友人である限り、危険な所に連れて行く訳にはいかない。と、シールは心中でそう頷いた。

「何故？ 私が危険だから？」
「そうだよ。これから行くところは危険だ。本当に」
「其処に貴方は行くんでしょう？」

　そう言いつつ、エレナは見つめてくる。シールは、その彼女の瞳を見つめた。
　その髪の色に負けないくらい澄んだ金色の瞳の底では、強い意志と仄かな不安の混じりあっていて、そこでふと、シールは目の前にいる彼女が自分の事を案じてくれているのだと気がついた。

「心配してくれているのかい？」

尋ねるような事じゃないとは分かっていつつもエレナに問うと、彼女は眼をそらした。

「別に？　　あの鬱陶しい子供達は、貴方がいなくてがっかりしていたみたいだけど」

　そんな、照れ隠しの様な仕草に、思わずシールは噴き出した。

「ああ、そうだろうね」

　そして、エレナの頭を撫でて、シールは目を閉じた。
　そして自分が生徒達から本当に慕われているのだと言う事実をかみしめる。そして、自分の怪我を、皆は自分が思うよりもずっと、心を痛めて心配してくれているのだという事実も、かみしめる。
　今、エレナはシールに向けて手を差し出している。子供達を思い、シールを思い、自ら立ち上がって、どうにかしようと、そう考えて。どうにかしよう。何とかしようと考えて、シールに助けの手を、差し出しているのだ。
　そんな彼女の助けを拒絶することは、果たして、よいことなのだろうか。
　思えば彼女の、エレナの暴走の件にしたって、慕ってくれていたマリの気持ちをシールが無自覚のままないがしろにしてしまったのが原因だったともいえるだろう。
　勿論、その一件がそうだったから、という訳ではない。、けれど、このエレナの決意を、自分の身を案じて、危険な地帯に足を踏み入れる覚悟を決めた彼女をないがしろにして、この場に置き去りにする事が正解なのか、
　傷つけたくないと言って、その決意を無視することこそがエゴではないのか。
　だけど、もし自分についてきたら、彼女は間違いなく危機にさらされる。それもまた事実。
　シールは考えて、考えて、もう一度だけエレナを見た。
　彼女は黙ってシールを見上げている。顔に一切の迷いは無く、静かな決意をそ

の身にたぎらせてシールを見つめている。その、誰かのためにという姿勢は、以前までの彼女には存在していなかったものだった。
　シールは、彼女の僅かに見える成長の兆しを純粋にうれしく思い、笑みを浮かべた。
　だが、直ぐにその感情の消し、視線を背丈の低い彼女に合わせると、言葉を紡ぐ。

「本当についてくると言うのな、もしも君の身に危険が降り注いでも、僕は君を助ける事が出来ないかもしれない。もしかしたらこの先、僕は君を見捨てるような判断をしなければならないかもしれない。分かるね」

　それは、最後の確認だった。

「私は、貴方に頼るつもりもないし、助けられるほど弱くも無いわ」

　対して、エレナも答える。自らの決意を揺らがせず。
　シールは再び、諦めたと言うように笑みを浮かべると、自身の足元に展開する転移魔法陣の中心から一歩下がった。そしてその分、エレナが一歩、前へと踏み込む。
　術印の中で並んだ二人は、互いを見つめた。

「行こうか」
「ええ」

　そうして、二人の姿は魔法陣の放つ光の中に消えていった。

と、言うわけで、修正したら長くなっちゃったので分割しました。
うーむ。下手なことすると自分の作ったキャラを破壊してしまいそうだ。
頑張ります。

第二十四話 ゲナの町

「……」
　エレナは、少し物珍しげに、辺りの光景をその瞳に移していく。
　人々の往来激しく、物品の交易も盛んなのか様々な特徴的な服装をした人々が次から次へと、エレナの目の前で入れ替わっていく。簡易に建てられ並ぶ店舗。机の上や座敷に並べられる面白い品物の数々。それは見た目から大きさ、そのモノの価値に至るまでバラバラで、見ていて飽きる事はない。
　シールとエレナの二人は、現在、目的地であるニルナック村から最寄りの、村とも物資の交流があるというゲナの町へと訪れていた。
「なんだか珍しいみたいだね？ エレナ」
「ええ」
　エレナは感慨深く頷いた。思えば生まれてからこれまで、貴族としての生活を続けてきた自分は、こういった雑多な街には連れて行かれる事は殆ど無かったし、自分で行こうと思った事は無かった。
　学院の間近にもこういった商店街はあった筈なのに、其処に行くという発想が無かったのだ。
　だがこうして見ていると、余りに秩序の無いその雑多な光景が、何処か祭りの様にも見えて楽しそうだった。何処となく今までこういう所に来なかった自分が損したような気分になり、エレナは今を楽しむようにその光景を見つめていた。
だがしかし、
「さすがに、今日は観光をしている暇は無いよ。エレナ」
「分かっているわよ」
　今の仕事は観光では無い。その為に自分がついてきた訳でもない事は理解していた。が、それでも目の前の世界は楽しい。と、エレナは視線を彷徨わせ、シールは苦笑した。

「そうだね。今度何処か大きな街に行こうか。観光目的で」
　そう言いつつ、シールは笑みを浮かべた。なんとも、これから危険地帯に行くのに気の抜けたものだと、エレナは思った。その言葉に思わず笑みを浮かべる自分も。
「そう言えば、今、何処向かってるの？」
　エレナはこのまま村の方へと向かう者だと思っていたが、シールは門の方へと向かわない。
「んー。一先ずは、この街に駐在している筈の騎士団さんに挨拶かな」

　騎士団の地方駐屯地。各地域の治安を守るために存在するこの役所は、街の治安維持や、街への街道をうろつく魔物の退治、物資の交流の管理まで勤める、街の存続には無くてはならない存在である。
　シール達が此処に来た目的は、目的地であるニルナック村に行く前に、魔術師の援助を要請する為だった。ニルナック村の現状が分かないが、救助者がいる可能性が大きい以上、転移魔術の使える魔術師が複数欲しかった。
　転移魔術は非常に繊細な魔術だ。距離が近ければ正確な位置まで指定できるが、距離が離れている場合はかなり大雑把な移動になってしまう。それこそ目的地から誤差一キロは当たり前だと考えた方がいい。つまり、一度村から此方の町へと転移すると、戻るのに再び時間がかかる。
　エレナとシールの二人だけでは一度に運べる人数も限られてしまうため、下手をすれば村に何らかの危機が訪れた場合、誰一人として対応できず、悲劇が起こる可能性まであるのだ。
　だからこそ、シールは援助を要請したのだ、が、
「はあ？ 魔術師を貸せ？ 駄目だ駄目だ！ 認められん！」
　目の前の、騎士団に所属している筈なのにえらく太っちょな髭面の男を前に、シールはため息を吐き、エレナは不快なものを見る目で睨みつけた。
　シールの要求は、この責任者の男に真っ向から弾き飛ばされたのだ。
「既に何人もの犠牲が出ているのだ！　　そう簡単に優秀な魔術師を送り出せるか！」

「今、村がどういった状況にあるか分からない以上、救助は必要です」
「そんな事貴様に言われんでもわかっとる！ 今検討中だ！」
「私達はそれを手伝いにきたと言っているんです」
「これは騎士団の仕事だ！ よそ者はひっこんどれ！」
「私達は国から依頼で行動しているのですよ」
「例え国からの要望でも勝手に動かれては困るのだ！ 責任者はワシだ！」
　先程から繰り広げられる会話は、ひたすら平行線だ。シールは二度目のため息をついた。
　まあ、確かに、どう見たって二十代前半の若造と、十代半ばの少女のコンビを信用できないと言う彼の言う事も分からないでもない。国の依頼が横暴なのもごもっとも。
　だが、彼が此処まで此方の要請を拒否する理由は、そういった理由では無くて、多分、単に、優秀な魔術師を失う事で、自らの地位が危ぶまれる事を恐れての事だろう。学院長曰く、既に何人も兵士や魔術師は失われていると言う。これ以上失態を犯したくない、と、つまりはそう言う事だ。
　彼のもの言いや態度を見ているとそれが良く分かった。だからこそ厄介だ。
　チラリとエレナを見ると、エレナもシールを見て、間をあけて自分自身を指指さした。
　自分がゲルター家だと言えばどうにかなる、と、そう言っているのがシールにも分かった、が、シールは首を振る。此処でそれをばらせば確かに融通は利くだろう。権力には弱そうな男だ。
　だが、そうすると、エレナは間違いなく此処にとどめさせられるだろう。わざわざ此処まで来てそんな結末は馬鹿らし過ぎる。
「兎に角！ こちらからは人手は出せん！ 以上だ！」
　半ば強制的に、この会談は終了になった。

「やれやれ、どうしたものかな」
　半ば無理やり追い出される形で外に出たシールは頭を掻く。あまり期待こそし

てはいなかったが、しかし実際こうなると困ったものだった。
　だがやはりどうしても人手は必要だ。せめてあと一人か、二人くらいは。
「ギルドに依頼したら？」
　と、エレナが思いついたように提案した。
　エレナ自身ギルドに関しては知識としか知ってはいないが、確か相応の報酬さえ払えば相応の働きをしてくれる民間機関だと言う事だ。ならば、今回の件では役に立つのではないか、とそう思ったのだ。
　しかしシールは首を傾ける。
「ギルド……か。あそこは安定した人材がいないからなぁ……」
「そうなの？」
「そうだよ。国の介入の無い世界だからね。だからこそ融通のきく所もあるんだけど……」
　そういいつつ、シールは首を傾けたまま、腕を組み唸る。
　エレナも彼の悩みを手伝いたいとは思うが、しかしこういった場合どうすれば解決するか、何て、学院でも習わなかったし、本でも知らない。なので押し黙るしかなかった。
　そうして、何処か手持ち無沙汰気味にエレナが周囲の光景を見渡していると、
「……ん？」
　ふと、人々の多く行きかう大通りの向こう側から、背丈の高い妙齢の女性が此方の方へと大きく手を振っているのが見えた。誰か待ち合わせた人を見つけたのだろうか、と、自分の後ろを振り向く。
　だが、其処は街道へと出る門の近くで、兵士以外誰もいない。ではもう少し手前の方だろうかと前を見るが、どうにも彼女は此方の方を見つめて手を振っているように見える。
　一体誰に対して、と、エレナはもう一度彼女を見てみると、
「……は？」
　その彼女は此方にどんどんと向かって来ていた。それも大通りの人々を押しのけ、ぶんなげ、薙ぎ倒し、悲鳴と絶叫と共に。
「ちょっ！　シール!?」
「うん？」

ずっと一人で思い悩んでいたシールがふと顔を上げると。

「しーぃいいいいいいいいいいるぅうううううううううううううううう!!!!」

真正面から、人々を投げ飛ばしてきた女の豊満な胸から繰り出されたプレスアタックが直撃して、ごきばきめきと盛大な音を立ててシールは地面に激突した。

「いやあ！ 久しぶりだなシール！ 何年ぶりだ!? 三年か!? この街で会うなんてすごい偶然だ！ これって凄いな！ 運命だ!? おい！ シール！ なんだよ白目なんて向いているぞ?! 面白いな！ ほら！ 何か言え！ シール！ シール!? シール!!」

頭を打ち、気を失ったシールをブンブンと振り回している女性を前に、エレナは絶句した。

今現在、リアルで忙しくて更新遅れそうです。ごめんなさい。

早く錬金術の方も更新せにゃならんのになぁ……

第二十五話 ギルド『紅眼』

　ギルドという組織はピンからキリまで、様々な種類のものが存在する。
　それこそ超一流で貴族や、国が直接依頼を申し込むような圧倒的な実力を誇るギルドがあれば、とてもまともな仕事ができそうにも無い盗賊まがいの集団、はたまた魔物狩り等の実践からは程遠い、魔術や薬品などの研究を司る錬金術師のギルドまで、本当に多岐にわたる。
　現在、エレナは、そんなギルドの集団が集まる酒場の中心で席についていた。
　何故此処に来たのかと言えば、あの巨大な女がシールをぶっとばし、更には気を失ったシールと茫然となっていたエレナをむりやりこの酒場まで引っ張り込んだのだ。
　ちなみにシールは未だ気を失い、奥にあった寝室で横になっている。駄目男とエレナは愚痴った。
　まあ、シールは置いとくとして、と、エレナは目の前の三人の男女に視線を向ける。
　その内の一人は先程シールを薙ぎ倒したばかりの女性。黒く長く、美しい髪と、少々挑発的な軽装の鎧が特徴的な、背の高い元気な女。
　残る二人は彼女の仲間だという。一人は無精ひげを生やした筋骨隆々の男で、酒瓶を時々口にしながら、此方を見てとても楽しそうに笑っている。最後の一人は、この二人への印象とは大きく変わった、若く、何処か男は面倒くさそうに頭を掻きながら、しかしどちらもエレナを見ている。
　どうすればいいのだろう、と、エレナは考える。そもそもコミュニケーション能力についてはかなり未熟な彼女には、こういった状態の場合、どうすればいいのか全く頭には浮かばなかった。
　なにはともあれ、言葉を交わさなければ、と、エレナは意を決して口を開いた
「……えー、皆さんは「私はセラ、ハンターだ！」

そのエレナの決心をあっさり叩きつぶす様に、シールを薙ぎ倒した彼女は元気よく、簡潔に自己紹介をして、出鼻から挫かせてくれた。エレナは沈黙し、頬を引き攣らせながらも、彼女のその言葉を繰り返す。

ハンター。人々を襲う凶悪な魔物の討伐や、希少な生物、錬金術師が研究などで必要となる珍しい素材の採集などを行う職業だ。と、エレナは思いだす。

しかし、セラというらしい彼女が希少な植物の採集なんてできそうにも見えず、やはりやる事は魔物の討伐なのだろう、と、補完する。

そんな彼女の簡潔な自己紹介に次いで、真ん中の、背が高く、筋肉隆々な男が、いかにも逞しい笑みを浮かべて手を上げた。

「バルゴ。セラと同じく、『紅眼』っていうギルドで、ハンターやってるんだ。よろしくな！」

やはり元気よく、というか、五月蠅く、男は声を上げた。恰好は、くつろいでいたのか適当なシャツとズボンをはいただけで、余計に見た目は暑苦しく、年も食っていそうな印象だったが、聞こえてきた声はまだ若く、エレナは顔には出さずに驚いた。

無精ひげで隠れてしまっているが、良く見れば顔もまだ若々しく、ひょっとしたらシールともあまりかわらない年齢なのかもしれない。

そして最後の男が顔を上げ、若干面倒そうな顔をしながらも、口を開いた。

「……ヴェインだ。その二人が所属しているギルドの、まあ、親分をやってる」

ヴェイン、と名のる男は二人に比べると随分適当な挨拶を送った。少しくすんだ赤い髪の下に表情を隠している彼は、バルゴとセラの二人からエレナがイメージしたギルドとは、またかけ離れていて、何処か俗世離れした感じだった。

髪の合間から覗く瞳は、彼の髪と同じく赤く、しかし髪とは逆に澄んだ赤色をしていて、それがエレナをじっと見つめる。それがなんだか少し恐ろしいくらいに綺麗で、エレナは静かに身震いした。

各々、強烈な印象をエレナに与えた三人は、しかもシールの知り合いだと言う。

なんというか、どういった人生を歩いていれば、こんな三人と知り合えるのか。あの素っ頓狂な男の過去への好奇心がふつふつとわいてくる。が、今はそれは置いておこう。

自己紹介を終えた三人は此方をじっと見てくる。今度はお前の番、という事らしい。
「……はあ、えっと、エレナです。一応、シール先生の教え子です」
　実際は、直接授業を受けている訳ではないが、しかしそう言った方が分かりやすいだろう。彼からは色々な事を教えてもらい、協議しているのは事実だ。
「教え子？」
「あの学校の生徒ってことか？」
　あの、とは、オルフェス学院しかないだろう。
「……そうですけど」
「「なんだつまらん」」
　セラとバルゴが二人は口をそろえた。どうやらこの二人は波長が合っているらしい。
「……つまらん？」
「恋人かなんかだと思った」
「愛人か何かだとばかり」
　どうやらこの二人は、駄目なレベルの波長が合っているらしい。と、エレナは修正する。
「ああ、だけどシールは子供に手は出さないか。アイツは真面目だ」
「いや、わかんねぇぜ？ 実は本性はムッツリだったりすんだって」
「ムッツリって何だ？」
「ムッツリってのはなあ……」
　そしてその二人はエレナを無視して勝手に話し始める。もう、帰っていいだろうか、と、エレナは息をついたが、ふと、ヴェインがエレナを見つめている事に気がついた。そして口を開いて、
「で、どうしてその生徒と先生がこんな街に？　　　観光なんて訳じゃないだろう？」
「それは……」

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「それで、その村に行かなきゃならないと、それも二人で、」
　説明を聞き終えると、セラとバルゴはうんうんと何度も頷き、理解しているんだかしていないんだかよくわからない反応を返した。二人のリーダーらしいジェナは黙って聞いているだけで反応を示さず、これはこれで聞いているのだかいないのだか、分かりにくかった。
　暫く沈黙が続くと、セラとバルゴが互いに視線を合わせると、エレナに向かって身をのりあげ、彼女を戦かせた。
「それならそうと言え！」「手伝うぞ！」
「却・下」
　そして、二人の頭をがしりと、何時目を覚ましたのか、シールが掴んでいた。
「おお、シール！ どうしたんだその包帯！」
「セラ、君は少し、過去を振り返る努力をしようか」
　シールは頬を引き攣らせながら空いた席に座ると、そのまま大きく息を吐く。
「おいシール。何だよ却下って」
「そのままの意味だよ。君たち二人を連れていけない。不安だからね」
「なんだと！ 馬鹿にするなよシール！」
「そうだ！ 私たちもお前と別れて数年、成長したんだぞ！」
　二人は腕を組み、ご立腹というように頬をふくらました。
「……数年前、護衛の任務で、襲いかかって魔物を撃退した後、護衛対象ほったらかしにして何処までも魔物を追いかけて行った事は、覚えているかい？」
　二人は首を振った。横に。
　シールは静かに頬笑み、肩をぽんと叩くと、
「行こうかエレナ」
「「ちょっとまったあぁぁぁああああああ!!」」
　二人はシールの首にしがみつき、シールはカエルの様な声を出して呻いた。
「「何が不満だと言うんだ！」」
「聞いた通りだよ！ 君たちは不安定にも程がある！」
「不安定じゃないぞ、ちょっと忘れっぽいだけだ！」
「それが駄目なの！」
「まあ、落ち着け」

そんな中に割って入ってきた落ち着いた声が響いた。
「ヴェイン。君も何とか言ってやってくれ」
　シールは締まる首を押さえながら叫ぶ。が、ヴェインは首を横に振って
「どっちにしたって、人手はいるんだろ？」
「……まあ、ね」
　シールが頷くと、ヴェインはそのまますっくと立ち上がる。酒場のカウンターで店主に銀貨を一枚渡して、そのまま荷物をまとめ出した。シールは、何か言おうとするが、その前にヴェインが口を開く
「丁度他の奴らが仕事に出て、暇だったんだ。手伝わせてやってくれ」
「暇？」
　ああ、とヴェインは頷く。
「国からの要請で、古代獣退治に人員を割いている。うちのギルドの殆どがそっちにいった」
「ああ、だから君等しかいなかったんだね」
　君達しか、という事は、他にも『紅眼』というギルドには仲間がいるのか？
　まあ、確かに、この三人だけだとしたら、ギルド、というよりもチームに近い。実は大所帯だったと考えるのが普通だろう。と、エレナが考えているうちに、シールもまた、思案に暮れる様に額にしわを寄せた。
「いや、でもね……」
「二人で不安なら、俺も行こう」
「……いいのかい？」
　意外そうなシールの声にヴェインは頷いて、
「部下が一人もいない状態で残っても意味は無い」
　そう返答に、シールはうーんと唸り、悩み始める。
　エレナからすれば、セラ、バルゴ、そしてヴェインの素性は全く知れず、ついさっき自己紹介をしてもらったばかりで、判断する材料が無かった。ただ、なんとなく、シールがヴェインに対しては一定の信頼を置いている、という事だけはこの会話で伝わってきていた。
　それからしばらくして、シールが、エレナ、セラ、バルゴ、ヴェインの顔を順に見渡す。そして、

「……ま、いいか」
　何処か軽く決断した。
「本当にいいの？」
　その呆気ない決定にエレナは聞き返すが、シールはうんと頷いた。
「まあ、ね。チーム構成も一応バランスは良いし、この数ならある程度人数を分けられるし」
　シール、エレナは魔導師、ヴェインは知れないが残る二人はどう見たって近接戦闘に長けていそうないでたちだ。確かに、チームで行動するにはバランスの良い構成にはなっている。
「なら、明日の朝五時に行動開始としよう。集合は北門入口前」
　ヴェインが最後にそう絞めて、会談は終了となった。

久しぶりの投稿です。ごめんなさい。
そして別の小説に投稿しそこなうというトンでもミス。二重でごめんなさい。
これからはある程度投稿ペース復活しそうです。

第二十六話 宿屋にて

　その後、ひとまず酒場を離れたシールとエレナは、再び騎士団の元へと足を運び、責任者の男ともう一度だけ、取引を進めた。
「とりあえず此方で独自に侵入しますので、向こうから此方へ救助する際、目印となる転移魔法陣の準備をお願いします」
　そのシールの意見に、責任者の太っちょな男は多少不満げにしつつも「わかった」と、案外素直にそのシールの意見に頷き、元々は騎士団が使う手はずになっていた転移魔法陣を起動しておくと、約束した。
「……意外にあっさり了承したわね。あのデブ」
「転移魔法陣の起動で、死人が出る事は無いからね」
　かくして、交渉はつつがなく終了した。

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「これが平民の宿……案外広いのね。豚小屋みたいなの想像してたわ」
「うわあ、エレナ。君今の台詞すごく貴族っぽいよ」
「貴族だもの。私」
　交渉後、二人は近くの宿屋に体を休めた。
　その宿屋というのは、丁度ヴェイン達『紅眼』が集団で借りていた宿屋らしく、皆が出払い、部屋が空いている為、家賃はタダだった。
　しかしまあ、必要経費は国に請求書を押し付ける為、どちらにしろ自分の懐は痛まないんだけど、と、シールは頭を掻きながらも、ヴェイン達には感謝した。
　当てられた部屋は、それなりに広かった。多少のボロさは目につきはしたが、其処まで貴族的な感覚に毒されていないエレナには十分な代物で、むしろ普段の生活では見ないような雑用品を見つけては、

「なにかしら、これ。変な顔」
　そう、あははと笑ってその年の子供らしくはしゃいだりもした。
　そんな彼女をシールは苦笑しながらも眺め、目を細め、
「不満があるかい。エレナ」
　そう、言葉をつくった。
「え？」
　エレナは棚に並べられた意味不明な彫刻物を手に取りながら、首を傾げる。
「不満って、何の事？」
「同行者の事」
　ああ、と、エレナはこの宿を貸してくれているあの三人の顔を、順々に思い浮かべた。
「あの人たちの事は何も知らないもの。不満の抱きようがないじゃない」
　そう。知らない。名前こそ尋ねる事が出来たが、それだけだ。たかだかほんの少しの対話だけでは彼らの事なんて知りようがない。だから、心の中にあるのは不満では無く、不安だ。
「結局どういう人たちなのよ？ あの人たち」
「どういう、か……結構複雑なんだよね。あの三人」
　けど、と言葉を続けて
「少なくとも、僕は、あの三人を好いている。悪い奴らじゃないしね」
　そう言って笑みを浮かべ、シールは一度言葉を切る。そしてゆっくりとベットに体を倒した。
「……さすがにそれだけじゃわからないわよ」
「はっはっは、だよねー」
　なら、彼らの所属しているギルドの話をしよう、と、シールは笑みを浮かべた。
「あの三人が所属している【紅眼】ってギルドは中々大きなギルドでね。五十人近くの人数が所属している。仕事の内容は、まあ、何でも屋に近いかな」
「何でも屋……」
　そう言われてもいまいちエレナにはピンとこない。するとシールが言葉を続けた。

「魔物退治は勿論、物資の調達、運搬、要人の護衛、本当に何でも屋だよ。国からの依頼も引き受けてる。本当の意味での何でも屋だよ」
「……節操がないわね。そんなてんでバラバラな仕事してて、ギルドとして成り立つの？」
　そこまでまとまりのない、信条も何もないような仕事をしていると、その内に内部崩壊でも起こしてしまいそうな気もするが、と、エレナはしわを寄せた。
「仕事は一定の成果は上げてるし、意外に組織としての結束力は強いんだよ」
「ルールが厳格なの？」
「ルールというよりも掟かな。確かにそれも厳格だけど」
　一息、仰向けになっていた体をそのままエレナへと向ける。
「なんというのかな。【紅眼】ってギルドは、はぐれ者が多いんだよ」
「はぐれ者？」
「うん。はぐれ者。何処にも居られなくなったはぐれ者。彼方此方から爪弾きにあった異端者。そう言う奴らが集まってる。だから内部の結束が強い。何故なら」
「……その【紅眼】が、唯一残された居場所だから？」
「そう言う事。だから、【紅眼】はギルドとしても異端かもね」
　何らかの目的を元に集結した組織では無く、ただ、帰る場所として集い、結束しているギルド。だからこそ選ばれる仕事の内容は節操がなく、バラバラなのだ。
「まあ、これ以上詳しく知りたければヴェイン達と仲良くなる事だね」
「……それが一番難しいのよ」
「そこまで気を張る必要はないさ。別に、今の話も秘密にされてる訳ではないし」
　シールのその能天気な物言いに、エレナは複雑そうに表情を沈めた。
「……そう言えば、ヴェインって人が、親分だって自分で言ってたけど、あれってどういう事？」
「そのまんまの意味だよ？　ヴェインが【紅眼】の創立者さ」
「……あの人が？」
【紅眼】は現在、国の依頼も引き受けている、と言っていた。という事は、それ

相応に信頼もあるギルドという証明にもなる。そんな組織を創ったのか？　あの、そんなにシールと年も離れているようには見えない、ヴェインという男が？
　徐々に湧きだした好奇心を抑え、エレナは言葉を選び、口を開いた
「なら、貴方はヴェインと、というかあの三人とどうして知りあったの？」
「……何だっけなあ」
　だと言うのに、シールの反応は、何と言うか、ぼんやりとしていた。
「……何だっけって、忘れる事？ ソレ」
「いや、本当に色々あったんだよ。僕。なんかもう、気が付いたら知り合いになってたって感じで」
「どんな人生歩んでたのよ……」
　まあ、シールなら、という納得も僅かにあるが。
「色々だね～二十数年に生きていればそりゃ、色々あるよ」
「私、もう十何年生きているけど、取り立てて愉快な事は無かったわ」
「そりゃ、君が何かしようと思わないと何も起こらないさ」
　そう言って、「まあ、僕の場合は、望んでないのに厄介事がやってきてくれたけど」と、遠い目をしながら乾いた笑みを浮かべた。
「……そういうもの……よね。やっぱり」
　対してエレナは、シールの言葉を噛み砕くように、頷いた。
「今日はこれくらいにしておこう。明日は早いし」
「そうね」
　明かりを落として、互いに、供えられたベットに横になった。
　エレナは、そう言えば、誰かと一緒に眠りにつくなんて、子供の頃いらいなんじゃないかしら？　なんて事を思いもしたが、疲れもあったのだろう。直ぐに穏やかな安穏の底にたどり着き、眠りについた。
　その横ではシールが、体を横にしながらも目を開けて、暗い天井を見上げつつも、
「何事も……ない訳ないんだよなぁ」
　と、何処か諦め気味に呟いて、目を閉じた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　翌日、北門前にて、

　シールとエレナは二人並んで、北門の前へと到着した。

　その前では、セラは鋭く長い槍を片手に、バルゴは巨大な大槌を背負い、ヴェインは細く短い両刃剣を左右の腰にぶら下げている。

　二人に気づいたヴェインはシールへと歩み寄ると、表情を変えぬまま、

「準備は」

「万全だよ、そっちは？」

　尋ねられ、頷く。そしてセラとバルゴもまた、シールへと頷いた。

　シールは一歩前へと進む。セラ、バルゴ、ヴェイン、そしてエレナの視線を受けて、それらをまとめる様に、シールは微笑んだ。

「行こうか。皆」

第二十七話 初実戦

　シールとエレナ、そしてギルド【紅眼】がゲナの街を出て、ニルナック村へと続く道を歩み進めてから数時間が経過した。既に太陽は高い山々の陰から顔を見せている。辺りの草原からは幾つか生物の気配が感じられ、その日の始まりが動き始めていた。
　本来ならば、転移魔術という、便利な移動手段を使うのだが、何故か村へと転移魔術は発動できなくなっている、という話は騎士団から聞いている。また、馬車などを利用しようとしても、馬が言う事を聞かなくなる、という事も聞かされていた。故の徒歩による移動だった。
　貴族で、箱入り娘の様に育てられたエレナにとって、その徒歩移動は辛い物のようにも思われたが、その持前の魔力を利用し、肉体を強化する事でカバーしていた。
　シールも、【紅眼】の三人も歩行による移動手段は慣れたものの様で、この数時間は順調に進んでいた。
　異変が起こったのは、それから更に数十分経過した後の事だった。
　徐々に歩んでいた道がしっかりと形を成し始め、人里が近い事を全員が把握し始めた頃だ。何処か唐突に、シール達の眼前が霧の様な者で覆われ始めてきたのだ。
「……シール」
「ああ。皆、気をつけて」
　前をのんびりと歩いていたセラが、そのシールの忠告に不思議そうに振り返った。
「気をつける？ 何を？」
「マナが濃くなってるんだ」

「マナ？」
　その声に、エレナも同意した。
　マナが濃い。普段から、マナというのは不安定で、ある程度は揺らぐ。同じ場所でもその総量の振れ幅は大きい。だがこれは、異常だ。明らかに不自然なレベルでマナが辺りを充満している。
「でも、マナっつーと、魔術師にとっちゃいいことじゃねえのか？　魔術使いほーだいになるとか」
「マナを魔力に変換できる量も、限界があるからね。無制限という訳にはいかないな。それに」
　シールは、何処かためらいがちに前を指さす。
「……ああいう、厄介なのが現れるから」
　霧の様なマナの陰から、ゆらりと、幾つかの影が現れる。
　それは、遠目で見る限りでは野犬、の様に見えた。だが、距離を詰めるに従って、それとはかけ離れた存在だと言う事が明らかになっていく。
「――ガアァア」
　陰から見え始めたのは二本脚の立ち姿。それだけならば、人と間違えそうになるくらいには、酷似していた。だが、その奇妙に猫背に曲がった小さな体と、異様な呻き声がそれを否定する。
　浅黒い皮膚の上からは血管が走り、別の生物の様に蠢く。眼球は濁り、血走り、焦点が合わずに彷徨い走る。口蓋は開き続け、涎は垂れ流し、狂気に満ちた呻き声を上げる。
「魔物……ゴブリンの亜種かね」
　バルゴは慣れたような口ぶりで、眼前の狂気の生物をそう呼称した。

　さて、此処で魔獣と、魔物との違いを説明しておこう。
　魔獣とは、いわゆる魔力を肉体に取り組む事が出来る様になった生物だ。それは突然変異種であったり、元々そう言った機能を備えた種族であったりもするが、ともかく、マナを取り込み、己が魔力に変える能力を得た生物。それが魔獣。
　対して魔物と呼ばれる生物の場合、そう言った特殊な区分は存在しない。魔力

を有する者もいれば、何一つ持たず、ただただ巨大なものもいる。種類も様々で、明確なライン引きはされていない。
　共通点はただ一つ、人に害をなす。その一点だ。
「……この近辺が異常地帯になっているって事は間違いないみたいだな」
　そして眼前のゴブリンは間違いなく、その魔物と呼ばれる存在となっていた。
「……ゴブリンって、害獣って呼ばれているけど、魔物と呼ばれる程好戦的だったかしら？」
　エレナは首をかしげる。そう、ゴブリンは確かに集団で行動し、時に農作物や放牧されていた牛などを襲う迷惑極まりない害獣に区分されている。だが、基本、数が少なければ臆病で、人に自ら近づく様な生物では無い筈だ。
　だが、眼前のゴブリン達は三匹という少数で此方に近づいてくる。どう見たって此方を襲う気満々な、唸り声を上げながら。
「マナの影響だよ。ゴブリンは基本、マナへの抵抗力が弱いからね」
　シールは何処か呑気にそう言うが、エレナは緊張を強いられていた。
　なにしろ魔物だ。今まで一度も対面した事のない、人類にとっての敵。正直言って、ビビった。思えば、こうした明確な〝敵〟と出会った事は今まで一度も無かったのだ。緊張もする。
「よし。じゃあエレナ。頑張ってみて」
「は？」
　だからシールのあっさりとした一言には、エレナは唖然とさせられた。
「いや、だから、戦っておいでってこと」
「……唐突ね」
　荒事を予想しなかった、何て、甘い考えで此処にいる訳ではない。だがまさか、いきなり戦って来いと言われるとは思わなかった。
「この中で実戦経験ないの、エレナだけだしね」
　つまり、此処で練習しておけと、そう言うことか。
　確かに、唐突に実践に巻き込まれるというよりかは、こうして、しっかりと仲間がいる状態で一度戦ってみた方がいいのかもしれない。が、それでも、実践、と考えると、不安だ。
「……アドバイスとかないの？」

「んー、アドバイスが必要な程、特徴的じゃねえしな。ゴブリンって……」
「数も少ないしね」
　特徴的じゃない、注意すべき所がない、という事は、それほどの驚異的な存在ではないと言う事だろうけれど、と、エレナは考えつつ、魔物の動きをじっと見つめる。
「……悩んでも、仕方ないわね」
　緊張を吐き出す様に息を吐く。同時に、魔術を空で案じる。何があったのか、どんな魔術を使うべきなのか、頭の中でシュミレートする。
「ああ、エレナ。戦う時は【顕現】させておくように」
「え？」
「君の魔力は凄いけど、戦闘用の術式として組んだ事は無いでしょ？」
「そりゃそうだけど」
　将来、騎士団やらに所属するつもりも無いので、戦闘むきな授業はとっていない。
「君にとって【顕現】は戦闘の要だ。だったら使い慣れていた方がいい」
　実践に置いて、力の出し惜しみは意味がないからね。と、シールは付け足した。
　成程、と、エレナは頷き、言葉を紡いだ。
「【メナス】」
　神の名。自身の加護者の名を呼ぶ。直後、肉体の奥底から湧きあがる特殊な魔力。万物に【破壊】を与える魔の力が体中を巡る。片手には剣を模した魔力。正直言って、武器を扱った事は殆ど無い。故にシンプルな武器を選択。体には鎧を。そしてそれを維持する。
　気を抜けば、魔力が更に溢れかえりそうな気配がするが、抑え込む。これ以上の魔力は必要ない。
「行くわよ」
　宣誓。同時に数匹の魔物が同時に、エレナへと飛びかかった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

同時に三体、跳躍、眼前へと迫る。
エレナは攻撃に合わせ、右へと跳ぶ。魔力に強化された力が一気にその場から体を弾き飛ばす。勢いが強すぎて、少々距離が離れすぎた。が、攻撃は避ける事が出来た。
「っふ！」
二度目の跳躍。今度は接近の為だ。未だ目標の唐突な移動に反応できていないらしく、ゴブリンたちはその場にとどまってい。エレナは突進し、そして、
「くたばれ」
剣を薙ぐ。実体がなく、だがそれ故に本物の剣よりも鋭いその魔剣は、ゴブリンの内一匹を捕らえ、その首を跳ね飛ばした。噴き出した血を避ける。まずは一匹。と、エレナはカウントする。
続けてもう一匹と、剣を構える。だが、狙いを定める前に、残る二匹の内一匹が、既に眼前へと跳びかかっていた。
「【弾】」
エレナは短く言葉を紡ぐ。詠唱の省略、ではなく、マナの強制。魔術への昇華を。
昇華された魔術は、瞬時にゴブリンとエレナの合間に入る。そして、
「ァァァァアアアアアアアアアアアア?!」
爆裂。その衝撃はゴブリンの体を叩きのめし、徹底的に破壊し尽くした。
「二匹目」
言葉にし、三匹目は、と視界を巡らすと、既に最後の一匹は此方に背を向けて逃げ出していた。マナにあてられたとは言え、野生の本能は残っているらしい。
ふう、と、エレナは息を吐いて、力を抜いた。
だが、
「仕留めろ！ アレが仲間を連れてきたらどうする！」
叱責、ヴェインの鋭いその声に一瞬仰天したが、すぐさまその言葉の意味を理解し、意識を立て直した。【顕現】した魔力を集中させ、形を創る。
「【破魔の槍】」
創り出したその槍を、その場で投擲する。破壊の力を秘めたその槍は、瞳ではとらえきれないような速度で遠くへと逃げ出したゴブリンへと追いつき、そのま

ま胴体を刺し貫いた。

「三、匹、目」

　エレナは今度こそ、緊張が解け、力が抜けた。

　ふっと、体が倒れそうになって、その前にシールが体を支えた。

「お疲れ」

　彼の笑みに、つられて笑いそうになるエレナだったが、

「三十点だ」

　その横でヴェインの酷な評価に、その笑みが潰された。

「倒したじゃない」

「ゴブリンを倒したくらいで誇るな」

　ヴェインはそう言いつつ、二匹目の、エレナの魔術で吹き飛ばされたゴブリンへと近づく。

「高い戦闘能力はあるらしい。だが、力に振り回されすぎだ」

　息絶え絶えだったそのゴブリンに剣を振り下ろし、その息の根を止めた。

「魔物の息の根は確実に止めろ。相手によっては首をはねても生きている場合がある。お前は、戦う姿勢が緩すぎる。もっと徹底しろ」

　淡々とした物言いだったが、その言葉の内容は厳しい物で、エレナは口を尖らせた。

「……仕方ないでしょ。これが初めての実戦よ」

「そんなもの、現実と関係ない。誰もお前が戦い慣れるのを待ってはくれない」

　剣についた血を払い、エレナへと近づく。その赤い瞳がエレナを見つめ、威圧する。

「経験が足りないのなら、それを補うだけのセンスを発揮しろ。それができるから、シールはお前がついてくるのを許したのだろう」

　そう、言うだけ言い切って、ヴェインはそのまま先へと進み始める。

　想像以上に容赦のない言い様に、エレナは若干へこんだ。心構えの様な言葉を告げてくれるだけ親切な男なのだろうけれど。と、そう考えているうちに、左右からバルゴとセラが頭をグシャグシャと撫でてきた。

「ま、いいじゃないか。ヴェイン。私の時と比べればましだぞ？」

「はっはっは、セラは初めての実戦でいきなり魔物に突っ込んでいって、ボッロ

ボロにされてたもんなあ」
　果たしてこれは慰めなのだろうか、と、顔が引きつる。
　そんな状況をみかねたのか、シールは手を叩き、注目を集めた。
「さ、そろそろ行こうか。もうすぐ……目的地だ」
　シールの言うとおり、もうまもなく、彼らの前には目的地が姿を現す事になる。
　今回の事件の中心、ニルナック村が。

ぶ、文章が安定しない……
どうにもならんねこりゃ、もっと書かねば。頑張ります。

第二十八話 ニルナック村 到着

　エレナが初めての実戦を終えてから更に一時間。
　その間にも凶暴化したゴブリンが何匹かシール達を襲いかかってきたが、それらはエレナが撃退した。徐々に不慣れからくる緊張も解け、俊敏で効率の良い戦いが可能となってきた。
　常識外れな魔力と高い戦闘センスを持っているエレナにとって、たかがゴブリンの殲滅など容易いものだった。だが、生物を殺す、という行為は、少なからずエレナを疲弊させていた。
　魔力の剣にこびりついた血を払い、エレナは大きく息を吐く。
　何かの命を奪う、というのは、疲れる。体では無く、心が。
　相手は魔物だ。人に害をなし、女子供も容赦なく襲う、人類の敵。生物の倫理からも外れたこの世界の外れ者。しかし、それでも、命は命だ。意識しているつもりも無いのに、罪悪感という名の鎖が心を縛ろうとする。
　だけど、
「……そんなこと」
　今更だ。この場所に立つと決めたのは自分だ。こういう、命を奪わなければ生きられない世界に、彼がいる事くらい、分かっていただろう。
　ならば、最早悩む事に意味は無い。ただ前へと進め。
　エレナはそう、意識を改め、しっかりと前を向いて歩き出した。
　そして現在、
「ニルナック村……此処か」
　五人は、ニルナック村へと到着した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

ニルナック村は、見る限りでは特にこれと言った特徴のない、普通の村だった。

　民家が遠感覚に並び、牛舎などの家畜小屋などが建てられ、野獣避けの柵の奥には農作物などが植えられていたであろう大きな畑が見えていた。本来ならばのどかで、平和な村の様子を眺める事が出来ただろう。

　だが、現在の村の様子は、やはりおかしかった。

　民家の壁には大き穴など彼方此方が粉砕され、おまけに住民は存在しない。家畜の小屋も同様で、違うとすればそこの住み主は存在していると言う点、ただし、食い散らかされた死体となってはいるが。柵も破壊され、植えられていた農作物もまた、食い荒らされている。

　どう考えてもまともな状況では無かった。

「マナの影響で、魔物になった野生生物が暴れた、と、考えるのが普通かな？」

「じゃあ、この村がこうなった原因ってのは、マナなのか？」

「……どうだろうね？」

　シールはそう答え、辺りを散策しながら、じっくりと考えを見直していた。

　マナが原因、なのは間違いないだろう。マナが溢れ、その影響で魔物が溢れ、人々が襲われる。こういった災害はそこまで珍しい物では無い。シール自身も、そう言った事件には何度か出くわしている。

　しかし、それだけで説明するには、どうにもこの事件は不自然だった。マナの暴走の仕方、魔物の発生、騎士団の失敗、何故そもそも自分達が派遣されたのか、何もかもが、不自然だ。

　と、シールが、そこまで考えていた時だった。

「だ、誰だ!?」

　人の声、前を向けば、額に包帯を巻いた、若く、憔悴した男が一人。両手には井戸から汲んだ水を抱えて、此方を向いて身構えている。

「……ニルナック村の住民さんだね？」

　生存者。どうやら彼に事情を聞いた方が早そうだ。彼はそう結論した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「こっちです」
　シールが出会った村の住民の案内で、村の奥になった大きな風車の塔へと五人は案内された。
　恐らく集会などで使われていたであろう広い塔の中には、たくさんの村人達が焦燥しきった状態で避難してきていた。
　その彼らに、シールはまず、自分達が国から派遣された救助隊である事、目的は音信途絶になった村の異変を確かめ、元に戻す事だと告げた。安心してもらう意味を込めて、もう大丈夫だと言うように
　だが、
「……反応、薄いわね」
　エレナは、シールの言葉に顔を打つ向かせたまま言葉を返そうともしない様子に不思議そうな声を上げ、それをシールは口に指を当てて避けさせた。
　確かに助けに来た反応がこれでは此方のやる気も削がれてしまうだろう。しかし今の彼らは極限状態だと言う事は見て分かったし、余計な刺激は与えてはならない事が分かっていた。
　ただ、とシールは辺りを見渡す。
　これは薄いというよりも、反応しようとしていない様にみえる。
　それが何故か、という理由は、まあ、大体想像はついたが、今は置いておく事にした。
「ひとまず、バルゴ、セラ、みんなに食料と、水を配ってあげて」
「そんなもん、俺達持ってきてねえぞ？」
「此処にあるよ」
　地面を足で叩く。と、次の瞬間踏みしめた地面から封印術式が広がっていった。複雑な軌跡を描いて蠢く線は大体五メートル程でその広がりを止めた。
「【解放】」
　一言告げる。すると広がった封印術式は解ける。其処に封ぜられていたもの、国が配備していた食料の山が突如避難所に出現した。流石にこの時ばかりは村人の皆も目を丸くしていて、拍手をする子供までいた。シールは笑みを浮かべてその拍手にこたえてあげた。
　楽をする為、というのが目的だったけど、こういう反応が返ってきたのは良

かったかもしれない。うん。
「それじゃあ二人とも。よろしくね。女子供は優先的にね。ちゃんと人数分あるから、その事もしっかり皆に伝えるんだよ」
「「おう」」
　元気の良い返事だった。まあ、流石にこれであの二人が大ポカする事は無いだろう。
「さて、それでは事情を聴かせてもらいましょうか……村長さん」
　此方に向かって、何か話しかけようとして、しかしシールの珍技に目を奪われ、固まってしまった老人に、シールは話しかける。
「あ、ああ、はい。そうです」
　頷く老人に笑みを向け、シールは、ひとまず人がいない場所への案内を頼んだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　避難所の奥、其処には古い大きな机と椅子が並べられた部屋が存在した。
　意外と者の揃っているこの部屋は、年に数度、村の有権者達が会議をする為に集まる部屋なのだと村長は説明して、その椅子の一つに腰を掛け、シール達も促した。
「ではまず、この村の異変が何時から起こったのか、教えてもらいませんか」
　シール、ヴェイン、そしてエレナが席に座ると、まずシールが事の本題を尋ねた。
「はい……あれは、確か」
　大体二週間ほど前だったでしょうか、と、村長は語り始めた。
　その日の朝、何時もの様に日の出と共に目を覚まし、何時もの様に仕事に向かい、何時もの様に畑を耕し始める筈だった村人たちは、ある異変に気がついた。
　最初は気にも留めていなかったが、全く変化する様子も無く、村の彼方此方にその異変が発生している為徐々に不気味になり、村長に相談する事になった。
　村長が聞いたその異変。それは、村中に妙な〝もや〟が発生しているのだとい

う。
「……〝もや〟、ですか」
「ええ、〝もや〟です」
　最初その〝もや〟が何なのか分からず、男達が触れたり、仰いだりしても揺らぐだけで変化もしない。正体の掴めないそれは村人達を不安がらせ、かといってそれに時間をかけるわけにもいかず、村人たちはその〝もや〟の事は忘れようとした、らしい。
「ですが、時間がたっても〝もや〟は消えず、それどころかどんどんと広がって行きました……そして、」
　異変を超える異常は数時間の後に起こった。
　普段、大人しく、人々からも慕われている男が、突然暴れ出したのだ。まるで発狂でもしたかのように狂ったように四肢を動かし、近くにあるものをやたらめったら破壊し始めた。
　おまけに力も異常に強く、他の男衆が五人がかりでようやく鎮圧できた程だ。
　それでも暴れ続けるその男を引っ叩き、水をぶっかけると、急に男の顔に理性は戻った。そして辺りをキョロキョロと見渡して、一言告げた。
「みんな、どうしたんだ一体、と……自分が暴れた事は覚えていなかったのです」
　エレナは額に皺を寄せ、シールへと顔を向け、口だけ『魔物化？』と動かしたが、シールは首を横に振った。人間は元々マナの許容量だけならかなり高い。だから魔術師なんて存在まで生まれるほどなのだ。それは一般人でも変わりは無い筈だ。
　ただし、〝許容量だけ〟、という事を忘れてはならないが。と、シールは付け足し、しかしそれ以上は考えるのをやめた。
　後にしよう。今は、村長の話を聞くのが先だ。
「それからも、また何人か、突然正気を失って暴れ出す者があらわれました。男に限らず、女や老人、子供まで、本当に何の予兆も無く」
　その時には村人たちもこれが異常事態である事は分かっていた。そしてその原因、あるいは予兆があのどんどんと広がっていく〝もや〟だと言う事も。
　村人達はこの避難所にまで避難させて、何人かの男達で編成し、ゲナの街に助

けを求めに行かせた。この事態が自分達で何とかできるものではないと分かっていたから。
「ですが、その、その矢先に！」
　感情が爆発しそうになった村長をにシールは頷き
「魔物に襲われた。そうですね？」
　先を促す。村長は体を震わせながらも首を縦に振った。犠牲者も出たらしく、その顔色は真っ青になっていた。
「それからはずっとこのままで。一度は男達を集めて突破しようとも思いましたが、逃げようとすると魔物たちが集団で襲いかかってきて、なすすべも無く……」
　逃げようとすると、という言葉に、ヴェインはぴくりと反応したが、しかし、この場で、彼はその反応だけにとどめた。
　さて、とシールは尋ねた情報を頭で整理する。ひとまず、この村で何かが起こったのか、そのむらびと視線の情報は手に入った。あとは、
「聞きますが、騎士団の方々は此処に来られましたか？」
　尋ねると、村長は僅かに額にしわを寄せた。とても深刻そうな顔で
「はい。確かに何度か来てくださって、我々に食料も提供してくださいました。その後、村の外の様子を見てくると言って……」
　それ以上は、彼は言葉を噤んだ。
「帰らなかった、と」
「はい……」
　村人達がシールの言葉に期待を寄せなかった理由はこれだろう。
　既に何度も、期待を寄せ、そして裏切られたのだ。余計に焦燥してしまったその理由も分かる。
「成程……大体状況わかりました。それでは最後に一つ、」
「はい？」
　その最後の質疑を終え、村長への事情聴取は終了した。

話がなかなかうごかねえ……まあ、しょうがないね！
五月九日）
話数入れ忘れていました。わーい恥ずかしい！

第二十九話 変動

「……静かね」
　高く、遠くの山々まで見渡せる高見台の上で、エレナは一人呟く。
　魔物を見張るために設備されたらしいこの場所で、エレナは見張りを続けていた。
　マナの霧深く、昇っているはずの日も隠れ、人はおろか獣の気配すらも感じない村の空気はひどく寒々しい雰囲気を纏い、エレナの心を震わせた。
　エレナが村の見張りについた経緯は、今から約一時間前、村長からの話を聞いた直後に遡る。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　村長の話を聞いた後、シール達は村の人々、特に怪我人や子供たちを何とか町まで連れ出す方法を村人たちも交えてあれこれと意見を交わした。
　だが、やはり上手い解決案が出ることはなかった。
「兎に角、このマナの霧を払わなければ話にならない」
　ヴェインはそう言い、皆もそれに同意した。
　女子供が多く、護衛する側の人数も少ない以上、転移魔術が一番安全だ。
　ならば、根本的な解決策を考えるしかない。少なくとも、その解決への足がかりが欲しい。
　それさえ見つかれば、後は一度ゲナの町にでも戻って、騎士団との交渉もできるだろう。流石に原因も何もかもを明確に示し、要請すれば騎士団も動く筈だ。
　と、そのように話はまとまり、その後二手に分かれ、行動を開始した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　かくしてエレナはこの物見台の上で、魔物が来ないか監視をしている。

　といっても、この深い霧の中を目で探っているわけではなく、この濃いマナを利用した結界で村全体を覆ってその周囲を探っている。

　エレナと同じく護衛に回っているのは、エレナのいる場所から対極に位置する物見台に陣取るバルゴと、そして、

「エレナーおなか減らないかー？」

「村の皆もおなか減ってるんですから、我慢してください」

「ちぇー」

　物見台の屋根の上に、何故か登っているセラだ。

「……はあ」

　エレナの口から自然とため息が漏れた。不安。そう、不安だ。

　ハッキリ言えば、このチーム分けには、不安があった。不満ではなく、不安が。

　セラ、バルゴの二人が、エレナにはどうにも不安だった

　まあ、この短い時間、ほとんど会話だって交わしたことのないような相手に信頼も何もないのはわかるけれど、なんというか、彼ら二人にはプロフェッショナルな信頼感が非常に、薄い。

　ヴェインは、その立ち姿からも只者ではない〝感じ〟がしたけれど、セラとバルゴにはそれがなくて、なんだか、共にいて安心できる要因にはならない。

　自分がこういった「実践」を経験したことがない以上、見本となる人がいてくれたほうが安心できるのだけど、あの二人がそういった見本になってくれるか、と考えると、

「……微妙よね」

「んー？ どうしたー？」

「なんでもないわよ」

　寝ているのかと思ったら以外に耳聡い。

「……人の事愚痴ってる場合でもない、わね」

　目を閉じ、村全体に張っている結界へと意識を走らせる。

少し、南方面の結界が歪み始めていた、徐々に、徐々に修正を続ける。
　結界の維持は、想像以上に難しい。
　村に侵入を許してから迎撃するにはこの村は広すぎる。だから村全体を結界で覆う必要がある。
　そのため必要となる魔力の量は膨大となる。そういう意味ではこの異常発生したマナは便利ではあるが、その維持と安定を続けるには邪魔でしかならい。
　ふと、下から足音が上ってくる音がした。
　振り返ると、狭い階段から男が一人、上ってくる。そしてこちらを見つけると笑みを見せ
「大丈夫かい。お嬢さん」
「貴方は……」
　確か、村で最初に出会った男だ。
　低い背丈と細く、無駄なく頑丈そうな体。農場というハードな現場で働いていると理解できる。そんな男だった。
「ジャンだ。よろしくな」
　そう言って、彼は水の注がれたコップをこちらに差し出した。
「ありがとう、ございます」
　受け取り、口に含むと澄んだ水の味がする。密かに魔術を使い、マナや毒の有無を調べてみたが、それもなかった。いくらなんでも警戒しすぎな気もするが。
「すまんなあ。本当はお茶でも淹れてやりたいんだが」
「いえ、平気です」
「おーい、姉ちゃんも飲まねえのか？」
　屋根の上のセラにも彼は声をかけるが、屋根の上からは手がぶら下がり振るだけで、降りてくる気はないらしい。
　いい加減な対応だったが、ジャンは気にする様子もなく、もう一つのコップの水を一気に飲み干すと、まるで此方の緊張を和らげるようにニカッと笑みを見せる
「しかし、あんたみたいな女の子にこんなことさせて悪いなあ」
「私は魔術師ですから」
　自分の素性はギルドの魔術師、ということにしてはいる。

実はただの魔術が使えるだけの学生です、などと名乗って村人たちを不安がらせることもないという配慮ではあるのだが、なんだか騙しているみたいですこしばかり罪悪感を感じてる。

「ふーん、すごいなあ、俺の娘と同じくらいなのに」

「娘さんが、いるのですか？」

横に立って村の外の、見えない景色を眺めるジャンの姿を見ると、意外に感じられた。

その体つきこそ、長年の農業作業の結果かたくましいけれど、確かによく見ればその顔だちは老けていた。だが、父親というイメージが自身の父にしかないエレナにとって目の前の彼はあまり父親という感じではなかった。

「……その娘さんは、今はどうしているんですか？」

「あー、心配してくれてんのか？ 大丈夫だよ。あの子は」

ジャンのその元気な笑みに力が抜けた。

「あの子は、今は巫女をやっとるからね」

その言葉を聞いた瞬間、エレナの緩んだ緊張が再び張り巡らされた。

「巫女、ですか」

その言葉は、村長から、聞いてはいた。

「……巫女として仕えると、その仕事が無事終わるまで神殿で働くんだ。親でも会ったらいかんというんでな……正直、巫女なんてどうでもいいから帰ってきてほしいんだがなあ」

どことなく悲しそうなジャンから目をそらして、エレナは、シール達、事の現況を調べにいった二人へと思いを馳せた。

何しろ、あの二人が調べにいった事こそ、ジャンが語る神を祀る神殿なのだから。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

シールとヴェインの二人もまた、

道はニルナック村から更に北。鬱蒼とした草木の先に細々と伸びた道だった。

曰く殆どの村人も利用しないような道らしい、のだが、嫌にその道は綺麗に舗

装されていた。雑草も丁寧に引き抜かれ、むしろ村の道よりも綺麗に整備されているくらい、整備が行きとどいていた。
　そんな道を二人は進む。一人は無表情に、もう一人は何処か憂鬱そうな表情で。
「しかし……いいのかいヴェイン。今さらだけど。ここまで付き合わせて」
「本当に今更だな。別に。さっきも言ったが暇だったんだ」
「本当に珍しいね……そもそも、国の依頼を受けた事自体が」
　ヴェイン、彼との付き合いは結構長い。だからこそシールは、ヴェインがこの国という組織が信頼できるものではないと考えている事を知っている。だからこそ意外だったのだ。
　ヴェインはその問いに首を振り、特に楽しそうでも何でもなさそうに口を開いた。
「……最近、この辺り胡散臭い噂が流れていた」
「どんな」
「人攫い、神隠し」
　そこまで聞いてシールは手を叩く。納得したと表情を緩めて、
「あー……それで丁度良く、僕の依頼の話を聞いたと」
「そう言う事だ。聞く限り、この件は〝胡散臭かったからな〟」
「そうだね」
　そう、胡散臭い。どうにもそんな〝気配〟がする。
　勘にも近いその〝気配〟は、なぜだが良く当たるのだ。
　だからこそ、二人は事の原因の元へと足を進める。
「……村長の言っていた話がこの問題の原因とは限らないけどね」
　最後に尋ねた質問「この村には特有の儀式や〝しきたり〟はないか」というもの
　答えは「ある」だった。
　曰く、この村は何年も前に、不思議な奇病が蔓延していたという。
　病の原因は不明、今まで一度も見た事もないような奇妙な症状に町医者も匙を投げ、人々は長く苦しみ、悲しんだ。
　体の弱い女や子供から先にかかるその奇病に村は心底疲弊し尽くしたそうだ。

遂には村を棄てる他無いのではないか、という話まで出てきた時、村に一人の男が現れた。

異国の神の伝道師と名乗るその男は、「神の力」という不可思議な力を用いて、瞬く間にし病に苦しむ人々を癒しつくしたと言う。

村人たちはその奇跡の様な所業に驚き、そして感謝した。

それからというもの、村の人々はその神を信仰し、伝道師である男の指示の通り、何年かに一度その神の意志を伝える【巫女】を選出し、村奥に建設した神殿に送り出す事になった。

「ただの美談と考えられたらいいんだけどね……」

この話で一番怪しい点は、はやり病を〝瞬く間〟に癒したというその伝道師

病を癒す魔術というものは確かに存在する。

そう、存在するが、一瞬で病を消し去ることなどできない。

まず症状を調べ、その人間のマナの状況を調べ、それからいくらかの準備を施し、魔法薬などとともにゆっくりと癒していくのが医療魔術の基本だ。

一瞬ですべての病を取り払うなど、数百年に一度の大聖人くらいでなければ不可能だろう。

なら、この村で起こったその奇跡とやらは一体どういうことなのか。

「まず、病に見せかけて呪術系の魔術を村に蔓延させ、その後、病を癒すと見せかけて呪文を解く」

「お粗末な自作自演だね……まあ、本当かどうかはわからないけど」

「ならお前は、偶然たまたま病の流行った村の中に数百年に一度の大聖人が奇跡を起こし、その後どの国からも何の音沙汰もなく、村の辺虚に神殿一つ立てて引きこもっていると？」

「……だよねえ」

古くから良くある手法ではある。

此処まで露骨なものこそ少ないが、自分達にとって都合の悪い人間を咎人に仕立て上げて裁き、口を封じる、なんて話は良く聞くものだ。

「……さすがに村全体を巻き込んで、なんて話は聞かないけど」

「今まで他の例が世間に洩れなかっただけだろう。あるいは、今まで誰もやらなかっただけか」

「まあ、本当、これがただの天災だって言うのならそれに越した事は無いんだけど……」
　それならば、後の仕事はちゃんとした国の派遣する魔術師たちに任せられる。
　だからシールはそうである事を願っていた。だが、
「来たぞ」
　ヴェインが心底面倒臭そうにそういう。シールも前を見ると、確かにそこには、〝いた〟
　ゴブリンと同じく人に似た二本脚の立ち姿。ゴブリンと決定的に違う点は、そのからだの大きさが一回りもふたまわりもでかく、そしてその顔面に眼球が一つ眼前すべてを睨みつけるように備わっている点。
「俺の記憶が正しければ、サイクロプスはこんな所に生息していない筈だがな」
「こんな生物が生息する近くに人里ができるわけがないよね……」
　サイクロプスはマナによる暴走うんぬんを差っ引いても十分魔物と評されるほど凶暴であり、凶悪だ。非常に好戦的で、人里を襲う例が何件もある。確かな対処法を持っていない人里は無抵抗に破壊しつくされることもある。
　そんなサイクロプスがこの村の近くにいたとするなら、この村はこのマナの霧の被害を受ける前にサイクロプスの手によって滅んでしまってもおかしくは無い。
　だが、そうはなっていない。
　そもそもこんなに村里の近くにいて今まで村を強襲しなかったこと自体が、おかしい。
　ならこれはどういうことを示すのか。
「確定だ。裏で糸を引いている奴がいる」
　ヴェインは淡々とそう口にし、シールは思いっきり息を吐いて項垂れた。
　分かってはいたけどね、こういう面倒な事態になる事は、とシールは愚痴る。
　サイクロプスは力が強く、凶暴性が高い半面知性が低い。
　だから、幾人かの魔術師が上手く魔術を掛ければ簡単に操る事が出来る。
　実際そうやって戦争利用された事もある
　サイクロプスが誰かに操られ、騎士団や逃げようとした村人とたちを襲ったと言うのなら、色々とある不自然な事態にも納得がいく。

「仕掛けてきたってことかな。そうなると、」
　背後を振り向く。すでにマナの霧の中に紛れ、見えなくなってしまったが、その先には確かに似るナック村が存在する。
「村にも来るかもな。敵が」
　裏に人間がいると言うのなら、今仕掛けてきたのはシール達が分断され、今が攻め時だとその陰で操る者が思ったと言う事だろう。
　ならば村にも魔物たちが襲ってくるだろう。恐らくゴブリンと言った弱い魔物では無い、サイクロプスかそれ以上の魔物が。
　つまり、それをエレナ、そしてセラとバルゴ、の三人で迎撃しなければならないと言う事だ。
　そう、なのだが、
「……まあ、大丈夫でしょ」
「ああ」
　何故か、二人の言葉には、ある種の確信で満ち満ちていた。

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「きた！」
　結界からの伝達が体に伝わるエレナは体を物見台から乗り出し、マナの濃霧へ目を凝らす。
　深い霧の海の中からハッキリと見える影の群れ。
　間違いなく。あれらは魔物だ。さっきまでエレナが相手していた様なゴブリンとはその質も量も桁外れの敵が大挙して押し寄せてきている。
「ま、魔物が来たのか!?」
「避難所に戻って！　　他の人たちにも、その場から出ないように伝えてください」
　指示を与え、ジャンを物見台から追い払うと、もう一度魔物たちの姿を目視する。
　巨体、頭部に巨大な眼球。サイクロプスという名を頭の中におさめた知識の海から引きずり出す。

強靭な肉体と残忍な性格、一つの地域に出現を確認すれば、その時点でそこいら一帯が人払いがなされるくらいに危険な、正真正銘の魔物。ゴブリンとはレベルが違う、人類の敵。

「っ！」

お腹の底で震えが起こった。それが恐怖なのか武者震いなのか、それともその両方か、エレナには判断が出来ない。理性では押さえがきかないくらいに、本能の部分が震え叫ぶ。

「セラさん！」

一先ず彼女に報告する為、屋根の方へと体を向ける、と、

「――え？」

その視線の先を飛び去る影、

エレナの眼前で、焔の髪の乙女が空を飛んだ。

第三十話 地を割る豪傑と舞い踊る紅

「来たか」
　バルゴは眼前に魔物の群れ、サイクロプスの集団を見て、物怖じする事無く一言呟いた
　その数は多く、目に映るだけでも十数体は優に超えるだろう。
　驚異的な数だ。もしこれだけの数が本当に村に押し寄せていたら、一夜も持たずして村は滅びている
「どこの誰だぁ？ こんなバカ仕掛けやがったのは」
　バルゴは笑みを作り、裏を引いている人間の気配を察した。
　普段、バルゴはセラとともに陽気に、気の抜けたように振舞っている。
　だがその本性は、エレナが感じたものとは少し違う。
　事の状況を瞬時に見抜くだけの洞察力、状況を把握する判断力、それに伴う行動力がある
　普段の陽気なふるまいは、緊張をする必要がないからだ；。
　必要があれば、相応の力を発揮する。
　無駄のない行動、それはまさに熟練者としての証明でもあった。
　そして、今、彼は眼前に並ぶサイクロプス達を見て、笑う。
「そんじゃ、やりますかね」
　背負っていたハンマーを取り出し、特に特殊な動作もなく振りかぶる
　まだサイクロプスともかなり離れた距離でありながら振り下ろされた大槌は
「ッガァ!?」
　一撃で大地を砕き、地を割り、岩盤を大地から突き上げさせる
　巨大な岩盤の槍はサイクロプス達をまとめて貫き、屠り去る。圧倒的な破壊力。
　眼前が土煙と、発生した岩の柱で荒れ果てた光景に変わり、バルゴは、

「運が悪いなぁ、お前ら」
　憐れむ。自ら死地へと向かうよう操られたサイクロプス達に同情する
「だが、加減はしない」
　そして、獰猛に笑い、身動きとれずにいるサイクロプス達に二撃目をぶつけた。

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　セラは跳躍する
　眼下、何もかも小さく見えるくらい高い、物見台の屋根の上から跳躍する。
　手に持つのは、もとから携帯していた長槍、華麗な紋様の施された魔槍。
　地面に着弾、普通なら骨を折るどころか粉々のミンチになってもおかしくない高度からの落下を彼女は平然と成功させる。
　そこは集団となっていたサイクロプス達の、ちょうど中央。サイクロプス達は、突如として登場したセラに反応しきれず、その動きは止まっている
　その動きの止まったサイクロプス達へ、セラは瞬時に槍を突き出した。
「ッガ!?」
　一体、その巨大な眼球ごと頭部を貫かれたサイクロプスは、奇声をあげて、絶命する。
　再び意表を突かれ、何が起きたのか理解しきれず停止するサイクロプス、対してセラの動きは非常に俊敏で、的確だった。
　槍を引きぬき、血を掃う。頭上で槍を一転させ、その槍に込められた魔力を開放する。
「【風刃】」
　瞬間、剣が閃き、真空の刃が飛び出し、周囲のサイクロプスの体を断裂する。
　血が飛び交い、連続して巨体が倒れる音が響く。
　響く悲鳴と怒声、仲間が次々に倒れ、サイクロプス達の中で混乱が伝播していく。
　元より知性もあまり高くない、故に唐突な状況を理解しきるだけの頭は無い。
　だが、一つ、知性の低い彼らにも理解できた事実がある。

眼前の赤髪の人間は、敵だという事実が。
その手段は理解できずとも、彼らの本能が叫んでいた。眼前の人間は、危険だと。
故に、サイクロプス達は突撃する。眼前の敵へ。
危機に対し、警戒でもなく逃亡でもなく、攻撃を選ぶのが彼らが魔物と呼ばれる所以だ。
危険は逃げたところで存在することに変わりない。
ならば排除する。その全てを。それでこそ種は存続する。彼らの考えであり、理念だった。
だが、今回、この場において、その判断と理念は、失敗であったと言わざるを得ない。
「っは」
セラは大きく、短く息を吐きだすと、笑みを浮かべる。
それはバルゴの笑みともまた違う、野性味の伴った笑み。
バルゴに比べると、セラはあまり頭の良いほうではない。
教えてもらった文字や数学も、殆ど一時間もすれば忘れてしまう。
自分にとって本当に必要である、と理解できなければ、彼女の記憶能力は働かない。
「お前は野生生物か」
と、文字を教えてくれたヴェインにも匙を投げられたくらいだ。
買い物ならできるようになった、と、セラは胸を張って言うと、彼は首を振り呆れてしまう。
彼女はあまり、頭がよくない。それは事実だ。
だが、だからこそ彼女は自分のできること、可能なことをきっちりと把握する。
ギルドの仕事の詳しい内容は聞いたところでわからないから、聞かない。
だから、今回の依頼に置いて、セラが理解していたのはたった二つの事だった。
村を守れ、
敵を殺せ

この二つ。
「お前たちは〝てき〟だ」
　一言、死を告げる執行人の如く、彼女は一目の鬼達に告げる
「私の〝てき〟だ」
　セラはそう言って、更に表情を変える。それは、
「殺す」
　肉食獣が獲物を見つけ、血が体を駆け巡り、興奮極めたときに見せるような表情だった。
　そしてサイクロプス達は生涯に置いて最初で最後の体験をする。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……凄っ」
　エレナは、眼前のセラの乱舞に、状況も忘れ感嘆と声を上げた。
　敵のど真ん中に突撃し、繰り出される攻撃を踊るようにかわし、隙を縫う様に刺し貫く。
　蝶のように舞い、蜂の様に刺す。ばかみたいな理想の言葉をそのまま体現していく。
　その戦いの様にエレナは感嘆し、彼らを侮っていた自身を恥、そして、現状への疑問がわいた
　サイクロプス、今この村を襲っているあれらの敵が、なぜ群れて行動しているのか。
　サイクロプスは基本的に単独か、あるいは少数で行動する。
　彼らは力が強い分、数に頼る必要がないのだから。
　ちょうど、道中のゴブリンとは逆の状態だ。サイクロプスの習性から考えれば不自然だ。
　これはどういうことなのか？
　だが、その疑問を解く間もなく、事態は動く。
「っ?!」
　皮膚を這うような感触が右腕に走り、エレナは体を振り向かせる。

「三つ目?!」
　維持されていた結界から伝わる敵の気配。
　サイクロプス達が新たに、違う方向から集団でやってきている。
「【メナス！】」
　薄透明な魔力の塊、自身の特質を顕現した力を具現化
　体に鎧を、両手に剣を、背に翼を、顕現させ、跳躍する
「シールっ」
　自身の恩師の名を、まるでお守りのように叫びながら、エレナは死闘へと自らを放り込んだ

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ニルナック村から徒歩数十分。
「ここか」
「ここだね」
　彼らの眼前にあるのは、古い遺跡を改造して完成させたと言う、あの村の神の神殿、
　それはあんな比較的どこにでもあるような村にあるとは思えないほど、巨大で、異様な建築物が連なっていて、どこか、不気味だった。

第三十一話 神殿へ

「……本当、あの平凡な村には不釣り合いな神殿だね」
「製作を指導したとかいう、『伝道師様』の趣味のよさがうかがえるな」
　ヴェインは顔を歪め、皮肉を言い、シールは苦笑し、前方にそびえる神殿を見つめる。
　村人達の信仰する神【ラグナ】というらしい、異国の神の神殿。
　確かに、趣味の悪い代物だ。だが、決していい加減な代物では無い。
　神殿は、正しくその神の経典に基づいて建築されれば、相応の法則が生まれる。ただ適当に豪勢にするのではなく、その神の威光を受けられるような、そんな形に建築していくのだ。
「その法則があるって事は……まあ、完全な詐欺集団ってわけじゃないみたいだね」
「致命的なまでに胡散臭いことには変わりない」
「そだね」
　シールは一度頷き、神殿への入口へと足を踏み入れた。
「急ごうか。騎士団の人たちが始末されたって事は、当事者さん達にももう異常が外に知れ渡っているって知っているってことだからね」
「逃げ出す前に、首根っこを引っ掴んでやる」
「まだ黒幕と決まった訳じゃないんだよ？」
「五月蠅い。まだそんな事を言っているのか」
　ヴェインは無表情のまま殺気だっていた。
　対してシールは先と同じく苦笑のまま、しかし、嫌な予感だけはひしひしと感じていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「せぇえああああああああ!!」
　エレナは魔の剣を振り抜く。
　魔力で底上げされ強大な力を伴ったその剣は真っすぐサイクロプスへと飛んでいく。
　だが、
「ォオフゥ」
「!?」
　避けられる。
　全く脅威と感じていないかのように、軽々と避けられる。剣が、全く届かない。
「何でっ」
　直後、拳が来た。
　魔力の鎧で阻まれ、直接のダメージこそなかったが威力は殺せず、体が跳ね飛ばされる。
　元より軽い体だ。地面に叩きつけられ、紙細工の様に吹き飛んだ。
　眼前でサイクロプス達が嗤っている。無様な此方を更に貶める様に。
　強い。
　強い。サイクロプス達はゴブリンとは比べ物にならないくらい、強い。
　力が強く、瞬発力も高く、反応速度も並ではない。人の姿を模した獣そのモノだ。
　最初の数体は何とかなった。空からの急襲はサイクロプスの隙を丁度良くついていた。
　だから何とかなった。だけど、それから先が続かない。
「【フレイム！】」
　魔力から生まれた焔を炎弾と化し、飛ばす、だが、当たらない。
　サイクロプス達は巨体の割に、俊敏だ。此方の攻撃など見てからでも避けて見せる。
「どうして！ 当たらないの！」

迫りくるサイクロプスを避ける為、地の力を砕く翼で空を飛翔しながらも、叫ぶ。だが答えは何処からも聞こえてこない。
攻撃が当たらない。理解できなかった。それがどうしてなのか。
遠目から、セラの戦いは見ていた。彼女は攻撃を見事に繰り出し、敵を屠っていた。無駄なく、特に考えて攻撃している訳でもなく。ただただ単純に攻撃を繰り出していただけだ。
だと言うのに、自分の攻撃はまるで通じない。
何が違う、彼女と、自分とで、戦い方にどんな違いがあった？
思い返してもまるでわからない。何か違いがあったようには、思えなかった。
「……違う。そうじゃない」
違いが無かったのではない。
違いがあったかどうかすら、自分にはわからないのだ。
彼女と自分との戦いの差、一つの攻撃の合間に行われる微々たる、しかし膨大な要素の一つ一つが、自分には理解できない。マナの存在すら知覚できない子供が、魔術を扱えない様に。
長い時間の中で積み重ねなせる練磨
死と隣り合わせの中で技を見出す実戦
経験。それが圧倒的に足りない。だから、〝何故〟が、理解できない──

「、はっ⁉」

眼前、唐突に何かが飛来してきた。
それを把握する間もなく、エレナはそれに直撃し、バランスを崩し、地面へと堕ちていく。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

ニルニック村、『神殿』内部
不気味な外装に負けず劣らず、その内装も何かを彷彿させるような異様な構成

だった。
　村人でも近づいてはいけないと言うその内装は、人の為の機能を排し、その神殿の構築に必要だったであろう、不気味な石像や紋様が所狭しと乱立し、刻まれていた。
　そんな不気味で、奇妙な空間をシール達は進み、そして人を発見した
「これはこれは、旅のお方ですかな？　【ラグナ】様を奉る神殿へようこそ」
　その人間とは、真黒な司祭風の服を纏った男だった。
　年老いた男で、顔には深くしわが刻まれている。顔に張り付けている微笑で、その皺が奇妙な形に引っ張られている。
　その皺も、笑みも、何処か不気味だ。言葉にはせず、シールはそう思った。
「ええ、町から町へ、村から村へと移動する流浪の者です」
　問いかけにシールは平然と嘘を答える。
「ほう、それはお疲れの事でしょう。どうです？　此処でゆっくりされていかれては？」
「それはありがたいはなしですが、流石に失礼でしょう？」
「いえいえそんなことは」
　そう、老人は笑みを深めた。自分達二人を歓迎するように。
　シールは苦笑を浮かべた。
　陳腐な寸劇だなこれは、と、そう思いながら。
「馬鹿馬鹿しい」
　ヴェインも同じように思っていたらしい。
　表情は変えぬまま、しかしどう見たって苛立ちを隠さずに、腰に掛けた剣を抜いた。
「ど、どうなさいました!?」
「馬鹿馬鹿しい、そう思った。それだけだ」
　老人へと剣を向けて、ヴェインは一歩一歩と迫る。刃先はその細い、血管の浮き出た首へと向かい、近づいて行く。老人は震え、一歩下がり、それに合わせてヴェインは進む。
　傍から見れば、悪人は此方だ。だが、シールもヴェインも既に察していた。
　この神殿を包む異様な雰囲気、複雑に重ねられた結界、生き物の死臭、何より

も、
　この老人から、そして、その周囲から漂う、濃い殺意。
「この茶番をやめろ、つまらなすぎて欠伸が出る」
「な、何の事だか、」
「ああ、そうかい」
　あくまでもとぼける老人の、その答えを聞いた瞬間、ヴェインは剣を突き出した。
　一切の挙動も見せず、最短で首をはねるよう突き出されたその剣は、
　しかし老人には当たらず、
「来たか、」
　神殿を支える支柱の陰から飛び出した、奇妙な衣装の戦士によって阻まれた。
　ヴェインはもう一方の剣を引き抜き、構える。
　シールは魔法陣の施されたグローブを装着し、ゆらりと体を揺らす。
　神殿内部での戦闘が始まった。

第三十二話 背負ったもの

「……う、」
　エレナは、目を覚ました。
　意識を一瞬途切れていたようだ。目を覚ませば其処は地面で、体は力なく地面に寝転がり、顕現させた魔力の鎧は僅か、維持できずに消えかけている。
「っひ!?」
　眼前には、今まさに両手で握った棍棒を振りおろそうとするサイクロプスの姿が、
「ガアァァアアアアアアアアアアアアア!!」
「うぁぁあああああああ!!」
　体を必死に動かして、避ける。腕を僅かに掠り、皮膚が削り取られる。
「【メナス！】」
　消えかけていた鎧を再充填する。幸い、魔力にはまだまだ余裕がある。すぐさま鎧は復帰した。
　だが、
「……く」
　だからどうした。鎧が復帰した所で、どうにもならない事には変わりはない。
　後悔という名の茨、それが心の奥底を蝕む。
　分かっていたつもりだった。自分がこの場に置いてどれだけ場違いなのかを。だが、本当は何一つ分かっていなかった。「何とかなる」なんて、曖昧で根拠なき希望が心の何処かにあったのだ。
「どう、したら、」
　魔術。もっと強い、もっと強大な魔術を使えば敵は倒せるだろうか。

威力だけなら間違いなく倒せる。倒せるが、その魔術を完成する前に、殺される。
【特質顕現】を維持していても、不可能だ。狙いを定めずとも敵を倒せるような大魔術には相応の強大な魔力と、時間が必要になる。目の前の敵、サイクロプス達に対してはそんな余裕もない。
　どうしようもない、という諦めが、甘えが、耳鳴りの様に響く。
　戦いようがない。抗いようがない。何せ敵はこんなにも強くて、自分はこんなにも未熟だ。
　そもそも、此処まで私が命を掛けて、この村を守る義務もない、此処まで来た動機だって曖昧で、未熟だ。
　諦めろ。後は、他の人間に任せろ。そんな甘えが、耳を打つ。
　体から、力が、緊張が抜けていく。心が屈服し始めていた。眼前の困難に。
　今まで敗北を知らず、苦難を知らなかったエレナの心は、それに対して酷く、脆かった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「大したものでは無いな。所詮私兵か」
　ヴェインは血の付いた剣を払い、眼下で崩れ落ちていく兵士たちを一瞥し呟いた。
　彼の周りには数多くの戦士、黒装束の暗殺者の様な恰好をした者達が転がっていた。その得物は様々で、ナイフであったり、長剣であったり、魔道具であったりとしたが、しかしモノ言わぬ死体となっている事には変わりはなった。
「やれやれ、やっぱり強いね、ヴェイン」
　対して、シールもまた、特に怪我をした様子もなく苦笑を浮かべた。
　彼の周りにも多くの戦士が転がっている。ヴェインとの違いはと言えば、殺されてはいないと言うただそれだけの点だ。肉体の根幹をなす魔力を完全に封じ、誰もが意識を失っていた。

「殺さないのか」
「さすがに、皆殺しにすると騎士団さん達が怒りそうだ」
　この任務にはちゃんと国の許可は取っているが、それでもこういう規律やら何やらを超越するような真似をしてよい顔をされるわけがない。
「主犯を捕らえればいいだろう」
　そう言って、ヴェインは神殿の奥を顎で示す。
　確か其処には、あの司祭の恰好をした老人が隠れていた筈だが、今は其処には誰もいない。代わりに、隠されていたのであろう地下へと続く通路がぽっかりと姿を現していた。
「……黒幕確定、あーあー、厄介な事になりそうだ」
「そんなこと分かり切っていただろう、この神殿の内部を見ればな、」
「まあ、ね、」
　神殿に書かれた紋様、石造、様々な用具や呪具、それら神を祭る為の様式的な代物ではなく、正しく魔術を扱う為の、本格的な儀式のモノだった。
　例えばマナを収束する魔術、例えば外部に情報が漏れない為の結界、例えば、
「……魔物を召喚する召喚式、」
「破壊はした。だが、既に召喚された分は、戻せん」
「村の護衛は、三人頼みか」
　シールは振りかえり、村の方角であろう方向を眺める。村が見えるわけがないが。
「セラとバルゴがいる、平気だ」
「エレナもそこに加えて欲しいな」
「信頼しているのか？ あのガキを」
「信頼していないの？ 君は」
　当たり前だ、と、ヴェインは吐き捨てる。
「その要素が何処にある？ あんな、甘やかされまくってるガキの」
「まあ、それは否定しないよ」
　シールは息をついて、首肯する。
「だけど彼女は、賢いからね」
「賢い？」

シールは頷き、笑みを浮かべる。
「自分の立場を、自分が背負ったものを理解できるくらいには、賢い子さ」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「お嬢ちゃん！ 逃げろ！」
声が、響いた。萎え果てようとしていたエレナの体に鞭打つ様なそんな鋭い声に、エレナは覚醒を強いられ、何の声かと彼女は確認した。
「……な、」
それは、ジャンを先頭に置いた村の住民たちだった。
村の男達。ボロの服を着て、各々が武器になりそうな農具を構えて、此方に突っ込んでくる。エレナはその光景が全く理解できず、状況が把握できなかった。
何をしている!? 何故自分以上に力の無い人間が、こっちにやってくる!?
それは無策であり、無謀であり、愚かな行為だった。
「ゲヒャヒャ!!」
サイクロプス達は村人達を獲物としか思っていない。各々がもった棍棒や得物を振りかぶり、一つしかない眼球を血走らせ、舌をむき出しにする。
何故！　と、エレナは叫ぶ。あのままだと死ぬだけだけなのだと。
だと言うのになぜ、彼らはこんなことを、こんな無謀な事を！
その解は直ぐに飛んできた。
「村を守るんだ!!」
叫ぶ、それは連なり、重なり、巨大な咆哮となりエレナを震わせる。
そうだ。とエレナは理解した。それが動機だ。それが彼らの原動力だ。村を、故郷を、自分達の住むべき場所を、帰るべき居場所を守る事が。
無策も無謀も愚かさも、知った上での行動だろう。それが村を守るのに少しでもつながるのなら、と、そう言う意思で彼らは動いているのだ。
エレナはそんな、彼らの意思に再び打ちのめされ、そして気づく、
自分の背負ったモノの、その大きさに。
そして理解する。自分の動機なんて、今この場では何の関係もない事を。

今、エレナは此処にいる。そして彼女は背負ったのだ。ニルナック村の、その全てを。

攻撃が当たらないから、無理？

敵が強すぎるからで、出来ない？

動機が貧弱だから、力が出ない？

その程度のものが！　今背負うもの全てを投げ出していい理由には、ならない！

「お、……おぉ、ぉぉおおお！」

腹底から湧きあがる、意識を腹底から引きずり出し、練磨し、昇華する。

「【我が力の本質よ！ 破滅の神の化身よ！ 顕現せよ！】」

今までセーブしていた分の力、御しきれないと躊躇してきた自身の魔力の本質の全てを顕現する。

「【メナス!!】」

彼女の背から、破滅の鬼神が降臨する

「お、お、お嬢ちゃん!?」

「離れろぉお！」

睨み、怒気混じりの声で動きを止め、退避させる。

「【行けぇ！】」

「ギギャ!?」

同時に、顕現させた鬼神で、迫るサイクロプス達を牽制させる。

やはり当たりはしないが、単純にリーチの伸びた攻撃はサイクロプス達を警戒させるには十分だった。

その隙の合間、エレナは頭を回転させる。

センスで補え、と、ヴェインは言った。経験の貧弱さを、自らの才能を利用し補えと。

今すぐセラの様にはなれない。

彼女のように戦えない。ならば、そうではない戦い方をするしかない

「【神の領域】」

シールとの戦いで身に付けた、広域のマナを収束し、自らに取り組む魔術の構

築。
　村の周囲ではマナが溢れている。その全てを強制的に力を得るまでに収束させる。
　マナの濃霧は薄れ、同時にサイクロプス達の周囲に幾つもの、マナの収束体が発生する。
「――っ?! これは、」
　その瞬間、エレナは気付いた。
　今まで霧のように拡散していたマナが形となるくらいに集約したことで、気がつく。
　周囲のマナが、エレナが収束したマナ達が一つの形になっている事に
　それは、
「……な、なんだありゃあ!?」
　遠目に見ていた村人たちが悲鳴に近い驚きの声を上げた。
　マナが、性別の判断できない、巨大な人の顔になっていたのだ。
　怨嗟を叫び、全てを呪う、恐ろしい、おぞましい、人の顔になっていた。
「……呪い」
　その正体をエレナは理解した。
　これならば、魔物どころか村人たちまで我を失った理由に説明がつく。
　だが、今はそれを考える時ではない。
「支配せよ！」
　鬼神に呼びかけ、エレナはその収束したマナのコントロールを奪う。
　例えその形は何であれ、マナはマナだ。
　そして距離は離れていても、敷いた【神の領域】の結界が操作を可能にする。
　だが、
【ァァッァァァアアアアアアアアアアアアアアアアァァァアアアアアアアア!!!!】
「っ!!」
　鬼神が暴走する。その溢れる力で、全てを破壊しろと叫ぶ。
　眼前の敵たちも、空も大地も、そして人も、全てを破壊しつくせと。滅せよと。

「ぐぅうううぅぅぅううううう!!」
　苦悩では無い。欲望だ。望めば手に届く破滅、それを望む欲望。
　安易な快楽。これに身をゆだねればどれだけ気分がいいだろうか。そんな事を思う。
　だが、それを許せば、全てが終わる。
「黙ってなさい!!」
　咆哮。
　神に与えられた破滅の力、その衝動は自らの意思で喰らう！
「【我が意思を阻む総てを破壊せよ】」
　残る意思の全てを注ぎ込み、命令を下す。
　瞬間、鬼神は発動する。宙を漂う狂気を宿す人面型のマナを魔力で制御し、魔術へと昇華する。同時に鬼神自身が両の手から創りだした閃光を重ね、束ねる。
　破滅の力を秘めた閃光は、至る所でマナから昇華した魔術と連結する。
「【ディストラクション！】」
　連結した光が、サイクロプス達どころか、その周囲全てを喰らう様な強大な魔法陣に変わる。
　そして次の瞬間、それは痛いくらいに白い輝きを持って、爆裂した。
　光はその場に留まりきらず、天へと昇りその光を拡散させる。
　村を覆う霧も払う圧倒的な光がニルナック村の上空でその存在を誇示させた。

うん。これエレナが主役だわ。
さて、そんなことはさておき、この話、一応学園も乗っていっているのに既に半分以上の話が学園から離れている件について。
……ごめん！　だけどもうちょっとで終わるはずなんだ！ 多分！ いやホント。
あ、ちなみに最後の技はＳＯ３の影響もろに受けてます

第三十三話 呪いの根源

　ニルナック村の上空で神々しい柱が立ち上った、丁度その頃、

　村奥の、この事件の元凶ともいえる、【ラグナ神殿】では、

「……これは、」

「……」

　シールとヴェインが、息を殺して、眼前の光景を見つめていた。

　二人の前に広がるのは、地獄だった。

　血と、骨と、怨嗟と、悲鳴、それらが無限に、尽きる事なく満ち続ける場所を地獄と称すると言うのなら、その場は間違いなく地獄だ。足元一杯に散らばる人の体の〝一部〟それは腕であったり、指であったり、眼球であったり、骨であったり、〝子供であったもの〟だったり、ともかく、様々なモノが転がり、死に絶えていた。

「お、お、か、あさん、」

　子供の声がする。幼い少女の、震えるような、声がした。

　様々な、恐らくは放棄されたのであろう〝実験のなれの果て達〟の、その中から、声がする。

　シールは既に物言わぬ〝それら〟を除けて、〝それら〟の下敷きになっていた少女を見つけた。だが、その少女もまた、酷く歪んでいた。体の彼方此方に異様ともいえる大きな傷がつけられ、爛れ、膿んでいた

　見るだけで目をそらしてしまいたくなるような、惨状。

　だが、シールは目をそらさず、虚ろな少女の瞳をじっと見つめ続ける。

「……あ、あぁああ、」

　爛れ、歪み、痩せこけた腕が、救いを求める様に此方に伸びる。

　彼はそれを、ゆっくりと握りしめた。

「、お、お、おが、あさん、どご？」

「大丈夫だよ。もうすぐ会えるから」

　無残な少女の体が揺れる。

　それが笑みを浮かべたモノなのだと、シールには分かった。

「おや、此処まで来てしまいましたか」

　その声は、神殿の上層で出会った、司祭のものだった。

　シールは少女をゆっくりと横たえ、振りかえる。其処にはやはりあの老人がいた。ただし、周囲には既に堂々と戦士達を備え、その表情には人のよさそうな笑みはなく、代わりに冷酷さ剥き出しになって張り付いていた。

「……貴方が、ひょっとして、〝伝道師様〟でしたか？」

「ええ、あの村に救いの教えを説いたと言うのでしたら、私になりますね」

　村を救った、救世主。だが二人の前にいる男は、醜悪の権化のような老人だった。

「成程、では、質問させてもらいます」

　シールは振り向き、渇いた笑みを浮かべながら、ゆっくりと口を開く。

「これは、一体〝何の真似〟ですか？」

「何の真似、とは、随分ないいようですね」

　そう言って、老人は足元に転がる有象無象の血のしみ込んだ地面を踏みしめて、笑う。

「これらは、大切な儀式の結果生まれてしまった犠牲ですよ」

「儀式？」

「ええ、神に至る為のね」

　シールは、眉を顰め、言葉を繰り返す。

「……神に至る？」

「【ラグナ】、我らが神、神にならんとする我らが主の名」

　神殿につけられた名前、それを彼は狂信的な熱のこもった声で呼ぶ。

　ヴェインは馬鹿にしたように鼻で笑い、

「神に〝ならんとする〟、ね。つまりは、神ではないわけだ」

　そう吐き捨てる。

「今はまだ、と、いうことです」

それを老人は指摘し、ヴェインを危うさの灯った瞳でにらみつける。
　周囲の戦士たちも同様だ。沈黙しつつも、殺意がヴェインへと突き刺さっていく。
【ラグナ】それが彼らにとって、神に等しい存在らしい。
　老人は一度首を振ると、再び陰気な笑みを顔に張り付けると、手を広げた。
「我らは【ラグナ】様を導き、そして導かれるモノ。あの方が神に至るまでの道を切り開く、いわば標となるべき存在。その為の犠牲が、〝これら〟ですよ」
　これら、と、老人は指差す先にいるのは、徹底的に痛めつけられた、少女達。
　見るだけで痛ましいその姿を指さして、老人は何ら罪悪感を抱いていなかった。こうある事が当然で、自然なことなのだと心の底から信じ切っている、陶酔しきった顔をしていた。
「もう、いい」
　ヴェインは、一歩、シールを押しのけて前へと進んだ。
　その顔は変わらず、無表情。だが、その全身から溢れる、目に映るような莫大な殺意は全て、眼前で狂喜に侵され謳う老人へと向けられる。
「お前の意思も、望みも、何一つとして興味はない。死ね。ただ、死ね」
　そう告げ、答えも聞かずヴェインは跳躍した。
　両の剣を抜き去り、振り下ろす。だが同時に老人の左右に立つ戦士たちも老人を守る為、前へと立ちふさがった。危うい光が交差し、剣が重なる。ヴェイン、そして戦士達は一瞬膠着状態になった。
　そしてその間を老人は見逃さず、皺を寄せ笑みを浮かべた。
「おお、怖い」
　老人は、そう、とくに恐れた様子もなくそうつぶやくと、
　右手をかざし――ヴェインの足元に隠されていた魔法陣を発動させた。
「!? っちぃ」
「ヴェイン！」
　瞬間ヴェインと、そして司祭の周りにいた戦士たちは同時に光に包まれ、消えた。
　シールは伸ばして、宙ぶらりんになった掌を引っ込めて、大きく溜息を吐いた。

眼前では未だに余裕の笑みを消すことのない「伝道者」の老人が一人。
「ヴェインは何処へ？」
「地獄へ」
短くそう述べ薄ら笑う。シールは不快そうに息を吐くと、老人から背を向けた。
「シール殿、実は貴方の事は私も知っているのですよ」
「へえ、そうなんですか」
部屋に戻り、息絶え絶えになった少女たちに治癒術をかけつつ、適当な相槌を打った。
「ええ、魔術学院の、〝あの男〟の手下であると言う事も、〝貴方自身にまつわる事も〟私達の世界では有名ですからね」
「それで？」
僅かに生き残っていた少女達を丁重に横にして、彼は結界を敷く。治癒と防護の力を付加した結界を包み終えると、シールは前を向いた。
「ですから、そんな貴方には、このようなご相手はどうでしょうか？　平和主義者殿」
彼の背後から現れた、それを、シールは正しく認識できなかった。
それを見た目だけで簡単に表現するのなら、曖昧で、黒く、大きい、霧の塊。
触れれば突き抜けてしまいそうな、〝もや〟、それが老人の背後から現れた。
現れた、というが、しかし、足元を見ても足がない。そこにもただ、靄があるだけ。
「……」
「素晴らしいでしょう!? 我々の努力のたまものですよ！」
その靄は、エレナの【鬼神顕現】にどこか似通っていた。
だが根本は違う。
その半透明の体は、魔力ではなく、マナだ。
万物の根源、自由自在、能動と受動の合間で揺れる力の塊。本来人は、その力を取り込み、自らの内部で魔力と呼ばれる力に昇華させなければ利用できないはずだ。しかし、それはなぜか、魔力として昇華されていない。あれはマナだ。しかも、

「……【呪い】、感情に汚染されたマナ」
　マナが様々な影響を与え、与えられる。
　その場の環境や、そこにいる生物達にも同じように、影響を与え、与えられる。
　それが感情と呼ばれるものでも
　生物の怨嗟、憎しみ、怒り、そういった曖昧なものですらマナは影響を受け、与えるのだ。
　本来ならそれらはそれほど強烈な影響を与えるものではない、はずなのだが、たとえば戦場、多くの人が一定の感情を爆発させるような場所では、そのマナは極端に形を変える。
　その感情に犯されたマナは、異常な攻撃性、暴力に特化した力が発揮される。
　それらは力が強いが、制御が全く聞かない。マナという万能物質がそういう力を得た、その結果、その汚染されたマナの存在する地域は、ありとあらゆる万物が、そのバランスを崩壊させる。
　そして果てにはその地域は生きとし生ける生物が住める状態では無くなり、崩壊する。そうして草の根一つ残らなかった土地を人々は恐れた。そう言った場所はどうしたって戦場や人の血を吸った土地に多くなる為、余計に。
　だから、そうした土地は呼称されるようになる。【呪い】と。
「まずこの村に病という形で魔術を掛け、人々を苦しめた」
「そうです」
「人は苦しみ、そして死ぬ。それはマナに影響を与え、狂わす。【呪い】の様に」
「そう、そして、怨嗟に染まったマナを、変異する前に収束し、貯蔵しました」
「村一つ分の怨嗟のマナ、後は連鎖的だろうね、マナの溢れる大地のラインを少しずつ、その怨嗟のマナに染めていく。徐々に徐々にマナは増大する」
「いやいや、苦労しましたよ。村一つ分といえど、時と共に劣化してしまいますからね。村からも時々、呪いを抽出し、補充する必要があった」
「時折、それと分からぬ程度に村人でも殺したのかい？」
「可能な限り、惨たらしくね。魔物の仕業だと愚かな彼らはそう思ったようですが」

老人はせせら笑うようにそう言い、しかし、と続けた。
「それでも、もっと明確な、定期的な【呪い】の補充は必要不可欠だった」
「その為の巫女だね」
怨嗟の生贄、悲鳴を上げるためだけに捧げられた巫女。その結果が、息も絶え絶えなこの子達。
「その為だけではありませんがね」
「なら、何のために巫女と騙したんだい。そして何のために、呪いを」
その答えを待ち望んでいたように、老人はすぐさま手を払うようにして、黒い靄に向ける。
すると、わずかに黒い靄の塊が〝剥げた〟そしてそこには、
「……っ」
少女がいた。幼く、年も１３，４歳ほどの幼い女の子が靄の中心にいた。
その瞳は見開かれ、しかしそこに意思は伴わず、虚ろなまま沈んでいる。
薄い衣装をまとった体は異様に細く、白い。そして何より、体の所々が、〝半透明〟になっている
それは、物質とマナの狭間で揺れている証、そういった特徴を示す生物は一つ。
「……、強制的に精霊に昇華させたんだね」
「ほお、洞察力は優れておられるのですね？ その通り！」
老人は笑う。まるで自らの自慢を見せびらかして悦に浸る子供のように。
その横で少女は虚ろに、その場に漂う。
半強制的に生み出された、精霊、呪いのマナ魔力に変換できる、肉体と、呪いのマナの合間を彷徨い、移ろう、精霊、つまり、
「【呪いの精霊】」
精霊はその属性にあった〝体質〟をその身に宿す。
水の精霊なら、その身は水と共に在る。そう〝なる〟そうであることが当然なのだから。炎の属性を宿すのなら炎と、土なら土と、共に過ごし、そう〝なる〟
精霊たちは、その属性の力を、人をはるかに超え、引き出すことができる。その根源から。
そして【呪いの精霊】ならば、引き出す力の根源は、【呪い】

「この存在は！　世界の、世界中の怨嗟から力を引き出すことができる！　このようにね！」
　瞬間、真黒なマナが、瞬時に魔力に変貌、黒く鋭い塊が、物質と化し、シールへと襲いかかった。

第三十四話 怨嗟の渦の中で

「成程」
　ヴェインは一人、納得したように呟いた。
　その場所は明かりもほんの僅かしかない、広く、血の匂いの強い部屋だった。
　眼前には、共に転送された、何処か虚ろな黒衣装の騎士たち
　そしてその奥には、
「グガァアァァァアアアアアアアアアアアアア!!」
　膨大な数の魔物達
　異様な光景だった。すべての魔物達は眼を血走らせ、狂気に満ちている。
　よく見れば、顔を隠した騎士たちもそうだ。その眼球は血走り、口端から涎が流れ出る。
　ヴェインがただ一人、この部屋で平然としていた。
「……」
　ヴェイン、彼は寡黙であり、何かを強く主張することはない。
　だからこそ、不可思議で、何処か捉えどころのない人間に見える。
「必要な犠牲、崇高なる目的、神へと至る所業、」
　そう見える彼だが、時折、酷くシンプルな行動をとる。
「そんなものは、何一つ関係ない」
　嫌いな者を、斬る。そんな明快さが、彼にはあった。
「死ね。死ね、死ね、死ね」
　呪いのマナに汚染されたわけではない。自身の内から噴き出る怨嗟を吐き出し

ロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レ
ロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ壊レロ

　呪ワレロ

　呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ

「……私は、」

　地獄の淵に陥る少女は、眼を開く。

　眼前で踊るのは怨嗟、

　見るだけで腐り果ててしまいそうなほど、醜悪で、悲しくて、哀れな、怨嗟の渦。

　決定的に死を与え続ける呪いの、その濃縮体。発狂するほかないような呪いの内で、やはり少女は、そこにいることが当然のように、平然としていた。

「……あ、……あ、」

　いや、平然と言う言葉は正しくない。

　少女は飢え、そして足掻いていた。眼前の怨嗟を、触れるだけで掌まで腐り落ちてしまうような醜悪な怨嗟の塊を求めるように、少女は手を伸ばし、空を掻いていた。

　だが、怨嗟に手は届かない。怨嗟と、その掌の間に奇妙な模様、魔方陣が、彼

女の渇望を阻んでいた。何の為にそれがあるのか、彼女には理解できなかった。しかし、彼女にとってそれは、何故だか分からないけれど、邪魔に思えた。

　邪魔、邪魔だ。この魔方陣が何のためにあるのかは分からないけれど、邪魔だ。

　怨嗟から彼女を守っていると、そう言えなくもないはずの魔方陣を、彼女は憎悪した。

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「どうしました。シール〝先生〟」

　シールは膝をついていた。

　魔力の防護が施されているはずの服の上から小さくない血の跡が広がる。

　僅かに呻くように声を漏らした。苦痛を堪える様に。

　眼前には、呪いを宿した巫女。すでにその少女の姿は見えず、代わりにあるのは人の怨嗟を宿したマナと魔力は顕現化した塊だ。故に彼女は

　その塊は、緩やかに揺らめきながら、徐々にシールへと近づいていく。

　シールは、目を覆い、掌を広げた。

「【封印】」

　瞬間、揺らめく塊に封印術式が施され、体を構成する【呪い】のマナの半分が途切れる。

　一瞬が瓦解した自らの肉体に揺らぎ、黒い塊は体を揺らした

「!!」

　しかし次の瞬間にはその肉体を復元させ、反撃がきた。

　僅かに靄の掛かった黒の塊は瞬時に収束、長く鋭い鞭のようになってシールへととぶ。

　シールは首を捻り、位置をずらす。

　鞭は頬を掠めた。触れた場所はほんの僅かで、回避はほぼ完ぺきだった。だが、

「が、!?」

　シールはその掠めた頬を抑え、膝をつく

触れた部分、そこがまるで敵意を持つかのようにシールの肉体に激痛を叩きつけていた。呪いのマナが無尽蔵の敵意がシールの肉体を蝕み、触れた頬を黒く染め、爛れさせる。
「……ぐ、ぅ」
「素晴らしいでしょう。ただの呪いのマナであるのならこうはいきません」
老人の自慢げな声に不快気に眉を潜めつつも、シールはその言葉の意味を考え、考察する。
「【呪い】の力を制御しているのか」
「未完成とはいえ、精霊ですからね。人が操るにはある程度、配慮が必要ですね」
そう言って、老人は掌を見せた。描かれているのは操作系の魔法陣
「ああ、そう」
それを見て、シールは跳躍した。老人へと向かって。
封印術式の刻まれた手袋を構え、右腕を鋭く手刀のようにして突きだした。
「無駄ですよ」
シールの攻撃はタイミングも、動きも完全だった。
だが、老人との間に黒く不気味な【呪い】の精霊が割って入る
「まあ、そうなるよね」
そのままシールは留まらず、封印陣を振りぬき、叩きつける。
「【封印・マナライン】」
黒い霧の塊、シールが突っ込んだ右腕から放たれた淡い光が封印術式になってマナを吸収。
精霊を包む呪いのマナが徐々に崩れ、再び中に埋もれていた少女を露わにする。
シールの封印術式が、徐々に、少女を呪いのマナから解放しつつあった、が、
「……ぐ」
今度の浸食個所は繰り出した右腕、まるで腐り落ちるかのように、肌も、生物ですらないはずの服も淀む。シールは、しかし手を離すことはなく、そのまま封印術式を展開しながら、少女へと手を伸ばしていく。
そんな、徹底して少女を救わんとするシールの姿を

「……はは、」
　老人は笑う。
「く、ははは！　その少女が呪いのマナの源泉なのですよ！　まだわからないのですか!?」
　瞬間、シールが手を伸ばしていた少女が、目を見開いた。
「っ!?」
　シールを侵食していた呪いのマナがさらに加速した。
　まるで外敵を襲うように、食らうように、シールの右腕からどんどんと食らい尽くす。
「っがあぁ！」
　たまらず、シールは右腕を引き抜く。あと少しで手に届きそうだった少女の姿はあっという間に呪いのマナに覆われ、再び隠されてしまった。
「……っはぁ、」
　シールは、黒ずんだ右腕を抑え、【呪いの精霊】を睨みつける。
　精霊、という存在は人よりも高位だ。神に近い存在だと人々に語られる。
　それは何故か、疑問にする必要もない。
　例えば肉体の性能を崇拝する人間がいるとする。精霊はその分野で人を超えている。
　例えば精神の在り様を崇拝する人間がいるとする。精霊はその分野で人を超えている。
　何か特定の何かが人を超えている、のではなく、
　人が支持するあらゆる部分で、精霊は人を超えている。
「その精霊を相手取って倒せるとでも思っているのですか？」
「倒すつもりはないさ。幼い子供を」
「噂に違わぬ偽善者ですな。それでは、そのまま死んでもらいましょうか！」
　老人が掌を大きくかざし、振り下ろす。それに合わせ、呪いの精霊も大きく動いた。
　呪いの濃霧の凝縮、振り下ろされる害意の塊。
　部屋に満ちた呪いの濃霧がすべて、収束する。エレナの行った【神の領域】よりも遥かにスムーズに、怨嗟の骸が無数に表れる。それらは全てシールを襲いか

かる。
「――――っ」
　一瞬、体を翻そうとするシールの姿はそこにあった。が、次の瞬間には呪いのマナに潰された。一瞬黒いマナの下で何かが抵抗するようにうごめいたが、徐々に動きが止まり、潰れた。
「……呆気のない」
　老人の呆れた、というよりも、見下した嘲笑が部屋に響いた。対して呪いの精霊はただその場に漂うだけで、これといった反応を示すことはなかった。
　残るシールはヘドロのようなマナの内に沈み、徐々に形が崩れていく。老人はその姿を一瞥すると、興味を失ったのか、背を向け、部屋の外へと足を向けた。
「さて、【精霊】の調整を進めなければならないな」
　シールへの興味もすでに失ったのか。老人は精霊に指示を与え、シールの埋もれた呪いのマナの塊から背を向けた。これから先この精霊をどうするか、どうやってあの村を処分するか、そんなことを考えながらシールに対しての意識なんて、これっぽッチも存在していなかった。
　だからこそ、気がつかなかった。背後からシールが忍び寄っていたことに。
「な!?」
　気の緩み、老人の向けた背を、シールは蹴り飛ばし、地面に叩きつける。
　精霊を操る魔方陣を足蹴に、もう片方の足で首根っこを踏みつける。
　老人が首を捻り見つめたシールの姿は、体の彼方此方が爛れたように傷ついてはいるものの、しかし、生きていた。呪いのマナに覆い尽くされていても、死んではいなかった。
　あり得ない事実だった。
「何故!? 何故生きている!?」
「封印したんだよ。僕の中にね」
　シールは平然と、『伝道師』の首根っこを足蹴で押さえなつけながら、笑った。僅かに冷や汗をかきながら、だが平然とそう言いながら。ところどころ朽ちたようになっている魔術式を込めた服の下、肌の上には大きな封印術式が描かれている。
　老人は目を見開き、叫んだ。

「出来る訳がない！　そんな事が！」
　肉体そのものにマナを封印する。技術的にはそれは可能だ。
　だが、その封印の対象は何であろう、呪いのマナだ。触れれば生物であろうと無機物であろうと、朽ちさせ、腐らせ、破壊しつくして、殺す。悪意と害意の塊。そんなものが人の体の内に取り込めるわけがない。
　だというのに、
「知らないよ」
　この男は平然としている。何事もないかのように。
　その時になって、老人は思い出した。シール。魔術学院の教師であり、魔術学院の長である〝あの男〟の下僕、その特殊で〝異常すぎる経歴〟について。
「く!!」
　踏みつけられた掌が蠢く。仕込まれている魔法陣が起動し、背後で漂う呪いの精霊を起動させんと怪しさとともに光り始める。だが、シールの動きのほうが老人の抵抗よりも遥かに早かった。
「【封断・絶剣】」
　平面の剣、物質封印を司る封印術式が老人の手首を喰らった。

第三十五話 人の上に立ちし者

　死ネ

　死ネ

　壊レロ

　壊レロ

　呪ワレロ

　呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ

ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレ
ロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ呪ワレロ

怨嗟、怨嗟、怨嗟、怨嗟、怨嗟、怨嗟

地獄、

少女そして、彼女と地獄を隔てる魔方陣

その隔てが、消えた

『あ、は』

少女は笑みを浮かべ、地獄へと飛び込んだ

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……っはあ」

エレナは膝をつき、息を吐いた。

体が震える。魔力の浪費があまりに激しかった。

力のままに振るったあの破滅の光は、結果としてサイクロプスをせん滅することには成功したものの、代わりに魔力と体力が根こそぎ奪われた。それ以上に意識が掻き乱される。

「お嬢ちゃん」

声に反応して、見上げるとバルゴが巨大な大槌を杖代わりに体を支えていた。

こっちを見る笑みはどこかのほほんとしているが、しかし、今までエレナに見せていたようなものとは少し違う、観察するような色が光っていた。

「……何を見てるんですか」

「いやいや、なかなかやるなエレナちゃんってさ」

「……それは、ありがとう、ございます」

ここにいるということは、サイクロプスをしっかりと撃退して見せたらしい。結界の反応もない。サイクロプスの撃退数は同じはずなのに、彼は全く疲労して

いない。
　なんというか、露骨に実力の差が露わになって、ムカつく。
「……そういえばセラさんは？」
「サイクロプス追っかけてった……」
　駄目じゃないですか。と言おうとしたが、突っ込む気力もわいてこなかった。
「ま、これ以上はサイクロプスも来ねえだろうし、大丈夫だろう？」
「……わかるんですか？」
「ま、勘だ」
「……」
　信用ならねえ、と言いたいが、結界から周囲を探るとサイクロプスの気配が確かにない。どういう勘なんだろう。もしかして人類とは別に特殊な器官が体にあるんじゃないかと、エレナは失礼ながら疑った。
「とりあえずこいつら村に連れて帰ろうぜ？」
　そう言って指差す先は、先ほどサイクロプスたちに無謀な特攻をかました村の男衆。泥まみれになり、あちこち怪我もしているようだが、死人はいなかった。
「お前が助けたんだぜ？ やるじゃん」
「自覚、ありません」
　本当に、サイクロプスたちに翻弄されて、自分の力にも翻弄されて、ようやくこの結果に漕ぎ着けた。それだけだ。誰かを守るとか、意識した覚えがないし、今も自覚できない。
　しかし、
「お嬢ちゃん」
　男たちの中でも戦闘を突っ走ってた男、物見台で水をくれたジャンという男が、エレナに近づいて、力無い笑みを浮かべながら、頭を下げた。
「ありがとうよ。おかげで助かった」
「……いえ、」
　思わず、笑みがこぼれた。
　良かったと。自分が間違いではなかったと、肯定してくれているような気がした。
「さあ、お前ら！　サッサと避難所に帰るぞ！　ほら、今お祈りなんてしても仕方

ないだろう!?」
　そう言ってジャンは他の村の男衆。腰が抜けたように尻もちをついたり、必死に神に感謝の言葉を述べている奴らにはっぱをかけた。
　そんな様子がどこか面白くてエレナは笑いながらも、ニルナック村へと足を向け──
「□□?!」
　異変に気がついた。

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……なんてことだ」
　シールは、恐ろしく顔を顰めていた
　彼の足もとには事の元凶である『伝道者』がいる。村を騙し、救ったふりをして賛美を集め、あらぬ実験に手を染めた男がいる。すでに右腕の遠隔操作の魔方陣はシールによって右腕ごと奪われ、抵抗する術もない。
　だというのに、シールは顔を顰め、頭を抱えていた。
　そして老人もまた、絶望してはいなかった。むしろその表情を歓喜に染めている。
「……素晴らしい」
　老人は瞳を淀んだ光で輝かせていた。
　彼の、そしてシールの目に映る姿、【呪いの精霊】、その姿を、二人は目の当たりにしていた。
「……」
【呪いの精霊】、黒ずんだ、靄にかかっていたマナの姿。不確定なマナの塊であったはずの、姿。だが、しかし、いまはすでにそうではない。目の前にあるあの不確定だった精霊は、
『……ママ、何処？』
　不安定な、頭の内側で反射するような不安定な声。
　細く、黒く透き通った、しなやかな肢体。長い長い、怨嗟を詰め合わせたような長い髪。呪いのマナで構成した、美しく、おぞましい女の姿。

幼い、１２，１３、くらいの少女は、今はまるで二〇前後の恐ろしく美しい女と化していた。

「精霊、本物の、精霊」

精霊。そう、この「伝道師」の施した人を精霊に昇華させたその手術は、

本当のところ、〝完全に〟成功を収めていたのだ。

老人がその精霊を操るために、あえてその精霊への昇華を阻害していたのだ。そのつもりはなくとも、制御しようという意図が、彼女の昇華を留めていた。

だが、シールがその制御術式を破壊したことで、その阻害が解かれ、彼女は昇華した。

人の呪い、人の恨み、生きとし生けるものの醜悪な感情の塊。それらを万物から受け取り、そしてそれを万物に等しく与える慈悲なき上位者に

【呪いの精霊】此処に降臨しせり。

「素晴らしい！」

と、老人は立ち上がり、狂乱したように精霊の元にふらふらと近づいていく。

「待て！」

「素晴らしい……そう、私は間違えていなかった！ 人は昇華できる！」

シールの制止する声も聞かず、老人は一歩一歩と、精霊と化した少女の元へと近づいていく。その、元は少女だった精霊の、酷薄な瞳にも気付かず。

『【呪ワレヨ】』

一言、僅か一秒ほどの短い時間だった。

だが、

「……っが」

老人は全身を呪われ、蝕まれた。

「――っ!?」

何が、起きた？

シールは言葉を失った。何の拍子もない、少女が一言つぶやいただけで、老人の体が爛れた。少なくとも、その力は完全に精霊の領域に到達していることは、今ので証明された。

「……君は、」

声をかける、【呪いの精霊】はゆっくりと此方を振り向く。

シールは生唾を飲んだ。見つめられるだけで冷や汗が出る。
　精霊といえど、ある程度傾向、性格の掴める相手なら、まだ此処まで緊張したりはしない。だが、今の相手は【呪い】の精霊。しかも、人の手で強制的に人間から昇華された不安定な精霊だ。
　少なくともまっとうに向き合って、力押しでどうにかできるような相手だとは思えない。
　可能な限り安全に事が済めば、
「君は、ニルナック村の子だね？」
『……』
　精霊は、ゆっくりと、頷いた。
　言葉は通じる、言葉の意味を理解できている。何より単なる村の少女だったころの記憶がある。それを理解し、シールは一先ず息をついた。言葉が通じるのなら、意志疎通ができるのなら、まだ何とかできる。説得できる。
　勿論気は抜けない。だけど、精霊との交渉なら何度も経験はある、これならなんとか……
「……っ？」
　そう、安堵していた矢先だった。
『──ァ、……ぅ……く』
　目の前の、【呪いの精霊】の様子がおかしくなっていた。
　まるで息苦しそうに、口を開け閉めしながら喉を押さえている。
「ど、どうしたんだい？」
　トラブルは確実に抱えているだろう。元々無理のある話だ。人の精霊への昇華。実際にそう言う話はあるにはあるが、人為的に無理やり引っ張り上げるなんて話は聞いた事がない。それについ先ほどまではあの不安定な靄の様な体だったのだ。
　何か、体にトラブルが発生したのか、シールは彼女の元へと駆けよった。
『……ク、る、……しい』
　のど元を抑え、【呪いの精霊】は口を開け閉めする。まるで水中で息ができなくて悶えるように。
「苦しい……って」

考える。人が苦しむ理由では無く、精霊が苦しむ理由を考慮する。

精霊、精霊だ。人より遥かに高位であり、神に近いと呼ばれる程の強い力を持つ精霊。それ故に病に侵される事はない。人の悩みの大部分は簡単に克服できる体を持っている。

ありえるとすれば、自らを構成するマナを、周囲の環境から吸収できなくなった場合……

「……！ ま、さか!!」

『く、ルしい、……ぁ、あ、あ、あ!!』

精霊が叫ぶ、悲鳴を上げるように、

瞬間、

呪いが

顕現した

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「!? こ、れは……」

そして、眼前に広がる光景に怖気を走らせた。

「【呪い】……どうして此処まで?!」

村に広がっていた濃霧、エレナが先程鬼神の力で吹き飛ばした呪いの霧がいつの間にか元に戻り、どころか更にその濃度をまして、村を覆っているのだ。

いや、ただ覆うだけでは無い。最早その濃霧は、魔術で収束させたときに見せた怨嗟の骸を彼方此方に発

生させ、総てを呪う様な声を上げている。

エレナは驚愕と疑問が入り混じらせる。何故怨嗟が強くなったのか、理解できない。戦争地域、呪いが発生する条件であるそう言った場所であったとしても、此処まで強烈な【呪い】の現象を引き起こす例なんて聞いた事がない。

「っつ!?」

考察、それに耽る暇も無かった。村一杯に埋める呪いが此方を睨み、そして襲ってきたのだ。
「【結界強化・縮小！】」
　村全体を覆っていた結界の範囲を狭め、その濃度を濃くする。
　無理やりその形を歪め、避難所と、この場所にのみ区切る。呪いのマナが弾き飛ばされ、
「な、なんだぁ!?」
「逃げて！　早く」
　エレナは結界に意識を集中し、村人たちを追いたてる。
「バルゴさん！　セラさんは!?」
「あいつは大丈夫だ！　いいから急ぐぞ」
　けがを負った人間を背負い、バルゴは駆け出す。彼に次いでエレナも、結界を徐々に狭め、強くしながら後退していった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……最悪だ」
　シールは、自らの体に封印術式を張り巡らせながら、呻いた。
　呪い。呪いだ。呪いの渦が、人々の怨嗟の感情を喰らい、そして自ら飲まれ、暴走したマナの結晶がシールの目の前で、異常に渦巻き、狭く暗い部屋一杯に埋め尽くしている。
『……アぁ、くるしく、ない』
　その怨嗟の渦の中、中心に坐した【呪いの精霊】は嬉しそうに喉を鳴らした。
　先程まで苦しそうに顔をゆがましていたと言うのに、今はそんなそぶりも見せない。
【環境強制】
　精霊は、その体の特質状、自らの気に入った土地、場所を選び、其処に住みつく。そしてその場所を維持する為に、自らの膨大な力を利用して環境を強制する。
　学院の裏の森、湖に住まい、エレナとマリを森の外へと導いた精霊が良い例

だ。
　だが、当然、人にとって有害な方面で環境が維持される場合もある。
　例えば炎の精霊。強烈な焔の力を自らの糧とする彼ら、彼女等は、例えば死にかけていた火山を活性化させ、派手に爆発させる。自分の住みやすい環境を整える為に。自分の体を構成するマナを手に入れる為に。
　人より上位の存在である精霊が、自分が生きる為に辺りの環境を一変させる
　人はこれを【天災】に位置付けている。
　もし、発生した場合、止めようがないし、防ぎようがないからだ。
　そして、
「……」
　今、目の前に起こっている現象もそれに当てはまる。
【呪いの精霊】が、自らが維持し易い環境を産み出す為に、大地に長き間蓄積されていた、ありとあらゆる生物の怨嗟を、呪いを、引き起こした。本来はそのまま眠る筈だった感情の渦を巻き起こした。
　それは、それはやむなき事だ。
　人が自分の住みよい環境を維持する為に、森の木々を切り倒し、其処に住む生物を追いだすのと同じだ。【呪いの精霊】に昇華した彼女は、精霊の力でそれを実行したに過ぎない。
　だが、
「このままだと、ニルナック村まで崩壊する……！」
　既に、この狭い地下の個室も、瓦礫が腐り、崩壊し始めている。無差別に攻撃意思を向ける呪いのマナが溢れかえった影響だ。そしてその崩壊はこの場に留まる様子は見せない。むしろ加速し、拡大している。
　下手すればニルナック村、いや、それを通り越してゲナの町まで被害が及ぶ。
　精霊の力だ。巻き込みかねない。
　最早シールには選択の余地はなかった。
「【封断・偽剣二式】」
　二次元の剣、マナの構成を奪う長剣を構え、シールは覚悟を決めた。
「止める」
　構え、彼は原初の眷属へと剣を向けた

第三十六話 怨嗟の根源を封印せよ

「……はっ」
　ゆっくりと、大きく息を吸い、吐く。その空気すら腐敗したようなにおいがする。呪いのマナの汚染で、その空気すら害意に満ちている。それを一々封印術式で封じ、清浄な空気のみを取り込む。
　汚染されたマナを取り込まないために自分に施した全身の封印。だが、その結果としてマナが体内に取り込めなくなっている。呪い、感情のみを排除することができるほど封印は都合がよくない。
　というよりも、空気の汚染が進みすぎており、すでに人体に取り込めるレベルを超えている。
　武器は今、片手にある封印術式の剣のみ。
　効力はマナを構成する全ての強制封印。
　しかし……だからといって、どうする？
　彼女は別に、こちらに戦いの意思を向けているわけではない。
　事実、【呪いの精霊】はこっちに視線すら向けない。楽しそうに居心地よさそうに、ここで拷問を受けた子供たちの、血と怨嗟のしみこんだ地面で横になっていた。
　今、シールを襲っている呪いの渦は、ただ、彼女が生きているだけで起きている現象にすぎない。
「……だけど、それで、これか」
　天井が崩れ、落ちる。腐敗が進む。崩壊が始まる。崩れ去った先には何も生まれない。
　ともかく、彼女に近づき、現状を把握させなければ、
「……っく」
　一歩、二歩三歩、距離を詰める。足元のレンガは風化し、崩れかける。息を吸

うだけで痛みが全身に纏わりつく。封印術式も通過し、体を傷つける。
　わかっていたが、たちが悪い。空間のすべてが痛みを与えてくる。
「聞こえているかい。お嬢さん」
　声をかける。血のしみ込んだ床に体を寄せる精霊に向けて。言葉は通じるはずだ。ならば、説得すれば、ある程度状況は改善するかもしれない。そういう希望を込めてシールは声をかけた。
『……』
　精霊はどこか不機嫌そうにこちらに視線を向ける。
　言葉は、やはり通じた。ならばもう少し、
「自分が今どういう状況なのか、理解できてるかい？」
『……』
　返事はない。だが不審そうな表情に顔を変えた。記憶がはっきりしないのだろうか、不思議そうに自分の体を見詰めて、首をかしげている。
「君は今、精霊、人とは違う存在になっている。分かるかい？」
　問う。だが聞こえているのかいないのか、首を傾げたまま、此方に視線を向けることなく濁った瞳の色で、ただただじいぃっと、自分の体を精霊は見つめ続ける。
「今のままだと、君は周囲に害を与えてしまう。此処だけじゃない。君の故郷のニルナック村も、それ以上の場所にだって危険が及んでしまうんだ」
　通じている。言葉が通っていると信じて声をかけ続ける。信じなければ、どうしようもなかった。
　シールは、術式の剣を静かに構えて、息を吐いた。覚悟するように
「今から君を止める。だから其処でじっと──」
　最後の予告を告げる、その時だった。
『───あ、は』
「?!」
　瞬きすらしていなかった。だと言うのに、刹那、精霊はいつの間にかシールの眼前まで距離を潰し、そしてその黒い掌でシールの喉を掴み、締め付けた。
「っが」
『あははははははははははははははははははははははははははははははははは

はははははははははははははははははははははははははははははははははははははは!!!!!!』
　狂ったような笑い声が脳を揺さぶる。
　細く長くい指が、まるで絡みつくように首を締め付ける。
　その締め付けた指の先から伝わる敵意、体中を蝕む【呪い】が封印術式を徐々に食い破り、肉体へと喰らいつく。背筋も凍るような、息も止まるような痛みが体中を走り出した。
「な、んで？」
　目と鼻の先まで顔を近づける精霊、その表情は──口の端が裂けるような、笑み。
【呪いの精霊】その生物としての本能に飲まれている
「……っが、がぁぁああ！」
　馬鹿か、と、シールは自分を罵った。
　記憶があろうが、言葉が通じようが、彼女はすでに単なる村娘ではない。歪んだ人間の手で精霊という、別の生命へ無理やり昇華させられたのだ。
　その根本は人と違うモノ、身も蓋もない言い方をすれば、バケモノだ。
　意識から外れていた。単なる少女だった頃の姿を見たからなのか意識から外していた。
　今まで自分が向き合い、戦ってきたような、人外のそれと同等に見なければならなかったのに。
　痛みをこらえ、シールはマナの封断剣を振り上げ、振り下ろす。
　自分を掴むその腕の力を奪い取るため、封印の剣を──
「?!」
──その、片手に握っていた封印の長剣が、黒ずみ、その機能を失っている
　術式の維持に失敗して、崩壊したのか？
　いや違う。
　封印の術式そのものが、呪われ、腐り、破壊されたのだ。
「な……」
　ありえるのか。単なる術式だというのに、【呪いのマナ】は浸食できるものなのか!? いや、事実、目の前で起こっている現象はそうだと言っている。

無差別、何一つ例外を許さず破壊しつくす非情のマナ。
危険すぎる。これは、この世界の理からも外れた、慈悲もなにもない暴力だ。【天災】ですらない。これは完全に、世界への敵対となる能力だ。
封じなければ、何としても、何があろうとも。さも無くば彼女は、本当に世界の危機と化す。
「……か、は、」
かといって、今、この場を逃れる手立ては、ない。
痛みが全身を侵略する。視界がチカチカとぼやけ、呼吸することすら難しい。そんな自分の姿を【呪いの精霊】はうっとりと、嬉しそうに、楽しそうに見つめている。
此方の苦しみを吸収し、糧にしている。
やばい、死ぬ。
死ぬかもしれない、ではなく、死ぬ。
そう、自覚しそうになったそのときだった。
「砕け散れぇえええ!!」
ヴェインが、大量の瓦礫の山、武器を握りしめたまま絶命した戦士の死体、牙をむき出しにしたまま転がる魔物の生首、それらの死体と瓦礫と山と共に、部屋へと降り立った。
『――っ!?』
「ヴェ、イン、」
精霊、そしてシールが一瞬、その豪快な登場に息を飲み、絶句する。
ヴェインは幾体もの大型の魔物の上に立ち、一瞬周囲を目視する。そしてこちらを、精霊に飲み込まれ連とするシールの姿を見つけた瞬間、その魔眼を発動させる。
「【わが眼前の全てを支配せよ】」
両の剣を引き抜き、眼光を光らせる。強大な魔力がヴェインの肉体を纏い、同時に狭いこの部屋を充満していた呪いのマナが彼を避けるように割れる。
ヴェイン、彼の瞳に秘められた能力は、眼前のマナの〝支配〟。吸収でもなく、操作でもなく、支配。自らの意志のままに、自らの望むままに完全に支配する、原初の上位者。

『っ!?』
　自分の構築した領域が崩壊し、精霊は驚愕に顔を歪め、
「失せろ！」
　その刹那のうちに、ヴェインはシールと精霊の懐に飛び込み、剣を振りぬく。
『あ、あぁぁぁああああああ！？！？』
　両腕から離れ、マナの構成が解け両手が砕け散る。同時にシールは崩れ落ち、その彼の首根っこを引っ掴み、ヴェインは後ろに飛び、下がる。
「……っか、は……は、ありがとう、ヴェイン」
　震える体を押さえ、爛れ、痛みに侵略された体を押さえ、息を吐く。
「何をしているんだ、お前は」
「すまない」
　歯を食いしばり、シールは自嘲気味に、震える唇を笑みに歪めた、が、ヴェインはシールの姿を見ようとはせず、ただ目の前で不思議そうに首を傾け失い無くなった両手を見つめつづける精霊を、眺めていた。
「で、あれはなんだ」
「馬鹿が村娘の巫女を無理やり施術して作った人工精霊」
　ヴェインは舌打ちをした。その眼前の彼女が、果たしてどれだけこの世界の理不尽によって生み出された被害者なのかを理解したからだろう。
　だが、シールと違い、迷いはしなかった。
「【支配せよ】」
　一言、魔眼が輝き、視界の全てを支配する。向けられた視線の先にいるのは、【呪いの精霊】。その肉体をマナで構成されているというのなら、その能力も及ぶ。
　だが、
『ァァァァァァアァァアアアアアアアアアアアアア!!!』
「っ！」
　魔眼の支配を逃れ、精霊は魂を震わす咆哮をする。
「純粋にマナだけで肉体が構成されているわけではないか」
　精霊は魔力を自らのなかで構築できる。だからこそ妖精よりも高位の存在になっている。その為ヴェインの支配力は弱くなり、そこから逃れることもできる

のだろう。
「だが、それでも完全に逃れられやしない、シール！」
「うん、」
　ヴェインの支配によって呪いのマナが弾き飛ばされ、正常なマナが元に戻っている。
「【偽剣】」
　生み出した剣を構え、跳ぶ。
『【呪わレロ！】』
　精霊は更に咆哮する。同時にシールの周囲のマナが汚染、踏み抜く大地が腐り、ひび割れたレンガの先から、大地の奥底から封じられていた怨嗟が、視覚にすら映る真っ黒なヘドロが溢れ出す。
　シールは剣を振るい、封印術式で怨嗟を封じ、新たに剣を生み出し跳ぶ。狭い部屋を縦横無尽に飛び回り、距離を詰める。
『っあっぅぁぁぁああああ!!』
　再び、再生した両手が飛び出す。だがシールも、すでにその攻撃は経験し、そして見抜いていた。
「【封印！】」
　封印術式を楯にして、両腕の突撃を抑える。ほんの一瞬でその盾は腐り果てるが、その次の瞬間には、シールの剣はその両腕を喰らい、封じる。
　更に間をおかず、剣を構え、鋭く突き出す。其処に迷いない。【呪いの精霊】の体の中心を捕らえた。
「ぉぉぉおおおおおおおおお!!」
『ぃぃぃいぃいいいいいいいいいぁああああああああああ!?』
　悲痛な悲鳴に顔を顰めながらも、剣を更に深く押し込む。封断剣を基点に内部の呪いを封印し続ける。だが、それは同時に【呪いのマナ】の侵略も意味していて、徐々にその剣の形態すら維持できず、崩壊していく。
『きえロぉぉオオおお！』
　精霊は再び両手を再生、どころか、異様な輝きを見せながら、本来の人としての形状を歪ませる。それは太く、巨大で醜悪な触手のようにもみえた。
　それと同時に。彼らのいる部屋が、いや、この神殿そのものが振動し、まるで

その全てを飲み込むかのように怨嗟が溢れ出る。既に部屋は部屋としての形も保ってはいない。床も壁も天井も、何もかもが呪いに喰われ、怨嗟を叫び、そしてシールに向かって襲い掛かる。
「邪魔を、」
　だが直後、シールの背後から飛び出す威圧、魔眼の光、
「するな!!」
　ヴェインが繰り出した双剣の軌跡が触手を弾き飛ばす。支配の魔眼に従いその双剣にマナが乗る。軌道に沿って繰り出された波動が怨嗟を破壊し、脆くなった壁をぶち壊し、部屋を破壊し尽くした。
　シールは精霊の反撃にも、ヴェインの助けにも反応は示さない。何があろうとヴェインがいると、彼は信頼し、だからこそ揺らがない。迷わない。封断の剣を手放さない。
　だが、それも限界が近くなっていた。封断の剣はその全てが浅黒く変わり、枯れた木の葉が崩れるように、シールの手中から消えて行く。
「まだだぁ!!」
　だが、それでもシールは躊躇わない。封断の剣が切り裂いた精霊の体、その傷口に向かって、その手刀を叩き込む。貫手は呆気なく精霊の体を貫き、背中を突き破る。
『あぁ、あっぁァアァァぁああああああああああああああ!!』
　痛みに絶叫する精霊、シールは血が出るくらいに唇を噛みしめて、叫ぶ。
「【封断・四連！】」
　直後、精霊の体の内側から突き破り、四枚の封印術式が飛び出した。
　一瞬それらは瞬き、そして精霊の体に再び溶け込む。痛みに悶えていた精霊はその瞬間体を止め、目を見開き、そして、
「……これは、」
　その全身の、黒く、仄かに薄く透明だったからだが、徐々にその実態を失い、構成力を失う。そして暫くしすると、その形を解き、空中へと霧散した。
　後に残るのは、全身を爛れさせて息を吐くシールと、その腕で眠り、倒れる幼い少女。
「どうやって元に戻したんだ？」

ヴェインは此処で初めて驚愕した様な、そんな表情を造りながらシールに問いかける。彼はてっきり、あの呪いの精霊そのモノを、そのまま封印してしまうものだと思っていたのだ。
「封印する時、精霊の体の中に、この子を見つけたんだ」
　正確には彼女の魂と言ってもいい部分。精霊となりその体の構成すら崩れ去ったが、人を素材とした以上、その根源たる部分だけは残っていたのだ。
「だからその部分をベースに、体を構成していた【呪いのマナ】の総てを封印した」
「精霊としてではなく人として、そのガキが持ち直した？」
「……まあ、結果だけ見るのなら、まだ分からないけど」
　下手すれば、このまま目覚めない可能性も十分ある。
「おい」
　と、ヴェインは不機嫌そうにシールの頭を引っ掴んだ。
「なにをするんだ」
「何故お前がそんな顔をする」
　そう言われ、シールは自分の顔を触れてみる。その表情は、醜く歪んでいた。
「……まあ、ねえ」
「鬱陶しい、見ているだけで苛々するから止めろ」
「容赦ないなあ……ヴェイン、は、」
　相も変わらずなその友人の物言いに、何処か安心した。だからなのだろうか。
「、おい！」
　全身を包む強烈な痛みも、容赦なく子供を叩きのめした罪悪感も何もかも放り出して、膨大な疲労に飲まれながら、シールは意識を手放した。

これにてひとまずこの事件は決着です……長かった
とりあえず次の話か次の次辺りで学園に戻れます……いや本当に長かった（泣
あ、ＯＰ追加したので、よろしければどうぞ、

第三十七話 各々のその後

「……以上が、今回ニルナック村で起こった事件の顛末です」
　シールがそう言葉を切ると、それを黙って聞いていた学院長、見た目だけなら美少年な百歳過ぎのバケモノ老人が、やれやれとため息を吐いた。
「何一つとして良い事の無かった話だね。今回の事件は」
「ええ、全くです」
　シールは未だに体中に残るアザ、呪いの跡を擦りながら大きく息を吐いた。未だに痛み続けるその後はあの時の戦闘の凄惨さをシールにありありと思い出させてくれていた
「その後のニルナック村はどうしたんだい？」
「混乱は続いていますが、一応は元の生活に戻るよう努力は続いています。騎士団も村に入れるようになりましたから、村の復興も、混乱を抑える警護も彼らに任せました」
「うん。そういう仕事は彼らのものだからね」
　今回の件は事件の規模も犠牲者の多さもかなりのモノだった事もあって、腰の重い騎士団も動かざるを得なかった。というよりも、この事件そのものを未然に防げず、また、拡大も抑えられなかった事もあって一部責任を追及されてもいる様だ。
　しかし、シールにとってはそんな事はどうでもよかった。それよりも、
「子供達は、どうでしたか？」
　問うと、彼は何時も口元に添えている微笑を歪めた。
「ミイラ化してしまったのも含めて十人の死体を発見。生き残った子どもたちもその内数人が死んでしまったよ。残る子供達も回復には時間がかかりそうだね」
　呪い、怨嗟を〝絞り取られた〟子供たち。痛めつけ、苦しめられることそのものを目的に苦しめられ続けていた子供達は、皆死んでしまっていた。生き残って

いたのは【呪いの精霊】とする為に術式を施され、失敗し、捨てられた子たち。
　そして、成功した【呪いの精霊】そのものとなった、あの子。
「学院長、彼女はどうなりましたか？」
「【呪いの精霊】かい？」
　その言葉を聞くと、シールの顔も歪む。だがそれを学院長が制した。
「君がそんな顔をする必要はないよ」
「別に、自己嫌悪している訳ではないですよ。ただ、」
　村人達が、そして子供が苦しみ、そして死んでいった事実は、苦痛だった。
　学院長は、シールのその心情を読み取ったのか、「ああ、御免」と告げて
「……【呪い精霊】はメリア先生に任せているよ。彼女はあれで、準聖人並みの力はある。まだどうすれば回復するかもわからないから時間はかかるけどね。でも助かるよ」
「そう、ですか」
　ソレを聞いて、少しだけ安堵の息をシールは吐いた。その姿に学院長も微笑を浮かべ、しかし次の瞬間にはその笑みを掻き消し、
「さて、それじゃあ、その【ラグナ教】の話に移ろうか」
　空気が若干重くなる。
　今回の事件の元凶。あの村で、単に一時的に名乗っていたものなのだと思って調べてみればそうでは無く、実際に、あの組織は【ラグナ】を神と仰いでいるのは、事実だった。
【呪いの精霊】を封印した後、気を失ったシールに変わってヴェインが残る兵士や魔術師の始末と一緒に辺りの書類等諸々を回収しておいてくれていた。しかし、
「正直に言えば、良く分かりません。あの場に残されていた資料はその全てが【呪いの精霊】の創造に関する物でしたから」
　ただ、とシールは言葉を続け、
「【呪いの精霊】は、完成ではあっても、完結ではないようです」
　そう。【呪いの精霊】は、あのニルナック村を利用した実験としては完成していた。しかし彼らの目的では無い。
「完結ではないか……何が目的なんだろうね【人造精霊】だなんて」

何気なく、学院長は部屋の隅へと目をやる。
　其処には一人の男がいた。【ラグナ教】、あの村の救世主の〝役〟を果たしていた老人が、部屋の隅っこで蹲っている。しかし、その瞳には光は無く、ただ何をするでもなく、茫然とその場にいるだけの様に見えた。
「……あの男も、殆ど何も知らなかったみたいだしね。隠し事はないよね？」
「封印術を施していますから。嘘はつけませんよ」
　シールが施した封印は、【感情封印】
　彼の施した術で老人は喜怒哀楽を失った。だから、彼には何かをする結果得られる喜びも、自分の主に準じて得られる快楽も無い。逆に誰を裏切ろうと、どんな失敗をしようと、嘆き悲しむ事もない。
　感情が無い以上、仲間や自分の主への裏切りに対しても何ら感情は動かさない。
　この【感情封印】は残酷な、まっとうな魔術としても禁術扱いを受ける危険な術ではあったが、シールは使用に躊躇はなかった。
　シールは彼自身の平和を破壊しかねない悪意に対して、容赦を知らない。平和を愛する彼は、その平和がどれ程脆く、貧弱なものなのか知っていた。
「あらかたの情報は引き出しましたから、後はもう、」
「そうだね、裁きは騎士団に任せよう……しかし」
　そう言葉を切って、学院長は掌で口元を隠して、眉を寄せた。
「今回の事件に思い当たりでも？」
　そりゃいくらでも、と、彼は苦く笑う。
「……流石に長く生きていると、似たような事考える馬鹿は何人も思い当たるけどね……数十年前にも世界征服たくらんでた馬鹿はいたし、君が生まれる少し前も似たような奴はいた……ただ」
「ただ？」
　しかし、彼は言葉を続けなかった。何かを思い、悩むように額をとんとんとん、と指で叩いて、己が体験してきた長い長い年月をさかのぼる様にしていただけで、これ以上、この件に言葉を続けなかった。
「……とにかくまだ捜査するにも追求するにも要素が少なすぎる。国王にもこの事は掛けあって、調査を進める様に促すよ。これだけの被害者だし、直ぐに対応

してくれるよ」
「そうです、ね」
　シールは立ち上がり、学院長は何時もの笑みを向け、
「お疲れ様、と、言っておこうか。今回は苦労を掛けた」
「何時もの事でしょうに気を使わないで下さいよ、気持ち悪い」
　ああ、そうだ、と、シールは言って
「リーン先生はどうですか？」
「サンドワーム単独撃破に成功して、地元住民から勇者扱いされてそてんてこ舞いになって帰ってきたよ。珍しくノイローゼになっているから見舞いに言ってあげて」
　シールは苦笑しながらも手を振り、部屋を後にした。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　学院長の、その豪華な扉を閉じて、前を向くと、そこにはエレナが待っていた。
「やあ、」
「うん」
　挨拶も適当に、二人は人気の少ない廊下を歩いていた。と言っても、特にこれと言って二人とも目的地を決めていた訳ではなく、ただなんとなく、立っているだけでは息がつまりそうだったから、歩いていた。
　廊下のすぐそばでは、村へ出発する前とやはり変わらず、学生たちがその年齢問わず各々の楽しみを享受していた。古くなったボールを蹴って遊んだり、本を読んだり、お茶を飲んだりと、だ。
　つい先日、あんな恐ろしい死闘があったのに、学園に戻れば平和が平然とあった。
　それがエレナには不思議で、だけどそれがとても大切に思えた。
　平和は大切なモノ。子供の頃から聞かされたその言葉の意味が始めて理解できた気がした。
「体の方はどう？ だいじょうぶ？」

互いの沈黙を破り、先に言葉を掛けてきたのはシールの方だった。
自分の方が遥かに重症だった癖に、と言いたかったが、エレナは言葉を飲んで
「ええ、別に、大きな怪我はしなかったから」
「うん。よかった」
そう言い彼は笑い、それさえ知る事ができれば満足だったのか、言葉を続けなかった。
さて、何を言おうか。エレナは考える。
別に何も言わなくても、彼は不平を述べる事も、不快に思う事もしないだろう。そう言う男だ。しかし、エレナは言葉を交わしたかった。何を言えばいいのか分からないけど、言うべき事も分からないけど、ただ、言葉を交わしていたかった。
しかし、こういうとき上手く言葉を作れない。人とのコミュニケーションを怠ったツケだった。だから必死にエレナは頭を絞って、たどたどしく言葉を紡いだ。
「予想と違ったわ」
「何がだい」
うん、と、一度エレナは頷いて、
「何時も怪我して帰ってくる貴方を助ける決意をしたワタシ、慣れない依頼に苦戦しながらだけど、貴方を助けて、見事に凱旋、なんて、甘い事考えていたのよ」
シールは黙って続く言葉を待っている。エレナは思いきる様に言葉を吐き出す
「でも、実際は足引っ張りまくりで、ぐだぐだして、自分が役に立っているのかもあやふや。結局貴方はボロボロだし……何しに行ったのかしらね」
考えて飛び出した言葉に、エレナは自嘲する。あまりにもそれがマイナス思考だったからだ。しかし、自身の余りの油断に対して、後悔があるのも事実だった。
しかし、そんな彼女にシールは静かに笑みを向け、言葉を掛ける。
「だけど、君のお陰で助かった人たちはいたよ」
無謀にも村を守ろうと飛び出した男達、彼らをエレナは必死で守った。無様で酷く強引な力技ではあったけれども、それだけは事実だった。

「……ええ、そうね」
「君は僕に付いて行った事を後悔している風に言うけれど、僕は君が来てくれて良かった。君のお陰でたくさんの人たちを助けられたんだから」
　来てくれて良かった。こう言ってくれるのは彼の優しさなのだろう。
　だけど、彼らを助けられた事は、卑下する事ではないというのは事実だった。彼らは感謝してくれていた。ありがとう、助かったと。だから、その気持ちを否定するのは、それこそが間違いで。
　だから、と、エレナはもう一度、気持ちを改める様に頷いて、
「あの人たちを助けられた事は、誇りに思うわ」
「うん」
　エレナの言葉にシールは頷き、何時もの様に微笑みを浮かべた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「ははは！　お前も飲めよ！　ヴェイン」
　やかましい、どんちゃん騒ぎが頭に響く。カビ臭いソファーで横になっていたヴェインはその荒々しい声に無理やり覚醒を強いられ、顔を顰めながら体を起こした。
「何の騒ぎだバルゴ」
　ヴェインを無作法に起こしたバルゴは酒で赤らめた顔でにんまりと笑いながら、その片手に握ったものを見せつけてくる。見れば、それはぎっしりと金貨の詰まった袋だった。
「ハハハ！　サンドワーム討伐に行っていた奴らが帰ってきたんだよ！」
「……ああ、随分早かったな」
「すげえ姉ちゃんがぶっ飛ばしちまったんだと！　お陰で大儲けだ！」
　アルコールに脳を浸食された彼の説明は全く要領を得ないが、兎に角凱旋した仲間達の中にはけが人は出たが死人は出なかった事。怪我したその馬鹿も今は仲良く酒を飲んで騒いでいると言う事は分かった。
「全員でまとまった金が入ったからな！　宴だ宴！　やらいでか！　お前も騒げ！」
「煩い、全く」

ヴェインは呆れ顔でヴェインの手を払い、息をついた。近くの机に置かれていた水差しから水を貰い、飲み干すと皆で暴れて散々足る有様になりつつある酒場を眺め、もう一度息をついた。
「お！ 大将！ 大将だ！」
「リーダー！」
「ヴェイン様！」
「師匠！ かっこいいっす！」
酔っ払い、顔を真っ赤にさせたギルドの仲間たちが勝手な呼び方でヴェインのことを呼び、咆哮する。その言葉はバルゴと同じように、酔っぱらっているのかメチャクチャだ。しかし彼らが誰しもヴェインを支持していることだけはわかった。
「……はあ」
その期待の視線を受けてヴェインは頭を掻いた。そういった視線を受けることを戸惑っているようだった、が、その期待に耐えきれなかったのか、かっくりと頭を下して、
「皆」
どよめく。だれしもが彼の言葉に耳を傾け、集中する。
「ご苦労だった。騒げ、笑え、楽しめ。友と共に。それが幸せだと噛みしめろ。以上」
短すぎる演説に雄たけびを上げる。
それを見て、ヴェインは無表情に頷き、しかし何処か困ったような顔を浮かべた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

ヴぇインが起床してから、宴は更にそのペースを上げ、最早何を祝っているのかも分からない大混乱の模様を見せ始めていた。が、主役のヴェインはその隙を見て、酒場を抜け出ていた。

元々、彼はああいった雰囲気は得意では無かった。仲間達も、そう言った馬鹿騒ぎも嫌いではないが、上手い付き合い方が分からなかった。
「ヴェイン」
　一人になれた、と思った途端に声を掛けられ、彼には珍しく、驚き、きょどる。声の方へと視線を向けると、酒場の屋根の上に赤々と月光の光に当てられ輝く髪の少女がいた。
「セラか。何をしている」
「月、見てる。奇麗だ」
　見上げつつ、笑う。心の底から嬉しそうに。ヴェインもその笑みにつられ笑う。
「お前は変わらないな」
「ヴェインは変わったのか？」
「さあ、わからないな。自分では」
　そう言い言葉を切り、彼は目を閉じる。その姿は、何時も憮然とする彼には何処か似合わない。
　しかし、そんな彼の、普段と違う様子を知ってか知らずか、セラは笑い。
「別に大丈夫だぞ？」
「何がだ」
「……何がだった？」
「お前は鳥か」
「鳥か！ かっこいいな！」
　馬鹿だ。と、思いながらもヴェインは、笑った。
　それをみてセラもまた笑う。笑って、二人で月を眺める。
　確かに綺麗だ。ヴェインは言葉にせず、そう思った。

よし、完全に一区切り（自分の中で
ひとまず、こんどこそ学院の話に戻りますよ！ やった！ 楽になる！

魔術学院の平和主義者

学院黙示録編

第三十八話 強くあるために

前書きという名の言い訳
学黙示録編改変完了
・以前と同じストーリーは沿うものの一から書き直されているため内容は所々大きく違う
・この話の前後の結末に違いはないため、改変前を読んだ人はわざわざ読み直さずともよい
・しかし結構違うところもあるので、できれば見てね
　以上です。前のほうがよかったという意見もあるかもしれませんが、個人的に、以前書くことを避けていたところ、書かなければならないところを自分なりにがんばって書いた結果ですので、この改変で行こうかと。
　もちろん、違和感やおかしな点があれば、ばしばし意見をいただければうれしいです。それでは

　魔術学院オルフェス、第三グラウンド
　ガイディア国誇る魔導教育研究機関、オルフェス学院は三つのグラウンドを保有している。第一、第二グラウンドは全学生に解放された普通のグラウンドだ。授業での一環、体育や魔術の実技授業など、健全な利用がなされている。しかし第三グラウンドはそういった目的とは一線を隔している。
　国家騎士団を目指す学生達の厳しい鍛錬、学院で研究を行っている魔術師達が行う危険な実験、魔導生物の生体実験などなど、周囲にまで危険が及ぶ可能性があるものを隔離する為に存在しているのが第三グラウンドの存在する理由だった。
　その為、その規模は巨大で、そして万一の事態に備え、その周囲には結界まで張り巡らされている。そんな万全の体制が整えられた地の、その中心で、
「さて、」
　シールはリラックスした表情で佇んでいた。片手に木製の剣を備え、しかし特にこれといって気負う様子も無く、ゆらゆらと身体を揺らしてその場に突っ立っていた。
「……」

そしてそんな彼に相対するように、距離をとった場所には、制服を崩した感じで着こなしたエレナが、シールと同じく木刀を片手に構えて、シールを睨みつけていた。こちらはシールの様子と異なり、緊張を背負った様子で、じっとシールを睨みつけ続けている。
　シールは、そんなエレナに苦笑を見せて、そしてエレナを招くように手を振り
「さ、好きにかかっておいで」
　その言葉に反応して、エレナは身体を倒して、全速力でシールへと特攻した。その速度は確かに凄まじい。魔力によって強化された彼女の身体は、暴風を巻き起こし、柔らかな土の地面を削り、距離があったはずのシールの元へと一気に接近した。
「っはぁ！」
　そして、眼前までたどり着くと、片手に握った木刀を一直線に振りぬく。
　しかし、シールの身体を打ち抜く軌道で振りぬかれた一打は、空を切る。シールは自分の身体を深く沈ませ、その一撃をあっけなく潜り抜けていた。そして、空振り、身体を泳がせるエレナの背に回りこむと、その手に構えた木刀を容赦なく振りぬいた。
「っく！」
　しかし、エレナもそれに対応する。シールへと走り抜けた勢いをそのまま利用し、シールの攻撃範囲から離脱する。そのまま真っ直ぐに駆け抜け、そして十分に距離をとった時点で振り返り、詠唱を唱える。
「【炎弾！】」
　彼女の掌から炎の魔術が繰り出される。加減なく大量の魔力を注がれた火球は、速度こそ遅いが凄まじい熱を伴い、シールへと向かっていく。相対するシールは、その炎弾を前に逃げる事はしない。その場で掌を翳し、彼の最も得意とする術式を刻む。
「【封印】」
　封印の術式が発動した。それは赤く輝くと、迫る炎の熱を受け止め、飲み込み、喰らってしまう。最後には自身ごと砕け散り、消えてなくなった。
　しかし、火球に飲まれた景色の先に、エレナの姿はなく、
「……!!」

エレナは、魔力を滾らせた足で自身の生んだ魔術を追い抜き、シールの背後に回りこんでいた。木刀を構え、無防備に晒されるように見えるその背に振りぬかんとする。
だが、その直前に、シールの
「惜しい」
という声と共に、エレナの足元に封印術式の光が輝く。それはまるで罠のように地面に仕掛けられた封印の術式だった。エレナが回りこむよりも先に、シールは術式をその場に仕込んでいた。
輝く赤い光と共に、エレナの足元からマナが奪われ、体から力が抜けるそして、
「はい、僕の勝ち」
最後に、振り返るシールにコン、と木刀で叩かれ、勝利を決められた。
「これで僕の一〇戦一〇勝、満足したかな？」
「……むぅ」
エレナは不満げに唸った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……はあ」
エレナは第三グラウンドの中心で、大きく溜息をついた。
シールとの戦闘鍛錬、こうして稽古をつけてもらう事を考えついたのは、やはり先の〝村〟での戦いの経験からだった。シールを手伝おうと意気込んでついていった彼の職場、しかし実際に経験してみるとそこは、エレナにはついていくのも厳しい、今までいた世界とは別物の厳しい世界だった。エレナはその世界では自分がいかに無力かを教えられた。
別に戦う事に興味があるわけじゃない。
しかし、ふがいない結果を晒してしまった以上、そのままにしておけない。
だからこそシールに訓練を頼み込んだ。そして、彼の時間が空いている時に試しに模擬戦をすることになったのだ。しかし、その戦績は既に十戦十敗、エレナ

は一度としてシールに勝利することは愚か、一撃を与える事も許されなかった。攻撃魔術を使うことすら許可されたのに、だ
　次元が違う。エレナは地べたに倒れこみながら、そう理解した。
　事、戦闘について、シールと自分とでは知識も、技術も、経験も、何もかもに途方もない差がある。つい最近、実戦経験を体験したばかりの自分では到底叶わない。繰り返した敗北の中で、それが良く分かった。
　そんなエレナを、シールは僅か程も乱れない表情で覗き見て
「自分に何が最も欠けているか、分かったかな？」
「何もかも足らなすぎて、さっぱりよ」
　その答えにシールには苦笑してみせる。
　しかし実際そうとしか答えられないのだからどうしようもない。何が足りないか、と聞かれたら何もかもが足りないとしか言いようがないのだ。それほどまで、戦うと言う行為に対してエレナは未熟だった。
　するとシールはふむ、と頷き、更に、術式を唱えた。
「【封断・偽剣・五式】」
　瞬間、彼の掌から生まれたのは、彼が常に扱う封印の術式だ。しかしその大きさは彼が今まで見せていたものの比ではなく、おおよそ十メートルほどの巨大な大剣。それがシールの掌に生まれた。
「は？」
　エレナは呆然と、その巨大な剣を、口を開いて眺めていたシールはその剣を丁寧に握り締めると、エレナの法を向き直り、そして大きく振りかぶり──
「ちょっと!?」
　シールは、その封印の大剣を振り下ろした。寝転がっていたエレナはぎょっとしながらも、その場で身体を横に転がす。その次の瞬間には封印の剣は地面を叩きつけられた。マナのみ捉えるシールの封印の剣は、物理的な現象を起こさぬまま、地面にぶつかった衝撃で自壊した。
「何するのよ!!」
　エレナは怒り、叫んだ。普通に驚かされた。あの剣が実際に人を切りつけたりできない事は知っているが、目の前に剣の形をしたものが振り下ろされたら驚くに決まっている。

しかしシールは悪びれず、
「今、どうして僕の攻撃を避けられたんだい？」
　その問いに、エレナは首を傾げた。
「それは……あんな大きい剣見せて、思いっきり振りかぶって見せたじゃない」
　あんなあからさまに剣を振るう挙動を見せれば、いくら自分でも避けられる。あれなら例え、魔力の加護を受けない一般人でも反応し、回避する事が出来ただろう。
　シールはエレナの答えに頷き、そして
「そうだね、じゃあ」
　そう彼が言った、瞬間
「……え」
　エレナは、自分の首筋に、封印の剣が突きつけられていると気が付いた。先と同じ巨大な封印術式の大剣。しかし今度は今、こういう状況になるまで全く気が付かなかった。
「さて、今回はどうしてよけられなかった？」
　シールは問う。エレナは眉を潜め、
「どうしてって……いつ剣を創りだしたのかすら、気が付けなかったわ」
　シールの方をずっと見つめていた筈なのに、彼の攻撃を起こすアクションに全く反応できなかった。瞬きするようなほんの一瞬で、彼はエレナへの攻撃を完成させていた。
　シールはエレナに突きつけていた封印剣を解き、そして更に問う。
「君を攻撃したのはどちらも同じ封印術式だ。それなのに、一度目は避ける事が出来たのに二度目は全く避けられなかった。その違いは何だろう？」
「あなた自身の持つスキルでしょう？」
　スキル。使う術式が同じなら、違うのは使用者がその術式をどう扱ったのか、つまりは戦術だ。相手の隙をつき、術式を高速で構築し、そしてその剣を振るう隙を見せない、それらは全てシールのスキルに他ならない。
　シールはその答えに肯定の頷きを見せ、更に問う。
「なら、もし君がそのスキルを教えたとして、君は僕に攻撃を当てられるかな」
「……それは」

自分とシールの差にあるのはスキルだと、図らずもエレナ自身がそう指摘した。それならスキルを身につけさえすれば、自分に攻撃があてられるか、シールはそう問うている。
　だが、エレナは首を横に振った。
「……無理よ」
「それはどうして？」
「それは……だって、経験がないもの」
　答えて、エレナはシールが言いたい事をようやく理解できた。
「君にはスキルが無い。もしスキルを身に着けても実践で扱うだけの経験がない」
　君に足りないのは経験だ。シールはそう言った。
　エレナは力を持っている。常人では到底到達し得ない大量の魔力を保有できるその才能。更には破壊の神【メナス】の加護。事、戦闘において彼女の才能は非常に優れた力を発揮すると言っても過言ではないだろう。
　ところが、実際に戦ってみるとエレナはシールには勝てない。
　自分の才能を生かす技術がないから。技術を扱う経験がないから。
「どれだけ才能があっても、強い能力を持っていても、経験なしでは戦えない」
「〝強い〟のに？」
「〝力〟はね。そして力を振舞うだけで敵をなぎ払う事はできる。だけど一定のレベルを超えたら、そういう〝強い力〟に立ち向かう〝スキル〟を誰だって身に着けている」
　強大な力に対してどのように対処すれば良いか。どう動けば隙をつけるのか。そういう技術を身につける。戦いに身を置くものが、考えない訳がないのだ。
「純粋な戦闘力の比べ合いなら、力の強い者が勝利する。結果は変わらない。だけど実戦はあらゆる要素が組み込まれる。自分より強い力を持つ者への対処なんていくらでも在るんだ」
　魔物との戦いと同じだ。彼らは並外れた力や能力で人間に襲い掛かる。だがそれを知識で知り、技術で対処し、経験で練磨すれば十分に戦える。
　むう、とエレナは唸り、しかしまだ納得できないのか
「でも、そういった技術、対策を超える〝力〟が出てきたら？」

「〝その対策を超える力〟をどうにかする技術や対策をとる事になるだろうね」
「その力に技術を上乗せしたら？　その対策をどうにかするスキルを身につけたら？」
「同じ事だよ。〝スキルを上乗せした力〟への対処をとられる事になる」
「いたちごっこじゃない」
「その通り」
　その〝いたちごっこ〟こそ、経験の蓄積であり、スキルの練磨と構築だ。
「なら、いたちごっこをまるごと踏み潰しかねない力にはどう対処するの？」
「あの時、暴走したエレナは丁度、ソレに近い感じだったねぇ」
　エレナが〝グレて〟いた頃、そしてストレスに耐え切れず鬼神を現出させた彼女はまさにソレだった。圧倒的な破壊力、いくら攻撃を受けても衰えない勢い、魔物を超える洞察力と反射神経。あらゆる点であの時のエレナの力は常識を超えていた。
　でも、と、シールは首を横に振り
「対策に上限はないよ。あの時のエレナにしたって、本当なら僕一人で対処に臨む必要はなかった。何人もの魔術師達で君への対処に挑めば、遥かに確実に君を止められただろうね」
　一人で持ちえる技術や対策には限度があるが、それなら複数の人間で向き合えばいい。強大な魔物と対処する時、たった一人で向き合うことがないのと同様だ。一人では無理なら二人で、それでも無理なら三人で、それでも無理なら更なる大勢か、あるいは武器や道具を使って、そうしていけばどこまでも対策は広げられる。
　当然、対策のレベルを上げれば相応に様々な費用や時間がかかる訳だが。
　ふうん、と、シールの言葉にエレナは納得し、しかしあの時もし、シールが大勢で自分を囲い、押さえ込もうとしてきたら嫌だなあ、とも思いながら、
「じゃあ、どんな大規模な戦術でも倒せなければ？　国家レベルの対策ですら」
「ありとあらゆる戦術、国家レベルの戦術でも太刀打ちできない程になれば、それは最早人の相手にする存在じゃないね。関わるのも馬鹿馬鹿しい話さ。精々望むものを与えて囲んで、堕落させるかな」
　初等科の子供達とする会話のようだ、とシールは苦笑した。

「じゃあ、もしそんなのが敵意を持って攻めてきたりしたらどうするの？」
「諦める」
「ストレートね……」
「実際そうするしかないからね……ただ、実際にそんな例があったね。国家レベルでも対処できないような存在が、人類そのものを滅ぼそうとした、そんな自体が」
「……それって？」
　首を傾けるエレナに、シールは肩を竦め、
「この国で、というよりも世界で一番有名な話かな」
「……魔王」
　エレナの言葉にシールは頷いた。
　そう。魔王。魔族の中から生まれた異端の王。単独の力が強いが故に纏まりなく、それ故に人類へ攻め込む力のなかった魔族の全てを纏め上げ、人類を攻め込んだ存在。
「そして、その魔王を人類は撃退した。どうやって？」
「勇者ベルレイン。そしてその勇者に加護を与えた神の力だわ」
　魔王率いる魔族の進撃に人類は守りの一手を強いられた。だがその時、神々の加護を一身に受けたものが、つまり勇者が現れ、魔族を追い返し、更には彼らを撃退した。
　これは神が人類の歴史に直接的な介入を果たした唯一の例だ。
「神は人類の味方なのかしら」
「勿論そうだと言う人もいる。ソレとは別に、神は世界のバランサーを担うものたちであり、人類の味方と言う訳ではないという人もいる」
「バランサー？」
「魔王は世界のバランスを崩すほどに力を持っていた。だからそれを止める為、その魔王に相対する人類に同等の力を与えた、という考え方だね」
　確かにそう考えた方が、すっきり来ると言うのはある。神を崇める文化は人類特有のものだが、かといって神が人類の味方をする理由が分からない。神は高位の存在なのだから。
「といってもまあ、あくまでもこれらは僕達人間の推測でしかない。上位者の神

たちの考えなんて、いくら想像したって分かる事じゃないさ」
　シールはそう言った後に「話が逸れた」と頭を掻いて、言葉を区切り、
「ともかく、戦闘において、君に足りないのは経験だ。だからもし本当に戦闘能力を身に付けたかったなら、繰り返し鍛錬し、技術を学び、そして実戦を経験する事だよ」
　だけど、そう言って、エレナの顔をシールは覗き、
「それは本当に君がしたい事なのか、ちゃんと考えなければいけないよ？」
「私の、したい事」
　そうだよ、とシールは頷き、
「確かに村の時は君の手伝いがあって助かった。それは心から感謝しよう。だけどこれからもずっと、僕の手伝いをするだなんて、それは間違っている。これは僕の仕事であって、君の仕事ではないからね」
　戦う事への興味を持った。だから教えて欲しい。それならばシールは協力してあげる事にいささかの躊躇もない。だが、ただシールを手伝いたいと言う、それだけの為に彼女の時間を戦闘訓練に費やさせる訳にはいかない。
　彼女は、彼女の為に時間を費やすべきなのだ。勿論、この戦いの鍛錬と、その先に見えるものこそが彼女の求めているものならば何の問題もない。
　しかし、そうではないだろう。エレナの表情からそれは直ぐに伺える。
「見つけないとね。自分が何をしたいのかを」
　そして、その為にも、と、シールはエレナの肩を叩き、
「ちゃんと、授業には出ようね」
「……はい」
　昼休みの終わりを告げる鐘の音が響き、シールの特別授業は終わった。

第三十九話　〝騒動〟の予兆

　シールとの鍛錬を終え、午後の授業。
　エレナはつまらなそうな顔をして、今、魔術歴史学だったかなんだかをしている教師の言葉を右から左へと聞き流し続けていた。
　シールの言う事は事実である事は理解している。自分探し。自分のこと。自分がこれからどうするべきか、なにをしていくのか、将来どうするつもりなのか、その探求。それがこれから必要になると言う事も。
　そしてその探求の為に、学院の授業は用意されていると言う事も、エレナには分かっていた。わかっていたが、しかし、それでもエレナには退屈だった。
　彼女は自分の興味がある事とない事との区分が明確だ。面白いと思えば自分から調べ、理解を深めていくし、つまらないと思ったなら、それは一切耳に入れない。学生というよりも学者に近い感性が彼女の中にはあった。
　そしてそうであるが故に、彼女には学校の授業が退屈でならなかった。否、好ましいと思う授業も確かにある。リーンの授業など、彼女自身に対しての好き嫌いは別にして、教えられる内容は非常に高度で、聞いていて非常に好奇心がそそられる。だが、それでもつまらないと感じてしまう授業が多くあるのだ。例えば今聞いている授業がソレだ。
　シールもまた、彼女のそうした感性が、目標がないということを除けば既に高度なレベルに達していると言う事を理解してはいた。彼女は優秀であり、それ故に他の多くの学生のように、受動的に授業を受ける姿勢が耐えられないと言う事も。
　しかし、それでも彼が彼女に授業を受けて欲しいと望むのは、彼女に他の学生と隔絶した生活を送って欲しくはないと思っているからだ。学校は社会の疑似体験だ。その学院の経験が未熟なままでは、将来学院を卒業した時、きっと苦労す

ることになる。
　折角、このオルフェス学院に所属しているのだから、相応の経験をつんで欲しい。シールはそう考えていた。だからこそ、エレナに授業を受けるよう進めたのだ。
　だが、しかし、後日、シールはこの判断を、もう少し慎重にするべきだったと反省することになる。事、集団行動というものが、決して良い作用ばかり発揮するものではない事を、シールは理解していたものの、若干、甘く見てしまっていたのだ。
「……む？」
　事が起こったのは授業が始まってしばらくしてから、知った知識の朗読のような授業にエレナがうつらうつらと船をこぎ始めた頃だ。
「……ん」
　コン、と後頭部に何かが当たった。不思議がり、背後を振り向くが、後ろに座り並ぶ学生達は皆、真面目そうに、少なくともそう見える姿勢でノートに視線を向けていた。足元をみると、紙くずを千切って丸めたようなゴミが落ちていた。
　拾い、広げてみると、そこには
『死ね』
　その一言が書かれていた。エレナはその言葉の意味が判らず、
「……うん？」
　首を傾げ、椅子に戻った。すると再び、
「……む」
　頭に何かがぶつかる。少し苛立ちながら振り返ると、やはり紙くずが転がっている。今度は拾わない。変わりに誰が投げつけてきたのか周囲を探してみるが、誰も顔をこちらに向けない。暫くそうしている、元よりうつらうつらしていた彼女が気になっていたのか、教師が棘のある声色で、
「エレナさん。前を向きなさい」
　エレナは無言で前を向いた。流石に昔のように、教師に注意されたくらいで報復をするような真似はしない。正直腹正しい事この上ないのだが、黙って前を向いた。
　すると、

「……馬鹿みたい」
　ぼそりと、背後からそんな声がした。
　エレナは無言で振り返った。後ろの同級生達は誰もが此方を見てはいない。というよりも、わざわざエレナから目を逸らしている。だが、口元に僅かに笑みを、嘲笑を浮かべているのが見えていた。
「エレナさん！ 私の授業がつまらないのなら出て行っても良いのですよ?!」
　教師の苛立つ声、再び背後から聞こえる小さい嘲笑。
　エレナは浅く眉を上げ、
「申し訳ありませんでした。真面目に授業を受けます」
　エレナは丁寧に頭を下げ、席に座った。真っ直ぐと前を向いて、真面目な表情のまま、姿勢は微動だにせず、小声で非常に素早く、高い魔力を注ぎ魔術を紡いだ。
「【反転結界・炸裂術式付加】」
　次の瞬間、エレナに向かってとんできた紙くずは勢いよく反射し、後方、エレナを遠めに笑っていた同級生達の前で爆発を起こした。
「「「ぎゃあぁああああ!!?」」」
「なんなのですか！ いい加減にしなさい!!」
　吹き飛ぶ同級生とキレる教師、それらを尻目にエレナは前を向いて、真面目な顔をしながら、今日の学食は何を食べようかしら、などと言う事を考えていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　あくる日の午後。学生用、更衣室にて。
「……眠い」
　エレナはそんな風に眠たげな声を上げながら、用意されていた、らしい、自分のロッカーを探していた。次の授業は魔法薬の授業だ。魔力を宿した物質の実験は大きな危険が伴うため、分厚い手袋やらエプロンやらマスク等をしっかりと装備しなければならない、らしい。
　しかしなにしろエレナはこの授業には殆ど通った事がない。この準備が面倒と言う理由で今まままでは顔も出した事は無かったのだ。よくまあ今まで進級できた

なと自分でも思うが、そこは他の成績の優秀さと、ゲルダー家の権力に保護されてきたようだ。
　とはいえ、今はシールとの約束を守る為、既に他の学生が用意を終えた更衣室をうろうろと探しうろつく羽目になっているわけなのだが。
「やっと見つけた……」
　更衣室の奥、かすれた自分の名前をようやく発見したエレナは溜息をついて、ロッカーに指をかけた。しかし、
「……あれ？」
　扉を開けると、用意されている筈のエプロンがそこには無かった。否、あるにはあるのだが、しかしその様相は、どう考えても、
「……ぼっろぼろ」
　なんというか、どう考えても故意に切り刻まれ、ボロボロになったエプロンが其処にあった。最早着るというよりもぶら下げるという方が正確なほど、
「……んー」
　エレナは首を傾げ、唸った。
　何故こうなったのかは今はどうでもいい。問題なのは、これが今からの授業に必要であり、それが失われてしまったと言うことだ。エレナはその場でひとしきり唸り、そして最後に、何か思いついたように、
「……ああ、」
　ぽん、と掌をたたいた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「エレナさんは何をしているんですか、全く。最近まともになったとおもったら！」
　移動教室の先にて、魔法薬の担任教師であるコーウィンは、学生達がつまらなそうに魔法薬の調合をする中、これ見よがしに大声でエレナへの不満を叫んでいた。彼は臆病な気がありエレナが荒れていた時期は見て見ぬ振りをして、そしてその場にいない時は彼女の愚痴を垂らすと言うなんとも不健全な真似をしていた男だった。

優秀な学者であり、有能な魔術師ではあるのだが、いかんせん性格までは完璧とはいかない。悪い所ばかりではないのだけれど、とはミストの彼への評価だ。
さて、そんな小心者の彼は、最近彼女はおとなしくなり始めた事をきっかけに、逃げ腰な態度から一転、強気に彼女を責めるようになっていた
「全く、そんなやる気がないのなら、来る必要も無いと言うのに！」
彼は声高々とそう宣言する。学生達の前での発言としてはあまりにも不適切だが、彼を咎める声は少ない。むしろ、彼を賛同するような笑みを浮かべる学生がぽつぽつと見える。
そして中でも、〝事を仕掛けた〟優越を思わせる笑い声が奥のほうから漏れていた。彼らは意地の悪い笑みを顔に浮かべ、ひっそりと、教師の罵りの言葉に耳を傾けほくそえんでいた。
そんな少し淀んだ空気になりつつある教室の中で、扉が開き、
「先生」
「エレナさん！ 一体何をしてい……」
現れたエレナの姿に、コーウィン教師は様々な怒りを忘れて、沈黙した。その教師は愚か、その周囲の同級生達も同様に沈黙した。
「……その格好は？」
「エプロンが破けていたので、保健室のメリア先生にエプロンを借りてきました」
「ず、随分と古そうですね。なんか返り血が」
エレナが肩からかけているその古そうなエプロンには、真っ赤で大きな斑点が幾つも付いていた。場所によってはなんか血みどろの手でしがみついたような跡もあって、
「メリア先生が戦場で医者をしていた時、死んでいった患者さん達のものだそうです」
「……そ、それは、また随分と色んな物が染みこんでいる様な」
「最前線で医者やってたものだから、メリア先生を慕っていた患者さんの怨念がエプロンについてるとかで、彼女を外敵から守るため装備者の周囲に災厄を撒き散らすとか」
「……」

「さあ、授業を続けてください。先生」
　その日の魔法薬の授業は、何故か至る所からラップ音が鳴り響き、電灯がカチカチと瞬いた後に破裂し、窓の外から謎の人影が現れ呪詛を呟き、机が飛び上がり、飾られた人体モデルが血涙を流しながら呻き声を上げ、薬品が幾何学色の煙をまきちらしながら爆発し、前代未聞の大混乱に陥った。
　エレナの周囲でのみ。
　エレナ自身は平和そうに昼寝をしていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　また、とある日の午後、
「「「ちょっと、顔貸しなさいよ」」」
「【風よ、力を孕み爆裂せよ】」
「「「きゃあああああああ!?」」」
　不穏な雰囲気でエレナを囲っていた女子達は、吹っ飛んでいった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　また、とある日の午前、
「「「ちょっと、顔貸せよ」」」
「【大地よ、力を孕み炸裂せよ】」
「「「ぎゃぁああああああ!?」」」
　不穏な雰囲気でエレナを囲っていた男子達は、吹っ飛んでいった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「「てめえ！　ちょっと面ぁ!!」」
「【死ね】」

　不穏な（以下略

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「と、まあ、こんな事があったのだけど、どう思う？　シール」
「……うーん」
　シールは自室でのエレナの問いに、答える事を躊躇い、呻き声で濁した。
　どう考えた所で、嫌がらせ、というかイジメをうけているようにしか思えないのだが、どうなのだろう。被害はどう考えても彼女にではなく、その周囲に向かって暴走している。
　由々しき事態だと言う事は分かる。分かるのだが、まあ、放っておいても彼女自身には問題は至らないのではないのだろうか。いや、その周囲には間違いなく大変な事になっていきそうなのだが。
　しかし彼女が同級生達といずれ軋轢が発生する事は、シールも予想していた。
　元よりゲルター家という特殊な家を持つ彼女、更にはその家の力を利用して大暴れしたという事実も昔の事ではないのだ。彼女が暴君として振舞っていたのなら、害を与えようと言う者も出てこなかったろうが、取り巻きも引き連れず、大人しく振舞う彼女を「苛めやすくなった」と勘違いする者も出てきてしまうだろう。
　良くない傾向だ。このままでは被害が出る。主に彼女の周囲に。
「とりあえず、また変な事があったら言ってね」
「分かったわ」
　エレナは素直に頷いた。良い子だ。
　シールは彼女を思いつつ、しかし、教師と言う立場からすればこういうトラブルなど何時もの事だ。対処の準備も立ち向かうだけの覚悟も既にある。エレナのクラスの担当の教師であるリナとも、既に面識はあるし、話も通してはいるのだ。
　シールはとりあえず息をつき、エレナの問題をリナに相談しておこうと思った。今時点では、この厄介な問題は、しかし対処のしようがあるという確信を持っていた。

この問題が、実は想像以上の厄介さを孕んでいようとは、この時点では思いもしていなかった。

第四十話 きぞくとへいみん

　エレナの周囲で起こっている問題は、単なるイジメだと、そういう安易な理解をシールが切り替えるきっかけになったのは、自身の受け持つ初等クラスの「歴史」授業を行おうと向かった時の事だった。
「さって、今日は、魔術の術式概念の誕生の歴史だったかな？」
　シールは鼻歌を歌いながら、教室へと足を向けていた。
　歴史授業は彼が子供達に教える上で、好きな授業の一つだ。人に知識を与える事は楽しいものだが、中でも自分の好きな事を教えるのは格別だ。彼はそう思う。
　勿論、子供は基本的に勉強なんてものは嫌いなものだ。学問の楽しさを教えることはやっぱり難しい。しかし、だからこそ工夫のしがいがあるものだ。今日は子供の喜びそうなコミカルな絵図を用意していたりもしていた。
　楽しんでくれるといいなあ。そんな風にシールは笑って、教室の扉に手をかけ、
「やあ皆、おは──」
　にこやかな笑みを浮かべて扉を開いたシールは、
「うっせえ!! 死ねこのばか！ ばーか!!」
「お前がばかだろ！ 死ね！ 死ね！ ばーかばーか!!」
　子供の、とてもほのぼの殺伐とした喧嘩に直面した。
「……うわぁ」
　子供達の間で喧嘩なんてのはしょっちゅうなので、別にこうした光景自体見慣れたものでは在るのだが、しかし流石に軽く浮かれて教室に入っていった身としてはかなりキツイ一撃だった。
　暴れているのはパームとカリアンか。何時もあまり仲が良い訳じゃないのは確かだが、今日は一体どうした事なのか。

シールは溜息をついて教卓に教材を置くと、一先ずその周囲で彼等を恐々と見守る子供等の肩を叩いた。するとその中の一人マリが助けを求めるように、
「せ、せんせー、パーム君とカリアン君が」
「マリ。二人はどうしたんだい？」
　今までの経験を考えてみると、まあ、教科書を貸した貸さないだとか、どっちがズルしたしないだとか、子供らしいと言う他無い理由だった事が多いわけだが、果たして今回は何が理由なのか、しかし、マリはきゅっと眉を額に寄せて、
「え、ええっと、ね……」
　彼女の、答えづらいと言うのとはまた違う困惑の表情に、シールは首を傾げた。所詮は子供、という考え方はいけないが、それでも子供は子供だ。安易な理由でしかないと思うのだが。
　すると、パームとカリアンがシールに気が付いたのか、二人は顔を上げ、
「「せんせー!!」」
「二人とも、今度は何で言い争ってるんだい？」
　言葉はトーンを下げて怒りを抑えるように、理由を尋ねる。どんな理由であれ、子供にとってそれは真剣だ。下らないと片付けず、ちゃんと話を聞いてあげなければならない。だから、彼等がどれだけ素っ頓狂な事を口走ろうと、一定の理解を示してあげられると、シールは思っていた。
　するとパームがシールを睨んで、そしてカリアンを睨みつけた。
「コイツが偉そうなんだ！」
　偉そう、問われたカリアンは歯を剥き出しにしてパームを威嚇する。パームもそれを返す。再び殴り合いの喧嘩をやりだしかねなかったので、シールは二人の頭を押さえた。
「二人とも、もっとちゃんと説明して。どういうことなんだい？」
　問うと、パームははっきりとこう言った。
「コイツが、貴族だから！」
　するとカリアンも言葉を返し、
「五月蝿い！　平民の癖に生意気なんだよ！」
　その二人の言い争いは、シールの表情をより、複雑にさせた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「何なの……一体」
　その頃エレナもまた、先日より続く「よくわからない事態」に溜息をついていた。今日は教室に入れば天井からペンキが飛び散り、座ろうとすれば椅子に呪い術式つきの画鋲が備えられ、魔術実習では狙い済ましたように方向性を失った魔術が此方に飛び掛った。
　それら全て、エレナが新しく開発した障壁魔術によって全て、反射させたが、しかし喧しい事には変わりは無い。一体これはどういうことなのか。理解に苦しむ。
　授業を抜け出し、校庭で空を仰ぎながら、考えを巡らせる。この状況は何かと、
「こんなシチュエーション、昔読んだ絵本であったような……？」
「イジメ」という非常にシンプルな単語を真っ先に思い浮かべても良いものだと思うのだが、しかし今までゲルダー家という圧倒的な力と、自身の類稀な魔術の才能が、外敵という存在を知覚する前に排除してきたのだ。
　つまり、未体験の状況に、理解が追いついていないのだ。
　故に彼女は今も何故か自分に降りかかりかけた未熟な呪術を跳ね返しながら、不思議そうな顔で、エレナは首をかしげていた。
「……何かしら。あれ」
　ふと、騒がしい、というか、どこか物騒な騒ぎの声が聞こえてきた。
　中庭の方、覗き見ると、なにやら何人かの子供達が揉みあっているようにみえる。が、よくよく見れば背の低い子が体を小さくして縮こまっていて、その子の背中を何人かで、砂をかけたり、蹴り付けたりと……
「……む」
　エレナは眉を潜めて、唸った。
　少女が虐げられている。〝イジメ〟られている。自分のことでは全く発想できなかった言葉がとてもあっさりとエレナの頭に浮かんでいた。
　さて、ではどうしようか。
　勿論、改心し、真っ当な感性を取り戻したエレナは、目の前の光景を酷いもの

だと見て分かるし、苛められている少女が可哀想だとも思う。自分を変えなければという意識からも、こうした現場を見過ごすのは間違いだと感じている。
　ただ、この「イジメ」という現場をどう対処すべきか、エレナは分からなかった。
　人生経験の少ない上、元々「イジメ」る側の人間だったのだ。どう対処する事が正解なのか、全く分からなかった。大体自分が「イジメ」を止めるなんて権利を持っているのかも疑わしい。しかし、そんな風に思い悩んでいる間も、少女は酷く残酷に苛められている。エレナから見ても少々度が過ぎると思えるくらいに。
　とりあえず、止めよう。
　これ以上考えてイジメを傍観するのも馬鹿馬鹿しい。エレナはそう考え、イジメの現場へと近づいていった。距離が狭まるに連れてその場の光景が詳しく見えてくる。
　蹲る一人の少女を、情け容赦なく蹴りつけ、殴り、ドロをかける。おおよそ魔術という神秘の力を学ぶ学院とは思えないほど原始的で野蛮な真似事だった。
　それを見て、エレナは先ほどまで躊躇していた自分が馬鹿馬鹿しくなった。悩む必要なんて無い。さっさとぶちのめして、止めさせよう。そう決意した。故に口を開き、
「ちょっと、何してるのよ」
　エレナは颯爽と、イジメの現場へと立った。表情は憮然と、怖そうに見えるように。この流れのまま魔術の一撃でも放ってしまおうか、そんな事を思い、そう発言した。今こうして介入する事に間違いは無いと、そう確信して、しかし、
「……っお前!!」
「え？」
　何故、と、エレナは思った。
　何故か、苛めていた連中は、問答の余地も無く、エレナに殴りかかったのだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

場所は再び、初等科クラス　一－Ａ教室
「さて、今日は歴史の授業……を少し変えて、貴族と平民の話をしよう」
　内心で、折角教材を用意したのになあ、と少し落ち込みつつ、シールは教壇でそう宣言した。とはいえ、この酷い現状を、このクラスが抱えた問題を放棄するわけにも行かない。今までは男女共にランダムに定めていた子供達の席順は、その中心で真っ二つに分断されている。右側には貴族、そして左側には平民の子供達だ。
　随分とまあ、酷い状況だ。シールはそう呻き、とりあえずは、と言葉を選んだ。
「ついさっき、パームとカリアンが喧嘩してたね。貴族、平民って」
　この言葉に子供達は頷き、当の本人の二人は目を逸らした。子供らしい仕草だなとは思うが、やはり面倒な問題だ。シールは苦い顔をした。
　貴族、そして平民の問題は、身分を問わず学問を授ける事を公言しているオルフェス学院においては大きなテーマの一つだった。容易い問題ではないし、言葉でいくら繰り返しても解決できる問題ではない。
　だからこそ、教師にはその繊細な問題への臨機応変な対応を求められるのだ。とはいえ、まさか初等クラスの教師である自分がこの問題に向き合う必要があるとは思いもしなかったが。
「じゃあ皆に聞こう。このクラスは平民と貴族が半分くらいの人数でいるね」
　今、シールの目の前には右半分と左半分で綺麗に貴族と平民に分かれている。普段は身分関係なくバラバラにしているが、今回の授業の為、分けてある。
　シールの受け持つ世代の初等部のクラスは、オルフェス学院が魔術師の才能のある平民を大きく取り入れ始めた層だ。平民の学院入学は前からあったが、彼らの世代から更に平民への受け皿が広がっている。
　平民と貴族の割合は平民の方が圧倒的に多い
　が、貴族の者は魔術の素質を持つものの比率が高く、他国からも留学生として入学してくる子供も多い為、比率的には平民と貴族で丁度五分五分といった感じになっている。
「じゃあ、皆に問題だ。貴族ってなんだろうね？」
　そのシールの問いに、一瞬、子供たちは静まり返る。あれだけ騒がしくしてい

たパームまでも、答えを失い、言葉が出ない。やはり、曖昧な知識しかもっていないようで、答える自信が無いのだ。
　これくらいは、教えた筈だけどなあ、と、シールは苦笑していると、一人、静かに手を上げる少年がいた。カリアンだ。
「それじゃあ、カリアン」
「政治的権力を持った特権階級の人々の事です」
　カリアンは少し自慢げだ。パームはそんな彼を睨みつけるが、気にしもしない。賢しげな物言いは生意気にも見えるが、シールから言わせれば可愛らしいものだった。
「そう、カリアンの言ってる事は正しいね。政治的権限を持った特権階級の人間の事だ。あるいは貴き者という意味合いもあるね」
　国や時代によって、貴族と言う言葉の遣い方は違うし意味も変わってくるが、今の時代のこの国での言葉の意味はそれだ。
　しかし、
「じゃあ、貴族の条件って何かな？　貴族は、何をしたら貴族なんだろう。どうしていたら、自分は貴族だと言って良いんだろう？」
「それは……」
　問うと、カリアンも沈黙する。勿論、シールは答えられないと知っている。こんな問いかけ、大人だってさらっと答えられる者は少ない。
「さて、それじゃあ、貴族の歴史の話をしようか」
　シールの言葉に、子供達は真剣に体を向けてくる。やはり、自分の興味のあることには、子供達は真剣になれるものだ。普段から、これくらい集中してくれたらいいのに、とは思うが。
　さて、とシールは言葉を置いて、
「五〇〇年前、勇者ベルレインが魔族の王に勝利し、長きに渡る魔族と人間の戦争は終結した。それから人類は、魔族の侵攻を恐れることなく発展を遂げていった」
　魔族、という脅威の消失は、今まで対魔族の為に利用されていた技術を自身の為に利用していく事を意味していた。人類は驚くべき勢いで発展し、成長した。しかし急激な成長は、人類の悪性を浮き彫りにさせていく事となった。

「魔族との戦いでの功績もあって、魔術師は〝貴族〟という特権階級を取得した。魔術は当時から強力な力だった。他の技術の発展が遅れた事も合って、あらゆる分野で魔術は活躍していたからね」
　知識が無い人々は、魔術と言う存在はありとあらゆる万事を可能とする奇跡の力に見えていた。そして魔術師達も、自身の魔術に欠点があることを認めず、万能であると偽った。魔術とは秘法だと、神々に選ばれし者だけが扱える奇跡だと。だからこそ特権を独占していった。
「魔術師達は集い、【ルナ】という大国を築いて、圧倒的な権力を手に入れた。その国では王も貴族も皆魔術師であり、魔術の才能の無い者は、それこそ奴隷のように扱われた」
　魔術は血によっても紡がれるものだが、唐突に才能に目覚めるものもいる。平民の中でも魔術の才能を持つ者は勿論いたが、そういった人間は赤子の頃から抹消されるか奪われるか、あるいは魔女の証として殺されたりもしたという。そうして、当時の魔術師達は魔術の独占を推し進めた。
　そこまで言うと、パームは純粋な怒りの表情を見せて、
「じゃあ、貴族は悪い奴じゃん！」
「確かに、過去の貴族が良い存在だったとは言いがたかったね」
　パームの言葉に理解を示す。すると今度は、カリアンや他の貴族の子供たちがつまらなそうな顔をしてむっすりとしていた。シールは苦笑し、
「だけど今と昔とでは貴族の意味が違う。さっきも言ったけど、昔の貴族は魔術師と同義だった。そのままの意味では僕等も悪い人たちになっちゃうね」
「でも！ 今だって貴族は！」
「パーム、人の話は最後まで聞こうね？」
「……はあい」
　パームはシールの言葉に不承不承ながらも頷いた。良い子だ。さて、
「横暴を極めた魔術師達、それ故に平民達はそれに幾度も対抗しようと試みた」
　しかし、その度に返り討ちにあった。魔術の知識が無い彼等は、魔術師に対抗する術も知らず、それ故に虐殺され、更には手ひどい報復を受けた。その時代の魔術師は、真に邪悪だったといっても過言ではなかった。
「だけど時の流れと共に、平民達の間でも魔術の解明が成され、魔術は奇跡でな

く、技術である事を理解した。魔力の無い者でも魔術を扱える魔具の発明も進んだ」
生まれた魔術師の才能のある子供を隠し、育てる事で。あるいは魔術師達の中でも平民の味方となってくれる有志達によって、魔術の秘匿は平民達に知られるようになった。
「そして、〝魔抗師〟と名乗る一派が革命が起こった。三〇〇年以上前の話だ」
横暴を働く魔術師達に天罰を。
そういった意思の元集った革命軍〝魔抗師〟。血を重んじるあまりに数少ない魔術師の十数倍の軍勢、魔術封じの魔具装備、火薬等の爆発物の使用、更に【ルナ】側から流れた反逆者の魔術師達。
徹底した構成で、平民達が命を賭して行われた革命。その結果、その時代、富と権力を牛耳っていた魔術師達を殲滅された。平民達が勝利したのだ。
「魔術師が支配した【ルナ】は崩壊した。【ガイディア】は、【ルナ】という魔術大国の後地に誕生した国だ」
しかしある程度の人々は他国に流れていき、結果としてかつての【ルナ】ほどの大きな国では無くなったが。
「ガイディア国はこの大陸の中央地、魔術都市の跡地を利用して、魔術師＝貴族に〝虐げられてきた人々〟が作った国だ。だからガイディア国を作った創始者の人々、少なくともその中心となった人々は、魔術＝貴族至上主義を嫌悪していた」
勿論、魔術師を嫌悪していたからと言って、魔術という万能に近い力を手放せる訳が無かった。しかし、あくまでも魔術は手段であり、功績ではないという意味を明確にした。
「だから、この国での貴族になる条件というのはシンプルで、『ガイディア国に一定の功績を積み、認められたもの』と言う風になっている」
勿論、実際はそう容易いものではなかったが、そう定義されているのは間違いない
そこまで言って、シールは息をついた。
正直、もっと詳しく、正確に話さなければならない内容なのだが、そうなると今度は専門用語を交えなければ正確な講義にはならず、子供に理解させる事がで

きない。証拠に、今でも子供達の何人かは情報を整理しようとうんうんと唸っている。眠っている子はいないのは幸いだが。
　とりあえず、皆が理解を終えるまでまとうか、と思ったその矢先、カリアンが手を上げる。促すと、彼は立ち上がり、
「功績を積んだ結果得た特権、というのなら、身分が高いと言う事を平民は認め、敬うべきではないですか」
　その言葉にパームは口を尖らせるが、反論はしない。今の国の貴族の存在が、彼が嫌うようなものとは違う事を、彼も理解したらしい。ソレを確認したうえで、シールは頷き、
「そうだね。今の貴族の人々は、大抵は何らかの形で国に貢献した人々だ。戦争で功績を挙げたり、一定以上のお金を国に納めたりとね。その恩恵を、僕達は全員受けている」
　そう答えると、シールが貴族を肯定するのが許せないのか、パームが手を上げた。シールは肩を竦め、「はい、パーム」と指摘してあげた。パームは口先を尖らせて、
「でも、じゃあ、親父や爺ちゃんが貴族になったら、その子供はもうずっと楽して良いってのかよ。そんなのおかしくねえ？」
「別に、貴族の人たちが、日々を遊んで暮らしている訳じゃないよ」
　シールは優しく笑みを浮かべ、言葉を続ける。
「貴族となり特権を得た者は、今度は義務が生まれる。統治者としての義務がね」
　当たり前の事だが、特権階級になると言う事とは、何もせずに報酬を得られ、自由にできるなんていう意味な訳では無い。特権階級として、今度は統治という仕事が任される。
　それは人の社会において必ず必要なものだ。
「統治者としての仕事は大変だよ？　自分の管理する人々の生活を保障し、何かあったときは責任を負わなければならないからね？ 立派な仕事だ」
　そう語ると、パームは言葉を成せず、席に着き、同時にカリアンが立ち上がり、勝ち誇った笑みでパームを指差し、笑った。
「そらみろ！ 僕が正しいんじゃないか！」

「勿論、親がしている事を自分の手柄のように誇るのは間違いだけどね」
「うぐ……」
　調子に乗りそうになったカリアンを押さえつける。流石にここで貴族の子供達の肩だけを持つ訳にはいかない。実際、そう単純に片付けて良い話ではない。
「平民は、貴族に保護される側の立場の人間だ。だけど、何もかも与えられている訳じゃない。収めるべき税を納め、その対価に保護を得ているんだ。だから貴族はその貰った分を正しく返さないといけない。義務を怠ったり、過剰に税を搾り取り私服を肥やそうとする貴族は悪徳貴族って呼ばれるね」
「僕の家はそんなことはしていません！」
　そうだね、とシールはカリアンに笑いかけ、
「君のお父さんは勤めを果たしているだけだ。自分のしなければならない事を」
　そう言うと、カリアンは頷き、しかし僅かに考え込むように座り込んだ。
　二人の問答から、再び沈黙が広がった。今まで子供達の中に合ったようなイメージで描いていた虚像、特に平民の子供達は貴族と言う対象が理解しづらく、それ故に安易な悪のイメージを植えつけてしまう場合が多いだろう。
　自分の中で築いてしまったイメージを崩すのは難しいが、子供なら、まだ柔軟性が効く。勿論、逆に強固に変えてしまう事も出来てしまうので、教師は注意しなければならないが。
　子供達を見渡してみると、皆は各々、大なり小なり色々と考え始めている。良い事だ、とシールは頷き、最後に事の始まりであるパームとカリアンを見てみた。するとパームがまだ、何か言いたそうに、顔を伏せ、口を尖らせている。
「パーム、言いたいことがあるなら今、言うと良い。別に僕は君を怒るつもりは無いし、思ったことを口にするということは大切な事だ」
　シールに促され、パームは口先を尖らせたまま、どこか搾り出すような声で、
「……でもずりいよ」
「なにがだい？」
「……俺の親、貴族じゃねーもん。農民だもん」
「……ふむ」
　なるほど、と、シールは頷いた。
　パームが言っているのは、この世に生まれた者の殆どが抱く怒りだ。この世に

存在する不条理、理不尽、不公平。どれだけ奇麗事を述べたって、それは確かに存在する。
　この世には持つものと持たざるものがいる。どうしようもない現実。
　これを子供に納得しろというには、あまりにも残酷だ。
　シールは僅かに息をつき、考える。自分が最善の教えを与えられるとは思えないし、誰もが納得できる答えをシールは知らない。しかしそれでも、真摯に、子供と向き合わなければ、何より失礼だ。
　だから、シールは真剣に言葉を考え、選び、口を開いた。
「パーム、不平等って何だと思う？」
「……貴族と平民」
「それはどうして？」
「だって、最初から！ 俺じゃどうしようもできねーじゃん！」
　感情的なパームの声を、シールは受け止める。彼の怒りは、理不尽への怒りは正しい。決して間違えているものではない。しかし、
「よし、それじゃあ、その不平等をなくしてみようか」
「え？」
「生まれたときから、誰もが平等な世界だ。皆、生まれたときから持っているものも、持っていないものもなにもかも同じ世界だ」
　あくまでも仮定の話だよ？　とシールはつけたし、言葉を続ける。
「そんな世界をどう思う？ パーム」
「そりゃあ……そっちの方がいいさ……でも」
　納得いかない、と言うような顔をするパームに、シールは頷き。
「平等な世界。誰もが同じものが与えられる世界。ただし、」
　区切り、
「ただし、その世界は努力を積んでも意味の無い世界だ」
「……え？」
「だってそうだろう？　努力した者が報われてしまえば、それは平等じゃない。その人だけ、違うものになってしまうじゃないか。貴族の人々の努力を、パームは認めたくないと言ったんだからね」
　極端な話だ、とは自分でも思う。しかし真に平等とはそう言うことだ。

「誰も何もしなくても、何もかも与えられる世界と言うのは、完璧な平穏なのかもしれない。誰も餓えず、誰も苦しまず、生まれもっての格差に苦しむ事も無い」
　さて、とパームに問いかけ、
「パーム。君はそんな世界がいいかい？」
「……嫌だ」
　パームは首を振った。当然だろう。とシールは思う。
　何故なら彼がこの学院に入学できたのは、少なからず努力を積んできたからだ。努力して入学して、そして入学した後もずっと頑張ってきた事をシールは知っている。やんちゃで、しょっちゅう喧嘩をするけど、それでも人一倍の努力家であるとシールは知っている。だから、努力が認められないなんて、そんなのは嫌だと思うだろう
　だからこの問い方は意地悪なものだった。とシールは僅かに笑う。
　そして言葉を選び、語りかける。
「僕が思う理不尽は、機会への不平等だ」
　努力する機会が与えられない。挑戦する機会が与えられない。何かをしようとしても、何かを求めようとしても、それをすること事を否定される。何かをしても報われない事は良くある。だが、何かをしようとすらさせてもらえないのは、真の理不尽だ。シールはそう思う。
　そして、だから、
「君達は今、学ぶ機会を与えられている。魔術を、知識を教えられている。そしてその機会は、今後、あらゆる物事へと挑戦への機会に繋がっていく」
　そう。シールの目の前に少年少女たちは、皆、恵まれているのだ。学ぶ機会を、学んだ知識を生かす機会を、与えられているのだから。
「自覚して欲しい。君達は今、貴族平民に関係なく、この上ないほどに恵まれていると言う事を。そして、努力次第で望む道を目指せると言う事を」
　そこまで言って、シールは息をついた。改めて子供達を眺める。一人一人、全く別の反応を見せる。納得した、という顔をしていない子も何人もいる。
　今彼らに話したことは基本、誰だって知ってる当たり前の事だ。大切なのはその先だ。学んだ事、知った事を前に、自分達がどう思うのか、何を考えるのか。

その答えは自分自身で選び取らなければならない
　さて、それじゃあ、と、作文用紙を与える。
「今回、何を思ったのかを文章にしてみようか。そこまで沢山書かなくてもいい。兎に角自分が思ったことを書いてみようか」
　と、そう言って、シールが子供達に嫌な顔をさせた、そのときだった。
「……！ ……!!」
「……!! ………………!!」
「……うん？」
　外から騒がしい声が聞こえてきた。子供達も興味を外に向けている。シールは溜息をついて、注意を促そうと扉を開けた。すると、
「この糞貴族が!! てめえらが厚かましい顔するから鬱陶しいんだよ!!」
「この糞平民!! 無礼な口を利くな!!」
　平民と貴族の集団が、凄まじく顔を真っ赤にさせながら、大喧嘩を繰り広げていた。パームとカリアンの時よりも遥かに激しく、遥かに大人気なく、だ。
「……」
　シールは言葉に出来ず、沈黙した。ちらりとクラスを見渡すと、子供達も子供達で呆れた顔で、自分の先輩達を眺めている。
「……君達？」
　二つの勢力は、声をかけたシールの方を見るが、とても正気とは思えないくらいに瞳は濁っていた。そして貴族の少年達はシールを確認するとその濁った瞳をシールに定め、口を開き、
「黙れ平民が！ 貴様に何か言われる筋合いは無い!!」
「糞貴族!! そんなだからテメエラは馬鹿なんだよ!!」
「なんだと!?」
「やるか!!」
　再び、言い争いが勃発し、シールを無視して取っ組み合いが始まった。シールは開きかけた口を閉じて、ただ、両の拳を握り、封印術を創り出し、
「後輩の前で恥を晒すな」
　二つの勢力に、教育的制裁を加えた。

第四十一話 報復

　オルフェス学院、中庭にて、シールが珍妙なる侵入者に制裁を加えていたその頃、イジメの現場に安易に首を突っ込み、挙句の果てに喧嘩ざたに巻き込まれてしまったエレナは、

「……うぅ」

「痛い、痛いよぉ」

「ひっ……」

　全員等しく、徹底的に叩きのめしていた。単純な話で、エレナの類稀な魔力とそれによって強化された身体能力は、同級生の子供らと比較になる訳が無く、あっけなく蹴散らされてしまったのだ。

　シールとの訓練を発揮するまですらなかった。至極当たり前の事だが。

「……なぜ、こうなったの」

　エレナ頭を抱えた。

　おかしい。私は確か、イジメを制裁するための正義の使者的立場にいたのではなかったのか。何故いつの間にかイジメっ子をイジメる立場になっているのだろう。相手はイジメっ子な訳で、別に蹴散らしたって構わないような気もするが、根本的に何の問題も解決していない。単にその役者が変わっただけなのだから。

「……あ、あの」

「ん？」

　と、その時背中から声をかけられた。振り返ればそこには顔がドロドロの少女が一人。今地面に転がっている少年少女らに苛められていた子だろう。忘れていた。実際そこまで彼女を不憫に思ったわけではなかったのだから。

　……えーっと、と、エレナは言葉を考えて、

「大、丈夫？」

「は、はい。あ、ありがとうございます。エレナ様」
　少女はどこか怯えながら、エレナの言葉に頷いた。こちらの名を知っている事に疑問はない。自分の知名度が高い事くらいは流石にエレナも自覚している。
　しかし、なら彼女を苛めていた学生達は何故殴りかかってきたのだろう？
　いきなり殴りかかった、という事は何らかの形で此方を認識していたと言う事だ。で、あるなら何故、だ。ゲルダーの家の人間に殴りかかればどうなるか、普通、畏れて避けようとする筈なのだが？
　と、そこまで考えて、まあいいと思いなおした。何はともあれイジメは収まったのだ。非常に暴力的なやりようだが、あとはとりあえずこの目の前の弱弱しい少女を保健室に連れて行けば良いだろう。
　そう思い、彼女を連れて行こうと前を見る、と、
「あら？」
　いつの間にか、先ほどよりも更に大勢の数の学生達が、自分達を囲っていた。エレナが叩きのめした学生等を看る者も何人か見えて、だとすればイジメっ子らの仲間だろうか。
「……エ、エレナ様」
　エレナはとりあえず、少女をかばうように前へと進み、身構えた。囲む学生達はエレナを憤怒の形相で睨みつけていて、なんというか威圧感があった。
　エレナはその様子を冷静に眺めていると、一人の少女が前へと進み出る。少女は、エレナによってなぎ倒され痛みに喘いでいる仲間をチラリと見て。
「酷いじゃない。私の友達に何してくれるの？ エレナさん」
「あら、私のこと知ってるの？」
「私、貴方のクラスメイトよ？　 まあ、貴方みたいな高尚な身分の方には私のことなんて視界にすら映らないでしょうけど」
　えらくストレートな皮肉な物言いに、エレナは浅く眉を上げた。相手の表情は明確な敵意に満ちている。しかし此方は彼女の顔に全く覚えがない。とりあえず、言葉を返すように、
「貴方のトモダチは一方的にこの子に暴力を振るっていたわ。それなら、逆に暴力を振るわれても文句は言えないんじゃない？」
「あら、それじゃあ貴方は殴られてしかるべき何じゃないの？」

そう言って、怒りとも嘲りともつかない笑みを少女は浮かべる。
「だって散々貴方は、貴方達は身勝手に暴力を振るってきたじゃない？」
「そ、れは……」
エレナは、思わず沈黙した。
何故なら、事実だからだ。エレナは自分は荒れていたとき周囲に当り散らしてきた。自分の家の名前を使って好き勝手して、それを利用した連中も放置してきた。取り巻き達が好き勝手暴れる事も放置してきたのは、自分だ。
罪は罪だ。それはエレナとて、忘れた訳ではない。元々、自らの罪悪感と腐り堕ちるような甘えとの間で潰れてしまいそうになるような程、純粋な彼女は、誰よりもそのことは真剣に考えていた。
だが、だからこそ、どう向き合えばいいのか分からなかった。
罪には罰を。だが罰とは何だ？
法の罪には罰が与えられる。それは禁固刑であったり、労働刑であったり、鞭打ちであったりする。それなら自分も閉じこもったり、暴行を受けたり、あるいは何らかの労働を積んだりする。私もそうすればいいのか？
本当にそれだけで、そうするだけで、償ったと言っていいのか？
いやまて、とエレナは首を振る。今はそんな事はおいておけ。問題なのはこの子だ。
「ならなんで私じゃなくてこの子を？ それだけの事をしたというの？」
「だってその子、貴方と一緒に私達を理不尽な目にあわせてきた内の一人よ？」
言われ、振り返ってみると、少女は更に涙顔で縮こまった。とても、自分の周りで好き勝手していた奴等と同じ事をしていたようには見えないが、というか、そもそも彼等の顔を覚えていないため、本当に彼女が一緒にしていたのかも分からない。
エレナがそうやって困った顔をしていると、エレナを糾弾する少女は勝ち誇るように表情を笑みに歪め、
「自業自得よ。正義は私達にあるわ」
「正義？」
エレナは眉を潜めた。正義、という言葉に違和感を覚えたのだ。自分に非があるのもまた事実だ。反論のしようも無い。だけど彼らが正義と自称する事も間違

いだと思えた。だが、そんなことを思う間に、じりじりと少年少女らが囲んでくる。エレナは更に背後の少女を下がらせる。
　彼女が正しいのか、自分が間違えているのか、エレナには分からない。分からないが、背後の少女をこのまま見捨てる事だけは間違えている。エレナはそう確信し、転移の魔術を発動しようと身構えた、その時だった。
「何してるんだい？」
　この異常な雰囲気が撒き散らされた空間を、酷く落ち着いた声が切り裂いた。その場にいる誰もが驚き、その声の方に視線を向ける。エレナはシールかとも思ったが、しかしその声は彼よりも若かった。
　彼らを掻き分けるようにして現れたのは、褪せた金髪に鋭い瞳、何処か冷たさを感じるような、落ち着いた笑みを浮かべる少年だった。
「……キース、君」
　キース、と、そう呼ばれた少年は、柔らかな笑みを浮かべて、この異様な状況を冷静に見渡していた。彼は、エレナに一説ぶっていた少女を見て、周囲でエレナを囲んでいた少年少女らを見て、そして最後にエレナとエレナに庇われている少女見て、首を傾けた。
「一体、何をしているのかな？」
　再び、キースは質問を繰り返す。酷く落ち着いた様子のその言葉は異様な熱気につつまれた空気であったその場に冷や水をかけるようで、戦意に満ちていた少年等もその熱を引かせ、何処か居心地悪そうな顔になっていった。
　何だ？　あの男は。あいつらのリーダーか何かなのだろうか？
　エレナはそう思いながらも、様子を眺めていた。いざとなれば直ぐに逃げ出せるように、転移術式の準備だけはしておいた。身構えつつ、眺めていると、先の少女がキースの前に進み出て、
「キース君。貴方だって知っているでしょう？ あれはエレナよ」
「ああ、噂は聞いているよ。それで、その彼女を囲うのは何故？」
　キースは笑みのまま問うと、少女は短く答えた。
「報復よ」
「報復？」
「彼女達は散々、私達に暴挙を繰り返してきた。私たちには復讐の権利がある」

「ああ……なるほど、そういう状況なのかい」
　キースは少女の言葉に素直に頷いていく。非常に紳士的な表情での受け答えに見えるが……何故かエレナには面倒だからと適当に聞き流しているように見えた。気のせいだとは思うのだが。
　そうして少女の言葉を聴き終えたキースは、「全て分かった」と笑みを浮かべ、
「なるほど、それなら君達を止める権利は、僕には無いね」
　おお、と、周囲から声が漏れ、エレナは身構えた。それはこの暴行を肯定する声に他ならない。やはり敵だ、とエレナはキースと言う名の少年を睨みつけ、転移の魔術を構築しようとした。
　しかし、キースは「ただ」と言葉を続け、
「ただ……近くにリーン先生がいるって、教えといたほうが良いかと思ってね」
　その名を聞いた途端、少女達は怯えるように一歩下がった。
「リ、リーン先生が？」
　リーン、確かに彼女がもし此処に現れれば、全てが終結するだろう。少女達の言い訳の一切に耳を貸さず、ただただ一方的に全てを平等に爆発させ、この厄介事を終結させる筈だ。
　キースは明らかに引いた様子の周囲を見渡して、しかし気にしないように爽やかな笑みのまま、頬を指で掻き、
「早く此処から離れたほうが良い。彼女に目を付けられたらただではすまないよ？」
　その一言が皮切りになった。少年少女らは互いに顔を見合わせて、逃げ出した。誰とて無差別な爆撃魔術を受けたくないだろう。リーンの厳しさと爆発魔の悪名は学生の間でとどろいている。
　それでも、と、最後まで残った少女に対してもキースは笑みを向け、
「ほら、君も逃げたほうが良い」
「……でも、」
「彼女らの始末はこちらで付けよう。だから安心して」
　すると最後に残った少女も──最後に此方に明確な憎悪の視線を向けた後に──逃げ出した。残ったのはエレナと、少し焦ったような顔をした少女と、そして

キースという名の少年のみ。
「さて」
　言葉を呟き、キースが近づいてくる。「始末はつける」そう彼が言っていた言葉がエレナの耳には残っていた。だから反射的に、転移魔術も忘れて、キース少年に向かって、エレナは突撃した。
「……!!」
　自身の体を濃密な魔力で纏い、身体能力の強化を発動させた。速攻の一撃をキースに与える為に。怪我をさせるつもりは無いが、加減するつもりも無く、躊躇の無い一撃を奔らせた。
　だが、
「おっと」
「、なっ?!」
　避けられた。それなりにかなりの速度をだして振ったはずの拳なのに、余裕を持ってスレスレの位置で避けられた。まるでシールとの訓練の時のように丁寧に。
　もう一発、と拳を握り、今度は顔面を狙って振り回す。だがそれも首を捻るだけで狙いをずらされ、空を切った。
　体は泳ぎ、ぐらりと揺れた。その直後に、
「【封印拳】」
「っぐ!?」
　鋭い一撃が背を撃った。途端、体から力が抜けていく。何時か、シールから受けた【封断剣】と似た感覚が全身を包んでいく。
「……使いづらいな。研究が必要か」
　そんな声を聞きながら、エレナは意識を失った。

第四十二話 キース少年

　過去の夢を見ていた。過去といってもそれは、ほんの少し前の事だが
　かつての自分。強大すぎる権力の庇護を押し付けられ、心を狂わされ、惑わされ、そしてその怒りを周囲に叩きつけ振り回していたかつての彼女。覚えている。忘れる訳が無い。
　あの時は周りが何も見えなかった。見えない泥のような悪意が全身を纏わりついていて、ソレを振り払おうと、ずっと足掻いてばかりだった。それの所為で周りの人々が傷ついていこうと、おかまいなしだった。
　だけど今は、違う。シールによって悪意を払われ、自分の〝過ち〟が見える。
　近づく人を忌み嫌う権力で脅して、卑屈になる相手を哂う自分。
　誰かが大切にしていたものを壊して、知らぬ振りをしていた自分。
　こちらを想って声をかけてくれた誰かを、強大な魔力で傷つけた自分。
　全て、自分がしてきた事だ。「今は違う」なんて言葉で片付けられない。
　自分の所為で身体を傷つけられた人、心を傷つけられた人、大勢いる。大勢だ。自分の苦しみを周りに撒き散らして自分を少しでも慰めようとする
　なんて身勝手。
　なんて傲慢。
　もう、目を逸らす訳には行かない。
　だけど、だったら、どうしたら良い？

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……あ、」

夢から覚め、エレナが目を開くと、自分が知る宿舎の天井が目に映った。
　しかしみれば自分の知る天井とは対称の形をとっていると気が付く。作りが微妙に、自分が知るものとは異なるものだ。入った事は無いが、此処は性別で分けられている内の男子宿舎であると気が付いた。
　と、なると、何故こんなところにいるのか疑問が残る訳だが、
「……ん」
　ベットから体を起こすと、此処は学院の学生宿舎の部屋だった。自分もその部屋で暮らしているからそれは分かる、が、自分の部屋ではなかった。
　ぐるりと部屋を見渡してみる。本棚には古い魔道書、他にもチェス板や作りかけの魔道具が転がっている。壁には術式の刻まれたナイフや剣が飾られ、この部屋の趣味は嫌いじゃない。
　しかし、なんだろうか。身体からまだあまり力が入らない。全身が軽くぐったりとしている。何時だったか、そう、シールにのされたときを思い出す。兎に角眠い。
「……ぅん」
　まあ、いいや。寝よう。丁度ベットにいるんだし、
「寝るな」
「っきゃあ!?」
　そこに声がかけられ、一気にたたき起こされた。
　身体を起こして、今まで陰になっていたベットの下を見ると、其処に見える二人の影、一人は褪せた金髪の少年の
「……貴方」
「おはようございます。ゲルダー家の〝お嬢様〟」
　あの時、騒動に介入してきたキース少年が、そんな風に言って、笑っていた。しかし出会った頃に浮かべていたような柔和な笑みとは全く違う、なんというかやたらとニヒルな笑みを浮かべていた。なんだか先ほどまでと随分とキャラが違う。
　そしてその横には少女、あの時酷く苛められていた少女がいた。
「お、おはようございます。エレナ様」
「……おはよう」

と、エレナもとりあえず挨拶を返した。いや、挨拶するのはおかしいのだろうか。と、エレナは沈黙する。すると少女も沈黙で返し、停止した。

……やはり、気まずい。

そう思うのは向こうも同じだったらしい。少女は焦るように、

「あ、えっと、私、ミフィールって言います」

「え、ええ。そう」

「……」

「……」

再び沈黙。中々、どころか全く話が続かない。エレナは自身の引き出しの少なさに絶望した。するとミフィールはエレナが落ち込んでいるのが見えたのか、焦って、声を上げ、

「あ、あのエレナ様！「おい、こらちょっと動くな」

それをキースに押さえ込まれ、頭を下げて沈んだ。エレナもそれに習った。

しかし何故キースがそう止めるのか疑問し、よく見てみると、

「……何してんの？」

見れば、キースはミフィールの手を取って、何かの魔術を発動させている。何の魔術かとよく見てみると、その光は暖かく、ミフィールが何人もの学生によってたかって傷つけられた身体を包み込んでいく。

「治癒術だよ。悪いけど少し黙ってくれ。集中できねえ」

面倒くさそうにキースが説明し、それから魔術に集中した。

エレナが眺めてるうちに、痛々しいすり傷が徐々に消えていく。流石に保険室長のメリア程ではないが、そもそも治癒術そのものが高度な魔術だ。実際、エレナは使えない。技術が繊細すぎて、膨大な魔力を持つ彼女には調整がきかないのだ。

器用な男だ。エレナは感心しながらその治癒行為を眺めていた。

それから暫くして、治癒が完了したのか、キースが息をついた。

「……あー、疲れた」

「あ、あ、ありがとう、ございます」

蚊帳の外だったエレナを尻目に、ミフィールは深々と頭を下げ、対してキースは軽く肩をすくめるだけで済ませた。そして、さてと、と呟くとキースは立ち上

がり、エレナをじっと見下ろし始める。
　沈黙、エレナはいたたまれず、キースを見上げ、
「……何よ」
「何よ、じゃ、ねえ、」
　そう区切りつつ、拳を握り締め、ゆっくりと振り上げたキースは、
「よ！」
「痛ったあ?!」
　と、思いっきり、エレナの頭に拳を叩き込んだ。ゲンコツと言われる一撃だった。
　エレナは頭を抱えて叫んだ。瞳を閉じると、瞼の裏から光が飛び交った。中々強烈な一撃で、瞳から涙が零れる。しかし不満をぶちまけようにも、当人のキースは既に最初の善人面を思い出せないような凶悪な顔をぶら下げて、エレナを睨み続けている。
「一体何考えてんだお前は。なあ、馬鹿」
　なんだかとってもスラングな言葉をキースは吐き出す。エレナは瞬きして、
「何って、何が」
「何じゃねえよ。コイツの件だ」
　コイツ、と指差した先にはミフィールがいた。彼女は指を指されてびくっと身体を震わせたが、キースはそれを無視して、
「あいつを助けるのは良い。だが、なにあの状況を暴力沙汰で解決してんだよ」
「だってしょうがないでしょう？」
「あーなる前にいくらでも手段はあっただろ。教師を呼びつけるとか！」
「……あー」
「『……あー』じゃねえよ。何だ、馬鹿なのかお前。馬鹿なんだなお前」
　キースは納得したような顔をして、ひたすら馬鹿を見るような蔑む顔で此方を睨んできた。なんだか凄く馬鹿にされているのが分かった。
「……貴方、キャラ違わない？」
　確か最初に出てきた時は紳士的というか、非常に落ち着いた感じでいじめっ子達をいなしていたのに、今は何だかやたらとスラングだ。そこはかとなくやさぐれた感じがする。

するとキースは人を小ばかにするように鼻で笑い、
「外面なんて良い顔するに決まってんだろ」
「限度ってものがあるでしょう。二重人格ってくらいよソレ」
「ニコニコ笑ってちょっと優しくしただけで〝イイヤツ〟だ。笑える」
　キースはしれっとそんな風に、彼を慕っていたであろう学生達全員を小ばかにしたような言い草をしてみせる。中々あくどい性格をしているらしい。
　しかしどうやら彼のあのキャラはこの学院においての彼の処世術のようだった。
「まー、そんな事はどうでもいーんだよ」
　キースはそう話を区切り、
「おかげでまた〝話〟がこじれたじゃねえか。どうする気なんだよ一体」
「ちょっと待って、〝話〟って何よ」
　何って、と、キースは、
「貴族の連中と平民の連中の〝ケンカ〟だよ」
「……へー？」
「『……へー？』じゃねえって。お前分かってんの？」
「何が？」
　あのなあ、と、キースは呆れたような顔をして、
「この騒ぎの原因、お前なんだぞ？」
「……へえ？」
　エレナはぽかんと口を開けた。

第四十三話 事の発端

　事の発端は、一人の少女だった。
　オルフェス魔術学院、此処はガイディア国の中でも最高峰と呼べる魔術研究機関であり、最高峰の学習機関でもある。現在も有能な魔導師たちを排出してきた最高機関だ。
　そしてこの魔術学院において、現学院長であるミストはこう宣言している。
　魔術を学ぶ意思のある者は、その行いを援助し、差別しない。
　この学院において、貴族と平民の差別は許されていない。魔術を扱える者はその才能を余すことなく極めさせてやることが、ガイディア国の国益に繋がるという学院長の考えに基づく宣言だった。
　実際、こうして身分の分け隔てなく教育を施す魔術学習機関というのは珍しく、しかしこの方針の結果、ガイディア国の魔術習得人口は大きく上昇していると他国からも関心が集まっていた。
　故に、ミスト学院長の教育方針は、国王にも認められ始めていた。
　ところが、つい最近、そのミスト学院長の方針を完膚なきまでに無視して、自らの家の力と、自身の類稀な才能で暴君のように振舞う一人の貴族が出現した。
〝彼女〟は何らはばかることなく暴力を振るい、権力で脅し、また、自分の周りの連中に好き勝手させ、挙句に教師にまで乱暴を加えた。
　その主犯の少女と言うのが、
「……エレナって訳ですか」
　シールは、大きく溜息をついて頭を抱えた。
　彼がいる場所は、中心街に存在する一つの喫茶店【ミルフィー】。彼がよく通う素敵な茶屋だった。その場で飲む分だけでなく、質の良い素晴らしい茶葉も販売している。付け合せのデザートも非常に質がよく、近くの貴族街で暮らす奥様

方もよく通っている。
　お茶好きのシールもこの店はとても気に入っている。店のマスターとも顔なじみで、よく彼からおいしいお茶を紹介されてはそれを楽しんでいる。
　そんな彼の愛する茶屋で、しかし今、非常に憂鬱な思いをしていた。
「……いやあ、本当、どうしよっかな」
　シールはちらりと、一緒にこの店に入った二人の同僚に視線を向ける。
「ケーキ、美味しいです」
　一人はリーン、鉄面皮、美女教師。彼女はいつもどおり、まるで表情の無い顔で目の前に出されたデザートを口に運び、なんだかご満悦のような顔をしている。
「……うう、私、私、どうしたら、」
　そしてもう一人はリナ、一応、エレナのクラスの担任教師だ。エレナが荒れに荒れていた時期から彼女に振り回され、軽いノイローゼになっている経験がある。そして今、その時以上に憂鬱状態になっていた。
「うーん」
　その二人と同じテーブルにシールはついていた。傍から見れば浮気をした男とされて泣き崩れる女、そして浮気相手の女の三人構造に見えなくも無いが、実際はそんな訳が無い。何故こんな状況なのか。それはシールがリナに、正確にはリーンにつれられたリナに助けを求められたからだ。
　では、何の助けを求められたのか？
「まさか、ここまで広がっているとは……〝あの〟馬鹿騒ぎが」
　それこそが、シールも体験した、学生間に広がった貴族と平民の対立問題だ。否、正確に言えば、最初は、平民の子供達が貴族に先に手を出し、暴力を振るっていたようなのだが、結果として貴族の子供達も仕返ししているので最早どっちでも同じだろう。
　今や学院のいたるところでしょっちゅう平民の子供達が貴族をイジメ、それを貴族の子供達が咎め、言い争いをしている。それだけでなく、平民の少女が貴族の子と仲良くしていたからという理由で苛められたり、逆に貴族の少年が平民の子と喋ったから殴られたり、そんなどうしようもない事件も発生していると言う。

更には、その差別意識は教師にも向けられ、平民の教師は勉強が下手、とか、貴族の教師は教え方が傲慢、などなど、非常に下らない決め付けや偏見で授業が成り立たなくなる事もあるほどだ。
　この件について学院長は流石にその笑みを歪め、
『何も、こんな一斉に〝病気〟発症しなくても……』
　と言って、軽く頭を抱えた。
「何がどうしてこんな事に……」
　シールは疑問だった。何故こんなにも下らない、という言葉で片付けられるような馬鹿騒ぎが、こんなにも大げさに発生してしまっているのだろう？
　否、その答えを今此処で聞かせてもらったわけだが。
　まず、きっかけはエレナだ。ゲルダー家長女が荒れ、暴走したあの事件だ。
　だがあの事件は、荒みきっていたエレナの心を、シールが説得（肉体言語）した事で、既に解決している。エレナは自身の行いを見つめ直し、ゆっくりとだが、確実に、自分の更正を目指すようになっている。
　しかし、ここでシールは一件落着と見てしまったが、未だ煮え切らないものを抱え込んでしまっている者達がいた。それが、
「エレナによって傷つけられた、被害者達、ですか」
　そう、彼女自身の事とは別に、彼女達のしたい放題に巻き込まれた被害者達は、今までずっと怒りを溜め込んでいたのだ。彼らはエレナにされた事を、振るわれた暴力や罵られた言葉を覚えていた。覚えていて、憎悪を蓄積させていった。
「まあ、考えてみれば当たり前の事、ですが」
「学生全体へのアフターフォローが遅れたのが痛手でしたね……」
「元々、横暴を重ねるエレナ一行への報復騒ぎというのは何度もあったらしいです。それが実行に移される前に、貴方がエレナを更正させてしまったわけですが」
「それが余計に、子供達のストレスを抱えさせる結果になってしまったと……」
　シールは更に溜息をついた。胃も痛い。
「結果として僕の所為になるんですかね……」
「反省してください」

「そこは貴方の所為じゃないって言ってください」
「あなたのせいじゃないです」
「ありがとうございます……で、どうしましょうかね」
　リーンは神妙、に見える無表情のまま、一度頷き、
「爆発させれば、馬鹿騒ぎも止まりますよ」
「息の根まで止めないでくださいね」
　実際、彼女は爆発させて学生を止めているらしい、加減はしているらしいが。最近廊下などで黒焦げになった学生を見かけるのは彼女の仕業だろう。授業がしょっちゅう邪魔されるので、まず授業開始と共に生徒を爆発させて、それから授業を進めよう、などという若干気の狂った提案まで職員会議で言い始めた。冗談と他の職員はとったが、恐らく本気だろう。
「まあ誰もがそれくらい、開き直って振舞えれば良いんですが……」
　彼女ほど開き直れれば、学生達の暴走にも毅然と立ち向かう事が出来るだろう。
　問題なのは、と、シールとリーンは同時に、さっきから無言のリナに目を向けた。エレナの担任教師、爆心地の中心にいるリナは、二人の視線を受けて、その瞳にためていた涙を一気に爆発させた
「私！ どうしたらいいんでしょう!?」
「リナ先生、落ち着いてください」
「わ、私、何度も注意したんですけど、その時適当に濁されてばっかりで!!」
「いや、リナ先生は十分にやっているかと」
「もう！ リーン先生みたいに爆発させればどれだけ楽か!!」
「いや、それは見習わなくていいんじゃないかと」
「きっと私がいけないんです！ 私！ 若くて、だからなめられるんです！」
「……うん、ええ、もうどうしたらいいんでしょうね」
　シールは天井を仰ぎ、あらゆる言葉を呑み込んで息をついた。
　慰めようにも、話が通じない。女性のヒステリー、と片付けてしまうのはあまりに失礼な話だが、しかしこういう風に感情の坩堝にとらわれてしまった女性の相手は、未だ慣れたためしが無い。
　同じく女性のリーンなら、とも思ったが、

「その、リーン先生。リーン先生はどう……」
「この新作ケーキ、仄かな栗の香りが素敵で美味しいです」
「……ええ、おいしそうですね」
「幸せです」
「それは、上々です」
　彼女はケーキを食べる事に夢中だ。彼女は甘いものが大好物なのだった。先ほどから既に五つは平らげている。何故そんなに食べてスレンダーでいられるのか疑問だが、今はそんな事心の底からどうでもいい。
　ヒステリー状態になってしまった女性と、ひたすらケーキを貪り食べる女性、これほど嬉しくない両手に花状態も無いだろうなあ、とシールは遠い目をした。
「困ったなあ……」
　シールは溜息をついた。
　確かにイジメの問題は、常に教師の悩みの種だ。どれだけ繰り返そうと正しい答えなどなく、解決への道は長く苦しいという事は知ってはいる。しかしだからこそ、向き合うだけの心構えは持ち合わせているつもりだった。
　ところが今回の問題は、単純なイジメの問題とは違う。
　身分さの対立感情。これはイジメ以上に複雑で、難解だ。何しろ今も尚、この問題に端を発した内紛は世界で後を絶たないのだから。救いなのは、今学生間で蔓延しているのはあくまでも、〝身分対立ごっこ〟の域を出ていないと言う一点だ。だからシールは自分のクラスの生徒達の暴走は何とか収める事が出来た。
　しかし、これが、中等クラス、高等クラスになるとそうはいかない。その年頃の子供は出来る事が増えてくるにしたがって、過剰なまでの自信を得てしまっている。反抗期とも呼ばれるその時期は、大人の声が中々届かない。
　反抗期と、面倒な問題とが絡み合ってしまっている。一筋縄ではいかない。
「どう対策したものか……」
「私は既に対策済みです」
「……ええ、リーン先生はね」
　爆発させる事が解決に繋がるのかいささか疑問ではある。
、しかし、確かに彼女のクラスや受け持つ授業では、最近問題が起こらないと聞いている。暴君たる彼女を前にすれば、どんな相手でも問答無用で排除される。

更にリーンには、例え誰一人いなくなってしまった教室を前にしても平然と授業を続けられるタフネスさがある。
　だから、今問題なのは、
「……う、うぅぅぅ、ひっく、えーん」
　リナだ。彼女が担任するのはこの問題の渦中にあるエレナのいるクラスだ。元々、暴君状態のエレナの問題にも振り回されていた彼女は、今回の件で完璧にノイローゼになってしまっている。
「エルフィン先生はどう言ってました？」
「えっと、その、もうちょっとだけがんばってくれって……」
　そうだろうな、とシールは頷く。新任教師である彼女を本来なら他の教師達がフォローするはずなのだ、が、今はそれが出来ない。問題が学院全体に蔓延し、誰もが自分等の担当する学生にてんやわんやになってしまっているからだ。
　せめてもう少し、リナだけで持ちこたえて欲しいというのがエルフィンの心情だろう。
　が、この様子を見る限りでは、もう既に限界だろう。
　しかし彼女が瓦解すれば、いよいよもってこの騒ぎに歯止めが利かなくなる。何しろエレナのいる彼女のクラスこそ、この問題の発端なのだ。故に、そこが崩れれば、何もかもが決壊する。道徳も、躊躇も、だ〝ごっこ〟では済まなくなる。
　リナはそんな爆弾を一人で支え続けているのだ。ノイローゼにもなるだろう。
　そんな彼女を知っているからこそエルフィン教授は、唯一この現状に比較的余裕を持って対処できているリーンにリナのフォローを頼んだのだ。シールはそれに巻き込まれたと、それが今の流れだ……が、しかし、
「リーン先生。何とかリナ先生をフォローできませんか？」
「つまり、もっと激しく爆発させろと」
「甘いものでも食っててください」
「もっと注文して良いですか」
「どうぞどうぞ。気の済むままに」
　駄目だ。彼女にフォローを期待するとえらい事になる。主に爆発する。子供達が。

かといって、自分だって手一杯だ。一応今のところ自分のクラスは落ち着きを取り戻しているが、同じく初等クラスの子達で不安定なクラスはいくらでもある。そしてそのフォローを他の担任教師達からも頼まれているのだ。

その上、中等クラスのエレナのフォローなんて回れるかどうか……

「時間が解決してくれればいいんだけど……」

勿論、甘い期待だと言わざるを得ないだろう。子供の自浄能力はあてに出来ない。もしそれがあるのなら、教師は必要ない。子供がこの問題に〝飽きる〟のにもやはり時間がかかる。

教師の介入、やはりこれは必須だ。しかしその上で学生からの抑制が欲しい。

「エレナはどう動くかな……」

この事を彼女が知ったとしたら、かつての自分の罪を突きつけられるようなものだ。もし彼女が心から、自身の成長を望むなら、この問題に向き合わない訳には行かないだろう。

だが、彼女にこの問題の解決を望むのは難しいだろう。既に教師ですら掌握できる規模を超えている。そんなものを彼女が制御できる訳が無い。なんとかしようにも、何をどうしたらいいのかも彼女には分からないだろう。

〝人付き合い〟に関しては常人のソレにすら届かないほどに、未熟なのだから。

となれば、誰かに助けを求める必要があるわけだが、自分が助ける訳にはいかない。助けて欲しいのはこっちなのだ。しかし学生の誰かがよしんば助けてくれたとしても、生半可な人物ではこの問題に対抗できないだろう。普通の学生なら間違いなくこの流れに飲まれる。周囲の環境に飲み込まれないほど、自分を完成させている学生なんて少ない。大人だってそうなのだから。

この状況に飲まれず、冷静に判断できて、争いの抑制もできる、尚且つエレナに偏見持たず接し、助けようとしてくれるような人物、と考えて、シールは頭を抱えた。

そんな、都合のいい学生、いるわけが……

「……ああ、そういえば」

その時、ふと、昔馴染みの褪せた金髪の少年の顔を、シールは思い出した。

第四十四話 残された少女達

　男子学生寮、キースの自室にて、
「……と、まあ、こんな具合だ」
「……むぅ」
　キースから聞かされた今回の事件の概要、つまり、貴族と平民との争いの原因について聞かされ、エレナはただ唸った。
　シールによって更正してからというものの、エレナは何気なく振舞いつつも、自分のやってきた事を忘れた事は無かった。かつての自分は傲慢であったし、横暴でもあった。皆が守るルールを平然と破いて捨てたた。沢山の人を傷つけた。それが真実だ。それを自覚できるくらいには、エレナの心は回復していた。
　だからこそ、キースの話は、耳が痛かった。
　自分の過ちが今尚、色んな人の迷惑をかけて、傷つけている。
「で、何か言う事は？」
「……ゴメンなさい」
　エレナは、素直に謝った。シールに教わった事だ。過ちを犯し、人に迷惑をかけてしまったのなら謝罪しなければならない。人と人とが仲良くする為の大切なルールだ。シールからそう教わった。
　だが、キースはエレナの謝罪を、下らなそうに笑い、
「俺に謝ってどーすんだよ」
　そう言い、ミフィールを顎で指した。エレナは彼女に向き合い、改めて頭を下げた。
「……ごめんなさい。私の所為で、貴方はイジメられていたみたい」
「い、いいえ！　エレナ様の所為じゃありません！」
　するとミフィールは凄い勢いで首を振って否定した。いや、別にここまでかしこまられても困るんだが、とエレナも困った。ゲルダー家に恐縮してしまってい

るのか、そうでないのか。自分の地位からくるトラウマ。距離の測り方がエレナには分からなかった。
　人馴れしないエレナと恐縮しっぱなしのミフィールは、結果として沈黙し、互いに向き合って押し黙り続けた。キースはそんな二人を馬鹿馬鹿しそうに眺めていたが、不意に思い出したように、
「そーいや、そもそもお前、本当にそこのお嬢様と馬鹿をやらかしたの？」
　それは、確かにエレナも気にはなっていた。自分が荒れていたとき、確かに取り巻きは沢山いた、いたが、困った事に殆どそいつらの顔は覚えていないのだ。ミフィールもいたかどうかエレナには分からなかった。
　もし本当に実行していたとしたら、彼女にも非がある、という事なのだが、
「そ、それが……」
「「それが？」」
　エレナとキースはそろって首を傾けた。
　ミフィールはびくびくと青い顔をしながら、しどろもどろになって、
「私、私、あの、貴族で、だけど、没落しちゃって、」
「「……うん」」
「あの、エレナ様とは、昔、一度会ったことがあって、挨拶もできなかったけど、」
「「……はあ」」
「それで、その、お父さんとお母さんが、エレナ様と仲良くなっておけって」
「「……」」
「そういうの嫌だったんです。でも……私がイジメられていた時、エレナ様に……」
　話が、進まない。
「悪いが、さっさと本題に入ってくれねえか？」
　キースが痺れを切らしたように口を挟んだ。エレナもまた、正直耐えかねていたので頷くと、ミフィールは「すみません！」と二度三度と謝罪を繰り返し、言葉を続けた。
「その、私、エレナ様に助けてもらった事があって、それでお礼が言いたくて。だけどその、何時もエレナ様の側にいろんな方がいらっしゃって、私近づけな

かったんです」
　助けてもらった、らしいが、助けた当人のエレナは全く記憶に無かった。やつあたり気味に、目に付くムカつく奴等をなぎ倒していったような事はあったが、ひょっとしたらその時偶然そうなったのかもしれない。
「えっと、それで、どうしたの？」
「そ、それで、遠くから何時か話せないかと思って見ていたんですけど」
「……ひょっとしてそこをあいつ等に見られたと？」
「……はい」
　つまり、遠くでエレナを伺っていたのを勘違いされた挙句のとばっちりだったと
　なんとも言えずエレナが沈黙すると、キースが息をついて、
「……ノロマでドジでマヌケだな、お前は」
「情け容赦ない表現ね」
「それ以外どう言えと」
　確かに、おそろしく要領の悪い少女だった。
　ゲルダー家の栄光に縋る事も出来ず、損ばかりする。非常に要領が悪い。彼女が悪いわけではない。ないのだが、だからこそ不憫で、哀れな子だ。
「これからどうする気なんだよ」
「ど、どうするって」
「多分、お前これから更に酷く苛められるぞ。何しろ平民達が目の敵にしているエレナがお前と仲良いって、あの騒ぎで証明しちまったようなもんだ」
　キースに問われ、エレナとミフィールはますます困った顔になった。エレナは自分の所為でますますミフィールを窮地においやった事実に困り、ミフィールは折角恩人たるエレナに再び助けてもらったのに、それが自分を更に追い詰める結果となった事実に困っていた。
　ミフィールは困り果てた表情で、同じく困り果てた表情のエレナを見上げ、
「ど、どうしたら、良いんでしょう？」
「どうしたらって……」
　泣きそうな顔で、というか泣き顔でミフィールの問いかけにエレナは困惑し、呻いた。どうかしてあげたいのは山々だ。自分の所為で酷い被害を蒙る彼女を見

捨てる事なんて出来ない。
　だが、正直な所、どうすれば良いのか全く分からない。
　二人は再び沈黙した。今度は悲痛な表情をもって。
　そんな光景をキース面倒くさそうな顔をして眺めていたが、暫くするとそれにも耐え切れなくなったのか、そのままゆっくりと手を上げて、
「それじゃあ、俺はこの辺で、」
「待って」
　外に出ようとするキースの腰を、がっしとエレナは引き止めた。
　キースは心底嫌そうな顔をして振り返り、
「離してくれ」
「此処は貴方の部屋よ。何処に帰ろうと言うの」
「じゃ、出かけてくる。夜には戻る」
「そういわず、ゆっくりしていきなさいよ」
　エレナは一切腕を緩めず、魔力を利用し力づくで部屋の中へと引きずり込む。単純な魔力だけで言えばエレナに並び立つ者はいない。キースに抵抗する暇すら与えず再び部屋へと引きずり込み、そして、頭を下げた。
「どうすればいいのか教えてください」
「知るかボケ」
　キースはエレナにチョップを叩き込み、速攻で切り捨てた。
「そもそも俺はお前が滅茶苦茶やりやがったのをどういうつもりだと問いただしただけだぞ？ 何でお前に助けを求められてんだよ。おかしいだろ？」
「知らないわよ。良いから教えなさい」
「命令口調になってるぞクソアマ」
　べしりとキースははたき、そして一度大きく息を吐き出し、最後には心底までに見下げ果てた顔でエレナを睨み、
「てめえが撒いた種なんだ。まずは自分で解決する努力をするのが道理だ。最初っから人頼りにしてんじゃねーよ、クズ」
　そう言い切り、キースは大きく音を立てて扉から出て行った。残されたのはエレナと、未だすすり泣くミフィールのみ。エレナはあまりに気まずく、すぐさまこの場から逃げ出したい気分になった。

「エレナ様……」
　しかし、まるで見捨てられた子供のような少女を前に、逃げる訳にはいかなかった。
「大丈夫。必ず、助けるから」
　根拠もあてもないが、誓う。そうだ。助けなければならない。彼女を。それができなければ、変わりたいなどと思ってはいけない。本当に変わりたいなら、自分のかつての過ちを正さなければならないはずだ。
　しかし、どうやって？

第四十五話 馬鹿な男

　キース・リンベル。
　元は十数年前の戦争終結の直前、いわゆるガイディア国の暗黒時代に生まれた孤児。両親は不明であり、その姓は家族のものではなく、所属していた孤児院の名をそのまま使用している。
　魔術の才能を生まれ持っており、それを現学院長に認められている。彼と共に何人かの孤児の子供達が奨学生としてオルフェス学院への入学を果たした。尚、そこに至る経緯は秘匿とされている。
　最初は孤児の生まれということで、彼の精神面への不安を訴える貴族や教師の声もあったが、国王の認可を得て入学を認められる。以後オルフェス学院は平民の入学も進んで受け入れるようになった。
　入学当初の不安を跳ね返すように、入学後の成績は優秀、多少授業を休みがちではあるものの、学院長の期待に応える好成績を収めている。授業態度も良く、性格も温和で協調性も高い。元々孤児たちの中ではリーダー格を勤めていた様で、学生間でもリーダーシップを発揮する所が随所で見られた。
　おおよそ欠点の無い非常に優秀な学生であると言える。
　以上、キース・リンベル担当教員、日誌抜粋

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　キースは薬学の授業を受けつつ、掌で隠しながら大きく欠伸をした。
　昨日、昔からの〝友人〟の頼みを聞いて、トラブルの解決に立ち回る羽目になった彼は、徹夜明けのまま授業を受ける羽目になり、眠気と戦い続けていた。
　瞼が重く、頭には霧がかかり、身体は重い。
　だが、彼は授業の最中、教師の目の前で眠りこけるなどといった真似はしな

い。
　彼は自身の境遇について、正しく、現実的に見ていた。
　自分は孤児であり、そして平民のみでありながらこの魔術学院への編入を許された人間であり、そしてこの先のオルフェス学院の平民枠の調整のための【モデル】ともなっている
　キース・リンベルは常に特殊な立場にいる。彼はそれを自覚している。
　元より〝特殊な経歴〞〝特殊な事情〞から平民の魔術学院入学という結果に至ったのだ。それ故に彼の立場は不安定で、何時崩壊してもおかしくは無かった。だからこそ慎重さが求められる。普段の立ち振る舞い、行動、その全てが学院側から監視され、事細かに評価されている。そう考えて動かなければならない
　魔術と言う技術は非常に強力だ。そしてそれゆえに独占的になりがちだ。かつて、そういった歴史があった。それほど強力な力なのだ。
　そしてそれ故に、平民が魔術を学習する事を危惧する連中は山ほどいる。かつて、そういった魔術の独占意識が酷い虐殺に発展した過去が在ると言うのに、歴史は繰り返すものだ、と、キースは苦く思う。
　そしてそういった連中は平民層の魔術学院の入学者を憎み、何よりもキースの存在を疎んじていた。何故ならキースこそがこの学院の平民層の入学を許すきっかけとなったのだから。
　だから、彼らはキースを監視する。付け入る隙を見つけるように。
　だから、キースはどれだけ小さな事であっても、付け入る隙を与えてはならない。
　勿論、国王の認可の下、入学した彼にも後ろ盾は存在する。巨大な〝後ろ盾〞が。彼の入学を支持した者達、〝途方も無い〞力を持つ〝彼ら〞の後ろ盾は、万一の事態が起こったとき、間違いなくキースを擁護してくれるだろう。例えどれだけ大事になろうとも〝無かった事〞に出来るくらいの力はあるのだ。しかしキースは彼らに頼るのは嫌だった。だからこそ、普段から彼らに頼る事の無いよう、優等生を演じているのだ。
「それではキース。この魔法薬製造工程にある問題点を述べなさい」
「はい」
　教師の指示にキースは立ち上がり、余裕すら漂わせる微笑と共に答えを述べ

る。
　その姿はまさに優等生、キースは意図的にそう演じている。彼は完璧を演じるように勤め続けていた。完璧に自分が程遠くても、学生と言う身分の範囲なら、それくらいは演じられる。
「魔素の抽出のため使用する器具の一つ、紅水晶の特性に注意が必要になります」
　スラスラとよどみなく答えていくキースは今日も優等生だった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「キース君。ここの課題教えてくれないかしら？」
「ああ、構わないよ」
　授業が終わってもキースの〝演技〟は続く。彼の優等生さは同学生達にも向けられる。同学生だからといって気は抜かない。マイナスの噂は一片すら流す事はしない。
　しかし、同級生に向ける演技に関しては、正直、彼は苦労とは思っていない。同級生、子供の心は難儀だが純粋で、そして意外なほどに安易だ。さほど手間でもない優しさを見せれば容易く子供は靡く。収入を得る為に社会に従属する大人と違って、子供の好き嫌いはシンプルだ。
　能力の優れるものを好み、能力を劣るものを嫌う。気の合う者を好み、合わない者を嫌う。顔の良い者を好み、悪いものを嫌う。口の達者なものを好み、口下手なものを嫌う。
　子供の評価はおぞましい位の現物主義者なのだ。
　だからキースは優秀である事を演じる。幸い顔も悪くは無い。それなりの優秀さと軽い優しさ、社交性を見せればそれだけで簡単に友情なんてものは〝釣れる〟のだ。
　勿論、同級生の中には複雑な感情を抱き、独自の考えを持つ者もいる。あるいは有能である人を疎んじ、憎む人もいる。だが、キースとて誰からも好かれようとは思わない。重要なのは〝なんとなく〟いいやつだと思われることだ。
　大衆の意見が、〝雰囲気〟が自分を肯定すれば良い、そう考える。子供は流さ

れやすい。〝雰囲気〟が彼を肯定すれば、皆それに従う。彼の能力を疎む者も、わざわざその〝雰囲気〟喧嘩を売る気にはならないだろう。
　今はソレとは別に一つ、厄介な問題が発生しているが、それも問題では無い。
　この雰囲気を維持し続ければ、関わり無く、流せる。キースはそう思っていた。
「キース。明日、皆で街に遊びに行かないか？」
「ああ、ゴメン。今日は孤児院の方を手伝わなければいけないんだ」
「またか？ 大変だなーお前も」
「全くだよ。悪いね」
　なお、学院での交友関係は、一定のライン以上踏み込ませぬよう気を払う。別に彼らと仲良くするつもりは無い。維持するのが面倒だし、深く関われば関わるほど此方の行動が制限される。だから一定の距離でラインをとる。
　孤児院、というのは、彼が入学する以前所属していた院で、手伝いに行くのも事実だ。しかし誘いを断る大義名分とすれば、周囲からも悪い感情は思われない。むしろ孤児を守ろうとする優しい〝ヒト〟として伝わるだろう。
「それじゃあ、また」
「ああ、またなー」
「またね、キース君」
　返事が響く。声の質からも悪意のある返事は無い。キースはそれを確認し、笑みを維持したまま扉をくぐり、教室を出てからも規則正しく歩みを進め続ける。時折、すれ違う教師に頭を下げて、笑みを浮かべつつ、校門の逆方向へ歩き出した。
　周りに誰もいなくなる。旧校舎の奥の方まで、そして、周りに誰もいなくなったのを確認し終えると、微笑を崩して、
「……はぁ、だりぃ」
　キースは〝素〟に戻って大きく溜息を吐いた。別に彼とて好きで優等生を演じているわけではない。自分の特殊な事情がそうするだけで、本来の彼は年相応の少年だ。
〝普通の人間ではないが〟感性はまともだ。だから疲れるものは疲れる。
　そんな彼だから、演技の後は必ず一人になりたがる。こうして誰もいない所で

ようやく仮面を取り払って一息つくのが彼の学院での日課だ。今日も彼はゆっくりと、素の自分をあけっぴろに出していた。
　だから油断していたのだろう。後ろからの気配に、声をかけるまで気が付かなかった。
「おい、緩んでるぞ、キース」
　一瞬、キースは身体を跳ねさせて、急ぎ表情を作り振り返る。引きつりみたその顔は、
「っ、何だ、ネジかよ」
　ニヤニヤと笑みを浮かべながら手を振る、背の高い少年。全体的にひょろひょろとした印象で、しかしどこか愛嬌があるその知った顔に、焦ってとりつくろった優等生の笑みを崩し、馬鹿馬鹿しそうに頭を掻いた。
「学内じゃ話しかけんなっつってんだろ。ネジ」
「いーじゃねーかよ。誰も見ちゃいねーって」
　確かに周囲には誰もいないが、しかしやはり気が抜けない。学内で〝自分〟を知っている彼とはあまり長く話していたくないのだ。
　ネジは、キースと共に学院に入ってきた一人であり、入学する前から彼の友人でもある。しかしネジは基本的に、キースのような演技はしていない。彼はあくまでも平民の魔術師見習いとして入学しており、モデルとしては見られていない。
「つーか、ずるい話だ。何で俺がこんな真似しなけりゃならないんだか」
「ま、此処にいられるのは感謝してるんだぜ？　〝リーダー〟」
「その呼び方は止めろっつってんだろ。ネジ」
　キースはうんざりするように言うが、ネジはケラケラと笑うだけだ。
　彼は昔からそういうキャラだ。ひょうひょうとしていて、人の事をからかって笑うのだ。悪い奴ではないのだが、面倒な奴だ、とキースは苦く笑う。
「お前は最近どうなんだ。上手くやってるのかよ」
「ああ、最近一つ下の可愛い女と仲良くなれた」
「誰が女の話をしろっつったよ」
「出来れば最後まで行きたいんだ。アドバイス頼むぜリーダー」
「知るか。そしてその呼び方を止めろ」

そんな風に下らない雑談を、二人は茂みに座り込みながら話し続けた。普段は話さないような腹を割った雑談が、キースには何だかんだで楽しかった。

「あー、そういや、リーダーは最近どうだよ。貴族の奴等と」

「どうって？ 何だよ」

「最近よくあんだろ？ 貴族がどーのとか平民がどーとか」

「あー、アレな」

最近、その〝原因の女〟に出会った事があった。想像していた以上に間の抜けた、しかもやたらと要領の悪い女だった気がする。一時荒れて、それをシールに諌められ更正したというのはキースも知っている。それなりに有名な話だ。

だから何とかしたいと彼女が想っているのだろうが……まあ、無理だろう。あそこまで要領悪い、世間知らずのお嬢様だ。精々引っ掻き回して余計に問題を悪化させるくらいしかできる事は無いだろう。

しかし、まあ、はっきりいってどうでもいい。厄介ごとから避ける術は元より敷いている。この馬鹿騒ぎが静まるまで、上手く逃げ切れるだろう。

「精々上手く逃げるさ。お前はどうだよ」

「クラスの貴族の奴等がわけの分からない絡み方をしてきてさ」

「お前は体がでかくて目立つからな」

キースはネジの図体のでかい体を見上げて、呆れた声で言った。二人は子供時代を同じ餓えた暮らしをしていたのに、どうしてこうも違うのか。キースは、自分の平均未満の背丈を見て、若干諦めたような声を上げた。

「で、絡んだ奴等はどうしたんだ？」

「一人ぶんなぐってやったら、逃げた」

「もう少しおとなしくしろよ。俺が尻拭いする事になるんだ」

「だったら何とかしてくれよ。リーダー」

ふざけんな。そう返す。ただでさえ面倒ごとの多い人生。これ以上はゴメンだ。

「ほとぼりが冷めるまでまってろ」

「なんとかしてくんねーの？」

「何で俺がしなきゃいけねーんだよ」

問い返すが、ネジはニヤニヤと笑うだけだ。したり顔がムカツク。キースは馬

鹿馬鹿しくなって手を振って、自室へと足を進めた。
　この問題を解決しないといけないのは俺じゃない。と、キースはエレナの顔を思い出し、その彼女に向かって、
「まあ、精々頑張ってくれ」
　そんな風に他人事のように告げた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　キースの日常から数日後、学院男子宿舎、自室にて、キースは唸っていた。
「……で、何やってんだ。お前」
　自室の床に倒れこむボロ布のようなエレナと、それを介抱するミフィール。何故自分のプライベートルームにこの二人が沈んでいるのか。あまり考えたくなかった。関わり合いになりたくないとそう願っていた筈なのだが。
　エレナは、キースの問いかけにゆっくりと身体を起こして、
「そ、その、争いを止めようとして」
「止めようとして何でボロボロに何だよ」
「そ、その、エレナ様、頑張ってたんです」
　ミフィールが彼女を擁護するように言葉を続ける。曰く、エレナは苛められそうになってるミフィールを助けようとしたり、他に苛められている子供を助けようとしたり、頑張ったらしい。頑張って、結果としてその苛められている子の代わりに巻き添えをくったり、変わりに殴られたり、魔術で吹っ飛んだりしたらしい。
　結果として、ボロ布になって今キースの目の前に転がったらしい。
　キースは心底呆れた顔になった。
「……何よ」
「……いや、想像よりも遥かに増して馬鹿なんだな。お前」
　キースは額を揉んだ。頭が痛かった。まさかこの少女、エレナがここまで要領の悪い奴だとは思わなかった。世間知らずといえど、以前不良貴族達を率いていたのなら、ある程度、人心コントロールの能力を持っていると思っていたのだが……

しかしどうやら彼女にはそういう能力は欠片も無いらしい。
　いや、まあ、そんな事はどうでもいい。
「で、どうして俺の所に来たんだよ」
「助けてください」
　どストレートなヘルプが来た。故に、
「帰れ」
　キースは即座に拒絶した。
「どうしたらいいのか分からないのよ。どうすればいいの」
「だからって、何で俺に聞くんだよ」
「貴方、要領よさそうだから」
「それだけで知り合い未満の俺に助けを求めるな。他をあたれ」
「貴方以外あてが無いのよ」
「〝シール〟にでも聞きゃいいだろ」
　彼女を更正させたシール。彼ともキースは知らぬ仲ではないが、それを今語る意味は無い。兎も角彼女をここから追い出したかった。しかしエレナは眉を顰め、
「彼の教室も大変らしいのよ。助けなんて求められないわ」
「だろうな？ お前の所為だ。本当碌な事しない」
「……」
　容赦なく言葉で攻める。さっさと追い返すために。
　だが、エレナは反応しない。顔をむっすりとさせながらも、じっとその場を動かない。どうやら本当に、自分以外に当てが無いらしい。そうでなければこんな友人どころか知り合い未満の男の部屋に居座ろうとはしないだろう。しかし、だからといって此方が彼女を助ける理由は欠片も存在しない。彼女は自分の身内でもなければ友人でもない。
「もういいから、さっさと帰れっての」
「……どうすれば助けてくれるの」
「全裸で三回回って犬のマネしたら助けてやるよ。さっさと帰れ。失せろ」
「分かったわ」
　は？　と聞きなおそうと振り返ると、女子の制服のリボンを引き抜いてボタン

を剥ぎ取ろうとしているエレナがいて、
「ア・ホ・か！」
　キースはとりあえず目の前のストリップを止めるため、殴った。頭を。
「お前には羞恥心と言うものが無いのか！」
「貴方脱げといったんでしょ?!」
「本気にするか普通!? 出ていけっつったんだよ!!」
　ものすごい馬鹿なのか。自分に価値を感じていないのか。いずれにせよ、自分のことが恐ろしくどうでも良いらしい。本気で躊躇と言うものが無かった。
　すると今度はエレナは両手を床につけて、頭を下げる。土下座だ。
「お願いしますから助けてください」
「……あのなあ」
　自尊心を何一つ持ち合わせない、持つことが出来なくなった少女を前に、キースは口を開きかけ、閉じる。この女はどんな事になろうとも此処を動く気は無いらしい。本当に、本当に頼るあてが無いのだ。
　しかし、やはり迷惑だ。
　この女をわざわざ助けてやろうと言う気は、此方には全く起こらない。ゲルダー家の長女、恩を売っておけば役に立つかもしれないが、正直そうすることも面倒くさい。必要以上に権力に擦り寄る事は逆に落とし穴にはまる事になる。
　何より、〝ゲルダー家とのコネは既に獲得しているのだ〟
　だから、必要ない。キースは彼女を追い出す決意を新たにし、
「うぜぇんだよ。迷惑なんだっての。消えろ。死ね」
「お願いします」
「いや、だから」
「お願いします」
「あの、な……」
「お願いします」
　エレナは此方の言葉を一切聴かず、深々と頭を下げて、というか土下座姿勢のままキースに助けに請うてくる。自室に女二人を入れて一人に土下座させている男の図が完成していた。こんな所を見られれば誤解を招くどころの騒ぎではない。しかし、エレナはそんな事を気にせず、微動だにしない。

「……この」
　更に罵倒を重ねようとして、キースは言葉を飲み込んだ。相手を傷つける言葉を考えるのは、疲れる。それに、今更どれだけの罵倒を重ねても動くとは思えなかった。
　エレナの認識を改める必要がある。
　この女は愚かしく、世間知らずの馬鹿だが、〝飛び抜けた〟女だ。
　自らの罪、それに過ちと認め、向き合う事は誰だって嫌なものだ。自身が失敗したのだと認めるのは辛い。苦しい。大抵の人間はそれから目を背けて、過去に埋もれさせて忘れようとする。どれほど強い人間だってそうしてしまいたくなるのだ。
　だが、彼女はそうしない。それは誇るべき自分が無いからだ。だが何より、誇るべき自分になる為に彼女は罪と向き合ってる。前へと、自らを前進する為に必死になっている。足掻き、悶え、それでも前へと。
　いずれ、彼女は、その意志の強さ相応の人物になるかもしれない。
「……はあ」
　何故俺に関わる女は、殆どがまともじゃないのだろう。
　しかし、そんな変な女に、少しながら情が移ったのも事実だった。キースは未だ地面に頭をへばりつけているエレナの頭を叩き、顔を上げさせる。端整で、真剣な表情のエレナを前に、キースは肩を竦めて、
「……わかったよ」
「……本当？」
　心配そうに仰ぎ見るエレナを見下ろして、俺は馬鹿だと、キースは大きくため息をついた。

第四十六話 解決への一手

「で、お前はどうしたいんだ？」
　キースは自分のベットにどっかりと座り込むと、物凄くぞんざいな表情で、床に正座したエレナとミフィールの二人を見下した。問われたエレナは暫く考えながら言葉を選び、一言、
「今の騒ぎを止めたい」
「曖昧すぎる」
　ぴしゃりとキースはその答えを断ち切った。
「お前みたいな駄目人間が一人でそんな事立ち回れるわけ無いだろう」
　エレナ個人の問題であるなら兎も角、既にその垣根を越えて、貴族と平民などと言う言葉にし難いややこしくて複雑な問題にまで発展しているのだ。既に現状は、エレナの手に負える代物ではない。
　それなのに、その問題を解決したいなんて曖昧な目標達成できる訳が無い。
「じゃあどうしろってのよ」
「目的を明確にしろ。何をすべきか。何がしたいのか」
　何もかもを手出しする事は出来ない。この世の中は人の両の手で抱えられるほど小規模ではない。大切なのは選ぶ事。自分が何をしたいのか、何を守るのか、それを明確にする事。
　エレナは慣れない事に時間をかけつつ、ゆっくりと言葉を考え、選び、
「この騒動で無関係なのに巻き込まれて、迷惑をこうむる人を助けたい」
「……全然絞れてねえけど、まあいい」
　額に皺を寄せながら、キースは溜息をついた。
「じゃ、まずはコイツだな」
　そう言って、キースはあごでミフィールをしゃくる。その時まで、何故自分が

ここにいたのかも良く分かっていないようなミフィールは、
「え、は、はい！　ええ!?」
　と、驚き、戸惑う彼女の腕をキースは引っつかむと、彼女を引きずり起こし、呆然としていたエレナを振り返ると、
「おい、何してんだ。行くぞ」
「行くって……何処へ？」
　キースは扉を蹴り開け、やさぐれた笑みを浮かべて、言い放つ。
「問・題・解・決」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……此処は？」
　キースに連れて行かれたのは、鬱蒼とした茂みと伸びた弦で囲われた旧校舎、現在この校舎の教室では授業は行われず、その代わり学生間で行われる課外活動。つまるところ〝サークル〟〝クラブ〟を開くための部室となっていた
　勿論今までエレナには縁の無い、どころか近くにすら来たことがなかった。
　キースはエレナの疑問には答えず、そのまま校舎の中へと入っていく。エレナとミフィールは慌てて彼の後を追っていった。
　外の廃墟のような外装とは違い、中は意外なくらいに綺麗に整えられている。校舎を
利用している学生が教室を利用する引き換えに自主的に清掃を行っている為だった。
　小奇麗な廊下には、既に今日の授業を終えた学生達が各々の活動を楽しむために集まっていた。どこか充実感に満ちた表情をした彼らを羨望の眼差しでエレナは眺めつつ、
「何故私はこんなものかぶらなければならないの？」
　尋ねた。エレナは今、キースに貸し与えられた帽子を深々と、目が隠れるくらいになるまで被らされていた。キースは此方の帽子の縁を掴み、更に深く被らさ

れて、
「今の自分の知名度を自覚しろ。この現状でお前がほっつきまわればそれだけで馬鹿みない馬鹿騒ぎが発生するんだよ」
　最早動く爆弾のようなエレナは、しかし反論する事もできず、黙ってキースについていった。
「此処だ」
　キースは足を止める。そこは元は職員の事務室だったのか、広い部屋だった。窓から中の様子が見えるが、中にいる学生達はなにやら机に向かってひたすら何か文字を書き込んでいる。
　扉の上に掲げられた文字を読んでみると「執筆部」なる言葉が刻まれていた。
　エレナとミフィールがぽかんと、その文字を眺めているうちに、キースはさっさと部屋の中へと入っていった。二人が後に続いて部屋に入ると、部屋の住民達が突如やってきた来訪者に視線を向けた。
　その中でも一人の少年、背丈の低い、多分エレナよりも一つか二つ年齢の低い少年がキースをみて、にっこり笑ってやってきた。
「〝リーダー〟じゃないっすか！　どうしたんすか!?　またエミリアさん関係で？」
　知り合いらしい。キースは少年に対してクリ、と呼んで、
「エミリアは関係ねえよ。野暮用には違いねーけどよ……あー、めんどくせえ」
「そうなんすか!? あれ、後ろの二人は!? 二人も女連れって流石っすね!!」
「そんなんじゃねえって……リドは？」
「あー、姉さんなら奥の部屋っす」
「ありがとうよ」
　キースがそう言って手を振ると、クリと言う名の少年は「お安い御用っす！」と、嬉しそうに手を振って、再び元の座っていた机の前まで戻っていった。あんなにも落ち着きのなさそうな少年なのに机に座ると他の部員達と同じように集中した表情で何かのピンナップなのか、それを集中して作り始めた。
　他の子たちも同様だ。だが、幾らかの学生達は未だ此方に、正確にはキースに視線を向けていた。それがどういった類のものなのかは知らないが、何処と無く、好奇と好意の入り混じったようなものだとエレナには感じた。だが、キース

はそれらの視線を何も気にせず、そのまま部屋の奥へと進んでいく。
　部屋の置くには更に一つ扉があった。部長室という言葉が刻まれたその扉を、キースは無遠慮にノックもせず開ける。
「リド、いるか」
　部屋の中もまた広く、しかしそこかしこに積まれた本と、そして何かの資料の束で狭く感じてしまった。その部屋の中心、古くて大きくて、大量に資料の積まれた机の上で、一人の少女がゆっくりと頭を上げ、此方を睨みつけた。
「……うるさいわね、こちとら徹夜明けなのよ」
　資料に埋もれた身体を起こしたのはエレナと同じ年くらいの少女だった。癖毛を無造作に伸ばし、薄っすらと開かれた瞳は青色、頬にはソバカスがあり、額には何箇所か手直しされてるボロボロの眼鏡が引っ掛けられている。
　そんな、女性らしさの欠けらも無い少女、リドにキースは近づき、
「頼みがある」
「貸し一つね」
　リドは、何の頼みなのか、そういった質問を一切せず、そう即答した。
「……お前は、昔の仲間を助けてやろうっつー気にはならねえのか」
「そんなお人よしは貴方だけよ。〝リーダー〟。で、どういう事情なの？」
　奇妙な呼称と共に、少女リドは来訪者達を眺める。そしてエレナに視線を定め、
「噂のゲルダー家のお嬢様が此処にいる理由、聞かせてもらいたいわ」
「噂？」
「あら、知らない？　平民の〝過激派〟の内では彼女、今や賞金首らしいわよ。彼女を屈辱に合わせた者に金一封ってね。誰が先に彼女を〝イジメ〟られるか競争中」
　キースはげんなりした顔でエレナを見つめ、
「お前……よく他人に構ってる余裕あったな」
「私、向けられた魔術、全部弾いたから。創作魔術で」
「天才め。ムカつくわ」
「ちょっとー、私を無視すんじゃないわよー」

「なるほどね……ま、大体こっちで調べた話と似たり寄ったりだわね」
　キースの説明を聞き終え、リドはテーブルの資料を眺め、そう語った。
「調べた？」
「【執筆部】は毎月、学院の内外の情報誌を発刊しているのよ。だから、記事に載せるための情報収集なんてお手の物。お一ついかが？」
　そう言って渡されたのは雑誌は、中々に派手でゴテゴテした文章の踊る、俗っぽいものだった。しかし一度その内容を流して見ると、意外なほどに精緻な文章と共に、興味引かれる内容が面白おかしく書かれていた。
　とても学生の内で作られたものとは思えない出来だ。そうエレナが感心してると
「あ、一〇〇ゴルドーね」
「……お金取るの？」
「流石にそのクオリティ維持するには金がいるのよ。無償でやっててもね」
　文章の大量印刷や写真撮影の為に魔導機を無償で利用させてもらっているが、それらのそれでも経費は中々馬鹿にならない。執筆部はかなり大きな部の為学院からも部費を提供されているが、それだけでは足りない。
　その為特別に、その使用目的を明記しそれ以外に利用しない事を必須条件に、冊子の販売を認められたのだ。学院側は、価格をつけた時点で売れる訳が無いと高をくくっていた所もあったのだが、好調に部数を伸ばし、売れている。今や本物の出版社からもスカウトが来るほどだ。
「苦労したのよ？ 此処に至るまで。どんだけあのジジイにアピールしたか」
「おい、話逸れてるぞ。戻せ戻せ」
　キースが手を叩き、話を無理矢理元に戻す。
「現状は、まあ、もう分かってるな。貴族と平民の大喧嘩。というか貴族への平民達の報復行為の暴走。で、エレナ嬢はそれを止めたいと言ってる」
　なるほどね、とリドは頷き、しかしその後直ぐにその愛らしい顔に似合わない、皮肉な苦笑を浮かべ、息をついて、

「そんなの、無理に決まってるじゃない。【暗黒時代の英雄】じゃあるまいし」
「英雄？」
　エレナの疑問にリドは「知らないの？」と首をかしげ、
「暗黒時代……十年前、戦争終結後の荒廃した時代を平和に導いた英雄よ。腐敗した貴族を成敗して、荒れ果てた平民をまとめ、引きこもっていた王を改心させた一人の男……有名な話よ？」
　話の流布を国が止めたから、表立って話されていないけど、とリドは付け加えた
　エレナも記憶を辿る。十数年以上前、確かにこの国は荒れていた。ゲルダー家の加護の内でずっと守られていた上に、その頃自分はかなり幼い。殆ど記憶に無い。
　ただ、ゲルダー家は今も尚強い力を持っているのは、その時代、腐敗した貴族と敵対し、平民達を支持したからこそそのものだと言う事は、エレナも知っている。
　しかし【英雄】と呼ばれる者が存在したという事までは知らなかった。
「おいおい、いい加減本題に入らせてくれないか？」
　思考に入りかけていたエレナはキースの苛立つ声にゆり戻される。
　リドは何故かニヤニヤと笑みを浮かべた後に、
「悪かったわよ。で、私にどうして欲しいの？」
　キースは溜息をついて、そのまま引っつかんだままのミフィールを前に突き出した。
「この女をお前のサークルに入れてやって欲しい」
「……この子ぉ？」
　おどおどと、何が何だか全く理解できていない風のミフィールを、リドはじろりと睨みつけ、観察する。
「なんか……すっとろそうね」
「ああ、ついで言うとどもり癖があって人見知りが激しい。要領も悪い」
「……そんな子を入れてくれって？」
「だから頼むって言ってんだよ」
　あーそう、と、言って、ミフィールをもう一度睨む。ミフィールは彼女の視線

に怯えつつも、しかしその場から逃げないように必死になっていた。その様子まで見て、リドは息をつき、
「……了解。分かったわよ。で、貴方、名前は？」
「え、は、はい、私、ミフィールです！」
「あ、そう。じゃ、行くわよ」
　そういって、ミフィールの腕を掴んで、そのまま先の部室に直進する。え？　え？　と疑問の声を上げ続けるミフィールに、リドは笑みを浮かべ、
「部員紹介よ。あんたこれから私の〝部下〟になるんだから、しっかりしなさい」
「え、でも、え？　私、あの」
　混乱するミフィール、対しキースは笑いかけ
「苛められたくないんだろ？」
「そ、それは勿論」
「じゃ、頑張れ」
　その一言と共に、ミフィールはリドと共に部室につれられた。扉の向こうでは何かの騒ぎと、やんやの喝采のような声が聞こえてきている。エレナはその様子を呆然と眺めて、しかし慌てたように首を振って、
「ちょっと？　対策って、ミフィールを〝執筆部〟に入れるだけ？」
「そーだよ」
「それで解決する訳？」
「まーな」
　そういわれても納得できない。エレナは散々苦労しても、ミフィールに降りかかる火の粉を払えなかった。だというのにキースは友人だか何だか知らないが、その人にエレナを預けて、それでもう大丈夫だという。
　納得しろと言うほうが無理だと言うものだ。
　キースは、そうだな、と、言葉を切り出して、
「そもそもだ。どうしてミフィールが苛められると思う」
「嫌われているからでしょう？　そして恨まれているから」
　そもそも嫌っていなければ、恨まれていなければ、ミフィールへあんな仕打ちが出来るとは到底思えない。元は加害者側だったエレナですら残酷で、見るに耐

えないような卑劣な真似だった。多くの人間でよってたかって
　だが、キースは軽く首を振り、
「はずれちゃいないが、正確じゃない」
　そう言って、言葉を続け、
「誰かを嫌うって体力がいるんだよ」
「体力？」
「嫌うって疲れるんだよ。あいつが憎い、あいつをやっつけてやりたい、そう言う風に思うだけでもどんどん疲れる。疲労する。永遠に維持なんてできない」
　感情を磨耗する。苛めの原因はあったのだろう。今回の場合、エレナを取り巻いていた横暴な暴力事件。これが発端だ。確かにその時点では正当な怒りや憎悪があったのかもしれない。だが、その怒りを全員維持できるとは思えない。
　そもそもエレナの暴力事件を、イジメの加害者全員が受けた訳が無いのだ。
　そんな奴等が、全員〝怒り〟という感情を保てる訳が無い。
「じゃあなんで、あんな酷い事が出来るの？」
「わるふざけ」
　一言、キースの言葉に集約された邪悪さに、エレナは顔を顰めた。
「……ふざけてるの？」
「だから、ふざけてんだよ。大抵の奴等にとって、イジメなんて遊びだよ」
「そんな、遊びなんて」
「誰かを傷つけるって楽しいぜ？　　　それをお前は一番良く分かってる筈だよな？」
　そう言われ、エレナは沈黙した。自分の過去、やつあたりのように周りを傷つけた時、己の心中に浮かんだ感情。どうしようもない罪悪感と自己嫌悪、それらに隠れた感情。弱い相手を踏み潰す快感。人を見下す事で安堵していた自分の心。
　それは誰の内にでもある、負の感情だ。
「だから、皆、そうするのさ。人を傷つけて見下すのが気持ちいいから」
「じゃあ、そういう奴等は、ミフィールの事を」
「どうでもいい、くらいにしか思ってないんだろうよ」
　その〝苛められている子〟の事が「どうでもいいから」苛める。別に苛めた所

で心は全く痛まないし、可哀想とも思わない。彼らにとって苛められている子供は、地面に転がる石ころと一緒だ。蹴っても無視してもいい。だけど蹴り飛ばしたほうが愉しいからそうする。それだけ、罪悪感も希薄だろう

　なんともいえない不快な感情が己の内に浮かんだ。しかしかつての自分はその感情に浸っていた。だから、その「わるふざけ」の連中を攻める事は自分には出来なかった。

「でも、それを止める為に、どうしてこの部にミフィールを？」

「蹴り飛ばして遊ぶには〝手痛い〟相手だと、そう思わせる為だ」

　小石を蹴るな、といって聞かないなら、その小石に〝トゲ〟を仕込めばいい。ただ蹴って遊ぶには面倒な相手だと、手間のかかる相手だと、そう思わせれば苛めはその熱を失っていく。

　動機が曖昧なら、ほんの小さな妨害でイジメは消滅する

「じゃあ、これは、」

「トゲを仕込んだって事だ」

　キースはそう言って、面倒くさそうに頭を掻いた

第四十七話 無気力な解決者

　エレナがキースに協力を要請し、彼が彼女の手を取って、数日が経過した。
　中等クラス、魔術学院と銘打つこの学院でも当然国語や数学などの基本的な学習事項は存在する。社会の中心に魔術と言う力が働くこの世界においても、基礎的な文章構築や計算ができなかったりしたら困るのは当然だからだ。
　この教室はそうした基本的な学習をするために設置された最もポピュラーな教室であり、同じクラスの生徒達はまず、こうした決められた教室に出席しなければならない。
　学ぶ魔術学によって選択授業が多いこの学院においても、そうした所は魔術を学ばない普通の学習教室とそう変りはしない。その授業を受ける生徒達も、その身にどれだけ魔力を保有していようとも、普通の子供とその挙動は変る事は無い。普通に笑い、普通に遊び、そして普通に授業を受けるものだ。
　そのクラスに所属するミフィールは、悲しそうに自分の机に目を落している。
　彼女の机には、ズタズタに刻まれていた自分の教科書が合った。明確な、悪意ある何者かの攻撃、ミフィールは彼女は押し黙って、そっとその教科書を自分のバックにしまった。
　そんな彼女に対して、遠巻きにニヤニヤと笑みを浮かべる子達はいても、彼女を慰め、話しかけようとする子供は存在しない。その惨状から目を逸らすか、あるいは哀れむような視線を向けるだけで、他は悪意ある視線が圧倒的に多かった。
　あからさまなイジメの光景がそこにはあった。
　ミフィールは涙を見せないように顔を伏せて、必死に堪えようとした。ここ最近、こんな風に自分の私物が盗まれて、ひどい状態で打ち捨てられるしょっちゅうだ。この前は自分の体操着が盗まれ、土汚れでドロドロになって帰ってきた。
　絶え間ないイヤガラセ、それでも勉強は続けている。こんな真似をされたせい

で成績が落ちるのが嫌だったから。でもそうすると、今度はガリ勉だのなんだとのと、更に暴挙に拍車がかかった。生意気だ、ムカツクと。
　どうしてこんな酷い事が許されるんだろう。
　否、許しているのは自分だ。自分が彼ら彼女らの悪意を許しているのだ。
　言えばいいのだ。あらん限りの勇気と力を振り絞り、「やめて」と。そして戦えば良い。実際、エレナも何らかのいやがらせを受けていると聞いているが、彼女は平然としている。むしろそういう悪意に対して毅然と立ち向かい、撃退している。
　なのに、ミフィールにはそれはできない。やろうとすると、心が縮こまってしまう。喉が痙攣し、声もでなくなってしまうのだ。
「早く死ねばいいのに」
　ぼそりと、嘲りの笑いと共に彼女に向かって呟かれる言葉に、ミフィールは身体を小さくさせて、必死になって声を聞かないようにした。
　怖い。怖い。怖い。周りの視線が怖い。悪意に満ちた視線が怖い。どうしたら良いのかも分からない。この教室に味方は一人もいない。エレナも今ここにはいない。常に自分を守ろうとしてくれるけれど、自分の教室にまで彼女を連れ込む訳には行かない。自分の騒ぎに彼女を巻き込むわけにはいかない。
「……エレナ様」
　それでも、堪えるために守りの言葉のように呟く。だけどもう駄目だった。耐えられれそうになかった。瞳から溢れた涙が、ついには零れそうになってしまった。
　だが、その時、
「やっっっと見つけた!! 何してんのよ!!」
　ずだごがばこーん、という派手な音と共に扉が開かれた。扉を開いた主は一人の少女であり、その彼女が恐ろしい形相で仁王立ちしていた。
　あまりの衝撃に先ほどまでミフィールをイジメていた学生等も、この教室にいる誰もが呆然とした。そして誰よりもミフィールが一番驚いていた。あんまりにも驚いたため、零れかけた涙も引っ込んでしまった程だ。その彼女に、少女、リドはずかずかと音を立てて近づき、
「何してんの！」

思いっきり、彼女の頭を引っぱたいた。スパコーンという非常に小気味の良い打撃音が教室に木霊し、再び教室にいる誰もが呆然とした。先ほどまでの凄惨な、悪意と残酷さに満ちたその雰囲気がどこかに吹っ飛んでいってしまった。

雰囲気をぶち壊したリドはまるで気にする事も無く、ミフィールを睨みつけ、

「朝は集会があるから部室集まれっつったわよねぇ？」

少女、リドの恐ろしい剣幕と表情に、ミフィールは半ば混乱しつつ、

「あ、あ、あ、あ、あ、あの、」

「あ？　なに言ってん？　馬鹿!?　いーからさっさと来なさい!!　仕事が待ってんのよ！」

「でも、その、授業が」

「一回や二回サボった所で死にはしないわよ！　さ、行くわよ!!」

そういってミフィールを引きずるようにして教室の扉を開き、教室中の視線を集めながら出て行こうとして、しかし、扉を閉める直前、リドは振り返った。そして静かに

「何、見てるのよ」

何処か、普通の子供が身に付けるものとは次元の違う、凄みというか殺意と言うべきものを漂わせながら、リドは周囲を睨みつける。好奇と、遊びを邪魔された敵意の入り混じっていた同級生らは、彼女の恐ろしい雰囲気にすぐさま視線を逸らした。

理解できぬ者、こちらの理屈の通用しない相手に言葉を投げかけられるほど彼らに勇気などなかった。

「死ねクズどもが」

最後に、ミフィールが告げられた言葉を更に残酷にした言葉を吐き捨て、入ってきた時と同じくらいけたたましい音を立てて、リドは扉を閉めた。その音の凄まじさに再び生徒等は身体を震わせ、沈黙した。

その後、冷え切った教室は、担任の教師が入ってくるその時まで、沈黙したままだった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

リドにつれられて、というか引きずられて教室を出たミフィールは、旧校舎へ向かう渡り廊下の辺りまで引きずられた。そしてリドはミフィールへと振り返ると、あたふたとするミフィールをみて、肩を竦め、
「全く、手間かけさせんじゃないわよ」
　そう言って、リドはミフィールの頭を撫でた。表情は半ば呆れたようにしつつも、その瞳には確かな優しさの光が宿っていた。そして、そこでようやくミフィールは、どうやら自分を助けてくれたらしいと言う事に気が付いた。
「なんであんなことされてアンタ黙ってるのよ。マゾ？」
「ち、違います……でも、怖くて」
「怖かったら教科書破かれてもいいっての？　ばっかみたい。私ならあの場にいる全員の大事なもの引き裂いて踏んづけて、泣き叫ぶ奴等を裸にひん剥いて写真とって廊下中に張り出してやるわ」
　犯罪じみた台詞を吐き出すリド。かなり変わった人だという印象しかなかったが、しかしこうして自分の為に怒ってくれる事が、ミフィールには嬉しかった。
「あの、あの！ ありがとうございます！」
「感謝なんて良いわよ。だって、」
　そう言って、リドは笑った。教室でミフィールに向けられていたような安易な哂いとはまた次元の違う、とてつもなく邪悪な笑みを、
「仕事があるってのは本当だもの。さ、がんばりましょー」
　そして再びリドはミフィールを引きずり始めた。それも先ほどよりも遥かに強固な力で。
「え、え、え？」
「今日は学生新聞の発行。狙うは悪徳商人の実態調査！」
「え、ええ？ それって学生雑誌？」
「そうよー？　　ウチのモットーは【子供の身分を利用して法を超えて好き勝手！】」
「は、犯罪じゃ?!」
「子供なんだから仕方ない仕方ない！ カッとなってやった！ 反省してる！」
　そんなリドの高笑い、そしてミフィールの戸惑いと悲鳴は、共に旧校舎の中へと消えていった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　さて、そんなこんなでミフィールがリドに連れ去られていった頃。
　彼女をその環境に押しやった張本人のキースはというと、
「……めんどくせえ」
「物凄い無気力っぷりね……」
　食堂でだらけて、エレナに呆れられていた。
　しかしこの数日間、だらけ続けた訳がない。彼ら、というよりもキースは、エレナの語る目標である「被害者の救済」を進めていた。彼の学院で築いてきたコミュを最大限利用し、〝騒動〟に距離をとってる者達にイジメられる子達を預け、保護を頼む。
　そしてそれと同時に苛めっ子たちを遠まわしに、優しく、脅していく。
「平民の素行の悪さが職員会議にかけられていてね……」
「貴族の両親達が、平民の奨学金制度の廃止を求めているらしいよ？」
「次に暴力沙汰が起これば、停学処分が下されるらしくてさ」
　そんな噂が流れていると、イジメっ子達に流布する。
　嘘である。が、噂と言っている以上その真偽は問題では無い。大体、実際にそうなっていても何ら不思議ではないのだから別に構わない。そして、そうした噂を聞いた学生達は一様に驚き、そして怯えた。先にキースが述べたように、イジメっ子の殆どがそれほどまでに〝騒ぎ〟に熱を入れている訳ではないのだ。当然、停学や退学のリスクを犯してまで、イジメを続ける勇気なんてあるわけが無い。
〝わるふざけ〟をしていた者達は、そのキースの言葉だけ散っていった。
　当然、本気で貴族達に怒りを抱えている者達はまだいるだろう。しかし数が減ればその被害の量も減っていく。着実にキースはイジメの被害を減らしていった。
　勿論、キースとて誰も彼も助けようとするつもりはなく、
「マジでお前を利用して暴れてた連中なら助ける気はねーけど」
　と、最初にエレナにそう言っていた。エレナも同意した。しかし、実際に苛め

られているような学生は、ミフィールと似たような、気弱で、強くものを言いだせない様な学生ばかりだった。流石にエレナも、自分の周りしょっちゅうくっつこうとしていた連中の顔くらいは見分けがついた。
「遊び半分で暴れる連中なら、〝力〟の弱い奴を狙うのは当たり前だが……」
　キースはそう言いつつ、何処か訝しがった表情をしつつも、仕方なく片端から貴族達を助けてまわっていった。結果として、片っ端から全員を。
　そして今に至る。
「……疲れた」
　キースは呻いた。この作戦において、キースは出ずっぱりだった。彼が学院で築き上げてきたコネと自力の話術を頼りに立ち回り続けたのだ。当然労力は彼に集中する。
「……ごめんなさい」
　そんなキースを見て、エレナは申し訳なさそうに頭を下げた。被っていた大きな帽子が縦に揺れる。エレナはエレナなりに、何とかキースを手伝おうと努力しているのだが、やはり全くコネも無く、話術も持たない彼女には、穏便な解決なんてできやしなかった。
「別に、最初から期待しちゃいないさ。お前の協力なんてな」
「でも……私の問題なのに」
「だったらもうちょっと真っ当な交流深めろよ。折角ゲルダーって名があるのに」
「ゲルダー家……」
　この名前にエレナはまだ拒否感がある。長年積み上げられたトラウマだ。勿論、これが自分と引き離せない、逃れられないものだと知っている。だが、立ち向かうにはまだ勇気が足りなかった。自分がこの名に振り回されない自信がまだ無いのだ。
　答えを返せずにいるエレナに、キースは息をついて、
「ま、精々問題が起きた時、俺を庇ってくれりゃいいさ。お嬢様」
　そう一言言って、手を振った。その仕草にエレナは僅かに笑みを浮かべた。気を使われている、その事くらいは彼女にも分かった。
「でも……こんな地道な事をして、なんとかなるのかしら？」

「なるんじゃねーの？」
　キースは椅子に身体をぐったりと預けながら、あっさりそう答えた。
「今のこの騒ぎは、燃料を失っている」
「燃料？ 何それ？」
「悪・敵」
　一言、そして指を立て、
「平民が貴族を攻め立てる理由。大義名分。つまり、お前だ」
　エレナを指差し、キースは更に言葉を続ける。
「今、お前は横暴を働いていない」
「そうね」
「だから騒ぎの火は燃え続ける事は無い。いずれ燃えつきる。放置していてもな」
　火は燃料がなければ燃え続けられない。この騒ぎの燃料とは、エレナの暴走だ。彼女の悪行があるからこそ、平民の皆は怒り、それを原動力にしていた。しかし、今の騒ぎは過去の彼女の行いのみを燃料にしている。蓄積されただけで供給されない燃料は直ぐに尽きる。
　このまま争いが続けば、今度は貴族に火が引火する可能性は十分ありうるが。
　キースが行っているのはそうならないようにする為の、更なる火消しだ。事態の行き過ぎを防ぎ、被害がむやみに拡大しないように、取り返しのつかない被害が及ばぬように、火に水をぶちまけ、収まるのが早まるように仕向ける。
　既に貴族側に引火してしまった火もあるだろうが、そこら辺は教師に任せる。彼らとてオルフェス学院の教師、優秀な者達が揃ってる。
　なるほど、とエレナはキースのやり方に納得した。そして、ただ、と唸り、
「……でも、根本を正す方法は無いの？」
「ねーよ。そんなもんがあったらこの世から争いなんて言葉は消えている」
　一つの問題の原因が一つであるとは限らない。幾つもの幾つもの原因が積み重なって絡み合う。その絡み合った原因を一つ一つほぐしとかなければならないのだ。だから、〝根本を正す〟なんて事は出来ないのだ。
「地味な活動が一番効果が上がる。見せ掛けだけ派手でも意味は無い」
「そういうものなのね……あら？」

ふと、今や聞きなれた騒ぎの声が聞こえてきた。エレナが立ち上がり見渡せば、なにやら人が集まって、誰か一人を囲んでいるのが見えている。
「キース、また争いよ」
「ふざけんなよ……どんだけ暇なんだよ学生身分の癖に」
　キースはうんざりと言いつつ、頭を掻いて身体を起こした。
「で、今度はどんな様子だ？ また平民が貴族をリンチしてんのか？」
　キースが問うと、エレナは非常に困った顔で、
「……貴族が、平民を囲んでいるわ」
「……なんだって？」
　キースもエレナの視線を辿る。確かに騒ぎが起こっていた。何人かの学生が一人の学生を囲み、暴力を振るっている。イジメの現場だ。しかしよく見れば、今まで見てきた光景の全く逆光景が起こっている。
　美しい、新品の制服を纏った小奇麗な学生、貴族が、古着を纏った学生、平民を苛めている。平民の好む物語ではありがちな、権力者のイジメが発生している。
「……貴族への〝飛び火〟が燃え広がったとか？」
「……いくらなんでも早すぎる」
　確かにいずれ、貴族達も暴走する可能性は十分にあった。しかし、まだ騒ぎが大きくなってから数日だ。そんな早い時期から、イジメという形が取れるほどの集団的になるか？
　まして今、キースとエレナは火を片っ端から押さえにかかっているのだ。教師達の尽力もある。それなのに今、いきなり？　キースは訝しがりながらも、その騒ぎの方へと歩き出すと、様子が見えてくる。遠目で確認したとおり、〝貴族〟が〝平民〟を苛めている。
　キースは顔を一瞬顰め、しかし次の瞬間には爽やかな笑みを浮かべ、
「やあ、何をしているんだい？」
「お前は……」
　貴族の少年達からは敵意ある視線をこちらに向けられる。それはエレナにではなく、キースに向けられたものだった。ますますキースは理解できず、内心で首を傾げる。

今まで自分は上手く立ち回っていた。そして最近に至っては苛められている貴族を助ける努力すらしてきたのだ。それなのに貴族の者達から睨まれる覚えは無い。
　しかし現状、明らかに敵意が此方に向けられている。理由はさっぱり分からないが。
「どういう状況なの？ キース」
　後ろからエレナが追いついてきた。キースが答えあぐねていると、
「あ、」
　風が強く吹いた。エレナが被っていた帽子が風に煽られ吹き飛ばされた。煌く金の髪と共に、エレナの美しい素顔が晒される。そしてそれを見た貴族の少年達は驚愕の表情を浮かべ、叫んだ。
「エレナ様！」
　そしてすぐさま表情を鋭くして、
「その男からお離れください！ エレナ様！」
　は？　とエレナが反応するよりも早く、貴族の少女達の手でエレナは引きずられ、キースの傍から引き離された。
「何、何なの？」
　エレナは疑問の声を上げると、貴族の少年は鋭く声を上げ、
「その男は！ 今の平民どもの反乱の首謀者なのです!!」
「「……はあ？」」
　エレナとキースはそろって首を傾けた。

第四十八話 新たなる火

　エレナとキース、二人が呆然とした表情で貴族の少年少女らを見つめていた。既に状況はイジメの現場とは程遠い。暴力を振るわれ続けていた平民の学生は既に逃げ出している。
　しかし貴族の少年達はそんな事を気にせず、憮然とした表情で、キースを睨みつけ、
「この男が平民達を先導し、私達貴族を次々に暴力を振るったのです！」
「いやいやいやいやまてまてまてまて」
　キースは頭を痛そうにしながら手を振った。しかし彼のその反応はごもっともだとエレナもそう思った。あまりにも、あまりにも酷い話の吹っ飛び方だ。全く理解できない
　問いたい。何故、そうなる。
「待ちなさい。どういう事なのかきちんと説明しなさい」
「何を隠そうこの男は、」
　そう区切り、もったいぶる物言いで、
「【暗黒時代の英雄】なのです！」
　まて、とエレナは更に心の中で思った。さらに話が飛んだ。何？　英雄？　【暗黒時代の英雄】この話は知っている。リドが語っていた【英雄】だろう。腐敗した貴族を罰し、荒れ果てた平民をまとめた英雄。国王を揺り起こした正義の英雄。
　で、それがなんでキースを指す事になる。
「……うん、よーし、ちょっと待て」
　キースもまた、掌で顔を覆いながらもう片方の掌でストップをかけた。頭が痛いのか、何処かしんどそうな表情をしている。人前なのに優等生の仮面がとれか

かってるのだからよっぽどだろ。
　大きく息をついて、
「色々と言いたい事があるけど、まず僕が【英雄】とやらだという根拠は？」
「平民達がそう言っていた！」
　キースは表情を僅かに歪め、更に言葉を重ねる。
「本当に？ 平民達が正確に一言一句そうだったの？ 君がそう聞いたの？」
「……私の仲間がそう言っていた」
　なるほど、と、キースはそう言って溜息をついて、
「そんな、曖昧な情報で意味不明な決め付けをされたらたまらないよ」
「五月蝿い！ 貴様らの屑の所為で我々がどれだけ傷つけられたか！」
「その彼らを助ける努力をしているんだけどね？」
「そんな戯言を！」
「本当よ」
　と、ここでエレナが口を挟んだ。キースに怒りの牙を向けていた貴族は、助けたと思っていたエレナからの援護射撃に表情を驚かせた。エレナは更に言葉を重ね、
「彼は、苛められた貴族の学生を助ける為に動いているわ。私が保証する」
「エレナ様はあの男を騙されているのです！」
　返されたその言葉にエレナは顔を顰めた。自分の言葉が全く通じていない。それは彼らが人の話を聞こうとしていないというのもあるのだろうが、自分の言葉に説得力が無いという事でも合った。
　だが、ここで言葉を詰まらせる訳には行かない。それでは本当に役立たずだ。
「だったら、実際に助けた人に確かめなさいよ。今から会いに行きましょう」
「証人なら此処にいますよ」
　は？　と首を傾げると、彼らの中から一人の少年が出てきた。その少年は確かにキースとエレナが助けた貴族の学生の一人だった。彼は、何処か怯えたような、震えたような表情をしながら、キースの方を見て
「か、彼です、確かに、苛められ、ました……」
　だがその声は、指は、確かにキースを指差した。その怯え震える様は、自分を苛めた相手に対する恐怖を漂わせている。しかしエレナにはそれえが、脅され、

無理矢理言葉を言わされ、罪悪感で落ち込んでいるようにしか見えなかった。
　しかし、彼の言葉を聴いて、貴族の少年は大きく声を上げ、
「この男は我等貴族を傷つける敵だ！ 此処で打ち倒す！」
　そう言い、リーダー格なのだろう少年は杖を突き出す。魔術発動の、最もポピュラーな補助道具だ。つまりそれは、人に向けて魔術を発動しようとしている事に他ならない。
「ちょっと、止めなさい！」
　エレナは叫ぶが、効果は無い。貴族の少年は何処か恍惚とした、自分に酔った表情の笑みを浮かべている。まるでエレナの言葉を聴かない。
「キース！」
　ならば、と、キースに呼びかけ、逃げろと言おうと思った。しかし、うっとうしい
　キースは、口の動きだけでそう言ったのを、エレナは目にした。
　そして次の瞬間、キースは身体を小さく斜にした。何気ない、足を少しずらしただけのような動きだったが、それがあらゆる動きに対する戦いの構えだと、シールと何度かの模擬戦をくりかえしたエレナには分かった。
「【マナよ集い形と成せ、】」
　リーダー格の少年の魔術の詠唱が始まった。
　魔術の発動には様々な方法があるが、根本的に必要なのは周囲のマナや自身の魔力に指向性を与え、自らの望む魔術の形にそれを昇華させる事にある。その指向性を与える上で最もポピュラーなのが術の詠唱だ。しかし、
「【炎よ集い力を孕め、我が敵を討つべく敵を定め──】」
　長い、否、この年の魔術師ならこれでも上等と言えるレベルなのだろう。だが、正直な所、これだけの時間をかけるくらいなら、ストレートに殴りかかったほうがマシだろう。
　魔術と言う力を手に入れ、それ故に行動の選択肢を自ら狭めている。
　実戦経験をしたことがない、という事がエレナにも直ぐに分かった。
「めんどくせ」
　キースは、今度ははっきりと言葉にした。そして動く。元より小柄な身体を更に低く低く倒し、そして獣のような速度で走り出す。初動が目に追えず、エレナ

は目を見張った。
「【炎弾！】」
　同時に魔術が発動する。火球は、詠唱の長さに見合うだけの威力を確かに持っていた。普通の人間が直撃すれば、怪我ですまないようなレベルの代物だ。しかしその魔術の向かう先に、キースは既にいない
「え？」
　気の抜けたような声。少年の前に既にキースは迫っていた。自らの魔術の発動に集中し、成功した事に安堵していた彼は、接近するキースにその直前まで気が付く事ができなかった。
「っは」
　その少年の様を、キースは鼻で笑い、そして杖を握り締めた右手を鋭く叩く。
「が!?」
　痛みに少年が悲鳴を上げる。その次の瞬間、彼の身体に掌を当て、そしてただ、押す。そこまで力が込められている訳ではないのだが、バランスが崩れていた彼の身体はぐらりとゆれ、無様に倒れた。
「っな!?」
「よっと」
　その隙に、取り落とした杖をキースはすくい取り、指で一転させ正しく握る。その手付きはまるで手品師か、そうでなければスリ師のようだとエレナは思った。
　そしてキースは、倒れた少年にその杖を突きつけ、優等生の笑みを浮かべた。
「はいおしまい。もうやめないか？」
「ふ、ふざけるな！」
　少年は起き上がり、キースのにこやかな笑みに拳を振りまわす。しかし当たらない。揺れる身体の足元を払い、転ばせる。
「ほら、今はもうやめよう。互いに良い事なんて一つも無いじゃないか」
「この……！」
　キースは肩を竦め、貴族の少年はまだ怒りを滾らせて、再び突撃しようとして
　しかし次の瞬間、
「いい加減にしなさい!!」

エレナの鋭い怒声が空間を引き裂いた。貴族の少年等はびくりと身体を震わせ、キースは僅かに肩を竦め、エレナの方を見つめた。
「けたたましいにも限度があるわ！　　　馬鹿騒ぎをするなら別の所でやりなさい！」
　怒りを堪えたようなエレナの声に、貴族の少年少女は恐怖し、沈黙する。怒り狂うゲルダー家に向き合うだけの勇気は彼らには無かった。そして「覚えていろ」そんなベタな捨て台詞を吐いて、貴族の子供達は去っていった。
「……ふぅ」
　少年達は退散していくのを眺め、エレナは溜息をついた。
　どれだけ言葉を重ねても通じない。ならば、かつての自分のように怒りに任せて叫んでみたのだ。だから通じたのだ。これなら最初からこうしておけばよかった、とエレナは息をついた。
「ありがとよ。今のはマジで助かった」
　キースはそう言って、溜息を大きくついて、うな垂れた。
「無駄に疲れた……」
　そう言って地面に寝転がる。彼にとってはまさかのトラブルだったのだろう。エレナだって、まさかあんな形でキースが巻き込まれるなんて思いもしなかった。
「平気？」
「ああ、怪我はしてねえよ……しかし、何だってんだ」
「いきなり【英雄】なんてね。突拍子無さ過ぎて笑っちゃったわ」
　エレナの言葉に、キースもふっと、表情を緩め、
「いや、本当にそうだよな」
　答えるようにキースは笑った。笑い、そしてゆっくりと頭を抱えて、
「本当に、根拠のない噂なら、どれだけ良かったか……」
　そう言って、項垂れた。
「……え？」
「……」
　二人は沈黙する。キースはひたすら押し黙って頭を抱えつつ、地面を見つめ、エレナはそのキースを前にかける言葉が見つからず、押し黙った。

しかし黙り続ける訳にも行かず、エレナは口を開く。確信に触れるように。

「……え、ねえ、ひょっとして……」

「……」

「……マジで？」

　エレナは、スラングを使って、聞きなおした。

第四十九話 暗黒時代の英雄の話

　十数年前、ガイディア国、暗黒時代
　この時期、荒れ、秩序は崩壊していた。他国との泥沼のような戦争は続き、国内の全ての機能の低迷が続いた。貴族によって国の権限は掌握され、自身を財を守る事に終始していた。私服を肥やし、ひたすらに富を貪り食う。平民はその逆にひたすら飢え、飢えに飢え、互いに奪い、殺し、呪う生き方を強いられる。
　国を守るべくしてなった騎士達は国外で死に続け、国に残るのは賄賂とコネで戦場に立つ事を逃れた卑劣者ばかり。国王はひたすら、何もかもを諦め、自室に引きこもり続けるだけ。
　荒れていた。いずれ、他国の侵攻を抑えられても自壊してしまいかねないほどに。
　その時代、一人の少年率いる孤児の集団が、国内に現れた。
　彼らは、正確には彼らの中心となっていた少年と少女なのだが、この二人は、荒れたガイディア国を象徴するようだった。彼らは物語にある義賊のように、私服を肥やす貴族達の家を襲い、その財産を奪い去り、スラム街に撒く、という行いを繰り返したのだ。
　この時代、保護者もいない孤児達は、ゴミを漁るくらいしか生きていく手段が無い。小さな身体ではまともな仕事にありつけないし、靴磨きや小間使いなどの小さな仕事を得たとしても碌な報酬も支払われないことがしょっちゅうだ。そもそも、飢えの所為で働くは愚か動く事も出来ず、そのまま餓死する事の方が多いのだ。
　そんな中、略奪によって喰い紡ぐと言う真似をする彼らは異常だった。
　曲がりなりにも騎士の守る貴族の家からの略奪なんて真似は、普通なら子供には不可能な事だ。しかし彼には魔術と言う、子供でも人外の力を発揮出来る特殊

な才能があった。
　彼と彼女は同じく魔術の才能のある仲間と共に、貴族達の家を襲い続けた。おざなりな護衛についてる腐敗した騎士達を打ち倒し、貴族を殴り倒し、そして中にあったあらゆるものを全て奪い取っていった。そしてそれを仲間達に分け与えた。
　彼らのやっていた事はどうしようもない犯罪だった。人のものを破壊し、喰らい、奪う。どうしようもない咎人だった。しかし、その腐敗した時代において、彼の行動は平民達から徐々に支持を集め続けた。富を貪り平民を見捨てた貴族達に制裁を加え、そして平民達に富を再分配する少年。まるで物語に出てきそうな彼の行為は、様々な脚色を経て、ついには【英雄】とまで呼ばれるようになっていた。
　しかし、当の本人は、略奪を繰り返した、義賊の片割れ、キースは〝正義の行い〟なんてしているつもりは全く無かった。
　貴族を狙っていたのは単に、金と食料を沢山持っていたからだ。貴族への制裁も何も、殺されそうになったからそれを返しただけに過ぎない。英雄なんてものになるつもりは無かったし、追い詰められ、生きていく為にやむ無く手に染めた犯罪行為というだけだった。
　だから、キース自身は周りからどう思われようと、そんなことどうでもよかった。ただただ、自分の仲間達が飢えから逃れられれば、生きていられればそれでよかったのだ。
　だからその日も彼は、出来る限り裕福そうな、この時代にして巨大な屋敷に住む貴族に狙いを定めた。常に彼と共にある少女と共に、刃を研ぎ、暗殺者の如く動きで、侵入を果たした。
　だが、幼き頃の彼は迂闊だった。
　義賊として有名になるほど派手な真似をしてきたのだ。当然、自分の保身には鋭い貴族達が、その対策を採らないわけが無かった。
「捕まえたぞ！　このクソガキがぁ！」
　屋敷に侵入したキースを待ち受けていたのは、金でも食料ではなく、大げさすぎるほどの武装で待ち構えていた大勢の騎士達だった。いくら魔術の才能を持っているといっても、所詮は子供、多勢に無勢の状況で敵う訳も無かった。

何とか命からがら、仲間の少女を逃がし、残された彼は捕まった。そして、
「この！ 散々！ てこずらせ！ やがって！ このクズがぁ!!」
「っ……!!」
捕まった彼は館にある牢獄の一室で、騎士達から、殴られ、蹴られ、暴力を振るわれ続けた。キースの行いによって国内にいる騎士達の顔は丸つぶれにされていた。盗賊たちに言いようにやられる情けない騎士達。彼らは役人や貴族達から小言を言われ続けたのだから。
幼い彼の体は殴られるたびに面白いくらいに吹っ飛ばされる。普通なら死んでいたっておかしくない暴力の嵐を、しかしキースは自らの魔力によって身体を守り凌ぎ、そして同時にチャンスをうかがっていた。
すきを見せたら、〝ころ〟してやる
当時の彼には容赦が無かった。自分が死ねば、自分の助け無しには生きられない仲間がいると知っていたから。故に、隙さえ見せればこの場にいる全ての人間を殺してでも構わない、そう考えていた。
しかし、
「そろそろやめてくれないかな。目障りだから」
その時、声がした。若く、子供のように幼い声だった。
痛みを耐えていたキースはゆっくりと顔を上げた。薄暗い牢獄に入ってきたのは、自分よりも少し年上なくらいの少年、なにやら豪奢な姿をしているのは貴族の子供だからだろうか、とキースは思った
その少年は、キースへと近づくと、笑みを浮かべ、
「へえ、思った以上に子供なんだね。まるでガキだ」
「てめえに、いわれたか、ねえよ」
キースは目の前の、自分と同じくらいの少年を睨みつける。相手が誰なのかわからない。何故子供がこんな所で偉そうに振舞っているのか、何一つ分からないが、この目の前の少年が自分をこんな目に合わせているのだと、それを悟る事は出来た。キースの研ぎ澄まされた感性がそうだと告げていた。
少年は、キースの憎悪に満ちた視線を軽く受け流すと、観察するように２，３頷き、
「一体今までどうやって盗賊の真似事なんてしてこれたんだい？」

「はあ？ そこにいる、バカたちが、居眠りしてる、間にだよ」
　キースは息も絶え絶えな状態で強く哂う。そう、所詮、この腐り果てた王政を守る騎士など腐っている。王を守ると言う役目も忘れて、下町に降りては王様気分で暴力を振るってくる奴らが殆どだ。
　だからこそ、彼らが守る貴族の館は狙いやすい。万一侵入が見つかったとしても、子供、と、此方を見て勝手に油断してくれるのだから、尚の事だ。
「こ、このクソガキ！ 黙りやがれ!!」
　と、自らの失態を明かされた騎士の一人が、倒れたままのキースに蹴りを入れた。子供の身体をしたキースは吹っ飛び、壁に叩きつけられる。
　だが、それでもキースは嘲笑をやめない。
「戦争からにげたヘタレが、さっさと家でママに子守唄でもうたってもらえ！」
「この……!!」
　騎士が剣を抜く。言いすぎた、と僅かな後悔が頭を過ぎったが、しかしこのクズにいい気にさせるくらいなら、言いたい事をいったほうがまだマシだ。それに、この状況、逃げる隙が生まれるかもしれない。
　騎士がキースに歩み寄る。怒りに頭を真っ赤にさせて、剣を振り上げ、キースはそれに合わせて魔力を滾らせる。そして、

「や め ろ」

　キースに問いかけた少年が、奈落の底から聞こえてくるような声でそう告げた。言葉と共にはっきりと感じる殺意、それが一瞬で部屋を充満し、支配した。従わぬものは殺す。そんな明確な意思が手に取るように伝わってきた。
「っひ！」
「……！」
　剣を抜いた騎士は一瞬で竦み上がり、剣を取り落とした。キースはこの少年が、実は少年の皮を被ったバケモノなのかと思った。
　少年は再びキースの前に立つ。そして観察するようにじっと睨みつけると、
「君、魔術を使えるね」
　そう告げられ、キースは一瞬息を呑む。彼自身、自分が〝魔術〟とやらを扱え

ると知ったのは最近だ。それなのに少年は見ただけでそれをあててみせた。だが、その驚きを表情には出さない。キースは額に皺を寄せ、
「〝マジュツ〟はテメエら貴族の〝センバイトッキョ〟じゃねえだろ」
「僕は貴族って訳じゃないんだけど……ふむ、威勢、度胸もあるね」
　そういってキースの髪を掴むと、顔を少年の前まで吊り上げる。つかまった時、しこたま殴られたが、しかし彼の体内に存在する魔力のお陰で、顔の形が歪むほどの怪我は無かった。
　その顔を、少年はじっと観察する。
「目つきは悪いけど、顔は良い。よしよし」
　そういって、少年は髪を手放した。支えを失い、地面に顔をぶつけ呻くキースに、少年は笑いかけ、そして、一言、
「君を、〝真〟の【英雄】にしてあげよう」
　現在、オルフェス学院の学院長を務める男、ミストは邪悪に笑った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　キースの自室。〝貴族〟による〝平民〟への暴力事件、その後。キースの事情、【英雄】の話を聞いたエレナは、信じられない、といった表情でキースの話を聞き終え、僅かに首をかしげ、
「それで……貴方がミスト学院長の所為で【英雄】になったって事？」
「……まあ、そうなるな」
　キースは思い出したくない過去らしく、心底嫌そうな顔をしながらそう語った。エレナはじろじろとキースを見つめ、不思議そうに首をかしげた。
「……とてもそうには見えないわ。貴方、目つき悪いし」
「やかましい」
　エレナの頭をはたき、キースは溜息をついた。自覚はあるらしい。
「でも【英雄】ってなろうと思ってなれるものなの？」
「なりたくてなったわけじゃない。やらされたんだ。俺は」

キースはそう言って頭を掻いた。彼の経験した【英雄】は、仲間達を集わせ先導するカリスマだとか、人々に正義を謳うとか、そう言うものとは全く持って無縁のものだった。何もかも、お膳立てはミスト達によって用意され、キースはただ、その敷かれたレールの上を辿るだけの作業を繰り返した。

結果として、彼は今この学院に在籍する権利を得た訳なのだが、ともあれそれらはあくまでも過去の話だ。既にキースが担ってきた〝英雄〟という存在はその役割を終えている。

しかし、それが何故か今、再び現出した。この学院のバカ騒ぎの真っ只中に

エレナはそこまで考えて、頭を掻いて、

「え、ちょっとまって、混乱してきたわ」

唐突に変化した状況にエレナは頭を抱えた。

「……状況を整理しよう」

キースは、どこか疲れたような表情をしながらも、そう呟いた。

エレナもそれに頷き、ひとまず事件の最初から思い返し始めた、

「……まず、事件の根本にあったのは、私の事よね」

「そう。お前が身勝手して、お前の取り巻きが暴挙を重ねたのが事件の根底だ」

エレナの事件が、平民の学生達が貴族の生徒に抱いた悪感情の原因だ。エレナたちによって暴力を振るわれたもの、尊厳を傷つけられたもの。彼らは怒り、恨み、しかしその身分差から抵抗できず、ただただ不満を溜め込んだ。そして、

「それが爆発した。〝貴族苛め〟という形をとって」

こうして、貴族への平民達の攻撃が始まった。かつてエレナを取り巻いていた連中を始めに、次々に貴族達が制裁と言う名の暴力を加えられていった。キースの入学をきっかけとしたミストの学院への政策、即ち平民学生の受け入れに端を発した平民の学生数増加によって貴族のそれと拮抗し始めていたのもまた、原因の一つではあるのだろうが。

「性質が悪いのが、弱い奴等が特に狙われやすかったって所だ」

「だからミフィールも狙われた」

多分、元々は、エレナと共に暴力を振るってきた連中のみをターゲットにしていたつもりだったのだろう。だが、既にその主義は崩壊している。こうした集団行動では例え大人であっても主義主張はぶれてしまうものだ。ましてや子供の集

団行動なんてそんなもの容易く崩れてしまうだろう。
　それをエレナは止めようとした。そしてキースはそれに協力した。
「で、まあ、ミフィールはリドに任せた。その後もコネを使っていった」
「ところが、事件はそう簡単には終わらなかったわけよね」
　それが今回の騒動。キースの【英雄】の話。
「平民達がリーダーはキースだと言い、それに触発され貴族は平民に報復を開始した……一応聞くけど、平民のリーダーなんて、身に覚えは無いわよね」
「あるわけないだろ……」
　キースは頭を掻いて溜息をついた。勿論エレナとて、キースが実は平民達の首謀者だなんてこと考えもしてはいない。一応の確認だ。
「でも、じゃあ、なんで急にそんな話が……」
「【英雄】が俺だと、知ってる奴がいないわけじゃあない……だが、」
「貴方を犯人と言ったあの子、なんだか怯えていたわ……」
「……」
　キースは顔を顰める。いままで飄々と問題を解決して回っていった彼も、この問題には随分と迷っているようだ。事情を聞く限り、彼にとっても【英雄】の問題はナイーブな話のようだから、それは仕方が無いとは思うが。
　キースは溜息をついて、まずは、とエレナに頭を下げ
「巻き込んじまって悪い。まさか、俺の過去が湧き上がってくるとは……」
　真剣に謝られた。エレナはそのキースのその態度に一度は目を丸くした。しかしすぐさま首を横に振って、
「最初に巻き込んだのは私だし、原因も私よ。謝る必要なんて何処にもない」
　しかしキースは顰め面を崩さなかった。自身の問題に対して、彼は真剣に悩んでいるらしい。何時も飄々としている彼の態度からは予想できなかった姿だった。
　そして彼は、
「……面倒なことになるぞ、これから」
「どうして？ 確かに馬鹿騒ぎの勢力が二つに増えたってのはめんどうだけど」
　それだけじゃない、と、キースは首を振る。
「今までは単純な話だった。お前が原因だったとはいえ、貴族嫌いの平民が勝手

に苛めをやらかしていただけだったんだ。つまりは一方的だった」
　手指で人の形を作り、一方がもう一方を叩くようにキースは見せる。そして、
「前も言ったが、燃料、つまりは悪・敵がいなければ争いの炎は燃えない。お前と言う火種が暴走しない限り、この騒ぎは時間がかかろうと勝手に収まる筈だった。
　しかし、と、キース派もう片方の手で人の形を作り、
「ところが、貴族からも暴走が生まれた。そして貴族と平民、その双方を喰らい合うように、双方にとっての敵が生まれちまった」
　貴族と平民。昔から常にある。対立が完成してしまった。双方の炎は互いに互いを喰らい合い、更に激しく燃え上がり、争いを加速させ続ける。
「……下手すれば取り返しがつかなくなる」
　そしてエレナは、キースのその言葉の意味を、確かに思い知る事になる。

第五十話 扇動者

　キースの過去、【暗黒時代の英雄】この言葉が囁かれるようになって一日。
　そう、一日、たった一日。そのたった一日の間に、今回の事件、エレナとキースの介入によって一時的に収まり始めた貴族と平民の対立事件は更なる暴走を始めていた。
「思い上がった平民どもに制裁を!!」
「我等が神聖なる学び舎を汚す下郎に天誅を!!」
　平民の学生達の暴走、それに相対するように貴族の者達からも、平民達への暴行を加える者達が現れたのだ。彼らは平民の学生達に無差別に暴力を加え、
「貴族どもがまた理不尽な暴力を！」
「傲慢な貴族達に膝を屈するな!!」
　そして、その暴行に、更に平民の学生達は怒りの炎を滾らせ、暴走を強めた。
　キースの介入によって、そのイジメを行おうとする者達の数、特に遊び半分でそれらに加わっていた連中は排除された。しかし、残された者達はさらに強固に、そしてより強い熱意を持って、暴走を始めたのだ。
　最早授業が阻止される事などしょっちゅうで、真面目に授業を受けようとしている学生も、なんとか暴走を抑えようとする教師の面々も困り果てていた。
　そんな中、ことの中心にいるはずのエレナとキースはというと
「いい加減に！　しなさあああああああああああああい!!」
「いい加減に！　しろぉおおおおおおおおおおおおお!!」
　叫んでいた。というよりも悲鳴を上げた。
　エレナは駆け回るようにして学院中に伝播した争いを止めて回っていた。最早コミュニケーション能力の有無など関係ない。見かけた端から言葉で止め、権力で押さえつけ、暴力で叩きのめした。手段を問わず、エレナは暴走を止めて回っ

ている。
　そしてキースもまた、自信の可能な限りの手で持って争いの仲裁に入っていた。自分自身の過去がこの事件に関わってきたという事実が分かった以上。他人事ではもうない。言葉巧みに皆を誘導し、懐柔し、脅し、時には教師を利用して暴走にブレーキをかけようと駆け回っている。
　しかし、それでも争いは止まらない。一つを止めている間に、二つも三つも喧嘩が起こり、いじめが発生し、誰も彼もが睨み合った。
　事態は更なる泥沼を迎えている。
「……どうしてこうなったのかしら」
《……どうしてこうなった》
　昼食の時間を過ぎ、人の減った学食にて、エレナとキースは同時に溜息をついた。
　とはいえ、二人は共にいる訳ではない。キースは、エレナの耳元からのみ声だけでそこにいた。彼は今は待ったく別の場所にいる。エレナが耳に装備した魔具を通して、通信魔術で声を伝播している。最早キースとエレナが直接会う事も危険になってきているのだ。
【暗黒時代の英雄】この言葉は、エレナが思っているより遥かに、強力な効果を及ぼしていた。貴族の学生にも、平民の学生にもだ。
　平民の学生は、「英雄が我等についてる」という根拠も何も無い自信に滾らせ、暴力行為に対して躊躇を見せなくなった。キースの脅迫も最早通じない。
　貴族の学生は、「英雄など、ゲルダー家の前には無為だ！」と、エレナを勝手に持ち出し、更にそれを【英雄】と対抗させる事で熱を高め、暴走を激化させる。
　必死に争いを止めようとしているエレナとキースの名が、何故か争いを激化させる原因なってしまっている。馬鹿馬鹿しいにも程がある。
「めんどくさい……」
　エレナは、何もかもを総括した感想を漏らした。今回の原因たる自分がそんな事を言うのはどうなのだろう、という気もしたが、しかしそう思わずにはいられない。この事件は、最初はもっと単純だったはずだ。エレナへの、自分への平民達の復讐。自分の所為で酷い目にあってきた連中がそれを恨み、復讐しようと、

そんなシンプルな話だったはずだ。
　それなのに、何故こんな大騒乱になってしまったのか。
　エレナがそんな風に唸っている間、キースは考え込むような沈黙を続けていた。そして、納得したように、
《……扇動者がいるな》
　苦々しく吐き出されたその言葉に、エレナは首をかしげた。
「扇動者？」
《事件にどんどん燃料を与えている奴。有象無象の連中を煽って、事件をややこしい方向に持っていこうとしている奴等がいる。そうじゃなけりゃ……》
　そうじゃなきゃ、ここまで争いが激化する説明がつかない。キースはそう言って、魔術通信の向こうで溜息をついた。言われてみると確かに、エレナへの報復が貴族全体に飛び火した事も、キースの英雄の話がでたくだりも、唐突過ぎる。
　誰かが意図的に、この事件を燃え上がらせるために仕組んだものだと考えれば、その突飛な状況も納得できる。
「じゃあ、あの時キースを犯人だっていってた子は……」
《扇動者、じゃ無いだろうが、そう言う奴等に唆された可能性はある》
「じゃあ貴族の勢力に扇動者が？」
《いや、下手すりゃどっちもだ》
　どちらか一方に火が着けば、相乗効果で敵対陣営も燃え上がる。しかしこの騒ぎの広がりようを考えると、恐らくはどちらにも同じようにこの騒ぎを煽っている奴等がいる可能性が大だ。
「でも、誰が、何のために」
《知るか。相手勢力によほど恨みがある奴か、正義心が無駄に高い奴か、あるいはたんなるお祭り騒ぎが好きな大馬鹿野郎か》
「祭り好き……って」
　最初の二つなら納得できるが、最後の一つは意味不明だ。エレナの疑問の声にキースは、あー、と言葉を考えるように声を上げてから、
《例えば、貴族への制裁とか、そう言う言葉って、耳障りはいいもんだろ。そういう言葉に酔いしれた連中が、何時までも酔っていたいって、そう思ったのかも知れん》

「そんな下らない理由でこんな事やる？」
《やるさ。人間ってお前が想像するより遥かに馬鹿だぞ》
　キースはまるで見てきたかのようにそういった。あるいはひょっとすると、実際、見てきて、経験で語っているのかもしれない。【英雄】としての役目を担っていた時に、人間の下らなさと愚かさを。
「なら、扇動者を倒せばこの騒ぎは収まる？」
《広がっちまった騒ぎが、それだけで止まるとは思えないが、勢いは萎えるだろう》
「でも、扇動者だなんて……どうやって探すって言うの？」
《……扇動者がいるなら、争いを止めようとしている俺達が目障りになる筈だ》
　争いの主格になっている二人のリーダーが争いをとめようと働けば、いずれ勢いは削がれる。当然、争いを起こした扇動者にとっては邪魔でしかない筈だ。そして争い続けたいと思っているなら、必ず接触を図ってくる。
《そこを逆に叩けば、争いの鎮火にめどがつく》
「でも、どう対処すれば？」
《向こうがどう出てくるか分からん……だが、やるなら半端をするなよ》
「半端？」
《扇動者と相対すれば、二択だ。完全に目的が相反してる。だから和解か、破綻かしかない。それ以外選択の余地が無い。曖昧な状況を維持する事は出来ない。》
　だから、相応に覚悟して事にあたれよ、と、通信先からキースはそう語り、言葉を区切った。通信越しにキースが身体を起こす音が聞こえた。
「何処かへ行くの？」
《リドんとこ。扇動者の情報を仕入れてくる。それに……》
「それに？」
《いくらか、引っかかる。特に【英雄】の話が出てきたって事がな》
　それだけ言って、キースは通信を切断した。エレナは息をつき、天井を仰いだ。
「私は、どうするべきなのかしら……」
　エレナは一人、呟く。今騒動の解決、そしてもっと根本的な問題に対して向き

合う為に、彼女は頭をめぐらせた。今、自分自身がどうするべきなのかを。だが、自分がやるべきことなんて、既に決まっている。罪を償う事だ。自分自身がしでかした罪、身勝手な暴力の日々への贖罪をしなくてはいけない。

　贖罪、それは誰に向けて？　決まってる。自分身勝手で傷ついた人々に対してだ。いま、此処まで騒ぎが大きくなっているのも、本をただせば自分が原因なのだ。問題がどれだけ複雑になっていてもそれを忘れてはいけない。

　でも、それなら、それをどうやって、その彼らに償う？

「どう、すれば」

　それが分かれば、この問題は解決できる筈だ。キースの言うとおり、そんな安易な解決に至れる訳が無いけれど、そうしなければ事は前に進まない。

「席、失礼」

「え、ああ、どうぞ」

　エレナは反射的にそう答えて、ふと気が付いた。何故こんな人気の全く無い食堂で、わざわざ自分の真正面の席に座る輩がいるのかと。そう思い、前を見てみると、一人の少女が、此方を見つめていた。

　目がアウト、少女はニコリと、形だけの笑みを返し、口を開いた。

「始めまして、というべきかしら。エレナ・ロズ・ゲルダー。私はヒノ」

　茜色の髪、気の強さを象徴するように凛々しく伸びた眉に、髪と同じく情熱を湛えるような茜色の瞳。エレナは思い出す。ミフィールへ行われていた最初の暴行事件。その時自分と向き合っていた少女の事を。

「貴方に虐げられてきた平民達の代弁者よ」

　彼女は、憎悪に塗れた瞳をエレナへと向けた。

第五十一話 あやまちとの相対

　エレナは瞳を大きく瞬きして、目の前の彼女を見つめ直した。
　代弁者。代弁者と彼女は言った。犠牲者、と言うのは分かる。自分が昔迷惑をかけ、苦しんできた人たちのことなのだろう。だが代弁者とは、それはつまり、
「……貴方が、なら、平民達のボスって事？」
「私がボスなわけじゃないわ。私達のリーダーは【暗黒時代の英雄】よ」
　改めてでてきた英雄の名に、エレナは僅かに眉を潜め、
「キー……その、【英雄】が自ら貴方達のリーダーと名乗ったの？」
「貴方には関係ないわ」
「……そう」
　平然とそう返され、エレナは沈黙した。彼女の返事が、此方の質問をごまかしているのか、それとも此方と取り合わないつもりなのか、エレナには判断がつかなかった。
　しかしやはり、平民側にも既に英雄の話は浸透しているようだ。
「……」
　エレナはひとまず、目の前の少女を注意深く見つめた
　見た目の通りの気の強さを発揮している少女、ヒノは、心底侮蔑したような瞳で此方を睨みつけてきた。エレナはその視線を受けながら、ゆっくりと周囲を見渡した。自分達以外誰もいない、と思っていたら出入り口のほうでガタイの良い少年と同じ年くらいの少女達が固まり、こちらを怖い形相で睨んでいる。
　彼らもこの少女の仲間なのだろう。とエレナは納得する。自分を此処から逃がさないつもりなのか、あるいは、教師の介入を恐れているのか、そこまでは分からなかったが。
　ただあまり、よくない事が起こりそうだと言うことは、エレナにもわかった。
「それで、〝代弁者〟が私に何の用件があるのか、聞いてもいいかしら」

エレナは早速本題へと切り込んだ。こういう場面で器用に立ち振る舞える性格を自分はしていないし、大体この状況では言葉を弄しても意味が無いだろう。
　するとヒノは静かに、しかし明確な発音で、一言、
「邪魔をしないで」
　その言葉を理解できず、きょとんとしたエレナに、ヒノは言葉を続ける。
「私達が行っているのは制裁、それは私達の正当な権利。それを邪魔しないで」
「……邪魔？」
「貴方でしょ？ 私達の制裁を邪魔しているのは」
「……」
　正確には自分とキースだ。その事実を彼女は口にしない。本当に知らないのか、あるいはあえて無視しているのかは分からない。しかしそんな事はどうでもいい。
　問題なのは彼女の言葉だ。彼女の言っている事。それはつまり、暴力の現場を止めるなと、そう言っている。争いを止めようとすることを止めろと、そう言っているのだ。
　扇動者、キースの言葉がエレナの頭に過ぎった。
　彼女達は争いの継続を望んでいる。そして私に接触を図ってきた。
　ドンピシャだ。エレナは心中でキースの勘の良さに感心した。
　しかし、それなら、扇動者にどう対応すべきなのか？　キースは半端はするなと言っていた。懐柔するか、あるいは徹底して叩けと。だが、その前に
「どうして？」
　エレナはたまらず、問いかけた。
「どうしてそんなにこんな騒ぎを続けたいの？」
「悪が罰せられず、我が物顔でいるからよ」
　ヒノはそう言い、エレナを睨みつけた。
　エレナはその怒りに燃える瞳を前に、言葉を失った。
「私達は何度も貴方と貴方の〝オトモダチ〟の横暴に迷惑してきたわ。授業を妨害され、憩いの場を乱されて、私物を奪われて、暴力を振るわれて、教師にまで手を出された」
　ヒノの語るその言葉の全てに対して、エレナは反論する言葉を持たなかった。

事実だったからだ。好き勝手にしたし、好き勝手にさせた。自我に檻に囚われ、救いを求めて暴れ、それをシールに救われた。
　しかし、シールには救われはしたが、罰せられはしなかった。
「この学院は貴族平民は平等な筈。それなのに貴方達は理不尽な振る舞いをし続け、私達を傷つけた。なのに、なんで仕返ししちゃいけないの？　私達は黙って耐えろって？」
　殴られたのに、殴り返しちゃいけないのか。何故一方的に耐えなければならないのか。彼女はそう言っている。それは当たり前の感情。復讐という、誰しもが持つ感情。「復讐は何も生まない」なんて言葉はよく言われるが「故に耐えろ」というのは、被害者にはあまりにも酷な事だ。
　エレナにも、流石にそれはわかった。そしてだからこそ、彼女に返す言葉を思いつくことが出来なかった。彼女への理解とはつまりは、自分の過ちの肯定なのだから。
　自分は罪人だ。エレナはそれを自覚した。
　だが、だからといって、黙っているわけにも、いかなかった。
「でも、復讐したいからといって、無関係な人を巻き込んでいいの？」
「無関係？」
「貴方達の起こした騒ぎで、私と同じ加害者達、それよりも関係の無い人々が傷ついているわ。それも心と体の弱い人たちばかり。それが正義だというの？」
　そう、彼女の怒りが、エレナにだけ向けられているならいい。自分と一緒に馬鹿をしていた〝オトモダチ〟に向けられるのもまだいい。しかし、ミフィールのように殆ど無関係な者までが、その怒りの矛先を向けられるのはどうしたって納得できない。
　彼女達を巻き込んだのも自分だ。しかし、それがこの事実を許す事にはならない。
　ヒノという少女は、僅かに額に皺をよせ、
「……この騒ぎの根本の原因の貴方が私達を批難するの？」
「批難ではないわ。事実よ」
　ヒノの睨みを、エレナは平然と返した。別にエレナはヒノを言葉で傷つけようとか、そういうつもりは無い。至極単純に質問しただけだ。だが、次の瞬間、ヒ

ノは再び燃え上がるように顔を赤く染め、
「なら、どう償うと言うの？ 貴方は、私達に！」
「……」
「貴方が私達を批難すると言うのなら、貴方がしてきた事全てを償いなさいよ！ 身勝手な振る舞いで傷ついた人達の心を癒してみなさいよ！　それが出来ないくせに何を偉そうに！」
　返す言葉は無い。まさしく、どうやって償えばいいのかわからず、エレナは思い悩んでいるのだから。だけど此処で沈黙して、彼女の意思を無言のうちに肯定してしまう事だけは駄目だと、エレナは理解していた。だから、意思のままに、彼女は叫んだ。
「なら、償うわ」
「なん、ですって？」
　動揺に揺れる少女の瞳をにらみ返し、エレナは宣言する。
「私がしてきた事、罪を償うわ。償ってみせる。それでいいのでしょう？」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　その頃、旧校舎の一室にて、
「あ、キース様」
「様をつけるな、ミフィール」
　キースはミフィールと再会していた。
　大量の資料を抱え、此方に笑みを向けるミフィールにキースは手を振った。『執筆部』はどうやら大忙しらしく、来訪したキースにも気づかず、彼方此方で書類が舞いとび、資料を持って走り回ったり、机に向かって筆を書きなぐっていたりと、誰もが仕事に集中している。そんな中、ミフィールは資料を運び、時にお茶を運んで部員達と笑みと言葉をかわし、慌しく駆け回っている。
　邪魔しちゃ悪いか、と思いつつも、その活気ある様子にキースは首を傾げ
「なんだ？ 何か面白い事でもあったのか？」
「貴族と平民の皆さんが大喧嘩でネタがいっぱいで嬉しいって、リドさんが」

「……そいつは上々だな」
　素直に喜んでやっていいものなのか、正直微妙な所だ。しかしミフィールが非常に嬉しそうに、生き生きとしているのでとりあえず祝福した。キースは改めて、ミフィールを見る。最初に出会ったときと比べると、今の彼女は、
「随分と楽しそうだな」
「はい。沢山こき使ってもらってます」
「……それは楽しいのか？」
「はい！」
　はっきり頷くミフィールの笑顔の眩しさに、キースは目を逸らした。なんだか無垢で純粋な子供をだまくらかした気分だ。
　だが、少なくとも以前のように俯いて、ジメジメと常に何かに怯えるような表情からは幾分か回復しているのは事実だった。無論、まだ表情には影があるし、間の抜けた気配は抜けていないようだが、それでも随分とマシな方だ。元々、これくらいは明るい少女だったのかもしれない。暴力の恐怖は人を怯えさせ、その能力を小さく見せるものだ。それが子供なら余計に。
　エレナがこの様子を見たら喜びそうだな、とキースは思いつつ、
「ま、精々頑張れよ」
　そう言って手を振り、リドの部屋に行こうとした。が、背中から何かに引っ張られる。振り返ればリドが此方の制服を摘んでいて、
「あ、あの」
「何だよ」
　問うと、ミフィールはキースに頭を下げて、大きく笑みを浮かべ、
「ありがとうございました。私、此処に紹介されて、本当に良かったです」
「俺は紹介しただけだ。今が楽しいのだとしたらそれはお前の努力の結果だ」
　リドには、仲良くしてやれとも、気遣ってやれとも言っていない。外部の危険から保護してやってくれと頼んだだけだ。頼まれていないことを、リドはしないだろう。
　それでもミフィールが此処で皆と仲良くやっていけているのは、彼女が自分で努力した結果に他ならない。だからキースは別に、礼を言われる覚えは無い。努力して得られた結果は彼女だけのものだ

だがそう言っても、ミフィールは首を横に振って、彼女の元来のものであろう、優しさに溢れた笑みを浮かべ、
「それでも、ありがとうございます」
「……そう思うなら、エレナに言ってやれよ」
　そもそもキースは彼女の為に何かやろうだなんて考えもしなかった。彼女を助ける事にしたのは、エレナが此方にしがみつくようにして助けを求めてきたからに他ならない。
　彼女を助けたのは自分ではない。エレナだ。キースはそう思っている。しかし、それをわざわざ口にする必要はなかったようで、ミフィールはキースの言葉に大きく頷いて、
「はい、勿論です！」
　そう答えた。そうか、とキースも笑みを返す。
「おーいミフィール！ 俺にもお茶くれー」
「あ、はい！ それじゃあ、私はこれで」
　キースはミフィールの笑みに手を振って、仕事へと戻る姿を見送った。
「ありがとう、ねえ。まあ、悪い気はしないが……」
　あのエレナが、彼女の感謝の言葉を聞いたら、一体どんな顔するんだろうか。そんな事を思いながら、キースは部長室の扉を叩いた。

第五十二話 悪質な影

　部長室に入ってきたキースを眺めたリドは、開口一番、
「あら来たわね。【暗黒時代の英雄】殿」
「次、俺をそう呼んだらブチコロス」
　いきなり不穏な台詞を吐くキースに、リドは肩をすくめて笑ってみせる。
　しかしその表情は何時もの軽快なそれではなく、何処か苦笑の笑みに近いものだった。何故ならリドもまた、キースの昔やっていた事を知る一人でもある。彼女だけではなく、ネジや彼のほかの仲間達も、実はキースの正体を知っているのだ。
　そして知っている以上、この件はリドにとっても他人事ではない。
　キースはとりあえず備え付けの古びたソファーに座り込み、息をついた。ちらりとリドの机を見ると、何時も散乱している資料が、今日は更に酷さを増しているように見える。
「仕事のほうは順調らしいな」
「まーねー、新しいネタも次々入ってくるし、ミフィールも意外と仕事出来るしね」
「そうなのか？」
　彼女が素直に褒めるなんて珍しい。リドはキースの問いに頷き、
「仕事の要領は超悪いんだけど、でも失敗すれば学習するくらいの脳はあるもの。何度も怒鳴って張り倒して、パターンを覚えされば中々良い塩梅になったの」
「張り倒すな張り倒すな」
　彼女にはそうした教え方の方が伸びるのかもしれない。が、まるで犬の調教のような具合だな、とキースは苦い笑みを浮かべた。
「元々自分の要領の悪さ知っているみたいで、だから努力はできる子みたいだ

し。与えられた仕事に熱心に取り組めるって子は貴重よ？」
「……まあ、それならよかったよ」
　単に使えない人材を預けるというのは流石に気が引けていたのだが、役立ってるというのなら安心だ。精々こきつかってやってくれ、とキースは心中で呟いた。実際に言えば本気でこきつかいそうなので言わない。
　ミフィールを含め、今までエレナとキースが助けていた者達は何とか上手くいっているらしい。苛められた経験から、キースの〝友人達〟と打ち解けられない者達も多いらしいが、それでも孤独でいるよりはずっとマシだろう。〝友人達も〟彼らに気を使ってくれている。良い奴等だ。
　しかし、誰しもがそうであるわけではない。
　そしてその問題と絡んでくるのが、英雄の件だ。助けた筈の少年によって引き起こされた、更にややこしくなったあの問題。
「何処から漏れたんだ……【英雄】の話なんて」
「そりゃ、私達の他にも一杯、当時の貴方を見たって人は多いでしょうけどね。でも、あの時は完全に別名で、別人を名乗っていたわよね」
　当時のその【英雄】、あれは計画者の一人であるミストを中心に徹底した情報統制がなされていた。キースの事も、上手く情報をずらし、改ざんする事で別人のように仕立て上げる事までしたのだ。それなのに、単なる一般市民がキースの正体に気づくだろうか。
　それならば、可能性があるのは貴族側の人間、と言う風になる。平民と比べれば貴族の方が、ひょっとしたらキースの事情に詳しいものがいるかもしれない。
「だが、貴族の側の人間がわざわざ明かすのか……」
　平民のリーダーの出現、それは貴族側の人間にとってマイナスでしかない。元々いじめられる側の人間が、更に相手側にリーダーを生み出すような真似をするだろうか
　扇動者が、明確な敵を定めて貴族側の決起を促したとも考えられるかもしれないが、たかが学院内の〝馬鹿騒ぎ〟の為に国全体で流布の禁止が命じられているキースの話を持ち出すだろうか。ただ、相手に敵を定めるのに、わざわざ英雄を仕立て上げなくたっていいじゃないか。
　そもそも、可能性がある、とは言ったものの、それでもキースの正体を知って

いる貴族と言うのはそういないだろう。ましてやこの学院に通うのはその子供だ。尚の事可能性は低い。
　そうなると……
　そこまで考えていると、リドが、不満気に声を上げ、
「ねー悩むのは良いけど別の所でしてくんない？ 私、仕事まだあるんだけど」
「てめえも少しは考えろ」
「嫌よ面倒臭い」
　あまりに素っ気の無いリドの態度に、軽くぶんなぐってやろうか、と、青筋を立ててそう思った。しかしリドが手にする「執筆部」の原稿のその一面を見て、意識を奪われた。
　記事に乗せられた写真には貴族の少年少女らの写真が大きくのっていた。彼らは射影魔具で撮られるのに慣れていないのか、表情は硬く、緊張しているのが写真越しにでも分かった。
「……なんだこいつら？」
「平民の暴走に決起した貴族の学生達よ。【貴族同盟】だって。ベタよね」
「【平民同盟】もクソつまんねえ名前だと思うけどな。確かそんな名前だろあっち」
　そんなリドの説明を聞いたものの、キースは、その写真に写る自分よりも幼そうな学生達の姿をみて、違和感を覚えた。
「……この【貴族同盟】とやら、本当にこのガキ達が作ったものなのか？」
「あ、やっぱそう思う？ なーんか代表って気がしないのよねえ……」
　リドは若干楽しそうな顔で此方を向いた。キースもそれに頷く。
　この写真に写っている子供達は、なんというべきか、〝自信〟が見えないのだ。
　どんな形であれ、ある程度の集団を引っ張る者達は、その表情や立ち振る舞いに自信のようなものが溢れてくる。集団を率いる自覚が、その者の挙動を洗礼させるのだ。勿論その本人の素養によって程度はあるし、状況次第でも同じだ。
　しかし、この写真に写っている少年少女らには本当に、微塵も、そうした洗礼された表情をしていないのだ。所在なく、自信なく、不安だという感情が写真を通して伝わってくる。

そんな彼らがいま、学院を騒がせている主犯格だとは思いにくい。
「一応、彼らはリーダーはエレナさんだって言ってるけどね」
「勝手なことを……まさかそう書いたのか？」
「うちの雑誌は本人との確証無しに不確かな情報を載せたりしません」
　ご立派な事だ。と、キースは息をつき、改めて写真を眺める。
「もしもエレナが本当にこんな組織を作っていたのだとしたら、こいつ等の肝が小さい理由も分かるが、実際はあいつはリーダーなんかんじゃない。分かってるだろ」
「じゃあ、誰が本当の〝リーダー〟なの？ この馬鹿げた組織の」
　その問いに、キースは「知るか」と答えて、しかしその後、僅かに俯き、
「……」
「どしたの？」
「もしこいつ等が本当にスケープゴートだとして、この集団を率いている奴らが別にいると仮定して……そうなると、なんとなくやり口が似てないか」
　貴族としての権力をこの学院に持ち込み、主張し、それを主張するために他の誰かを表に立たせ、利用する。自分達はその者の影で自由を満喫する。少し前、というかつい最近、似たような事件が起こっていた。
「……あー、確かに似てるわ。エレナさんの時と」
　リドは納得したように頷く。その瞳が僅かに鋭く輝いた。
　確証のようなものは全く無い。だが、こんな下らない事をする人間は、限られる。正義感がめっぽう強いか、相手への恨みが根深いのか、はたまた、よっぽどの馬鹿かだ。そしてエレナの取り巻き達はその馬鹿の部類に入る。
　そもそも今回の問題は、エレナと、その取り巻き達が真のターゲットだった
　それなのに今までキース達が助けた相手の尽くが、心身の弱い、巻き込まれただけの被害者ばかりだったというのもおかしな話だ。いくら暴走しているといっても、その本来の狙いの者達を見逃すなんて話、馬鹿馬鹿しすぎる。
　なら、その取り巻き達が揃って雲隠れしていると考えた方が良いだろう。
　そして、隠れた上で自分の敵を討つ手段がこれだとしたら……
「推測の域を出ないが……」
「いやいや、案外当たってそうよ。考えてみれば、【執筆部】が〝目星〟つけて

いた連中が全然見当たらないってのはおかしいと思っていたのよね」
　リドがニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべる。自分にとってネタになる事を見つけたときの顔だった。これが自分と関わりの無い事なら、他人事のように思えるのに、とキースは溜息をついた。
　しかしこうなった彼女は頼りがいがある。ほっておいても勝手に、この件に関しては調査を進めてくれるだろう。リドは元よりその気のようだ。
「ま、精々調査しておいてくれ」
「了解りょうかーい……あ、そうだ、これ知ってる？」
「なんだよ」
「あのね――」
　リドの口から語られる情報に、キースは徐々にその額に皺を寄せていった。そして最後まで聞き終えると、大きく溜息をついて頭を掻いて、
「いよいよ末期だな……」
「この問題、比較的平穏に解決するなら急いだ方が良いわ。もう時間も無いわよ」
　そうだな、とキースは返した。今リドから与えられた情報は事実だろう。で、あるなら、もう時間は無い。エレナに会って、対策を練る必要がある。早急に。だがその前にいくつか調べる必要もある。
「それで、これからどうするの？」
「【扇動者】に脅されたかもしれない奴の所いって……と？」
　キースが体が起こそうとした、丁度その時だった。
「……！　……!!」
「……こ、……が……ろ！」
「……ら！　…………!!」
　突如起きた、外の騒がしさに出鼻をくじかれた。何だ？　とリドと顔を合わせて首を傾げているうちに騒ぎはどんどんと大きくなり、終いには、
「キース！　キース・リンベルはいるか!!」
　どったーん、というけたたましい音と共に、『執筆部』の扉が開かれた。乱暴に開かれた扉の先には、大きな三人組の少年達が、キースの目の前に現れたのだ。

リドはまん丸目を見開いて、その来訪者を見つめ、
「……何、あれ、リーダーの知り合い？」
「……いや、しらねえよあんなむさいの。あとリーダーって呼ぶな」
　むさい、とキースが評したように、少年達は一見えらく大きなガタイで、太っているようにすら見えたが、よく見れば太っているのではなく、トレーニングによって身体を筋肉の鎧で覆っているのだと分かる。
　学生の身で、其処まで身体を鍛えている人間は、運動部に所属しているか、あるいは、〝将来〟に備えて何らかの訓練をつんでいるかだ。例えば騎士の家系の貴族で、将来家を継ぐ為に訓練を続けている者もいる。
　彼らの衣服が目新しさ、こちらに歩み寄る挙動の整えられた様子から、騎士のほうだとキースは予想できた。
　しかし、それならなぜ、その男達がキースを強烈な視線で睨みつけてるのだろう。
　すると、彼らの内、中心にいる少年が前に進み出る。何処か凛々しい顔つきの彼は、キースをじっと見つめ、
「キース・リンベルだな」
「そうだけど、君達は？」
「話がある。こちらに来い」
　またかよ、と、キースは内心で愚痴を漏らしながら、溜息をついた。背後ではリドが楽しそうに手を振っているので、少年達に見えないように中指を立てて返した。

第五十三話 ケンカ

　旧宿舎の裏側、ただでさえ人気の少ない旧宿舎のその裏に、キースは連れて行かれていた。キースはうんざりしながらも辺りを見渡す。騎士の少年三人組は此方を囲うように、逃げられないようにと壁を作っていた。
　まるでイジメの現場だな、とキースが苦い笑みを浮かべると、再びリーダーの少年が前に進み出て、
「キース・リンベル。聞きたいことがある」
「うん、何の用かな？」
　キースは穏やかな、いつも皆の前で向ける微笑を表情に浮かべた。その笑みのまま、目の前のリーダー格と思しき少年を眺め見る。顔つきだけ見ると、自分と同じくらいだが、体つきが一回りも二周りも違う。どちらかといえばキースは小柄なほうだ。子供の頃、まともに食事にありつける時期が少なかった所為か、あまり体が大きくならなかったのだ。
　自分と彼が並ぶと、まるで大人と子供のようだった。
　そんな体格を持つ彼は、背丈の低いキースを睨みつけ、
「先日、我等の仲間達がお前に暴行を受けたと訴えた」
「暴行？」
　キースは首を傾げつつも、おおよそ予想をつけていた。先日、キースに絡んできたあの貴族の少年達だ。どうやら自分よりも強い奴等に泣きついたらしい。自分にとって都合の良い言葉を並び立ててだ。
　キースは僅かに零れそうになった感情を抑え込み、息をついた。
「僕から彼らに暴行を加えた覚えは無いな。暴行されそうになったけど」
「出鱈目を言うな！ クズが!!」
　横にいる鼻が僅かに潰れ、巨体な割に犬みたいな奇妙な愛嬌のある顔をしてい

る少年が叫んだ。キースは内心で「犬コロ」と呼びつつ、表情は笑みのままでいた。
「その少年達は暴行と言っているけど、そもそも彼らは何処を怪我したといってたんだい？ どうやって暴行を受けたと？ そこに信憑性はあった？」
「彼らは貴様に酷い言葉を投げられたと言っていた！」
「へえ、なんて？」
「……言葉にするのが苦痛だと」
　その答えに、キースは噴出してしまった。あまりに馬鹿馬鹿しい答えに、耐え切れなかった。そもそも身に覚えの無い事で因縁をつけられた時点で、哂いを堪える事に必死だったのだ。それなのに〝言葉にするのが苦痛〟とは、全くもって馬鹿馬鹿しい。
　キースは嘲笑を顔に貼り付け、そのままの思いを口にした
「ばっかじゃねえの？」
「貴様！」
　思わず漏らした言葉に、途端、「犬コロ」はその図体に似合わない俊敏な動きで、キースへと拳を振るった。やはり武術、恐らく騎士としての鍛錬を積んだ人間の動きだった。常人なら身じろぎすら出来ずに叩きのめされる。そんな容赦のない一撃。
　だが、キースはそれをみて、
「っは」
　鼻で笑って、鋭く、右足を高く繰り出した。それは足元の砂を伴い、向かってきた「犬コロ」のつぶらな瞳を襲った。
「っむぅ!?」
「よっと」
　そしてそのまま宙に打ち出された右足を横に薙いだ。それは「犬コロ」の顎を丁寧に捉え、脳を揺らす。「犬コロ」は立つ事も叶わず、膝を付いた。
「キ、サ、マ、」
「どんくせえなあ……」
　キースはそんな風に言って、呆れた。図体はでかいのに、攻撃にいたる挙動の何もかもが単純すぎた。純粋な身体能力だけなら、間違いなくキースより高いも

のを持っている筈だ。しかし経験の浅さが全ての足を引っ張っている。
「舐めるな！」
　もう一人の少年が拳を振り上げ、キースに突撃する。キースは右足を戻すと一歩二歩と下がる。少年はそれを追い、振り上げた拳を挙げようと駆け、結果、足元の魔法陣に気づかなかった。
「【放電】」
「ぎゃ!?」
　魔法陣から発せられた魔術は微弱な、ぱちんと光るような雷だった。怪我をさせるようなものではなく、しかし勢いよく駆け出した者の足元をすくうには十分すぎた。足元に転がる少年の頭に踏みつけて、
「注意散漫。駄目駄目だなーおい」
「く！ 足をどけろ!!」
　未だしびれがぬけきっていないのか、足を震わせながら巨体の少年は叫ぶ。キースはそれを無視して眼前の、リーダー格であろう少年に向き合った。
「……」
　身構えるリーダーの少年は、なるほど。少し雰囲気が違う。ただ自分の力を前へと振り回すような、猪の様な戦い方をするつもりは無いらしい。多少は実践に覚えがあるようだ。
〝多少は〟と、キースはその場を引かず、僅かに目を細め、
「どうした。来いよ」
「……っ」
　リーダーの男は突撃する。その巨体に似合わぬ鋭いフットワークでキースに詰め寄りその拳を真っ直ぐに振りぬいた。キースは地面に転がる少年を踏み台に、背後へと跳ぶ。
「ふっ」
「お、」
　キースの動きを、しかし少年はそれを見抜いていたらしい。広げた距離を更に詰め寄るように、大きく足を踏み込む。懐へと飛び込まれれば力の差で負ける。
　それを理解したキースは再び地面を蹴り上げ、砂を撒き散らす。だが、
「同じ手が!!」

少年は顔を腕で隠し、粉塵から瞳を守っていた。そしてそのままの勢いでその太い腕を振り下ろす。小柄なキースを捉える動きだった。
だが、その掌は空を切り、
「何?!」
「敵から目を逸らしちゃ駄目だろ」
キースは、粉塵を影にし、巨体な少年の背後に回っていた。少年は振り返るが、しかし間に合わず、キースの掌で発動した雷が少年の背中を打った。
「がっ！」
「はい終了」
雷に身体を痺れさせ、膝を付く。キースは彼の背を蹴り倒し、踏みつける。
「悪いな。騎士との戦いってのは慣れてんだよ」
暗黒時代。彼は国を騒がす盗賊として曲がりながらも騎士達と戦いを続けた。彼らの戦い方、実直な騎士との戦い方はとうに学んでいる。このガタイの良い少年等の戦い方はまさにそれだった。彼らが真面目に、真剣に鍛錬を積んできたからこその賜物だろう。
そして、だからこそ、キースからすれば非常に戦いやすい相手だった。彼らがもし、自分の力を正しく使いこなす事が出来たら、それも違っただろうが、
「こんだけ鍛錬してんのに、それを動かす頭がスカスカじゃ意味ねえわな」
「な、に」
「いいように利用されてんじゃねえってんだよ……【風流掌握】」
訝しがる少年を無視して、キースは溜息をついて、そのまま魔術で周囲の気配を探った。大抵、こういう事を仕掛けてきたやからは、必ずその結末を見たがるものだ。自身の仕掛けた〝事〟の成功を確かめるために。
「……いた」
案の上、この旧宿舎の裏手であるここを丁度見下ろせる二階に、そっとこちらを伺う人間が何人かいる。元々人目がつかないようにと選んだこの場所をわざわざ覗き込む奴はそういない。つまり、
「【我が身に力の加護を】」
唱えられた魔術は肉体強化。その魔力によって常人とかけ離れた力でキースは跳躍する。一瞬で二階の窓際、此方を観察していた者達と目線を合わせたキース

は、その彼らの顔を確認し、やはりと確信した。以前キースにいきなり喧嘩をふっかけ、そしてキースに「耐え難き屈辱」とやらを受けたというあの少年等だ。
　彼らは、一瞬で跳躍してきたキースの姿に、
「っえ？」
　と、口をぽかんとあけた。とても、自分達に危機が訪れるとは思っても見なかった。そんな顔をした彼らに、キースは獰猛な笑みを浮かべ、魔術で強化された足を振り上げ、
「高みの見物とはいい身分だなあオイ！」
　そのまま彼らと自分とを隔てる窓ガラスに蹴りを入れた。激しい破砕音と共に元より古くなっていた窓ガラスは抵抗無く砕け散り、少年達にふりかかった。
「きゃぁぁぁあ!!?」
　響く悲鳴の中、キースは破れた窓ガラスから廊下へと踏み込んだ。飛び掛ったガラスに驚き、怯える学生等を前に、キースは鼻で笑う。例えガラスで皮膚を裂かれたとしても、メリアの医療術をかけてもらえば後も残らない。だから彼は気にしない
「な、な、な、な、」
「よお、またあったな」
　先に魔術をぶつけてきた少年に、キースはわざとらしい笑みを浮かべて見せる。少年は混乱し、キースを認識するのに暫く時間がかかったが、ようやく自分の置かれた周囲の状況を認識すると、精一杯の虚勢を張り、叫んだ。
「き、きさ、貴様！ 何を！」
「五月蝿い」
「っぎゃ!?」
　何かしゃべろうとするので顔を殴って黙らせる。以前は彼を無傷で帰した。だが、同じ事を、しかも周囲を巻き込んで繰り返した馬鹿に容赦をするほど、キースは心が広くない。
「ま、お前等にも言いたいことは色々あんだろうが……ちょっくら殴られろ」
　キースの獰猛な笑みを向けられた少年達は、その表情を恐怖に歪めた。

第五十四話 悩む少女と少年の告白

　オルフェス学院中庭。
　普段は常に管理人が整備していた美しい庭は、今は見る影も無く荒んでいた。丁寧に植えられていた花々は踏み躙られ、備え付けられていたテーブルなどの家具は倒され、壊されていた。つい最近、ここでも平民と貴族の争いがあったのだ。
　いよいよもって、身分差のある二つの勢力の対立は制御しきれない所まで来ていた。彼らは教師や用務員達が庭を修正する間もなく、争い続けている。
「うーむ……」
　キースはそんな荒れた中庭の上で、腕を組み首を傾げていた。
　別にこのどうしようもない光景に心を痛めている訳ではない。思い悩むのは、先の乱闘で得られた情報を整理していたからだ。
『し、しらない！ しらないんだ！』
　キースが暴行を、もとい制裁を加えた貴族の少年達は、あっさりとキースに降伏した。元々暴力なんてものに晒された事が無かったのだろう、一二発拳を〝行使〟するだけであっけなく、彼らは泣き出してしまった。
　しかし、そんな彼らから得られた情報は芳しくない。
『私達は、ただ、お前が英雄だって知らされただけで……』
『じゃ、俺を犯人だって言ってきたあのガキは？』
『か、彼が自分から、犯人を知っていると……』
　彼らが扇動者か、それに近いものだと良かったのだが、どうやら彼らは単に扇動者に〝煽られた〟側の者達だったらしい。ならばと、キースを犯人呼ばわりしたあの少年に問いただそうとしたのだが、探してみても見つからない。少年に保護を頼んだ者を尋ねても、

『楽しそうにしていたのに、急に顔を出さなくなった』
　と、困った顔をされてしまった。ならば、彼らの保護下外で何らかの形で脅され、利用されていると見るのが正しいだろう。しかし、それなら一体誰が何の為に？
　やはり直接探る必要がある。時間は無いが……
「と？」
　男子学生と女子学生、双方の宿舎へと続く渡り廊下。その先にいたのは、ついさっきから探し続けていた少女、エレナ。しかし彼女の様子は何時もとは明らかに異なり、
「……何があったんだ？」
「……」
　見てみれば、顔を伏せたままのエレナの姿は、何をぶちまけられたのか上から下までびしょびしょに濡れていた。無残、とまでは見えないのは彼女の容姿故だろうが、それでも中々酷い有様だった。
　躊躇いがちのキースの問いかけに、エレナは濡れそぼった頭を上げて、どうにも疲れた表情で、
「……扇動者に食堂のお茶ぶっ掛けられたわ。貴方は？」
「……筋肉馬鹿に絡まれて馬鹿貴族をリンチした」
「貴方の方が楽しそうね」
「楽しくはねえよ。お前がつまんねえ状況ってのは認めてやるが」
　キースは溜息をついて、彼女の濡れそぼった頭を撫でてやった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「先に私の部屋にいて。私は風呂入ってくるから」
　そう言って、キースはエレナに彼女の部屋を案内された。ゲルダー家の一人娘、とはいえ流石に宿舎の部屋が特別だとかそう言うことは無く、キースの暮らす部屋と対照的な作りをしているだけで、大して広さは変わりはしなかった。
　キースの部屋もそうだが、この学院の宿舎は一人部屋が殆どだ。この学院の立地がそもそもガイディアの中心に存在する為、足で通える位置に実家があるもの

は足で通うものが多いのだ。対して宿舎の方は設計のミスではないかと思うほどに大きく、それ故に平民を受け入れ始めた今でも、一人部屋を用意できるほどに収容量に余裕がある。
　まあ、それでも最近は、徐々に余裕がなくなってきているという話も聞くが。近いうち魔術で拡張するか、あるいは共同部屋に変わるかもしれないという。
「やれやれ」
　キースは下らなそうに頭を掻いた。
　それにしても、えらくあっさりと自分の部屋にエレナは通したが、あの女は自分の部屋に大して親しくも無い男入る事に抵抗が無いのかという気もするが、まあ、こっちも人の部屋をじろじろ見る趣味は無い。大人しく待っていよう。
「酷い目にあったわ」
　と、そんなくだらない事を思っているとエレナが部屋に入ってきた。
　キースは振り返り、そして
「……」
　軽く絶句した。
　風呂から出てきた彼女は肌身に薄着を一枚と男が着るような短パンを穿いただけというあまりにもラフな格好で入ってきたからだ。なるほど女子学生の宿舎の中では人目を気にする事は無いのかもしれないが、自分の部屋に男がいることを彼女は理解していないのか。
　元より美少女と言っても過言ではない彼女は、雫を湯で火照った肌に滴らせていて、なんだかぞわりと背筋に走るような色香を身に纏っていた。が、キースはそれに対して男として緊張するよりも、まずその無防備さに呆れたように口を開け、
「男の前でそんな馬鹿な格好してくんな馬鹿。犯すぞ」
「……犯す？ 犯罪でもするの？」
　何故か頭に疑問符を作るエレナに、キースは眉を潜め、
「つまんねージョークだな、おい」
「いや、だから犯すって何をよ」
　問われ、キースは暫く口を開けた後、
「……おい、まさかとは思うが」

「何よ」
「子供は何処からやってくるか知ってるか？」
「女性と男性が子供をつくるのでしょう？」
「……じゃ、子供のつくりかた」
「キス」
「できるかぁあ!!」
　キースは叫ぶが、エレナは未だ理解できていないのか首をかしげた。
　この学院に来る前から不良少女と化していた彼女は、入学時から興味のある授業以外はサボることが多かった。天性の才能を持つ彼女は勉学でも凄まじい理解力を発揮するが、やはり興味の無い事に対してはからっきしだ。故に巷にあるような冒険小説や恋愛小説ともあまり縁の無い生活を送っていた。友人はおらず、人づてにその手の話を聞く事は無く、当然異性との交流などからきしだ。
　結果として、彼女は性の知識がすっぽ抜けていた。
「……分かった。後でシールに報告しておく。だから今は黙ってちゃんと服を着ろ」
「分かった」
　エレナが制服を着直す様子を見ないよう背後を向いて、キースは溜息をついた
　大貴族、ゲルダー家の長女が性に対して無知ってのは大問題なんじゃないだろうか、と思いもしたが、あまりに馬鹿馬鹿しいのでキースは考えるのをやめた。こういう問題は教師に任せよう。
「終わったわ」
　返事と共にキースは振り返る。まだ微妙に乱れた格好だが、前のよりははるかにマシだろう。そして今は彼女の艶姿を眺めている時ではない。
「それで？ 何があったのか詳しく教えてもらおうか」
　キースの問いかけに、エレナは難解そうな表情で、眉を顰めつつも口を開いた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……なるほど、平民側の扇動者か」

全てを語り終えたエレナは大きく息をついた。別にそこまで長い間語ったつもりは無かったのだが、何故だかやたらと疲れた。学生同士の喧嘩を止める時よりも遥かに。そしてその疲労と同時に頭の中に過ぎる、疑問、

「……分からない事があるの」

「なんだよ」

「何故、ヒノは私が罪を償うと言ったらあんなに怒ったのかしら」

あの時、エレナが償いを宣言した時、ヒノは激昂した。

『ふざけるな！』

そう叫び、近くにあった水差しをエレナにぶちまけ、エレナの返事を抗議を聞く間も無く去ってしまったのだ。しかし、そもそも彼女達平民の願いは、エレナが罪を償う事だ。彼女が彼女の罪に見合うだけの罰を受ける事。だから暴れている。なのに何故だ？

エレナのその問いに、なるほど、と、キースは頷き、

「そりゃ、敵対意思満点の状況で、宣戦布告しに来たそいつ等に対して、お前がいきなり謝罪するなんて言ったって、信用できないってのがある」

「それは……確かに」

「自分達の思いが軽んじられてるとでも思ったのかもな」

勿論エレナ自身は自身の罪を軽んじたりなんて、思ったことはない。それどころか今もずっとどうやって過去を償えるかと思い悩んでいるのだから。しかしそうした思いが必ずしも正しく伝わると言う訳では無い。

「ただ、それとは別の問題もあるだろう」

「別の？」

「ヒノって女はな。お前に謝って欲しくないのさ。多分な」

「は？」

キースの言葉が全く理解できず、エレナは首を傾けた。謝って欲しくないとはどういうことなのか。キースはエレナの疑問を理解し、そのまま言葉を続ける。

「悪は悪のままでいて欲しい。そいつらはそう思っているんだ」

「……意味が、よく分からないわ」

「親を殺された子供がいた。そいつは犯人を恨んで追い詰めた。だが犯人は改心して人々に愛を説く牧師になってた。お前がその子供ならどう思うよ」

「……ふざけるなって思うわ」
「そう言う事だ。言わばこれは感情の問題だよ」
　理不尽を向けてきた相手、身勝手を振舞って、自分を傷つけてきた相手。そんな〝悪〟がいきなり自分の罪をあっさり認めて、謝罪してきたら？
　当然、そんなの納得できる訳が無い。
　ヒノは言っていた。復讐させろ、仕返しさせろと。あれも感情の問題だ。
　エレナはその感情の動きに納得し、理解した。しかし理解したままでは駄目だった。何しろエレナは、キースのたとえ話で言うところの人殺しの牧師なのだから。
「じゃあ、その牧師がその子供に償いをしようと思ったら、どうしたらいいの？」
「知るかっての」
　キースはこんどこそきっぱりとそう言い切って、エレナに指を突きつけた。
「学校の問題集じゃないんだ。答えなんて決まっていない。そもそも本当に答えがあるのかどうかだってわかりやしない」
　現実でぶつかる問題に、分かりやすい答えなんて存在しない。そもそも答えといって良いかも分からないくらい曖昧で、不確かなものばかりだ。だからこそ自分で考えなければならない。何を行い、何を得るのかを。
　キースは、そもそも、と言葉を続け、
「大体、別にお前がこの問題を解決する義務があるわけじゃない」
「私がこの騒動の原因なのよ？」
「だからどうした。今問題を起こしてんのはお前じゃない。そのヒノって女だ」
　そう、今回の騒動を引き起こしているのはそのヒノという少女であり、彼女達の取り巻きであり、それと対立する貴族同盟の連中だ。彼等彼女等が今回の主犯格だ。どれだけエレナの過去が原因だろうと、彼女は犯人ではない。この事実は揺らがない。
「だからこの問題と向き合わなきゃならないのはそいつ等と教師達だ」
「……でも、私が！」
　エレナはどこか焦るような声で叫ぶ。何故自分がこんな風に焦っているのか分からなかったが、それでも叫ばずにはいられなかった。だが、キースは冷めた目

つきで首を振り、
「見てみぬ振りでもすればいい」
「……私は過ちを犯したのよ」
　適当にも聞こえるようなキースの物言いに、エレナは噛み付くように、自分の感情を吐き出すような悲痛な声で呟いた。
　自分は酷いことをした。酷いことをしたのだと、彼女は自分に訴える。自分の苦しみを少しでも晴らそうと、周りにやつあたりをして、誰しもに苦い思いをさせた。それを償わなければ、成長などと言う言葉を自分に掲げる資格も無い。
　エレナは頑なにそう思う。彼女は元々、権力によって自分の罪が許される事に耐え切れず、押しつぶされてしまったような少女だ。だからこそ、今もまた、彼女は自分を攻め立てる。聡明で、純粋であるが故に。
　キースはそんなエレナの様子を見て、溜息をついた。エレナのそういう性格が、本質が、キースにも伝わった。そしてその痛々しいまでの純粋さを、キースは眩しく思った。
　やはり〝イイ女〟だ。
　頑なで、純粋で、輝かしい。それもそれが素の性格なのだからたまらない。近寄りすぎるとそのエネルギーに火傷しそうになるほど、無垢な魂。だが、そんな純粋さは、ただ生きていくだけでも重い枷になる。それもキースにもわかっていた
　だから、と、彼は口を開き、
「一つ教えといてやる」
　そう切り出して、語る。
「俺は、ガキの頃、人を殺した事があるんだよ」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「かなり昔の頃だった。親に捨てられて、仲間と一緒に路上の隅っこで暮らしていた時の話だ」
「あの時は道端でゴミ拾ったり、盗んだりしてなんとかその日暮らしみたいな事をしていた」

「物を盗んだり、空き家に勝手に住み着いて暖をとったりして、なんとか生きていたのさ」
「そしたら、騎士にそれが見つかってな」
「元々当時の騎士は質が悪い。運が悪かった」
「奴ら、本気でガキの俺等を殺そうとして、女はひん剥いて犯そうとしやがった」
「だから殺した。丁度ソイツがぶら下げてた剣使ってな」
「腹ぶっ刺されてひくひく悶えながら死んだよ」
　キースの唐突で、非常に淡々としたその語り口に、エレナは息を呑んだ。キースの語る言葉が真実なのかどうなのか、全く分からなかった。だが、その語る瞳の静けさが、事が真実であると語っていた。
「この件だけじゃない。俺は散々犯罪を犯し続けた。自分達の中で魔術の才能があると気づいた時からは、貴族の家を片っ端から強盗した。奪い、暴力で屈服させた。自分が生きる為に、誰かから奪い続けた」
「……」
　それが一体どんな人生だったのか、エレナには全くわからなかった。過ぎるほどに恵まれていた自分の人生では、彼の地獄は想像する事すらかなわなかった。
「そして、これらの罪は、ジジイ……ミスト学院長の権力で全部無かった事になった。全部だ。俺の仲間を含めて、散々積み重ねた悪行は全部チャラになった」
　俺等の所為で、散々苦しんだ奴等もいたはずなのになあ、とキースは皮肉な笑みを浮かべる。エレナは何一つ声を返すことは出来なかった。
「さて、で、お前自身は何やってきたんだっけ？」
「なにって……」
「授業サボって、チンピラ引き連れて授業妨害して、後は何だ？ 暴行事件？」
　そこまで指折りで数え、キースはエレナを見て鼻で笑い、
「くっだらねえ。こんなつまんねえ事でなに悩んでんだ？ お前」
　その言葉には、流石にエレナも反感を覚えた。自分の悩みを軽んじられた様に思えたし、なにより自分の所為で苦しんできた人たちを小ばかにしているようにしか思えなかった。

「その大小を比べるような事じゃないでしょう」
「比較しなくたって小せえよ。お前のしてきた事なんて。一年もたてば誰も記憶の彼方に忘れ去ってしまうくらい、小さい。それが被害者でもな」
「そんな事……」
「騒ぎがでかくなったからって囚われすぎてるんだよ。お前は」
　そう、なのだろうか？　エレナは首を傾げる。
　キースの真意は、自身の過ちに囚われすぎているエレナを解き放つ事ではあるのだが、その言葉に嘘は含めていない。実際、エレナがやってきた事なんて、遠めに見れば単なるチンピラと大差ない。エレナの事に関してだけ言えば、今騒ぎ立ててる連中が大げさすぎるのだ。
　しかし、エレナは納得しきれないのか、眉を潜め、
「それでも、私の所為で傷ついた人はいるのよ」
　ヒノという少女のように、此方に烈火のごとく怒りを向けてくるものもいる。彼女等の怒りは、そのまま傷つけられた心の反映だ。だからこそ、それを見てみぬ振りはできない。
　頑な、強情という言葉でも言い表せないその強さに、キースは溜息をつき、
「だったら尚更、ちっせえ過去に囚われてる場合じゃねえだろ」
「過去の事で、彼女達は怒っているんじゃない」
「過去は過去だ。変わらないし、変えられない。お前が施さなければならないのは、過去の被害者たちじゃない。今の被害者たちだ」
　ならばこそ、だ。極端な話、エレナの悪行すら今は無視するべきなのだ。そんなことに囚われている間にも、今の彼女達はどんどんと暴走の〝るつぼ〟にはまっていくのだから
「その為には、事の原因すら、邪魔でしかない」
「自分の罪を償う為に自分の罪を放棄しろと？」
「別に、そんなめんどうなこと言っていない。やるならさっさとやれって言ってる。はっきり言って、どーでもいいんだよ。お前の過去なんて。他人にとって」
　キースは言う。エレナ以上の罪を背負った男は、どこか悟りきった表情でエレナを見つめ、語りかける。
「自分の罪に浸ったって、意味は無い」

「……」
　キースはそう言いながらも、自分が滅茶苦茶な事を言っていると自覚していた。自分の罪を無視しろ、というのは、身勝手にも程がある。結局は思考放棄だ。
　だが、そうでもしなければ前に進めない、とキースは思っている。さっきエレナにも言った。過去は変えられない。そうである以上、どんな償いをしようと、過去は抹消できない。所詮は、罪人の罪償いなんて、自己満足だ。
　ならば、進むしかない。戻れないのなら、前へ。前へ。罪を背負って。
「……」
　エレナは、キースの言葉を耳にして、暫く目を瞑り沈黙した。まあ、恐らくは此方の言わんとしていることは理解しているだろう。一々悩んでる暇があったら動けと、結局はそんなことを言っているのだ。
　こまごまとした事情に一々足を止めているような暇は無い。だから、
「決めたわ」
　エレナは、きっぱりと告げた。キースにではない。己自身に向けて。
「何を？」
　キースは問う。
「謝りに行く」
「誰に」
「ヒノに、私が迷惑をかけた人たちに」
「何の為に」
「先に進む為に、過去に決着をつけるの」
　エレナのその答えに、キースは頬を掻いて。
「謝った所で、奴等はお前を許そうと思わないぞ。奴等はお前を悪としたがってる」
「それでも謝罪するわ。許されないなら、それを続けるわ」
「謝罪する事が、お前の罪を償う事には繋がらない」
「なら償いの道を探し続けるわ。何をなすべきなのかまだ見えていないけれど」
「見てみぬ振りしたほうが楽だぞ」
「私は、自分の罪を見逃した方が、辛いわ」

言い切る彼女の表情には決意が満ちていた。そこに揺らぎや迷いは無い。過去に目を瞑り、行動を起こせ、そういったキースの言葉に対して、エレナの答えはやはりどこまでも実直だった。罪から一時でも目を逸らせとそういったのに、だ。

　誰だって失敗や過ちを犯している。そんなのに向き合ったって自分の得になることなんてない。それなのに真正面から彼女は向き合おうとしている。自分の過ちから目を逸らしている連中なんて、ごまんといるのに。

　やっぱりバカな女。

　キースは心中でそう告げる。しかしだからこそ、手を貸そうと思ったのだ。

　だから

「分かったよ。ついてこい」

　キースは息をつき、立ち上がった。

「何処へ？」

「そのヒノ、お前の被害者達がいる場所」

「知ってるの？」

「知ってるも何も」

　と、キースはほんの少し前、リドに聞いた情報を口にした。

「今、【平民連合】は職員室を占拠して立てこもって、大騒ぎ中だ」

第五十五話 一人の少女が受けた理不尽

ヒノ・フレイラー、彼女は苦学生である。

元より裕福ではない家庭に生まれた彼女は幼いころから両親の手伝いを強要されて育った。彼女は言葉を覚えるよりも先に、父の仕事の掃除の仕方を覚え、母の仕事である裁縫の仕方を覚えた。幼いころからそんなことをずっとやってきた彼女は友人たちとも満足に遊ぶ事の無い、色褪せた幼少時代をすごしてきた。

末期と言えど、暗黒時代と呼ばれた時期に仕事で稼ぐ事ができたと言う時点で、彼女の家庭はある程度恵まれていたのかもしれない。勿論それは比較的というだけで、毎日遊ぶ事も許されず笑いもしない両親の為に奴隷のように働いてた彼女には、似たようなものだとも思えたのかもしれないが。

ヒノはそのときの自分が何を考えていたのか、あまり覚えていない。毎日がただ苦しく、辛く、楽しくもなんとも無い日々。どれだけ真面目に働いても親の口から零れるのは感謝の言葉でもなんでもない、世の中に対する愚痴ばかり。失敗すれば怒鳴られ、時に暴力を振るわれる。幼きヒノは、そんな環境に耐える為、感情を殺し、機械の如くひたすら作業を積み重ねていた。詳しく思い出せないのはその為だ。

そんな彼女が魔術学院に入学する経緯。

それは誰にも祝われない五歳の誕生日を迎えた時だった。

彼女が五歳の頃、【英雄】が現れた。

自分より少し年上くらいの〝少年〟、顔は隠し、正体も分からず、しかしその言葉は凛々しく、猛々しい。陰鬱とした平民街の人々は、絶望の中でも凛と響く彼の言葉に魅せられ、ひきつけられていった。彼は集った人々に意思を与え、悪徳貴族から奪った財を与えた。そして彼は武器を持たず、人々を引きつれ城に乗り込み、そして王を改心させた。

あっという間、と言う他無いくらい、【英雄】は、暗黒時代を終わらせた。
そして、そんな【英雄】の偉業は、死に掛かっていたヒノの感情を覚醒させ、そして魅了するには十分すぎるものだった。顔も、名も知らぬその【英雄】にヒノは信仰にも近い感情を抱いていた。
ともあれ、暗黒時代は終わった。財を蓄え続けた悪徳貴族の財産は全て解体され、国民達に再分配された。経済は立ち直りの傾向をみせていく。そして貴族のみ入学が許された魔術の学び舎、荒れた時代であろうとその栄華を揺るがせなかった最高峰の魔術学習兼、研究機関オルフェス学院が、平民にもその門が開かれる事となった。
そして、その時からヒノは勉強を始めた。未だ自分を扱き使おうとする親に隠れ、小遣いを稼ぎ、それを使って勉強の資材を購入し、こつこつこつこつと勉強を積み重ねていった。
彼女の望みは唯一つ、平民の入学が許された魔術学院に入学する事。
以前よりマシになっているとはいえ、未だ幼きヒノを仕事場で扱き使おうとする両親から逃げたかったと言うのもあった。しかし何よりかの【英雄】がその学院に入学したと言う〝噂〟を聞いたのが強い動機となっていた。別に顔を見たいとか、あって話がしたいとか、そう言うわけではないのだが、それでも、あの【英雄】と同じ場所に立つ事を、彼女はどうしてもしたかった。同じ場所に立てれば、少しでも近づける、そんな気がしたのだ。
幸い、魔術の才能がある事は既に分かっていた。まだ親の手伝いが心の底から嫌だった時、イライラが頂点に達した瞬間、自分の目の前に〝炎のようなもの〟を生み出したのだ。それはストレスによって自分の魔力と周囲のマナとが反応したものだというのを知ったのは最近だったが、ともあれこの時、ヒノは自分になんらかの魔術の才能があると知っていた。
だから彼女は勉学に心血を注ぎ、結果として優秀な成績で試験を通過した。彼女は、晴れて奨学生として入学が許された。当時九歳、通常から三年遅れの入学だった。
学院の生活は楽しかった。両親の仕事の手伝いなんてしなくても良い。知らない事を沢山学べる。友人も出来た。食事だって、今まで食べた事の無いものを沢山食べられる。今まで親の仕事に、貧しさに潰れていった幸せな時間を取り戻す

ように、彼女は学院での生活を満喫していった。

　だが、それとは別に、彼女の中にどす黒い感情が育っていた。

　自分の、学院から用意された借り物のと比べて美しい制服を纏った少年少女たち。物腰は整っているが傲慢で、常に此方を見下すような視線を向けてくる子供達。
　貴族だ。ヒノは、彼等に対しての、煮えきれない感情を処理できずにいた。
　貴族は基本、学院への入学条件は一つ、魔術の素養の有無だ。それがあれば誰でも学院に入学できる。入学が許可されたとはいえ平民には未だ高き門と言えるこの学院に、あっさりと入学できるのだ。
　無論、平民と違い貴族は、入学時には高い入学金を払い、その後も定期的な授業料を支払う事が義務づけられている。その費用は学院の維持費だけでなく、平民達の授業料をも賄っている。だからこそ貴族の子供の入学の入り口は広く、寛大なのだ。
　ないのだが、しかしそれがヒノには腹正しく思えた。親に、両親に払ってもらうと言うところが、そもそも彼女には腹正しい。自分は親の支援なんて何も無かった。むしろ、学院への入学も反対されたくらいだ。
　それなのに何故彼らは、親の支援を当然のように受けて、傲慢な態度をとれるのだろう。
　何故【英雄】は、この学院に入学したのに、彼らに制裁を加えないのだろう。そんな事すら思った時もあった。
　大人ならば、それを諦観する事でその感情を処理できたのかもしれない。たとえ一度や二度の革命が起こってもそう容易く動かせない世の中の仕組み。それを飲み込んで、自分達の生活を受け入れることが出来ただろう。
　だが、彼女がその事実を飲み込むには、若すぎた。
　幸い、この学院では平民と貴族は同じように扱われる方針が新たに定まっていた。受けられる授業に差異は無く、授業以外の待遇も貴族と何ら変わりは無い。卒業後の進路も、今まで貴族のみが選択できるような国務に関わる要職に就く事も夢ではない。

故にヒノは入学後も努力を続けた。此方を見下し、小ばかにする貴族達を見返してやるために、彼らよりも良い生活を手に入れて、何もかも諦めたような両親を見返してやるために。

彼女は、魔術師としての才覚は平凡だったが、努力を続け、優秀な成績を収め続けていた。教師達からも一目置かれていた。

屈折した感情を滾らせてはいたものの、その時のヒノは真っ当な〝復讐〟を目指していた。己が努力で世の理不尽を見返すと言う、真っ当な〝復讐〟を。

だが、ヒノは見てしまった。

下らない貴族達を一蹴するような権力を持ち、見目美しく、頭脳は明晰、そして天性の魔力を所有する完全なる存在。それなのに傲慢に振舞って、女王のように君臨する、一人の少女の事を。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……」

ヒノは、過去を振り返るのを止め、目を開いた。

「ヒノさん？ どうしたの？」

「なんでもないわ」

心配そうに声をかけてくれた仲間に笑みを向け、ヒノは周囲を見渡した。職員室のテーブルが並ぶ上で、本来いるべき教師ではなく自分の仲間たちがそこでたむろっている。

今現在、ヒノ・フレイラーは、オルフェス学院の職員室を占拠し、貴族達に制裁を加えるべく、動いていた。事の経緯は単純で、【平民同盟】の一部の学生が教師から注意を受け、それに反発し、暴走した結果、職員室に押し入り、占拠する事になったのだ。計画性なんて欠片も無い。単なる暴走だった。

ヒノにはそれがわかっていた。自分達の行った事が、暴挙であると。しかしそれでもいいと彼女は思った。貴族への報復、その力になるのなら構わないとそう思った。

エレナの率いた貴族の暴走、それは彼女が知るだけでも酷いものだった。

ゲルダー家という存在による脅迫、暴力。権力の加護無き者たちは一方的に殴

られ、罵られ、傷つけられた。中には乱暴されたと言う少女も、ヒノの友人の中にはいた。エレナ自身のように、ただワガママを振舞うというだけではない。彼女を利用していた貴族は、非常に醜悪な暴れっぷりをみせていた。
　勿論、エレナ自身からくるワガママもあるわけなのだが、それでも平民達の不満の数は相当に広がっていた。
　だから、この一連の平民達の騒動は誰かが決起して起こした訳ではない。自然と彼方此方から不満が沸き起こり、渦巻き、そして爆発したのだ。現在ヒノがリーダーのような真似をしているのはそれをまとめるだけの能力があったからに過ぎない。

「あ、お邪魔するよ」

　そんな風に、ヒノが思案に耽っている最中、唐突に、そんなぼんやりとした声と共に占拠した筈の教員室に一人の男が入ってきた。職員室を共に占拠した仲間達は、あまりにも平然と〝彼〟が入ってきた為に、追い出す事も忘れて呆然としている。白髪交じりの黒髪、気の抜けたような笑みに、ラフに着こなされた教師の制服、
「……教師の方々は仕事の為、別室を用意している筈ですが」
　シール、彼に向けて、ヒノは警戒を交えながら言葉を投げかけた。
「あーうん。忘れ物を取りにきたんだ。次の授業の準備がねー」
　部屋の中ではそれなりに魔具を構えた学生達が興奮で血走った目で彼を睨んでいる筈なのだが、シールは特になんでもないように平穏そうな表情で、自分の机に歩いていって資料を漁り始めた。
　彼の事は知っている。暴走したエレナを止めた男だ。暴走を止めて、止めたまま、彼女の罪を裁かなかった男だ。そして今、彼は自分達の行いを咎めようとしない。
「……私達を咎めないんですか」
「話を聞いてくれるなら。でも君達は聞かないだろうし、無駄な事したくない」
「……無責任ですね」
「君達の責任は君達のものだ。勿論、背負いきれなくなれば僕等が背負うけど」

シールはさらっとそう言った。目当ての資料を見つけたのか、手元にそれらの紙を束ねて丁寧にそろえていった。全くこちらに警戒も、怒りも見せない教師を前に、ヒノは不思議な思いを抱いた。
　だからこそ、聞きたくもなった。何故、そう、何故だ。
「何故、シール先生はエレナを罰しなかったのです。酷いことをしたのに」
　問われ、シールは首を傾げ、
「まあ、まずは期間を設けたかったっていうのはある。彼女の事情は複雑で、そして思った以上に幼く、傷つきやすかった。だから時間を空けたかった」
「甘すぎます」
　言うと、手厳しいな、とシールは苦笑し、
「そうだね。授業を荒らして、無関係な人たちを傷つけて、自分の権限を無法者達にスキに使わせて、彼女は確かに罰せられるべきだ。だけど」
「だけど？」
「彼女は賢い。だから自分の罪は、自分が一番良く分かっていると思ってね。そして自分がどう罪と向き合うべきなのか、決めてくれると思ってね」
「……そんなの信用できません」
「ま、そりゃ君達は出来ないよねえでも。でも僕は信じてるよ。彼女も」
　君達もね。と、そう告げ、笑った。それは暗に、ヒノ達の行いもまた、間違っていると言っていた。そしてそれを、自分達で気づき、償えと。
　しかしそれは無理だ。とヒノは思った。もう、この騒動は自分ひとりの手では止められない。貴族達への憎悪を抱えている者は自分だけではない。そして自分もまた、止めようという気が起こらなくなってしまっている。
　怒りが、憎悪が自分を突き進める。
　シールは、そんな此方の感情の動きを知ってか知らずか肩を竦め、
「血気盛んに暴れるのは良いけど、そろそろ限界が近いことは理解しているよね」
「限界、ですか」
「此方としても、ただ押さえるという手段が効かなくなりつつある君達を持て余し始めている。そうなれば僕等は実力行使で君達を止めざるを得ない」
「……」

シールの言うことがヒノにも分かる。自分達は今、かなりの温情をかけてもらっている事も分かっている。これだけ暴れておきながら、教師陣は未だ、言葉によるアプローチを心がけている。しかし職員室乗っ取りまでしてしまっては、その優しさも限界を超えるだろう。

もうじき、教師達が本気で直接介入する。シールの言葉はその警告だ。

「それとも、止めて欲しい？」

「馬鹿な」

咄嗟にそう返した。そのときの自分の声が思った以上に焦っているのでヒノは自分で驚いた。思った以上に自分は焦っているのかもしれない。だがこれ以上ダラダラと〝報復〟を続けていても埒が明かないこともヒノには分かっていた。

だからそろそろ〝決着〟へと動くべきだ。彼女がそう決断した、その矢先、

「ヒノさん！」

出鼻をくじくように、一人の仲間が部屋に入ってきた。少年は視線を集めながら、息を切らして、そして叫んだ。

「貴族達がきました！」

「なんですって？」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

ヒノが仲間を連れ、職員室を出ると、そこには確かに貴族の学生達が並び立っていた。

彼らは一様に右手に魔具の杖を持ち、今すぐにでもそれを振るってきそうな構えを見せている。それを実行に移さないのは、恐らく此方の仲間達も同様に、杖を構え、魔術を発動せんとしているからだろう。

緊迫状態の中、ヒノは一歩進み出る。此方の顔を見て、少年達は僅かに身じろぎ、しかし次には顔を赤くさせて、怒りを見せた。

「貴様がリーダーか!?」

「私たちのリーダーは【英雄】よ」

その言葉に、周囲から賛同の声が沸きあがる。

しかし、実際、ヒノはこの英雄というのが不確かな情報で、そもそも当の本人

がこの学院に本当に在籍しているのかどうかもわからないと知っていた。〝彼〟が学院に入学したと言うのはあくまでも噂だ。確証はない。この騒ぎの前からヒノは英雄の姿を探した事はあったが、見つける事はおろかその尻尾さえも掴む事は出来なかった。
　貴族達はしきりに〝キース〟、彼こそが英雄であると口にしているが、ヒノはキースを知っている。彼とはクラスこそ違えど何度か言葉を交わしたことすらある。優秀で優しい男、という認識はあったが、そこまでだ。彼が本当の英雄なのかと言う確信は全く無い。
　もし彼が本当に【英雄】ならば、思う事、言いたい事は沢山あるけれど、今は【英雄】と言う言葉が周りをまとめるのに便利だから、使っているだけだ。かつての羨望の感情が、褪せてしまった訳ではない。しかし、それを利用しようとするくらいの合理性は彼女も身につけていた。
　さて、と、ヒノは改めて前へと向き直る。貴族達の数はそれなりにそろえているが、どう考えても現状の数の利はこちらにある。向こうは明らかに萎縮している。だからヒノは余裕を持って、問いかけた。
「それで、なんの用なのよ。貴族様」
「何の、用だと!?」
　ヒノの問いに、蓄積していた怒りが爆発したのか、少年はその顔を真っ赤にさせた。
「貴様らの暴行への抗議に決まってる！ 一体何の真似だ!!」
「先に傲慢さを振るったのは貴方達よ」
　ヒノは鋭く言葉を返し、貴族の少年の顔を睨みつけた。少年は彼女の、有無言わせんと言わんばかりの迫力に押され、一歩下がった。
「私達はただ、学ぶ事を望んでここに来たのよ。魔術を学んで、自分達の権利を会得するために。その為の努力を必死に積んだわ。寝る間も惜しんでね」
　ヒノは語る。そこに淀みは無い。自分は努力し続けてきた。そして結果、この学院への入学を許された。それは今の彼女を支える誇りであり、自信だ。対して、それを持たず、恵まれた環境のお陰で入学できた貴族の少年達は僅かに身体を震わせた。
　その様子を見て取って、ヒノは更に一歩踏み出す。

「その神聖な学び舎に暴力と混沌を持ち込んだのは貴方達だわ」
「あれは一部の者達がやった事だ！」
「でも止めなかったわ。私達は散々暴力を受けている間も、一方的な理不尽に晒されている間も、貴方達は傍観し、あまつさえ蔑みもした。違う？」
　貴族の少年は押し黙った。彼女の指摘する言葉が事実だからだ。彼らはその暴力によって怯える平民達を見て、とめる事はせず、そして内心で笑っていた。そういった感情は確かにあった。人は誰でも、自分より弱いものを見つめて愉悦に浸るときがあるのだ。
　勿論そんな学生だけではなく、単に暴力に自分が巻き込まれる事を畏れた、体と心の弱い者もいるのだろう。しかしヒノ達の怒りは最早そんな存在を許しはしなかった。
「だから私達は報復した！ 抵抗した！ 理不尽に!! それの何が悪いのよ!!」
　彼女の怒りは留まる事を許されなかった。際限なく燃え喰らい続ける炎の蛇が彼女の内にいた。何もかもを飲み尽くして、最後には自身すらも喰らい尽くしてしまうほどのおぞましい蛇が、彼女の中で滾っていた。
　そしてその怒りは、木々に炎が燃え広がるように、周囲に伝播していく。
「見て見ぬ振りして、自分の身に降りかかれば被害者ぶる！　 身勝手にも程がある！」
「そうだよ!! 死んじまえクソ貴族!!」
「てめえらみたいな奴等がいるから俺等が苦労するんだ!!」
　怒り、あるいは憎悪と言うべきものが彼女の全身から放出され、それが彼女の仲間達をも飲み込んでいく。正常を異常に狂わせる感情の暴走。何をしても構わない、何が起ころうと知った事ではない。そんな雰囲気があたりに充満していた。
「く、くるな！」
　怯える貴族の少年達を、血走った目をした平民の子供達が囲んでいく。
　一触即発の状況。囲まれた貴族の少年達はその異常な空気に押され、泣きそうな顔で今にも構えた杖を震わせていた。
　背後で彼らを眺めるシールは、僅かに身体を低くする。直ぐに動けるように、と、しかし、それら一連の動きは、次の瞬間、砕かれた。

「どきなさい」
　高く、美しい声が、異常な熱を持ち始めたこの空間を切り裂いた。押しかける人々が割れ、その先から二人の人影が現れた。それは、
「エレナ様！」
「キース、君？」
　エレナ・ロズ・ゲルダーとキース・リンベルの二人が現れたのだ。貴族と平民達から漏れた声は戸惑いか歓声か、あるいはそれら全てが入り混じり、渦巻いた。
　二人は平民達の前、ヒノの眼前並び立つ。ヒノは一瞬戸惑い、しかしまずはキースへと顔を向けた。彼女自身をかつて、貧困から救い上げてくれた英雄〝かも知れない男〟その彼が何故、敵の大将であるエレナをつれてきたのか。
「これは、どういう事なの？ キース君」
「別に、僕は用なんて無いよ。ただの案内」
　そう言ってエレナに目配せすると、エレナは前へと進み出た。キースはそのまま廊下の壁に背をつけて腕を組み、瞳を閉じた。我関せずと、そんな態度をありありと見せつける。貴族も平民もそんな彼に言葉をかけることは出来なかった。
　そして、それ故に、エレナに皆の意識が集中する。
「なんのようなの。エレナ・ロズ・ゲルダー」
　問われ、エレナは鼻を鳴らして、その美しい髪を靡かせて、そして威風堂々というような自信満々の表情で、
「断罪よ。私自身への」
　そう告げた。

第五十六話 被害者と加害者の相対

　今より、ほどほどに前の話。
　ヒノが入学してから数年が経過した。
　魔術学院を名乗るオルフェス学園は、しかし勿論魔術だけを教える訳ではない。この国の歴史や文学、数式などなど、あらゆる学問を学ぶ機会が設けられる。魔術の実技は基礎的な学問を修め、必要な知識を確かに得られたと確認できた後だ。
　それまで魔道具を利用したりして、擬似的に魔術を操る訓練を重ねていたヒノ達は、その日はようやく、長い詠唱を利用した魔術の発動、〝詠唱〟の訓練を始めた。
「意識を集中させなさい。魔具を用いない詠唱は相応の集中力が必要になります」
　教師の女性、五〇代半ばの厳しい事で有名な彼女の助言と共に、教室にいる学生達は詠唱による魔術発動の訓練を始めた。しかし、
「【力よ集い形と、……く、」
　ヒノは教師に教えられた詠唱を何度と無く繰り返した。だがやはり、魔術の詠唱は難しかった。魔力を注ぐ事に集中しつつも、それと同時に詠唱を紡ぎ、更にその詠唱込められた意味を解し、魔力にその意味をも込めなければならない。
　思考を幾つも分割し、同時に働かせなければならない。魔術を学ぶ者は誰もがこの訓練に苦労する。「脳が三つはあればいいのに」とはこの訓練を行った者が誰しも口にする言葉だった。
　鍛錬次第で詠唱の技術が上がる者もいるが、どうしてもこの詠唱訓練を不得手とする者もいる。そうした者は魔具や、術式を刻むなど別の方法を使わざるを得なくなる。だがそうした方法はやはり、詠唱と比べて応用性に欠けるのだ。故に詠唱の技術を持つものと持たざるものとでは、魔術師としての位に大きな差があ

る。だから出来る限り身に付けておきたい技術なのだ。
　教室にいる誰しもが、ぼそぼそと、教えられた詠唱を呟きながらも、魔術の成功を成す者は一人もいなかった。それも時間をかければかけるほど、集中力というのは削られていく。
「……く、」
　ヒノは額に浮いた汗をぬぐい、顔を上げた。ぐらぐらと熱を持つ頭を振るう。既に何度と無く詠唱を繰り返したものの、とても自分にこれが可能とは思えなかった。
　ただ、諦めるのは嫌だった。特に、貴族の連中に負けるのだけは。
　だから、もう一度詠唱を試みようと、顔を上げた、その時だった。
「エレナさん！　なにをしているのです！」
　教師の鋭い声が響いた。その鋭い声と視線はヒノの丁度背後に注がれていて、ヒノは思わず振り返った。
「……むぅ」
　そこには、皆が努力を続けていた中、不敵にも堂々と居眠りを続けていた少女がいた。教室中にいる画学生が絶句する中、彼女は、教師のその声に、ゆらりと身体を起こし、起き上がった。
　その少女は、一言で言えば、鮮烈だった。燃えるように美しい金髪に、澄んだ蒼い瞳。その美しさに見合う端整な容姿。雪のような白い肌にバランスの整ったその体。とても自分と近い年の少女には思えない。
　彼女が、噂に聞くゲルダー家の暴君エレナであるという事実も忘れて、ヒノは綺麗だと思った。
「……」
　エレナは、その淀んだ瞳を教師に向ける。教師の女性は一瞬躊躇するように身体を震わせたが、しかし持ち直すように怒りを表情に浮かべ、
「この授業の大切さを理解していないのですか?!」
「……」
「詠唱の試験を合格できなければ魔術師としての就職試験の殆どの権利を失う。ゲルダー家の長女がそんな結果を出せば、どれだけ名を汚す事になるか分からない訳では無いでしょう。それとも、それが理解できないほど堕落しましたか？」

説教、というには棘がある物言い。しかし彼女の言う事はごもっともだと思った。エレナの暴挙に普段へきへきしている者達は教師を応援したほどだ。しかしそれに対して、棘を向けられていたエレナ自身は、聞いているのかどうかも分からないような表情のまま、ぼんやりと前を見つめ続けていた。
「人の話を聞いているのですか!!」
一喝。教室に響くような声を教師が張り上げる。するとエレナは、そのぼんやりとした表情のまま、教師に視線を向け、ゆらりと掌を広げた。
「【光よ】」
短い、どころか、単語を呟くだけのような詠唱。しかし次の瞬間、魔に精通するものなら誰しもが反応するような鋭いマナの流動が教室に発生した。その流れはゆらりと、魔具を持たない彼女の掌に集中していく。
そして次の瞬間には、教室の誰もが生み出せなかった、魔力で紡がれる光球がエレナの掌に現れた。それは美しい輝きをもって教室を照らし、彼女を照らした
「は、」
彼女の、何処か醜悪にすら見える笑みをも、だ。そして次の瞬間。
「【炸裂】」
先と同じく短い詠唱と共に光球が飛び、教室の中央まで到達すると、光弾が一瞬ふくらみ、そして爆発した。
「きゃぁぁぁあ!!?」
「うわぁあああ!!」
突如炸裂した光の玉は、巨大な音と熱を放ち、その周囲にいた学生達を恐怖に陥れた。悲鳴が響き渡る。嫌らしいほどに的確に放られた攻撃魔術は教師を含め、教室にいる誰をも驚かせ、怯えさせた。
幸い、というべきなのか、光の玉の爆発は一瞬で終わった。しかし残った教室は沈黙に包まれた。突如降りかかった悪意に誰もが青い顔をして、沈黙を強いられていた。
「はは」
静寂に包まれた教室の中心で、エレナは淀んだ瞳で周囲を睨み、歪んだ笑みで、怯える皆を嘲笑った。その姿にはやはり悪意しか存在しない。本来備えた美しさも霞むほどに、今の彼女は邪悪だった。

「エ、エレナさん！ なんて事を!!」
「五月蝿い」
　咎める教師の声、しかしそれをエレナは再び発生させた光弾を向けることで制した。再び爆発させる、そんな脅迫を前に、教師の女性は再び沈黙を強いられた。
　そして、エレナはそのまま教室を出ようとした。止めるものは誰もいない。どうでもいいから、早くこの教室から出て行って欲しい、皆一様にそう思っていた。
　ただ、一人を除いて、
「何故、そんな事をするの!!」
　ヒノは、気が付けばそう叫んでいた。
　何故、そう何故、だ。
　自分が焦がれるような、理想の体現のような少女。まるで、子供の頃、親に隠れて読んだ絵本のお姫様のような彼女の、その暴挙のありようにヒノは憤慨していた。
　純粋な怒り、貴族の暴挙への憎悪、しかし彼女の心に渦巻くのはそれだけではない。エレナの、何もかも持っているのに何もかも失ったような顔をするその姿が、たまらなく嫌だったのだ。
　自分の努力を何もかも否定するようなことをしないでくれ。
　身勝手な願いでもあった。しかしそれでも叫ばずに入られなかった。
「邪魔よ」
　短く呟かれた言葉と共に、ヒノは吹き飛ばされた。軽く押しのけられただけなのに、まるで大男に吹き飛ばされたように、教室の壁まで叩きつけられた。再び教室で悲鳴が巻き起こる。
「……ぐ、うっく」
　頭でも打ったのか、ぐらりと揺れ始める視界と意識の中で、ヒノは〝何故〟という疑問と怒りを渦巻かせて、そのまま意識を失った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　廊下、職員室前

　一触即発の状況から突如出現したエレナの謝罪宣言に、周囲は混沌とした。囲まれていた貴族の少年達は現れた自分達のリーダーに驚き、喜び、しかし現状窮地に立たされている事実とエレナの発言で困惑している。平民達は平民達で唐突に現れた敵の親玉の発言にどう敵意をぶつければいいのか分からなくなっている。

　そんな混沌とした現場の中心で、エレナは平然としていた。空気が読めていないだけとも言えるが、ともあれ目の前のヒノに視線を集中させていた。

　視線を向けられたヒノは息をつき、その視線を返し口を開いた。

「断罪ってどういう意味か分かっているの？」

「罪を罰することでしょう？」

「つまり、謝罪に来たということ？」

　ヒノはそう問い、憎悪に顔を歪ませ、

「誰が、貴方を許すと言うのよ」

　早速、ヒノは顔を歪め、拒絶の言葉を吐いた。

「何処をどういう思考をしたら、自分が謝罪できる立場にいると、そう思えるのかしら。自分が許されるだなんてどれだけ傲慢な頭をしているの」

　皮肉と罵倒の入り混じる彼女の物言いに、周囲の平民達は賛同するように声を上げ、対抗するように貴族達からはヒノへの罵声が続いた。しかし、そんな罵詈雑言の中心にいるエレナは、それを腕を組んで眺めているキースは、それでも特にこれと言ってリアクションすることは無かった。

　一通りの罵声が飛び交い終わるまで、エレナは瞳を閉じたままでいた。そして徐々にそれが収まっていくと、口を開き、

「ならどうしたらいいの？」

「くどいわ。あなたがどうしようと私は認めない」

「なら、認めなくて良いわ」

　は？　と、エレナの言葉が理解できず声を上げたヒノに対して、エレナは首を

傾け、
「貴方達が認めようが認めまいが、私は貴方達に償う。それがどう評価されようと、私の知った事じゃない。貴方達がどう思うとどうでもいいわ」
　言い切った。あまりにも威風堂々と言うもので、ヒノは一瞬、彼女がなにを言っているのか全く分からなかった。呆気にとられたのだ。しかし
「なによそれ、自己満足したいって事？」
　皮肉の意味を込めてそういったつもりだった。しかしエレナは、
「そうね」
　彼女の皮肉をあっさり肯定し、更にエレナは言葉を続け、
「私は私の為に罪を償うの。貴方達の為じゃない」
　自分の為に、罪を償う。その言葉の意味を飲み込むのに、ヒノは数秒の時間を要した。そして、意図はともかくとしてその言わんとしていることを飲み込むと、顔を真っ赤にした。
「ふざけるな！ 私たちにしてきた事を、自分の自己満足に利用させろって!?」
「だって、どう頑張ったって私が謝罪するなんて、勝手なことだもの。それとも貴方は分かる？ 加害者の誠意ある謝罪って」
　それは散々、エレナが自分に問い続けた言葉だった。今はそれを相手にぶつけ投げかけた。ヒノはそれを答えられる訳が無い。何しろ、エレナが散々考えても、全く分からない問題だったのだから。
　沈黙するヒノにエレナは、だから、と言葉を続け、
「私は誰が何といおうと自分の罪を償うわ。けれど、これが貴方達のためになるなんて、身勝手な事はいえない。だから、これは一方的な謝罪、償い」
「だから、だったら、そんなの自己満足じゃない！ 付き合えないっての！」
　再びの拒絶。だが今度はエレナの言葉の方が早かった。
「私にとっての自己満足は、貴方達に赦されて、貴方達に受け入れてもらえるまで断罪を続ける事。貴方達の心が満たされたとき、私は自己満足を完結させる」
「ば、かじゃないの!?」
　叫びつつも、ヒノはエレナの言葉を理解していた。
　エレナの言わんとしている事は分かる。ややこしい言い回しをしているが、結局は此方が許すと言うまで、謝罪し続けると、そう言っているのだ。此方が信じ

られないと突っぱねても、謝罪し続けていくと、そう誓っているのだ。
　勿論、ヒノにはそんな言葉、信じられない。信用なんてできる訳が無い。今まで散々問題を起こしておいて、謝罪するなんて、何を根拠に信じろと言うのか。
　だが、機会は与えるべきじゃないのか？
　自分の内に、疑問を感じる自分がいるの事を感じた。
　少なくともこうして此方に反省を示している。自ら頭を下げて、お願いだから償わせてくれと言っている。許可が無くとも、自ら償いを続けると誓っている。それを認めるべきではないのか？
　罪は、いずれ、誰かが赦さなければならない。それが分からないヒノではない。
「だけど！　そんなの！」
　ヒノは、振り絞るような声で、首を振る。
　だけどそれは、此方の望みとは外れている。ヒノ達の望みは、報復だ。自分達が受けた傷を、正当な権利として返す。それが自分達の望みなのだ。それなのに、向こうからの謝罪を受け入れてしまえば、それができなくなる。
　復讐させろ。やられた分だけ、返させろ。感情がそう告げている。
　だけどその怒りは、本当に純粋な報復か？
　疑問が更に沸き起こる。
　自分は、自分の中で燻る貴族へのコンプレックスをぶつけたいだけなんじゃないか。恵まれた環境にいる貴族が、のうのうとその幸運を享受することへの憎悪。言うなれば、単なる嫉妬を、エレナという都合の良い対象にぶつけたいだけなんじゃないのか。
　違う、と、ヒノは自分の問いに返す。確かにそういった理不尽への怒りが自分の中にあることは否定しない。けれども、自分は、皆の代弁者でもある。彼女の所為でひどい目に合ってきた仲間がいた。友人がいた。彼らの話を私は受け止めた。彼らの思いを無碍にする事が正しいだなんて、そうは思えない。
　なら、他の者達もそうではないと？　自分と同じように、恵まれた貴族と言う身分の連中への復讐のチャンスとしか捉えていないと何で言える？
　繰り返される、自分自身への自問自答。
「なにやってるんすか、ヒノさん」

その問いに答えるように、背後から声と共に肩がたたかれた。

　振り返ると、何人かの男子学生が、どこか嫌な笑みを浮かべてその場に並んでいた。知っている。〝制裁〟の時、殊更に手酷い攻撃を繰り返す者達だ。仲間内からも問題視されていた。

　彼らはエレナを囲み、そして彼女を見下ろし嘲笑う。

「貴族様よ、あんたそれで謝罪してるつもりなのか？」

「そーそー、謝り方がなっちゃいねーな」

　嗜虐的な笑みを浮かべる。彼らはどう見ても、悪意に満ちていた。

　そらみろ、と、心の内の声が更に響く。所詮、こんな集まりだ。本当の被害者なんて一握り。正当な理由を抱えている者なんてほんの僅かだ。それ以外は、自分と同じように、自分の悪質なコンプレックスを解消したいだけに過ぎない。単なるやつあたり。

　違う、と言おうとした。彼らに、止めろ、とも言おうとした。

　だが、口が動かない。言うだけの力が、体から湧き上がってこなかった。彼らの姿はある一面において、自分の代弁者だったから。自分の悪意の代弁。正当な復讐とか、そんなことはどうだってよくて、ただただ彼女が、〝ヒドイ目〟に合う事を、望む自分。

　このままになる事を望んでいる自分と、そんな自分への嫌悪感がない交ぜになって、張り裂けそうになった。

「……ま、こういう輩が混じってるだろうとは思ったがな」

　そんな時、ぼそりと、声がした。エレナを囲おうとする少年達の罵声に入り混じった声は、壁に寄りかかるキースから聞こえてきた。ヒノが視線を向けると、彼は僅かに壁から身体を起こし、そして、ゆるりと、人差し指をエレナを取り囲む少年達に向けた。

　一瞬、彼のその指が複雑に動く。それはマナで術式を刻む挙動だった。

「【発動】」

　瞬間、パチンと高い音が響いた。それはキースの指先と、エレナの体からのもので、更には赤い光が放出される。それはエレナの周囲の少年達に触れ、次の瞬間には、

「あ、……」

「えあ……」
　うたくたと、少年達が倒れていった。その場にいた仲間たちも貴族達も、何が起こったのかわからず、しかしヒノはキースの仕草を目撃していた。彼は、まず驚いているエレナに僅かに笑みを見せ、次に彼と同じようにこの場を傍観するシールに僅かに目配せし、最後にこちらを見て肩を竦め、
「さあ、続きを語ってくれ」
　そう言って、再び元の場所に戻った。至極あっさりと。周りの唖然とした表情も完膚なきまでに無視して。ヒノはたまらず、
「ちょ、キース君!?」
　質問ですらないようなヒノの問いかけに、キースは顔をあげ手を振って、
「僕は君達の話し合いに口を挟む気はない。好きなように決着を付けてくれ」
　投げやり、適当さすら感じるその物言いにヒノは歯噛みした。別に、彼を英雄と確信している訳じゃない。だけど、此処まで無関心なのはあんまりじゃないか。自分でも身勝手な事を思っていると自覚しながらも、そう思った。
　しかしそれは、仲間の【平民同盟】の者達もそうだったらしい。一人の少女が耐え切れず、声を上げた。
「キース様！　貴方は英雄なのでしょう！　それなのにそんな言い方あんまりです！」
「まず僕は英雄じゃないし、勝手に責任を押し付けられても困る」
　大体、　そう彼は区切り、
「もう、後は君達が判断するだけじゃないか？ 僕が何か口出す余地は無い」
「判断？ なにを」
「許すか、許さないか、それだけ」
　そう言って、そこに並ぶ怒れる平民の学生達を見渡す。
「君達に許されようと許されまいと、エレナは君達にしてきた事を償おうとする。なら後は、君達がそれをどう認めるかだけだ」
「そんな！ そもそも彼女のいうことなんて信じられない！」
「だから、それを含めて、君達が判断すればいい」
　そう、エレナは既に、自らの非を認め、そして謝罪している。可能な事であれば自らその罪の償いをしていくと、そう宣言している。たとえそれが自分の為だ

と言っていたとしても、そう宣言したのだ。
　だから後は、その謝罪を受け入れるか否かだ。
　そして、それを受け入れるか否かの判断は、各々にゆだねられている。どれだけ平民達が集おうと関係ない。何しろ、別に集団でエレナを拒否したとしても、〝意味は無いのだから〟エレナは償う。彼らの心が癒されるその時まで。
　だからキースは認めるか否か、それだけを問うた。ヒノに、そして彼女の仲間達に。
　けれど、
「……ぐっ」
　ヒノは、受け入れたくなかった。
　エレナの言葉に、少なくとも今のところは、嘘偽りは無いだろう。なにがどうしてそういう風に、謝る気になったのかまでは知らない。だけど今この時点で、彼女は償おうとしていると言う事だけは、分かる。それくらいは、こちらにも伝わる。例えどれだけ彼女の言動がおかしなものでもだ。
　彼女を認めろと、理性は囁く。彼女のしようとしている事に、誤りは無い。確かに過ちを犯した。それを償うと言っても根拠は何も合い。それでもいま、こうして償いの姿勢を見せていることを、拒絶してしまえば、どんな謝罪も、受け入れられなくなってしまう。
　そもそも人の事をとやかく言えるのか。エレナに以前指摘されたとおり、自分だって多くの人を傷つけている。この争いの所為で、無関係の人を巻き込んでいる。その責任をとらず、その癖に、エレナには全ての責任は彼女にあると押し付けて、それを糾弾する。
　その上彼女が謝罪をしてきた時はそれを認めない。それはどんなワガママだ？
　だけど、それでも、ヒノの中には怒りが、憎悪が燃え滾っているのだ。
　自分への仕打ち、涙を流して訴えてくれた仲間達の思い、努力し、苦労して入ってきた自分達の誇りを傷つけられた屈辱。それら全て、大人から言わせて見ればくだらない事かもしれない。小さな事かもしれない。だけど、それらは自分達にとって偽り無く真実だ。それらを飲み込んで仕方ないと流せるほど、寛容にはなれない。
　認めろ、と、理性が自分を責める。

認めるな、と、感情が自分を追い立てる。
　分からなかった。分かる訳が無い。この問題に、授業の問題のように正しい答えがあるわけではない。どちらにも正しい面と間違った面があるのだから。
「ヒノさん……」
「……」
　今や、仲間たちも、乗り込んできた貴族達も、ヒノの言葉を待っている。
　ヒノは歯噛みして、思考の暴走する頭を振り払った。拒絶しよう。そう思った。自分の中の邪悪を自覚しながら、それでも、やっぱり、この感情を叩きつけられずに終わるなんて、耐え切れない。だから、そう思って頭をあげて、そこで、エレナと真正面から向き合った。そして
「──あ、」
　かつて、美しいと思った彼女の顔が目に映った。彼女は、かつての歪みを振り払い、ただただ真っ直ぐに此方を見つめている。何処か必死さすら感じさせる彼女の表情は、以前よりも人間じみていて、それでも美しかった。
　ふっと、感情と理性のわがたまりが静まっていくのを感じていた。その美しさにつられたから、と言う訳ではない。ただ、かつて一瞬でも憧れた彼女が、その美しさを取り戻している事実が、自分のわだかまりを静めた。
　久しぶりに心に訪れた静けさ。
　すると、するりと、言葉が生まれた。
「決闘、しましょう」
「え？」
　意味が分からず問うエレナに、ヒノは息をつき、真っ直ぐに彼女を見た
「決闘しましょう。もし貴方が私に勝てたら、〝貴方の謝罪を受け入れるわ〟」

第五十七話 ひとつの決着 その影で

　ヒノが持ち出した提案、決闘。別に形なんてどうでもよく、兎に角魔術で戦って、相手を負かせたら勝ちだ、というそんなシンプルな提案を、エレナは飲み、そして場所を第三グラウンドに移動してその通りに決闘を行った。
　その内容について、語れることは少ない。何故なら開始から十秒と経たないうちに、エレナがヒノを倒してしまったのだから。
「参ったわ」
　ヒノはそう、静かに告げた。
　別に彼女は負けるつもりは無かった。全力で、己が技術の全てを総動員し、戦うつもりだった。だが、こちらが魔術を唱えるほんの数秒の間に、エレナは速攻し、魔力の剣でヒノの首に剣を当てた。
　元よりその素養が桁外れに違うのだ。その上、曲がりなりにもシールと訓練を重ねるエレナに、ヒノが勝てるわけが無かった。それでなくとも、エレナにはかなわないだろうということはヒノにも分かっていた。
　だが、ヒノはそれでも戦った。この戦いは、彼女にとって必要な儀式だったのだ。
「貴方の謝罪を受け入れるわ」
　ヒノはそう言った。エレナは魔術を解き、一歩下がると、厳かに頭を下げた。
「ごめんなさい」
　誰もが押し黙る静寂の中で、エレナはヒノに、そして彼女を見守る平民の皆に向かって頭を下げ、謝罪の言葉を口にした。心から、自らの罪を認め、そしてこれから先、償い続けていく事を宣言した。
　この彼女の宣言を持って、この馬鹿馬鹿しくも壮大な、オルフェス学院の貴族平民間の抗争は終焉を迎える、筈だった。
「ちょっとまて!!」

声が響いた。それはこの結末を眺めていた【平民同盟】の少年の一人であった。彼は声をふり上げて、エレナを睨み、指差し
「俺はこの決着に納得していないぞ！　この決闘はヒノとお前との決闘だ！　大体！」
そう言って、先に平民の抗議を仕掛けてきた【貴族同盟】を続けて指差して
「私たちはこいつ等にも酷い目に合った。それなのにこいつ等が何の罰も与えられないのはおかしいだろうが！」
その言葉に、賛同する声が平民側から響いた。すると貴族側からも、
「私たちとてそれは同じだ！　たとえエレナ様の件とは関係なく、辛い目に合ってきた者達がいる！ それなのに此方だけが謝罪するなんて納得できん！」
貴族の子供達も賛同する声が響く。互いの納得は得られていない。
すると、エレナはその中心に建って、
「なら」
と、声を上げ、
「〝決闘〟すればいいわ。私にだってかかってくればいい。互いが納得できるまで」
そう、宣言した。
最初、エレナのその宣言に誰も言葉が出なかった。怯えや恐れ、どう対応するべきか分からず、困惑した表情の者達が大半だ。だが、その中でも一人の少年、先ほど抗議の声を上げた少年が、顔を興奮に赤くして、唸り、呻き、迷い、そして最後に、
「う、ぉぉぉあああああああああああああああ!!」
慣れない、というような咆哮をあげて、エレナに向かって突撃した。
それに続くようにその場にいた平民達が続いていく。誰もが困惑し、蹴躓きながら、それでもそれぞれの感情を吐き出すようにして突撃していく。そして応じるように貴族の子供らも、エレナを救わんと言うように突撃していった。
事態は、収拾つかない大乱闘に発展していった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……なんとまあ、結局乱闘は避けられなかった訳だが」
　そんな様子を巻き込まれないよう遠くから眺めていた少年、キースは
「……ま、いっか」
　至極あっさり、そう呟いた。
　教師一同はこういう乱闘事件に至るのを避けるために努力していた訳で、それ故にエレナが選んだこの結末は教師には悪い気もする。しかしそもそもこの事件は、エレナに不満をぶつけられなかった平民達の暴走だ。その不満を解消するしかない。
　そう言う意味では、〝こういうの〟は必要だ。溜まっていた不満を、燃料を、一気に注ぎ込み、爆発させ、炎そのものを燃え尽きさせる。
　半端に残すよりもこういう形の方が禍根は生まない場合がある。
　まあ、ここで行き過ぎた怪我を負ってしまえばそれまでだが、そこは――
「僕が見張っておくよ。行き過ぎないようにね」
　シールがキースの横に現れた。キースはシールを見上げ、ニヤリと笑って、
「悪いですね。シール先生、こんな結末に導いてしまって」
「敬語気持ち悪いよ。キース」
　キースはその言葉に笑った。彼とは知った仲だ。キースは頭を掻き、
「つーか、そもそもアンタがエレナをちゃんと罰しなかったのがわりーんだよ」
「確かにね。表向きにでも、教室掃除とかさせればよかったかもしれない」
「ゲルダー家のお嬢様が教室掃除ねえ……」
　別に、それがエレナの罰になるかどうかは問題ではない。しかしそうしてエレナが罰を受けていると見せ付ける事は、学生の不満のガス抜きになったかもしれない。
　勿論、そんな事、全てが終わった後に言っても仕方の無いことだが。
「悪かったね。本当は僕等が頑張らなければならないのに」
「自分の生徒や他の教師のサポートに回ってたんだろ。文句はねえよ」
　そもそも教師達とてここ数日ほぼ徹夜で事態を沈静化させようと努力はしていることはキースとて理解している。実際シール含め教師達の疲労の色は濃い。そんな状態の彼らに、これ以上の努力を続けろなどと攻められない。

「ま、謝罪してくれるくらいなら、なんか礼をくれ。高いの」
「学院長に話しておくよ」
「期待してる」
　そう言い、キースは乱闘に背を向けて歩き出した。
「何処へ？」
「まだ、扇動者は残ってるんでね」
「……手伝いはいるかい？」
「教師が行っても立場上〝処理〟できないだろ。事後処理を頼むよ」
　教師だからこそ、できない事もある。キースがやろうとしている事はそう言う事だ。シールはキースのその意図を理解した。だからもう一度、「悪いね」とそう言ってキースに少し苦い笑みを浮かべた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「さて、」
　シールと分かれた後、キースが向かったのは、この第三グラウンドの大乱闘を眺められるすぐ近くの小さな丘の上そこで待っている男の下だった。
「と、まあ、そう言う訳だ。エレナお嬢様の真意、分かったか？」
「……ああ」
「ついでにお前が都合よく利用されようとしてたのもわかった？」
「……」
「怖い顔すんなよ」
　キースが喋りかけたその学生は、つい先ほどキースに絡んできた騎士見習いの少年だった。あの騎士見習いのなかでリーダーを担っていた彼は、憮然とした表情で近づいてきたキースを見下ろしていた。
「さて、それじゃあ案内してもらおうか。影でコソコソしてる馬鹿どもの所へ」
「その前に一つ良いか」
「何だよ？」
　問われ、首を傾げるキースに、騎士見習いの少年は訝しげな顔で、
「何故お前はこの件に関わる。聞く限り、お前は望んでこの件に関わってきた訳

じゃあるまい。なのにどうしてこんな真似までする」
「その理由、お前が知る必要が在るか？」
「……」
　沈黙する騎士見習いに、キースは溜息をついた。しかしまあ、確かに彼の言うとおりではある。が、それを説明するのも面倒で、「あー」と声を伸ばし、息をついて、
「エレナのことが少し気になったってのはある。俺の仲間が迷惑していたってのもある。純粋に巻き込まれて、乗りかかった船ってのもある。あとは……まあ」
　そう区切り、騎士の少年を見上げて、ニヤリとニヒルに笑って、
「俺が実は、貴族が嫌いってのがあるな」
　そういって騎士見習いで貴族の少年に渋い顔をさせた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　オルフェス学院には幾つかの新設された校舎が存在する。
　平民への学び舎の開放にあわせて建設されつつある校舎や宿舎、建設されたそれらは新入生が入学するたびに順次開放されていくようにしている。故に、現段階ではまだ開放されず、殆ど使用されていない教室も存在している。
　そんな教室の内の、一室に、【貴族同盟】の本拠地はあった。
　しかしここに集まる者達は、ついさっき、果敢に平民同盟の選挙した職員室に乗り込んでいった者達が集まっている訳ではない。此処にいるのはそんな彼らを影でけしかけた者達がここに集まっていた。
　彼らの内の半分は、かつてエレナの取り巻きをしていた連中でもあった。
　彼らの目的は『貴族の本来あるべき権限を取り戻す事』
　彼らは学院での平民、貴族の平等化に不満を持つ者達だった。本来の【貴族同盟】はあくまでもヒノ含めた【平民同盟】の抵抗の為に組織されたものだったのだが、今、この同盟を牛耳る連中、〝エレナの元取り巻きたち〟によってその目的をずらされていた。
　彼らは今回の事件をチャンスと捉えていた。エレナを奪われた事で自由に振舞

えなくなった彼らが、再び〝自由〟をする為、平民達の暴走を大きな問題と捉え、今の校則を変えようとしていたのだ。
　だからこそ、いましがた飛び込んできたニュースは彼らを戦慄させた。
　エレナ・ロズ・ゲルダーが平民達に謝罪した
　その報を聞き、その場にいた彼らは全員がどよめき、うろたえた。
　彼らにとってゲルダー家、あらゆる貴族の頂点の力を持つ家の娘であるエレナは、元は最大の後ろ盾であり、武器だった。例え実際は全く協力関係に無くとも、言葉に出すだけでその力は絶大だった。
　ところが、彼女自身が直接、平民に謝罪をしてしまった。これでは今までのように後ろ盾に使えない、どころか、自分達の立場がない。なにしろ、形だけとはいえ、今までも自分達のリーダーはエレナだと公言していたのだから。
「何故エレナ様はあのような愚民どもに!!」
「そもそも彼女をきちんとこちらに引き入れていない時点で問題だったのでは!?」
「それを言えばお前達もだろう！　何故俺に言う！」
　動揺は不和を呼び、争いを招いた。特に彼女の力を寄る辺にしていた者達が集まるこの場においてはそれは顕著だ。実際、直接彼らの指示で平民達に抗議に向かった連中は、現在はエレナと一緒に大乱闘に参加している。なまじ彼らの「エレナがリーダーだ」と語る言葉を真に受けていた分、何の気負いもなくエレナとともにいられた。
　しかし、此処にいる彼らはそうは行かない。
　彼らの本懐は遂げられないし、このままだと自分たちまで、平民達に謝罪をしなければならなくなる。何しろ此処にいるのは平民と同じ扱いに不満を持つものや、エレナと共に暴走していた張本人達ばかりなのだから。
　だから彼らは、エレナと同じ貴族でありながら、ヒノ達以上にエレナの謝罪を認められず、受け入れられなかった。それ故に、どうにか現状を破壊できないか、それを悩み始める。
「……良い方法がある」
　そしてそこで、一人の少年が、率先し、エレナの権限で暴走していた少年が、手をたたいた。彼の声に混乱していた【貴族同盟】は静まり、耳を傾ける。

「良い方法とは？」
「簡単だ。折をみて、再び平民達に制裁を加えればいい」
「それは……」
「謝罪の直後の奇襲。平民の屑どもは裏切られたと知るだろう。和解は断裂だ」
　ようは、エレナが平民に謝罪し、貴族が屈服すると言う事実が失われればいいのだ。ならば、今回の和解騒動そのものをぶち壊しにしてしまえば良い。はっきり言って、エレナやヒノの決意と決断を根こそぎ台無しにするような提案だった。
　しかし、提案された彼の意見に対し、その場にいた皆は、
「……おお」
「そうか、それなら」
　そんな声と共に、賛同を集めていった。
　どんな形であれ現状を打開できる事、何より自分達が手を汚す必要ないという、その事実が彼らの心を引き寄せていた。直接手を下すのは、権力によって服従している立場の弱い家の者達。自分達はこの場で高みの見物をしていればいい。
　既にその結果もたらされる更なる混沌などに彼らは関心が無かった。自分達の安全が守られれば、それでいい。パームが考えるような〝典型的なわるい貴族〟の発想が彼らにはあった。
　しかし、そんな風に、己を守る事のみに執着して、表立つ事を他人にやらせてきた彼らだから、きづかなかった。いつの間にか開かれていた窓に立つ、一人の少年に、
「ハロー、黒幕気取りのクソども」
　そんな声で、暢気に盛り上がりを見せていた貴族の学生達は驚かされる。突如降りかかったその声の方を見ると、褪せた金髪の、どこかニヒルな笑みを浮かべた少年が、そこに立っていた。
「何だ貴様！　何者だ！」
「ベタな台詞だなおい」
　少年は鼻で笑って、首を振り、腰に手を当て、
「ま、言いたい事や聞きたい事はそれなりにあるんだが……まあ、今は」

そう呟きそのままゆらりと、腰のベルト仕込まれていた、〝ギラリと禍々しい銀色に輝くナイフを取り出し〟爽やかに笑った。

「死ね」

数秒後、【貴族同盟】の悲鳴が教室中に響き渡った。

第五十八話 暴力者

　新校舎、現在未使用の教室、【貴族同盟】本部
「さあて、こんなもんか」
　その教室の中心に立つキースは、そんな暢気な声をあげ、辺りを見渡した。
　周囲にあるのは中々に惨劇だった。先ほどまで優雅にこの場所でくつろいでいた少年少女たちは誰もが平等に、顔や身体に殴り、蹴られた後を残して地面に転がっていた。所々に魔術を放った後が見え、折角真新しかった教室は、酷い有様に変わっていた。
「あのな、」
　熱の無い声で、彼は語りだす。この惨状を生み出して置きながら、酷く冷めた表情のまま、まるで現状を作り出した事を、何かの作業とでも捉えているかのように、
「別に、俺はサディストじゃない」
　そんな風に淡々と言葉を続けて、キースはリーダーを気取る少年の下へと足を進める。コツコツとなる足音は、少年にと
「だから、こんな真似をしても、楽しくもなんとも無い」
　キースは、作業のように、少年の顔を踏みにじる。自身で語ったように、キースのその表情は愉悦に歪む事も、怒りが滲み出る事も無かった。ただただつまらなそうに、少年の顔を踏みつけ、つまらなそうに、ナイフを突きつけ、頬を撫でる。
「早々とこんな馬鹿馬鹿しい騒ぎ、終わらせたいんだよ。だから、」
　区切り、冷え切った笑みを浮かべ、
「誓ってくれよ。この場で。二度と下らない真似はしないって」
　屈服しろとキースは語る。しかしそれこそが彼らにとって最も譲れない一点だった。平民に屈服する事など出来ない。平民と同等に立つ事すら我慢できない

彼らがそんなことを認めるわけが無い。キースもそれは知っている。だからこそ、キースはそう言ったのだ。
　だから、返ってくる返事にも、見当はついていた。それは、
「お、お前のような屑に！ 誰が平伏などするか!!」
　予想通りの言葉が返ってきた。故に、
「あ、そう」
　溜息と共に、少年の腹に蹴りを入れた。鈍く肉を打つ音、足元で、まるで死に掛けた虫のように身悶える少年を、キースはつまらなそうに目を細め、見つめていた。
「なんでこういう馬鹿って無駄にプライドが高いんだろうな」
　そんな風にぼやいて、痛みに悶えぱくぱくと開いたり閉じたりするその口に、靴を捻じ込んだ。
「むごぉ!?」
「さっきの台詞、もっかい言ってみろ。おい」
　ぐりぐりと、今は言葉を発するは愚か、閉じる事も出来なくなった事を承知でキースは言う。息が出来ないのか真っ赤になり始めた少年を見て、キースは笑い、靴を退けて、その後に腹を蹴り飛ばした。再び呻き、もがく彼に、キースは再び語りかける。
「「もう二度としません」って言えば良いんだよ。そうすりゃ今回は見逃してやるよ。だからほら、言えよ。もうしませんってさ」
「だ、だ、誰が」
　変わらぬ返事に、キースは酷薄な笑みを浮かべた。そして再び少年の腹に蹴りをいれ、続けさまに、蹴り続けた。身悶える少年の襟首を掴み無理矢理立たせ、容赦なく殴りつける。
　一方的な暴力、容赦なき蹂躙。いっそ清清しささえも思わせるようなキースの様に、眺める事しか出来なくされた周囲の者達は心底怯え、震えた。温室育ちで、常に暴力を行使する側だった彼らは、この時初めて〝暴力〟がどういうことなのか理解した。
「もうやめろ」
　いよいよ、少年は愚か、周囲の者達まで屈服し、泣き出そうという頃合になっ

て、キースの手は止められた。騎士見習いの少年だ。彼こそがキースを此処に連れて来た張本人でもある。
　キースはその彼に、酷く冷め切った瞳を向けて。
「何だよ。今説得の真っ最中なんだから邪魔すんなって」
「説得に暴力が必要なのか」
「必要だね」
　キースはそう返し、一打、少年に張り手を食らわしてから襟首を手放した。そして崩れ落ちる少年を無視して、騎士の少年へと向き直った。
「憎悪する心すら圧し折って、二度と反抗できなくなるまで痛めつけておく。こういう馬鹿にはそれくらい徹底してやらなきゃわかんねえんだよ」
「だが、いき過ぎている」
「はあ？　これでも気を使ってんだぜ？　治癒術さえかけてもらえば怪我が後にのこんねえようにさあ。むしろ感謝して欲しいものなんだけど。なあ？」
　そう言って後ろを見れば、
「こ、こ、こ、ろして、やる……！」
　キースに一方的な暴力を振るわれていた少年が、杖を構えていた。瞳にはぐるぐると憎悪が渦巻いていて、最早正気なのかもさだかではない。キースは息をついて騎士見習いの方に肩をすくめ、
「ほらみろ、中途半端な所でお前が止めるからだ」
「そんな事を言っている場合か？」
　直後に魔術がきた。火花の散る強力な雷の魔術。制御が難しく事故も起こりやすいため学生は使用禁止となっている魔術だ。実際制御が出来ていないのか、使用した当の本人はその威力に悲鳴を上げている。
　キースは溜息を一つ零し、
「全く、傷が残らないようにしてやろうと思ったのに──」
　自分の履いていた上履きから踵を外し、
「──よっと!!」
　それを、魔術により強化された脚力で、勢いよく前へと蹴り飛ばした。半端に拡散した雷の魔術よりも遥かに鋭く、精度高く飛んでいった上履きは、少年の顔面を捉えると、

「ごぱぁあ!?」
　と、奇妙な奇声を上げさせて、乱れる雷を沈めさせた。一瞬騒がしかった教室はあっという間に静けさを取り戻した。唖然とする騎士見習いの横でキースは「ナイスシュート」と呟いてから唸るように、
「ふうん、やっぱ強化系の魔術は便利だな」
「……そもそもそういう風に使うものなのか？ 強化魔術」
「頭固いね騎士見習い。魔術に決まった使い方なんてあるわけ無いだろ」
　そう言いつつ、シュートを決めた少年に近づくと、俯いた彼の顔を上げた。するとやはり、というか、先ほどの一撃を顔面から受けた少年の鼻からは血が垂れ、鼻は微妙に歪んでいた。
　キースはその鼻をつまみ、
「ぐぎゃぁああ!?」
　その鼻をむりやり元の形に戻す。変な形で固まれば不憫だと言うキースの心遣いなのだが、やられる側の人間としてはたまらない。鼻を摘んだキースを前に、少年は動く事も出来ず、その場で止まっていた。
「さて、おい、どうだ。まだやる？　それならこの鼻もっかい潰してまた元に戻すけど」
　最後に、そういって脅しをかけると、少年顔を動かさぬまま、その場で震えた。瞳の色を見ると、最早怒りも憎悪も無い。ただただキースへの恐怖しか残ってはいなかった。
　それを確認して、キースは笑い、手を離し、
「良い判断だな、じゃあ」
　倒れる彼の顔スレスレを強く踏みつけ、
「失せろ！」
　一言叫んだ。
　その鋭い声で、痛みと恐怖で停止した【貴族同盟】の学生達は、悲鳴を上げて逃げ出した。最早散り散りバラバラに、掲げていた信念も何も無く、ただただ恐怖で逃げ出した。
　ひどい有様となった教室の中心にいるのは、キースと少年のみ。キースはその場に誰もいなくなると大きく息をついて身体を伸ばし、

「はい、終了。あーだりい、手ぇ痛い、服に血ぃついた、最悪」
　そう言って、あらゆる不満をぶちまけて、キースは大きく伸びをした。そんな彼を騎士見習いは半ばあきれた顔で見つめていた。先ほどまで暴力の化身の如く一方的な暴力を振るい続けた彼と同一人物には思えなかった。
「なんだよ」
　いや、と言葉を返すと、息をつき、話題を変えるように、
「いいのか？　彼らは一様に有力貴族だ。お前の所業を彼らが親に伝えれば、それこそこの学院にお前はいられなくなる」
「大丈夫だよ。スポンサーがいるからな。こんな時くらい役に立ってもらうさ」
　スポンサー、その言葉の意味がわからず騎士見習いの少年は首を傾け、
「スポンサーって何の……いや、そもそも誰が？」
「ミスト学院長、そしてゲルダー家。あと国王」
「……なんだと？」
　平然とキースが口走った三つの名は、この国における最大権力者達の名だった。オルフェス学院学院長、ミスト学院長。圧倒的権力を保持するゲルダー家、最後に現国王。
　冗談と言うにはいささか笑えない、と騎士見習いはそう思うが、キースは何処までも真顔だった。
「……まさか、【英雄】の件、本当なのか？」
「残念なことに」
「何故そんなことを明かす」
「説明が面倒だった。それに、まあお前ならいいかなってな」
　そう言ってキースは子供のように笑った。
　何の信用だ、とそう思ったが、しかし、確かに騎士見習いの少年に話すつもりはない。それは騎士見習いの彼の性分であり、此処までの結果にエレナを導いたキースへの信頼でもあった。
　それを見抜いたからこそ、キースは自分の事情をあっさり明かしたのかもしれない。まあ、そんなことは今はおいておこう。
「まあ、いい。兎も角、これで、この件は終わったと見ていいのか？」
　周囲を見渡す。誰もその場には残っていない教室。平民同盟はエレナと〝決

着〟を向かえ、【貴族同盟】はこの有様。これで完結。そう考えて間違いない、と、彼はそう思った。
　ところが、キースは溜息をついて、
「いーや、まだ、話は済んじゃいないんだよな」
　騎士見習いの少年は目を丸くした。
「なんだ？ まだ他の奴等がいるとか」
「いや、まあここを根城にしていた連中の事ではなくて」
　区切り、自分を指差して、
「俺の……いや、【英雄】の件で、なあ」
　彼がそう呟いた、その時だった。
「うひゃあ、派手にやったわねー」
「キ、キースさん！ 大丈夫ですか!?」
　教室の扉から響く二人の声。
　一人はリド、もう一人はミフィール。貴族達が逃げ出した荒れ果てた教室を眺めて。一人は好奇心で目を輝かせ、もう一人は恐怖と心配で泣きそうな顔になっていた。
　変わらぬ二人の様子にキースは呆れた笑みを浮かべ、
「遅かったな。もう終わったぞー」
「ちぃ、優等生が貴族相手に暴力事件って記事書こうとしたのに」
「お前は清々しいくらい最悪だな」
　キースの言葉を見事に無視して、首にかけた魔導投影機で適当に教室の様子を撮影し始めた。まるで恐れを知らない様子に軋み習いの少年も、キースも呆れた。
「おいリド、そっちはなんか分かったか？」
「黒幕の所在ってのはアンタに先をこされちゃったからねえ」
　リドは悔しそうに唇を尖らせた。騎士見習いの少年が協力したおかげで速攻でこの場を乗り込めたのだから、リドと差がつくのは当然だ。それでもすぐに此処をかぎつけるあたり彼女の記者の嗅覚は本物だった。
「ただ、まあ、こちらも収穫無しって訳じゃないのよ」
「というと？」

「あんたを犯人呼ばわりして、貴族を焚き付けた子、見つけたのよ」
「なに？」
　キースは驚き、リドをみる。すると彼女の背後から小さく縮こまった下級生、以前怯えた様子でキースを名指しした少年がそこにいた。彼はキースに見つめられると更に怯え、申し訳なさそうな顔で。
「……ご、めんな、さい」
　そう言って、泣きそうな顔になった。目が赤い。既に泣いた後らしい。
「……何処にいたんだ」
「常に人目から逃げるようにしていたから、部下と包囲して確保したわ」
「……お前等が泣かせたんじゃねーだろうな」
　キースは呆れつつ、泣きそうな顔の少年の頭を撫で、
「謝らんでいい。それよりも教えてくれ。お前はなんであんなこといったんだ？」
「……脅されて」
「誰に？」
　問う。すると、何故か、ミフィールは僅かに顔を伏していた。表情は何処か以前の彼女を思い起こさせるような黒く、沈んだ顔で。理由も分からず、キースは首をかしげ、直後に、少年の声を聞いた。
「実は……」
　次の彼女の言葉に、キースは目を見開いて「は？」と情け無い声を上げた。

第五十九話 最後の黒幕

〝彼〟の生活は、ある時期を迎えるまで非常に満ち足りていた。
　彼の側には常に微笑む家族がおり、そして満ち足りた生活があった。何かを望めば望むだけの物が手に入り、お腹が減れば直ぐに好きな料理屋お菓子がやってきた。彼はその環境をあって当然だと思っていたし、その生活がどのようにして維持されているのか、考えた事もなかった。
　外には、外の世界には飢えが満ちており、日ごろから飢えて倒れる者達のことなど、彼は考えもしなかった。あるいはそれを知識として知ってはいたが、だからといってそこに同情し、哀れむと言った感情が働く事は無かった。
　それは教育の賜物、という他無かった。特権階級としての意識、それは両親から脈々と受け継がれ、少年へと伝授されていた。少年にとって外で悶え苦しむ者達は、自分たちの富を維持するための家畜であり、それ故にその境遇を当然とすら思っていた。
　道徳の麻痺、それを不幸と考えるには、彼らはあまりに傲慢すぎた。
　そしてその傲慢さは、革命と言う罪の形をとって、彼らに襲い掛かってきた。なぜこうも唐突にすべてを奪い去られなければならないのか。どう考えてもあの薄汚い連中は間違えていたし、自分たちは単なる被害者だった。なら、正しいのは自分だ。
少年はそう思い、だけど既に彼の周囲には、彼を肯定する者はいなかった。
今まで彼を肯定していた人々は誰もが目を逸らし、背を向けた。
誰も少年の言葉を聞き入れようとはしなかった。彼を正しいというものは、誰もいなくなっていった。
　そしてそれからの生活は一変した。豊かさは消えた。威厳に溢れていた両親は怒りやすくなった。妹が泣く事も多くなった。いじめられる事が多くなったらしい。

彼は、その唐突な環境の変化を理不尽だと思った。唐突に訪れたその不幸の、その理由を欲しがったのだ。そうしなければ彼の鬱屈した精神は耐え切れなかった。
　そして思い出した。あの男だ。自分と年も変わらない、あの薄汚い男。
　あいつが、アイツが、アイツガ、
「なるほどね」
　そんな彼を前にして、【英雄】は納得したような声を上げた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　男子宿舎の一室。キースの部屋からおおよそ数部屋分くらいしか離れていないその一室で、キースとその学生は対面していた。
「キース……リンベル!!」
　キースは冷め切った瞳でその場を見渡した。
　締め切られた部屋、換気なども成されていないのか饐えた匂いが部屋を包み、眺めているだけで陰鬱になるようなその部屋は、とても数室分はなれた自分の部屋と同じとは思えなかった。
　そしてその部屋の主である少年を見つめる。
「俺の【英雄】としての活躍から不利益をこうむった奴は確かにいた。暗黒時代。富と権力を蓄え、独占していた連中だ。そういう奴等は当然、俺の所業を恨んだ」
　英雄と言う存在は、討たれるべき悪がいて初めて成立するのだ。彼の【英雄】としての仕事は、あの時代の悪、富と権力を独占した貴族達を叩く事。容赦なく叩きのめし、平民達の前に引きずり出し、悪として裁くことだった。
　その結果、没落した貴族、しかし厳罰を逃れたものの子供が、この学院にも在籍している。少年は学院の宿舎に引きこもりがちで、日々を鬱屈とした感情と共に過ごしていた。それ故にキースは面識が無かったが、しかし彼はキースの事をしっかりと覚えていた。
「だがまさか、こんな目と鼻の先に、その被害者と加害者が住んでいるとはな」

まさか同じ年の同じ宿舎にいるとは思いもしなかったと、キースは笑った。
「貴様！」
　キースがぼやく間に、少年が突っ込んできた。だが勢いもまるで無く、キースには応じる余裕が十二分にあった。だから、
「よっと」
　僅かに身体を動かして、拳を振り上げる少年を蹴り飛ばした。それほど強い一撃ではないが、自分の勢いにはねかえされて、吹き飛ばされる。
「こ、この」
「運動不足か引きこもり。もっと日の下に出ろよ……なあ、」
　そう言い、振り返る先には、
「なあ、ミフィール」
「……」
　キースの背後から現れた少女、ミフィールを前に、もがいていた少年は目を見開いた。
「ミフィール」
「兄さん……」
　少年の名はミロス・マルフィス。ミフィール・マルフィスの実の兄である。
「まさか、こんな偶然があるとはなあ」
　偶然、という他無い。本当に、偶然、気まぐれでエレナが助けた少女がミフィールで、その彼女達を助けようとしたキースと因縁があるなどと思いもしていなかった。しかもその兄が自分を貶めようと動いていたとは。
　兄妹の家、マルフィスは元は相応の貴族だった。しかし暗黒時代の折、保身に走り、不正に走った。結果としてそれを【英雄】を筆頭とする革命派の手によって断罪され、没落した。
　結果だけ見れば、キースは兄妹の生活を一変させた犯人だ。
「……やれやれ」
　キースは溜息をつく。今彼は、ある意味で自分の被害者達と相対しているわけなのだが、繰り返すようだが、キースは【英雄】に関しては殆ど自分の意思を関わらせる余裕は無かった。【英雄】という駒を操っていたミストの思うがままだった。

故に、その件の責任を問われてもどうしようもないのだが、しかし流石に目の前にこうして自分の行いで被害にあったものを見ると、なんともいえない気分になる。

「……キース様は悪くありません。元々父が、不正をしたんですから」

「だまれ！　そもそも何故お前はその男と共にいるんだ!! 私達をこんな目に合わせたのは他でもないその男なんだぞ!!」

「お父様のしてきた事は過ちだった。それを裁いたのが偶然キース様だった。それだけです」

ミフィールはおびえた表情で、しかしそれでも変わらず自分の兄を見つめた。怒りに我を忘れた実の兄を。

「それに兄さんは、何もしてこなかったじゃないですか」

「何だと？」

血走った瞳で睨まれ、僅かに竦みながらも、ミフィールは言葉を続けた

「私、私、愚図でノロマだけど、だけど頑張ってきました。勉強だってちゃんとしたし、お金が無いからってバイトもした。イジメにだって頑張って耐えていました」

ミフィールは確かに要領は悪い。仕事も遅いし、覚えも悪い。友人関係だってうまく作れない。だが、それでも彼女は努力を続けてきていた。どれだけ理不尽な目に合っても、どれだけ世界が彼女に対して残酷な現実を突きつけようと、それでも彼女は努力は続けてきたのだ。

彼女は決して、自身の不幸を理不尽の所為だと言い訳して、諦めはしなかった。

「兄さんは何もしてこなかった！　没落して！　それを全部人のせいだって言って引きこもって、私なんかに当り散らしてばかりじゃなかったですか！　現実から目をそむけて、それなのに何を偉そうに!!」

「きさまぁあああああああああああああああああああああ!!」

再びミロスは憎悪に任せ突撃する。今度は実の妹に向けて、歯をむき出し拳を振り上げ、怒りを激突させんとした。キースは間に割って入ろうとするが、しかしその直後に、

「何をしているの」

彼の拳は止められた。一人の少女の細腕に、
「エレナ、様」
キースよりも先に割って入ったエレナは、顔や服にドロや斬り傷、打撲の跡や火傷や凍傷などを全身に残した状態でそこに立っていた。乱闘、それらの決着を済ませた彼女が、ここにやってきたのだ。
「リドさんに、キースがどこか聞いたのよ……それで」
エレナはちらりと、今つかまれてる拳を振りほどこうともがくミロスを見つめ、その後キースに首をかしげ、
「キース。コイツなに？」
説明を求められ、キースはどう答えるべきか僅かに考えた。しかし途中で考えるのも馬鹿馬鹿しくなり、それ故に短く簡潔にまとめた。
「事をややこしくした元凶」
「なるほど」
エレナは振り返り、そして逃げられないよう彼の首根っこを引っつかんだ。
「死ね」
一撃、強力な打撃音が響いた。

第六十話 ばかさわぎの終焉

　オルフェス学院、学院長室
「以上が、今回の顛末です。学院長」
　学院長室にて、シールは、事の終わりにキースから聞かされた話をそう最後まで語りおえると、一息つき、目の前に出されてあったお茶をゆっくりと啜った。それを机の向かいで聞いていた学院長は大きく溜息をついて、
「キース、そしてエレナちゃんに借りが出来たね。今回は」
「ええ、全く。二人はよくやってくれましたよ」
　はっきり言って今回の騒動ではシールも学院長も最後までてんてこ舞いだった。教師と言う立場上、子供同士の争いを止めるのに暴力を行使することは出来ない。可能な限り言葉で子供達を留め、そして双方の理解を促さなければならないのだ。しかしそれには子供達からの信頼と、その信頼を損なわないための根気強い対話が必要になる。
　だと言うのに今回の場合、殆ど全ての生徒達がその騒ぎに乗じて暴れていたのだ。これでは教師の首は回る訳が無い。
　だからこそ、エレナとキースの介入は、確かにそれなりに問題は残したものの、教師達からすれば救いだった。
「二人には何か御礼でもしないといけないね」
「エレナには、何か珍しい魔具でも与えては。キースは高いものと」
「今度、適当に良いものあげようかな」
　学院長はそう言いつつ、やはり溜息を濃くついた。
　オルフェス学院学院長ミスト、圧倒的な魔術師としての能力と、権限を持つ彼は、しかしこうした問題に関してだけはやはり参っていた。大人であれば彼を前にした途端、その力に恐れひれ伏す。だが子供は恐れ知らずだ。
「若いって怖いねえ」

「そんな台詞はいてると、老いますよ」
「僕まだ十台後半だよ」
「はいはい」
　シールはそんな風に、学院長の軽口を流して、立ち上がった。エレナとキースの手によって事件は解決に向かおうとしているが、しかし当然、問題は未だ多くある。そしてそれらを解決するのは教師の役割だ。
「ああ、そうだ。その、問題解決をした二人は？」
　出て行こうとした矢先の学院長の声に、シールはああ、と声を上げ、
「あの二人は……」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「ねえ、『一〇〇人の学生をたった一人で打ち破る鬼神』ってこれ私の事？」
「知るか……『女を連れ込み地面に舌這わせる腐れ外道』って誰の事だおい」
　エレナとキース、二人は旧校舎の執筆部にいた。机の上で向き合っているのは今月発刊される予定である記事の原稿である。
「協力した借りを返せ」
　というリドの要求によってキースが連れて行かれ、そのときエレナも巻き込まれて、結果として現状のようになっている。どうやら今は締め切りが近いらしく、誰もが中々切羽詰った表情で記事原稿の作成に向き合ってる。
　そんな中、キースとエレナの二人は記事原稿の文章確認を任されたわけだが、
「……なんというか……随分と面白おかしい記事ね」
「身内には容赦ないからなあの女。つーか何処からこんな情報が……」
　事、遠慮の必要ない相手に対しては限界ギリギリアウトの所をぶっちぎっている。マスコミらしいといえばらしいが。文面で自分が跳梁跋扈の大暴れをしている様子を見ると苦い顔しかでない。横のエレナを見ると彼女もまた奇妙な顔で自分の記事を眺めている。
　改めて記事に目を戻すと、今回の事件の顛末も書かれている。
「『平民・貴族同盟は、反省として後始末と一ヶ月の掃除当番……』」
「ま、それくらいでいいんじゃねえの。妥当かどうかはしらんが」

両グループは身分さも何も関係なく、関わったであろう者達は全員が掃除に参加し事後の後片付けを命じられている。「自分は関係ない」などといった不満の声を上げる者もいたが、ヒノ、そしてエレナが率先して罰を受けている事から不満を口にするものはいなくなった。
「糞真面目だなあ。別に、お前がリーダーじゃねえだろうに」
「その方が話がスムーズに進むでしょう」
　勿論、エレナ自身は、これで自分の〝過ち〟がチャラになるとは思っていない。どう償っていくのか、これから自分で探していかなければならない。そうでなければ誰よりも自分が納得できないから。
「真面目だねえ。体、壊すなよ」
「頑張るわ」
「素直な事で……」
　キースはそう溜息をついて、天井を見上げた。何だってこんな女がやさぐれてしまったのか不思議でならないが、そう言うのなら好きにしてくれたらいいと思う。今度こそ、彼女だけの問題なのだから。
　そう考えていると、ふと視線を感じる。横を見返すとエレナが此方を見つめていて、
「何だよ」
　問うと、エレナは改まったような表情で頭を下げ、
「ありがとう。貴方がいなければどうにもならなかったわ」
「おお、感謝しろ」
　そう冗談風に笑ってやるが、エレナはそれでもと頭を下げ続ける。今の結果は全て貴方のお陰だとそう言うかのように。彼女のそんな姿がキースには馬鹿馬鹿しかった。そもそも今回の件、半分は自分の問題でもあった。最初は成り行きだったとはいえ、自分が始末をつけるのは当たり前だ。
　それに彼女は、自分の責務を十分に果たした。騒ぎをとめようと必死に駆け回り、無様でもなんでも必死に努力した。自分の罪と向き合い、相対し、そしてひとつの決着をつけた。それはキースにだって、とてもできないことだ。だから、彼女は自分を誇るべきだし、一方的にキースに感謝を述べるべきではない。
　だが、そういったって、彼女は頭を下げ続けるだろう。だから、「あのさ」と

口を開き
「あれ見ろ」
「あれ？」
　キースが指差す先にはミフィールがいる。修羅場に近いこの場にて軽く目を回しながらも必死に、何処か充実したような顔で駆け回る。兄の件でショックは確かに受けていたが、それでも今もけなげに働いて回る。想像以上に逞しかった。
　そんなミフィールを見てエレナは目を細める。
「あいつがああしてられるのは、お前が動いたからだ」
「……」
「それは誇れよ。お前の成果だ」
「うん」
　エレナは素直に頷いた。以前シールと共に救った村のときと同じく、自分のしたこと、できた事を胸に刻む。決して忘れはしない。大切な事だから。
「まあ、後は……」
「ちょっと！ さぼんなそこ!!」
　キースがさらに言葉を重ねようとしたその矢先、リドの怒声が響き、言葉を中断させられた。喋りかけた口を閉じるとエレナに目を向けると、エレナもそれに応じるようにして、笑って、目の前の自分の記事を見直す作業に戻った。
「あ、エレナ様！ お茶！ いりますか!?」
「……それじゃあ、頂戴」
「ミフィール！ 私にも！」
「はい！ リドさん！」
　再び慌しくなった教室の中、そんな騒がしいやり取りを横目で見る、キースは先に口にしようとしていた言葉を心中で口にした。
　そんな風に、誰かと少しでも絆を作り始める事ができたのも、誇っていい
　改めてみれば偉そうな台詞で、口に出さないで正解だ。そう思い、キースは一人で小さく笑って、彼方此方からお茶を要求されて混乱しているミフィールに、自分もくれと声をかけた。

というわけで、改稿終了
……いやあ、大変だった　本気で難産でした　当たり前ですが

しかし結果の良し悪しはどうあれ、こうしてきっちり書けたことは素直にうれしい。
しかしまだまだ書かなければならないことは沢山……が、がんばろう

喫茶店編

第六十一話 とあるマスターの何時も通りの平和な一日 前編

　貴族街、王城の周囲にその土地を構え、身分の高いものか、あるいは相応の収益と信頼がなければすむことのできない街道、その背の高い建物の中でもひときわ小さな、しかし落ち着いて店。
　名は【ミルフィー】という、とある魔術学院の教師も良く通う、その店は見た目とは裏腹に市民から貴族まで幅広く人気を集めているカフェだった。

「マスター。新しいのが届きました」
「ほう、そうかね」

　マスターと呼ばれた男、この【ミルフィー】の店長を勤めるちょび髭の似合う渋めの顔の彼は、店員として働いている少女のその知らせに頬を緩ませた。普段貴族の奥様がたから、「ダンディで素敵」と評判の彼がそこまで頬を緩ませるその理由は一つ、彼が楽しみにしていた紅茶が届いたからだ。

「何時ものように、保管庫に入れておきましたから」
「うん、ありがとう」

　彼自身、今すぐ保管庫に飛び込んでその味と香りを楽しみたいと思っているのだが、残念ながらそうも行かない。何せ客がいる。個人的な優先順位は茶葉が上位に来ているのは違いないのだが、しかし儲けが無くてはそもそもお茶を買う資金も得られない。
　この社会に生きるうえでは必要な事だ。しかしもどかしい、早く味わいたい。彼はそわそわとそんな思いを抱きながら、菓子を用意した。
　今回の茶菓子は自身がある。パティシエと共に討論を重ね、昨日徹夜で完成さ

せた新作だ。程よい風味と果物の自然の甘さがとても〝よい〟。何よりお茶に合うのだ。

「さて、それじゃあ運んでくれるかな」
「はい」

　ウエイトレスの少女に頼むと、元気よく笑顔で返してくれた。その笑顔にこちらまで嬉しくなる。笑みの素敵な女性というのは良いものだ。
　ともあれ今は客だ。彼女を含め、皆良く働いてくれているが、お茶や菓子の説明、客への顔見せ挨拶など、彼自身が出向かなければならないことがたくさんある。彼はホールへと足を運んだ。

　店内に入ると、やはり顔馴染みの客様たち、貴族の奥様方が楽しげに、友人達と会話を楽しんでいた。何時もの光景だ。そして何時も、よくもそこまで話す事があるものだと感心する。放っておけばそれこそ一時間でも二時間でも彼女らは会話を続けるのだ。
　正直面倒だと思う事もあるが、しかししっかりとお金も落としてくれるのであれば構わない。それに、元々会話を楽しめるようにともこの店は考えられている。
　マスターが客人の中でも一際楽しげに〝おしゃべり〟をしている奥様方へと近づくと、彼女らも彼に気が付いたのか、少し恥ずかしげに口元を隠して、笑みを浮かべた。

「あら、マスター。ごきげんよう」
「ごきげんよう。奥様方、お楽しみいただけていますか？」

　姿勢は正しく、言葉は落ち着きを払って丁寧に、そして表情には柔和な笑みを。元々彼は平民の出で、そういった作法やマナーは習った事は無かったが、この店を出す際には独学で学んだ。何せこの店の場所が場所だ。最低限のマナーも

守れない人間には店に構える資格も無い。
　雰囲気作りは大切だ。彼は普段から自らに言い聞かせている。
　この店は一見小さく、みすぼらしいように見えなくもないが、ただお茶を飲み、菓子を楽しみ、友人との会話を楽しむ。ただそれだけの事に大げさに構えては、客のほうが萎縮してしまうものだ。だからこの規模でよい。それにそこまで従業員も多くは無い。

「マスター、こちら、今日はじめてこられた、メロニアさん」
「はじめましてマスター。素敵な、可愛らしいお店ですね。気に入りましたわ」
「光栄です」

　当然だ。彼は言葉にせず、胸中でつぶやく。
　この店の内装には勿論こだわっている。店内の色合いも和ませる落ち着いたものを選び、テーブルや椅子のデザイン、小物や照明に至るまで気を払った。お茶の香りを邪魔せぬよう、派手な香りのする花は飾らず、野原に自然と咲いているような地味な、しかし可愛らしい花を飾っている。
　開店当初から少しずつ、少しずつ、自身の考案や店員のアドバイス、お客様の要望をこなしていき、ここまで店を作り上げてきた。努力を続けてきたのだ。
　マスターにとってこの店は自慢であり、自信だ。

「それではごゆっくり」
「ええ、それではまた」

　最後に改めて挨拶をしてテーブルから離れていく。彼女らにのみ構っているわけにも行かない。他にもお客様はいるのだ。マスターは一人一人の客に頭を下げ、挨拶をして、お茶の紹介をしていった。
　コレが終わったあとも仕事はたくさんある。仕事事態は順調だが、自分ひとりが楽できるほど恵まれているわけでは決して無い。彼自身、従業員と共に働かなければならないのだ。昨日の徹夜のような無茶も、決して珍しい事ではない。
　しかしそういった苦労も、彼は苦とは思わない。彼は茶を愛し、それに合うお

菓子を愛し、長く洗礼し続けてきた店を愛し、それらを人に伝える事のできる今の仕事を愛していた。彼は自らが天職についていると自覚し、その幸運を噛み締めて、今日も客人への真摯な笑みを忘れない。

　客足が落ち着き始めた頃、ようやくもってマスターは新しく来た茶葉をあけることになった。絹袋を空けた瞬間、芳醇な香りが溢れる。鼻の奥にまで行渡るように香りを堪能する。
　うん、素晴らしい。彼はその香りに実際に酔いしれ、頭をくらくらとさせていた。彼は真摯にお茶を愛していた。とことんまでに、だからこうして新しいお茶の香りを堪能する時間は誰にも邪魔されたくは無い。彼は何時もそう思い、願う。
　だが、たいていの場合は、それは許されない。そこまで彼の生活はゆとりに満ちてはいない。

「マスター、お客様です」

　その渋めの顔を子供のようにしわくちゃに歪めで、彼はウエイターの少年を見た。

「今、私は忙しいんだが」

　少年は苦笑いをした。マスターのそんな子供のような所は少年も知っているし、この時間を彼が何よりも楽しみにしているのも知っている。しかし彼も仕事は全うしなければならない。
　それに、この知らせは決して、彼の気持ちを害するものではない。

「マスター、そのお客様というのが……」

そうして告げられた名前を聞くと、先ほどの不機嫌な顔は何処へやら、ぱたぱたと店の入り口のほうへと彼は走る事になった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ウエイターに告げられた名前、それを聞いて入り口を覗いてみると、確かにそこには、その名を持った少女がいた。マスターは先の客人たちに見せていたよな柔和な笑みとは違う、にっこりとした、素のままの笑みをその相手に向けた。

「ミフィール、いらっしゃい」
「マスターさん。こんにちわ」

　ミフィール。彼女も此処で働いている少女だ。正直、あまり器用な子ではないが、しかしちゃんと丁寧に教えてあげれば、ちゃんとその通りに働く事のできる子だ。
　実は、この店の名の由来の少女でもあるのだが、今はそれはおいて置くとしよう。
　マスターはそう思い直し、そしてミフィールの隣にいる少女へと、恐らくミフィールが此処につれてきたのであろう子へと目をやった。

「……はじめまして」

　そんな風に、なんだか不慣れな感じで挨拶をした少女は、美しかった。単純にそう思えた。ミフィールも愛らしい少女だと、そう思って良いくらいの容姿はしていると思うのだが、あくまでそれはその年齢からくる可愛さだ。
　その少女はミフィールと同じ年くらいだというのに、既に美を体得していた。まっすぐに伸びた金髪に、パッチリと開かれた眼、スッと伸びた鼻、潤んだ唇、細く折れてしまいそうな体、どこぞの神殿で謳われる女神を彼は思い出してい

た。

「マスターさん。こちら、エレナ様です」
「はじめまして、エレナ様。私はこの店の店長を務めているラウジと申します。マスターとお呼びください」

　没落したとはいえ、貴族のミフィールが〝様〟をつけるくらいなのだから、かなり身分の高い方なのだろうとは想像が付いた。だが、だからといって唐突にへりくだった態度を取るわけにもいかない。他の客と差をつけるべきではないし、彼女自身、ソレを望んでいるようにも見えない。自ら家名を晒さない所を見るに、そうなのだろう。

「こうして立ったままというのもなんですし、席を案内しましょう」

　二人のレディーを恭しく、マスターは奥の席へと案内をした。

あけおめー
ちょっと小話……になるといいなあ
あ、それともうわかっているとは思いますが、茶の知識に関してはｗｉｋｉやら本やら読んで四苦八苦しておりますので、間違いがあればお知らせください。

第六十二話 とあるマスターの何時も通りの平和な一日 後編

「……美味しい」
　マスターが用意した、先ほど奥様方にも出した新作の菓子を味わったエレナ嬢のその言葉に、マスターは僅かに頬を緩めた。やはり、子供のこういう実直な感想は嬉しいものだ。

「マスターさんはお菓子作りもお上手なんですよ」
「……貴方が造られたのですか？」
「パティシエと一緒にですが」

　そう応えると、納得したように頷き、再び口にそのデザートを運んだ。そして美味しそうに顔を綻ばせた。可愛らしい、子供の笑みというのは良いものだ。
　この時間帯は客足も少ないので店も営業休止だ。店員も幾人か帰らせ、店内には次の営業時間の準備をすすめるパティシエと、彼女らだけだ。
　だからマスターも安心してエレナとミフィールをもてなす事ができた。

「ミフィールは此処で働いているの？」
「はい、あの、昔から知り合いだったので、この店の開店以来働かせてもらってます」

　ミフィールとの付き合いは長い。それこそ暗黒時代の終わり、つまり彼女の家が荒れ果てるその前から彼女との関わりは始まっていた。
　元々マスターはその彼女の家が経営していたレストランのボーイとして働いていた。下積み時代、様々な店の経営方法や、接客の仕方など、ものの仕入れ方、人脈作りなど、その時から彼は店を始める準備を進めていたのた。

その時に彼女に、正確には彼女の家族に出会ったのだ。
　決して良い出会いではなかった。彼がその時犯したミスを、偶然訪れていたミフィールの父が、咎め、強く叱責し、その場で首を言い渡されてまでいた。
　最初から、何れは店を辞めるつもりではあったものの、ショックは大きかった。それに、その時期は未だ国内外の情勢も、景気も不安定で、一度クビになれば改めて別の仕事を得るのに苦労する事が分かりきっていた。
　そんな折、彼女が「やめてあげて」と、荒れる父を止めてくれたのだ。
　それは多分、彼自身を助けようと思ったのではなく、自分の父の形相が恐ろしくてたまらなかっただけなのだろう。しかし結果として救われた事には変わりは無い。
　マスターはミフィールに感謝し、それから度々彼女に例として御菓子とお茶を振舞った。
　そうやって彼女との交流が築かれた。それは彼女の家が没落した後も勿論、彼女の生活の助けになればいいと、彼女に自分の店で働くように勧め、何度と無く彼女の力になろうとマスターは心を尽くしてきた。
　だから、彼女が最近、酷く暗い顔をする事が多くなった時など、人一倍心配したものだ。
　家の事については既に彼女は乗り越えていた。だから彼女の通う学院の事だということはマスターも理解できていた。だからそうたやすく口を挟むわけにもいかず、しかしずっと案じていた。
　だが、

「リドさんが、私のこと『影が薄いから潜入取材させやすい』って褒めてくださったんです」
「それは、嬉しげに語ることなのかしら？」

　今の彼女の笑みを見るに、もう大丈夫なようだ。非常によくしてくれた人がいたと本人も言っていたが、この様子を見るに、その一人はこのエレナなのだろう。
　ミフィールは彼にとって恩人であり、大切な友人だ。だから、マスター自身、

彼女に感謝を込めて歓迎しなければならない。

「新しいお茶を用意しましょう。今度のは今日仕入れたばかりのもので、素敵な香りがするものを」

　本当はそれに合う菓子も用意しても良いのだが、彼女らは女性だ。そう何度も進めても困ってしまうだろう。甘さは控えめにしているが、やはり食べすぎはスタイルによろしくない。年頃の女性は誰でも気にするものだ。
　……一人、例外的な女性に心当たりもあるが。と、

「□□□□」
「うん？」

　何処からか声がした。そちらへと顔を向けると、閉めてある扉のガラス越しに、見覚えのある人物がいた。マスターは閉めていた扉を開くと、知った彼が笑みを浮かべて、此方へと歩み寄ってきた。

「こんにちはマスター」
「やあ、シール」

　シール。彼女らの通う魔術学院の教師の男だ。マスターと同じくお茶好きで、昔からよく茶店や茶葉の売店などで顔を合わせ、それから仲良くなったのだ。この店にもよく来てくれるお得意様だ。
　時折彼と共に、豪快な、もとい、素敵な女性も尋ねてくるのだが、今日は来ていないようだ。

「今日はどうしたんだ？」
「以前くれたお茶の御礼をしようと思ってね」

　そういって彼が差し出すのは綺麗に布で包まれた箱、渡されてみると相応の重

さが両の手にかかる。これは……

「高値ではないけれど、素敵なティーカップセットが売られていてね。なんでもアダリア辺りで造られたものなんだってさ」
「最近、あちらのほうとも交流再開したからな」

　その地方の茶葉は勿論、茶器や店を飾るを小物なども流れてきていて、店を経営する身としてはありがたいことこの上ない。時折そちらに買い物へ出かけ、良いものが無いか探すのも最近の楽しみの一つだ。
　と、そんな事を思っていると、背後のエレナ嬢が目をぱちくりさせていた。マスターは紹介が遅れたと慌ててシールの事を紹介しようとする、と

「シール?!」
「あれ、エレナも来てたのかい？」

　マスターの前で二人は顔を見合わせ、驚いている。どうやら知りあいのようだ。いや、確かに彼女が魔術学院の学生なのなら、その教師の彼と顔見知りなのも不自然な事ではないだろう。

「シール、君も茶を飲むか？ 用意するが」
「いや、構わない。実は仕事がまだ残っていてね。それをまず終わらせなきゃね」

　そう言って手を振ると、シールはエレナへと視線を向ける。エレナと、そして彼女と共に座っている。ミフィールを目にして、彼はにっこりと笑みを浮かべた。

「……何よ」
「いや、別に。楽しそうで何よりだってね」

そう言って、シールは「また来るよ」とあいもかわらずな適当な笑みを浮かべて、店を出て行った。

「相変わらず、変な男」

　エレナ嬢はシールの背を見送ると、誰に言うでもなくそう愚痴垂れ、興味なさ気にそっぽを向いた。しかし彼女がシールを強く意識しているのは容易く見て取れた。
　だが、だからといってそれを追求する意味は無い。彼女の悩みは彼女だけのものだ。この店は悩みを解消ためにあるのではない。悩みを自分の中で、自分自身で整理するためにあるのだ。マスターはそう確信する。

「さあ、それではお茶を用意しましょう。きっと気に入りますよ」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「ふむ」

　日が暮れた頃。
　エレナたちもとうに帰宅し、その後来た第二波の客人たちももてなし、とうとう閉店の時間になった頃。マスターはシールが贈ってくれたプレゼントを開いてみた。
　箱の中は確かに彼の言うように、素敵な柄のついた茶器一式が揃っていた。派手すぎず、しかしテーブルに備えればそれだけで華やかさが増すような、出来の良い一品だ。マスターはこの一品をどう使うか、想像をめぐらせながらも、同時にこの品を送ってくれたシールのことを考えていた。
　シール、彼の経歴はあまり知らない。しかし学院教師の仕事の影で何か、とても大変な仕事を色々と任されているということは、時々見かける怪我だらけの姿

を見れば察しは付いた。
　しかし彼自身はその事について話そうとはしない。一度尋ねた事はあったが、あの曖昧な笑みのまま首を振り、彼は答えるのを拒否した。だからそれ以降は尋ねていない。
　それでも良いと彼は思う。別にできたてほやほやのカップルでもあるまいし、シールとの関係は友人だ。そして友人という関係を長続きさせるコツは適度な距離感だ。
　いずれその機会があれば彼の苦労話を聞くこともあるだろうし、無かったとしてもかまわない。お茶を愛する仲間という関係は変わりはしない。
　マスターはそう確信して、明日の仕事について考えをまとめ始めた。
　彼は自分のあり方を、この店のあり方を確信している。故に行動にぶれは無く、あり方に歪みは無い。だからこそ、店は平和に保たれる。自らの領分を定め、決してその領分を超える事をしない。
　彼は自分のあり方を理解していた。だからこそ、幸福を得る事が出来るのだと理解していた。
　彼のそんな適度に満ち足りた生活は今日も続く。

ヤマなしオチなし
しかしこんな話も書きたくなったので書いてみました。すごい気楽。

魔術学院の平和主義者

牢獄城編

第六十三話 不幸の手紙

　魔術の発達が進んだこの世界においても、手紙という情報交換手段は存在する。
　通信用魔術、なんてものも確かに存在するが、長距離である場合、非常に細かな儀式や準備、そして人材が必要になる。少なくともある程度の敷地に魔法陣を敷き詰め、さらに双方に魔術師が存在しなければならない。
　現在そういった手段や手続きを簡略化するための魔動機の開発はなされているが、遅遅としてそれは進んでいない。過去、魔動機に関して天才的な才能を持った人物もいたが、現在の魔術師の地位を脅かす存在として排他され、結果として資料にも残っていない。未だ魔道機械は魔術という分野の発展と比較すると未熟で、魔術の代用にいたってはいない。
　だから魔術学問の総本山、ガイディア王国でも最も魔術の知識と力が集結しているという
　この学院でも、基本、情報のやり取りは手紙だ。
　手紙のやり取りは一般市民と変わらず、郵便屋が運んでくれる。が、なにせ、繰り返すようだが、此処はガイディア国最高の魔術研究施設にして教育機関、オルフェス学院だ。
　初中高等クラスの学生達、あらゆる分野の研究員、教師等等、兎に角人が多い。だから郵便物も相応の量になるし、何より下手な管理や受け渡しをすると誰のものかわからなくなり大変混乱する。
　だから、手紙はまず〝集積所〟に集められる。そしてそこから手紙や配送物があることを生徒や教師、研究者に通達し、配達物を受け取るのだ
　これがオルフェス学院の配達システムだ。

「はい、これがシールさんへのお手紙ですね」

「……」

　さて、その〝集積所〟手紙の受け取り場にて、シールは一人、自分の手紙を受け取っていた。受け取って、名状しがたい、非常に困った表情をしていた。
　受け取った配達物は、見た目は非常に厳かで、重量感ある高価な封筒に、風格ある模様の印が付いた蝋で蓋されていて、見るだけで何事かありそうな奇妙な迫力があった。

「……そうか、もうこんな時期か」

　シールはそんな手紙を受け取り、その場でじっと手にあるそれを見つめ続けていた。ひたすら。職員の人間がシールを不気味そうに眺めているのも無視で。
　それから暫く、幾人か他の学生がこの場を利用してはシールの事を不気味に眺め、退散し、職員がついにシールのことをあきらめた頃。

「何やってるんですか」
「おふう?!」

　そんな彼の背中を、彼の同僚たるリーンが蹴り飛ばした。シールは呻き、恨みがましくリーンを睨むが、彼女は憮然としたままだ。

「そんな所に突っ立てられていたら邪魔です。客にも従業員にも」
「まず言葉を」
「かけたじゃないですか」
「足が共に」

　リーンは無視した。無視して職員に自分への配達物を尋ねた。彼女もまた、シールと同じく呼び出されたらしい。

「はい、これがリーンさんへのお手紙です」

「……」

　シールと同じく、リーンは無言でその場に立ち止まった。渡された手紙はシールと同じくやたらと豪華で威厳ある、存在するだけで何事かを引き起こしそうな代物だった。

「リーン先生？」
「……」

　声をかけるが反応は無い。先ほどのシールと同じように目の前の手紙をただただ見つめ続け、なんともいえない表情を続けていた。どうとも取れない反応だ。
　シールは一度二度、彼女の前で掌をかざし反応を見たが、返す反応もない。
　暫くその状況が続き、ふと、リーンが顔を上げると

「シール先生、旅行に行きましょう」

　突如として、リーンは覚醒したようなはっきりとした表情で、唐突過ぎる発言をした。

「……何をおっしゃっているんです？ リーン先生」
「だから、旅行です。旅行にいきましょう。アダリアでもラークスでも何処でも良いじゃないですか。旅行に行きましょう。楽しいですよ」

　全然楽しそうに無い無表情なのだが、逆に切羽詰った間はひしひしと伝わってくる。なんというか助けて欲しい感が凄い。無表情である事には変わりないのだが。
　しかし、シールにも彼女の心情は分かっていた。つまりは彼女にも自分にも届いたあのごつい手紙だ。仕事に対して基本、真面目にやってきている彼女がそんなふざけた事をいうなんて、それくらいしかない。
　実は、シール自身、彼女の意見は全面的に賛成したかった。ぶっちゃけこの場

から今すぐ逃げ出してどこぞの街か港でのんびり観光に行きたいと、だが、

「リーン先生、僕ら、仕事があります。子供は放置できないでしょ。生物ですし」

　彼らは教師であり、親に代わって教育を施すのが仕事だ。そんな人間が職務放棄して遊びに行くわけにも行かない。他の仕事以上に自分以外の人間の責務が自分にのしかかる仕事だ。
　そんな立場の人間がフラフラとしているわけにも行かない、と、シールは思う、のだが、

「学院長の命令でしょっちゅう彼方此方フラフラしてる貴方が何を言ってるのですか」
「……ですねー」

　そういえばしょっちゅうフラッフラしてるよなー、僕ら。と、シールは遠い目をした。だからこそそのフォローはかなりしっかりしている。シールとリーンの事情は学院の教師には理解が行渡っているので、二人が休みのとき、誰が誰のフォローに行くのか、既にローテーションは何パターンも決まっているのだ。
　いや、しかし、と、シールは首を振って、

「あれは僕らの仕事の事情を思ってのことでしょう。流石にただ旅行に行くためだけに他の先生達に迷惑をかけるわけにはいかんでしょう？」
「……大丈夫です。黙っていけばばれません」
「そういう問題ではないでしょう」
「別に良いじゃないですか。有給使いましょうよ有給」
「だーかーら」
「それに」

　と、リーンは一息ついて、

「……この手紙に従ったら、私達、どっちにしろ学院を空ける事になりますよ」
「……そうなんですよねー」

　そう、彼らへと届けられたその手紙、見た目のごついそれの内容が、もし二人の予想通りなら、少なくとも数日、二人は学院を空ける必要がある。そして恐らくその先で、ろくでもないことが起こる。
　出来れば行きたくない。それは二人揃っての共通認識だ。しかし逃げ出すにも立場と責任というのがある。何より、この手紙そのものが、安易に放り投げてよいものではないのだ。

「……捨てて、手紙が届かなかったって言いましょう」
「……それしたら今度は郵便屋の責任問題ですよ。〝この手紙〟」

　嫌そうな顔でシールは手紙を摘んでちらつかせると、リーンは嫌そうに目をそらした。本気で嫌そうな顔をしている。そりゃ、僕もいやだけど、とシールはため息を吐いた。
　シールとリーン、二人は並んで首を捻り、唸った。最早職員達は怪訝な表情を隠さず、横を通る生徒達は二人を見てひそひそと言葉を交わした。
　このまま此処にいたら変な噂でも流れそうだな、と、シールが懸念し始めたその頃、

「……」
「……リーン先生？」

　リーンが、シールの手に持っていた手紙を抜き取り、目を瞑った。そして、

「……【炎鎖】」
「コラ」

魔術を発動させようとした直後、声がかかり、止められた。シールではない。子供のように高く、若く、そして聞き覚えのある声だった。
　シールとリーンは半ばうんざりとした表情で、声の主へと顔を向けた。

「……学院長、何してるんですか」
「うん。いや、そろそろだなって思ってさ。コレ」

　いつの間に抜き取ったのか、リーンが持っていた手紙を二通広げると、彼自身も何処となく面倒そうな表情で、しかしはっきりと、

「そろそろ受けてもらわなきゃ困るんだよね。国王からの授賞式」

　そう言って、二人をげんなりさせた。

第六十四話 王城へ

「国王からの授賞式？ 出るの？ 貴方が？」
「……まあ、ねえ」

　エレナはシールから聴かされた話に目をぱちくりとさせた。
　何時もどおり、彼の部屋に忍び込んで、彼の本を勝手に読み漁っていた時にシールが帰ってきた。そして聴かされた話が、ソレだ。国王からの王城招待、その理由というのが、今までの功績を讃えシールとリーンを表彰するためだという。

「それって、物凄く栄誉な事なんじゃないの？」

　国王から直接讃えられるなんて、早々ある事ではない。あらゆる点で国を支援してきた大貴族や、国王に直接仕え何十年にもなる要職の人々、あるいは戦争勝利の功労者など、そんなレベルの功績をしなければ、国王が直接出てくる事は無い。
　そんな栄誉に、例えどれだけ特殊であろうと、たかが一介の教師が得るなんて奇跡に近い。
　そんな奇跡を得たはずのシールは、

「……栄誉な事……なんだよ……ねえ」

　やたら、テンションが低かった。さっきからベットに倒れこんでぐったりとした表情を続けている。なんだあのやる気の無い顔。

「……何かあるわけ？ その、国王の式典に」
「何かあるって決まったわけじゃないよ、わけじゃないんだけどね……本当」

　憂鬱な顔をしている。やたらと。普通なら喜んでもいいはずなのだが。

「というか、そもそも何の功績の積んだの？ 貴方」
「……えー、と、確かこの国の存亡の危機を二、三回救った、だったっけ？」
「……超適当ね。何よ二、三回って」
「いやあ、まあ、本当なんだよ。なんか救った」

「なんか」と、こんな適当に救われるってのもどうなんだ。と、エレナは自分のいるこの国に突っ込みをいれたくなったが、良く考えれば自分も彼に救われたのだから文句も言えない。
　しかしこの男、何でこんなに嫌がっているのだろう。ただの人間では一生の間、どれだけがんばったとしても手に入れることの出来ない栄光なのだけど、一応は。
　そう、そのままたずねると、シールは顔をゆがめて、

「いやあ、そんなのいらないよ。もう」
「そんなの……ちょっと待ちなさい。〝もう〟ってなによ？」

　問うと、シールは自分の机をやる気に自分の机を指差した。正確には彼の机の、備えられている引き出しをだ。指示されるまま、エレナはその指差す引き出しを開けてみる、と。

「……」

　なんというか、その引き出しにみっちりと、ぎっしりと、〝色んなもの〟が詰まっていた。
　例えばやたらと長ったらしい文章でみっちり書かれた賞状であったり

例えばやたらと豪勢な像が頭に付いたトロフィーであったり、
例えばやたらと華麗な彫刻がなされたメダルであったり、
そんなのが、みっちりと、なんかガラクタでも詰め込んでいるみたいに、シールの使い古された机の引き出しの中に、収納されていた。

「……なにコレ」
「一生の間、どれだけがんばったとしても手に入れることの出来ない栄光」

さらっと、彼はそんな事を言う。先ほどまで彼女の頭の中にあった栄光という二文字に非常に安っぽいイメージに覆いかぶさった。何だコレ。

「……いくらなんてでもこの扱いは酷くない？」
「いやあ、学院長からの依頼こなしていくうちに色々貰ってね」

色々貰うなんて気軽な代物ではないはずなのだが、国民栄誉賞みたいなものがごろごろと並んでいるところを見てしまうと。それを言う気も失せた。

「リーン先生もたくさん持ってるよ。面倒くさいからって倉庫の中に突っ込んでるけど」
「……で、これが、行きたくない理由？」
「いや、そうじゃなくてね……」

シールは再びベットに顔を埋め、呻く。そんな様子は年の離れた教師、というよりも多少抜けた所のある兄弟のような感じだ。エレナはそんな動でもいい事を思いつつも、彼の口が開くのを待った。
そして暫くすると、彼は重い口を開いて、

「行くとね、ホントにね、起きるんだよ」
「何が」
「厄介ごと」

厄介ごと、と彼が言うと妙に説得力がある。と、元厄介ごとの一人、エレナは頷いた。

「今のご時世なんて、平和だけどやっぱりまだまだ不安定でしょ？　で、そんな時代の国王の出席する一大イベントに、僕らみたいなのが出ると、面倒な事になるんだよ」
「……言わんとしていることは分かったけど、起きるとも限らないんじゃないの？ 厄介事」
「でも、起きないとも限らない……それにまあいろいろあってね」

　シールは呻き、ごろごろと転がって、最後にはぐったりとベットに伏した。
　よっぽど今まで、その起きないとも限らない厄介ごとに酷い目に合わされたらしい。目が死に絶えている。なんだあの腐った魚のような色。

「いい大人なんだから、あきらめたら？」
「……エレナ、変わりに行ってくれない？　村の件でも手伝ってくれたし表彰されるかも」
「いや」

　エレナは速攻で切って捨てた。シールは撃沈した。
　彼女もぶっちゃけ、授賞式なんて興味なかった。最近学院長からレアモノの魔具を貰っているので十分満足している。大体面倒事が起こるであろう場所になんて行きたくない。
　当たり前だ。

「それで僕に行けって言うのは酷くない？」
「大人なんだから、自分に与えられた責務は自分で果たしなさいよ」
「……言うね、エレナ」

シールが大きくため息をついた。
　それは、彼が諦めた意味だという事は、エレナにもわかった。

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「シール先生、リーン先生、準備は出来ましたか？」

　職員室にて、シールとリーンが二人、並び立っている。シールもリーンも、その格好は軽い普段着だ。式典までまだ日はあるが、其処は王も出席する式典、当日さっと行って、そのまま終わりというわけには行かない。準備説明、リハーサルなんてものもある。それもまた手間といえば手間な話だった。
　数日分の衣服用具、式典用の式服も用意してある。結構な重量だが、それはリーンの分も含めて【物質封印】で保存してある。
　準備は万端だ、ただ、二人の表情が死んでいる事をのぞいて、
　そして、そんな彼らを囲うように、主任教師も勤めるエルフィン教授。そして教師陣たちが並んでいた。彼らは皆が皆、二人に対して暖かい視線を、同情に満ちた視線を送っている。

「お二人とも、国王に失礼の無いよう、気をつけてくださいね？」

　教師陣を代表してエルフィン教授が慈悲深い声でそう言う。だが二人は目をそらして

「ええ、まあ……」
「そんなやる気の無い表情ではいけませんよ？ 国王からの招待なんですから」
「はい、まあ……」

　エルフィン教授のゆっくりとした言葉に、シールもリーンも揃って目を逸らし

た。
　エルフィンは困った顔をして、しかし理解もあるので仕方ない、と、ため息をついた。

「では、はじめますよ」

　そうして、エルフィン教授は転移の術式を発動させ始めた。王都ガイディアの名に違わず、王城はこの街の近くに存在する。歩いてたどり着けるくらいの距離なのだが、理由があって歩く事ではたどり着くことは出来ない。だからこういう面倒な方法を取らざるを得ないのだ。

「何か言伝はありますか？」
「……僕が帰らなかったら、子供達をよろしくお願いします」
「……私が帰らなかったら、子供らに課題を山ほどつけてあげてください」

　なぜかどちらも遺言風で、しかしある意味、両者とも教師らしい遺言だった。そしてそれを聞き受けた教師陣は何故か敬礼ポーズをとっていた。

「……負けんなよっ」
「必ず帰って帰って来てね、帰ってきたら、伝えたい事があるからっ」
「俺、お前らの事、嫌いじゃなかったぜ……」
「君達、死亡フラグぶったてるのやめて」

　そしてその直後、皆に見守られながら、二人の姿は職員室から消えた。

第六十五話 牢獄城

　ガイディア国、王城、その城壁内部、
　ガイディア国の王城は城下町と共に城壁に囲われている。貴族街と王城の合間に出口の無い城壁で完璧に囲われる、という、非常に奇妙な形をしているのだ。
　出入り口もあるにはあるのだが、実はそれも殆ど利用されていない。他国からの来客や、あるいは王家の者や役人達が王城を出て移動する際のみ利用される。普段は、例え貴族であろうとその出入り口を利用する事は出来ない。上空には結界が張り巡らされてもいるので、魔術で空を飛んでも入る事は出来ない。
　つまり、王城の外と中は完全遮断されているのだ。中に入るには、許可された人間による特殊な転移術しかない。
　だからガイディアの王城は「牢獄城」とも言われている。その臆病とも取れる強固な守備姿勢は他国から侮られる要因にもなっている。
　そんな牢獄城の城壁内部にシールとリーンの二人は立っていた。二人は一度天を仰いで、そして互いに向き合うと、

「さて、それじゃ早速王城に向かいますか？ リーン先生」
「嫌です」
「同意見です。まずは宿に向かいましょうか」

　二人は真っ先に王城へと向かう道から目を逸らし、わき道へと逸れていった。

「久しぶりですね、二人で並んで王城入るの」
「大抵、貴方か私、何処か行ってますからね。この時期」
「学院長が気を使ってくれているんですかね？　僕らが此処に来たくないからって」

「その代わり命の瀬戸際まで追い込まれるような仕事を押しつけられますが」
「どっちにしろ地獄ですね。僕ら」

　シールは乾いた笑みを浮かべながらも、周囲の風景を眺めていく。
　城壁の中、防衛のため外部と閉ざされた空間であるこの場所は、中で暮らす兵士や使用人たちが閉塞感を消すため、少ないながらも幾つかの娯楽施設が存在している。衣服店、装飾品店、レストラン、酒場、果ては娼婦館まで。
　物資は定期的に外部から転移で運ばれてくる。人の移動も本来ならその時だ。
　シールたちが向かう先も、そんな施設の一つだ。
　といっても宿屋ではない。何せこんな城壁の中を訪れる来客なんてかなり限られる。それこそ他国の来賓など、そういった人々だ。そんな人々が宿屋などに泊まる筈も無く、王城で来賓の部屋へと案内される。兵士達も用意されている宿舎に泊まるし、使用人らも同様だ。
　つまり、宿屋はこの空間に限っては存在する理由がないのだ。
　無論、シールとリーンが王城に向かえば、それはそれは豪勢な、学院のシールの部屋の数倍はあるであろう部屋へと案内されるのだろうが、二人とも揃ってそれはご免だった。
　だから二人が向かうのは、王城でも宿屋でもなく、酒場。彼らの顔馴染みの酒場だった。

「親父さん。元気してますかね？」
「さあ、数年前は生存していましたが」
「お酒好きだからな、病気してなきゃいいけど」
「くたばってるかもしれませんね」
「縁起でもない事言わないでください、リーン先生」

　二人はそんな感じで、のんびりゆったりと知る道を歩んでいった。時折警備中であろう騎士達がぎょっとした表情で彼らを見たりしているが、本人らは全く気にしない。
　実にマイペースに、彼らは王の住まう小さな街を闊歩する。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「相変わらずだなぁ……」

　この城壁内部の酒場は幾つかあるが、その中でもこの酒場はかなり見た目が凄まじい。古臭く、作りも上品さというよりも下品さのほうが露わになっている。なんというか、街中にある安い、粗野な男どもの溜まり場というイメージの店だ。
　しかし此処も、この国が認めて開いた店だ。最初は超高級な酒場ばかりが建設されていたのだが、あまりにも上品が過ぎて平民出身の騎士達から肩が凝ると不満が出た。
　その解決案として建てられたのがこの店だ。わざわざ街外れの市民の人気店と話をつけて、此処に移ってまらったのだ。わざわざ汚らしい所まで完膚なきまでに再現する、なんて馬鹿馬鹿しい苦労もしたが、お陰で騎士達にもこの店も人気がある。
　そんな店と、シールたちは馴染み深かった。

「親父さん、いる？」

　若干軋む扉を開くと、良く知る酒場の光景が目の前に広がっていく。筈だったのだが、

「おう、シールじゃねえか！ 久しいなあ！」

　何故か酒場は荒れており、その中心で見知った髭面のでかい男が、どうみたってこの国を防衛する近衛の騎士達をぼっこぼこにしていた。

「……なにしてるの、親父さん」

　親父さんと呼ばれた男、ガラムは、片手にうっすら血の付いた肉切り包丁をもってこっちににっこり微笑んだ。見ようによっては殺人鬼が近づいているように見える。
　無論、そんなわけは無く、彼はこの酒場の店主を勤める男だ。勤務年数一〇年手前。
　しかしそれが騎士らをボコボコにする理由にはならない。
「いやな、其処にいる騎士のガキどもがウチにケチつけやがったから制裁をだな」
「それで殺人を起こしてはだめだよ」
「殺しちゃいねえよ。半殺しだ」
「どっちにしろ駄目だね」

　そう言いつつも、シールとリーンはぶっ倒れている騎士たちを遠慮なしにどけて、適当な席を立てて腰をついた。こういう場合、気にしないのが一番良い。
　この店で二番目に偉いのは目の前のこの親父さんなのだから。一番はその奥さんだが。

「さて、何か頼むかい？」
「じゃ、お茶を」
「甘いものを」
「此処は酒場だって忘れてねえか？」

　酒を飲め酒を、と、ガラムは唸るが、シールは笑って首を振った。流石に真昼間から酔う気はしないし、何より酒癖の最悪なリーンにそれを飲ますわけにもいかない。
　しかしまあ、二人が酒をあまり嗜まない事くらい、彼らと長い付き合いのガラムも知っている。既に適当なつまみと飲み物を取り出し、さっと二人の前に並べていた。

「で、今日は何でこんな所に？」
「表彰式」
「ああ……可哀想にな」

　即、同情された。

「……い、いや、いきなり同情されてもな」
「だって何時もろくな事おこんねえじゃん。お前らが行くと」

　シールもリーンも目を逸らす。どこか遠い目で。

「前は何があったっけ？ 反乱？」
「有力貴族の反乱だよ。ものの見事に巻き込まれたね」

　暗黒時代も過去のものとなり、徐々にからの回復の兆しが見えはじめた頃だ。
　他国も王族も貴族も平民も、誰もが疲弊しきり、この状況でこれ以上互いに問題は起こすまいという暗黙の了解が得られた矢先の、本当に空気の読めていない貴族達の反乱だった。
　いや、しかし何故このタイミングなのか、というのは理解できる。疲弊しきった王家、此処で一気に踏み込み王家を打倒できれば、自らが国を支配できる、その絶好の機会だった。
　確かにその通り。丁度いいタイミングだ。欲が出てしまったのも分かる。
　分かる、分かるが、もう少し空気を読め。これが全国民の意見だった。
　結果、起こったのは非常に短期的な反乱、そして収束だった。
　問題を長期化させたくなかった、させるわけにはいかなかった王家は、情けも容赦も無く、徹底的に反乱貴族らを叩きのめした。本来あるべきルールや了解、その全てを完膚なきまでに無視して、一族郎党木っ端微塵に粉砕した。
　そんな圧倒的反乱鎮圧に、その時表彰の真っ只中だったシール達が駆り出されたのだ。

「……いやね、あそこまで扱き使われるとはね」
「それでその功績を讃えてまた表彰に担ぎ出されましたね」
「そんで今度はその表彰の真っ只中に生き残った貴族が突撃してきて……」

　思い出したくもない過去を思い出して、シールは誤魔化す様に目の前のサラダを箸で弄び、リーンは無心で目の前のエドの豆をぽりぽりと口に運んでいた。

「確か更にその前は精霊の暴走だっけ？ 今回は何が起こるんだろうな」
「不吉な事いわないでくれない？」
「一番ジンクス背負ってんのお前らじゃん」
「そうなんだけどねー」

　おつまみをぽりぽりと食べながらシールは首を傾けた。一体どんな因果が自分に纏わり付いているのだろうか、と。運命で片付けるとするのなら、神を恨まざるを得ない。

「まあ、兎に角、今日は此処に泊めさせてもらうよ。お金も払うし」

　用意してあった銅貨をガラムに渡す。ガラムはその金をしっかりと数えながら、笑い、

「ウチにまで厄介ごと持ってくんなよ」
「……だからまだ起こるって決まったわけじゃ」

　そう呟いた、直後だった。ドカッという激しい音と共に、酒場の扉が開き、直後にゴツイ装備で身を固めた騎士たちがどかどかと酒場に入ってきた。
　そして、騎士たちを率いている、真紅のラインの入った騎士長を示す鎧を装備した男が、端正な顔をした金の短髪の男が、鋭い瞳でギラリとシールたちを睨んだ。

「……親父さん、知り合い？」
「あー、最近王城勤務に出世した奴だよ。確か名前はダルシアって奴」
「……何故、そのダルシア君はこっちを睨んでるのですか？」
「そりゃ、あいつの部下が其処で転がってっからじゃね？」

　シールとリーンは自分らの椅子の後ろにぶっ倒れて泡を吹いてる騎士達を見た。そしてもう一度ダルシアの顔を見た。彼の表情は怒りに染まっている。

「……親父さん。これ、僕らのせいじゃないよね」
「ま、そうだな」
「宿代、返してください。お城に向かいますから。今すぐ」
「残念ながら返金不可だ。きっちりサービスしてやるからじっくりのんびりしてくれ」

　ガラムはにっこりと笑みを浮かべて、二人の肩をがっつり掴んだ。

「「くそったれ」」

　二人は同時に神様に向かって悪態をついた。

第六十六話 酒場の騒乱

「ガラム殿、私の部下がとんだ無礼を、失礼しました」
「なに、気にする事はねえよ、俺は優しいからな」
「御心感謝します。直ぐに酒場を片付けますので」
「おーう、さっさとしてくれよ。何しろ此方は忙しいんだ。真昼間から人の店を馬鹿に出来るどこぞの騎士団さんと違ってな」
「了解いたしました。では早速」

　ガラムと騎士長ダルシアの二人はが言葉を交わしている。ガラムはおどけた笑い顔で刺々しい言葉を、ダルシアは表情も言葉も全く感情を出さず謝罪までも淡々と事務的に。
　はっきり言えば非常に空気が悪かった。自分の部下をぼこぼこに殴られたほうも仕事場を侮辱され荒らされたほうも平然としていられた方がおかしい、といえばそうだろうが。無論、元はといえば、ダルシアの部下が無礼を働いたのが間違いだといえなくもないが、現在の状況でどちらが悪か、などといってもどうしようもない事だ。
　特にダルシアの部下達は表情にあからさまな怒りを見せている。上司であるダルシアが表面上、対話で事を済まそうとしているからこそ手を出さないよう心がけているが、ガラムの挑発的な態度に耐えかねているのが見えていた。
　軽い修羅場、一触即発のような状況、

「……おつまみが切れました」
「何か作りますか。リーン先生何が食べたいですか？　豚肉と野菜はあるみたいですけど」
「甘味モノを」

「原材料豚肉から甘いもの精製するってどんな錬金術ですか。野菜炒めにしましょうね」

　しかしそんな中、随分とのんきな声を上げている二人がいた。

「……シール先生は料理できるんですよね」
「というか、こんなの炒めるだけですからね。リーン先生だってこれくらいならできますよ」
「この前、料理をしていたら爆発しました」
「一体どんな奇跡を起こせば爆発という結果が生まれるのか気にはなりますね」

　シールとリーンはひたすらマイペースだった。シールは勝手に保冷庫を漁り、調理を始め、リーンはシールの調理風景を眠たげな顔で眺めている。直ぐそばで発生している修羅場には断固として、一切関わるつもりは無いらしい。至極真面目に無視している。
　流石に騎士たちも二人の事は気になるようだが、しかし今は目の前の酒場の店主に意識を向けているらしい。誰も、もうじき行われる盛大な式典の主役の二人とは気が付かない。
「……？」
　だがそんな中、一人、彼らに目を向ける者がいた。ガラムと向き合っていたダルシアだ。

「……彼らは？」
「あ？ ただの客だよ」

　ガラムはそう流したが、しかしそもそもこの城壁内で「ただの客」なんて人間が存在するはずが無い。限られた人間以外は立ち入る事すらままならないのだから。
　そして二人の格好は騎士にも見えず、王城に使える役人にも見えない。使用人だといえばまだ納得できるが、しかしこんな真昼間から酒場にいられるほど此処

に使える使用人達は暇ではない。
　更に、近々始まる王城の式典、これらの要素を考えると、答えは自ずと導かれる。
　ダルシアはふっと顔を上げて、
「……まさか、」
　そう言葉を漏らし、ダルシアがシールとリーンに近づき、まさに声をかけようとした、その時だった。

「――いい加減にしろよ、オッサン。なめくさりやがって」
「お？　ガキが、やるってのか？」

　とうとう、背後で待機していた若い騎士の一人が、ガラムの飄々とした態度に堪えきれず、前に進み出た。拳を握り締め、喧嘩腰に。そしてガラムもまた、それに応えるようにニヤっと笑って拳を握った。悪い事に、ガラムはいい年している割に、好戦的な男なのだ。
　けたたましい怒声と激突音、そして歓声。ガラムと騎士がぶつかり合い、乱闘が始まった。
「馬鹿か！　止めんか！」
　ダルシアが苛立つように叫ぶが、一度火のついた乱闘は収まりが聞かない。ガラムを何人もの騎士が囲い拳を振り上げ、ガラムはそれに負けないくらいの力強さで拳を振り回す。
　他の騎士達も、ガラムに突撃をかます奴もいたり、遠巻きに罵倒を浴びせる奴もいたり、面白半分で囃し立てる奴もいたりと、好き放題だ。喧嘩となると国防を務める騎士も無法の傭兵らと変わりは無い。血気盛んなのはどちらも同じなのだ。
　こうなるともう止まらない。騎士達とガラムの大立ち回りが始まってしまった
「おい、なに知らん顔してるんだよ。お前ら」
　そして暴れだす騎士たちの中には、シール達に目を向ける者もいた。
　我関せず、という態度に腹を立てたのか、あるいは荒れきった感情をぶつける都合の良い相手だと想ったのか、拳を握り二人に近づいていく。テーブル越しに

シールの胸倉を掴みかかる。
　しかし掴みかかられたシールは、特にあせる様子も見せず、穏やかな顔で、
「まあ、落ち着いて」
　と、騎士の頭を軽くつついた。抵抗、というよりも友人にちょっかいをかけるようなそんな仕草だ。しかし、そうした途端、
「……ああ、そうだな」
　シールを掴みかかっていた騎士が、毒気を抜かれたような表情で胸倉を離した。先ほどまでの怒りの表情は何処へやら、まるで気の抜けた表情で呆然としていた。しかしそれも暫くたつと、はっと正気に戻ったように首を振って、首を傾げた。何かを思い出そうとしているような、そんな顔をして。だが目の前の乱闘を見つけると、
「おい、なにやってんだお前ら！」
　と、そんな違和感を振り払おう様に獰猛な表情に変わり、その騒動に参加していった。
　残されたシールは乱れた服装を正すと、平然と厨房に戻っていった。リーンはそんな彼をジト目で睨みつけ、問う。

「何したんです」
「感情の方を封じました。すぐ解けるような程度ですが」
「禁術です。学園長に報告しますよ」
「新しい服と甘いもの、どっちが良いですか？」
「甘いものを」
「今度甘味巡りのついでに新しい服でも買いに行きましょう。最近買って無いでしょう」

　そうして、やっぱりのんきに薄暗い取引をしながら。二人は再び勝手にくつろぎ始める。
　そんな二人をダルシアは一瞬、まるで観察するようにじっと眺めていたが、すぐさま同僚達を止めるため、割って入ろうと声を荒げる。
　自体は混沌、いよいよもって収集が付かなくなり始めていた。

だが、その時、

「何やってんだい！ あんた!!」

　店全体を振るわせる、ガラムや騎士達の怒声なんて一瞬で吹っ飛んでいくような咆哮が木霊した。あれだけ暴れまわっていた騎士たちは一瞬にして静まり返り、ガラムは一気に青い顔をさせて、声のする方へ顔を向けた。
「ケ、ケーナっ」
　ケーナと呼ばれたのは、背丈の低い、巨体なガラムと比較すれば二倍近く違いのある、小柄な女性だった。顔も若々しく、下手すればガラムの娘とも見えるような彼女は、娘ではなく、なんと彼の妻である。
　彼女は、下手すれば少女にも見えるようなその顔を鬼のように怒らせて、ガラムに近づいていく。その様子は鬼が童に怯えるようにすら見えた。
「まぁたあんたは!! いい年こいてっ!!」
　ケーナは言葉を区切り、怯えるガラムの頭を引っつかむと、
「馬鹿なことしてんじゃないよ!!」
　地面に叩き付けた。その挙動は熟練の騎士たちでも映らない、気が付けばその熊のような体が床にめり込んでいた。衝撃で店全体が一瞬揺れ、騎士たちを戦かせる。

「リーン先生、塩とってください。塩」
「はい」
「それは火薬です。何で間違えたんですか。というかどっからとってきたんですかそれ」

　唯一シールとリーンだけが、特に反応する事も無く勝手にくつろいでいた。

「全く、何時まで経っても落ち着かないんだから。しょうのない」
「ま、まてケーナ。落ち着け。べ、別に俺が一方的に喧嘩をふっかけたわけじゃ」

「やかましい！ どうせ馬鹿な挑発でもしたんだろ！」

　片足で一撃、振り下ろす。その小柄な体の何処からそんな力が溢れるのか、地響きのような音がして、更に騎士たちを震わせた。
　そう、この店において、頂点に君臨するのはガラムではなく、彼の妻のケーナである。それも精神的な、とか言う意味ではない。物理的な強さで、彼女はガラムの上位者として君臨している。
　先ほどの騒乱が嘘のように静まり返った酒場で、ダルシアが意を決したように近づき、
「……奥方」
「あーら、騎士長さんこんにちわ！ ごめんね？ ウチの馬鹿亭主が!!」
　言葉と共に更に一撃。ぶっ倒れるガラムの背中を踏みつけながらきゃらきゃらと笑うケーナ。自分の夫が悲鳴をあげるが、そんな事は気にしない。
　騎士たちも流石にドン引きしているが、しかしその結果、騒動は一瞬で静まり返る事になった。暴力を行使するものは、より強い暴力を行使するものに平伏するものだ。
「早急に片づけを進めます。壊れた家具の代金も。ご容赦を」
「そう？ 本当にすまないね。この馬鹿は後で私が折檻しておくからさ」
　今でも十二分にお仕置きになっているのではないか、と言う気もしないでもないな、と、シールは思いはしたが、言葉にはしなかった。嵐は黙って耐えるに限る。下手に手出ししてよい事なんて一つも無い。
「さあ、片付けるぞ！ 早急にだ！」
　その言葉をきっかけ、先とは比べ物にならないほどの速度で酒場の片づけが進んでいった。

　：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「お久しぶり。ケーナさん」
「久しぶりだね、あんたら！ もっと来れば良いのに！」

ダルシア達が片づけを終え、去って言ってから暫くして、
　シール達はケーナと向かいあって話をしている。ケーナは手馴れた動きでおつまみを出すと、ケラケラと笑みを浮かべた。ガラムが暴れたりなんだりと、そういう事をしていなければ、彼女は実年齢相応の、気の良いおばさんの振る舞いを見せてくれる。
　ちなみにガラムは未だ床に叩き込まて気を失っている。何時もの事なので気にしない。
「で、今日はどうしたんだい？ 二人とも！」
「……実は、授賞式に」
　その途端、ケーナは、悲しげな顔をして、
「……可哀想にね」
　心底同情された。

第六十七話 夜の戯れ

注意）多少、アレな描写が混じります

　深夜、【牢獄城壁】の内部は静かだ。ただでさえ訪れる人数も限られ、騎士たちも規則で深夜の寄宿舎の出入りも禁じられている、そして客がいないので店も閉じる。
　人通りも無く照明の明かりも最低限になる。月光の照らす本当に静かだ。
　そんなもの静かな夜、ガラムの開く酒場、【ガラーナ】にて、

「さ、飲むぞ。シール」

　ガラムとシールは人気の無い酒場のカウンターに陣取っていた。
　なんだかんだで、この店に入ってからすぐさま騎士団騒動で、ゆっくりと話す暇も無かった。だから付き合え、と、目を覚ましたガラムがシールを誘ったのだ。
　ちなみに、リーンは酒が飲めないので此処にはいない。幾らかおつまみを与えていると眠くなったのか、ケーナに寝室へと連れられていった。その後、ケーナも自室に戻っていったらしい。
　さて、ガラムは嬉しそうに、何だか高そうな銘柄の酒瓶をシールに突きつける。シールはそれを受け取りつつも、ガラムの頭に巻かれた包帯を見て、

「……というか大丈夫なの。頭」
「……いや、ケーナも加減してくれてたし……多分な」
「これに懲りて、喧嘩なんてもうやらない事だね」
「うっせえよ」

まあ兎も角、今はシールとガラム、二人でダラダラと、酒盛りを続けていた。

「しかし、本当に久しぶりだな。此処に移店してからめっきりこなくなりやがってよ」
「教師の仕事もあってね。中々顔を出せなかったんだよ」

そう言うと、ガラムが何やら不思議そうな顔をして、唸った。

「なんだい？」
「いや何、お前が教師か、と思ってな」
「何を今更、もう教師を始めて何年にもなるじゃないか」
「お前が、教師を始めたって聞いたときにゃ本気でぶっ飛んだね。俺は」

ガラムはそう笑って、透明感のある薄紫色の酒をちびちびと飲み始めた。昔はあれくらいの量は煽るようにして飲んでいたはずなのだが、流石に最近は自重するようにしているらしい。
シールも酒を口にする。強い癖も無く、舌触りの良いお酒だ。例え見た目がぼろくとも、国家認可の娯楽施設。良い酒を仕入れている。
ガラムは、酒を楽しむシールをマジマジと見て、愚痴るように、

「だってお前、昔全然社交的じゃなかったじゃねえか」
「そうだったかな？」
「そうだよ。いっつもヴェインとリーンとばっかりつるんでよ」

そうだっただろうか。そういえば二人と知り合ったのはあの頃からだったか。

「そういや、あいつは元気か？ ヴェインは」
「親父さんだって聴いた事くらいあるだろう？　【紅眼】は今やこの国一番のギルドだ」
「直接会ったことは無いからな。お前は会ったんだろ？」

「会ったよ。元気してた。中々ギルドの長らしくなってたさ」
「……そうか、それも信じらんねえな。昔はお前ら皆ガキだったのに」

　昔か、と、シールとガラムは同時に呟き、そして振り返る様に天井を見上げた。煤けた天井、いや、そう言う風に設計された天井を見上げて、それから暫くすると。

「……思い出さなきゃ良かった」
「……全くだ。いい思い出が少なすぎる。良く生きてたな俺ら」

　そして同時に顔を背けて、呻いた。こんな酒の場でゆっくりと思い返すには彼らの過去は過酷過ぎた。今もそこそこ過酷だが、昔ほどじゃない、と、シールは改めてそう思う。
　そして、そう思うからこそ、現在の生活は、今ある平和な日々は、シールにとって何物にも変え難い。学院長の依頼を嫌々ながらもこなしているのも、その平和を守るためだ。
　その身をもって、平和は脆く、儚く、それ故に大切なものだと、シールは知っている。
　そして努力の甲斐あって、今、シールの身辺は平和だ。未だトラブルも、学院長の依頼もきついが、まあ、それでも昔と比べたらずっと、平和だ。

「平和ね……お前がそんな事言うってのがまたな……」
「くどいね親父さん。何年も経てば、流石に子供は成長するさ」
「子供が大人にねえ……まあお前もそんな年か……じゃあよ」

　そう区切ると、ガラムはシールの顔を覗き見た。

「……何？」
「そろそろ、結婚も考えて良いんじゃねえか？」

軽くむせた。昔話をしみじみ話していたと思ったら、やたら突飛な言葉が飛び込んできた。

「……結婚って、いきなりなんだよ。大体僕が誰と結婚するの？」
「リーンとだろ？」

シールは凄く変な顔をした。

「僕と彼女はそんな関係じゃないよ」
「今は、だろ。長い付き合いじゃねえか」

シールはすこぶる変な顔をした。確かに、彼女とはかなり長い付き合いだ。そしてその間に〝そういった関係〟にならなかったと言えば嘘になる。
しかしだ、結婚という言葉が飛び込むと、途端に意識が跳びそうになる。
試しにシールは、自分がリーンと結婚する、という事を想像してみた。
彼女と挙式を挙げ、夫婦になり、家を構え、共に働き、子を授かる所を、想像、そうぞう。

「……うーん？」

やはり、全く持って現実味が無かった。想像の絵図すら浮かばない。

「何疑問符頭につけてんだよお前」
「えー、だって結婚だよ？ 全然わからない」
「普通、自分が結婚したらどうなるかくらい考えるだろう」
「……それにリーン先生だって結婚っていう概念理解してるかなあ？」
「いくらなんでもそれは無い……んじゃ、ねえ、のか、なぁ」

だいぶ怪しい、と、シールは首を傾げる。
彼女は基本、自分の仕事と学問以外は、かなり浮世離れしている。いや、流石

に結婚は知っているだろうけど、それでも自分がそうなるという事を彼女は一辺たりとも考えてはいないだろう。
　そんな彼女と結婚……いや、そもそも

「……そもそも結婚するって良い事なの？」
「あたりまえだ、結婚はいいぞ？ 信頼できるパートナーと築く愛！ 人生！」
「つい先ほど、そのパートナーにノックアウトさせられてたじゃん」
「あれも愛の賜物だ」

　言い切る辺り、ガラムの愛は本物だった。しかしそれならそれで、その喧嘩っ早い血気盛んな性格をどうにかすべきではないか、とシールは思った。
しかしどうにもこうにもシールの反応は薄く、ガラムは溜息をだした。

「全く、そんなんじゃ婚期逃すぞ？ 愛を探せ、愛を！」
「愛、ねえ？」

　ガラムは呆れたようなその言葉に、シールは首を傾げる。彼の同僚の教師達の中に、結婚している人間は何人もいる。周りから結婚の尊さと大切さを語られたのも何度かある。結婚を勧められた事もある。そして好きだと告白され、迫られたことだってある。
　だがしかし、シールはそれを受け入れた事は無い。結婚が嫌いだ、とか、まだ早い、とか、そう言う一般的な理由ではない。ただ、誰かを愛し、共に人生を歩むという行為自体が、〝わからなかった〟のだ。
　シールは、リーンとは違う意味で、そういった一般的な幸せに対して、理解が無かった。
　それは彼の歩んできたこれまでの人生の、その過酷な経験によるものだった。それと戦い続けてきた結果、何か根本的な、基本的な何かを掌から零してしまったのだ。

「……まいったなあ」

シールは自分が、平穏の中で暮らしてきた人間と比べて幾らか欠落している所があると自覚している。だから彼は必死に生きて、そして教師の立場になった時、よりいっそう学び、経験してきた。欠落部分を補えるように。彼の教え子達に、彼が失ってきた〝なにか〟を失わせないように。

しかしそれでも、時折こういった形で自分の欠落を突きつけられる

それはどうしようもなく、彼の心を荒れさせ、落ち込ませた。

「……何勝手に沈んでんだ」

「沈む話題ふったの親父さんだよ」

「結婚話したら沈むと誰が思うか」

「独身男には辛い話さ」

シールはもっともらしいことを言ってごまかすと。ガラムは唸り、

「そういうことじゃねえだろ……おい、話題変えるぞ」

「凄い切り替え方だね」

「湿っぽい酒ほどつまらねえものはねえんだよ」

そういってガラムは鼻を鳴らす。なるほど確かに、とシールは笑う。折角懐かしい顔にあったというのに、下らない気分になるのももったいない。

シールは話題を変えて、最近あった下らない馬鹿話を語ってみせて、ガラムもそれに乗って馬鹿話を披露した。

久しぶりに会った旧友らしい会話を、二人はダラダラと続けた。時折笑いを交えながら。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……飲み過ぎたな」

シールはアルコールの匂いを漂わせながら、フラフラと酒場の二階、与えられた寝室へと体を運んでいた。既に深夜だ。調子に乗ってガラムとグダグダとしゃべり、そして酒を飲み過ぎた。酒が上手くて飲みやすくて、気が付けば自分の許容限界を超えてしまっていた。

ガラムに至っては酒場のソファーで寝こけている。見事に睡眠中だ。随分と心地よさそうに眠りきっていたので、近くの毛布をかけておいた。今の季節はそこまで寒くもない。凍えることはないだろう。

「【浄化を】……む」

シールは自分の体内のアルコールを魔術で分解しようとするが、魔術も上手く使えない。こんな酔っぱらってしまっている状態で体内に作用する魔術なんて使えるわけが無い。

そんな判断もできなくなってるのか、と、シールは首を振った。

水を飲みに下に戻ろうか、と考えていると。

「あらシール。酷い顔ね」

「ああ、ケーナさん」

目の前からケーナがいた。喉でも渇いたのだろう。水差しをお盆に載せている。

そして、確かにシールの顔はかなりアルコールに汚染されて、酷い顔をしていた。我ながら醜態だと、シールは笑った。

「しょうがないね。ホント。あの馬鹿に付き合わなくても良いのに」

「いやいや、酒が美味しくてね」

「どうせガラムがどんどん酒を勧めたんでしょ？ ちゃんと断んなさいよ」

そういって、御盆に乗せてあった差し水をとって、シールに差し出した。口にすると、冷えた水の胃に落ちる感覚に、シールは息をつく。ぼやけまくっていった意識がある程度鮮明になった。

「ガラムは？」
「下のソファー、良く寝てるよ」
「そう、それじゃ、さっさと寝るんだよ。明日には王城だろ？」

　そう言うと、ケーナは階下に降りていった。ガラムの様子を見に行ったのだろう。こういうのが、愛なのだろうか。と、アルコールの靄が掛かった頭でシールは考える。
　愛、恋愛、家族愛、愛愛愛、誰かの幸せを願う事、無償の思いやり、人に許された感情。
　言葉にするとどれも嘘に思えた。シールにとってそれはそんな容易いとは思えない。彼にとって愛とは自身の欠陥であり、だからこそ何よりも崇高なものに思えてならなかった。
　しかし、考えてもどうしようもない事だという事も分かっている。そもそもこんな酔っ払った状態で考える事ではない。
　シールは頭を振って、体を解して、さて、部屋に戻るか、と、足を進めようとして、ふと、足が止まった。
　立ち止まった場所は丁度リーンの泊まる部屋の前だった。それ以外別に他意はないのだが。しかしそれがガラムとの馬鹿話の影響なのか、頭がぐるぐる回るくらいに酔ってしまったからなのか、シールはそのまま、特に何の拍子も気配も無く、するりと部屋に入り、ぱたんと扉を閉めた。

「……うん」

　そこそこの広さの部屋の中、当然暗く、奥のベットではリーンが眠っていた。薄手の寝巻きに身を包む姿が眼に映る。
　シールは静かにリーンへと歩み寄った。足音を一切立てず、素早く。

　……いやぁ、犯罪臭しかしない

　思わず言葉にせず、呻く。これでは完全に夜這いだ。いや、そもそもそうする

気満々じゃないか。と、他人事のようにシールは思った。
　ともかく彼女の前まで近寄った。そしてリーンを眺めてみる。美女だ、と即言い切れる程度には彼女は綺麗だった。白い素肌の良く見える寝巻き姿は艶かしく、怖気にすら似た感覚が体に走った。

「ふむ」

　背中に触れてみた。掌から熱が伝わる。そのまま撫でてみる。柔らかな肌の感触だった。

「……ん」

　僅かにリーンが身じろいだが、シールは構わずベットに乗りあがり、背中を撫で、その蒼い髪に触れた。指の間を滑るように艶やかだ。良く見ようと顔に近づけてみると花の香りがする。石鹸の香りだろうか。
　そのまま唇で髪に触り、そこから降って首筋へと触れた。呼吸のリズムで鼓動する喉を指で撫でる。寝巻きの隙間に指を入れて柔らかい肌に指を滑らす。そのまま上へと指を伸ばしていく、と、

「……何してるんですか」

　其処に声が響いた。
　シールが顔を上げると、半目で此方を睨み付けているリーンと見事に目が合った。とてつもなく侮蔑に満ち満ちた視線を前に、シールは暫く考えるように唸り、そして言葉を選んで、

「いやあ、ちょっとリーン先生の観察を」
「最低ですね」
「流石に否定しません」

彼女の言葉に素直に同意しつつも、シールはリーンから離れようとはしなかった。
耳を食み、そのまま唇に触れていく。指を伸ばして乳房を掠め、太股の合間に足を入れる。全身をくまなく、掠めるように触れていく。リーンは全く抵抗しない。抵抗するのが面倒なのだろう、とシールは感じていた。少し強く触れてみると、僅かにむずがるように体をくねらせた。
子供のような反応だ。そう言うところは可愛らしい。触れれば触れるほど綺麗だとも思う。
そう考えてみれば、リーンに対しては色々な想いがある。感情がある。
だが、ならば愛はあるのだろうか、と、考えると、

「……やっぱ、よくわからないな」
「何がですか」
「リーン先生、愛って何でしょう？」
「気持ち悪いです」
「これまた否定しません」

シールは素直にうなづいた。
というか、夜中に女性の寝室に侵入して、女性の体を弄ぶ最低男の台詞ではない。シールのやってる事は十二分に犯罪である。リーンが声を上げればシールは問答無用で犯罪者になる。

「いきなり何を言い出してんですか」
「いや、ガラムが結婚しろと五月蝿くて」
「すれば良いじゃないですか」
「素っ気無い反応ですね」
「興味ないです」

シールも予想していた答えが返ってきた。それくらいは分かるくらいの長い付き合いだ。

とはいえ、少し腹が立つので頬をつねってみる。それもされるがまま。頬を引っ張られながら、眠たそうな顔でこっちをじっと見ている。
　本当に、こういう人だ。昔から変わらず。しかし、だからこそ、
「……」
「なんです？」
「リーン先生、エロい事しません？」

　どストレートな誘いに対して、リーンは首を僅かに傾けて、

「眠いからいやです」
「そうですか」

　とことんまでな返事に対して、シールもあっさり頷いて、立ち上がる。

「それじゃあまた明日。おやすみなさい、リーン先生」
「おやすみなさい」

　まるで何事も無かったように、夜の挨拶を交わして、シールは部屋を出て行った。
　再び廊下に出たシールは、ゆっくりと、大きな欠伸をして、

「……、うん、眠いな」

　そのまま自分の部屋へと入っていった。

次に入れるはずだった話を突っ込んで文章を多めにしてみました
その内容がこれってどうなんだろうと小一時間自問自答

第六十八話 牢獄城の朝

【牢獄城壁】の朝は遅い。
　というのも単純に、朝日が城壁に遮られて、その光の恩恵を受けるのが遅くなるのだ。まあ別に、城壁内で農業を行っている所なんてあるわけなく、実際そこまで困難な問題というわけでもないのだが。
「……見事な二日酔いだな。これは」
　そんな遅い朝に、洗面所で、シールは鏡の前で呻いた。鏡に移る自分の顔はむくみ、色は青く、目は窪んでいる。昨日、魔術による体内調整もせずにそのまま寝た為、結果、こんな酷い事になっている。
　酷すぎる顔だ、とシールは顔を洗い、マッサージするように揉んでいく。今日は王城に行くというのに、こんな顔で顔を出すわけには行かない。せめて酒の気だけでも抜ききらなければならない。
　いつもなら、例え祝いの酒の席でも自身の許容範囲以上の酒は飲まないように自重している。酒を飲みすぎると、自分の場合、多少、そう多少、理性が飛ぶのだ。
「……んー、やってしまった」
　シールは自分の行動を振り返り、呻いた。酔いに任せて女性を夜這いなどと、聖職者である自分がやるというのはどうなんだろう。というか、まあ、どうしようもないという方があってる。死んだほうが良いんじゃないかな僕、とシールはばかばかしい笑いを零した。
　でもやっぱりやわらかかったよねー
　と、一瞬昨日の事を思い出そうとする酔いと煩悩に飲まれまくった頭をぶん殴り、シールは呻いた。そしてやはり土下座の一つでもしたほうがいいのではないだろうか、と、そんな遠い目をしている、と
「……ねむい」

そのリーンがゆらりと、非常に眠たそうな顔でフラフラと入ってきた。シールは一瞬どう声をかけるか躊躇し、しかし一度息をつくと、可能な限り冷静に、

「……リーン先生、おはようございます」
「……どいて」
「……大丈夫ですか？ 起きてますか？」

　何処か幽鬼のようなあしどりで、フラフラフラフラと洗面台の前に立った。立って、数秒、その場で停止した。そして停止したかと思うと、
「っおぉ?!」
　バタン、とぶっ倒れたので、シールが支えた。寝たらしい。立ったまま寝たらしい。
「……この人は」
　色々と言いたい事を飲み込んで、溜息をついた。

　洗面所で立ち寝をかましたリーンを、シールは何とか起こし、ついでに顔を洗わせ朝の身支度を整えさせ、それから一階の酒場に下りていった。
　下では既にケーナとガラムが二人揃って朝食の準備を終えていた。ガラムの顔色が若干悪いが、特に苦しげなそぶりも見せないので、平気なのだろう。
　かくして四人は一つの大きなテーブルに着き、
「いただきます」
　食物への感謝をささげ、朝食が始まった。

「それで、今日は王城で授賞式なのかい？」
「いいや、とりあえずは挨拶回り。授賞式は明日」
「……」
「リーン先生、寝ないでください。起きて起きて」

　パンとサラダ、そしてハムを用意されていたシンプルなサンドイッチだった。

四人で仲良く話をしながら食事をする光景は何処か家族のようにも見えた。無論そうではないのだが、平和な光景だった。
「面倒だなあ、ちゃっちゃと終わらせりゃ良いのに」
「そうはいかないのさ。国の式典なんだから」
　ガラムの意見はシール自身も同意するが、やはり王国の式典は、例えどれだけ無駄に思えるようなことでも威厳を保たなければならない。国の象徴という役目も負っている以上はだ。
　そう思っていると、今度はケーナが口を開く。
「だったらこれから王城かい？ 服とか用意してんの？」
「用意してあるよ。リーン先生のもね」
　既に物質封印は解き、手荷物は部屋に出してある。精々二日三日分の宿泊用具なので、大した量の衣服は無いが、式服等も用意してある。
　それを聞くとケーナは安心したように頷き、
「じゃああとで着付けてあげるから、見せてごらん」
「別に、式典当日じゃないんだから、見てもらわなくてもいいさ」
　ただでさえその当日にはやたらと着るのが面倒な、ややこしい式服を着なければならないのだ。今日まで神経を使うとなると気が滅入る。そう、シールは思っていたのだ。が、
「駄目だよ。王にも謁見するんだろう」
　ケーナは譲らない。そういった面では彼女は頑なだ。オカン臭いとも言うが。そう言うところはシールよりも年長者であり、面倒な所でもあった。
　シールは溜息を紛らわすようにフォークを目の前のハムを突付いた。齧ると、風味のよいコショウの香りが美味しかった。そして話題を変えるように、
「王は元気してるかな？」
「客に来る騎士達の話じゃ元気らしいがな。相変わらず景気の悪い顔してるみてえだが」
　ガラムは呆れるように言う。彼自身は王の顔を見る機会はあまり無いが、酒場の店主をやっているとそういった王城内の風評も騎士たちや使用人たちからよく耳にするのだろう。
「相変わらずかぁ、気が小さいんだよね。あの人」

「もっと堂々としてりゃ、馬鹿にする奴らも減るってのに……リーン、傾いてるよ」
　シールはリーンを片手で支えながら、その話題の国王のことを考えていた。
　ガイディア国国王、彼がシール達が今いる牢獄城を造った男である。その徹底的なまでの守衛体制、それは正しく作り手の気質を表していた。現国王の性格は、一言で言えば臆病なのだ。
　その臆病さから、過去にはどうしようもない間違いを犯したことがある。が、それを考える必要は無い。少なくとも今は、彼は賢明なる王なのだから。

「ま、こんなご時世、用心に越した事は無いさ」

　シールはそういって、パンにサラダを挟み、噛り付いた。そしてそれから先は、四人とも会話を止め朝のエネルギーを注ぎ込む作業に没頭を始めた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「リーン先生、目は覚めていますか？」
「……はい」
　そういいつつも若干空ろなリーンの横顔を心配げに見つめながら、シールは彼女を引き連れて城壁内の中央道を歩いていく。朝食を終え、準備を整え、いよいよもって二人は王城へと足を運んでいた。
　といってもまだ今日は挨拶回りと、王への参拝、式典の準備でしかない。故に二人の服装も学院で教鞭をとる時の制服で、黙っていれば正装にも見える代物なので代用している。

「ま、新品用意していて助かりましたね」
「料金も学院持ちです」
「いやあ、役得ですねえ」

やはり、たかが挨拶回りでそこまで神経を使いたくない、というのが二人の心情だった。
　路地の彼方此方には式典の準備のためか、やけに綺麗に片付いている。国民も交えた祭典でもないため、派手さはまるで無い。内々の式典なのだ。
　時折現れる使用人たちはパタパタと荷物を城に運び、国王直属の騎士達はその鎧を厳かな装飾で彩られた式典専用の、身を守るでなく姿を見せるための鎧を装備し、戦列し、掛け声と共に式典の準備を繰り返している。
　普通の祭りともまた違う、何処か少し重い雰囲気が、辺りを包んでいた。
　そしてやがて二人の向かう先に、何処か無骨な、様式美というよりも、機能に特化したような、要塞のような城が見えてきた。まさしく【牢獄城】の名に相応しいともいえるような風貌が。

「相変わらず地味な城だなあ。観光向きじゃないですよね」
「別に、観光に行くわけじゃないでしょう」
「せめて楽しめなきゃ損でしょう」

　普通、王城というのはもう少し派手なものだが、そもそも城壁に囲われているこの王城。国外からの客は愚か、国民からもあまり見えないような状況で、それ故にひたすら機能に特化する作りになっているのだ
　無駄が無い、というと非常に優れたようにも思えるが、しかし、それでもやはりもうちょっとカッコいいものでもないんじゃないだろうか、と、シールは頬をかく。
　ともあれ、二人はとうとう、城の前までたどり着いてしまった。

「リーン先生、心の準備はできましたか？」
「魔道具は全種類そろえてきました」
「それ、対古の魔獣用じゃないですか。城に攻め込む気ですか」

　取り出した魔道具はシールがひとまずしまわせてて、二人は【牢獄城】へと足を向けた。

第六十九話 城内

　シールとリーン、二人は【牢獄城】の正門の前までたどり着いた。
　流石に一国のお城の正門だけあって、頑強そうで、中々の威圧感がある門だった。
　魔術的な加工も成された頑強な鉄の門、左右には全身を鎧で覆い、身の丈はある槍を構えた騎士たちが門の前に立つ。見事な守衛が敷かれていた。シール達が更に歩み寄ると、騎士が槍を交差させ、二人の道を塞ぐ。そして兜越しに声を発す。

「何用か」
「王の招待を受けて」

　何処かピリピリとした表情の若い騎士に、学院長から再び渡された重厚感のある招待状を見せる。一瞬不審気な表情をしていた騎士達は、その手紙を見た瞬間、表情を強張らせ。
「で、では貴方達が！」
　そう言って言葉を詰まらせ、瞬時に槍は退けられた。そして門に合図が送られ、重たい扉が開いていく。

「さて、では行きましょうか」
「……」
「人の背中押さないでください。ってか盾にしないで」

　リーンに背中を押され、まるで盾のように扱われていた。シールは苦い笑みを浮かべ門をくぐる。

見えてきた城内の光景は、外から見る無骨な風貌と比べて随分と煌びやかだった。彼方此方に色彩豊かな絵画や花、彫刻が飾られていた。城内の警備を任されている騎士達の鎧も、派手で、見栄えが重視されていた。
　これは普段の【牢獄城】の光景ではない。式典準備の為の飾り付けだ。

「ま、以前ほど悪趣味じゃなくなりましたね」

　シールは少しほっとしたように息をついた。
　普段のこの城の内装は、よく言えば地味な、悪く言えば無骨すぎる風貌をしていた。昔はその寒々しい気配に嫌な思いをしていたのだが、今はそれが無い。

「というか今までのが無骨すぎるんですよね」
「この前は寝室に内乱の痕跡がをカーペットで隠されてました」
「自分には金をかけないにも程がありますよね、ホント」

　国王なら、もう少し自分を着飾る努力もして欲しい。と、シールは口に出さずに思う。確かに自分を着飾ることばかりに執着する王よりはましだが、見目の良し悪しを気にしなさ過ぎるのは、それはそれで問題だ。
　そんな事を思っていると、前から騎士が一人、シール達へと歩いてきた。そして二人の前にたどり着くと、左胸に拳をやり頭を軽く下げた。それは騎士の礼だった。顔を上げたその騎士は、なれた口調で話しかけてきた。

「ようこそいらっしゃいました。応接間へと案内します」

　兜と鎧でその容姿は見えないものの、声はそう若くも無い。ひょっとしたら自分達よりも年上かもしれない。と、シールは思った。
　さて、案内、と騎士の彼は言ったものの、一応、シールもリーンもこの城の造りは知っている。昔はそれこそ自室に戻るよりもこの城に入っていた頻度のほうが多かったくらいなのだから。
　とはいえ、わざわざ案内を申し出てくれた厚意を無碍にする必要も無い。

「それじゃあよろしくお願いするよ」
　そう言うと、騎士はもう一度礼をすると、先導を始めた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

【牢獄城】は非常に堅実な造りをしている。つまり見栄えや権威を重視しない、防衛力の高い造りになっている。徹底した城壁による防衛は言わずもがな、この城自体もそれと同様だ。高度な魔術による結界と、精鋭の騎士達による厳重な警備。城が小さいのも、守備範囲を狭め、より守護を充実させる為のものだ。
　更に言えば、城の通路想像以上に複雑なのだ。それは単純に城を登るのも苦労する程だ。連続して階段が備わっている事は無く、一々複雑な通路を通らなければならない。進入されても容易く王の下にたどり着けないようにと考えられたものだ。
　城内にいる騎士達は有事の際は、すぐさま行きたい場所に参上できるよう隠し通路を把握しているのだが、普段はそれが開放されることも無い。
　詰まる所を言えば、一々移動するのが面倒なのだ。と、シールは内心で愚痴った。
「申し訳ありません。複雑なつくりで」
　すると、前を歩く騎士がどこか笑いを堪えるような声で言った。顔に出てしまっていたのか、と、シールが頬を掻いた。だが、ふと背後から黒々とした気配を感じ、後ろを見ると、
「……なんてー顔してるんですか」
　リーンがものすごく不機嫌そうな顔で淀んだオーラを発していた。なんというか、欲しいものを買ってもらえなかった子供というか、そんな感じの不機嫌さだった。
　シールは剣呑な目つきになったリーンの頬をつねった。そしてそのまま前に振り返り、
「君が謝る事じゃないさ。これは王を守るために大切な事だからね」
「いえ、私達も時々この城にうんざりする事はあります。守護に優れているのは確かなのですが、平時では面倒が過ぎる」

前を歩く騎士、年は三〇を越えたあたりだろうか。何と無しに気さくそうな人だ、と、シールは思った。
「まあ、こんな所に毎日いたら大変だろうね」
「王城勤めですから、この程度の苦労も当然ですが」
王の近辺を警護するのは騎士の中でも優秀な実力と結果を残した、選ばれた者達だけだ。王を御守りする栄誉に授かる。それだけでも此処にいる騎士達は満足するだろう。此処で働く事自体が、騎士の誉れと言う事なのだ。
とはいえ、やはりそれでも、ここまで頑強で複雑な王城勤めはご免だ、とシールは思う。内部に進むほど通路の区別が付かなくなり、自分が今どこにいるのかも分からなくなるのだ。子供のころはしょっちゅう迷子になっていた。
そういうと、騎士の男は「わかります」と、苦笑した。そして言葉を続けて、
「ですが、此処に務めていて良い事もありました」
「例えば？」
「貴方方に会えたことですよ」

そう言って振り返る彼の、兜に隠れた瞳には、僅かに尊敬の光も宿っていた。
「大隊長から、何度も話を聞かされていましたから。貴方方の事は」
「それはまた、一体どんな話をしていたのか気になるね。ホント」
「いやいや、大隊長のおっしゃってた通りの方達だと安心しました」
「何言ってたんだ、あの人は」
へらへら笑ってる白髪交じりの男と、その男を盾に隠れてる妙な美女の二人。この光景を見て聞いた通りと返答できる彼が聞いた話と言うのはとても気になる。ぺらぺらとものを話す性格じゃなかったはずなんだけどな。あの人。
「ははは、しかし、お二人と、ヴェイン殿の事を話す時は、大隊長も楽しそうですよ」
「昔話ばかりするのは老いた証拠だって言っておいてよ」
「誰が老いたって？」

と、騎士との会話を続ける中、背後から聞き覚えのある声をかけられた。
「お？」

振り返ると、其処には知った顔の騎士が二人。一人は昨日、酒場での乱闘にいた騎士隊長、そしてもう一人は、騎士隊長であるダルシア。そして彼よりも更に装飾の加えられた鎧を装備した壮年の男。厳格であろう顔を笑みで崩し、顎鬚を撫でている。
「噂すればだね」
　案内をした騎士は全くです、と苦笑した。このダルシアと共にいるこの男の名はイングラム。騎士達にも慕われ、国王にも信頼を置かれている、この国の騎士大隊長を勤めている男である。
「久しぶりだな。二人とも」
　白髪の混じった黒髪、苦労を重ねたのか深い皺を濃い色の顔に刻み、顎には同じ色の髭を顎に蓄えている。シールとリーン、二人を何処か優しげに見つめていた。シールは笑い、手を差し出した。
「やあ久しぶり、大隊長殿」
「全くだ。英雄殿」
　二人はそう言って握手を交わし、懐かしむように笑みを浮かべた。
「リーンも、元気していたかな」
「はい」
　素直にリーンも頷く。が、シールの背から出ようとしないあたり、相変わらずだった。そんな様子を見てイングラムは改めて笑う。その笑い方は何処か過去を懐かしむようでもあった。
　残されたダルシアは、暫し、そんな三人の会話を観察するように見つめていた。が、シールが彼の視線に気が付くと、静かに頭を下げた。
「では、私はこれで」
「ああ、そうだ。後で騎士達を闘技場に集めておけ」
「了解しました」
　淡々とした対話を終え、ダルシアは去っていった。此方に意識しているのは目に見えていたが、シールたちに何か言葉を投げかける事も無かった。
　ダルシアの姿が見えなくなると、イングラムは僅かに低めの声で、
「ダルシアとやらかしたらしいな？」
　そう呟いた。大隊長である以上、部下の起こした事件を把握しているのも当然

の事だった。シールはその問い手を振り、
「何もしてないよ。〝僕ら〟はね」
「ああ、ガラムだったな。全く、あの馬鹿め」
　イングラムは顰めた顔で首をふり、頭を掻く。言葉には軽い怒りと呆れを滲ませている。ガラムと彼はシール達と同じく昔からの知り合いだが、二人はあまり〝ソリ〟が合わないでいた。こういった様子も、過去、何度も見てきたものだ。
「幾つになっても落ち着かない奴だよ」
「あの人がおとなしくなったら世も末だよ」
　それもそうだな、とイングラムは笑う。だが、案内役に残された騎士を見て、まだ案内の途中か、と、頭を掻くと、
「王との話が終わったら、付き合って欲しい事があるんだが」
「厄介ごとは勘弁だよ」
「何、部下どもの訓練さ」
　勘弁してくれ。とシールは呻くが、イングラムは軽く手を振って去っていった。どうやら勝手に了承したものと思われたらしい。やれやれ、と、シールはため息をついた。
「では、こちらへ」
　苦笑気味の騎士の促しに応じ、リーンを引っ張りながら、シールは騎士に先導され応接間へと向かった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　イングラムと別れ、それから暫く歩き続けた。途中、奇怪な骨董物に目を奪われたり、使用人たちに変な目で見られたり、リーンの機嫌が最悪になりつつあったりと、紆余曲折あったものの、ようやく応接間までたどり着いた。
「では、私はこれで」
　案内の騎士が去り、シールとリーンは二人応接間に残された。
　王の客を迎える応接間だけあって、部屋は広く、他の部屋と比べても豪華だった。二人はそんな部屋の異様に柔らかいソファーに並び、座っていた。そこに腰掛ける二人は、

「……なんなんでしょうね、この柔らかさ。何が入ってるんでしょうか？」

「……」

「寝ないでください、心地よいからといって寝ないでくださいリーン先生」

　そんな馬鹿なやりとりをしていた。その時、部屋がノックされ、王の到着を告げる騎士の声が響いた。シールとリーンは立ち上がり、王を出迎える姿勢を作った。

そして、扉がゆっくりと開かれ、一人の男が顔を見せる。

「シールベルト。王の招待より参上しました」

「リーン・エリクス。同じく、王の招待より参上しました」

二人は男に向かって深くと頭を下げた。入ってきた男はゆっくりと頷き、

「良く来てくれた。わが国の英雄達よ」

　ガイディア国国王、オウズ・ガラン・ガイディア。この国の頂点に立つ男。その姿は、王国の王座には到底似合いそうにも無い、背丈の小さな老人だった。

ソロモンよ！　私は帰ってきた!!!

……いや、お久しぶりです。二ヶ月以上の更新停滞申し訳ない。

現在、不況の荒波に飲まれてんやわんやな状況が続き、更新に手がつけられない状況でした。

それでもちまちま書き続けて、ようやくある程度区切りの良い所までまとまったので更新を暫くの間再開します。

……早く楽になりたいなーホント

第七十話 ガイディア王

　かつて、ガイディア国の前王は、五人の子供を残してこの世を去った。
　この五人のうち二人は病で死に、一人は馬車に跳ねられて死に、一人は食べ物にあたって死んだ。どれも策謀や暗殺が原因といわれているが、どれも誰が殺したのか、はっきりしないままに闇に葬られた。
　結果、残されたのが現国王、末っ子のオウズ・ガラン・ガイディアだった。
　即位した若い王、右も左も分からない、言葉に力も無い子供の王、それは彼を囲っていた貴族達にとって、とても都合の良い王だった。貴族達によって、ガイディア王は一瞬にして傀儡と化してしまった。
　貴族達は彼の地位を、権力を利用し、暴走した。私服を蓄え民から略奪し、法を都合よく書き換えて、高みでふんぞり返って国民を奴隷のように使役した。他国との争いや食料の貧困、あらゆる悪的状況が相まって、最早泥沼という言葉が相応しい状況と化した。
　後に暗黒時代と呼ばれる時代だった。
　だが、こんな状況になる前、ただの操り人形として扱われていた国王、オウズは決して、それまでに何もしてこなかったわけではない。彼は聡明だった。寡黙で、小心者で、しかしそれ以上に時勢を見抜く洞察力と判断力があったのだ。
　彼は彼なりに国を救うために幾つも策を考えていた。
　しかしそれを口にしても、権力を掌握した貴族たちは見向きしなかった。
「人形は人形らしく黙っていろ」
　それが周囲の人間の、共通の認識だった。誰も、彼の意見に耳を貸すことも無い。話を聞いた所で自分の利益になる事はないのだから、聞く訳が無かった。
　策はあっても、それに従う人がいなければ形になることは無い。彼はやがて考えを口にすることを止めた。そうする気力を萎えさせてしまった。彼がどれだけ声を上げても、聞き届けてくれる人はいない。理解を示す人はいない。ならばそ

れに意味など無い。
　そうして彼は世界に背を向けた。自身の世界に閉じこもり、誰とも口を利かなくなった。
　貴族はより増長し、暴走した。止める人間は誰もいなくなり、世界はより混迷を極めた。希望の見えない未来に人々は憂い、絶望は加速した。

　時は過ぎる。いよいよ誰もがこの国をあきらめ、放棄しようとした、その時だった。
【英雄】と呼ばれる、誰もが望み、しかし現れる事の無かった存在が、現れたのは。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……今でも思い出す。彼が私を自己の檻から引っ張りあげてくれたのを」
　オウズ・ガラン・ガイディアは、その老いた体を震わせて、昔を思い出すように静かに頷いた。老王の語る彼とは、キースの事だ。キースが救った愚王こそ彼であり、今国を救う賢王として働き、キース達平民の魔術師達を援助しているのも彼だった。
「彼には感謝してもしきれない」
　キースは彼を救った。例えそこに何者の意図があろうとも、キースは彼を救ったのだ。その事実は決して変わらない。故に、賢王は彼に感謝を惜しまない。
　キース自身から言わせれば、美化しすぎていると苦い笑いを零すようなものなのだが、しかしそれでも救われたほうからすれば、感謝しきれないものなのだろう。と、シールは思った。
　王の話を聞きつつ、シールは給仕の運んできたお茶を口にする。流石に国王の口に運ばれる飲み物なだけあって、味も香りも上品に纏まっていた。
「彼は、キース達は元気にしているかね」
「ええ、先日も学院に起こった問題を解決へと導いてくれました」
　正確にはリーンや、その仲間達の協力あってのものだが、まあ、彼が中心となったといってもいいだろう。そう言うとガイディア王は、ほう、と、目を細め

笑った。
　そういう様子はまるで孫の活躍を喜ぶ爺のようだ、とシールは思った。無論、口にする事はしないが。国王にも息子も娘もいるが、過去彼が荒れていた時代に、貴族達に宛がわれた女に、生ませた子供達だ。強い愛情は無かった。その孫達にも。
　王の年齢を考えれば、既に王を引退して息子に後を任せてもよい時期のはずだ。だが静かにそれをしないのは、彼の子供達は跡を継ぐほどの技量が無く、逆に現王が真に優秀だからだ。王自身、過去の自身の怠慢を償うため、精力的に働いている。
　それが、跡継ぎとなる息子達には不満を抱かせ不和を呼んでいるのだが、それは今は考えるべきではないだろう、と、シールは頭を振った。その点においても、王は既に考えを巡らせ、争いが起こらぬようにと心身警護には力を入れている。
　どうあれ、自分が考えて仕方の無い、余計な事だ。と、シールは首を振った。
　と、シールが沈黙していると、その合い間を縫うように、先ほどまで気だるげにしていたリーンが口を開いた。
「最近の外交はどうなっているのでしょう」
「アダリアもラークスも自分の内政を整えるのに重視している。好戦的になる理由も今は無い。此方の内政も機能が回復しつつある。暫くの間は協力体制が崩れる事はないだろう」
　そう聴くと、リーンは静かに頷き、息をついた。どこか安心したように聞こえるその吐息に、王は目を細めた。
「不安かね。この国と、他国の行く末が」
「過去の例がありますから」
　そう言って彼女が王に向ける視線は鋭く、辛辣ですらあった。王の過去を咎めるようなそれは、不遜ともとれる態度だった。だが王は、それを無礼とは断じない。それを正面から受け入れて、老いた、しかし揺らぎ無い瞳で彼女と向き合う。
「以前のような事にはさせぬ。決して」
「そう願います」

リーンは淡々とそう言うと、カップに口をつけた。

シールはシールなりに事情があって、今此処にいる。そしてそれはリーンも同じだ。彼女は彼女なりの事情が、過去があって、経過があって、だからこそ今此処にいるのだ。

だから、シールも、彼女にも王にも何も言わなかった。

「老い先短い身だ。出来る事は少ないが、残る人生の全てを国民に捧げるつもりだ」

「王は既に十二分にこのガイディア国への貢献を果たしています」

心底からの言葉だ。賢王として覚醒してからというものの、彼の働きぶりは歴史上の国王を辿っても並ぶものはいない。高い知性があり、先見の明があり、民への理解も、貴族達への配慮も知っている。

過去、彼が持っていなかった決断力や指導力も、キースとの過去や、学院長達の援助によって補填してきた。

だからこそ、この国は過去の崩壊から救われているのだ。

しかし、その当人は決して、自分の功績を認めようとはしない。王は首を横に振る。

「私は怠慢という罪を犯した。償わなければならない」

そう言うのは分かっていた。故に、

「一人で背負わずとも、我々も尽力します」

シールは胸に手を当て、そう告げた。同じくリーンも、控えめだが確かに頷く。

「ありがとう」

そう言い微笑む姿は、やはり、王などではなく、一人の年老いた老人であった。

勿論、そんな事は言わないが。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

それから暫く、国王とのたわいの無い会話は続いた。国王という立場上、市民の、日常の出来事なんていうたわいの無い話に飢えていたようで、シールの話す

会話を彼は楽しげでいたようだった。
　しかし何時までも話を続けられるほど、王は自由ではない。ましてや今日は単なる挨拶だ。王には仕事があり、シール達は挨拶を終えてはいない。暫くすると国王の側近が声をかけ、談話は終了した。
「式典では二人が主役だ。よろしく頼む」
「努力します」
　シールとリーンは頭を下げ、王を見送った。
　王が去ってから暫くして、シールは軽い緊張を解すように体を伸ばし、大きく息を吐いた。流石に、例え既に何度か面識があろうと、国王の前でリラックスしきれるほど彼の神経は図太くない。
「まあ、元気そうで良かった。流石に年だから」
「そうですか」
　リーンの反応は、何時も以上に淡々としていた。何処か冷めた、冷め切った声がシールの耳を撫でた。シールはやれやれ、と顔を振り、
「今も国王は、〝国〟は信用できないですか？」
「王は信頼します。ですが、〝国〟は信頼していません」
リーンは冷酷な瞳をシールに向けた。無情というほか無いその顔を向けられたシールは、僕にそんな顔されても困るんだけど、と苦い顔をした。
「大体、それは貴方も同じでしょう」
「ま、そうなんですけどね」
　シールは頭を掻いた。彼自身、決してこの〝国〟に対して好感を持っているわけではない。むしろ、過去の経験から国家という組織のあり方を侮蔑している節がある。昔はそれこそ心から敵意と嫌悪を抱いていた。
　しかし今はそこまでの嫌悪は抱いていない。この国のあり方も、国王に対してもだ。ただ、それは別に大人になったとか、心が成長したとかいうわけではない。単純に、何かに無意味に敵意を抱くのも悪意を抱くのも、疲れてしまったのだ。
　だから、今尚『国』に嫌悪感を抱くリーンの考えは真っ当だ。
　彼女の経験は、彼女の心を傷つけるに足るほど、邪悪で、陰湿だったのだから。

「でも、だからといって、そう言う顔はしないでください」
　むにっと頬を摘んでも抵抗せず、リーンはじっとしていた。
　彼女自身も、流石にそこら辺は自覚があるのだろう。別に彼女とて、好きで過去を引きずっているわけではないのだ。そして、王への協力、その思いもまた嘘ではないのだから。
「さ、挨拶回りを続けましょうか」
　シールはそう笑いかけて、彼女の手を取り、共に歩みを進めた。

第七十一話 シールと国王直属騎士団

　牢獄城に存在する騎士の鍛錬所は、王城から少し歩いた所にある、古い闘技場である。過去は、奴隷や魔物を戦わせる残虐な娯楽が行われていた。現在ではそれも廃止され、年に一度ある剣術大会を除けば、騎士達の訓練所として利用されている。
　その風貌は、かつて華やかだったという名残が見えるものの、時の流れと共に風化していた。年に一度しか、公に開かれない闘技場は、最低限の整備しかなされていない。牢獄城と同じく無骨な有様に成り果てていた。
　そんな闘技場の場で騎士が並んでいた。城内への護衛やその他に必要な人員除いた全ての騎士達が、その場に並び立っている。光景としてみると、何処か荘厳でもあった。
　そして、騎士達の前に、二人の人間が現れた。騎士大隊長イングラム、そしてシールだ。
「なんだってこんな事を……」
「ま、そういうなよ。お国のためさ」
　騎士大隊長、イングラムの笑みに、シールは苦笑いを余儀なくされた。王へ挨拶も終え、城内での知人たち、過去世話になった人々への顔見せを続けていたシールとリーンは、途中、各々面倒な相手に鉢合わせ、別の場所へと連行されてしまっていたのだ。
　リーンは城内の魔道研究施設。そしてシールは此処だ。
「お前は教師になったんだから、人に教えるのは得意なのだろう？」
「僕は、ごつい騎士達へのものの数え方を身に着けた覚えはないよ」
「似たようなものだ」
「何処がだよ」
　武術指南など、子供の頃受けたことはあるが、した事がない。最近エレナに似

たような事はしているが、あれは基本技術だ。今回の相手は熟練の騎士達だ。技の錬度が違う。そんな彼らにどんな指導をするべきかなんて知るわけが無い。
　だがそんなシールの不安をまるで無視して、イングラムは揃い並んだ騎士達へと顔を向け、
「さて、揃ったな。お前ら」
　騎士達は改めて姿勢を正した。イングラムはよし、と頷き、
「ダルシアから話は聞いているな。今日は実践を想定した訓練を行う。そしてその為の講師がコイツだ。今日、お前らをしごいてくれる男だ」
　シールは溜息をついて、目の前にいる騎士達を見た。この国を守る守護者として君臨する彼らは、イングラムのその台詞に対して、真面目にシールへと頭を下げていた。だが、兜の奥からシールの顔を覗く目は、明らかに訝しげな風に歪んでいた。
　それはそうだろうとシールは思う。見た目二〇代、飄々とした表情のほそっちょろい若造が、幾人もの騎士達の中から幾度もふるいにかけられ、真の実力者として国王の守護を任された近衛兵たちを、わざわざ「ご教授」してくれるというのだ。例え騎士大隊長の言葉だろうと、馬鹿馬鹿しいと思うのが普通だろう。
　騎士達にはシールが今回の式典の〝英雄〟である事は伝えられていない。が、勿論シールの正体を察している者、知っている者もいる。ただそれでもシールへの不審を拭いさる事が出来る者は少なかった。
　そんな気配を察してか、イングラムは僅かに嘲弄するような声色で、
「この男が本気を出せば、傷一つつけられずお前らは敗北する」
　騎士達を煽り立てるように、イングラムはそんな言葉を口にする。勘弁してくれ、とシールは言おうとしたが、それよりも先にイングラムの口は回る。
「恐らく束になってもかないやしないだろう。腑抜けたお前らじゃあな」
　騎士達の表情は、此方への不審から、プライドを傷つけられた怒りに変わっていく。「そうまでいうのならやってみようじゃないか、コラ」という、そんな目で、シールをじっと見つめて、否、睨みつけている。
　いやあホント、勘弁してほしいなあ……。
「訓練内容は単純なこの男との決闘。殺す事と、大怪我をさせること以外は禁じない。とにかくコイツが倒れた瞬間訓練は終わる」

それはつまり、シール対ここにいる騎士全員、という事になる。それを聞き、騎士達は更に闘志を滾らせた。自分達が軽んじられていると思っているのだろう。実際、イングラムの物言いはそんなニュアンスを含んでいた。
そうして十分に闘志が盛り上がった所で、イングラムは満足げに頷き、
「というわけで、シール、頼むぞ」
「ここまで全力で煽っといて最後にぶんなげってどうなの？」
何だか前もこんな事された気がする。こういうイジメが流行っているのだろうか。
「……やれやれ」
一応思い返す。イングラムがこんな馬鹿な真似をさせる理由を。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「緊張感がない？」
イングラムに拉致され、闘技場へと連れていかれれる途中、イングラムからこんな話を聞かされていた。シールの問いに頷いたイングラムは、
「騎士達の中で緊張が緩んでる。国内が安定し、国外の脅威が収まり、安全になりつつある今、騎士全体の士気が、緊張が失われている」
「過度の緊張からの開放は、悪い事とは思わないけど」
安全である事、安寧の日々がある事は人から緊張を奪う。だがそもそも安寧の日々において、過度の緊張は毒にしかならない。無論、国を、国王を守護すべき騎士に緊張が欠落するなんてことはあってはならないが、しかしその程度ならイングラム自身が強く言ってやればそれで済む。わざわざシール自身が出張る必要など無いはずだ。
その筈なのだが、
「それがそうもいかんのだ」
イングラムは首を横に振る。表情は苦虫を噛み潰したように渋いものだ。仮にも騎士団長までのし上がった男がそんな表情をする理由、シールはそれを思い浮かべ、

「物騒な気配でもあるの？」
「ある」
　その返答は、最も望ましくないものだった。
「最近発生してる古代の魔物の封印開放。最近その原因を突き止めたんだ」
「原因ね」
　ある意味予想も出来ているが、一応聞いておこう。
「で、何が原因だったの？」
「ああ……謎の組織の暗躍だった」
　なぞのそしき、と声にならない声でシールは口にした。なんだろう。その響き。真面目な話の筈なのに、肩から力が抜けていく。
「最近の事件から古い封印術の警護を用意していたんだが、そこに襲撃があってな」
「襲撃ね。どんな奴だった？」
「全員統一して奇妙な衣装を着込んでいた。なんか儀式でもやりそうな、な。で、何人か捕らえようとしたが、尽く自害した。それも魔術での精査も避けるためか自分の体を木っ端微塵に吹っ飛ばしてだ」
　徹底しているな。と、シールは呻いた。自ら自害するという事は、その尖兵達全員、相応の信念か宗教を思っているか。あるいは洗脳にでもかけられているのか、なんにせよ真っ当ではない。理念の下で行われる自害など、それがどんなものであれ狂っている。
「ともあれ性質の悪い組織に違いないね、それは」
　そう分析しつつ、シールは呪いの精霊を生み出した例の組織を思い出していた。アレも確か、宗教であると自らを名乗っていた。あれも危うい組織に違いは無い。イングラムの言うその謎の襲撃者達とつながる証拠など無いが、妙に引っ掛かりを覚えるのは、勘ぐり過ぎだろうか。
　ともあれ今は関係ない。
「怪しい奴らがいるってのは分かった。けど王城まで攻めてくるとは限らないだろう？」
「無論そうだ。だが、この国にとって好ましくない奴らが存在し、にもかかわらず国王を守ろうとする騎士達が平和ボケしているなんて笑えない」

元は俺がしごいてやろうと思っていたんだが、丁度いい時期にお前が来たからな。と、イングラムは笑う。まるっきりシールの事情を考慮していない、爽快な笑顔だった。
「……何か高いもの奢って貰うよ。大隊長殿」
「安心しろ。これでも高給取りだ」
　やれやれ、と、シールは肩を落とし、うな垂れた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「やれやれ」
　思い出して、シールは再び肩を落としてうな垂れた。
　まあ、別に、イングラムの依頼は構わないとは思っている。つい先ほど、国王への協力を約束しているのだ。いきなりその約束を反故するつもりはない。
　問題は、リーンだ。元より【国】が具体化したこの場所は、彼女にとって好ましくない所なのだ。散々王城への参上を渋ったのも、城で極度に人前に出るのを嫌っていたのも、馬鹿馬鹿しく見えて、彼女なりに混乱していたのだろう。
　そんな彼女と離れる事は、正直、好ましいとは言いがたかった。
　無論、彼女は保護すべき子供ではない。大人だ。彼女は協力を仰がれ、協力を了承していた。自分の意思で。ならばこちらが口出しする事ではない。
　だが、心配なのは心配だ。
　とはいえ、前を向けばイングラムの挑発でその気になりつつある騎士達の整列。彼らを前にして半端な気持ちではいられないだろう。と、憂鬱を振り払うように首を振ると、シールは、務めて明るい声で騎士たちに語りかけた。
「それじゃ、始めようか」
　そう告げ、闘技場の中心へと足を運ぶ。
　片手に握る、渡された木刀の感触を確かめる。木製と聞くと重さを侮ってしまいがちだが、その重量はかなりしっかりと存在する。握る手ごたえもかなり強い。それにシールは違和感を感じてしまう。
　昔は剣でもナイフでも斧でも槍でも何でも振り回していたが、今戦闘で主に利用しているのは、封印術式を剣状にした【封印剣】だ。当然そこに重量は無く、

そもそも剣として利用する事事態あまりないのだ。アレは。
　アレは元々、物質を封じる【封印術】を、〝触れたモノを奪う〟【武器】に留める為に、【剣】という形を取っているに過ぎない。そもそも敵の殺傷を目的とした武器ではない。
　木刀といった、シンプルに相手への攻撃を目的とした武器を扱うというのは久しぶりだ。
「……ふむ」
　なれない武器を扱い戦う、というのはあまり気が乗らない。特に相手が熟練の戦士達で、それもこちらをやる気満々であれば尚更だ。
　怪我したくないなー
　そんなのんきな憂鬱をシールは抱えていた。
だが、そんなシールの憂鬱に反して、騎士たちは率先して前に出ようとはしなかった。気がどれだけ緩もうが、国王護衛を任されているエリート集団だ。例えどれだけ見た目に覇気がなかろうが、実力の分からない相手に、決して一時の感情だけでちょっかいをかけようとはしない。
　まず誰が出るか、騎士達の間で僅かに探り合うような空気が流れ始めた。その時、
「では、私が」
　騎士達の中から、一人前に出る男がいた。手には片刃を模した木刀を、兜は被らず、騎士長を意味する鎧を身に纏うその男は、
「ほう、ダルシア。お前か」
　先日より、妙に何度も顔をあわせている、ダルシアその人だった。
「……」
　シールはその顔に僅かに驚かされながらも、彼を観察する。まさか昨日の続きじゃないだろうな、と訝しがりもしたが、ダルシアの表情にはそういった気配は見られない。見ただけで相手の心中など分かるわけも無いが。
「……ふうん」
　まあ、怪我をしないようにしよう、と、シールは剣をだらりと下げた。ダルシアは騎士らしい正眼の構えで、シールの正面に立った。
「さて、それじゃあ用意は良いな？」

シールとダルシアの合い間にイングラムが立ち、手を上げる。そして、
「始ー」
　合図を言い切るか否かの刹那、ダルシアは地を蹴り、その場から消え去るような速度で、シールへと木刀を叩き込んだ。

第七十二話 近衛騎士の実力・シールの実力

　完全な先制を取ったダルシアの速攻は、同僚の騎士達は愚か、騎士大隊長たるイングラムすら一瞬その姿を見失うほどの速度を伴った一撃だった。魔術の発動も無しにあれほどの速度を出せる瞬発力、彼は間違いなく、王を守る近衛騎士隊の隊長だった。
　だが、その神速の一撃を受けたシールは
「……びっくりした」
　そんな風に言って眼を見開きながらも、しっかりとその一撃を受け止めていた。ぶら下げていた剣はいつの間にか前に構えられ、ダルシアの剣を受け止め、その木製の身を軋ませていた。
　その姿に周囲の騎士からどよめきが漏れる。剣を受けた、という事は、ダルシアの特攻を見切ったということに他ならない。
「……」
　ダルシアは驚きの表情を一瞬つくり、しかしすぐにその表情を隠すと、数歩後ろに下がった。剣を軽く振り、体を軽く揺らす。リズムを作るように一、二と間をおいて、直後に再びシールへと突撃する。
「やっぱ速い」
　対してシールはその場から動こうとはいなかった。変わらず木刀の構えを曖昧なままにして、隙だらけのようにもみえる姿勢でダルシアを迎える。
　二度目の激突。再びシールはダルシアの一撃を受け止めた。だが、今回は一撃で終わらない。続く連激。袈裟からの振り下ろし、返しの一撃、踏み込みを入れた突き。技と技の合間を作らない連技。
　迎え撃つシールはそれらの攻撃を全ていなす。決して軽くない一撃を木刀でいなし、避け、ステップで距離をとる。単純な体技だけでダルシアの攻撃を受け止め続ける。

ダルシアは攻め、シールは受ける。この形の戦闘が続く。シールは攻勢に移す事は無かった。防御に徹している。決して自らは攻めず、ダルシアの攻撃を待つ姿勢だ。

　ダルシアは、そんなシールの戦い方をどう思ったのか、攻撃をただただ受けられる現状を変えようと考えたのか、更に二、三と攻撃を加えると、今度は距離を大きくとった。

「……は、ああ」

「……」

　激闘の間、シールとダルシアは互いに呼吸を整える。

　そしてそれを見ていた騎士達は留めていた息を吐き出した。ダルシアの猛攻、それを平然と受けきったシールへと感嘆の目が向けられた。

　ダルシアの実力、若くして国王を守る直属の騎士隊長に任命された彼の実力は、周知の事実だった。だが、相対するシールの実力は、彼らにとって未知数だった。しかし実際こうして相対を見てみると、ダルシアと同等以上にすら見える。

　シールの正体を知る者、知らぬ者、どちらにせよシールを見る目が変わった。

　そのシールは、体を軽く解すと、前で剣を構えるダルシアに話しかけた。

「強いなあ。ダルシア君」

「光栄です」

　短い会話、そして再びダルシアは姿勢を低くし、シールもそれに合わせ腰を落とした。

「っふ！」

　そして、ダルシアは正面、体ごと剣をぶつける。鍔迫り合いとなる。ダルシアはぐっと力を込めているように見えるが、シールの体はその場から動かない。拮抗した状況が続いていた。

　数瞬の後、ダルシアは剣に込めていた力の向きを変える。正面から上方へ、シールの剣を上方へと弾き、シールの構えを崩す。そして直後に正面へと突きを繰り出した。だが、シールはそのダルシアの攻撃を予期していたのか、弾かれた剣を手放すと、そのまま体を捻り、突きを避ける。

「っちぃ！」

一瞬ダルシアは体を泳がせた。と、同時に、シールは彼の体のうちに入っていた。ダルシアは泳ぐ体に力をいれ、無理やり跳躍しよう動く。だが、
「遅い」
シールは軽くそう言うと、ダルシアの軽鎧を絡み取り、地面に叩き付けた。直後に宙へと舞った木刀を掴み取る。体を起こすと、緊張から解かれた体を身震いさせ、大きく息を吐いた。
「……あっぶいなあ」
僅かに緊張から放たれた震える声で、シールはそっと呟いた。木刀とはいえ、鍛え上げた騎士が全力で振るえば人の命なんて容易く奪えるのだ。心臓に悪い。
とはいえ勝利はきちんと収めた。まあこれで、イングラムも文句は無いだろう。
「やあ、大丈夫かい？」
地面に叩き付けた拍子に極めていた関節を外し、ダルシアを放した。僅かに息を吐くと、シール立ち上がり、未だ叩きつけられた衝撃で呻く彼を見下ろした。するとダルシアは、それから暫くして立ち上がり、
「……流石です。御見それしました」
ダルシアは一瞬、読み取れないような複雑な表情を浮かべていたが、それまた一瞬で消えてしまった。シールが見た時には僅かに額に汗を浮かべ、息を荒くするだけだ。それも数秒、整え、姿勢を正し、最後は丁寧に頭を下げた。
「よし、二人とも、よくやったな」
イングラムの労いの言葉に、シールは改めて緊張を解そうと、肩を下ろした、のだが、
「次は俺だ！」
と、そんなシールの思惑を吹き飛ばすように、今度は彼よりも遥かに巨体な男が前へと進み出てきた。その巨体に見合う大剣を模した擬似剣を両手に握りしめ、瞳には滾る闘志に満ちていた。
わーつよそー、と。シールは凄く嫌な顔をした。
「よし、頑張れよ。シール」
「ちょっと、まて。イングラム」
「ちなみにソイツ、前回の武道大会で準優勝した男だ。名前はトーマス」

いやだから待ってくれ。と、シールが愚痴るが、直後にイングラムの合図で戦闘が開始した。瞬時に大剣がシールに振るわれる。全く容赦が無く、巨体に似合わない俊敏な速度の乗った剣だった。
「怖いって」
だが、気の抜けた悲鳴と共に、シールは駆け出していた。大剣を潜り抜け、その内で跳躍、一瞬巨体の騎士と、目線が揃い、視線が交差する。
「っっぁああ!!」
トーマスはそれに鋭く反応し、剣を手放し拳を繰り出そうとしていた。
だがその間を与えず、シールは剣を振りぬいた。
「ちょいっとね」
小さく細かな、しかし何より鋭い一閃は相手の顎を掠めるようにして捕らえた。トーマスの脳を容赦なく揺さぶり、次の瞬間には彼の体は地面に沈んだ。わずかに体を身じろぎするものの、立ち上がらない。
騎士達の中で再びどよめきが漏れた。
二度目の勝利だ。騎士たちの認識の中で、シールの実力は疑いようの無い物になった。
圧倒的な力を見せ付けるでもなく、特殊な技を見せるわけでもなく、しかし坦々と、綽々と、確実に攻撃を決め、勝利する。紛れも無い実力者の証だ。
そんな感心を背に受けつつ、シールは着地すると、一度息を吐き出した。そしてイングラムに顔を向け、何か言いたげに口を開こうとしていた。の、だが、その前にイングラムは大きな声で、
「おし、次！ ゴードン、ソル、ニーニウ！ 行け！」
最早息をつく暇すらなかった。騎士達の中から三人が飛び出し、トーマスを倒したばかりのシールへと囲うように突撃する。剣すら構え直していないシールに対して二人は剣を、残りの一人は槍を振りかぶる。
「あっぶないって！」
シールはみっともない悲鳴を上げつつも、この状況を冷静な眼で認識していた。三者の騎士が見事に此方を囲うように攻めていると気づくと、後退を諦め、タイミングを見極め、体を沈めた。三者の攻撃はどれも空をきった。その隙を突くように、シールは開いた隙間へと跳び出した。

だが、そういいようにやられるほど、国王を守る騎士たちは甘くは無い。
「逃がさん！」
　長い槍を持つ騎士、ニーニウがその場から更に踏み込み、槍を棒術の要領で叩き込む。だが、シールは直前に軌道を変え、横に飛んだ。槍は空振り、硬くならされた地面が弾け飛び、掘り返される。
「っ本当、強いな皆」
　三者の囲いから抜けたシールは、そのまま立ち止まり、息をつく。呼吸を整える姿は何処か余裕すら見える、上から悠然と見下ろしているように、騎士たちには見えた。
　そんな彼に向かって、ゴードンとソルが突撃する。
「死ね!!」「くたばれ!!」
「何でそんな殺意ビンビンなんだよ!!」
　理不尽だ！　と叫び、同時にシールは背後へと跳躍した。二人の剣を一本の剣で防ぐ事は不可能だと判断したのだ。だが、背後に飛んだ瞬間、背筋に冷たい悪寒が走った。
「……って」
　シールが振り返れば、いつの間に回り込んでいたのか、あるいは此方に誘導されたのか、ニーニウが槍を構え、兜の奥から身震いしそうな冷たい視線が注がれていた。
「……あの、勘弁してくれません？」
「潰れろ」
「だよねえ」
　槍が瞬時に振り下ろされる。シールは剣を構えて、その一撃を受け止める。鈍く大きな、木の軋む音が響いた。
「げぇ……」
　シールは鈍い悲鳴を上げる。
　彼の持つ木製の剣が、ニーニウの一撃で中央からへし折れていたた。
　決して脆い作りでは無いのだが、それを打ち破るほどの力が、ニーニウの槍には込められていた。ニーニウはそれを確認し、もう一撃、槍を振り上げ、下ろす。追撃に前から騎士が二人、同時に飛び掛る。

前から二人、後ろから一人。決して距離、間隔を離さず三人で囲う。徹底したコンビネーションでシールを挟撃する。突如として訓練に放り込まれたとは思えない、洗練された戦い方だった。

シールは表情を苦難に歪め、しかし、その動きには一切の乱れを見せず、動く。

「きーっく」

シールは役に立たなくなった剣を手放すと、その場で頭を低くし、代わりに足を蹴り上げげた。背後から振り下ろされた槍の芯にぶつける。

「なっ!?」

捉えた、と確信して槍を振り下ろしたニーニウは、直後に手元に走った衝撃に声を上げげた。強く握り締めていた槍は、自身が振り下ろした槍の勢いと、シールの蹴り衝撃が合い間って、手の中で暴れ、弾け跳んだ。

「きゃーっち」

その槍を、シールは掴む。掴むために飛び出したその勢いのまま、目の前の二人へと飛ぶ。奇を突かれ、僅かに反応の遅れた二人のうち、一人に槍を突撃させる。

「っぐがぁ!?」

右側の騎士、ソルを打ち倒した。そしてそのまま突き出した槍を、左側へと薙ぐ。

「っぐ!?」

ゴードンは剣で受ける。だが、孤を描き、槍のリーチを利用し叩き込まれた槍の力を抑えきれず、一歩二歩、たたらを踏み、後ろに下がった。直後、シールは、

「やーりぃい！」

広く開いた隙、それを貫くように繰り出した刺突で、ゴードンの後退を追撃した。装備した鎧に直撃した木製の槍は、その自身の勢いに中心から圧し折れ、破壊された。だが同時にゴードンを打ち倒していた。

シールは使い物にならなくなった槍を捨てると、そのまま側で倒されていたソルの持つ剣を握る。二度三度振ると、再び、前へと視線を向ける。

「さて」

残る騎士、ニーニウへと視線を向けると、手に持った剣を突きつけた。向こうに武器は無い。あるのはシールの背後にいるゴードンの大剣のみ。勿論、其処にいかせるつもりはシールには無い。
　降参しろ、シールはそう言うつもりだった。
　だが、ニーニウはシールから目を逸らし、イングラムに目配せした。
「よし、許可する」
　何かイングラムが不吉な事を口にした。嫌な予感を覚え、後退の為シールは低く構える。するとニーニウは深く被った兜に何故か手をかけ、脱ぎ去った。
「……女の子？」
　男性の様に短く切り揃えた赤毛の、そばかすのある凛々しい顔。しかし丸みあるその容姿は間違いなく女性のものだった。
　シールは意表を突かれ、何故兜を脱ぐのか、考えが遅れた。対してニーニウは、自身の指を咥えると、歯を立て、指を噛み切った。そして僅かに流れた血を地面に垂らし、呟く。魔の力を。
「【炎蛇】」
　呪文と共に地面に染みた血が閃き、直後に赤々と燃える焔が現れ、蠢く。そしてその焔の中から、二つの眼光がシールを射抜いた。
「……わーお」
　直後、シールへと、滾る焔から生まれた焔色の蛇が、牙をむけ、飛び掛った。

第七十三話 近衛騎士の実力・シールの実力②

　シールと相対していた騎士、ニーニウ。彼女は騎士として高い誇りを持っている。
　国王直属の騎士団、それは能力があれば、才能があれば、なれるものではない。才能の下地から、絶え間ない努力、任務をこなし結果を出し続ける実力。更にそうして結果を出した騎士達の中でもその実力の内容、国への忠誠心、あらゆるふるいにかけられる。国王を守る騎士になるべくしてなる人材を見出すのだ。
　だから誇っている。騎士である自分を。自らの欲望を殺し、ひたすら自分を磨く事に尽力し、その結果を残せた事を、誇っていた。
　そしてそれ故に、目の前の男を、シールと呼ばれるこの男を、彼女は叩きのめさんとした。彼女の誇りを、共に戦う仲間を平然と叩きのめすシールが、彼女にはたまらなく腹ただしいものだったからだ。
　まるで自分達の努力を心底までに見下しているような気がしたのだ。
　故の全力、故の魔術だ。
　騎士になってから魔力を潜在的に保有している事が分かり、より自らを高めるために魔術を習い、習得した。今はまだ、自らの血を直接媒介にしなければ発動できないが、引き換えに強力な威力を発動できる。
　死ね！　とまでは思わないが、くたばってしまえ！ くらいには思っていた。
「行け【炎蛇】！」
　焔の蛇は顎を大きく開け、シールの体を焼き尽くし、牙で貫かんと飛び掛る。
　抵抗する動きの見せないシールに、倒したか、と僅かにそう思った。
　だが、
「……っ」
　シールへと飛び掛った直後、燃え滾る蛇は姿を消した。
　防がれたのだ。別段この事態は不審とは思わない。魔術への対抗手段を持って

いないと、甘く見た事は無い。だから、不審に思ったのは、
「……封印術？」
　結界、障壁術の類か何かと想像していたが、シールが使用していたのは奇妙な図形で彩られた、珍しい術式。封印術だった。ニーニウは疑問に思った。そもそも封印術は戦闘向きではない。わざわざそれでこちらの術を防ぐ意味が分からない。
　だが、そんな事知った事ではない、とニーニウは意識を切り替える。相手がどんな手段を講じようと、最終的に打倒すればいいと、そう考える。魔術師ではなく騎士である彼女らしい考え方だ。
「【蛇よ、滾り喰らいつくせ】」
　血を再び媒介とし、呪文を詠唱する。熟練の魔術師は血の媒介も、詠唱も無しにこの程度の魔術は発動を可能だと聞くが、まだ自分はそこまで至らない。しかしこの距離なら、向こうが攻撃を仕掛けてきても対応ができる。
　詠唱を完了し、ニーニウは自らの魔術の、その最大の威力のものを発動した
「【炎蛇乱舞】」
　焔を纏う蛇は五匹、血の魔方陣から生まれ、眼前の獲物へと飛びかからせる。するとやはり、というべきか、シールは自身の前方に、盾のように封印術式を発動させてきた。
　だが、この魔術はある程度ならば操作が効く。
「円弧！」
　一、二匹と封印術式に吸収されたが、残る数匹は弧をそる様にして魔法陣への衝突を回避する。そのままシールの背後へと跳躍し、死角をへと回り込む。
「喰らえ！」
　蛇は牙を剥き、滾る焔の刃をシールへと突き立てる。捉えた、と、そう思った。
　だが、シールは、
「中々面白い魔術だと思うけどね」
　そんな事を不適に笑いながら、口にしていたのが僅かに見えた。そしてそのまま、背から喰らい付こうとする蛇を置き去りに、此方に、突撃した。
「な！」

反射的に体を下がらせようと動く、が、
「自分の身が疎かじゃ、実用には程遠いよ」
　一瞬で距離をつめられる。動こうにも、今まで魔術の操作に集中していた体は強張り、反応が出遅れた。その隙を突いて、シールは此方へと手を伸ばした。
「っぐ!?」
　首を引っつかまれ、ぐいと体を入れ替えさせられ、前へと押し出された。眼前には、自分が放った焔の蛇が、顎を大きく開いていた。
　このままだと、直撃するっ
「【っ開放！】」
　瞬間、蛇は砕け、焔は解けた。
　体制を整え、シールへと向かおうと体を向き直す、が、
「……え？」
　シールの前に封印術式が三つ、並んでいた。
「【反転開放】」
　封印術式から飛び出してきたのは、自らが生み出した焔の蛇！
「【開放！】」
「無理、魔術権限は奪ってるよ」
　言われるように、操作が効かない。元より魔術は専門ではない。権限を、魔術のコントロールを奪う術を彼女は知らない。
「ぐっ」
　回避しようと後退する、が、その後退するよりも先に蛇が回りこむ。体を捻りそれを避けるが、残る二匹が追撃に回る。動きの先へ先へ、蛇が回り込んでくる。
　必死に体を動かすが、まるで蛇に踊らされているような有様だった。自分の操作よりも精密に蛇は蠢き、逃げる事も、シールが行ったように操作者を叩く事もままならない。
　そして、気が付けば三匹の蛇は、その長い体を紡ぎ、その胴体を縄のようにしてニーニウを囲い、鎌首は頭へと牙を向け、停止していた。ニーニウは、そこから成す術は無かった。
「ま、いりました」

半ば呆然と両手を上げると、シールは笑った。途端、魔術は解け、拘束から開放された。
「これくらい出来るようになれば及第点、まあ、頑張ってね」
そう言い軽く笑うシールがたまらなく、憎らしかった。だが、それと同時に自分が編み出した魔術を自分以上に操るシールのその実力へ感嘆を漏らす自らも、確かに存在していた。
「ありがとう、ございました」
息を荒くして、何とか姿勢を立て直すと、頭を下げた。下げて、そのまま気を失った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……だぁ」
それを見届けて、シールは全身の力を抜くため、目一杯息を吐き出した。一瞬で全身の筋肉を弛緩させ、次の瞬間酸素とマナを一気に取り込んだ。
……疲れた、シールは疲労した体を揺らすようにして、脱力した。
ニーニウに対して魔術指導するような真似もして見せたが、やはり相手はトップエリートの騎士たち、余裕をもって倒せるような相手ではない。先のトーマスも、今回の三人もだ。強い。どれだけ真摯に鍛錬を取り組んでいたのかがよくわかった。
よくわかった。わかったから、休みたい。本当に疲れたんだもの。
「イングラム、ちょっと」
そんな訳で、イングラムに休憩を提案しようと声をかけた。だが、そのイングラムは、何故か此方を見ると、あまりその顔に似合わない意地の悪い笑みを浮かべていた
うん、嫌な予感しかしない。
「よーし、全員でかかれ！」
「ちょっとまてイングラーム!!」
シールは悲鳴をあげ、同時に騎士たちが一斉にシールに殺到した

第七十四話 圧勝、その頃彼女は

　夕暮れ時、日は障壁に隠れ、僅かな光しか城壁内にはとどかなくなってくる頃、騎士団の決闘所の中心で、シールはドロドロの体でクタクタと地面に座り込んだ。
「……お、終わった」
　両手に持った木刀を手放しながら、シールは座り込んだまま、背を地面に倒す。
　疲れた。汗と泥まみれで、息が上がり、体中に疲労という名の重しがのしかかる。両手で二つ握っていた木刀を手放すと、魂ごと吐き出すように、大きく息を吐いた。
「うむ、大変だったな」
「……怒っていいよね。というか、一回殴っていいかな、イングラム」
　あまりにも他人事なその台詞に、シールは顔を引きつらせ、イングラムを睨みつけた。
　イングラムも同じように顔をひきつらせ、ばつの悪そうな表情で、
「いや、元々は最初ダルシアとやった時のように、タイマンで手合わせさせようと思ってたんだが……なんか余裕ありそうだったからな」
「それで何でこんな大乱闘になるわけ」
「だが、全員ぶちのめすんだから、大したものだよ。本当に」
　イングラムが呆れたように周りを見渡す。
　その場には、少し前まで堂々と立ち並んでいた騎士たちが、尽く打ちのめされている光景が広がっていた。トップエリート、国王の守り手たる騎士達は全員が全員、見事にシールによって打倒されていた。
　イングラム自身、まさかここまでの結果がでるとはおもいもしていなかった。
　ダルシアのときと同じく、シールは特殊な魔術を使ったりはしなかった。封印

術も相手の騎士が魔術を使えるときにだけ、利用していたくらいだ。
　にもかかわらず、シールは全員を倒してのけた。
　だが、身体能力が騎士たちより跳びぬけていたという訳でもなかった。そこまで言うほど、シールと騎士たちの実力は離れていない。単純な力や俊敏さだけ取れば、シールを超える能力を持った騎士達は何人もいた。
　だが、シールは、相対する敵の長所と短所を見極め、短所にのみ狙いを定め攻撃を続けていた。相手が誰だろうと、どんな状況だろうと、決してぶれることなく。
　それは経験が生んだしたたかさだった。その点において、シールはずば抜けている。
　無論、そのシールの強さをイングラムも知っていた。が、しかし流石に騎士たち全員を打ち倒すほどとは思いもしなかった。
「……ひょっとして前より強くなっていないか？」
「……教師になってから、無茶苦茶な事件をこなす事がおおくなってきたからなあ」
「何故教師になってからそんな機会が増えるんだ？」
「学院長に聞いてくれ。そんな事」
　嘆息し、シールは頭を起こす。借りた騎士服も酷い有様だ。彼方此方ほつれ、所によっては魔術で焼き焦げ、ボロボロになっている。救いがあるとすれば、自分が怪我という怪我を負っていないというところだが。
　怪我一つでもして体の動きが鈍ればそれまでだったのだから、当然といえば当然だが。
「しっかし、これでよかったの？ 本当に」
「十分教えにはなっただろう。ここまで徹底的にお前にのされたんだ。自分に何が足りなかったか皆考えるはずだ。そうでなければこいつらはここに居られない」
　そういわれ、見てみると、最初のほうに倒してしまった騎士たち、ダルシアやトーマス、ニーニウなどの騎士たちは既に立ち上がり、武器を握って構えを見直している。
　その姿勢は別に特別な事は無い。国王を守る彼等には当然のように求められ

る、向上心だった。その向上心はうちの子達にも見習わせたものだ、とシールは思った。
「お前には礼をしないとな。何か欲しいものはあるか？」
「高いお茶と茶菓子」
「安上りな事だ。他には無いのか？」
　シールは暫く、あー、と間抜けな表情をした後に、ふと思いついたように、
「最近出来た良い衣服屋無い？ 良い所探してんだけど」
「なんだ？ 新しい服でも買うのか？」
「僕じゃなくてリーン先生」
「なんなら案内しようか？」
「お断りだよ。何が楽しいんだよそれ」
　折角美女と二人きりででかけるというのに、何故おまけがついてくるのか。
　やれやれ、とシールは立ち上がる。自分の衣服を改めて確認し、改めてその酷さを認識し直した。ついで言えば自分の体からも汗臭さが漂っている。シールはげんなりな顔をした。
「水浴びしたいんだけど」
「城に戻って裏口から一階上れば直ぐに風呂場だ。行ってこい」
　了解したよ。と、シールは軽くそう言う、と、
「シール様！」
　すると、シールの背後から慄然と揃った声が響いた。振り返ればシールよりも遥かにボロボロな騎士たちが、半ば気力のみで立ち上がり、敬礼を見せ
「ご指導！ ありがとうございました！」
　再び声を揃えた。徹底的な敗北の後にも満ち満ちたその鋭気にシールは僅かに姿勢を正した。別に、彼らの事を真に思っての事ではなかったが、しかしこういう風な態度を示されると、身が引き締まる。
　シールは改まって彼らに向き直すと、騎士の礼を返し、
「これからも頑張ってね。国王の守り手として」
　シールの言葉に騎士たちは再び敬礼をし、シールが去っていくのを見送った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「あー、本当、汗臭い。ドロドロ、最悪、死にそう」
　だが、騎士たちの視線から外れた途端、シールはそんな愚痴をのたまった。いや流石に、もう格好をつけられるほどの余裕は無い。体力は限界ぎりぎりだ。
　しかし、騎士たちは皆、強かった。確かにそれぞれ一流と言ってもいい能力を持っており、それを更に極めているのがよくわかった。問題があるとすれば、その能力を誇り、自信を得たが故に、その能力をより発展させると言う発想へと進めていない、という印象が多かった所か。
　自己改革の意識への促進、今回の戦闘でソレが進めばいいけど、と、シールは思う。
　ともあれ、今は風呂だ。体を洗い流し、このドロドロの古着を脱ぎ捨てたい。
　正直、使用人の女性達から、まさしく汚物を見るような眼で見られる気がして、耐えられない。そしてこの格好では間違いなくリーン先生は自分を見て、汚物を見る眼で見る。その点は断言できる。
「さっさと体を洗って、リーン先生を探そうかな」
　そういって、シールは洗い場へと足を向けた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　嫌悪感が、全身をのたくっている。
　自分を睨むように並ぶ、眼、眼、眼、眼、眼、眼、視線が、自分の体を這う。
　小さな小さな蟲の群れが体を這い回っているかのような、全身を伝うおぞましさ。嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ。此処にいたくない。こんな所にいたくない。
　こんなものはまやかしだと言い聞かせる。そうだ。分かっているのだ。
　だがそれでも体の底からドロドロと溢れる悪意が修まらない。じくじくと膿んだ傷から毒が溢れ　　体を腐らせていく。どこまでもどこまでも、体が、心が、魂が腐っていく。
　だけど、嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。腐るのは、嫌だ。

皮膚に爪を立て、掻き毟る。皮膚から血が滲む。
　胃の底から湧き上がってきそうなモノを飲み込む。
　耐えなければならない。屈しってはならない。立ち向かわなければならない。向き合わなければならない。怒りでも敵意でもいい。あらゆる感情をもってでも、己を喰らわんとする憎悪を叩き潰す。
　負けるのは嫌だ。屈するのは嫌だ。この傷をつけたのは、軽蔑すべき者達なのだから。
　そんな奴らから与えられた傷に、屈するのは、嫌だ。どんな事があろうとも。
　歯を食いしばり、血を滲む思いで踏みとどまる
　彼女は腹底から息を吐き出した。自身の内を蝕むモノを少しでも吐き出すように。
　彼女は前を向く。彼女は苦境へと向き合う。彼女は決して腰を折らない。
　彼女は、リーンは、己自身の内から湧き上がる悪意と、向き合っていた。

第七十五話 没落者

　国家認定魔術師
　文字通り、国にその実力を認められ、直属の研究機関や魔術師団に務める事を許された、魔術師の精鋭集団である。魔道を進むものにとっての憧れであり、目標となるべき者達だ。無論、魔術師と一言で言っても様々な学問が存在するため、魔術師も千差万別だ。
　そしてその中でも王の警護を務める【魔道師団】は、先天的な高い魔力と、絶え間ない努力で編み出された技術力が必須とされている。仕事として、国王を守るための外敵の排除は勿論、城壁に結界を巡らせての警戒、日ごとに進歩する外国の魔術に対抗する魔術研究。やるべきことは多い。
　とはいえ、【牢獄城】と呼ばれるほど強固なガイディア国城。国の中に更に城壁をめぐらせるほどの守護の厚さは、その守護の中央程、危機から離れる事意味している。
　つまるところ、あまりに厚い守りが、逆に中心部の緩みを誘発してしまっているのだ。
　国家直属魔術師、魔道師団・大師長メザイヤ、彼女もそんな状況を警戒していた。王を守護する魔術師達を率いる彼女は　イングラムと同じく、暗躍する不審な集団についての情報は耳にしている。もうまもなく行われる式典に対して、警備の強化を必要としていた。
　そんな折、懐かしい二人が挨拶に訪れた。今回の式典の主役、シールとリーンだ。
　丁度いいところにきてくれた。イングラムと同じく、メザイヤもそう思った。
　故にメザイヤはリーンに自分の部下を指導を依頼した。彼女の能力、騎士団、魔術師とは何のかかわりも無い、一介の教師である彼女が身に着けている〝類稀〟な力は、刺激になる。そう思ったのだ。

といっても、依頼自体イングラムほど無理やりにでは無かった。リーン自身それを了承してくれたし、その時は普通に彼女へ感謝していた。
だが、
「……リーン？」
「……なんですか」
指導の最中、リーンの様子がおかしくなっていた。
常に無表情で、感情の変化がわかりにくい彼女なのだが、しかし今日に限っては明らかに様子がおかしかった。顔色は青を通り越して白く、ただ立つだけなのに、体もふらふらと、何処か不安定だった。
メザイヤもまた、リーンやシールの過去を知る一人だ。故に彼女の事情はメザイヤも知っている。故に、彼女の心にある傷も知っている。
メザイヤは彼女を案じ、リーンに教わった魔術詠唱の速読術、その〝コツ〟を繰り返す魔術師達から引き離し、リーンへと話し掛けた。
「無茶をする必要は無いのよ」
「平気です」
言葉を重ねるが、即答。一見、平然としているように見える。だが、彼女は酷く意地固な性格をしている。例えどれだけ過酷な状況にあっても、耐える。耐えようとしてしまうのだ。
一見それは立派な事だが、ただ耐え忍ぶ事が良い事とはいえない。
人の心の許容量などたかが知れている。誰か、受け止めてくれる人がいるのだ。
今の彼女を受け入れてくれる人、それはシールだ。
メザイヤは彼女をシールと離してしまったことを後悔していた。
「リーン」
「指導を続けます」
そう言うと、魔術師達へと歩み寄っていった。メザイヤは溜息をついた。彼女を強く引き止めることは出来ない。彼女に魔術師達の指導を依頼したのは自分だ。
彼女の顔色が悪いままなら、シールを呼んでこようか。そんな事を考え始めた頃だった。

「メザイヤ様」
　と、自分の部下の魔術師の一人が、声をかけてきた。丁度良い、可能なら、シールを呼んで来て貰おうか、と、そんな事を思った。その魔術師の、焦るような、困ったような表情を見るまでは。
「どうしたのかしら？」
「いえ、その……」
　言いづらそうに言葉を濁らせる。何なのだ、と、尋ねてみると、
「あの女は何処にいると聞いたのだ」
　声がして、部下の背を見る。そしてその瞬間、メザイヤは額に僅かに皺を入れ、唸る。
　厄介な奴がきた。そう思いながら

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「さっぱりしたなぁ……」
　シールが頭から湯気を出しながら、満足げに表情緩めていた。城内は使用後の排水を浄化し循環する術式のシステムも温水のシステムも完備されている。故に風呂場はかなり豪華だった。
　どれだけ無骨で砦のような城だろうと、流石は王の住まう王城だ。シールは体の汚れも疲れも落としたさっぱりとした顔でいた。
「さて、後はリーン先生を……」
　魔術師の研究施設。既に今いる場所はそのエリアだ。やはり式典に向けての飾り付けが進んではいるが、そこをうろつく人ぶれは、騎士たちよりも魔術師のフードをかぶった王宮魔術師達が多くなっている。
　確か、と記憶を辿り、階段を上り、更に廊下へと進む。道が僅かに開け、飾りつけも減り魔術師の研究所らしい、薄暗い廊下が広がってきた。

「リーンせん……」
　そう、声をかけようとして、その彼女の前にいた人物に気が付いて、顔をゆが

めた。彼女のいるその先にもう一人、人影が見えたのだ。そしてそれはシールも良く知る、そしてあまり会いたくも無い人物だったのだ。
「……嫌だなあ」
　身も心もすっきりした、矢先に会いたい顔ではない。できればこのまま踵を返してしまいたい衝動にかられるが、しかしリーンをそのままにしておく事は出来ない。
「……やれやれ」
　覚悟を決めるように、あるいは諦めるようにそう呟くと、シールはその二人へと足を向けた。その足音にリーンは気が付いたのかこちらを振り向き、そしてその足音の主がシールだと知るや否や
「おっと、」
　勢いよくシールにぶつかる様に抱きつき、そのまま体に手を回して、ぐっと前へと押しやった。どこまで盾扱いする気なんだこの人は、とシールはもう一度溜息をついた。
　ともあれ前を向く。目の前の人物と相対する。姿格好は騎士のそれ、現在着飾られている騎士達のそれよりも更に煌びやかな装飾、傷一つ無い、よく言えば戦場の一つも経験した事の無い鎧を身に着けた男、僅かにたるんだ頬、額に寄り、戻らない皺、険しい表情から出た二つの髭、知った顔。知った、嫌な顔だ。
「お久しぶりですね。ダーミル・ルジア様」
　礼は欠かない。相手は貴族であり、騎士団の中でも有力者だ。
　しかし、そのシールの礼に対して、今さっきまでリーンの前に立ちふさがっていた男は、不快気な顔を隠しはしなかった。
「これはこれは、英雄殿、ご健康そうで何より」
　言葉はイングラムの言い様とさほど代わらず、しかし明らかな悪意と敵意の混在した言葉だった。シールはそれに特に言及はしない。つっかかれば突っかかるほど絡まるのが見えていたから。蛇のいるとわかった藪を突付く馬鹿はいない。
　その反応を不快に思ったのか、ダーミルは鼻を鳴らし、シールを睨みつけた。
「リーン先生と何を？」
「何をしにきたのかと聞いただけだ」
「今回の式典の為の挨拶回りです」

「そんな事は分かっている！ 一々口を開くな!!」
　吼え猛る。シールは唾が跳んでこないように顔を僅かに遠ざけた。
「いいか、私は貴様らなど認めない。平民は平民らしく、地面に這いずり回って、我々を貢げば良いのだ」
　メラメラと瞳に滾る憎悪の色は、ある意味で感心すら覚える。どういう育ち方をすれば、他人をそこまで憎悪し続ける事が出来るのだろう。
　僕には無理だろうな、と、シールは内心で思った。
「いずれ必ずこの国から追い出してやるからな!!」
「そうですか、頑張ってください」
　別に言葉に他意は無かったのだが、ダーミルにはそうは聞こえなかったようだ。顔色が赤を通り越して白くなり、直後に拳をが飛んできた。
「危ないな」
　避けても良かったが、万一後ろのリーンに被害が飛んでも嫌だったので、掌で止めた。軽い拳だ、仮にも騎士だというのにと、内心で嘲笑する。顔には出さないが。
「貴様っ！」
「こんな所で暴力は止めましょう。噂が立ちますよ」
　周りを見ればちらほらと使用人達が此方を見ている。ダーミルがにらみを利かすと直ぐに散っていった。ダーミルは再びシールを睨み、
「そもそも、お前のような奴が王城へと参上する事が間違いなのだ」
「そう思うのであれば、王に直接直訴なされば良いのでは？　貴方の言い分が正しければ王が正しい対処をなさるでしょうから」
「王になど」
「その発言、国王への反意ととられますよ」
「黙れ！」
　五月蝿い、と顔を顰めそうになった。いけないいけない、と、シールは自分を律する。
「いいか、必ずだ！ 必ず貴様をこの国からたたき出してやる！」
　最後まで憎悪に満ち満ちた声で、最早周りの目など気にしない。体を大きく揺らし、憎悪を撒き散らしながら去っていく。

「元気な人だな。つくづく」
　シールは溜息をついた。
　彼は典型的な貴族だった。暗黒時代、特権階級による暴挙に加担していたと〝思われる〟貴族ルジア家の現当主だ。本来ならば、その折の越権行為を行った貴族達は厳しく罰せられ、良くて国外追放か監禁か、悪ければ処刑が行われていた。だが、ルジア家はその咎を逃れていた。
　しかしそれでも、何もかも無傷ですんだわけがない。統治する土地を削られ、権限を奪われ、国王との縁も遠くなった。つまるところ、彼の家は貴族としてとことん没落してしまったのだ。
　今回王城にいるのも、式典を理由で無理矢理乗り込んできたのだろう。
　本来なら、此処にいていい身分ですら、なくなってしまっているのだから。
　最早二度とルジア家は貴族として上に立ち上がることは無いだろう。既にどの貴族からも見放されている。構うものなどいない。彼の代で、全てがお終いだ。
　そしてだから、それ故に、改革を率先したキース、ゲルター家、オルフェス学院学院長ミストを、そして彼を切り捨て更正した国王を彼らは憎んでいる。憎悪している。
　しかし、正直シールにとってすれば、そんな事はどうでも良かった。一々この城に参上するたび絡まれるだけ面倒な相手だ。
　ましてそれがリーンにまで及ぶとなれば、
「そうだ、リーン先生」
　と、自分の背に逃げ隠れた彼女を見る。表情は俯き隠れ、何一つ言葉にしない。シールは僅かに不安がり、腰を落とし、声をかける。
「……リーン先生？」
「……ぅでした」
　小さく、何かを呟き、
「ぉっと？」
　言葉を聞き取る前に、リーンはシールの背中に寄りかかるように崩れ落ちた。

第七十六話 リーンの傷、闇夜の会合

　シールが倒れたリーンを抱いて、魔道研究室を訪れる。するとそこにいたメザイヤは、すぐさまリーンの状況を理解して、頭を下げてきた。
「ごめんなさい、シール」
　別に謝って欲しいわけではないんだけど、とシールは頬を掻いて、リーンを近くのソファーに寝かせる。メザイヤ以外の魔術師は部屋の奥から此方を伺うようにしているが、視線を向けると目を逸らした。
　やれやれ、と首を振り、メザイヤに手を振って頭を上げさせた。
「一応聞きますけど、何かあったんですか？」
「……魔術の指導をしてもらっていたのだけど。途中で顔色が悪くなって」
「でも無理して、そしたらダーミル様がやってきたと」
　リーンの髪を触れ、撫でる。僅かに顔色は悪いが、しかし体調が悪いというわけではない。これは体の問題ではなく、心の問題だ。そしてそれは例に漏れず、体の傷よりも遥かに厄介で、複雑だ。
「……まだ、治ってはいなかったのね」
　メザイヤは首を振る。何処か悔やむような顔をしながら。
「容易く治るような傷じゃないですよ。でも向き合う努力はしている」
　傷、そう、傷だ。リーンの心の根幹に深く刻まれた傷。シールと同じく過去の経験からう生まれたトラウマ。彼女はそれに深く傷つき、それ故に耐えようもない苦しみを得てきた。
　そして、それだからこそ彼女は自ら教師という職務をまっとうしようとする。自身のその負った傷に負けぬよう、抗っている。非常に不器用で荒削りなやり方ではあるが、努力はしているのだ。
　傷は、既に過去の事だ。そしてそれは時と共に癒える。幸運にも今、彼女は恵まれている。手に職があり、心の通じる友人もいる。いずれ傷は、別のもので埋

めていける事だろう。
　だが、かといって、その過程が困難でないとは限らない。
「だけど、だからこそ焦ってしまったんでしょう。この件は、リーン先生の焦りすぎが原因ですよ。貴方が悔やむ事じゃない」
　しかし、メザイヤは顔を俯かせ、悔やみ続ける。彼女もまた、リーンの心の傷を知っている。そしてそれが、国と言う形が負わせたものだということも知っている。故に彼女は、頭を上げない。
　彼女もまた、その罪に加担したと、少なくとも本人はそう思っているから。
「僕等はもう、大人です。自分達の管理ぐらいできないと」
　シールはそう言い、笑う。心配するなというように。そして改めてリーンを抱え直すと、
「今日はもう帰りますよ。挨拶回りも終わってますし」
「部屋ならあるわよ」
「城から離したほうがいいでしょう。ダーミル様と顔を合わせたくないし」
　彼のような人物のために、これ以上リーンを消耗させたくない。それがシールの心情だ。そのことを理解し、メザイヤはそれ以上は何も言わず、ただ申し訳なさそうのにした。
　シールは構わず、転移魔術の術式を刻む。向かう場所は【ガラーナ】だ。
「それでは、メザイヤ〝先生〟。こんな形で挨拶なんて申し訳ありませんが」
「いいえ、でも、貴方達の顔を見れて良かったわ」
　シールは笑みで返し、術式を発動した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　酒場【ガラーナ】
　その一室、シール達の利用している、この牢獄城の内部では数少ない宿泊ようの寝室にて、リーンはゆっくりと目を覚ました。
「……ここは」
「ああ、眼を覚ましたんですね？」

軽くぼーっとしているリーンを覗いて、シールはほっと息をついた。様子を見るに、気分が悪いとか、そう言う事は特にあるわけではなさそうだ。
　そのリーンは、最初は宙へと視線を彷徨わせ、しかし徐々に焦点をシールに合わせて、
「……私は」
「ダーミルに苛められてぶっ倒れたんですよ」
　そう聞くと、彼女の顔は歪む。辛さを感じて、とは違う、悔しさを堪えるような、噛み締めるような、そんな表情だった。シールは苦笑し、彼女の額に手を当てた。
「今回は失敗でしたね。気負いすぎで、そして焦りすぎです」
「……」
　シールの追い討ちをかけるような言葉に、リーンは無言で、僅かに喉を唸らせた。
　本当なら慰めの一言か、あるいは心配したと声をかけてあげるべきなのだろうが、リーンにそれは逆効果だ。そんな言葉をかけてしまえば彼女は心底ふてくされるだろう。何時もと顔は変わらないだろうが、まあ、それに、彼女とて、自分が、そして他の皆が心配をしてくれていたと言う事は分かっているだろう。だからこそ、これほどまでに彼女は悔しそうなのだ。
「食欲はありますか？ 何か食べたいものは」
「……」
「いらないんですか？ 城の食堂から来賓用のお菓子を貰ってきたんですがね」
「……食べます」
「では、お茶を入れてきましょうか」
　シールは笑い、この分ならば大丈夫だろう、と、そう思い、お菓子を取りに向かおうとした。だが、そうする前に、ぐっと手を引かれた。振り返ればリーンがシールの手を掴み、顔を俯かせている。
　シールは苦笑し、彼女の手を両手で取った。リーンは顔を上げぬまま、呻くように
「……私は」
「貴方の気持ちは分かりますけどね。リーン先生」

世間とズレる自分を感じる、というのは誰だって怖いものだ。ましてそれが決定的なものだと自覚しているのであれば、それは尚更だ。取り返そうと、乗り越えようと足掻く事は間違えてはいない。
「でも、だからって、気負いすぎれば空回って、最後にはつぶれてしまいますよ」
「……」
「あわてる必要なんて無いんですよ。一歩ずつ進めばそれで、」
　そう言っても、リーンは納得しない。そう言うところは、彼女は人一倍真面目で、頑固なのだ。シールは軽く息をつき、
「昔から、変わらないんだから。リーン〝ちゃん〟は」
「……その言い方は止めてください」
「すみません。リーン先生」
　シールはそう言い直して、もう一度リーンの額を僅かに撫でて、そのまま部屋の外へと出て行った。扉を閉め、一息つくと、
「あら、シール」
　扉の先にはケーナが待っていた。水差しと薬草、それとお菓子を盆に乗せている。さすがは分かっている、と言うべきなのだろうか。
　そのケーナは
「リーンの様子はどうかしら？」
「悪くはないさ。病気って訳じゃないしね」
「それでも一緒にいてやりなよ？」
　分かっているさ。とシールは軽く頷き。するとケーナも笑い、
「リーンも幸せだね。アンタみたいなのがいてくれて」
「何時も彼女には張り倒されてばっかりだけどね」
「愛情の裏返しだよ」
「愛ねえ？」
　訝しげに返すシールに、ケーナは軽く眉を立てて、
「あんたはさ、リーンがこのままでいいって思う？　こんな風に辛い思いをしたままでさ」
「良いわけが無いだろう。そんなの」

シールは即答し、
「それでいーのよ」
ケーナは笑う。シールはその意図が理解できず、ただ肩をすくめるだけに済ませた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

深夜、元より人の数の少ない牢獄城の内部は静けさを増し、闇夜に見えるのは、僅かに式典の準備で灯の明かりが城の彼方此方に点っているのみで、残るは暗闇だけだった。
牢獄城は強力な防衛機能を備えた防壁を備えているが、しかしその内部は未だ、完成しているとは言いがたかった。というのも、暗黒時代の騒乱の後、城壁内の街並みの一部が破壊され、それが未だ修正しきっていないのだ。
元は貴族達の道楽のための街道、過去、荒れた城壁の外を尻目に道楽の限りを尽くした者達の憩いの場だった地域、内乱の際は特に念入りな騒乱が起こった場所だ。そしてその場は現在もまだ、修繕を成されていない。
王はその地域の修正を必要と考えていない。元より、必要な城内のシステムは修正されており、また、騎士達の道楽に関しても既に完備している。これ以上の娯楽は必要ではないと判断したのだ。
故にこの場は当時の荒れた状態のままだ。かつての道楽と、更にそれを略奪しつくされた跡が強烈に残っている。

そんな崩壊の跡を、一人の男がフードを被り、人目を避けるように足を進めていく。

時折見回る騎士達から身を隠し、そしてその崩壊区域の先、まだ僅かに建物の面影のある廃墟へと入っていった。
中は、過去の騒乱の後がそのままあり、どう考えても生活の痕跡は存在しな

かった。しかし、それとは逆に、何故か奥には人の気配、そして明かりがあった。その人の明かりへと男が足を運ぶと、魔術で生んだ青い火を囲むようにしていた人影が、彼を見つめた。
「遅いぞ、何をしていたのだ」
　そしてその内の一人が、何処か苛立った声で、糾弾する。するとフードを被った男、僅かに垂れた頬、僅かにたるんだ頬、額に寄り、皺に髭、ルジアが、返すようにして、
「人目を避けていたのだ。慎重になるに越した事はあるまい」
「貴様の事など気にかける者はおるまいよ」
「人の事を言えた立場か！」
「何だと!?」
　口論が熱を上げる。互いが互いのプライドを傷つけられ、その内に殴り合いに発展しそうなくらいに顔を赤くさせた。それを見かね、もう一人、大きな白髭の目立つ男がその二人の合い間に入り、
「馬鹿が！　下らぬ言い争いなどする暇は無い!!　止めんか!!」
　その一喝に二人は不満げに鼻を鳴らすと、距離をとり、しかしその集団へと足を進めていく。そしてその全員が中心の火を囲んだ。奇妙な色の火に照らされて明かされるその者達の顔は、誰もが王城の重鎮であったり、没落した騎士であったり、有力の貴族頭首であったりと、その顔ぶれは様々だ。
　しかし一つ共通している事があるとすれば、その誰もが、何処か薄らぐらい、悪意と野心に満ちた表情をしているということだろう。そしてその一同の全員がその場で集い、しかし何かを待つように沈黙していた。
　そして、それから間もなくして、
「揃われましたね」
　声が響く。高いとも低いともつかない奇妙なその声の持ち主は、崩れた通路の奥から現れた。フードを被ったその者は、先に揃っていた男達と比べて背丈は低く、しかし逆に奇妙な威圧感を纏っていた。
「皆々様、わざわざこんな場所までご足労をかけました」
　まずはそう、頭を垂れる。すると腰の引けていた貴族達は、僅かに姿勢を持ち直し、

「我々は軽々しく足を運べる立場の人間ではない」
「それをわざわざ呼び出したのだ。意味は分かっているな」
　そう、威厳を保つように、高慢な物言いした。だがそれはどこか虚勢じみていた。目の前のフードの者、どう考えても真っ当とはいいがたい雰囲気を纏ったその者に、恐れを抱いているのかもしれなかった。
　フードの者はそんな彼等の態度に対して、僅かに口元に笑みを、嘲弄の意味の微笑をつくり、しかしあくまでも相手を敬う姿勢を崩さず、胸に手を当てて、
「ええ、無論、約束しましょう。皆様に混沌と勝利を」
　そう言葉を作り、そして更に続けて、
「我等が神、ラグナの名に誓って」
　そう、宣言した。

魔術学院の平和主義者

牢獄城・激動編

第七十七話 祭の始まり

　牢獄城、ガイディア国栄誉賞式典当日。

　月の出る夜に、魔術に照らされた牢獄城で人々が集まり、式典が始まっていた

　この式典は元よりめでたい祝い事というのとは違う、国家への貢献を成した者を讃え、賞を与える、言うなればガイディア国の身内だけで行われる表彰式だ。

　故に、特に理由も無く国外からの来賓が招かれる事も無く、また、一般の国民の前で大々的に行われるものでもない。行われるのは牢獄城の中、小さく囲われた頑強な城壁の内だけで行われる。

　しかし、その城壁の内は、狭いが故に細かく、入念に飾り付けられている。

　騎士達や働く者達を楽しませる娯楽街も華やかさを増し、本来地味な牢獄城も同じくマントが飾られ式典の雰囲気を出している。牢獄城の正門前の広場では騎士達が並び立ち、見事な戦列を決めていた。祭典用の美しい鎧と、槍を構えて毅然と並び立つ姿は頼もしさに満ち溢れていた。

　その背後に魔術師達が高位である事を示す深い蒼のローブを着込み、魔術水晶をはめ込まれた杖を構えている。高い知性と、魔術と言うこの世界を構成する最も重要な要素を掌握したと強調するようなその姿は、騎士達とはまた違った意味で存在感に溢れていた。

　城門を潜ると、前日まで丁寧に準備されてきた荘厳に飾られた城内の風景が見えてくる。ガイディア国の国旗の淡い赤と、金の獅子の紋様のマントが飾られ、更に騎士と魔術師が並び立つ。

　敷かれた道を順に、呼ばれた貴族達や、役達が歩んでいく。誰も彼も派手でこそ無いが、この式典に合わせた美麗な衣服を身に纏い、己が権威を静かに見せ付けて、歩んでいく。

　彼らは、騎士達と、魔術師達の間を抜け、長い道を進み、階段を上がり、進んでいく。更に大きな扉をくぐると、その先にあるのは、大広間、謁見の間だ。

牢獄城の外見とは裏腹に、広い謁見の広間。両端には騎士達と魔術師達が、中央には出席する貴族や役人達、騎士団の重役や魔道師団の代表もそこに並んでいた。
　彼等の前にいるのは、王族や、王と血縁関係にある貴族の重鎮達。王に近しい者達が、その地位に見合う姿をして並び立つ。その彼等の仰ぐ先には王座が、このガイディア国における最高権力者にしてその主。ガイディア王の王座が見える。権力の全てを得るその椅子に座る男は、ガイディア国王、老王は、それ故の威厳を体の内から溢れさせる。金糸で刺繍の施された厳かなマントを羽織り、静かに眼下を見下ろす様は、賢王の名に相応しい姿だった。
　そうして、着々と役者がそろい、並ぶ中、遂に、
「シールベルト様！　リーン・エリクス様の御来城！」
　騎士達の声と共に、この式典の主賓の二人が、その場に姿を見せた。
　一人は若い青年。髪色は黒と白の混じり、どこか少年のような幼さの残る顔には静かな微笑が伴っていた。身にまとう衣服は、高位の騎士が身に着ける神々の加護を示す優美な刺繍の施された魔道騎士の礼服だ。かつて勇者ベルレインも身につけていたというそれと同じ姿をした彼は、その格好に負けぬ颯爽さで騎士と魔術師達の整列を抜けていく。
　もう一人は、同じく若い女。周囲の魔術師達の身につけるその衣服より更に深い蒼色の髪をしている。その髪は丁寧に梳かれているのか風の流れに合わせなびかせ、前髪は紫色の宝珠で出来た髪留めでとめられている。身に着ける魔術師のローブは蒼ではなく、黒。最高位を示すその色は、彼女自身の美しさをより強く映えさせる。
　二人は並び歩きそして、謁見の間の前で止まると、顔を見合わせ、
「さて、それじゃあ行きましょうか」
「ええ」
　シールが笑みを向け、リーンが憮然と返事をして、二人は謁見の間へと入っていった。
　かくして、式典が始まる。あらゆる人間の祝福と希望を、そして悪意と野望の入り混じった王宮の中で、一夜の祭りが始まる。

第七十八話 水面下の悪意

『これにて、国務大臣アーウェル・ロズ・ガスタルフィア様からの御言葉を終わります』
　ガイディア国国民栄誉賞授賞式は、未だ何かしらのトラブルが起こることなく、比較的順調に進んでいた。と言って、式典事態は何か特殊なイベントを用意しているわけも無く、基本、選ばれた人々が用意した演説を行うだけなので、大したトラブルが起こるわけも無い。
　それでもほんの少しでも問題が発生した場合は、周囲に配備されていたスタッフが速やかに解決させ、式典の表にその問題を露わにすることを防いでいた。
『では、ガイディア国国王からの御言葉です』
　遂に王の式辞が始まる。ガイディア王が王座から立ち上がると、音声拡大の魔術が組み込まれた魔道機械の前に立ち、語り始める。
『まずはこうして、この式典に集ってくれた事に感謝を告げよう──』
　老いた声は、応接の広間に広がっていく。会場の皆はその王の言葉に僅かに背筋を伸びさせて、体を改めさせた。王の言葉は更に続く。
　式辞の内容は、過去、貴族と自身がしてしまった過ちへの贖罪の言葉。そして現在ガイディアがどのように歩んでいくかの指針の発表と、それに自身が残りの余生を賭けて尽力する事への宣言だ。
　数日前、リーンに語った内容を、更に詳しく、丁寧に語っていた。
　内容の是非は、この場にいる人によって、各々違うだろうが、ともあれ王の言葉である。会場にいる皆は一様に身動きせず、王の御言葉に真剣に耳を傾けていた。少なくともそういう姿勢を見せていた。
　そんな中、会場の最前線で王の演説を聞いているシールは、

　……肩が凝るなぁ

と、外面に真剣な表情を湛えながら、内心で愚痴った。
　ガイディア王には少々悪いとは思ってはいるものの、既に誠心誠意を持って王の式辞を聞こうという気力は残されていなかった。短く済むものならまだしも、国栄誉賞式典は国王も出席するだけあって、結構長いのだ。
　今は王の挨拶が進んでいるが、それまでに大臣等の挨拶、有権貴族等や王族の御言葉、かなり盛りだくさんにイベントがあって、ようやく王の式辞に至ったのだ。こういう式典において、形式、と言うのが大切なのは分かるのだが、こうまで長く立ちっぱなしにさせられると、うんざり思ってしまう。
　加えて、今着ている鮮やかな神々の紋章が施された式服が、中々体にずっしりとくる重さなのだ。確かにこういう機会にはうってつけの派手な衣装ではあるのだが、
「かっこいー服用意してあげるからさ」
　と、ミスト学院長は楽しげな声でそんな事を言って用意してくれたものなのだが、もう少し軽い服は無かったのだろうか、と愚痴りたくなった。こんな愚痴を言うなんて、幼稚な感情だとは思うのだが、実際思いのだから仕方が無い。
　しかし勇者ベルレインの服って……何の皮肉だろ
　そんな事をシールが思いため息をついた。するとその時、自分の横で、
「……っ」
　並ぶリーンの表情が僅かに揺れたのに気が付いた。
　体を動かさぬまま、僅かに横をのぞき見てみると、リーンの顔色はやはり悪かった。何時も以上に血の気の無い白い顔、綺麗に揃った指は僅かに震えている。
　やはり、無理をしているなあ。
　手でも握ってあげられればいいんだけどなあ、とシールは思う。が、流石にこの式典の最中に手を取るのは駄目だろうなあ、目立ちすぎるし。と、僅かに苦い顔をした。
　ま、これくらいは、と、シールは僅かに手の甲を彼女の手に触れさせた。当たるか当たらないかの触れ合い。ほんの僅かなコンタクト。此処に自分がいると言う事を、意思として伝える。式典の、王の目前ではリーンに触れることも、声を

かけることも出来ないが、それでも思いは伝えられる。
　すると、ふっと、隣で僅かに力の抜ける気配を感じて、シールは少しだけ笑みを作った。
　式典が終わったら、さっさと外に連れ出そう。シールはそう決め、そして、
『それでは、授賞式に入ります』
　いよいよ始まる祭典のメインイベントに、シールは心構えを改めた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　彼は、静かに時を待っていた。
　どのタイミングで事を起こすべきか、常に観察し続けている。何処に誰がいるのか、常に観察できる位置で見渡している。この状況に失敗は愚か、流れが淀む事も許されない。全て速やかに、そして正確に行われなければならない。
　故に彼は集中し、しかし、それを一切、外に漏らしはしなかった。
　一見煌びやかに見えて、高位魔術師達の厳重な結界が敷かれたこの空間。人の曖昧な感情すら絡み取りかねない。彼は周囲に同化するように、景観と一体化することを心がけていた。
　約束された時間は迫る。
　協力者である筈の者達が、徐々に落ち着きをなくしているのが気配で感じる。別段、彼等に何かを期待など全くしてはいないし、失敗したとして彼等がどうなろうと、全くどうでもいい。が、馬鹿な真似をしでかして此方に被害が及ばないか、それだけが気がかりだった。
　こんな憂いを抱くくらいなら、協力者などいらなかったか。
　彼は馬鹿馬鹿しそうに、口の中でぼやいた。だが、今更そんな事も考えていられない。どちらにせよこのミッションにはあの愚かしい馬鹿どもの存在が必要不可欠なのだ。もし不確定が過ぎるのなら消せばいい。それだけだ。
　彼はそう納得させる事で邪念を払い、神経をより鋭くさせた。
　もう、間もなくだ。最後の式辞が終わる。そして、その後は、
『それでは、授賞式に入ります』

さあ、始まるぞ。

彼は胸中で凶悪な笑みを浮かべた。

第七十九話 最悪の光景

『それでは、授賞式に入ります』
　司会進行を進める男の言葉が響き、僅かに緩んできた会場が再び引き締められる。同時に準備していた演奏者等が一斉にファンファーレを鳴り響かせ、式典の雰囲気を盛り上げる。
『国民栄誉賞受賞者、シールベルト、リーン・エリクス』
　拍手が沸きおごると同時に、シールとリーンは静かに頭を下げた。そして頭を上げると静かな表情で前を、王座を見上げる。彼等の視線を受け、ガイディア王も視線を返した。
『シールベルト。前へ』
　言葉を受け、シールは静かに階段を登る。
　赤の絨毯を踏みしめ、颯爽と王座への階段を登っていく。周囲の観客からも視界に彼が映り、シールのその若さからなのか、毅然とした姿からなのか、どよめきと感嘆ともつかない声が漏れてきた。
　そして、王座の前に彼は立った。幾つもの視線を、あらゆる感情の入り混じったそれを背中に感じながら、ガイディア王へと視線を向けた。
　王は、老いた上での緊張からなのか、軽く強張った表情をしながらも、真剣な眼差しをシールへと向けていた。シールは彼の気分を解すように、ほんの少し肩をすくめる。と、王も軽く眉を上げ、小さく微笑んだ。
　王の手元には、既に重厚な賞状が用意されている。
「シールベルト。貴君をこの国に対する高い貢献を認め、ここに賞す」
　シールは再び頭を下げ、賞状を受け取る。拍手が背後で巻き起こった。
　数歩下がり、改めて頭を下げ、階段を降りていく。その際更にもう一度大きな拍手が送られ、シールは会場の皆にも改めて礼をして、リーンの隣に戻った。そして、

『それでは、リーン・エリクス。前へ』
　リーンが前へと進む。シールは彼女の体調に不安も覚えたが、しかし少なくとも、上へと上る姿は毅然としていた。だがシールの目には、僅かに彼女の体がブレているのを感じた。
　この表彰が終われば何もかもが終わるのだ。もう少し、頑張ってくれ。シールは彼女の危うい背中に、胸中でそう呼びかけた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　来た。来た。来た。
　彼は極度の緊張と興奮から脳髄から痺れてくるような感情を感じていた。だが暴走するわけにもいかない。傍観者のように目の前の光景をただ観測するようにして言い聞かせた。
　満を持して、王座の前へと昇り来るのは、真っ当な感情を持ち合わせていない彼ですら息を呑むほど美しい女。蒼い髪を靡かせ、闇夜のようなローブを纏った美女。
【魔帝】【蒼の化身】【理の支配者】【戦場の福音者】
　リーン・エリクス。稀代の魔術師、〝人類史上〟最強と呼ばれる魔術師。
　順調、全ては順調に進んでいる。だが、緊張を保ち続けろ。あの女は此方よりも遥かに上の存在だ。一つの隙でも見せれば、その瞬間圧殺される。
　リーン・エリクスは王座への階段を上りきり、静かに礼をする。ここから見える彼女の表情には、何処か疲労のようなものはあるが、しかし疑念は無い。
　感づかれてはいない。見抜かれてはいない。この策謀に。だから、落ち着け。
　更に一歩、リーンは進む。賞状を受け取るために。
　会場の全員が彼女へと視線を向ける。共犯者を除いて誰一人、疑いの無い瞳で見ている。
　そしてこの時点で、彼は
　勝った
　短く、そう確信し、紡いだ。魔の言の葉を。

事は瞬間だった。
「リーン・エリクス。貴殿をこの国に対する高い貢献を認め、ここに評す」
　王が言葉を続け、リーンが賞状を受け取る為に前へと出た、その時、その変異に真っ先に気が付いたのは、階下で彼女を心配げに見守っていたシールだった。
「……？」
　恐ろしく小さな音。耳を澄ましても聞き取れないような、そんな極小の音の、その〝気配〟とでも言うべきものを、シールは感じた。
　そしてその気配は、形になる。
「【閉じよ】」
　その言葉は誰が紡いだのか、会場の彼方此方に反響するように響いたその言葉は、しかし間違いなく、魔術の詠唱だった。シールは、そして周囲で王の危機に身構えていた騎士達は身構えた。
　だが、その動きを哂うように事は動く。
　騎士達が武器を身構え、動こうとした瞬間、会場の照明の全てが、機能を停止したのだ。
　月明かりも無い静かな夜。魔の明かりを頼りに闇夜を裂いていた牢獄城は、呆気無く闇に侵食された。
「……え？」
　戸惑いの声が闇の中で響いた。誰かが、あるい誰もが思わず漏らした声なのかもしれない。華やかな式典のその最中、唐突に広がった暗黒に、誰もが唖然とし、しかし徐々に混乱が広がっていく。
「□……!?」
「……！　……!?」
「…………!!」
　華やかさが一転、闇と混乱の悲鳴に包まれた会場。
　視界の一切が封じられ、会場にいる全員は慌て動き、見知らぬ誰かにぶつかって、無様に声を上げながら転げていった。
　だがその中でも魔術に心得のあるものや、会場に備えていた魔術師は、魔術に

よって明かりを作ろうと呪文を唱え始めていた。シールもまた、明かりを得ようと術を唱える。
「【光よ在れ】」
　だが、術は発動しない。術式が構成する前に、なんの魔術が働いているのか、魔力が形になる前に霧散してしまう。そしてそれを確認した瞬間、イングラムと思しき声が会場に響いた。
「王を守れ!!」
　その言葉に騎士達が動く。理解したのだ。これが何者かの悪意による〝敵襲〟だと。
　最前列にいたシールは既に動いていた。見えぬ暗闇の中を駆け上り、叫んだ。
「リーン先生!!」
　それは連携を呼びかける声であり、王を守れと指示する声であり、彼女自身の身を案じる声でもあった。だが、そのシールの呼びかけに対して返事は無く、
「□□!!」
　声にすらならないような、彼女の悲鳴。
「っ!!」
　シールは跳ぶようにして階段を駆け上る。だが、上りきるその直前、
「明かりが、」
　消えた時と同じく唐突に、照明の魔術の明かりが戻っていく。応接間の入り口から順々に、光が広がり、整列が崩れバラバラに散らばった人々を照らしていく。
　シールの眼前、王座の前も明かりで照らされる。
　そしてシールは、その〝光景〟を目撃した
「……！」
　視界に目一杯映る真っ赤な色。王座に寄りかかるように倒れ伏せ、腹部から血を流した王と、血で穢れたナイフを〝握り〟倒れ伏したリーンの姿。
　おおよそ、考えうる限りの中でも、最悪の光景が広がっていた。

第八十話 王の反逆者

　血を流し伏した王。その血でぬめり、怪しく煌くナイフを握り、同じく地面に倒れ伏したリーン、眼前の光景にシールは一瞬息を止め、しかし直ぐに頭を振り、
「リーン！」
　咄嗟に呼び捨てて、シールは彼女の元へと駆け寄り、うつ伏せに倒れる彼女を抱きかかえた。彼の背後からは騎士達が背後から王へと駆け抜けていく。
　リーンの体を抱き起こし、見ると、一目見て分かるような大きな怪我はしているようには見えない。だが、腹部が僅かにローブが裂け、腹に小さな切り傷が出来ている。
「……これは」
　シールはローブを更に裂き、見る。傷口は小さく、しかし、赤黒く脈動する術式が、徐々に広がっている。まるで生きて、彼女を内から喰らい尽くそうとするように、毒性の魔術術式。呪術だ。シールはそれを察し、傷口を指で触れ、
「【封印】」
　彼女の体の内に封印を施す。すると広がりつつあった呪術は速度を失い、脈動を止めた。だが、術式そのものが消えたわけではなく、彼女の意識が戻る気配も無い。
　呪術の依り代があるな。シールがそう分析し、次に王の様子を見ようと体を捻った。
　だが、
「動くな」
　首筋に槍の刃を突きつけられて、シールは動きを停止した。
　瞳だけ動かして、周りを見る。国王を守る直属騎士達が、誰であろうシールとリーンを囲い、その槍を突きつけ、敵意に満ちた視線を向けてきていた。

「何を、」
　と、問おうとして、意味の無い事だと察した。リーンの手に握られたナイフ、王の腹部から続いた血の跡がそのナイフに続いていた。その光景を見れば、誰だって考える事は一つだろう。
　リーン・エリクスが、ガイディア王を暗殺しようとしたのだと。ならばシールに疑いが行くのも当然だ。
　シールは溜息をつき、問うた。
「王は生きているのかい？」
「黙れ、手をあげろ」
　冷酷な、感情の一切を捨て去ったその言葉に、シールは浅く手を上げる。
　自分を囲う騎士達のうち何人かは、先日指導をつけた騎士達だとその挙動からわかったが、しかし、さすがにこの状況で手心を加えてくれることは無いだろうな、と、シールは苦く思った。
　暗闇に慌て混乱していた人々は、明かりが戻った今、更に強力な混乱に見合われていた。彼等の位置からは王の姿はよく見えない。だが、「王に何かがあった」それは分かっていた。だからこそ混乱していた。
　暗黒時代の終わりから今に至るまで久しかった血と野望の気配、大なり小なりそれに振り回されてきた観客達は、それ故に動揺も激しかった。
「見たぞ！」
　そんな中から、声が響いた。不安と言うよりも、歪な興奮に満ちていた声が。
「リーン・エリクスだ！ あの女が王に襲い掛かったのだ!!」
　声の主はダーミル・ルジア。先日シールたちに絡んできた男、没落し、落ちぶれたルジア家の当主。その男が興奮に満ちた声で、叫ぶ。
　動揺は更に広がった。彼の言葉の信憑性は関係ない。今、事実として王が倒れているのだ。そしてリーン自身は気を失い、自身を弁護する事もままならない。故に、彼の言葉は半ば事実として、広間の全員に広まっていく。
　シールが彼を見ると、ダーミルは批難するように口を歪めてはいるが、その瞳の奥が哂っていた。「いずれ追い出す」その妄言を事実にできたことを喜ぶように。
「……なるほど」

視線をリーンに戻す。

背後に広がる困惑と混乱、そして罵倒、徐々にシールとリーンへと向けられていく。

「……ふむ、」

しかし、そんな罵倒と混乱の悲鳴が入り混じった状況の中にいながら、シールは胸中では全く気にも留めてはいなかった。そして至極冷静に、現状を考察していた。

この場で何が起きたのか？　考えねばならない。狙い済まされ、明かりが落とされ生まれた暗闇。僅か十数秒の短い時間の間に王が血を流し、リーンも倒れていた。悪意に満ちた呪いとナイフのおまけ付きで。

この現状、リーンが王を殺そうとしたという可能性は真っ先に却下する。彼女は確かにこの国に対して様々な感情を溜め込んでいるが、しかしこんな馬鹿な真似をするほど狂ってはいない。

だが、そうするとあの状況は、そう、シールが考え始めた時だった。

「……ふぅん？」

視線に気が付いた。濃厚な悪意、否、殺意と言っていいようなものに。

会場の観客達からの安易な敵意ではない。もっと研ぎ澄まされた、鍛え抜かれた刃のような殺意。深淵の底から溢れてくるような邪悪。幾度も戦場を経験したものにしか生み出せないその気配

何処から向けられているのかは分からない。それを察させるほど甘い相手ではないようだ。だが、それは確かにこちらに向けられている。それは間違いない。

めんどうくさいことになったなあ

そんな風に、少々諦観じみた感情を思いながら、シールは息をついた。それが周囲の騎士たちには侮りにも見えたらしい、彼等の内一人が何処か苛立つように、

「聞いているのか！ 体を地面伏せろ!!」

と、頭を押さえつけ、シールの体を地面に叩きつけた。その上で槍を突きつける。

「魔導部隊！ 拘束しろ!!」

騎士の呼びかけに応じ、魔導師達が近寄ってくる。マナを封じる拘束術式を編

む事くらい、魔導師団の彼等には造作も無い事で、それで彼を拘束するべく動く。
　だがそれでもシールは冷静に、現在の大まかな状況は理解していた。だがこれ以上は情報が足りない。混乱に満ちたこの場ではこれ以上の情報は集まらない。
　今明確に分かっているのは、リーンが嵌められたという事実。そして、これから更に自分達を貶めようとしている、その予測のみ。
　故にシールは、瞳を一度閉じて、そして決断し、息をついた。
「しょーがないね」
　言葉と共に、シールは僅かに身じろぎする。騎士達はその動きを見逃さず、
「動くな！」
　呪文を紡ぐ動きをすれば喉を裂き、術式を発動させようと動けば腕を刎ねる。その準備が騎士達にはできていた。だが、シールの挙動はあまりに小さい。指で地面を一つ叩いただけだった。
　だが発動した術式の規模は、その挙動とは相反し、
「っなんだこれは!?」
　シールを中心として地面に瞬時に広がったのは、奇妙とも言える紋様の描かれた巨大な封印術式の魔法陣。シールを囲う騎士達をも捉えていた。
「悪いね」
　シールは軽く微笑み、更にもう一度、地面を指で叩いた。
「【封界】」
　そして魔術が発動する。
　赤く脈動し発動した術式は、瞬時にその場にいた騎士も魔導師も平等にマナを奪い去る。身体と密接に関わるマナを唐突に奪われ、全員、力を失い膝を突く。
　倒れていく騎士達の中心で、シールはリーンを抱きかかえて立ち上がる。
「じゃ、またね」
　シールはリーンを抱え、跳躍した。慌て、新たに囲おうとした騎士たちを飛び越え、更に慌てふためき動揺する会場の賓客たちをすり抜けて、応接の広間を飛び出した。
　残された騎士たちは暫く呆然としていたが、王族の一人の、
「追え！　王の反逆者だぞ!!」

という号令にはっと気が付いて、広間に並ぶ騎士たちも、魔術師達も、シールを追う。

　状況は変わらず最悪だ。シールは当たり前のように、現状をそう判断した。

第八十一話 野心の行き着く先

　式典であってはならない大事件の発生で、城内はパニックに陥っていた
　表彰されるべき人間が、王を暗殺しようとした。その情報は事実がどうかの正誤を構わず、瞬く間に城内の全てに広がり、それ故に誰もが理解できずに混乱した。何しろ、事実であっても虚構であっても王が倒れた事には変わりないのだから。
「……もう、面倒だなあ、本当」
　そんな中、現在目下〝暗殺犯〟とされているリーンをシールは抱え、溜息をつきながら颯爽と、逃走し続けていた。応接間を抜け、廊下に出て、更に待ち伏せる騎士たちを避けるために右に左に、階段も上って、今は三階の廊下を駆け抜けている。
　背後から広がる騎士たちのざわめき。怒りと混乱に満ちた声の多重奏にシールは慌て、急ぎ、走り続け、同時にこの場から逃げるため転移術式を刻んでいく。
「【彼の地へ運べ】……って、駄目だね」
　だが、使おうとした転移術式は、まるで反応しない。先ほどの暗闇の中で魔術の発動を阻害されたように、術式の発動を邪魔されている。だが、これは〝何者か〟の仕業なんてものではない。【牢獄城】のセキュリティからのものだ。
　牢獄城の強力な結界は敵の進入を防ぐための物だが、逆に内部に侵入した敵を取り逃さない為の術式構成も取り込んでいるのだ。それが発動した時はまさしく【牢獄城】という名に相応しい特性を秘める事になる。
　今回の場合、その捕らえるべき敵と言うのがシールとリーンに当たる訳だが。
「リーン先生、リーン先生？」
　シールは走り抜けながら腕の中の彼女に呼びかけるが、返事は無い。
　相当強力な呪いだ。常人ならあっという間に死を迎えるようなレベルの呪術。しかもその術式構成の源を別個に用意し、解呪を難しくしている。随分と念入り

なやりようだ。封印術で呪いの悪化を止める事が出来たが、安心できる状態ではない。
　早く彼女を安全な場所に連れて行ってやりたい。だが、
「シールベルト！　動くな」
　そう簡単には行かない。
　駆ける廊下の先には、廊下の奥に並ぶ騎士達。剣や槍を構え、道を塞ぐ。
　騎士達の動きにはよどみは無い。だが、情報の錯綜。突如起きた王の暗殺事件、更に犯人が湛えられるべき式典の主役と言う滅茶苦茶な情報の伝播によって、混乱が隠せていなかった。
　惑いながら、しかし騎士としての役割を果たさなければならないが為に、彼等は叫び、
「止まれ！　止まらなければ──」
　だが、相対するシールには一瞬の躊躇も無い。
「【封断偽剣・五式】」
　リーンを腕で抱え、片手を突き出し唱える。
　短い詠唱のみで挙動無く発動した巨大な封印剣は、一瞬で遠くに構えた騎士達へと突撃する。狙いを定めぬ強力な一撃は、何人かの騎士を捕らえ、マナを奪い去った。それでも攻撃に反応し、避ける者もいる、そもそも当たる位置に立っていない者も、だが、シールは更に魔の言葉を紡ぐ。
「【五式・追加・六式】」
　正面を穿つ様に突き立った封印術式の大剣は、突如としてその平らな体を波うちさせ、一気に幾つもの糸状に裂けて行く。そして全方向に分かれ突き立ち、逃れた騎士たちを貫き、マナを奪い去る。
「ば、かな」
　呻き、崩れ去る騎士達を尻目に、シールは走り去る。すると今度は背後から。
「距離を詰めろ！　彼には無意味だ!!」
　指示が飛ぶ。その声には聞き覚えがあった。打ち倒した騎士達の中心で振り返ると、奥から新たな騎士達の一団が、その中心では見覚えのある女騎士が一人。
「やあ、ニーニウさん」
「シールさん！　おとなしく投降を！」

「いやだね」
「……っでは、おとなしく捕まってください!!」
　騎士達が距離を詰めてくる。シールの封印術を警戒した動き、ニーニウという、シールとの戦闘を経験した彼女らしい戦術だった。
　だが、それでもシールはリーンを手放すことなく、地面を足で蹴り付ける。
「【封印】」
　蹴りつけた場所に発動したのは単純な封印術式。
　封印術の効果はシンプル、術式に込められたマナの分だけ、触れた対象から奪い去る能力。慌て、シールに迫っていた騎士達は、突如現れた術式に触れ、一瞬、両足のマナが奪われる。
「っとぉ!?」
「うわあぁ!?」
　足の力が突如抜け、先頭の騎士はぐらりと体のバランスを崩し、倒れた。先頭が転び、その倒れた体に足元をすくわれ次々に倒れ、
「はい、【封断・五連】」
　倒れた騎士達に、シールは掌から攻撃型の封印術式を発動する。重なっていた騎士達はまとまって、一気にマナを奪われ意識を失った。
「さて、」
　崩れた騎士達を跨ぎ、前を向けば、残っているのはニーニウだけだ。
「ニーニウさん。逃がしてくれないかな」
「シール、さん……」
　彼女は一瞬躊躇い、しかし術式の刻まれた魔槍を構え直す。
「どうか、投降を」
「別に僕も彼女も、王の暗殺なんてしていないよ」
「ならばこそ投降し自身の潔白を証明してください！　逃げては立場が悪くなる一方だ！」
「そりゃ無理だ」
「何故ですか！　意味が分かりません！」
　焦る様に、苛立つように叫ぶ彼女に軽く肩をすくめ、
「ニーニウさんがそう必死になるのは、イングラムが捕まったからかな？」

「っ！」
　彼女は息を詰める。どうやら当たっていたらしい。シールは苦笑した。
「王の暗殺未遂の容疑者、その者と関わりある者として拘束って感じ？」
「……そうです」
「これだと、メザイヤも捕まったかな？　指示したのは第三王子かな？　彼ならば言いそうだ」
　返事は無く、沈黙。つまりは肯定だ。
　予測していたその答えにシールは、なるほど、と納得したように頷く。そしてそのまま眠り続けるリーンを抱え直し、壁に寄りかかり、ニーニウを見つめた。彼女はそんなシールを前に、苛立つように、迷うように眉を潜め、
「……何が起こっているのですか」
　答えを求め、問うた。シールはその問いに嘆息し、言った。
「戦争だよ」
　暗殺よりも、遥かに凶悪な意味を孕むその言葉、ニーニウは息を呑む。
「権力者達が自身の利権を求めて、身勝手に周囲を振り回す、戦争。分かるかな」
　そこまで言い切ってシールは笑う。
　その笑みは、強い嫌悪感の篭もった、とても、とても残酷な笑顔だった。
「……せん、そう」
　ニーニウは乾ききった口の中でその言葉を転がして、呻いた。
　そんな彼女の様子を見て、シールは半ば同情する。彼女は若い。こういった混乱に対する耐性が無いのだろう。ならば、仕方が無い事だ。同情する。
　が、それでも、今は逃げないわけには行かないのだ。
「【封断・物質封印】」
　途端、彼が寄りかかっていた壁が、綺麗に長方形の亀裂が入り、傾き、外に倒れる。
「じゃあね、ニーニウさん」
　傾き、シールはリーンを抱えたまま、壁を倒し、開いた穴から飛び出す。ニーニウは外に飛び出す二人に手を伸ばすが、届かず、あっという城壁の外へ落ちていく。

「……!!」
　顔を出し見下ろすが、既に二人は闇夜の中に消えていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　その頃、式典の会場では、混乱していた観客もその場に留まっていた。シールがリーンを連れて逃げた故に、彼らが暗殺犯である可能性が最も高いと思われるが、しかし疑いは観客にも向けられている。真の犯人はいないか、協力者がいないか、魔導師達が調査を続けていた。
「逃がしただと!? 何をしているのだ貴様等は!!」
「追え！ 草の根を分けてでも探し出せ!!」
　そんな中、混乱する集団に紛れ、けたたましい声で騎士や魔術師達を罵る一団があった。事件が起こるや否や、〝きわめて迅速に〟シールとリーンの捕縛やイングラム達の拘束を命じた者達だ。
　そんな彼等の内の一人には、王族の姿もいた。
　彼はガイディア王の息子、第三王子だ。王子、と言っても、既に齢四〇を超えている。彼の母方は過去、〝暗黒時代〟に権力を掌握していた大貴族の娘だった。貴族が王家に近づいて権力を得るために宛がわれ、その結果生まれた男だった。
　つまりは、彼は誕生にこそ意味があり、それ故にその後の余生誰も期待をしなかった。第三王子と言う立場上、王位を継ぐこともままならない。更には暗黒時代の終わりと共に、母方の家は力を失い、より一層、力を失った。
　それが彼には不満だった。彼の心には常に滾るような野心があった。何もかもをてにいれてやろうという救いようの無い野心が。
　先に生まれてきた王子達は寝ぼけている。彼はそう思う。老い、既に死に掛けている老王が未だ出張っているこの状況に、第一王子も第二王子も気にも留めない。いずれは自身が相応の地位に着くと知っているからこその、生温さだ。
　彼は、そんな兄達を憎悪し、故に権力を求め望んでいた。我こそが、我こそが力を持つに相応しいのだと、そう信じて止まなかった。
　彼を取り巻く者達も、その立場や、事情が違えど、抱く野心は同じだ何かを望

み続け、渇望する事をやめた事は無かった。己が富を権力を求め、追い続けていた。
　だからこそ、彼等は、〝彼〟に賭けたのだ。今回の計画を。
　それ故に、シールベルトとリーン・エリクスの逃走と言う事態に、彼等は焦っていた。結果だけ見れば、彼等に〝罪を与える〟事がスムーズに進んだ。
　だが、本来ならシールとリーンは、有無言わさず拘束するはずだったのだ。
　何故なら、彼等は、とてつもない危険因子だったからだ。今回の計画をあっけなく崩壊させかねないほどの、危険な存在だからだ。
　それ故に、シールがリーンを連れて、逃走し、自分等の計画から外れた行動を取った事を恐れていた。彼等は誰しも大なり小なりシールに、シールの背後にいるオルフェス学院学院長・ミストの手によって、痛い思いをしてきたのだ。
　だからこそ、彼等は騎士達、魔術師達に罵声を向ける。自らの保身の為に。
「必ずだ！　どんな事をしてでも捕まえねばならないのだ！　分かっているのか貴様等!!」
　そしてそれは、ダーミル・ルジアも同じだ。彼はその弛んだ頬を揺らし、額に血管を浮き上がらせて叫ぶ。彼にとって今回の事件はミストやシールへの報復行為でもあり、それ故に彼の逃亡を許せなかった。
「……はっ、申し訳ございません」
　その彼の罵声と怒声を真正面から受ける人物、ダルシアだ。彼は、シールとかかわりある者として拘束されたイングラムの代行として担ぎ出されていた。現在の彼の役職は騎士大隊長代行だ。
「あの男だけは逃がしてはならないのだ！ あの男だけは……！」
「……」
　ダーミルは叫ぶ。半ば、本音が漏れているが、しかし咎めるものはいない。口を挟み、その結果として火の子が飛ぶのは誰だって嫌だからだ。
　ひとしきり、叱責、というよりも愚痴のような言葉を聞いた後に、ダルシアは口を挟み、
「今すぐ、城の外に追っ手を出します。既に城壁には【反転結界】が敷かれていますので、逃げる事も転移魔術をすることも出来ないはず。必ず捕えてみせましょう」

そう告げ、部下の騎士たち、魔導師達に指示を送った。彼等は何処か表情に、助かった、と言うようにその場から去っていく。そして同様に罵声を浴びせていた側の者達も去っていった。
　残っているのはダーミルと、そしてダルシアのみ。
　そしてダーミルは、残ったダルシアに近づくと、周囲をあわただしく行きかう騎士や魔導師たちの耳に届かぬよう小さな声で、告げる。
「分かっているなダルシア、これは我等のためでもあるのだ」
「……わかっております。叔父上」
　ダルシアのフルネームはダルシア・ルジア。ダーミルの甥だ。

第八十二話「内乱」

　大体三階から、一気に地上へと落下したシールとリーン。
「【風よ運べ 我らを望む場所に】」
　シールはその落下中に魔術を唱え、落ちる勢いを緩和する。
　牢獄城から少し距離をとって立てられた屋根の上に着地と同時に飛び降り駆け出した。
「城外に逃げ出したそうだぞ！ 探せ!!」
　背後から、階下で待ち構えていた騎士たちが此方を追いかける音がする。動きは早い。流石は王国直属騎士。国王が傷つけられたと知れば、彼等とて必死になるだろう。
　別段、追いつかれるつもりはないし、逃げ切る自信が無いわけではない。
　しかし、彼等はあくまでも自分の職務を全うしているだけであり、悪意があるわけではないのだ。問題なのは、リーンを罠にかけ、彼女に罪をなすりつけた、〝真犯人〟とその〝協力者〟だけだ。
　しかし、これからどうするべきか。
　逃げようと思えば逃げられる。だが、このままでは何時まで立っても追いかけられ続ける。王の暗殺犯、騎士たちが追うのを諦めるわけが無い。まだ、王が死んだかどうかも分からないが。
「いっそ国外逃亡でもしてしまおうかな」
　そう言ってみるが、しかし現実感が無いし、逃げる当てもない。大体、学院では子供達が待っているのだ。そんな彼等に、「先生は王の暗殺容疑」で逃げ出した、なんて事が伝わったらえらいことになりそうだ。
　やはり何とかするほか無いのだが、しかしどうするべきか。
「……！ ……たぞ!!」
　考えている内に、背後からの騎士達の声、

「、早いな」
　シールはリーンを抱え直し、駆ける。闇にまぎれて逃げ続けるが、背後から魔術の光も追ってくる。反転し、反撃するかどうか、選択を迫られたシールは、しかし、
「っと?!」
　わき道から突如伸びた影に体を引っつかまれ、一気に引きずりこまれた。

「何処だ！ 探すんだ!!」
　闇夜の大通りを騎士たちは走り続ける。左右に取り付けられた街灯と、右手に備えた魔動機で暗闇を照らし、わき道の暗闇もくまなく照らしていく。だが、人影は見えない。
「此処で分かれる！ 散れ！」
　騎士たちが散開する。その場に残ったのは騎士達を率いていた騎士長の一人のみ。彼は式典に起きた暗殺事件に苛立っていた。万全を期したと思っていた警備、そんな中起きた大事件に、自分達の威信が崩されたように思えていたのだ。
　それ故にシール等を探そうと躍起になり、しかし結果は伴わず、苛立ちは増していた。
「……隠れる場所などそう無い筈だが」
　牢獄城、城壁で区切った内に在るこの場所だ。隠れられる場所と言ったら建物の中くらいだが、其処も既に家捜しが始まっている。ともすれば、協力者の可能性も無いわけではないが、
「くそっ」
　苛立ちをぶつけるように、足元に転がる小石を蹴り飛ばす。すると綺麗に蹴り転がった小石はころころと綺麗にわき道へコンコンと転がって、その先で、カン、と、一際高い音を立てた。
「……うん？」
　不自然なその物音に、彼は不審気に顔を歪め、ゆっくりと近づいていく。暗闇

の中で、魔動機で照らしてよく足元を見てみると、僅かに薄っすらと切れ目のようなものが地面に見えている。
「……んん？」
　更によく見ると、その一辺には取っ手のようなものが見えている。其処を掴み、ゆっくりと引き上げてみると、其処には、
「……」
「よお」
　筋肉隆々の髭だるまがニッカリ笑顔で待ち受けていた。
　そして次の瞬間に野太い腕が飛び掛ってきて、
「っっっぉっわ!? が、むむぐぅ!?」
　悲鳴をあげる間もなく、兜を剥がれ口をふさがれ、首を絞められた。僅かに暴れ、抵抗のつもりか足をばたばたとさせたが、数秒も経たぬ内に気を失った。
　気を失って更に数秒後、髭の筋肉だるま、ガラムの横でシールがひょっこり顔を出して、
「……助かったよ」
「なんか騒がしいと思ったら、やっぱりお前等かよ」
　その言葉に、シールは苦々しい笑顔を向けた

；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；；

「国王暗殺ぅ？　おまえらがぁ？」
「だから、僕等はやってないって」
「人の話聞きなっての！」
　シールは、こんな状況ですらひたすらいつもどおりの彼等の様子に苦笑した。
　今、彼等がいるのは【ガラーナ】から少し距離を置いた通路に隠された、食料保管庫だ。人口が密集しており、店も限られるため、食料の備蓄もかなりの量が求められる。その為の場所だ。
　ガラムに拉致されるようにして連れられたのが場所が此処だった。
　既に此方の状況を予測していたのか、倉庫の中に入るとケーナもいた。リーンは彼女が用意してくれた簡易のベットで横にしている。更にちなみにいえば、先

ほど気絶させた騎士長はふんじばってそこら辺に転がしてあった。
　そしてシールはそこで、現状の説明をした。
　式典の最中、突如明かりを消されたこと、明かりがつくとリーンがナイフを握り倒れ、王が血を流して同じく倒れていた事、自分達が犯人にされそうになったので逃げた事、正直かなり滅茶苦茶な話だと思ったし、自分達が犯人ではないかと疑われても仕方が無いような状況だと、シールも思っていた。が、
「いやー、今回はまた厄介な事に巻き込まれたもんだなあ」
「大変だねえ。あんたら本当に一度厄払いした方がいいんじゃないの？」
　うんうん、と、二人は納得したように、当たり前のように受け入れた。
「……いや、もう少し驚かない？ 二人とも」
「や、まあ、こんなこったろうと思ってたからなあ」
「今日中に城が爆発するんじゃないかと思ってたくらいだよ。私は」
　夫婦は二人そろってそんな事をのたまった。どこまで不吉な予想をしていたんだろう。この二人。というかどれだけ信頼が厚いんだろう、僕等のジンクス、と、シールは顔を引きつらせた。
　しかし、そのカンのお陰で助かったのは事実ではあったが、
「……」
　リーンは未だ目を覚まさない。腹部から広がった呪いの影響をまだ受けている。ある程度の呪いなら彼女は自分自身で開放する事が出来るが、今回は侵食すら防げていない。シールの封印術で何とか留まっているだけだ。
「……やばそうなのか？」
「そうだね。厄介な呪いだよ」
「メリアならなんとか出来るんじゃないのかい？」
　メリア、オルフェス学院での保健室室長を務める彼女もまた、昔からの馴染みでもある。そして【聖人】に近しいレベルの高い治癒術を扱える稀少な人物でもある。彼女なら確かに、この呪いも時間をかければ、〝根源〟を破壊することなく開放できるだろう
「でも今彼女をよびだせないだろうしなあ」
【牢獄城】の城壁の結界も既に発動しているだろう。出る事は難しいだろう。今はシールが逃げたため、外のほうがかなり頑強な警備が敷かれている。それらを

打ち倒し逃げられないか、といえば出来るとは思うが、しかしそうすればいよいよいもって、完膚なきまでに犯罪者だ。そんな状態でメリアの世話になるわけには行かない。
　そう言う意味では、今、ガラムやケーナに今世話になっている事もかなりの迷惑をかけていることになるのだが、その彼を見ると笑い、
「俺達に迷惑がかかるとか、そう言う話なら今更だからすんなよ」
　そう言って笑う。慣れた言い様だった。
「で、どうすんだいこれから」
「城に戻るよ」
　シールのあっさりとした物言いに、ガラムは眉を浅く立てた。
「だがよ、今は滅茶苦茶警戒されてんじゃねーの？」
「現状を打破するには、〝真犯人〟を探し出すしかない」
　だが、シールを除いて、彼の味方となりえる人物は全て捕らえられた。そうニーニウが言っていた。それ故に何時か誰かが問題を解決してくれるとは期待できない。
　今、動けるのはシールしかいない。
「でも、なんでイングラムのヤローやメザイヤまでつかまったんだ？」
「簡単だよ。彼等が僕等の潔白を信じて、真犯人を探そうとすると思われたからだよ」
「誰にそう思われたんだよ」
「真犯人の協力者」
　協力者？　とケーナが首を傾げる。
「協力者。王が死ぬ事で得する人たち。この国で最も強い発言力のあるミスト学院長の使いが暗殺者となる事で得する人たち。僕等に恨みがあって、復讐したい人たち」
「……それって」
「多分、今王城で仕切ってる人たちだよ」
　ダーミルが迷い無く此方を名指しで犯人呼ばわりした所からもそれは分かる。彼は元々没落貴族、後ろ盾無く、計画も知らない状態で、突発的に発生した事件に便乗出来るほど、彼にアドリブが利いているとは思えない。

ならば、こうした計画が最初から知っていた、と、そう思えるとしか思えない。それも大きな後ろ盾があって初めてできた動きのはずだ。と言う事は、これは、非常に小規模ながら、王を打ち倒し、王位を奪おうとする動き。
　つまりは内乱、戦争だ。
　そう説明すると、おいおい、とガラムが手を振り、
「それ、どうやって身の潔白を証明するんだよ。周りはお前等を罪人にしてんだろ？」
「皆の前で、言い逃れの出来ない状況で真犯人を引きずり出すしかない」
　多分、今回の事件、王暗殺の〝実行犯〟こそが、この事件の発端であり提案者だ。
　そもそも先に述べた城内の不穏因子は、ガイディア王も勿論把握していたのだ。そして把握していたが故に牽制し、あらゆる防波堤を置く事で〝反乱〟を実行に起こさぬようにしてきたのだ。
　にもかかわらず、今回暗殺事件という形で、王に仇成す者が動き出した。わざわざシールに罪を擦り付けるおまけ付きで。ならば、これは王も把握しきれぬ〝外部〟からの干渉が起きたと考えるべきだ。
「なら、そいつを捕まえればいい。多分一気に計画は崩壊するはずだ」
「もう逃げちまったんじゃねえの？」
「僕らを逃がさない為に結界が発動している。だから真犯人も中にいるはずだ」
　今の現状では、城外に逃げようとすればどう足掻こうと不審に思われるだろう。わざわざ細工してまでリーンに罪を擦り付けたと言う事は、大勢の人間の目を誤魔化さなければ成らないということ。つまりこの暗殺事件を知っていた人間は決して多くない。
　少ない協力者達で、大きく動けるとは思えない。ならば、逃げる事も出来ないはずだ。
「王が生きているかどうかも気になるし、イングラムたちとも話を聞いておきたい。どちらにせよ、城に行かない事には話は進まない」
　シールは立ち上がり、眠るリーンの苦しげな顔を一度撫でると、自分達の窮地を救ってくれた二人に笑みを向けて、
「リーン先生を頼むよ二人とも。礼はするし、危なければ僕等を売っても構わな

いから」
「そんな心配しなくたって、リーンは守ってやるよ。でもシール」
　ケーナは言葉を区切り、シールの肩を叩き、
「落ち着いていきなよ？ 苛立ったってろくな事にならないんだから」
　その言葉に、シールは静かに息をつくと、にっこりと笑顔を見せて、
「そりゃ無理だね」
　そう言って、スルリと天井の扉から外に飛び出していった。
　残されたのはガラムとケーナ。そして昏々と眠り続けるリーンのみだ。
「……なあ、ケーナ」
「……なんだい？」
「……シール。すげえ〝キレ〟てないか？」
「……まあ、ねえ」
「……大丈夫か？ 騎士団」
「……さぁ？」

第八十三話 再訪する暗殺者（仮）

【牢獄城】城門前
　式典最中に起こった暗殺事件。暗殺者の最重要容疑者が式典主役であり、また、その者達が逃亡していると言う事実。更に最高責任者であるイングラムの拘束も相まって、この牢獄城の入り口は大変な混乱に在っていた。
「ソーレ隊は何故此処にいる!! 伝令は伝えたのか!?」
「アドレーがまだ帰ってきていない！ 何をしているんだアイツは！」
「何故ティムの部隊まで城外へ出ているんだ！ 戻せ！ 城内が手薄になる！」
　指揮系統が混沌、情報も錯綜し続ける。混乱の窮地といっていい、そんな最中、
「静まれ！ お前達！」
　城内より、ダルシアが姿を現したことで、混乱は一瞬、その渦を止めた。ダルシアは騎士隊長で、少なくとも今此処で混乱し、迷い続けている騎士達よりも上役の人間ではあったのだ。
　例えどれだけ命令系統が崩れても、上官の命令は凛として答える。そういった訓練を騎士たちは受けてきたのだ。
「混乱する気持ちは分かるが落ち着け。今は慌てふためき混乱している場合ではない」
「し、しかしダルシア殿」
「先ほど王は治癒していた魔術師から連絡があった。我等が王は生きておられる」
　ダルシアの言葉に、おお、と騎士らから安堵の声が漏れた。そう、彼等が最も混乱していたのは、やはり王という存在、自分等の主柱となる存在が危ういと言う事実だ。この情報は混乱を確実に沈静化させていった。
「今はまだ、かけられた呪いによって意識は戻ってはおられないが、じき目を覚

ます。故に、我々は王が目覚める時までに、一切の懸念を排除しなければならない」
　ダルシアはその落ち着きつつある騎士達に言葉を続ける。落ち着くように、混乱を整えるように。だが、それでもやはりまだ、騎士達の半数に迷いがあるのが見えた。
　すると騎士の一人が声を出し、
「……ダルシア殿、今回の件、リーン様が犯人なのでしょうか？」
　そう、これが混乱のもう一つの理由。式典の主役が犯人であるという疑わしい事実が、より騎士達の動きを鈍らせている。そもそも彼女が王を切りつけた、その実際の光景を直視してはいないのだ。ましてシールとリーン、二人の今までの〝功績〟は大きく、それが余計に麻痺させていた。
　しかし、それでもダルシアは揺らがず、
「誰が王に仇なしたか。それは我々が決めることではない」
　ダルシアはそう断じる。部下達の迷いも何も切り捨てるように。
「我々の目的は最初から定まっている。此処にいる誰も忘れたわけでは無いだろう」
　ダルシアの何時もと変わらぬ、しかし明瞭な意思の光を灯した視線を騎士たちにぶつけ、そう言うと、騎士の一人が頷いた
「王を守ること」
「そうだ。そしてもし、かつての英雄に王に仇なす可能性が僅かにでもあるのなら、我々は彼等と戦わなければならない。それが我らの任務だ」
　ダルシアの告げる無感情な、淡々とした言葉に徐々に混乱は静まっていく。そして彼の言葉に耳を傾けていく。
「我等はただ、王の敵を排除する。この件、何者かの思惑が見えると言うのなら、それらも全て斬り伏せてみせよう。そうでしか、我らは王への忠義を果たせぬのだから」
　張り上げる事も無い、終始落ち着きの払ったダルシアの言葉に、混乱を叫ぶ声は完全に消えていた。騎士達の顔に迷いは無く、あるのは己が使命を再認した戦士の顔つきだった。
「ソーレの部隊は我らと合流しろ！　再編する！」

「我等は王の警護だ！ 行くぞ！」
「探索魔術を発動する！ ゼルとファーを呼べ！」
　真っ当な指揮系統が回復していく。騎士長達はそれぞれ結集し、ダルシアの指示の元無駄なく騎士らを配備していく。魔術師達は各々の魔術を駆使して多用に動き、シールらの探索と王の警護を進めていく。
　その様子をみて、ダルシアは僅かに笑みを浮かべた。彼の手腕によって追走部隊の騎士らの混乱は静まった。これならば探索もスムーズに行くだろう。既に牢獄城の外へは結界で封じられ、出られぬようになっている。
　これならば、時間はかかれども、いずれあの二人は見つけられる。
　ダルシアが、そう確信した、その時だった。
「こーんばーんわー」
　シールは、ど真ん中に登場したのは。
「……なっ」
　その場にいた騎士達全員は、一瞬、絶句した。
　シールは、本当に何気なくそこにいた。衣服も会場から逃げ出したときとそのまま、勇者の紋章が縫われた式服で、表情も柔和な笑みのまま、構えも無く、騎士たちの真ん中に突っ立っていた。
　その場にいる誰もがその現状を理解できず、思考を停止した。ダルシアによって混乱は解かれているが、かといって、いきなりのこの事態に思考停止するなというほうが無茶がある。
　しかし、ダルシアの、
「構えろ！」
　という号令に、騎士たちも反応する。槍を構え、シールに突きつけ魔導師は魔術の発動へと術式を刻み始める。最早迷わず。彼らの意思はそれで統一されていた。
　だがそれらに囲われながら、シールは「へえ」と感嘆の声をダルシアへと向け、
「やー、ダルシア君。そこ、通してくれないかな」
「捕らえろ」
　ダルシアは全く持って冷静に、迷い無く騎士達に指示を送る。周りの騎士たち

は彼の冷静さに引っ張られるように、淀みなくシールに突撃した。
「【氷牙よ踊れ】」
　同時にダルシアは術式を刻む。発動した魔術は周囲の水分を集結し、巨大な牙と化して、騎士達の後を追うようにシールへと喰らいつく。だが、シールは、その場を動かず、
「【封印開放】」
　掌から封印術式を生み出す。マナの光で赤く輝くその術式は一度二度脈動すると、一際激しい光を放って、そして次の瞬間、
「……!!」
　突撃してきた騎士達の眼前に、深い煙を吐き出し始めた。
「何だこれは!!」
　混乱する声、目標を失った部下達の声が響く。自身の発動した魔術も手ごたえが無い。煙は小さな封印術式に収まっていたものとは思えないほどの量が溢れ、既にダルシアも既に一寸先すら見えなくなっていた。
「【風よ、吹き舞え】」
　風の魔術を発動するが、煙の濃度が濃すぎて、吹き散らす先から新たな煙が埋め尽くす。より強い魔術ならば弾き飛ばす事は可能かもしれないが、そのレベルの魔術はダルシアも扱えない。
「魔導師団！ 煙を払え！」
　指示を飛ばす。だが、その直後に、真横から、
「じゃあね」
　シールの、呑気な挨拶が響き、
「っ!!」
　反射的に剣を振るおうとするが、この煙の中、下手に剣を振り回せば誰に当たるかも分からない。ダルシアは柄を握り締め、歯噛みし、押さえた。
「【嵐よ！ 我が障害をなぎ払え!!】」
　そこでようやく魔導師たちが魔術を発動した。重く、辺りを取り巻き続けてきた煙のカーテンは魔導師の発動した暴風によって持ち上がり、辺りに吹き散らされる。視界は開け、ダルシアは辺りを見渡すが、既にその時には、
「……!!」

その場にシールの姿はない。ダルシアと同じく慌て辺りを見渡す騎士たちのみ。城門へと振り返れば、其処には城門を守っていたはずの騎士たちが倒れている姿が二つ。
「城内にシールベルトが侵入した！ 追え!!」
　叫ぶと同時に騎士達の内何人かが城内に突入していく。魔導師には城内で王や重役達の守護に周ってる仲間達への伝達を指示する。指示を終えるとダルシアもまた、城内へと足を向けた。
「……流石だ」
　一言、顔を伏して、そう呟きながら、

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　牢獄城内部、城内は同様に揺れ動いていた。暗殺者の共犯とされているシールベルト、彼が城内に戻ってきたとなれば混乱するのは当然だろう。騎士達は王の下へと急ぎ駆け出す者、シールの元へと武器を持ち急ぐもの、どう動くべきか混乱する者、様々だった。
　城外でダルシアが騎士達の混乱を沈めたが、城内では未だ混乱は健在だ。
　イングラムは居ず、騎士たちの指令は代役としてダーミルが任されているが、今まで全くそんな役割を担ってこなかった男が、イングラムの代用など勤まるわけも無く、彼は、
「いいから捕らえろ!! 私の前にあの男の首をもってこい！」
　そう喚くだけで、真っ当な指示が行き届く事も無かった。
　結果として、ばらばらの編成が続いていた。軍として集団で動く訓練を続けている騎士にとってその状態は力を低下させる要因となっていた。
　そんな状態の騎士達が、城門玄関にたどり着くと、
「いやー、大盤振る舞いだなあ、はっはっは」
　その侵入者、シールは、混乱する騎士達に囲われながら、大いに笑っていた。それはもう楽しそうに。あるいはその笑顔はやけくそ気味とも言える笑みで。
「捕らえろ！ 捕らえるんだ!!」

迷いある号令に騎士たちはシールに突撃する。剣と魔動機を備え、構える。既に彼に対して一切の躊躇は無い。例えその相手が英雄であろうがなんだろうが、王を守らなければ全てが終わってしまう。彼等は必死の決意で突撃した。

「やー怖い怖い、」

　対して、シールは、やはり笑い、そして、前方に迫る騎士たちに対して右向け右をして、爽やかに手を上げて、

「じゃ、またね」

　そう笑って、脇の通路に向かって駆け出した。

　それはそれは見事な、誰もがあっけに取られるような、逃走だった。

第八十四話 やつあたり☆

「そんな風に並び立つな！ 治療の邪魔だ！」
　王の寝室。ナイフによって腹部を刺され、意識を失い昏倒した王が運ばれた一室で、彼の治療に当たっていた医療魔術師は怒りの声を上げた。
　その怒りの矛先というのは、王の眠るベットの周りを囲うようにして恐ろしい形相で並んでいる騎士達だ。
　現状にいて、牢獄城の指揮系統は非常に混乱している。それ故に人員の比率を誰も把握しきってはおらず例えそれがどれだけ過剰で無駄が多いとしても、そう動く以外どうすれば良いかも分かっていない連中が多いのだ。
　しかしそれでも王を守らなければならない。少ないよりは多いほうがいい。そんな風な考えを持つ騎士達が、寝室に詰め困れてしまっているのだ。おかげで医療魔導師は治療の間も異様な視線の中に晒される事になり、いい迷惑をしていた。
　そんな状態でだから、シールを追走する人員は削られるなんてことにもなっていた。
　しかしそれでも追撃をしないわけにもいかない。騎士達は王を守るため、シールを迎撃するため、王の寝室へと通じる全ての通路を、隠し通路も含めて封鎖し、魔術師等と共に待ち構えていた。
　しかし、
「侵入者、シールベルトは今何処にいる!? この階層まで近づいてきたか?!」
「それが……何故か一階から三階までの間をうろうろと」
「は?!」
　何故か、シールは、王の下へと行こうとしてはこなかった。
　ひたすら階下の一～三階あたりをぐるぐると回って、逃げ続けているのだ。騎

士達が必死に封鎖した王へと続く道へは、まるで近寄る事はなく、こちらをからかうようにただただ彼方此方に逃げ回っているだけで、
「このままで、我々は死に体です！　　　　どうか我々もシールベルトの捕縛指示を！」
「ならん！ そうやって誘導した上で、新手が現れる可能性もある！」
「しかしっ……!!」
「待機だ！」
　そう、シールが陽動を行っている可能性もある。あるいは単騎であったとしても、王を狙う可能性がある以上騎士達の多くはその場を動けない。例えシールの目的が何であったとしても、その場を動けば、王に危険を曝す事になるのだ。
　先にダルシアが騎士達に語ったように、騎士達の信念とは王を守ることだ。
　それ故に騎士達は動けない。彼等が騎士である以上は、動けないのだ。
　結果として、シールを追う人員は更に限られる。騎士達は本当に少数で、階下でただただ逃げ回るシールを追いかける羽目になっている。
　しかし騎士たちの苦難はこれだけでは終わらない。
「くそ！ あの男は何処にいる!?」
「報告！ 三階に目撃情報が！」
「何だと!? 二階にいたんじゃないのか!?」
　ただでさえ複雑な牢獄城において、ひたすら逃げ回られるというだけで、追いかける側の疲労は尋常ではなかった。道も手狭で一度に追いかけられる人材も更に限られる上、少しでも距離を離せば直ぐに見失ってしまう。追い詰めたと思えば隠し通路で別の場所へと移動している。
　本来、牢獄城とはそこに住む人間が有利に働くように設計されている筈なのだ。
　しかしそれはあくまでも、この城に所属する人間が〝守る〟時にこそ発揮される真価だった。そして今その真価は、ただ追いかけるだけの騎士たちよりも、逃げ回る事で〝守り〟に入っているシールに対して発揮されているのだ。
　更に言えば、シールはこの牢獄城の作りや仕組みを追いかける騎士たち以上に熟知しているのだ。その真価を引き出すには十分の知識が。
　それがより一層、牢獄城の仕組みがシールに有利に働く要因となっている。

だが、それでもと、騎士達は必死に階段を上り下りして廊下を走り回り、シールを追いかける。自分のホームグラウンドで敗北するわけにも行かない、そう必死に駆け回る。
　そうして、ようやくシールを発見し、追い詰め、包囲する事もある。
　だが、その先には
「シ、シールベルト！　追い詰めたぞ！　と、投降しろ！」
「【封印発動】」
「「ぐわぁあああああああああああああ?!」」
　シールの封印術が待ち構えている。巧妙なトラップのように仕掛けられた封印術は疲弊しきった騎士達には避けきれるようなものではなく、むざむざとマナを奪われ、意識を失っていった。
　封印術にやられたとしても、決して死に至るものではなく、暫く身動きが取れなくなるだけなのだが、それが逆に騎士達の気力を萎えさせていった。ひたすら体力を削られ、見つけてもあっけなく取り逃し、挙句シールを見失っては、再び彼をひたすら探す鬼ごっこが始まるのだ。士気の上がりよう筈が無かった。
「あの男は何が目的なんだ!?」
　シールの全力逃走を必死に追いかける騎士達は、そんな悲鳴を上げていた。
　まるでただひたすら城内を引っ掻き回しているかのようなやり口だった。追えば追うほどこちらの体力は奪われ疲れ果てる。しかし、シールがそこにいる以上追わないわけには行かない。
　シールが暗殺者だという事が、騎士達を振り回す最も大きな要素となっていた。
「一体何をしているのだ！　さっさと捕らえんか!!」
　そんな状態であるからして、今回の事の〝真相〟を知っている第三王子ら一派も荒れに荒れていた。彼等は今回の件の真相を知っている。それ故に今の騎士達の動きが無駄だと言う事も知っているのだ。
　シールは国王を殺すつもりは無い。
　これが事実だ。国王の警護についている騎士達全員を今すぐにでもシールの撃退とリーンの捜索に当てたいのだ。が、そうおおっぴらに言うわけには行かない。そんな事を言えば、「何故シールの狙いが王でないと分かるのだ」という事

になってしまう。かといって彼等に言葉巧みに騎士達を指導する能力は無い。故に無駄に国王の警護に人員が裂かれていく事を黙ってみるしかない。
　今、城を暴れ回るシールにもし狙いがあるとすれば、それは自分達だ。
　恐らく、というよりも間違いなく、何らかの真実を第三王子一派が握っている事は既にシールに悟られているだろう。こんな風に露骨に指揮権をイングラムらから奪い取ったのだから当然だ。出来れば王の警護を全て此方に移したいがそれも出来ない。可能な限りの騎士達は自分達の周りに配備させる事は出来たが、その結果人員が更に削られるのだ。
　そういった振る舞いが騎士達の目に良く映るわけが無く、
「国の危機よりも自身の保身のほうが大切らしい。随分と臆病な事だ」
　騎士達の中にはそんな風に陰口を叩く者まで現れていた。実際真相を知らないものからすればそうとしか見えないのだから、やむをえない事だが。
　おまけに、シールが王城で大暴れしてくれているお陰で、彼等が混乱に乗じて進めようとしていた暗躍、権力の掌握が全く持って進まなくなってしまっていた。混乱に乗じて事を進める手はずだったのに、予想を遥かに上回る混乱が押し寄せているが故に、権力の掌握の為の最低限の国家システムすら麻痺してしまっているためだった。
　シールの存在が、彼等にとって目の上のタンコブどころではない邪魔となっていた。
　故に、彼等は怒りを部下らに叩きつける。
「いいか！　捕らえろ！　あと数分の内に奴を捕らえなければ貴様等全員打ち首だからな！」
　騎士らの指揮権をイングラムから奪ったダーミルは、顔を真っ赤にして騎士達に叫んだ。
　憎悪の対象であるシールがいまだ健在である事事態、彼には屈辱であるのに、その彼が此方をからかうようにして、自分達の目と鼻の先で暴れている事が、彼には耐えられないのだ。
　しかし、そんな怒りはただでさえ未熟な指揮力をより鈍らせる結果となる。
　指揮権を一方的に奪っておきながら、彼が騎士ら魔術師等に指示した内容は、「シールを捕らえろ」それっきりだ。ろくな人材派遣もせず、何故か自分達の護

衛にはしっかりと人員を裂くその迷走ぶり。
　こんな状況で騎士達の信頼も得られるはずも無く、
「これならいっそ、指揮官殿らがいない方がまだ動ける」
　そんな悪口まで飛び出る始末だ。
　王城内はどうしようもない負のスパイラルに陥ろうとしていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　こうして、城内に大混乱が巻き起こっていたまさにその頃、事の元凶であるシールはと言うと、
「あーはっはっはっは、たのしーなー。王の暗殺者って」
　笑っていた。軽快に、楽しそうに、城内の二階のエントランスを眺められる回廊から、混乱し続ける騎士達をみて大いに笑っていた。それはもう、非常に楽しそうに。
　解説するなら、彼は別に混乱する城内を嘲笑う為にこんな真似をしていたわけでは無い。彼の目的はあくまでも今回の事件の真犯人を探すためだ。そして更に言えばリーン達、そして王を守るのが目的だ。
　では、何故こうして城内を混乱に導いているのか？
　この目的は、王城内に〝危機〟が存在する。その事実を間接的に伝える事だった。こうしてシールが直接乗り込むことで、城内は混乱しつつも一気に緊張状態になり、王を守るために人員を裂く事になる。結果としてそれは王城内で今だいる真犯人一派から王を守ることにも繋がる。同時にそうして人員が削れればリーンを追う動きも小さくなる。
　かなり荒っぽいやり方だが、シールが王城で暴れる事が結果としてリーンと王、二つを守ることに繋がるのだ。
「やー、どうせ暗殺犯扱いされるなら好き勝手した方が得だよね。はっはっは」
　本人の動機は別にして。
　実際、シールもそこまで派手に動くつもりは無かったのだが、あまりにも周りが都合よく動いてくれるものだから、楽しくてついやりすぎてしまったという所がある。

ある意味、騎士達の混乱はシールにとって絶好の憂さ晴らしになっていた
「おいおい、流石に勘弁してやってくれよ。シール」
　そんな彼の背中に投げかけられる一人の声、シールはそれを既に知っていたのか、特に驚く事も無く平然と振り返る。其処には一つ、無骨な鉄格子の嵌められた扉があり、その鉄格子の奥には
「やあ、イングラム。数時間ぶり」
　鎧も剣も付けていない、無防備のイングラムが腕を組んで苦く笑っていた。

第八十五話 騎士大隊長の話

　牢獄城での再開を果たした鉄格子越しのイングラムは、酷く身軽な格好で其処にいた。シールが出会った頃の荘厳な鎧も剣も一切無く、あるのはただ、老いて尚鍛え抜かれた体のみだ。
「イングラム、無事だったんだね」
　シールはそんな彼に一つ笑みを向けると、さて、と呟いて、
「【感情封印】」
　速攻で、鉄格子越しにイングラムに封印術を叩き込んだ。イングラムは一切抵抗を見せず、封印術を受けると、先ほど浮かべていた苦笑を顔から消し、瞳には光も無く、ただただ無表情になった。
　そんな彼を確認したシールは、酷く冷め切った声で問う、
「今回の国王暗殺未遂、犯人は貴方？ あるいは少しでも関わりがある」
「……違う」
　イングラムは無感情にそう答える。シールは一つ頷き、
「では犯人を知っている？」
「……知らない」
　二言目も否定、シールは息をつくと、両手を叩き、
「【封印開放】」
　そう呟くと、途端にイングラムの瞳に再び意思の光が生まれた。一瞬呆然としていたが暫くすると首を振り、頭を掻くと、大きく息をついた。
「別に尋問する事事態は構いはしないが、事前に言ってくれ。生きた心地がしない」
「悪いね、こっちとしても一々確認するだけの余裕が無くって」
　シールはそう言うが、あまり悪びれている様子はなかった。そんなシールの様子にイングラムは溜息をつくだけで済ませた。イングラムにはシールが今、決し

て機嫌が良いわけでも余裕があるわけでも無い事は分かっていた。それに、彼の横暴とも言える行為も、現在の状況を考えれば納得のいくものだったのだ。

　現状シールに敵意を向けるこの城で、彼はどんな相手であっても油断してもならないし、信じてもならない。たとえ旧知の仲であってもだ。この世界は魔術と言う技術があり、そして、それを上手く活用すれば、人を操る事も、騙す事も、化ける事も可能なのだ。

「まあ、君が犯人じゃないって事くらい予想はしていたけどね。そんな風じゃ」

「今は一応自室謹慎って事になってる」

「随分とみすぼらしい自室だこと」

　シールの皮肉じみた言葉に対して、イングラムは勘弁してくれと首をふった。どう考えてもそこは簡易に作られた牢獄だった。彼とて、今回の事件であらゆる権限を奪われているのだと分かる。

「ちなみに、俺の変わりに誰が指揮を？ やはりダーミルか？」

「権限的にはそうじゃないかな。でも多分、実質的な指揮を行ってるのはダルシアだよ」

　答えると、やはりかとイングラムは頷いた。シールは彼の様子に首をかしげ、

「予想してたの？」

「あいつはルジア家の血縁だ。ダーミルの甥だ」

　それを聞くと、シールは意外そうな顔をした。

　ルジア家の血縁の人間はその尽くが地位と権力を奪われ、また、力を持たないようにと封じられてきたのだ。しかしそれなのに、こうなる前からイングラムはダルシアに騎士長という地位を与え、国王直属騎士としてそばに置いていた。

「彼、よく直属騎士の騎士長なんてなれたね」

「優秀だったからな。少なくとも同世代の騎士らよりは頭一つ分飛びぬけている」

　へえ、と、シールは感心したような顔をする。イングラムは騎士大隊長に選ばれた人間だ。人を見る目だって確かなものだ。そんな彼がそう言うくらいなら、間違いなく相応の力があるだろう。

「……でも、今こうして指揮を取ってると言う事は、今回の事件関わりある？」

「分からん。そもそもダーミル自身、今回の事件に関わってるかはわからないだ

ろう」
「それはほぼ確定じゃないかな？」
「で、あったとしても、真犯人については明かされていない可能性がある」
　確かに、これほどまでに秘密裏に進められてきた事件だ。協力者のうち、真に主客となる人物以外には殆ど明かされていないという可能性も十分ありえる。
　しかしそれはあくまでも推測。その真偽は直接〝聞き出せ〟ば問題は無い。今直面している問題なのは、ダルシアだ
　イングラムがそうして手駒にそれだけ有能な人物ならば、この混乱も長くは続かないだろう。なら急ごうか、とイングラムに顔を向けると、彼もシールの意図を察して頷き、
「さ、それで、何が聞きたい？」
「今回の犯人の正体。分かっている事をできるだけ」
　先に考えたように、ダーミルなどに直接〝聞き出せ〟ば最もストレートに犯人に近づけるのだが、しかし今、恐らくと言うか間違いなく、彼含め〝協力者〟の守りは堅いだろう。直接聞き出すのは難しい。なら、今はその周囲から聞き出して少しでも答えに近づく。
　先の感情封印からの質問では真っ当な答えは帰ってこない、故に改めての問いだ。
　すると了解、と、イングラムは頷き、そして、
「こいつは、騎士達の〝独り言〟から聞いたんだがな」
　と、語りだした。
「犯人を手引きしたと思われる奴等は何人もいるが、当の犯人は検討が付かない。今のところ、会場にいる人物の内の半数以上が検査を終え、その誰もが、犯人足りうる証拠を持ち合わせていなかった」
「残る半数も期待は出来ない？」
「ああ、そもそもあの時、最前列にいた俺達を除けば、全員会場の中腹あたりに並んでいた。其処からあの短い闇の間に、飛び出して、騎士達やお前等に気取られることなく王の下へ良くなんて考えにくい」
　例え魔術を使ったとしてもな、と、イングラムは締めくくった。
　そう、確かに今回の件、協力者の存在、真犯人を手引きした存在は見え隠れす

るものの、だからといって会場を守る騎士達や、イングラムやシール。何より王の目の前にいたリーンをだまくらかして、リーンに罪を擦り付けて王を暗殺することなど、出来るものなのか。
「そう。今回の問題はリーンだ」
　イングラムは指を立て、シールに突きつける。
「リーンを、〝あの〟リーンを騙す事なんて出来るものなのか？」
「……確かにね」
　今回の事件で厄介な点は、他でもないリーンに罪を擦りつけられたという点だ。この事件を単純に考えるなら、それだけの話だが、しかし、シールやイングラムからすればその意味は全く違う。
〝あの〟リーンだ。魔導の到達者と名高いミストが、〝絶対に〟敵に回したくないと公言するような彼女が、嵌められ、貶められたのだ。
　そんな事が、ありうるのか？　本当に？
「考えられるのは二つ、よほど、よっぽど相手が上手だったのか、それとも」
「リーン先生が本当に手を出したと？」
　シールの問い返しにの棘に、イングラムは落ち着け、と手を振った。
「俺も彼女を疑ってるわけじゃない。だが、例えば幻術を見せられたとか、」
「どちらにせよ、それには彼女を嵌めなければならないね。それじゃあ」
　シールにはそれが信じがたい。それほどまでに、彼のリーンへの信頼は厚い。それは過去からの経験であり、現在に至るまでの絆だった。そしてイングラムとて、リーンへの信頼は同じくらいある。
　しかしシールと違い、客観視するだけの冷静さも持っていた。
「お前のそのリーンへの信頼、抑えたほうが良いんじゃないか？　実際、彼女は嵌められたわけじゃないか。今、現実としてだ」
「……分かってはいるんだけどね。それは」
　そう。現実的な話、彼女は今呪いで苦しみ、そして王もまた暗殺されかかって、今も呪いで死に掛けている。そう、二人揃って……
「……ん？」
「どうした？」
「いや……まあ、ちょっとね」

シールはかるく頬を掻いて、今思い描いた事を考察した。しかしやはり、今だ情報が足らない。これきりの情報では事実には届かない。
「他に何か情報は？」
「悪いが無い。俺はこんな立場だし、城内も混乱中。まともに情報統制が働いていない」
　それは、確かにそうだろう。この現状、たとえシールの侵入騒動が無かったとしても混乱は続いていただろう。まだ事件が起こって数時間と経っていないのだ。わざわざイングラムの前に来て〝独り言〟を呟いてくれる騎士も少ないだろう。
「悪いな。あまり役に立てなくて、」
「はは、牢獄に閉じ込められてる人に無理は言わないさ」
シールはそう笑って、手を振った。そして、さて次はメザイヤの話でも聞けたらな、と、体を翻した。そうして後ろを見てみれば、

「お久しぶりですシールさん。おおよそ十分ぶりで」

　ダルシアが、何人もの騎士達を連れて目の前に現れていた。
「やあ、ダルシア。十分ぶり」
　シールはゆっくりと周囲を見渡す。先ほどまであった混乱の声は既に無く、静まっている。既にちらばっていた指揮系統をダルシアが掌握してしまったらしい。シールを囲おうと動く騎士達にも迷いは無い。
　やっぱり優秀だな。とシールは呻き、ゆっくりと体を引かせると、軽く手を振って
「じゃあ、ね」
「捕らえよ」
　シールは身を翻して逃走し、同時に、騎士達が突撃した。あっという間に駆け抜けていき、残ったのはイングラムとダルシアのみ。その彼は、イングラムへと視線を向けると、溜息をついて、
「騎士大隊長でありながら、暗殺犯に肩入れされては困りますね」
「どっちにしろ暗殺者の一味だろ？　　それよりもどうだ、騎士達を率いる気分

は」
　そう言うと、ダルシアは軽く肩をすくめて、
「不本意な形ですが、決して悪い気分でありませんね」
「油断はするな。シールは手ごわいからな」
「知っています」
　そう言い切ると、ダルシアは先にシールを追っていった騎士達の後を追うようにして、駆け出した。
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　その頃、ダルシアから尻尾を巻いて逃げ出したシールはというと、
「イングラムが気に入るわけだ！」
　そんな事を叫びながら、先ほどよりも遥かに精錬された速度で追い掛け回してくる騎士達を相手に逃げ回っていた。騎士達にシールが与えてきた混乱と行動制限、それが今は見事に取り払われ、騎士達の本来の実力が顕著に現れている。
　この騎士達の統率が、全てダルシアの実力であるとするのなら、彼は相当優秀な人間であり、高いカリスマを誇る人物でもあることが分かる。そうでなければこのような真似は出来はしないだろう。
　しかし、それは兎も角として、今は逃げなければならない。
　逃げ道は把握している。確かこの先の渡り廊下を進んで、右に曲がれば隠し通路が、
「きたぞ！ 捕らえろ!!」
「っとっとぉ!?」
　曲がった瞬間、騎士達が勢ぞろいで並んで、此方に突撃してきた。此方に来る事を既に予想していたらしい。本当に用意周到だ。これは、先ほどまでのようにただただ逃げ回っていられなくなった
　シールは背中に嫌な汗をかいていた。
「シール！ いざ勝負!!」
　一人、巨体な男がこちらに来る。確かトーマス。先の訓練とは違う、彼自身の本装備で迫り来る。構えるのは巨大な戦斧。訓練時の大剣と変らず重装備。
「負けても力で押すか、良い心構えだね。愚かしいけど」

「構わん！ 男は愚直で良い!!」
　トーマスは大斧を振り下ろす。先の訓練より数段速く、鋭く、力強い。その懐へと飛び込むにはあまりにも危険だった。
「ぉお！」
　シールは感嘆の声を上げた。前は長引かせたくないために一瞬で片を付けたが、しかし今回はそうさせるだけの隙を一切見せない。たった数日でその錬度が高まっている。
「教えた甲斐があったってものだ！」
「ご指導感謝する！ だが容赦はしない!!」
　一撃一撃が鋭く早い。その重量を利用し回転するように振り下ろす。
　その巨体な体の力を最大限斧に伝える戦い方だ。
　だが、それでも、どう足掻いても、隙はある。ただ生きているだけでも必ず現れるのだ。まして、此方の命を狩る為に動くのであれば、尚更だ。
「【封印剣】、」
　封印術式を発動、隙と隙を貫くように封印剣を叩き込む、つもりだった。
　背後から、濃厚な魔力の気配を感じなければ、
「挟撃！」
　振り返ると、ニーニウを含め横一列に並んだ魔導士団。既に術式の構築は完了しているのか、王城の広い廊下一杯に広がった魔法陣
「【炎蛇・多重強化！】」
　焔を纏った巨大蛇は、容易に見合うだけの圧倒的な熱を飽和しシールへと突撃する。廊下一杯に焔が溢れ、飾られていた彫像品等を破壊しながら突き進む。
「こりゃ無理だね」
　封印術式は自身の内に込められた魔力から生み出された〝容量〟分しか取り込めない。複数人の魔導師で生み出された魔術を封じきる封印術は直ぐには生み出せない。
「【物質封印】」
　足元の床を封印剣で切り刻み、足元に逃げ道を生み出す。
「【炎蛇乱舞・改!!】」
途端、頭を通りすぎた蛇の体から這い出るように、まるで豪雨のように大量の焔

蛇が、シールを追って迫り来る。淀みなく、迷い無く、シールを食らうために、
「本当！ きっちり精錬されてるなあ!!」
　彼等に鍛錬を施した事を後悔しつつ、シールは逃げ続ける。

第八十六話 アイデア

　ダーミル・ルジアは苛立っていた。
　何時まで立っても結果はやってこない。これの待ち望む、シールの首を縊り取ったという結果がやってこない。その当の本人はこの城にいるはずなののに、まるで連絡が来ない。
　その原因には、彼含めた今回の事件を引き起こした一派が、その権力に固執するばかりに指示が上手く行き渡らなかったというのもあるのだが、当然彼はそうは思わない。何もかも騎士達が無能だと切り捨てていた。
　故に苛立ちは全て騎士達にぶつける。近くに騎士が通る度に邪魔だと罵り、
「何をしているのだ貴様ら！　現場を指揮しているのは何処の無能だ！」
　今のところ、現場で騎士達を率いるているのはダルシアなのだが、彼はそのことは知らない。彼は現場に立っていないので、どうなっているのかを知らないのだ。彼は騎士達に守らせている安泰な部屋の中で、ただただ成果を期待し、焦っている。
「ダーミル！」
　と、苛立ちに頭を煮えさせている最中、第三王子からお呼びがかかる。ダーミルは舌打ちしたい気持ちを抑えて、務めて冷静であろうとした。したのだが、真っ赤に染まった垂れた頬は隠せない。
　しかし、王子らもそんな事を気にしはしなかった。何故なら彼等もまた、同じくらい焦り、苛立ち、青くなったり赤くなったり白くなったりしているのだから。
「首尾はどうなっている!!」
「はっ城内が混乱しておりまして、し、しかし直ぐに！」
「御託は良い！　成果を見せろ！　何時まで時間をかけている気だ！」
　王子らは吼える。最早、元々持っていた判断力も見失っていた。

そんな彼等に対して、五月蝿い、とダーミルは苛立つ。彼からすれば第三王子らも苛立ちを向ける対象だ。彼は自身が有能であると確信している。それ故に、彼を冷めた目で見下す〝共犯者〟等が腹正しくて仕方が無かった。
　そしてそれもまた、彼が成果を焦り求める原因になっていた。
　早く、早く、早く、どれだけ人材をつぎ込もうと、どんな手段を使おうとも──
「──まて、」
　その時、彼の脳裏に一つ、アイデアが浮かんだ。
　爛れ腐るような、悪意と共に。
「おい。おい貴様だ！」
　目に付いた騎士を呼び止める。騎士は慌てて近づき、
「は、なんでしょうか」
「シールの関係者は全員洗ったのか」
「は、はあ、勿論。しかし全員証拠不十分で、家も探しましたが、シールベルト。リーンエリクスを隠している様子はありませんでした」
　騎士は不審な顔をしながらも、正しくそう答えた。一応今は上官なのだ。
　そして、それを聞くとダーミルの表情が引きつるような笑みに歪んだ。彼の疑問に答えた騎士はその不吉な笑みに、僅かに眉を潜め、
「あいつらが宿泊したところがあった筈だ」
「城下の酒場です。旧知の仲だったようです。ですが、彼等の所にも二人は」
　実際には、その酒場から少しはなれた予備の保管庫に、リーンは匿われているのだが、ガラムとニーナはそもそもそんな保管庫があること事態、騎士達には伝えてなかった。
　酒場の構造など、知る人間がいなければ分かりはしない。この城下町の店のつくりは、暗黒時代の破壊、再生と経ているためムラがあり、画一的ではないのもその隠蔽に一役買っていた。
　そんな訳で、彼等はその事実を知らぬままでいたのだが、
「そうか、そうか！」
　ダーミルは、それに構わず、笑みを浮かべた。確信に満ちたような哄笑だった。
「二〇人ほど騎士達を呼べ！ 私について来い！」

ダーミルはそう叫び、似合わない騎士の格好をして外に飛び出した。
　何故思いつかなかったのだろう。
　こんなにも単純で簡単な方法があったというのに。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「何時まで追いかけてくるんだぁあああ!!?」
　シールは駆ける。式典の準備で飾りつけられ、しかしこの騒乱の所為で無残に荒れ果てている廊下を突き進む。背後から数十もの燃える蛇がうねり、のたうち、シールを追う。
　シールは複雑な牢獄城の内装を右に左に、可能な限り複雑に逃げ惑っているはずなのだが、まるで逃がすことなくぴったりと追いかけてくる。
「遠隔操作じゃない、自動追尾か！」
　術式を改良している。先の訓練所での経験で、自身の操作力の甘さを補う方法を選んだのか。少なくとも先の訓練時よりは遥かに鋭い。
　だが、自動であるのなら、操作に自由度が無い。
　例えば目の前に遮蔽物が現れても、回避は出来ない。今の蛇たちは先の大蛇とは違い、一つ一つの構成は小さく、それ故に、脆い。
「【封印・五連】」
　強い封印術式の壁を五枚、眼前に発生させる。ただただシールを追うことを命じられた焔の蛇たちは、目の前の壁に対処できず、術式にマナを、魔力を奪われる。
　自らの構成力を失った蛇たちは宙で弾け、消えていった。
　シールはそれを見届け、しかし、直ぐに迫る気配を察した。
「いたぞ！ 此処だ!!」
　先の道、声が響いたのは先の十字路の右側から。しかし前方からも騎士達が集い、こちらに向かってくるのが見える。今来た道も、背後から金属音の混じる足音。
　ならば選ぶ道は先の十字路の内、左のルートのみ。
「誘導されてるね」

騎士達を先回りさせ、選択肢を限り、ターゲットを望む場所に動かす。今までのように此方から逃げまわるのではなく、騎士達によって逃げさせられている。この現状はあまりよくはない。

壁を破壊し道を作る、といってもここら辺は個室が連なっている。一々壁を切り倒して先に進むのでは時間がかかり過ぎる。下を目指そうにも、此処は一階だ。地下は地上よりずっと移動可能範囲が狭まってしまう。それでは意味が無い。上も無理、降りるのと比べて手間取る。その隙を突かれる可能性が高い。大体さっきまで二階に騎士達が蠢いていたのに、今はいない保証も無い。

状況が、この道を選ばざるをえなくしている。本当に嫌な感じだ。

しかし、

「いっそ、飛び込んでみようか」

誘導されているというのなら、いっそ此方から行こうではないか。

シールは背後の騎士達を突き放すように一気に駆け出した。倒れた彫像品を乗り越え、悲鳴を上げる使用人達を避けて、右に左に曲がりつつ、廊下を抜ける。

抜けた先にあったのは、エントランス。城門前の広間にたどり着いた。

そしてそこで、

「動かないでください。シールベルト様」

前後左右、上階に至るまで並んだ重装備の騎士達と、魔術加工された弓を構えた軽装備の騎士達。そして術式発動の準備を完了した魔導師達。更に巨大な威圧感を誇るバリスタと魔砲弾兵器が数十台横に並び、シールを囲む様に配備されていた。

「……ワーオ」

シールは、その想像を超える、壮絶とすら言える待ち伏せ体制に、驚愕の意を表した。

第八十七話 特異なる封印術士

「……こりゃまた派手だね。ダルシア。それ、対魔物専用の魔導兵器じゃないか」
「貴方に対してやりすぎということはありません」
　ダルシア判断は全く持って正しかった。騎士達がシールに振り回される原因、それはシールの策略もあるが、何より彼をたった一人の人間として対応していた点にあった。騎士達はシールに〝たった一人の人間〟に対しての対応をとってしまっているのだ。
　しかしシールに対してその対応は不完全だ。少なくとも直属騎士達を相手取って、たった一人で殲滅できるほどの実力がある彼なのだ。
　シールを一人の人間としての戦力しか保有していない。そう言う判断で対応していた事が何よりの間違いだったのだ。それ故にダルシアの取った戦い方は的確だ。
「優秀だなあ……ホント」
　シールは息をつき、腰に手を当てた。その仕草はまるで、買い物に行ったは良いが、目当てのものが売り切れていて困った、とでも言うような、そんな落ち着きを見せていた。
　そしてシールは、「一応言っておこうか」と前置きをして、
「僕は王を暗殺しようだなんてしていない」
「ええ、疑惑がかかっているのはリーン・エリクス様ですから、貴方は重要参考人です」
　ダルシアは全くぶれることなくそう答える。シールは眉を潜め、
「彼女も王を暗殺だなんてしていないよ」
「では誰が王を襲ったのですか？」
「さあ、真犯人じゃない？」

「では真犯人も探しだしてみせましょう。貴方を捕えた後に」
　その回答には淀みが無い。全く持って、彼が今回の事件にかかわりあるものとは思えないほどに。シールはふむ、と息をついて、
「良いのかい？　思いもよらない人が犯人だったりするかもよ？　ダーミル様だったり」
　周囲の騎士達や魔導師達が息を呑む。彼等とて、今回の事件の不自然さに疑問を抱いてはいる。そして、事件の直後に城内における権限を奪いにかかる者達への不審もあるのだ。故にシールの言葉は、騎士達に大きく動揺させた。
　何より、シールの告げた名は、ダーミルを、つまりダルシアの叔父を指している。揺らがないわけが無い。
　だが、それに対してもダルシアは平然としていて、
「それが何か？ むしろ都合が良いですね。油断させやすい上、捕らえやすい」
　平然とそう言ってのけた。自分の叔父を多くの騎士達や魔導師たちの前で切り捨てた。彼は中々良い神経をしている、とシールは感心した。
「何はともあれ、まずは貴方を捕える必要があるでしょう」
「でもそれって、捕らえるって兵装じゃないと思うよ」
「死なないでしょう？ 貴方なら」
　そう言ってダルシアは小さく笑みを浮かべた。やってみろ、というような挑発的な笑みだった。シールはそれに笑みで返し、
「まあねぇ」
　そう呟いた。ダルシアはその無表情に、ほんの少し笑みを含ませて、しかしすぐにそれは命令を下す司令官の顔に掻き消える。腕を前へと振り上げ、彼は叫んだ。
「構えろ！」
　ダルシアの鋭い号令と共に重騎士達が長槍を構え、弓を引き絞る。魔導師たちが詠唱をはじめ、何十門にも渡る魔導兵器達が唸りをあげ始める。
　まるで巨大な魔物を相手取る時のように、否、まさしくそれを相手にしていると想定した戦い方だ。そう、ダルシアは戦い方をシフトしたのだ。「対、人間」から「対、魔物」という風に、戦闘のレベルをシフトした。
　それを理解したシールは、深く息をついて、軽く肩をすくめると、

「ならこちらも、〝少し〟バケモノらしい戦い方をしようか」
　そう言って、自身が身に纏う、勇者の紋章の中心に右拳を当てて、そのまま封印術式が開放した。
「【封印開放・顕現】」
　蒼い魔力が溢れ出す。それは全身に纏うと、静けさを宿しながら巡回した。
　同時にダルシアは右腕を振り下ろし、再び叫んだ。
「撃て!!」
　瞬間、巨大な轟音と共にシールへとあらゆる攻撃が殺到する。鋭い槍があるいは矢が、業火が、雷が、大矢が、砲撃が、あらゆる破壊のその全てがシールたった一人に集約し、叩き込まれんとしていた。
だが、猛攻を前に、シールは穏やかな笑みを絶やさず、
「【封印開放・水精霊の衣】」
　右掌を天に向け、脈動する封印術式が生まれる。
　それは、一瞬輝きを増し、そして次の瞬間、術式が崩壊した。
「っなんだあれは?!」
　騎士達の中から疑問の声が響いた。
　封印術式、そこからあふれ出したのは、〝水〟だった。しかし単なる〝水〟ではない。
　それは濃いマナを纏い、色濃く発光を繰り返していた。そしてそれは一気にシールの周りに溢れ出し、彼を守るようにして包み込む。
「……!?」
「魔術が……！」
騎士の剣も槍も、弓矢も砲撃も、魔術すらも飲み込んで、沈静化させた。
「攻撃の手を緩めるな！」
　ダルシアの指示が飛ぶ。呼応するように騎士達が雄たけびを上げ、追撃すべく大矢がとび、魔術が舞い、槍が繰り返し突き出される。
　だが、マナの閃きと共に、ゆらめくその〝水〟の壁は、まるで崩れることなく、シールの周りを囲い、守り続ける。
「崩すのは難しいと思うよ？ 何せ〝精霊〟の力だし」
　精霊、その言葉の意味が分からず困惑するダルシアらを尻目にシールは跳ん

だ。高いエントランスの天井まで届くような高い高い跳躍だった。
「【封印開放】」
　そして彼は空中で更に右手を掲げる。再び生まれた封印術式は、【剣】として振り下ろされることなく魔法陣としての円を作り、赤々と妖しく輝きを増し、
「【風神の真翼】」
　其処から一本の剣が取り出された。それは透き通るような緑色で、まるで鳥の羽のように無数の小さな刃を重ねたような、奇妙な剣だった。普通に考えれば、まともに剣として使える代物のですらなかった。
　だが、ダルシアにはそれが、例えようも無い寒気を覚えさせた。
「【己が力を振るえ】」
　ぎりぎりぎりと、シールは宙で剣を振りかぶる。
　まるで死神が、その鎌を振り下ろすような、不吉さ伴って、
「伏せろ!!」
　ダルシアの瞬時の号令と、シールがその剣を宙に向けて振るったのは同時だ。
　一瞬の静寂、しかし直後に巻き起こった
　何もかも薙ぎ倒し、吹き飛ばす、破壊的な暴風が
「おぉぉおおおおおおおおおおおおおお!?」
　その場にいた全員はあまりに唐突に巻き起こった爆撃のような風の衝撃に、息つく暇も無く身体を地面に叩きつけられた。圧のように吹き荒れ続ける【風】は留まる事を知らず、絶え間なく上から下へと叩きつけてくる
　死ぬ。このままだと風に潰されて、死ぬ。騎士達はそんな予感すら感じていた。
「【封印】」
　だが響く声と共に、唐突に風が止む。
　暴力的な嵐からの唐突な開放に騎士達はゆるゆると身体を起こし、呆然となった。手元にあった装備や魔導兵器は無残に風に引き裂かれ、破損している。
　そしてエントランスにはシールがいた。先ほどまで握っていたあの奇妙な剣は既に彼の手には無く、酷く無造作にその場で立っていた。
「はっは、やっぱ危ないねえ、アレ。安易に振るうものじゃないや」
「攻撃を絶やすな！」

ダルシアは瞬時に立ち上がった騎士達に命令を下した。彼は迷わない。先の理解すら出来ないような尋常ならざる攻撃を受けて尚、その冷静さを保っていた。
だが、今回に限れば、その冷静さは、失敗だった。
「【封印開放・炎蛇乱舞】」
足元から焔の蛇がが舞い飛ぶ。一瞬近寄った騎士達は同時に吹き飛ばされ、焔蛇は周囲を旋回する。シールを囲い、守るように。
「……下がれ!!」
ダルシアはその様子を目視し、素早く先の命令を切り替え、騎士達を退かせる。
幾つもの魔動機があの凶悪な風圧でやられ、壊れている。だが、無事なものもある。
「バリスタ！ 動けるか」
「一門だけなら！」
「構わん！ 撃て！」
指示が飛び、直後に貫通術式の刻まれた大弓がシールへと射出される。しかし、
「【封印開放・呪いの巫女】」
シールの右手から、黒々としたマナがあふれ出した。飛んできた大矢を飲み込むと、その速度を減衰させ、動きを止めると、その身を蝕み、最後には朽ちさせた。
「っ……怯むな！」
どれだけの攻撃を叩き込もうと平然とするシール。相対する騎士達は当然、戦意が落ちていく。ダルシアは声を上げ、それを持ち直させようとした。
だが、だからと言って、現状が変るわけではない。
シールは、今まで見せたことも無かったような魔術を、魔具を、魔剣を次から次に生み出し、操り、騎士達の攻撃を防ぎ、翻弄し続ける。
「……自分が封印した物質を自在に操っている？」
ダルシアは観察し、半ば呆然と自身の推測を述べた。
先の炎蛇乱舞は女騎士ニーニウの魔術だ。それを自らのものとして扱っている。と、すれば先の奇妙な剣も、バリスタの大矢を腐らせた魔術も、全て彼が封

印してきたものを操っていると考えるべきだ。
　だがそもそも〝封印術〟というものは、そんな自在な真似が出来る代物ではないはずだ。
〝封印術〟は〟危険な魔具、あるいは毒性の物質。あるいは魔物など、そういった存在を一時的に留め置くための術だ。先までシールが操っていたマナを奪う【封印術】物質の強制封印を武器と化した【封印剣】なら、まだ、なんとか理解は出来る。
　留め置く。そう。本来はそれだけの力。否、本来ならそれだけでも高等なる技術ではあるのだ。しかし、シールはそれどころではない。シールがやっているのは、そんな次元の代物ではない。
　もしあの術が本当に【封印術式】であるのなら、彼は、━━
「ぼーっとしてるね」
「!?」
　気が付けばシールが目の前にいた。騎士達も魔術師達も既に突破されていた。
「っくぉお！」
　振るった剣は空を切る。僅かに見えるのは余裕を持ったシールの笑み━━
「【開放・メナス】」
　一瞬、ダルシアの前に、おぞましい顔をした死神が生まれた。それはこちらを嘲笑するように笑い、その凶悪な腕を振り回した。
　腹部への衝撃、一瞬で意識を奪い取られた。

「ぐ、……」
　意識を失っていた。
　そう自覚する事で、再び眠りに落ちそうになった意識を奮い立たせ、ダルシアは立ち上がった。
　指導者たる自分が無様であっては指揮が落ちる。シャンと前を向いて、周囲を

見渡す。
　辺りは酷い有様と化していた。陣形は崩れ、装備は砕け、騎士達は倒れ、魔導師たちは昏倒していた。これがたった一人の人間にもたらされた被害だと思うと眩暈すらした。
　だがそうもしていられない。部下を指揮する、その役目を彼は負っているのだ。
「状況はどうなっている！　報告しろ！」
　声を張ると、先に身体を起こしていた騎士長の一人が駆け寄る。目立った外傷はないが、表情には疲労の度合いが強くあった。当然だろう。
「立て直すのにどれくらい時間がかかる」
「五分ほどください、部隊を再編成します」
「損害は？」
「陣形は完全に崩壊。魔導兵器も大半が破損、騎士達にも怪我人が……ただ、」
「ただ？」
「怪我人はいますが、死者は、〇人です」
「……そう、か」
　加減されたのだ。ダルシアはそう悟った。
　だが、その上で彼は、
「部隊の再編成を急げ、」
「了解しました」
　命令を急いだ。シールの意図、その気構えなど知る気は無い、と言うように。
　だが、そうして、騎士隊の編成を急いでいると、新たに一人、騎士が彼に駆け寄ってきた。先日ガラムに気絶させられた男だったのだが、今はそれはおいておくとしよう。彼は焦るような困惑しているような表情でダルシアに近づくと、敬礼を取り、
「ダルシア様！　報告が！」
「様はいい、それより何をしている。お前は国王の護衛に配備させた筈だが、」
　シールが本当に国王の暗殺を狙っているのか否か、その真偽をダルシアは考慮しているわけではない。しかし、それは必要な事なのだ。騎士の本分はダルシアが語った通り、国を守り、そして国王を守ることにあるのだから。

で、あるにもかかわらず、彼が此処にいる理由は何か。

　ダルシアは嫌な悪寒を背に感じた。

「そ、それが、」

「何だ？」

「ダ、ダーミル様が──」

　ダルシアは、自らの直感が正しかった事を悟り、不快そうに顔を歪めた。

第八十八話 蛮行

　酒場、ガラーナ
　店には今、ガラムとケーナ、二人は店の中にいた。シールと別れた後、二人は自分達の酒場に戻ってた。騎士達の動きが慌しく、店に自分達がいないと気づかると、怪しまれるからだ。怪しまれれば、リーンにも危険が及ぶ。
　結果として、騎士達が店を尋ねる前に戻る事には成功した。だが、騎士達が慌しく外を行き来している為、あまり目立って動く事ができなくなってしまい、リーンの元に戻れなくなってしまった。シールの封印術によってリーンの呪いの進行は止められている。悪化はしない。ただ呪いの影響で身動きとれず、意識を失っているだけだ。
　しかし、できるのなら早く戻りたい。それが二人の心情だった。
「隙見て、俺が行くか」
「まだ駄目だよ。騎士達が多い」
　そんな風にガラムとケーナは言葉を交わす。あくまでも明日の酒場の準備の作業を進めながらも、だ。シールとリーンと縁があり、宿泊した酒場。当然疑惑の目は向けられる。先ほども騎士達が店に乗り込み、ひたすらシラをきり追い返したが、まだ二人は、こちらを監視する目を幾つも感じていた。まあ、当然だろう。
　だが、彼らはこうした状況には慣れている。安易には動かない。焦って怪しさを見せるような真似はしない。此処で目立つ動きをすれば、逆にリーンの身の安全が怪しくなる。幸い、リーンの今いる倉庫は一見では分からないつくりになっている。この闇夜、混乱している騎士達では暫くは見つけられないだろう。
「全く、さっさとどっかいってくれねえかな」
「あの食料庫にはいくらでも食料がある。いざとなれば何日もそこで生きていられるよ」

「そりゃそーだけどよー。全く、鬱陶しいったらねーよ。なんなら直接乗り込んで――」
　そんな風に二人で話を続けている直後、
「ガラム・ラーウェン！ ケーナ・ラーウェンはいるか!!」
　扉が物々しい音と共に開かれ、騎士達がなだれ込んできた
「……本当に直接乗り込んできたな」
「あんたが余計な事言うからよ」
　二人は、表面上、驚いた顔で扉のに視線を向けた。大きく開かれた扉の先には騎士達が大量に並んでいる。その中心にいたのは頬の垂れた鼻下の髭を伸ばした男。ダーミルだ。ガラムは彼に対して、その大きな体を小さく折りたたみ、一見丁寧に見える物腰で、
「これはこれは、騎士様方、何の御用でしょうか」
「貴様等はシールベルト。リーン・エリクスの両名を泊めたそうだな」
「それが何か？　 ただ昔の馴染みで泊めただけですが……なんならもう一度捜索でも？」
　ガラムは平然とそう言ってのけた。別にこの家を探られたって痛くも痒くもないのだから。出来るのならさっさと家捜しでもなんでもして、帰って欲しいものだ。そうすればリーンの元へと行くチャンスもあるかもしれないのだから。
　だが、ダーミルは、ガラムの言葉には反応せず、
「必要は無い」
　そう言い、不吉な笑みを浮かべて、びしりと指を突き出した。
「貴様等を王暗殺の共犯者として逮捕する」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　場面は再び牢獄城に移る。
「……あー、死ぬかと、思ったなあ」
　騎士団たちの包囲網を切り抜け、再び逃走し、隠れおおせたシールが今いる場

所は、牢獄城の三階、城外のベランダ、の、裏側だ。張り付くようにそこに隠れながら息を吐き出した。
　無茶をした、と、シールは苦い笑みを浮かべる。
　ダルシアのあの包囲網を相手にとって、封印術だけで凌ぎ切れるものでは無かったとはいえ、苦労をした。封印術の開放は基本的に、自分のものでもないものを無理に利用すると言う事だ。それは尋常ではない集中力と、直観力が必要になる。
　ともあれ凌げた事は凌げたのだ。だから今はそれはいい。
「まあ、これで暫くは時間が稼げるか……後は」
『私に用ですか？ シール』
　声が響いた。それは何処か魔的な響きを感じさせるが、しかし知っている者の声だった。シールがあたりを見渡すと、ベランダの縁に〝それ〟はいた。
「……鳥？」
　そこにいたのは鳥だった。蒼く美しい羽を持つ鳥が、円らな瞳で此方を見つめている。何でこんな所に鳥が、と、思っていると、鳥がくちばしを開く。しかしそこから綺麗な囀りを響かせるのではなく、先と同じ知った声。
『私です。シール』
「……メザイヤさん、か。驚いたな」
　そう、その鳥は、その鳥の身体を借りているのはメザイヤだった。親しき生命に意思を宿し、その身体を借りる魔術、メザイヤが行っているのがそれだった。
　発動する事も難しい高等魔術のはずだが、流石は魔導師師団長といった所だろうか。と、シールは感心する。
「でも、そう言う姿で会いに来るって事は、つかまってるってことですよね」
『ええ、部下がこの子を私の元へ送ってたので、こうして貴方の元へ来たのです』
　そう言って、鳥は身体をくちばしで突いて、羽を繕う。こうした魔術は細かな所まで身体を操る事は出来ない。あくまでもある程度、体の意思を借りるだけなのだ。
『兎も角、こんな場所では落ち着いて話も出来ないでしょう。場所を変えます』
「城内は騎士達でひしめき合ってるんだけど」

『こちらへ』

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　そうしてシールが案内されたのは、牢獄城の中にあった仕掛けの一つ。巧妙に隠蔽された隠し部屋だった。武器倉庫にもなっていたその部屋の隅っこで、シールはようやく、というように腰を地面につけて、息をついた。
「……はあ、疲れた」
『無茶をしましたね』
「ええ、まあ。でもここまで追い掛け回されるとは思いませんでしたよ」
『部下達とて日ごろ鍛えていますから。何時までも貴方に頼る訳にはいきませんし』
「それで結局僕が苦労するハメになってるんだから、理不尽な話ですねえ」
　そう言いつつメザイヤが身体を借りている小鳥が窓枠に止まった。何度か体の動きを確かめるように羽ばたいて見せてから、シールの方を向き直った。
『さて、それでは何か聞きたいことは？』
「貴方が知っている犯人についての情報」
『その前に、貴方は何処まで知ってますか』
「何人かの協力者の存在、犯人が一般人の参加者の中にいる可能性が低い事、リーン先生の目を盗むほど、巧妙に仕掛けられていた〝可能性が〟あった事」
　なるほど、とメザイヤは軽く溜息、のような音を口ばしから漏らし、
『正直な所、私が知る情報も似たようなものです。何しろそもそも事件の詳しい情報を知るということが、行われていませんから』
　そうだろう、とシールは頷く。イングラムから聞き取れた情報から、メザイヤの方も似たり寄ったりだと言う事は想定できていた。そもそも真相を知る〝犯人〟であるシールとメザイヤがいるのに、わざわざ調査に人手を割くことはしないだろう。
　だから特に落胆することはなかった。勿論、残念である事には変りは無いが。
　しかし、メザイヤは『ああ』と思い出したように声を上げ、
「そういえば、使用された魔術が少し」

「魔術？ そもそも魔術があの場で利用されていたんですか？」
　シールは疑問を持った。覚えのある魔術と言えば、精々術式の発動そのものを封じる結界のみだ。照明が消えたのも、魔術を使わずとも仕掛ける事くらい出来る。協力者が城内にいるのなら尚更だ。
　魔術は痕跡として残る。マナが記憶するのだ。流石に使用者を辿るなんて真似は出来ないが、しかしどんな種類の魔術かは時間をかければ分かる。そうなれば手の内が明かされることになる。
　身を隠してこんな大掛かりな事件を起こしてまで、魔術の痕跡を残す意味が分からない。
「使われていたのは幻覚系の魔術です」
「幻覚？ 何処に使われていたんです？」
「ひょっとしたら観客の視界を奪う時、保険が欲しかったのかもしれませんが……」
　幻覚、神経に及ぼすものなど種類は多くあるし、それによっての魔術の種類も変ってはくるが、大抵は視覚に作用し狂わせる作用の者が多い。
　確かに、灯りを消したとしても完全に視界が奪える訳じゃない。窓の外には闇夜の光が零れていた。ともすれば、メザイヤの意見も否定できるものではない……が、
「……むう」
『……もう一つ考えたのですが』
　何？　とシールは尋ねると、
『例えば、王をリーンが憎悪する対象に見せかけるというのはどうでしょう？』
「つまり、リーン先生に幻術をかけて、リーンに王を襲わせるように仕向けたって事？」
　確かに彼女が怒りを抱いている人物は、実際の所多くいる……だが
　いくら憎いからといっても、今まで国王がいた場所にいきなりそういう憎悪の対象が出てきたから切りかかって殺しかけるなど、彼女がそんな真似するだろうか？
「普通、おかしいと思いますよ。冷静であれば誰だって」
『冷静で無かったなら？』

メザイヤは言葉を続ける。彼女はどうやら、王城でリーンが倒れた事を言っているようだ。そしてその点に関して、シールは否定する言葉を持ち合わせていない。
　確かに、彼女はこの王城に着てからというものの、冷静さを保てずにいたのは事実だった。彼女は過去の経験から非常に苦しみ、そして耐え続けていた。そしてそれは式典の時とて同じだ。彼女はずっと苦しんでいたのを、シールは間近で見てきたのだ。
　しかし、それでもだ。
「……」
『不満そうですね。納得いきませんか？』
「まあね。駄々捏ねてるみたいで悪いけど」
　シールは、メザイヤの意見に頷く事は出来なかった。それはイングラムのときと同じ、リーンへの過度な信頼があった。しかしそれと同時に奇妙な違和感が心の内にあったのも事実だった。
　違う。と、長い間、こうした事態に対応し続けてきた上で身に付けてきた、勘が、そんな風に言っているのだ。違和感。否、考えすぎなのだろうか？　たかが、そう、たかが〝暗殺〟だ。ヒトを殺す時、大抵は単純に済むものだ。
　何故単純なのか。それはその方が安全で、確実で、信頼性が高いからだ。
　そう。ただ殺す事が目的であるのなら、そんな難解な事はしない。
〝ただ、殺す事が目的ならば〟
「……ふむ」
　シールは静かに、一つの可能性を思慮に入れ、心に刻んだ。
『さて、それで、これからどうしましょう？　他に貴方があてに出来そうなヒトは大抵、私のように捕まっていますよ？』
「彼らを訪ねたところで、まともな情報は入ってこないだろうしね」
　騎士団長のイングラム。そして魔導師団団長のメザイヤの二人がこの程度の情報しか持ち合わせていない。いやそれどころか、シールを追う騎士達ですら、まともにこの事件の全容を把握しきってはいないだろう。
　ひょっとしたら〝真犯人〟の〝協力者達〟ですら、だ。
「さあ、て、どうするか──」

『『『シールベルト、リーン・エリクスに告げる!!』』』

　唐突に、小さな窓しか無いこの部屋に、大きな声が部屋の内に響き渡った。シールとメザイヤ、が、姿を借りている鳥が顔を見合わせた。知った声、そう、あまり長い事聞いておきたくは無い男の声が響き渡っている。

『『『十分の猶予を与える。中央通りに姿を現し降伏せよ！　　　　　　　　さもなくば、』』』

　魔術で拡大させていると思しきその声は、何処か愉悦に満ちていて、

『『『協力者と思しき者達、ガラム夫妻を処刑する!!』』』

　その声は自信満々にそう告げた。

第八十九話 尋常ならざる憎悪

『『『協力者と思しき者達、ガラム夫妻を処刑する!!』』』
　魔術を利用し拡張されたその声は、牢獄城の城壁の中で暮らす全ての人々に伝わっていった。多くの者達は、今からたった数時間前に起こった王の暗殺事件など知る由も無く、しかし、大事が起きたということだけは理解していた。
　しかし、だからといって、城内でも珍しいくらい気持ちの良い性格をしていた二人、近所の付き合いもよく、城内にいる誰もが好意を抱いていたような酒場の夫婦が王の暗殺犯の協力者など、そんな事を唐突に言われて信じられる訳が無かった。
　まして、いきなり処刑だのという言葉が飛び出すのだから、住民達は恐々とした。まるでかつての、賢王が愚王であった頃の、法と言う法が通用しないような、暗黒時代を彷彿とさせたのだ。多かれ少なかれ、その時代を知る者は心に傷を負うような経験がある。その反応は当然だった。
　特にシール達を知る者等は、自分達にまであの暴挙が及ぶのではないかと家の中に身体を隠し、震えていた。
　城内にいる全ての者に恐怖を与えるダーミルの宣告、そしてそれは当然、【ガラーナ】の裏手にあった食料庫にも響いていた。
「……」
　簡易に作られたベットの上で、リーン・エリクスは瞳を開けた。
　未だ呪いに犯された彼女は、青白い顔で荒い息をしていたが、その瞳は確かに開いていた。
「……いかないと」
　ぐらりと身体を揺らし、地面に落ちるようにベットから身体を下ろす。
　裂かれ、血で汚れた服はケーナが既に脱がせてある。下着だけを身に付けた彼女は、何処か現実味の無い精霊の様に白い肌を晒しながら、フラフラと立ち上

がった。、簡易に作られたベットにかけられていたシーツを手に取り、それで露出した身体を押さえる。といっても、肩に引っ掛けただけといった方がいいような有様だったが。
「……」
　彼女はそのまま、時折身体がゆれ、倒れこみそうになりながらも、階段を上り続ける。
　ガラムやケーナのいる、地上へと向かうために。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　牢獄城中央通り、その中央にて、ダーミル一行はその道一杯に騎士達を広げていた。
　元々備わっていた演説用の簡易舞台を囲うようにしてその場を占領している。その彼らの中心の舞台の上には大雑把に切断された丸太と、そしてガラムとケーナの二人が縛られ、転がされていた。
　ガラムの顔は強く殴られたのか、青い痣となっちるのが何箇所かあった。彼は地面に転がったままの状態で、小さく呻き、
「……ちくしょう、あいつ等、思いっきり殴りやがって」
「無駄に抵抗するからだよ。あの数を倒せる訳無いだろ？」
「だから、お前だけでも逃がそうって」
「あんたをおいて逃げれる訳無いでしょ」
　ケーナは呆れたように溜息をつき、ガラムは悔しげに俯いた。そしてそんな二人を見て、ダーミルは邪悪な笑みを浮かべた。
「さあ、丸太に縛りつけろ！ 見せしめにするのだからな！ ははは！」
　言われ、騎士達が動き出す、気が乗らないのか動きは鈍い。しかし確実にガラム達を縛り付けていく。ケーナは目の前でニヤニヤと笑みを浮かべるダーミルを静かに睨みつけ、
「……こんな真似して、どうなるか分かっているの？」
「黙れ！ この王の暗殺者が！」

ダーミルは勝ち誇るような大きな声を張り上げて、ケーナの頬を張った。ガラムは吼え猛り、
「ケーナに何しやがるてめぇ!!」
「押さえつけろ！」
途端、ガラムも騎士達に地面に叩きつけられる。いくら騎士を相手取って平然と戦える彼であっても、縛られた上に何人もの騎士達に一度に押さえつけられては身動きも取れはしなかった。
「良いざまだな！ よし！ 縛り付けろ！」
言われ、騎士達は不快そうな表情を兜の下に隠しながらも、言われたようにする。騎士である以上、彼らは上司に従う義務を負い、そして国王を守る義務を負う。これが国王を守ることに繋がるのなら、と、騎士達は自分を誤魔化すようにして作業を続けた。
かくしてガラム達は立てられた丸太に縛り付けられる。それは暗黒時代に横行した、腐敗した国家への反逆者を処刑する処刑舞台だった。かつてはここに縛り付けられたものは、むごたらしく槍で腹を突き立てられ、死ぬまで放置され、見殺しにされる。
そんなむごい過去のある装置に縛られるガラムとケーナ。そしてそれをご満悦層にダーミルは眺める。
彼は別に、ガラムやケーナが本当にシールの協力者なのかどうかは、別にどうでも良かった。彼は今、ひたすらシール達への憎悪だけで動いている。シールが苦しみさえすれば、たとえ今の行為が正しかろうがそうでなかろうが、どうでもよかった。
「さあ、来るがいい、クズどもめ。俺が引導を渡してやる」
彼は、その燃え滾る憎悪を胸に、そう呟いた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……とうとうやっちゃったか。ダーミル」
シールは何処か寒々しい声色で、そう呟いた。

人質、これを取られる可能性は、勿論シールも考慮に入れていた。しかし、流石にこうも大々的に、それも多くの人の目がある中であんな真似をやらかすとは、思いもしなかった。
　いや、正確には、流石に〝そこまで馬鹿〟ではないだろう、という、何処か楽観的な見方をしていたのだ。だが、その憶測は間違えていた。彼は、シールの想像を遥かに超える馬鹿だった。
『騎士団長代行ともあろうものが、法を破って証拠も無い人間を拘束した挙句公開処刑するなんて真似して、ただで済むと思っているんですかね』
「さあ、思ってるんじゃないですか？」
　そう思っていなければ、あんな真似はしないだろう。民間人に対して法を破り、部下達を使って非人道的な真似をして、失うものが多すぎるような気がするのだが、どうやらそれも分からないらしい。
　何故そんな思想になってしまっているのか、貴族として腐った時期が長すぎたのか、あるいはシールたちへの怒りで正気を失っているのか。全く分からないが、しかし、別に分かりたいと言うわけでもなかったので、シールは推測をやめた。
　今はそんな事どうでもいいのだ。
　問題なのは、現状、ガラムとケーナが人質とされている所だ。
　確かに滅茶苦茶なやりようだが、しかし、確かにそれは実行されてしまっている。そう言う意味では厄介だ。この後の事はどうあれ、彼の人質作戦は有効だ。
　シールにはガラム達を見捨てる事なんて出来ないのだから。
　だから、シールが苛立つように表情を強張らせているのをみて、メザイヤは小鳥の姿で心配げに声をかけて、
『今すぐ飛び込むような真似はしないでくださいね』
「そりゃ流石にしませんが、さて、どうしましょう」
　シールは淡々と、状況を分析する。
　ダーミルの様子はどう考えてもまともな状態とはいい難い。下手にシールが目の前に現れて余計な刺激を与えて、ガラムたちがはずみで傷つけられても困る。
　ともなれば、密かに潜り込むのが一番良い訳だが、さて。
「メザイヤさんは、その姿で魔術は？」

『残念ながら。この子は魔獣ですが、所持する魔力も限られていますから』
「そりゃ、そんなちっちゃい身体ですからね」
　魔術を扱う場合、単に術式を構成するだけではなく、周囲のマナを従う事が出来るだけの魔力が必要だ。別に体の大きさが魔力の保有量の絶対を決める訳ではないのだが、やはり限界はある。
『貴方の封印術では？』
「流石に対策くらいしてると思いますよ。結界かけられたらその時点でアウト」
　そう。シールの封印術は、例えば継続的に魔力を送り維持する結界を用意されるとその途端力を失うのだ。封印術の容量が全て、その結界に充満する魔力に奪われてしまうのだ。
　シールの封印術は、そういった風に守りに入られると、途端に力を失うのだ。
　だからこそシールは城内では逃げる事で、騎士達に攻めさせる戦い方をした訳だが、今回の場合は別だ。完全に相手が待ちの体勢に入ってしまっている。
『では、封印の開放では？ 何かこの場面で有効な魔具はないのですか？』
「別に、便利なものを好き好んで封印している訳じゃないんですけどね。僕」
『でも、用意はしているのでしょう？　　ミスト様から仕事を頼まれているのでしょう？』
「一つでも使うと、二人を助けるどころかそこにいる全員が消し飛びそうで……」
『……一体貴方はどんな依頼を頼まれているのですか？』
　こういう事態になるとわかっていれば、相応の魔具を用意していたのだが、今回はその用意が無かった。国王の式典に行くと言うのに重装備を用意するほうがおかしいのだが。
　定められた時間は短い。こうして離している間にも刻一刻と時間が過ぎていく。
「……まあ、出たとこ勝負も嫌いじゃありませんよ」
　シールは肩をすくめて、窓を覗く。順調に、順調に、ガラムたちが縛られていくのがみえる。シールは顔を顰め、しかし理性を正しく持ち続けてきた。
　怒りは腹の内に押さえつけ続ける。今此処で冷静さを失い暴れれば、間違いなくガラムとニーナを失い、自分の命数も尽きるだろう。怒りは必要ではない。必

要なのは、状況を見極め、正しく理解するだけの知性だ。
　シールはそれを知っていた。幾多の経験、幾多の戦いを経験しつくしている彼は、それ故に身内が捉えられている現状も、ひたすらに冷静だ。
　冷静、だった、

「……っ!!?」

　中央道の端からゆっくりと、リーンが姿を現す、その時までは、

「馬鹿な!!」
『シール！　待って！』

　シールはその瞬間、メザイヤの静止も振り切って、隠し扉を蹴破って、一気にその場から外へと飛び出した。階下から騎士達の声が聞こえてきたが、それを気にも留めない。
　シールはリーンの元へと一直線に跳んで行った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「見ろ！　見るがいい！」
　ダーミルの勝利を確信した声が響き渡る。
　人質を取り始めてはや数分、そろそろ見せしめのため、指の一本でも落としてやろうか、そんな事を彼が思い始めた頃だった。
　前方から一人の影、リーンの姿が現れたのだ。彼は勝利を確信し、笑う。ここまでものの見事に自らの策略がはまった事が嬉しくてたまらない、そんな笑い声だった。
「……」
　しかし、そんな彼とは対照的に、騎士達は複雑な表情をしてみせる。
　当然だろう。長らく続いた暗黒時代は既に終焉している。彼らは真っ当な精神と健全な感情を持った、正統な騎士なのだ。故にこうして得た結果は、〝このや

り方〟を肯定してしまったようで、嫌だった。
　だが、そうした感情を、自らの仕事に持ち込むことを彼らはしない。リーンを目視した瞬間、迅速に槍を構え、前を向き、彼女を捕らえんと動き出した。
「リーン・エリクス！ 両手を上げて地面に身体を付けろ!!」
　騎士長の一人、リズは軽く緊張を交えながらも声を張り上げる。
　だが彼女は、襲撃時、なんらかの呪いをもらっているのか、身体をゆらゆらと揺らめかし、足取りも怪しい。此方の声もまるで聞こえているようには見えなかった。
　いやそれどころか、今にも倒れてしまいそうなくらい弱って見えた。だが、それでも彼らは油断などせず、慎重に、確実にリーンを囲うようにして、追い詰めていく。
「何をしている！　さっさとあの女を捕らえろ！　裸にひん剥いて俺の前につれて来い!!」
　ダーミルはゲスな笑みを浮かべてそう命じる。
　最早自身の立場など完全に忘却の彼方へと追いやってしまっているらしい。だが、この場において彼の暴走を嗜める事の出来る者などいなかった。
「捕らえるぞ」
　ダーミルの言葉はどうあれ、捕らえねばならない事には変らない。リズはそう思考を切り替えると、騎士達をつれ、徐々に徐々にリーンを囲うようにして動いていく。魔導師達も配備し、万全の体制でだ。
「リーン！ 駄目だよ！」
　人質の一人、ケーナが叫び声が聞こえてきた。
　悲痛さの混じった声で、台の上で縛り付けられたまま、叫んでいた。彼女に対しても罪悪感が湧き上がってくるのを感じる。だが、それでもこの任務を投げ出す訳には行かなかった。
　ついにリーン・エリクスの表情が見えるまでに近づき、槍を突きつける。リーンは此方の事も見えていないのか、その場でフラフラと身体を揺らしてる。
　シーツで身体を隠しただけの彼女。それは元より在ったものなのか、呪いの影響なのか、今すぐにでも消えてしまいしまいそうな儚げなその気配が、心臓を締め付けるような色香を醸し出していた。

騎士達は一瞬見とれかけもした。だが、それでも槍の構えは崩さない。後はダーミルの命令と共に彼女を押さえ込むだけだった。
　だが、その時、
「リーン！」
　新たにもう一つ、彼女を呼ぶ声が増えた。
　ニーナの隣のガラムではない。もっと若い男の声。そして可能性があるのは一人しかいない。騎士達は声のほうを、近場の建物の屋根の上を見る。勇者の紋章が描かれた衣服を身に纏った白髪交じりの男。
　シール。彼もまた、この場に現れていたのだ。
「は！　はははははははっは!! マヌケがまた現れたぞ！　さあ捕らえよ！」
　ダーミルが、勝利を確信し、人質などに見事に誘き寄せられるシール達のマヌケさを大いに嘲笑ってみせた。やはり下らない、取るに足らない者達だった。英雄などという名はまるで相応しくない。彼は確信した。
　同時、シールを囲うように騎士達がシールのもとへと跳躍する。魔術師達の加護を得て、強力な跳躍力を取得したのだ。そしてそのままシールを速やかに囲うと、剣を引き抜き、首元を押さえてみせる。
　終わった。騎士達は誰もが思った。
　容疑者として最も疑わしい二人を捕らえた。そう確信したからだ。
　だが、シールは、そんな騎士達の確信をまるで無視して、自分の首元にかかっている騎士達の剣にもまるで動じず、しかし、表情には確かな焦りと動揺をもって、叫んだ。

「逃げろ!!」

　苦渋の形相で、腕を大きく振って、必死に声を振り絞って、そう叫んだ。

〝騎士達に向かって〟

「……は？」

シールのその言葉の意味が理解できず、リーンを囲んでいた騎士たちも、シールに剣を突きつけていた騎士たちも、ガラムたちを囲んでいる騎士やダーミルも、首を傾げて問い返した。
逃げろ、その言葉の意味が分からない。逃げるべきはそう発言したシール達自身であり、自分達ではない。そもそも何から逃げろと言うのだ。彼らは一様に同じ疑問を抱いて見せた。
だからシールの言葉に騎士達は反応せず、その場を動く事はしなかった。
つかまりそうになった彼の妄言だ。そう思ったのだ。
しかし、彼らはもっと深く考えるべきだった。
あれほどまでに騎士たちを翻弄してきたシールが、わざわざその首を晒してまで放った警告、その意味を

だが、最早遅すぎた。

既に危機は、逃れられない所まできていた。

そう

彼らの目の前に、

「嗚呼」

彼女は、妖しく息を漏らしながら、静かにそこに立っていた。

彼女は、リーン・エリクスは、耐えていた。

彼女は、この牢獄城に身をおいてから、ずっと耐えていた。ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、自らの内から滲み出る衝動を堪え続けていた。己が全ての意思を注ぎ込み、内から内から出る淀みを押さえ続けてきた。
そう、彼女は耐えていたのだ。

〝王城にいる人間全てを皆殺しにしないように〟耐えていたのだ。

　だが、常人なら数秒で殺しかねない呪いは、彼女の心を蝕んだ。彼女の衝動を抑え続けてきた枷が外れ、耐えるべき精神力を萎えさせてしまった。
　残ったのは、何もかもを喰らい飲み尽くす、尋常ならざる、憎悪、

「福音を謳いましょう」

　感情を覆い隠す仮面を外し、彼女は微笑む。地獄の様に。
　英雄　リーン・エリクス
【魔帝】【蒼の化身】【理の支配者】【戦場の福音者】
　史上最強にして、最悪の魔女が、ここに降臨する。

第九十話 歌

「魔術師が〝最強〟となるにはどうすればよいか……ですか？」
　王、暗殺未遂事件。この事件が起こる数日前、魔導兵団、部隊長、ミントは魔導師団長メザイヤによって紹介された英雄、リーン・エリクスにこんな質問を投げかけた。
　リーンは、ミントから投げかけられた質問に対して、その質問への理解、というよりもそんな質問を投げかけるその意味が理解できない、と言う風な顔をしていた。
「貴方の言う所の〝最強〟という言葉の定義が分かりませんね。それは単純に誰よりも強いと言う意味で、ですか？」
「ええ、貴方がその若さでそんな異名を持ちえた、その理由を知りたくて」
　ミントはそう言って、彼女の表情を伺う。好奇の目で。
　リーン・エリクス。魔導師団長メザイヤが連れて来た今回開かれる式典の主役の一人。最近でも『マナストーム事件』『黒龍復活事件』『キングワーム復活事件』それらを全て解決に導いた〝英雄〟最強の魔術師と名高い女性。
　そんな彼女に、何故こんな不躾と言っていい質問を投げかけたのか。ミント自身、それはよくわからなかった。ひょっとすると、自分と同じか、それよりも若い彼女が、英雄の称号を得ている事への嫉妬であったのだろうか。だからこんあ子供じみた、質問を投げかけたのかもしれない。
　リーンは、質問をしてから暫くの間、この魔導師団の訓練室に入ってきてから変らない無表情のまま、じっと此方を見つめてきた。不快にさせただろうか、とミントは思ったが、しかし暫くすると視線を、今さっきまで掌で実演して見せていた魔具を眺めながら、口を開いた。
「……そもそも、強さと言うのは複合的です。無類の〝破壊力〟を持っていても、日常で呆気なく事故や病で倒れる者も多くいます。それ故、強さとはただ

〝強い攻撃力〟をもっていればいいというものではありません」
　リーンは何処か眠たげな、あるいは気だるげな口調で、訥々と語り始める。
「しかし今回の質問の場合、そういった根本的な話には目を瞑りましょう。魔導師が、戦場において強さを獲得する、その方法のみに焦点を合わせます」
　語り始めると、周りの魔導師たちも彼女の話に聞き耳を立て始めた。誰だって〝英雄〟の話には興味はあるのだ。彼女の強さには。
「軍において、つまり貴方達が求められる強さとは、いかに最前線で戦う騎士達を護る加護を作り、後方からの魔術で敵を討てるのか、と言う事になります。魔導師が求められるのは前線に立つ事ではありません」
　国の魔導師は、いざ戦いとなる時の想定は普通、騎士達などの前衛を守るものがいる事が前提となっている。国の軍隊に所属しているのならそれは当たり前だ。単独任務でも無い限り、単独で戦闘するなんて事はありえない。
「故に、組織としての魔術師に求められる力は限られます。勿論、ある程度の応用力は必要ですが、本来求められる分野にのみある程度特化してさえすれば問題ないのです」
　力自慢の魔術師など必要ない。博識な騎士など必要ない。人間が極められる事など限られる。だから組織が必要なのだ。足りない所を補い合うために。
「しかし〝最強〟などという馬鹿げた言葉を個人が体現する場合、そうした組織による力の力の構成を考慮に入れる事は許されません。つまり単独で万能となりえなければならない」
　そう言って、彼女は何処か気だるげにしながら、此方に視線をやる。
「ですが、そもそも魔術と言うものは、〝魔術社会〟などと呼ばれる今の社会体制からも分かるとおり、使い方次第で万能の力を発揮するものです」
　ミントたちは頷く。勿論それは分かっている。何しろ彼女等は最も魔術の恩恵を受けている者達の一人なのだから。リーンはその返事をみて、言葉を更に続け、
「そしてそれは戦闘においても同じ事、攻撃は勿論、守りとしても魔術は力を発揮し、怪我人を癒す事も、肉体を強化し接近戦に持ち込む事だって可能です」
　それも分かる。本人の得手不得手による程度の差はあっても、魔力を得る素養があるのなら、訓練次第で魔術の幅はどこまでも広がるものだ。

納得、という表情をすると、「しかし」とリーンは首を振り、
「それなら何故、魔術師は戦場において後方支援に甘んじるのでしょうか。魔術という力それほど万能であるのなら、騎士を必要としない筈なのに」
　問われ、ミントは一瞬言葉を失うが、直ぐに頭を切り替える。答えられない訳じゃない。ただ、当たり前の事過ぎて、言葉にするのを忘れていたのだ。
「それは……万能なる魔術を扱うのには制約が多く存在するからでしょう？」
　本人のコンディション、保有する魔力量、魔術を使用する環境、魔術発動速度、あらゆる制約が存在する。そしてこれらの制約は魔術を扱う以上、絶対につきまとうものだ。
　それを聞いて、リーンは「そうです」と頷いた。
「つまり魔術師が最強となりうる為の条件とは、その〝制約〟を克服できるか、です」
　魔術と言う万能に近い力を、その使用制限無く自由自在に扱う事が出来れば、確かにそれは万能に昇華する。それはそうだろう。とミントは思った。思って、しかしそれは不可能だろうと思いなおす。そんな事が出来るのならとっくに誰かがやっている。それが出来ないから、魔術師は後方支援に甘んじているのだ。
　そもそも魔術師は誰も、教えを受ける過程で、〝制約ゆえに魔術は万能ではない〟と教えられるのだ。だから制約そのものを超越するなんて発想は普通出てこない。
　しかし、リーンはそれを超えると、そういった。彼女は更に続け、
「魔術の制約には様々なものが存在しますが、しかし中でも最もシンプルで、しかし克服すれば最強となりえる制約が存在します。それは、」
　リーンはその問いに、此方に身体を向けて、両手の掌を上に向けて、
「速度です」
　そう言うと、目を瞑った。大気のマナの揺らぎをリンスは感じた。魔術の動きだと分かった。そしてその予感の通り、リーンは魔の音を紡ぐ。
「【焔よ。我が命に従い燃え盛れ】」
　術の詠唱、そして次の瞬間には右の掌から炎を生み出した。特に変った様子は無い。普通の炎を生み出す詠唱だった。リーンはそれを方目を開いて確認すると、更に、

「【焔よ】」
　次に左の掌から炎を生み出した。彼女の両手には掌サイズの火玉が二つ、茜色に燃え続けている。どちらも同じ量の、同じ魔術だ。違うのは一点。詠唱の長さだ。
「魔術とは基本的に、マナを己が魔力として取り込み、そこに指向性を持たせるものです。術の詠唱や、術式の構築、魔具の精製など、全ては魔力に指向性を与えるためのものでしかありません」
　リンス達は素直に頷く、と言ってもこんな話の内容は、リンスは愚か、普通の魔導師たちなら誰だって知っている内容ではあるのだ
「指向性を与える」というのは、半端なものであってはならない。高い集中力と、魔力を制御する強い想像力でもって、本来あるべき事象を歪めなければならないのだから。
　例えば術式は、マナに〝文字〟を与える事で指向性を与えている。
　術式そのものにもマナが必要であり、その術式の構成一つ崩れるだけで魔術は崩壊する危険はあるが、しかし術式の構成さえ覚えれば、相応の素養さえあれば同じ魔術を発動できるようになる。
　魔具には様々な種類があるが、基本は使用者の素養を高め、魔術を使いやすくするものだ。魔具の加護によって高レベルの魔術を扱えるようになる。ただし魔具そのものの精製に非常に時間がかかり、また、魔術によっては非常に費用もかさむ。
　詠唱は道具は使用せず、術式を構築する必要も無い。だが、それらの代行となる詠唱は、多大な集中量と時間が必要になる。そしてそれは半端な事では短くする事は出来ない。勿論、意味ある言葉のみを選択していけばある程度は短くなる。が、それ以上短くする場合、本人の高い集中力と想像力が必要になる。
　他にも様々な魔術を構成する方法はあるのだが、しかし大まかに言えばこの三つだ。
「魔具や術式は用意していれば発動は直ぐに可能です。しかし持ち込み維持できる量は限られます。刻一刻と変化する戦場では、やはり最も使用率の高い魔術手法は詠唱です」
　個人が持っていける魔具も術式も限界がある。軍であればまとめて運搬できる

かもしれないが、それでも、一々状況変化に合わせて魔具を取りに走るくらいなら、その場で詠唱したほうが圧倒的に早い。だから主流は詠唱だ。
「詠唱の制約は何より発現に時間がかかると言う事です。更に極度の集中力を有するため、詠唱中は無防備を晒す事になります。故に騎士達が必要になると言う訳です」
　しかし、もしも、
「もし、詠唱に全く時間を有する事が無かったのなら、騎士達の援護なくとも戦えるでしょう。魔術を自在に操る万能の存在が誕生します」
「……魔力の制限等、他の制約は？」
「それすらも、それを補う魔術を一瞬で生み出すことが出来れば、補完できます。魔力を補給する魔術、マナを再構築する魔術、体力を回復する魔術、接近する敵を排除する魔術、こういった術も一瞬で生み出せるのですから、制約は全て取り払われる」
　リーンはそこまで言い切り、息をついた。そして、
「術式詠唱の短縮化は勿論容易い事ではありませんが、しかし程度あれ誰でも可能なモノです。〝最強〟に憧れるなら、努力する事ですね」
　結論は告げた。と言うように、彼女は再び、手元の魔具をいじくり始めた。
　同時にミント含め、魔導師たちは、何処か理解できない、と言った風な表情をした。リーン、彼女はつまり、その詠唱を最速化すれば魔術師は最強となる、そう言っている。
　ミントもまた同じだ。別に彼女の答えは理解できなかったから、と言う訳ではない。彼女のその答えが、魔導師たる彼女には至極当たり前の事だったからだ。
　勿論、それをないがしろにしていいものではない事は分かっている。彼女自身、常に自らの魔術の速度を高める訓練は欠かしたことが無い。戦場においてはいかに素早く詠唱を済ませる事が重要なのかは、彼女だって分かっているからだ。
　だが、最強と言うイメージとは繋がらない。詠唱の短縮には限界がある。それこそまさしく制約、制限が。人間の口はそんなに早く回らないし、頭は動かない。どれだけ単純な魔術でも完成し発動するまでに一秒はかかるものだ。〇コンマ何秒という時間の間に敵の攻撃が飛び交う戦場ではその一秒も致命的な隙にな

る。
　だからこそ、制約と呼ばれるのだ。彼女が言っているのは、何処か、此方の質問を軽く受け流しただけであるように思えた。
「速度を真に極めれば、どんな相手にでも勝てるのですか？　例えかつての魔王であっても」
　故にその問いかけは何処か皮肉めいたものだった。できる訳が無いだろう？　そんなニュアンスがありありと込められた問いかけだった。
　しかし、リーンはそれでも全く表情を変えず、そのまま
「ええ、可能です」
　平然と、至極当たり前というように彼女はそう答えた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　時は戻り、中央通りに場所は移る。
　魔導師団部隊長、ミントは身体を揺らがせ、今にも倒れてしまいそうなリーンを前にして、何処か幻滅と失望の入り混じるような感情を腹の底で渦巻かせていた。
　別に、リーンが最強である事を望んでいた訳ではない。
　むしろ彼女を捕らえなければならない自分達の身分を考えれば、あっけなく捕まってくれたほうが良いに決まっている。だからリーンの今の状況に関して言えば安堵しているというのは本心だ。
　しかし、それとは全く別の所で、現状への失望があるのも事実だ。
〝英雄〟は〝最強〟でなくてはならない。それは英雄録に憧れ信仰する子供のような想いだった。最強であって欲しい。無双であって欲しい。そんな幼い感情が彼女の中にあったのだ。だからこそ、先日、彼女にあんな質問をしたのかもしれない。
　だが、所詮は妄執だ。
　現実はこの通りだ。〝英雄〟とやらは弱り、苦しみ、挙句人質を取られ無様な姿で人々の前まで引きずり出されている。そう。これが現実だ。英雄なんてこの世にはいない。彼女は私達が捕らえるべき、王暗殺の重要参考人だ。

「第三魔導師団、術式用意、騎士達を援護せよ」

　ミントの指示、そしてリズ騎士長率いる騎士達の動きと共に魔導師たちは動き出す。リーンを捕らえんが為に。

　しかし直後に二つの動きが、この処刑場に起こった。

　一つシールベルト、彼が戦場に突如現れ、叫んだ事。

　彼の叫んだ「逃げろ」という言葉について、ミントは最初理解できなかった。しかしそれはきっと、リーンや、あるいはガラム夫妻に向けられた言葉なのだろう、と、そんな風に解釈した。というよりも、そう解釈する以外、彼の言動を説明する事ができなかった。

　だから彼女はその事を捨て置いた。シールは後方を守る騎士達に任せようとしたのだ。

　むしろ、彼女が警戒を高めたのは、もう一つの出来事の方。

　リーン・エリクスが動きを見せたのだ。

　先ほどまで、ただふらふらと身体を泳がせていただけの彼女は、何処か儚げで、精霊のような姿をしていた彼女が、身体を僅かに起こしたのだ。それだけ、と言えばそれだけの動きだ。だが、少なからず騎士や魔導師としての経験を積んできた彼らには、緊張感を促すだけの〝何か〟があった。

　何をする気だ、と、騎士達が僅かに警戒を強め、ミントも手持ちの魔具を構えた。だが、

「……？」

　彼女はその両の手をゆっくりと、胸元に合わせて、指を組んだ。まるで神に祈りを捧げる巫女のように。

「何を、」

　理解できず、ミントは訝しがる。まさか神頼みでもしているのか？　そんな疑問すら沸く中、彼女はそれでも此方に視線を向ける事も無く、そのまま、

「□□□□」

〝歌〟を 歌い始めたのだ

「……は？」

　瞳を閉じて、両の手を合わせて、空に奉じるように、不思議でよく通る〝音〟を響かせ続ける。それは奇妙で、しかし何処か不可思議で、聞き入ってしまいそ

うな魔性があった。
「……何を」
　ミントは、いや、その場にいる誰もが理解できなかった。
　その歌を、否、果たして本当に歌と表現していいのかは分からなかったが、しかしそれがどういった意味なのか理解できない。そもそも理解する意味があるのかも分からなかった。
　あまりにも場違いな行動、本当に狂ったのだろうか、そんな事を思った。
　しかし、半ば人間離れした雰囲気を纏う彼女の歌に、部下達が何処か魅了され始めていたのをミントは感じた。一々感情を絡めてしまうあたり、未熟だった。部下も、それを従える自分も。
　理解不能な存在に気を払う必要は、無い。
「魔導師団！　拘束魔術準備」
　渇をいれるため、指示を強く飛ばす。部下達は動く。騎士達も同じく距離を詰める。
　終わりだ。そう思い、指示をリズにあわせんと動こうとした。
　その時だった。
「……あ、が、ぁ？」
　低く、鈍く、不愉快な、しかし耳にへばりつくようなひび割れた呻き声が響いたのだ。一瞬、騎士達は意識をそちらに奪われる。振り向いた先にあるのは、ダーミルと、人質に取った酒場の夫婦、の筈だ。
　そしてそれは勿論変りは無かった。三人は揃ってその場にいた。ガラム夫妻は先と同じく木の柱に磔になっている。そしてダーミルは彼らの前で仁王立ちをして──
「っひ、ひ、ひ、」
　その両腕を、〝蒼く透き通る氷の剣〟で貫かれ、舞台の壁に磔になっていた
「……な?!」
　ミントは今度こそ、驚愕の二文字を表情に刻んだ。
　部下達も、騎士団たちも同じだ。それはダーミルの心配、ではなく、その氷の剣が一体何処からと言う疑問だった。
「構えなさい！　医療術が使えるものは救助を！」

指示、魔導師たちは防衛の魔術の準備をし、騎士達はその魔術師達を守るようにして構えた。残る部下はダーミルの保護に向かう。だが、たどり着くその前に、

「ぃぃぎゃあああぁぁぁああああああああああああ！！！？」

磔になったダーミルに数十本もの剣が突如飛び掛り、その全てが両手足を貫き続けた。最早、両腕は引き千切れ、足は見るも無残な有様に変った。悲鳴はもう響かない。気を失ったのか、あるいは死んだのか、

「っな……？」

ミントは再び周囲を確認する。魔術の詠唱は何処からも聞こえてこない、いや、そもそも魔術をダーミルに叩き込む意思のあるものは、リーンとシールの二人だけだ。だがシールは騎士達が取り囲み、リーンは、わけの分からない歌を……

……ウタ？

「う、うぁあああ⁉」

直後、強力な爆裂が起こる。焔が何の拍子もなく騎士達の中心で燃え滾り、騎士達が吹き飛ぶ。その熱に耐え切ることも出来ず、騎士達は地面に転がり呻く。

「きゃぁあああ⁉」

上空から、大樹をも圧し折るような暴風が吹き荒れる。術式の用意をしていた魔導師たちはその圧力に叩き潰され、骨を軋ませ悲鳴を上げた。

「ぐ、ぐごあ‼」

舗装された道路に亀裂が走り、亀裂の先から岩石が槍となって騎士達へと突撃する。鎧が彼らの身体を護るが、しかしその衝撃は周りの騎士達をも巻き込んで、吹き飛ばす。

「っ……⁉」

ミントが周囲を見渡す間も、次々に〝異変〟は発生していく。

次々に焔が爆裂し、鋭い風刃が身体を切り裂き、巨大な落雷が鳴り響き、重力の鎖が全身を縛りつけ、水球が大砲の如く破壊力で直撃する。あらゆる現象のその全てが、一切の途切れなく、全ての騎士達と魔導師たちを叩きのめしていく。

最早絶え間などなく、魔術が、咲き狂う。

魔術が、魔術が、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔術、魔、魔、魔、魔、魔、魔、魔、魔、魔、魔、魔魔魔!!!!!!!!!!

「なによ、こ、れ、はぁ!?」
　ミントは叫んだ。
　叫んでいる最中も背中に火球が叩き込まれ、身体を正体不明の〝蔦〟が縛りつき、暴風が骨を軋ませる。最早息する事すら苦しい状況。事前の魔術の加護が無ければとっくに死んでいる。凄まじい魔術の怒涛。
　何が？　否、誰が？
　いや、その答えは知っている。分かっている。
　というよりも、こんな真似が出来るのは、一人しかいない。
「リーン・エリクス!!」
　吼え、彼女を睨む。リーンは未だ、特に此方に気を払うでもなく、あの奇妙な、魔的な響きの司る歌を歌い続けている。特に魔術を行使している風には、い

や、

「□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□」

〝している〟。彼女は先ほどから〝し続けている〟。
　あの奇妙な『歌』。何も気にも留めず、奏で続けているあの『歌』

「□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□」

　そして、ミントは悟る。『歌』の正体、それは

「【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【】】】】】】

　超、超超超神速で紡がれ続ける、魔術の連続詠唱!!
「ふ、ざけるなぁぁぁ!?」
　突如現れた雨の弾丸を身体に叩き込まれながら、ミントは叫んだ。
〝音〟に聞こえるほどの詠唱短縮!?　ありえない！　そんな事あるはずが無い！
リーンは確かに先日、説明していた。最強として魔導師に必要な能力とは、【速度】であると。そう確かに言っていた！
　だが、これが速度!?
　これが?!　最早彼女が紡いでいるのは言葉ですらない！　音だ!!　短縮とか効率化とか、そう言う問題ではないだろう!?
　もし本当にコレを実行していると言うのなら、『術としての意味』と、『事象を歪めるだけの意思』を、聞き取る事すら出来ないような〝音〟に全て叩き込んでいると言う事になる！ それも、一切の絶え間なく連続で！
　人間に、そんな事が可能なのか?!
「で、できる訳が……」
　戦く様に、ミントは一歩下がろうとした。だが、何故だか足が動かない。
「っ!!」
　見れば、足が氷の塊に覆われ、後から強烈な痛みが走った。何時の間にか魔術

の加護を突き破り、自らの身体を食い破ろうとしている。
　このままでは、魔術の暴風雨に身を晒す事になる！
「障壁！　障壁を！　作りなさい！　早く！」
　部下達に指示を飛ばす。既に部下の半分はこの大混乱に振り回され、そして倒れている。だが、残り半分は無事だ。彼らは混乱に陥りつつも、訓練を反復するように術を刻み始めた。
　障壁さえ、障壁さえはることが出来れば！　単純に魔術を防ぐ事ができる筈だ！
　ミントも部下達と同じく詠唱を始める。
「【我が守り手【──】を……!?」
　だが、その魔術は封じられる。唐突に降りかかった歌によって。
　否、魔術の詠唱が音によって封じられる訳も無い。
　ならばこれは、魔術の阻害、魔術の封印だ。
　しかし王城で使われるような結界型の、その空間丸ごと魔術を封じる類のものではない。何故ならリーンの魔術は未だ健在だからだ。ならばこの魔術封印は、明確に狙いを定めて封じられたと、そう言うことになる。
　つまり、この地獄のような魔術の暴風雨を発動させながら此方の詠唱を発見し、更にその魔術が発動する前に此方の魔術を解析し、その魔術を発動する一秒も満たない間に破壊したと、そう言うことになる。
「ミント様！　障壁が張れません！」
「て、転移術も！」
「結界も不可能で、ぎゃぁあ!?」
　障壁を張れず再び混乱に陥った部下達が、次々に魔術に討たれていく。最早立ち上がっている部下は数えるほどしかいない。その部下達も次々に魔術に吹き飛ばされ、加護ごと弾き飛ばされていく。
「……」
　最早ミントは、驚きを通り越して恐怖した。そして理解した。
　彼女の言っていた〝最強〟の意味。
　制約を超越した魔導師、魔帝
　大げさな異名だ。そう思っていた。仰々しい、実の伴わない名だと。だが、現

実はどうだ？　圧倒的な魔術の嵐、魔術を完全なまでに支配しつくし、更に此方の魔術の一切を封じ、喰らい、更に地獄を生み出し続ける。
　アレは、大げさでもなんでもない。事実通りの異名だったのだ。
「逃げます！　逃げるのよ!!」
　最早選択の余地は無かった。逃げるしかない。人質も何もかも捨てやって。
　騎士達は彼女に近づく事すら出来ない、魔導師たる自分達は魔術を扱う事すら許されない。勝利できる可能性の尽くが存在しない！
　転移の魔術を扱う事も出来ない。騎士も魔導師も、その場にいる誰もが無様に足をばたつかせて、死に物狂いで走り出した。外へ、この地獄の外へ！
　走り、走り続ける。途中何人もの人間が吹き飛ばされ、叩き潰されていく。部下もどんどん減っていく。だが、最早彼らを助ける事も、ミントにはできなかった。そんな余裕は一つも無いのだ。
　早く、早く早く早く早く!! 早く外へ!!
　救いを求める彼女の願いに答えるように、眼前、魔術と魔術の隙間から、ほんの僅かな光が見える。あれは魔具の街灯の灯り、この地獄の外へと続く救いの光だった。
　彼女は既に魔術に叩かれボロボロになった腕を必死に伸ばし──
「痛!?」
　衝撃に腕を抑えた。魔術に叩きつけられたのか。そうも思った。事実はそうではなく、しかし、ある意味でその予測はあたっていて、
「……これって、」
　蒼いマナの光、それが目の前の道を、彼らの行く先全てを防ぐようにして、壁のように広がっている。
　結界だ。
　今回の『人質作戦』においてシールベルトの【封印術】対策に用意されていた結界、その筈だ。事実。張ったときと寸分違わぬ場所にその結界は存在している。
　だがそれが何故、私達を〝弾く〟？
　否、最早何故、と疑問することすら馬鹿馬鹿しく思えた。
　奪ったのだ。複数人が同時に発動した強固な結界のその権限を。彼女が。

そして、外敵から守る為の結界を、中にいる者を閉じ込める為の〝牢獄〟に変えた。
「……っひ」
　部下の一人が耐え切れず、悲鳴を上げた。他の誰も、似たようなものだった。悲鳴をあげなかったのは、単にそれをあげることが出来ないくらいに絶望に陥っているからだ。そしてそれはミントも同じだ。
　背後に迫る、死の気配、容赦なく放射される狂気
　振り返る。振り返るほか、無かった。
「【嗚呼】」
　彼女は、リーン・エリクスが、微笑んでいた。
　濃厚な殺意と共に。とても、とても穏やかに。
「【全てに終焉を捧げましょう】」
　彼女は、彼女は、堪えきれないというように破顔し、そして、歌った。
「【死ね】」
　全ての破滅を
「【死ね】【死ね】【死ね】【死ね

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね】」

　死を叫ぶ呪いの言葉は、それすらも魔術の一端と化する。暴走する魔術に周囲のマナは唸りを上げ、亡者の呻き声のような音を立てて、リーンに力を与えていく。濃密なマナは蒼く輝き、リーンの身体へと吸い寄せられていく。
　輝く翼の様に凝縮されたマナを纏う彼女は、神か、あるいは悪魔にしか見えなかった。
「嫌だ！　嫌だぁぁああああァァアアアア!!」
　部下達は、散り散りになって逃げ出した。逃げ出して、その先で獣に喰われるが如く、無限の魔術を叩き込まれ、倒れていった。ミントは、その場にいた。逃げなかったわけじゃない。既に魔術の氷刃に撃たれ足を動かせずにいたのだ。
　ある意味では幸運だった。もし動いたら、皆と同じようにその瞬間魔術に喰われていたのだから。
　しかしミントはそれでも逃げ出したかった。
　例え魔術に喰い殺されようと彼女の、魔帝の前に、立っていたくなかった。
「【私の渇きヲ癒セ】」
　呪いと共に築かれるのは莫大なる陣。神速の詠唱をもって時間をかけるその理由。それは、今刻まれる魔術の破壊力を示している。この地域一帯全てが消えてなくなるような規模の、巨大な魔法陣が大地に刻まれていく。
　魔法陣は蒼く蒼い、極限まで高められたマナの光を放ち始める。
　最早、一切の猶予も、与えてはくれない。
「あ、……あぁ」
　ミントは、地面に身体を付けて、頭を垂れ、彼女と同じく両手を組んだ。
　それはリーンのように諂う為ではない。神に慈悲を願うものだった。

だが、彼女の相手は神ではなく、魔帝だ。
　自らに歯向かった愚者の許しを受け入れる慈悲を、持つ訳も無く、

「【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【エンデ】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】」

　断罪は告げられた
　圧倒的なマナの光に満たされる。色は蒼から黒へと変り、全てが極限に高められ、そして、

「【封断】」

　瞬間、生まれたのは膨大な魔術の爆発、ではなく、赤く閃く一筋の光だった。巨大な魔法陣はその赤い光に中央から寸断される。魔術の嵐は一瞬、その光に飲まれ、消え去っていく。
　一瞬、魔術の海の中央に出来た一筋の道、その僅かな道を一瞬、何者かが駆けていく。
　そして〝彼〟は中央、リーンの元へとたどり着き、
「【□□□□】」
「【封断偽剣】」
　赤の剣と、蒼の剣が交差した。
「【邪魔を】」
「駄目だよ。リーンちゃん。女の子がそんな怖い顔しちゃあ」
　リーン・エリクスはマナを凝縮させた剣を構え、憎悪と狂気に堕ちた瞳で彼を睨み
　シールベルトは封印の剣を構え、困ったような笑みで彼女に優しく声をかける。
　二人の英雄は地獄の中心で相対する。

第九十一話 慟哭

　英雄の相対から若干時間をさかのぼる。
「さー、て……どうしようかな」
　星の巡る闇夜の空を仰ぎながら、シールは大きく大きくため息をついた。
　逃げろ、という警告のすぐ後、リーンの【魔帝モード】によってシールの周りにいた騎士達はなぎ倒された。というよりもシールのいる場所丸ごとが魔術で吹っ飛んだのだが、その際、リーンの魔術の癖を知っていたシールは上手く逃げる事が出来た。
　出来た、が、果たしてこの現状をなんとするか。
　距離を離れて、一つ二つ別の屋根に飛び乗り振り返ってみると、かつては見慣れた、しかし現実のものとは思えない光景が、戦慄たる光景が広がっていた。
　視界に映るほど凝縮され獣のように唸り、瞬くマナの流動。その力を持って炸裂し続ける魔術の嵐。逃げ惑う騎士と魔導師たち。それを阻むようにして蒼々と輝く光の牢獄。そしてその中心で哂い続けるリーンの姿。
　地獄絵図、という表現がまさにぴったりだ。
　そして、それを生み出しているのが、自分の大切な人だと言うのだから笑えない。
「やれやれ」
　シールは肩をすくめ、この今の状況に対して苦い笑みを浮かべた。
　よくもまあ、ここまで最悪の展開と言うものが続くものだ。やはり、というべきなのか、王城に行くとろくな事にならないと言うジンクスは当たっていた。もし万一、再び誘われるような事があった時は絶対に断ろう。シールはそう堅く誓った。
　結界に再び視線をやる。既に大変な事態になっているが、そもそもの発端はガラム夫妻の人質作戦なのだ。あの二人は何処にいるのかシールは探すが、結界の

中は阿鼻叫喚となり、一向に視界はつかめない。
　行くしかないか。
　シールはそう判断し、そして右手を離れて展開する結界に翳した。
「シールベルト！」
　だが、シールが術を展開する前に、彼を呼ぶ声がした。屋根の下の足元に、ダルシア率いる騎士部隊が新たに到着したのだ。この騒ぎに気が付き、此方にやってきたらしい。
　ダルシアは視界にも映る。自身の同僚達が成す術無く結界に閉じ込められ、叩きのめされていく様。彼は顔を顰めた。
「これは……」
「やあ、ダルシア。君の叔父さんはとんでもなく迷惑な事をしてくれたよ」
　シールの呼びかけに、ダルシアは一瞬、口を開いたが、しかしそのまま何も言葉を作らぬまま、閉ざした。そして再び眼前の地獄を眺め、顔を歪めた。何が起きたのか、大体でも察せたらしい。
　シールはそんな彼を見て僅かに笑みを浮かべ、
「ダルシア、頼みがあるんだけど」
「……何か」
「医療団を呼んでくれないかな。多分〝終わったあと〟怪我人が沢山出ると思うから」
　その言葉に、ダルシアの周囲の部下たちはどよめいた。捕らえる対象であるシールがそんな事を言えば当然だろう。そもそも彼自身が目の前の光景を作り出した可能性だってありえるのだ。しかし、ダルシア自身は暫く瞳を閉じ、考えを巡らせたその後、小さく頷いた。
「分かりました」
　ダルシアはそう返答すると、そのまま部下達に指示を送り、彼自身もそのまま城のほうへと引き返していった。
　彼とて、現状での優先すべき点は分かっているようで、ありがたいことだ。
「さて、それじゃあ、いきますか」
　シールはそんな感じで気軽に、自らの封印術式を発動し、結界を封断した。

: :

　こうして、シールはリーンの結界を切り裂いて、彼女の眼前へと踊りでたわけではあるのだが、しかし、むしろ此処からが問題だった。
「……!!」
　シールが斬りかかった、直後、彼女の振るう蒼の剣の発する衝撃に彼は吹き飛ばされ距離が空けられてしまう。再び距離を詰めようとするが、しかし彼が体勢を整えようとした時には、二人の距離の間をたちまち魔術が渦巻いたのだ。
「遠いな……」
　先は封断で切り裂く事が出来たが、今度は先よりも更に濃密で、封印術式はリーンの元にたどり着くまでに崩れてしまう事が分かる。容易く距離をつめられなくなっていた。
　シールは距離を詰めることを諦め、その場で身体を起こし、彼女を見る。リーンは正気を失っているのか、シールを見つめつつも【歌】をやめることは無く、壮絶な姿でこの空間のマナを全て支配していた。
「……何処かで在ったような状況だ」
　シールはエレナを救い出したときの事を思い出していた。あの時もエレナは正気を失い、こんな風に自分が必死になっていた気がする。……現状は、あの時と比較にならないくらいに危機的ではあるのだが。
「【□□□□】」
　考えている間も、リーンは歌い続ける。だが今は無差別に魔術を発動させ続けている訳ではない。眼前のシールを敵と定め、自らの肉体強化魔術や感知系魔術等を連続発動し、シールに備え力を膨らませ続けている。地面に倒れ伏した騎士達や魔導師達には目もくれない。
　明確に、シールを自らへの危機と捕らえている。正気を失っている筈だというのに、嫌と言う位に冷静な判断力だった。おかげで、これ以上、騎士達や魔導師たちが無抵抗に嬲られる事はなくなったが、
　……本気で死ぬかもしれないなあ
　シールは死の気配を間近に感じた。リーンのこの状態、【魔帝モード】ははっきり言えば人間には、否、例え古代獣だろうがドラゴンだろうが太刀打ちできる

ものではない。

　幸いなのは、本当に不幸中の幸いなのは、彼女が〝全く持って本調子ではない〟という事だ。もし彼女が真に正気であり、そしてコンディションもまともであるのなら、騎士達を倒す、ではなく、殺している。それも一瞬で。結界を張ることも無く、一瞬の間も無くだ。

　彼女が正気を失い、そしてコンディションが最悪だからこそ、彼女は騎士達を殺し損ねている。危険な状況には変わりは無いが、それは確かな幸いだった。勿論、彼女が呪いを受けなければそもそもこんな事にはならなかったのだが。

　ともあれ、彼女が危険な事には変わりは無いのだが。しかし、それでもシールは彼女を止めなければならない。彼女のために。

　なぜなら、リーンは今まで耐えていたのだ。人を殺さないように、それは彼女が人であろうと努力し続けたと言う事だ。その努力を、何処の誰ともつかないような人間の悪意によって砕かれるなんて馬鹿馬鹿しい結末を、彼女に与えるわけには行かない。

　しかし、ではどうやって？

「……リーン先生」

　シールは、まずは、というように彼女に呼びかける。普段と同じ呼称で。

「リーン先生！　僕です！　シールです!!」

「【□□□□□□】」

　あるいは無駄だと言う事も、シールは半ば自覚していた。だが、それでも呼びかける。周り魔術の爆音に恐れず、負けぬくらい強い口調で、

「リーン先生！　貴方はこんな事を望んではいなかったでしょう！　目を覚ましなさい！」

「【□□□□□□】」

　目を覚ませ。正気にもどれと。

　しかし、あるいはやはり、と言うべきか。反応は無かった。

　憎悪に飲まれている。狂気に喰われている。仕方の無い事だ。彼女を咎める事は出来ない。

　しかし、彼女が化け物に堕ち、殺戮者となる事だけは、許容できる事ではない。

彼女を止め、救う。彼女を殺すくらいの覚悟で、それを定める。

「少し借りるよ」

シールは足元に転がっていた騎士の剣を二本拾い上げる。魔術の加護にも反応しやすい鉱石で作られた良い質の剣だった。シールはそれをどちらも右手に備え、指を当てると、

「【封印付加】」

剣を封印術式で赤く染め上げる。幸い、彼女の万能性は魔術に依る。物質への干渉は低い。剣を媒介に封印術式を利用すれば、比較的彼女の干渉を抑えられる。あくまで、比較的、と言う話ではあるのだが、

「……さて、」

と、二本の剣を構え、シールは腰を落とす。そして大きく息を吸って、吐いた。

時間が経てば経つほど、彼女は自らを魔術で延々と強化し、こちらは不利になる。

時間を経てば経つほど、彼女は強大なバケモノに成長していく。

早く、可能な限り早く決着を付ける。彼女が完全になる前に。

「【封断結界】」

己が肉体を基盤にして、自らの身体を覆うようにして封印術を構築する。封印術式を利用した防護だ。討たれれば直ぐに消えるが、しかし確実な守りとなる。

「【□□□□】」

対してリーンも歌を続ける。マナは更に色濃く身体を纏う。最早強固の鎧であるようにしか見えないように、彼女の身体を覆い隠した。

そして、一瞬、間が開く。倒れた騎士達の呻き声も無ければ、魔術の爆音も無い。ただ中心でシールとリーンの二人が互いを睨み、沈黙し続けていた。

そして数瞬後、シールは駆け、同時にリーンは、彼方へと響かせるようにして謳った。

「!!」

直後、シールの眼前には爆発するかのような勢いで魔術の塊が飛び交った。魔術で起こしえるあらゆる現象、それらが全てシールへと牙を剥き、狂った勢いで飛んでくる。それなのにその全てが正確だった。

「っぁぁあああ!!」
　シールは喉奥から吼え、風をも引き裂く速度で剣を薙いだ。封印術式を伴った剣は赤く閃き、そして眼前の魔術を飲み込み、喰らった。魔術を取り込んだ封印術式はその身を黒く腐らせていく。
　術式の剥がれた剣は、この魔術の海の前ではただの金属の塊だ。だが、
「【付加！】」
　直後にシールは新たな封印術を剣に装備させる。そしてその間、もう片方の剣を薙ぎ、同じように自らを喰らおうとする魔術を剣で叩きっていった。
　怒涛の嵐を、シールは両の剣で切り裂き、駆ける。無論、魔術は前方からしかやってこない訳ではない。三六〇度、あらゆる方向から焔や雷が彼を喰らい襲う。【封印結界】は一時はその攻撃を防ぐものの、すぐさまその限界を超え、崩壊していく。
　だがシールは厭わない。身体に走る痛みを無視し、走り、そして跳躍する。
　術の嵐を超え、視界が開かれる。下を見ればリーンが此方を見上げている。だが、ただ此方を見て、呆然としている訳も無く、歌を放つ。敵を打ち払う自らの僕を生み出すために。
　マナが彼女の前で凝縮する。それは一瞬強く光を放つと、次の瞬間、光の中心から白熱を生み出し、そしてその中心から、
「【GYAAAAAAAAAAAAOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO
　彼女の前方に焔を纏う龍が生まれ、産声を上げた。その身に纏う焔は大気の水分をも瞬時に消滅させる程の熱を孕んでおり、近くで倒れていた騎士達はその余熱だけで身悶えた。
「【GUUUUUGAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!】」
　龍は、主の憎悪を体現するかのように猛り、吼え、そしてシールを見定めると、次の瞬間その巨体をうねらせ、シールのもとへと突撃した。
「……勘弁して欲しいな。マジで！」
　それを見たシールは、しかし戦術を変えることは無い。
　宙で剣を前に構え、そして意識を集中させた。その直後、来た。
「【GSYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!】」
　龍はシールを飲み込もうと口を開く。シールは、一瞬躊躇しつつも、直後、宙

でマナを蹴り、その口の中へと飛び込んでいった。
「っぐ、【結界!!】」
　体内は灼熱地獄だった。改めて防護を敷いたシールは、術式越しに凄まじい熱量を感じ取った。目を開けば瞳の水分も奪われる為瞳を閉じた。声を出せばその瞬間喉が焼かれると感じ、口も閉ざした。しかしそれでも剣を手放さず、一方の剣を振るう。
「【連続展開！】」
　圧倒的なマナの純度の為か、龍に触れるどころか存在するだけで封印術は消えてなくなってしまう。それを補う付加の発動をシールは連続とした。剣を媒介とした封印術は消滅と発動を凄まじい勢いで繰り返し、脈動する。
　その隙間に届いた熱は剣を融解させていく。
　しかし剣は確かに龍の身体に届き、シールはそのまま剣の柄を握り締め、
「斬り裂けぇぇぇぇえええええええええええええええ!!!!」
　咆哮し、そのまま剣を自身の落下の速度に合わせて振りぬいた。目を開けば、先には燃え盛る世界ではなく整地された地面が見え、シールは着地する。振り返れば龍は身体を切り裂かれ、身もだえ元のマナへと戻っていった。
　自身の無事の確認のため己が姿を見れば、龍を斬った剣は剣としての役割を果たす事が出来ないのが見てわかるくらい、融解し、刃を失っていた。シールはそれを捨て、もう片方の、なんとか無事な方の剣を握り締め、前を向いた。
　そこにはリーンがいた。再び、触れ合えるくらいの距離に。
「やあ、リーン、先生」
「【死ね】」
　直後、シールの頭上にマナの剣が振り下ろされる。予測していたシールはそれを剣で押さえた。彼女は元々一般的な魔術師とそう変わらない運動能力の筈だが、やはり既に、肉体強化は完成されていた。振り下ろされた剣は、その軌跡すら見えなかった。
　だが、所詮は素人の剣術だ。予測さえ出来れば、流す事は出来る。
　シールは彼女の両手から繰り出されるマナの剣の乱舞を、一本となった剣で捌いた。伏せ、身体を捻り、そして相手の剣のマナを削ぐ。魔術の発動も続くが、リーンの周囲を細かく動き回る事で、それをいなした。

「リーン先生！ いい加減目を覚ましてください!!」
「【□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□】」
　聞こえていない。彼女の心に響いていないのだ。シールに対してもただただ憎悪を放ち、狂気を振るい、怒りをぶつけてきた。
　何故だ。シールは心がつぶれるような思いをした。
　貴方はこんな風に、何もかもを捨てて、何もかもを壊してしまうような人じゃないだろう。どれだけ人と違っていても、どれだけ重い過去を背負っていても、それでも立ち向かっていこうと思える程、勇気のある人じゃないか。
　それなのに、何故届かない!!
「両親との誓いも破って！　僕等への誓いも忘れて！　奈落に堕ちるつもりか！　リーン!!」
「【──ッ】」
　直後、歌は止まり、剣は無軌道な弧を描き、シールではなく地面を叩き割った。衝撃が走り、シールは僅かに距離をとる。
　彼女が動揺したのだ。
　止まった、のか？
　否、止まってくれ。
　シールは祈りを捧ぐ様な思いで、彼女を見た。
　そしてそれが生ぬるい願望だったと言う事を知った。
「【あ】【あ】【ああ】」
　リーンは涙を流すことなく啼いていた。それは理性の光を伴うものではない。深い絶望によって生まれた慟哭だった。
「【□□□□□□】【□□□□□□】【□□□□□□】【□□□□□□】」
　彼女は歌う。歌い続ける。最早その様は、ただただ悲哀に狂っていた。
　リーンによって強制的なサイクルに組み込まれたマナが脈動する。痛々しいまでに蒼く輝いていた光は、更なる凝縮を強制され、互いの色を喰いあい、潰れ、やがて色を失っていく。
「あ、れは」
　黒く脈動するマナの凝縮体が球体となり、宙に幾つも生まれる。それは例えようの無い不吉さを孕んでいて、シールは背筋に怖気を感じた。

「【封印・五連！】」
　封印術を束ね、盾とする。しかしそれを自ら作りながら、同時にその術式の盾としての信頼の無さを自覚していたシールは身体を小さくして身構えた。
「【黒弾】」
　直後、黒の球体は撓み、そして炸裂するような勢いでシールへと奔る、シールの封印術はそれを一瞬捉えるが、飲み込む事は愚か触れることも叶わず砕け散り、
「っがぁぁあああ!?」
　シールは吹き飛ばされた。否、正確には吹き飛ぶようにして、その場から逃れたのだ。万一あの光の直撃を喰らっていたのなら、シールの身体は根こそぎ消えてなくなっていただろう。
　あらゆる魔術を喰い合った力の塊は、破壊という現象のみを孕み凝縮していたのだ。
「っぐ、は！」
　シールは逃れた勢いで体を地面に叩きつけられる。だが衝撃に悶える猶予も無い。新たに精製された魔術の渦が、シールを中心に囲い、そしてその全てが襲い掛かってきたのだ。
「【封界！】」
　瞬時に発動した封印術は、彼の周囲にあった魔獣の全てを奪い去った。だが、
「……な、」
　その魔術の陰に隠れて、【黒弾】が隠されていた。
　そうだ、彼女が生み出したのは、一発ではなかった。リーンは憎悪に飲まれ、狂気に喰われ、しかし、事相手を討ち滅ぼす事に関してだけは、本当に、おぞましいほどに冷静だった。それを失念していた。
　己を囲う魔術に対して、防ぐという手段をとってしまった時点で、シールは出遅れた。例え、無傷で超えることが出来なくとも、逃げ出すべきだったのだ。
　しかし、時既に遅く、
「っ!!!」
【黒弾】はシールを狙い、炸裂した。

第九十二話 救いと顛末

「……あれは、」
　医療師団を連れ、戻って来たダルシアは、その直後にシールが黒の魔弾を叩き込まれ、爆裂に飲まれる様子を目撃し、絶句した。しかしそれとは別に、彼の至極冷静な部分が、その力の正体を分析していた。
「……まさか、勇者の？」
　かつて、魔の軍勢に立ち向かい、勝利を収めた英雄。ベルレイン。彼──否、〝彼女〟は神々に与えられた加護を利用し、そしてその力の全てを集結させることで、あらゆる現象を打ち破り魔王を討った剣を生み出したと言う。
【黒の剣】を。
　リーン・エリクスが生み出したのは、それと同じ力だと、ダルシアは直感的に察した。彼とて魔術を扱う魔導騎士だ。それ故に、その感性が働いた。だが、しかし彼女が神の加護を受けたと言う話も、実は勇者の末裔だと言う話も、聞いた事が無い。
　つまり、複数の神の加護抜きにして勇者と同等の力を生み出したと言う事になる。
　眼前の光景はリーン・エリクス自身の持つ、素養の極限さを指し示していた
　そして、
「【□□□】」
　その彼女が徐々に此方に近づいてくる。凝縮されたマナの剣を両手に握り締め、おぞましく、同時に美しい。悲哀に満ちた笑みを浮かべながら、ゆっくりと。
「……！ 構えろ！」
　ダルシアと、その部下達は背後の医療師団を守るように剣を構えた。だが、正直、勝てる気は全くしなかった。今すぐ逃げ出せと、彼の根底にある生命として

の意思が、そう告げている。彼や部下の騎士達はそれを意思で封じようとした。
　だが、体の震えは収まらない。
「ダ、ダルシア隊長……」
「余計な事を考えるな。前を見ろ」
　震える部下を叱責する。怯えを見せればまず其処から喰われると分かっていた。
　歌が更に響く。彼女の握り締めるマナの剣に更なるマナが上乗せされ、濃く凝縮していく。更にその身の色を蒼から黒へと変化させていく。ダルシアの予測は確信へと変わった。
　だが、だからと言って、現状に何らかの救いが表れるわけではない。むしろ、確信に変わったからこそ、ダルシアの絶望は深くなった。
「【□□□】」
　死ねと、彼女の瞳がそう言っている。それは神が告げる断罪の言葉に等しく、それ故に抗う術はなかった。ダルシアは戦闘能力の無い医療師団へ、逃げろと、指示を送る。が、喉が麻痺した。手振りで下がらせる。だが、その指示が行渡ったどうか、分からなかった。
「【□□□□□】」
　最早、彼女の姿がはっきりと見えるまで近づかれていた。
　神に祈るだけの猶予はすでに過ぎた。ダルシアは、体中の震えを引き締め、マナを循環させる。射程の範囲に入れば真っ直ぐに彼女へと足を進められるようにと。
　真っ先に自分が動けば、恐怖にとらわれた部下達も動けるだろう。それで逃げてくれるのなら、それはそれで構わない。そういう考えだった。
「【□□□□□□□□□□□□□】」
　歌の音が更に早く、そして鋭くなる。徐々にこの空間に満ちたマナが再び凝縮され、膨大な魔術の海を生み出さんとしている。ダルシアは目を覆い、大きく、そして強く、一歩前へと足を進めた。
　そして、次の瞬間、
「【っ？】」
「…………え？」

リーンの体が、揺れた。
　ダルシアの目の前で、リーンがまるで転びそうになるのを防ぐように、一瞬たたらを踏んだのだのだ。絶対の力を自由自在に操る彼女の、そんな何処か滑稽な姿に、ダルシアは何処か笑いそうになってしまった自分がいるのに気が付いた。
　命を賭す覚悟でいたついさっきまでの自分と落差があまりに大きかった。
　しかし、何が起きたのか。
　その衝撃を受けたリーンは、不思議そうに後ろを振り向いた。
「〝おいた〟が過ぎるよ。リーン」
　其処にいたのは、シールだった。彼が、右掌でもって彼女の背を打っていた。彼がその掌を打ち込んだ箇所からは赤い光が、封印術の光が彼女の背中を伝って広がっていく。
「全く、抜け目ないね。学院長も」
　よく見れば、シールが身に纏っていたその服、勇者の紋章の刻まれたその衣服が、僅かに光が覆っていた。それはリーンが扱う剣と同じ黒の光であり、それがシールの身体を守るようにして纏っている。
「こんな仕掛けをしているのなら、最初からそういえば良いのに」
「【□□□!!】」
　シールの軽口は、しかしリーンには届かない。振り返り、シールから受けた封印術を振り払うようにして、右手の【黒の剣】をシールへと薙ぎ払う。
　だがそれよりも、シールの動きのほうが早い。
「【封断偽剣】」
　シールは不意を撃つように、彼女の手の甲を、黒の剣を扱うが故に無防備になっているその箇所を封印の剣で切り裂いた。マナの凝縮はその衝撃で止まり、爆発するように【黒の剣】が弾けて消えていく。
　例えどれだけ強力なマナの凝縮が起こったとしても、その根底を支える器官を奪えば収束は止まるのだ。
「【□□！□□□□!!】」
　リーンはシールへと憎悪を叫び、左から黒の軌跡を作る。振るわれた剣は地面に突き刺さり、その衝撃で大地に大きな亀裂が走る。自身への強化と【黒の剣】の威力が合わされば、大地すら破壊してみせる。

シールは、しかしそれでも怯まず、躊躇わず、彼女の左腕を捕らえた。
「【封、!!」
　だがシールのその剣は弾かれる。彼女が自身の身に施した反転加護がシールへと牙を剥いたのだ。だがシールはそうなる事は知っていた。加護によって封じられた右手を捨て、左手に封印術を重ね、手刀を放つ。先に封印剣で貫いた箇所と寸分違えず、打ち抜いた。
「【封、印！】」
　そして加護を返されつつも、左腕をも封印する。先と同じく黒の剣は弾けて消える。両腕を封じ、しかし同時に両腕に封印を返されたシールは、彼女を蹴り倒し、その体を押さえ込む。その動きを完全に止める為に。
「【□□□!!】」
　だが、それでも彼女は止まらない。息を吸い、マナを集わせる。超圧縮された魔の暴圧を再び発動させんとマナが吼え、唸り始めた。再び地獄が生成されようとしているのだ。
「そりゃ」
「【っ!!?】」
　だがシールは、彼女の口を自身のそれで塞ぎ、その発動を抑えた。
「【絶対封印】」
　直後に、封印術を口内から発動させる。術式は彼女の内部から全身に突き進み、彼女の守りの加護を砕ききり、己が使命を完遂した。即ち彼女の【歌】を奪いとった。
　延々と続いた魔道の嵐は、その一瞬で動きを止めた。散る事もできずにその場で拘束され続けてきたマナはその瞬間開放され、僅かな光と共に拡散していった。
　その光景は幻想的であり、見ようによっては輝く花が散っていく様にも見えた。
　こんな状況でも無ければ、最高なのになあ、などと、リーンから顔を離したシールは、酷く場違いな事を思っていた。
　そんな馬鹿なことを思わなければやっていられない、という気分でもあった。騎士達との追いかけっこから連続でこの戦闘だ。疲労困憊だし、両腕は上手く動

かないし、何より全身に痛みが走って物凄く辛い。
　学院長の仕掛け、この【勇者の加護】が無ければ、そもそも辛いでは済まなかったが。
　ともあれ結果として、この場は収める事ができた訳だ。
「リーン先生、大丈夫ですか？」
　シールは顔を上げ、馬乗りのようになっているリーンを見下ろした。
　彼女は、毒が抜けたように呆然とした表情をしていた。だが暫く待っていると、途端に、泣きそうな顔になって、本当に泣き出した。無情の仮面を失った彼女は涙もろいと、シールは知っている。
「っ!!──！────!!」
　彼女の嘆きは言葉にはならない。シールが封印術で彼女の声を封じているからだ。だが、彼女の嘆きのその意味は、シールにも痛いくらいに伝わっていた。
「大丈夫ですよ。リーン先生」
　上手く動かない掌で頬を撫でて、涙を拭う。子供達が泣き出してしまうときしてやるように、シールは彼女を慰めた。リーンは泣き叫ぶのをやめて、ただ、シールの手にすがる様にして目を閉じる。
「無事でよかった」
「────ーーっ」
　ただ此方の温もりを求める彼女の姿は、とても先ほどまで地獄を生み出していた人とは思えぬほど、ただ綺麗で、そして痛ましいほどに無垢だった。かつて彼女が少女だった時と被るほどに。
　よかった。彼女を救えて、救えることが出来て、よかった。
　この感情が、ガラムやケーナの言うような愛なのかどうなのか、それはやっぱり分からない。だが、そう思うこの気持ちだけは本当だった。
「おっと、そうだ。親父さん、ケーナは、と」
　あまりにも激しい戦闘だったためにすっかりすっぽ抜けてしまった。
　慌しく医療師団の人々が周囲の倒れた騎士たちを癒しに動く中、シールは辺りを探ると、処刑台の十字架に既に姿は無く、その根元に、
「……！」
「……、……！」

二人が、何事かを言いながら、手を振っていた。シールは溜息をつく。二人がリーンの魔術に巻き込まれた様子は無く、あの状況でリーンは二人を識別し、守っていたらしい。
　二人は絶えず、声を振り上げ続けている、シールは二人に手を振りかえすが、
「……！　……!!」
「……!? …………!!」
「聞き取れないよー」
　首を振るしぐさをしてみせると、二人はこちらへ指を刺す。当然此方という意味では無く、
「……後ろ？」
　指示通り、振り返ると、
「シールベルト、リーン・エリクス、捕らえたり」
　ダルシアが剣を突きつけ、冷徹な声色で、そう告げた。

第九十三話 王の目覚め

　沈んでいた日が再び昇り、影に浸る牢獄城のうちにも光が差し込む。
　王暗殺未遂事件が発生してから一夜明けて、明朝。
「……完了した」
　一夜中、国王につきっきりで治療していた直属の治癒魔導師が、ゆっくりと顔を上げて、そう告げた。彼の視線の先には老いた老人、ガイディア王がベットで身体を休めている。その瞳は閉じられているが、しかし昨夜あれほどまで悪かった顔色が、今は元に戻っていた。
　寝室の警護に当たっていた騎士たちはそれを聞き、歓声を上げる。一晩かけ、何者かによってかけられた呪いが、今、払われたのだ。
「暫くすれば目も覚ますだろう。その後、薬膳を。消耗されている筈だ」
　そう言いつつ、医師は身体を起こし、外へと出て行った。騎士達は彼を見送りつつ、王の無事を喜んでいた。それは最も懸念していた事態、王の死亡という最悪の事態が乗り越えられたことへの安堵だった。そして何より、この事件が収束へと向かっていることへの安堵だった。
　シールベルト、そしてリーン・エリクスは、既に捕らえられているのだから。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　牢獄城地下一階、第三独房
「……嫌な目覚めだなあ」
　シールは目を覚まして開口一発、そんな事を呟いた。
　強力な魔封じの術式が刻まれたロープで全身を縛られて、地面に転がされているような状態なので、その不満もごもっともと言えるが。昨夜捕らえられてから直ぐに、魔術を封じられ、そしてそのままこの牢獄にぶちこまれたのだ。その

後、何もすることは出来ず、疲労もあってすぐに寝てしまったのだ。
　流石に此処までやらなくとも封印術は使えないのだが、随分と警戒されているらしい、と、シールは息をついて、身体を何とか地面から起こした。
「ん、と、」
　薄暗い牢獄の周囲を見渡すが、リーンの姿は見えなかった。こんなジメジメした場所に呪いを受けている彼女が放り込まれていなくてほっとすべきなのか、あるいは彼女の様子が確認できずに残念がるべきなのか、判断に迷う。
　さてと
　昨日のといっても、眠った時には既に朝が明けかけていたが、とにかく、昨日の事を思い返す。王の暗殺未遂、追うと同じく呪いにかけられたリーン、疑惑を駆けられた自分達、逃走、再侵入と情報収集、ダーミルの暴挙、リーンの暴走、それを止めるために精根尽きたところでダルシアに捕縛され
　……いや本当にろくな一日じゃなかったなあ
　シールは心中で呻き、しかし考えは巡らせる。この現状から助かる方法を。捕まった、と言う現状は彼にとっては諦める要素には全くならなかった。
　脱走するには少々この拘束はきつい、強硬手段に出れば、とも思うがそうなれば今度こそ本当に死人が出る可能性も否定できない。となると、やはり真犯人を割り出すのが最も健全で安全だ。
　情報は幾らか仕入れた。そしてその幾つかの情報から仮定ではあるが、真犯人、王の暗殺犯の正体が形になってきている。根拠と呼べるものも殆ど無い。だが、直感とも呼べるものが、シールの考えを定めていく。長年の修羅場への経験から生まれた第六感だった。
　ただ、後もう一つ。せめてもう一つその仮定を確信させる情報が欲しい。そうすればいざと言う時迷い無く動く事が出来る。だから、後一つ。
　そんな風にシールは悩んでいると、不意に
「目覚めましたか？」
　と、声をかけられた。鉄格子の先を見れば、昨晩と変わらず騎士長としての鎧を纏ったダルシアがそこに立っていた。どこか冷たい印象を与える鋭い表情もそのままだ。
　そんな彼こそがシールとリーンを捕らえた張本人でもある。

彼は、しかし、わざわざ此処まで足を運んで来た割りに、特に何か此方にアプローチする訳でもなく、ただただシールの様子を眺めていた。無様に縛られている自分を笑いに来たのだろうか、という卑屈な考えも浮かんだが、しかし流石に彼とてそこまで暇ではないだろう。
　此方の反応を確認に来たのだろう。そうシールは思い、しかし好都合だと僅かに微笑を浮かべて、
「質問があるんだけど、いいかい？」
「どうぞ」
　あっさりと、シールの質問を促す。シールはうん、と頷いて、しかしまずは、と少し考えてから、
「リーン先生にやられた騎士たちの様子はどうなっている？」
　その質問は意外だったのか、ほんの少しダルシアの表情が子供のようにきょとんとなった。彼は、まず真っ先にリーンの事を尋ねるのだと思っていたのだ。しかしその考えは正しい。シールが尋ねたのはあくまでも〝リーンにやられた〟騎士たちについてなのだから。
　そんな風に発想する事はダルシアには出来ず、しかし質問には素直に応じた。
「貴方の指示の通り、医療師団を呼び寄せていましたから、即座の治療の結果、命に別状はありません。騎士や魔導師として元通りに復帰できるかはわかりませんが」
「そうかい」
　シールはその結果を聞いて半分はほっとし、もう半分は落胆する。
　命を助けられたのは幸いだ。不完全であったとはいえ、リーンの【魔帝モード】と直面して死者がいなかったと言うのは奇跡に近い。
　しかし、では救えた者達は元の生活には戻れるかと言うのはまた、別問題になってくる。怪我しだいでは後遺症を残す可能性もあるし、荒れ狂う彼女との対面は精神に大きな傷を残す。再び剣や杖をもって何かと相対することを恐れてしまうかもしれない。
　何もかも無事ではあって欲しいと望むのは強欲すぎる
「ちなみに叔父は、腕は細切れなっていたので完全な修復は難しいと、足は無事ですが」

「あ、そう」
　これに対してはシールは非常にあっさりとした反応を返した。
　基本、彼は救うべきものとそうでないものの線引きは極めて明確だ。そのつもりは無かったにせよあの惨事を引き起こす原因を作った彼に対して、同情する事は難しかった。
「王はどうなった？」
「つい今しがた、呪いからの脱却に成功しました。今は目覚めるのを待っています」
　その言葉を聴いて、静かにシールはほっとした、訳ではなかった
　その表情にあるのは、納得できない疑問に唸る皺を寄せた顔だった。
　王が生きていた。生きていた？　本当に？　だとするのならば――
「どうしました？ 王が生きていて、残念ですか？」
「まさか、ほっとしてはいるよ。一応ね」
　彼の表情からそう問うたダルシアを軽く流し、シールは息をついた。とりあえず、もう少し情報を集めよう。そう、頭を切り替え、
「じゃあ、リーン先生はどうなったかな？」
「呪いで昏倒されました。あの魔術の暴走を行った結果なのか、呪いも悪化したようです。医療士も、強力過ぎて依代を見つけなければ施しようがないと」
　これも予想していたと言えばしていた。勿論悪い方のケースとして。しかし悪いケースのなかではまだ比較的マシな状況だ。
「王の反逆者に随分とサービスが行き届いているね。医師をつけてくれるなんて」
「まだ聴取も出来ていないのに死なれては困りますから」
　ダルシアは平然と答え、なるほどと納得した。
　この現状、真犯人たちとその仲間達以外からすれば、未だシールとリーンが犯人と決定している訳ではない以上、真犯人たちもおおっぴらに自分等を犯人に仕立て上げる事は出来ないのだろう。勿論、聴取が始まれば身に覚えの無い証拠の山が次々に出てきてあっという間に犯人にされてしまいそうだが、やはり手順は必要となるのだろう。
　しかし、その手順とて直ぐに済まされるだろう。

もう時間も殆ど残されていない。

「ああ、そういえば、リーン様が昏倒する前に、一文を」

「文？」

そういえば、とシールは思い出す。リーンの声を自分は封じていたのだ。施した【絶対封印】はかなり強力な分、持続力は殆ど持たない。だがそのときはまだ効力が続いていたようだ。

「どれどれっと」

鉄格子越しに開かれた用紙を見る。朦朧とする意識の中で書いたためからか、かなり文章が乱れているが、しかしはっきりと、強い意思を持って描かれていた。

「……これ、は」

紙に書かれた内容は、本当に短いもので、しかしシールの表情を歪めさせるのには十分な威力を秘めていた。その紙には、

おうをさしたのは　わたしだ

そう書かれていた。

「これは、重要参考品として預からせていただきます」

ダルシアの声が牢獄内で反響した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

その頃、王の寝室では

「お目覚めになられたぞ！」

歓声が響き渡り、先ほどまで落ち着きを取り戻していた寝室が再び慌しくなった。

ガイディア王が目を覚ましたのだ。

表情は未だ空ろで、意識もハッキリしてはいないようだが、しかし、騎士たちはおおきく息を吐き出した。ようやく、最悪の事態は脱したと。

「……なにがあった」

ガイディア王は、暫くは天井を眺めるようにじっと虚空を見つめていたが、不意にそう言葉を発した。近衛の騎士は王の下へと近づき、
「昨夜、式典の最中に暗殺者が……大変申し訳ございません。我等が未熟なばかりに」
　騎士の懺悔を、しかし王は聞き終わらぬうちに、考え込むようにして顔を俯けた。
「国王様？」
「……それで、その暗殺犯は？」
　近衛の騎士は、一瞬答えるのを躊躇った。しかし、隠し立てできるものではない。
「現在、式典の主役でもあったシールベルト、リーン・エリクスの両名を重要参考人として調べています」
　その言葉を聴いて王は顔を顰め、掌で覆った。式典以前に、彼らが王とある程度親しい事は城内ものなら知っている。そんな彼らが犯人の可能性のある状況、王は今どんな心境なのか、推し量る事も出来ず、騎士らは言葉を詰まらせた。
　しかし、その沈黙を割るように、護衛騎士の一人が前へと進み、膝を付いた。
「王、失礼ながら尋ねさせていただきます」
「申せ」
「……闇の中、その御身を狙った犯人の姿をご確認できたでしょうか」
　病み上がりである彼への気遣いも何も無いストレートな問いかけだった。しかしこればかりは急いて済ませなければならない。何もかも理解できぬ事件の多かったこの事件、唯一確信に触れており、尚且つ真実味のある王の言葉が必要なのだ。
　王はその質問に対して、やはり暫くは答えようとはせず、幾らか考え続ける。表情にあるのは疲労か、落胆か、重い表情をした国王が口を開いた。
「リーン、リーン・エリクスだった。私に襲い掛かってきた者は」

第九十四話 真相

　ガイディア王城、謁見の間
　本来民の謁見を王自身が直接聞き届け、答えるための場だ。かつての時代ではこの場はまるで使用される機会は無かった。しかし今はまた開かれ、民の意見も望みも正しく聞き届けるための場所となっている。
　しかし、今はそれとは別の理由でこの場は開かれている。
　これから始まるのは、咎人への断罪だ。
　巨大な門が開かれ、何人もの騎士達に引きずられるようにしてやってきたのは、つい昨日、この場で英雄として讃えられていた男女である。
　シールベルトとリーン・エリクス。二人とも、拘束器具を全身にまとい、一切の身動きすら出来ないようにされていた。リーンに至っては未だ意識が戻っていないのか、半ば引きずられるようにしてこの場に連れ出された。
　彼らを見下ろすようにして王座に座るは、昨夜命を狙われ、今朝ようやく意識を取り戻したガイディア王と、その補佐として並ぶ第三王子らだ。
「……」
　王はその顔をひたすら俯かせている。あるいはそれはかつての【暗黒時代】彼が外部との接触の一切を絶ち、己が内に閉じこもっていた頃の虚無感に似た仕草だった。
　対して、王の横で補佐するようにしてこの状況を眺めていた第三王子は隠すようにして残忍な笑みを浮かべた。かつての英雄のその有様に、深い愉悦を感じている、そんな笑みだった。
　彼の兄達もこの場にいるが、性急に動くこの事態に未だ理解が追いついていない。先々に者を進めていく第三王子らの言われるがままだ。無能め、と彼らの弟は内心で兄を罵りもした。
「これよろり、シールベルト、リーン・エリクスの尋問を始める」

本来ならこうして、わざわざ王暗殺の容疑者を王の前まで引きずり出し、その真偽を問いただすような真似をすることは無い。だが、シールベルト、リーン・エリクスは両名とも、この国に多大な貢献を成した英雄だ。その彼らを弁護の余地無く疑いを晴らす機会も与えず処刑することは、許されない。
話を大きくする事を二人が望んでいないため国内では大きな話題にはならないが、彼らの活躍によって救われた者達の中には彼らを神聖視する者すらいる。それ故の弁護の場だ。
勿論、第三王子らは、彼らに弁護の余地など与える気はないのだが。
王の前に並べられたシールとリーンの二人に、まずは第三王子が口を開いた。
「何故このような罪を犯したのか、理由を述べよ」
「私達は何もしてはいません」
シールが落ち着きの払った声でそう言うが、「ふざけるな！」という大きな声で彼の言葉を否定した。そして更に言葉を続け、
「貴様等が犯人であると言う証拠は次々に上がってきている！　最早疑いの余地は無い！」
「証拠？」
「使用されていた魔術の痕跡も、マナの再現でも、使用されていたナイフも、全てがリーン・エリクスが犯人だと指し示している。これでどうして犯人で無いと言える!!」
それらの証拠は確かにリーンの所持していたものだった。しかしもし調査を行うものたちの中に介入者がいればそれらの証拠は容易く作り上げられるのは事実だった。
だが、そうした並ぶ証拠に、反論は出来ない。
何しろ今、問われているリーンは意識を失っているのだから。
「では、加害者であるリーン・エリクスが呪いを負ったの何故でしょうか」
シールは横にいるリーンを見て、問う。確かに、彼女が実際に暗殺を行った犯人であるのなら、彼女が呪いにかかる理由は無い。その筈だ。だが、その問いにも第三王子らは平然と冷徹な笑みを浮かべ、
「それもまた、彼女が直接王を暗殺したという証拠なのだよ」
「というと」

「王の守りが騎士や魔導師たちだけである筈が無いだろう。王の身につける衣服には必ず、反転の加護がかけられている。リーン・エリクスは自らの刃に焼かれ、呪われたのだ」
　筋は通った意見だった。事実、あの式典の際、王の身には反転の加護がついていた。国の要である国王が自身の身を守るためにその程度の加護をかけない道理は無い。
「何より、リーン・エリクス自身がこのような文章を残しているではないか!!」
　見せ付けるように広げられたのは、リーン自身が残した文章だ。
　王を自身が暗殺した事を示す文章。それは疑いようも無く彼女が残したものだった。しかしだからといってそれが確たる証拠となりえるかと言えば、そうではない。そもそもそれを書いた時、彼女が正気だったのかも疑わしいし、それを残したのが容疑者であるリーン自身だ。それの真偽性は疑わしいものだ。
　しかし、こうした場において訴えるには、十分な効力を発揮している。
「更には！ 王自身が自身を襲ったのは彼女だと証言している！」
　シールは国王を見上げるが、王はシールと視線すら合わせない。
「魔術による幻覚の類ではないのですか」
「あの闇の一瞬、魔封印の結界が広がっていたのは貴様が一番良く知っている筈だ」
　確かに、とシールは思い出す。その瞬間に限って、確かに魔術は仕えなかった。あの闇の、ほんの数秒の間だけだったが、強力な魔封印がなされていた。あの場では幻覚などの魔術は発動する事は出来ないだろう。強力な、リーンや王を呪った魔具などでもない限り。
「以上の根拠が、両名を王の暗殺犯である証明だ！ 何か反論はあるか!?」
　問われ、シールは暫く何かを答えを探すように宙へと視線を彷徨わせたが、しかし最後には軽く、諦めたように息をついて、
「特に、反論できる事は無いですね」
　そう答えた。
「では、シールベルト、リーン・エリクスの両名を王の暗殺犯と断定する！」
　その言葉は、二人の処刑の断定と等しかった。
　響き渡るその声に、王は静かに、空しげに首を横に振った。

「何故だ。何故、私を裏切ったのだ」
　表情を覆う王の声は悲壮感に満ちていた。今まで信をおいていた者の裏切りに対する絶望、それを感じさせる悲哀が、その声を通して伝わってくるかのようだった。
　シールはその言葉に、僅かに額に皺をよせ、静かに語る。
「王、ガイディア王。僕等は貴方を暗殺などしません。しようとも思いません」
「では先に挙げられた証拠を否定せよ」
「挙げられた証拠のどれにも僕らは身に覚えが無い」
　その答えに、王ではなく横に備えていた第三王子が冷笑を持って答えた。
「それの何処が反論か。具体的な根拠も無い」
　実際、その通りだった。シールは達にはそれを否定するだけのものを持ちあわせていなかった。直接手を下したと思しきリーンが未だ意識を戻して良い無いのだ。シールには反論のしようが無い。
「……もういい」
　ガイディア王は疲れた、と言うように言葉を吐き出す。
「王、待ってください」
「もう良いといったのだ。貴様らは私を裏切ったのだ!!」
　先の悲壮感とは打って変わって、耐えようの無い怒りを感じさせる声色で、王は叫び、シールを攻めたてる。シールは首を振り、
「僕等は貴方と約束したのですよ。それを違える分けが無いでしょう」
「知らぬ！ そんな約束はもう知らぬ!!」
　否定。拒否。シールの言葉の何もかもを否定するように彼は首を振る。
「早く！ そやつらを私の前から退けろ!!」
「王！」
　シールの声も届かず、シールを捕らえる騎士たちが、二人へと手を伸ばした。
　そして──

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

時は、ダルシアとシールとの対話に戻る。
　薄暗い牢獄の中、ダルシアにリーンの走り書きしたその文章を見せ付けられたシールは、苦悶の表情、をしてはおらず、暫く眉を潜めた後、納得したように、
「なーるほど」
　という言葉と共に、むしろ晴れやかな笑みを浮かべた。
「何を納得しているのですか？」
「いや、今回の犯人の〝仮定〟が自分の中で確信できたからね」
　その言葉に、ダルシアは僅かに瞳を大きくさせ、
「犯人が分かったと？」
「証拠も根拠も無いけどね」
　シールはそんな風に言うが、しかし表情にはどこか確信を持った物言いだった。その答えにダルシアは、僅かに周囲を、人の気配を確認し、そして出入り口を警護している者だけであると確認をとると、僅かに屈んで、
「伺ってもよろしいですか」
「いいけど……君は今回の事件の首謀者側の味方なんじゃないかな？」
　その問いにダルシアは軽く肩をすくめ、
「彼らの企みなんて知りませんよ。どうやら叔父は私を引き入れたかったようですが」
　どうやら彼が知るのは、この暗殺事件に身内からの関与が、自分の叔父や第三王子らが関わっている〝らしい〟と言う事だけのようだ。しかし、
「その割に熱心に僕らを追い掛け回していたじゃないか」
　問うと、ダルシアはしれとした顔をして、
「あの場においてはあれが最も正解でしょう。もし指揮権がイングラム大隊長にあっても貴方を追うよう指示されますよ」
　それに、と言葉を続けて、
「万一、首謀者側が城内の指揮系統を得た場合、ポイント稼ぎにもなりますし」
「……君は随分と割り切りの良い性格をしているね」
「そうでなければ出世できない立場にいましたから」
　ルジア家の出身、王の反逆未遂の立場にいた彼が、王直属の騎士隊長になるのだけでも随分と苦労はしてきた。結果として彼は非常にばっさりとした判断力を

身につけていた。
「つまり、王につくにしても、犯人側につくにしても、動きやすい立場にいたと？」
「ええ、だからもし万一、貴方の言葉に真実味があれば、王につきますよ。勿論そのときには、私の事を口ぞえしてもらえれば嬉しいですが」
　シールは暫くダルシアを見つめる。はっきり言って信頼できる要素は一つも無かった。シールはダルシアのその自身の望みに率直な性格に、少し好感を持ち始めていたのは事実だった。シールは彼のような、どこかあけっぴろな人間を意外と気に入る性質だ。だが、それでも信頼と言う言葉は容易く置けない。彼がルジア家であり、本来シールたちに恨みを抱いているであろう家のものである事もそれに拍車をかける。
　しかし、彼以外今はアテが無いのも事実だ。どのみちこれからシールは、問答無用の尋問を受けるはめになるのだから。
　まあ、いいか、と、シールは肩をすくめた。
「今から、リーン先生以外に真犯人がいる前提で話すよ？」
　ダルシアはうなづきを返し、シールは笑みを浮かべ、
「そもそも疑問じゃあないかな？　何故王が殺されなかったのか」
「それは……暗殺をしくじったと考えるのが妥当では？　貴方の仮定で考えればリーン・エリクスが王の殺害を阻止する事ができたと言うのも十分に考えられます」
　だが、いや、とシールは首を振り、
「でも、リーン先生は倒されていた。そしてその後王を殺す機会があるはずじゃないか。それなのに王は死なず、〝一夜で癒される〟呪いをかけられただけだ」
　そう言ってシールは疑問を口にする。
「あのリーン先生を出し抜いておきながら、王の暗殺をしくじる理由って何？」
　何故王が生きている？　ダルシアに聞いた話を聴いた瞬間、シールはそう思った。
　王が今回の事件においての主軸、つまり犯人側の狙いだった筈だ。そのために此処まで大げさな準備をして、自分とリーンを罠にはめてまで殺そうとしたのだ。それなのに生きている？　それはどういうことだ。もし王が真犯人を見てい

たとしたらすべてが台無しになるのではないのか？
　リーンを出し抜いたという事実もまた、その疑念を抱いていた。それはダルシアも同感だった。なまじ、彼女の壮絶な実力を見せ付けられているからこそ、その疑念に拍車をかけていた。
　ありえない。それが事実とするなら、別の可能性
「考える可能性は二つ、本当に失敗したか、そもそも王が死なない事が計画なのか」
　前者は考えにくい、ならば後者。
「……つまり王が生きている事が計画に入っていると」
「そう考えるのが妥当だね」
　シールは静かに笑みを浮かべ
「そもそも今回の事件は〝王暗殺事件じゃない〟んだ。僕とリーン先生を貶めるための〝リーン先生暗殺未遂事件〟だった」
　そう、これが今回の事件で誰もが振り回されたところだ。
　つまり、王が狙われたのだと。王が殺されようとしたのだと、誰もが思い、それ故に犯人を捜して回った。だが、現実として王は死んでいない。危うい状況だったとはいえ、医療魔術師が一晩苦心すれば何とかなってしまう程度のものだった。しかし逆に暗殺者として仕立て上げられたリーンは今も呪いで死に掛けている。医者も手を上げるほどの強力な呪いで。
　この事件の狙いは、王の暗殺、に見せかけてリーンとシールにその罪をかぶせ、あわよくばリーンを殺害する事にあった。そしてそうする事でこの国の中でも影響力の強い英雄、そしてそれらを使役するオルフェス学院学院長、ミストを押さえ込もうとした。それが本来の目的。
　実際そう考えれば、王が殺されない筋が通る。
　しかしこの推測を聞いて、ダルシアは首を振る。
「幾つか納得できない所があります」
「どうぞ」
「まず第一に、わざわざ暗殺者側がわざわざこの状況にまで仕立て上げて、王を生かしておくメリットが分かりません。彼らの思惑が学院長の失脚にあったとすればなおさら、彼と親しい王の存在は邪魔でしょうに」

そう、犯人側の立場に建って言えば、王の生存は危険でしかない。そもそも協力者と思しき第三王子らは一派は、現王政への不満を抱いていて、だから協力したのだと、そう思っていた。だからこそ、今回の事件は国王の暗殺だと、そう確信したのだ。しかしその前提が崩れるとなると、何故王を生かしているのか、協力者達の動機も、不明瞭になってしまう。
「第二に、王は生きている以上、貴方達を擁護するのでは？」
　そう。そもそも王はシール達と、そしてオルフェス学院学院長ミストとは親しい関係である。そうである以上、〝どれだけ疑いの目がシール達にかかっても普通は必ず擁護する〟どんな事があろうともだ。ダルシアは彼らの関係を直接知らないが、少なくとも〝その程度の信頼関係はある筈だ〟。そんな彼を何故生かしておく？
　王の生存、確かに生かしておいた場合も、様々な面でメリットはあるだろう。そもそも暗殺行為自体ハイリスクだ。一国の王が死ぬのだ。あらゆる統制が崩れるし、内乱の可能性だって否定できない。
　だが、それでも犯人側からすれば生かしておいたほうがメリットよりもデメリットの方が遥かにでかい。王という爆弾を抱えて彼らが自身らの目的を果たせるとは到底思えない。今回の暗殺事件はそうでなくともリスクの多い計画であると思える。それなのにこれ以上の不安材料をわざわざ持ち込むだろうか？
　王を生かす理由が見当たらない。
　王の生存を喜ぶ城内において、その発想は不謹慎極まりないと言えるが、しかしそう思えてならなかった。だからこそ、確かに、現状での王の生存は不審だとも言える。
「そして最後に」
「うん」
「リーン・エリクスが犯人ではないとして、ならば、実際に王を傷つけ、リーンを呪いと共に貶めた暗殺者は誰だと？」
　そう、結局まだこの疑問が解決されていない。真犯人は誰か、だ。あの会場で観客としていたものたちは誰もが犯人とはなりえない。唯一可能性があるのがリーンだった。しかしその彼女が被害者だとすると、誰が彼女を倒したのか、誰が王を傷つけたのか。

最も重要な点が抜けている。対してシールは
「簡単だよ」
　そう言って笑い　瞳に子供のようにいたずらっぽい光を見せて、
「いるじゃないか。唯一、あの闇の中、一切の迷い無くリーン先生を呪具で傷つけ、更に貶める事ができる人が。そして事件後、疑われる可能性が全く無い人がたった一人」
　その言葉でも、ダルシアは分からなかった。
　否、分かってはいたが、ありえないと否定してしまっていた。しかしシールはダルシアが否定したその人物を告げた。はっきりと、

「王が、この計画の協力者で、リーンを呪った犯人だ。そう考えれば全て納得いく」

　その言葉に、ダルシアは上手く言葉を作ろうとして、しかし息を詰まらせ、
「意味が、分かりません」
「だから、その生きていた王が、今回の事件の首謀者と結託していたら？　それなら話は簡単だ。王は協力者達に自分の権限を明け渡し、僕等を処刑し、ミスト学院長を貶めるだろう。何せ、協力者なのだから」
　確かに、それはそうだろう。王がもし協力者なら、第三王子らの味方であるのなら、考えうる全てのデメリットが取り払われ、メリットしかなくなる。なくなるが、しかし、
「王が暗殺者側の味方なら、こんな回りくどいやり方をする必要なんて無いでしょう。こんな事件を起こさずとも、王の権限を振り回せば良い。そのほうがずっと安全だ」
　その問いに、シールはそうじゃない、と首を振り
「普通に考えればさ、協力者、まあ、第三王子らの目的は、やっぱり王の命だよ」
　いきなり先までの言葉を全てひっくり返すようなその言葉にダルシアは目を丸くした。
「いや、今回の事件は王の暗殺ではないと貴方が」

「〝今回の事件は〟ね」
　そう言って、肩を竦め、
「別に、式典なんて仰々しい祭りの最中に王の命を狙う必要は無いじゃないか。その先日か、更にその前の日か、むしろ式典の前のほうが命は狙いやすいし、チャンスは多いよね？」
　普通、この牢獄城で外から暗殺者を送り込むのは当然難しいが、城の内々にそれらを手引きする者達がいるのなら、何とかなる筈だ。そうシールは言うが、ダルシアがいやいや、と首を振り、
「ちょっと待ってください。前日？ 王が命を狙われたのはその前日だと？」
「僕等が王に挨拶したのが数日前だったから、その日から式典までの間かな？ 暗殺か、あるいは誘拐か」
「しかし王は今、こうして、この城にいるではないですか」
　そう。この城にいるから、昨晩、暗殺されかけ、呪いに苦しみ、そして今、生還されたと、そういう話になっているのだ。先日のうちに王が消えていたら、それこそ式典どころの騒ぎじゃない。
「その王様さ、本物って保障が何処にあるの？」
　その言葉に、ダルシアは今度こそ目を大きくさせて、絶句した。

第九十五話 王は何処か

　牢獄城１Ｆ　看護室へと続く渡り廊下

「……」

　牢獄城の狭く複雑な路地を、ダルシアは一人、部下を連れずに歩いていた。

　地価牢獄でシールの推理を聞き出したその直後、シールは尋問の為連れて行かれ、ダルシアは一人残された。しかし彼にはやる事が残っている。シールの言っていた言葉の確証を得る事だ。

　当然ながら、シールの語った言葉は何もかも、一つとして証拠も根拠も無い話だった。シールとリーンが犯人ではない、そう思いもするダルシアでさえそれは信じ難い話だ

　あの王が、偽者などと。

　そして彼がそう思うのだから、それを回りに証明するのはもっと証拠が必要になる。

　ダルシアはそれを探すべく動いていた。

　まず、調べるとすれば、当たるのは医者だ。王を救った名医、つい先ほど国王の命を呪いから払ったかの男。もしも王が偽者なら、彼の治癒に当たった医師なら確実に分かる筈だ。少なくとも、何らかの違和感を感じる、その筈だ。

　だが、医務室を見てみても彼の姿は無かった。その代わりに看護術士がいたので彼の行方を聞いてみるが、知らないと言う。そもそも彼は王を癒した後、この医務室に戻ってきていないと言う。

　そして看護士は、少し、何処か、納得行かない、と言うような表情で、

「でも驚きました。彼が王の呪いを癒しただなんて」

「不自然な事ですか？ 国王直属の医師ならそれくらいは出来るものでは？」

「勿論彼の医術は素晴らしいです。ただ、あの人は呪術系統の魔術は専門外です。その場合、他の医師が。外科と呪科は全く別のものですから」

その答えに、ダルシアは笑みを返せず、曖昧な表情で返した。
確かに暗殺事件直後、場は混乱していた。医師も手が空いている者が無理矢理つれてこられたと言う可能性だって当然ありうる。が、いくらなんでも専門外の医師がそのまま居座り治癒をするだろうか？ ましてそのまま解呪できると？
いや、まて。確か彼が治療している最中、看護術士が何人かいたはずだ。彼らにその治癒を手伝わせ、技術の欠落を埋めていたと言うのなら何の問題もないはずだ。目の前の看護術士に、その医師を手伝っていた看護術士の容姿を細かく伝え居場所を尋ねた。
だが、
「……そんな人、知りません」
おかしな事態が発生している。ダルシアは確信を持った。
不審な表情になった看護術士に、今聞いたことは黙って置くようにと命じ、ダルシアは更に調査を進める。国王の今日に至るまでの予知表。それは必ず正確に記録されている筈だった。
「これか」
記憶官の部屋を訪れ、王の行動記録の帳簿を覗く。すると、
「……キャンセル？」
シールとリーンとの対話の後、一切の謁見のキャンセルが行われていた。理由には体調不良と書かれているが、そんな記憶は無い。まるであたかも、不自然さを隠すために人と合うのを嫌ったかのようだった。
調べれば調べるほど、ほんの僅かながらボロが現れ始めている。それは何も考えずに見ればなんでもないが、シールの語る仮説を通してみれば、確かな歪みだった。
シールの推測どおり、暗殺者一味の計画なのだとすれば、これはかなり脆い。
医者の事といい、この記録簿の事と良い、最初から疑いにかかって調べてみれば、明らかな証拠とまでは言わないが、直ぐに違和感を感じられるくらい、隙だらけだ。
だが、この〝速度〟は侮れない。たった数日、それさえ誤魔化せればそれでいい。そういう計画だ。計画が始まってから数日の間に王を捕らえ、そして今回の事件でその掌握を万全のものにする。更にそれと同時にオルフェス学院長、ミス

トの使いを貶め、王に並ぶほどの権限を持つミストを抑える。そういう計画。
　暗殺者達の計画のヴィジョンは見えた。
　だが、未だ確たる証拠は無く、それ故に解決には至っていない。
　今尋問を受けているシールたちの元へ向かい、王が偽者だと叫んだとしても、狂ったのかと笑われ、シールと共につかまるのがオチだ。シールも言っていた通り彼の推測には何の根拠もありはしないのだから。必要なのは絶対的な証拠。
　例えば、本物の王の所在。
　考えろ。よく考えろ。
　王は偽者だ。しかし生きている演技をしている。というのなら、本物の王は生きていたとしても、死んでいたとしても、何処かに保管されている筈だ。例えどれだけ高等な魔術を扱っていても、何時までも演技を維持できるものではない。
　偽者を頃合を見計らって〝王として〟殺す、そう考えるのが妥当だろう。
　だが、どんな魔術でも魔具でも死体を真似るなんてこともそうそうできるものではない。ならば必ずそのときに本物が必要なはずだ。
　ではどこに本物の王が隠されているか。
　場所は限られている。暗殺者側の協力者は至極少数。故に行動範囲は限られ、城壁の外に王を運ぶなんて事はできない。なら城下町の何処か？　真夜中、魔術を使い外見を晦まし少数で運び出せば、人工が密集している城下町で安全に運び出せるか
「いや……」
　城下町は散々、シール達を暗殺者として探す時、捜索されている。それこそ草の根を分けるかのように。ガラム夫妻がリーンを隠していた食料庫も発見している程だ。それでも見つかっていない以上、考えにくい。
　城壁外はありえない。城下町も考えにくい。ならば、城内は、だが、城内もまた、シールが散々走り回り、逃げ回り、その内部を隅々まで駆け回った。そのシールを追うために散々騎士達も隠し通路や隠し部屋を探して回ったのだ。
　叔父、ダーミルがわざわざ騎士大隊長として騎士達を押さえ込まなければならなかった事からも、騎士の統制は全く出来ていない。ならば、そうして騎士たちが王を見つけても口を紡ぐ、と言う事はないだろう。だがそれなら何処にいるびか。

ありうるとすれば、城内で、シールも、それを追い駆け回る騎士たちも全く立ち入る事は無く、どんな者にも見つからず、常に監視できて、しかし監視している所を怪しまれず、見咎められる事も無い。そんな場所だ。

「……馬鹿な」

あるわけがない。ダルシアはそうして首をふる。確かに、何かを隠すための隠し部屋と言うものはこの城のいたるところに存在する。攻め込まれた時、城内から王が逃げるための隠し部屋。だが、それですらも、地理を知り尽くしたシールと騎士たちがしらみ潰しにというくらいに駆け回り続けたのだ。そもそも、暗殺者側は王を誰よりも城内の身内から隠さなければならないと言うのに、誰もが知っている場所に隠すわけが無い。

やはり、シールの推理は全て妄想だったのではないか？

彼自身が言っていたように、証拠も根拠も何も無い。やはり妄想、シールのその推測に至った根底にあるのは、リーンへの過剰とすら思える信頼だ。彼女が自ら王を刺すと告白する筈が無い、そもそも罪を犯すわけが無い。そういう信頼。確信。

果たしてその過度な信頼を信用して良いのか。

ダルシアはそう思うが、しかし首を振る。少なくとも彼の言葉を今は信じよう。別に、今、独自に彼の推理を調査した所で損は無い。何より〝彼の言葉だ〟

考えろ。ありえないと否定せず、彼の妄想が事実だったと確信し、その上で推理を重ねる。想像。思考。城内でもし、そんな暗殺者達にとって都合の良い場所が本当にあるとすれば――

「……あった」

そう、一箇所だけ、シールも、そして騎士達すら探し回り駆け回ることが出来ず、そして暗殺者の一味が常に本物の王の所在を見張り、部外者達を近づけさせない事が出来る、唯一の場所が。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

時は戻る。

王に見放され、処刑へと導かれ、引きずられていく二人の英雄達、その様子か

ら気だるげに目をそむけ、自室へと引き下がろうとする王。
　そんなどこか悲劇的なその情景に割りこむ、扉の音、
「見つけたぞ！」
　開かれた扉の先に現れたのは、血で汚れた剣を片手に、部下達を引き連れて現れたダルシア。彼の部下達が抱えているのは一人の老人。何故か今、この謁見の間から離れようとしている国王と同じ顔をした男。
　ダルシアは、敬語も何も無い声で叫んだ。
「王の寝室！ ベットの下の隠し部屋に本物の王がいた!! そいつは偽者だ!!」
　皆の視線が王に注がれる。今まさにこの場から逃げようとした王に、偽の王に、
「ナイス、ダルシア」
　次の瞬間、シールは拘束からするりと抜け出し、大きく跳躍した。その場にいた騎士や魔導師、大臣等や王子らが何が起きたのかも理解できず、呆然とシールを見上げる。
　そんな中、シールは宙で身体を捻り、術式を唱える。
「【封断偽剣・五式】」
　右手から生まれた封印術式の大剣を彼は振りぬく。王に向かって、そして
「……っ?!」
　誰もが目を疑う光景が現れた。
「……王!?」
　王、老い果てた賢王ガイディアは、向かってきた封印剣を、まるで芸人のごとく身のこなしでするりとかわし、更に宙を舞い、その場で〝停止したのだ〟
　魔術を使えば宙に浮く事など可能なのかもしれない。だが、既に老人といっていい年の国王が、シールの一撃を〝華麗〟に避けるなんて芸当がこなせるものとはとても思えなかった。
　宙に浮き、シールの攻撃を華麗にかわした王は、シールを宙から見上げ、そして、
「〝へえ、気づいたんだ〟」
　子供のような、否、〝子供の声で〟そう言って、ニヤニヤと笑みを浮かべた。その皺くちゃの顔がぐにゃりと歪み、更にその顔の形そのものが〝歪んだ〟

その歪みの先にあるのは、確かに皺の刻まれた顔。だがそれはつい今さっきまでと違い、妙にその質感が違った。まるで、なにか粘土のようなもので顔の形を作り上げたかのように

「幻覚の術で、完全に見た目を他の人物に変えるなんて事はできない」

　魔術は万能ではない。リーンのような超越者でもない限りは。それ故に、

「だからまず、顔の形を何かで覆い、似せ、そして幻術で〝保険〟をかける」

　図らずとも、メザイヤの予測は当たっていたのだ。それも誰かの目を眩ませると言う事実まで正解だった。ただし、誰が、何を目的としているかが違ったが。

王は、その場にいる全員の視線を向けられた偽の王は、どこか自分の仕掛けたイタズラの明かされた子供のように笑って、

「ハッハ、せーかいだぜ英雄」

　王は、王を騙った偽者は、皺だらけの顔に指を突きたて、引き千切る。ブチブチと無機質な物体が断裂する音と共に、仮面の下の素顔が見えた。

　それは皺など一つも無い子供の顔。整っているが、しかしその邪悪な笑みがその全てを台無しにしていた。老人特有の白髪の下からは、色褪せた緑色、という表現が相応しいような髪が顔を出す。

「苦労したんだぜぇ？　こんな悲壮感まるだしのクソジジイのサルマネなんてよお。おまけにそこのクソ女に呪い返されるしよ。キッチリ殺しときゃよかった」

　少年は、真の暗殺者はそう言って笑う。無邪気な笑み。と言うにはその口から流れ出るその内容はあまりにも邪悪だった。相対するシールは、

「下品な口の利き方、指導対象だよ。少年」

　そんな風に茶化して肩を竦め、何時ものように剣を構えた。

第九十六話 幻惑の偽王と平和主義者

　謁見の間は一気に大混乱に陥った。王が偽者だったと、そんな信じ難い事実が証明された以上、それは当然だろう。事態を知らなかったものは状況を把握できずに周囲を見渡し、事情を僅かでも知っていた暗殺者の協力者達は、自身の所業が知れる事を恐れ逃げようとしどろもどろになっていた。
「き、貴様!!」
　第三王子が暗殺者の少年を見上げ、叫んだ。だがそれは犯人を咎める咆哮ではない。己が罪を暴かれた焦りから生まれた悲鳴だった。
「約束が違うではないか！ 何をしているのだ貴様は！」
　だが、偽の王は、正体を現した暗殺者は、
「あー、うっせえなクズ」
　まるで取り合わず腕を振る。一瞬で閃く魔術の閃光。湧き上がる悲鳴。
「ぎぃいあああああああああああああ！？！」
　絶叫が木霊する。第三王子の腹が先の閃光に貫かれ、赤黒く、焦げていた。無残にも生かされるような形で彼のハラワタは焼かれていた。
「王子！」
「救出しろ！ 他の王子らもだ！ 無関係の者を此処から脱出させろ！」
　ダルシアの指示の元、騎士たちは動き出す。此処に連れて来た王と捕らえられていたリーン、王子らの保護、この裁判の為の役人達、そして何よりシール達を嵌めようとしたと思われる者達、彼らは特に念入りに保護してやらなければならないとダルシアは騎士達に強く指示していた。
　結果として、謁見の間は慌しく人が行き来し、しかしその中心ではダルシアとシールの二人が、何処か落ち着きの払った表情で並んでいた。シールはまだ少し身体に纏わりついていた偽者の拘束具を払い落とすと、ダルシアへと笑みを向けた。

「よく、本物の王を見つけてくれたね。助かったよ。ダルシア」
「本当に、ギリギリでしたが」
　しかし、このタイミングしかなかったのも事実だった。王が、偽の王がシールを追い詰めるために寝室から身体を動かすこのタイミング。
　隙を突き、寝室に向かえば、しかし当然、代わりの見張りのものがいた。見た目は自分達と同じ騎士、だが、騎士隊長たる彼には、彼らの姿に見覚えは無かった。所属を問えば、いきなり切りかかってきた。
　案の定と言うほか無かった。そうした敵襲を予期していたダルシアは、既に部下を控えさせていた。彼らは偽の騎士たちを切り捨て、そしてベットの下を探り、発見した。王のためにある秘密の部屋を、本物の国王を。
「遅くても早くても危うかった」
「ま、見つけられたのなら結果オーライさ。で、」
　シールはそう言って笑みを浮かべ、そして上を見上げた。王のローブを身に纏った少年。今回の事件の主犯格、真の王の暗殺者。
「後の問題はあの真犯人」
「行け」
　ダルシアは短く指示を加え、騎士達が動き出した。魔術を使い、宙を跳び、此方を見下ろし嘲りの笑みを浮かべる暗殺者へと飛び掛る。
　だが、瞬時に周囲を囲われた暗殺者の少年は、
「――ッハ」
　そんな風に鼻で笑い、指を振るい、術を刻んだ。
「【我が身は幻】」
　騎士の剣が触れる、その瞬間に、少年の身体は〝ブレた〟。騎士の剣は少年の身体を貫通し、だが、少年の身体は其処には存在しなかった。
「【我等は幻】」
　更に、王のローブを纏った少年の姿が、次の瞬間には〝増えた〟。それも数十とこの謁見の間を覆うような数に、
「……なっ」
　騎士たちは一瞬絶句する。しかし魔術の詠唱はその戸惑いを無視して更に重なり、

「【汝らは幻】」
　その言葉と共に、騎士達やダルシア、シールの姿までが、〝少年の姿に変わった〟
「馬鹿な!?」
　そして次の瞬間、少年の幻影はナイフを構え、一斉に、飛び掛ってきた。暗殺者達の姿に変えられた騎士たちは抵抗しようと剣を構えるが、大量の幻影に飲まれ、そして次の瞬間には何もかもが紛れて見えなくなってしまった。
「厄介な！」
　ダルシアは飛び掛る幻影を振り払い、呻いた。幻影、確かに利用する事は知っていたが、だがこれは異常な量だ。ほぼ単独でこの事件の要となった以上、相当の実力者である事は分かっていたが、時間が無かったとはいえ相応の魔具を用意しておくべきだった
『ハハハ、誰が本物でしょーかー？』
「声が……!?」
　暗殺者の声の出所が反響し、どこから聞こえてくるのかも分からない。幻影も一斉に同じように口を動かしている。恐らく自分を覆っている幻影もだ。
　殆どの影が幻影だ。見れば一瞬その姿が〝ズレる〟のが分かる。更にこれらの幻影は殆ど自動で動かしている。故に細かなコントロールは効かず、時折敵もいない場所を切りつけたり、意味の無い跳躍をしていたりする。
　だが、そうした違いを見極めるには、あまりに幻影の数が多すぎる。
　あれは幻影だ、そう見極めた時には既に他の幻影達に飲まれ、見分けがつかなくなる。だからといって何もかも無視できない。何故なら本物が確実に紛れているからだ。更には自分の部下達も中に入る。
　同士討ち、なんて真似は部下たちとてしないだろう。だが、それを畏れるが故に攻撃の手が緩み、幻影をうまく対処できない。それが狙いなのだろう。相手を自身と同じ幻影で覆い、攻撃の手を緩めさせ、連携を取れなくさせ、そして、
「っ！」
　と、ダルシアがそう分析している内にも背後から一人の幻影が現れた。剣を構え、振り返る。だが暗殺者の幻影は両手を上げて、慌てた表情で、
「わ、私です！」

「所属と名を言え！」

　切り返すと、「私は……」と、言葉を続け、だが、次の瞬間邪悪な笑みに変わり、

「ミラリア、っつーんだよ!!」

　斬りかかって来た。本物の偽王。そうだ。幻影に紛れ、彼は此方を討つ気だ。そうでなければこんな手を打つ前に逃げている。だがこれは勝機だ。無効がわざわざ幻影から出てきてくれた。

　ダルシアはナイフをかわし、極めた剣の一撃を少年へと振りぬいた。

「ッグガ!?」

　剣の一撃は、確かに暗殺者の腹を裂いた。事後確認だが幻影でもない。本体だ。それ故にダルシアは更なる追撃を喰らわす為、ふらつく少年へと切りかかる。

　だが、

「□□!?」

　得体の知れぬ、悪寒とも言える感覚に、ダルシアは一度剣を引いた。それは少年があまりにもあっさりと後退したが故の違和感なのか、あるいは魔術を通じたものが時折感じるマナを通した第六感だったのか、それは分からない。

　だが、直後にその判断は正しかったと彼は理解する。

　切り裂かれた腹を抱えて身悶えていた少年は、しかしその俯いた身体を一気に翻すようにして身体を起こして、

『ハハ、ひっかかんなかったか！』

　そう言って、右手の平をかざし、光を放ったのだ。それは第三王子を焼いた魔術の光で、そしてよく見ればそれは豪雨の夜に光る稲光に似ていた。

「雷か!!」

　否、正確にはそう見えるほどに圧縮され、強大な光に変わった熱の放射か。

　ともあれ危険な事に変わりは無く、ダルシアは常時発動している魔具に守られながらも身体を光に叩き付けられ、膝を折った。その隙を縫うように暗殺者は再び、笑いながら幻影の陰に隠れていく。

「っぐ、待て!!」

　追うが、あっという間に見分けがつかなくなってしまった。腹を切り裂いた筈

だが、幻影の情報は既に書き換えられ、皆同じような傷が腹にある。幻影の中に紛れいている本物はたった一人なのだ。だというのにその一人にこんなにも翻弄されてしまっている。
　ダルシアは歯噛みし、唸る。だがそこに、
「伏せろ！」
　シールの声が響き渡る。見れば、一人の幻影から紅の術式、封印の剣が突き出ていた。それは分かりやすく振りかぶるようにモーションされ、そして、
「【封断・五式】」
　瞬間、屈んだダルシアの頭の上を封印の剣が走った。マナのみを喰らう術式。その効力ゆえに最悪味方に当たっても死ぬ事は無い。幻覚は術式に引きずり込まれ、消えていく。
「と、これでどうかな？」
　幻影が消えた後には、シールの声に反応し身体を伏せた部下達と、既に倒された仲間、更に先の騒動で逃げ遅れた者達も僅かにいた。だが幸い、王や王子ら、リーンは既にこの場から逃がされていたが、
「おー、スゲースゲー」
　残る暗殺者はその場の中心で、ニヤニヤと、謁見の間の中止にいた。やはり少年の顔、そして王のものである筈の豪奢なローブを身に纏っている。だがその服の中心はダルシアが傷を、
「……何？」
　ダルシアが切り裂いた筈のその腹、だが今見れば、其処は、服が切り裂かれただけで血が少しも流れていない。だがその代わりに、裂かれた皮膚との合い間の傷口を肉が盛り上がり埋めるようにしている。
「再生、能力？」
「せーかい。ハッハ、すげーだろ？」
　道理であれほどの傷を負いながら、瞬時にあれだけの動きができた筈だ。そしてこれだけの幻術を操る力を持つ理由も納得した。ダルシアは納得し、そして同時にその能力の存在する事実に寒気がした。
　再生能力。その力が開発されたのはかつての暗黒時代。未だいくつ者国を相手に戦争をしていた時代だ。致命傷を受けても、まるでリビングデッドのように復

活する不死身の兵士。それを生み出すための研究だった。
　だが、研究途中で問題が発見される。肉体の再生には魔力とは別に多大な生命力が必要だと分かったのだ。再生力を持つ魔物や魔獣は、そうした生命力を体内に存在する貯蔵庫から引き出すのだが、元々そうした機能の無い人間はそうした対応が取れるはずが無い。
　結果として、大きな傷を受けた再生能力者は、その傷を癒すと共に人体に必要な最低限の体力をも搾り取られ、死ぬ。そんな本末転倒な結果が生まれてしまったのだ。
　そこで、人体に魔物と同じように、エネルギーの貯蔵庫を作り出すという発案が次に生まれた。しかしそこでも更に新たな問題が生まれる。
　人工の生命力貯蔵庫。それには人間と同質の命の力が必要とされた。別の生命体の力では拒絶反応が起こるからだ。しかし人一人を蘇らせるほどのエネルギーには、人一人殺すほどのエネルギーが必要となる。
　つまる所、一人の再生者を生み出すために、何人もの人間の命を搾り取り、干からびさせなければならないのだ。あたかも伝説の魔族、吸血鬼の如く。
　この結果を受け、再生能力者の開発は【吸血鬼製造計画】と揶揄され、そのおぞましさから戦後永久廃止となった。人間には不相応な力だとされたのだ。
　ところが、目の前の暗殺者はその再生能力を行使している。さも当然のように。
　そしてそれは一つの事実を示している。
　目の前の少年が、何人もの命を犠牲にして生まれた怪物だと言う事だ。
「ハハ、おいおい、なに呆けてんだよ。騎士隊長さんよ」
　暗殺者はそう言って笑うと、右手を翳して再び魔術を発動する。命を吸い命を紡ぐ吸血鬼はその命を攻撃にも転用できる。
「燃え尽くせ！」
　先ほどよりも更に強い光が閃いた。魔具による防御は通じず、生み出した障壁は切り裂かれ、ダルシアの視界の全てが光に飲まれ、彼は瞳を覆った。だが、その直後に
「【封印！】」
　紅の術式がその合い間に割り込む。光は一瞬その術式に飲まれ、ダルシアはそ

の間に真横へと跳んだ。盾の役割をしていた封印術は間もなく撓み、そして崩壊した。
「た、すかりました」
「前を」
　ダルシアの横ではシールが
　攻撃を防がれた少年は、しかしまるでその表情に焦りを見せることなく指を立て、
「【我等は幻】」
　再び、幻を再生させた。
「キリが無い！」
　いくら幾つもの命を喰らった再生者であっても、ここまで精緻で強力な幻術をこんなにも瞬時に生み出される訳が無い。元々多くの人間を騙すために偽王となる準備を進めてきた暗殺者だ。この謁見の間に魔具の一つでも仕込まれている可能性がある。
　だが、探す時間もあても無い。
「ダルシア！ 部下と一緒に下がれ！」
　そんな時、再びシールから声が飛んできた。だがその言葉にダルシアは顔を歪め、
「しかし！」
「邪魔だ！ はっきり言って!!」
　ダルシアは答えを詰まらせた。確かに、数の利を叩き潰されたこの現状では、部下の騎士たちも自分も、彼の力を振るうための邪魔者でしかない。ならば、この場に彼一人残した方が良い。
「まだ敵はいる！ 君達は外を頼む！」
　そう言って、シールと思しき幻影は、封印術式を地面に叩きつけ、
「【封界！】」
　直後、謁見の間は紅の術式に飲み込まれ、その封印術式に幻影は消し去られた。
「今だ！ 撤退！」
　騎士たちはその瞬間、ダルシアの指示の元、倒れた仲間達や、逃げ遅れた人々

を助け動き出す。再び暗殺者が追撃を狙おうとする前に。
　だが、当の暗殺者はそんな騎士達の様子をニヤニヤと笑みを浮かべながら見つめていた。結果として脱出は何の問題も無く完了した。最後にダルシアが扉の前に立つと、一度だけ振り返り、
「御武運を」
　そう言って、魔術で扉を操作し、一気に扉を閉じた。けたたましい音を最後に、謁見の間には本来の静寂が戻った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「あー、ハハ、鬱陶しかった」
　残されたシールを前に、暗殺者、ミラリアはその顔に残っていた〝面〟を剥がしとった。面の下から現れた顔は、やはり若々しい子供の顔だが、褪せた緑の髪がその顔には不似合いだった。
　その顔には、面の何処に隠されていたのだろうか、耳にはピアスが付けられてあった。逆三角の形をとった黒紫の耳装飾。奇妙な装飾の施されているそれは、妖しく光を反射していた。シールはそれを見つめ、
「それは……」
「ああ、気づいた？ これ、あの女を呪ってる魔具さ」
　ミラリアはニヤニヤと笑いながらその耳飾を手で遊ぶ。チラチラと妖しく光るその魔具にシールは眉を潜めた
「出来れば彼女を開放して欲しいんだけど？」
「嫌だね。あの女はこのまま呪い殺す」
　あっさりとミラリアはそう言い切った。
「あの女が一番厄介だった。だからアンタじゃなくてあの女を呪ったのさ」
　魔帝、彼女の能力は当然、暗殺者たる彼も把握している。
　真に彼女の能力が発揮されていた【暗黒時代】しかしその時代の資料は少ない。だがそれ以後の彼女の活躍はやはり目覚しく、そして脅威だった。それ故に彼女は今回の計画にとっての最大の障害だった。
　その判断は、ミラリアが王として呪いの治癒を受けていた時、リーンの暴走を

観察した時、正しかったと確信した。
【魔帝】彼女はバケモノだ。
　で、あるならばシールベルト、彼の方が殺りやすい
　シールベルト、彼のことも当然ミラリアは知っている。平和を求めるが為に己を傷つける甘い男。確かにその精神においては狂っていると言えるほど、強い。だが戦闘においては単なる邪魔でしかない。
　扱う封印術は確かに特殊で、それ故にオルフェス学院長に重用されているようだが、だからといって【魔帝】のような【究極】とも言えるような能力とは違う。戦闘能力は確かに高いがあくまでも〝人間〟としての領分を越えていない。人外の域に到達している訳ではないのだ。
　先のリーンの暴走を彼が止められたのも、彼女の不調と、あのオルフェス学院長ミストの仕込が合ったからこそだ。それが無ければ既に死んでいる。
　対する自分、ミラリアは【魔帝】ほどでは無いが、人外だ。そう在るように造られ、育てられたバケモノだ。そう在りつづけなければならない環境に自分はいたのだ。それ故の自負がある。己は、人間如きには負けぬという自負が。
「さ・て・と」
　前を見る。相対する彼は、やはりと言うべきなのか、此方を見つめ、どこか腑抜けたような、気の抜けた笑みを顔に湛えたままだった。
　殺せる。ミラリアは改めて確信した。
「やれやれ、どうしようかな」
　シールは、そんな風に言葉を漏らして、此方に視線を向ける。その仕草は戦いに赴く者の顔、というよりも、単に、何か、戸惑いのようなものを得た子供のような表情だった。
「何笑ってんだよ、へーわ主義者様。何か笑える事でも？」
　ミラリアはそう軽口を叩きつつ、手の内に魔術を構築していく。封印術など一瞬で消し去る、先にダルシアに向けたものよりも遥かに強大な一撃を生み出すため。幻覚は必要ない。一瞬で終わらせる。
　シールは、そんな此方の仕込みにも反応せず、頭を掻いて、
「君みたいに、いい相手って久しぶりだからさ」
「ハァ？ 良いって、何が良いってんだよ？」

術式完成。内にある生命力をも注いだ魔術。後は至近で放てば後も残らない。
　シールは、未だ、此方の思惑などまるで気づかぬように、ただ此の質問に答える言葉探すように肩を竦めて、何時ものように暢気な声で、
「いや、だからさ」
　区切り、笑い、

「殺しても、いい相手」

　瞬間、眼前に現れたシールは、封断術式を振りぬき、ミラリアの右腕を寸断した。
「……え？」
　つい先ほどまで其処にあった自分の腕が、仕込んだ術式ごと宙を舞う。そんな珍妙な光景に、ミラリアは呆けた声をあげた。だが次の瞬間に燃え滾るような熱と痛みが腕のあった場所に奔り、否応無く正気に戻された。
「、っがあ！？！」
　何が起きたか、理解せぬままに彼は背後へと跳ぶ。それは彼が培ってきた戦闘経験からくる反射だった。危機から距離をとり逃れるための動きだった。
　しかしそれを追うシールの動きは、彼のそれより更に速く、
「【絶断】」
　首を狙う一撃、ミラリアは紙一重でそれを避ける、つもりだった。だが僅かにずるりと、首筋から〝何かが抜き取られるような〟異様な感覚が奔り、直後に血が噴出した。
「ぎぃい!?」
　首を押さえ、更に強く地面を蹴り背後へと跳ぶ。
　距離を稼ぎ、再び幻術を出現させるために、だがシールの追撃は止まらない。
「【三式】」
　彼が出現させた短剣型の封印術式が、ミラリアを迫り飛んで来ていた。一直線に飛んで来るそれをミラリラは身体を捻り、避ける。短剣の剣は軌道を変えることも無く、彼の頭上を越えていく。しかし
「【封印開放】」

シールの言葉に【三式】の封印が解かれる。その小さな短剣の術式に封じられていた物質が開放される。術式はミラリアの目の前で歪み、たわみ、剣と化す。騎士達が蹴散らされた魔剣、幾つもの剣の重なった、風神の翼。

「【乱風】」

魔の言葉が唱えられ、暴圧の神風が吹き荒れる。

「っか!! が、ぁあ!!」

至近距離からの直撃を喰らったミラリアは地面に叩きつけられた。己の体の全ての骨が軋む音を耳にし、悶える事も出来ぬままに悶絶する。

だが、どれだけ強力な魔剣であっても、遠距離からの指示ではその持続力に限りがある。ほんの数秒で魔剣は地面に落ち、ミラリアは暴圧から開放された。

だが、その先には、

「━は？」

瞳に向けられた、二本の指

「あ、」

訪れたのは暗い闇。そして脳天に突き刺さるような熱い熱い激痛。脳が狂い、身悶えてしまうには十分すぎて、ミラリアは激痛に従い、叫んだ、

「ア、ア、ア、嗚呼、嗚呼アア嗚呼アアアアアアアア嗚呼アアアアアアアアアアアアアああ亜ああああああああああああああああああああああああああああ！？？！」

たとえ化け物であろうと堪えられないその激痛を前に、ミラリアは身悶え続け、しかしその激痛とは別に、どこか冷静な思考を頭の中においていた。痛みは眼部の両方から、しかし片方は未だ痛みは続き、もう片方は引いていく。痛みの引く理由は、既に失われたが故に容易い修繕ですんでしまったという事。彼の再生能力は破壊は癒せるが喪失は癒せない。故に肉で埋めるだけで済まされる。

痛みの残るもう片方は、治癒が進んでいる事を知らせる激痛だ。

視界の全てを奪われた訳ではない。が、片方が奪われた。彼はそれを理解し、息を整えた。

「っは、っく、は」

残された方の目で前を見る。前に存在する〝敵〟を。

「〝両方とも〟潰せると思ったんだけど、へえ、やっぱり中々やるもんだね」

シールは、敵の返り血を浴びながら、何時ものように穏やかな表情で微笑んで、そんな事を暢気な表情で呟いた。だが、彼の血まみれになった右手の指には、赤色に塗れた〝白い塊〟が、つぶれ、へばりついていた。
「出来れば、早々に死んで欲しいんだけど、頼めるかな？」
　シールは何か、お使いでも頼むかのような声で、そうミラリアに尋ねた。
　シールベルト、【暗黒時代】の彼の呼び名は【平和主義者ぎゃくさつしゅぎしゃ】
　その残虐性を覆い隠すために付けられた、彼の仇名だ。

第九十七話 かつての話と暴かれた秘匿

　十数年前、暗黒時代
　ガイディア国国境、最前線
　アダリア、ラークス、ガイディアの三国の国境の重なる中心点、地形的問題点、マナスポットによる進入禁止地域、あらゆる問題が重なり、結果として三国の勢力が集中し、長年拮抗し続けている、戦場の交差点。
　極端にマナを消費する魔動機が次々に投下され、大地の形を維持するマナすらも絞り果たし、雑草一つ生えないような荒野が広がっていた。命を感じさせないひび割れた大地が広がっていた。
　空ろとなった大地を埋めるように他の地からマナが流れ込み、それが不安定な形で具現化し、大雨を降らし、雷が鳴り、強風を巻き起こし、今日の天候は雷、時々竜巻。

「くそ……どうなっているんだ」

　そんな馬鹿げた、天変地異とでも言える様な天候の中をイングラムは走っていた。
　彼は、騎士として非常に優秀であり、個人としての能力も、部下達を指揮する能力も高かった。だが、平民と言う身分であり、また、騎士として愚直で真面目すぎるが故に戦場の最前線に引っ張り出された。
　通常、戦場に立たされることは実力を認められたという事だ。だが、この最前線においてその常識は当てはまらない。何年もの間三国で戦い続けた結果、疲弊、病、マナの枯渇、士気の低迷、人権を無視した魔導兵士の導入、あらゆる混沌が渦巻いていた。
　その最前線に立てと言われると言う事は、死ねと、そう言われた事と同義だっ

た。
　そんな彼が戦場を走っていた。部下たちを引き連れ、戦場の奥の奥へと
　理由は明快、敵襲があったのだ。アダリアとの戦闘を終え、ようやく一息ついた所やってきた奇襲だった。休む暇などない。此処に彼を送り込んだものの意図があからさまに理解できるほど、この戦場の状況はひたすらに劣悪だった。イングラムは、その混沌したこの環境に精神をすりつぶしていた。
　それでも尚、指揮官として戦い続けられたのは、彼の愚直さ故のものだった。だが、今日の地獄はその様相が違っていた。
　死臭がする。イングラムはそう感じる。この煉獄において、死の〝におい〟など日常だ。だがこの気配は、血と腐敗の匂いは異常だった。まるで渦巻くように、大量とも言える死の気配がのたうっている。
「……これ、は」
　そしてその原因はすぐに知れた。奥に進むにつれ、殆ど破壊され崩れた街道の彼方此方に、〝死体〟が散らばり始めたのだ。此方の死体も、敵国の死体も、段々段々折り重なって、死で死を覆っていた。それも、
「……子供」
　子供、そう、幼い、おおよそ１４，５の子供の死体で、その場が埋まっていたのだ。
　巻き込まれた民間人、と言う訳ではない。彼らは一様に剣を持ち、槍を持ち、魔道具備え、魔兵器を備えている。戦場で戦う兵士達の、騎士達の装備と何ら代わりはしなかった。
　少年兵士、敵国の一つは孤児の子供を集め、短期的な集中教育を経て、兵士として送り出す。つまり彼らが今回の敵襲だと言う事だろう。
　子供を利用する非道、しかし、イングラムにはそれを批難する事などできなかった。
　批難できるような立場にいないのだから。
「……くそ！」
　頭に過ぎる罪悪感を振り払い、道を進む。歩を早め、戦場へと進むにしたがって、奥へ奥へと進むにしたがって、死の密度は高くなっていた。死体、死体死体死体、子供の死体。部下達の死体も確かにあったが、既にそれら子供の死体の数

に埋まっている。目を背けてもその先にまた子供。
　本当に狂った光景だった。
「おい！　イングラム！　何だよこれ！」
　背後の部下の一人、傭兵のガラムが声を上げ叫ぶ。普段からこの戦場を前にしても飄々としているが、そんな彼でもこの光景のおぞましさに苛立ちを隠せていないらしい。気に喰わない男だ、普段なら小気味良い筈だが、当然、今はそんな気分になれるわけが無い。
　地獄と共に死が重なる光景。その中を進み、時に子供の死体を踏みつけていく自身が、たまらなくおぞましかった。
　だが、そんな時、ふと前方、より一層死体の積みあがった丘の上で、知る人影が見えていることに気が付いた。
「ヴェイン！」
　瞳を魔封じの紐で覆った、色褪せた赤髪の少年、ガイディア国の少年兵、ヴェインが其処にはいた。血塗れた魔剣を下ろし、当然のように戦場の中心に立っている。敵国の外道を罵れない理由はコレだ。ガイディア国もまた、敵国のそれか、それ以上に外道な行いに身を染めているのだ。
　ともあれ、と、イングラムは首を振り、彼に話しかけた。
「ヴェイン、何があった」
「……」
　ヴェインは何も答えない。魔力の唸り声を上げる細身の剣を下ろすだけだ。元々彼とは殆ど会話の通じることはなかった。だが今回は、暫くすると軽く顎をしゃくり、イングラムに視線を促した。
　その先にいたのは、
「……シール、ベルト」
　シールベルト、ヴェインと同じく兵たる少年が其処にいた。
　全身を血塗れにして、剣を地に下ろしていた。死体の山の頂上で、見下ろすようにして、その空虚で、何一つ光を孕まない瞳で此方を見つめていた。
　そして彼の足元には、彼に討たれた子供達が、恐怖と絶望に表情を歪めて、無残に無慈悲に折り重なるように死んでいた。首を刈られ、腸を引きずり出され、手足を切断され、眼部を潰され、脳天をかち割られて、ありとあらゆるあり方

で、死んでいた。
「……っひ」
　とうに死に慣れ切っているはずの部下が悲鳴を上げる。だが、その震えの理由も理解は出来た。目の前の光景は、人が持つべき常識とは、あまりにかけ離れていた。
「何が、何があったんだ、シール」
　ふとすれば全て吐き出してしまいそうな体を抑え、何とか言葉を紡いだ。だが、シールはその場から動く事はしない。その代わりと言うように、ヴェインがイングラムを見上げ、口を開いた。
「……ラークスのじっけん兵だ」
　普段からよくわからない、正体不明といって良いような子供だが、やはりその声は声変わりもしていない高い声だった。だが、その声色は救いようの無い虚無に満ちていた。
「実験？」
「集落を襲って、捕らえて、家族人質にして兵士にしたんだと」
「……は？」
　非人道的とか、そういう日常で使われる言葉のレベルからかけ離れていた。
　別に彼が何か、別の言語を使っているわけではないのに、とても理解できない言葉を使っているようにしか聞こえなかった。道徳から外れているとか、それ以前の問題だ。なんなんだ、それは。
　いや、そもそも何故そんな事を、イングラムがそう口走ると、
「コイツがそういって、指揮してたよ」
　ヴェインが差し出したのは痩せこけた中年の男の生首だった。指揮官を意味する兜を未だ頭に被りながらも、その有様は死に満ちていた。そして顔に皺を寄せて、何故か悲哀に満ちているように見えた。
「あいする子達をよくも殺してくれたなって、泣いてたよ」
　ヴェインはそう言って、歪み切った笑みを口元に浮かべた。
　頭が、痛かった。
　此処は、狂っている。
　普通は、否、戦場であっても、人が人として在るべきものが、ない。失くして

はならない物が、ない。一切合財が失われている。消えてなくなってしまっている。
　此処は、地獄だ。人が生み出し、人が狂い、そして死に逝く地獄。

「イングラム」

　声、シールから声がかけられ、イングラムは意識を戻した。
「なん、だ」
　話しかけられ、イングラムは自分の声が震えていることに気が付いた。死体の頂点に立つ少年が、倫理崩壊の体現者であるシールが、あまりにも異様に思えたのだ。
　シールは、視線を宙に彷徨わせ、空ろな声で、
「てきをたおせばへいわになるんだよね」
「……、へいわ」
　それは軍の魔導通信で散々叫ばれている言葉だった。敵と戦え、美しき祖国を土足で踏み躙ろうとする獣どもを打ち倒せ、平和を取り戻せ──耳が腐るほどに叫ばれた言葉。うんざりとなるくらいに繰り返された、欺瞞に溢れた言葉、
「へいわになるんだよね」
　シールは繰り返す。まるでこの惨状の罪を問うかのように
　イングラムは、そうだと言うべきだった。戦争を指揮する立場にいる自分は、そう言うべきだったのだ。そうしなければ、そうでなければ指揮者としての役割を果たせない。己が使命を果たせない。
「……っ」
　だが、言葉がでなかった。
　あの言葉が嘘だと知っているから。安全圏からぬくぬくと、何一つ不自由する事のない人間が口にした、嘘に塗れた、薄っぺらいものだと知っているから。戦地へ、明日死ぬかも分からない地獄へ送り出すための傲慢極まる醜悪な言葉だと知っているから。
「言えよ」
　シールはいつの間にか、イングラムの前に立っていた。子供らしい細く、幼い

腕で、血まみれの腕でイングラムの胸倉を握り締め、空ろな声で、
「言え」
　命じる。年の差も何も無かった。残酷に冷酷に、シールは命令を告げる。
　言えと。
　嘘と欺瞞に塗れたその言葉を発せと。
　イングラムは、頭を掻き毟り、顔を歪め、そして喉を引き絞るようにして、
「そう、だ。ああ、平和に、なる」
　口にした瞬間、とことんまでに惨めな気分になった。この戦場に追いやられた時だって、これほどまでに惨めに自分を思ったことは無かった。
　シールはイングラムを手放し突き飛ばした。無様に転げるイングラムを、見下ろし、そして嘲笑う。血と死に塗れた少年は、全てを見下ろす様に空を見上げ、そして空ろな声で、
「あーあ、はやく、へいわにならないかな」
　乾ききった笑い声が死地に木霊した。
　シールは死の中心で、何もかも見下した嘲笑を響かせていた。

「……む」
　そこまで夢を、かつての過去を見て、イングラムは目を覚ました。
　懐かしい、と思うにはあまりに凄惨で、血に塗れた過去だった。戦争、もう十年以上前にもなる。良い思いでなんて殆どない、ひたすら長く、苦しい思いをし続けた日々。
　だから彼らには借りがある。返しきれないような大きな借りと、罪が。
「さて」
　イングラムが立ち上がり、身体を伸びする。その直後、木々の割れる音と共に封じられていた筈の扉が開かれた。騎士ではなく、現れたのは剣を持った三人の男。奇妙な衣装に身を包み、全員同じような布で顔を覆う。
　以前聞いた、〝なぞのそしき〟の連中と、容姿が一致していた
「封印を解いてまわった怪しい奴等……まさか城にまで入り込んでるとは」

大失態だ。と自嘲しつつ、イングラムは立ち上がる。当然武器は持っていない。だが、無手で構え、大きく足を開く。指を大きく開き、普段の落ち着き払った姿とはまた違う獰猛な顔で、
「地獄帰りを舐めるなよ。無法者」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

【謁見の間】
　相対する二人のうち、ミラリアは己の失った腕を押さえ、荒い息を整えた。そうしている間にも、彼がシールに刻まれた傷は徐々に癒される。改造され、人の道から外れた彼の再生能力だ。
　しかし、失われた腕と瞳は戻らない。決して癒されず、彼の損失となる。故にシールは焦らず、その場から動かない。ただ獲物がこちらに来るのを待っている。
　ミラリアは切り離された腕を睨み、しかし表情には無理矢理笑みを浮かべ、
「オイ、こねぇのかよ、センセイ？ 俺を殺したいんじゃねえのかよ？」
「なんでわざわざ。君の仲間が幾らかいるみたいだけど、騎士達がいずれ収める。そうすれば君は一人だ。それなのに焦る必要なんて何処にもない」
「あんな雑魚どもにそれが出来るかねえ？」
「君の仲間も、君ほどじゃないだろう？　そんなゲテモノ改造、何人もできやしない。だったらなんとでもなるさ。騎士達はそうした相手のプロフェッショナルだ」
　淡々と冷静に、シールは言葉を並べる。此方の状況を読み、周囲の状況を理解し、そして確実に此方を追い詰めるための手段をとっている。冷静だ。その姿は、何時もの彼と、ミラリアの知る、シールベルトと呼ばれる人物とまるで変わりはしない。
　違うのは、彼の全身から圧倒的な殺意が放出されている一点。ゆらりと、陽炎のように濃厚で、しかしリーンの憎悪の放出とはまた違う精錬され尽くされた剣のような殺意が、彼から発せられている。
　この世の邪悪と呼べるような場所に身を置く彼ですら経験した事もないよう

な、狂気にも近いそれに、ミラリアは腹底から震えを持った。傷からの痛みとはまた違う、冷えた汗が額を流れる。
　この、目の前にいる男は、本当にシールベルトと同一人物なのか？
「早く、終わりにしたいんだよ。夜、あまり眠れてないし、お腹も減ってる。明日には子供達に算数の新しい公式を教えなきゃいけない。先生は大変なんだよ」
「その可愛い子供達を皆殺してやろうか？ 苦労が晴れるぜ？」
　揺さぶりをかける、確かに安い挑発ではあった。だが、
「やってみたら？」
　そう一言返すだけで、シールの動きに変化はない。揺らぎも見せない。呼吸の一つすら乱れはしない。しかし、純粋な殺意だけが、先よりも更に濃度高く、錬度高く、上昇した。
　挑発は意味がない。むしろ逆効果か。
「ク、ハハ」
　声を上げ、固まった己が肉体を崩す。呪具のナイフを手の上で遊び、構える。
「【我等は夢幻なり】」
　幻を生み出した。しかし今度は先ほどのように数え切れないほどの無数の幻ではなく、五つ、数えられるほどの幻。だが、その動きは先ほどの大雑把な代物ではない。
「ふぅん」
　相対するシールは軽く感心した声を浮かべた。
　幻達の動きは鋭く、何より明確に此方を狙い定め、彼を追っていた。本物さながら、失った腕すらも正確に再現し、それによって欠落した部分を庇う動きをするほどに。だがそうであってもシールは、冷静に、丁寧に距離をとる。視野に五体の幻が全て映る所まで移動し、封印の剣を生み、振るう。
「【封断・五式】」
　一薙ぎで全ての幻を捕らえ、切り裂いた。幻はその胴体から分断され、淡く揺ぐ。
　だが、そのまま消え去ってしまうものと思えば、揺らぎは小さくなり、更には分断された体が修復されていく。数瞬の内に元に戻ってしまったのだ。
「へえ」

シールは再生した幻影に狙われぬよう、更に距離をとる。
　消えぬ幻。存在するマナを絶とうと、絶え間なく注がれる魔力と術で消える事はない。シールがどれだけマナを喰らう剣を突きたてても、少年の幻影は憎らしい笑みを浮かべながらシールへと纏わりつく。
　流石にこの特別製の幻影は、先のように大量に操る事は出来ないが、大量の幻もまとめて薙ぎ払えるシールには此方の方が有効なのは確かだった。
「なるほど、厄介だ」
　シールもまたそう納得し、そして瞬時に判断を下した。
　五方向から統合性のないバラバラの動きで迫り来る中、それらを避け、跳び、背後に構える本体を視野に捕らえる。封印剣を構え、その剣先を向けた。
「【伸】」
　封印の術式が一気に伸長する。それは雷のような速度でミラリアの体を貫いた。
「おっと？」
　だが、次の瞬間、本体であった筈のミラリアの体が歪み、消える。
　幻であり、囮なのだとシールが悟る、次の瞬間。
「ッハハハハ！」
　シールの背後、膨大な殺意と共に少年の甲高い笑い声が響く。直後にシールに呪具の剣がその背中に叩き込また。
「【呪われろぉお!!】」
　憎悪の咆哮。邪悪な色をした剣が更に妖しく閃き、死霊の悲鳴にも似た魔術の発動音と共に、対象に呪いを宿そうと術式を刻んだ。
　しかし、
「【封印】」
「っな!?」
　リーンと同じように蝕む筈だった呪いは、次の瞬間、消え去った。剣の傷すらも飲み込まれ、まるで一切の痕跡すらも残す事はなかった。故に衝撃を受け、膠着したミラリアと、あえて受ける選択をとった事で、迷いを消したシール。その後の動きの差は歴然だった。
「【封断・斬魔】」

構えていた紅の剣が更に輝きを増す。魔力を更に上乗せされ、その色を深めた剣は、赤の光を引いてミラリアへと鋭く閃く。
「ふっざけろっぉぉお!!」
一瞬の硬直を解き、ミラリアは身体を捻る。だがやはり完全に距離をとるには時間が足りない。故に彼は、無事の体を庇い、断たれた腕を前へと差し出した。盾とする為に。
「ぎぃい!?」
腕を断たれたミラリアは悲鳴を上げる。だが、次の瞬間には距離を大きくとる。切り傷一つで今の一瞬を切り抜けた。その事実にミラリアは一瞬安堵したが、腕を包む激痛に、再び現実に戻された。
「……なに？」
腕を見ると、先にシールに刻まれた腕が、そのままでいる。通常の人間なら何もおかしなことはないが、彼は再生者だ。それなのに一切の治癒が行われていない。ダラダラと血が流れ、痛みが徐々に強くなる。
シールを睨むと、彼はしれとした表情で、紅の剣は振るい、
「君の、再生力のラインを封印した」
「ふう……いん？」
言葉と共にシールが、回復不可の一刀を構える。
「再生能力は強力だけど、それ故に、防御が疎かだね。基本も出来てはいない」
だから、その再生力を奪えば、君は城内の騎士達よりも脆くなる
シールはそう言葉を告げ、そして突撃した。
ミラリアは応じ、呪いを喰われた短剣を捨て、新たに短刀を引き抜く。呪い自体は耳につけている呪具から発せられるため、リーンへの呪いはまだ継続されている。故に短剣を捨てても問題は無い。だが新たに引き抜いた剣でも封印剣を防ぐ事は出来ない。物質封印の剣は、どんな物質も喰らい切り裂く絶対貫通は脅威だった。
剣で受ければ此方の武器を破壊される。だがその身に受ければ命を削られる。結果、回避の一手しかなくなり、ミラリアの動きは限定される。
その先をシールは狙い、討つべく動いていた。
「【封印開放】」

シールから逃れるようにミラリアが動いた先に、封印術式が既に発動していた。それはマナを奪うものではなかった。術式が蠢き、そして閃く。それは光に変わり、そして封じられていたモノが開放される

現れたのは、輝く白い十字の剣。それは美しく、破滅的だった。

「【堕天の宝剣】」

そしてシールの言葉と共に、それは煌々とした光を放ち、破壊を孕む衝撃を放った。

「ちぃい!!」

ミラリアは己が特性、命の貯蔵庫から強化した魔力を引きずり出し、灼熱の光を放つ。魔剣の烈光と、己の熱光がぶつかり合い、弾け、爆発した。

「がぁああ!!?」

その破壊力に、軽い彼の身体は吹き飛ぶ。光と爆音、そして衝撃と痛みに意識を遠のかせながらも意識を奮い立たせ、足を地面に叩きつけ、姿勢を整える

だがその直後、剣を構えるシールの気配が、死角から

「背後!?」

「【封断】」

首を狙う一撃。ミラリアは光に弾き飛ばされた身体を無理矢理に捻り曲げ、絶対貫通の封断剣を紙一重で回避する。その通り、回避は成った。

「っ!?」

「左足」

致命の一撃に隠した一閃に、左足を犠牲にする事で、

「ぎぃぃいい!?」

激痛に悲鳴を上げ、しかし震えを堪え崩壊した封断剣を振り払った。無事な右足で距離をとる。だが貫かれた左足は、先に裂かれた腕と同じく、治癒は働かない。回復のラインを断ち切られた。

「さて、機動力も奪ったね」

シールは首を傾け、静かな笑みを浮かべた。

「次は左手かな？ それでも右足？ 何処を削ろうか」

穏やかな口調で、優しげな瞳で、残虐な言葉を語り掛ける平和主義者。

最早、無理に笑みを浮かべる事も出来ない。目の前の殺戮者がおぞまし過ぎ

た。
　腕と片目を失い、癒えぬ傷を付けられ、機動力まで奪われた。其処から更に、確実に此方の命が削られていく。追い詰められていく。ただただ敵を殺すためにのみ磨がれた刃は、確実に此方の喉を喰らおうとしていた。時間がたてばたつほど此方が不利になっていく。
　早く、早く何とかしなければ
　追い詰められていく事実が、頭をかき乱す。
　命を着実に握り締められていくその現実に、彼は初めて恐怖していた。
　だが、それとは別に、どうしても理解できない疑念が、彼の頭の何処かで渦巻いていた。
　確かに目の前の男は、恐ろしく強かだ。命を賭けるこの場においてもまるで焦る事は無く、此方の命を奪い取る為だけに動く。途方もない練磨と、命を賭して戦い続けた、殺戮の到達者。
　しかし、それとはまったく別の脅威、もう一つの側面。
　何故呪いを喰らえる？
　彼は知らない。以前、彼の仲間が【呪いの精霊】をシールにけしかけ、しかしその【呪いのマナ】をシールに喰らわれ、反撃を受けたと言う事を。意図的に、その情報を教えられていなかった。
　故にミラリアは戦慄し、そして考える。
　魔武器を自らに閉じ込める力、呪いを自らに封じ喰らう力。相手の魔術回路を封じる力
　封印とは、容易い魔術ではない。万能の力を持ってはいない。魔術である以上、制約が其処には存在する。リーン・エリクスでも無い限り、それは確実だ。封印術なんていう繊細な術式なら尚更だ。元来それは、物質を留めるためだけの代物の筈なのだ
　つまり、結論は一つだ。
　彼が扱っている【封印術】は【封印術】ではない。
　確かにその基本は、封印術の特性と変わりない。だがその奥の奥、何かが、あるいは何もかもが、違う。どこかに異能が存在する
　それを知らなければ逃れられない。勝つことができない。

傷を負い、しかし警戒からミラリアは動きを止める。シールは当然それを待つ。

　生まれた両者の沈黙、それは暫く続き、しかし予期せぬ形でそれは崩れる。

「【結界発動】」

　その響かせた声は、シールのものでも、ましてミラリアのものでもなかった。もっと年老いた男の声、落ち着いた中年の声だった。そしてその魔言と同時に、眩い光が部屋中に放たれる。
「あぁ?!」
「……これは」
　瞬間、シールの両手に備えた封印術式が、呆気なく崩壊した
　結界、そう、特殊な力もないただひたすら、マナで満たされた結界が謁見の間に敷かれたのだ。害の無い筈のその効力は、しかしシールの特殊すぎる戦術に大きく影響を与え、狂わせる。彼の封印術は、マナで完全に満たされる空間においては形を維持することもままならない。
　声のした方へと彼が顔を向ければ、
「何をしている、ミラリア。さあ、行け」
　医者が、否、偽の王を癒した偽の医者が、そう言って笑っていた。その手には魔具を、この謁見の間に〝
仕込んでいた代物〟を起動するための魔具を備えて、そして、その声と同時に、ミラリアは獰猛な笑みを浮かべ、飛び出した。武器の一切を失い、無防備となった彼への最後の好機と思ったのだ。
　そしてその瞬間、彼はついさっきまでの思考を破却した。シールベルトに対しての違和感。もう一つの脅威の側面。その思考を放棄した。それは本質が戦士である彼の思考回路からすれば、当然の帰結だった。
　だが、それ故に、彼は、失敗した。

「なるほど、〝これ〟か。狙いだった、と」

　シールは、侮蔑を滲ませた声を発し、

　そして、その次の瞬間、ミラリアの全身は弾け飛び

「素晴らしい」

　偽医者は、感嘆の声を上げた。

第九十八話 不可侵の白王と狂信者の望み

「急げ！ 王とリーンさんを安全な場所まで！」
　ニーニウは意識の無いリーンと王を引きつれ、王城の中を走り回っていた。
　今回の事件で不当に捕らえられた者達を助けるダルシアの部隊と分かれ、ニーニウは護衛の任務を担っていた。だが、本来逃げ込む先であるはずの王城で、何故逃げ回る嵌めになっていた。
　理由は単純で、城内の何処からか、敵が襲ってくるのだ
　黒い布で顔を隠した、宗教で使われそうな奇怪な衣装に身を包んだ謎の戦士達。噂に聞く、封印を解いて周る謎の集団、イングラムが部下の鍛錬を決意させたその戦士達が、城内に唐突に姿を現したのだ。
「邪魔だ!!」
　槍を薙ぎ、魔術で焼き払う。部下達と共にそれを繰り返す。
　敵の数は少ないが、よほど強固な魔具を備えているのか、倒しても倒しても繰り返し起き上がり、攻撃を仕掛けてくる。異様なほどのしぶとさだった。既に致命の一撃を与えている筈なのにだ。
「……!!」
「し・つ・こ・い!!」
　腹を貫き、それでも尚立ち上がろうとした敵兵に、焔の槍を鋭く突き出し地面に縫いとめる。暫く身悶えたが、それでも数秒もすれば動きを止めた。周りを見れば、他の部下達も敵兵を始末する事は出来たようだ。
　だがまた新たに出現しないとは限らない。その前に城外に出た方が良いだろうか？
　城から逃げると言うなんて発想、騎士にあるまじきものだが、王やリーン、他の要職の人々をこの場で危険な目に合わせる訳にはいかない。
「ん?!」

だが、そう決断したその最中に、一人、別の影が廊下の奥から現れた。
「待て！　お前は……！」
静止を呼びかけるが、相手は動きを止めない。医者の姿をした男だ。
ニーニウは彼が偽者である事は教えられていない。だが、この戦闘地域にわざわざ突撃する不審な挙動。状況を考えれば、彼が、今城内で暴れてる敵達と〝同じ〟だと直ぐに察した。
故に、彼女は今の戦闘で怪我をした腕を振るい、血の媒介を開放する。
「【炎蛇！】」
炎の蛇を呼び出した。戦闘の連続で、肉体の疲労とは別に彼女の精神は冴え渡っている。魔術の創造は鋭く、湧き上がった蛇が瞬時に医者へと牙を剥いた。
だが、現出した焔の蛇は、男にその牙を剥く前に、
「【呪われよ我が敵】」
蛇の炎は、突如生まれた闇にのまれ、まるで腐るようにして地面に堕ちた。
「これは……！」
コイツは、〝特別製〟だ。
ニーニウはそれを悟り、槍を真っ直ぐに向け、直接的な攻撃を繰り出そうと構えた。しかしそれよりも偽医者の動きは速い。先に蛇を堕とした時と同じく、指で胸元にある〝逆三角の胸飾り〟を翳し
「【呪いは主に伝播する】」
黒紫の光がうずまく。それは燃え尽きようとした焔の蛇に纏わり、瞬いた。数瞬の後、地に伏した腐り爛れた蛇が暗闇を纏い、起き上がった。
主であるニーニウへと牙を剥いて、
「っ【炎蛇ぁ！】」
向かう黒蛇に新たな焔の蛇を繰り出す。シールとの鍛錬の記憶から、権限を奪われたと判断し、それ故にニーニウは自らの魔術で相殺する事を選んだ。間もなく二つの蛇は衝突した。
一方は火の粉、しかしもう一方は〝腐り爛れたマナ〟を
「なんだ⁉」
黒蛇から撒き散らされた黒のマナはニーニウの腕に纏わりついた。まるで這いつく虫の様に、そのマナは彼女の篭手を越して、腕に激痛を与えた。

「ぐ、ぁ、ぁ!?」
　そのマナは、かつての〝何処かの村で生まれたマナの動き〟に似ていた。しかし彼女はそれを知るよしもない。ニーニウは激痛に歯を食いしばり、しかし自らの任務を果たすため、
「っ王を守れ！」
　黒く爛れた腕を押さえ込み、そう咄嗟に叫んだ。それは彼女が騎士としての役割を果たすためだった。王を守る。その使命の為だ。だがその指示を聞いた偽医者はニヤリと笑みを浮かべ、
「ふむ、都合の良い」
　偽医者はリーンを超え、しかし守りを固めた王へと動くのではなく、逆の、手薄となった方へと向かっていった。それは、
「な!?」
　リーン・エリクス。偽医者の狙いは彼女だった。数を減らした守護兵士達を、先の黒の魔術を叩き込み、落し、未だ呪いに解かれぬ彼女に手を伸ばし、その首に手をかけた。
　そして、ナイフを構え首に突き立てると、
「動くなぁ!!」
　叫んだ。だがその声はニーニウたちに向けられたものではなかった。彼の視線は、彼女等の先、ニーニウの背後だった。
「え？」
　疑問と共に彼女は背後へと視線を向けた。そして、そこにいたのは、
「シール、さん？」
　彼の名を呟き、しかし頭に過ぎったのは疑問だ。
　それは理解できぬものを見たときの呆然に近かった。
　その顔は、姿は、確かに彼、シールベルトだった。この国の英雄であり、昨晩追い掛け回した相手であり、ついさっき、自らの無罪を証明した彼に違いは無かった。
　しかし、それまで確認していた彼の姿とは決定的な違和感があった。
　光、という表現で正しいのだろうか。それが彼の体の周りをのたうっている。
　彼の身体の内から発せられているような淡い白の光と、それを縛るように奔る

黒い光が十字に交わっていた。更には、その上から多重の光が重なりかかっていた。
「な、なに？」
　ニーニウは、彼のその状況が何なのか全く理解できなかった。だが、それがまともなものではない事だけは、理解出来ていた。
「『やれ、やれ】」
　その声色はシールのソレと同じだったが、奇妙な響きを伴っていた。彼は、その光の内に奇妙な威圧感をめぐらせながら、一歩ずつ、偽医者に近づいていった。、
「動くな」
　偽医者は、リーンに切っ先を近づけ、リーンはそれに抗う事をしない。未だ、呪いの影響下にあることがわかった。シールはそんな彼女の様子に首を傾け、掌を広げる。其処には先に彼が戦っていた少年、ミラリアが身につけていた耳飾が、砕けて其処にあった。
「『呪具は破壊した筈なんだけどな】」
「別に、呪具の大本が一つだけとは限らない。第一〝魔帝〟を封じる要を一人に集中させる訳が無いでしょう？」
　そもそも、あのミラリアが意識を失っていた間、常に魔力を必要とするはずの呪具は持続しない筈だった。だが、その供給の窓口が二つあればその問題も解決する。
　へえ、と、シールは奇妙な響きのままに呟きで、
「『……その呪具はひょっとして、あの村で研究してきたものかな？】」
「ええ、魔術と呪いのマナの合成です。素晴らしいでしょう？」
　そう、と、シールはつまらなそうにそう言い、砕けた耳飾を捨てた。身体に纏わりつくその光は時折強く光り、シールの表情を歪めさせた。
　偽医者はそんな彼を見て、哂い、
「辛そうですね。その【束縛】は」
「『お陰さまで。肩が凝りそうだよ】」
　シールは、息を殺すように、大きく息を吐いた。すると偽医者は唐突に、
「【矢を成せ呪いよ】」

呪いの魔術を生み出し、それを矢を放つようにして、振り下ろされた。それに対してシールは、掌を広げ、言葉を紡ぐ。それは詠唱ではなく、単なる名前。
　自らの内にある、王の名
「『不』『可』『侵』『の』『白王』」
　メキリと世界にヒビが入る音がした。そして次の瞬間、僅かに黒の光が弾かれ、その隙を突くように白の光が強く放たれる。その光は、シールの身体に飛び掛る呪いのマナを、まるで砕くようにして弾き飛ばした。
「『……ぐ】」
　だが、それと同時に、彼を纏う光の数は更に深く、重くなる。彼を罰するように、閉じ込めるようにして複雑に絡み合い、重い光を纏う。その様子を興味深そうに、偽医者は観察した。
「その力を振るえば振るうほど、【束縛】は強くなる」
　歌うようにしてそう語り、そしてシールに視線を向ける。
「復讐したくありませんか？　　そんな人の身に過ぎた、厄介な代物を無理矢理〝押し付けた〟愚者どもに。そして被害者である貴方を理不尽に束縛する〝神達〟に」
　偽医者は、どこか哀れみを滲ませるような声色で、シールに語りかける。だが、シールは苦々しい笑みを浮かべ、
「『悪いけど、復讐なんてめんどくさい事、やる根気が無くてね】」
　勧誘と取れるその言葉に対して、そう拒絶した。その拒絶の答えを予測していたのだろう。偽医者はそうですか、と呆気なく答え、平然とした表情を保ったまま、リーンに改めてナイフを突きつけた。
「貴方に押し付けられた〝力〟は究極に近い。が、幾重もの鎖でつながれた上、その精神の尽く人のそれだ。故に、その力は人の許容の範囲でしか振舞えない」
　人の精神であるが故に、〝人質〟という存在が意味を発生する。もし精神まで神であるなら、そんな意味はない。容赦なく全てをなぎ払うだけだからだ。人であるが為に、人としてしか力は震えない。
　偽医者は、更に、と言葉を続け、
「究極の力とは、しかし無敵という訳ではない。そうでなければ貴方の中の〝ソレ〟は倒されなどしなかった。万能の存在など、この世に存在しない」

其処まで語り、偽医者は歪んだ笑みを浮かべた。それは残虐性の伴った、しかし自信と確信に満ち満ちた笑みだった。
「手段を考え、選び、そして極めれば、神など容易く殺せる。貴方達を追い込むことが出来た今、それを確信しましたよ」
「『それが君達の望みかい？】」
　ええ、と、偽医者は頷いた。

「怠惰な神達を殺し、真なる存在を生み出す。我等が神、【ラグナ】を」

　神殺しを確信の声と共に宣告する彼の狂気は、その場にいた者全てを戦慄させた。確かにこの世に神はいる。想像上のものではなく、明確に存在する神が。だからこそエレナのように加護を受ける者がいる
　それを殺すという発想など、聞いた事も無い。理解できぬ者への恐怖だった。
　シールは、その答えに、静かに息をつき、
「『一つ、言っておこうか】」
　言葉を紡ぎ、
「『神を殺す。随分と凄い目標だ。だけど】」
　更に続け、
「『上ばかり見上げていたら、足元をすくわれるよ？】」
　次の瞬間だった。
　マナの震えと共に、彼の背後から唐突に、メザイヤと共にイングラムが現れたのは。
「なっ!?」
「行って！」
　魔術で姿を隠した二人は、気づかれると同時に魔術を放ち、剣を振り下ろした。
　偽医者は驚愕を顔に浮かべ、しかし、ほぼ反射的に、その身体を横にずらした。剣と魔術は彼の抱えるリーンをも掠め、しかし地面を空しく叩いた。偽医者は不意打ちを避ける安堵と無防備を晒したイングラム達への嘲りに笑みを浮かべ、

「【呪いよ──】」
　呪術を新たに生み出そうとし、しかし、
「行け!!」
　イングラムの声に、更にその背後から、ダルシアが現れる。偽医者へと振るう一撃は今までで最も鋭く、速い。だが、それでも、偽医者は嘲りを崩さず、
「その程度の奇襲がぁあ!!」
　呪いを溢れさせた。壁のように現れた呪いのマナは剣を飲み込み、腐り落す。更にそのままダルシアやイングラム、メザイヤをも巻き込もうとして、そして、
「ニーニウ!!」
　その、すべての背後から、腕を呪いに喰われ、故に口で焔を伴った槍咥えた女騎士が、偽医者へと振るった。リーンをも巻き込むほどに、全力で振るわれた一撃は、安堵に身体を緩ませた偽医者の隙を突いた。
「なあ!?」
　だがその一撃は胴を掠めるだけに留まった。無理な姿勢から繰り出された一撃は敵をを捕らえきることはなかった。故に今度こそ、凌ぎきったと偽医者は笑った。
　笑って、そして、気が付いた。
「は？」
　ニーニウの槍が、彼の首から賭けていた呪具を、的確に捉え、焼ききっていた事を。
　当然、その帰結は、
「───、あ」
　彼の腕で眠っていた、最強の魔女は目を覚ます。
「……え？」
　永い眠りから覚めた彼女は、ぎろりと、自らを拘束する男の顔を睨みつけ、

「【【【【【【【【【【【【【【【【【【【【】】】】】】】】】】】】】】】】

　最早それは〝歌〟ですらない。刹那、その刹那に込められた万の魔言は、周囲のマナを根こそぎ集約し、大気をも巻き込み、光をも歪め、世界をも喰らい、そ

れら全てを一点に集中させ──

「【【【【【【【【【【【【【【【【【【【蒼の果
て】】】】】】】】】】】】】】】】】】】】」

　その衝撃は、一瞬で牢獄城そのものを揺るがし、破壊しつくし、爆光を放出させた。蒼の光は彼方の空まで貫き、遥か高くを漂う雲すら弾いて消し飛ばした。当然、その光の軌跡の間にあったものは、跡形すら残さず、偽医者は、この世に一切の痕跡すら残さず、消滅した。
「……うあ、」
　ニーニウは呻いた、それは絶句に近い。
　壁が、根こそぎ消えてなくなっていた。穴と言うには大きすぎる破砕の跡に、既に空高くに昇った太陽の光を広く広く取り込んだ。一面を崩壊しつくした古城、そこに差し込む陽光の情景は、事の終焉を語るようで、美しかった。
「……」
　そんな光景を生み出したリーンは、拘束具をずるりと外しながら、シールの元へと近づいた。そして、昨日からシールが身に纏っている勇者の紋章の刻まれた衣服の中心に指を合わせ、
「【【【【【【【【【【【【【戒めよ】】】】】】】】】】】】】」
　彼女の言葉と共に、勇者の紋章が黒い光を放ち、彼の体から溢れようとしていた白の光が、その周囲で波打っていた黒の光と共に集約し、次の瞬間には、
「……はあ、きつかった」
　シールの姿は、元の、単なる柔和な笑みの青年の姿に戻っていた。彼は肩をゆっくりとまわして大きく伸びをすると、ふらりと、そのまま此方に倒れこむ彼女を支え、
「やあ、リーン先生、気分はどうですか？」
「お腹、減りました」
「何か食べたいものはあります？ 僕も腹が減って」
「甘いものを」
「流石に空きっ腹にいきなり糖分ぶち込みたくありません。食堂いきましょう

か」
そう話しを終え、周りにいる皆を見渡して、
「うん、みんな、それじゃ、おつかれ」
　そう言って、さわやかに笑みを浮かべると、そのままリーンを抱えて去っていった。全員、いやちょっと待て、と引き止めたかったが、彼の背中からは、今は頼むから、休ませろ
　そんな意思が伝わってくる背を前に、ダルシアもイングラムメザイヤもニーニウも、誰一人声をかけることも出来なかった。ただただ、疲労をにじませたなんとも言葉にしがたい今の気持ちを苦い笑みに変えて、彼らを見送った。

第九十九話 ガイディア王誘拐および殺人未遂事件 その結末

　オルフェス学院、学院長室。
「シールベルトとリーン・エリクスを罰しないと⁉ どういう事です‼」
　怒声が、部屋の中で響き渡る。部屋にいる人影の内、顔を赤々とさせて怒りを爆発させているのは、ガイディア国での要職に就く者達。中には大臣職に就くものもいた。そしてそんな彼らに相対するのは、このオルフェス学院の学院長だ。
　怒りを爆発させる男達は、息を大きく吸って、再び怒声を発した
「あの者達は我が国の戦力に大幅な損害を与えた！　どれほどの騎士達が傷ついたか！」
「国王を守る為にね」
　ミストは平然とそう返すと、一瞬、男達は言葉を詰まらせ、しかし更に声を荒げ、
「もっとやりようがあったと言ってるんですよ‼」
「ならそれを君達がやればよかったじゃない」
　ミストは自分専用に用意された小型の高級ソファーにゆっくりと身体を預け、そして目の前の男達を見据えた。
「今回の件は城内の反逆者が出てしまったのが根本の原因だ。その始末を他人に任せておいて、終わってから『やり方が納得できない』なんて、都合が良すぎるとは思わない？」
「し、しかし！」
「大体、おかしな話だよね。いくら秘密裏に進められていたとはいえ、常にあらゆる情報が流れてくる君達が何もかも気づかないなんて事はないよね？　普通は」
　そう言って、目の前にいる男達を、学院長は睨みつける。子供の姿をしながらも、発せられる彼の圧力は、威勢良く吼えていた彼らの勢いを削ぎきり、沈黙を

強いた。
　そう、今回の事件、いくら秘密裏に動いていようとも、城内にいる者達が気づいた計画に、同じ場所で過ごしている者達が気づかない訳が無い。計画そのものは気づかずとも、その〝気配〟を察せた者はいた筈だ。
　では何故事件がこうも完全な形で起こったのか
　一つの原因として、そうした事件を察したものが、その事件を都合が良いと思い、黙っていたのなら？　意図的にその〝気配〟を無視し、そして他のものに気づかれないようにしたのならどうだろうか。
「勿論、君達の中にそんな人たちがいるだなんて、僕はそんな事を思いたくないし、勿論君達だってそんなことしていないよねえ？」
「と、当然です」
「なら、良いんだよ。でも、もし違ったら、」
　そう言って、ミストは笑みを浮かべた。それは見た目だけなら子供の笑顔だったが、直視すれば得体の知れない恐怖を感じさせる、人外じみた笑みだった。
「保障はしない」
「なん、の？」
「全て」
　その一言に込められた言葉の意味を正しく理解できた者は独りもいないだろう。だが、その言葉に込められた不吉さは、その場にいる誰もが理解した。理解し、そして恐れ、怯えた。
「大体、君達は大きな勘違いをしている。僕が彼らを自由に従えるだなんて」
「で、ですが、貴方の部下なのでしょう？」
「僕は彼らと契約している。彼らにしか出来ない問題を解決してもらう変わりに、彼らの存在を、社会的な悪意から守ると」
　シールとリーン、あの二人は確かに強い。尋常でないほど。人としての枠を大きく逸脱し、たった一人で国家戦力のバランスすら崩してしまいかねないほどの力がある。〝暗黒時代〟に生まれてしまった怪物だ。
　そしてだからこそ彼らは自分の身の振り方を自由に出来ない。
　強い力を持つものは義務が生まれる。彼らは人々に要求される。「その力で、私達ができない事をしてくれ」「私達を守ってくれ」そう、要求されるのだ。そ

れは身勝手な言葉だが、世の真理でもある。力がある者が何もしようとせず、身勝手に振舞うのは、罪だ。怠慢と言う名の。
　それは、あらゆる意味での力を持つ、ミストが誰よりも理解している事でもある。
　そして彼の考えを、シールとリーンもまた、理解し、納得していた。しかし過去の経験からこれ以上、〝国〟に自らを預ける事だけは避けたかった。だからこそ、彼らはミストと契約したのだ。国王に並ぶ権力を持つミストに、自分達の身の振り方をゆだねた。そして自身の保障と、ある程度の自由を約束とし、ミストの配下となった
「彼らと僕等の関係は対等だ。彼らの願いを僕が遂行するからこそ、僕は彼らに命じる事が出来る。もし僕が彼らとの約束を破れば、彼らは平然と僕に牙を剥くだろう」
「それは……しかし、貴方なら」
「一人なら、でも彼らが僕に牙を剥く時は二人揃ってだろう。そうすれば一たまりもない。彼らはその凄まじい牙を誰に束縛されるでもなく自由に振り回すだろうね」
　もしそうなればどうなるか、分からぬ彼らではないだろう。つい先日、その二人に直属騎士団を翻弄され、振り回されたのだから。それも、大きく手心を加えられての結果だ。
「自分達が、何もかもを意のままに出来るだなんて、そんな救いようのない思い違いをしてはいけないよ？ ねえ、君達」
　ミストのその優しげな言葉に、役人達は今度こそ完全な沈黙を強いられた。そして間もなく、彼らはおざなりな礼と共に、学院長室を出て行った。
「やれやれ」
　彼らが出て行った後、ミストは大きく溜息をついて見せた。
　彼らの中には恐らく、先にミストが語っていた、わざと今回の事件を見過ごした者達がいるだろう。しかしそれらを罰する事はしない。何故なら、きりが無いからだ。
　国王は今、善政をしている。しかし国民にとっての善政とは大抵、支配者にとって旨みの少ない政治なのだ。当然敵は多くなり、王を疎ましく思うものは多

くなる。本当に、次から次に沸いて出てくるのだ。
それでもガイディア王が己が意思を貫いてこれたのは、彼を、ゲルダー家と、そしてオルフェス学院長であるミストが支持し、支援してきたからだ。
しかし、それでも限界は訪れる。周りの反対を押し切っての強行は、今まで権益を貪っていた役人達の不満を爆発させる。それは以前にも、〝有力貴族たちの反乱〟と言う形で暴走した。そして今回もまた、暗殺事件という形となって現れた。
国王を捕らえ、自分の配下とも言えるシールとリーンを貶める。王と自分、この二つを同時に押さえる。ゲルダー家のみでは押さえられないだろう。第三王子らは覇権を握っていた、かもしれない。
勿論、ミストが黙ってそんな事をさせるつもりはなかった。情報はミストに届かないように工夫がなされてはいたものの、〝そろそろ不満が爆発する〟そんな見立てが合ったからこそ、シール達を送り、そして結果を阻止する事に成功したのだ。
結果。かなり、ギリギリではあったが。シールとリーンを送ったのだって、殆ど〝カン〟に近いレベルでの判断だったのだ。シールにあの〝勇者の衣〟まで預けたのはやり過ぎかとも思いもしたが、今思えば本当に、渡しておいて幸いだった。
こんな面倒な事態、二度と起こって欲しくはない、とミストは肩を竦め、
「まあ、流石に、これ以降は同じような事は起こらないと思うけど……」
前回の反乱と、今回の暗殺未遂。これで、暗黒時代以降もしぶとく生き残っていた、腐敗した役人達も排除された。直接関わっていたであろう者達の尽くは捕まり、証拠がない者も関わっていたと思しき者は罰として財産を取り上げられ、閑職に追いやられた
残った者達は今回のように脅して押さえ込めるし、抜けた後釜には、若い人材が既に備えている。今回の事件の中心となった第三王子に至っては、そもそもミラリアによって受けた傷で絶対安静を余儀なくされた。最早彼が王座を担う事はないだろう。
ようやく〝掃除〟が出来た。ミストはそう、胸中で頷いた。
幸いだ。これで後は王の養生が済めば、この国は今まで以上に安定した、善政

が行われることだろう。〝暗黒時代〟からの回復が確かになる筈だ
　ただ今回の件は、〝シール達が城に向かったからこそ〟起きたのかもしれないが
「謎の宗教組織……ねえ？」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ガイディア城、資料保管庫
　イングラムとメザイヤ、二人は大量の資料を前にして、今回の事件についての事後処理作業を続けていた。今回の事件で、王を殺されかけ、更には敵兵を王城内まで侵入されていたという、言うなれば大失態を演じた彼らは、しかしその責任問題を追及されることはなかった。
　それは、そもそも今回の事件が身内の裏切りが原因であり、イングラム達の責任を追及し始めれば、更にもっと多くの、それこそこの国が一時的に麻痺してしまうくらいの人々が罰せられなければならなくなるからだ。
　何より、王が無事だったことが何よりの免罪となった。王は今、静かに養生している。意識も取り戻し、そしてその彼から、イングラムたちにこれからも頼むと、約束されたのだ。
「危険な者達から、国民を守り続けよ」
　最後に会った時の王の命を思い出し、イングラムはため息をついた。あの言葉は明らかな恩情だ。おろかな失敗をした自分たちへの。そして今、自分たちはここにいる。
「なんとも情けない。出来ればさっさと責任を取ってしまいたいが」
「そうもいかないでしょうね。これだけ仕事が残されてるんですから、それに……」
「【ラグナ】か……」
　今回の事件で、大量に裏切り者が出てきてしまったのは確かに問題だ。
　だが、それ以上に問題なのは、彼らに協力したもの。【ラグナ】とやらを崇める謎の組織。あそこまで不安定な計画を、成功の一歩手前まで導いたのは間違いなく、彼らだ。

彼らの信念は全く理解の出来ないものだった。〝神殺し〟なんて戯言を明言する時点で、正気が疑われるのは間違いないが、しかし単なる頭のおかしい宗教と笑うには、彼らの力は強力すぎた。
「あれだけの人外を生み出して、あれだけの戦力を保有して、その上、最近になるまでその存在自体が世間に知られ渡る事もなかった」
とんでもない組織力だ。それなのにその信念はまるで理解できない。だからこそ恐ろしい。せめて、今回の事件においての彼らの目的が分かれば、と調査を進めていくと、
「魔導研究機関から何らかの資料が強奪された形跡が合ったらしい」
魔導研究機関、第四魔導研究機関。この城内に在る魔導研究機関の一つではあるのだが、キワモノの研究ばかりする事で有名な、変人機関だ。同じ魔導研究者の一人でもあるメザイヤですら滅多に近づく事はないし、情報共有すらなされない。
そんな所に、あの【ラグナ】は侵入し、資料を強奪した形跡があったと報告された。
宝物庫や軍事機密の重要資料には一切手を触れていないのに、そのキワモノ機関には手を出し、そして資料を奪還した。国家転覆すらありうる事件を扇動しておきながらだ。
不吉だ。イングラムは胸中で呟いた。
「しかも研究者達は何が盗まれたのかも明かさないときてる」
「私にも、情報は届いていません。暗黒時代の資料らしく、慎重になっているそうで……、ただ、なんでも……」
そういって、僅かにメザイヤは顔を俯かせ、声を潜めて、
「シールに関係のある事のようです」
「シールの？」
ええ、とメザイヤは頷き、
「彼はミスト学院長の依頼で厄介なものを自信の身に捕らえ、封じています」
「つまり、その封印物の中のどれかの資料と言う事か？」
しかし、メザイヤはその問いに首を横に振った。
「そうではなく、彼の〝奥深くに存在する〟ものです」

そのメザイヤのぼかした言い方に、次の瞬間、イングラムの表情が固まり、僅かに青くなった。顎に当てていた手に拳を作り、強く強く握り締めた。メザイヤはそんな彼の様子に眉を潜め、
「大丈夫ですか？」
「……ああ、少し昔を思い出しただけだ」
　イングラムはそう言って首を振り、頭を掻き、そして大きく息を吸って、吐いた。そして表情を静かに引き締めた。
「もしソレが本当なら、本格的に【ラグナ】を対策しなければならないな」
　もし、事が本当ならば、ミスト学院長とも掛け合い、話し合わなければならない。その事をイングラムは視野に入れ、そしてそのためにも目の前の仕事に、より一層真剣に取り組み始めた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ガイディア国城下町、酒場ガラーナ
「さあ、しっかり掃除しなよ！　あんたら！」
　酒場ではケーナの鋭い声が響き渡っていた。彼女の指示の元、何時もの鎧を脱ぎ、普段着で動き回る騎士達が忙しなく、壊れた酒場を修理して回っていた。
　そして彼らの中にはガラムの姿もあり、彼は愚痴りながら、
「全く、何で俺まで……」
「酒場の破壊の半分はアンタが大暴れしたもんだからだよ！　この馬鹿亭主！」
　一言でガラムの抗議は瞬殺された。
　その後、ダーミル率いる騎士達に踏み荒らされ、中破壊されてしまっている家具を騎士達は必死に補修し続けていた。補修不可能なものは破棄され、代わりのテーブルや椅子が用意されていった。当然それらの代金もまた、騎士団から支払われている。
　別段、ガラムとケーナがそうしろと命じた訳でも要求した訳でもなかったのだが、しかし騎士達は彼らを巻き込んだことに責任を感じているのか、自ら進んで

この酒場の補修に進み出ていった。
　そして、その補修を行う騎士達の中には、ダルシアの姿もあった
　ガラムは自分よりも遥かに真面目に仕事をしている彼を物珍しそうに眺め、
「おう、お前騎士長なんだろ？ こんな所で仕事していていいのか？」
　彼の部下を叩きのめした結果、馬鹿げた喧嘩をした事もあってか、興味がわいての質問だった。対して、ダルシアは、大して表情を変えぬまま、ガラムの方を向いて、
「騎士達の多くが怪我を負い、〝呪い〟とやらの被害も甚大です。なので私も」
「真面目な奴だな。禿げるぞ将来」
　軽口にダルシアは軽く鼻で笑い応じた。ガラムは面白くなさそうな顔をして、ふと、思い出したように、
「そーいや、あの糞野郎はどうなったんだ？」
　糞野郎、なんていう言葉で彼の指し示す人物はダーミルただ一人だろう。ガラムは自分の妻をも巻き込み容赦なく暴力を振るったあの男を心の底から嫌悪していた。そしてそれは、その甥に当たるダルシアの前でも隠すことはしなかった。
　ダルシアはダルシアでその事をまるで気にしてはいないらしく、
「生きてはいますが、両腕を失い、足も重症。ついでに正気も失っています」
「正気ぃ？」
「リーンさんの暴走を目の当たりにしたらしく、恐怖のあまりに、らしいです。今もベットでずっと意味不明なことを喚いて寝てますよ」
「お前自分の叔父の事でよくまあそんな淡々とものが言えるな」
　本当に興味が無いような表情でそう語る。実際興味がないのだろう。ガラムとて同じだが、自業自得というには哀れにも思えた。ほんの少しだが。しかし、ダルシアは肩を竦め、
「常識を振舞って感心するような相手が前ならそうしますよ」
「いや、本当、驚くほど可愛げがねえのなお前」
　知っています。と、これまたダルシアはつまらない返事をした。どこまでも冷静沈着、精々最初の、部下を傷つけあれた時の激昂意外はまるで感情を動かさないこの男に、ガラムはつまらなそうな顔をした。なにか、一つでもこの男の顔色が変わる所が見れなければ楽しくない。

と、そこでふと、彼の気を引けそうな話題を一つ、思い出した。
「でも、そんなお前等でもシールにはボコボコにされたんだってな？」
つまらん挑発だとは知っているし、他人の話を引き合いに相手を挑発するなどみみっちい気もするが、しかし彼は基本、相手がからかえればそれでいい。そんなくだらない性格をしている所がある。
そして何故か、そう言うところが彼に不思議な縁を結び付けたりもするのだ。冗談ととればそのまま馬鹿話になる。喧嘩を売られてるととれば、喧嘩して、そのまま仲が良くもなる。中にはそのどちらともとれずひたすらソリが合わない奴もいるが。例えばかつてのイングラムとはそんな感じだった。喧嘩にすらならず、すれ違いっぱなしだった記憶もある。そう言う場合も勿論ある
ところが、ダルシアはそのどれとも違う反応が帰ってきた。
「ええ、本当に、ものの見事に、叩きのめされました」
そう認め、そして、非常に嬉しそうに、笑みを浮かべたのだ。ガラムはそんな反応に目を丸くした。流石に挑発に対して喜びという反応が返ってくるとは思いもしなかった。
「何だお前。マゾか？」
そう聞くと、違いますよ、と首を振り、
「かつて、貴族の反乱が起こったとき、シールとリーン・エリクスが鎮圧しましたね」
「ああ、ひでえ騒ぎだったな、あれ」
「あの時、彼らが襲撃した貴族の屋敷に、私もいたんです」
ダルシアは思い出す。
あの頃は未だ、ルジア家も多大な力を有していた。そしてそれ故に父達は更なる野心を滾らせて、周囲の家と共同して王を討とうとしていたのだ。その集会、表向きには単なる社交パーティの場に、当時子供だったダルシアは呼ばれていた。
そしてその場を、シールベルトとリーン・エリクスがぶち壊したのだ。
それはかつての上記族の反乱を察知したガイディア王の速攻だった。それ故に容赦は微塵も無く、一方的に貴族達は蹂躙された。そして父達は後続で訪れた騎士達に討たれたのだ。

そして、それから間もなくルジア家が崩壊した。彼の家はボロボロになり、ものの見事に没落した。だが、彼はそんな事はどうでもよかった。

その悲鳴飛び交う集会の真っ只中、ダルシアはずっとシール達を見ていた。自分と少ししか年の違わない子供。その少年が、父が自慢げに見せ付けていた私兵たちを蹴散らしていくその姿、彼が好きだった英雄譚、勇者譚の主人公達の姿と、その彼の姿が、ぴったりと一致して見せた。

シール達が自身の父を討った直接の原因だと知っていても、全くもってかまわなかった。彼はひたすらに権力を追い求める父達と、ルジア家と決定的に合わなかったのだ。

だから彼は没落し恨み言を喚き続けるダーミルらを無視し、鍛錬を続け、ついには国王直属騎士に抜擢された。だから彼は今ここにいる。

「じゃ、なんでお前シールを追っかけまわしたんだよ。最後は協力したらしいけどよ」

「かつての英雄にどれほど近づけたのか調べたくて。とても楽しかった」

そう語る彼の姿は、冷静な表情に似合わず、どこか恍惚としていた。

「……滅茶苦茶歪んだ奴だな。お前」

「知ってます」

さらっとそう言うダルシアにガラムはげんなりとした顔をして見せた。この歪み切った男とはどうにもソリが合わないらしい。嫌いな奴ではないが、どうにも会話が成立しない。

ガラムは話を切り替える為に頭を掻いて、

「そういや、その当人、シール達は何処行ったんだよ」

「教師の仕事があると学院に。お二人には世話になったと。後日礼を言いに行くとも」

「お前らが来たらまたえらい事になるから止めてくれって言っとけ」

そんな軽口をたたきつつ、ケーナに怒鳴られぬよう、仕事を再開した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

オルフェス学院、教務室。

「あれだけ酷い事件に巻き込まれたのに、学院に帰ったら即仕事ですか」
「教師は大変ですねえ……」
　シールとリーンは、他の教師達が既に帰ってしまった教務室の中で、たまりにたまっていた子供達の小テストの答えあわせを進めていた。
　自分達が休んでいる間に、他の教師達が進めてくれていた分のテスト内容だ。当然、どの辺りまで進めてくれていたのか理解しなければならない。日数だけなら精々数日間だけだが、それでもしっかり把握しておかなければ教師の仕事は出来ない。
　流石にあれだけの事件が起きた後にというのは苦痛ではあるようだが、こうした仕事に対して手を抜く訳には行かない。
「ああ、また、ミーナが同じミスを。今度補習ですね」
「うん、マリは勉強頑張ったね。パームは此処の基礎、教えた筈なんだけどなあ」
　二人は生徒達の回答を前にして、教師らしい言葉と共に採点を続け、唸ったり、納得したりしていた。そうしている姿は普通の、若い教師の二人としか見えない。しかし彼らは確かに先日、直属騎士達を振り回し、王の暗殺者を叩きのめし、牢獄城そのものを半壊させた張本人でもある。もし彼らに打ちのめされた騎士達がこの光景を見れば、自分の眼が腐ったのだと本気で疑いにかかってしまうだろう、そんな不思議な光景でもあった。
　そんな不思議空間を生み出しながらテスト採点を続けていた彼らは、しかしやはり、疲れてはいるのだろう。暫くするとどちらがという訳でもなく、大きく息をついて、軽く採点の筆を止めた。
　そして、そのまま前を向いて、
「リーン先生は、呪いを受けた身体は大丈夫なんですか？」
　まずはシールが語りかけた。リーンは僅かに体をさすり、
「メリアに治してもらいました。散々怒鳴られましたが」
「ああ、僕も怒られました」
　何故功績を表彰される筈なのにそんな怪我を負っているのだと罵られたが、しかしそれは本人達が一番問いただしたい問題だろう。何故自分達がこんな目に合っているのかと。

「結構呪いの影響、酷いと聞いているんですけど？」
「暫く安静にと言われていますが、問題はありません」
　リーンは素っ気無くそう言う。彼女がそう断言し、メリアが彼女を自由にさせている以上、確かに大丈夫ではあるのだろう。そう理解しながらも、シールは彼女に向き合った。
　何時も通り、まるで表情を動かさない、彼女の端整な顔は、しかし何処か僅かに疲れていた。頬を撫でるとわずかにこそばゆいのか目を細める。そしてシールは、そのままゆっくりと、彼女の頭を胸元に寄せ、抱きしめた。
「……くるしいです」
　抗議にしては小さなその声に、シールはすみません、と謝った。それでも彼女を抱きしめる事は止めはしなかった。自分でも、どうしてそうしているのか分からぬままに、シールは、自分の心中の言葉をそのまま呟いた。
「ああ、よかった」
　気づけば、声が震えていた。暫くしてそれが恐怖から解かれた震えだと気が付いた。自分の腕の中で彼女が存在している事が、これ程までに安堵を得るものとは思っても見なかった。
「リーン先生」
「なんです？」
「いなくならないでくださいね」
　声はまたも、震えていた。それも今度は怯えを孕んだ震えだ。
　リーンは小さく息をつき、
「人は、急にいなくなったりしませんよ」
「嘘だ」
　シールはそう言って、より強く彼女を抱きしめた。彼女の言葉は嘘だ。人はいなくなる。あっという間に、手の届かない所にいってしまうのだ。それは、彼は良く分かっていた。
　だから、今回は本当に、恐ろしかった。
「消えないでください。お願いだから、いなくならないでください」
「約束を守れと言ったのは貴方でしょう。だから、いなくなったりしませんよ」
　リーンは、彼の抱擁をただ受け入れ、そのまま静かに瞳を閉じた。

その二人の姿は、シールが自らに損なわれている物と諦めた、愛の体現に他ならないものだと、彼はその時は気づく事はなかった。ただ、腕の中にある彼女と、胸中にある平穏、その幸福を噛み締めていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　深い闇に紛れ、何も見えなくなってしまうような、そんな何処かの奥深くにて
「それで、今回の実験と横奪は上手くいった、と」
「呪術はかの実験の副産物でありましたが、しかし戦力になると証明できました」
　闇には男がいた。狭い部屋、まるで街外れの妖しげな魔術道具店のような、小さな研究室。様々な色の薬品、魔物の生首、おおよその一般人が想像しうる魔女の工房、その体現のような場所の中央には、一人の男がいた。灯りが小さく、そのために年齢は不詳だが、しかしその声は、まだ若々しさがあった。
　そして、その彼に語るのは、一人の女。彼女の姿をガイディア城の者がみれば、それがあの騒乱の中で、かの〝偽医者〟を手伝っていた〝看護士〟であると気づいたものもいただろう。
　彼女は闇にいる男に向かい、頭を下げ、
「奪還した資料は此処に」
　そう言って彼女が渡したのは、イングラム達が話していた資料。魔導研究機関から、あの騒動に乗じて奪った資料の束だった。その拍子には、でかでかと書かれた警告文と共に、タイトルが書かれていた。
『不可侵の白王』ただその一文が書かれていた。
　男は、その資料を眺め、僅かに感嘆の声を漏らし、
「かの〝封印術士〟はどれほどのものだった？」

女は、僅かに目を細め、
「人間でした。あれは。救いようのないほどに」
男は、そうか、と言葉を返し、
「ならば、やはり、彼をアテにする訳には行かないか」
「もとよりそのつもりはないのでしょう？」
「勿論。我等は我等の力で完成させる。我等の目的を」
「我等が神、【ラグナ】を」
「そうだ」
宗教、というにはあまりにも組織じみたやりとりをしてみせる彼らは、しかし間違いなく、イングラムたちが警戒する【ラグナ】そのものだった。
「では私は新たな任務を」
「任せよう。我等が神、【ラグナ】の加護を」
「【ラグナ】の加護を」
そんな短いやり取りの後、女は背後の闇に消え、その狭い研究室には男が一人残された。彼は、女に渡された資料を眺め、僅かに笑みを浮かべ、
「さあ、研究を続けよう。我等が神の為に」
どこかその声には、自らの台詞に対しての皮肉にも似た嘲りが混じっていた。

と、言うわけで、長きに続いた牢獄城編、ここに完結です。
……な、長かった。まさかこの牢獄城編書き始めてからほぼ一年近くになるまで書き続けることになろうとは全く思いもしていなかった。牢獄編最初と今とで文章の書き方がぜんぜん違うような気が（笑
学園ものなのに全く学園が絡まない珍事。こんな話に皆さん本当に今まで付き合ってくださってありがとうございました。とりあえず次回から学園に舞台は戻ります。エレナもちゃんと出てきますのでどうかご安心を。
しかし、色々気になるところの修正もしていかないとでもあるんですよねえ……貧乏の方も続き書かなければ……まあ、おいおい、徐々に徐々にやっていくつもりです。その分執筆が遅くなるかもしれませんがね！（えー
よろしければ、これからもどうかお付き合いください。それでは

学院黙示録編 大改編のお知らせ⇒完了

　あけましておめでとうございます……おっそいですねすいません
　お久しぶりです　ずっと更新していなくてすいません　 そして更新ではありませんごめんなさい。
　今まで更新がなかった間なにをしていたのかというと、ずっと学園黙示録編を改文していました。
　いや……最初は誤字を見なおそうと思っていたのですが
・あーここはやっぱこういうのも書かなきゃいけないよなー難しそうだからって逃げちゃったんだよな
　↓
・あれ、ここも書き足したほうがよくね。つーか書かなきゃだめじゃね？
　↓
・でもこうすると前後の文章がおかしくなるしなー
　↓
□……
　結果、全文一から書き直しという事態に……ええ、馬鹿ですね
　というわけで、その書き直しがようやく完成したわけです。しかしあくまでも今まで読んでくれた人が苦労しないようこの黙示録編の前後とのつながりは問題ありません。
　この修正をしたからといって読み直す必要はないということです。もちろん、新規のストーリーもあるのでできれば読んでくださればうれしいですが
　ただいきなり変更すると混乱を招く可能性があるため、明日の一／一五の夜中の一二時に一気に修正をはじめたいと思います。
　一／一六深夜
　改変終了

……疲れた

微調整含め、色々はまた後日ー

エレナお嬢様成長劇 恋愛編

第百話 コイバナ前編

　職員宿舎、シールの部屋
「シール、聴きたいことがあるんだけど」
　シールのリーンの波乱に満ちた授賞式から数日が経過した。
　国王の暗殺未遂事件が起こってから数日、牢獄城が謎の蒼い光で爆発を起こしてから数日、あらゆる事件が起こってから数日。
　今のところ、シールとリーンは平和だった。
　王城内では現在、首を切られた役人達の後釜の調整やら、負傷した騎士達の補充やら、様々な調整で非常に慌しい事になっているらしいのだが、学院と言う壁の中にいる彼の元までその嵐は届いていない。
　勿論、二人はそれぞれに仕事があるわけで、別に健やかな休日を過ごしていた訳ではないのだが、とはいえ、それなりに平和な日常が戻ってきた。
　そんなこんなで日々が過ぎ、久しぶりのように感じる休日が訪れ、ゆったりと読書とお茶を楽しもうとしたそのときだった。
「シール、いる？」
「おや、エレナ？」
　エレナが部屋に入ってきた。
　前回の事件後、エレナも学院内に未熟とはいえ交流が生まれた。エレナは時折旧校舎の『執筆部』に顔を出したり、ミフィールと共に出かけたりと、徐々に健全な交流を重ね始めたのだ。
　勿論、シールの部屋への入り浸りもまだ収まってはいないが。以前ほどの頻度ではなくなっていた。故に今日は久しぶり、とは言わないが、朝から珍しい、とシールは思った。そして何の用かと尋ねれば、聞きたい事があると言う。
「ふむ……」
　シールは首を傾げる。

エレナは学問に関して、疑問に思うことは自分で調査し理解できるだけの力はある。それでも分からない事は此方に尋ねてくる訳だ。しかし彼女の何処か困った表情を見るに、今日はそういう事ではないらしい。
　となれば、日常での相談だろうか。
　築き始めた同じ学生との友情、初めて体験するそうした交流に戸惑う事もあるだろう。慣れない人との関わりにどうすればいいのか分からず困惑もする事もあるだろう。
　勿論、そういう悩みが生まれるのは好ましい事だ。
　それはつまり、年相応の子供らしさが生まれたと言う事なのだから。
　そしてそうした悩みに対して応じてあげるのもまた、教師としての仕事だ。
　シールは意識を改めてエレナと向き合い、
「うん、何が聞きたいんだい？」
　どんな疑問であろうとも、可能な限り答えよう。答えられずとも共に悩み、解決への道を探ろう。シールのそんな考えを知ってか、エレナは頷き、そして尋ねた。
「愛って何？」
「わ か り ま せ ん」
　シールはうな垂れた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　彼女がそんな素っ頓狂な質問をしたその理由は、おおよそ数時間前に遡る。
　場所は旧校舎、『執筆部』部長室。
「コイバナ？」
「そう、恋話」
　リドのその台詞に、それを聞いていたエレナとミフィールは首を傾けた。
「次号の特集で、女性読者向けの学生恋愛体験談、なんてコーナーを設けようとしたんだけど、どうにもネタが少なくってねえ」
　リドは溜息をつきながらそう語る。ベタと言えばベタな題材だ。歴史あるとすらいっていいような、女性の間で不動の人気を誇る王道中の王道の記事、恋愛

談。執筆部では今まで、「ポピュラーすぎる」という理由で避けられてきたのだが、今回は一度王道に立ち返ろう、という訳で、この記事を雑誌に載せることになった。
　王道、と言う事で、記事の作成にはそこまで創意工夫は必要なく、それ故にリドはこの記事は楽にできるだろうとタカをくくっていた。
　ところが、話はそう簡単には進まない。
　今回体験談と銘打った以上、誰かが経験した恋愛でなければならない訳だが、しかし周囲の者達にインタビューなどを繰り返してみても、事前の募集を呼びかけても、どうにも記事に乗せられるような内容の体験談が足りないのだ。
　青春の真っ只中にいる以上、相応にそうした話が転がっていると思っていただけにこの結果はショックだった。
「まあ、そう簡単に自分の恋愛経験なんて明かしたくは無いわよね」
「今、正に経験しているから、口にできないんじゃないでしょうか？」
　ミフィールの指摘もごもっともだ。過去の話を思い出として語るのなら、そうした体験談は出しやすいが、今正に恋が継続中となればそう容易く明かせないだろう。それを言い出せば、学院と言う狭い領域の内で恋愛と言うジャンルに区切った応募をかけたこと事態、そもそも間違っていたと言う事になる。
　だが、今更記事を差し替えようにもネタがそう簡単に転がっている訳でもない。なんとしてでも完成させなければならない。
「それなら身内から話を聞いていったら？　　『執筆部』沢山部員がいるじゃない」
　エレナの問いにリドは溜息をついた。そんなもん、とっくにやっている。そして結論として、まるで役に立たない事が判明した。文系集う『執筆部』、そうした色恋にはほとほと縁が無い。いても片思いのままでついえてしまった体験談が殆どだ。
　そうした話に多少色をつければ、悲恋として語る事もできるだろうが、できればそれは最後の手段にしたい。普段のガセ交じり前提とした〝面白記事〟と違い、体験談と銘打つ以上、創作はあまり交えたくない。まあ、体験談である以上、無意識のうちに語る者の創作が混じる事は良くある事ではあるのだが。
　さてどうしたものか、とリドが悩むと、再びエレナが手を上げて、

「じゃあ、貴方はどうなのよ。リド」
「私？ 今は恋なんてしてる暇はないわよ。仕事一筋」
「じゃあアレ、昔……そう、あれ、初恋は？」
「キースよ」
　即答した彼女の言葉に、エレナは思わず声を詰まらせた。リドは肩を竦め、
「というよりも、〝昔の仲間内〟じゃあの男に惚れなかった奴はいないわよ。何しろ殆どあいつのお陰で私たち生きてこれたようなもんだから」
　まああれは惚れたというよりも、大黒柱たる父親に抱くような親愛の情に近いものなのではないだろうか、とも思う。元々真っ当な両親に恵まれなかった者達が多かったのでなおさらだった。そうかんがえるとやはり恋愛話かといえば微妙な所だ。そもそも自分達の事情をそうやすやすと話すわけには行かない。たとえどれだけネタに困っても。
　何人もの年頃の女を養い慕われる男、というのも面白い話だとは思うが。
「……まあ、例外が一人いたけどね」
「なに？」
「なんでもないわよ。で、そういうあんた達はどうなのよ。ミフィールは？」
　問われ、ミフィールは僅かに頬を赤く染めた。可愛い反応だなとリドはニヤつき、次にエレナを見てみると、
「……エレナ？」
　物凄く首を傾けていた。途方もない難題を前にした学者のような顔で。
「……、れん、あい」
　そのまま動きを止めた。軽く彼女の目の前で手を振ってみたが、微動だにしない。まるで石像のようにその場で固まったままだ。
「……ちょっと、大丈夫？」
　問うても反応なし。難しすぎる問いだったようだ。
「……難儀な女」
　心配するミフィールをよそに、リドは呆れ気味に溜息をついた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……恋」
　リドとミフィールとの会話後、二人は執筆部の仕事に戻り、エレナは邪魔をしないように執筆部から出て行った。自分はあくまで部外者だ。二人からは部に入れば良い、と誘いを受けているが、どうにもそれは決めかねている。
　ともあれ今、彼女の関心は別にある。
　生まれてこのかた、エレナは恋なるものをした事がない。
　特殊な家の生まれで、更に特殊な才能を持ち合わせ、おまけに長くの間周囲に心を閉ざした生きかたをしてきた彼女にはそういった健全な経験がない。そもそも友情と言うものを僅かなりとも築けたのが極々最近なのだ。恋なんて、そんなことした事があるわけが無かった。
　大体、真っ当に交流を交わしたことのある異性すら数えるほどしかいない。
　実の父親、シール、キース。たったの三人だ。他の男達とは喋ったことはあっても名前どころか顔すら殆ど覚えていない。我ながら凄まじいと自分の交流能力の低さにエレナは衝撃を受けた。
「恋愛……」
　勿論、そうしたものがどういうことで、なにをしたりするものなのかくらい、エレナだって知っている。あまり進んで読みはしないが、その類の、若者が好む小説などを読んだ事が無い訳ではない。
「……誰かを好きになると、違う？」
　好き、ということはエレナには分かる。自分にだって好きなものは多くある。食べ物だってそうだし、好ましいと思った本は幾つもある。人だって、自分を救ってくれたシールを好ましいと思っているし、村の事件で出会った【紅眼】の三人も、前回の学院騒動で助けてくれたキースも、ミフィールやリドは勿論、全員それぞれ好ましい人物だと思う。
　だが、それは愛なのかと聞かれれば、どうなのだろう。
　自分は別に、彼らを〝情熱的〟に〝求めたり〟していない。
　しかしこの情熱的だのなんだのというのは本から得た知識で、そもそもコレが本当に恋愛なのか分からない。大体、その本の知識にしたってその本によってその恋愛の定義はバラバラだ。
　最近流行らしい恋愛小説をミフィールに勧められて読んでみたが、求める事が

愛だの、黙って見守る事が愛だの、どんな事でも受け入れる事が愛だの、結局何が愛なのかさっぱり分からなかった。そしてその事に気をとられていた結果、小説そのものを楽しむ事を忘れるというマヌケをさらした。とりあえず自分の感性が人とはずれているらしい事は分かった。

　まあ、今はどうでもいい。今は〝恋〟の話だ。〝愛〟の話だ。

　私は、果たして恋はできるのか？　否、しているのか？

　例えば、シールに対しては？

「……うーん？」

　やはりこういう場合、人の経験を聞くのが一番いいと思うが、さてどうしよう。そもそもその話題が集まらないから、リドは困っていたのだが。

　と、そんなことを思っていたそのときだった。

「……あら」

「……」

　廊下の先に此方を睨む赤髪の少女と、眼が合った。

久しぶりの学院話
そして百話到達です……いやあ、感慨深い。まだ先だとか思ってたら修正した結果あっという間に百話ですよ
これも読んでくださっている皆さんのお陰です。本当にありがとうございます。
せっかくだから何か記念に……とも思うのですが……いやあ、何も思いつかないや！（笑
まあひょっとしたら何か思いついてやるかもしれませんが、期待しないでおいてください。それでは

第百一話 コイバナ中編

　エレナと廊下で対面したのは、先日の大乱闘でエレナと退治していた平民側の実質的なら〝リーダー〟を務めていた少女。ヒノ、という名の少女だ。
　前回の乱闘騒ぎの末、形の上でエレナや〝貴族連合〟と彼女等〝平民連合〟とのわだかまりは解消された。これ以上引きずる事はしないと、互いは認め合った。
　が、当然、だからといって感情の面も何もかも納得できた訳がない。
　彼女は未だ、エレナには処理しきれない沢山の感情を持っている。
「……」
　だから騒動以降、彼女はエレナを無視しつづけてきた。またいずれ、彼女とは言葉を交わし、煮えきらぬ感情を受け入れなければならないとは思っているが、今は無理だ。顔をあわせれば自分のドロドロとした感情を吐き出しそうになってしまいそうなのだ。
「……」
　自然と早足になる。早くこの場から離れたい。向こうだって、自分が叩きのめした相手と顔を合わせていい気分はしないだろう。だから、と、彼女をスルーしその場から離脱しようとした、
「ちょっと」
　その矢先、何故か背後から首根っこを引っつかまれた。
　衝撃で喉が圧迫され息が詰まる。
「何するのよ！」
「ねえ、恋したことある」
　……は？　とヒノは口にしてしまった。
　なんていったこの女？　コイ？　濃い？　故意？
「……え、何？ なんていったの？」

「恋よ。恋愛。愛。した事ある？」
　質問の意味はわかった。が、その意図が全く理解できなかった。愛？　　なんだ、この女は何を考えて何でこんな台詞を口走ってるんだ？　というか何故それをわざわざ私に聞く？
　ヒノがそうやってぐるぐる疑問を頭の中でめぐらせていると、エレナはそれを否定と捉えたのか、静かに、おおきく溜息をついた。
「……した事無いのね」
　そして物凄い失望の顔をした。
　……ムカツク
　ヒノは顔を引きつらせた。ものすごい腹が立つ。何だその顔。なんだってこの女にこんな下らない質問でここまで残念な顔をされなければならないんだ。
「別に、恋くらいしたことあるわよ」
　プライドを逆撫でされ、堪えきれず、ヒノはそう口にする。と、
「どんな感じだった?!」
　エレナが物凄い食いついてきて、ドン引きした。何故彼女がここまで食いついてくるのかさっぱり分からなかった。が、なんとなくろくでもない地雷を踏み抜いた事だけは分かった。
　関わり合いになりたくない。
　しかし、恋をしたことがあるか、だと？
　あるか？　といわれればヒノにはある。年相応、恋の一つや二つ、した事はある。
　憧れ、という意味では最初〝英雄〟にそれを抱いた事はあった。が、あれは恋ではないだろう。明確に恋をした、と言えるのは学院に入ってから間もなくだった。
　二つくらい上の少年。本来の入学適齢期から少し遅れて入り浮いていた自分に何かと優しくしてくれて、色々と分からない事も教えてくれた。今まで〝そういうこと〟に疎かった事もあって、あっという間にその人が好きになった。
　好きになった、そう、好きになった、が、告白とかそう言うことをする前に、その男が何人もの女子に手を出した挙句ポイ捨てした外道野郎として中庭に裸でつるされた。どうやら非常に女性癖の悪い男だったらしい。そして初心で右も左

も分からなかったヒノはその男にとって格好のカモだったようだ。
　その事態が発覚したお陰で、ヒノは助かったのだが。
　そうして彼女の初恋は終わりを迎えた。下着一枚に剥かれて魔術で木に結び付けられ、哀れに泣き喚く恋の相手の姿を見ればそりゃ百年の恋も冷めるだろう。
　……さて、果たしてこの話がこの女が食いつくように求める話なのだろうか
　ヒノは、頭一つ小さいエレナを見つめた。
「……」
「なに？」
　……違うな。いや違うよな？　というか絶対違う！　甘酸っぱいどころか酸味過多で違う涙が出るわ！　私の初恋すっぱ！　そもそもこんな友人にだって話すのを躊躇う黒歴史話したくないわ！
「……え、何で泣いてるの？」
　五月蝿い黙れ腐れ貴族こん畜生。
　ヒノは内心で罵りとりあえず零れた涙を拭った。そして息をつき、冷静になる。そもそもこの女になんの義理があって自分のコイバナなんて話さなければならないんだ。いいじゃないか。無視したって。
　そう言い聞かせようとする、の、だが、
「ん？」
「……くっ」
　目の前のエレナの、とても期待に満ち満ちた輝きの瞳に、ヒノは口が引きつるのを感じていた。義理も何も無いが、この期待から逃げるのは負けた気がする。物凄く。
　まあいい。どーせ減るものでもなし。
　話してやろう。話して、さっさと此処から去ろう。
「……あれは確か」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　人生で初めての恋、が物凄くどうしようもない結果に終わったヒノは、それ以降男に対して少し距離をとるようになった。直接的な被害は無かったとはいえ、

流石に男に躊躇無く接する事ができるようになる訳が無かった。
　まあ、その事と、当時から暴走していた貴族嫌いの件を除けば、人間関係も学生生活も順調だった。前回の暴動が起こる前までは彼女は素晴らしく学生らしい学生生活を満喫していたのだ。
　さて、悲恋（笑）から時間が経過し、ある程度ヒノは男性への免疫を身につけた。
　知識と経験も身につけ、入学当時のように浮き足立つ事も既に無い。状況や環境に溺れずに接する事もできるようになっていた。貴族に対しては別だったが。
　ともあれ、男児とも親しく接する事ができた彼女は
　一人の、同じ年の少年と親しくなった。
　好きな人というほど大げさでもない。恋と言うほど熱を伴っても無かった。だが気の合う相手だったことは間違いなかった。彼も平民の出身であり、革命後、苦労して勉強を重ね学院に入学を果たした人で、自分も似たような境遇だった。だから彼の苦労は自分のことのように感じた。
　話してみると似たような趣味を持っていて、気も合った。話してみて一番楽しかった相手だったのは間違いなかった。
　さて、そんな彼との恋の話が展開するのかと言えば、実はそんなことは無い。
　何しろ彼はそれから暫くして、この学院を去る事になったのだ。
　理由は単純で、どうしようもなかった。実家の父親が流行病に死に、同じく母が倒れたのだ。安定し始めているこの国であっても、稼ぎ手をなくした者を養うような社会的なシステムは完全に用意されている訳ではなかった。
　このままでは母と、兄弟が死ぬ。それを知った彼は学院を去る事を決めた。
　日が昇る午後、皆が学び舎で学んでいるその最中、一人荷物をまとめ、門を潜ろうとした。しかしその時、彼は前に知った顔がいるのに気が付いた。
　ヒノは正門の前で彼を待ち構えていた。
「授業サボり。感心しないな」
「……今日だったのね」
　ヒノはそう問う。彼が今日去っていくのは知っていた。しかし彼から教えてもらったのではなく、担任の教師から教えてもらっていたのだ。だから授業を抜け出して、彼をこんな所で待っていたのだ。

彼は、ヒノを見て、何処か無理に笑みを浮かべた。
「ああ、残念だけどな」
そう言う風に、諦めたように言った。
その声にたまらなくなって、ヒノは目を瞑り、
「……続けるわけには行かないの？ もったいない」
「オフクロには、この学院入学まで世話かけた。これ以上は、なあ」
ヒノは両親とはあまり仲が良くなかった。学院の入学にも反対された。だから彼の気持ちはヒノには分からない。だが、彼が今、とても悔しい思いを抱いている事は痛いほど分かっていた。
「学院を出ても、働く場所は？」
「先生がさ、故郷の近くに働き先紹介してくれたんだ。給料も結構いいんだぜ？」
それは途中までとはいえ魔術と言う技術を学んだ彼を野放しにできないという判断でもあった。国外に流出する事を避けねばならないほどの魔術は学院の学習期間で学ぶ事はないが、それでも魔術は悪用しようとすればいくらでもできる。優秀であればなおのこと。それは彼が学院でも優秀な成績を残してきた成果でもあった。
そしてそれはつまり、最後まで学院を学びきる事ができれば、もっと高い所を目指す事ができた証明でもあった。そして彼がそれを望んでいた事をヒノは知っている。
「働けるだけ御の字さ。その給料ならオフクロにも、楽をさせれる」
「……そう」
本当は、そんな風に割り切っていないくせに、そう言おうとした。だがこれ以上、彼にそんな言葉をなげかける事は、残酷な事だとヒノにも分かっていた。誰よりもこの結果を惜しんでいるのは彼だ。それでも此処を去ると決めたのだ。それなのにこれ以上引きとめるのは、追い討ちをかけるのと変わらない。
だから、もう彼にかける言葉は何も無かった。彼を傷つけずに済むであろう言葉を何一つ持ちあわせていなかった。何か思いを告げようとしても、その何もかもが、彼を傷つけてしまうのだと、悟ってしまった。彼も、それを察したのか、笑みをなげかけ、歩いていく。学院の広い門を潜り、学院の外へと出た。そして

これからもう二度と、学生として門を潜ることは無いのだと、ただこの場の沈黙が告げていた。
「なあ」
「何？」
　振り返らぬまま、彼はヒノへと声をかけた。応じるヒノも、振り返らない。互いに顔を合わせぬまま、言葉が漏れる。
「……あのな」
　彼のその声は、振り絞るようだった。先ほどと同じくらい、学院を去る事を自ら認めたときと同じくらい、辛そうな声だった。それが何を意味しているのか、何を伝えようとしているのか、察せられぬほどヒノは鈍くは無い。
　だが、彼は言葉を続けず、ただ沈黙を残し、その後に、
「……いや、いい」
「そう？」
「ああ」
　そう言って、再び彼は歩き出す。彼が去っていく、その足音を聞いたヒノは、最後に振り返った。門の境の向こう側にいた彼もまた、此方を振り返りみて、笑った。
　その彼の笑みは、悲しさと熱っぽさの入り混じる、とても切ないものだった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……ふぅん、まあコイバナとしてはどうなのかって思うけど、まあなんとなくそれっぽさが匂ってるし、もう少し話を整えれば記事にできそうね」
　ヒノの語ったその話を聞き終え、リドは満足げに頷いた。
「ってあなた誰よ!?」
「リド？」
　懐かしむように語っていたヒノと、それを聞き入っていたエレナは同時に驚愕した。本当にいつの間にか彼女はそこにいて、しかもなにやらメモ帳を片手にヒノの体験談を記録している。
　リドはメモを書き留めしまうと、エレナへと親指を立て、

「いやあ、エレナ、取材協力とはありがたいわ。あんたやっぱウチ入ったら？」
「待ってよ！ 取材って何！ というか記事って何!?」
「安心なさい！ 貴方の話、ちゃあんと乗せといてあげるから！」
「いやだから待てぇ！ 何も聞いていないわよ私！」
「いーじゃない減るもんじゃなし！」
「なんか減る気がする!! 大事なものが削り取られる気がする!!」
「気にしたら負けよ！ 若いんだから！」
「あんた同じくらいの年じゃない!!」
　恐ろしくゴリ押しだったが、エレナはこういうコミュの築き方もあるのだと感心した。シールがそれを聞けば静かに首を横に振ってエレナを諭していただろうが。
「というかリド、どうして此処にいるの？」
　エレナは首を傾げ問うと、リドはにんまり笑い、
「いや、そーいや一人、こういう話を確実に握ってる男を思い出してね」
　そう言って、キラリと眼鏡越しに瞳を輝かせた。

第百二話 コイバナ中編II

「帰れ。今すぐに」
　取材対象は開口一番に女子三人に言葉をぶつけた。
　リドにつれられて向かった男子寮の取材対象━━キースは上半身は裸で下に寝巻のズボンを履いただけと言う乱れまくった格好で、物凄い疲れたような顔をしてこちらを睨みつけた。一応こちらにはヒノがいるのだが、キャラ作りも忘れてチンピラ丸出しの顔である。
「本気で何しに来たんだよお前等は、つーかなんだこの団体状況。いやそんなことはどうでもいい。疲れてんだよ俺は。帰れ」
「ＯＫ、分かったわ。お邪魔します」
「人の話を聞いてくれ。頼むから。お願いだから」
　リドはそんなキースを物凄い無視して部屋の中へと猛進していった。エレナはいいのだろうか、と首をかしげながら、ヒノはそもそもなんでついてきているんだろうか、と首をかしげながら。
　さて、と部屋の中をエレナは見渡す。
　かつての騒動の折には幾度か足を運んだ事のあるキースの部屋だ。自分の寮部屋とは正反対の作りで、後は同じ。彼の所持するナイフやら何やらが適当に飾られている年頃の少年らしい部屋━━━と……猫？
　猫、がいた。ベットの上に猫が一匹。
「……キース、あの猫は？」
「猫は猫だよ」
「寮、ペット禁止じゃないの？」
「許可は貰った」
「……というかどう見ても魔「にゃんこだ」……そうね。にゃんこだわ」
　有無言わさずと言うキースの声に、エレナは素直に頷いた。淡い赤色の体毛の

猫、明らかに魔獣と評しても問題ないレベルの魔力を感じられるのだが、黙っておいた方がいいらしい。リドとヒノは気づいてはいないらしく、のんびりとキースの部屋を眺めている。
　猫、にゃんこは、キースのベットの上で眠たげな眼差しでこちらを見つめていたが、ふ、と、興味を失ったのかこちらから目を逸らした。
　知性はあるのだろうか？
　かつてエレナを散々ちょろまかした青色の猫を思い出す。あれは途中で人間に変化を遂げるほどの高い魔力と知性を保有した魔獣だったが、果たしてあの猫は？
「……ま、別にいいけど」
　別に今はそんなことを考えに来た訳ではないのだ。
　そう思いリド達に視線をやると、リドは肩を竦めどうぞ、とこちらを促す。ヒノはそもそも何故此処にいるのか分からないが、興味深そうにこちらを見つめている。
　ふむ、とエレナは頷き、とりあえず、と口を開けた。
「キース。貴方、好きな人はいる？」
「いる。それがなんだ」
　ためらいない即答にエレナとヒノは「おお……」と感嘆の声を上げた
　が、リドは小さく溜息をつき、
「あんた……まだあの女好きなの？」
「リドは知ってるの？」
「知ってるわよ。そいつも昔馴染みだもの」
　リドはそう言い溜息をつく。何故か空しげな顔をして。エレナは首をかしげ、
「どんな人なのよ」
「変な女」
　リドの答えに、一瞬ヒノも僅かに首を傾けた。
「……変？」
「ああ、間違えた」
　リドは手を振り、頷いて、
「物凄い変な女」

エレナとヒノの首の傾きが強くなった。
「人の惚れた女を変とか言うな」
「変は変でしょう」
「否定はしないがな」
キースは深くうな垂れた。果たして彼はどんな女性を好きなっているのだろう。
「散歩に行く、とか言って魔獣を刈り取ろうとするくらいには変な女よ」
「変な女ね」
「変とかいうレベルなのかそれ」
エレナは納得し、ヒノは若干引いた。キースは無言で視線を窓の外へ向けた。
「なんだってあんな女好きなってしまったのかしら。今までずっと尽くしてきても全くあんたに靡くそぶりも見せないじゃないあの人格破綻者。不毛としか思えないわ」
「不毛……」
「不毛よ。不毛と言う言葉しかあてはまらないってくらい、不毛」
「それは……可哀想に」
「可哀想な奴よ」
「可哀想ね」
「「「可哀想」」」
「……お前等はあれか？ 俺の心を抉りにきたのか？」
女子三人の同情に満ちた言葉に、キースは撃沈した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「それで、可哀想なキース。他に何かネタは無いの？」
「頭に可哀想をつけるな。頼むから。で、何？ ネタ」
キースの問いに、リドは事情を話した。記事なるような恋愛体験談が少なくても困っていると言う事。それ故にキースの体験を参考にしたいということを。
するとキースは手を振って。
「そんな経験ねーよ。俺、別にもててねーし」

「子供の頃モテモテだったのでしょう？」
　そうエレナが問うと、キースは鼻で笑い、
「あれはモテてんじゃねーよ。たかられてたんだ」
　たかられていた。というと何だか虫か何かのようだ。
「あの時期、メシを手に入れることができたのは俺くらいだった。だから小さいガキどもは俺の周りによってたかってきたんだよ」
「でも分けてあげたんでしょう？」
「子犬みてえなガキが目を潤ませながらボロボロの格好で『にーちゃん腹へったー』なんていって擦り寄ってきて分け与えなかったら俺はゴミ畜生だよ」
「今考えればあれ、子供なりの処世術よね」
「いいカモだったなあ……俺。全部一人で独占してりゃ背も伸びたかもな」
　そんな風に自嘲気味に笑った。そこら辺の事情を始めて聞いたヒノは僅かに目を丸くしたが、エレナは興味深げに頷き、リドは懐かしそうに目を細めた、が、
「ただまあああの時期はネタにはならないし、私だって知ってるから興味は無いのよ。それよりもほら、あれ、男娼時「茶菓子でも喰うか、リド」むぐ……」
　何か、非常に聞き捨てならない単語が飛び出そうとしていたが、キースはリドの口にクッキーを突っ込み押さえた。そして思い出すようにして、
「恋愛ネタねえ……」
　そう呟いて、溜息をついて、
「数年前、ある女のヒモになってた事があった」
「紐？」
「心身を売る代わりに報酬を得る取引の事だ」
「随分前衛的な取引ね」
　エレナはうんうんと納得した。ヒノはそんな彼女になにか物言いたげに口を開いたが、そのまま静かに閉じた。そしてキースへと視線を移し、
「でもなんでそんな取引をしたの？ キース君」
「小汚いクソガキを心病んだ貴族にあてがった、外道な男がいてな……」
　その外道は今、この学院で学院長をしている訳だが。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：

　事の始まりは、ミストに英雄として利用されるようになったその後。大規模な革命を終え、ある程度安定し始めた頃だ。キースはその頃既に【英雄】としての仕事を一先ず終えていた。一応、これ以上の仕事は任される事は無い。のだが、

「魔術学院に入学したい？」

「ああ」

　キースはミストと掛け合っていた。

　彼がミストにこの国一番の魔術学習の専門学校、オルフェス学院の入学だった。【英雄】として長く扱き使われた彼は、自身の力の無さと、知識の貧困さを自覚した。

　強くならなければならない。それが分かったのだ。

「あんた、その学院のセンセイやるんだろ？」

「正確には学院長」

「どっちでもいい、あんたは顔がきくんだろ」

「君を入学できるように融通を利かせろ、と？」

　キースは頷く。ミストはふむ、と頷いた。実はこの時、キースの提案にミストは至極乗り気だった。というのも、もとより彼はオルフェス学院を改革する必要があると考えていたからだ。

　長きに渡る暗黒時代、オルフェス学院の教育内容は非常に偏り、また、その精度も殆どが腐敗していた。ガイディアーの、というのは名ばかりの代物に成り果てていた。

　だからこそ考えていた方針の一つ

　魔術の才さえあれば身分を問わず入学を許す門の開放。

　それをキースが進んでやると言うのなら、それこそ渡りに船と言える。

　言える、のだが、

「それなら条件があるよ」

　そう言って、ミスト邪悪に笑った。

「ガキあいてにはずかしくねえのかよ」

「何かを得たいなら対価を支払うべきだ。僕は君の親でもなんでもない。君に温情をかけてやるだけの理由も無いなあ」
　何の努力も苦労もせずに無条件に何もかも与えてもらえるだなんて、そんな風に思い上がった子供が僕は一番嫌いでね。と、学院長は笑う。キースは本当にこの男が学院の教師になる事ができるのか不安になった。
　が、今更だった。
「……で、なにやらされんだよ」
　ミストはそう言ってケラケラと笑った。笑って、
「まあ、言うほど大げさな事じゃないさ」
　そう言って、役者のように指を立てて、
「単に、ある人の家にお世話になってほしいってだけなんだけどね」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「こんにちわ。平民」
〝ある人〟というのは、キースと年の離れた大人の女だった。
　長い金髪の二〇を超えた綺麗な女。体つきは良く、何処かアンニュイな雰囲気で、ふとすれば娼婦とも間違えられるような妖艶とした雰囲気を纏っていた。
　聞けば〝元〟貴族と言う。それなら年齢を考えても既に嫁ぎに行っていてもおかしくは無い筈なのだが、案内された屋敷には僅かな使用人と彼女だけしかいなかった。
　間違いなく何らかの事情を、それも厄介な事情を抱えている女だった。
　後から話を聞けば彼女の実家は、暗黒時代に不正を働き、しかし他の家の不正情報を革命派に売り渡す事で罪を逃れ、その全員が他国に亡命してしまったらしい。
　しかし既に嫁いでいた彼女だけは逃げ遅れた。
　そして彼女の実家が売った貴族の中には〝彼女の嫁ぎ先〟も含まれていた。
　夫だった男はその事実を知ると怒り狂い、彼女を捨てた──結果としてそれが革命の折、彼女を生き残らせた要因となったのだが──そしてその後、彼女は行く場所を失った。実家に帰ったところで誰一人としていない。身内を売って逃げ出し

たのだから当然だ。元夫は既に革命で処刑され、残された家族は当然、自分達を売った彼女の家を糾弾し、彼女自身も拒絶した。
　彼女はほんの一瞬で、天涯孤独の身になってしまった。
　残されたのは逃げ出した実家が持ち逃げしそびれた僅かな資産だけ。【英雄】の活躍で再起した王によって真っ当となった新政府は、しかし彼女の扱いを悩んでいた。貴族ですらなくなった哀れな女。さりとて放置する訳にも行かない。彼女の現状を作り出した原因は自分達にあるのだから。
　とはいえできる事は限られる。一先ず彼女には幾らかの世話人を置いて、様子を見る事に決めた。どちらにせよ、これからどうするかは彼女自身が決める事なのだから、と。
　ところが、事態はそう容易くはすすまない。
　たった一人になった彼女は、心を病んでいた。そして荒れた。凄まじく荒れた。物凄く荒れ果てた。世話人たちは次々に逃げ出して、仕事が続かない。しかし放置すれば何も喰わず、何も飲まなくなる。一時はあまりに食事を取らないために倒れた事もあったという。
　彼女にもまた、国外で暮らす場所を用意したものの、時間はかかる。それまでに彼女を監視する者が必要だった。
　そこでキースに白羽の矢が立った。
「まあ、要領よく行けば何事も無く過ごせるさ」
　ミストはそう爽やかにキースに語った。
　実際問題、そんな訳が無かったのだが。
　彼女の住まう屋敷で暮らすようになった彼は、その日の内に彼女を抱く事になった。というか、寝ている間に襲われた。〝とある事情〟で女性との性関係の経験を少なからず持っていたキースだったが、流石にその時は驚きで目を白黒させた。
　抵抗しようにも相手は女であり、また無理にやり引き剥がそうとしても魔力を学び始めたばかりの自分が彼女を怪我をさせてしまいそうで、結果されるがままに一夜を終えた。
　事が終わり、疲労に沈むキースが何故こんな事をしたのか尋ねると、女は
「かわいかったから」

そんな風に言って笑った。全てを投げ出したような空ろな笑いだった。
今ならキースは確信を持っていえる。あれは単なるやつあたりだったと。
実の家族に見捨てられ、嫁ぎ先をも失って、あっという間に天涯孤独となった。これからどうなるかも分からない状況に追いやられ、何かにやつあたりしようにも、周りにいるのは遠巻きに自分を恐々と見守る使用人ばかり。当り散らせばすぐに逃げていく。
そこに丁度良く、やつあたりできる格好の相手が見つかったのだ。
それ故に、キースは度々、彼女から暴力を受ける事になった。
出会い頭意味も無く殴られ、蹴られる。それで済めば良いが時には飾られた皿や壷などを上から落される時もあった。言葉を尽くして罵られる事もあったり、彼に割り振られた部屋をナイフでズタズタにする事もあった。屋敷にいる間、彼は魔力で自分の身体を守る事が常になった。
しかし、暴力続きかと思えば、唐突に愛の言葉を囁かれ、抱きつかれ、襲われる。彼女自身が傷つけたキース傷口に唇を落して、ごめんなさいと泣きじゃくる。夜に寂しいからとベットに潜り込み、抱き枕のように抱きつかれる。
好き勝手にできる、壊れにくい人形、それがキースの屋敷での役割だった。
それはキースにとって、それは途方も無く疲れる環境だった。
全くもって関係が築かれない。言葉を重ね、なんとか彼女の奇行を止めようと努力し、一時はそれに彼女は同意する。かと思えば次の日に彼女は自分の腕をナイフで切りつけて大騒ぎになった。
何とか積み上げていこうとする積み木をなんら気にもされず呆気なく蹴り飛ばされる感覚、疲労しない訳が無かった。ミストに【英雄】の真似事をさせられた時より遥かに疲れた。
一応、と言うべきか、ミストからは彼女の動向を監視し、命に関わるような事を止めるだけでいい、とは言われている。が、目の前で狂乱を見せ付けられ、放置できるほど彼の器は大きくなかった。
その彼のお人よしっぷりが彼女を喜ばせ、彼女の暴走は徐々にキースにのみ向けられるようになった。その結果に使用人たちはほっとしたらしい。

「……っぐ」

ある夜には、キースが違和感に目を覚ますと彼女が自分の首に指をかけていた。本気で首を絞めるわけでなく、しかし振りほどけないようなくらいの力で幼いキースの細い首を握り締め、そして彼女は問う。
「ねえ、私のこと好き？」
「ああ、すきだよ」
　好き、と言葉にすれば彼女は満足し抱きついてくる。だからキースはそれを口にした。ここで答えなかったり、誤魔化したりすれば殴り、蹴られ、そして大声で泣き喚かれる。それならまだ嘘でもなんでも好きだと言った方がマシだった。どうせ、次の日には何もかも忘れたような顔をして、こちらを殴りに来るのだから。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　そんなこんなで日々は過ぎた。キースは昼は学院入学の準備の為、スパルタ教育を受け、帰れば屋敷で狂乱する彼女の世話と、今考えても相当ハードな日々を送った。「メシが食えるだけマシだ」そんな風に自分をごまかしながら、キースはなんとか乗り切っていった。
　時間が経過するにしたがって彼女の精神は徐々に安定していった。時間の経過が彼女の心を癒していった。あるいはやつあたりするほどの憎悪を、磨耗させていった。
　顔をあわせるたびに振るわれた暴力の数は日ごとに減っていた。かわりに共に夜を過ごす事は多くなった。それも無理矢理犯されるのではなく単に彼女がベットに潜り込んで、そのまま眠る、それだけで事は済んだ。
　それでも時々、キースの首に指を掻く事はあった。
　身体に不相応なベットで寝転ぶキースの首にゆびをかけ、彼女は笑う。最初の頃のような空ろな感じはもう無かったが、その代わりどこか儚そうな笑みを浮かべる。
「……なんでもいいけどさっさとしてくれ。オレはねむい」
　キースはそんな彼女に言葉を向ける。彼の声は何処までも諦めていて、疲れていた。彼女はその声を聞いて笑い、

「貴方って老けてるのね」
「老けてるってなんだよ。大人びてるって言え」
　実際は彼女の言葉は正しい。キースは大人びてるというよりは老けていた。
　経験が彼に諦観を身に付けさせた。自分ではどうしようもない状況。力の無い自分が、それに対して諦める事を既に覚えていた。それは老いという表現が近かった。
「ぜーんぶ諦めた顔。本当、貴方って本当は中身が大人なんじゃないの？」
「お前は中が子供みたいだけどな……もうねろよ」
　そう言うと、彼女はまた笑って、
「ねえ、私の事、好き？」
「ああ、好きだよ」
　キースはその問いに機械的に答えていった。感情を交えないように心がけながら、ただただ淡々と、自分のことだけを考えるようにして眠りに着いた。
　ただそれでも間近で触れる肌の暖かさはそう簡単に消えるものではなかった。

　そしてそれから更に一月が経過した

「彼女が他国で暮らす準備が整った」
　ミストがそうキースに告げた。つまり別れの日が来たのだ。
　元々殆ど物が無かった屋敷から家具がどんどんと売り払われ、馬車に詰まるようなほどのものにまとめられていく。僅かにいた使用人達も礼金を貰って消えていき、残されたのはキースと彼女だけになった。
　彼女は夜と共にこの場所を離れる手筈になっていた。キースも次の日の朝には屋敷を出る。そうすればこの滅茶苦茶な日々も終わりを迎える。
　そして、その日の夜、彼女の出発が間近な時間
「……」
　キースはベットで横にならず、残された古い椅子に腰掛けて、待っていた。な

んとなく、来る予感がしていた。来ないならそれで構わないとも思っていた。

　そして彼女はやってきた。

　何時も薄手の寝間着のみでやって彼女は、今日は外出用の厚手のコートを纏っていた。長かった金の髪は短く切りそろえられてある。表情にはもう、気だるげな色は無い。今日までの間に彼女は心を取り戻していた。それをキースは知っている。

　彼女は、黙ってこちらを見上げるキースへと近づくと、椅子に座るキースを見下ろした。見れば年の離れた姉弟のようにも見える、そんな二人は互いを見つめあう。

　そして彼女は静かに口を開いた。

「本当の事を言って」

「なんだよ」

「私の事、好き？」

　問いの意味を、キースは理解した。

　本心を語ってくれと、彼女はそう言った。つまり彼女にとっての都合のいい人形ではない、キース自身の声を語ってくれと、そう願った。それをキースは理解して、理解したうえで、

「……ああ、好きだよ」

　彼女の問いに、キースは嘘で答えた。人形として、返した。

　彼女はキースのその答えに、静かに目を伏せた。そしてキースに顔を寄せて、唇を重ねた。今までのように貪るように押し付けるのではなく、ただ静かに、長く、重ね続けた。キースは抵抗する事はしなかった。

　彼女は顔を上げる。だけど何時ものようにそのままキースを求めて抱きついはこなかった。そのまま静かに一歩、後ろに下がって、

「さようなら」

　そう言って微笑んだ。彼女の頬には一筋、涙が流れた。

　キースは知った上で、彼女が部屋を出て行くのを黙って見届けた。

次の日、目を覚ますと屋敷には自分以外に誰も残されてはいなかった。
「……ああ、さようならだ」
　自分以外の温もりの無いベットの上で、キースは一人で静かに呟いた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　最後までキースが自分の過去を──エレナやヒノがいたため誤魔化したり省略した部分はあったが──簡潔に語り終えると、それを聞き終えたエレナは、
「それで？ その後彼女は？」
「違う国の違う町で平和に暮らしてる。残された資産を元に商売始めたらしい」
　余計にもミスト──学院長がわざわざキースに教えてくれた。全くもって女と言うのは逞しい、とそう思う。と、こんどはヒノが興味深げに
「キース君は彼女に会いたいと思う？」
「いいや全く」
　そもそもあの関係をキースは酷く割り切っていた。自分は彼女を利用しただけであり、彼女もまた、自分の中にあった不満をぶつけていただけなのだと。最後、それが揺らぎそうになり、それを受け入れることが自分にできないとそう感じた。だから彼女を拒絶したのだ。
　キースがそう言うと、三人の少女達は、何故か顔を見合わせた後、
「酷い男」
「酷い男ね」
「酷い男だわ」
「「「サイテー」」」
「一斉に罵るのを止めてくれ。少なからずダメージを受けるから」
　キースはうな垂れた。まあ、この話をすればそう言う反応が返ってくると分かっていた分、そこまで大したダメージは受けなかったが、それでも何故同じ年の女子三人に罵られるというのは相当に、きつい。
「大体、暴力を振るわれ続けたのは俺だ。俺に同情すべきじゃないのか？」

「同情したほうがいいの？」
　と、エレナは不思議そうに、首をかしげた。キースはその純真な問いを前に、何か言いたげに口を開いたが、そのまま溜息をついて
「……いいや」
「だったらいいじゃない。サイテー男。女の子から罵られるなんて、男の勲章みたいなもんよーたぶんねー」
　リドはケラケラ笑った。エレナはそういうものなのか、と首を傾け、ヒノはかつて自分をとって食おうとした外道男が、他の女から罵られて「男の勲章だ」と誤魔化していた事を思い出したて、物凄い馬鹿馬鹿しい気分になった。
　するとキースはそんな三人の少女達の反応を見て、遠い処に目を向け、笑い、
「……男〝そのもの〟を持っていかれそうになった事、あったけどな」
　そこまで言って、キースは静かに、声を出さずに、泣いた。
「リド、何故キースは泣いているの？」
「……聞かないであげて」
「……」

【極・女難】
　何故か生きていく上で災厄を持つ女性と関わり続ける羽目になる宿命者。道を歩けば先祖代々伝わる世界を滅ぼしかねない秘術の書かれた呪文書を咥えた活発な女の子にぶつかり、街に出れば明らかに暴漢と思しき男に囲まれたお嬢様風少女が五・六人現れ、図書館で勉強をしていると呪術の勉強をしていた内気なネクロマンサー眼鏡娘が呪術の実験材料にしようとしてきて、家に帰れば幼馴染が両手にナイフを握り締めて「一狩りいきましょう！」とか言ってくる。
　事の大小に限らず少女が抱えるその災厄に巻き込まれる。
　高名な術士に相談してみたが、術士はキースの顔を見た瞬間、黙って涙ぐみながら首を横に振った。神の加護があるというアクセサリーを買うと二秒で砕け散った。
　既に当の本人は何もかも諦めて、悟っている。でも時々泣く。

　キースの設定資料一部公開　遊びでゲームの称号風に
　ギャルゲーの主人公設定みたいだなとおもったがそんなことはなかった。

第百三話 コイバナ後編

「なかなかいいネタになりそうな話も聞けたし、いい取材になったわ」
「そもそもネタにしていい許可した覚えは無いがな。俺は」
　リドが楽しげにメモをとっていく姿をキースは呆れたような顔をして眺めている。ヒノは男子の部屋が珍しいのか何処か興味心身に眺めている。そしてエレナは一人、静かに腕を組み、唸っていた。
「……なに唸ってんだ？ お嬢様」
　キースが問うと、エレナは静かに顔を上げ、口を開いた。
「……ねえ、愛って何？」
　そのあまりに哲学な質問に、瞬間、場の空気が凍った。
　真正面からその質問を受けたキースは静かにヒノとリドへと視線を向けたが、二人はさっと視線をかわして、
「……さて、と。私は記事、仕上げなくちゃいけないからと」
「……そもそも私は図書館で勉強しに行く途中だったんだな」
　そんな言い訳と共に立ち上がると、そっとキースの部屋から出て行った。
　結果、エレナの質問は直接ぶつけられたキースに向かう事となった。キースはエレナの何故か期待に満ちた視線を一身に受け、顔を引きつらせ、苦笑いを浮かべた
「……うむ」
　そう呟き、腕を組み、そして頷き
「分からない事は、先生に聞け」
　キースは至極晴れやかな笑顔でそう言った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……と、いうわけできたの」
「……」
　シールは静かに頭を浮かべて、チンピラ少年の顔を思い浮かべた。
　キースの奴、面倒だからって僕に全てぶん投げたな？
　内心でキースへの恨み言を呟きながら、シールはエレナの質問をもう一度、改めさせられた。先ほどは混乱し、ついわからないなんて事を口にしてしまったが、もっとちゃんと答えてやら無いといけない。
　僕だって分かってはいないんだけどね？
　つい最近愛とはなんぞ、と彼女と同じ疑問を抱いてうじうじと悩んでいた事を思い出す。そんな奴が果たして愛を語れるのかと言えば疑問だ。教師と言う立場とはいえ、知らない事を教える事はできないし、知った振りをするのは最悪だ。
　しかし共に考えてやれない訳ではない。
「ふむ……それじゃあ、エレナが聞いたって言う二人の話を考えてみようか」
　シールがそう提案するとエレナも頷いた。正直ここで自分の話しも披露できればいいのだが、残念ながら経験が特殊すぎて今回の話の当てにならない。
「そうだな……それじゃあまずはヒノさんの話。単刀直入に言って、二人の間には愛があったと思う？」
　愛がそもそも何なのか分からないエレナにそんなことを問うてもどうしようもない気もするが、シールは「なんとなくでいいよ」と付け加えた。エレナはそういわれ、暫く考えるように首を傾けると、
「……無かったんじゃないかしら」
　ゆっくりと、そう答えた。シールはその答えに頷き、
「それはどうして？」
「愛があるなら、離れたくないと思うのじゃないの？　それなのに二人はあっさりと別れてしまったわ。それって、愛というほど、二人の間で絆が深まっていないという事じゃない？」
　ずっと一緒にいたい。エレナの希薄な知識でも、恋人同士、好きなもの同士がそう言うことを望むというのは分かる。そしてそれが愛なのだとすれば、ヒノとその少年との間には愛が無かったという事だ。

しかしシールはその答えに首を傾け、
「そうかな？　例えばヒノさんは、本当は彼とは離れたくなかったけど、どちらにせよこの学院を去らなければならない彼を想って別れたのかもしれないよ？」
　そしてそれは少年もしかりだ。どちらにせよこの学院を去ることになるからこそ、彼女とは何も言わず別れを告げた。この場を去る自分が、彼女を縛る事を望まなかった……の、かもしれない。
　勿論真相は二人の心中にしかない。こうして勝手に推測することは本当は邪推だろう。本来はシール自身の体験談でも語れればいいのだが、残念ながら彼の体験は少々特殊すぎて此処で話すには向いていない。
「でも……私はそれでも一緒にいた方がいいと思うわ」
「それがエレナの結論だね。でも二人の考えはまた違った」
　僕はエレナの考え方も好きだけど、とシールは微笑む。
「じゃあ、キースは？」
　うん、とシールは頷く。彼のあり方、彼女への応じ方を。
「彼はずっと〝その彼女〟に求められてきた人形を演じてきた。そして最後、彼女は人形を望まなかったがソレを拒絶したね」
「拒絶したのなら、愛は彼女にしかなかったのかしら？」
　さて、それもどうだろう、とシールは首を傾げる。
「彼女がようやく第二の人生を歩む段に入って、自分っていう負の思い出を連れて行ってはいけないと突き放したってのもあるかもよ？」
「それは……そうなら勝手だわ。勝手に自分を卑下して、勝手に彼女を突き放すなんて」
　勿論想像だけど。とエレナも付け足す。彼は自分からは割り切った関係だったから、と答えた。そして既にその時好きな女がいたからだ、とも。それ等は嘘だったのか。
「あるいは全部本当だったのかもね」
　人の感情がコレ一つと決まる訳ではない。以前のエレナの向き合った問題もしかり、人には様々な思いや感情があり、それらをまとめて見る事なんて出来やしない。
「ひょっとしたら、そうした感情の中には、彼女を愛しむ気持ちもあったかもし

れない」
「……そう、なのかしら」
　キースの飄々とした顔をエレナは思い浮かべる。まあ確かに昔から純愛を貫いているらしいのだから、そうした感情についてはエレナより遥かに純真なものを持っているのかもしれない。これもまた、分かるものではないが。
　さて、とシールは手を叩く。そしてエレナに笑いかけ、
「さて、二人の例を話してみたけれど、共通した所はあったかな？」
　二人の話に共通する所があれば、もしかしたらそこが〝愛〟と呼べる部分なのかもしれない。しかしエレナは首を横に振って、
「二つの例はどちらも相手を想っての行動、かもしれないけど……」
　共通、とまではいえない。そもそも状況も環境も、登場人物も違う。その人々の抱えた感情も過去も何もかも違う。それなのに共通する所なんて探し出せる訳が無い。そんなのは当たり前だ。
　その答えにシールは頷き、そして少しイタズラっぽく微笑んで
「そうだね。でもそれならなんで〝愛〟なんて言葉があるんだろう」
「愛……」
　そこでエレナの思い悩んだ愛という言葉に行き着く。
　言葉は様々ある。人の思いや感情はその多くの言葉でより正確に、明確に表現する事は出来る。しかし事こうした事実に関しては〝愛〟という言葉が利用される。それはどういう事か。
「つまり、愛って言葉は、あたりまえだけど、ただの言葉なんだろうね」
「言葉」
　シールは結論を述べた。これがいくらかウジウジと考え続けて見出したシールの結論だ。
「愛、という言葉に対して人の行動は漠然としすぎている。誰かを思うこと、誰かを望む事は人によってバラバラだ。それを愛という言葉で納める事は出来ないんじゃないかな」
「じゃあ愛という言葉は不適切なんじゃないの？」
「そう。だから愛という言葉はその言葉自体に意味は無い。重要なのはそれを読み取った人間が、それをどう解釈するかだ」

これは愛という言葉に限った話ではないだろうが、しかし結局はそう言うことだ。愛は人それぞれで、一つとして答えが無いのなら、自分の中で結論付けるしかない。自分にとっての愛はこうなのだと。

「つまり愛とは」

「人それぞれの解釈で、異なる」

　瞬間、エレナはなんだか気の抜けたような顔になって溜息をついた。

「煮え切らない答えね……」

「まあねえ」

　シールは笑う。正直こんなものが正しいと言うにはあまりにも適当すぎると自分でも思うのだが、答えを出せといわれれば結局こんな言葉でしか言い表せないのだ。

　ひょっとしたら愛とは絶対にこういうものだ。と言う人もいるかもしれないが、それだってそうじゃないと思う人がいればそれだけで絶対ではなくなる。もしこの答えを真の意味で理解している人がいれば、その人は多分、人々を導く救世主か何かになれるのではないだろうか。

　が、今のところ万人に愛を説ける者はおらず、だからシールはそう結論するしかないのだ。

「それじゃあ、ねえ、シール」

「なんだい？」

　問うと、エレナは純真な瞳で首をかしげ、

「私が貴方を想うのは、愛とは違うのかしら？」

「それは君自身が決める事だ」

　シールは優しく微笑んだ

と言うわけでコイバナ編終了
……うーん弱いオチ、まあこんなもんです（笑
次回は再びストーリーに移ろうかな、と

リーンの日常 デェト編

第百四話 リーン先生の比較的波乱な一日 ①

　暗雲流れる海洋。
　吹き荒ぶ雨風、高く弾く波、時折鳴り響く雷。
　何処までも荒れ果てた海。その上空に光があった。蒼の光だ。嵐の中を渦巻く膨大なマナ、それら全てがその蒼の光へと終結していく。風が、波が、暗雲が、その光を中心にまるで竜巻のように渦巻いている。
「【□□□□】」
　光の中心、その奥でこの膨大な現象を巻き起こしているのは、あろう事か人間だ。その身体を渦巻く光と同じ蒼の髪の女。人にあるまじき事象を引き起こす女は、それらを制御する歌を謳い続ける。
「【□□□□】」
　謳う彼女の視線は、黒く淀み荒れる海の、その一点に注がれる。凍てつききった瞳で見下ろしながら、蒼のマナが蛇の如く纏わり付いた腕をその一点に掲げる。そして、
「【【【【【【【【【【【【蒼雷】】】】】】】】】】】】」
　言葉を紡いだ瞬間、爆音と爆光が響き渡る。その細く小さな掌か生まれたのは尋常ならざる蒼の雷。光届かぬ暗雲の檻の全てが一瞬瞬くほどの力を孕んでいた。
　本来の雷とは次元の違うその魔の塊は、海面に触れる瞬間、拡散するは愚か、海そのものを穿ち、巨大な穴をぶち空けた。
「【……】」
　彼女は海に空けた大穴をじっと眺める。生まれたその穴を埋めるために周囲から海水が流れ込み、大波を生む。そんな異様な光景を、彼女はただじっと眺め続ける。
　そして変化は訪れた。

埋まりつつある海洋の大穴から沸きあがる気配。一瞬全てが盛り上がった、かと思うと何かが爆発するかの如く水しぶきを上げ、〝ソレ〟が姿を現した。

「IIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIII!!!!!!!!」

　奇怪な音と共に波を掻き分け現れたのは、浅黒く、把握するのも馬鹿馬鹿しいくらいに巨大な海魔だ。クラーケンと呼ばれるそれは、一つ一つが大木よりも太いその腕を揺らめかせ、立ち上ってきた。そして空にも届きかねないその腕を蒼の女へと伸ばし、莫大な圧力でもって彼女を捕らえんとした——が、
「【空間絶断】」
　何処からか呟かれた言葉、そして次の瞬間閃く赤の光。刹那のうちにクラーケンの腕に、身体にその光が奔ったかと思うと、
「IIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIII！？！？？？」
　クラーケンの腕が、身体が切断した。血は飛び散らぬまま、腕が落ちる。光を奔らせたのは、蒼の女の光の影に隠れた一人の男。灰色のようにも見える白髪入り混じる髪を靡かせた柔和な笑みの男は、万物を引き裂く紅の術式剣を片手に構え、僅かに首を傾けた。
「まだ死なないのか」
「【鬱陶しい】」
　それを確認して二人は飛び出した。一人は魔力で生み出した壁を蹴り、一人は膨大なマナをそのまま支配した蒼の翼をもって。雷で穿たれ、全身を切り裂かれた海魔はその怒りに任せ、二人に飛び掛る。
　何十メートルともなる腕を、その自重を無いかの如く自在に振り回し、叩きつける。空を切ればそのまま海に叩きつけられ大波を引き起こした。
　触れれば一瞬で圧死する。それほどの速度と質量を前に、二人はまるで宙を踊る木の葉のように攻撃をかわしていく。一度たりとも攻撃を受けられない。常に命を賭すその戦いを二人はこなれた風にこなしていく。
「【空断】」
「【蒼焔】」
　そして続け様に繰り出される蒼と赤の光の渦はその醜悪で巨大な身体を引き裂

き、焼き焦がした。その冗談のような体格の差とは真逆に、二人の人間はクラーケンを圧倒していた。
　とはいえ、これで終わるほど、伝説の海魔は貧弱ではない。
「IIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIII!!!!!!!!!」
　再び響く奇怪な音。鳴き声ではない。そのあまりに巨大な身体が蠢く事で海風が巻き上がり、鳴り響く振動音だ。そして同時にその大木のような腕を、山のような身体を乗り出した。残る腕の全てを伸ばし、二人を囲うようにして高く伸ばし、そして振り下ろす。
　それは最後の足掻き。生まれて初めて訪れた命の危機からの焦りだった。
　それ故にその行動は、浅はかだった。

「【天墜】」

　響くのは、この場にそぐわぬ何処か高い子供のような声。
　空が割れる。暗雲が尽く弾け跳び、訪れるのは太陽の光、では無い。それは細やかに、何処までも精緻に描かれた巨大な魔術術式。起動するのは計算され尽くした複合魔術。対象を穿ち破壊することを目的とした魔術の発射口。
「【【【【神魔禁縛】】】】」
「【封印結界・反転】」
　海魔の腕に囲まれていた筈の二人が巨大な魔術術式の外へと転移し、クラーケンを束縛する。蒼の光がその腕をまとめて縛りつけ、赤の術式がその身体を覆い尽くし全てを封じる。身動きが全くとれず、もがく海魔に、空の術式は光を放ち、

「【焼き払え】」

　瞬間、爆光が天から堕ちた。膨大な熱を伴ったその光は巨大な海魔の中心を穿ち、砕き、焼き払う。あれだけ二人が攻撃を加えてもしぶとく再生を果たしたその身体は、一切の痕跡も残さず光の中に溶けて消えていく。

「IIIIIIIIIIIIIIIIIIAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAaaaaaaaaaaaaa……」

　最後の断末魔の音と共に、巨大海魔は光に消えた。
　残されたのは、膨大な熱の余波で生まれた大量の水蒸気。
　そして、それを傍から眺める二人の男女と、
「やあ、二人とも、お疲れ様」
　空から降りてきた、幼い子供の姿をした男。
　その暢気な声に、二人の男女小さく溜息をついた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　オルフェス学院学院長室。
「やあ、本当にお疲れ様。お二人とも」
　オルフェス学院長ミストは、目の前でぐったりと座り込む二人を前に労うように爽やかな笑みを浮かべた。浮かべたものの、それがどちらかと言えば逆効果である。本人も気がついてるらしいが、笑みは止めない
「……いや、流石に最近疑問に思いますよ。僕等教師でしたっけ？」
「……」
　シールは呻き、リーンは疲れてるのかうつらうつらしている。
　今回、彼らは例の如く学院長の命令で再び復活した古代獣の相手をさせられたのだ。場所は南東、アダリアの方角とは真逆の方角で、ゴラン帝国との国境近くだ。
　ドラゴンやら巨大ワームやらときて、今回は知性無き巨大海魔だ。伝説やら何やらと語られるバケモノ達、その殆どと既に戦った経験があるというのも果たして人間としてどうなのだろうか。
「僕だって学院長なんだけどねー」
　二人に対してミストは何処となく余裕な感じだ。彼とて決して楽な立ち回りを演じていた訳ではない筈なのだが、そこはやはり経験地の差、とでも言うのだろうか。
　シールやリーンとて並外れた経験を重ねてきた筈なのだが……

「さすがは妖怪」
「なんか言った？」
「いいえ、なにも」
　シールは面倒くさそうに否定すると、もう一度溜息をついた。ともあれ疲れた。あそこまでしぶとく生き残る生物と言うのは流石に知らない。ミストの大魔術のように全てを根こそぎ消滅させなければ、再び復活しかねないほどの生命力だ。
　生物、というよりも精霊、否、悪霊の塊といった方がいいかもしれない。
　そんな存在と大立ち回りをするのは、疲れる。
「まあ、不満はあると思うけど、君達の選択だしね」
　その疲労を察してかミストは笑う。そう、確かにその通り。ミストに従うのはシールとリーンの選択だ。幾つも示された道の内、自分達が選んだ道なのだ。だから不満こそあれ、この選択肢を選んだ事実に何かを言うつもりは二人には無い。
　しかし……
「少し疑問があるだけです。何が楽しくてこんな苦労ごと任されてるんですか」
　大魔獣の復活やらなにやら、こうした大問題は度々シールやリーンに任されるが、大本はミスト学院長の仕事なのだ。彼が引き受け、二人は手足となって戦う。言うなれば二人はミストの代理だ。
　ではそのミストは、何故に戦うのか
「最初に言わなかったかな？　力ある者の義務さ。今回の件だって、普通の兵士に任せていたら、一体どれだけの被害が出た事か」
「その理屈は分かりますが、自分の為に力を使うという事はしないんですか？」
「無理さ。君達もそうだろうけど」
　ミストの笑顔が変わる。先ほどまでの子供のような無邪気な笑みから、何処か長年の記憶の蓄積を匂わせる、老獪な笑みに
「僕等は無関係の人間を助けるほど、お人よしに育った覚えはないですけどね」
　シールの声にミストはそうかい？　と、首をかしげた。どこかイヤミったらしいニヤニヤとした笑みと共に、
「君達の目の前に犬がいたとしよう。哀れな犬だ。両脚が折れているのか自分で

狩りはできない。腹が減ってるのだろう。哀れっぽく泣き声をあげて、骨が浮いて見える。そして君達は背中に大量の食料を持っている。一人では持ちきれない食料をだ」
　さて、君達はその犬を素通りできる？
　ミストは問うた。見捨てられるかと。その目の前にいる犬を助けずに、情も無く容赦も無く、見捨てる事が出来るのかと。シールは苦々しく溜息をついて、
「いいえ」
「……」
　リーンも口にはしないが、答えは一緒だろう。だからこそミストの問いにつまらなそうな顔をしているのだ。
「君達はそうしてしまう。君達はとてつもなく過酷な世界にいて、馬鹿馬鹿しいほどに残酷な経験を重ねたのに、その魂はまっとうだ。だからこそ、君達は罪無き弱者に振り回される」
　罪無き弱者。自分では驚異に抗えない者達にまとわりつかれ、喰らいつかれ、最後には骨まで砕かれて、殺される。そういうものだ。見返りを求めない善意は、一瞬で食い尽くされる。
「まあ、僕が介在してる以上、頼られすぎて破綻する事は無いと思うけどね」
「今も十分過剰すぎる頼られ方してると思いますが」
「ま、今の状況は少し異常なのは認めるけどね」
　頻繁すぎる古代獣の復活。通常の人間では対処しきれないレベルのバケモノの数々。ここ数年で激増したそれらへの対処。影で暗躍する謎の組織。
「ま、そこら辺はこっちの仕事だね。そこら辺は任せておくといい」
　そう言うと、再び学院長は子供らしい無邪気な笑みを浮かべ
「今度の休日、二人でゆっくりしなよ。仕事は処理してあげるからさ」
　そう言い笑う。
　シールはふむ、と頷いて、横で何処か眠たそうに座るリーンを見つめ、
「リーン先生、今度の休日の予定は？」
「ありません」
　それなら、とシールは口を開き──

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　オルフェス学院、食堂。
「という訳で、明日、リーン先生とデートする事になりました」
　シールの宣言に、周囲で同じく食事を取っていた教師陣は食事を進める手を止めて、暫くその宣言を吟味するように間を空けた。
「いきなり何を言い出すかと思ったら、のろけかい。シール先生」
　口火を切ったのは彼の隣で食事を勧めていたファン教師だ。瞳にかけた眼鏡を指で持ち上げ、何処か皮肉そうな笑みを浮かべる。
「こっちは君の残した課題作成に苦労させられたっつーに」
「今度何か奢りますから勘弁してください。ファン先生」
　シールが学院長の〝私用〟に巻き込まれた時、フォローは大抵ファン教師にまわされる。数学の授業を受け持つ彼は仕事が非常に手早く、色々な教師からも頼りにされている。勿論シールも彼を頼りにする事は多い。結果として何かと高いものを奢らされる羽目になるのだが。
　自分の所為ではないということを考えると理不尽さを感じはするものの、まあ仕方ないと割り切っている。
「デートですか……いいですねぇ。私も若い頃は妻と……」
「コーウィン先生ー、とりっぷしないでー」
　シールの言葉に何か昔を思い出したのか、魔法薬教師のコーウィン教師が昔話を語り始め、それを魔科学のマルコ教師がのんびりと引き止める
　何故に男性教師全員で食事をしているのかというと、これは学院長の提案だったりする。教師人の連携を強めるなら、一緒に食事をとった方がいいよね！　なんていう中々にお天気な方針なのだが、比較的仲良くいってるのだから面白いものだった。
「ともあれ、楽しんできます。のんびりと」
「しかし、リーン教員となあ……なんつーか」
　ファンは暫く唸り首を傾げる。
「なんでしょう？」

「……いや、ロマンチックな展開が期待できんの？」
「ああ……無理でしょうね」
　シールは爽やかな笑顔がすっぱりと断言した。ロマン？　そんなもの、起こるわけが無い。そんなあまっちょろい考えを持っていては彼女とは付き合えない。
「まず第一に彼女を暇させないようにしないと、勝手に帰る可能性が」
「……いや、なんてか、それ、どーなん？ 男として」
「まずデートっていう形までこぎつけた時点で幸運です」
　シールのその悟りきった笑顔に、ファンは苦い笑みを浮かべた。あのリーンの美しい容姿は学院でも知らぬものはいないが、同時に彼女の凄まじい鉄面皮な性格も知らないものはいない。
「やー、うん……頑張れ」
「ええ、本当に」
　コーウィン教授の長々とした自慢話ＢＧＭに、シールは頷いた。比較的真剣に。

本編に入ろうとしたがそんな事はなかったぜ。
デート編です。果たしてまともなデートとなるのか分かりませんが。

第百五話 リーン先生の比較的波乱な一日 ②

　場所は再び、食堂にて、
「という訳で、休日、シール先生と出かける事になりました」
　リーンは目の前のハムをフォークで突付きながら、共に食事を取っていたリトとメリアに向けてそんな事を呟いた。
「……」
「……」
　二人は、そのリーンの言葉を聞いてから、暫くそのままの姿勢で停止していた。メリアは暫く頭を掻きながら、息をつき、そして冷静に務めるようにと頭を指で叩いて、そしてリーンへと顔を向けた。
「リーン？ 休日に遊びにいく？ シール先生と？」
「ええ」
　首肯するリーンに、再びメリアは額を指で叩き
「……それはつまりデートという事よね？」
「遊びに行くだけですよ？」
「うら若き男女が休日に共に遊びに行く事をデートと称する以外何があるのよ」
　そうなんですか？　とリーンが首を傾げる。果たしてこの女はマジでいってるのかとメリアは思った。いや、しかしまだその事はどうでもいい。正直彼女が中々にトンだ性格をしているのは既に知っている。長い付き合いなのだ。
　問題なのは、そう、問題なのはだ。
「そう、あんた、休日にって言ったわよね」
「ええ」
「……休日って、今日よね」
「そうですね」
　その休日は、今日、である。当日である。三人は今の今まで今日の休日はどう

するか、暇なら三人で遊びに行くか、などと話していたのだ、その最中リーンがぶっちゃけたのだ。
　リナはおずおずと手を上げて、
「……つまり、今からですか？ じ、時間は？」
「ロマールなら転移術で行けますから一瞬でいけます」
「……その格好で？」
　リナに指摘され、リーンは自分の格好を見下ろしてみる。彼女が今纏っているのは余所行きの私服……ではなく、何時もと同じ、教師の制服だ。そう、教師の制服なのだ。
　リーンは自分の格好を眺め、その後二人にしっかりと頷いて見せ、
「大丈夫です。汚れてません」
「大丈夫な訳無いでしょうが！」
　メリアがキレた。のんびりとトレイのお野菜をフォークで突付いているリーンの首根っこを引っつかみ、引きずり食堂を出て行く。リナは慌ててそれについていった。
「こちとら男を漁る暇も無いってのに、全く！」
「まだご飯食べてません」
「お黙り。リナ先生、手伝ってください」
「は、はい」
　そんなこんなで三人は食堂を後にした。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ロマール、王都ガイディアからおおよそ東に位置する大きな街。古くから存在する劇場を中心に発展を遂げた街で、日ごろから歓楽街として様々な店と人が集う明るく華やかで、少し騒がしい街。中心にはロマールを象徴する大型の噴水があり、魔導機械による仕掛けで夜にはマナを集め仄かに光る水を噴射し、人々に親しまれている
　そんな噴水に備えられたベンチに一人の女がいた。一人の、美女が。
　一目見ただけで意識を全て持っていかれるような端整な容姿、白磁の様に白く美しい肌に何もかも見通す澄んだ瞳、流れるような蒼い髪を丁寧に結われ、まと

められている。いま少し流行の肌を晒す衣服は彼女のその現実離れした美しさを更に引き出していた。
当然彼女の姿は明るく騒がしいこの街でも一際目を引いた。真に美女とはこういうものだというようなそのたたずまいは、老若男女、あらゆる人種の人間の意識を引いた。
　そして当然、悪意ある者の意識も。
「お姉さん。此処で何してんの？」
「彼氏でもまってんのー？」
「綺麗だねーちょっと俺らとあそばねー」
　気が付けば彼女は、何処か真っ当でない風を漂わせた男達に囲まれていた。
　彼らはこの街ではそれなりに有名な、言うなればならず者集団だった。まともな職に付かず、時に弱者に暴力を振るい金銭を巻き上げ、時に女性に乱暴を働く、典型的な札付き。
　しかし彼らが咎められることは無い。彼らのリーダーが、この街の大地主の息子であるからたちが悪い。彼らは無法を好きなだけ働き、ソレを自由に出来る立場の上に胡坐を掻いていた。
　そしてそんな彼らがその美女に目をつけられた。彼らを知る街の住民達は女性に逃げるよう言いたかったが、そんな事をすれば自分達に矛先が向くことは分かっていて、言い出せなかった
　男達は彼女を完全に囲むようにすると、明らかな威圧をかけながら女に迫っていく。
「ちょっと俺らと遊ばない？」
「別にいいだろ？ 少しくらい」
　声色に隠れた暴力性、言外の脅し。何時もの彼らの手口だった。そうやって無理矢理連れ立って、その後暴力を働く、なんとも卑劣な手口だった。
　しかし女はその場を動かず、ただ僅かに首をかしげ、
「質問です」
「あん？」
　彼女はその涼やかな瞳をならず者達に向けて、問うた。
「貴方方は何時もこのような事を？」

「あ？　　……あーそうさ。この前は一五くらいのガキを案内してやったんだっけ？」
「そうそう！　　　最初はギャーギャ喚いてばっかだけどすぐ泣いて謝ってきてな！」
「あれは笑えたな！」
　と、なんとも聞いていて眉を潜めたくなるような笑い声と共に男達は自らの悪行を語りだした。それが自慢だとでも言うように。すると女はその悪行の説明をきちんと聞き終えた後、納得したように頷き
「なるほど。安心しました」
　次の瞬間、彼らの足元には幾重にも交じりあった巨大な魔術術式が発現した。
「「「「は？」」」」
　騒がしい街並みで一際大きく響くその爆発音は、日ごろからそれに聞きなれている学院とは違って酷く目立った。

　それから数分後
「やあリーン先生。お待たせしました」
「遅いです」
「すみません……素敵ですね今日の姿は」
　遅れてやってきた、少し小洒落た格好をしたシールはリーンを前に微笑んだ。
　見るとリーンは珍しく、といっては失礼だが、綺麗に着飾っている。式典の際のような格式ばった服装ではなく、その年の女性らしい落ち着きと彼女自身の持つ魅力を際立てる可憐な姿だ。素晴らしい、とシールは少々大げさに感動していた。学校の制服でやってくる事も実は覚悟していたのだが。
　そう、素敵だ。だからこそ彼女の足元に転がる黒こげの何かについては考えない方がいいだろう。うん。
　リーンはシールの賞賛に首を傾け、両手を上げるような仕草をして
「メリアたちに無理矢理着せられました。動きにくくて面倒です」
「では、まずは動きやすい服を何着か買いに行きましょうか」

そう言ってシールはベンチに座るリーンへと手を差し伸べた。リーンはしばらく掌をじっと睨んでいたが、何か納得したのか、シールの手を握り立ち上がった。
　そのまま二人は華やかな街並みへと足を踏み出した。

タイトル　後編で終わる気が全くしない件について
後で数字か何かに変えます（笑

第百六話 リーン先生の比較的波乱な一日 ③

　中心街から少し外れた敷地に存在する大きなお屋敷。
　ロマールの大地主の住むその屋敷は、派手さの無い、しかし相応の年月の中で自然と生まれた風情があった。
「だから！ あの女を捕まえてくれよ！ 親父！」
　その大きな屋敷の中で物騒な声が木霊する。
　此処は屋敷の執務室。座るのはこの屋敷の主にしてこのロマールの重鎮、バルドス。この街が大きくなる以前からその職に就き、以降極端な成長を遂げたこの街のバランスを整える為に奮闘したこの街の影の貢献者だ。
　そして相対するのは何故か体中煤けて黒焦げになっている男。それはつい先ほどリーンによって大爆発させられた男、名前はジョウン。対するバルドスの一人息子だ。
「俺達はただちょっと遊んでやろうとしただけなんだ！　それなのにあの蒼髪の女は！」
　ジョウンは口を閉じ、ただ自分を睨むバルドスに矢次に先ほどあった爆発の経緯をまくしたてる。先の一件は、父の権力を傘に何時も大きな顔をしてちょっとした王様気分だったジョウンにとって信じられない屈辱だった。
　だからこそ彼は父親に事を話した。バルドスは何時も不機嫌そうな顔をしていながら、息子であるジョウンには何時も甘かった。何か彼がねだればすぐに使用人にそれを用意させるほどに。
　だからきっと今回もまた、父が何とかしてくれる。そう信じて……しかし、彼の父は、彼の話を最後まで聞くと、何時もの厳しい表情をしたまま、ずっと下を向いている。
「お、親父？」
「……この」

え？　と、小さすぎて聞き取れず、ジョウンが聞きなおそうとした、その瞬間、
「この、愚か者が!!」
　その声に含まれたあまりの迫力に、ジョウンは飛び上がった。
　この街がまだ小さな劇団のある村でしかなかった時から此処を死に物狂いで支えてきた男の力強さに、その息子は一瞬で恐縮した。何時も彼の言う事を黙って聞いてくれる父親から、未だかつて無いほど怒りが渦巻いていた。
　彼が言葉を失っていると、バルドスは大きく溜息をつき、その目を掌で覆った。ジョウンは父のそのあまりに疲れた様子に声を出せずにいると、バルドスはそのままの姿勢で、
「……蒼髪の女、貴様はそう言ったのか？」
「あ、ああ、そ、そうだよ。その蒼い髪の女が俺に」
「蒼の髪は自然と生まれるものではない」
　突然何を言い出すのだろう。と思ったが、やはりビビって声の出ない彼は黙って父の話を聞いていた。
「蒼の髪とは全身の髄、髪先に至るまで高純度のマナを収束している証拠だ。人間という枠では収まりきらない程の収束を体現している証拠だ」
「……」
「【勇者】を例外として、神の加護を受けたものでもそこまでのマナの収束を体現出来る者は少ない……歴史的に見て、【蒼の髪】を人間が体現した例は数えるほどしかない。それも、一部分が、というくらいが精々だ」
　そう。だからこそ輝くような蒼髪を体現した人間などというのはそういるものではない。光の加減でそう見える、なんていうのはあるかもしれないが、蒼という色をそのまま体現するなんてこと、絶対にありえないのだ。
　本来なら。
「その女は全ての髪が蒼かった。そうだな？」
「あ、ああ」
「そんな現実ではありえないような事象を体現した女は、この世に一人しかいない」
　そういい、彼の父は何処か重々しい声と共にその名を口にした。

「リーン・エリクス。この国に存在する最終兵器だ」
「……へ、へいき？」
　あまりに突飛な言葉にジョウンは目を丸くした。兵器？ 人間が？
「暗黒時代が生み出した最悪の魔女。【平和主義者ぎゃくさつしゅぎしゃ】【魔眼】と共にたった三人で万の兵士を滅ぼしたとされるこの国の秘蔵中の秘蔵」
　この情報は暗黙のうちに隠されるようになったが、この大きな街を管理する身分の人間として、彼はこの彼らの事を把握していた。遊び半分で触れてはならぬ禁忌、とはいえその禁忌を理解しなければ、不用意に踏み込むような真似をしてしまいかねない。
　だからこそ彼はそれを知り、その〝キワモノ〟が現れた時は最前の注意が払うよう心がけていた……だというのに
「で、貴様は何といった？ 生意気だった？ 黙らせようとした？」
「え、い、いや、あれは」
「お前はこの家を、否、この街を潰す気だったのか？」
「いや、だって、知らなかったんだ！」
「知らなかったで済む問題ではない。自分の立場も弁えず、この国の最大の爆弾に手を突っ込み、知らなかったと言って何千人と言う人間が死んでも、お前が許されると思うのか」
　極端な話だ、と、笑う事は出来ない。何故なら彼女の、彼女達の存在はそれほどまでに特異で、異端だからだ。しかしだからといって、その特異とて、下手に手出しせず、何事もなくただ日常を過ごしてさえいれば、決して爆発を招くようなことは起こり得ない。
　ところが、バルドスの目の前には、その爆発を引き起こすような愚かな真似をした馬鹿がいる。だからこそ、彼は怒り狂っていた。
「面倒だからと貴様に好きにさせていたのは俺の過ちだった。まさかこんな下らん真似までしていたとは。全く、自分の迂闊さに呆れて言葉もでん」
「お、親父」
「お前には騎士団に入ってもらう。……後ろ盾も無い新入りとしてな。その腐りきった根性を徹底的に叩き潰してもらう」
　父親の無慈悲な、冷酷なその瞳と言葉に、息子は哀れな悲鳴を上げげた。

さて、そんなこんなで一人の悪漢の断末魔が街の何処かで響いていた、その頃

「このシュークリーム美味しいです」

「それは上々。ああ、このパイも美味しいですね。リーン先生」

「ください」

「どんな即答ですか……口あけて、なんです？」

「……」

「……」

「……」

「……あーん」

「あむ」

最終兵器と称されたシールとリーンの両名は、美味しいと噂の菓子店で、のほほんとマヌケなやり取りをしていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

デートとは、いかに相手を楽しませるかが重要である。

などという陳腐すぎる上に当たり前すぎる言葉をシールは何処で耳にしたのか覚えていない。がこの言葉の通りだとすると、リーンに対しては実の所簡単に実行に移すことが出来る。

具体的にどうするか。

一、適当な甘味所を探して店に入る。

二、好きなだけ甘いものを食べさせる。

以上だ。間違いなく彼女はその日中上機嫌であろう。

しかし果たしてこれがデート、と呼ばれるものなのだろうか、と考えると、首を振らざるを得ない。これではデートというよりも、餌付けだ。そもそもデート

とは自分も共に楽しまなければならないのではないだろうかとも思う
　という訳で今回、シールは一つ目標を立てた。
　即ち、リーンとあくまでも〝真っ当に〟デートするという事だ。
　なんとまあ、えらくハードルの低い目標のような気がするが。
　既に衣服の買い物を終えている。菓子店もめぐり、基本的にはもう今日の目的は達している。達してはいるが、此処で終わるつもりはシールには無い。確固たる意思を持ち、断固とした決意でデートするのだと、既に心中で誓っている。
　……果たして、そんな決意でもしない限り成立しないデートが果たして健全なのかそうでないのかは別としてだ。
「ありがとうございましたー」
　菓子店を後にして、シールとリーンは並んで歩く。購入した衣類は既にシールが封印術で保存している。物質を記憶しマナに分解してコンパクトに収納。そんな芸当が出来るあたりシールの技能は非常に便利だった。
「美味しかったです」
「たくさん食べましたねえ……」
　相当数のケーキを胃袋に放り込んでおきながら何時も通りのしれっとした表情で満足げな言葉を呟くリーンに、シールは僅かに苦い笑みを浮かべた。チラリと身体を眺めてもまるで細いままだ。あれだけ食べたケーキは一体何処に消えていったのか。今更な話だが。
「さて、次に行きましょうか」
「何か予定でもあるのですか」
「ええ、一応は」
　これから向かう場所は、恋人同士のデートとしては定番といえば定番の、鉄板とも言えるところだった。当たり障りの無い、と言ってしまえばそれまでだが、やはりこの街に来た以上、見逃す手は無い代物。
「ロマール劇場のチケット、一応特等席で買ってあります」
　このロマールの街の中心、此処がこれほどまでに大きな街となった、その核とも言える場所だ。かつては小さな酒場のような所で行われていたその演劇も、今や千人以上の観客を取り込める大劇場で行われている。人気も高く、他国からわざわざ訪れる人もいるとか何とか。

そんなロマール劇場の特等席、ともなると相当なコネと金が必要なのだが、試しに学院長に入手を頼んでみたら至極あっさり手に入れてきた。果たしてどんなコネを持っているのかシールには最早想像も出来なかった。

　ともあれ、そんな首尾で手に入れたのだった。

「演劇、ですか？」

「興味がありませんか？ それなら別のところを探しますか？」

　正直、これで興味が無い、といわれたら泣くに泣けないのだが、とはいえこの予定は此方が勝手に決めたもの。受け入れなければ諦めよう。チケットは適当に誰かに譲ってしまうのもありかもしれない。かなりの額が注ぎ込まれているが。

　さて、とリーンを見てみる。リーンは渡されたチケットをじぃっと見つめ続ける。これから見る予定の演劇はストレートなラブロマンス、とは違う。今流行の演劇作家が描く架空の歴史の王権を誰が担うかで争う王子らとそれを憂う王と妃、そして巡る他国との戦乱を描いた非常にボリュームのある作品だ。完成度は高いらしく、巷でも噂となっている。

　単調といってはアレだが、彼女がロマンスを好むとは少々思えなかったので、ストレートに面白そうな作品をチョイスしてみたのだが、どうなのだろうか。彼女の様子を見るに、決して興味が無いわけではないらしい。

　非常に変わり者の彼女だが、かといってそうした物語を楽しむ趣向に理解が無いわけではない。彼女とて小説等は読むし、楽しみもする。無表情のままだが。

　そうして、暫くチケットを睨み続けていたリーンは、ふと顔を此方に向け、

「シール先生は見たいのですか？」

「リーン先生と一緒に見たいですね」

　シールがそう返すと僅かにリーンは首を傾け、シールを見つめた。そしてそのまま

「では、行きましょうか。私も見てみたいです」

「ええ、それでは」

　シールはリーンの手を握りながら、ほっと肩を撫でおろした。

　果たして、最後の〝見たい〟という言葉がどちらにかかっているのか、少し気にしながら

第百七話 リーン先生の比較的波乱な一日 ④

　ロマール劇場
　街中の寂れた酒場から始まったこの劇場は、今はそのかつての酒場の面影は無い。人気と共に度々改築を繰り返し、大きく立派になっていったこのホールは最早数千人を飲み込む程の大きさに変貌を遂げていた。
　その景観は素晴らしく、随一の建築士達によって築かれたその姿は、優雅な宮殿をも思わせるほどだった。
「はあ、随分と立派ですねえ……」
「それだけ人気なのでしょう……」
　そんな劇場の前にシールとリーンの二人がぽかんとした顔で突っ立っていた。流石に目の前に立つと威圧感がある。一応この劇場の、しかも特等席で今から見物する事になるのだが。
「正直、肩が凝りそうです」
「なんというか、王城よりも緊張しそうですねぇ」
　かなり失礼な事を喋りながら、シールとリーンは首を傾けた。とはいえこの劇場はそこまで格式ばったものではない。そもそもが酒場のショーが出自なのだ。これほど劇場が大きくなった今でもそのスタンスは変わらない。劇作も庶民に受け入れる構成だ。
「まあ、楽しみに来て緊張するというのも馬鹿馬鹿しいですし」
「それは、そうですね」
「折角特等席をとったんですから、楽しみましょう」
「特等席って何が特等なんですか？」
　リーンに問われ、はて？　とシールも首をかしげた。とりあえず学院長に頼んだらその特等席のチケットが手に入っただけで、正直何がどう特等席なのか良く分かっていない。なのにお金だけはしっかりと払わされたのだから少々理不尽で

はある。
　別にこうした劇や何やらを嗜まない訳ではないが特等席は始めてだ。
　シールとリーンはそろって暫しの間、黙考し、
「……見えやすい場所とか？」
「椅子がフカフカとかですかねえ」
「大きいのかもしれません。王座くらい」
「わあ、凄そうですねぇ」
　そんな、非常にほのぼのとした想像を二人で興じた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「いらっしゃいませ、シール様。リーン様。どうぞ此方へ」
「……」
「……」
　そして、実物とくとうせきを見て、衝撃を受けた。
「……気楽に楽しめそうに無いのですが」
「……凄いですね。これは」
　シールもリーンも、ロマール劇場の特等席というのを舐めていた。仮にもこの国随一を誇るような巨大劇場、庶民にも親しまれるほど敷居が低いが、だからと言ってその上限まで低いとは限らない。
　チケットを係員に見せた瞬間、非常に丁寧に案内された場所は、なんと言うか、まず席ではなかった。いや、椅子はあるんだが、その椅子がある場所が、凄い広かった。どう見ても個室レベルの広さだ。
　前方の壁は窓のように広く開かれ、そこから舞台が一望できるようになっている。中央には豪奢で非常に柔らかなソファーがデンとあり、そこから舞台を眺める事が出来るようになっているようだ。
「広すぎて落ち着きません。私の部屋より広いです。此処」
「普段の生活と違いすぎますものね。一応金は持っているのに」
「基本本を買うか、甘いものを食べるかくらいしかしてません」

「あー、僕は本とお茶ですね。後、茶菓子」
　何度も国を救ってる割に、酷く安上がりな二人は、目の前のセレブ空間に威圧感を覚えていた。とりあえず座ってみると体が沈み込むと同時に絶妙な反発があり、一体何が詰まっているんだとシールはソファーを突付いて首をかしげた。
　すると、先に挨拶をした後に、部屋の隅で待ち構えていたボーイがさっとシール達へと近づき、頭を下げ、
「何かお飲み物はいかがでしょうか？」
「……あー、どんなものが？」
「アルコールの類も用意できますが」
「ああ、いえ、ジュースでいいです。軽く飲める果実系のものを」
「了解しました」
　それだけ言うと爽やかな笑みと共に給仕係は去っていく。なんというべきか、無駄なく、周囲に不快感をもたれないための完璧に訓練された動きだった。正直ちょっと怖い。
「というか何も考えずに喋ってますけど、劇場なら周囲に迷惑では？」
「防音魔術付きのようですよ。外からは此処はただの壁に見えるとか」
「徹底してますね」
「完全なプライベートルームですね。あ、フルーツまである」
　瑞々しい果物が皿に盛られている。触れてみると冷たい。よくみれば保冷術式がかけられているようだ。瑞々しくて、一つ摘んでみると新鮮な果汁が溢れ、美味しかった。
「なんだか、典型的な悪徳貴族の部屋にありそうな代物ですね」
「後は白猫がいれば完璧ですね」
「用意しましょうか」
「「結構です」」
　二人で声を揃えて否定すると、構えていたボーイさんは爽やかに了解しました、とそう言って、用意したジュースを並べて去っていった。もしシールが用意してくれといったら用意するつもりだったのだろうか。
「……したんだろうなあ、多分」
「どっから連れてくるんでしょうね」

「用意してあるんじゃないですか」
「さすが特等席……！」
　まるで何の役にも立たない、アホな推測とアホな会話だった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　劇の始まりは静かで、厳かだった。
　丁寧に語られる世界観、そして同時に役者達が動き出す。場面は闇に残る王座、座るのは老い果て暗い影を顔に残す老王。既に演目で語られている、己が人生を語りだす。
　この場にいる殆どの者が理解している展開。だが奏でられる重厚な音楽と共に、魔術で拡声された役者の口から語られるその言葉は、深く、そして魂を震わせる。そこが劇場であり、演劇である、その当たり前の認識を一瞬で拭い去り、観客を一気にこの世界に引き込んだ。
　舞台が暗転し、場面が変わる。才覚溢れた個性ある三人の王子らの登場だ。野心ある者、賢明なる者、怯える者、それぞれが言葉を交わし、憤り、嘆き、争う。時に面白おかしく、時に激動の音楽に合わせて、単なる対話でも視聴者を飽きさせぬ仕掛けで視聴者を引き込み続ける。
　事態は流れ行く。
　病を患う王。動く事態、迫る王権の行方決断。
　王の葛藤、王子らの想い、同時に揺れ動く世界。
　見世物としては堅さのある王権の争い。しかしそれを感じさせぬ畳み掛けるような展開と、感情移入できる魅力的なキャラクター達、それを演じる役者の白熱の演技。
　シールはそれを特等席で眺めながら、感服していた。
　魅入られる。魅入られるように役者の演技も、台詞も、舞台の準備も証明も音楽も、何もかもが見事に調和している。話の好みなどといった問題ではない。ただただひたすらにこの演劇は極められていた。
　人気だって出るのも道理だ。シールは納得する。そしてそんな演劇を特等席で

見られる事ができた事を、学院長にひっそりと感謝した。リーンもまた、表情こそ変えぬが、瞳をじっと前に向け、劇に集中している。とても真剣に、楽しんでいるのがシールにもわかり、少し嬉しくなった。
　この場所を選んでよかった。正解だったと。
　意識を再び劇に戻す。舞台では役者達が大立ち回りを演じている。戦火の中、裏切りと弾劾の声が響き、若き王子が絶叫する。薄っすらと鳥肌すら立つような魂の演技。世界を呪うような彼の引き裂くような悲鳴の背後から、裏切りの騎士がゆっくりと近づいて行き──
　そこで、パッと、おどろおどろしく照らされていた舞台が明るくなった。
「え？」
「は？」
　シールとリーンは揃って疑問の声を上げた。演出、と見るにはそれはあまりに唐突で、突拍子が無かった。それに舞台の役者達も一瞬、唐突に明るく照らされた自分達に戸惑いを見せている。客席もざわめき始めた。
　なんだ？　とシールが疑問に思う間もなく、客席から複数の男達が舞台に上がり込み
「貴様等！ 動くな!!」
　そう言って、役者達に魔術師の杖を突きつけた
　一瞬、何が起きたのか役者達も、客席の人々も、何も理解できずにいたが、舞台を警備していた者達が慌てて彼らを下がらせようと前にで、
「ちょ、ちょっと君達！ 何を──」
　そう、言ったか言わないかした内に
「【炎弾！】」
「っうぎゃぁあああ!?」
　その警備兵が、彼らの放った炎の玉を受け、ようやくその場にいた全員が、事態をようやく理解した。唐突に舞台に上がった彼らは、劇の演出でもなんでもなく、悪意を持ってこの場に立ち入った、無法者であると。
　そして、同じくそれを理解したシール達は、
「……」
「……」

押し黙り、すこぶるうんざりという顔をした。

第百八話 リーン先生の比較的波乱な一日 ⑤

　この世界において、魔術という存在が極めて万能の力を示す。
　日々の人々の生活を支える施設、日用品、医療、あらゆる場面で魔術は利用されている。勿論戦争利用など危険な流用もあるものの、それもまた、人の営みを支えるという意味では変わらない。
　魔術は今のこの世界における人の生活を支える要だ。
　それほどの万能たる活用が可能な魔術。故にその研究は常に多くの人々が、あらゆる方面から日夜努力を進めている。以下に効率よく魔術を利用するか。あるいは術式の簡略化、維持化。はたまた、魔導機械の転用方法を探るか。研究は長く、そして延々と繰り返される。
　研究者達は自ずと研究目的を同じくするものたちと徒党を組み、【魔術結社】として研究を更に効率よく進めようとする。そして今、劇場の舞台に無粋に乗り込み、魔術を放った無法者は、そんな【魔術結社】の一員達であった。
　何故に彼らがこんな真似をしでかしたのか。
　それは彼らの研究内容が、国から危険と認定されたからだ。
　魔術は有用であると共に非常に危険ともなりうる。至極当然だ。ガイディア国もそれは認識している。故に魔術研究は必ず、国へ年に一度研究内容を報告し、認可を得なければ行う事は許されていない。
　彼らはその検定に落ちた。そして憤怒した。
　自分達の研究は世界の平和の為の研究だ。確かにその研究の為多少の（……）の犠牲はあったものの、非常に有用であったと彼らは確信していた。妄執していたといってもいい。だからこそ怒り狂った。自分達を認めようとせず、資料のみを見て一方的に却下とした国家組織を憎悪した。
　そして、それ故の今回の暴走である。
　書類審査なんかでは自分達の研究の素晴らしさが分からないというのなら、ど

れほどまでに人類にとってこの研究が有益なのかを直接見てもらおう。彼らはそんな、斜め上な発想に到達したのだった。
「くそ！ 何処だ!?」
　魔術結社【次元魔導術式研究所】の所属員の一人はホール内を駆け回っていた。彼らは研究者である為に荒事の経験などない。しかし彼らが研究した〝平和の為の魔道具〟はホールを警備する警備員程度なら一瞬で倒す事を容易にしていた。
　劇場の客席にいる多数の人間は、更にその内から張り巡らせた包囲結界の中に閉じ込め、それは成功した。後はこの会場にいるであろうＶＩＰを探し出す事。通常の人間が三ヶ月働き得たその全額を注いでも手に入れられるか分からないような席を陣取るような人間だ。人質として非常に効力を発揮するだろうと彼らは確信していた
「あった、此処か！」
　巧妙に人目から隠されていたＶＩＰルームへの入り口を彼はようやく発見し、魔道具を構える。人に叩き込めば数ヶ月は意識を失うような代物だが、しかし生きてさえいれば問題ない。彼はそう思い、それを構え、中へと突撃し、
「「動くな」」
　完璧に目の据わった二人のカップルに赤と蒼の剣を突きつけられて、完全に思考停止に陥った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……さて、と」
　シールは目の前で感情を封印し呆然とした男を前に、腕を組んで息をついた。
　状況を整理しよう。現在この劇場は魔術結社（舞台を見ていると犯人達がでかい声で演説していた）が乗っ取っている。人質はこの劇場を見に来ていた観客全員。結界に閉じ込められ、一切外に出る事が出来ない。この隔離されたＶＩＰルームから探ってみても相当な結界だ。並みの魔術師では太刀打ちできないレベルのを、だ。
「魔術結社……か」

シールは学院長の依頼で何度かこの手の集団と戦った事はある。
　魔術師の集団というのは危ういのだ。特に同じ傾向の魔術師が集まると、自分達の研究は〝何をおいても優先されるべきだ〟という極端に偏った考え方に陥る場合が多い。行き着く先が人体実験やらなにやらといった、かつての魔術師への架空の妄想をそのまま具現化したような行動をとる事もある。だからシールが出番として必要になるのだ。
「……まあ、流石に劇場乗っ取りなんてしでかした馬鹿は初めてみましたけど」
　舞台で役者達を縛り、結界を張られ逃げられなくなった観客達を見張る男達を見て、シールは若干かを引きつらせて呟いた。向こうからは此方が見えない。また、音も聞こえない。だから安心して見ていられる。現状此処には先程やってきたテロリストの他は自分とリーン、そして従業員の男しかいない。
従業員の彼はシール達の行動に対して全く動じる様子もなく、テキパキとテロリストを縛り上げ、待機している。こんな所までプロのようだ。と、シールは感心した。しかし縛った所で、恐らく魔術結社の者達は、人質は一箇所にまとめるつもりなのだろうから、突撃してきたこの男を放置していては以上に気付かれる。何時までもこうしてはいられない。
　ではどうするか。シールは考える。状況は良くない。大勢の人たちが人質に取られ、しかも等しく全ての人々の命が脅かされようとしている。敵の数は分からず、街駐留の騎士達が来たとしても、どう動けるのかも不明。
　更に、敵は無謀に見えて、きっちりと高度な魔術を行使している。魔術結社と名乗るだけあって、逃げ出そうとした客をきっちり押さえ込む辺り相当な代物だ。外で構えているであろう騎士たちは隠密侵入など出来なくなる。救助は難航しそうだ。
　と、まあそんな事を考えもしたが、正直そんなところどうでもいいのだ。
　問題なのは、そう、問題なのはだ。
「……リーン先生？」
「……なんです」
　リーンが、物凄く不機嫌になっている事が、シールにはたまらなく恐ろしかった。例によって例の如く表情に変化は無い。しかしその全身から立ち上る不機嫌なオーラは見ただけで冷や汗が零れる。

しかし、一応彼女の意見も聞かなければ、とシールは覚悟を決め、
「……ええと、どうします？」
「どうするもなにも、私たちが何かするのは邪魔でしかありません」
　何処かスッパリと、リーンは言い切る。自分に言い聞かせるようにでもあった。
「この騒ぎ、間違いなく外で騎士が動いているでしょう。彼らは彼らなりの作戦行動をとり、馬鹿どもの制圧に乗り出すはず。私たちが勝手に動けば、その邪魔になる」
「まあ、その通りですよね」
　リーンの言う事は何も間違えてはいない。自分達が動けば、恐らくはこのテロリスト達は殲滅出来るだろう。だが、人質が全員無事に、となると話はまったく別だ。状況がつかめないこの場で、全ての人間に一切の危害なく、なんて神でもなければ不可能だろう。まして、その混乱を外部の状況の分からない騎士らがみればどうなるか、分かったものではない。
　此処にやってきたテロリストは一人。大規模な魔術を使用してはいるが人数的は多くはないだろう。ならばテロリスト達が下手な動きをしないよう見張りつつ、騎士達が動くのを待って、その動きにそって援助を、というのが理想だ。シールとてそう思う。
　そう思う。だが、あくまでそれは相手が真っ当であった場合だ。
　シールは感情を奪い取った男に近づくと、僅かに間を空けて、
「確認します」
　これは、あくまで念のための確認だ。念のため、そう念のための。だが、
「君達は秘密兵器のような〝何か〟を用意しているか」
「……している」
　確定だ。シールはそれを理解し、大きく溜息をついた。
　この質問は経験則だった。この類の研究者気質の犯罪者は、顕示欲が強い。研究とは結局の所、その成果を周囲から認めてもらわなければ満たされないものだ。そしてこうした犯罪に走ってしまったものは、認められなかったからこそ、暴走する場合が多い。今回彼らが襲ったのは劇場。人質とするにはあまりに膨大な人数のそれも、歪んだ顕示欲の暴走ととれば、理解できる。

結局の所彼らは見せ付けたいのだ。自分達の研究を、人々に。

　自分達は凄いものを生み出したのだ、と。つまり、

「自分達の研究成果である〝ナニカ〟を用意していると……何です？」

「……□□□□」

　語られたその言葉に、沈黙が訪れる。といっても、この場で口を開いているのはテロリストの研究者を除けばシールだけだったのだが、そのシールが口を開かず沈黙を続け、そして最後に大きく溜息をついた。

「……リーン先生。とりあえずこの場で待機を、ここから客席を監視して、馬鹿どもが馬鹿しないよう見張っててください」

「……」

　リーンは答えない。その代わり凍てつききった瞳でシールを睨みつけている。そういう反応となると分かっていたが、やはりそれを向けられると辛いものだ、と、シールはもう一度溜息をついた。

　デートは大失敗だな

　そんな何処か場違いな事を考えながら、シールは一人部屋を出て行った。

第百九話 リーン先生の比較的波乱な一日 ⑥

《我等の目的はただ一つ。この研究の無限の可能性を諸君等に知らしめることだ》

　ロマール劇場、その前に集結した騎士達を前に、劇場を乗っ取った研究者は魔術による幻影で、騎士達の前で演説をかましている。何処か熱に浮かされたような様子で言葉を吐き出す。自身の言葉に酔っているようでもあった。

《残り数刻、それまでに我等の研究の成果を形として認めよ。それができなければ国は我等の研究をないがしろにした己が愚鈍さをその身でもって思い知るだろう》

　そんな風に、言いたい事を言って、男の幻影は消えた。残されたのは周囲の結界を囲う騎士達と、彼らを更に遠巻きから囲う野次馬達のみ。

「魔術結社か……厄介な」

　ロマール在中の騎士団を指揮する騎士長は、現状の難解さに呻いた。

　ロマールの街は人の往来が激しく、活発だ。そして人の出入りが激しいという事はそれだけ犯罪の芽が出やすいという事に他ならない。国の定めた法等なんとも思わぬような犯罪者達との戦いを繰り返してるだけあり、その手合いとの戦いには慣れている。

　とはいえ、流石にこんな大規模な騒動を相手取った事はなかった。

「結界術式の解析は？」

「済みました。破壊事態は数秒で可能です……が」

「そうすればどうしたって相手にそれが伝わるか」

　状況は難航している。敵の動きは素人だとすぐに分かったが、扱う魔術は不相応な代物だ。術式解析の専門家を転移術で呼び出したとしても時間がかかる。この事態あまり時間をかけることは良くないが、しかしそればかりはどうしようも

ない。
　騎士長は僅かに拳を固め、解く。そして部下へと顔を向け
「全員に待機させろ。専門の魔術師が到着するまで手を出させるな」
「了解しました」
「敵が再び要求をしてきたら俺が交渉にでる。できるだけ時間を稼ぐ」
　下手には動けない。人質の救助が最優先だ。彼にもそれはわかっている。時間を稼ぐというのも難儀な事だが、今すぐに動けば確実に人質が犠牲となる。それだけは避けねばならなかった。
　唯一の懸念は、あの演説から滲ませた奇妙な自信。魔術結社は所詮研究者の集団だ。こんな荒事にはなれるはずも無い。それなのにあの幻影の演説は、自分達が成功を収めると信じて疑わない声色だった。
　何か、切り札がある？
　しかし、騎士長はその対処には動けない。そもそもまだ劇場へと立ち入る事すらままならないのだ。彼に出来るのは現状できる最善をするだけだ。慌しく動く部下達に指示を出し、報告を受けながら、騎士長は胸中に宿る不安を拭うように己が役割を全力でこなしていった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ロマール劇場、大道具倉庫室
　ロマールの最高の舞台を彩る為に用意された数々の大道具、しかし今、職人芸術家達によって仕上げられたそれらは無残にも破壊尽くされている。その代わりに地面に描かれるのは、不気味に青白く輝く巨大な魔術術式。
【次元魔導術式研究所】の研究の集大成だ。成功すればこの劇場には恐らく前代未聞の大混乱が訪れる事だろう。しかしそんな事彼らには関係なかった。彼らが注目しているのはこの術式が成功すること。そして成功した上で、自分達の研究を認めようとしなかった国の役人達に一泡吹かせる事だった。
　子供じみた復讐劇、それに彼らは酔っていた。
「もうすぐだ……！」
　魔法陣の中心で術式の詠唱を終えたテロリストの代表、先ほど幻影で騎士達に

脅迫をかけた魔術結社の長たる男は感極まる声で誰に向けるでもなく叫んだ。
「我等の集大成によって！　我々を見下した者達への復讐が成る！」
「へえ、そりゃ凄いね」
　感極まる、だからこそ背後からのその相槌に、男は暫く反応できなかった。
　数秒の時間を要してようやく、その声が全く聞いた事のない男の声と気が付き、
「!? 誰──」
　振り返る、だが、次の瞬間には術式に意識を喰われ、地面に倒れ伏した。同じくその場で術式を精製していた男達も次々に倒れる。残されたのは、それをなしたシールただ一人だ。倒れた男達を見下ろしシールは息を吐き、目の前の、異常なほど巨大な術式を前に、若干の眩暈を覚えていた。
　召喚術式。
　転移術の転用。向かうのではなく、招く為の術式。あの村の神殿で行われていた魔物を招く魔術と同じだ。しかしその手法は大きく違う。あそこで行われていたのは、特定の魔物を無作為に、個体差を鑑みずに何処からとも無く条件に合うものだけを招く召喚術だ。稼動範囲には限度があり、また、魔的な素養が高いものではなくてはならない。魔物ならその条件に合うが、例えば魔力を持たぬ一般人は転移術を使えない。だからあの村のあの組織は〝巫女〟などというまどろっこしい方法をとったのだ。
　しかしこれはどうも様子が違う。
　意識を奪った男から聞いた話「召喚術式の転移術転用」つまりある特定の〝何か〟を別の場所から一方的に此方へ転移させるという術式だ。なるほど確かに実現できれば相当だろう。あらゆる環境での活用が可能となる。世紀の大発明だ。
　実現できれば
　そんなものは不可能だ。シールは確信している。転移術に必要なのは莫大な情報だ。自分が今いる場所、そしてこれから向かう場所、双方を転移者が理解し、強く意識し始めて成功する。その意識を抜かせば転移は失敗、全く知らぬ場所に飛ばされたり、距離が伸びなかったり、最悪、その場で砕けて死ぬ事もある。
　転移術はそれだけ繊細だ。それを一方からの干渉で正確に狙った対象を呼び寄せるなんて不可能に近い。だが成功しようが失敗ようが、割を食うのは恐らく、

この場にいる全ての人間だ。だからシールは此処にきた。
　そして、自分の予想があたっていた事を知った。
「……既に召喚が始まっている」
　苦々しそうに、四方に敷かれた魔石から順調に魔力を吸い上げる巨大な魔法陣をシールは観察する。後数分、下手すれば数秒すればこの巨大な魔法陣でなければ招けないような〝何か〟が、無防備な観客達が山のようにいるこの劇場のど真ん中に現れるのだ。
　召喚され切る前に魔法陣を破壊するか？
　シールは自分の提案に首を横に振る。召喚術は基本的に転移術と変わりない。転移術が、転移をする途中でその術式効果を解かれてしまったらどうなるか。途中でマナルートの移動がキャンセルされ、その場で再構成される。
　つまり、下手すれば街のど真ん中に、ナニカが召喚されることになる。
　勿論そうならない可能性もある。例えばロマールから離れた郊外に放り出される可能性だってある。召喚術式がそもそも不安定な上、途中で召喚が遮断されたショックで途中で砕け散る可能性だってある……ある、が
「その可能性と、街中で危険物召喚の賭けか……」
　しかし当然、此処に召喚を許しても相応の危険を秘めている。何しろ此処にはシール達と同じく演劇を楽しみにしていた観客がごっそりといるのだ。その人々を背負って、シールは戦わなければならない。万一の成功に備えた賭けか、自身が無力な人々を背負って戦うか、二択。
　シールは暫くとんとんと、地面を蹴りつけ、首を振った。、
「……ま、いつもの事だよね」
　封印の術式剣を掌から生み出し、構えた。直後、魔力の光が満ちたり、大きな閃光が放たれた。召喚が完了したのだ。果たして何が出てくるのか。シールは目を細め、身構えた。
　……出来れば、途中崩壊してバラバラになってくれたら嬉しいんだけど
　人間だったら軽いホラーだが、この際文句は言うまい。そう思いながら僅かに息を呑む。光が消えていく。役目を負え光を失っていく巨大な魔法陣。そしてその中心で座する一つの影、それは
「……小さい？」

巨大な魔法陣の規模にしては小さい。シールは僅かに首を捻る。青白い肌。妙に生物らしい生々しさを秘めた丸いフォルム。不自然さを帯びた細く長い四肢、頭、らしき所にあるのっぺりとした一つの目。

そして、醜悪極まるその姿からこちらに向けられる、無軌道な悪意と殺意。

確信、アレは危険だ。故に、

「【封断絶剣・六連式】」

ナニカの周囲に封印術式の剣が発生する。それは包囲するように並び、数瞬の後に射出された。奇怪な悲鳴が響いたと同時に中心にいた肉塊はびくりと震え、一瞬で動かなくなる。

……死んだ？

あまりの呆気の無さに僅かに首を傾げる。あれほど自己顕示欲の高い研究者達が用意していたのがコレで済むだろうか？　　試しに細切れにしてみようか、とシールが動こうとした、だがそれ以前に、

「……魔法陣が」

再び脈打つ、そして輝きと共に備えられていた魔石から魔力を吸い上げ、新たに何かを招こうとしている。そして、まるで先ほどの再現のように光が満ちて、中心に新たなる召喚物、奇妙で、奇怪な肉塊が鎮座した。

「……連続召喚？」

先ほどシールが殺したナニカを潰すように現れたナニカ。先ほどよりも微妙に巨大だ。そしてもぞりと蠢いている。薄ら白い色の肉の塊が蠢く様は中々に冒涜的で、気色の悪いものだとシールは思った。

「まあ関係ないんだけど」

一閃、赤術式の剣を横薙ぎする。生き物のように伸びたその剣は肉塊の身体を奔り、僅かな間の後、肉塊は真っ二つに両断された。再び血飛沫が飛び散る。舞台の小道具などにぶちまけられる。シールはそれを確認し、そして周囲を見渡す。魔法陣は光を失っている。

……と、思いきやまたもや光が放ちはじめる。召喚が再び始まる。

「……失敗した、そうか。失敗なのか」

召喚に失敗した。あるいは召喚対象の規模が大きすぎて、分散されて召喚されてしまっている。多分あの魔物、らしき生物は元は一個の固体だったのではない

か。それが引き千切れて無理矢理呼び出されている。だから順々に召喚されているのだろう。この奇怪な、しかし悪意だけが満ち満ちた召喚物は、分断されながら此方に送り込まれているのだ。

　その事実を把握し、シールは何処か薄ら寒い気分になった。果たして自分が今刻んでるそれらが、どれほど真っ当でないものなのか、理解できてしまったからだ。

「君らは一体、何を作ったんだよ」

　地面に転がる犯罪者達をシールは一瞥した。明らかに自然が生み出した生命とは違う、不自然な、悪意に歪められた生命体。奇怪で、しかし四肢や頭があるところから、何処か人間の面影も見えなくも無いソレら。そしてそれを躊躇い無く惨殺する自分。考え想像するだけでどうしようもなく嫌な気分になる

　シールは繰り返し、溜息をつく。

　今日は楽しいデートだったというのに、何をしているんだろうか。僕は

　化け物から流れ出た血の、むせ返るような匂いが身体に纏わりついて気色悪かった。目の前には更に巨大な肉の塊が先ほどシールを切り殺したバケモノを潰すように召喚される。それを確認し、どこか気だるそうに、シールは再び封印の剣を抜く。

「最悪だ、全く」

　苦々しさの極まったその声は、ケダモノの断末魔に掻き消された

第百十話 リーン先生の比較的波乱な一日 ⑦

　ロマール劇場前
「解析終了。対抗魔術を用いれば敵に気付かれずに結界内に侵入できます」
「ご苦労」
　魔術師の解析報告を聞き、騎士隊長は構える、密かに劇場を囲わせた部下達に手元の魔術で言葉を届ける。
「《合図と共に突撃せよ》」
　既に劇場の構造をそれを知る建築士から聞き出した。そして敵がいるのが何処なのか、その位置の予測、透過魔術による確認、予測される敵の攻撃手段、大勢の人質を守る為の魔導機の準備、それら全てを部下の騎士達に叩き込んでいる。出来れば更に万全な体制で行きたいが、これ以上の時間をかければ魔術結社の者達が人質を危険に晒す可能性がある。
　故に
「《突撃》」
　騎士隊長の指示と共に、騎士達が静かに、そして速やかに結界に侵入した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ロマール劇場、大道具倉庫

　ただただ肥え太ったかのように見える肉の塊
「【封断】」
　奇怪な四本足をジタバタと死にかけた虫のように動かす不愉快な獣
「【封断五連】」

醜い蛆がひたすらに巨大化したような、醜悪な匂いを放つ虫型の生命体。
「【封印絶剣】」
何故か人の足が背中に幾つも生えた、冒涜極まる化け物の群れ
「【連断】」
シールの両手から紅の閃光が閃くたびに、巨大な肉塊が幾重にも切り裂かれ、砕かれ大量の血をこぼして地面に堕ちる。数瞬間をあけて再び召喚陣が光り、新たな肉塊が呼び出され、更にそれを繰り返す。
力を行使するシールは既に何も顔に浮かべない。感情の一切を殺しきり、敵を殺戮する機能と化していた。まるで淡々と単純作業を行うかのように、化け物たちを殺していく。
「【空断】」
最早術式の詠唱以外、言葉すら発さない。ただただ相手を殺す、その為に自らの身体を動かし続けるその様は、狂気じみていた。しかしそれは彼にとっては懐かしさすら覚えるほど、身体に染み付いた動きでもある。
思い出して、気分が良くなるものでもない。今やかつてとは違う道を歩み始めているのだから、無理に思い返す必要も、ましてやその技能を振るう必要も無い筈なのだ。
だが今彼はまた同じ事を繰り返している。それもリーンを放って、だ。
もう、悔やむのも馬鹿馬鹿しいのでしない。しかし自分を取り巻く血みどろの因果が何時までも纏わりついているような気がして、すこぶる気分が悪かった。
勿論、自分は正しい事をしているのだろう。自分がいなければ今尚召喚され続けている奇怪な化け物たちはこの場から溢れ、客席に雪崩れ込むかもしれない。自分を守る力も無い人々が、この醜悪な化け物たちに食い尽くされるかもしれない。
そうならない為の努力が、過ちであろう筈がない。
だが、正しいか間違えているかなんてシールにはどうでも良かった。
ただ彼は、身勝手さを貫けない己と、状況を憂いた。
人様の事など何一つ気にせず、この場から逃げ出せればどれだけ楽だろう。自分達が逃げ出した後、この場で起きる阿鼻叫喚の地獄から目を背けられれば、どれだけ楽だろう。しかし出来ない。それを否、と言えるくらいには真っ当な心

と、その意思を通せるほどの力が自分の中に宿ってしまった。奇しくも学院長の言ったとおりに。
　ああ……馬鹿馬鹿しい
　だからシールは剣を振り、バケモノを屠る。血反吐を浴び、断末魔を聞き、不愉快極まる有様になりながら、殺し続けた。既にこの場は奇妙な色の血で満ちて、元は大道具置き場とは思えぬほどの地獄絵図と成り果てていた。
　早く終わらせよう
　その一心で剣を振るい、甲羅のような肉を纏ったバケモノを更に斬り殺した。
「さて、そろそろ……ネタ切れかな？」
　何体目とも分からぬバケモノを殺し、シールは魔法陣に備えられた魔石を確認する。魔石は既に溜め込み続けていたのであろう魔力を吐き出しつくし、色を失いつつある。つまりは魔法陣の動力源がなくなりかけているのだ。せいぜい後一回、それが済めば【召喚術】は正しいプロセスで機能を停止する。
　そう思っている間に、血肉に埋もれかけていた魔法陣が再び光を放つ。シールは両手に封印剣を自然体のまま、前を向いた。コレが最後の〝化け物〟召喚。この〝化け物〟たちの正体を既にシールは理解していた。魔法陣の光は満ち、シールは息を吐く。
「……コレが最後か」
　召喚陣から現れたのは、今まで現れたのよりも更に巨大で醜悪で、そして今まで以上に支離滅裂な姿をした、化け物だ。一見は青白い肉で出来た醜悪な塔。頭頂部には眼球が無数にあり、人の身体の一部が塔の側面に無数に伸びている。
　おぞましさ極まったその様に、シールは静かにその名を告げる。
「……【崩壊物】か」
　魔物と呼ばれる生物は、本来保有しきれない量のマナを取り込んだ結果突然変異を起こし暴走した生物だ。が、その突然変異とは結局、保有しきれないマナを受け入れる為に行われる生命体が起こす防衛反応だ。
　では、その突然変異ですら補いきれない量のマナを一つの生命に注ぎ込むとどうなるだろうか？　その結果がこの奇怪で、一切統合性のない生命体だ。神が定めつくりし生物の枠組みから逸脱し、魔物ですら最低限持ち合わせているような生命体としての理すら失われ、

壊れきった化け物。【崩壊物】。誕生すれば食事も何も、生命の意地に必要な事を一切せず、いずれ崩壊する自らの身体を振り回し、周囲に破壊だけをもたらして死んでいく、救いようのない存在。
　召喚失敗で分断されようが寸断されようが一応生きてはいたのはその為だ。そもそも生物として崩壊してしまっているのだから、生きるも何も無い。そもそもそんな理屈は通じない。だからこそテロリストはコレを召喚対象に用意したのだろう。
「妙な所で保険をかけないでくれよ」
　そう愚痴りつつ。シールは一切の間をおかず、封印の剣を振るった。巨大な塔を縦に引き裂くように。伸縮自在の絶対貫通剣、その性能に違わず巨大なバケモノは何かしらアクションを起こす間すら与えられず、一瞬で真っ二つになった。
「生き物の理から外れようと、粉々になれば死ぬよね」
　更にそのままもう二本の剣で横に薙ぐ。紅の光が幾度も左右に奔り続ける。即座にバラバラに砕け散った。派手に噴出す血飛沫が、倒れた魔術結社の研究者達を不気味に彩っていった。
　終わったか？　シールは思いつつも、警戒はとかず、周囲を見渡した。この場に身動きをとる者はいない。確かにシールは全てを殺しつくしたはずだ。だが、それでも、この手の状況では一瞬の油断も命取りであるという事は既に学んでいる。
　だからシールは、ゆっくりと足を動かして、動か〝そうとして〟、そこで直ぐに異変に気が付いた。
「……これは」
　シールの足元が動かない。まるで何かに囚われているかのように。シールは足元を見て、そして理解する。地面を浸すくらいに溢れた〝血〟それがシールを捕らえているのだという事に。
　更に血は蠢く。緩やかに弧を描きながら小さく凝縮し、小さくも鋭い針のようになって、シールの周囲から伸びてくる。まるで捕食した獲物を喰らう蜘蛛のように。更にはシールが身体に浴びた〝血〟までもがヂクヂクと鋭い刃の形状を取り始めた。
「【封印結界】」

シールは全身に封印術をめぐらせ、マナを封じ、それらを弾く。だが異変は留まらない。その場に流れた大量の〝血〟が、唸り、淀み、流れ、一箇所に固まっていく。途中で転がった大量の肉片も溶け、同じく終結していく。
【崩壊物】だ。シールは確信した。シールがバラバラに召喚されたそれを更にバラバラにしたはずなのだが、【崩壊物】はあろう事か【血】の状態ですら生き延びる。いや、生きるという表現すら正しくな
シールは認識を改めた。これは最早悪意を持った【事象】だ。生物ですらない。
青黒い〝血〟そのものとなった【崩壊物】は、先ほどよりも更に巨大となる。血で作られた頭のない、巨大な四肢の化け物。それは召喚によって分断された、本来の姿なのだろう。既にその図体は、この倉庫を打ち破りかねないほどのそれになっていた。
「……【封印】」
封印術式を発動する。が、僅かに血を裂くだけで、意味はない。こんな風に、大質量で、尚且つ切断系の攻撃が通じない相手は、シールは苦手だ。天敵といってもいい。全てを封印するにしても、この巨大さは流石に手間だ。しかるべき順序を経なくてはならない。
「厄介だな」
【崩壊物】は、顔の無い首をぐりんと動かす。此方の事など視線に入らないのだろうか。倉庫の壁に近づきメキメキと圧迫する。外に出ようとしているのだろうか。それだけならまだいい。だが、この【崩壊物】から発せられる悪意は未だ尽きていない。先ほどのシールへの攻撃がその証拠だ。
幾らかの方針と対策、そのどれが最善か、シールは考える。だがいつの間にか背後に迫っていた気配に気が付いた時、その思考は吹っ飛んだ。
「リーン先生!?」
「【灰燼と化せ】」
短い詠唱から放たれる莫大な魔術。次の瞬間、シールの眼前は莫大は焔に包まれた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：

「……何が起きたんだ？」

劇場へと突入し、見事にテロリスト達を撃破し、人質を救出した騎士隊長は、呆然とした心地で部下の呟きを耳にした。目の前の状態を前にして、部下の言葉にはおおむね彼も同意見だった。

テロリスト達の話から、切り札が用意されていると知った騎士団は大道具倉庫に突入した。だが来て見ると、何故か首謀者と思しき男達は倉庫の前で魔術で縛られ横たわっていた。状況を確認する為に中に入ると、

「……コレは、なんだ？ 焼き焦げた跡？」

中は彼らが想像していた以上に非常識な有様になっていた。

入って直ぐに感じるのは何かが焼けた強い異臭。そして広がる光景は、焼き焦がれた大道具と、代わって描かれた魔法陣……らしき場所に残った、巨大な〝シミ〟。一切の痕跡を残さず焼き尽くされたような後。

それが何なのか、あまりに強力に焼かれた為か、その残骸からは全く読み取る事は出来ない。が、その量から、少なくとも劇場にいた人々が危機に晒されかねないほどの〝ナニカ〟が呼び出されていたのは間違いなかった。

しかし、騎士団が来たときは既に、その〝ナニカ〟は死んでいた。召喚失敗か魔術結社達による人為、と考えるには外でわざわざ魔術で縛られた者達の説明がつかない。

ここで〝ナニカ〟が召喚され、その〝ナニカ〟と魔術結社たちを〝ダレカ〟が倒した。

そう考えるが妥当だが、ではそれは誰か？　結界の精度からしてもこの魔術結社の集団はその人間性は兎も角技術力は並大抵ではない。そいつらが切り札とするそれを騎士団の到着よりも早く始末する誰か

……本当にそんな真似ができる人物がいるのだろうか？

騎士隊長は疑問に思いながらも人質達の救出、暴行を受けた者達の治癒など慌

しく指示を送っていった。結果として今回の事件の陰で活躍した誰かはうやむやになり、しかる後に、彼は今回の功績が認められ出世する事になる。が、本人はその報奨を複雑な心境で受け取ったそうだ。
　影で魔術結社の暴走を未然に防いだ二人の教師は最初から無かった事となった。唯一、この事件をある程度まで把握していたであろうＶＩＰのボーイは、しかし当事者達がこの件が明るみに出る事を拒んでいた事を察し、沈黙を貫いた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　場所は変わり、ロマール郊外
　奇妙に隆起した地形から開拓の手から逃れ、自然の木々が残る小高い丘にて、二人の影がそこにはあった。一人は蒼髪の洒落た姿をした美女。もう一人は若く、何処かゆったりとした表情の青年。しかしその格好は何故か蒼黒く汚れている。
　二人の男女、シールとリーンは無言で丘を登っていく。いや、正確にはリーンが、だが。
　シールは彼女についていきながら、何度か口を開いている、が、
「……あの、リーン先生」
「……」
　リーンは反応せず、シールは溜息をついてばかりだった。
　あの後、リーンは一瞬で【崩壊物】を焼き尽くし、消し炭にした。更にシールを捕らえて転移術を発動したのだ。気が付けばこの場所だ。ロマールの街からも離れており、視線を横にやれば、木々に隠れて騒がしきロマールの街並みがチラリと見える。
　唐突過ぎて事態が良く分からないが、冷静になれば一応、リーンに救われた、という事になる。故にシールは礼を言おうと先ほどから彼女に呼びかけているのだが、彼女は此方に視線すら向けない。先ほどから何処に行こうというのか、ひょいひょいと丘を登っていく。シールは後を付いていくしかなかった。
　機嫌、悪いなあ……
　当たり前だ、と理性が突っ込みを入れる。何しろデートなのに彼女をほったら

かしにしていたのだから。正しい判断とか、皆を守る為だとか、そう言う問題ではない。彼女以外のものを優先してしまった。それが問題なのだとシールも分かっていた。
　とはいえ、それが分かった所で、シールが出来るのは彼女に謝罪するくらいのもので、それすらも許してもらえない現状、どうしようもないのだが。
「……」
　と、小高い丘を登りきった先で、リーンが足を止めた。
　自然とシールはリーンに追いつき、彼女の横に並ぶ。さてどんな言葉をかけたものかとリーンを見るが、彼女は此方に顔を向けず、じっと前を向いていた。シールも釣られてそちらを見る、と
「……」
「……おお」
　闇夜に、魔動機の光で輝くロマールの街が一望できた。自然の風景とは違う、人の営みによって照らされた人工の光、しかし切磋琢磨な人の営みが生み出したその光は、確かな絶景だった。
「綺麗ですねえ……」
　しみじみとそう口にすると、リーンは此方を向かず、そのまま景色を眺めながら、
「貴方がこの景色を守ったのでしょう」
　そう口にした。その声は予想に反して、冷たさは感じなかった。
「……もしかして、慰めてくれています？」
　なんとも情け無いと自分で感じるシールの問いに、リーンは無表情のまま、彼を睨み、
「正しい事をしたのに何時までもウジウジしている男がいるからです」
「……いやあ、リーン先生を放置してしまったから」
「その程度で怒るほど、私は理解が無いと思われていたと」
「……すみません」
「鬱陶しいから謝らないでください。鬱陶しい」
「二回言わなくても」
「鬱陶しい」

尽く感情を交えぬ声で、リーンは淡々とシールを罵り、シールは苦笑した。これが彼女なりの気遣いだと分かっている。だからこうして接してくれるのが、シールにはありがたかった。だからこそ、言わなければならない事はある。たとえ拒絶されようとも。それがケジメだ。

だから、と、シールはリーンに改めて顔を向けて、ゆっくりと頭を下げた。

「……ありがとうございます。それと今日はすみません。エスコートできなくて」

「許しません」

……若干挫けかけたが、うん、まだ大丈夫。シールはそう言い聞かせた。

「で、では、どうしたら許してくれますかね？」

どれほどの甘味が要求される事になるのだろう。なんて、少し馬鹿なことをシールは覚悟していた。だが、リーンは即答で甘味を要求する、訳ではなかった。

「□□、」

何かを言おうとして、僅かに間を空けた。何かを少しだけ、躊躇うように。そして 一歩、シールへと近づき、ゆっくりと首を傾げて、静かに問うた。

「なにをしてくれますか？」

変わらぬ無感情、しかしその仕草はあざとい位に愛らしく、

「……えっと」

それが、彼女なりの誘いであると気が付いた瞬間、シールはそのあまりの意外性に、まるで初めて好きな少女をデートに誘えた少年の如く赤面した。巡るましく思考を回転させ、片手で顔を覆い、何かを紛らわすように頭を掻いて、その後ゆっくりと息を吐き出す。

そんな挙動不審を幾ばくか繰り返し、そして

「では、失礼」

静かに彼女の手をとって、もう片方の腕で抱きしめて、胸元から此方を見上げる彼女に近づき、唇を落とした。瞳の端に騒がしき街並みの光を映し、腕の中の彼女の温もりを感じながら、シールは幸福を感じていた。

もうこのデートが失敗か成功か、そんなことはどうでもよくなっていた

我ながらどういうオチだ（迫真）
まあそんなこんなでデート編、完結です。
小話を連続で挟みましたが、今後の事を考えると此処くらいしか入れられそうにないので。
という訳でようやく話を本編に移します。こっから恐らくぶっとうしで。
さあて……何時完結できるかなー、ッハハ

魔術学院の平和主義者

エレナ先生奮闘編

第百十一話 目覚め

　ガイディア国北東に存在する酒場【月光亭】
　ギルド【紅目】本部、紅目ギルド〝創立者〟がまだフリーの頃、幾つかの依頼をこなした報酬をすっとぼけられ、挙句押し付けられた幽霊屋敷の館を、かつての仲間の暴力的な魔術と、地獄のような権力を保有する男のコミュを利用して一夜で再建し、しかし再建したは良いが何をどう利用すればいいのかさっぱり分からずとほうにくれているうちに、何故かヴェインを慕っていたフリーの冒険者たちが我先にと流れ込み、更に何故か職を失った料理人家族が流れ込み、評判を聞きつけた他の傭兵どもが通うようになり、気が付けば国にギルド拠点としての申請があっさりと通っていて……
　まあざっくばらんにいって、本人が意図せぬうちに何故か完成していたギルド拠点だ。そんな経緯ではあるものの、そのギルドの〝創立者〟つまりはヴェインは此処を拠点とし、自身の住処として暮らしている。
　さて、明朝、【月光亭】において、その彼は、自室のベットの上で目を覚ました。僅かに眠たげなその表情で首を振り、身体を伸ばす。
　昨日はギルド長としての面倒な書類整理があって、眠るのが遅くなっていた。本人からすれば成り行きでなったとしか思っていないのだが、こうした事務を欠かさずこなす辺り、彼は真面目で、そしてそれなりに仲間思い出もあった。
　故に昨日は眠るのが遅かった、が、習慣として彼は同じ時刻に目を覚ます。僅かに重さを感じる頭を振るい立ち上がると、共有の洗面場で顔を洗い、二階の自室から下へ、酒場のホールへと降りていった。
「ヴェイン様！ おはようございます！」
「……ああ」
　ヴェインを慕うギルドの一員、まだ若い少年が声をかける。ヴェインは彼の頭をぽんと叩いて、そのまま下へと降りていく。酒場はギルドの皆が朝から騒い

で、朝食をとっている。中には酒を流し込んでいる馬鹿もいたが、ヴェインは特に注意する事も無い。カウンターに腰をかける。
　すると慌しく食事を運んでいた酒場の少女、職を失い流れ着いた料理人一家の長女メルルが笑みを浮かべ、歩み寄ってきた。
「ヴェインさん。朝食はどうしましょう」
「……何時も通りでいい」
　そう言うと、少女は元気良く頷いて、いち早くそのオーダーを届けようと厨房へと駆け込んでいった。その後姿をヴェインは眺め、元気が良い、と、僅かに眠気の残る頭でそんな事を思った。放置されている誰も触れた形跡の無い新聞を広げ、息をつく。興味のそそられない記事を眺め、溜息を吐いた。
　彼にとっての何時も通りの朝だった。そんな彼を、カウンターでグラスを磨く、そこに立つにはまだ若めにみえる女が苦笑交じりに眺め笑う。
「相変わらず、つまらなそうな顔をしているのね？ ヴェイン」
「……俺は普段どおりにしているだけだが、ネル」
　ネルと呼ばれた女性はそうだね、と笑いながら、彼の手元に苦味の濃い気付けの茶を置く。ヴェインはそのお茶を口にして、頭にかかっていた眠気を払った。
「先日の仕事、結局どうなったのかしら？ もめてたと聞いたけど」
「騎士団が支払いにケチをつけてきたからイングラムに報告した」
「相変わらず容赦ないのね」
「契約を反故にしようとする馬鹿が悪い。国に仕える騎士団が。失笑モノだ」
　どれだけ賢王が善政を続けようと、目の届かぬ場所はある。ヴェインが前回仕事を引き受けたのはちょうど、そういったところだった。
「少しなりとも〝ゆとり〟ってものがないと、世渡り難しいわよ」
「知らん。それより依頼書を見せろ」
「はいはい」
　そう言ってネルが依頼書の束を手渡す。酒場に張り出された依頼書とは違い、ヴェインに直接手渡されたのは、彼個人に当てられた仕事の依頼書だ。彼自身の実力を頼りとした依頼書は多く存在する。実際その依頼内容も相当に、難度の高い代物ばかりなのだが……
「モテる男は辛いわねえ」

「……」
　ヴェインは幾らかを捲り目を通すと、そのままネルを睨み
「……コレだけか？」
「ええ、そうよ？」
「なら棚に隠されたのはなんだ」
「……どういう洞察力してるのかしらね。貴方って」
　ネルは溜息をついて、そのまま新たな依頼書を手渡した。先にヴェインに手渡されたものと同じだが、その書かれた内容が大きく違った。
「国からの依頼か」
「昨日の今日だから、貴方も嫌がると思ったのだけど」
「いらん気はまわさんで良い」
　そう言ってヴェインは依頼書をじっと睨む。その姿を見てネルは溜息をついた。
　実際の所、国からの依頼だから隠した、というわけではなかったのだ。問題なのはその依頼書の内容だ。依頼書の管理なんて仕事を続けていれば分かる。あの依頼書は、ヴェインの気を引くに足るものだ。だから隠したのだ。
　彼が気を引くような依頼は大抵、危険に満ちているから。
「……」
　そう思っているうちにヴェインはその依頼書を折りたたむと、静かに懐に入れた。依頼書を受ける気でいるのだと分かり、ネルはもう一度、彼に聞こえるように溜息を吐いた。しかしヴェインは気にもしない。そんな反応もわかっていたから、ネルはどこか諦め気味に、
「せめて、朝食は食べてからいってよね」
「……」
　そう言って、腰を上げかけたヴェインを押し留めた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　長い夢を見ていた。

暖かく、体中を優しく包む闇の中。
ただ心地良い温もりが身体を包み、何時までもそうしていたいと思いもした。
けれども、それはいずれ目を覚ます事になるという事も分かっていた。
いずれ夜は明け朝は来る。まどろみに浸り続けてはいけないのだ。
だから――

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……あ」
少女がとても重たい瞼をなんとか開いて目を覚ましたのは、今まで触れた事も無いような、柔らかで清潔なベットの上だった。暫く少女は、何故自分が此処にいるのか考えようとした。
いや、そもそもそれ以前の自分がどうたったのか、少女は思い出せずにいた。あまりにも深く、静寂に包まれた眠りは少女自身の記憶すら淡い霧の中に包んでしまっていた。
しかしおぼろげながらも、此処が自分が生きてきた場所とは違う事は分かった。だから立ち上がろうとするが、身体は上手く動かない。
「……う、あ」
それでもなんとか身体を起こそうとするが、手足を滑らせ、ベットから落ちてしまう。地面に身体を幾らか打ちつけ、少女は呻く。だが何故だろう。痛みが無い。少女は不思議に思いつつも、それ以上の思考は回らなかった。
周囲を見渡せば、綺麗に整えられた棚、そしてビンに様々な液体、魔法薬が並んでいる。それがどういうものなのかは少女には分からず、ただその色彩の美しさが、純粋に楽しかった。
と、その時、部屋奥から足音がした。少女が振り返るとそこには、
「目を、覚ましたのね」
清潔感のある白い衣服を纏った妙齢の女がいた。少女を、何処か信じられないものでも見るかのような顔で、声を震わせた。少女は、何故この美しい女性が自

分を信じられないようなものでも見るような顔をしているのか、理解できなかった。

　その後、女性は少女に幾度か質問を繰り返した。気分は悪くないか。身体に不調は無いか。目は見えているか。更に不思議な光を幾度か少女に当て、確認をするようにそれを繰り返した。そして溜息をつきながら首を振り、

「……どうなって……いえ」

　苦悶の表情のまま少女の頭を撫でた。動揺は隠しきれていないようだったが、それでも少女を撫でるその手は優しかった。

「【呪いの精霊】……どうすればいいのかしら。マジで」

　どこか投げやり気味に、美女は途方にくれた笑みを浮かべた。

というわけで新章へ
ここから先、恐らく小話を挟んでいる余裕はなくなる……かな？
とりあえず行き当たりばったりなー感じがしなくもない

第百十二話 精霊の処遇

　オルフェス学院、学院長室
「【呪いの精霊】が目を覚ました、か……」
　某日、メリアからの報告を受けたオルフェス学院学院長、ミストは軽く頭を抱えた。
「さすがメリア、と言いたい所ですが……どうするんですか、これ」
　その向かい側で、シールも同じように頭を抱えた。
　呪いの精霊、ニルナック村でシール達が保護したあの精霊、暴走状態だったそれをシールが無理矢理人の姿に留めたそれが、メリアの治癒により目を覚ました。、しかしはっきりいって、目覚めた彼女をどうしたらいいか、二人は途方にくれていた。【精霊】という存在は人間の扱える範疇を大きく超えている。【精霊】は望むままに自然を操る、あらゆる生命の一個上の存在だ。そんな存在が近くにいる、というだけでも危険極まりないのだ。
　しかもそれは人の手で、人の身体を使って人工的に生み出され、その上司る属性は生命の【呪い】、まさにとびっきりの厄ネタだ。
　正直ミストは、村の一件でシールが彼女を持ち帰ったとき、その場で〝処分〟でもしてしまおうかとすら思ったほどだ。それほどまでに彼女は危険で、ふとすれば周囲に災厄を撒き散らしかねない。
　命を天秤にかけるなど馬鹿馬鹿しいと、直ぐにその案は却下した……が。やはり今、その扱いに困っている。不安の種はまだあるのだ。
「こんなの、【神殿】の連中に知られたら何を言い出すか……」
「ろくなことにはならないでしょうね」
【神殿】
　神々を崇め、神々の力を監視し、管理する独立組織。彼らは何処の国にも属し

ていない独立組織だ。目的は一つ。神々の意思を受ける【巫女】を集め、神の意思を聞き、その力を管理する事。神が実在するこの世界では、神の権威はより明確だ。神殿はその威光を利用し、更に巫女を集め、圧倒的な影響力を手に入れている。
　そして彼らは神の使いとされる精霊に対しても敏感に反応する。
　過剰とも呼べるくらいに。そしてそれは危険を伴う。
「【神殿】は〝神の意思を届ける事を至上とする〟と言ってるけど、この類の組織の例に漏れず、権力と力の亡者と化してるわけで……」
「人工精霊、しかも呪いなんていう属性ときたからにはどうなる事やら……」
　神に仕える、としておきながら、都合の悪い神、例えば破壊神メナスを一方的に邪神として流布している辺り、【神殿】の身勝手さも知れるというものだ。そういった意味でも【呪いの精霊】は巨大な爆弾といえる。下手打てば、神の力を行使する【神殿】を敵に回しかねないのだから。
　だからこそ対策は必要なわけだが、その前に
「でもまずは、精霊の少女がその力を制御できるようになるしか無いね」
「暴走されれば、大事ですからね……しかし」
　生まれたばかりの彼女が果たして自身をどれほど制御できているのか。メアリの話では大人しく静かなもののようだが、何時シールとの戦いを再現するかどうかも分からない。
　人工精霊なんて、長く生きてきたミストにも〝あまり〟経験は無いことだ。手探りに彼女の様子を理解しなければならない。そして彼女がもし自分の力を制御する術を持たないのであれば、それを教えてやら無ければならない。
　それにはシールも同意見だ……が、
「つまり、精霊に教育を施せと……」
「うん。僕も凄い無茶を言ってることは分かってるから、そんな顔しない」
　彼女は元は人間だ。年端も行かぬ少女に過ぎなかった。だが今は違う。人類とは一閃を隔した存在だ。そして、そうなってしまった彼女を、その精神が子供だからといってそう扱う事は難しい。シールは彼女と戦ったことがあるからこそ、その危険性は良く分かっている。
　万物を呪い、腐らせる世界の大敵となりうる悪意の塊。その力を自覚し制御す

る精神と、手繰る術を身に付けさせなければならない。それがシールには憂鬱だった。
　情緒教育は問題ない。シールがいつも子供達に向けて行う道徳の教育と何も代わり無い。が、精霊の、自然を司る力を指導するというのは事情が違う。全く。
「僕にはその教育は不可能です。操る術を知りません」
「そうなんだよねえ……君は特殊だし……」
　二人はそう言って、唸った。扱いかねる。結局はそういう事だ。二人ともそろって人外じみた力を保有する逸脱人だが、その性質はこの二人の間だけでも大きく異なる。当然の事だが、自分の分野と全く異なる力を教え導く事なんて出来ない。
　やはり必要なのは同等の力を持つ者。似通った力なら、それを説き、導く事が出来る。だが、神の眷属の力なんてものは――
　と、その時、部屋の扉が軽い軋みを上げて開いた。二人は視線を向ける。
「あれ？ エレナ？」
「シール。此処にいたの……学院長、こんにちわ」
「エレナちゃんこんにちわ」
　可憐な容姿の輝く金髪の少女、エレナが現れた。何故彼女が、と、見てみると、エレナの手には幾らかの資料の束があった。
「執筆部の継続書類と、発刊の雑誌の販売許可の印を貰いに」
　執筆部の書類をひらりと学院長の机に乗せる。この手の書類は本来各所の許可を貰う為にたらいまわしにされる事が覆い。特に部活の分際で販売なんて始めている執筆部はその作業が酷く面倒なのだ。故にそこら辺の書類整理はミストが一括して行っている。
　そんなわけでちょくちょく、という訳ではないが、エレナがリドなどに使いを頼まれた時は、こうしてミストのところに顔を出す。なるほどと頷くシールを尻目に、ミストは僅かに、眉を上げ、
「そういえば、エレナちゃんは破壊神……【メナス】の力、持ってるんだよね？」
「ええ、そうですが？」
　突然何を言うのだろう、とエレナは首をかしげた。対してシールはパッと手を

上げて、
「学院長」
「言いたい事は分かるけど待ってね……エレナちゃん。【メナス】は制御できてる？　報告じゃ、ちょっと前から【メナス】の力が活性化してきたって聞いたんだけど」
　エレナにミストは問いかける。エレナは若干首をかしげながらも頷き、
「確かに最近活性化して、触れるたびに何かを壊していましたけど……」
　そう言って右の掌を表に向ける。すると深い濃度の魔力が彼女の手に纏わり付く。神の属性の【顕現】。しかし破壊の力であるはずのそれはゆったりとした流れで穏やかさを保っている。
　その掌をゆっくりと、部屋に飾られた生け花に近づけていく。【メナス】の魔力は可憐な花に纏わり付く。だが、それは破壊される事無く、ゆっくりと蕾を閉じて、首を傾けていく。あの花は日中は日の光とマナを取り込むために蕾を大きく開き、夜には閉じる。今は日中だ。それなのに眠りについていく。
　死の力、破壊の力ではなく、生命にとっての【眠り】の時間を与えていた。神の顕現、その力を細部まで開拓し、それを使い分けている。彼女のコントロールは完璧だった。
「随分と最近は操れるようになりましたけど……何か？」
「……」
「……」
　言葉を交わさぬままミストはシールに視線をやり、シールは溜息をついた。
「……まず本人の意思を確認してください」
「それもそうだね、という訳で、エレナちゃん？」
　ミストの幼いのにひたすらに妖しい顔に、エレナはやはり首を傾げた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……という訳で、この子がニルナック村の少女……そして呪いの【精霊】だ」
　シールの言葉にエレナは彼に連れてこられた少女を見つめる。

エレナの前には茶色の髪の毛の、エレナよりもずっと幼い少女が首を傾けて、呆然とエレナを見上げている。エレナも同じように首を傾けて少女を見下ろした。
　村の一件はエレナも関わっている。そしてこの少女、呪いの精霊がシールによって保護され、学院まで連れ帰られたところも彼女は知っている。が、こうして目の前で普通の少女のようにしている姿を見ると、どうにも不思議な気分だ。
　だがこの子には間違いなく、通常の生命体とは格の違う、神に近しい存在なのだ。シールの封印で、今は完全にその気配を感じさせないものの、それはエレナにもわかっていた。
　彼女に、神の力の【顕現】の扱い方を精霊に教えてあげて欲しい。
　基本的な勉学、単なる田舎の農家の娘であった彼女に教える事は山ほどある。それらに関してはシールが請け負う。だが、それ以上のこと、神に連なる力の制御を頼みたい。とミストはエレナに依頼してきた。そしてエレナはそれを〝請け負った〟
　そう、受けたのだ。エレナはこの仕事を自ら進んで引き受けた。
「……エレナ、いいのかい？ はっきりいって危険だよ？ かなり」
　シールは精霊の少女の頭を撫でながらもそう繰り返す。いい加減聞き飽きたものの、彼の言う事は確かに事実なのだから、シールの気持ちもエレナには分かっていた。だが、
「大丈夫よ。シールもついていてくれるんでしょ？」
「まあね、流石に君一人に任せるわけにもいかないしね」
　別に生半可な覚悟で、理解も足りぬままに依頼を受けた訳ではない。かといって、少女がかわいそうだからとか、そういった同情からこの依頼を受けた訳でもなかった。
　ただ、エレナは経験してみたかったのだ。シールと同じ、誰かに教える事を。
　とはいえ、流石に目の前に直面し、容易く振舞えるほどエレナは器用ではないし、経験も浅い。先ほどから内心では戸惑いっぱなしだ。それでも目の前の少女を前にして、エレナはそれを自制した。
　さて、それじゃあまずはどうするか、エレナは暫く少女の前で頭を回し、言葉を選び、そして

「……貴方、名前は？」
　出来る限り優しく、エレナは問いかけた。少女はぼーっとしながらも此方を向いて、そのままゆっくり口を開いた。
「……セフィ、です」
「そう、セフィ、これからよろしくね」
　そういい手を差し出すが、少女は
　少女は未だ、覚醒から意識をハッキリさせる事が出来ていないのだろう、エレナは彼女の掌を掴み取って、ゆっくりと握手を交した。
　少女の掌を握って、小さな手だ、とエレナは思った。

第百十三話 こどもとのたいわ

　オルフェス学院、第三グラウンド

　まだ日の光に照らされず、肌寒い朝霧の中、二つの影がその場で踊っていた。

　二つの影、それは二人の少年だ。一人は小柄の褪せた金髪の少年。片手に小型の剣を模した模擬剣を構え、軽快に身体を動かし、剣を振るう。もう一人は短く髪を切りそろえた逞しい少年。両手で大剣を模した偽剣を構え、静かにその場で佇む。

　朝霧の中、小柄な影がステップを刻むように大柄な影の周囲を巡る。自身の周りを駆けるその影に、中心の陰はその手の剣を僅かに、引く。

「……!!」

　それを見て取って、周囲を巡っていた影が、跳ぶ。跳躍は鋭く、大気を満たす霧が風に撒かれる。保たれていた距離が一瞬で潰された。

「□□□」

　影が交差する。霧の奥、突撃を受けた大柄な影、短髪の少年はその場から一歩後ろへと下がる。それは向かってくる突撃に対しては遅い動き。だがそこによどみは無い。

　初手の閃激、小柄の少年から繰り出されたそれを、大柄の少年はその動きだけで避ける。そして構えられた大剣を、無駄な挙動無く振り下ろす。

「□□！」

　少年は更に速度を上げ跳ぶ。振り下ろされた剣を潜り、身体を捻る。もう一撃振るおうと……だが、

「っ」

　身体を捻った先に、剣が構えられていた。その動きを先読みし、振られた剣が小柄の少年の首に添えられる形になった。擬似剣とはいえ、寸止めされていなければ首の骨が折れていただろう。

「……俺の負けだ」
　小柄の少年キースは、騎士見習いの少年ジーンに両の手を上げた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　学園内であった貴族平民間の闘争事件。その間に何の因果か戦い、争い、最後には一時的に協力して事件の解決へと向かった二人は、現在はそこそこの交友関係を続けていた。こうして、互いに戦闘訓練を行うくらいには、
「あー……疲れた」
　キースは浮いた汗を拭い地面に身体を倒し、息を吐いた。それを騎士見習いのジーンはじっとにらみつける。キースはそのままの姿勢で首を傾げ
「なんだよ？」
「手を抜いているのか？」
「はあ？」
　キースはその質問に、不思議そうな声を上げた。
「んな真似したら訓練にならんだろ」
「なら何故俺がお前に勝つ事になる」
「お前の方が実力が上だからだよ」
　毎日こうしているわけではないが、週に数回、二人は模擬戦闘を繰り返した。勝率は七：三。キースが三だ。ここの所は負け続けだ。だがその結果がジーンには納得できないらしい。
「あの時、俺は三人がかりでお前に敗北した」
「あー、そう言うことか」
　そう言うと上半身を起こして、軽く頭から土を払うと、
「俺がどうしてあの時、〝ああいう〟戦術つかったか分かるか？」
「……」
　キースとジーンとの初対面、軽いリンチに会おうとしていたキースが彼らに対して使った戦術は地面の土を使った目潰しだった。地面を蹴りつけ、目を潰し、挙句に死角から討った。
　それを思い出しながらジーンは僅かに苦い顔をしたが、キースは肩を竦めて、

「あれは、お前の方が実力が上だったからだよ」
　立ち上がり、軽く短剣を振るいながら言葉を続けて、
「相手の裏をかくだとか、奇策だとか、そーいうのはそもそも実力が伴わない人間が使うような、自分の実力を誤魔化す為の戦術だ。不利な状況を覆す為の」
　実力があるなら、そもそも小手先を使わずとも倒せるのだから当然だ。
「大体奇策なんてのは初見にしか通用しない。実力者ならその初見ですら看破して見せるだろう。そんな戦法に頼ってたら、何時かしょうもない死に方して終わりだ」
〝奇策〟しか使わない人間、なんてのは最早冗談の類だ。物珍しさからなんとか通じるような小手先の技を多用してしまっては、直ぐにネタも尽きる。だからキースは正面から立ち向かう戦術を見につける為、鍛錬を続けている。自分にとって、そうした正面から立ち向かう力が足りないと自覚していた。
「だからお前とこうして鍛錬に勤しんでるんだよ」
「俺としては、その〝小手先の戦法〟を参考にしたいんだがな」
「あれくらい、お前も少し考えりゃ思いつく猿知恵だよ。そんなもん考える前に基礎戦闘技術を見に付けよーぜおい」
　キースとジーン。互いが互いの足りない所を埋めるため、互いを参考にする。決して友好的な関係とはいい難いが、相性の面から言えば二人の関係は良好と言えた。
「さて、それじゃもう一戦……と、どうした？」
　キースが見ると、ジーンがじっと違う方向を向いていた、釣られてキースも視線を向けると、そこには、
「……エレナと……子供？」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　呪いの精霊が目を覚まし、学院での教育を開始してから数日が経過した。その間ミストは精霊、セフィの両親に事情を説明し、彼女自身の容態を理解させ、彼女が自身の力を制御する必要性を説いた。

そしてシールはメリアと共にセフィの容態を話し合い、彼女に施されている封印術の改良、体調の管理など、あらゆる方面から彼女が自身と周囲に与えるであろうリスクを軽減するように努めた。
　そしてエレナはというと、現在早朝第三グラウンドにて
「……」
「……」
　セフィと向き合い、ガンをくれあっていた──もとい見つめ合っていた。
　別段好き好んで自分よりも一周りも二周りも小さな子供相手を睨みつけている訳ではないのだが……
「……えーと」
「……」
　僅かに呻くエレナに対して、少女は表情をピクリとも動かさない。ただエレナに視線を向けられているからそちらを向いているだけで、それ以外はまるで人形のような有様だ。
　反応が全く無い。エレナは泣きそうになった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

『ああ、それはね、単純に、緊張しているんだよ』
　セフィが全く口を利いてくれない。この事をシールに相談すると、シールは若干苦笑しながら答えた。
『まだ、意識がハッキリしない、ということじゃないの？』
『それもあるだろうけど、それだけじゃないね』
　シールは手馴れた動きで紅茶を注ぎ、エレナの前に並べる。そのまま
『自分の正体すら定かで無いままに見ず知らずの土地。そこでいきなり知らない女の人に、全く知りもしない力を教えてもらえといわれて、警戒しないわけが無い』
　特殊な境遇、呪いの精霊、そういった事柄を全部取っ払えば、そう言うことになる。実際、少女が両親と再会したとき、泣いて喜ぶ両親に対して少女は呆然と

しつつも、何処かほっとした顔をしていた。
　基本的にセフィは普通の少女だ。故に、
『子供は緊張すると押し黙る。言葉をぶつけて自分を守る手段を知らないからね』
　どんな言葉を返せばいいのか、なにをいえばいいのかわからない。子供に残される最後の手段は自閉だ。沈黙を貫き、相手の様子をじっと伺う。その相手が、自分にとって害のあるものなのかどうか、見極めるのだ。
『その状態を解除する方法は？』
『方法は一つ』
　花の香りのするお茶を口に含むエレナの前に、シールは指を一つ立てて、
『信頼を築く事』
　シンプルなその答えが、エレナにはとても難しく思えた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　信頼とはつまり仲良くなるという事だろう。しかし少女とは全く会話が成り立たない。会話が成り立たないために信頼が築けないのに、会話を成り立たせるには信頼を築くしかない。
「……どうしたらいいのよ」
　若干途方にくれた声をエレナは上げた。するとそこに、
「何でお前は会うたびに途方にくれた顔してんだよ」
「……あら、キース、と、」
　精霊という体質を隠したほうがいいからとこんな場所まで来たので、まさか此処で人と出会うとは思わなかった。キース、そして背後には騎士見習い、ジーン少年までいる。彼は無言で頭を下げた。
　エレナのゲルダー家に長らく仕えていた騎士家系の長男だ。学校ではそういった関係は一応表に出してはいけないはずなのだが、彼は律儀にもその態度を崩さない。まあこの程度なら別にエレナとて気にしない。そうしたいと彼が望むのをわざわざ止める意味も無い。
　まあ、この二人になら別に見られたところで問題は無いだろう。それよりも

だ。
「キース質問」
「なんだよ、お嬢様」
「子供と仲良くなるにはどうしたらいいの」
「それを子供の前で言っちゃう辺りお前駄目だと思うぞ」
　ごもっともだとエレナも思い、頭を抱えた。そんなエレナを無視してキースは少女の前で腰を下ろし、少女を眺める。少女セフィはキースを前にゆっくりと首を傾けた。キースも同じように首を傾けたが、不意に
「よっと」
「……？」
　セフィの前で自分の掌を上向きにする。セフィは不思議そうにしているとキースは僅かにその掌に魔力を集中し、
「【凝結】」
「……?!」
　少女は目を見開く。キースの掌に、周囲の朝霧の水分を集め、凍らせた。瞳に映るくらいの結晶が生み出されたのだ。キースの手で生み出された結晶は、既に昇りはじめた日の光に照らされて、キラキラと輝いている。少女はそれを、何処かびっくりしたように、呆然と眺めていた。
「【円】」
　キースは更に魔術を紡ぐ。氷の結晶は更に凝縮し、幾重も立体に円の形を重ね、最後には掌サイズの綺麗な球体へと形を変えた。澄み切った透明の球体。誰もが綺麗だ、と素直に思えるそれを前に、セフィもまた、僅かに瞳を輝かせた。
「【包装】……っと、ほら、これをやろう」
　更に保温の魔術を加え、その状態で固定したものを少女の掌に載せる。魔術によって固定したその氷の球は恐らく丸一日はその形を保持するだろう。少女は僅かに顔を上げると、
「……ありがとう」
　そう短く答えた。キースは笑い、少女の頭を撫でてやり、その場を離れた。
　そしてエレナに向き直り、
「ほい、簡単な交流終了」

エレナは敗北感に膝を付いた。
「落ち着いてください。あれくらいの魔術、エレナ様も扱えるでしょう」
「こんな事でへこむな。お前の方が凄い事できんだから」
　野郎二人のフォローで何とか立ち上がるが、エレナは敗北感に包まれていた。頼まれてから数日、セフィとはどれだけ頑張っても真っ当な会話一つ成立しなかったというのに、キースは至極あっさりと交流をこなしている。
「……手馴れてるわね。キース」
「そりゃ俺、孤児院手伝ってるし。ガキに相手なんて日常だ」
　彼がかつて世話になった孤児院。キースは今もそこに時折手伝いをしにいく。その為エレナと比べて子供の扱いに長けているのは当然だった。
「なんだったらお前も今度来るか？ 超ハードだけど」
「今度伺って見るわ……でも今は」
　そう言って両足を開き、身構えエレナは再びセフィと向き合う。
　そのガチガチの臨戦態勢状態が既に子供と向き合う姿勢として大きく間違っているような気がしたが、面倒だったのでキースは何も言わなかった。ジーンは何か言いたげだったが、エレナの真剣そのものな表情を前に挫折した。
「つまり、凄い魔術を見せればいいのね？」
「いや、魔術はあくまでもきっか……、いや、もういいや、とりあえずやってみ」
「それじゃあ、見ていて、セフィ。今から……」
　そう言って、エレナは膨大な魔力を渦巻かせ、両手をグラウンドに向け
「今から、地面、割るから」
　野郎二人は全力でエレナを止めにかかった。

第百十四話 指導

　ガイディアとアダリアの国境付近、旧街道。
　暗黒時代の国家間戦争においての激戦地近くであったこの場所は今や見る影も無く破壊され、道としての役割を殆ど果たしていなかった。既に新しく舗装された路面が存在する為、今この道を通るのは獣か、魔物の類くらいのもの。
　人の営みから外れてしまった道、だが今は何故かその道に、複数の人影が姿を見せていた。数はざっと見積もって十人以上。流浪の旅人、そんな風な格好だが、注意深く見てみれば彼らには奇妙な所が散見していた。まずその動き。単なる旅人、ととるには彼らの動きはあまりにも統率されすぎていた。前方の男の歩く速度に後方の男達はよどみなく歩調をあわせる。それは軍事訓練を受けたもののソレだった。
　次に、彼らは一様に、その身に武器となるものを身につけているという点。整備されていない街道においては魔物の存在もあり、多少なりとも身を守る武器を手にするのは決して珍しい事ではない、が、そういった場合は何人かの護衛が武器を持ち、他のものは荷物を背負う、といったように役割分担が成されている筈だ。彼らにはそれは無い。全員が一式の荷物と、そして腰に短くとも実用性の高い剣を備えている。
　そして何より異様なのは、彼らの表情だ。一見、全員特にコレといった奇怪な顔は浮かべてはいないし、時に誰かが冗談を言い、それを皆が笑うくらいの交流もそこにはある。だがそれにもかかわらず、彼らの瞳には一様に剣呑な光が宿っていた。殺気と評しても差し支えない光、まるでこれから戦場へと赴く戦士のような、そんな覚悟の入り混じった意思が、彼らからは発せられていた。
　見ようによっては盗賊、とも取れるが、そもそも彼らが進んでいる道を他に利用するものなどいない。ここは既に崩壊した街道であり、普通の人々は新たに舗

装された道を通っていく。もし彼らが盗賊だったとするなら、狙う場所はそちらだろう。わざわざ人気の無い道を進む意味が無い。

故に、彼らは盗賊ではない。

彼らは更に先に進む。今までは僅かながらも道の形を成していたこの旧街道も徐々にその形を崩し、その代わりにあまり見目の映えない奇妙な草木が道を侵食し始める。それらを書き分け、時に切り落とし、彼らは進む。先ほどまでは笑い合いもしていたのに、今はそれも無い。彼らは淡々と自身の進行の妨げとなる物を排除し、前へと進んでいった。

「──、止まれ」

先頭を行く男の指示に、集団の動きがピタリと止まる。彼らの前に一人の影が現れた。草木の陰から現れたソレはフードを身に纏い、長身で、そして腰には剣を一本備えている。

「……何者だ」

先頭の男は短く問う。腰にある剣に即座に手が伸びるようにと構え、ジリジリと意識を前へと向けていく。背後の全員もまた、各々が即座に動けるよう姿勢を変えていた。

すると彼らの前に立つ男はその場で僅かに肩をすくめるように動き

「こっちはわざわざ呼ばれてきたというのに、酷いお迎えだ」

そう言ってフードを外す、零れたのは赤色の髪、端整な容姿に髪の色と同じ褪せた赤の瞳。それはガイディアにおいて最も有名なギルドの長であり、この国で最も強大とされる戦士の一人だった。

「──ヴェイン殿」

フードの男達の先頭、旅人のように似せた姿のガイディア騎士、ダルシアは丁寧に頭を下げた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

オルフェス学院、第三グラウンド

「何故お前は天才属性の癖に要所要所でとんでもない方向に行くんだ」
「流石に天変地異を起こして喜ぶ子供はいないと思います。エレナ様」
　エレナが暴走しかけたのを止めた後に、二人は一先ずはエレナを説教した。そしてエレナはとりあえず反省した。
「性急すぎたのね。もっと段階を経て地面を割っていかないと」
「だから割るな」
　キースはエレナにチョップを入れた。痛かった。
　彼は大きく溜息を付いて、
「派手を起こせば良いってわけじゃねえ。そんなもん分かってるだろ？」
「……」
「信頼に必要なのは触れ合う経験と、時間だ」
　キースはセフィをちらりと見つめ、
「お前が向き合うのは一人の少女、たった一人だ。焦るこたない」
「……そうね」
　エレナは頷く。確かに、焦る必要は無い。教師たちのように複数の子供達を一度に相手にするわけでもないのだ。セフィの目線まで腰を落とし、彼女を撫でる。まだぼんやりとした風な彼女はエレナに撫でられるがままにされている。
　やはり彼女自身の表情からはまだなにも汲み取る事は出来ない。
　少しずつ、それが出来るようになっていこう。とりあえず今は、
「……教えるべき事を教えていきましょうか」
「教える、とは一体何を？」
「……【顕現魔力】の操作法」
　周囲の属性で変化するのではなく、それ自身が一定の属性を得てしまった魔力の操作方法。現状この学院で属性付加された魔力を得て、尚且つ自在に操っているのは彼女しかいない。だからこそ頼まれた仕事だ。
「……その少女は神の【加護】を？」
「……それに近いわ」
　ジーンの問いにエレナは答えを少し濁す。彼らが大っぴらにこの件を口にすることは無いと分かってはいるものの、流石にペラペラと喋っていい事でも無い。必要以上のことを語る必要は無い。

シール曰く、彼女にはまだ基本知識を教えるだけで、魔術の心得は教えていない。ならばまずは基礎の基礎。自身の内にある魔力の知覚からだ。果たして、魔術師としての心得が役立つのか分からないが。

とりあえずは、魔術を扱う上での基本、つまり【魔力／マナの知覚】からだ。

「セフィ、自分の中に……そうね、〝あたたかいもの〟は感じるかしら」

セフィはゆっくり首を横に振った。エレナもその答えは予想はしていた。

曖昧な表現にせざるを得ないのは、そもそも魔力、もといマナが曖昧な代物だからだ。魔術の素養のあるものでも、最初自分の中の魔力を感じ取るのには相当な苦労がいる。更に、属性を獲得した魔力はその感覚すら常人とは異なることがある。

実際エレナも、メナスの力を自覚してから、魔力の感覚が以前とは異なっている事に気が付いていた。以前はただ強い熱の塊のような感覚だったのが、今は静かで冷たくて、だが強大な力が身体を巡っている。それなら当然呪いの魔力をめぐらせ生きる彼女も感覚が異なっても不思議ではない。

そして更に言えば、彼女の精霊としての力はシールがギリギリまで封印している。僅かに魔力を吸収放出できるギリギリのラインまで。感覚が分からないのは当然だ。よしんば分かったとしても、精霊である彼女とエレナとの感覚が同じとは限らない……

難儀だ。エレナは改めて痛感する。相当難解な問題が突きつけられたものだ。実際、ミストはエレナが上手く彼女を導く事が出来るとはあまり期待はしていないだろう。

しかし、だからこそ成果を上げてみたい。エレナはそう思っていた。

だがさて、どうするか……

「セフィ、手を出して」

「……？」

セフィはゆっくりと両手を差し出す。エレナはその掌を握ると、魔力を彼女へと流していく。無論、破壊の属性は完全に押さえこんでいる。純正の魔力のみを彼女に触れさせていく。

「どう、何かが流れてくるのが分かる？」

「……」

セフィは無言で頷いた。エレナは微笑み、
「それならこの力と同じように〝流れているものを〟自分の中に感じるかしら」
この問いには暫く時間がかかったが、ややあってからセフィはゆっくりと頷く。上手く自分の魔力を知覚できたらしい。エレナは手ごたえを感じて、少し焦るように
「それじゃあ、その魔力を――」
そういおうとした、その時だった。
「エレナ様！」
ジーンの鋭い声、背後で男二人が身構える。エレナも気が付いた。
セフィの体の内、エレナの握っている掌から、黒いマナが漏れている。同時に周囲のグラウンドから僅かながら溢れ出る。【呪い】の精霊の力の発露、それを察したエレナは即座に
「【起動】」
セフィの胸元に備えてあった魔動機に触れ、魔力を注いだ。瞬間起動した魔導機は赤い光を放ち、セフィの周囲を囲い、封印術を発動させる。
シールが入念な準備と手間をかけて用意した。封印術式の仕込まれた魔導機だ。装備者の魔力を迅速にそのうちに封印する術式。全てを侵す【呪い】と言う特性に対しても起動できるように細かな調整もなされている。
その魔導機を起動、瞬間、軽く、乾いた音がした。
「……っ」
エレナ息を呑み、そして背後でキースとジーンは周囲を確認する。魔動機の起動を皮切りに、周囲の状況は始まりと同じく静かに元の姿へと戻って言った。セフィ自身も。事の中心にいるセフィだけが何が起こったのかわからずきょとんとした顔をしている。
「ッ……セフィ、大丈夫？」
問うと、セフィは素直に頷いた。それを見てエレナはほっと息をつき、次に背後を振り返ると、キースとジーンが二人揃って警戒の姿勢をとっていた。
キースは警戒を解かぬまま、此方を非難の入り混じった視線で睨み、
「……大丈夫なのか？ オイ」
「ええ……ごめんなさい、危険に晒したわ」

「せめてあと数秒早く言え。その台詞」
「……」
　二人は警戒を解いた。キースは僅かに額に浮いた汗を拭い、セフィ、ではなくエレナを睨む。何が起こったのかもわかっていない幼い少女を睨まないのは彼なりの気遣いなのだろう。
「なんだったんだありゃ。すっげえ嫌な感じがしたけど」
「……彼女の力よ」
「だろうな……〝随分と〟難儀な問題を抱えてるなあおい」
「ええ……」
　迂闊だった。とエレナは反省する。シールからも魔力の知覚程度なら教えても問題ないと話し合っていたので、すっかり油断していた。まさかたったこれだけで顕現が暴走するとは思わなかった。
　不安定な存在、人工の精霊。その意味を改めて思い知らされる。
　この件は改めてシールに相談しなければ。
「なんでこんなこと難儀な問題抱えてんだか」
「ミスト学院長に頼まれたのよ」
「あのクソジジイ……なんだお前、弱みでも握られたのか？　　断れよこんなこと」
「別に、ただ私が受けたいと思ったから受けただけよ」
「何のために」
「自分の成長のためよ」
「……ほーう」
　キースがその答えに目を細めると、ジーンがその隣で軽く前に出て、
「……エレナ様、そろそろ時間が」
　と、声をかける。ふと校舎に備えられた時計機を見ると、確かにもうそろそろ授業が始まる時間だ。結局今日は何も教えることはできなかった、という落胆が僅かに心を刺した。
　焦るな。キースの忠告を胸中で繰り替えし、エレナはセフィに向き直る。
「いきましょうか、セフィ」
　セフィはこくりと頷いた。こういう所作は本当に単なる子供みたいで可愛い、

エレナは純粋にそう思い、微笑んだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……ったく、どうしてこうまともに整理しようとしないのかね」
「……」
　エレナはセフィをシールのクラスへ届けると別れ、残された男二人は自分達が使用した模擬剣等の片付けに向かっていた。これらの武具が仕舞われているのは、サークル活動などの者達が共有で使う倉庫だ。その中は極めて雑多であり、各々が使用したり、あるいは使わなくなったりしたものを適当に詰め込んだだけ、といった風な、兎に角酷い有様だった。
　キースとジーンが使用した模擬剣も此処にあったものだ。もとはジーンが自分の訓練用にとおいてあったもので、キースもそれを利用している。
　二人は自分達が使用した武具をなんとかまとも片付けようとして、しかし周囲に転がる用途不明の品々を前に中々苦戦を強いられていた。
「だー……もういっそ、このゴミ山の中に突っ込んでおくか」
　そんな投げやりな事をキースが愚痴り始めた時、隣のジーンがおもむろに口を開いた。
「……どう思う。あの少女」
　唐突だな。とキースは思いつつその質問の意図を考えた。
　少女とは、エレナと共にいた彼女だろう。そしてその問いの意味は、先程少女が発言させた、あの〝よくわからないもの〟について。
　つまりはエレナが心配なのだろう。なんというべきか、一途な男だ、とキースは半ば呆れ、半ば感心した。それが彼女を守る騎士として生まれ育ったものとしての矜持なのか、はたまた彼女を一人の異性として意識しての言葉なのかはキースには分からなかったし、追求する気も無かったが。
「さあ、な。少なくともエレナの心配は全くしちゃいないが」
　エレナは天才だ。キースやジーンが二人揃って彼女と戦ったとしても彼女は余裕で二人をなぎ倒す。確かにあの少女の能力は異常だったが、だからといってエレナがどうなるとも思えなかった。

だからキースはそう答えた。だがジーンは首を横に振り
「俺とて、エレナ様がどうこうなるとは思っていない。そうではなく」
「……あの少女の自身のことか？」
　ああ、と、ジーンは頷いた。
「あの少女は感情の起伏がなさ過ぎる」
「……ふむ」
　キースが魔術を見せてあげた時、感謝の言葉をキース自身が受け取った。だが確かにその時も少女から喜の感情を感じ取る事は難しかった。初対面の相手への緊張、警戒は勿論あるのだろうが。
　キースもジーンも彼女の事情を知らない。精霊となった彼女の経緯も、長く昏睡状態にあって、最近ようやく目覚める事が出来た事も、知らない。だが、彼女自身の今の状態については理解も出来る。
　あの少女は決して、〝良い状態ではない〟と。だからジーンは心配しているのだ。
「……上手く良くと思うか？ エレナ様の指導は」
「今のままじゃ難しいんじゃねえの？」
　キースはすっぱりと言い切った。
「当たり前だろ。あの女、いままで誰かを教えるなんてしたことも無い、それどころか人付き合いだって最近ようやくまともになったレベルだ。それに」
「それに？」
「今のエレナの奴、考え方はビミョーに〝ずれてる〟」
　後方、エレナが去っていった初等クラスへと続く道を眺めながら、キースは肩を竦めた。
「時間がかかるかもな……ま、俺のしったこっちゃねえけどさ」
「そうか……」
　キースの回答にどう納得をしたのかは知らないが、ジーンは頷いた。その後、二人は道具を片付け終えると、互いに向かうべき授業へと向かい別れていった。

第百十五話 将来への展望

　国境の境、旧街道
　ヴェインとの出会いを果たした騎士団一向、ダルシアは彼へと近づくと丁寧に騎士団としての礼の構えを取り、
「お初お目にかかります。ヴェイン殿。私は──」
「知ってる。ダルシア。イングラムの依頼書にお前の名があった」
　対してヴェインは礼をするでもなく、短くそう言ってダルシアの挨拶を無視した。その態度に部下の騎士達が僅かに顔を顰めるが、ダルシアが視線でその動きを諌める。ヴェインは二人の所作を気にするそぶりも見せず
「極秘任務と聞かされて詳細は知らん。教えてもらおうか」
「それは──」
　ダルシアが口を開こうとした、が、その説明に入る前に、ヴェインは僅かに顔を顰め、視線をダルシアから外す。その行動に僅かに疑問を得たダルシアだったが、周囲から立ち上る〝気配〟を察し、理解した
「構えろ!!」
　短い命令。彼の部下達が半ば反射的に武器を構えようとした、その直後に異変が起こる。何処からとも無くその周囲から、真っ黒な衣装に身を包んだ怪しげな者達が、その手に杖を構え、現れたのだ。
「──ッ！」
　敵襲、そう理解した瞬間、ダルシアを筆頭に騎士達は動く。だがその動きは既に待ち構えていた敵たちと比べてあまりにも遅かった。構えられた杖から術式が構築され、魔術が放出される
「【炎渦】」
　全方位から発動した魔術は一斉にその場にいる全員に襲い掛かる、筈だった。

「【開眼】」

　短く唱えられたその言葉、同時に起こる異変はその場にいる全員の目を疑わせた。一瞬〝空間が揺らいだ〟かのような感覚が起きたかと思うと、騎士達に向けられた炎、それが動きを歪ませ、次の瞬間、それは〝たわんだ〟。
「!?」
〝たわんだ〟その炎は、本来ならありえざる歪みを経て、宙返りでもするかのように、自らを生み出した術者たちのほうへとその矛先を変える。まるで空間が、世界が、そうなるようにと炎を歪めたかのように。
「っ！」
　その短い驚愕の悲鳴が響くか響かないかする内に、炎は術者たちを焼き尽くした。強力な魔術だったのだろう。一瞬その熱に悶え苦しむ声がしたが、次の瞬間にはくぐもった声に代わり、最後には消し炭を残して周囲の術者たちは一人残らずこの世から焼き払われた。
　最初から何も無かったかのような静寂が、その場に訪れた。
「……な」
　眼前で起きた光景を理解できず、呆然とする騎士達。その彼らを前にして、その光景を生み出した張本人、ヴェインは、その瞳の魔眼の輝きを見せつけながら、首をかしげ
「それで、詳細は？」
　そう聞くのだった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　魔術学院中等クラス。
　休憩時間、エレナは自身の教室の中で、軽く欠伸をした。
　セフィの個人指導は今日は一先ず終了だ。何も無い田舎で今まで平凡に暮らしてきたセフィには、エレナが教える事のほかにも教える事は山ほどあるのだ。
　故に今日の指導はもう無い。それにエレナにも当然授業はあるのだ。セフィに

自分の生活を全て注ぐだなんてそんなことするわけにはいかない。
「……暇ね」
　しかしまあ、やはりというべきか、既に学んでいる内容を垂れ流している授業というのにはあまり興味が無いのだが。とはいえ、学院長の依頼があったから授業をサボる
　なんてのは、言い訳にしてはあまりに情けなさ過ぎる気がする。前々からシールにも授業は真面目に出るようにといわれている。故にエレナはセフィの講習の後、真面目に授業には参加していた。
　その授業を真面目に聞いていたかどうかは別にして、だが。
「眠い……」
「寝るな」
　見事に居眠りをここうとしたエレナの頭に軽い打撃が直撃する。顔をあげてみるとヒノがいた。彼女は生ゴミを見るような目でエレナを睨み
「周囲が真面目に授業受けてるのに居眠りぶっこくとかいい度胸よね」
「だって私、もう授業の内容知ってるもの」
「復習しようとは思わないのかしら。お貴族様は」
「私、一度覚えたら忘れないもの」
「その頭ぶったたいたら記憶力は消えるのかしらね……！」
　喧嘩腰のヒノに油を注ぐようにエレナは応じるが、しかしまあこのやりとりも最近は見慣れた光景のようにはなっていた。二人とももうその距離感にはなれたもので、互いに挑発しつつも別段それ以上踏み込んで言い争う事は無かった。
　エレナは顔を上げて息をつくと、ヒノは細めで睨み、
「周りの連中は真面目に授業を受けてんのよ。居眠りこかれると気分悪いわ」
「……今度から、目を開けて眠ろうかしら」
「真面目に授業受けろっつってんのよ、私は」
　ヒノが再び軽くひっぱたくと、エレナは呻いた。しかしヒノの言わんとしている事も分かる。確かに自分の才能にかまけて他人の努力の場を乱すような行動はとるべきでは無いかもしれない。
　次は本当に、目を見開いたまま寝る方法でも身につけようかしら……
　なんて、微妙にずれた事を考えているエレナの前に、ヒノは溜息をつきながら

一枚の紙を突きつける。見てみるとそれは
「……進路希望？」
「確認アンケートよ。アンタまだ書いて無いでしょ。出してもらわないと困るわ」
　普段進んで話しかけてこないヒノがエレナに接触した理由はコレらしい。見てみるとずらずらと希望する進路への質問項目が並んでいる。多すぎるような気もするが、魔術という特殊技能を身につけた人間が、将来向かう希望先というのはやはり重要らしい。
　エレナはざっとそれを眺め、職種志望欄を眺めて顔を顰め、
「……冒険者って、職なの？」
「書いてる馬鹿はいたわよ。学院で何を学んできたのかしら」
　ヒノがあきれた様に言う。まあ、確かに冒険者なんて聞こえは良いが、あまり真っ当な仕事とは思えない。唯一思い当たるとしたら、セフィの村の一件で出会ったヴェイン達。
　あの三人は兎に角優秀だったが、しかし彼らのように誰もがなれるとは思えない。そう考えるとやはり、ヒノの言うとおり、夢を見過ぎてるのかもしれない。
「そういう貴方は何を志望したの」
「宮廷魔術師……だったけど、容易くは無いでしょうね。内申も悪いでしょうし」
　内申というのは、先にヒノが起こした騒動の事だろう。確かにあの件で、教師からの評価は落ちたかもしれない。シール曰く、「教師の怠慢というところも合ったから、心配は要らない」との事だったが……
　そうなってしまった事を、自業自得、と責めるなんておかしいし、自分を責めるのも筋違いのような気がする。ので、エレナは沈黙で返した。
「……まあ、私の事なんてどうでもいい。貴方はどうするのよ。早くして」
「進路、ねえ」
　エレナは暫くアンケートを眺めた後
「無記入じゃだめ？」
「駄目に決まってんでしょ。ふざけないで」
「だって、私の志望なんて、意味無いじゃない」

その声の、エレナにしては珍しく、何処か頑なさが残った声で、ヒノは少し驚き、同時に一つ納得を得た。彼女の身の上を強く意識することの多い彼女だからこそ、彼女の言わんとしている事はすぐわかった。
「……ゲルダー家の娘だから？」
「跡取りは私じゃない。誰かと結婚してその人が、って事になるのかもしれないし、ひょっとしたら両親が弟を作るかもしれない。でも少なくとも、私は自分の身の上を自由には出来ないわ」
　きっぱりと言い切る。自分の家については、エレナも流石に分かってはいた。実家に対する嫌悪感、トラウマはあるとしても、家を出るなんて事は許されない。ゲルダー家という存在を寄る辺にしている人間は沢山いるのだ。
　そう、理解がある。将来について、こうして悩み考える機会が与えられている他の学生を羨ましいと思いもしたりはするが、理解はしているのだ。自分には、そんな自由が無い事を。
「だから、学生の間に教師の仕事を経験したかったっての？」
「……セフィのこと？ もう知ってるの？」
「あんたが学院長に依頼を受けた次の日には噂は流れてたわよ」
　ただでさえ派手な上にこれまで様々な事件を起こし、今も奇抜な行動も多いエレナは兎目立つのだ。今や彼女が何かをしでかすたびに、学院では噂となって駆け巡る。故にヒノもセフィのことは知っていた。
「……そういうわけじゃないけど」
「じゃあ、どういう意味なのよ」
　エレナは答えに悩んだ。経験がしたい、なんていう曖昧な答えのまま、放置していたが、改めて問われると、どうなのだろう。ヒノの言うように、自分の鬱屈した感情を発散させたかっただけかもしれない。
「そこら辺、しっかり定めておかないと、その子に失礼よ」
「そうね……そうなのよね」
　例え身勝手な理由だとしても、ソレすら定められずに保留してしまっていては、セフィが可愛そうだ。ソレはエレナにも分かっていた。
「ありがとう。ヒノ」
「気持ち悪い。私はその子の事が気になっただけよ」

その後、エレナはアンケート欄に、「保留」と記入し、ヒノの顔を軽く引きつらせながらも提出し、その後暫くその場で、セフィの件と自分の感情について、思い悩んだ。

第百十六話 怒りと嘆き

　周囲の茂みや木々の間、それに紛れるようにして設置されたテント。ガイディア国の騎士達が備えたモノだ。念には念をと術式の簡易結界まで敷いてある。入念なカモフラージュの意味は、当然先に襲ってきた連中が再び姿を現さないかの警戒でもあるのだが、それとはまた別に警戒しなければならない事もある。
　此処はアダリアとの国境付近。少数とはいえ騎士団を用意に近づけるには危険すぎる。たとえ暗黒時代から国交が回復していても、だからこそ余計に刺激を与える訳にはいかないのだ
　故に彼らの任務は極秘扱いだ。そしてその任務というのは
「王暗殺を企てた魔術結社の打倒か」
　焚き火の側でダルシアの話を聞いたヴェインが顔を顰める。
　ガイディア国王の暗殺未遂、第三王子ら国の中枢とも手を結んだ謎の組織を潰す事。それがダルシア達に与えられた任務であり、ヴェインに託された仕事だ。国王暗殺事件より前から、ガイディア国各地の古代獣の封印を解く等、様々な問題を起こしていた事からずっと探し続けてきたのだが、王暗殺の件でようやくその尻尾を掴んだのだ。
「魔術結社ラグナ……本人らは宗教組織だと言っているそうなのですが」
「宗教？ 神殿の連中じゃあるまいし」
　この世界の神は現実世界に強い影響力を与える形で実在する。故に宗教とは人々を導き救い、集団としてまとめるものではなく、実質的な力を持つものだ。其処に中心となる神がいる限りにおいては。
「はっきりとしたことはまだ……暗殺者は神を殺すなどと口走りもしましたが」
　神を殺す。常識的に考えて狂っている。
　人類の、否、この世の理から外れた世界の上位者。この世に多大な恩恵とちょっかいをふりまきながらも好き勝手してる支配者達。この世の現象に等しい

その彼らを殺す。ソレは最早、〝燃える〟という現象をこの世からなくすとか、そんな妄言に等しい台詞だ。
　そんな台詞を真顔で吐きながら、一方で王暗殺に間近に迫るその組織力。〝異常〟　相応に騎士団で経験を積んで来たダルシアにはソレが直ぐに分かる。謳う目的と、その行動力がまるでバラバラだ。そしてこういった組織は時に恐ろしい惨事を引き起こす。
　故に、可能な限り迅速に、排除しなければならない。だからこそのこの討伐隊だ。
　とはいえ、ヴェインはその説明を聞いた所で、特に興味は無いらしく、
「頭のおかしい連中の言葉を理解しようなんて無駄だ」
　淡々と、自身の扱う剣を眺め、時に術式の保護を加え、手入れをするだけだった。奇襲を受けた時とは違う、褪せた赤色の瞳は焚き火の揺らめきをただ映すだけだ。
「俺は俺自身の目的が果たせるならそれでいい」
　そう言い切り、ヴェインは剣を仕舞った。そんな彼の姿を見るダルシアは間を空け、口を開く。
「今回、何故貴方はこの任務を？」
　その質問の意図を読めなかったのか、ヴェインは僅かに首を捻る。が、暫くすると一つ思い出したように額に皺をよせ、
「……そういやイングラムが余計な事書いてたな。シールが好きな変態がいると」
「好きなのではなく、憧れてるだけです」
「十分変態だ」
　無論、差し支えあるなら答えられなくとも結構ですが、とダルシアは付け足した。ヴェインは奇妙なものを見るような顔でダルシアを見つめると、溜息をついて
「別に、隠しているわけでもない、下らん話だ」
　そのまま焚き火をじっと睨み、彼は口を開いた。
「ガキの頃、俺の故郷が〝丸々〟どこぞの魔術結社に乗っ取られた」
「……村そのものがということですか？」

「そうだ。そして、住民の尽くが実験体にされた。俺の家族も」
　極めてシンプルな説明だった。だがその言葉に込められた邪悪さを、察せぬダルシアではなかった。法を破る魔術結社、実験体とされたという事実。それらから導き出せる結論。邪悪で残酷な悲劇。
「気が付けば瞳は魔眼にすりかえられていた。家族は化け物になって死んだ」
　淡々とヴェインは説明する。しかしその声にもし温度があるなら、冷たさのあまり火傷してしまうくらいに、冷え切っていた。
「俺は俺の故郷を滅ぼした連中を滅ぼす。穢された家族の誇りを取り戻す」
　それはダルシアに告げたものではない、ヴェイン自身への宣言だ。瞳にはやはり感情は映す事は無かった。だからこそ、その胸奥に封じられた憎悪と怒りは、計り知れるものではなかった。
「復讐なんて、つまらん、ありきたりな話だ。そうだろう？」
　問われたダルシアには肯定する事も、否定する事も出来ず、ただ沈黙で返した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　闇
　そこは一切の光の届かない闇の中だ。何もかもが見えなくて、それなのに何故か自分の周りの光景がはっきりと分かる。だから彼女はコレが夢だと分かった。
　では何が見えるのか。
　血だ。だけどそれは赤くない。黒い、ただただ黒い。血が固まり色がつぶれたとか、そう言うことではなくただただただただ真っ黒な、〝真っ黒な血〟が彼女の周囲に溢れていた。闇の中で蠢く黒の血が、彼女にははっきりと見えていた。
　自分が立っているその場所は、黒い血の池の中心だ。
　何故こんな所に立っているのか分からなかった。いつも、朝起きて、父と母の手伝いに畑に出て、昼が過ぎればトモダチと遊んで、遊び終わったらご飯を食べて、最後に■■■様にお祈りを捧げて、眠る。

　何事も無い、平凡な一日が訪れる筈なのに――なのに？

何か　忘れている　何か　何か　　　とても〝思い出したくない〟何かを

するとその疑問が呼び水となったのか、血の池の水面下から、〝何か〟何かが湧き上がってくる。それは、ごぼごぼという嫌な音と共に、眼前へと浮き上がってくる。

ソレには、　その〝頭〟には見覚えがあった。

それはトモダチの〝頭〟だった。幼い頃からずっと仲が良かった少女の顔だ。元気がとてもよくて、可愛くて、笑うとえくぼが出来る、そして、そして

そしてあの時■■■様の巫女に選ばれた──

──大丈夫よ！　■■■様はとっても凄いのよ？

彼女は笑っていた。とても嬉しそうに、自分が巫女として選ばれた事をとても誇らしげにしていた。一緒に遊べなくなることが少し寂しそうだったけど、それでも彼女はとても嬉しそうだった。

だから、自分も巫女の一人に選ばれた時、巫女になった喜びよりも、彼女にまた会えるのだと喜んだ。彼女がアレだけ喜んでいたのだから、きっと誇らしげにそして幸せにしているだろう、そう信じて。

　そう、信じて、信じていた。

だから　　　だけど

目の前の　〝頭〟が　口を開く

■　■　■■　■■　■

■■■痛い■■■痛い■痛い■■痛い痛い痛い痛い■■■痛い■■■■■■痛い痛い■■痛い■痛い■痛い■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い■■■■■■痛い痛い

■■■■■■■■■痛い痛い痛い痛い■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■痛い■■痛い痛い

■■■■■■■■■■■痛い■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■痛い■■■■痛い痛い痛い

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■痛い■■痛い痛い■■■■■あああああああ

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■痛い痛い痛い痛い■■■■■痛い痛い痛い痛い

痛い■■いいいいいいいいいいいい■■■■■ががが っがあががあああああああ

■■■■■■■■ぎぃいいいいああああああ

■■

おまえもはやくしね

■■

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　少女、セフィは学院に割り当てられた部屋のベットの上で目を覚ました。

「……」

　近くに備えられた窓からは月光が差し込む。近くでは学校で働く事を許された母が、セフィを心配したのか、近くの机で眠りについている。
「……」
　セフィは、おぼつかない手付きで自分にかけられていた毛布を母にかけてあげると、そのまま窓越しに月を眺め見る。その表情に代わりは無い。エレナと接する時と同じ、無表情のままだ。
　だが、その瞳からは一筋の涙が零れ落ちていた

第百十七話 突入

　早朝、朝露が木々の葉に積もり、滴る。深き森の朝。
　その奥、木々の陰、茂みの間、伸びた木々の隙間、自然と獣の目からも隠れ、更にその上から幻影の魔術を重ね巧妙に隠された場所に、それはあった。
〝地下へと続く階段〟。
　鬱蒼と茂る森林の中には不似合いな、明らかな人の手の加えられたその階段は更にその上から周辺の草木で出来た扉で隠され、徹底した隠蔽がなされていた。その場所から人影が二人、現れる。それはまるで個性を覆い隠すかのように黒色の衣装に身を包んだ二人の人間だ。
　彼らは周囲をゆっくりと見回していく。この樹海で、獣や羽虫の瞳すら警戒するかのような注意深さで、全ての気配を見取っていくように。
　それも暫くすると、警戒を解いたのか、二人はゆっくりと入り口から身体を起こしていく。どこか気が抜けた、とでも言うように二人で顔を見合わせて、そして──
「──っが」
　その片割れは、首に矢が突き刺さって、死んだ。
「!?」
　音も無く殺された片割れに動揺し慌てて引き返そうとするもう一人の背を、再び矢が襲う。それは脳天を刺し貫き、後を追うようにして絶命した。あまりに静かに、呆気も無く事は終わった。そしてそれを確認し、周囲の茂みの中で、完全に気配を消し去っていた騎士達が立ち上がる。
「仕留めました」
「よし」
　矢を射た部下の言葉を聴き、ダルシアは静かに指示を下す。

「突入」
　ダルシアの声と共に、騎士達が魔術結社のアジト内部へと音も無く突入していく。自らの役目を、王に仇なそうとした者達を討つ為に。
「……」
　そして騎士達の任務とは別に、復讐を背負う褪せた赤髪の男もまた、騎士達の後を続くようにして、中へと侵入していった。彼は彼の目的を果たす為に。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　明け方、オルフェス学院第三グラウンド。
「……」
「……」
　キースとジーンの二人は揃って並び立ち、沈黙していた。
　ここの所の毎日のように、この場所で朝の鍛錬を行っている二人だが、今日は二人とも剣を交えて鍛錬を積もうとはしない。二人はただ呆然と並んで突っ立ち、目の前の光景を眺めている。
　彼らの視線の先にあるのは、一種の暴力装置だった。
「【穿て!!】」
　少女の、エレナの咆哮と共に大地が轟く。彼女の数十倍はあろう巨大な石槍が精製され、それが天へと突きあがる。魔術を知らぬものが見ればそれは神の所業と見るであろうその業を、エレナは
「【爆ぜよ！】」
　一瞬で砕き破壊する。爆光と共に炸裂した岩石は地面を撃ち、更に陥没を増やしていく。キースたちの方へも岩石は飛び散ったが、それは直撃する前に事前に張られた結界を前に弾かれ地面に落ちた。
「あれ、王城暮らしの魔術師でもそう発現できる規模の魔術じゃねえぞ」
「流石エレナ様だな」
「感心してんなよ。おかげで訓練できねえよ……まあ、見てて飽きないけどよ」
　教師でもそうは生み出せない魔術の嵐を連続で放つ光景を見られるというの

は、まあ貴重な経験だ。もし騎士を目指すなら、あの規模の魔術にも物怖じしないだけの胆力が必要となる。
「で、あの女は何をしてるんだ？ 巨大な魔物でも殺そうとしてんのか？」
「ストレス解消だそうだ」
「随分派手なやつあたりだなオイ。巻き込まれたら死ぬぞ」
　そう言ってる間にもエレナは魔術を次々に発動させる。あふれ出す魔力で強引にマナを制御し、竜巻を巻き起こし、焔を爆裂させ、地を砕く。自然災害でも見ているかのような凄まじい光景だった。
「……あれ、もし戦うとしたらどうするよ」
「魔術を唱えさせないよう、準備をし罠を仕掛ける以外ないだろう」
「だよなあ……あるいは魔術耐性の高い装備か。半端じゃ抜かれそうだが」
　そんな雑談を二人でしている間に、エレナも気が済んだのか、魔術を解いて地面に降り立った。幾つかの魔術を唱え、隆起した地面を再び元の形にならして行く。
「ストレス解消は終わりかお嬢様」
　キースが問うと、汗だくになった少女は浄化術を自らにかけながら、呻くように、
「……上手く、いかないのよ」
「なにがだ」
「あの子との接し方……慣れてはきたの……だけど」
　セフィとの交流から更に時がたち、エレナはセフィに力の扱い方を教えるのに慣れてきた。それと同時に彼女への接し方にもなれてきたつもりだった。が、
「未だ、肝心の少女は未だ心開かせずと」
「……」
　そう、彼女自身の心は未だ閉ざされたままだ。セフィは自分から誰かに口を利こうとはしないし、表情に変化も見せない。喜怒哀楽が極めて乏しく、なによりも自ら生きようという気力をまるで感じさせない。
　未だ、エレナは彼女の心を掴めずにいた。
「……んー」
　エレナはその事実を改め、沈黙し、首を捻る。その姿は先ほどまでこのグラウ

ンドを破壊し続けていた少女とは思えぬほどに、小さく見えた。
「……」
　ジーンはキースを見るが、彼は知らぬ顔だ。エレナに関して、これ以上何か口を挟むつもりは毛頭無いらしい。彼は基本的に、自分以上の能力を持つ人間をわざわざ助けようとはしない。
　とはいえ安易なアドバイスは、彼女から悩む機会を奪い、彼女を侮る事に繋がる事はジーンにも分かっていた。それはこれまで彼女に強いてきた〝優しい虐待〟となんら代わらない事も。だから彼もまた下手なアドバイスを口にすることはせず、沈黙すると決めていた。彼女自身が自分で答えを見出す為に。
　だが、今日は休日で授業は無いが、何時までも此処にいるわけにも行かない。そろそろ彼女に声をかけ一度部屋に戻るかと、ジーンがそう思い始めた時だった。
「……ああ」
　そう、呟いたかと思うと、思い当たった、とでも言うような顔で、頷いた。そして此方を振り向き、
「行く所が出来たわ」
「……何処へ？」
「彼女の両親のところ」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　学生用宿舎
「ようこそいらっしゃいました。ええと、エレナ、様」
「エレナで結構です。ええと……セフィのお父さん」
　貴族、というエレナの立場に緊張した面持ちのセフィの父に、エレナは応じる。
　セフィの両親、二人は揃ってセフィの与えられた部屋にいた。学院長の紹介で二人は今学外に家を借りている筈だが、今日はセフィの衣服を用意していたらしい。そうでなくても二人は学内で仕事に就いているため、どちらかには会えると

思っていたが、こうして二人揃って見つけられたのは行幸だった。
　セフィはシールの補習を受ける為に別の教室で今も授業を受けていて、両親二人だけ、それがエレナには好都合だった。たとえセフィの今の状態でも、彼女自身に聞かれるにはあまりよくないと、そう思っていたからだ。
「それで、お話というのは？　……学院長さんのお話では、貴方がウチのセフィの世話をしてくれているというのは聞いてはいるのですが……」
　セフィの母は笑みを浮かべ、しかし何処か疲れた表情でそう言う。唐突に別の環境に住まう事になったのはこの人も同じなのだろう。村の件にしても娘の件にしても、怒涛の環境の変化に疲れるのは誰でも一緒だ。エレナはそれを胸に刻んだ。その上で
「……聞きたいことがあるのです」
「それは？」
「セフィの様子、どうですか？ 以前と……巫女として連れられる前と比べて」
　その問いに、両親は揃って暗い顔をした。

第百十八話 暗闇へ

　魔術結社の秘密拠点、なんて呼称を聞くと、一般人は生々しくおぞましい迷宮のようになった場所を想像される事は多いが、実際はそんな気味の悪い光景が広がるような事は殆ど無い。そもそもその〝秘密基地〟とやらは国の眼から逃れつつも、魔術師達が住まい、研究する為に存在しているのだ。牢獄城に住まうガイディア王のような、偏屈な事情でも無い限りは、例え相手が犯罪魔術師集団であったとしても、自分の住処をわざわざ住みにくい有様に変えるような人間はいないだろう。
　つまり拠点そのものは巧妙に隠されていようとも、内部はそこまで陰湿な仕掛けや構造はしていない。むしろ外部の結界や隠蔽に自信がある魔術結社の場合、その内の守りは疎かになってる事もある。
　無論、基礎的に防衛機能が無い訳がないのだが、それ故に騎士達の行動は迅速だ。
「三部隊に別れ進行しろ。敵に容赦はするな。油断すれば此方が狩られるぞ」
「了解」
　ダルシアの命と共に騎士達が拠点の内を駆け回る。そして彼らとは別に、ヴェインが剣を引き抜き進みだす。ダルシアはヴェインに指示を送る事は無い。彼はあくまで部外者だ。下手に騎士の動きに取り組もうとすれば、逆に動きを阻害しかねない。
　故に、
「ライン、ファラ、彼の補佐を」
「「了解しました」」
　騎士の二人をヴェインに付ける。それだけでいい、とイングラムからは指示を貰っている。それだけで拠点襲撃の大きな役に立つほどに、彼の実力が突出して

いるのだ。
　シールとリーン、牢獄城にて自分達を徹底的に翻弄し、壊滅寸前に追いやったあの二人と同等の実力持つのならば、それも納得できるだろう。
　なればこそ、彼は自分の仕事を成す。
「王に仇なす者を討つ」
「はっ！」
　騎士達を鼓舞しつつ。ヴェインは薄暗い通路を駆け出した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ヴェインは背後に付く騎士達を見やる事も無く先へと進んだ。前方の路地、四方に分かれるその道の先、黒服の男が一人、こちらを見て顔を歪め、
「し！ 侵入し、ぐっが……」
　声を発する間もなく、ヴェインは魔術師の喉を切り裂く。切り裂かれた喉から血を噴水のように噴出して、それを抑えようとしながら男は崩れ落ちる。ヴェインは確認する事もせず、更に駆け抜ける。
　路地に並ぶ扉から幾らかの魔術師が何事かと顔を出す。彼らは血塗れた剣を構えたヴェインを見て、慌てて杖を取り出す。
「【焔よ！ 敵を焼き尽くせぇ！】」
「【魔眼】」
　だが、瞬間、魔術は全て主へと牙を剥いた。
「っひ!?」
　短い悲鳴をあげ、彼らは自分の生み出した炎に焼かれて崩れ落ちる。
「行くぞ」
「……はっ」
　一瞬身構えた騎士達だったが、ヴェインの声に応じ再び走り出す、ヴェインに対する、半ば畏れとも取れる視線を僅かに送りながら。
「【開け】」
　ヴェインはそれを気にする事も無く、侵入者対策に発動した結界を破壊し、道をつくり、先に進む。内部構造は事前の調査でも分からなかったが、拠点を陣取

る場合、必ずそこにはセオリーが存在する。その知識と、魔術結社との戦いを積み重ねてきた経験、そこから積み重ねられた〝勘〟でヴェインは突き進む。
　騎士達はただひたすらヴェインを追走する。役割上は補佐だが、ほぼヴェインの独走を追いかけているだけだった。途中いくつかの分かれ道はあったが、ヴェインは迷うことなくその勘に任せて歩を進める。徐々に未知は狭まり、下へと降っていく。ヴェインの勘は、自身の向かう先が正しいと告げていた。
　そしてそれを裏付けるように、敵の戦士達が慌しく前を塞ぐ。まるでこの先の道を守ろうとするかのように。
「分かりやすいな」
　とはいえ、ほぼ最短距離で詰めているはずなのに、意外と冷静に此方の対処に回っている。随分と冷静な動きだった。それは、指導者、この拠点の主が的確な指示を送っていると、そう言うこととも取れる。
　とはいえ、やる事は変わらない。ヴェインは剣を構えた。
「【起動！】」
　相対する兵士達は素早く唱える。途端、異音が周囲に走る。周囲を見ればとってつけたような備えられ方をした魔具が四方に散らばっていた。それは丁度ヴェインらを囲うようにあり、淡く怪しげな光を放っている。
　魔術術式か？
　ヴェインがそう思い魔眼を発動させようとするが、その時違和感に気付く。彼の魔眼捕らえる存在。マナの感覚が周囲から薄れ、そして消えていく。
「これは……」
「マナの排除?!」
　背後の騎士は気付いた。これはヴェインに対する対抗手段だ。魔眼の発動を抑え、相手の動きを封じようという。
「……魔眼を知ってるか」
　ヴェインが小さく呟く。魔具を起動させた男たちは一斉に剣を引き抜いた。身構える彼らの様は引きこもった魔術研究者とはとても思えない。明らかに鍛錬の詰まれた、戦闘要員なのだろう。
　騎士達が一歩前に進み出、同じように剣を引き抜く。
「引き受けますか」

「必要ない」
　答えるや否や、ヴェインは騎士達の制止も待たず前へと駆け出した。構える彼の剣が通路の灯に照らされ鈍い銀の輝きを見せる。光は交差し、その次の瞬間、剣を薙ぎ血を払うヴェインと、地面に倒れ伏す四人の男達が残された。
　剣が交差する音は愚か、抗いの声すら上げぬ間に、敵は血に沈んでいた。
「……速い」
　騎士の一人が呆然と呟く。
　魔眼という力は敵の魔術の使用を封じる。しかし魔術を使用せずともマナを操作され攻撃に転用される。ならばとマナすら排除したとしても、彼自身の剣技は達人並である。
　戦闘に関して言えばヴェインは一つの到達点に達していた。
　魔術に対しては絶対的な優位性を持ち、しかし魔術を扱わなければ圧倒的な剣技の前に散る。あらゆる攻撃手段に対して、彼は上位者となる。相手からすればこれほど理不尽な敵はいないだろう。
　それでもまだ、此処が数をそろえられるほどの広さが無いだけマシなのだ
　もしこの場が広い空間で、ヴェインの横に幾らかの魔術師が並んだらどうなるか。
　相手は魔術を使えず、一方的に此方から魔術を叩き込み踏み潰す。そんな理不尽な光景が生まれる。この世界における魔術兵法の全てを踏みつけ崩壊させるような状況を、ヴェイン一人で体現出来るのだ。
　そんな彼の横に、シールやリーンが加えられたらどうなるか。
　背後に身構え呆然としていた騎士、ラインはその想像をした瞬間、寒気を感じた。騎士に属していない人間が、大軍を崩壊させかねないほど馬鹿げた力を保有している事実に。彼らが生み出されたのは暗黒時代。自分達が〝まともな地獄〟で戦っていたその頃、かの暗部では一体どれだけの〝業〟が生まれたのか、想像するのもおぞましかった。
「行くぞ」
　ヴェインの声に意識を持ち上げる。
　そうだ、今はいい。今はこの場に意識を集中させろ。
　そう自分に言い聞かせて、思考から逃れるようにして、ラインは駆け出した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　オルフェス学院、学院長室。

「事実を知りたい……ね」

　この部屋の主、ミストは来客者であるエレナの要求に溜息をついた。

「ニルナック村でかの宗教団体がセフィに何をしたか、教えてください」

　コレがエレナの要求だった。あの村で行われていた事。宗教という名を被って行われていた人体実験の資料開示。しかしそれは、容易くＹＥＳと言えるものではなかった。

「はっきり言って、君が見るようなものじゃないよ？ アレは」

「子供には悪影響？」

「そう言う問題じゃないよ」

　ミストは笑う

「そんな、程度の問題じゃないんだ。あの村で行われていたのは」

　ミストはそう吐き捨てる。

　ミストはセフィに対して、そして彼女の村の巫女達に対して、あの宗教組織が、【ラグナ】が何をしてきたのか、勿論知っている。シールをその場へと向けた張本人なのだから、その事実を知るのは当然の義務だった。そうして知りえた【ラグナ】の悪行の数々は、人より長く生き、人の悪行の行き着く先を知り尽くしていた彼でさえも、顔を顰めざるを得なかった。

　呪い、人の呪いを利用す為にひたすら行われ続けた残虐非道の数々は、とても正気の人間が行ったものとは思えぬほど、狂気に満ち満ちていた。その様子を克明に記した報告書。大の大人にすら晒すのを躊躇う代物だ。

　ましてそれを、未だ未熟な心の少女に晒すなど

「相手の事を知るってのは大切だと思うけど、ハッキリ言って彼女の過去は重すぎる。知っていた方が接するのが辛くなるほどに」

　心を病んだ人間と接する場合、相手の病に引きずられないよう注意を払わなければならない。相手の淀んだ気に飲まれ、自分も心を患ってしまうという例など数え切れないほど存在する。

だが、エレナはミストの忠告を聞き入れることなく、ただ前を向く。
「でも私は、彼女の事をもっと知らなければならない」
　セフィのことで頭を悩ませていた時、ふと気が付いた事だ。
　辛い過去を抱えた彼女に、エレナは自分がどうすればいいのかずっと考えていた。自分自身が未熟であるが故に、自分の不足を補おうと考え続けていた。だが、そう考えて考えて考えて、結果としてエレナは、セフィ自信に対して眼を向けることを怠っていたのだ。
　つまるところ、考え方が微妙に〝ズレ〟ていた。
　セフィの問題なのに、自分しか見ていなかったのだ。それはセフィを通して成長しようというエゴが眼を曇らせた結果なのかもしれない。
　勿論、それが全て悪い、という訳では無いだろう。セフィに対する自分、という考え方は一つの正しいあり方だ。だが、それに偏りすぎた結果、盲目になるのは避けなければならい。そう彼女は感じた。
　両親に彼女の話を聞きに言ったのはその為だ。しかし両親も、セフィに対しては戸惑う事が多いという。
『あの子は確かにおとなしい子でしたけど……眼を覚ましてからというものの、本当に口数も少なくなって……』
『セフィを、守ってあげたい。そう思うのですが』
　セフィの母は泣きそうな顔になり、父は彼女を支えるように肩を抱いた。こうしてセフィを想う両親すら、セフィ自身の変化に戸惑っている。やはり彼女の変化は、あの宗教団体によって行われた〝ナニカ〟にある。
　ならば、エレナはそれを知らなければならない。
「私は彼女を救いたいわ。その為に出来る事はしたい」
「ふむ……」
　エレナの真剣な瞳に、ミストは僅かに首を傾ける。
　彼女にセフィを預けたのは誰であろうミスト自身だ。そしてそのエレナがこうして真剣にセフィに向き合おうとするその姿は素晴らしい事だ。だが、だからセフィが救えるのかといえば、そうではない。それほどセフィの過去は重い。エレナは彼女を癒す一つのピースとはなりえても、一人で彼女の傷を癒しきるには至らない。

だからこそ、エレナがその事実に踏み込む事にミストは慎重になる。エレナがやる気になっているのはいいが、少々焦りすぎていた。その焦りが結果としてエレナ自身をも傷つけてしまっては本末転倒だ。
勿論、その危険性はシールや自分が気を払い、抑制してやる事も出来る。しかしそうだとしても、危険なのには変わりない。故に踏み込むなら、確認しなければならないことがある。
彼女の意思の在り様を。
「なるほど、じゃあ一つ質問だ」
「何ですか」
「それは君自身の為なの？ それともセフィの為？」
エレナに最初、この件を依頼した時は恐らくは打算しかなかっただろう。自分自身が、彼女と向き合う事でどうなれるのか、そのことにしか興味は無かった筈だ。だが今はどうなのだろうか。
エレナは静かに眼を瞑る。それは奇しくも以前ヒノにも問われていた事だ。己が何のために行動するのか。彼女はそれもまた、ずっと考え続けてきたが、簡単に答えが見出せるものではなかった。
しかし、今、エレナには一つ、言えることがある。
「多分ですが」
「うん」
「両方だと思います」
エレナはミストに告げるというよりも、自らを改めるように言葉を続ける。
「セフィとの関係で自分が成長できたらと思う気持ちも本当ですし、彼女自身をどうにかして助けられたらと思う気持ちも、確かに私の中に芽生えています」
「なるほどね」
セフィ自身を助けたい、そう思う心が芽生えなければ、そもそもセフィに対する意識を向けることはなかったのだろう。そう思えるようになりつつあるのだ。彼にとって、学院長という立場は上手く国に影響力を及ぼせ、尚且つ悪眼立ちしないからこそ就いている隠れ蓑に近いものだが、それでもこうした生徒の成長というのは嬉しくなる。
ならば、

「いいよ。いいだろう。君に見せよう。あの村で行われてきた事を」

「本当ですか？」

「ただし」

　ミストは笑う。覚悟を問うような笑みを、

「覚悟を決めるといい。セフィが受けた仕打ちは、君のような甘やかされたお嬢様は知る事すらなかったような――暗黒だ」

　その言葉に、エレナは僅かに生唾を飲み込んで、確かに頷いた。

第百十九話 決意と決着

【宗教団体・ラグナ】本拠点
　その単調に続く通路をかけながら、ヴェインは今の己を思い返す。
　といっても、彼の今までの人生を語るのは容易い。彼が生きている中で掲げ続けてきた目的は復讐、それ以外のものは無い。彼は彼の故郷を滅ぼした魔術結社を呪い、恨み、戦場を渡り、生き延び、力をつけ、魔術結社を追い続けた。似たような組織を滅ぼし続けた。
　彼は復讐を目的に生きてきた。復讐の為に剣を磨き続けた。血の滲む鍛錬、そして魔眼の力、仇から与えられた力をも利用して、彼は敵をなぎ倒し、この国のギルドのトップといえる所まで駆け上り続けた。全ては復讐の為に。復讐を原動力として、結果得てきたものだった。
　だが、なら彼にとって、例えば彼が率いるギルド〈紅目〉は、彼の復讐の道程に存在した単なる副産物でしかなかったのだろうか。ギルドだけではない、彼は戦い続ける最中に、様々なものと出会ってきた。
　彼を共と慕う者達と出会った
　彼を愛していると微笑む女と連れ添った
　彼を師と仰ぐ少年に付きまとわれた
　彼を敵だと吼える連中と戦ってきた。
　これらの出会いは、彼にとって無意味な、復讐を成す上での単なる淀みでしかなかったのだろうか。
　否。違う。そう彼は理解している。
　彼が、復讐の過程で出会ってきた者達は、触れ合ってきた人々は、重ね続けてきた経験は、復讐の過程で生まれた淀みなどでは断じて無い。それらはかつての血に塗れた過去とは比べ物にならないほど、輝かしく、醜く、しかし素晴らしいものだと。復讐はただ過去に身を沈める事しかできない。だがその出会った人々

は、経験は、彼を未来へと進めてくれる。
　彼は復讐者だ。
　だが、復讐が、己に何をもたらさない事は理解していた。全ては自己満足でしかないことを。それ故に、彼は彼を取り巻く彼らの事を、彼女等の事を何よりも大切に思っていた。
　だから、それ故に、彼は復讐を成し遂げなければならなかった。
　復讐をとめることは出来ない。彼の心の内側に突き刺さった憎悪は、決してなくなることは無い。事を成し遂げるその時まで。
　彼は復讐を成す。過去に浸るためではない。未来へと進む為に。

　そして、今、彼は一つの魔術結社の　地下へと続く階段を降りている。ある種の予感を抱えながら。此処は似ていた。作りがとかそういうのではなく、あえて言うならば〝気配〟か。それはかつての彼の故郷を襲った連中の気配だった。
「ヴェイン殿！」
　補佐の騎士の声に前を見る。幾らかの結界の備えられた先にある扉。彼は魔眼で呆気なくその結界を切り開き、扉を押し開いた。
「……ッ」
「ここは……」
「□□□」
　色々な〝モノ〟の匂いの入り混じった、お世辞にも明るいとは思えない薄暗く狭い部屋、細かく魔術術式の刻まれた紙が彼方此方に貼り付けられている。地面には〝ナニカ〟の血の跡が走り、奥に並べられたビンには〝ナニカ〟の肉片が丁寧に、まるでコレクションにでもしているかのように並べ置かれている。
　そんな、正気の人間が住まうとはとても思えない異常な空間の、その中心に
「おや、懐かしい顔だ」
　いっそ朗らか、といった笑顔をフードの下から見せる、その男はいた。その男の顔を。影から薄っすらと見えるその男の顔は、ヴェインの見た事のある顔だった。
　それは、自分の妹の脳髄を引きずり出していた男の顔だった。

それは、両親をおぞましい者に変え、喰らい合う様を記録した男の顔だった。
　それは、故郷全てを焼き尽くし、そ知らぬ顔で去っていった男の顔だった

「──ッ」

　ヴェインはその瞬間、一瞬で全身の毛が逆立ち、心臓が強く鳴るのを感じた。全身の血が体を巡り、剣を握り締める手に更に力を加える。その時彼の内にあった感情がなんだったのか、分からない。
　歓喜か
　怒りか
　憎悪か
　それとも全てか
　あらゆる感情が彼の内で爆発し、それが無理やり普段変わらない顔に表情を作る。

「っは」

　まるで泣きそうにも見える、笑みを
「殺す」
「それは困るな」
　男の軽口を耳にする間もなく、ヴェインは剣を引き抜き男に飛び掛った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　夕暮れ時、オルフェス学院初等クラス。
「さて、皆文字を書き取れたかな？」
　教師、シールの声と共に、子供達は元気良く手を上げて返事をする。その中にセフィの姿もあった。胸元に魔具がネックレスのように仄かな光を放つ以外は、彼女は他の子供達と変わらない、普通の少女だ。
　彼女は他の子供達のように手を上げない。感情の無い表情で、ただじっと子供

達に笑みを向けるシールへと視線を向ける。彼は此方の視線に気が付いたのか、笑みを返す。
　セフィはその笑みに笑顔を返さない。彼の笑顔も不思議そうに見つめ返すだけだ。
　シールはそんなセフィの様子に少しだけ苦笑しつつも、直ぐに皆に笑顔を向け
「それじゃあ、今日の授業はおしまい。宿題はちゃんとやってくるようにね」
　そう言って、子供達の元気な返事を聞いて、教室を出て行った。それを確認した途端、子供達は一斉に立ち上がる。今日は何をして遊ぼうか。そんな話をしながら、
「セフィちゃん！　一緒に遊ぼう！」
　そんな中、マリがセフィに声を書ける。セフィは返事をしないが、マリはそれを確認せずに彼女の手を取る。周囲には他の子供達も一緒だ。彼らはセフィの事情を知らない。だが、彼女が何かしらの事情を抱えている事は察している。
　シールの教室の子供達は、多少なりとも〝特殊な〟魔的素養を持つ子供が集まる場所だ。それ故に、同じような事情を抱えた仲間たちに対して、子供達は進んで交流を取り、受け入れようとする。
　この教室の子供達の姿勢は、シールにとって誇らしい事の一つだ。
「今日はなにしてあそぼっか」
「アレやろうぜ！　泥玉合戦！」
「セフィちゃん魔術つかえないじゃん。他の遊び考えなよ」
　少女と少年がやんやと騒ぎ、笑う。しかしセフィはその中心にいながらも、やはりあまり表情を変えない。時々ゆっくりと頷いたりするだけだ。意思はあるが、感情が希薄。それは子供達を前にしたとしても変わらない。応じる子供達は、特に気にするような事も無いのだが。
　今やセフィを中心としたそんなやりとりも日常と化していた。彼らは何時ものように遊び場のグラウンドへ向かう。が、その途中、
「あれ、エレナじゃん」
　一人の少年が声を上げる。前を見ると確かにそこにエレナがいた。何処か疲れたような顔をしながらも真っ直ぐこちらに向かってくる。
「エレナ！」

「エレナー！　どうしたんだよ！」
　パーム達が真っ先にエレナへと駆け寄る。彼らにとって最早エレナは馴染みだ。ゲルダー家の娘といった偏見も持たず、彼らは怖いもの無しにエレナに接していた。エレナもまた、彼らとの付き合いにはもうなれたものだった。
　ところが今日の彼女は元気が無かった。疲弊しきった、といった様子でパーム達の頭を撫で、
「……少し、ね」
　子供達にそんな風に応じつつ、エレナはセフィへと視線を向ける。そして周囲の子供達へと少し無理をしたような笑みを作り、
「……ねえ、貴方達、セフィと少しだけお話してるから、先に行っててくれる？」
「えー……先に私たちが遊ぼうって言ったのに」
　マリは口を尖らせる。が、エレナの様子に何かを察したのだろう。直ぐに表情を改めて、「わかった」と口にした後、
「後でちゃんと連れてきてね！」
「ええ、分かってる」
「セフィちゃん！　後でね！」
　そう言って駆け出す。子供達は何時だって元気だ。
　そしてあっという間に日の差し掛かる廊下には、セフィとエレナだけが残された。
　セフィは不思議そうにエレナを見上げる。
　エレナはセフィを前に、息を呑む。顔に浮かぶ感情は、恐怖の様でもあったし、悲しみのようであったし、怒りの様でもあった。あらゆる感情がせめぎ合っていた。そしてそれを堪えるように口を強く紡ぎ、セフィを見つめ続ける。
　そして眼を伏せて、セフィの身体をゆっくりと、抱きしめた
「貴方を助けるわ。必ず」
　それは決意であり、彼女を想うエレナの愛だった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

闇の中
「さて」
響く声で男は囁く。外では騎士と部下達の喧騒の音を耳にしながら、まるで気にする事も無く、平然とした表情で、微笑む。僅かな灯りとフードの陰で良く見えないが、何処かそれは仕事での疲れを拭うような、穏やかなものだった。
その部屋の異常性と、足元で褪せた赤髪の男と騎士達が血の中で倒れ伏していなければ、そして右手は血塗れで、掌には、淡く輝く一つの眼球が乗せられているという事実を排除すれば、その男は優しげな人柄にも見えたかもしれない。
「さて、それでは、終わりを始めよう」
響くその声は、闇に響き、闇のまれ、消えていった。

……疲れた！
色々と展開的に悩んだりなんだりしましたが、なんとか此処まで。
ようやく物語を坂道から転がす事が出来ました。
後はどこまで転がせるか、頑張っていきます。

魔術学院の平和主義者

神殿編

第百二十話 急変

　アスファル大陸。ガイディアやアダリアといった幾つかの大国とそれに寄り添うように小国家が並ぶ人のひしめく大陸。国境が重なるその中心地、一つの街があった。
　整地されたその大地の上に均一に並ぶ建物。統一された印象を受ける街、そしてその中心に、一つの巨大な建築物が存在した。それは白く、そして高い。この時代には珍しいくらいその外装は整っていた。
　広い門から内部に入ると、其処は　聖堂、といった印象が強い。石柱が並び、精緻な神の姿が描かれたステンドグラスが背後から光を取りこむ。澄み切った空気は何処までも冷たく、それが荘厳な雰囲気を更に加速させていた。
　その場の更に奥、幾つかの道を曲がり、階段を上がると、何処か裁判所にも近い場所がある。中央には誰かを立たせるために作られたような台が添えられれ、そこを囲い見下ろすようにして白石作りの傍聴席が用意されている。
　其処には白地の衣服に身を包んだ男達が並んで座っていた。
「……」
「……、……」
「…………」
　豪華な意匠の施された意匠に身を包んだ男達は、その場で誰かを待つようにしながら、小さく囁きあっていた。すると部屋奥から一人の男が姿を現す。顔に刻まれた皺の割に若く見えるその男は、頭に高い帽子を冠り、そしてその場を見渡す。小さく言葉を交わしていた者達は視線をその男に向けた。
「よく集まった、早速だが、コレを見て欲しい」
　言葉と共に侍女と思しき顔を隠した女たちが男達に資料を配る。男達は
「神の遣いから渡された確かな情報だ」
　それらの資料を見た男達はそれぞれ程度あれ顔を顰め、そして左右の同僚達に

視線を向けると顔を伏せ、言葉を交わす。
「ガイディアは我々の干渉を嫌ってきた……だがコレは明らかな規約違反だ」
「我等を何処までも侮りおって……あの古狸」
「憎たらしい。だが、力を持つが故に処分も出来ん」
　交される言葉の端々に入り混じる悪意は、清澄なこの場の空気に見合わず、陰湿さに満ちていた。彼らは各々顔を赤くさせたり青くさせたりしながら小声で早口に忙しなく身体を揺すった。その光景は何かしらの嫌悪感を人に沸き立たせるような矮小さを感じさせるには十分だった
「今はあの化け物はどうでもいい。問題は〝コレ〟だ」
　改めるように高帽子を被った男は周囲の男達に資料を改めさせる。小言を止めた彼らは再び資料をにらみ、そして
「対処せねばなるまい」
「神々の与え申した恩恵は、我等が管理しなければならない。我等だけが許される」
「このような隠匿は許されん！」
　次々に零れる言葉に、高帽子の男は頷き、
「そうだ。悪しき者に利用される事のなきように、それが例え──」
　一息、その顔は性根を表すように歪みきり、
「それが例え、人の手で生まれた邪法の紛い物だったとしても」
　嫌悪と侮蔑に満ちた言葉は、彼の書類の写真に注がれた。
　そこに映る一人の少女へと

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　オルフェス学院
　既におなじみとなった第三グラウンド、本来なら人気の少ないこの場所は、最近は常に同じ顔ぶれが集う一種のテリトリーのようになっていた。グラウンド中心のすぐ近くにエレナ、其処から少しはなれて腕を組み、そちらを見て見学するキース、ジーン。そしてグラウンド、その中心からやや上、セフィは宙を浮かび、瞳を閉じてマナを身体に纏わせる。

幼くも小さい彼女の身体に漂うマナは、仄かな色を纏いながら、緩やかな水面のように波をつくっている。それはとても穏やかに見えた。
「セフィ、もう良いわよ」
下で、明るい金の髪を靡かせたエレナが微笑む声をかける。するとセフィはゆっくりと瞳を開き、そのまま身体を地面へと降ろしていった。纏っていたマナは解け、地面へと吸い寄せられていった
「上手く出来たわね。セフィ」
「……」
エレナは微笑みセフィを撫でる。セフィは表情を変えぬまま。だがエレナに撫でられながらじっと彼女を見つめていた。キースとジーンはそのまま彼女達に近づき、
「安定してきたな」
「シールと何度も相談して、セフィが頑張ったもの」
エレナは何処か誇らしげで、同時に安堵した顔をする。既に悩む様子は無い。キースは感心する。やはり、自分がどうこうと口出しする必要は無かったと。
後はこのまま行けば、セフィの闇も晴らすことが出来るだろう。
そう思いつつも、同時に自分の内に、そうは上手くはいくまいという予感がキースの中にはあった。何度もセフィが力を操ろうとしているところを見れば、教えられなくともセフィの異端さは察せる。
その異常性は、恐らくは混乱を生む。誰も彼も、エレナのように自分の異端の力を完全に制御できる訳が無いし、彼女のようにその力を持っていても問題を踏み潰せるくらいの権力を抱えている訳でもない。
ミストが保護しているとはいえ、どうなるか。
「……杞憂だといいんだが」
だが、キースのその不安は、的中する。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「やあシール。来てくれたね」

「リーン先生に攫われたんですけどね。例の如く」
　シールは学院長室でミストの前、苦い笑みを浮かべて座った。
　初等クラスの授業帰り、何時も通り、といっては悲しくなってくるが、リーンに強制的に転移され、今はミストの前だ。
「いい加減、もっと穏便に呼び出してください」
「君が逃げなければ考慮してあげるよ……ところで」
　区切り、窓の外、第三グラウンドの方向を眺め
「セフィの様子はどうだい？」
「安定してますよ。【呪い】という発想から離れたのは正解でした」
　それは思考の転換だった。セフィの力のコントロール。自分が持つ力を全く操作できないセフィに対して、エレナとシールが相談した結果たどり着いた一つの結論だ。セフィの力、彼女の呪いの精霊としての考え方を改めたのだ。
　そもそも精霊というのは神に近しい存在で、その力は狭く深い、よりも、広く深い。人の範疇に納まらない膨大な力を扱えるからこその精霊だ。それ故に、呪いという力に区切るには違和感があった。
「セフィのイメージを拡大させると、途端にマナの扱いがスムーズになりました」
「なるほど、それは上々だね……全く持って」
　だが、そう言うミストの声は全く持って、喜ばしいといった色は無かった。いつも飄々とした彼にしては珍しく、そしてシールにとってありがたくないことに。
「……何かあったんですか」
「うん。しかも残念ながら、とっても厄介な事が」
　ミストのその前置きが更にシールに嫌な予感を加速させた。ミストは子供の振る舞いの真似事をしたりするが、もったいぶって相手を怖がらせるような真似を好んでするようなタイプではない。
　顔を顰めるシールに、ミストは一つ息をついて、そして躊躇い無く切り出した。
「一つ、ヴェインが【宗教団体ラグナ】の討伐に失敗した」
「……は？」

半ば呆然としたシールを尻目にミストは言葉を続け、
「そしてもう一つ」
　この上なく鬱陶しそうな顔をして、
「セフィの事が【神殿】にバレた」

第百二十一話 虎穴に入らずんば

　旧校舎、執筆部、部長室。
「リド！【神殿】に関して教えて！」
「権力の亡者よ」
　転移術で唐突に室内に飛び込んだ挙句にいきなり質問を投げつけたエレナに対して、ミフィール、そして何故かこの部活動に巻き込まれつつあるヒノと雑談していたリドは即座に返答した。エレナはその回答を受け止め、しかしあまりにも予想と異なる回答に一瞬頭が停止した。
「権力？ 神に仕えるのに？」
「表向きはそう、だけど」
　リドはやりかけていた仕事を肩脇に置き、手に頬をついて言葉を続け
「【神の特質顕現】、つまり【巫女】を神殿は集めている。それは表向きには神の意思を地上に届け、神の力を人の欲に利用される事の無いようにする為、だけど裏では」
「【神の巫女】その圧倒的な力を独占し各国に多大な影響力を得ています」
　と、背後からジーンがキースを連れて、リドの説明を補足する。
「二人とも……」
「突然どうしたんだ？ シールから何か言われたみたいだが……」
　キースが尋ねる。
　何時も通りの校庭での訓練、それが終わるかしたくらいにシールが尋ねてきたのだ。キースがジーンと、何時も通りの様子見には少し時間が早い、とそう言葉を交わしたのもつかの間、エレナが珍しくシールと言い争いをし、直後にシールがセフィを連れてエレナと分かれた。傍から見る分に分かったのはそれだけだ。
「シールはなんていったんだ？ 何故あの子を連れて行った」
「【神殿】が彼女を連れて行くって……」

「セフィ……あの少女が神殿に、ですか」
　その言葉は、彼女が神の力に属した存在である事を示唆しているのだが、ジーンもキースも、決して驚きはしなかった。その力の一端を目撃し、察しはついていた。故に驚く事ではない。
　セフィの力の詳細、そして何故今回唐突にセフィのことがばれたのか、気になる問題は幾つも在るが、それはまあ、自分達が頭を悩ます事では無いだろう。
　現状、問題なのは、
「なんで……いきなり！」
　目の前で怒り狂っているエレナだ
　エレナが叫んだ瞬間、パリっと魔力が部屋を走る。破壊の権限の乗ったそれは彼方此方を僅かに〝削り取る〟。エレナの膨大な力が感情に触れ、発せられたのだ。最近は彼女も感情のコントロールも魔力のコントロールもできるようになってきたのだが、それが効かなくなるまでに彼女は怒っていた。
　それは、シールが有無言わさずセフィを連れて行ったことが何よりの原因だった。
「なんであんな、まるで説明しようとすらせず……！」
　エレナはシールを誰よりも信頼している。それこそ両親よりも。だからこそ有無言わぬ彼の態度は本気で腹正しいのだろう。とはいえ、怒り狂う彼女をこのままにしておくと、その余波だけでこの部屋が破壊されかねない。
　先ほどからリドが批難するような目線でキースをにらみつけている。彼女を止めろといっているらしい。目の前で、此方が一瞬で消し炭になりかねないほどの魔力を漲らせている少女にはお近づきにはなりたくないのが本心だが、やむを得ない。
「……おいエレナ」
「何よ！」
　エレナが叫ぶたびに大気に魔力の光が走る。お前は雷神か何かか、とエレナに言ってやりたかったが、ソレを言ってこの現状がどうこうなる訳も無い。
「落ち着け……心当たりあるんじゃないか？」
「……心当たり？」
「お前の意思無視して話し進める程、融通きかない教師じゃないだろ。シール

は」
　その点に関してはエレナも頷く。彼とは、恐らくはこの場にいる誰よりも言葉を交わしてきた。彼の人となりを自分自身の目で見てきた。だから彼はそう言う、一方的なことはしないと分かっている。
　では、何故？　彼が神殿の件から自分を遠ざける理由──
「……あ」
　あった、理由はあった。非常に明確で分かりやすい理由だ。
【メナスの加護】
　コレだ。エレナ自身の特性。生まれもって持ち、最近になって覚醒したこの力。
「いえ、でも……加護者だからといって問答無用で神殿に攫われるの？」
「加護者ってのは此処だけの話にしてやる……で、ジーン、どうなんだ」
　キースはジーンに話を振ると、ジーンは頷く。
「加護者の管理は神殿の持つ絶対的権限の一つです。先も述べましたが、神の加護者の力は活用次第で国単位に莫大な力を与えます」
「なら周辺国も加護者を集めればいいんじゃないの？」
「【加護】持ちは滅多に現れません。そして現れたとしても、僅かなれど神々との交信を可能とするのは【巫女】達のみ。それを独占する神殿の連中がやはり一歩、先に集めてしまいます。確保したとしても、同じでしょう。探し出されます」
　エレナが全く今まで神殿とかかわり無く過ごせたのは、彼女に力を与えた神が滅多な事では巫女を生み出す事は無い【メナス】であったこと、そしてゲルダー家とミストの保護下に在ると言うのが大きかった。
　そしてそれゆえに、同じくセフィの保護も順調、の筈なのだが
「……どうしてそのセフィって子の情報だけ漏れたのかしら」
「それは私たちが気にする事じゃないでしょう？　それよりも、神殿に連れて行かれた人はその後どうなるのよ？」
　リドの推測を遮り、ヒノがジーンを尋ねる。
　ヒノを含めた全ての視線がジーンに集まる。ジーンは息を吐き、
「確かに神殿は問題も多いですが、一応複数の国から認められている組織です。

〝真っ当な神の力〟を持つのであれば、即座に危害を加えられることは無い筈です」
「真っ当じゃなかったら？」
　真っ当じゃないのかよ。とその場にいる全員がエレナに心中で突っ込みを入れた。ジーンは僅かに唸りながら言葉を探り
「……私も其処まで詳しく……しかし、異端審問にかけられる可能性が」
「それって？」
「神々の意向に背く、神々の理に反する存在であるならば、それが人々に害をなす前に処分するのも神殿の仕事、だ、そうです」
「……処分って何」
「……」
　ジーンが回答を控えた。つまりはそう言うことだ。神殿で何が行われるのかは明確ではないが、このままだとセフィはなんらかの危険に晒される。ならば
「助けないと！」
「どうやって」
　キースは即座に口を挟んだ。
「力づくで追い返す……」
「それで根本的に解決すると本気で思っちゃいないだろう」
「……ゲルダー家で匿う？」
「そんなことすりゃ国際問題になるぞ。さっきジーンが言ってたように、神殿はガイディアにも加護者の力を融通する対価に強い影響力を持ってる。ゲルダーなんてのが動けば直ぐバレる。当然ミストでも駄目だ」
「……でも」
「俺たちが考えるような浅知恵じゃ、意味は無い」
　キースは溜息を吐き、肩を竦めた。
「だからこそ、シール、ミストはお前を遠ざけたんだろ。おまえ自身が何かしようとしてもややこしくなるだけ。むしろお前まで神殿に〝連れてかれりゃ〟助けなきゃいけない相手が増え――」
　と、そこまでキースは口にして、次の瞬間、口を閉ざした。自分が口にした言葉。その意味を改めた瞬間、嫌な予感が走った。軽く苦い顔をしながらエレナを

見ると、彼女は僅かに瞳を輝かせ、
「連れていかれる……」
「待て」
　キースは即座に口を挟んだ。エレナが何を考えているのか直ぐに分かった。分かったからこそ静止に掛かった。
「〝ソレ〟を避けようとシールとミストが気を使ってるって分かってんのか？」
「む……」
　当たり前だが、エレナまで連れて行かれれば、ミストの仕事が更に増える事になる。そもそもセフィ【人工精霊】であり【呪いの精霊】でもあるが、エレナはエレナで【破壊神メナス】の加護者、エレナがどう扱われるかもわからない。まあ、いかに神殿とて、ゲルダー家の力を無視できるとも思えないが。
「あ、あの」
　と、此処で、ゆっくりと、半ば怯えながら手を上げたのは、ミフィールだ。キースが口を閉じため息をつくと、そのままミフィールの言葉を促す。
「そ、その、多分、ミスト学院長やシール先生の判断は正しいと思うんです……」
「……」
　エレナも頷く。感情は兎も角、理性では、彼らの選択が正しいと今は納得できている。ミフィールにそう改めてられて、少し悔しくなるのは、自分が子供だからだろうか。
「でも」
　だが、ミフィールは言葉を続け、エレナを見つめ、
「エレナ様がどうしたいかは別なのでは」
　そう口にした。エレナはミフィール言葉に、暫し口を閉じ彼女を見つめ、キースは小さく溜息を吐き出して、僅かに瞳を細め、
「……その結果、自分以外の誰かに迷惑をかけてもか？」
　それもエレナの立場を考えれば、その迷惑というのはとんでもなく広い範囲に及ぶのだ。それは紛れも無く事実だ。
「……でも、それでも全部エレナ様のものです。その責任も」
「背負いきれない責任は、責任とは言わん」

淡々とキースは正論を吐くが、ミフィールはじぃっとキースをにらみつけて、食い下がる。別に、彼女とて自分が勝手なことを言ってるのは自覚しているだろうに、それでもこうして食い下がるのはエレナを思っているからだ。
　キースは溜息をつき、エレナへと視線を移す
「で、お前はどうするんだよ。お前のダチはこんなにも頑張ってるんだが」
「……そうね。ありがとうミフィール」
「いえ……差し出がましい真似を、すみません」
　慌てるミフィールにエレナは微笑み、そして静かに目を瞑る。考える、必要は無い。既に自分の中では結論が定まっている。後はその決断をどれだけ詰めることができるかだ。その為に
「皆、教えて欲しい事があるのだけれど──」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　数日後
　魔術学院に二台の馬車が正面から入ってきた。刻まれた模様は神の威光を知らしめる印、中から現れたのは威圧するように厳かな白の衣装に身を包んだ男と、同じく白を基準とした従者達。男は不遜な態度で学院の様子を見回し、前から歩いてくる人影に目を向けた。
「……」
　一人は少女。茶髪の、何処か虚ろな印象を与える幼い少女。学院の制服を身に纏った少女は、何処か不安にさせる足取りでゆったりと前へと進む。そしてその隣に
「□□□□……」
　隣の少女よりも年上の、美しい少女。金の髪を靡かせた少女は、隣の幼子を庇うように一歩前に進み出ながら、馬車の方へと歩んでいく。彼女達の姿を確認した男は、無表情のままに、
「異端の精霊に、邪神の巫女か。これよりお前達を神の聖域に連れて行く。神の意に背くような真似をすればどうなるか、覚悟するといい」
「……」

あからさまな侮蔑を交えた言葉を叩きつけて、男は前の馬車に早々と乗ってしまった。二人は残る従者達に背後の馬車乗るよう促される。
「……」
　幼い少女、セフィは隣のエレナの腕を引く。表情は変わらないが、其処に不安という感情が薄っすらと映っていた。エレナは、腕を引くセフィの手をぎゅっと握りしめ
「大丈夫よ」
　そう言葉にして、揃って馬車へと乗りこむ。馬車の中は広いが、それ故にどこか寒々しくて、エレナはセフィに寄り添うようにして椅子に腰かける。
「エレナ！」
と、そこで、馬車の外から声が聞こえてくる。窓から顔を出すと、遠くから茜髪の少女、ヒノが駆け寄ってくる。止めようとする従者たちをスルりと魔術ですりぬけて、そのまま顔を出すエレナの首に飛びつくようにして抱きついてきた。
　エレナは驚きながらもバランスを取り
「ちょっ「エレナ！ 突然出て行くなんて！ 何で言ってくれなかったの!?」
　そんな風に、わざとらしく大きな声を上げて、そのままエレナの耳元に口を寄せ
「……これを持っていきなさい」
「……用意してくれた物？ 間に合ったの？」
「……こんな馬鹿な芝居させたんだから下手打ったら殺すわよ」
　そんな短いやり取りと共に、小さな皮製の袋を渡された。直後に従者がヒノを引きはがす。その瞬間ヒノはまるで親友との別れを惜しむ少女の様に泣き崩れる顔になった。中々の演技だ。ミフィールではこうはいかないだろう。
「それじゃあね、ヒノ」
「お守り！ ちゃんと持っていてね！」
　そんなやりとりをして間もなく、従者たちも乗り込んで、馬車は出発した。遠い異国の地へと

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

オルフェス学院学院長室
「……さてさて、どうなるかなあ」
「なるようになるしかねえだろ」
二人が、神殿の使いに連れられていく様子を、窓際から眺めていたミストの呟きに、ソファーにふんぞり返るキースはそう返した。ミストは苦々しい笑みで返して
「やっぱり僕個人としては、もっと安全策で行きたかったんだけどね」
「だが、セフィを守る手数も少なかったのは事実なんだろ？」
そう言うと、ミストは頷いた。
「神殿にいる僕の手駒もそう多くは無いし、強い力があるわけじゃない。あそこの中は独自のルールで動いている」
だが、ゲルダー家の娘にして、曲がりなりにも神の巫女であるエレナならば、良くも悪くも神殿をかき回すことが出来るだろう。ただし、その結果が良い方向に進むかまではわからない。
「最悪。エレナを助ける為にセフィを見捨てる、なんて選択が出てくるよ？」
「そこら辺はエレナにも言って聞かせた」
「どうせなら説得して欲しかったねえ。君に」
「出来るか。あの手の女は苦手だ」
「女相手なら誰でも手篭めに出来るくせに」
「うるせえだまれ聖職者」
キースが睨むとミストは笑う。とはいえ何処か苦々しい表情は消え去りはしなかったが。まあ無理も無い、とはキースも思う。何しろ、この件だけでも頭が痛いのに、まだ別の仕事が残っているのだから。
「んで、シールとリーンは？」
「どでかい事件を解決しに、城へ」

第百二十二話 事の顛末

　ガイディア城医務室。
　後ろにリーンを引き連れて、シールが其処に足を踏み入ると、その場で治療を受けていた騎士達が揃って頭を下げる。だがその姿はそれぞれ、大きな傷を負っているのか包帯や医療用の術式布などを巻く騎士達が見えた。
「構わないで、寝ていてくれていいよ」
　シールはそう言って騎士達の頭を上げさせ、溜息を吐く。騎士達の怪我の具合を見るだけでも、自分がこれから首を突っ込もうとしている問題の難度を理解できる。正直あまり気乗りしない……が、其処に、旧友が巻き込まれてるとなると話は別だ。
「さて、と、ヴェインは……と」
　そう言い辺りを見渡すと、リーンが背後から指を刺す。指先の、医務室の奥。看護士によって汗を拭われ、横たわっているヴェインが見えた。そしてその横には見覚えのある赤髪の美女
「セラ」
「シール！」
　そう言って彼女は顔を上げたが、ベットで眠るヴェインを気遣ってか直ぐに声を落としてそのまま椅子に座り込んだ。いつも威勢の良い彼女が泣きそうな顔をしている。
「どうして此処に？」
「ヴェイン、負けたっていうから……」
　これがやられた相手が他のギルドの仲間なら復讐だ！　くらいの事を言ってもいいのにそんな様子もなくしょげかえっている。本当に、ヴェインが敗北した、その事実がショックなのだろう。それくらい、彼女はヴェインを信頼しているのだ。

「他のギルドの仲間は？」
「仕事……終わったら来る」
　そう言って、そのまま座りヴェインを再び心配げなまなざしで見つめる。見つめたって治りはしないがそんな無粋な言葉を投げかける気はとても起こらなかった。
「大変だったね」
　シールは軽く彼女の頭を撫で、そのままベットに視線を移す。ベットの上にはヴェインが横たわっている。褪せた赤髪の彼は、顔に片目を隠すように包帯を巻かれ、眠っていた。顔色は悪い。
「シール殿」
　と、背後からまたも見覚えのある男。かつてこの城で〝鬼ごっこ〟をしたダルシアが顔を出した。彼は比較的、他の騎士達と比べて傷は浅いが、消耗しているようにも見える。それでも表情にソレを出さぬよう、維持している。
「何があったんだい。ダルシア。ヴェインは」
　彼に気を使うのは失礼、とそう思い、シールはそう問いかけた。ダルシアはそれに頷くと
「……今回の作戦は━」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　極秘任務
【王暗殺未遂事件首謀者及び国内古代封印術式無断開放疑惑の犯人討伐】
　これを請け負ったダルシアは、誰よりも今回の依頼に関して警戒心を抱いていた。王暗殺の一件を深くまで知る彼は、それゆえに彼らの得体の知れない力を知っていた。だからこそ迅速に、そして全力でこの拠点を襲撃した。
　その全力を尽くした今回の討伐は、失敗した。
「退け！　急げ！」
　ダルシアは叫び、部下に撤退を命じ続ける。
　侵攻は極めて順調だった。途中までは
　敵の兵士達は、決して倒せぬ相手ではなかった。もとよりこの殲滅戦のメン

バーは騎士団の中でも精鋭部隊。例え相手がどれだけおぞましい改造を詰まれていようと、それに応じ打ち倒すだけの能力はある。ヴェインが一直線に奥地へ進んだが故に戦力を削がれたのもあいまって、半ば一方的といっていいほどに、部隊は敵を切り裂いていった。
　ところが途中で一気に形勢が逆転する。
　半ば以上まで侵攻を果たし、幾らかの研究施設を押さえた辺りで、変化が起きる。この地下施設の更に地下へと続く階段、その調査へと向かおうとした記した位置が、その異変に気が付いた。
　地の底、何かが蠢くような音がする。
　そしてその音が何か、探ろうとする間もなくその地の底から、〝ソレ〟が溢れかえってきた。赤黒く、奇妙な色合いの、〝肉の塊〟
「……【崩壊物】?!」
　マナの臨界点を超えたモノ。自分の器を維持できずに、生物としての維持すら出来なくなった、破壊衝動の塊。瞬間、この拠点はその【崩壊物】で溢れかえった。最早戦術も何も無い。理性も知性も意思もない化け物たちが敵も味方もまるで見境無く飲み込み続けた。
「た、助け!! ひぃ!!」
「こ！ この！ 魔術が効かない!!」
　敵の魔術師の絶叫、部下達の悲鳴が辺りに木霊する。
　尋常では無い再生力と、馬鹿馬鹿しいくらいの巨大な身体。剣で刻もうと魔術で焼ききろうと際限なく増え続けるその肉の塊。最早殲滅作戦も何も無かった。この拠点は、単なる危険地帯でしかなくなっていた。
「『OOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO
「バ、ケモノが！」
　敵味方入り乱れて飲まれようとしているこの有様では、最早この拠点を攻略する意味すらない。故にダルシアは急いで撤退を指示して回った。転移術が出来る者は脱出を。出来ないものは可能なものとの合流を。
　入念な作戦準備があったため、脱出は問題なく進んだ。
　だが、未だ脱出報告が無い者達がいる。ヴェイン、そして彼につけた部下達。
「まさかとは思うが……！」

ダルシアは悪寒にかられながら、奥、ヴェインたちが向かった最奥の扉を開く。そして扉を開いた先に、眼前へ広がっていたのは、
「……!!」
　倒れる部下二人と、ヴェイン、そして
「ふむ。早いな。優秀な戦士だ」
　外の喧騒すらまるで耳に入らないかのような、朗らかな声。フードの陰で顔はハッキリしないが、微笑んでいる。直感がこの男を敵と即座に認識する
「【風よ我が翼となれ】」
　状況を確認するや否や、ダルシアは強化魔術を足にかけ、一気に〝男〟に接近する。そのまま流れるようにして剣を斜に振り下ろす。だが、
「おっと」
「っ！」
　避けられた。まるで身構える事も無く、何気ない動作で此方の剣先を見切って動いていた。直ぐにダルシアは察する。それは明らかに実力の離れた上位者の動きだった。更に間を空かず連激を繰り出す、が、それもやはり避けられる。
　容易く、造作も無いというような笑みがフードの奥からちらつく。馬鹿にしているようにすら見えたが、この状況、この環境を作り出したのであろう主の表情と考えると、おぞましいとしか思えなかった。
「っく」
「だが、流石に構っていられないな」
　男はぐっと、掌を広げる。魔力、否、もっと強大な〝何か〟が集約しているのをダルシアの魔術師としての能力が伝えてくる。寒気、反射的に術式により跳躍するが、それすらもまるで意味があるとは思えない
　━━死ぬ
　だが、直後に鈍い銀の閃きが走る。それは
「ヴェイン殿?!」
　地面に倒れ伏していたヴェインが起きざまに振りぬいた一撃だった。
「━━っと」
　刃の閃きは謎の男の椀部に走り、次の瞬間その腕を切断した。血を撒き散らし、男は半ば呆然とする。傍でソレを見たダルシアはその瞬間わずかばかりでも

勝機を感じさせた。だが、
「……驚いたな。良くこんな短い間に意識を取り戻せるものだ」
　飛び散った血、そして肉が宙で動きを緩めたかと思ったら、その肉片が空中で〝留まり〟、そして時間が巻き戻るかのように、それらは元の場所へとピタリと戻った。
　治癒、否これは
「あの暗殺者の再生力……！」
「ああ、〝Ｋ０３〟。彼の再生能力は、私の力の複製だからね」
　そんな風に軽く笑う男へと、ヴェインは更に剣を振るう。魔眼で剣にマナを集約させ、純粋な力を孕ませ、それを一息に振りぬく。
「極剣」
　瞬間、集約されたマナと共に振り切られた剣閃は絶対的な破壊を生み出した。無駄な拡散は一切無く、その剣閃のまま斬激は飛び、この地下の研究室丸ごと叩き切る。
「っ!!!」
　衝撃にダルシアは思わず、倒れ伏した部下達を抱えて地面にすがりつく。ガラガラと天井から岩が崩れ落ちてくる。衝撃でこのままこの地下室が崩壊してしまっても何らおかしくない威力だった。
　しかしダルシアが半ば呆然とする中、突如、爆煙が不自然に払われ、
「素晴らしい。マナをそこまで自在に操るとは」
　男は、まるで無傷で、先ほどと同じ場所にいた。その掌には一つの輝く眼球。片目を瞼で塞ぎ、その裏から血を流すヴェインが僅かに眉を潜める。
「十二分に【魔眼】は成長したようだ。ありがとうヴェイン君。君のお陰で計画ははかどりそうだ」
「黙れ」
　再びヴェインの剣にマナが集う。今度は先ほどよりも鋭く強く。大気が唸りを上げるような音を鳴らす。あるいは今度こそこの部屋が完全に崩壊してしまいかねないほどのそのうねりを上げて、
「ふむ、流石にソレを受けきる事は難しそうだ」
　そう言うや否や、男は術式を詠唱する。その言葉の意味は

「転移術か！」
　此処を攻める前、敵の脱出を防ぐ為に転移術を封じる結界は敷いていた。だが、現状崩壊物の暴走から逃れる為にその結界は解いている。都合よく、敵だけを封じ込めるような結界を生み出す事は出来なかった。つまり、
「待て！」
「それではごきげんよう」
　そんな捨て台詞を吐きながら、呆気なく転移術を発動させた。マナの残痕が一瞬残るがソレも消える。首領を取り逃がす、その致命的な事実にダルシアは歯噛みしつつも、しかし直ぐに思考を切り替え、
「ヴェイン殿！」
　ぐらりと身体を崩し倒れていくヴェインを受け止める。背後に迫る崩壊物の這いずる音を聞きながら、手早く部下達と、周囲の資料を手に取り、転移術を発動させ、その場から脱出した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……以上です」
　ダルシアの話を黙って聞いたシールとリーンはそのまま沈黙を守る。シールは未だ動かないヴェイン、その包帯で隠された、今は虚ろとなったその瞳を見つめる。
「魔眼が奪われたのか」
「魔眼自体の所持者はヴェイン殿です。コントロールはそう容易く出来るものではない筈……勿論、それでも驚異ですが」
「現在対策を講じています。封印は無理でしょうが、術式の構築次第では──」
　騎士達の報告を聞きつつも、シールは別の事を懸念していた。
　ヴェインが魔眼を奪われた。それはつまり、その組織の首領とやらは最初、魔眼を含めて十全の状態のヴェインを撃退したという事だ。リーンの前例もある以上、ありえないと断言する事は出来ない。だがそれは
「不意をうつにしても……それでもヴェインを倒すっていうのが」
「あの男、私がどれだけ爆発起こしても無傷ですからね……鬱陶しい」

「相変わらずヴェインは苦手ですか」
「陰気臭くて嫌いです」
　そう言いつつもリーンとてヴェインのことは心配しているのだろう。で、なければわざわざこうして自分と共にお見舞いにはこないだろう。情報を聞きにいくだけなら自分だけでも良いのだから。
　そしてシールとて、思う所が無いわけでもない。
「まあ、敵討ちって柄じゃないけど、ねえ？」
　昔馴染みの友が、こんな有様にされて、平然といられるほど、鈍い神経はしていない。
「勝手に熱くなられても鬱陶しいです」
「リーン先生はぶれないですねぇ」
　まあ、ぶれられても困るのだが。彼女にはこのままでいて欲しい。そう思ってシールは笑い、再びダルシアの方へと向き直る。
「さて、それじゃあ本題に入ろうか」
　つまり、自分達を此処に呼んだ理由。学院長の依頼の内容だ。別に彼とてヴェインの見舞いの為だけに此処にシール達をやったわけじゃなるまい。
「今回はヴェインを倒したその男、【ラグナ】の首領を倒す……で、いいのかな」
「いいえ」
　シールの問いに、ダルシアはきっぱりと首を横に振った。え？　と首を傾げるシールにダルシアは用意してあった大きな地図を取り出して
「いずれ二人にはあの男の討伐も頼らざるを得ないのかもしれません……しかし現在、別の大きな問題が発生しています」
　病室で遠慮なく広げられる地図に看護士は僅かに顔を顰める。しかしダルシアは構わず、国境まで描かれた縮図の地図の、その一箇所に集約させたマナで丸を描いた。
「……此処は？」
「先に襲撃した敵の秘密拠点です……そして」
　そのまますっと、ガイディア国の方向に放射状の線を書く。
「ラグナの秘密拠点から溢れかえった【崩壊物】がこの国に侵攻しています」

「真っ直ぐこっちに？」
「はい……方法は分かりませんが、非常に統率の取られた動きで此方に」
　一息ついて、ダルシアは僅かに緊張の入り混じる声で
「このままだと周辺の村々を飲み込んで、此処に激突します」
　その言葉に、シールとリーンは揃って顔を顰めた。
　リーンは無表情のまま、雰囲気で。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　周囲を囲む白い城壁、外界との道を唯一繋ぐ門を潜り抜けると広がる美しくも、温かみの少しかける街並みを抜け、更に進む。街の入り口から既に眺める事が出来ほど巨大な、巨大な建造物が一つ。神殿と呼ばれるそれは、エレナの乗る馬車の窓からでもしっかりと、
確認できた。
「……此処が」
「……」
　神々の力を統べる神聖なる場。世界中の巫女達が集う【神殿】に、エレナとセフィは到着した。

第百二十三話 神の意の届く場所

「大きいわね」
「……」
　エレナは呆然とした表情で目の前の建造物、神殿を眺めている。神々の意を聞き届け、そして人々に伝える場所。という話は聞いていたが、果たして此処までやたらと巨大で威圧感を与える必要があるのだろうか、などと、エレナは首を傾げる。隣にいるセフィもエレナを真似るように首を傾けた。
　そんな事をやっていると、エレナ達の乗った馬車の背後から付いてきたもう一台の馬車の中から、此処まで来る道中全く顔を見せなかった乗客が顔を出す。エレナはその背後から付いてくる馬車にはてっきり神殿の神官とか、そんな風体の人間が詰まっているものとそう思っていたが、ソレは予想とは違い
「……騎士？」
　武装を固めた騎士、それも、兜から除く顔からは上手くはその表情は伺えない。騎士はそのままエレナとセフィの元へと近寄ると
「……っ？」
「──なっ」
　ぐいっと、セフィの腕を掴んで引っ張った。
　エレナは呼び止めようとするが騎士はまるでエレナの言葉を聴こうとすらしない。乱暴な手付きでセフィをひっぱり、まるで獣か何かを連行するかのように連れて行こうとする。
「何を……！」
　エレナは、それを見た瞬間、半ば反射的に魔力を体内で練り上げた。大気のマナを一瞬で掌握し、それらを全て力に変える。魔術的才能もあるのだろう。セフィを連れて行こうとした騎士が動きを止め、鋭い目つきでエレナを睨む。
　一触即発の空気の中、エレナが一歩、前へと進み出ようとする、だが、

『不用意に、力を振るうな』
　キース達から告げられた警告、それが頭を過ぎる。分かっている。自分には目的がある。目の前の事に一々怒り狂って感情を爆発させたら、間違いなくその目的から遠くなってしまう。
　だが、それなら。
　まずは息を整えた。しかし魔力はそのままで、騎士の方を見つめ、
「もっと、丁寧に、連れて行ってあげて？」
　言葉を区切るようにして、言い聞かせるように騎士に言葉を放った。それは脅しにも近かったが、意図は通じたようだ。暫くエレナを睨みつけるが、その後は先ほどよりも柔らかく、セフィの手を掴み、ゆっくりとした歩調で歩いていった。
「……」
「大丈夫よ。後でまた顔を出すわ」
　無表情、しかし何処か不安そうな顔のセフィにエレナは微笑みかける。そうする事しか出来ない自分に歯噛みするが、今は仕方が無いのだ。騎士とセフィ、二人の向かう先は、神殿の横に備えられた宿舎のように見える場所。其処が何なのかはわからなかったが、後で顔を出そうと心に決め、
「……のっけからこれじゃ、先が思いやられるわね」
　エレナは溜息を吐いた。元々セフィを助ける為に此処に乗り込んできたのだ。目的を見失ってはならないと、自分に言い聞かせる。
「さて、と」
　前を向く。目の前にあるのは巨大な神殿。覚悟して乗り込もうと、ようやくエレナは一歩を踏み出した━踏み出そうとした。が、その瞬間
「止まりなさい!!」
　鋭く、しかし焦りも入り混じるようなその声に、エレナは足を止めた。みると先ほど騎士とセフィが去っていったその方向から別の人間が姿を現した。やはり女性。今度は先ほどエレナが創造していたような、神官といった風情をそのまま体現している姿だ。法衣を身に纏った姿。表情は厳格そのもの。嫌いなタイプだ、と、真っ先にエレナは決め付けた。
「何処に行こうとしているのですか。勝手に動かれては困ります」

「……貴方は「私は貴方の案内と教育を任されています、ファナです」
　案内兼教育係、などという割に、その彼女の声色は酷く冷たかった。リーンとは別種の冷たさだ。あの女は無表情も何も単なる天然のようなイメージだが、この女は感情そのものが滲み出ている、そんな印象だ。
「それで、そ「お黙りなさい」
　即座に声が飛ぶ。エレナは僅かに顔を引きつらせた。
「貴方は神の使途である事を秘匿し、義務を怠った。それは許されざる行いです」
「にもかかわらず神殿に入るのを許されたのは、単に教皇に慈悲があったから」
「その事実を深く理解したうえで行動すべきだというのに」
　と、ずらずらとファナは言葉を吐き出す。その続け様に浴びせられる言葉を、エレナは冷静に聴きながらも、そのあまりにも露骨な敵対態度には納得していた。事前に皆で調べた情報と一致したからだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「神の階級？」
「ええ、神々には階級がある、みたいよ？ 少なくとも神殿の常識の中では」
　神殿の内部に侵入するに当たって、必要になるのは彼らの情報だった。神殿の教えは、彼らが統べる巫女の力もあいまって、世間には相応に浸透している。が、エレナ含めた彼らは特に知らなかった。考えても見れば幼少期よりこの魔術学院に入学している自分達は神殿の教えが浸透する前にこの学院に隔離されたようなものなのだ。
　とはいえ、今はその教えを知らなければならない。そう言うわけでリドが持ち寄った資料。神殿から世間へと発刊される〝神書〟だ。この世の成り立ち、生命の誕生、それらと神々がどのようにして関わり、導いてきたのか、それらが書かれた本に、確かに神の階級付けも成されていた。
「【生誕の神】、命を司りこの世の生命全てを生み出したとされるこの神様が最上位。その下に自然を形作る四神【水】【風】【土】【火】、そして彼らから派生する【群神】つまりは【精霊】ね。それらが下について、徐々に派生してい

く」
【生誕の神】を頂点とし徐々に広がっていくピラミッド。それはある地点を境にその広がりは逆に向いていく。
「此処から先は【神殿】が〝邪神〟と認定した神々の領域、人間にとって悪であり、神の敵対者が生み出して言った邪悪な存在たちの空間」
　破壊、病、災、様々な不吉な文章を並べながら徐々に下に集約していく。下に下るほどに言葉の孕む危険性は増していき、そして最後の集約点、其処に一つの名が記されている。
「そして、最も危険で、最も邪悪で、最も最悪の神。生物が悪を成すとその神の元に堕とされ、永劫の苦しみを与えられるとされる、〝地獄の主〟」
　そこに記されていた名を、エレナは既に予想していたので、驚きはしなかった。おどろおどろしくのたまう亡者の絵と共に、其処にはこう書かれていたのだ。
【メナス】と

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　なればこそ、彼女のこの徹底的な態度も理解できるのだ。つまり自分は神の中でも最も邪悪で、最悪で最低な邪神の、その尖兵とも言えるのだ。【メナスの巫女】というのはこの場ではなんらアドバンテージにはならない。むしろその逆という訳だ。
　しかし、それなら自分もセフィと同じように審問にかけられても仕方ないように思えるのだが、〝邪悪なれど神の使い〟と〝人工的に生み出された神のまがいもの〟、とではまた話が違う、のかもしれない。
　などと、考察を続けているうちに、ファナの説教は終了したようだ。何処か上の空で話を聞いて（実際聞いていなかったのだが）いた此方をジロリと睨む。
が、知らぬ振りをしているとそのまま、
「ついてきなさい。此処を案内します。勝手な場所には絶対に行かないように」
　そう素っ気なく言って歩き出した。エレナは言いつけを守り、無言のまま、その後ろを付いていった。

第百二十四話 神殿内部。

　神殿の内部は広かった。
　だがそれは儀式や形式美によって構築されている部分が多く、実際に自分と同じ巫女が利用する、と思しき場所は見た目ほどに大きくはなかった。といっても、学院の教室よりかは大きかったが。
　食堂、図書室、開放された広場、思った以上にオルフェス学院と共通する施設は幾つも在る。住まう人間が自立した生活を送る上では必要な設備ではあるのだろう。基礎的な知識を学ぶための教室まで神殿の内部には存在した。流石にこの点は学院よりは遥かに小規模ではあったが。
　そして勿論、学院には存在しない場所もこの神殿には存在した。
「此処は神と意思を通じ合わせる為の祈りの間」
　神殿のただ奥に存在する大部屋。
　つまり、巫女の修行場、とも言える場所だった。神の意思と交信し、より強い力を神から貰い授かり、それを更に振舞っていく、らしい。実際神と交信なんてした事の無いエレナには正直その祈りの意味を全く理解できなかったが。
「それで、私も神と意志を「黙りなさい」
　質問をしようとして、ぴしゃりとファナが言い、エレナが再び口を閉ざす。彼女の命令はまだ有功だったようだ。しかし質問の一つすら許されないというのは、よほど自分のこの場においてのヒエラルキーは低いらしい。と、エレナは感心した。このように扱われる事は彼女の人生では殆どなかったので新鮮ですらあった。
　勿論新鮮であるが、快いものであるというわけではないが
「貴方は最たる邪悪【メナス】の使い。他の善なる神の使途と違い、邪神とその意思を通じ合わせるなど許されません。しかし神の使途としての責務を怠る事も

許しません」
「……どうしろと「邪神を封じる為の祈祷なら許します」
　邪神を封じる祈祷、とはどういう意味なのか正直さっぱり分からない。そもそも死そのものたる【メナス】を封じてどうしようっていうんだ、とか、色々といいたい事はあるが黙っておく事にした。どうせ、質問しても黙れの一言で封殺されるのは見えていたから。
「その身に潜む悪が閉じるよう祈りなさい。時間が経てば迎えにいきます」
　予想道理たったそれだけを告げて、ファナはその場を去り、場にはエレナが一人残された。残されたからどうしろというのだと、と前を向くと
「……っと」
　先ほどまで祈りを捧げていた巫女達が、一斉に此方を見つめている。年齢は結構まばら、だがエレナと同じ年か、それよりも若い子も沢山いた。そんな子供達が一斉に、エレナを見つめている。その視線は悪意的と評するほど露骨ではなかったが、好意的な印象からも程遠かった。
　まるで見世物小屋から出てきた珍獣を眺めるような、そんな視線だ。
　一瞬、その異様な雰囲気に飲まれそうになるが、一先ず落ち着いて
「これからこの神殿でお世話になることになりました、エレナです。皆さんよろしく」
　そう言って頭を下げた。一応、よどみなく。だが、
「……」
　帰ってきたのは、白けた、というような沈黙。あるいは失笑の入り混じった鼻息。エレナの言葉に対して誰も反応する事は無い。それは悪意を感じられる無視だった。エレナの存在を、その声を、悪意で持って無視して知らん顔をするという意思が見え透いた。
　……なるほど
　エレナは彼女達のその反応を察し、その場から一歩はなれた。耳を澄ますと何処からから途方にくれる自分を嘲笑う声が聞こえてくる。この嘲弄は見に覚えのあるものだった。かつての学院で起こった貴族と平民の大喧嘩、その最中に幾度も見かけ、自身でも体感した事のある、悪意。それを更に陰湿にしたイメージだ。

一先ず周囲の巫女達と同じように両手を合わせ目を瞑る、ポーズだけを取る。祈るといっても彼らが何をしているのかわからないのでポーズだけだ。
先が思いやられる
エレナはそんな風に思いながら小さく溜息をついた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

【神殿】
神の意思を届け、神の力を振るい、人々にその恵みを提供する偉大なる組織。いかなる国家であろうとも彼らの存在を卑下する事は出来ない。大地を肥やし、風を吹かせ天候を操り、医者も逃げ出す病を癒し、穢れた大地を聖なる炎で浄化する。
人知の及ばない【奇跡】。
そしてそれらを操るは、神に見定められた巫女。
【巫女】としての才能に芽生えるは幼い頃からだ。神と意思通ずる力ある【神殿】はそんな幼くも才能に目覚めた巫女の候補達を即座に神殿へと〝迎えられる〟。そうして巫女としての理念、信条を教え込まれるのだ。
巫女達は自分達が特別神に愛された存在であると思っている。実際その通りだ。彼女達は神に愛されたからこそ此処にいるのだ。故に彼女達は自身が夜のいかなる人間よりも優れた存在と信じて疑わない。
巫女にとって、神に仕える事こそが世界の秩序を守る事であり、神の意思に通じる事の出来ない者達は、彼女たちが救って〝あげる〟だけの哀れな迷える子羊でしかないのだ。
神殿の外の世界の事も、少女らしい趣味やアイテムに興味を示す事はあっても、外の情勢そのものには興味は無いといって言い。世界がどうなろうと何処で戦争が起ころうとも、自分達神の使いの必要性が喪われる事は無いのだから。
彼らは巫女としての営みを続ける。神への祈りを捧げ、力を高め、人々を救う。それは理念や使命ではない。彼らにとって当たり前の事だ。だからこれから先、どんな事があるお供、自分達の生活は変わることは無い。そう信じているものも少なくはなかった。

ところが、閉鎖的で、完結していた彼女達の世界に、思わぬ異物が迷い込んだ。
　名前はエレナ。最底辺にして最悪、最大の穢れを纏う死の化身、【メナス】の巫女。本来この神殿には足を踏み入る事すらままなら無い邪悪の使い。言葉にするのもおぞましい〝ソレ〟がこの神殿にやってくるという。
　巫女達に疑問が沸きあがる。何故そんな汚らわしい存在が、特別な我等の領域に土足でやってくるのか。飛び交う邪推。【神殿】の権威を無視する邪悪な魔法使い、巨大な権力を握る貴族の娘、人工精霊、断片的に彼女達に流される情報は、狭いコミュニティの中で更に肥大化させ、暴走させる。
　彼女達の中で、エレナという存在がいかように成り果てたか、想像に難くは無い。
「メナスの巫女なんて……おぞましい」
「死の使いなんて、不吉を撒き散らすに決まっているわ！」
「そんなのが何故この神聖な場所へ……」
　巫女達の間で囁かれるそれらは、エレナが訪れてから尚も加速した、彼女を自分たちで〝排除しよう〟なんていう意見も巻き起こるくらいだ。
「メナスの巫女……ね」
　だが、中には安直に情報に流されず、彼女の来訪を考慮する者もいた。
「面白くなりそうねぇ」
　琥珀色の髪を靡かせる女、巫女の衣装に身を包んだ彼女は妖艶な笑みを浮かべた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

【神殿】
　巫女達を中心として回るこの組織は、しかし当然ながら巫女だけで神殿の人員が構成されるわけが無く、組織を組織として形作る為の人員は存在する。巫女達以外の人員は作業員などを除けば【神官】と呼ばれている。
　彼らは巫女と同じように、神々の恩恵を受けてはいない。神の使いたる巫女たちを助け、彼女達の代わりに無数の神々が司る世界の法則を神の教えとして人々

に伝えるのが使命だ。そう言うことに表向きはなっている。
　ジーンが以前エレナに説明したように、【神殿】は極めて強力な【巫女】という存在と共に、世界中に影響力を保有する独立機関。その力を実質掌握しているのが、表向き巫女の従者に過ぎない彼ら神官なのだ。
　巫女のように神を直接感じ取る事が出来ない神官のなかには、神の存在を心から信じていないものも多い、出世や御子の力で得られる権益ばかりに意識が行くような不信神官なんて神殿では珍しくない。
　とはいえ、信心深い神官もいないという訳ではない。
「……」
　神官の寝室
　高位の神官を示す神官帽を立てかけられているこの部屋の主は、自室に備えられた小さな神棚に両の手を合わせ、強く強く祈っていた。信心深い神官たちのなかでも、神との祈りがそのまま力に繋がる巫女達の中にだって此処まで熱心に祈りを捧げるものはそうはいないだろう。
「……」
　どれだけそうしていたのだろう。顔に薄っすら伸び始めた皺に汗が伝うほどになった頃、男はゆっくりと立ち上がった。顔を拭うとそのまま机にある手紙に目を通す。
「メナスの巫女……人工精霊」
　呪うようにして短くその言葉を呟くと、静かに決意するように
「神の本来の権威を取り戻すのだ」
　その瞳は、男の狂気を映すように渦巻き揺らめいてみえた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　そして、その頃
　神殿、ソレを一望できる高台の上で、
「やれやれ、ミストも随分と焦ってるね」
　男が一人、そう言って、やれやれと呟いた。その衣服は神殿に仕える神官の、

その見習いの格好では合ったが、どこかその男の持つ雰囲気にはそぐわない、ちぐはぐな印象を見るものに与えた。
　男は手に持った手紙を改めて見通す。文面の最後に綴られるのはオルフェス学院の学院長の名だ。男は何処か懐かしそうにその名をなぞり、笑みを浮かべると、掌から生み出した光で手紙を焼ききる。
　そして神殿を見下ろし、
「上手く【メナスの巫女】を回収出来るなら良いけれど……どうなる事かな」
　男は困ったような口調でそう呟きながら笑い、高台からひょいと飛び降りると、闇夜に消えた。

第百二十五話 脅迫と支配

「そ、そ、その、わ、わ、わ、わざとではないのです」
　そんな情けない、震えと怯えの混じった弁明は、神殿内部に存在する談話室の一つから聞こえてきていた。中を見ると、巫女の衣装を纏った少女たちが床に座り込み、頭をひたすらに伏せている。その格好もあって、怒れる神を前に恐れをなす信者のようにも見えるが、彼女達の前に神はいない。
　その代わり、彼女たちの前には一人の少女がいる。
　薄暗い部屋の中、幻想的な魔術の灯りに照らされる彼女の様は、とても同じ人間とは思えぬほどに美しく、そして恐ろしい。此方を見下ろすその瞳には冷たく冷酷で、死にかけの羽虫をみるかのような、感情のまるで映らない瞳だ。
　だが、何よりも彼女達を恐怖のどん底に叩きつけるのは、エレナの背後にハッキリとかんじる強大な影、彼女みこ達では到底生み出すことなどできない、圧倒的な神の力、死の化身の存在。
　破壊神【メナス】　その虚ろな眼孔が、彼女たちに睨みをきかせているのだ。
　何故？　何故こんな事に？
　リーダーの少女、クルルは自問する。何故どうしてこんな事になっているのか。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「ちょっと、この神殿のルール、教えてあげましょうか」
　最初はただの嫌がらせのつもりだった。
　年上の巫女たちが言うようなに追い出すつもりなんて無い。ただ、外の世界から来た死の使いに対してのちょっとしたちょっかいをかけるつもりだった。何も知らない少女に、神の使いである自分達の力を見せつけてやろう。

そんな、安易で安っぽい自尊心を満たすための、いらずら
場所がわからないだろうからと道案内と評して人気のない場所に連れて行って、神の力を〝見せつけ〟それから解放してやる。本当に、別にだそれだけのつもりだった。
この程度のこと、巫女たちの間では日常茶飯事だ。神殿内部の狭い社会の中で、巫女同士の陰険なやり取りが絶えることはない。だからクルルそうした。疑問に思うこともなく。自分の友人たちとともに。
特大の地雷を自分たちの手で手繰り寄せたのだと終ぞ気づかず、

「【メナス】」

結果として、クルル達はその地雷を踏み抜いた。
新たにやってきた〝世間知らずの巫女〟エレナ、彼女を騙し誘い、狭い個室へと追い込んで、さあ、陰湿なイタズラを始めようかとしたかしなかったかの内に、彼女が神の名を呟き、何もかもが終わった。
現れ出でた神の使い、巫女達だけができる、神の力の顕現の、その〝奥義〟。神そのものの身姿をこの世に降臨させるその秘術は、否応なく彼女と自分たちとの力の差を思い知らされた。クルル達は平伏する以外、選択肢は無くなっていた。
ゆったりと椅子に座る彼女の前に、頭を地面にこすり付けて許しを請い願う。本来の想定とは全く真逆なこの状況にクルルはひきつった笑いしかこぼれてこなかった。
「ねえ」
頭の上から澄んだ声がする。
「私としてはそんな風に頭を下げられても困るのだけど」
そんな風にいいながら彼女は、椅子の腰掛をトンと叩く。彼女の動作に合わせるように背後の破滅の神が同じように地面を強く叩く。響く音、死の気配が、研がれた巫女たちの感覚を撫で、恐怖を与えてくる。
「私は貴方達を脅したい訳でも無いし、」
死神の爪先がゆっくりとクルルの首筋を撫でる。温かみなんて微塵も無い。触

れた先から温度を奪っていくその指先は、身体に刻まれた原初の恐怖を呼び起こした。
「貴方達を怖がらせたい訳でも無い」
　鋭く伸びた歯をむき出しに、破滅の化身はクルルたちの眼前で哄笑する。怯え竦み震える彼女達を破滅の神は嘲笑っている。クルルはその冷たい吐息に、声に、縮みこまった。
「私は、ただ、貴方達と仲良くなりたいだけなの」
　薄っすらと、彼女は微笑む。人形のように美しい容姿の彼女が、薄暗い部屋の中で微笑む様は最早ホラーだ。背後で死神が笑う姿とあわせると尚更そう思う。クルルは泣いた。本気で泣いた。それほど怖かった。
「うれしかったのよ？　貴方たちに誘われたの。ここにきて、知り合いなんて全然いなくて、私、とっても寂しかったもの」
「……そ、そ、そうなんで」
「だから」
　クルルの言葉を遮るように、彼女は言葉を投げかける。それは冷たくて、鋭かった。
「だから、悲しかったわ。貴方たちが私になにをしようとしたか分かった時は」
　再び破壊神メナスの気配が地面に伏せる彼女たちへと近づいてくる。カチカチカチとむき出しの牙をならし、爪を立てて、動かぬ獲物を食らおうとするようにゆっくりと
「ほ、ほ、ほ、本当に！　すみません！　許してください！　なんでもしますから!!」
　目の前にちらついた死そのものを前に、彼女たちの精神は崩壊寸前まで追い込まれていた。クルルの仲間たちなどもう、蒼白な顔で泣きながら震え、抱きしめあって固まっている。災害を前になす術を失った子供のように。
　それでもクルルは必死に声を振り絞った。まさに必死に。
「なんでも？」
　すると、彼女の言葉を聞き入れたのか、すっと、前から死の気配が下がっていく。恐る恐るクルルが顔を上げると、彼女が、エレナがいつの間にか目の前に降り立ち、そっとクルルの傍に近づいていた。彼女は、そのままクルルの頬をなで

ると、
「じゃあ、私のトモダチになってくれる？」
「そ、それは……」
　口ごもる。その〝トモダチ〟の意味、含みのあるどころでないその言葉に、クルルは躊躇する。〝トモダチ〟とやらが何を意味するにしても圧倒的な破滅の力を振り回す彼女の傍にいたくはなかったし、そもそも自分たちは他の巫女、自分よりも上位の力を持つ巫女達の下に付いているのだ。安易に頷き彼女に従ってしまえば、そのあと自分たちがどうなるか分かったものではない。ないの、だが、
「……イヤなの？」
「い、い、いいえ!!」
　クルルは悲鳴を堪えながら必死に頷く。友人たちも同様だった。この先がどうなろうとも、眼前に迫る危機、破滅の神の使いの少女の機嫌を損ねてしまうの恐ろしかった。
「嬉しい」
　微笑む。やはり薄らと、冷たく、恐怖を与える笑み。クルル達は大きく震えた。お願いだから、そのまま機嫌を治して私たちを部屋に返してくれ。今やそれだけが彼女たちの願いだった。
　それを知ってか知らずかエレナは微笑む。微笑んで微笑んで微笑んで、
「それじゃあ、私のこと手伝ってくれないかしら？」
　その問いに、頷く以外返す答えはクルル達には用意されていなかった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　数日前オルフェス学院

「駄目だな」
　神殿の資料を漁っていたキースがため息をついて、手に取っていた本を閉じ

た。
「想像以上に神殿に関する資料は少ない。歴史や、教えなんてのは腐るほどあるが、神殿内部の組織構成の類になるとぐっと資料が減る。正しいかも怪しい」
「直接見てみる以外わからないってこと？」
　そうなる、と、キースは手に取った本を元の棚に戻す。
「手っ取り早いのは神殿内の先住民に話を聞くことだ」
「誰かと友達になればいいということね」
　そういうと、キースは微妙な表情を浮かべた。
「……変なこと言ったかしら」
「まあ、冷静に考えればわかると思うが、」
　そういって、なんだか演劇の役者のようなしぐさでエレナに指を突きつける。英雄のまねごとをしていたせいで、そういうのが癖になってるだろうか、なんて無関係なことをエレナは頭の隅で思った。
「選ばれた者しか立ち入ることも許されない神聖な神々の領域、そこにお前はミストの権力と、おぞましき破壊神メナスの力をもって無理やり押し入るわけだ。それもその横隣りには今までミストの手で隠された怪しげな少女もついている状態で」
　一気にそうまくしたて、区切り、
「目立たねえわけねえだろ？」
「うん」
「そんな奴と仲良くなりたいかお前？」
「……ううん」
　エレナは項垂れた。こんな奴がもしも自分の目の前にいたら警戒するにきまっている。問題はその問題児が自分であるという点だが。
「友達？ お前はその前に虐められる可能性を考慮しろ」
「苛められるかしら」
「閉じられたコミュニティってのは排他的になりがちだ……まあ」
　その方が好都合かもな、と、キースは笑う。どこか悪意の入り混じるその笑いに、エレナはなんとなく彼の意図を察した。察したが、あまり聞きたくはなかった。が、

「……一応、その心を聞いていいかしら？」
「察してんだろ？ 簡単だ。お前の最も得意とするところだよ」
　そう言って、口にする。
「暴力による、強制的支配」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　キースのその読みは的中し、そして彼の提案した作戦は実行に移され、成功した。成功はした……が、私はどこの悪女だとエレナは突っ込みを入れたかった。キースから「いかに悪女に見えるかの演技指導」なるものを施されたがはたしてあの男は何故にそんな技術を知っているのか。
　が、確かに効果は絶大ではあった。エレナは見事に手駒を手に入れることができた。とりあえず今日はもう帰らせたが、明日には自分をいじめようとした彼女たちから根掘り葉掘り話を聞くつもりだ。
　この行動がファナに咎められるかもしれないが、エレナは気にしない。
　何しろ時間がない。セフィがこれからどうなるかまだ掴みきれていないが、数日中に事が起こるのは間違いない。それまでに何とかしなければならないのだから。
　とはいえ、流石にまだ神殿の様子も把握しきっていない状況で暴れすぎても危険だ。向こうから襲ってきた以上応じてしまったが、今日はこれ以上下手に動かないほうがいいだろう。
「でもその前に、セフィの様子を……」
　と、そこでエレナは動きを止める。そういえばセフィはどこに連れて行かれたのだろう。最初神殿の入り口で彼女が連れて行かれた方向は流石に記憶しているがそれまでだ。
　先に少女たちにこのことを問い詰めたほうがよかったか。
　エレナはそう舌打ちし、彼女たちを追いかけようか、と部屋を出ようとして、

「やあ、お困りかい？ お嬢さん」
　背後から突然声をかけられ、飛び上がった。少女達が出て行ってこの部屋には自分以外いないはずなのに。反射的に振り返り見ると、そこにいるのは男、山吹色の髪、背丈の高い、神官なる者たちが身に着ける制服をしている。
「おっと、驚かせたかな」
「だ、誰？」
　楽しそうに笑う男にエレナは不審な表情を浮かべる。なんというかその男の笑みには胡散臭さがにじみ出ていた。どこかで見たことがあるような笑みだ。そう例えば学院の学院長の笑みに似た──
「おっと、警戒しないでほしい。この場において僕は君の味方だ」
「……だから誰よあなた」
「まあ、突然こういったって警戒するよねえ……ふむ」
　そういって、懐を漁る。そして取り出したのは手紙の封筒。若干ボロボロな見た目だが紙自体は新しく、何よりその差出人の署名欄には見知った男の名が書かれていたのだ。
　ミスト、と
「オルフェス学院学院長の知人、そういえば信じてくれるかな？」
　その瞬間、この男から感じる胡散臭さにすべて合点がいった。

第百二十六話 牢獄と騎士

　壮麗な神殿をぐるりと回った裏側。巨大な神殿から隠れた影に存在するいくつかの施設。神殿内の食堂で働く者たちや、清掃面などの使用人達が暮らす宿舎などが並ぶこの場所に一つ、一際みすぼらしい小屋が一つある。
　見れば近くの看板に大きく、「立ち入り禁止」などと書いてある。あからさまに一目から避けるようにして建てられたその施設の前に、エレナと一人の青年が並び立っていた。
「さ、此処に精霊の少女がいるよ。正確には隠されている、だけどね」
「……どうもありがとうございます」
　どうにも怪しむ視線を解除できないまま、エレナはここまでエレナを案内してくれた彼、ラルクと名乗るその男に礼を言った。彼はどこか困った顔━のように見えるがやはり胡散臭い━━で首を傾げ、
「おや、まだ信頼されていないかな？」
「……ええ、残念ながら、流石に」
　唐突に学院長の知り合いだ、と言われても信用できない。いや、学院長の知り合いだったらなおのこと信用できない、というのは失礼過ぎるだろうか。あまり自分自身は深くかかわっていないが、シールの振り回されっぷりを考えるとミスト学院長にアレな印象を浮かべてしまうのはやむを得ない事だった。
「……ちなみにミスト学院長とはどういう関係なのですか？」
「ひ・み・つ」
　イラっときた。
　しかしラルクは気にするそぶりも見せず、
「言っただろう？ 古い馴染みさ。それ以上でも以下でもない」
　あの年齢不詳の男の古い馴染み。若く見えるが一体何歳なのだろう。なんてことも思ったが、考えても無駄なので思考を切り替える。するとラルクはおどけた

仕草を続けながら口を開き、
「僕は君にそこまで積極的に協力はできない。こうして何かを教えてあげることはできても、それ以上のことはできないと考えてくれ」
「わかりました」
　あっさりエレナが頷くと、ラルクは大げさに項垂れ、
「……どうせなら少しくらい悲しそうな顔をしてもいいのに」
「……はあ」
「ああ、美少女からの侮蔑交じりの視線が痛い」
　今度は楽しそうにのけぞる。お調子者タイプ、と評していいのだろうか。この手のタイプとあまり話す機会はなかったためか、無駄に疲れる。
「……とにかく神殿内で貴方に無理に協力を頼むことはしません」
「ま、その方が助かるは確かなんだけどね。もちろん、此方で助けられることがあったらそうするつもりだよ。出来る範囲でね」
「ありがとうございます」
　一応、礼儀として頭を下げると、ラルクは笑いながら手を振って、それじゃあね。と、背を向けた。が、
「ああ、君の名前、確認していいかな？」
　即座に振り向いてそう尋ねてきた。その軽いノリに若干引きつつも
「……手紙に書いてなかったんですか？」
「手紙は暗号化されていてね、君の名前まで明記されてなかったのさ」
　そういう事もあるのだろうか。しかし自分の名前くらい、神殿でそれなりに上がっていそうなものだが、と思いつつも、特に勘ぐる意味もないと思い直し、
「エレナです」
「ふうん……良い名前だね」
「そうですか？ そういわれたのは初めてですが」
「うん、響きがいい。なんとなくだけど……それじゃっ幸運を」
　そんなやり取りをして、ラルクは去っていった。変なうえに、その人となりを掴めない男ではあったが、しかしこの神殿においては貴重な味方が一人増えた。そんな風に前向きに考えようとして、若干挫折して、とりあえず置いておくことにして、エレナは振り返る。

「……さて」
　立ち入り禁止、そう看板に書かれた古びた小屋の戸を、エレナはそっと開けた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　小屋の中は狭く、まともな家財なんてほとんどない空家のような状況だった。が、よく調べると足元に扉があり、それを開くと地下室へと続く階段が現れた。
「……いかにもっていうか、こうまでして隠す事なの？」
　不審に思いながらもエレナは地下へと続く階段を下りていった。
　先にあったのは、薄暗い魔道照明で照らされた地下室だ。先ほどまでいた神殿と比べて随分と古びた印象を与えるその部屋には一人の騎士が古びた椅子に腰かけ、見張るようにしていた。
「貴方は……」
　兜の下からのぞくその顔にエレナは見覚えがある。最初此処を訪れたとき、セフィを連れ去った騎士の男だ。【神殿騎士】という名は事前に捜した資料にあった。神より選ばれし巫女を守る聖騎士。邪悪なるものを払い人々に安寧を約束する正神に命を捧ぐ戦士たち。
　しかし事前に調べたその情報と、今目の前にいる騎士とは随分と印象が異なる。まず彼の身に着ける鎧だが、酷く小汚い。戦いで汚れた、とかではなく、単純に整備をしていない結果、さび付いたような感じだ。
　そして騎士の男は、明らかに隠されたこの場所に侵入してきたエレナに対してあわてる様子も、咎めるようなこともしない。ただただ面倒くさそうな表情をして、椅子から動こうとすらしないのだ。
　神の使いの戦士たち、そんな印象とは随分と離れる反応だ。
　エレナは戸惑いつつも、声をかける。
「えっと、すみません、此処に」
「神の使いたる巫女様が立ち入るようなところではありません。お帰りを」
　と、セフィの事を尋ねる暇もなく、騎士の男が言い切ってしまう。声には抑揚も何もなく、事務的にといった印象が強い。そもそも止めようとする素振りすら

見せない。椅子に座ったまま。据え置かれた本をパラパラと捲ったりしている。
　なんなんだこの態度は？
　いや、不法侵入した自分が悪かったのも確かではあるのだが、少々露骨すぎる。此方がメナスの巫女だからだろうか、とも思ったが、それともまた違う感じだ。エレナは眉を顰め、しかし気を取り直し、
「……実はここに私の」
「神の使いたる巫女様が立ち入るようなところではありません。お帰りを」
　繰り返される言葉。乾いた声に見え隠れするあからさまな気だるげな色。職務に忠実とはとても思えないこの男の態度にエレナは僅かに目を吊り上げた。部屋にそのまま足を踏み入れると、入り口から見えていた奥へと続くであろう扉に歩み寄り、
「……勝手に入るわよ？」
「巫女がここに立ち入ろうとした際、私は実力行使で止めることを許されています」
　淡々とした声に僅かに苛立ちに近い色が混じった。一瞬エレナは騎士に視線をやるが、そのまま、ドアノブへと手をかけた、直後、
「――っ」
「お下がりください」
　グンと、乱暴な手つきでエレナの肩が引かれ、無理やり扉から引き離される。
　若干面倒くさそうなこえと共に剣呑な視線がエレナに突き刺さる。言葉から発せられ暴力の匂い、半ば力づくで押しのけようとするかのような動作は、普通の女性には恐怖を与えることは間違いないだろう。それをわかっていて騎士はそうしている風だった。
「……触らないでくれる？」
　が、同じ温室育ちでも捻くれねじ曲がり、荒みきった道を歩み、更にシールと幾度かの経験を積んだ彼女にとってすれば、その殺意はいささか温かった
「此処は危険です」
「その割に警備がおざなりのようだけど？」
「神聖なる巫女様がお入りになるところじゃございません」
「私、邪神の巫女だから大丈夫ね」

「屁理屈をこねないでくださいますか？ 巫女様」
「なんだってそんなに嫌がるの。私は友達に会いに来ただけよ。なのに──」
──まるで、後ろめたいものがこの先にあるみたいに
そういうが、騎士は反応を示さない。先ほどよりも強い力でエレナをここから引きはがそうとする。が、今度はエレナも身じろぎしない。魔力を全身にめぐらせ、むしろその引きはがそうとする力を撥ね飛ばすように、
「【邪魔をしないで】」
騎士の腕を弾く。一瞬、驚いたようなに騎士が挙動すると、瞬時にエレナから距離をとり、殺意にも似た気をエレナへと向ける。動きが一気に鋭くなった。その反応が彼の実力なのかもしれないが、それでも、それでもだ。
この男は、自分よりも弱い。
エレナは即座にそれを見抜いた。そして騎士もまた、幼いエレナという少女が、自分よりもはるかに強大な力を秘めていると見抜いたのだろう。しばらくすると構えを解いた。力づくでかなわないとわかったからだ。
「ここで見たことを言いふらしたりするつもりはないわ。それならいいでしょう」
何がいいのだ、勝手に決めるな。そう言いたげな騎士だが、しかし力づくが通じないという事実を考慮してか、真っ向から反論しない。その代り、
「では、護衛に付かせてもらいます。おひとりでは危険ですから。巫女様？」
「ご勝手に」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

扉をくぐり、日の光の差し込まない薄暗い通路を進みながら、エレナは額に浮いた嫌な汗を拭った。暴力によるゴリ押し。キースから言われた通り、それが通用するところでは容赦なく使用するように心がけはするが、気分が悪い。昔はこればかりやらかしていたはずなのに、今は気分が悪くなるというのは都合がよすぎるだろうか。
必要な事だ。我儘を言うな。そう自分に言い聞かせ、先を進む。後ろについてくる騎士の足音も気にしないように、だが、しばらくするとそんなウジウジとし

た思考が吹っ飛ぶ光景が彼女の前に広がった。
「……これは」
　わざわざ騎士がここを見張っていたその先は、牢獄だった。かび臭い空気に鉄格子、その中は古びたベットと便器。中に入っている人間は入り口から一見した限りでは見当たらないが、紛れもなくそこは牢獄だ。
「……ここにセフィがいるの？」
　若干信じられないような気分になりながら、奥へと進む。奥へと進むまでの牢獄には人気が全くなかったのが救いだったが、それでも胸中のざわめきは消えなかった。
　そして、薄暗い牢屋の連なる先の、その奥に、
「セフィ！」
　いた。一際大きく、分厚い鉄格子に阻まれた牢屋の中に、セフィの姿があった。エレナが駆け寄り鉄格子に体当たりするように声をかけると、眠るようにして地面に倒れ目をつむっていたセフィが反応する。だが、それは何時もより遥かにまして元気のないもので、
「……ぁ」
「……セフィ」
　どんな言葉をかけていいかわからず、エレナは呻く。自分の姿をみたセフィが僅かながら表情を緩めてくれたのが唯一の救いだった。
　牢獄の中にいる彼女の姿は、とても痛々しいものだった。ここに来た時はお下がりの学院の制服を身に着けていたが、今は奇妙な術式の書かれた不気味な衣装、しかもまるで体を締め付けるようなデザインで、実際に彼女は苦しそうだ。表情の痛々しさからすぐにそれは察することができた。
　普通、こんな事をした挙句に、子供を牢屋に押し込めるか？
　常識外のこの状況に、エレナは顔をしかめ歯噛みする。認識が甘かった。というよりも、自分の中の常識が、甘っちょろかった。ここは善良なルールと教師に守られた学院とは違うのだ。
　今すぐにでも、彼女の拘束着を引き裂いて、此処から連れ出したいが、それではだめだ。そんなことをすれば自分はともかく、彼女の居場所がどこにもなくなってしまう。今は辛抱しなければならない。

しかし苛立ちはどうしようもならない。エレナは今なお背後で黙ってついてきている騎士へと振り返ると、かみつくのを堪えるように押し殺した声をだした。
「……子供をこんなところに押し込んで恥ずかしくないの」
「私は命令に従ったまでです。文句は神官殿にどうぞ」
まあ、そうだろうな、と舌打ちする。この男はあくまでも上の命令に従うだけの騎士でしかないのだ。この男にあたってもどうしようもない。しかしそれならどうする。
「セフィ……」
牢獄の彼女を見やると、セフィはこちらをじっと見つめる。助けて、なんて言葉は口にしないが、しかしその瞳は明らかな怯えの色がエレナには見えていた。それくらいの感情の機微は、すでにエレナもわかるようになっている。
「出来れば、早くここから出て行ってくれませんかね。私が神官殿に怒られる」
「……この」
思わず暴言を口にしそうになって、その時、ふと、頭に一つのアイデアが走った。
「……質問があるのだけど」
「……はあ？」
「貴方、神を信じる？」
「それはもう。何しろ貴方様のような巫女様方がおられるのですから」
「言い方が悪かったわね。貴方は神を崇拝しているかしら？」
「……ええ、それはもちろん」
「嘘ね」
この男はふてぶてしいが、嘘はそこまで得意ではないらしい。
神殿に務めているが、神を信じているわけではない。職務に忠実なわけでもない。やる気も特にない。上から命じられるままにこんな薄暗い、表向きに隠された暗部の仕事を受け持つ。
この男は、そういう人間だ。ならば
「命令よ。これから貴方はこの子にまともな食事を用意しなさい」
「そのような業務は契約に含まれておりません」
「ああ、それと子供向けの何か、簡単な本でも用意しなさい」

「人の話を……」
　騎士が口を開こうとする前に、彼の前に〝あるもの〟を突きつける。手のひらに乗せられた小さなそれは、薄暗いこの地下通路の中のわずかな光に照らされて、妖しく、見事な光を放つ宝石だ。
「……っ」
「反応が良いのね」
　エレナは目を細めた。物の価値のわかる男でよかった。そしてその価値に意味を見出している男でよかった。
「売れば相応の値段になるわ。少なくとも、貴方の給料が吹っ飛ぶくらい」
「……」
「場合によっては、これを貴方に譲ってもいい。この子の世話の報酬として」
　騎士の給料がどんなものかは知らない。だが、この男の勤務態度を考えれば、おおよその察しが付く。故にエレナは強気に
「もう一度言うわね。あの子の食事を用意しなさい」
　そこまで言うと、騎士の男は僅かに停止し、何も答えないままエレナに背を向けて再び薄暗い通路を歩いて行った。

　そして、それから十数分後。エレナがなんとかセフィの拘束着を緩めることに成功したあたりで、再び鎧のこすれる音が響く。再び現れた騎士は、手にお盆を、その上には暖かなパンに具沢山のスープ、肉汁の弾けるソーセージを並べ、更に果物がついていた。
「こちらでよろしいでしょうか。巫女様」
「……わかりやすいのね。貴方」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　お金は大切!!
　と、リドそしてミフィールまでもが説得し、結局用意して持ってくることに

なった小さな宝石。家のパーティ等でエレナに送られてきた〝プレゼント〟をそのまま机に入れていたのを、持ってきていたのだ。
　そして実際それらは役に立った。あのやる気のかけらもない、此方に善意を一切与えないようなあの騎士の男を一瞬で取り込み、味方につけてしまった。
　お金とはすごいものだ。
　不自由しないほどの金を持つがゆえに自覚できなかったが、お金には純粋に人を動かすだけの力がある事をエレナは理解した。今までどれだけ態度の悪かった相手も、一瞬で首を垂れる様になる。
　幸いまだ、家にいたときに送られてきた〝プレゼント〟はある。数はそう多くはないが、使い時を誤らなければ、再び役立つこともあるだろう。
　まだこれからだ。
　今はセフィの環境を良くしただけ。これからこそ、彼女の運命を左右することになる。
「……」
「……セフィ？ 大丈夫よ」
　用意された食事にも手を付けず、心配そうに此方を見上げるセフィをエレナは撫でる。幼い少女だ。苦しい過去を背負っているが、それでも物静かな普通の少女だ。
　その少女に精霊の重荷を背負わせた〝何者にも〟、そんな罪のない少女をこんな場所に放り込む〝何者にも〟膝を屈してなるものか。
「私は、負けはしないわ」
　エレナの胸中に渦巻く焔が強く強く燃え盛っていた。

あけましておめでとうございます（震え声
大変更新が遅れて申し訳ありませんが、何とか投稿できました。
目標、今年中の完結

第百二十七話 能動的に人を使う事を覚えた彼女

　王都ガイディアからアダリアの方角に一〇キロ離れた地点。
　本来人気のない平原の、小高い丘の上、そこは騎士たちが集う駐屯所のようになっていた。周囲に街も村もない、魔物が集まるようなこともないこの場所に騎士たちが駐留する理由は一つ。「ラグナ」が生み出した【崩壊物】の迎撃作戦のためだ。
　とはいえ、彼ら騎士団がそれを行うわけではない。騎士団はあくまでもサポート。
　その迎撃殲滅を行うのは──
「アレは何やってるんですかね。先輩」
　丘の上に魔道兵器を設置する作業をしていた騎士の一人が、同じく作業をしていた先輩騎士に声をかける。
　二人の視線の先にあるのは、小高い丘の上に立つ二人の影。名高いオルフェス学院の教師の制服に身を包んだ男と女。シールとリーン。今回の【崩壊物殲滅作戦】の中核である二人は、その丘の上で、なにやらずっと、魔術の詠唱を続けている。
　より正確に説明するなら、地面に座り込んだシールが静かに目を閉じて、集中するように詠唱を続け、対してリーンは彼を中心に結界を張り巡らせる魔術を詠唱で次々に生み出している。
「今回の作戦の要、なんだとさ。俺たちの仕事の一つは、あの二人の邪魔をしないことだ」
「……本当に、あの二人だけで何とかできるんですかね」
　俯くように、初めに声をかけた後輩騎士は言う。
　先行した視察部隊の報告では、現在「ラグナ」から飛び出した崩壊物たち互い

に食らい合い、さらに周辺のモノ、小さな村までもすべて巻き込んで吸収し、初期の比ではないほどに巨大化してしまっているらしい。そんな、さらに強大化した化け物たちをあのたった二人でどうにかできるというのは、想像するには現実離れしすぎていた。
「ま、確かに信じがたいけどよ……」
　先輩騎士は、手に持った魔道兵器を丁寧に手入れしつつも、軽く息をついて、
「俺は、あの二人……つーかリーン・エリクスが戦ってるとこ見たことあんのよ」
「それは……例の暗殺事件の時の？」
　騎士団を徹底的にのしたという話は後輩騎士の耳にも届いていた。が、先輩騎士は首を横にふる。
「いいや。その前の、くそでけえ芋虫が砂漠から這い出てきた時さ」
　サンドワーム、と呼ばれる魔物。古代に封印されたと思しきその魔物が突如現在に封印を解かれ召喚された事件。召喚された地域では今なお語り草で、いずれは伝説になるであろうなんて話まで流れていたその事件。
　その解決を行ったのがリーンだ。騎士団とギルドが終結してもどうにもならなかった化け物を彼女は一人で何とかしてしまった。
「知ってるか。地面って〝ひっくり返るんだぜ〟」
　先輩騎士は、何処か引きつった声を挙げた。その声は投げやりで、その目はうつろだった。一体彼が何を見たのかはわからないが、その様子だけで、説得力は十分だった。
「あの二人ならどうにでもなるだろうよ。俺たち騎士団が全員集まってもどうにもならん問題も、あの二人がいればどうにでもなる」
「……恐ろしい事ですね」」
「あの二人がそんなにも化け物な事がか？　それともそんな二人に命運を預けているこの国がか？　それともあの二人を頼りにしなきゃ何もできない俺たちのあんまりな不甲斐なさがか？」
「……全部です」
「同感だ。そしてその恐怖を脱却する方法は一つだけある」
「それは？」

「黙って仕事して、訓練して、強くなることだ。さ、俺らの仕事に戻るぞ」
「……了解です」
　そう言って二人は各々の仕事を、二人の化け物をフォローするための仕事へと戻っていった。そしてその場に残された化け物二人は、周囲に人気が無くなった後、詠唱を続けていた二人はふと、動きを止め、
「微妙に聞こえてるんだけどねー」
「化け物呼ばわりとは心外ですね」
　そう言って、頷き合った。
「まあ心外ではあるんですがリーン先生サンドワーム戦で何したんです？」
「一々砂に潜ってウザかったので砂漠を全部空に浮かべました」
「そりゃ化け物呼ばわりもされますがな」
　天変地異ってレベルじゃない。それはトラウマにもなろう。シールだってそんな光景を目の当たりにしたら顔を引きつらせる自信がある。そんな彼女と同列に自分が並べられているという事実が突きつけられているわけだが……
「ま、今さらですけどねえ……リーン先生、どうです？」
「あと数日で完成、そちらは」
「同じく。まあ、間に合いそうではあるね……やれやれ」
　そう言って肩を回し解し、やけに青い空を見上げシールはため息をつき
「さて、エレナは今何をしているんだか」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　エレナ・ロズ・ゲルダーが神殿にやってきてから三日の時間が流れた。めったに人の流れのないこの神殿に突如訪れた少女、巫女たちの間に広がった衝撃と困惑と悪意、お祭り騒ぎにも似たそれらも既におさまりを見せていた。
　さて、その間、エレナが何をしていたかというと、
「エ、エレナ様！　資料をお持ちしました！」
「エレナ様！　お菓子とお茶をお持ちしました！
「エレナ様！　エレナ様を唆そうとしてる巫女たちの話を掴みました！」
「ご苦労様、下がっていなさい」

神殿の小さな図書室の中で、頭を下げる巫女達に、エレナは微笑み指示を下す。
単に彼女がこの三日間でやってきたことと言えば、暴力と支配であった。
初日の脅迫を皮切りに、エレナは極めて積極的に、自分に対して悪意を向けてくる巫女たちを取り込んでいった。ひたすら、真っ当な交流も何も全部無視して、ただただその圧倒的な力だけを振り回し、強制的に。
学院において圧倒的だったエレナの力は、この神殿に置いても同等、否、それ以上だった。何しろここには彼女を力で圧倒できるリーンも、力だけでなく言葉でもエレナを抑えられるシールもいないのだから。
とどまる事を知らないエレナに支配に、巫女たちは恐怖し怯えた。
たった三日の間にエレナの名は恐怖の代名詞になり、彼女の存在は畏怖の象徴と化した。可能な限り彼女には近づいてはいけない。彼女を疎ましく思っていた連中がそんな認識を身に着けるころにはすでに、エレナは自分の手足として動かせるだけの巫女たちをあらかた確保してしまっていた。
「エレナさん！ これはどういうことです！」
と、狭い図書室に怒号が響く。
エレナの世話役、という名の監視係であるファナが図書室に乗り込んできたのだ。顔は真っ赤で、今にもとびかかってきそうなくらいに怒り狂っていた。
対するエレナは貢物である資料を閉じて、潤んだ唇が弧を描いて、美しい笑みを彼女に向ける。だが憤怒するファナの前で浮かべるそれは、怒りでから回る彼女を嘲笑するようにも見えた
「どうって、知り合った友人たちに、調べ物を手伝ってもらってるだけですが？」
「とてもそうには思えません！　貴方がその子たちを人気のない場所に連れ込んだという話を何度も聞いています！」
脅しているのだろう！　と言外に告げるが、巫女たちはファナから一斉に目をそらす。彼女の激怒よりも、エレナの怒りに触れる方が、彼女たちには恐ろしいのだ。その様子を見て、エレナはその笑みを濃くし、
「証拠は？」
その笑みを前に、ファナは更に顔を赤くさせるが、それ以上は何も言う事は出

来なかった。エレナが彼女たちを脅している決定的な場面を抑えていないのだからそうだろう。そもそも彼女たちの半分くらいは、エレナを苛めようとした自ら薄暗がりの人目のない場所に連れ込んだのだから誰にも見られていなくて当然だった。
「もっとメナスの巫女としての自覚を持ちなさい！　次に何か問題行動があれば神官様たちに報告することも辞しませんからね！」
　そう言って、再びけたたましい扉の閉まる音と共に去っていく。一瞬図書室は騒然となったが、しばらくすると元の静けさを取り戻していった。そんな中、エレナは最初から変わらぬ姿勢のまま、
「支配って結構楽しいのね」
　能動的に人を使う事を覚えたエレナは、楽しそうに笑った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「さて……」
　貢がれた資料を閉じ、息をつく。どれ……もとい〝オトモダチ〟の話や持ってこさせた資料を眺め、ある程度この神殿の内情は理解できた。
　一、神殿を支配しているのは巫女ではなく神官である
　二、神殿の運営もすべて神官の手で行われている。
　三、異端審問もまた、全ての審査は神官たちの手によって行われる。
　四、神殿のすべての最後の決定権は教皇にある
　五、教皇に申請を通すには神官長を介する必要がある。
　セフィをどうするか、という事への決定権を握っているのは実質神官長。ならこの者たちをどうにかするしかない。だが、ではどうやってこいつ等に干渉していくか。
　そもそも神官にとっては都合のよい道具でしかない巫女にはそれは難しい。だが、そもそも神官が、というか神殿が各国に幅を利かせているのは巫女の力が存在するからだ。それなのになぜ、巫女が支配される立場にいる？
　巫女からの神殿の干渉、が、不可能である訳がないのだ。
　力を握っているのは巫女なのだから。

なら何故こんな気持ちの悪い関係になっているのだろうか。という疑問が頭の中で渦巻く。しかしこのこじれた関係の解消が、すぐさま解決できるものなら良いが、まだ神殿に入って数日の自分にどうにかできるものなのか、まだ怪しい。
　どうしようかと、そんなことを考えていた……が、再び図書室の戸が開かれ、エレナはそちらに視線を向けた。はいってきたのはエレナよりも年上の、妙齢の女性。彼女はエレナを見つけると、真っ直ぐ此方へとやってきて、そのまますっと頭を下げる。
「何かご用でしょうか？」
「貴方と話がしたいという人がおられます。どうか話を聞いてはくれませんか？」
　静かで澄んだ声で、淡々と彼女はそう告げた。
　エレナは一瞬考える。
　実のところ、この類のコンタクトはいずれ起こりうることは分かっていた。巫女たちにどんな奴がいるかは不明だが、エレナがこうも派手に行動を移せば、何らかの目的をもって、エレナに接触をしようと測るものがいてもおかしくはない。
　それは悪意の類ではなく、打算という目的のために。
　エレナが荒んでいた時期もそうだった。誰もが恐れおののくだけではなく、エレナの力を目的に吸い付いてきた寄生虫のような奴らがいたのだ。かつては疎ましいだけだったが、今回は違う。
　打算であれ何であれ、もしもエレナの存在を「良し」とするものからの接触であった場合、それはエレナからしても〝利用できる味方〟成り得るのだ。力づくで無理やりいう事を利かせるような関係ではない、ゆがんだ形であれ確かな味方を。
　だからエレナは、その思考の後、静かに頷き
「わかりました。案内してもらえますか？」
　そう言って、最近慣れてきた余所行きの微笑みを浮かべた。

第百二十八話 大地の巫女との相対

　巫女に連れられて案内されたのは神殿内の巫女達に与えられる私室。ファナの説明を思い出すと、確か巫女の中でも高いくらいに位置する者たち、リドが見せてくれた神のカースト制度の上位に存在する神の巫女に与えられている部屋だ。
　エレナに与えられた部屋よりも一回りも二回りも広いその場所には、備えられたテーブルに肘を付け腰を下ろし、微笑む女が一人
「初めまして。【大地の神グラド】に仕えるクレアと言います。よろしくね？」
　年を考えればシールと同じくらいだろうか。淡い黄土色の長い髪を丁寧に結んだ彼女が余裕をもって微笑む姿は何だが様になっていた。
「……初めまして、メナスの巫女のエレナです」
　エレナは挨拶を返すと、此処まで案内してくれた巫女に促されて向かいの椅子に座る。
　真正面から彼女、クレアという女を見たときのエレナが彼女に抱いた感想は、「綺麗な大人の女」と、第一印象はそんなところだ。薄らと施された細やかな化粧、エレナよりも背丈は高いだろう。男と比べてもそれなりの高身長で、その姿勢も、巫女の服の上から見えるスタイルも良い。
　いままでエレナが神殿にやってきてから見てきたような巫女達と比べて随分と垢抜けた印象を受ける。とはいえ、気後れしている場合ではない。
「それで、話というのは？」
「そんなに焦らなくてもいいのよ？」
　と、エレナの質問にクレアはクスクスと口元を抑えて微笑む。そしてテーブルに備えられているクッキーを差し出して？
「この茶菓子、美味しいのよ？ どうかしら」
「……この手の趣向品、巫女たちの間では禁じられていませんでしたか？」

「手に入れられないわけじゃないのよ。いろいろと方法はあるのよ」
　やはりクスクスとクレアは笑う。
　調子を狂わされるような気分だったが、それは自分の未熟を晒すようで、エレナは自分を落ち着けるように息を掃き出し、差し出された茶菓子を一つ口に付けてみた。普通のクッキーだ。甘い。結構砂糖多めだ。
「どう？ 美味しい？」
「美味しいですね。少し甘いけれど、お茶には合いそうですね」
「あら、大人なのね。エレナさん」
「……世間知らずの子供ですよ。私は」
　自分は子供だ。エレナは誰よりも自分をそう思う。両親の過剰な愛に囲まれて、今度は魔術学院の中で引きこもって、シールに救われてようやく周囲が見えるようになった。そして多くの、とまでは言えないが、それなりの知り合いが増えた。友達、と言っていいかもしれない者も、そして気が付いた。誰もかれも、エレナよりたくさんの事を知っていると。
　遊び方、コミュニケーション、趣味も仕事も何もかも、エレナよりも多くを知り、経験し、その身に学んでいる。皆、エレナよりもずっと大人だった。彼女が救ったミフィールだってそうだ。引きこもっていた自分だけが、どこまでもガキだったのだ。
　だからエレナは自分をそう称する。とても自分が大人だなんて、思えなかった。だが、
「あら、あなたが子供なら、神殿の巫女達はどうなのかしらねえ」
「……どういう事でしょう？」
　尋ねる。すると「貴方も覚えがあるでしょう？」とクレアは霧だし、
「エレナさん。ここにきてしばらくいやがらせ、受けたでしょう？」
「……え、ええ。まあ」
　あまりあけっぴろにすることではないと思うのだが、問われた以上は頷いた。と、
「ねえ、そういうの、どう思う？」
　どう、とは？　と、エレナは首をかしげながらも、思い返す。このたった数日の間に受けた数々の嫌がらせ、それをどう感じたか？　なるほど、最初は確かに

鬱陶しかった。当たり前だ。エレナは嫌がらせをされて喜ぶような変態ではない。
　そう、鬱陶しくて嫌だった。そうではあったのだが……
「……意外と俗っぽいですね」
　そんな風に言葉を濁す。
　神殿という場所に対して、幻想なんて抱いたつもりではなかったのだが、それでもなんというべきか、エレナはこの数日、まるで悪びれもせずにいやがらせをしようとする巫女達の姿は、エレナに幻滅にも似たものを感じさせた。
　彼女たちには力がある。それは事実だ。エレナが神殿にきてからあちこちに、神の力、その一端を感じていた。エレナと比べてその力は微々たるものであったとしても、その力そのものは本物だろう。人の上位者に預けられた、圧倒的な奇跡の力は。だがそれを保有する巫女たちはといえば、遠巻きに陰口を叩いたり、しょうもない嫌がらせをして喜んだりする。
　その様は、言葉を選ばずに言ってしまうと──
「ガキって、言っていいのよ？」
　クレアは衣を纏わぬ言葉を吐き出して笑う。エレナは若干顔を引きつらせた。しかし同時に、確かに、とも思いもした。ガキ、もとい子供っぽいのだ。この神殿の巫女たちは。年齢層は学院よりも高い方だ。それなのに、やってる事が、学院の阿呆どもと大して変わらない。
　女の本性なんてそんなものだ、なんて言葉で片付ければそれまでなのだが……
「ねえ、どうしてだと思う？」
「どうしてって……」
「巫女がどうしてあんなにガキなのかって話」
　あなたも巫女なのでは？　と質問したい衝動をエレナは堪えた。しかし巫女がガキ……もとい子供っぽい理由？ そんなもの、わかるわけが──
「あっ」
　と、言おうとして、ふと思い浮かんだことがある。それはつい先ほど、集めた情報を基に考えていた時に浮かんだ疑問だ。巫女と神官の力関係に対する疑問だ。最初は、あくまでも形としてそうなっているだけで巫女にも相応発言力はあるものなのではと思いもした。そうでなければ説明がつかないから。

だが、そうでないとしたら？　巫女に発言力がない、のではなく、巫女が神殿に対して何かしらの干渉をする気が最初からないのだとしたら？　この考えはクレアの言うところのガキっぽさとつながる。
で、あるなら、これは
「巫女は……生まれて間もなく神殿に発見され、引き取られるのが普通でしたか」
「そうね」
「なら……」
わずかに思慮をめぐらせ、少し嫌な気分になりながらも、それを吐き出すように息を吐き、
「巫女達は生まれて間もなく、神殿に〝そうなるよう〟に教育を受けていると？」
洗脳、という言葉を口にしようとして、飲み込む。目の前にいるのはその巫女達だ。そんなことを言われていい気分はしないだろう。エレナの飲み込んだ言葉を知ってか知らずか、クレアはエレナが入ってきた時から変わらない微笑を湛えたまま、
「私はね。それが嫌なの」
その言葉を吐き出した時の彼女の表情は変わらず微笑みのままだ。だがどこか仮面のような、貼り付けたような笑顔といった印象をエレナは受けた。
「巫女達は神殿に押し込められて、道具として神官たちに利用される以外何をすることも許されない。疑問を挟む余地すら与えられない。それが嫌」
言葉だけ聞けばエレナも納得できる所は多々ある。が、なんだろうか。その言葉の正しさの裏に、薄暗い感情が渦巻いているのがエレナには見えた。薄暗い、長らく燻りつづけた、怒りと憎悪。
なんとなく、エレナは自分の過去を思い出した。だが今は、
「それで……貴方は私にどうしてほしいのかしら。クレアさん」
話を切り出す。余裕がないような切り込み方だが、言葉のやり取りなんてエレナにはできないのだからやむを得ない。無理に気取ってボロを出すくらいならこの方が良い。
クレアは少しだけ此方を見定めるように視線を向け、口を開く

「エレナさん、協力しない？」
「協力ですか？」
「エレナさんは目的があるのでしょう？ セフィさん、だっけ？」
　もうすでに、そのことは知っているらしい。いや、知らない訳がないだろう。あれだけ派手に動いたのだ。少しエレナの背景を調べ、その行動をたどればすぐにその答えにたどり着く。
「ええ、そうです。私はあの子を助けたい」
　正直に話す、と、クレアは優しいのね、と付け加え
「それなら、私は貴方に協力できると思うわ」
　そう言ってにっこりと、満面の笑みを浮かべた。その笑顔を、エレナは若干固い表情で受け止めた。こんな時に微笑みで受け止められないあたり、経験値が少ないな、とエレナは思った。が、引きずらず、
「協力……具体的にはどのように？」
「セフィさんを異端審問にかけようとしている神官様の情報をあげるわ」
　その答えに、エレナは目を丸くした。
「必要でしょう？ エレナさん、まだそこらへんの情報掴めていないものね？」
「確かにそうですが……そんなのをどうやって？」
「私、これでも巫女達の中じゃ結構偉いのよ。貴方の手助けにはなると思うわ」
【大地の巫女】グラドに仕える彼女の持つ力、そして神殿への影響力は確かに本物だった。エレナとて、彼女と相対したとき、彼女自身からにじみ出る魔力、神の力の波動の強さは感じざるを得なかった。それだけの力を保有し、しかも世の構成にまつわる大地の巫女ともなれば、その力は疑わずともよいだろう。
　そして、敵の情報、なんて言い方は仰々しいが、それでもセフィの運命を決めようとしている相手のことはしっかりと知らなければ、どう動くこともできないのだ。彼女が与えてくれるその情報、そして協力はエレナは是非とも欲しいところだ。が、それなら
「その代り、私に何をしろと？」
「大丈夫よ。これもまた、エレナさんと目的は一致するはずだから」
　大丈夫、という言葉ににじみ出る胡散臭さにエレナは若干嫌な汗をかいた。学院長に毎度むちゃ振りをされるシールもこんな気分なのだろうか、なんてことも

思いもして、若干彼に同情した。
「神官長、ローレンを叩き潰してほしいのよ。二度と立ち上がれないくらい」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　その後、いくらかの会話の後、エレナは神官の名と、まつわる情報を聞き出し、あいさつもそこそこに部屋を出ていった。残されたクレアはエレナが部屋から出ていったのを確認して、また笑った。
　他の巫女達が恐ろしい恐ろしいと声を揃えているが、実際話してみると、あの焦りようだ。別にこちらは彼女を嵌めようとか、取って食おうとか、そんなこと考えてもいないというのに。
「まあ、可愛らしいけれどね……ああいうのも」
「あの……クレア様？」
　と、そこで、エレナが部屋に入ってから一言も口を出さなかった、クレアの従者が彼女に声をかけた。クレアは首を傾けて
「なあに？」
「……彼女は、その、上手くやれるのでしょうか？ ローレンを潰すだなんて」
「さあ？」
　そう言ってクレアは、まるで他人事のように冷たい言葉を吐き出した。
　だがその声色も、表情も、エレナと相対した時と何も変わらない、優しげで、表情は穏やかな微笑みのままだ。それが一層、彼女のゆがみを露わにしているようだった。
「あの子が失敗しようがしまいが、私は痛くはないわ。例え、あの子がたくらみに失敗して、私の名前を出しても、どうとでも言い逃れできるしね？」
「……そう、ですね」
　彼女の巫女としての地位と力をもってすれば、その程度は容易いだろう。傍若無人な真似をするエレナが何を言ったところで、彼女には傷一つつかない。クレアはそれが良くわかっていた。
　彼女にとって、エレナは捨て駒ですらない。勝手に暴れて都合よく行けばそれでいい。無駄に倒れてしまったらそれまで。その程度の認識なのだ。

彼女には望みがある

　だが、その望みを叶えるための意思が、どこまでも欠落していた。

「頑張ってほしいわね、エレナちゃん」

　まるで客席から決闘を眺める観客のような口ぶりで、クレアはエレナを応援する。その表情はやはり、穏やかなままだ。まるで何も感じない人形のように。

第百二十九話 ■■■との対面

　神官長ローレンは、いうなれば神官のエリートともいえる出身の持ち主である。
　彼の母親は【火の神グレン】に仕える高位の巫女、父親は神の信徒たちの尊敬と信頼を獲得している敬虔な神官の長、どちらも各国に幅を利かせる神殿の中でも高い地位と権限を持つ実力者。
　二人の間に生まれたローレンは、周囲の期待に応えるように神官としての道を歩み、順調な出世街道を歩んでいった。
　彼の神官としての活動は極めて優秀。
　だが、異端者、神殿の教えを違う者には容赦がなく……

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：

「――さん！　エレナさん!!」
「っんあ？」
　狭い部屋をけたたましく叩く扉の音とファナの声に　エレナは机に突っ伏していた自分の頭を持ち上げ、寝ぼけた声を上げた。昨日、クレアから渡された情報、そして部下の巫女達に集めさせた資料を読み漁り、そのまま眠りについてしまっていたのだ。貴重な資料によだれの跡がついていた。
「起きなさい！　朝の清めの時間ですよ！」
「わかっていますよ、ファナさん」
　まだ日も出ていないというのに。彼女もこんな朝早くから律儀なものだ。ま

あ、恐らくは、エレナを教育、というよりも監視するためにいるのだろうが、その働きっぷりには感心する。
　資料を机の中に、更に自分が部屋にいない間に勝手に探られないよう魔術で封をし、エレナは部屋を出た。

　巫女の朝は早い。
　日の出と共に目を覚まし、そして浄化魔術によって清められた水で体を洗い流す。神に仕える者として常に清楚たれというのが巫女の原則らしい。浄化した水というのがまたやたらと冷たく感じて、エレナはいまだこの作業が慣れない。今度からは魔術で体温調整でもしようかと考えている。
　そしてその苦行を終えると、次は朝食の時間だ。食事の内容はさほど質素ではない。生き物の死を穢れとされ肉類は出されないが、代わりに豊富な果物や野菜、パンやスープが並べられる。
　食事に不満は無い。学院の食事と比べて質が良いと感じる時もあるほどだ。味付けがやけに薄い事と、食事の前に神へのお祈りが面倒な事を除けば、だが。
　このお祈りなのだが、学問的見地から考察を始めると意外と面白いとエレナは感じてはいた。この祈りに込められた意味、詩としての読みやすさ、この祈りを生み出した神殿と世界の歴史的背景等々、感じ入る事は多々ある。これは文化と呼べるものだ。
　が、それらを学んだり考察したりする時間はエレナにはない。
　故に、面倒、と切り捨てるほかなかった。この件が終わり時間があれば調べてもいいかもしれないが、今はダメだ。
　祈りの内容は初日に覚えたので口パクする必要もなくなった。今日はどう動くか、そんなことを考えながらエレナは祈りを諳んじると、焼きたてのパンを口の中に放り込んだ。

　食事が終わると年の若い巫女達は勉強会が始まる。ここら辺の流れは起床時間の速さこそ違うものの、学院のそれと大して変りは無い。しかし授業の内容は

はっきり言ってつまらない。教える内容はやけに〝乏しい〟
　ここら辺はクレアの言うところの、巫女に必要以上の知識を与えないという方針にのっとったものなのかもしれない。神殿の成り立ち、世に存在しながらもたわむれに世界を弄りまわす神々を信仰するに至ったその経緯は興味があるのだが、歴史に関しても巫女として教えられる情報はやけに偏向的だ。正直、聞いていて辟易してしまうのだ。
　しかしこの学習時間はそこまで長くは続かない。
　巫女にとって大事な時間はこの後にあるのだから。
　勉強会が終われば、祈りの間で巫女としての修練が始まるのだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「さて、皆さん」
　何処か優しげな瞳をした年老いた老婆、クルル曰く【水の神・ライク】に仕える最年長の巫女、ジゼル――比較的―人格者ではあるが、起こると怖いとはクルル談――その彼女が揃って地面に座り、両手を組む巫女達に向い、笑みを浮かべる。
「今日もお祈りの時間がやってまいりました。我々がより強く、神の恩恵を授かるため、何時か我らを加護する神々の御許に至るために、より一層の努力を怠らぬよう」
　そう言って、ジゼル自身も手を組み、優しげな笑みを止め、瞳を閉じ、
「では、はじめ」
　その一言で、その場から音が消え去った。巫女達は一人として身じろぎしない。声もたてず、呼吸すら、やめてしまっているかのように静かだ。この場にいる生きとし生けるものすべてが石にでもなってしまったかのようだった。
　……やっぱり、凄いわね
　その中で一人、祈りをするふりをしているエレナの意識だけ、虚空を漂っていた。
　神殿内で用意された祈りの部屋、世界を生み出した最高神【生誕の神・リヴ】

の像、それ以外何も飾りつけのされていない、簡素極まる部屋に巫女達が集う。大陸中から集められているとはいえ巫女の数は少ない。しかしたった一つの部屋にその巫女達の大半が集うとなると、中々壮観だ。
　その上、巫女の一人一人が、一心不乱に両手を合わせ、各々の神に祈りをささげるのだから、異様ともいえるだろう。正確には祈りではなく、瞑想に近いのだが。
　巫女達の自らの内にある奇跡の力を成長させる。
　この集団瞑想の目的はそれだ
　意識を集中し、自らの力を通じ、それらを与えた神々に意識を繋げ、その奇跡の色をより濃く、強くする。神との擬似的な通信手段、それがこの瞑想。という話をクルルが教えてくれた。
「神の力は巫女の存在意義ですから、この訓練をないがしろにする者はいません」
　そう言っていたように、彼女もまた、この部屋で額に汗を浮かべながら、じっと瞑想をつづけている。エレナにちょっかいをかけようとした時の彼女とはとても思えないくらい真剣そのものだ。クレアはいないが、彼女は高位の巫女故に、この部屋で祈りを続ける必要はないのだろう。
　背後から見てみると、巫女達の内にある神の力の宿った魔力がその体から湧き出て、揺らめいているのが見える。その魔力はすぐ隣にいる巫女達の魔力と共鳴し合い、時折、弾けるように動いたりもする。影響しあっているのだろう？　それが巫女達の瞑想に良い影響を与えるのかどうかはエレナにはわからないが。
　さて、エレナもまた、ここで瞑想を続けるのは義務なわけだが、エレナは今のところ、これをまじめに行ったことは無い。お前は修行なんてするな、と初日にファナに思い切り釘を刺されたからだ。
　が、しかし
「……」
　ここ数日は黙ってみていたが、流石にこの場で黙りっぱなしというのは暇が過ぎる。と言って、勝手にここを出ていくのもエレナは許されない。背後ではファナがいるのだ。しかし他の誰かに話しかけたりして集中を妨げるなんてまねもしかねる。そもそも話しかけるような相手はいないのだが……

ともなると、
「……ふむ」
　エレナはファナの視線を背後に感じながらも、そっと手を組んで、瞳を閉じる。瞑想、オルフェスにいた頃、似たようなことは何度もやったことはある。魔術を扱う上で高い集中力が必要になるのだからそれは当然だ。
　しかし、今回の瞑想とは微妙に話が違う。通常の魔術を扱うときはもちろん、メナスの力を扱うときすら、エレナは魔術的な感覚を重視してきた。事実その感覚で大部分魔力は制御できていたので、問題無かった。
　が、今回のこれは顕現そのものの力を伸ばすものだ。
　今までのように魔力の流れ、放出する量、大気のマナの動き、それらを意識した制御と抑制ではない、顕現そのものを意識し、力の渦の中に没入する。なるほど、考えてみればこの手の作業はしたことがなかった。
……まあ、ちょっとだけなら
　沸き立つ好奇心に流されるように、エレナはそっと目を閉じて、すっと、魔力の内を意識しながら、精神を集中し始めた。そして――

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

『……え？』
　そして、気が付くとエレナは何もない、真っ白な世界にいた。
　右も左も、地面も空も、何もかもが白い。見ているとどこまでも落ちて行ってしまいそうなくらいの白、見続けていると目の感覚がおかしくなってしまいそうなほどの白色だ。唐突に切り替わった、現実感のあまりにないその光景に、エレナは思わず声をあげ、その声がまた、奇妙な震えを帯びていてまた驚いた。
　なんだ？　なんだコレ？
　疑問が渦巻き、それらが解消されない内に、エレナの眼前の純白に変化が起こる。ひたすらに白かった目の前の空間が揺らめき始めたのだ。それは徐々に大きくなり、渦巻くと表現できるほどのものになり、一つの形に変わっていく。
『……っ』
　白の歪みは、人の形になったのだ。最初はただ人の形を模しただけのゆがみ

だった、見る見るうちにそれは明瞭な形を模してゆく。そしてあっという間に、それは、エレナと変わらない、完全な人間の形に成った。
『っな……』
　男、若い男の姿。背は高い、容姿はまるで作り物の人形のように整っている。整いすぎて現実感がまるでない。髪は無造作に伸び、衣服はなぜかシールが来ているのと同じ、オルフェス学院の教師の制服だ。
　男は、薄らと瞳を開ける。金色の瞳、吸い込まれるように澄んだ色の瞳がエレナをじぃっと見つめ、そしてどこか眠たげに、口を開いた。
『【……ああ、きたのか、みこ】』
『……あなたは誰』
　若干、なんとなく目の前の、現実離れした男が誰なのか、エレナには予感があった。が、一応、確認する。あまり、自分のその予感を信じたくはなかったからだ。だが目の前にいる酷く眠たげな美青年は、此方の気持ちなどまるで知ったことではないというように、ひどく簡潔に
『【めなすだ】』
　物凄いシンプルに、自分が死の神だと告白した
　エレナは恐らくいまだかつてないほど微妙な顔をした。
『【……どうした？】』
「……いえ、毎日努力している巫女達に申し訳ない気分になって」
　自分の才能を恨んだことはないし、有用活用してやろうと考え直しはしたものの、流石に何もかも割り切るには微妙な所だ。
　天性の才能というのは、傲慢が過ぎる。エレナはそう思った。

第百三十話 ■■■との対話

　神との対面、死の淵にいた者がその瀬戸際に見るとか、伝説の勇者が加護を受ける時に出会うとか、そんな奇跡的なイメージがあるソレを、エレナはすさまじくインスタントな形で果たしていた。
　……なんかちょっと祈ったらぽっと出てきた。
　印象としてはそんなところだ。ありがたみもなにもない。そして目の前に現れた神メナスには威厳もない。
『【……あぁ、ねむい】』
　目の前の神は目を細めそんな事を言いながら、ゆらゆらと体を揺らしている。そもそも神が睡眠をとる必要性があるのかと疑問が残るが。
『あ、貴方がメナス様、なの？』
『【……ああ、せい確にはぶんれいだが】』
『ぶん……分霊？』
　問うとメナスはゆるりと首を回し、しばらく何かを考える様に動きを止め、
『【おまえと言ばをはなすための、インたーフぇースだ】』
『いんたー……？』
『【……カミがひとがことばを交わすための、■……つうしん魔道ぐと考えろ】』
『貴方が魔道具？』
　なんとなく、彼が言わんとしていることは分かった。だとするならメナスの恰好、オルフェス学院の教師の制服を身に着けているのも納得ができる。アレは、此方の記憶やらなにやらから抽出したイメージとでも考えればいいのだろうか。よく見ればメナスの顔もシールに似てる。
　エレナの意識の中から生まれた人形、とでも考えればいいのか。

『それじゃあ、この空間は？』
『【わたしとおまえのらいんないにうまれたせいしんくうかん】』
『……ナルホド』
　果たしてそれが魔術的に再現するならどれほどの奇跡なのか、と考えようとしてエレナはその思考を放棄した。難しく考えないほうが吉らしい。神の常識と此方の知識がかなりずれているし、知ったところで自分がどうこうできる範疇を大きく超えている。どうしようもない。
『【それで、なにかようなのか？】』
　メナスの問いに、エレナは首を横に振り、
『瞑想してみたら、いつの間にか貴方の下へ。意図して貴方を尋ねたわけじゃない』
『【そうか】』
　結構無礼な事を言ってるような気がするが、特にメナスは気にする様子はない。精霊との相対で感じた感情の欠落、とはまた少し違った感じだが、それでもやはり通常の人間とは感性が違うのだろうか。
　と、緊張や警戒が無意味なものだと理解してしまうと、今度は聞きたいことが沸々と湧いてきた。神との相対、なんて、常識外との対面ともなると知的好奇心が刺激されないほうが無理な事なのだから仕方がない。
『色々と質問いいかしら？』
『【いーぞ】』
　さっくりあっさり許可が出た。ので、質問をしてみる事にする。
『貴方たちって普段何をしているの？』
『【ひまだからねてる。ひとのせかいをのぞいてるのもいる】』
『人の営みなんて見ていて楽しいの？』
『【しらん。おもしろいやつはおもしろいのだろう】』
　結構適当な回答だ。神同士のつながりというのは意外に無いらしい。その割に勇者と魔王の伝説の折は、勇者に対して神々が連携して力を与えていたようにも思えたのだが、アレはまた別なのだろうか？
『そういえば貴方たちは何故私たちに力を与えるの？』
『【ひまつぶし】』

『そうなんだ……』
『【ちがうのもいる、かみそれぞれだ】』
『じゃあ貴方はどうなの？』
　ボサボサ髪の眠たげな男の姿をした神、どこかシールにも似ている、否、似せた姿をしたメナスに問うと、メナスは暫く言葉を迷うような、あるいはためらうような間をあけ、
『【わたしのちからは死のちからだ】』
『そうね』
『【わたしのちからはあんいにひとにはあたえられない。わたしのちからとたいきょくの、つよいたましいをもつものでなければならない。そういうにんげんはすくない】』
『私が強い魂を持っていたと……でもそれは条件でしょう？ 理由は？』
『【……】』
　メナスは沈黙した。それはなんだか気まずそうにも見えて、エレナは僅かに目を細め
『まさか、めずらしく条件が合ったからとりあえずやってみたと？』
『【ウン】』
『ウンて』
　神は結構適当らしい。いや、それは前評判である程度分かっていたことだが、しかし眼前でこんなこと言われたら流石にどんな顔をしたらいいのかわからない。笑えばいいのだろうか。
『本当……私達って貴方たちの玩具みたいなものなのね』
　神にとって人とは壊れたところで困らない玩具。そんな風に評した歴史家もかつてはいた。神殿によってそういった神々への非難は禁じられているが、それでもそういった声が絶えない程度には、神は結構好き勝手に、人間の人生を狂わせている。
　そう考えてみると玩具という表現が、やはりしっくりくる。だが、
『【そうでもない】』
『え？』
　そこに否定の言葉が割って入った。エレナが顔を上げると、メナスはその吸い

込まれるような黄金の瞳をエレナに向けている。
『【ときおり、われわれにてをとどかせんとするものがうまれる】』
『……貴方たちに……〝手を〟？』
『【それは──】』
　と、更に言葉を続けようとしたその時、ふとこの真っ白の空間に〝ゆがみ〟が発生した。白色しかない空間だけに目視はできない、が、確かにそれは歪みだ。何か、大きな力がこの空間に干渉してるとエレナは体感した。
　メナスはその異常にのほほんとしていた表情を少しだけゆがめ、
『【リヴか……】』
『リヴって……』
　祈りの間に飾られていた、最高神にして生誕の神リヴの名がエレナの頭に浮かぶ。その神による神への干渉、言葉にしてみると冗談みたいだが確かに目の前で現実として起こっている。空間は更にゆがみを走らせ、流石にエレナも恐ろしさを感じ始めたが、メナスは心配するなというように手を振り、
『【しゃべりすぎたからはらをたてたらしい。うっとうしいやつだ】』
　と、言って、メナスがふとエレナの額に指をあて、次の瞬間エレナの意識は暗転した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　白から黒へと意識が移り、頭の中が混乱する。意識が揺らめき、唐突に変わり続ける状況に思考がまとまらず、そのうち闇の中に意識を委ね、そして
「──レナちゃん」
「っ?!」
　自分に向けられたその声に、ふっと、エレナは意識を取り戻す。いきなり重力がかかるような感覚に身じろぎしつつも体を起こす。頭を上げると、もうどこまでも真っ白な空間は存在しない。今この場所は、瞑想を始めた祈りの間だ。違う点はエレナと同じく祈りを続けていた巫女達がどこにもいなくなっていた点。
　此処にいるのはエレナ、そして彼女に声をかけた女、クレアだ。
「クレアさん？」

「こんにちはエレナちゃん」
　彼女は以前あった時と変わらない温和な笑みを浮かべている。エレナは頭を振って至高を整えつつも疑問に思った。此処、祈りの間は高位の巫女、つまり彼女は訪れる必要がない場所のはずなのだが……
「何故ここに？」
「エレナちゃんどうしてるかなって様子を見に。そしたら祈りが終わってもエレナちゃんだけその場でじっとしてるんだもの。ビックリしちゃった」
「ああ、なるほど……」
　メナスとの対話の間に祈りの儀式は終わっていたらしい。そしてずっとトランス状態だった自分を除いて皆が部屋を出たと……誰一人声をかけられなかったというのは地味に傷つくが
「あら、ジゼルおばあちゃんは貴方に気をかけていたみたいよ？」
「水の巫女のジゼルさんが、ですか？」
「ええ。貴方の状態がどういうことなのか、わかっていたみたいだから、」
　そう言って笑みを深め、
「エレナちゃん、ひょっとして神様とお話しした？」
「……わかるのですか？」
「私もだけど、神と対話できる巫女はなんとなく、神の〝匂い〟を感じるの」
「……匂い」
　クレアの〝匂い〟という表現はよくわからなかったが、エレナの超常的な体験を即座に察せる辺りはやはり高位の巫女という事なのだろう。あっさりと神と対話を交わしたエレナがいう事ではないが。
「【大地の神】でしたっけ？ クレアさんに加護を与えた神」
「ええ、穏やかな方よ。でも少し怖い人」
　貴方に似てるんですね。なんてことを口にしそうになった。
「中には神様らしい神様もいるらしいのだけれどね。少なくとも地の神はまだまし、らしいわよ。他の神様よりも」
「他の神様はそうじゃないと？」
「風の神は気まぐれ。火の神は横暴＆女好き。まあ、聞いた話だけどね」
「……なるほど」

メナスはずっと眠たげで、適当な印象を受けたが、しかし交流するには楽な相手では会った。少なくとも横暴な神や気まぐれな神の相手をさせられていたら、もっと戸惑っていただろうし、そんな神が自分の加護をしていると考えるとげんなりしたかもしれない。
「メナス様はどんな方だったのかしら？」
「知らないんですか？」
「メナスの巫女は珍しいから……どんな方？」
　エレナはつい先ほどのメナスの様子を思い返し、
「終始眠たげでぼけっとしてましたよ。破壊神何て呼ばれてるとは思えないくらい」
「あらそうなの？　私、メナスは巨大な角が二本ついて頭は山羊、胴は馬で尾は蛇、常に何かを破壊する事しか考えられない頭足らずの邪神って聞かされていたんだけど」
「もし本当にそんな化け物と真正面から対話してたら私発狂してましたよ」
　いったいどこをどうしたらそんなイメージが伝わってしまったのか。元々邪神として語られている以上は仕方のない事なのかもしれないが……そういえば確か、湖の精霊もまた、メナスは自分の力を理解しているがゆえに、力を安易に与えることはしない、とか何とか言っていたような気がするが、巫女の数が少ないというのもこの悪評の原因なのかもしれない。
「私が話広めたらマシになりますかね、メナスの評判」
「ああ、エレナちゃん、神様にあったことは黙ったほうがいいわよ？」
「何故ですか？」
「神様に出会った巫女は上位巫女として認められるわ。同時にいろんな面倒くさい儀式とか通行儀礼みたいなのがあるのよ。他の巫女達と隔離するためにね」
　ああ、とエレナは納得する。あまり神の存在を神聖視していなかったエレナですら、メナスと対面した時はなんともいえない微妙な気持ちになったのだ。日頃神々に畏敬の念を向けている信心深い巫女達や神官達がこんな神の本性を知ったらショックだろう。だから情報を隔離するのか。もちろんそれだけではないとは思うが。
　まあ、別段エレナからすれば神のイメージがどうこうなろうとあまり気にしは

しないのだが、それよりも目の前の難事の解決だ。
「えっと……」
　窓の外をながめてみると、まだ日の光は高く明るい。様子からしてまだお昼時、食事の時間が終わったかそれくらいだろう。この後、巫女の日課は午後のお祈りの時間以外無く、自由時間だ。
　エレナからすれば公然と自由にできる時間はここくらいで、だからこそ可能な限り有効活用しなければならないひと時だ。エレナは焦るように、慌ただしく立ち上がった。
「急がないと」
　だが、その直後に両肩に手を置かれ、
「あら、あわてちゃだめよエレナちゃん」
　と、クレアに引き止められた。
「お昼ご飯も食べずに慌てて仕事したって成果は出ないわよ？」
「……いえ、あの」
「これから一緒にご飯食べない？ 貴方と一度、落ち着いてお話ししたいわ」
　正論、ではあるのだろうが、今のエレナからすれば余計なお世話だった。というかこんなふうに苛立っている自分を彼女が面白がっているような匂いがプンプンするのは気のせいだろうか。と、エレナはクレアのニコニコとした笑みを見て思った。
　が、彼女の意図はどうあれ慌て過ぎてもしょうがないのは、まあ、事実ではあった。彼女と話す事もまた、為にはならないなんてことは無いだろう。多分
「わかりました……」
　もしも下らない雑談だけだったらとっとと食事を切り上げよう、なんてことをエレナは口にせずに思ったが、そんなエレナの考えを知ってか知らずかクレアは楽しそうに笑い、
「それじゃあご飯食べに行きましょうか」
　するとクレアは嬉しそうにエレナの手を引っ張って、そのまま歩き出した……食堂とは真逆の方向へと。
「……あの？ どちらへ？」
　不審に思いエレナが問うと、クレアは再び先ほどエレナが感じ取ったような笑

みを──どこか性悪で、人の悪そうな笑みを浮かべて、

「エレナちゃんに、〝敵〟に会わせてあげようと思ってね？」

第百三十一話 神官との対話、そして大地は二つに割れ

　クレアに連れられてエレナがやってきた場所は、神殿の奥、今まで立ち入ることはなかった、立ち入ることを許されなかった場所だ。
「此処は確か……」
「そう、神官さんたちの職場ね」
　神殿内で神官の居住場所と巫女の居住場所は隔離されている。というよりも巫女の居住空間が限られているのだ。本来巫女は外に出たり神殿を自由に行き来することは許されていない、とファナから話を聞いてはいたのだが……
「私は大丈夫よ。ほら」
　そう言って彼女が前からやってきた巡回中の神官騎士に目を向ける。向かってきた神官騎士は、しかしクレアに対してなにかしら咎めるようなことはせず
「……」
　ただ静かに頭を下げた。上位の巫女、それは彼女自身から語ってきかされていたため知っていたが、しかしこうしてみると彼女の立場はこの神殿内に置いて、思った以上に強い地位にあるようだ。
「神と意思を交わし、力を得たと認められた巫女は、その神の加護を各国に分け与えるのが義務になるわけだけど、その引き換えにある程度の自由と権限をえるわ。そういう意味では、エレナちゃんも認められれば私の同じように自由にふるまえるかもしれないわよ？」
「そんな時間はないし、そもそも私の神はメナスです」
　メナスの神と意思を交わしたと知られたらどうなるか。少なくともファナは発狂するだろう。そして下手すればセフィと同じ牢獄に投獄だ。
「あらそうね。そもそも破壊神の力なんてどう生かせばいいのかしら」
「活用方法はあると思いますよ。認められるかは知りませんけど」
　メナスの破壊、否、死の力は強大だ。そして想像以上に広い範囲にその力は及

ぶ。何かの命を奪う短絡的な事もできるが、それだけではない。空間を構成するあらゆる物質、生命、それらが持つ、力の流れを沈めることもできる。物事の根幹を左右できる力だ。

　使い方次第では、恐ろしい力を発揮するのは間違いない。勿論、使えれば、の話で、そもそもエレナもまた、慈善活動でもない限り振る舞うつもりもないが。

「ついたわよ」

　と、そんなことを考えているとクレアから声がかかった。場所は階段をいくつも登った先にある部屋の一つ。

「……ここって」

エレナが躊躇いがちに口を開くが、クレアは気にすることもなく扉をノックする。しばらくすると「入れ」という、少ししが割れた声が響き、クレアは躊躇う事なく扉を開け中へと入って行った。エレナもやむなくその後に続く。

　部屋の中は意外と質素で、簡易の神棚、それと事務用と思しきテーブル以外、家具らしき家具もあまりない。そんな清貧を心がけているかのような部屋の中心に一人の男がいた。初老を思わせる顔のしわ、しかしその瞳はまだ強く、意思が点っている。厳格な性格であろうことはその姿を見ただけで分かった。

男は、職務の途中だったのか、書類と向き合いながら、ノックをしたクレアに目を止めると、一瞬でその表情を綻ばせ、

「おお、クレア様、よくぞここまで」

そう言って急ぎ立ち上がると彼女の前まで近づいて、恭しく、丁寧にお辞儀をした。それは形だけの代物とはとても思えない、心底からの敬いの感情がなくてはこうはいかないだろう。

対して、その最大限とも言える敬意を受けたクレアは、しかし、表情には特にこれといって、特別な感情を浮かべることもなく、むしろ淡々とした印象を受ける笑みを浮かべながら、

「そんな大げさにしなくていいのよ。ローレン」

と、そういって返した。

ローレン。その名には当然覚えがある。クレア自身がエレナに伝え、そして叩きのめして欲しいと依頼してきた人物の名だ。つまりこの男がそうなのか。しかし、ここまでクレアに敬意を払う人物を叩きのめすとはどういうことなのか？

エレナがそんな疑問を感じていると、
「おや、そちらにいるのは……」
穏やかな表情を浮かべたローレンの視線がクレアからエレナに移った。エレナは挨拶をしようと口を開こうとした、が、
「……メナスの、巫女！ 何故ここにいる！」
　一瞬にしてその表情が憎悪に切り替わり、エレナが挨拶の言葉を告げるその前に、憎悪と嫌悪に満ちたその言葉をエレナへと叩きつけた。なるほど、クレアの意図はどうあれ、この男の事を敵と評したクレアの言葉は正しいようだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　神官長ローレンはエレナを憎悪と嫌悪に満ちた視線で一瞥し、しかしすぐさま視線をそらし、クレアへと向き直り、
「クレア様。邪神の使いなどと言葉を交わしてはなりません」
「あら、彼女はそんな悪い子じゃないわよ？」
　エレナへとローレンが告げた怒りと憎悪をクレアは特にこれと言って気にした風もなく、
いっそ朗らかな調子で言葉を続けた。
「皆とごはんを食べようと思って……」
「いけません！ クレア様！ 穢れが移ります！」
　穢れが、と眼前で断言されたエレナは軽く顔を引きつらせつつも、ひとまずは顔に怒りを出さぬようにはつとめた。
　というか、今までの生意気な巫女、と言った偏見の目で嫌がらせは受けてきたが、メナスの巫女としてここまで極端に敵意を向けられたのは初めてだ。ファナのアレはどちらかというと、警戒からくるものだったがこれは違う。敵意、嫌悪、憎悪、それらの感情がまっすぐにこちらに突き刺さってくる。怒りよりもまず、その感情の向き方に興味が湧いた。
　メナスへの嫌悪、それはつまり、高い信仰心があるということに他ならない。
　そして、この男が、セフィ、彼女を異端者として裁判にかけようとしている男だと聞いている。最初は、そもそもこの情報を信じていいのかすら疑わしいもの

ではあったのだが……
「許し難い……邪神の手先がこの世にのうのうと生きているなどと、この世を生み出した神々を冒涜している！」
　なるほど、ここまで信仰心が高い男なら、納得も行く。別段裏があるでもなく、ひたすら、邪教によって生み出された神を冒涜する異端の精霊として処断しようとしている、ということなのだろう。
　とはいえ、そうなると今度は一体どこからセフィの情報が漏れたのかとか、まだまだ疑問はあるが……
「良いか邪神の使い！」
「私はエレナと言いますが」
　邪神の使い扱いされること自体は比較的どうでもいいことではあるのだが、かと言って名前も呼ばれないというのは不愉快だった。が、エレナの訂正にローレンは耳を貸すつもりは毛頭ないようだ。興奮気味の赤ら顔で口を大きく開き、
「貴様も、そしてあの神々を愚弄する悍ましいバケモノも必ずや正しき裁きをくだしてやる。覚悟しておけ」
「あの子はバケモノではありません」
　エレナは淡々と、しかし強い意志をこめてローレンの言葉を否定する。彼女を化け物呼ばわりするのは、自分を貶すよりも、腹が立った。
「神々に仕え、その威光と力を人々に伝える役目をおった神官が、あのような幼い子供に情けないとは思わないのですか」
「邪悪な存在から無辜の民を守るのも、神々の使いたる我らの使命だ。邪霊が周囲に被害を及ぼさないと、その保証がどこにあるというのだ」
「それは……」
　それは、事実ではあった。最近は落ち着きを見せていたものの、彼女に内在する危険性は消え去ったわけでも何でもなく、ふと力の使い方を謝れば、周囲の環境をすべてを呪いによって爛れさせる事ができてしまう。例えどれだけ訓練を重ねようと、それは変えようのない現実だ。問いに答えられず言葉を濁すエレナに、ローレンはそれ見たことか、というように加虐的な笑みをさらに濃くさせ、
「そしてそれは貴様もそうだ。破壊神の巫女、お前の危険性、我々は必ずや暴き、そして滅ぼしてくれる」

「……前より疑問だったのですが、何故あなたたちはメナスを邪神と見なすのですか？」
エレナは五月蝿そうに目を細め、言葉を返した。
「あらゆるものは古くなり、老い、死ぬ。それはこの世の摂理です。それを司る神を邪と言うのは、現実から目を逸らす以外の何物でもないのでは」
「違うな。老いは、死は、確かに世を司る現実の一つ。それを否定すまい。だがメナスはその力を司り力を管理しているわけではない。ただ力に胡座をかいてるだけだ」
　ローレンは若干興奮気味に、しかし明瞭な口調で言葉を続ける。
「神々は我々卑小な人類に対して圧倒的な力を持っておられる。が、あくまでも現象を引き起こす力を持つのであって、そのものではない」
　神々が超常的存在そのものでなく、超常的な力を総べる存在、
「なぜメナスが胡座をかいていると、断言できるのですか。その根拠は──」
「勇者ベルレイン」
　……勇者ベルレイン？　何故ここでその名前が出てくる？　疑問、だが直後に勇者の逸話が頭の中で再現される。ベルレインは何体もの神々の加護を受け、その力で魔王を討った。勇者という名に霞んでいるが、しかし冷静に考えれば、神に力を授かるということは即ち、
「勇者ベルレインは神の巫女だった？」
「そうだ。ベルレインは神に定められし勇者であり、巫女だった」
　そもそも勇者が女である、という事実すら、エレナは知らなかったのだが、意図的に伝わることを避けてきた事実ということなのか
「で、それが何故、メナスが邪神であることと？」
「わからんか？　メナスやそれに属する神たちは勇者ベルレインに加護をあたえなかったのだ」
　エレナはつい先ほど、対話したメナスの顔を思い浮かべた。メナス、死の神、彼が勇者の味方をしなかった？
「勇者に力を助けず、放置した。魔王という。世界を破滅させんとした存在を奴らは認めたのだ。これを邪悪と言わずなんという」
　……なるほど、とエレナは納得した。

彼の言い分に納得した、のではなく、彼らがメナスを邪神と何故信じられるのかについて、納得できた。勇者伝説はいまだ、この世界で最も人気で愛されている。国境を越え、人々の心に深く根付いているのだ。神殿の信仰の背景にこの勇者伝説があるなら、なるほど、これほど強い後ろ盾は無いだろう。
「メナスが力を貸さなかった証拠は？」
「神殿の前身の組織、勇者達の援助を行った大巫女達が証拠を残している。神々の中で、メナスとそれに従う神たちは勇者たちに手を貸さなかったと」
それは本当なのか？　と言おうとして、エレナは口を閉じる。
その真偽どうあれ、今それが事実と伝わっている以上ごねても意味は無い。というかそもそも、メナスが事実力を貸さなかった可能性もかなり高い。あの寝ぼけた眼を思い出してエレナはため息をついた。
神様、貴方がサボったおかげで私ピンチです
「我々を滅ぼさんとした魔王を、メナスたちは肯定した。彼らは我々人類にとっての敵対者。それらの脅威から人々から守ろうとすることをお可笑しいとお前は言うのか。メナスの巫女よ」
「……その魔王とやらは本当に人類を滅ぼそうとしたのですか？」
「当然だ」
エレナの問いに、ローレンは断言する。
「魔族の中でも異端。混沌の世界において己が力のみですべてを支配し、そして人類と敵対した最悪にして邪悪なる魔王。かつての勇者ベルレイン、【漆黒の勇者】の敵対者」
そしてその名を、ローレンは何処か躊躇うように、言葉にするのも忌避するように顔を歪めながらも、告げた。

「【不可侵の白王】」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

平原
騎士団の拠点、だがそこにすでに騎士団の姿はない。簡易のテント設備はすで

に撤去され、騎士団が用意した資材などを残して、徹底的に撤去され尽くされていた。人気の失われたこの場所で、しかしシールは以前いた場所から身じろぎせず、リーンもまた、彼の傍を離れず詠唱を続けていた。
　その二人の視線の先には広い平原と、以前までは存在しなかった巨大な影が一つ
　遠目に見れば山にも見える。だが日の光に照らされたその影は、あまりにもおぞましかった。青紫色に脈打つ表皮、生物としての合理性もなく伸びた腕、足、眼球、毛。膨れ、爛れ、腐る。ただあちこちに血肉と悪臭をまき散らす肉の塊。
【崩壊物】
　ラグナからあふれ出たそれらが、この地にたどりつくまでの道すがら、あらゆるものを食らいつくし続けてきた結末が、そこには合った。
　シールとリーンは姿を見せたそのおぞましい巨体に顔をしかめ、
「随分早くに来ましたね……」
「まあ、間に合いましたけど。此方も」
　リーンは詠唱を止め、息をつく。
　シールもまた、立ち上がり、体の関節を鳴らして伸びをした。そして、
「そいじゃ、始めましょうか」
「早く帰りたいですね」
「ケーキが無いから？」
「騎士団の食糧はマズイです」
「栄養は一杯ありますけどね。甘くはありませんが」
　軽口を叩きつつも、シールは両の手を己の胸に当てる。それだけの挙動。特にこれと言って不自然でもないその動きをした瞬間、リーンが周囲に巡らせていた結界が一瞬にして発動した。光がシールとリーンを包み込む。その光は何かから二人を守るようにして光を放ち続ける。
　しかしその異常な空間の中心にあって、シールはまるで気にすることなく、ただ一言、
「【極黒の勇者】」
　言葉を告げた瞬間、世界が揺らいだ。
　彼のその言葉を畏れるように、世界は捩れ、悲鳴を上げる。その震えが空間に

伝わり、脈動する結界の光をより一層強くした。
　　その現象を巻き起こしたシールの様相もまた変わる。黒白の入り混じる灰色の髪が、何もかもを飲み込むように、真っ黒に染まっていた。その立ち振る舞いは平然としたものだったが、彼の周囲を漂うマナは、重く、苦しい。
「さて」
　更に、シールは両の手を広げると、そのままゆっくりと、自分自身の胸へと沈めていく。身体が水面のように波紋を立て、指が水に沈むようにのめりこむ。
　一定まで自分の指を自身の体へと埋めると、一度だけ息を吸い、
「【不可侵の白王】」
　告げ、そして一気にその指を抜き放った。
　白く輝く【何か】をつかんだその指を。
　取り出したるそれは、一本の剣。巧みに洗練され、生み出されたかのように端麗なその剣は、ひたすらに白く、何もかもを拒絶するように白く、眩く、美しい。
　その剣を、【不可侵の白王】なる名で呼ばれたソレを、現実のものとはとても思えぬようなその剣を握りしめ、シールは…………物凄い嫌そうな顔をした。
『【怖いなあ……コレ』】
「わがまま言ってないで早くしてください。神様がキーキー五月蝿いんです」
『【了解です』】
　リーンの言葉に軽い調子で応じて、一振り、試し振りのような調子で剣を振り抜いた。
　その、瞬間
　風が喰らいつくされ
　愛らしい花々は根こそぎ焼き払い、
　大地が割れ、岩石が宙へと舞わせ、そのまま砕け塵と化し
　空間そのものが罅割れ、破砕し、悲鳴のような音を掻き鳴らし
「AAAAGAAYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!! 」」
　そして【崩壊物】は、莫大な白光の刃に両断され、吹き飛ばされ、なぎ倒され砕かれて、凄まじい断末魔をと共に、崩れ落ちた。腐った血が決壊するように大地に溢れ、平原を汚していく。だがその血の跡すら【剣】によって生み出された

白光によって焼失した。
　山のようなあの悍ましい血肉の塊は、一瞬にして叩き潰され、崩れ落ちた。
　そしてそんな有様を生み出したシールは、未だその威圧感をアリアリと放ち続ける剣を片手で軽々しく握りながら、真っ黒になった頭を一度掻いて、
『【……こんな力振り回してた【魔王】はどんな気分だったんでしょうね』】
「今の貴方と同じような気分じゃないですか」
『【……そうかもしれませんね……ただ、まあ】』
　前を見る。そこには、彼が生み出した光景。大地が真っ二つに割れ、隆起し、風が唸りをあげ雲が渦巻き雨風を呼び、更に【崩壊物】の血肉の跡で青黒く染まるという、最早この世の終わりのような光景が広がっているわけだが、しかし、それでも、その有様の中から、崩壊物は体を蠢かしていた。
　生きている。いや、元より生物として〝生きている〟のかどうかすら怪しい。だからこその【崩壊物】だ。その生物としての壊れっぷりは、以前の劇場で散々思い知らされた。だから、
『【残りカスの始末、行きますか』】
　シールは剣を再び構え、静かに殺気を立ち昇らせる。その隣でリーンは瞳を細め、小さく口を開き、音にも聞こえるような詠唱を放つ
「【【【魔神化】】】」
　先の一撃で周囲に散った大気のマナを一瞬で、己が力に変える。凝縮したマナは蒼く輝きを放ち、暴走し唸りを上げる。圧倒的な二つの力に揺らぎを見せる世界の悲鳴は、二人を拒絶し畏怖するようだった。
　だが、二人は気にすることなく、荒れ果て、生物ですらないバケモノたちの蠢く空間へと飛び込んでいった。まるでその地獄こそが、自分たちの居場所だというように。

第百三十二話 壊れた女と現実

　神殿、巫女の居住区へと続く廊下にて、
「ごめんなさいね。食事できなくて……」
「最初から食事なんて取る気無かったでしょう貴方」
「あらそんなことないわよ？」
　エレナとクレアは並び歩いていた。
　あの後、ローレンに追い出されるような形であの場所を後にしたエレナは、疲労感に項垂れていて、それをクレアはクスクスと笑っている。エレナと比べて随分と楽しげだ。こっちは暑苦しいオッサンに散々言葉で嬲られ続けたのだが、気にすることは無いんだろうか。無いんだろうな。とエレナは内心で毒づいた。
「……それで？」
「それで、って？」
「あの方とはどういう関係なのですか？」
　ローレンはエレナにとって、自分とセフィを目の敵にしている敵だが、クレアにとって彼がなんなのかわからない。彼女曰く、巫女が籠の鳥扱いされる事が嫌なのだと言う。　確かに、彼が巫女を神聖視しているのはわかるし、彼を含めた神官たちが巫女を神殿から外に出さないようにとしているのは分かる。だが、現状が、彼を個人を叩きのめしたからといってどうこうなるともおもえない。何かあるはずなのだ。理由が。
　そう思い尋ねてみた、のだが
「ん、元恋人」
「……」
　生々しい言葉にエレナは言葉を失った。いきなりドロドロしてきた。

「あら、冗談よ？」
「……はあ」
「本当は片思い」
「……ほう」
　どんな顔をしろというのだこの女アマ。といった調子でエレナが睨みつけるとクレアは楽しそうに笑い出す。からかっているのだとわかってはいるが、だからと言って彼女のふざけた言動をいちいち流せるだけの狭量はエレナにはない。
「真面目に話してもらえます？」
「私、マジメって苦手なのよねえ……」
　エレナは既にクレアに対して気を使うのをやめていた。というのも、彼女に対して真剣に取り合うことがバカバカしいと気がついたからだ。もちろんそれは、彼女がこちらをからかうから、という理由とは違う。
　クレアには真剣さがない。
　というよりも、意思があまりにも━薄弱なのだ。
　最初の接触、今回のローレンとの誘導、どちらのクレアからの接触の結果ではある。それを考えれば彼女はエレナを介して積極的に事を動かしているように見える。
　だが、蓋を開けてみれば、とりあえずエレナに情報を渡して、あとは放置だ。エレナがどういう行動をとるつもりなのかもまるでわかっていないのに、それで満足している。もちろんそれはこれからまだ何かあるかもしれないが、しかし彼女の様子を見ると、その線も薄くなってきた。
　意思が薄い。適当と言ってもいい。
　エレナが成す行動の結果、自分の望む結果が得られればそれで良い。しかし得られなかったとしても構わない。最悪自分に火の粉が飛び、破滅が訪れようとも、どうでもいい。そんな虚無感を、彼女と話していて感じるのだ。
　しかし、それなのに、
「私としてはローレンが破滅すればそれでいいのよ？」
「……巫女が籠の鳥扱いされるのが嫌だったんじゃなかったんですか？」
「あら、そうだったかしら？」
クレアはのんびりと、穏やかに、先ほどまで親しく話していた相手の破滅を望ん

でいる。その言葉に嘘偽りは感じない。まっすぐと、本心から、願っている。誰かが不幸になる事を。
　あまりに虚ろな心、しかし相手の破滅への願望は確かにある。
　彼女は破綻している。狂っている。そう感じた。
「安心して？　エレナちゃん。必要な事があるなら手伝ってあげる。私ができることがあるなら、できる限り助けてあげる」
「……ええ、ありがとうございます」
　クレアの、何処までも穏やかな、優し気な笑顔に、エレナは出来る限り感情を交えぬままに、礼を返した。ふとすれば、その笑顔が化け物のように見えて、怖かった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　クレアと別れた後、エレナは独り巫女の暮らす神殿のエリアへと戻っていった。結局昼食はとらなかったが、正直食欲はわかなかった。クレアのドロドロとした感情に胸焼けしたらしい。
　何をどうしたらあんな風になったのだ。
　しかし疑問に思いながらも、薄ぼんやりとしたクレアに対しての理解が、エレナの中にはあった。かつてシールに救われるまでの自分。何をしても、満たされない、癒されない自分の心に自暴自棄になり、惰性と暴力におぼれた自分。
　どことなく、彼女のあの投げやりな様はかつての自分と重なるところがあった。
　あるいは、シールならそんな彼女を、救おうとしたのだろうか？
　そう思って、エレナはため息をついて、首を横に振った。シールは優しい。だが彼は聖人ではない。彼は自分の手が二本しかないことを知っていて、だから誰もかれも助けるような愚かな真似はしない。
　彼が自分を助けたのは、ミストに依頼されたから、そのミストが自分を助けろと命じたのは、彼女の家の存在と、彼女自身に秘められたメナスの力の為だ。
　だけど、それは……

「考え事かな？ エレナ」
「……ラルクさん？」
　いつの間に目の前に、ラルクが立っていた。この男はこの男で掴みどころがまるでなくて話すのが疲れるのだが、このタイミングで出会いたくなかった。
　学院がなんだかとても懐かしく感じ始めたエレナを、ラルクは気にせず、
「別に……ただ、少し」
「クレアはこの神殿で生まれた巫女だ」
　と、エレナが何かを口にしようとする前に、ラルクは唐突にしゃべり始めた。何だ、と尋ねようとしたが、ラルクの話す内容にクレアに関する事だとわかったエレナは口を閉じる。
「神殿は巫女の婚約は神官たちによって完全に掌握される。なぜなら巫女の子供は往々にして、神の加護を受けやすいからだ。神の加護が外部に漏れるのを防ぐために、巫女達は必ず神殿の身内と結ばれる」
　結婚の自由がない、という点においては、元より大貴族の娘であるエレナには親近感の沸く話だったが、とはいえ、だからといって人の気持ちを無下にしかねないその制度にわずかながらの嫌悪感が消えるわけではないのだが。
「さて、そうして、この神殿にいるとある神官と巫女、二人の間に生まれたのが彼女だ。彼女は、生まれながらにして高い力を持っていた。神の加護の濃度も、神の権限を持続する魔力のキャパシティも、母のそれも、鍛錬を積んだ巫女達のそれをも大きく上回っていた」
「そしてそれがわかった途端、神官達の中で誰が彼女を娶るかで抗争が生まれた。強大な巫女と関係を得るという事は、神殿内で強い権力を保有する事になるのと同義だからね。それはそれは激しい争いだったらしいよ？」
　エレナはお腹が減って泣く赤子の前で誰がその赤ん坊と結婚するかを顔を真っ赤にして罵り合い続ける神官たちを想像した。あくまでも想像だが、真実とそうずれたものではないだろうことはなんとなくわかった。
「そして、長い抗争の果てに、彼女を妻として迎え入れることになったのが、当時の神官見習いで、今の神官長のローレンだ」
「じゃあ二人は夫婦？」
「いや、クレアはこれからまだ数年、巫女として各国にその力の加護を分け与え

る義務が残っているからね。それが終わった後正式に籍を入れるそうだよ？」
「……」
　エレナが感想を口にできず沈黙すると、ラルクは肩を竦め、
「以上が彼女と彼の背景さ。勿論、どうしてその彼女が君に未来の夫の破滅を願うようになったのかまでは分からないけどね？」
「……よくそんなに知っていますね」
「おいおい、君のために調べたんだよ？ 感謝して欲しいな」
「ありがとうございます」
「どういたしまして」
　感謝半分、薄気味悪さ半分でかなり不誠実な礼の言い方だと思ったのだが、彼は特に気にするそぶりもせずに笑顔で返した。本当に、彼が何を考えているのか、よくわからない。だが、クレアの背景が少しわかったのは事実で、それはありがたかった。
「さて、と。それでどうだい？ セフィちゃんは助けられそう？」
「……まだ、もう少し」
「そう？ 頑張ってね」
「……他人事ですね」
「おいおい、僕だって、もしも彼女が犠牲になったらと思うと胸が痛むさ」
「嘘ください」
「本当さ。だから手伝っている。本当なら、君を連れ去るだけでもいいんだけど」
「……」
　爽やかに笑みを浮かべながらそんな事を言ってる様はやはり胡散臭い。此方をからかうようなしぐさにむきになってしまう自分も相当子供っぽいけれど、と、額を指で叩く。
　身内に対してストレスをため込んでどうするのだ。
「それで？ 一体何の用でしょう？」
　そういうと、ラルクは目を細める。そしてゆっくりと口を開き、
「ああ、伝えておかなきゃいけない事があってね」
　僅かに空気が冷えていくような感覚を覚えて、エレナは無意識に唾を飲んだ。

いやな予感がした。そしてその予感は━━的中した。

「〝セフィの処刑日が決まった〟」

　その言葉が告げられた瞬間、言葉の意味が理解できず暫く思考を停止させていた。そしてその意味を飲み込むと、今度は躊躇うように、

「……処刑？」

　エレナのその動揺を、ラルクは冷笑するように、静かに

「言葉通りの意味さ？ 明日の夕方、彼女は処刑される。だから聞いたのさ」

　その言葉は軽く、しかしナイフのようにエレナに突き刺さる。

「彼女を助ける手立ては、見つけられたかい？」

　ラルクの笑みに、エレナは沈黙でしか、返す事が出来なかった。

第百三十三話 鋼の意思

　静かな夜
　白石で建設された神殿は月光の柔らかな光を反射し深い闇の中でその姿を薄らと浮き上がらせる。神殿が清貧を街の景観にも促しているこの街において、唯一の夜景の観光スポットと言える。それほどに幻想的な姿を見せていた。
　そんな神殿の内部で、闇と闇の間を駆ける〝影〟があった。〝影〟は、警備に周る神殿騎士達の油断と眠気の隙間を縫うように、闇から闇へ、その身を隠し、するりするりと駆けていく。実体がないかのようで、しかし確かにそこに存在している〝影〟は、神殿の奥へ奥へと迷いなく進んでいく。
「……」
〝影〟は、幾つかの扉を抜け、階段を登り長い通路を抜けた先、普段は神官たちも立ち入らない最奥たどり着いた。〝影〟は周囲に神殿騎士達がいないことを確認した後、一つの仰々しい扉の前に立ち、錆びたドアノブに手をかけようとして—
「……!!」
〝影〟が手をかけるその前に、扉が開いた。〝影〟は勢いよく背後へと跳び、獣が警戒するように姿勢を低くして扉の奥をにらみつけた。扉の奥の暗闇から足音が響く。影は緊張の度合いを高め、ゆるりと両の手を広げ、左右に構えた。魔力が両手に集約していく。
　そして、扉の奥から、姿を現したソレは、〝影〟に微笑み
「やあ、エレナちゃん。早かったね」
「……ラルクさん。驚かさないでください」
〝影〟、エレナはラルクを前にして、疲れたようにため息をついた

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

真夜中に寝室を抜け出して、神殿の奥までエレナがやってきた理由は単純だ。
　神殿の奥の奥、巫女も神官も普段立ち入らないこの場所には、存在自体が伏せられているような、表に出すにはあまり好ましくないモノが貯蔵されている。ちょうどセフィが押し込まれた監禁場所と同じように、後ろめたい、表ざたにできないようなものがゴロゴロと転がっている場所なのだ。
　そしてそれはつまり、セフィの処刑に関わる〝モノ〟もあるという事だ。だから来た。
「これが、審判の像」
　ラルクがその奥でエレナに見せたのが、〝ソレ〟だった。
　おおよそ二メートルほどの浅黒い金属の像。無表情の虚ろな表情をした女の姿を象った像は、胴体から縦に分かれるようになっており、中に人一人分が収納できるようなスペースが存在する。一見して、空洞内部には何も存在していないように見えるが、
「……術式が」
　よくよく見れば、赤黒い色の術式が、びっちりと内側を埋め尽くしていた。親の仇のように一切の隙間なく書き尽くされたそれは見るからに悍ましかった。
　しかし、この後ラルクから聞かされた説明は、更にエレナの気分を悪くさせた。
「審判を受ける人間……人間に限った話じゃないけど、対象はこの中に入れられる。そして神々の審判を受ける。中に入れられた者が真に邪悪なものでないのなら、無傷で解放される。しかしもしも邪悪な存在であったなら、神の裁きを受ける……」
　と、そこまで口にして、ラルクは口元を歪め、
「──という事になっている」
「実際は？」
　エレナは務めて表情を出さず、問う。
「中に入れられた人間は、邪悪であろうがそうでなかろうが、死ぬ」
　死、という言葉がラルクの口から告げられた瞬間、周囲の闇の重みが増したようにエレナには感じられた。眉を顰め目の前の表情のない女の像をにらみつけ

る。当然ながら反応は返ってくるわけがない。だが、その能面な表情は、今のエレナにはこちらを嘲笑っているようにも見えた。
「中の人間を審判するっていうのは？」
「勿論そんな機能は存在しない。これに出来るのは中に入れられた人間を殺す事だけ」
「……それのどこが審判なの？」
「死ねば全員悪人として神に裁かれた、そういう事さ」
　悪、故に死
　ではなく
　死、故に悪
【審判の像】なんて名は、悪を裁くものでもなんでもなく、人が人を殺す大義名分を与えるための邪悪な装置でしかないという事だ。神の審判なんて言う聞こえのいい言葉と共に、この像が一体何人の罪なき人間の命を奪ってきたか、ラルクは口にこそしなかったが、恐らくは一人や二人では足りないだろう。
　エレナは目の前の像を木端微塵に粉砕したいという衝動にかられたが、留まる。これはあくまでも道具でしかない。道具を壊しても別のものを用意されては意味がないのだ。
「……死ねば邪悪、それなら死ななければいいのよね？」
「理屈の上ではね」
「それなら審判の時、セフィの精霊の力を引き出せば？ 死なずにすむんじゃ」
「残念ながらこの術式の前には精霊であろうと例外では無いね。と、いうよりも、元々ここの術式は、精霊を殺すために生まれたものだ。彼らを殺すのは骨が折れるからね」
　神殿が邪神と認定した神、そしてその使いと言える精霊たちは神殿にとって、というか人類にとって危険な場合も多い。それ故に神殿はそういった精霊を排除する手段を手に入れていた。それが【審判の像】びっちりと書かれた術式だ。
「例え、あの子が精霊の力を全て引き出したとしても、生き残るのは不可能だ」
　一度発動すれば、精霊だろうが何だろうが、その存在が維持できなくなるまで命をすりつぶし続ける。むしろ精霊の方が存在自体が強いために苦しむ時間が長くなるかもしれない。

ラルクがそう説明すると、エレナは額に指をあてる。苛立ちを堪えるようにしているようだった。そんな彼女の様子を前に、ラルクはふむ、と指を顎に当て、
「さて、僕から一つ提案がある」
「……なに？」
「セフィちゃんの事は諦めない？」
ラルクは真顔で告げた言葉に、エレナは表情を顰めた。冗談じゃないとでも言いたげなエレナに、ラルクは物怖じすることなく笑みで返して、
「エレナ、僕は君が、君なりに頑張ってきたとは思うよ。子供がたった一人で〝努力し結果を出そうと掻いてきたこと〟は認めるよ。だけど、それでも限界はあるよね」
今回の件だってラルクが教えてくれなければ気づくことだってできなかったかもしれないのだ。セフィが処刑されるその時、のんきに情報を集めていた可能性もあったのだ。
「今まで君がしてきた事は、結局なに一つ結果に結びついていない。セフィちゃんの境遇を少し良くして、後はせいぜい、あの壊れた巫女の気まぐれに振り回されただけだ」
エレナにはセフィを助ける能力が根本的に足りていない。その事実をラルクは淡々と、冷酷にエレナへと突きつける。
「そもそも君が彼女に固執する理由ってなんだい？　憧れの人に近づくため？　辛く苦しい過去を背負うセフィへの同情？」
エレナがここに至った動機。彼女がここにいるその理由を並べ、そしてラルクはそれらを鼻で笑う。
「はっきり言って、弱いよね。理由としてはさ。君にとってセフィは特別でも何でもない。精々少しだけ仲が良くなった、その程度の〝他人〟だ」
セフィとエレナが出会ってからの時間は短い。彼女とまともに言葉を交わしたことなんて数えるほどしかない。エレナがもし、セフィと仲良くできているかと聞かれても、答えることはできない。仲良くできた自信なんて一つも無いからだ。
「そんな人間のために、君は自分の身を危険にさらす事は愚か、学院や、自分の家族にまで危険に晒そうとしている」

「だいたいねえ、彼女みたいに不幸な人間はこの世に数えきれないほどいる。彼女よりも更には不幸な人間は馬鹿馬鹿しいほどにいる。それなのに、目についた人間だけ助けるなんて、身勝手な自己満足以外の何物でもない」
「もういいだろう？　君の自己満足も此処までだ。大人しくしていてくれ。そうすれば君だけは此処から連れ出してあげよう。だから──」
「嫌よ」
　饒舌に続くラルクのセリフは、エレナのその一言で真っ二つに両断された。微塵の躊躇も迷いもないその宣言は、流石にラルクも予想していなかったのだろう。若干目を丸くした。
「いや……あのね、エレナ」
「絶対嫌よ」
「あの……」
「絶対嫌よ」
　二回言った。有無を言わせぬ、と言わんばかりの強烈な眼光を前に、何かを言おうとした口を開いたラルクの言葉を霧消させ、代わりにため息を吐き出させた。
「……強情だね？」
「嫌なものは嫌よ。絶対嫌。死んでも嫌」
　全力の拒否だ。馬鹿馬鹿しいほど子供っぽく、無垢で純真で、だからこそ性質の悪い我儘だ。ラルクは徹底的に頑なになった子供を前にした、というような顔で、額を掻いて
「別に僕だって、あんな幼い子供を助けること自体悪い事だなんて思わないさ」
　そう前置きし、だけど、と続け、
「人間のできることに限界はある。自分の限界を超えることをしようとすれば、必ずや痛い目を見る。不幸が訪れる。そして最後には絶望する」
　その声の色は濃く、深く、重い。幾度も経験を積み重ね続けた結果得られた強い実感の篭ったものだった。エレナはラルクの内側の一端に触れたような気がした。あるいは今のラルクのセリフは、自分の経験から基づくエレナへの警告だったのかもしれない。
　だが、彼の意図を理解してなお、エレナは変わらず、

「自分の限界なのかどうかなんてどうだっていいわ。理屈を並べられても私の目標は変わらない。私のこの我儘で周囲に被害が及んだとしたなら、その被害を含め、私が自分で償いつづる。その責任を負い続ける。その結末から逃れるつもりはないわ」
「ただの他人のために？」
　するとエレナは、心の底からわからない、と言うように首を傾げ、
「何故他人だから諦めなきゃいけないの？　逆に聞きたいんだけれど、何故自分にとって無関係の人間が苦しんでいるのを助けちゃいけないの？」
　エレナにとって、セフィを助けたいと願った動機は様々だ。打算もあった。同情でもあっただろう。しかし結果として、エレナは他人でしかない彼女を助けたいと願ったのだ。そしてそれを決めたのなら、最早迷うことはない。放たれた矢の如く、彼女は目的に向かって突き進む。
　ラルクは、彼女の強い意思に染まった瞳を見定めるように暫く見つめた。
　沈黙、そしてゆっくりと口を開くと、僅かに震えを帯びた声で
「……素晴らしいね」
「バカにしているの？」
「まさか。逆だよ。感心している」
　そう言って、エレナへと微笑む。
「周囲の人間から虐待にも似た歪んだ愛を受けながら、何の疑問もなく、躊躇いもなく、他人を助ける事を当たり前と考えられる君は偉大だよ。圧倒的だ」
「気持ち悪いわ」
「本心から言ってるんだ。エレナ。僕は君みたいな人間に出会えて少し感動している。君はその魂の使い方を誤らなければ、偉人になるだろう。断言したっていい」
　どこか陶酔するように、熱っぽくラルクはエレナを褒め称える。唐突にそんな風に褒め称えられても正直居心地が悪かったが、ラルクはエレナのことを気にすることはしない。
「だけど、エレナ。今は引くべきだ。このままだと本当に君は危険だ。神殿はセフィの次は君を狙う」
「でもそうしたらあの子は……」

「君の魂に敬意を表そう。君を此処から連れ去る時、セフィも助け出してあげよう。ミストはブチ切れるだろうけど」

「……貴方はミストの部下じゃなったの？」

「いや。僕と彼の関係はそういうのじゃないね。元々喧嘩別れしてたし」

　喧嘩別れ、なんて言葉はラルクもミストも似合わないように思える。

二人とも飄々としているイメージしかないからだだ。一体彼らの間になにがあったのか、気にはなるが、今は置いておこう。

　ラルクの提案、もしそれを実行すればセフィの命だけはたすかるかもしれない。だがそれでは、

「無理やり彼女をここから逃しても、あの子は邪神の使いと認定される。それではこの世界から彼女の居場所はなくなってしまうわ」

　この大陸を、世界に影響力を及ぼす神殿に敵と認定されればどうなってしまうか、想像に難くない。セフィの居場所はどこにもなくなってしまう。それでは彼女を救ったことにはならない。

「でも、それならどうする？　彼女を救い、なおかつ神殿にも彼女を認めさせるなんて、都合の良い方法があるかい？」

「……□□」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　セフィは夜が嫌いだった。

　彼女は闇に恐怖を感じる。それは巫女として連れていかれたあのおぞましき実験場の薄暗い牢獄の中で、身も心も大きく傷つけられてきたからだ。その記憶は彼女にはまだ真新しく、そして生々しかった。

　友人の血反吐を吐くような断末魔、自分に吐きかけられた呪いの言葉、この幼い体に術式を植え込むため覚醒したまま体を切り刻まれた恐怖と痛み、世界に溢れる【呪い】に飲まれ精霊になった自分。そんな、思い返すだけでも苦痛な何もかもが、闇の中にいると彼女の内側から湧き上がってくるのだ。

　この地下牢には元より光がささず、夜になると更に暗くなる。人もほとんど立

ち入らない為に照明も少なく、極めて薄暗い。エレナが騎士に用意させたランプがあるが、その弱い灯りは彼女の心を癒すにはあまりにも心もとなかった。
　しかしセフィはそれを表に出す術を今は失っている。心が表に出ない。感情が表情に伝わらない。助けを呼ぶ意思が欠落している。徹底的に傷つけられた彼女の心が、誰かに助けを求める前に、諦め、放棄してしまう。
　だから、彼女はランプを抱きかかえるような姿勢で横になり、目をつむり続けた。瞼の裏から感じるのだ。ランプの明かりだけを頼りにして、セフィは闇の恐怖から耐え続けていた。
　誰か助けて
　彼女はそう口にすることもできずに、独りきりで闇に怯えていた。そんな時だ。
「セフィ」
　声。最早セフィにとっても馴染みの声だ。ゆっくりと身を起こすと、そこにはエレナが鉄格子越しにいた。今は深夜だ。なぜエレナが此処にいるのか、そういう疑問はあったが、それでもそこにエレナがいることは、セフィにとってありがたかった。
エレナはセフィに微笑むと、
「大丈夫？ 平気？」
　セフィは頷く。本当は大丈夫じゃないだけれど彼女に気を使わせたくはなかった。そう思えるくらいには、彼女の心は回復していた。暗いのが恐ろしいなんて、彼女に言っても彼女は困ってしまうから。
　エレナはそんなセフィの感情を理解しきれないのか、何処か複雑そうな顔で、そう、とうなづく。
　そして会話が途切れた。あまりセフィとエレナは会話を続けられた事がない。セフィは感情の伝達ができなくて、エレナはあまりにセフィを気遣いすぎるからだ。その辺りの要領はキースや友人たちの方がよっぽど上手かった。エレナはいまだ、コミュニケーション経験が不足しているのだ。
　そして、いつもこうして会話が途絶えると、エレナはその沈黙を打ち破ろうと突拍子もないことをする。彼女なりのセフィと近づこうとする努力の結果なのだろう。大体は空回りしている。

そして今日も案の定、エレナは「そうだ」と口にした
「キースが教えてくれた魔術が一つあったの」
そう言ってエレナは短く詠唱を唱え、掌を広げる。するとその手のひらから小さな光を放つ球体が現れる。それは一つではなく幾つも現れ、ゆっくりと宙へと浮いていく。一定の高さまで上がると留まり、光の球体はクルクルと、色鮮やかな光を放ち、回り始めた。
セフィを苦しめていた重苦しい牢獄の闇が、一瞬で幻想的な輝きに切り裂かれた。これはエレナがキースに教わった照明の魔術だ。微量なマナの動きで次々に光の色を変える楽しい魔術。彼は子供達も大喜びする、と言っていたが、確かにこれほど派手な魔術は喜ばれることだろう━ただ、
「……明るすぎるかしら」
光球があまりにも煌びやか過ぎた。綺麗は綺麗だが、やたら巡るましく光が放たれ牢獄をチカチカと照らし続ける。派手だ。派手すぎる。
「……というかケバケバしい？ 目がチカチカするんだけど」
「……」
「あ、あら？ しかも解除できない？ 術式構成は解除したのに？」
「……」
「あ、しかもなんか光が更に強くなってく？ うねってる。パチパチしてる」
「……」
「……セフィはここで眠れる？」
セフィは黙って首を横にふった。目をつむっても光がまぶたを貫いて眼球を刺激してくるレベルだ。眠れるわけがなかった。
「……うん。ゴメンナサイ」
赤青黄色とめぐるましい光輝く地下の牢獄の前で、エレナは項垂れ、謝罪したここまでの流れも、何時も通りだったりするので、セフィも慣れた様子で頷いた。
「……」
セフィは、けばけばしい光を放つ光球を見ても、頭を抱えて落ち込むエレナを見ても、やはりうまく感情を表現は出来ない。ただ、あの恐ろしい闇を引き裂いた彼女を見て、そして今、子供の様に落ち込む彼女を見て、少しだけ、昔、何事

もなかった平和な村で、友達遊んで笑って楽しんでいたころのことを、思い出していた。
　あるいはそれこそが、エレナがセフィと接してきた中で最も大きな成果と言えるのだが、エレナはそれに気づくことは無い。眩しすぎる牢獄の中で、魔術が収まるまでの間、エレナとセフィは二人でたどたどしい言葉を交わし続けた。夜が僅かに白む時まで、そして運命の日はやって来た。

第百三十四話 運命の日の朝

　その朝、ローレンは何時ものように自身の職務に勤しんでいた。
　近々各地で行われる神殿の行事の調整、各地の〝神の家〟から送られてくる必要経費の資料、更に今後行われる巫女達の各国への派遣状況に関しての調整、神官長の中でも代表を務める彼の所には様々な申請書類が送られてくる。その確認が彼の仕事だ。
　老いた教皇には自信が目を通したもののみを送るようにしている。教皇を影から操っているだのと言われる事もあるが、老い衰えた教皇に対するサポートとして必要な事だと彼は理解している。彼自身の内には教皇に対する畏敬の念が確かに存在しているのだ。
　彼は神官長として極めて優秀だ。能力面においても、人格面においても。
　だからこそ、彼はセフィ、あの呪わしき人造精霊の処刑に関しても、迷うことはなかった。呪いの精霊、神々の威厳を貶める悍ましい存在を許す気は毛頭ない。
　なんとしてもかの邪悪な存在は滅ぼさなければならない
　と、彼はそう確信している。だからこそ、【審判の像】の使用にも躊躇いは無かった。あの像の機能について、彼は知っている。審判などという言葉が嘘偽りでしかないという事ももちろん知っている。だが、だからといって使用を躊躇うつもりは無い。悪を滅ぼすための必要悪、審判の像を彼はそう捉えていた。
　無辜の民を守るため、邪悪なる神の使いを滅するための悪。
　神殿の教義に逆らう存在はすべからく悪だ。そう教えられてきたし、彼自身そうおもっている。若いころ、神官の見習いの頃から精霊━彼らの言葉では邪霊というが、それらがもたらす被害を目の当たりにしてきた。
　永劫消えぬ黒き焔に焼き尽くされた村落
　病毒によって大地も水も空気も身体までも腐り果て苦しむ人々

一切の光が阻まれ、草木が一つ残らず枯れ果てた草原。

それらの光景は今でも覚えている。だからこそ、かの存在達は滅する必要があると確信している。今回も躊躇いは覚えない。必要なことなのだと、あの精霊は存在してはならないものなのだと確信している。少女を殺すことに良心の呵責を覚えないわけではない。だがそれでもやらなければならないのだ。

これは、いずれ自分の妻となるクレアを守ることに繋がる事だ。

クレア、生きとし生けるもの全てに恵みを与える大地の巫女。何もかも包み込むその圧倒的な癒しの力は神殿のみならず、世界の財産だ。だからこそ彼女を〝守る〟使命を帯び、彼女の夫になることをローレンはこの上なく誇らしく思っていた。

彼女は守らなければならない。世界のために。だからこそ、あのまがいものの精霊も、そしてクレアに馴れ馴れしく接していたあの邪神の巫女も、排除しなければならない。

彼は決意を新たにし、書類の片付けを再開しつつ、本日の審判の時に備えていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

その朝、クレアは何時ものように絶望的な気分と共に目を覚ました。

体が気だるい。意識が重い。瞳に映る全てが色褪せて見えて、何もかもに喜びを見出せない。眠った時、目を覚まさず死んでいたら、楽になっていただろうか。何時もそう思う。そしてそれは昔から変わらない。

彼女は生まれながらにして巫女の宿命を背負わされ生きてきた。

狭い狭い神殿の中の、狭い狭い巫女の社会の中で、彼女はとても生きづらい想いをしていた。自分たちにとって巫女の力が全てであり、神とのつながりが全てだと、そう言われ続けていた。

その中で彼女は巫女として讃えられ、巫女として嫉妬され、憎まれる。生まれながらその力故に神殿の事情に振り回されつづけてきた。彼女にとって神殿は、そして自分の力は、決して誇らしいものではなく、生まれながらに押し付けられた呪いでしかなかった。

生きるのが辛かった。

周りの巫女たちがおぞましかった。

自分の神との繋がりが呪わしかった。

だがその怒りは誰にも届かない。生まれながらに異質な彼女は、それ故に誰もが距離をおき、話を聞いてくれるような友は一人もいなかった。彼女とつながりのある大地の神は優しかったが、しかしやはり人とは違う。彼女の嘆きは理解されない。

そんな中、彼女の婚約者ともなるローレンとのふれあいは彼女に喜びを与えた。

いつも紳士的で、自分の事を大事にしてくれる年の離れた彼は、彼女にとっては唯一の光だった。彼と話すのは楽しかった。彼と触れ合うのが愛おしかった。彼と婚儀を交わすのが待ち遠しかった。

だがその幻想は砕かれる。

気づかされたのだ。彼は自分ではなく、自分の力しか見ていないと。

神殿の教えを誰よりも信じ、誰よりも神官としてあらんとする彼は、どこまでも自分を自分とは見ていない。彼は巫女という存在を、神の力のみ守ろうとして、大切にしている。

「ねえ、もしも私が巫女の力を失ったらどうする？」

「そんなことはありえません。貴方は類稀な力の持ち主なのですから」

問いに対して、ローレンはまるで理解できない、そういうように的外れな答えを返してきた。巫女でなくても構わないと、そう言ってくれる事を期待したいクレアの思いを踏みにじって。そして理解した。彼は、もし自分が巫女でなくなったら、きっと見向きもしないだろうと。

彼が大切なのは自分ではなく巫女の力で、それなら自分は一体なんだというのだろうか。

救いない現実を知った彼女は、静かに壊れた。

粉々まで砕けた彼女は、それからは何も考えないように生きるようになった。誰からも理解されない自分の想いを閉じて、ただ流されるように、絶望的な世界に埋れて行った。これから先、自分がどうなろうと、どうでもよくなっていった。

エレナがやってきた時も同じだ。面白いことになりそうだ、くらいにしか思わなかった。彼女を手伝うのも、すべては戯れ。うまく行けばいい。だけどうまくいかなくてもどうでもいい。なんでもいいし、どうでもいい。
　ただこの絶望的な世界が壊れれば、少しはこの気分も晴れるだろう。
「今日はどうなるのかしら」
　クレアは、幼き少女が殺されるかどうかというその時を、楽しみだというように虚ろに笑みを浮かべ、ベットに顔を伏せた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　その日の朝、エレナは祈りの間で祈りを捧げていた。
　目をつむり両の手を合わせ、呼吸を忘れているかと錯覚するほどに強く集中し続ける。今は祈りの時ではないために、他の巫女は一人もいない。随分と広く感じる祈りの間で、一心に祈りをささげ続けていた。
　彼女を見守るのは生誕の神リヴの像、そしてその像の隣で彼女を見守る者が一人。水の巫女ジゼルだ。彼女はなにか口にするでなくただじっとエレナを見つめていた。
「□□……」
　祈り始めてからどれだけの時間が過ぎただろう。すっと、エレナが立ち上がった。目を開くと軽く体を伸ばし、呼吸を整え、前を向く。ステンドグラスからの朝日の光を浴び金の髪を輝かせ、壮麗に佇む彼女の姿は絵になった。
　エレナは暫しそうしたあと、ジゼルへと近寄り頭を下げた。
「お付き合いくださりありがとうございました」
「いいえ」
　ジゼルはゆっくりと笑顔をエレナに向けた。エレナは笑みを返し、もう一度頭を下げると振り返り、去ろうとした。
「貴方が何をしようとしているのか」
　そこへ、ジゼルの声が後ろからとんできた。エレナは振り返ると、ジゼルは変わらず笑みを返し浮かべて、

「私にはわからないし、関わろうにも、もう年をとってしまいました。けれど……」
「……」
「気をつけてね。貴方みたいな子供は、幸せにならなければダメだから」
　それがジゼルとエレナとの始めての会話と言ってよかった。ジゼルがどういう人物なのか、エレナはこの時始めて触れ、理解した。優しい人なのだと。
　もっと話をしてみたかった。だが既に時間はない。
「はい、ありがとうございます……今度ゆっくりお話ししましょう」
　そう言って微笑んで、祈りの間を後にした。
　まっすぐな気遣いが嬉しかった。久しく触れていなかった善意が心を満たした。叶うなら約束を守りたいと思った。だが、今は、ただ独りの少女の為に。
「さあ、開幕ね」
　エレナは浮かんでいた笑みを消し去り、鋭い瞳で向ける。セフィを守り通せるかどうかの戦いが始まるのだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　神殿の奥に一つの部屋がある。
　円の形をした奇妙な部屋。窓はなく明かりは魔道機械の明かりのみ。周囲の壁の白さが痛い。中央は高くなり、階段で上へと登るようになっている。階段の先、部屋の中心は見せ物の舞台のような場所がある。外周はそれを見学するための足場で囲われていた。
　審判の間、と呼ばれるこの場所
　今日の夕刻 、ここでセフィが処刑される。

解決編開始。
始める前から散々結末に頭を悩ませていた解決編です。
多分三話くらいいっぺんにまとめて投下するかもしれません。しないかもしれません。
頑張ります。

第百三十五話 審判の日 前編

　ガイディア国、対崩壊物防衛戦線
　ただ穏やかな風にゆられる平原が一面に広がっていたこの場所が、今は見る影も無い。
　今ここにあるのはひたすらに、血の海だ。
　一面に広がる血肉、腐臭、蠢く肉塊。死骸を喰らう獣すら寄り付かない、赤黒い地獄の果て。人の想像するそれを、更に邪悪に塗りたくったような、吐き気すらも引っ込むような光景。
　それを生み出したのが、たった二人の人間であるなどと、一体誰が信じるだろうか。
　シールとリーン。地獄を生み出した二人は、その中心で並び立っていた。
【崩壊物】との戦闘が始まってから数時間。殺しても殺しても再生する化け物を、蘇らなくなるまで殺し続け、とうとう二人は化け物たちを滅ぼした。
　二人は、たった二人きりで、とうとう国を滅ぼしかねない災厄を払ったのだ。
二人からすれば、既に何度目になるかもわからないようなことではあったが。
「……あー、疲れた」
「……」
　とはいえ、流石に二人の表情にも疲労が見えていた。リーンは表情には出さないものの、やはりその顔に疲労の色が残り、シールに至っては一振りで万物を灰燼に帰してしまう【剣】を杖のようにしてうなだれていた。
　しかし既に彼らを脅かす【崩壊物】は存在しない。既にやるべきとは終わった━筈だった。
「……おかしいですね」
「なにが、ですか？」
　最初に、その異常に気が付いたのはリーンだった。

シールはうなだれたままそれを問うと、リーンは周囲を見渡すようにして、
「崩壊物から溢れたマナが拡散していません」
「……それは」
　言われ、シールも周囲を知覚して見る。散々【崩壊物】を駆逐し続けた結果、彼らを構成していたマナは砕け、周囲に散った。それは理解できる。だが、それらのマナは本来ならその場にとどまらず、周囲の環境に影響され、水や、風や、大地に溶け込んで、霧散するはずだ。
　だが、今この場においてはそれが起こっていない。マナはマナのまま、この場にとどまり続けている。それは膨大な量だ。山のようになっていた【崩壊物】を殺しつくしたのだから当然だろう。
「……何かの干渉が？」
「ここでマナが留まるように、何かが仕掛けられていると？」
　自然と異なる現象が続くなら、人為的な介入がある可能性は高い。まして、この【崩壊物】の暴走が、あの邪悪な組織の者の手によって引き起こされたのなら尚更だ。
　問題は、それが何のためなのか。
「何にしろ、いい予感はしません」
「そうですね……これも、気になりますし」
　シールが杖代わりにしていた【白の剣】を掲げて見る。見ると、時折その構成を崩しかけているのか揺らぎながらも、しかし未だその形は健在だ。が、　〝それがおかしい〟
　この【剣】は本来なら、ここまで長く維持できるものではないのだ。持って数分。それ以上は〝干渉〟が強くなりすぎるため、形を維持できずに崩壊する。だが、今はどうだ。危うさを残しながらも未だ形を保っている。既に数時間は経過しているというのに。
「リーン先生、〝干渉〟はどうです？」
「続いていますよ。ですが、弱いです」
「弱い？」
「無理に介入しようとする意思を感じません。監視しているような感じです」
　監視、その言葉にシールはますます嫌な予感を感じた。〝彼ら〟がわざわざそ

んな遠回しなやり方をする理由、そしてこの場で異常に蓄積されたマナ。結びつく線は今のところない……が、
「……この地のマナを、全部一時的に封印してしまいましょうか」
　シールは告げた。
　なにが起こるかなんてわからない。根拠もない。だが、頭の中で警報が鳴り止まない。そしてこの手の予想は大抵的中する。幾度となくこの手のトラブルに立ち向かってきた経験から導き出される、非常に精度の高い〝第六感〟だ。
　故に、何かが起きるなら、その何かが起こらないように、根本を抑える。
「【封界】」
　シールの決断からの行動は早かった。剣を持たぬもう片方の手のひらを、血みどろの大地に付けて、詠唱する。真っ赤な術式が一瞬で血の海に広がり、そして周囲のマナを捉えんと脈動を開始した。
　だが、封印術式がマナをとらえようとした、その直前に、魔術の閃光がシールへと奔った
「ッ!?」
「【□□】」
　即座にシールはその場から跳ねのいた。大規模な封印術式は解除される。即座にリーンが速読で術式を詠唱し、閃光の方へと魔術を走らせる。魔術の弾ける音と共に、血の海に結界で姿を隠していた誰かを浮き彫りにした。
「……流石、というべきか」
　姿を現したのはフード姿で顔を隠した、男とも女ともわからぬ人物。
「【崩壊物】を誘導した奴か」
　相手を推察すると同時にシールは【封印剣】を構え、巨大化させ、振りぬいた。物理の抵抗のない目にもとまらぬ速度で振りぬかれた一刀だったが、フードの人物はそれを避け、そして二人の前に対峙した。
「……【ラグナ】の指導者か？」
　ダルシアの話を聞く限り、【ラグナ】の指導者と思しき男はいまだ逃亡している。本拠地にいた部下たちも見捨て、ヴェインから【魔眼】を奪い逃走している。
　フードの者は、ゆらりと体を揺らし、そしてわずかに見える口元を笑みに変

え、此方へと飛び出してきた。
「来ますよ」
「【潰します】」
　シールは封印剣を構え、リーンは詠唱を開始する。
　血の海にて、三者の激突が始まった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　その時を同じくして、神殿の奥の奥、審判の間
　普段は決して誰一人立ち寄らないこの場所に、今は多くの人の気配があった。しかし気配はあるものの、場を支配するのは静寂。ひそやかに言葉を交わすざわめきすらなく、気味が悪いほどに静かだ。円型の室内、その壁にそうように神官たちが並んでいる。だが、彼ら、あるいは彼女らは模様のない真っ白な布で顔を隠し、音も無く声も無く、沈黙のまま並んでいた。
　普段とは全く違う異様な様相をした神官達は、布越しに彼らのいる見物台から晒されるように高くなっている部屋の中心へと視線を向け続ける。視線の先にあるのは古びた女を模した像──【審判の像】が、不気味に鎮座している。
　ひたすら沈黙を続ける女型の像を、神官達は見つめ続ける。まるで何かを待ち続けるように。

　そして、そんな彼らをどこか冷笑するようにして、奇怪な人の群から少し離れた場所で、若く端麗な姿をした女が一人、他の者たちのように顔を隠すことなく佇んでいた。淡い黄土色の髪、上位の巫女を示す正装を纏った彼女。大地の巫女、クレアだ。
　彼女は視線を上段に目を向ける。其処には彼女がいる場所と同じような場所がある。だがそこには、神官のたちはおらず、代わりに仰々しい椅子が一つ、老人が座っている。
　あの男こそこの神殿の最高責任者、教皇だ。かつては剛腕であり、神の教えに忠実で、多くの人々を救う活動を続けてきたという話だが、年には勝てないの

か、既にその面影は無い。今ああして椅子に座るのもけだるそうだ。豪奢な衣装を無理に着せさせられ、事が始まる前から疲れ果てている。
　今や【神殿】にいいように使われている哀れな老人。
　クレアにとって彼はその程度の認識だ。神官や巫女、それに彼を操るローレン自身だって、そんな風に考えるだけでもとんでもなく罰当たりな事だと言いそうだが、事実は事実だ。
　そんな事よりも、彼女の興味は別のところにある。
　向かい側、神官達の狭間の奥でちらつく金髪。下位を示す巫女服を身にまとった少女の姿。エレナ。彼女もまた、この場に姿を見せている。そもそも本来なら巫女は審判の間には立ち入れない。しかしエレナに頼みで、クレアは自分とエレナを無理やりここに押し入らせてもらったのだ。ローレンはあまりいい顔をしなかったが、彼が自分の頼みを断れないことはしっていたため、気にしなかった。結果としてここには巫女が二人いる。
　クレアがエレナに協力したのは単純だ。ここに来れば、そしてエレナを連れてくれば面白いものが見れると思ったからだ。
　クレアがそっと、エレナへと手を振ってみるが、エレナは反応しない。
　つまらないな、とは思うが、まあ仕方がないだろうとも思う。何しろ彼女が大事にしている少女が死ぬかどうかという瀬戸際なのだ。必死にもなるだろうし、こちらに構う余裕もないだろう。
　クレアはエレナがどういう対策を用意しているのか聞いていない。聞かなかった方が面白いと思ったからだ。勿論クレアはエレナがなにをたくらんでいようと成功するだなんて全く思ってはいないのだが。
「……あら？」
　と、そんなことを思っていると、入口の方から重々しい、軋む音が響く。審判の間の門がゆっくりと開いたのだ。入り口からまず現れたのはクレアの婚約者であり、神官長を務める男、ローレンだ。
　その次に現れたのは、重々しい鎧を纏った神殿騎士。外敵などいないのに重々しい大剣を腰に備え、周囲を威嚇するような兜をしている。そんないかめしい姿をした彼らは、しかし戦いに出ることは無く、代わりに、まるで恐れるように、小柄な一人の人間を連れてきた。

その小柄な人間━少女は、分厚い鎧騎士達の影に埋れ、一瞬見落としてしまいそうなくらいに小さかった。全身に奇妙な術式の描かれた術式苻を纏い、素肌は愚か顔すら晒されず、術式の下からわずかに見える体の膨らみでかろうじて性別がわかるくらいだ。
危うく転びそうになるところを繋がれた紐で無理やり引き起こされる様子は傍目にも痛々しい。だが彼女は神殿にとっては悪魔よりもおぞましい、邪神の使いなのだ。顔を隠す神官達からは、怯えるような、恐れるような気配が漏れ、声を出さず身震いした。
彼女こそが、今回の審判における、主役、【邪霊セフィ】だ。
セフィ、何も知らず、何もわからないままに連行され、勝手に恐れ戦かれている彼女は、戸惑うようにして部屋の中央、審判の像へと続く階段の前に連れてこられた。そこで騎士たちは一人を除いて全員が下がり、代わりにローレンが進み出る。
「神々の御加護を、生誕神リヴの御加護を」
短くローレンが告げ、そして周囲の神官達に向け両手を仰ぎ声を上げる。
「神々の名の元に真実を問う。この幼き少女が罪なき者か、少女の皮を被ったおぞましき邪霊の使いか。それを神の審判によって見極めよう」
そう言うと、残された騎士の一人が進み出て、セフィを連れて階段を登って行く。何度か転び、痛ましく声をあげることもあったが神殿騎士は助け起こす事はしない。ふらふらと前も見えない少女は何度も階段につまづきながらも自分の足で、審判の像へと登って行く。
上段からそんな様子を眺めていたクレアは、ふとエレナを見てみると、彼女は腕を組んで、冷静な素振りでその様子を見つめていた。だがその両手は腕を掴んで、指先が食い込んでいる。彼女の内面が浮き出ていた。ああしてセフィが昇っていく姿をどんな気持ちで見つめているのか、目に見えてわかった。
だがしかし、彼女は何もしない。エレナはその場から動こうとはしなかった。
今動かなければどうにもならないわよ？
とクレアは思うが、エレナはそれでも動かない。そして、とうとうセフィは像の前へとたどりついた。審判の像は少女を迎えるように、あるいは捕らえるように、ゆっくりと体を開き赤黒い術式がびっちりと描かれた内部を晒している。

術式に反応し、大気のマナの唸り声が響く。そのおぞましさはとても言葉で言い表せるようなものではなかったが、その事を指摘する者は一人もこの場にはいない。
「さあ、中へ」
　無慈悲なローレンの言葉に従い、神殿騎士が少女を像へと押し込むようにして、中へと入れた。エレナはそれに対しても動こうとはしない。ただじっと見る。
「□□□」
　セフィが、一瞬聞き取れないくらいにか細い声で何かを言った気がした。だが直後、無情にもけたたましい金属音が響き、審判の像は少女を閉じ込めるようにしてその身を閉じた。
　審判の像が起動する。
　今までの沈黙を掻き潰すケダモノの悲鳴のような音が部屋の中を埋め尽くした。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　どれだけの時間がたっただろう。耳にしたものを震えあがらせるような音にも慣れ始めた頃。
　特に前触れも無く、ゆっくりと、像の身体が開けて行く。そのうちに取り込まれた少女の身体が再び露わになる。その様子は押し込まれた時と変わっているようには見えない。
　だが、
「……」
　そのまま、ぱたん、と、軽い音と共に、少女の身体が地面に倒れた。
　神官達の間で声のない悲鳴が響く。ローレンが視線で指示を送り、騎士が倒れ

た少女の身体に触れ、そして

「死んでいます」

　感情を交えない、冷酷な言葉が、ホールに木霊した。

第百三十六話 審判の日 中編

「セフィッ!!」
　女の声が響く。事を最後まで見守っていたエレナが、悲鳴をあげるようにして、ホールの中へと乗り込んだのだ。少女の死が告げられた直後のエレナの行動に混乱が走るが、ローレンは一人慌てることなく、
「止めろ!!」
　と、鋭く騎士たちへと指示を告げた。
　騎士たちがエレナへととびかかる、が、エレナの動きは見た目華奢な少女からは想像もつかぬほどに素早く、騎士たちをするりと抜けていく。相手は巫女ゆえに武器も使えずとまどっている騎士達を一気に飛び越えて、エレナはセフィの下へとたどり着いた。
　そして、セフィの生死を確認した騎士が、エレナを静止しようとする間もなく
「ああ、セフィ！ そんな！」
　エレナはセフィへと縋り付いて、顔を伏せ嘆き、声を震わせた。絶望に満ちた声。まさしくこの結末にふさわしい、嘆きだった。彼女を止めようとした騎士達もその手を止め、神官達もその様子を見て、顔を隠す布の下でわずかに表情をゆがめている。
「……騎士達よ。早く彼女を引き離せ」
　ローレンはその様子に、僅かに言葉を躊躇うようにしてから、改めて指示をだした。
「神々は少女を邪霊と認め、裁きを下した。死した者は全て平等だ。しかし邪霊は死した後も毒を撒く可能性がある。しかるべき処置をせねばならぬ」
　淡々とした声に、騎士達は慌てて応じる。セフィの遺体に縋りつくエレナを引きはがし、嘆き悲しむ彼女を引きずるようにしてその場から離した。
「そんな！ 待って！」

そしてセフィの遺体を、浄化の意が込められた術式布に包まれた手で、騎士たちが運び出していく。エレナは彼らを止めようとするが、それは彼女を引きはがした騎士達によって取り押さえられた。
「静かにしろ！」
「うぐっ！」
　騎士の怒鳴り声、少女の悲鳴、そして鎧のこすれる音。持ち出される少女の遺体。こうして邪霊セフィへの審判は終わりを告げた──筈だった。
「【──破壊】」
　誰にも聞き取れないくらいに小さかったが、エレナのその言葉は確かに紡がれてた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：

　審判の日の前日。
　ラルクとエレナの密会まで時は戻る。
「確認していいかしら？」
「なんだい？」
　闇夜の中、唯一の証明である窓から差し込む月光にラルクの笑みが照らされる。憎たらしい、なんてことをエレナは思いながらも、投げかけるべき問を口にした。
「この審判の像の術式は、相手が死ぬまで止まらないの？」
　ＹＥＳ、とラルクはエレナの質問に首を傾げながらも頷く。
「対精霊用に生み出された滅殺術式。生物としての波動を検知し、それが消えるまで永遠に純粋な破壊の魔術を叩き込み続ける邪術だね」
　ひたすら相手を殺しつくすためだけに存在する邪悪な術式。神殿の秘術であり禁術だ。瞬間的な殺傷性が無い為戦場などでは使えない。つまり〝身動きの取れない相手への使用〟がこの術式の正しい用法なのだから、邪術という表現はかなり的を得ている。

「術式が発動すれば対象は死ぬ。これは確定だよ」
「なら」
エレナは冷たい視線を、女の顔を象った像の顔に注ぎながら、言葉を続け、

「中の人間が〝最初から死んでいた場合〟術式はどうなるのかしら？」

虫の鳴き声すら響かぬ静寂な夜の中で、エレナのそのセリフは闇の中で深々と響いた。ラルクは唇を歪め、吊り上げた。彼女の問いの意味、そしてエレナ、静かな、覚悟の据わった瞳を見て、面白そうに笑った。
「確かに、中の人間が死んでいれば発動はしないだろうね。炎の魔術のように対象の破壊を目的としたようなものとは違う、〝命を奪うためだけ〟の術式だからね。死体から、既に存在しない命を奪うなんてことはできない」
だけど、とラルクは肩を竦め、
「この術式から逃れる為に死ぬ、なんて本末転倒じゃない？」
「本当に死んでいる必要はないわ。ようは、この術式が騙せればいい」
生命を感知し破壊するというなら、そのセンサーをつぶすことで術式そのものを無効化する。セフィの審判を止められないなら、合法的に彼女を生還させせる手段をエレナは考えていた。
「でもどうやって、死んだと思わせるんだい？」
「セフィを仮死状態にする。術式が感知できないレベルで」
「だから、どうやって？ そんな都合のよい魔術なんて──」
「魔術では無理でも、〝神の奇跡〟なら可能かもしれないでしょ？」
「神の、」
聞き返そうとして、ラルクはふと、目の前の少女を見た。
エレナは死の神、メナスの寵愛を受けた娘だ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

翌日、早朝
エレナは祈りの間でエレナは意識を集中した。理由はもちろん、メナスともう

一度言葉を交わすためだ。その為に水の巫女に見張ってもらうよう頼みもした。彼女が味方になってくれるかどうかはわからなかったし、正直かなり危なっかしい賭けだったが、彼女は快く了承してくれた。
　そして瞑想を初めて早々に神の元へと辿りついて居た。真っ白で、果てのない精神空間。何処までも落ちて行きそうな異様な空間。
『ビックリするくらいさっくり着いたわね』
『【ラインはスデに繋がっているからな』】
『……今日は流暢ね？』
『【慣れた』】
　そしてエレナの前にはメナスがいた。以前よりは明瞭な口調で、しかし相変わらず眠たげで、存在自体が捉えづらい、しかし射抜かれるような存在感をもった存在。死の神だ。
「今日は大丈夫なの？」
　先日は対話の途中で他の神、おそらくは生誕の神リヴに邪魔されたが。問うと、メナスは思い出すようにああ、と相槌を打って。
『【リヴはヒトを信用していない。かつてじぶんの巫女がウバわれたから』】
　奪われた、その言葉にエレナ疑問する巫女を奪うとはどういう事か。今の時代神殿は巫女を独占し、保護している。そして神殿の神の力を受け取るすべての国にとっても巫女は貴重だ。それを奪うなんてことはできるのだろうか？
『【ムカシの話だ。それで――』】
　メナスはエレナへと、その金色の瞳を向ける。
『【ナンのようだ？』】
「単刀直入に聞くけれど、貴方の加護の力で、人間を仮死状態にできるかしら？」
『【可のうだ』】
　メナスはあっさりと言葉を返した。問うたエレナが呆気を取られるくらいに。
『【私は〝死〟をつかさどる。死とは眠りだ。そのレベルを調整するなど造作もない』】
　それなら！　とエレナは詰め寄ろうとした、が、メナスは
『【ただしー』】

そう、続けて口にした。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　正午頃、中庭で、セフィを見張る勤務についていた〝あの騎士〟は、神殿の少し外れある、閑散とした鍛錬所で淡々と剣を振り、鍛錬をいそしんでいた。
　彼が見張っていたセフィは審判の準備の為、既に連れていかれた。彼は牢屋を見張る汚れ仕事を解かれ、普段の警備の仕事に戻った。今は休憩中だが、自ら訓練所に足を運ぶ。
　神殿騎士の中で彼のように鍛錬を行う同僚は、実のところほとんどいない。
　神殿騎士の仕事は〝緩い〟。
　神々の加護のあるこの地を襲う者はそうはいない。各国にとって神の加護の力は圧倒的だ。どこかが神の加護の力を独占しようとすればその他の全てを叩き潰す。巫女の存在自体が強力な抑止力と化しているのだ。
　だから、騎士たちの仕事はゆるい。神殿下の街も至って平和だ。もう何日も剣を握っていないという輩も何人もいる。彼らが練習するのは神殿騎士としての格式であって、戦闘鍛錬は無意味なものなのだ。
　しかし、彼は自己鍛錬をサボりはしない。
　彼は神殿騎士としての自分は極めてどうでもいいと思っている。彼が元は傭兵で、神殿騎士になったのは、腕っぷしが認められたからだ。彼は自分には後ろ盾がないと知っている。神殿は自分をいつでも切り捨てられる駒としか考えていない。そして彼は自分の才能が腕っぷしくらいのものであると知っている。
　　だからこそ、彼は自分の武器を研ぐことだけは怠らない。仕事は適当だ。誇りも何もない。いつ切り捨てられるかわかったものじゃないからだ。だが、自分の武器をさび付かせることだけはしないと、そう決めてい
　だから彼は今日も、自分の持つ唯一の武器を研ぐために訓練を開始した──その直後
「見つけた」
「ぬっ?!」
　背中から蹴り突かれ、素っ転んだ。

振り返ると絶世の美少女がいる。エレナ。今自分をいいように利用している巫女だ。なんらためらいなく大金を自分のような男に注いでくれる非常にありがたい女だが、とはいえさすがにこの仕打ちはどうだろうか。
文句の一つでも言ってやろうか、と、騎士が立ち上がろうとする前に、エレナは懐から煌めく何かを取り出した。金のコイン。この国が誕生してから百年を記念して作られた記念コインだ。精緻に描かれた当時の国王の顔。しかるべきところに売れば相応の値段で売れるだろう。
それをおしつけられた騎士は、口を閉じ、金貨に視線を奪われる。
「エレナを審判の間に連れていくのは貴方？」
「いいえ、私ではなく」
「ならどんな手を使ってもいいから交代してもらいなさい」
どんな手と言われても、騎士が言おうとする前にエレナは更に輝く金貨を押し付けた。
「それを使っていいから買収しなさい。余ったら貴方の物よ」
「……」
「成功すれば更に宝石を出すわよ」
「了解しました。お嬢様」
騎士はエレナへと恭しく頭を下げた。
断る理由は無い。相手がこちらを金さえあればどうとでもなる、と思っているであろうことはわかっているが、それに腹を立たせるほどのプライドをこちらは持ち合わせていない。年端もいかぬ少女に良いようにつかわれる？　理不尽な暴力を振るわれる？ 結構じゃないか！
「そして成功したら、これをあの子に持たせて。皆に分からないように」
エレナが差し出したのは小さな水晶のついたネックレスだ。金目のものに対しての知識は相応に持ち合わせている騎士だが、この水晶についてはそれがどういうものなのか、自分の知識に掠りもしなかった。
と、いう事は
「これは……魔道具ですか？」
「もとはセフィに与えられた物よ。彼女の力が暴走したとき封印する力が込められて〝いた〟」

今は違うけれど。そういうエレナの表情は何処か、険しく厳しいものだった。
その険しさの理由が、〝自分がセフィを殺しかねない〟という現実と向き合っているなどという事を、騎士は知らない。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

そして審判の時、エレナはセフィがあの像に入れられた瞬間、セフィに密かに持たせた魔道具を起動させた。死の魔力を、魔道具から解き放った。
クレアに頼み、この場に連れてきてもらったのは幸いだった。それができなければ無理やりここに侵入していたかもしれない。流石に、彼女を目視できなければ、ただでさえ難易度の高い遠隔での術式を解放が不可能に近くなる。
とはいえ、目視できていたとしても難易度の高さは変わらない。セフィを殺さず、しかし生かさず。精霊と人との間で揺れる危うい彼女の生命を、破壊してしまわないように死の力で包み込む。幾度か近くの野原にいた野生の動物でも実験を繰り返したがそれでも不安はぬぐわれることは無かった。
綱渡り。周囲の神官達に気づかれぬように立ったまま、しかし祈りの間の時よりも遥かに集中し持続しなければならない。像の術式が発動している間ずっと持続し続ける。像から現れたセフィを見た瞬間、心底恐ろしかった。自分自身が彼女を殺してしまったのではないか、と思ったからだ。
「セフィッ!!」
それでもエレナに迷う暇は与えられない。セフィの死が神官たちに告げられた直後、エレナは魔道具の発動を解除した。そして騎士たちを急いで抜け、彼女の元へと駆け寄り、すがりつくように見せかけて、彼女の体からあの騎士が持たせた魔道具をそっと抜き取り、そして破壊した。粉みじんに砕き、証拠を隠滅した。
だから後は、祈るだけだった。
セフィがあの像の術式から逃げ延びていることを
そして自分自身が彼女を殺さずに済んでいるという事を。
——そして
「……っあ」

騎士たちが死んだと思い連れ出そうとしたセフィは、目を覚ましたのだ。
「……？　ッおあ!?」
　彼女の遺体を外へと連れ出そうとした騎士たちは、目を覚まし体を動かそうとしたセフィを見て、衝撃のあまりその手を離した。セフィは地面に体を下ろし、僅かに痛そうに声を上げる。
「……!?」
「──ッ!?」
　そんな様子を、沈黙の内に見守っていた神官達は目撃し、驚愕のあまり声をあげた。当然だ。死んだと思っていた。否、それが当然だったはずの少女が、起き上がったのだから。
　それを即座に受け入れているのはこの場ではエレナだけだ。もちろん、それは表には出さないが。
「ああ！　セフィ!!」
　出来る限り、驚いたように──そう意識しながらエレナはセフィへと駆け寄り、わざとらしいくらい感極まった声を挙げて抱きついた。彼女が生きているということを周囲に見せつけるように。
「良かった！　セフィ！　あなたは神に赦されたのね!!」
　その言葉を口にすると、どよめきは更に大きくなる。当然だ。彼らからすれば生きていた、という事実からまずありえないのだから。殺すため、セフィの命を奪いさるためだけの茶番。そこで発生したイレギュラーだ。
　さあ、どうする。エレナは内心で周囲へと問う。と、
「……エ、レナ」
　エレナの胸の中で、セフィが声を上げた。声を出すことも珍しい彼女が、ましてや自分の名を呼ぶことなんて数えるほどだ。彼女を助けよとするあまり、半ば彼女の事を意識から外していたエレナは、目を丸くして彼女へと視線を落とした。
　セフィは、
「……っ」
　彼女は声も出さずに、静かに泣いていた。表情からは恐怖と、そして安堵が見て取れる。怖かったのだ。あんな恐ろしい像に無理やり入れられて、しかもその

後、エレナ自身の手で一時的に仮死状態にまでなったのだ。恐ろしくない子供がいないはずが無かった。

　ましてや一度、悍ましい者たちによって、残酷な仕打ちを受けてきた彼女ならば、なおさらだ。

「……ごめんなさい、セフィ」

　エレナは演技ではなく、心から彼女に謝罪を告げ、優しく抱きしめた。彼女に厳しい仕打ちを強いてしまった事を謝り、そしてそうしなければどうにもできなかった自分の無力さを恥じた。

　それでも、彼女が生きていて良かったと、エレナは心から思った。そして、だからこそ、

「待て！　待たんか！」

　声がする。悪意と敵意に満ちた声。ローレンが。エレナとセフィを見下ろすようにして、わかっている。まだ終わってはいない。彼女を救うにはまだ足りない。

　だからこそ、セフィは何が何でも救うのだ。エレナは冷徹なる意思を瞳に宿し、セフィを守るようにしてローレンの前に立ちふさがった。

第百三十七話 審判の日 後編

「これは邪神による〝まやかし〟だ！」
　審判の間の中心で、ローレンの声が響く。
　彼にとってすればセフィをここで死んでいなければ、問題が発生する。彼が守るべき民たちを守れなくなるのだから、当然だった。それ故に今の現状、審判の像に入れられてセフィがよみがえる、などと言う状況は困るのだ。それ故に、「許された」と言うエレナの言葉に、異議を唱える。
　そしてその異議は、通る。この場に審判の像のからくりを知らぬ者もいるが、例え知らなくとも、ローレンの言葉に口を挟もうと思う者などいないからだ。
　ただ一人を除いて
「お待ちください」
　エレナは、ローレンからセフィを守るように一歩進み出ると、落ち着きの払った声で言葉を続けた。
「まやかしとは、どういうことですか」
　ローレンはエレナへと、その剛直な態度を崩すこともなく顔を向けた。
「まやかしはまやかしだ。そもそも審判の像はその力を発動していた。騎士があの邪霊の死も確認した。神々はその娘を邪と認め、裁きを下していたのだ」
「ですが彼女は生還しました」
「それこそが邪悪な存在の証。死の後に、蘇るなど例は無い。生物としての理に反している。邪霊が裁きを逃れる為の小細工を用いたのだ」
　正解。エレナは心中で呟いだ。ローレンの指摘は〝正しい〟。実際に小細工を実行したのはセフィではなくエレナだが、確かにこの審判の間において、〝まやかし〟は用いられた。魔道具を使い、更に死神の力まで借りて、審判の像の目を欺いた。彼の言いがかりは、見事に的をついている。
　エレナがしたのはまやかしで、ペテンで、邪法だ。これは真実。証拠は隠滅し

たとはいえ、詳しく調べられれば更なる証拠は出るだろうし、〝無かったとしても関係ない〞。でっちあげるくらいのことは【神殿】は平然とするだろう。
　元より此処は敵地で、向こうには正当性があり、此方はいかさまをしている。
　そんなどうしようもない状況で、エレナはこの茶番を潰さねばならない。彼女はそれを改め理解しつつ、前を向き、言葉を放った。
「邪霊、セフィが力を用いたことで神々の審判を逃れた、と？」
　そう前置きし、澄んだ、響く声で、次の言葉を告げた。
「つまりそれは、我らを見守る天上の神々が、邪霊如きに〝してやられた〞と？」
　エレナは冷たい、刃の様な言葉を叩きつけた。この世界の神々を信じ崇める神殿の中枢、教皇もいるこの場で、あまりにその言葉は鋭かった。沈黙のルールを他の神官たちに破らせるほど。
「何という事を！」
「無礼な……!!」
　彼方此方からそんな声がエレナへと向けられる。明らかな怒りの色の見えるそのざわめきを起こしたエレナは静かに、そのざわめきが収まるのを待ち、ローレンへと更に問いかけた。
「事実ではないですか。神の裁きよりも、邪霊の方が上手だと、そう言うのでしょう？」
「違うな」
　だがローレンは冷静なままだった。彼は表情を変えぬまま、静かに首を横に振り、
「神は常に我らを見守る事はできない。審判の像という存在を介さなければならない以上、邪霊のような強大な悪が相手の場合、その隙を突かれる。それはやむをえないことだ」
「しかしセフィは人ならざるものである事は既に承知されているはず」
「だからこそ、それをフォローするために我々神官がいる」
「それはつまり神が判断しきれなかった件を、貴方が裁くと？」
　エレナは目を細めた。
「本来この場は審判の像──神にその判断をゆだねることで正しくその者の善悪を

明らかにする場の筈」
　審判の像の機能、エレナはこれが実は、単なる処刑用具であるということは知っている。だがこの茶番劇は、審判の像は正しく悪を裁く機能を持つと、そういう建前の元に成り立っている。故にその真実を指摘しても意味は無い。相手の茶番の舞台に立つ必要があるのだ。
「神でもない貴方たちが一体何を裁くというのです？」
「大概にしろ小娘が！　我々は神々に魂を捧げ、神に使える道を歩んでいる。我らの潔白を疑うならそれは神殿そのものへの愚弄だ!!」
　周囲で見守っていた神官の一人もが声を荒げる。同時にその声に同調するような言葉にならない非難の音があちこちから叫ばれた。悪意と憎悪の圧力が審判の間に充満し、エレナを押しつぶそうと蔓延する。だが幼き少女は、セフィを背に身じろぎしない。
　自分は曲がりなりにも巫女。神の使い。神殿に置いて、例え籠の鳥であろうとも、巫女の存在価値は高く、その言葉は一定の力を持つ。単に無礼だというだけで、切り捨てられはしない。
「神殿を侮辱する意図はありません。ただ今回は〝異例〟。私も過去の記録には目を通していますが、蘇る、などという結果はいまだかつてない。だからこそ、慎重な対応が必要と考えます」
「ならばどうしろというのだ」
　そう言って、一つ、エレナは息をつく。ほんのわずか、目の前のローレンも気づけない程の一瞬の間、エレナは自身の言葉を〝溜めた〟。これから発する言葉を躊躇うように。だがそのためらいは一瞬で、そして次の瞬間には、それは発せられた。

「証明していただきたい。神に変わって裁きを下す貴方たちが、真に神の道に忠実であるのかを」

　果たして、その言葉の真意をこの時点で理解できたものはいたのか。少なくともその言葉をかけられたローレン自身は、理解してはいなかった。彼女の言葉を戯言と受け止め、鼻で笑った。

「馬鹿馬鹿しい。子供の我儘には付き合いきれん」
「証明できないのですか？」
「出来もしないことを言うなと言っている。信心とは日々のありようだ。印のようにあらわれるでもないものを、なにをもって証明とするというのだ」
「証明する方法があればいいのですか？」
　食い下がるエレナに、ローレンはくどいとはねのけ、
「もちろん、あればしてやるとも。我が信仰に一点の曇りも無い──」
　と、そう口にした直後、ローレンは背中に悪寒が走るのを感じた。今自分が、何か、とてつもない地雷を踏み抜いたような、致命的な言葉を口走ってしまったような、そんな感覚。
　──今、自分は何と言った？
　そんな彼の動揺に応じるようにして、エレナは僅かに顔を伏せたまま、しかし口元をわずかに綻ばせた
「証明は可能ですよ？」
　少女のか細い声が、ローレンの耳を撫でるようにして、聞こえてきた。寒気を感じさせる、蛇がのたうつような声だった。
そして、

「〝審判の像を使えば〟」

　その一言が、告げられた。
「……は？」
　ローレンは、理解できぬ、というような表情で、ぽかんと口を開けた。他の神官達も、暫くエレナ声に言葉を失った。あの幼い少女は今、何を言った？
「何を驚くのです。審判の像は正しく人々を裁く。セフィのような例外でない限りその機能は問題はないと、貴方が言った。貴方達が言った」
　エレナは淡々と告げる。だがローレン、そして周囲の神官達すべてに向けられたその言葉の、その真意を理解始める事に、彼らは凍りついていった。審判の像。それを〝自分たちに〟使う？
「貴方が、真に神の使徒であるなら、審判の像に入れられても生還できるはず

だ。当然ですよね？ 審判の像は」
　善を救い、そして悪をホロボスモノナノデスカラ
　エレナは笑った。赤い唇は綺麗な半孤を描いて、目を細めて穏やかに微笑むその姿は美かった。
　死神の使いというにふさわしいくらいに。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「さあ」
　一歩、前へ
「さあ、どうしたのです」
　更に一歩、足を進める。目の前の男、先ほどまで威厳に溢れていた神官長の下へ、そして今、突如として、自分の命をエレナによって掌握されようとしている男の下へと。
　ローレンは動揺していた。
　言葉を返そうにも、反論が出てこない。神官としての正しさを示せ。審判の像は正しく善悪を裁くなら、入って見せろと、そう言っている。だが実際審判の像は入れられた存在を問答無用で殺す。それはこの場にいるほとんどの人間が知っている。目の前の少女もだ。
　もちろんローレンの信心の証明などできるわけがない。
　だが、ソレを口にできない。
　それはつまり、あの少女をペテンにかけ、神殿が問答無用で殺そうとした事の証明だ。
「さあ！」
　幼い少女の皮をかぶった悪魔は、高々と声をあげる。
　その声は電撃のように審判の間を貫いた。先ほどまで声を荒げ暗黙の掟も破って暴言を吐いていた神官たちは、一転して静まり返っている。エレナの言葉に、何も言えなくなっていた。
　身内の中で公然と行われていたペテン。
　それが今、自分たちに敵意を向けている。

本来ならばそういうことは起こるはずも無かった。身内内での茶番なのだ。失敗など怒りえない。不都合など発生するわけがない。そのはずだった。だが、今は違う。
「待て……待て！」
「何を待つというのですか」
「そんな安易に審判の像を扱うなど許されん！ アレは神具であり──」
「何が安易なものですが！　幼き少女が！　罪なき罪に問われ処刑されるかもしれないのですよ!? そんな慈悲無き事を神々がお許しになろうはずがありません!!」
力強い声、真に迫る表情はまさに信徒であり巫女の鏡ともいえる態度だが、ローレンには見えていた。彼女の瞳に映る凍り付くような意思を、感情で揺らぎながらも紛れもなくこちらに向けられた意思を、人は、それを殺意と言う。
ローレンは理解した。その瞳を見て、理解させられた。この少女は、年端もいかぬ、自分の半分の人生も生きていないようなこの幼い少女は
　　自分を〝殺す気〟なのだ。
此方の命を引き換えに、邪霊の罪を無かったことにしようとしている。罪をこちらにかぶせることで、少女の審判をもみ消そうとしている。その意図を理解したとき、ローレンは寒気がした。
最初、エレナ、ゲルダー家の娘が邪霊の付き添いでこの神殿にやって来ると知った時、ローレンはエレナを愚かしいと思った。安い同情に釣られて、本来秘匿にすべき事を明かして感情のまま考え無しに身勝手に動いて、結果周囲に迷惑をかけるような、そんなごくごく下らないの小娘だと。
だが違う。彼女はそういうのではない。そんな、なまっちょろいものではない。
この女は、〝邪悪〟だ。
身勝手、なんてレベルではなかった。自分の為なら、他人の犠牲を躊躇わない。それを悪と知りつつも、己の手が汚れることも構わず実行に移そうとする、徹底的なエゴイスト。これを邪悪と呼ばずしてなんという。
逃げろ。逃れなければ殺される。
「っぐぁ?!」
「なぜ逃げようとするのです？」

下がろうとしたロ－レンの腕をエレナは強く掴みながら問う。その力は見た目からは想像もつかないほどに強く、痛い程だった。逃がさないと、そういう意思がありありと伝わってきて、ローレンは身震いした。振りほどこうとしても、腕はピクリともしない。
「き、騎士達よ！ この女を止めろ!!」
抗うように大きく声を張り上げると、動きかねていた騎士たちは慌てるようにして、エレナを取り押さえようと動き出した。
「【眠れ】」
一言、彼女が告げた瞬間、騎士たちはくたくたと地面に倒れ伏せた。
最初からローレンへと突っ込まなかった一人を除いて。
「……なっ」
「私がメナスの使いとお忘れで？」
エレナは無表情のままに告げた。神の使い、人の身でありながら、人より上位の存在の力を降ろし、行使できる超常者だ。当然ながら、平和ボケしているような神殿騎士相手が同行できるようなものではない。
神殿においてそれは常識だ。普段もっとも巫女達の力を制御していたローレンならわからないはずが無かった。だが、知っていることと、実際に目の当たりにすることは違う。
目の前の幼い少女が、暴力において手のおえない存在だと、誰が信じられようか。
しかし知ったところで、結果は変わりない。彼女は暴力においても手が負えないという結果が残るだけだ。だが、だからと言ってこのまま流されるわけにはいかない。このままでは、殺されるのだから。
「さあ、覚悟を決めてください」
「わ、私は神官長だ！」
「だからなんだというのです！」
「私は長きに渡り神に仕えている！ 今更我が信仰を疑うなど!!」
「あら、いいじゃない」
と、その声は壇上から聞こえた。ローレンにとってもなじみのあるその声。大地の巫女、クレアの声だった。彼女はざわめく神官たちを押しのけ前に出て、

ローレンを見下ろすように薄ら微笑みながら、言葉を続ける。
「証明してみなさいよ。ローレン。まさかできないなんて言うんじゃないわよね？」
　それは、大地の巫女とは思えぬほどに、女の悪意に満ちた、冷たい刃の様な声だった。その言葉に、そして瞳にあった淀みきった憎悪を見て、ローレンはこの時初めて大地の巫女が、自分に並々ならぬ憎悪を抱いていると知ったのだった。
　気づくのは、あまりにも遅すぎたが
「──では、参りましょうか」
　呆然とするローレンの肩を、エレナが強く握った。
「ま、──っが!?」
　声を出す暇も無かった。エレナは自分よりもはるかに背丈のあるローレンを方から引きずり倒した。そしてそのまま首襟を掴み、驚くほどの力で、引きずり、審判の像へと続く階段を登り始めた。
「や、やめろ！　が！　こ、これは！　ふざけるなぁ!!」
「喚かないでいただきたい。神官長ともあろう方が」
　悲鳴と共に浴びせられる罵声を、エレナはさらりと受け流す。それをどうする事も出来ず眺める神官達の目には、罪人を断頭台へと連れていく処刑人のそれにも見えた。この場においては裁くものと裁かれるべきものが、逆転しているが、そして二人は審判の像の前までたどり着いた。辿り着いてしまった。
「や、やめろ！　こ、こんな事！　こんな事は！　神が！　私は弱き人々の為に！」
「だから、それを証明しろと言っている」
　瞳を細め、言葉を刃の様にして、エレナは審判の像の中へと殺人装置へと押し込んだ。そしていまだ足掻くローレンを、下から覗き込むようにして見つめ、小さな声で、
「幼い少女をお前はこの殺人兵器に押し込んだんだ。覚悟を決めてみろ」
　殺意を言葉にして、エレナはローレンを突き飛ばした。ローレンは、最早反する言葉を口にはできなかった。ただ、怒りと恐怖と、全ての感情に突き動かされて、腹底から、ただ絶叫した。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

その絶叫に、神官たちは恐れ悲鳴を上げる。審判の像の金属音がけたたましく耳障りな音を奏で、大地の巫女の不愉快な笑い声がこだまする。混沌の最中に、エレナはゆっくりと、その扉を─

「ああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

閉じようと、

「──っ」

した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：
──いいよ
一瞬、その声が頭の内で反響する
自分の全てを包んでくれた男の声
優しい声だった　すべてを赦すと、そう言ってくれた人の──
：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
「っ!!」
その、直前、
「【ッこ、んのおおおおおおおおお!!!】」
エレナの叫びと共に、魔術がはじけ飛んだ。
単純故に強力な破壊の魔術は、轟音と共に目の前の【審判の像】へと直撃し、その体を爆散させた。その身を作っていた金属が砕け散り、神官達が悲鳴を上げ、エレナの牙にかからなかった騎士たちがどよめく。クレアだけがつまらなそ

うに舌打ちをしたが、それは悲鳴の中に埋もれ消えた
「……っは……っひぃ……！」
　そして、砕け散った審判の像の跡に、ローレンが震えながら体を小さくさせていた。それを見下ろして、像を破壊した張本人、エレナは震える彼の体をひっつかみ、驚く彼へと、
「こんなくだらない茶番！　してるんじゃないわよ!!」
「おごぉ!?」
　拳を握りしめ、殴り飛ばした。
　魔力がたっぷりこめられた一撃はローレンの体を神官達の高台まで吹っ飛ばした。取り仕切る神官長は悲鳴と共に地面に堕ち、審判の像は砕け、神官達は呆然とエレナを見て絶句する。
　長き歴史の中で、何人もの命を啜ってきた審判の像、殺人装置はこうして唐突に、その役割を終えたのだった。
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　私は馬鹿だ。
　ざわめき止まぬ審判の間にて、エレナは自分を自嘲した。
　セフィは邪霊であり危険、例えセフィ自身が悪意のない、幼い少女であったとしても、それは真実であり現実だ。それ故に、エレナは神殿側を罠にかける必要があった。だからその為に、【審判の像】は必要だった。【審判の像】は罪なき者を罪人とする邪悪な装置。
　だからそれを神殿側に使う事で、逆転させるつもりだった。神殿側を悪として、セフィを救おうと。
　だが結局は失敗した。否、できなかった。耐えられなかったのだ。信頼する巫女に裏切られ、死を恐れて悲鳴を上げる男を、そのまま地獄へと突き落すことができなかった。誰かを殺す、という事に忌避感は無いつもりだ。だが、自分の中の情を、エレナは抑えることはできなかった。
　失敗。失敗だ。自分は徹底すべきだった。安易な同情など、すべきではなかったのだ。
　審判の像、エレナにとっての『唯一の武器』を自分の手で破壊してしまった。

これ以上、神殿を攻撃する材料は、エレナにはない。
エレナが振り返ると、神官達は騒然となっていた。どよめき、言葉を交わしながらもどうするべきなのかわからぬまま戸惑い続けている。いままでまとめていたローレンがあのざまでは当然だろう。
その中で、クレアは一人こちらを見つめ、「残念」と言葉にせず口を動かしてエレナに伝え、軽く肩をすくめた。彼女からすればローレンが死ななかったこの結末は無念だった、らしい。と言って、それをどうこう言う気力はエレナにはない。
セフィ、彼女はエレナが買収した騎士の近くで座り込んで、此方を見上げていた。心配そうな顔、まだ涙の跡がある悲壮な表情。彼女に駆け寄りたいが、今や自分の処分すらどうなるものかわからない。
神官達の間ではひたすら混乱が続く。それが収まった時、どうなるか。
エレナは覚悟を決めた、その時だ。
「もう 良い」
声がした。この審判の間で、神官達も、エレナも、その存在をすっかり忘れていた人物。審判の間の最奥にただ物置のように座っていた男。神殿の最高責任者、教皇の名を冠する老人が、ゆっくりと、しわがれた声で口を開いたのだ。
「今回の審判はこれにて終わりだ。少女セフィは神に許されたが危険性はまだ内包している。故にその命は神殿が預かり、監視下におくこととする」
老いと疲れを否応なく感じさせながらも、しっかりととした口調で告げられたその言葉に、神官達はざわめきながらも頷きを見せた。教皇の言葉だ。それを否と言える者はこの場にはいない。
「老いに任せ、怠慢を働いた私が、愚かだった」
最後に絞り出すようにそう言うと、再び老人は椅子に座り、ゆっくりと目をつむった。そのまま死んでしまうのではないかと思うくらいに。周囲の付き人たちが慌てて彼を介抱し、そのまま外へと連れて出る。
責任者は去り、指導者は意識を失った。神官達もそれを了承した。つまり、
「……終わった、の？」
エレナは呆然と口にした。
終わった、終わったようだ。全く実感はなく、だが教皇の言葉は絶対だ。神官

達もざわめきつつも、エレナやセフィに言葉を投げかけるつもりは無いように見える。騎士たちはローレンを介抱ししつつも同様だ。
　終わった。エレナはセフィを守れたのだ。
「……良かった」
　エレナは沈むようにして座り込んだ。こちらを見上げるセフィへと視線を向けると、状況は理解できずとも感じるのか、どこか安堵した顔を向けていた。エレナは微笑み、彼女の元へと駆け寄り──

「やあ！ おめでとうエレナちゃん！」

　その声はあまりにも唐突で、あまりにも場違いだった。
　声は部屋の入り口から。男は普段と変わらぬ柔和な笑みを浮かべ立っていた。
　ラルク
　神殿に置いてエレナにアドバイスをくれた唯一の味方がそこに立っていた──どうしようもない違和感と共に。
「いやあ、まさかとは思っていたけど、本当にセフィちゃんを助けてしまうなんてね。驚いたよ、君は本当に素晴らしいね」
　エレナも、セフィも、神官達も教皇も、誰もが言葉を失っている中、まるで空気が読めていないかのようにペラペラと言葉を続けるラルクは、何処か滑稽で、何処までも異質だった。エレナは戸惑い、どうしたのだと声をかけようとして、その前に、
「……っあ」
　セフィに、気が付いた。
　エレナの近くに駆け寄った彼女は、ラルクを見て、目を見開いている。感情を表に出さない彼女にしては珍しいくらいにはっきりと、感情を露わにしていた。
　恐怖と言う名の、感情を
「……セフィ？」
「……あの、人、知ってる」
　知ってる？
「〝村の神殿で見た〟あの、人」

村の神殿。勿論、ここ【神殿】の事ではない。エレナは直接見た覚えはないが、しかししっかりと覚えている。セフィが攫われ、己の崇める神の為の実験を繰り返した邪悪な組織。魔物を生み出し続けたおぞましい神殿だ。
そこで、彼女が、ラルクを見たという。偶然？　ミストの命令で実は彼もシール達の仕事に協力していた？ 可能性はないとは言えないだろう。言えない、が――
「……一つ、きいていいかしら？」
「うん？ なんだい？」
「〝その手に持っているのは何かしら〟」
――彼の右手にある、〝人間の生首〟が、そうでないと告げていた。
「……ああ、これ？」
ラルクは、その手に持った血まみれの生首を、恐怖に歪みきったその首を、まるでおもちゃのように幾度か宙に回しながら、困ったような顔を浮かべた。
「ここに入ろうとしたら外の兵士に邪魔されてさ？　困ったもんだよ。無駄な殺生をする羽目になった。悲しいね」
そう言って、笑った。歪さは何処にもなかった。まるで子どもが見せるような裏表のない笑いだ。だからこそ、余計に壊れて見えた。誰も言葉がでなかった。だが誰もが、ラルクの朗らかとすら言っていいような笑みに、例えようのないおぞましさを感じていた。
「……そう言えば、聞いていなかったわね」
沈黙の中、エレナは、覚悟を決めるようにして、言葉を作った。
「なんだい？」
「貴方はなんなのかしら」
ラルクは忘れたの？　と困った顔をする。
「だから言っただろう？ ミストの古い―」
「〝知り合いの〟何なの？」
エレナは、言及をしなかったかつての自分を恥じた。
「貴方の言葉に嘘があるとは思えなかった。だけど、そうね貴方はミスト学院長の古なじみなのが事実だとして、結局、貴方は何なの？」
ミストの知り合いとだから、彼の手紙を持っていたから、この人は胡散臭くとも信頼できる。とエレナは納得した。だが、冷静に考えれば、ミストの知り合い

だからと言って、どう手に入れたかもわからない手紙を持っていたからと言って、信用できるという理由は一つもない。
　切羽詰った状態のエレナに疑えというのもそれは無理な話ではあったが――
「ふむ」
　ラルクはわざとらしく悩ましそうなポーズをとった。
「かつてはミストの友人だった。そして今は、そうだな」
　そう言って、人差し指をふいに、上にあげて、
「〝魔術結社【ラグナ】の長をして、呪いの精霊の実験をしたりもしていたかな？〟」
「　　【メナス】　　」
　エレナは死の神の名を告げた

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　時は戻る。神の間。エレナとメナスの対話空間。
【『――ただし、条件がある】』
『条件？』
　エレナの問に答えたメナスは、そう答えた。
【『死はセカイを司る力の中で、最も強大な理の一つ。】』
　人のみならずあらゆす生命には終わりがある。死を持たぬと言われる魔の存在はこの世には無数にいるが、そういった存在であっても、終わりは避けられない。万物は、全て、いずれ消えゆくものだ。
　四元と呼ばれる火も水も大地も空も、同様だ。死は神羅万象の終わりを担う。
　だからこそその力は絶大だ。仮死状態、などというレベルまで死の力を操るには、絶対的に力を受け入れるだけの器が足りないのだ。それ故に、
【『お前はヒトをやめなければならない】』
『いいわよ』
　アッサリと、エレナは頷いた。メナスもまた、その即答を平然と応じ、頷い

た。

【『そう、こたえることは、わかっていた】』

　メナスはエレナの魂に見惚れ、その力を分け与えた。危ういほど強く、輝かしいその魂。それ故に、目的を前にして、エレナが迷うはずはなかった。

【我が愛し子よ。我が眷属へと加えよう。その輝ける魂に、それに見合うだけの身体を与えよう。その魂の行き着く果てを、私に見せてくれ】

：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　審判の間は再び混乱に陥った。

　唐突に湧いて出た侵入者の存在、そしてその直後にエレナの周囲でマナの爆発が起こった。彼女の体を包むようにして、膨大なマナが渦巻き唸り声を上げる。状況を理解しきる前に立て続けに起こった状況に、混乱は歯止めが効かなくなっていた。

「な、にが……」

　セフィを守るようにしていた騎士が、エレナがいたほうへと視線を向ける。既にマナの流動はおさまりを見せ、徐々に視界が晴れていく。だが、そこにいたのは巫女の服に身を包んだ幼い少女ではない。

　そこにいたのは、マナと実体の狭間に揺れる、金色の体を持った美しい女の姿。

　人ならざる者が放つ、人外じみた美しさ。足先から髪の毛先に至るまで、不可視の金色に身を包み、ゆらりと揺らめくようにして立つそれは、その場にいるすべての者を惹きつけた。

　その美しさは死の危うさだった。総べての終わりが見せる尊さだった。

　人の形を模しながらも、人ならざる理に生きる者の姿

　実体とマナの狭間に揺れる、人よりも高等な存在、それは、

「……精霊」

神官達の間を縫ってそれを目撃したクレアは、呆然とした声で、それを口にした。
『――貴方を殺す』
　ローレンの時に見せた迷いなど微塵もない。純然たる殺意を放ち、【精霊エレナ】は宣告する。
「君は最高だ。エレナ」
　邪悪なる組織、【ラグナ】の指導者、ラルクは満面の笑みを浮かべた。

第百三十八話 生死の狭間で 前編

二話連続投稿です、ご注意ください

　崩壊物との決戦所跡地、穢れた大地にて
「っ……」
　フードの者が苦痛を堪えるように息を吐く。腹部にはシールが放った術式剣が突き刺さっている。剣はマナを奪い去り、肉体の力を奪っていた。シールが刃を引き抜くと、そのまま血みどろの地面に崩れ落ちた。
【崩壊物】を操っていた者との相対。シールもリーンも、【崩壊物】との戦いで疲労は色濃くあったが、それでも二人の敵ではなかった。
　それはつまり
「……違うな」
　この者は、ヴェインを倒したという、指導者と思しき男ではない。彼を倒した者が、こんなにも手応えがない訳がないのだから。シールは確認の為、目の前で倒れた人物のフードを外し、その顔をさらす、と
「女か」
　若い女だった。顔色は悪いが確かにそうだった。もしもダルシアがこの場にいれば、彼女が以前、王城に看護師として潜入していた女だと気がついたのかもしれない。しかし、彼女の素性がどうあれ、崩壊物を操り大地を蹂躙し、挙句多くの人々の命を奪い去ろうとしていた事実は代わりはない。
「その体、封じさせてもらうよ。聞くべき話は山ほどある」
　更に封印剣を生み出し、倒れ伏す彼女の体に更なる剣を突きたてようと動いた。油断なく、相手の反撃に注意を払いながら、だが、倒したという事実が、僅かにシールに隙を作っていた。

「ック、が、ぐが」
　女が、蠢く。肉体の自由が効かない体を無理に動かす様は虫が身悶える姿に似ていた。ソレでも紛れもなく、力の入らぬはずの身体を、女は動かしていた。
　最早歩くことすらままならぬはずの身で、何を？
　意図は不明。だが間違いなく危険であると察知したシールは半ば反射的に刃を振る。しかしそれは僅かに遅く、
「カ……ッハ」
　剣が女を貫く前に、その刃は〝弾かれた〟
「これは！」
　マナの術式、物質の概念に縛られぬ刃が、まるで見えない壁にでもぶつかったかのように弾かれ、しかも砕かれた。その原因は、女が懐から取り出したモノ。小さな球体。仄かに魔術的な光を灯すそれは、
「……【魔眼】！　ヴェインのか!!」
　マナの全てを支配しコントロールする強大な魔眼。それを持っていた。アレならば、シールの封印術式も突き破る事は出来るだろう。だが、ソレならばなぜ、今の今までそれを取り出さなかった？
　女は、取り出した魔眼を空へと掲げるように腕を伸ばし
「【起動】」
　その言葉を口にして、一瞬、笑みを浮かべたかと思うと、――女の肉体は〝爆散した〟
「……っ!?」
「……」
　血肉が飛び散り、青紫に穢れた大地を更に赤く染め直す。
　さしものシールも、そしてリーンすらも、その光景には言葉を失った。自殺、それにしても凄惨過ぎる最後だった。だが、その衝撃は、そのすぐ後に発生した現象の前に打ち消された
「血が……」
　飛び散った女の血肉が動いていた。だが女の肉体は【崩壊物】とは違う。ちぎれた血肉が生存している、なんていう生物の倫理に反した代物であるはずがない。ならばこの現象は、

「魔術！」
　気が付けば、女の血肉が大きく弧を描き、その周辺を巡っていた。高く空から見ればそれが青紫の大地に描かれた真っ赤な魔法陣だと分かるだろう。そしてその中心にあるのは、女の手のひらから零れ落ちた、【魔眼】
「【□□□】」
　それに気づいたリーンが魔術を即座に発動する。
　だが、自らの死そのものをトリガーとした魔術の強制力は、一瞬であれリーンの速術を上回った。魔術が発動する。【崩壊物】から溢れとどまり続けた膨大な量のマナが唸り声を上げげる。穢れきった大地を光が呑み込み、その中心で【魔眼】が輝きを増す。
「……!! ……ーン……!!」
「──っ……！」
　二人の声も姿も飲み込んで、術式は発動した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ミストが〝それ〟に気が付いたのは、神殿に自分が遣った使者からの報告書を改めていた時の事だ。文面からは一切情報の真意を読み取ることはできない完全な暗号文章。距離があり、通信魔具の何もかもが通じない神殿との情報伝達には手紙が用いられる。
　今回送られてきた内容も何も不備は感じなかった。エレナの様子、神殿の状況、こちらが必要する情報が丁寧に載せられていた──が、
「……待て」
　ミストは誰にいうでもなく、口にした。
　果たして、この手紙の送り手は、ここまで有能だったか？
　優秀な者ではある。神殿を自分は毛嫌いしている。敵地で仕事をする以上は高い能力が求められるのは当然だ。が、送られてくる報告書に、あまりにもそつがなさ過ぎる。仕事があまりにも完璧過ぎる。
　いつもよりも仕事の出来が良い。だからおかしい。

出来が悪いならまだ納得できる。この手の仕事にトラブルはつきまとうだろう。だがその逆というのはどういう理由だ？

頭の中でわずかに残っていた違和感が形になった時、ミストは言いようのない悪寒を覚えた。何か、致命的な見逃しをしていないか？

「……ん」

そこに、乾いた音が響いた。見ると窓ガラスを小さく叩く影、真っ白な鳥、使い魔だ。足には手紙が結ばれている。定時に送られてくる報告書。

「……」

ミストはすぐさま窓を開き、使い魔を招き入れる。手紙を取り上げ、広げ見てみる。そしてミストは、

「……ああ」

納得したような声を上げて、そのまま――手紙を、握りつぶした。

「まさか、とは思っていたけれど、なんとまあ……」

握りつぶした手紙をそのまま手放し地面に捨てる。部屋の椅子に座りこむと、明らかな動揺を抱え、顔を手のひらで伏せながら、思考を言葉にして、呻く苦々しさと、この男にしては珍しいくらいの怯えと共に、

「まだ、まだ諦めていなかったのか。ラルク……！」

潰れ、地面に転がった手紙には、短く

――暗号はもっと複雑な方が良いよ？　解かれれば盗み見られてしまうからね

なんていう、ふざけた内容と共に、その男の名が、綴られていた。

：：

神殿、審判の間。

エレナの活躍によってかつてない混乱に見舞われたこの場所は今、更なる混沌の渦にのまれていた。侵入者であるラルク、そして精霊と化したエレナ。双方の相対によって、いよいよもって秩序を保てなくなった神官達は我先にと一つしか

ない扉へと殺到していた。
　騎士たちは彼らを守る役割を持つはずだが、こういった荒事に全く慣れていなかった者たちだ。混乱し右往左往する様は他の騎士達と変わりはしない。かろうじてクレアやローレンをこの場から連れ出すことはできたようだが……
　唯一、エレナの手駒と化した騎士だけが、変わらず、セフィの傍にいた。エレナは男へと、自ら仕える神と同じ金色の瞳を向け、
『彼女を守り、その場を離れて』
「了解」
　短く答え、彼は小さなセフィの身体を抱え混乱する神官たちをすり抜けるようにして、その場を去っていく
「――レナっ！」
　幼い少女の声が響いた気がしたが、その声は即座に神官達の見にくい悲鳴によってかき消されてしまった。部屋の中心に残されたのは、二人だけだ。
「慌ただしいねえ。全く。別に彼らには用は無いっていうのに」
『なら、何の用なの？』
「散々言ったろ？ 君を浚うのが目的だってさ」
『―そう』
　ラルクの笑みに、エレナは瞳を細め、片手を宙へと広げ、
「――っご」
細く長い指を握りしめる。それに応じるように、ラルクの頭に刃が突き立った。
『空間掌握・刃』
人よりも遥かに容易にマナの干渉を可能とする精霊の身。それ故に魔術を生成し放つ必要はない。簡易の術式ならば、相手の肉体に直接それを創り出すことも可能だ。
　一度に使用できる大気のマナにも限界がある。だが、それだけでも、ラルクの四肢すべてをくまなくズタズタにするくらいは、可能だった――だが、
「い、きなり、ひど、いなあ」
　ズタズタになったラルクは、そのままの身体で、カタカタと口を動かし、無理やり言葉を紡いで見せた。切り裂かれた体からは血も零れてはいない。
『何故あなたは死なないの？』

精霊エレナは、不思議な事を発見した子供のように、素直な疑問を表情に浮かべた。そこに嫌悪感や忌避感は感じられない。目の前の男の身体を破壊しつくした少女の表情とは思えぬほどに。
　ラルクはそんなエレナの顔に苦笑し、胴体に突き刺さった刃をゆっくりと引き抜きながら、
「僕の身体は死ににくい〝体質〟――ッガ」
　言葉を続ける間もなく、彼の脳天に新たな刃が突き立った。ラルクの肉を引き裂くまでのモーションは一切なく、瞬き一つの間に、彼の身体から凶悪な刃が〝生えてきた〟ようにすら見えた。
『なるほど、単純な殺傷では死なないのね』
「ヒ、トがハナしているのを邪魔しちゃいけないよ？ エレナちゃ、」
　言い切る前に、追撃で刃が三つ、胴体から生えてきた。
　当然血は出ない。ラルクも平然としている。
　その異常とも思える不死性、再生能力、思い当たる力は幾つかある。何かしらの加護であったり、呪いであったりだ。この世界に置いてそれは珍しいが、存在しないわけではない。
　ならば
『死色の鎌』
　己の右腕、濃度の高いマナを歪め、形を変える。輝かしく、禍々しく、相手の命を刈り取るためだけに存在する刃。【死の精霊】であるエレナの身体から生み出されたそれは、死と言う概念そのものだ。
　その鎌を軽やかに振り回し、刃の輝きをラルクへと重ね、
『ねえ、これを喰らったら死ぬ？』
「――それは」
『回答ありがとう』
　エレナが宙を翔ける。鳥のように羽ばたく動作も、魔術師のように詠唱も必要としない。ただ赴くままに空間を飛ぶ精霊の挙動だ。ラルクはそれを確認し、よどみない動きで手のひらを向け、魔術を発動する。
「【祓え】」
　放たれた蒼い焔がエレナの身体を貫く、が、

「っ！」
　その体に炎が触れた、その直後、エレナの身体が消えた。否、崩れた。マナ、身代わり、いつの間にか、自身と大気のマナを固めた人形を入れ替えていた。不意をうつ為に、
『死ね』
「□□□」
　ラルクの背後へ回ったエレナが、ラルクの右腕を切り裂いた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　避けられた
　苦痛に歪むラルクの顔、そしてゆっくりと落下していくラルクの腕を確認しながら、エレナは冷静に、自分の攻撃の失敗を確認した。
　エレナが切り裂こうと思ったのはラルクの胴体だ。エレナは自分の能力を既に把握している。自分の力は死を与える。ラルクの、死ににくい奇怪な体質をも破れる。故に最も的の大きい体を狙った。
　だが、避けられた。不意をうち、背後へ回り、胴体を狙ったのに。
「痛っい、なあ……ひどいよエレナちゃん」
『あら、そう？ なら死ねば楽になれるんじゃないかしら？』
　そんな風に軽く流しながら、エレナはラルクを見る。切り裂かれ失われた腕は、血こそ吹き出したりはしていない、だが、回復もしていない。メナスの【精霊】エレナが死を与えたのだから当然だ。癒されはしないだろう。斬り飛ばされた腕は、そのまま地面に落ちた。
「ああ、全く、これでも痛みはあるんだよ？」
　この男は、自分の力で殺せる。その確証は得られた。問題は、腕を失ってなお笑みを絶やさない、ラルク自身の能力だ。背後から、完全に不意をうった一撃を、避けられる。それはどういう理屈か？
　警戒を強め、僅かに身を引くエレナに対し、ラルクは笑みを絶やさず、一歩、前へと進み出た。
「流石に、このまま、一方的にやられるわけには、いかないなあ」

失われた逆側、左腕をゆっくりとあげ、彼は術式を再び構築する。瞬く間に生み出された術式、それはエレナも知るもの。赤黒く脈動する邪術、神殿でエレナ自身が破壊した、審判の像に刻まれていた、
『滅殺術式――』
「の、改良版。さて、どうかな？」
　言葉と同時に術式が発動する。神殿で散々聞いた奇怪な唸り声と共に赤黒い引っ掻き傷のような魔術が自身を喰いあいながら、凄まじい速度でエレナへと直進した。命を削り奪う。その目的の為だけに生み出された術式は、審判の像が見せたそれよりもはるかに明確な破壊の意思を見せつけてくる。
　触れれば、その部分が砕け散る。確かな予感がエレナをよぎった。
『転移』
　転移魔術を発動。
　肉体をマナと織り交ぜた結果、転移術は意識を集中するまでもなく発動できるようになっていた。先にラルクの背に回ったのも転移術の応用だ。審判の間の上方、短い距離瞬時に体を飛ばし、その軌道から逃れようとした。しかし、
『追跡型?!』
　彼女のいる方向へと、赤黒い滅殺術はその動きを歪めた。まるで生きているかのような動きにエレナは僅かに身震いし、更に逃れようと身体をよじる。
「ああ、逃げてはいけないよ」
『ッ』
　だが、体を動かそうとしたその先で、足を、先回りしたラルクに捉えられた。ただ掴んでいるだけ、それだけだが、一瞬動きを絡みとられるには十分だ。
　ラルクの腕を破壊する。自身の身体を変化させ、すり抜ける。転移術を発動し更に別の場所に移動する。様々な手段がエレナの頭をめぐるが、どれも実行するまでに滅殺術式がエレナに直撃する。
　逃れるという思考を打ち切り、エレナは眼前へと迫る術へ意識を向け、魔力を練る。
　相殺する。間に合うか怪しいが、鎌を振るうだけの身体が残れば構わない。
　返す刀でラルクを殺す。
『砕け――』

悲鳴のような声を上げ直進する魔術へと、エレナは魔力を放つ。筈だった、

　その直前に、滅殺術式は全方から放たれた不可視の刃によって粉々に砕かれた。

「おや？」
『――な』
　何が起きたのか、その現象に驚きを覚えたのはエレナもラルクも同様であった。少なくとも二人の意思で起こした現象ではない。つまりそれは
「これは……」
　もう一体、莫大なマナを纏った気配が、いつの間にか現れていた。
　ラルク、エレナ、二人はその気配に釣られ揃って視線をそちらへと向ける。魔術の余波で崩壊しつつある部屋の中、突如現れたのは――黒。エレナと同じくマナと実体の狭間に揺れる身体を揺らし、視線を向ける〝彼女〟は
『……セフィ!?』
　もう一体の精霊が姿を現していた。

第百三十九話 生死の狭間で 後編

二話連続投稿です。ご注意ください

　エレナの騎士がそれに気が付いたのは、審判の間から離れて暫くしてからだった。
　あの侵入者の目的は分からない、が、極めて危険である事は察していた。エレナの命令通り、少女を守るだけ専念する事に決めていた。
　いっそ、あの地下牢獄に行くべきか
　単純に隠れるならあの場所も良いだろう、そんな風に考えていた時だった。
「……ん？」
　最初、あの部屋から逃れたとき暴れていた少女が、身動きを止めていた。諦めたのか、と思ったが、しかしそれにしてはあまりにも、静かすぎる。
　そして違和感が起こる。彼女が身に包んでいた拘束着、それが、〝ずれ〟た。最初、体格の小さい少女だからと自分を納得させたが──
「なんっ⁉」
　衣服が〝浅黒く腐り爛れ引きちぎれた〟時は、流石の騎士も全身に悪寒を走らせた。
　反射的に抱えていた少女の身体を手放した。エレナの命令も忘れる程の怖気だった。唐突に手放され、少女の身体は地面に落ちる、筈だった
「──これは」
　彼女の身体は空中をとどまっていた。まるで何かに吊り上げられるような、奇妙な光景だった。そして呆然と眺めるその先で、その姿は変貌する。
　拘束着が次々に引き裂かれ、少女の肌が露出する。だがそれは幼い体ではない。細く、長くい、女を思わせる四肢、だが身体は黒く、しかも透き通っている。その姿に似た姿を、彼はつい先ほど目撃したばかりだ。

「精霊化……」
　呪いの精霊、邪霊と呼ばれ神殿に忌避された姿にその身体を変えた彼女は、一度だけ此方に視線を向けると、迷いなく審判の間の方へと翔けていった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：

　戦い続ける精霊と人間、そこへと現れたもう一体の精霊、セフィ、かつて呪いの精霊と呼ばれ、そして神殿によって裁かれそうになった彼女は今、その姿を晒し、二人の前に現れた。
『エレナ!!』
　それは単なる、大切な者の名を呼ぶ少女の声、だが精霊の声はそれだけで明確な力を孕む。以前は彼女の悲鳴、それだけで世界に蓄積した【呪い】が蠢き、活性化し、あらゆる空間を汚し呪った。
　しかし今、空間を歪め蠢く力は怨嗟の声ではない。
　精霊は、マナと実体の狭間にゆれ、自然の力をそのまま体現する存在だ。それ故に【呪い】などという極めて狭い属性を精霊が担うとは考えにくかった。故にシールもエレナも、セフィと共に何度も試行錯誤を繰り返し、彼女の力の本質を見出した。
『その人から――』
　呪いも何も総べて、心から生まれるもの。彼女は、【感情】を司る精霊だ。
『離れろ!!』
　言葉が刃を向けるように、ラルクへと放たれる。
　村を、友人を、そして今恩人であるエレナを傷つけようとしたラルクへの、純真な、炎のような【怒り】がマナを動かし、刃の形を成した。自分を、そして自分の大切な者たちを奪おうとする「悪意」を穿つ刃は、迷いなく
「うおっ!?」
　獲物を喰らう獣の如く、ラルクへと襲い掛かった。

今まで、感情を表に出す機能を失っていたが、誰よりもラルクに身も心も傷つけられ、奪われ、叩きのめされた彼女は、当然、誰よりも強く、正しい怒りをその内に抱いていた。だから、今解き放たれたその力は、強い。
「う、っご、っと!?」
　腕を穿つ。両足を刻む。胴を貫き、首を掻き切る。再生しようと動きがあればその部分を狙い縫い付けるように更に一撃が加わる。攻撃の意思が、本能のままに食らい尽くす。
　ラルクの身体は一瞬止まる。そしてその隙を狙うように、
『お、ぉぉおおお!!!』
　エレナが飛び込み、その身体に絶死の刃を叩き込んだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　咄嗟の反応だった。セフィがいる事も、彼女が力を操りラルクを追い詰めた事も、エレナにとっては予想外だ。だが、結果生じた好機を見逃すほどエレナは緩くは無かった。
　鎌は間違いなく、ラルクの身体を貫いた。
　だが、エレナの表情は曇る
『……なに、コレ』
　突き立てたハズの鎌が、不可視の〝何か〟によって掴まれている。ラルクの身体を貫く前に、その動きを封じられている。何か？ 何だコレは？
　意識を眼前に集中する。その存在を視認する為に。
　ラルクの身体、全身を纏うようにして、濃厚な魔力が巡回している。鎌の信仰を阻む魔力は、よく見れば腕の形を成していて、刃を掴みとっている。これを、この力の現象は、エレナは知っている。精霊になる前、彼女はこの力をずっと操っていた。
『こ、れは』
「【リヴ】」
　その名は、生誕を司る神。
　彼を纏っていた魔力が形を成す。顔の無い女のヒトガタ。エレナが砕いた審判

の像を何処か思い出させるような、しかしそれよりも遥かに威厳溢れる、人ならざる影、〝権能〟、神々の加護を己が魔力によって体現する巫女の技。
　それを、〝ラルクが使っている？〟
『メナスが言っていた、リヴの巫女が奪われたっていうのは……！』
「ああ、そんな事もしていたっけ？」
　彼は笑いながら、失われた右腕の代わりに、顕現したヒトガタの右手で額を掻かせ、笑う。
「別に、リヴに限った話じゃないさ。もう察してると思うけど不死に関しては色々と奮闘したからね」
　指を折るようにして、彼は淡々と語っていく。
「軍の吸血鬼の研究も利用したし、竜の血肉を喰らったり、ああ、リビングデッドの開発なんてのまで、手を伸ばしたっけかなあ、ハハハ」
　ペラペラと語られる話は全ての禁忌とされるものだ。何もかもが人としての理から外れ、外道へと至るが故に恐れられる不死の法。だがラルクは、それが日常であるというように、ただただ朗らかに笑って見せる。
　壊れている。人としてとっくにこの男は道を外しきっている。
『そんな地獄の底まで覗き見るような真似をして、何を――』
「目的の為さ。ところで、」

「そんな風に、ぼおっとしていて、いいのかな？」

　何を、と、問い返そうとして、気が付いた。自分の身が、ではない。背後、セフィの周囲だ。彼女を囲むようにして刻まれつつあるそれは、滅殺術式に他ならない。
『セフィ!!』
　エレナは動き、同時にセフィもその声に反応する。
　恐れ、それがそのままマナに感応し、防護の形に代わる。それが破壊の術式を一瞬防いだ。その瞬間を掻っ攫うようにしてエレナがセフィをその場から離脱させた。
『ッグゥ?!』

背を焦がす痛みを代償として。
　掠めた、それだけで激痛が走る。
『エレナ!!』
　セフィはエレナの痛みに反応する。慈悲と怒り。エレナを慈しむ感情は彼女の背に癒しの力を与え、ラルクを怒る感情は新たな刃となって彼を撃つ。
　感情がそのまま形となってあらゆる能力に反映される彼女の力は凄まじい。
　だが、その力をもってしても
「精霊二体を同時に相手した事は無いけれど、此処まで緩いと脅威じゃないな」
　ラルクには届かない。
　生誕神の顕現が、その体を刃の様にして迫る怒りの意思を弾き砕き破壊する。それを潜り抜けても、その先ではラルクが術式でもって弾き飛ばす。
『滅びを!!』
　セフィの攻撃に重ねるようにして、エレナは新たに巨大な鎌を生み出し、振り下ろす。だがそれはラルクの首を刈り取るはおろか、触れる事もかなわず、かわされる。
『どうして！』
「どうしてって、決まってるじゃないか。極めて単純な話さ」
　ラルクはセフィの猛攻を凌ぎ笑う。我儘を言う子供に言って聞かせるように。
「君たちには技術が足りない。経験が足りない。そして何よりも━━」
　脈動、マナを吸収し術式が発動する前兆。それが部屋全体から巻き起こった。
『━━何』
　見れば、砕き崩れつつある地面、円形の外壁、高い天井、周囲の全てに細く長く細やかなラインが刻まれつつある。それはマナによって紡がれた、この部屋全てを利用し生み出された複雑で巨大な、魔法陣

「〝才能が〟足りない」

　そしてラルクの振り下ろされた腕と共に、それは発動した。
　極光、膨大な熱と破壊の音。強大な爆発に飲まれ、セフィもエレナもまとめて破壊の光に飲み込まれた。

「ああ……酷い事になったなあ」

　男の声は、何もかもが砕け散ったその上で、やけに響いた。
　神殿、審判の間、その跡地。最早ここがどういった場所だったのか、分かる者は誰一人存在しない。刻まれた歴史も思いも何もかも、全て瓦礫に帰した。
　歴史もなにもかもが埋まった瓦礫の上を、ラルクは誰に憚れる事もなく歩いてゆく。散歩を楽しむ少年のような歩みで、瓦礫の合間へと視線を向ける。途中、意識を失ったセフィの姿もあったが、彼女のことなど知りもしないというように、視線をさまよわせ続ける。

　そして発見した。夜の暗がりで、瓦礫の下で弱弱しく光るマナの明かり。
【死の精霊・エレナ】それを確認し、ラルクは頷き満足げな表情を浮かべ、
「やれやれ、手間が掛けさせて──」
　そんな事を言った辺りだっただろうか。

　彼の心臓を、手刀が突き破ったのは、

「……っお？」
　自分の胸から突如生えた金色の腕を眺め、ラルクは呑気な声を上げた。
　手を伸ばした先、エレナと思わされていた身体が砕けていく。マナによって生成された人形は、その役目を終えて霧散した。ラルクの背後では、本物のエレナがいた。ラルクの最後の隙をついて、残された力でもって一撃を叩き込んだ。
　最初に告げられた言葉、ラルクの狙い。エレナの誘拐と言う目的。それを最後

の最後に逆手に取ったのだ。
「……ああ、」
　腕を引き抜き、安堵の声を上げ、エレナは倒れた。
　引き抜かれた腕の跡、体に空いた穴を、ラルクは確認する。再生しない。それどころか徐々にその内側から体が崩れていく感覚がある。【死の精霊】、その力を直接叩き込まれ、汚染された結果だ。
　あらゆる不死を宿したこの身体だが、それら全てを突き破って侵食している。この世のあらゆる節理よりも、終わりという概念が高位に位置する証明であり、ラルクが、このまま滅び去る事を伝えていた。
「……ふうん。最後の最後に不意をうったか」
　自らの滅びを決定づけられたラルクは、その穴をなぞり──笑う。
「尽く、君は僕の予想を上回ってくれるねえ、エレナちゃん」
　心底から湧き上がるような歓喜の感情を乗せ、彼はエレナを称賛した。滅びをあたえられた体で、その滅びを与えた少女への賞賛救いようもなく狂っていて、その意味を理解する者はこの場にはいない。

　それからしばらくして、崩壊したその場に神殿騎士達が踏み込んだ。だが既に瓦礫の山にいたのは幾人かの逃げ遅れた神官達と、幼き少女セフィのみで、エレナと、この惨状を巻き起こしたラルクの姿はどこにも存在しなかった。

神殿編、完結
次話より最終章開始です。書き終わり次第投下していきます
ゴールデンウィーク中にかきためられるだけ書きたい……

魔術学院の平和主義者

神殺し編

第百四十話 むかしのはなし

書き終わった……（瀕死
最終章、投下開始します

　赤黒い雲が茜色の空を駆けていた。
　雨が降り注ぎ、血の入り混じった大地が泥に沈んだ。
　其処は地獄だった。
　人と人とが、どこの誰とも知らない相手と殺し合い、命を奪い合う地獄だ。戦場での魔術の多様、魔道兵器の活用により戦場のマナは吸い尽くされ、大地の何もかもが枯れ果てている。
　空も大地も失われ、人間の死体だけが折り重なる、まさに世界の終わりとでもいうのが相応しいような光景。だがその災禍の中心に、二つの動く影があった。
　一人は、戦場を彩る死体の一つ、まだ幼い躯を抱えている。
　もう一人は、この荒廃した大地へと、疲労の残る表情で周囲へと視線をめぐらせていた。この地獄で、生きている人間を探すように、縋るようにして。だが、この場に彼らのほかに生命は存在しない。誰もかれも死んでいて、誰もかれもが腐っていた。
　それを理解したのか、あるいはこれ以上探すのを不毛に思ったのか、一人は、
「……此処までだ」
　そう言った。
「もうこんな無意味なことは御終いにしよう」
　するともう一人、死体を抱えていた男が首を横に振る。
「まだ……まだだよ。だって、まだ」
「いいや、もうおしまいだ。これ以上何ができる」
　拒むような、抗うようなその声を、最初に声をあげた男は振り払う。地獄の果

てのような光景を前にして、彼の声は疲労に満ちていた。縋るように少年の躯を抱く男へと、彼は手を差し出す。
「行こう。もう此処は、ただの死地だ──」
「そんなことは無い!!」
　それは拒絶の言葉だった。もういいだろうと、諦めを促す男の声を拒絶する。振り絞るような悲鳴は荒野に響いた。返す者は誰もいない。それでも彼は叫ぶのをやめなかった。
「まだ……まだなにか！ 僕たちは！ 僕たちには!!」
　拒まれた男は、何か言いたげ気に口を開くが、それが言葉になる事もなかった。
「……なら、ずっとそうしているといい」
　疲れた、だけどそれ以上に悲しげな声だけを残して、男は彼から背を向けて、荒野を一人、去って行った。地獄の光景から逃げるような後ろ姿は、敗北者のものだった。挑み戦い敗れた男の哀愁を纏い、彼は戦場から立ち去った。
　残されたのはたった一人。
　死の山の上で、躯を抱えた男はたった一人で取り残された。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：；
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：

　何の夢だったか。
　ただひたすらに敗れ去った者の夢だった。何かに抗おうと全力で戦い続け、しかし破れ、何もかもを失った者の夢だった。夢で、最早全てが終わった死の大地で抗うと叫び続ける男はただ哀れで、醜く、痛ましかった。
　彼の内には善意しかないと伝わったからこそ、余計に。
　しかし、はて、何故私は夢を見ているのか、という疑問が頭をよぎった瞬間、エレナの意識は急速に覚醒を果たした。

「やあ、エレナちゃん」
　そして目の前に、あの憎い男がいる事に気が付いた。
　ラルク、神殿でエレナの協力者を騙りその実、セフィをあんなところまで追いつめた張本人。今この国であらゆる問題を巻き起こしてるその元凶だ。最後の最後、この男の心臓をエレナは貫いた筈なのだが、
　辺りを見渡すと此処は小さな小部屋。生活の痕跡もほとんど見られないような狭く何もない小部屋だった。エレナはひとまずその状況を理解し、そのままラルクを睨んだ。
「……なんで、死んでないの？」
「いや、死んでるよ？ 正確には死んでいる最中」
　ラルクは自分のローブを剥いで見せる。意外と鍛えられた身体。しかし胸元に、異様な穴がぽっかりと空いている。エレナが刺し貫いた胸が、心臓を無くし虚空と化していた。しかもその穴の中心から金色のマナが、蠢くようにして周辺を蝕んでいくのが見える。
　死のマナ、それが不死の身体を確実に蝕みつつあった。
　ラルク自身が言うように、彼の肉体は、間もなくして死ぬだろう。
「酷いなあエレナちゃん。僕もうすぐ死んじゃうよ？」
「早く死ね」
「容赦ないなあ」
　ラルクは朗らかに笑う。自分が死ぬと、そう告げて笑っている。その在り方は何処か異様だ。人間として決定的に軸が狂っているようにしか感じられない。だが、この男の瞳には理性がある。自分が今どういう状況で、今何をしようとしているのかが自分の中ではっきりしている者の目だった。
「何がしたかったの、結局あなたは」
「うん？ 別に、そこまで複雑な話じゃないさ」
「僕はね。世界中の人々が、幸せになってほしいんだ」
　真正面から告げられたその言葉に、偽りを感じる事は出来なかった。この国の彼方此方を歪め、破壊し、多くの人々を実験と称して傷つけて、不幸をまき散らした組織の親玉が、本気で、そんなことを言っている。
　その身勝手さに怒る前に、理解できぬ言葉に疑問を覚える前に

ただただ気持ちが悪かった。
　人間が、生きていく中で築く当たり前の倫理、ソレが根本から、この男は崩壊してしまっている。だが、ソレにもかかわらずこの男の瞳には理性の光が残っている。行動、その思考の回路は狂っているのに、理性は確かにある。自分の行いの全てを理解しているのだ。
　それがおぞましい。
　叶うなら今すぐこの場所から逃げ出したいが、身体を動かそうとすると身動き一つ取れない。見下ろしてみれば手術台のような場所に自分は固定されている事に今更気がついた。
「何故私を捕らえたの」
「もちろん君に用があるからさ。正確には君の力に、かな」
　ラルクはエレナの髪に触れる。嫌悪感が沸き立ったが動くことはできない。魔術も発動できないところを見ると、シールの扱うような封印の術式が施されているのかもしれない。
「最初は呪いの少女、セフィを回収するつもりだったんだけどね。いやあ、まさか君が来てくれるとは思わなかったよ。【死の巫女】否、今は精霊か」
「何のために」
「〝死〟を、得るため」
　ラルクは楽しそうに、そう口にした。エレナは顔を歪める。最早その破綻にも慣れた。悍ましさは変わりはないが。
「死が欲しいならゆっくり待ちなさい。そのうち貴方の体は壊れるわ」
「ああそうだね。そしてそれは〝好都合〟なんだけど、より確実で無ければならないからね。まあ、後はそれに」
　と、ラルクが顔をエレナに近づける。整った顔に、綺麗な笑みだった。多くの人を魅了する、その素性を知った途端おぞましく感じる笑顔、その笑みのままに言葉を紡ぐ。
「損得を抜きに、僕としては、君には無事でいて欲しいのさ」
「……は？」
　言っている意味が全く理解できずエレナは問い直した。
「……なに？ どういう意味？」

「そのままの意味さ。僕は君に無事でいて欲しい。君が無事のままであってくれた方が望ましいのさ。君が【呪いの精霊】を愛しく思うように、僕は君を愛しく思っている」
　ラルクの言葉のすべてを飲み込むのに数秒の時間を有した。そしてそれを完全に飲み込んだ瞬間、エレナにはえもしれぬ嫌悪感が沸き起こった。これは先のとは全くもって別物だ。
「このロリコン」
「その反応で返すのは凄いな君は。まあ、安心してくれ。君の肉体に劣情を催している訳じゃないから。これはもっと純粋な好意さ」
「キモい」
「今時の若い子は難しいなあ」
　ラルクは笑う。笑いながらも、しかし先の言葉を訂正するつもりはないらしい。そして先の言葉が戯言のような安さをエレナは感じなかった。つまり、この男は本当に自分に好意をもっているということになる。
「なんなの、まるで意味がわからないわ。貴方に恨まれる覚えはあっても、貴方に好意を抱かられる真似をした覚えはないわよ」
「僕が好感を持ったのは、君が僕にどうしたか、ではなくて、君がセフィのためになにをしたか、でね」
　ラルクは言葉を重ねる。その瞳は何処か輝いて見えた。何処か、素晴らしいものを発見した子供のように、
「君は深く関わるでもない少女のためにその身を投げ打った。打算がなかったわけじゃないだろう。だが、それでも神殿そのものを相手どる様なことは、それだけじゃあできない」
　その声はうっとりと、酔いしれるが如くだった。
「君の内には紛れもなく輝く物がある。それは尊く、しかし得難い物だ。誰もが獲得できるわけじゃない。しかし人の誰もが本来は持っている根源的な力。それを真っ直ぐに発揮できる君は、嘘偽りなく好意に値する。僕の中でね」
　これもまた、本心からの言葉に聞こえた。エレナは自分の中で、セフィの為にと行った全てが正しい行いだとは感じていない。身勝手であったし、正しい神殿側の意見も正当性があったことは認めている。だからこそ、目の前の男にそんな

評価を貰うとはおもいもしなかった。目の前の、エレナが知る限りでも許し難き行いを罪なき人々に強いたこの男に。
　やはり、理解できない。　だが、それとは別に目の前の男を抹殺せねばならないという確信もエレナの内にあった。
　この男は不吉だった。
　その内にある破綻が外へと溢れ出すその前に断固として止めなければ危険だと彼女がの鋭い本能が叫んでいた。身動きが取れれば即座に殺しかかっても構わないと思うほどの確信だった。
　だからこそ、身動きが取れない状況は歯痒かった、のだが、
「……何？」
　突然、大きな地響き、のように感じる音が天井から漏れ出した。かなりの衝撃だが、相当に遠くからの音のようです、鈍く浅く部屋は振動した。
　当然ラルクもそれには気がついたらしく、上を見上げるようにした。瞳を、何処か悲しそうに光らせて、
「ああ……どうやら部下が、仕事を全うしてくれたらしい。不可侵の白王相手に良くやってくれた」
「不可侵……？」
「かつての魔王さ。そして君の大事なシール先生が押し付けられた力でもある」
　唐突に湧いたシールの名。魔王、押し付けられたというその言葉の意味。いきなり増えた情報にエレナは眉を顰めた。
「シールがここにきているの？」
「蒼の魔女もね。此処は彼らの戦場の真下さ」
　エレナはシールたちが【崩壊物】との戦いに赴いたことは知らない。彼と自分の神殿の件は丁度同時期に、入れ違えるようにして発生したためだ。しかし、シールたちが何かしらの戦いに赴いたことと、その戦場の真下にこんな場所が用意されていたことが、偶然であるとはとても思えない。
　何か、全くもってろくでもないことを企んでいるのは間違いなく、しかしソレを理解したところで、身動きが取れない事には変わりは無い。
「さて、死んでしまった彼女の為にも、僕もすべきことをしなければね」
　そう言って頬に触れてくるラルクをエレナは睨みつけることしかできなかっ

た。
「怖い顔をするね？」
「罵ってもあげましょうか？ 早く死ね腐れ外道」
「もうすぐ死ぬんだけどねえ、僕」
「死んだ後にもう一回殺してあげるわ。必ず」
　怖い怖い、と、ラルクは笑い、そして失われていない左の掌をエレナへと向けた。手のひらからは魔術の発光が起こり、それがエレナの意識を刈り取って行く。
「力を貸してもらうよ、エレナちゃん」
　彼女の意識は再び暗転した。

第百四十一話 むかしのはなし その２

　血濡れた平原。崩壊物との決戦跡地。
　爆光、【ラグナ】の人間、崩壊物を操りガイディアを危機に晒していた女を捕らえようとした瞬間起こった、敵の自殺。そして同時に巻き起こった強力な術式の光に対して、シールとリーンの行動は素早く的確だった。
「【封印結界】」
「【術式強化】」
　封印術の防壁、それをさらに強化する術式が築かれる。幾度の戦場を経験してきた彼らにとって自爆特攻という敵の選択は決して珍しいものではない。対処は容易だった。
　だから問題なのは、この自爆に何の意味があるかだ。
　死して尚何かを起こそうとするのは、よっぽど自暴自棄になるか、あるいは自分の命を投げ打ってまで、遂行すべき目的があるからだ。そして今自殺を選んだ彼女はおそらくは後者。
　自分に一矢報いるために死を選ぶとは思えない。ではなにを？
　最初の爆発を防ぐと術式の光は弱まり、景色も回復する。シールは目を開き、眼前の光景を確認する。そこには、
「……何だこれは」
「……」
　目の前には、何もなかった
　そう、何もなかった。女の死体も、地面に散らばった女の血肉も、それどころかシール達が打ち倒した【崩壊物】の腐肉も青紫の血の海も、それによって汚染された草原も、何もかもが消え失せていた。目に見える、見渡す限りにおける総てが。
　何もない。全てが無い。あるのは徹底的に生気を失い乾ききった大地のみ。美

しき平原は、血まみれの平原は、一瞬でなにもない荒野に変貌を遂げていた。
「……マナが失われています」
　リーンが地面にそっと手を当て、独り言のように呟く。
　マナ、世界を構築する万能物質。それが一切合切失われれば、なるほど確かにこういう光景が生まれるかもしれない。
「ですが、大気のマナはともかく、平原や【崩壊物】のように既に物質化している存在を分解してマナを奪うなんて、ことは」
「そのためにアレが必要だったのでしょう」
　リーンが指差す先、そこは確か、女の死体があった場所だ。今は跡形もなく、本当に女があの場所にいたの疑わしく思えてしまうほどだったが、唯一、彼女がそこにいた証がその場に落ちていた。
「魔眼……なるほど」
　ヴェイン、彼の魔眼はマナへの強制力だ。所有者の思うままにその眼の届くすべてのマナを手繰る。時には精霊の存在すらある程度縛れる程に。
　この魔眼を使い、更に己の命を賭して術式を生み出すならば、一帯のマナをすべてを根こそぎにコントロールすることは可能かもしれない。なるほど、その理屈は理解できた。
　問題は、
「これだけの大規模な範囲のマナを奪って、なにをするか、ですね」
「いい予感は全くしませんが」
　勿論、シールだって同意見だ。これだけの範囲のマナ、更にあの大規模な崩壊物からのまで奪い取って収集したマナは、莫大だ。今までの様々な戦いを経験してきたが、意図的にここまでの量のマナを集めたという状況に出くわしたことはない。
　マナは万能物質だ。そのエネルギーは莫大だ、が、その力はある程度の密度で飽和状態になり、そして形になる。状況によってどんな形になるかは不明。
　つまりは、収集しすぎたマナは何になるかもわからない爆弾と大差ない。だというのに、ここまで広大な範囲のマナを集めたとなるとそれは……
「下手すれば、それだけでこの一帯が爆発で消えるかもしれませんね」
「不吉すぎるので勘弁してくれません？」

リーンの言葉が冗談でも何でもないのだから性質が悪い。実際下手すればそうなる。マナを集めるという行為だけでもそれだけの危険性が高まるのだ。これだけの量のマナの塊を意図的に悪用するとなればどうなるか、想像だってしたくはなかった。
　シールは自分のコンディションを確認する。体力気力共に減っている。が、戦えないというのとはまた違う。劣悪な環境で休みなく戦い続ける事には慣れている。
　リーンを確認する。表情は相変わらず変化はなく、しかしその顔色は比較的健康だ。何よりこちらを睨み返す彼女の目が、余計な心配をするなと語っていた。
　シールは笑顔を向け、そして意識を改める。仕事の再開だ。
「リーン先生、マナの行き先、分かります？」
「地下です。かなりの深くに空洞があります」
　索敵魔術で調べていたのか、即答で返事がきた。地下、空洞、ここを【崩壊物】との戦場にと選んだのは騎士団だが、完全に誘導されていたらしい。【崩壊物】の進行軌道上であり、シール達が暴れても問題ない場所といえばここくらいしかないのだから、予測も楽だっただろう。
　現状はあまり良くない。
　状況は次々に動いているのに、こちらはそれがどういう意図あってのものなのか全くもってつかめていない。奇怪な魔術結社達に一手二手先を行かれている。嫌な流れだ。こういう流れの最後に待っているのは確実な厄ネタであることは、シール達は経験則でそれを知っていた。
「急ぎましょうか」
　シールは自分の内の魔力にのみ頼って、封印術式を生み出した。リーンが発見した地下の空洞、そこにマナがあり意図してそれを送り込んだのなら、それを受けとる人間がいなければならないはずだ。つまり何らかの形で、その地下へと続く道も存在するはずなのだ。
　それをさぐるため、先ずこの一帯の大地の表面削りとって──
「……？」
　そうしようとする前に、シールの近くが一つの動きを捉えた。
　失われている筈のマナの流れを感じた。自分たちのすぐ近く、それは転移術を

利用したマナの流れだった。完全にこちらの大地のマナは失われているからこそ余計にその動きは目立つ。何処からともなくマナが休息に流れ込み、歪み、たわみ、人の形になって二人の目の前に現れる。
「っと、間に合った、かな？」
　何時もは学院にて高みの見物を決め込んでいるミストが、シールたちの前に姿を現した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　地下通路、
「敵の〝指導者〟がわかった？」
「うん、まあねえ」
　シールが大地の表面部分を根こそぎなぎ払い発見した、地下へと続くと思しき階段。それを下りながら、シールとリーンは、突如姿を現したミストの話を聞いていた。
「エレナちゃんを守る任を就かせていた神殿に潜り込んでいた部下が殺されていた。そしてその部下に成り代わって僕にずっと手紙を送り届けていたやつがいる」
「……って、つまりエレナは？」
「どうなっているかは全く分からない」
　それを聞いた時、シールは思わずミストに何かしらの言葉を浴びせたくなったが、堪えた。ミストには落ち度はなかったのは彼とのつきあいで確信が持てる。ミストの手を上回る事態だったのだ。
　それに、そう語るミスト自身の様子も気がかりだ。語る彼の様子にはまるで何時もの余裕が感じられなかった。何かに焦るような、あるいは恐れるような様子で、とてもではないが無神経な言葉はかけられない。
「それで？　そのニセモノの手紙の主とこちらの問題と、あまり繋がっているようには感じはしませんが？」
　そこへリーンが遠慮のない問いを投げると、ミストはわずかに苦笑し、まあ確証があるわけじゃないんだけど、と前置いた。

「そもそもエレナちゃんが神殿に行くことになったきっかけ、セフィちゃんが神殿に捕まったって話は二人とも把握してるよね？」
シールとリーンはうなづく。セフィ、呪いの聖霊である彼女が神殿に補足された。そもそもこれがエレナが神殿へと駆り立て巨大な騒動を引き起こすきっかけとなったのだ。忘れるはずはない。
「でもさ、それ、おかしくない？」
「……なにがですか？」
「どうやって神殿は、セフィちゃんを把握したんだろうね？」
「それは……」
確かに疑問ではあった。呪いの精霊、セフィの救出は国からの密命、ニルナック村の状況を調査せよ、という依頼の副産物だ。そして呪いの聖霊である彼女を確認したのはシール、エレナ、ヴェイン達のみ。
帰還の際、彼女を治療のため学院に連れ帰る旨を村の者達にも説明したが、その時のセフィの姿は元の少女のままで、シール達は一言も「精霊になったから」とは口にしていない。説明したのは彼女が目覚めた後、彼女の両親だけだ。その両親にしたって誰にも喋ってはならないと固く口止めはしてある。
学院に連れ帰ってからはメリアが彼女を預かり、学院からは隔離された場所で彼女の治療を続けていた。
つまり、彼女を知り、更に精霊であると知っている人間は極端に限られるのだ。そしてそれを知る者達が、神殿にベラベラとそれを漏らすとは考えにくい。
彼女が目覚めて以降は、セフィの姿を晒す機会も増えた。が、もとより魔術師以前に異能者の多い学院で、セフィだけがピンポイントに補足されるというのもおかしな話だ。それなら、もっと多くが神に背く異端者と指摘されてもおかしくはないのだ。そういう能力者も事実オルフェス学院には存在する。
にも、関わらず、セフィが、セフィだけが神殿に補足された。彼女のことを知るのはシール達だけだ。シール達を除くなら、他に彼女を知るのはただ一つ。
「つまり、【ラグナ】がセフィの情報を流したと？ 何のために？」
「さて、ね。そこまでは分からない。彼自身に聞かないと。だけれど、誰が漏らしたか、と言うと【ラグナ】以外に思い当たらない。ヴェイン達やメリアが裏切ると想うかい？」

まさか、とシールは首を横に振った。彼らはそんなことはしないと確信できる。それができないほどに彼らとの付き合いは浅くない。しかしそれなら
「それと、【ラグナ】の首謀者とはどういったつながりが？]
「間者に成りすました男から手紙が来ていたって言ったよね」
　そう言ってミストはシールに差し出したのは、まさしくその手紙だ。薄暗い階段の中その手紙を広げてみると、短い文章と、最後に名前が記されている。
「……ラルク？」
　その名前を聞いた瞬間、ミストの顔色はより一層渋くなった。この男は、表向き、表情をコロコロと変え感情を表現する事はあった。が、流石にここまで苦々しさを顔に出すのは見たことが無かった。
「……知り合いですか？」
「うん、そう……だから確信できる。この男が、僕の部下に成りすましていたこの男が、【ラグナ】のトップさ。断言したっていい」
　その核心が何処から来るのか、ソレをシールが問う前に、長く長く続いていた地下への階段が途切れた。申し訳程度に照明に照らされた長く続く廊下、そしてその先には古く小さな扉が一つ。
　一見その道に障害は無いようだが、リーンがスッと手でシールとミストの歩みを遮った。
「結界が何重にも巡らされてあります」
「解除にはどれくらい？」
「数分で」
「それならお願いします。で、その間に、学院長」
　リーンが早速結界の解除に取り掛かっている隙に、シールは未だ浮かない顔のミストへと振り返る。
「ラルクと言う人物の話を。十中八九、これから戦うことになりそうだ」
　敵の情報、その背景を知るのは重要だ。間違いなくミストにとって苦い過去の思い出となるのだろう。だが、これは聞かなくてはならない。この先の相手がどんな人物であれ、全く持って油断できない相手であることには間違いないのだからあ。
　ミストもそれは分かっているのか、頷き、

「うん、手短に話そうか。正直、あまり長々と語りたい話ではないし」
　そんな前置きを置いて、ミストは語り始めた。
　一人の敗れさった男の話を。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　何処にでもある村の、何処にでもいるような夫婦、その二人の間に生まれた子供。
　彼はどこにでもいる普通の少年、ではなかった。
　彼は、天才だった。
　彼は学び舎の全くない田舎の村で、しかし村長が貯蔵していた本を全て読み解くほどに知性に恵まれていた。大人でも数人がかりでようやく持ち上げるような丸太を、たった一人で持ち上げるような力を持っていた。
　そして何より、両親は愚か村の誰一人として全く持ち得なかった魔力に恵まれていた。
　ミストはそんな〝彼〟と同じ村で生まれた、なんでもない平凡な少年だった。
　特に何か際立った特技があるでもなく、冴えた頭があるでもない。むしろほかの子供たちよりもやること成すこと〝のろま〟で、よく馬鹿にされていた。仕事の一つもまともにできないと良く親からも馬鹿にされていたほどだ。
　だがミストにも誇れる事が一つあった。
　それは〝彼〟が、ミストの友人だったことだ。
　ミストから見て、否、村の誰からも見ても、彼は誰よりも善良で、優しく、そして優れていた。弱気を助け、強気をくじき、村の人々を、まだ子供と言って良いような年の頃から守ってきた。学の無い村人たちに読み書きを教え、新たな道具を生み出して村の生活に役立てた。病を患った子供が出れば、一人で険しい山に入り薬草を摘んで与えた。しかし、決して安易に何もかも与えるようなこともしない。村人たちがより良い暮らしができるよう、つねに取り計らっていた。
〝彼〟は村にとって、ミストにとって、紛れも無く英雄だった
　ミストは彼の友人であることが誇らしかった。彼のような輝ける存在が、自分のような人間に親しく接してくれる事が嬉しかった。自分に誇るものが無い彼に

とっての唯一の誇りが彼だったのだ。
　彼の事は誇らしく、しかし憧れはしなかった。〝彼〟は太陽のような存在で、だから絶対に手は届かない。ただ仰ぎ見てその存在に感謝する。ミストにとっての〝彼〟はそういう存在だった。
　だから、そんな彼と同じ魔力という才能が、自分にもあると気がついたはだいぶ後になってからだった。
　自分の才能に気がつかないまま、時が過ぎた。狭い狭い村の中ではあったが、そんな狭い世界の中でも様々な事があった。楽しい事があった。悲しいことがあった。憎しみがあった。愛があった。そしてそれらをミストは彼と共に経験した。
　――僕は村を出ようと思うんだ
　彼がそう口にしたのは、何度目の春を迎えたときのことだったろう。
　――どれだけできるかはわからないけど、この力を多くの人のために役立てたい
　彼はそう決意していた。そしてミストには、いずれそうなることはわかっていた。彼の才能は、この小さな村に収まりきるものではないと、ミストは確信していたからだ。
　ミストは彼と共に村を出た。
　彼の用になれる打なんて思ってもいなかったが、彼の力に少しでもなれればと思ったからだ。最初は断られるかと思ったが、〝彼〟はミストの同行を喜んだ。
　だが、そうして村を出た彼らは自分が井の中の蛙であると知る、事もなかった。
〝彼〟の才能は、大都会の、多くの人々の中でも見事に発揮された。〝彼〟は何もない田舎から飛び出した時点で、都会に住む魔術師たちの魔力を大きく上回っていた。魔術師たちが何日もかけて行う大魔術をたった一人でこなし、町中をどよめかせた。
〝彼〟は、まさに、真の天才だったのだ。
　だが村の時と違い、〝彼〟の才能は時として、祝福ではなく災厄も招くことになった。〝彼〟を妬み恨み嫌悪し、最後には悪意をもって攻撃をしかけてくるもの。〝彼〟の才能を悪徳に利用しようと声をかけてくるもの。

彼は学ぶ。自分の力はあまり大きく見せつけるべきではないと。
　多くを助ける。単純な、純粋な善意。だがだからこそ慎重さが必要だと〝彼〟はミストにも語っていた。彼は自分の力を理解していた。その危うさも。
　そこに嘘も偽りも無い。奢りも無い。
　ミストの目の前にいるのは、紛れも無く、英雄だった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「ああ、僕は長く生きてきたけれど、正直あれほどの天才を、あれほどの人格者を、彼以外に見たことがなかったよ。勿論、君たち二人とも比較してもね」
　ミストはそういって、〝彼〟を絶賛した。絶賛こそしたが、その声は疲弊に沈んでいた。誇らしき〝彼〟の人生を語るミストの表情には、過去を眩く思う色も、懐かしむ気持ちも感じられない。ただただ、その過去の疎ましさに疲弊していた。
「とにかくその男が度し難いほどのお人よしだった、ということでいいのですか？」
　目の前の結界を片手で解除を進めながら、リーンは問う。お人好し、なんて不躾な言い方だったが、ミストはそれに対して咎める事も無く頷いて、
「……ああ、そうだね、彼はお人よしだった――救いがたいほどに」
　ミストはその疲労を払うように、溜息を一つついた。
「さて、続きだ。彼は善行を続けた。顔を隠し名前を隠し、多くの、本当に多くの人々を救ってきた。この国だけじゃない、世界中の人々をね。誇張表現抜きに」
　何処かの街や村で、英雄の昔話が出てきたら、それは間違いなく「彼」がモデルだ、と、ミストは笑った。今の繁栄は彼のおかげだ、と言っても、決して言いすぎでないくらいに、彼は多くを救い続けてきたのだ。
「だけど、それはやってきた」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：

　それはやってきた。
　唐突ではなくゆっくりと、綿の糸で首を締めるように着実に確実に、残酷にやってきた。「限界」という壁が。
　彼の才能には際限がない。彼の努力は絶え間ない。彼の仲間に不満を垂れるものなどいない。彼に落ち度は全く持って無かったと断言できるだろう。
　だが、それでも、限界は訪れるのだ。
　言うなればそれは〝彼の〟ではなく〝善行の〟限界だったのだ。
　多くの人々を苦しめる病を世界中から払ったとして、生まれながらに病弱な子供が風邪を引いて、ある日あっさりと死んでしまうのを止められるだろうか。飢饉によって食料が乏しく、どうしようもなくなって、僅かにのこされた食事を求めて争い殺し食い合う。僅かに食料をもってきたとして、足りるわけがない。
　これらは当然、世界で起こりうる事だ。病や、事故や、飢え、争い、それらは人間という存在を構成する一部分であり、決して切り離せない。どれだけ社会が発展しようと、どれだけ多くの人々が見守ろうと、死ぬ時は死ぬ。あっさりと、死神は人々をさらって行ってしまう。
　それは世界の道理だ。どれだけ人々が頑張ったところで、限界はある。
　伸ばせる手は二本しかなく、その腕はあまりにも短い。
〝彼〟は、それを嘆いた。
　あたりまえのように死んで行く人々を悲しんだ。世界の摂理に攫われて行く人々を哀れんだ。彼は心優しかったから、普通の人のように「仕方ない」と適当な見切りをつける事ができなかった。
　仲間の誰よりも人の死を痛み、誰よりも己の無力さを感じながら、それでも彼は旅を続ける。そして知って行く。自身が強大になる程に、努力を重ねるごとに、それでも、届かない命があると。
　彼は、足掻いた。それでも足掻いた。
　才能をさらに伸ばした。あらゆる知識を脳髄に刻み込んだ。あらゆる魔術に精

通し、あらゆる戦闘技能を身につけた。自分の命の限界を知り、より長く多くの人を救うために不死の禁忌にすら触れた。
　苛烈過ぎる彼の努力は、仲間達を焼きつした。道程で一人死に、二人死に、三人が逃げて、四人が老いてこの世を去って、その度に彼は悲しんだ。だがそれでもどこまで行こうとも、彼の善意は、良心は、欠けることなくそこにあった。だから猶の事、苦しみ続けた。
〝彼〟は歩み続けた。〝彼〟は救い続けた。
〝彼〟でしか救えないような悲劇は目の前に無数に広がっていた。それを見過ごせるほどに彼の優しさは甘くはなかった。己の身を削ってでも、自ら前へと前へと進み続けた。

　そして、

　そして、焼き尽された己の故郷へ、〝彼〟はたどり着いた。

　原因は国同士の戦争で、その両国の狭間に遇った故郷が焼かれたという、それだけの事だった。多くを救おうと奔走していたがために、彼は自分の故郷を失った。
　皆死んでいた。幼い子供が母親と折り重なるように死んでいた。老いおとろえた老人が、顔に絶望を残して最後をむかえていた。老人は、村で、〝彼〟と親しくしていた友人の一人だった。皺々に老いた顔を、未だ村から飛び出した時と変わらぬ顔の〝彼〟は抱きしめ、泣いた。
　それを、最後の最後に残った〝彼〟の仲間、ミストは見つめていた。
　村を出た時に遇った〝彼〟への焦がれは最早摩耗しきっていた。あるのはただただ疲労だけだ。それでも〝彼〟が正しかったから、間違ってはいなかったから追いかけ続けた。
「……此処までだ」
　だけれども、目の前で、一番大事だったものの何もかもを失って、ミストの中にあった何かが、〝彼〟を慕い〝彼〟を追いかけた時からあった何かが、へし折

れた。
「もうこんな無意味なことは御終いにしよう」
　そう口にした瞬間、自分の中の大切なものが全て崩れ去る感覚をミストは味わった。コレまで生きてきた中で、ずっとずっとよりどころにしていたものが粉みじんに砕け、死の大地に沈んでいったのを感じた。
　ミストは〝彼〟の前から去った。大切なものを全て失って。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「僕は逃げた。果てまで抗い続ける彼に付き合いきれなくなって」
　ミストの話は終わった。かつて彼が憧れた男の話。どうしようもなく善人であり続けた男の話。英雄の話はそれで終わった。だが、その話は最後ではない。彼は終わってなどいない。続きがあったからこそ、今ここに三人が並んでいるのだ。
「彼のその後は知らない。彼がその後活躍したって話は全く聞かなかった。何を考えたのかもわからない。だけど──」
　区切り、そして確信するように、
「もし、【ラグナ】なんて組織に彼が属しているとしたら、彼がトップでない訳がない。断言しよう。何かしら理由が無い限り、彼は全ての人間の上に立つ男だ。だからこそ、この手紙の主は、【ラグナ】の指導者だ」
「結界、解けます」
　いつもと変わらないリーンの冷淡な声が響いた。彼女が掲げていた掌を振ると、マナの破砕音と共に彼らの道を塞いでいた結界はあっさりと溶けて消えた。
　残されたのは古びた扉が一つだけ。
「行きますか」
「……そうだね。後は彼自身に尋ねるとしよう」

ミストがもう一度、重々しい溜息をついて、壁に預けていた体を起こし、前を向く。シールも同じく。三人の視線に押されるように、結界を失い無防備となった古びた扉はきしむ音を立てながら、ゆっくりと開いて行った。

　そして

「おや、ミスト。君も来たのか。久しぶりだなあ……数百年ぶり？」

　英雄の、〝なれのはて〟が其処にいた。

第百四十二話 成り果てた男

　むかし、最後の友人が立ち去ったその後のはなし
　最後の友人が去った、その後も〝彼〟は死体の山の中にいた。最早二度と目を開くことも無い遺体を抱いていた。徐々に腐り形すら失いつつある死体を抱きつづける。〝彼〟以外には何もない。誰も訪れない。ここが死地と誰もが知っていたからだ。獣も、羽虫の一匹もやってこない。汚染され腐り果てた大地の上で、彼は、泣いた。枯れ果てたその上で、ただ声だけを上げて泣き続けた。
　そして、
「嗚呼……」
　小さく、声を上げた。その声色は乾ききって、掠れていた。だが、
「わかった」
　どこか、歓喜にも似た色があった。何かを理解したような、理解しきったような声。まるで子供がパズルを前に回答を見つけた時のような、確信の声。
「わかった、わかった！ わかった！ わかった!!!」
　そして引きつったような笑い声が木霊した。狂ったような声だった。だがそこには理性があった。知性があった。感情があった。悲しみがあった。絶望があった。
「わかったわかったわかったわかったそうかそうかそうかそうかそうかそうかそうかそうかそうかそうかそうかそうだったんだハハハアッハハハハハッハハハハッハハハハハ!!!!」
　狂ったような笑い。だが決して彼は狂えず
　理性を保ったまま、死の大地の淵で、絶望を吐き出すように笑い続けた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　狭い個室だった。
　突貫で作られて事が分かる狭く何もない部屋。そこにいたのは二人。一人はこちらに向けて朗らかに笑う男、【ラグナ】の指導者。ミストの古き知り合いにして〝英雄〟ラルク。ローブで体を覆っている。見ればローブの右腕部分が窪んでいる。右腕が失われていた。
　そしてその彼の近くに横たわる一人の少女、
「エレナ⁉」
　学院で別れた彼女がそこにいた。ボロボロに裂けた見覚えのないローブを身に纏ってはいるものの、間違いなく彼女だ。動き出しそうになるのを抑えながらラルクを睨むと、彼は頬笑み、眠るエレナの頬を残る左手の甲で撫でる。
「安心して欲しい。彼女は無事だ……まあ、精霊として目覚めてしまったけれど」
「……精霊？」
「おっと、僕が何かしたわけじゃあないんだよ？　呪いの精霊とは違う。彼女の魂は元より精霊化に耐えうるキャパシティを保有していたのさ」
　どこか楽しげに語るラルクに、ミストは顔をしかめ、シールは目を細め、リーンは無表情のまま
「いいからウチの生徒を離しなさいロリコン」
「ひどいなあ。流石に子供に欲情はしな「【穿て】」
　言葉を聞き終える間もなく、空気を読むこともなく、容赦ない速攻をリーンが仕掛けた。生み出された術式が大気に残る僅かなマナから刃を成し、ラルクの首を寸分違わず切り裂いた。
　流石にシールもミストも唖然としたが、ラルクは、
「っい、っだいなあ……」
　呻きながら、マナの刃を片手で引き抜いて、笑った。引き抜かれた傷口は血が零れる事も無く再生を果たす。その異常な不死性は牢獄城での暗殺者を彷彿とさ

せた。あるいはそれ以上か
　シールのその反応にラルクは気づいたのか、肩を竦め、
「そんなに焦らなくても、もうすぐ僕は死ぬよ？」
　そう言って、ラルクは自身の僅かにローブをズラし、自らの胸部を露出させた。
「……なっ」
　その胸には大きな穴が開いている。それは先のリーンの攻撃の様に再生する様子も見せない。輝く金色の光が穴の周囲をまるで罅のように奔り、更にその穴を広げていく。どう見ても尋常ではない傷がラルクの肉体を蝕んでいた。
「それは……」
「ああ、エレナの一撃だ。もう少ししたら僕は死ぬ」
　その言葉に、誰よりも衝撃を受けたのはミストのようだ。目を見開き、彼の傷を見て、僅かに体を震わせる。それも当然ではあるだろう。ミストにとってかつては彼は英雄だったのだから。
「では、その死にかけの人間が何をしようっていうんですか？」
「何だと思う？」
　そう言葉にして、再び、エレナへとその手を近づける。だがその前に、シールとリーンは動いていた。何をしようとしているのかは不明だが、しかし、全く持って碌でもないことは分かっているのだから当然だ。
　封印剣を生み出し、一歩で距離を潰し、振るう。同時にリーンが高速詠唱によってシールを強化する。狭い空間、巨大な魔術を編み込めないと理解したうえでのコンビネーション、それは達人の域をとうに超えていた。が、
「おっと」
　それは地面の小石を見つけ、躓かないように足をのけた、なんてくらいの気軽さだった。ラルクが身体を伏せ、シールの剣を避ける。同時に、無事な左の掌、その指を複雑に蠢かし、
「こ・わ・い・なぁ」
「ッ!!」
　一瞬、ほんの僅かな間に、近距離まで迫ったシールとラルクの間におびただしい量の術式が描かれ、そして炸裂した。単純だが強力な風刃の術式、シールは詰

めた距離を再び開け、同時に封印剣でそれらを喰らい、抑めた。
「高度な、術式構築か！」
　魔力によって超高速で描かれた魔法術式。リーンのような才能に依る高速詠唱とはまた違う、幾度なく繰り返された練磨の果てに得られる高等技術。それは、未だ後ろに控えるミストが得意とする技術の筈だが、
「ミストにコレ、仕込んだのは僕だからねえ」
　ラルクが再び左の掌を宙に向ける。指の一本一本が別の生き物のように気味の悪い動きをしながらも、それらは高速で魔力を練り術式を描く。
「伏せろ！」
　鋭い声、背後のミストの指示にリーンもシールも即座に反応する。背後で同じく術式を組んでいたらしい彼と、ラルクの術が同時に発動する。狭い部屋を埋め尽くす衝撃と光が放たれた。
　その間リーンはエレナの身体を防護術式で守り、更にシールが彼女の身体をその場から引きはがし、ラルクから離した。そして時と共に光と衝撃が収まると、ラルクとミストが向き合っていた。
「やあミスト。随分腕を上げたねえ。構築速度だけなら僕より上かな？」
「ああ、全く……嫌な気分だ」
　互いにその姿は若く、しかしその中身は人の生をとうに超越した者同士だ。だが二人の表情は対照的で、ラルクはいまだ朗らかな笑みを浮かべ、対してミストは苦々しい顔を隠さない。
「ラルク、君は、何がしたいんだ」
「決まってるじゃないか。僕の目的なんて、昔から変わりない」
　ラルクは左腕を広げるようにして、とても優しそうな笑顔を浮かべた。
「僕は、苦しんでいる人々を救いたい。ただそれだけだ」
　その言葉にミストではなくリーンが不快気に眉をひそめた。
「多くの人が苦しむような真似をしといて、そんな言葉を吐くのですか？」
「ああ……」
　リーンの問いに、ラルクは息を吐く。そして物憂げに首を横に振った。
「そうだね、僕は多くの人々に苦しみを強いてきた。【ラグナ】と言う組織を利用してね。そしてそれは紛れもなく僕の罪だ。償いようのない」

その声は、真に悔やむ声だった。己の罪を罪と認め、救いようのない愚かな悪と理解した声だった。安い嘘偽りであるとは思えない。だが、それでも
「それでも、僕はやらなきゃいけないんだ」
　断言した。
「救わなければいけない。幸せにしなきゃならない。だからその罪は全て背負おう。何もかもを救った後、誰も彼もを幸せにした後、僕一人だけ地獄の業火に焼かれ果てよう」
　異常だ。シールは理解した。
【ラグナ】なる組織を率いる以上、まっとうであるなどと思ってはいなかったが、事此処にいたって、目の前にいる男はシールが見てきたどの人間よりもぶっ飛んで異端であると理解した。
　何が異常か。この男は、真っ当な善人と同じように、悪を悪と、罪を罪と理解している。だが同時に、その悪に手を染める事を、罪に身を染める事をまるで躊躇わない。善人が善行のために悪行を成す、真っ当な道徳を保ちながら完璧に道を踏み外している。
　ミストが言うように、まさしく善人であったのだろう。真っ当であったのだろう。そしてそのまま外道となった。救いようの無い怪物に成り果てた。異常だ。
　正直言って話していたくも無かった。目の前の男は〝おぞまし過ぎる〟
　だが、言葉は続けさせなくてはならない。何故なら時と共にこの男は死ぬのだから
　ラルクがこちらに開かした胸の傷には、紛れもなくエレナの死の波動が宿っていた。一度彼女の【顕現】と相対している以上、見間違えはしない。ならば時とともに確実に、ラルクの命は削れて言っている。
　時間を稼げば、それだけ有利になるのだ。だからこのまま喋らせて……
「……？」
　そこで、疑問が頭を掠めた。
　時間が経てば、ラルクは死ぬ。なら何故この男は、ベラベラと此方の問いかけに乗ってくるのだろう。自分のタイムリミットはこの男が一番理解しているはずだ。それなのになぜ、自分からその時間を無駄に浪費するようなまねをする？
　これでは、まるで、向こうが時間を稼いでいるような──

「――ッ!!」
　その事実に気が付いたのは、リーンもミストも同時だった。
　相手がこちらの時間稼ぎに乗る。それはすなわち相手の目的も時間稼ぎという事に他ならない。その意図も、そこから生まれる結果も予想は出来ない。だが彼らは経験として、危険だとそれを察知した。
「【封印剣！】」
「【【焔】】」
「【牢ッ!!】」
　攻撃は同時に、三者三様に繰り出された。シールは術式剣を振るい、リーンは高速詠唱で焼き切り、ミストは新たな術式を構築しラルクを囲み狙い撃った。
「おっと、早いな」
　だがその三人の攻撃は、ラルクに届く前に弾かれた。
　結界、シールの封印術式も、リーンの高速詠唱から繰り出された焔も、ミストの術式構築から生まれた破滅の光も全てを弾き飛ばした。前もって用意された代物。先ほどは使用せず、今になって発動させた。意図を読み取られぬように、隠していた。
「時間稼ぎを見抜かれるとは思わなかったな」
「何をたくらんでいる!?」
　結界、その術式を破壊すべく新たに封印剣を生み出しながら、シールは溜まらずに叫んだ。流石に理解できなかった。死ぬための時間稼ぎをするなんて、今まで出会ったことも無かった。
「神と人間との境界線はなんだと思う？」
　封印術式を叩き込まれ、激しく結界が光を放つのを平然と眺めながら、ラルクは言葉を重ねる。
「それはね、生物としての魂の質だ」
　リーンが更に踏み込み、結界に手を触れ、術式を分解する。更にミストがその上から結界そのものを新たな術式に書き換えていく。だがそれでもラルクは言葉を止めず、軽やかに語り続けた。
「魂の器が人のソレでは、生物はその体の構造を進化させられない。それは人という種が定まった時より決まっている」

まあ、時々、生まれながらに魂の質が人の域を超えている人間もいるけれど、と、シールによって保護されたエレナを見て微笑む。
「だけど僕はそうじゃなかった。だからもし僕が人の領域を超えるほどの存在になろうとすると、砕け散る。【崩壊】してしまう」
【崩壊物】。【ラグナ】ガイディアに仕掛けたあの大量の【崩壊物】がシールの頭によぎった。
「なら、どうするか」
彼がそう問いかけると同時に、この狭い小部屋に大きな振動がふりかかった。シールたちの攻撃の結果ではない。部屋そのものが蠢いている。
「なん……!?」
衝撃の原因は上、天井からだ。何の飾り気もなかった天井が、衝撃と共に崩れていく。崩壊して行く。そしてその先から現れたのは、光だった。
「此処に集結させたのか?!」
それは、地上で奪い去られた膨大な量の、あまりにも膨大な量のマナの塊。飽和状態になっているのか彼方此方で危うい光を放ちながらも、絶妙なバランスで保たれていた。
「人は神に近づけない。神になろうとすれば力が崩れる。それなら──」
ラルクは宙へと手を掲げ、
「神に、産まれ直ればいい」
笑った。
「【我が簒奪した力を此処に顕現す】」
詠唱と共に彼の肉体から蠢くのは彼の魔力。生誕の巫女から簒奪した力。外法に外法を重ね彼がこの時のためだけに獲得した神の力
「【リヴ】」
一瞬、神の形がラルクの魔力から顕現した。だがそれは次の瞬間掲げられた左手から宙へと放たれ、天井のマナへと吸い寄せられる。
「……!!」
マナは万能の物質だ。その存在自体は単なる力。なににも染まり、その形と力を変えてしまう。そして、今、大地の全てと、それすら飲み食らう【崩壊物】から吐き出された致命的な程のマナが、【生誕】の力に染まった。

「生誕には死が必要だ。だから死に連なる呪いを研究していたんだけれど、」
　そして自身の胸の穴に手をかけ
「手間が省けた。まさか死の神が巫女を遣わすとは。まさに行幸だ」
　その穴を、一気に広げた。
「なっ……！」
　瞬間、彼の肉体に侵食していた死の波動が一気にその範囲を広げた。頭のてっぺんからつま先に至るまで金色の罅が入り、メキメキと音を立てながら彼の肉体を破壊していく。
　そして同時に脈動の音がした。ソレはこの部屋全てから響く術式の発動音。何も無かった部屋。飾り気も何も無い黒塗りの部屋の全てが脈動している。隠されていた、その壁に刻み込まれていた術式が発動していた。
「さて、御照覧あれ」
　そして、彼の肉体が完全に崩壊しきるその瞬間、天井の莫大なマナが光を放ち、そして部屋中を包み込んだ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

「……何が、起きた？」
　シールはそんな自分の声と共に覚醒した。自分の身体は瓦礫と土に埋まっている。一瞬、ラルクの存在を思い返し警戒するが周囲にあの男の気配は感じない。身体を起こし身体を確認すると怪我は無い。数日間ぶっ続けで戦い続けた疲労はまだ残っているが、それはさほど問題ではない。
「っと、」
　そして自分の身体の下にはエレナがいる。安らかな寝顔を覗かせている彼女に

息をつき、そして次に周囲に視線をめぐらせた。
　なにもかもが崩れていた。元々突貫で作られたような場所だったが、最早跡形も無い。だが、地下深くだったにもかかわらず生き埋めのようにはなっていなかった。ソレはやはり、あの膨大なマナを貯蔵するため天井に巨大な貯蔵庫があったからだろう。
　部屋が崩壊した今、上を見上げるとぽっかりと空が見える。
　想像以上にこの場所は地上より深くにあったらしく、広がる空は遠く、そして荒れ狂っていた。暗雲が渦巻き今にも雷を地上へと降り注ぎそうだ。地上から一気にマナが失われた結果、大穴が開いたこの場所に周囲からマナがなだれ込み、結果異常気象を巻き起こしているらしい。
　口に入っていた土を吐き出し、身体を払って立ち上がる。すると、
「【浮遊】」
　がれきの山の一部が突如、吹き飛ばされる。そしてその下からリーンが身体を振るい槌を払って現れた。
「よかった。無事でしたか」
「口に土が入りました……それで、あの男は？」
「うん、それに学院長も――」
　と、二人が言葉を交わしたその直後だった。
　衝撃音が、上空から響き渡ったのは、
「……何が？」
「……」
　二人は顔を見合わせた。エレナに防護の術式を改めてかけると、宙のマナを蹴りつけて地上へと上っていく。大気に存在するマナは依然として希薄であったため上るのには苦労した。
「……なんだ？」
　そしてその途中で一つの違和感に気がついた。否、圧迫感とでも言うべき物を。巨大な山が、あるいはそれ以上の何かへと向かって自分が飛び出しているかのような違和感を覚えた。
　何が上にあるのか。自分たちが何に向かっているのか。
　予感はあった。つい先ほどの光景が脳裏をよぎる。しかし進む歩を止めるわけ

にはいかず、シールとリーンは間もなくして地上へとたどり着いた。

　そして、そこで目撃したのは、

「……っぐ」
　血みどろになって倒れるミストと、
『【やあ、初めまして】』
　そんな風にいって笑う、白銀色の姿、

『【まったく、産まれなおす、なんてのは不思議な気分だね】』

　声は天から降り注ぐように響いてきた。空気を伝わる人の声ではない。人の頭に直接語り掛けてくる、天啓とでもいうような不思議な音だった。
『【そう、生物が神に到達するにはマナを受け入れるだけの器が足りない。だから構築しなおした。魂ごと創り直した。】』
　しかしそれを響かせている存在が目の前にいるという現実は、あまりにも受け入れがたく、理解し難かった。奇妙な声を放っているのは、つい先ほどまで言葉を交わしていた男、ミストの古き友人であり、英雄であり、そして【ラグナ】の指導者。だがその姿は先ほどから一変している。
　あえて言うならそれは精霊の姿に近かった。
　その全身は白銀色に輝いている。立ち上るマナが衣類のように全身を纏い。その肌から瞳から、全てがマナの光を放っている。精霊の存在はシールにも覚えがある。
　しかし、根本的に違う力の質が、量が、濃度が
　全てが常識の外にある。触れられる、どころかその圧で加太らが押されるような圧迫感がシール達へと放たれ続けている。莫大な力の塊が人の形になって周囲に放たれている。一見ソレは神聖であるようにすら思えた。
　見るものに畏怖を与えるほどの圧倒的な力がそこにあった。
『【うん、ようやく手に入れた。カミサマの力】』

神、全ての生物の上位者は、柔和な笑みを浮かべた。

第百四十三話 たった一つの愚かなやりかた

　マナの枯渇した大地に周囲からマナが雪崩れ込み異常な気象を巻き起こし、嵐と雷が鳴りやまず、ますますもって現実感を喪失させる。
　だが、現実だ。紛れもなく現実だ。足元にはミストが血を吐いて倒れている。目の前の男は、神は、触れられるような程の力を発しながら、此方へと語り掛けている。
　ラルク。人として死に、神として産まれ直した男は笑った。
『【苦労したよ。神様になるのは。何百年かかっただろうか】』
　笑う神に、シールは顔を引きつらせた。
　全く、厄日極まりだ。
　シールはため息をつきながら、冷静になるよう努める。相手は神だ。実際そうなのかは知らないが、少なくとも対峙していて、それを有無も言わさず納得させるだけの力は感じられる。
　邪悪なる魔術師やら精霊やら竜やら怪物やら、あらゆる生物を相手取ってきたが、ついに、というべきか、とうとう神が出てきた。冗談にしてもまるで笑えない。だがこれは現実だった。
　シールは緊張を抜くようにしてため息を一つついて、その現実に向きあった
「貴方が神になった……【ラグナ】もそのために作ったんですか？」
「まあ、そうだね。〝架空の神・ラグナ〟の降誕があの組織の本当の目的さ。もっとも、僕自身が神に生まれ変わるなんて話は殆どの人間は知らなかったけどね」
「なぜそんな事の為に彼らは協力を」
「彼らは僕が絶望から助け出した人々でね。だけど、それでも世界に絶望をし続けた人々だ。だから彼らは僕を信じた。その命を捧げてもね」
　慎重に言葉を続けながら、ひとまず、地面に倒れたミストに近寄る。ラルクは

反応しない。罠か、とも思ったが、治癒術を施してもソレを止めようとすらしない。既にミストの事を歯牙にもかけていないのだと気がついた。
「多分死んではいないと思うよ？ 加減はできなかったけれど」
「……ッぐ」
　産まれてから突然襲われて、驚いてしまってね、とラルクは笑っている。確かに言うほどにミストの怪我は重いものではない。だが、逆に言えばそんな風に、虫を払うような扱いでミストが倒されたと、そういうことになる。
　シールはそのままミストの身体をラルクから離した。リーンは彼の身体に防護術をかける。ラルクはそれを見守るばかりで、何もしない。シールは彼に、慎重に言葉を選んだ。
「それで、結局どうするんですか？ これから」
『【ずっと言ってるだろう？ 苦しむ人々を僕は救う】』
　と、ラルクは指先をそっと大地に向ける。乾ききった大地、その罅の中から、彼の指差す先から芽が伸びた。マナも何もない大地の上から当たり前のように。そしてそれは
『【力が無かった。だから限界にぶつかった。皆死んだ。】』
　瞬時に成長していく、芽が伸び若木となり、大樹となってシールたちを見下ろすまでになった。そしてその次の瞬間には老い、枯れ、朽ちて大地に伏し、さらにその横たわり，
朽ちゆくその身体から新たな新芽が顔を出す。
　高速で再現される木々の一生。繰り返す都度にその範囲は広がり、瞬時にして荒野だったこの場所は、巨大な森に姿を変えた。
『【わかったのさ、人の身では限界がある。どうあがいても届かない領域があるって。そして、ならば、人でなくなればいい】』
　そして、ラルクが手を握りしめると、それらはすべて枯れ果て、そして潰えた。自由自在に大地に恵みを与え、そして奪う。だがそれは力のほんの一端でしかないことは、明らかだった。対峙するほどにその力の強大さは伝わる。
『【僕が欲しかったのは人の域では救えない人々を救う力だ。そしてそれを今得た。だから後は救うだけだ。全てを】』
　ラルクは真っ直ぐにそう告げてきた。言葉にブレも迷いも無い。嘘偽りも感じ

ない。彼は本心から、そんなことを言っている。とても理解しがたかった。ただ善行のためだけにここまでするという事実が。
　だが、理解ができないからと言って、目の前の問題がどうなるわけでもない。
「なら好きにしてください。われわれは貴方を邪魔しませんよ」
　シールの横で、リーンがそう口にした。シールも内心でそれに同意する。
　悲しみを払うために尽力すると言うなら、善行を積むというなら、勝手にしてくれ。彼が今までやってきたことはどうあれ、彼がその力で持って多くの人々を救うなら、構わないと思ったからだ。過去の行いに報いが必要なら、シールだって人のことは言えない。
　ラルクが過去にどれだけの残虐な行為に手を染めてきたのか、シールが知る一端だけでも計り知れないが、だがそうだとしてもこれから行われる善行に罪はない。
　好きにすればいいのだ。
　勝手に善行を積んで、人々を救えばいい。世界を救えばいい。
『【うん、ありがとう】』
　ラルクは彼女の突き放すような言葉にそう微笑み、だが、
『【だけど】』
　と、言葉を続けた。一見優しげに見えるその瞳は、しかし、あまりにも純粋すぎて、逆に恐ろしかった。優しさ以外、一片たりとも曇りが無いような錯覚を覚えた。
『【だけどね、まだ足りないのさ。世界を救うには】』
「何故です？　　万能に近しい力は既にある。好きに振るえばいいじゃないですか」
『【自由には振るえない。強大な力は、その力とは関係ないところで制限を受ける】』
「制限？」
『【神々の制限さ。拘束、といってもいい。君にも覚えがあるんじゃない？】』
　そういって、彼はシールを見た。覚えがあるか？　　といわれれば当然、覚えがシールにはある。制限、拘束、それはつい先ほど【崩壊物】を討ったときも経験したものだ。

『【人造勇者シール・ベルレイン。君はさぞ制限を受けてきたことだろう？】』
　シールは心底嫌そうな顔をした。
　その彼の真名は、彼にとっては不愉快でしかなかった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：

　暗黒時代
　ガイディア国が戦争を続けていた時期、戦いは泥沼になった。戦力が拮抗し、なおかつ疲弊していたことがその泥沼化に拍車をかけた。決定力の欠いた各国は、戦場において決定的な力の探求への試行錯誤を繰り返した。あらゆる魔術、あらゆる魔道兵器、あらゆる魔法薬に軍隊の装備の強化。
　そんな中、ガイディアで一つの研究が進められていた。
　魔術は万能の力だ。それゆえに、時としてその力は戦場の理を覆すことがある。時の利、数の利、地形の利、それらを魔道が尽く覆す事が起こり得た。
　とはいえ、それはそう何度も起こるようなことではない。もし起こればそれは奇跡と呼ばれる、逆にいえばその程度の頻度でしか起こり得ない。
　ならば、その奇跡を自在に起こすことができれば戦場を左右できるのでは？
　そんな、途方もないくらいに荒唐無稽な発想が、超人開発計画だった。
　戦場の理を覆す、奇跡を起こしうる人材の探求、発掘、開発、本来ならばそんな計画に国が資金を出すわけがなかったが、その頃のガイディアは暗黒時代と呼ぶに相応しいほどの末期状況で、非人道的な研究にもあっさりと許可がおりた。
　国の援助を受けながら、進行していった奇跡を起こしうる人材の探求、その多くが、否、ほぼ全てが無駄で無意味な結果しか産まず、そしてその無為な探求のために多くが死んだが、それでも研究は進んでいった。進んだ、と、呼称していいものだったのかも定かではなかったのだが。闇のその更に闇の中へと猛進していった。
　百を犠牲にしても得るものが無いのなら、千を犠牲にする。そんなおぞましい試行錯誤の果て、確かに形になる者も現れた。

異国から流れ着いた一族、特別に美しい【歌】を持つ者たちを捕らえ皆殺しにした挙句に、生き残った少女を魔術兵器にしようと試みたり、

とある魔術結社によって人体実験を受け、その身に見合わぬ魔眼を移植された少年を、そのまま戦場へと送り込んだり、

死と犠牲と無為の果ての研究と発掘、その一つが、人造勇者計画と呼ばれるもの。

かつて魔王を打ち倒し【平和】をもたらした【勇者・ベルレイン】、神々の加護を受けたその魂、勇者の属性を宿したマナは、強大過ぎるが故に、力は霧散し大地に帰る事はできなかった。勇者の魂は、自らの故郷、ガイディアの地に封じられたまま存在していた。

人々にとって勇者の名はかつての不毛な魔族との争いに終止符をうった英雄の名であり、勇者ベルレインはお伽話のような存在であると同時に神聖な守り神のようなものだった。だが「奇跡探し」にやっきになっていた研究者たちにとって、勇者の名はまさに、喉から手が出るほどに欲しい宝石のように見えたのだろう。

その勇者の力を扱うことができたなら、きっと敵国の全てをなぎ払えるだけの力を得ることができるに違いない。

結果として、それが新たな魔王を生み出す結果になろうとも構わない。その時はもっと強い奇跡を生み出そう。

まさしく形振り構わず、後先も考えず、　かつてベルレイン自身が立ちいることを禁とした勇者の墓地をあっけなく暴き返し、彼らは数百年経っても未だ現存する強力な魔力の塊、【勇者の魂】を獲得した。

だがそこから先は、今までよりも更に血みどろだった。

強大な、あらゆる神の力の影響を受け歪んだ勇者の魔力、複数の神によって概念レベルに到達しているその力に適合しうる人間を探すため、研究者達は片っ端から試して行った。

死んでも困らない人間、死んだ方がいいような人間を探しだされた。適応には子供の方が都合が良いと判明すると、罪なき者を罪人にしたててその子供を実験に使うなんていう暴挙も平然と続けられた。

そして、生まれた。

適合しきれず絶命した子供たちの死体の山の上で、【勇者ベルレイン】の魂、封印という概念への適合者が。家族もなくまともな教育も受けず、名前もないままに勇者の魂を押し付けられ、しかし生き残って見せた少年が。
　故に研究者たちは名をつけた。称号を
　封印の勇者ベルレインを封じた者とし【シール・ベルレイン】と、そう呼称した。

：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

『【だけど、まさか思いもしなかっただろうね。勇者がまさかそのうちに更に、魔王の力を内包しているだなんて】』
　研究者たちにとって嬉しい誤算だったのは、勇者の力を保有したシールが、さらにそのうちから魔王の力をも引き出せるとわかったことだ。あらゆる存在を封印できる、だけでなく、魔王の力、【不可侵の白王】の力も扱えると知った時の研究者たちの狂喜乱舞っぷりはなかっただろう。
『【そして、その力のほとんどが活用できないだなんて】』
　そしてその喜びはぬか喜びであるとすぐにわかった。
　シールは、自身の力、勇者の力を引き出すとき、制限がかかった。それは強大な力を引き出そうと思えば思うほどに強くなり、【白王】の力を引き出そうとすると、身動き一つ取れなくなった。
　それが神々による制限であるとわかったのはしばらくしてのことだ。
「それは、以前の暗殺騒動の時に盗み出した研究書類から？」
『【うん、なかなか酷い有様だったね。興味深くはあったけれど】』
　最近はリーンが神の目を誤魔化す技術を開発し、一時的に発動することもできるようになった。が、だからといって制限は止まらない。未だシールは自分の内側に存在する力を完全に引き出したことは無い。
「ですが、それは魔王という存在を再び呼び出さない為なのでは？」

少なくともシールはそう結論付けた。わざわざ勇者を遣わすほどに魔王を問題視した神だ。むざむざと魔王の力を解放するわけがない。と、
『【そもそもさ、なんで神様達は魔王を封じようとしたんだろうね？】』
「……それは」
　魔の存在を討つ為に？
　勇者の伝承、神々が勇者に力を与えたその理由は必ずこう綴られる。神が人類を守るために、魔王の脅威を払うために神の力を勇者に与えもうた、と。だがそれをそのままに信じられるほどシールは幼くはない。幼くは無い、が、理由は突き詰めた事は無かった。
　もともと神など理解できないと考えを放棄していた。
　ラルクは、言葉の詰まったシールの代わりというように、口を開いた。
『【神はね、恐れているのさ。人に限らず自分達以外の生物が、自分より高い力を持つことを。自分たちの命が危ぶまれる可能性を】』
　神、という言葉に惑わされがちだが、この世界において神とは、一種の生命体だ。人よりも遥かに強大な力を持つ、この世界を支配する生命体に過ぎない。
『【生命体が、自分の命を脅かす存在を排除しようとする。当たり前だよね】』
　魔王の封印、なんて呪いを聞くと、まるで邪悪な存在を神々が人々から守っているよに聞こえる、が、その本質は至極単純に、自分の命を守るための自衛手段でしかない。
『【神々は魔王が怖かった。だから勇者を遣わせた。】』
「根拠は？」
『【リヴに直接聞いた。それじゃ不満かい？】』
「……いいえ」
　疑う理由が特に無かった。実際その言葉を聞くとしっくりくる。魔族と人類、神の視点からみれば違いも何も無いはずなのに、何故わざわざ人間側だけを味方したのか、その理由がわかった気がする。
「……なら、貴方に対しても？」
『【今見てわからないかい？】』
　輝く身体。だがその光の中に僅かに別の力が見える。それはシールも見覚えのある力の干渉。神々の拘束の力だ。だがラルクはその力にシールのように捕らえ

られるようなことは無かった。ただ煩わしそうに首をひねり、
『【鬱陶しい】』
　払う。拘束の力の波はそれだけで弾かれた。
『【僕の力はリヴの力をトリガーにしたものの、自分で創り出したものだ。だから君のように強い干渉は受けないのさ。とはいえ、】』
　区切り、苦く笑う。
『【まあ、最初はこんなものだろうけど、そのうちどんどん鬱陶しいことをして来るんだろうねえ。たとえば新しく勇者を遣わせたり】』
　それこそが、彼が自ら生み出した力を振るう上で起こる最大の障害。神の力を振るおうとすればするほど、既存の神々の干渉と障害が強くなる。たくさんの人々を救済する彼の目的は遠のいてしまう。
「……なら」
　あるいは、これから先、目の前の男が何を言い出すのか、予感があった。今まで【ラグナ】に属する人間の言葉をつなぎ合わせればより明確に。だが、問わずに入られなかった。この英雄の成れの果ての男が、最後に得た結論を、自分の耳で聞かなくてはならないと思った。
「なら、どうするんですか？　神の干渉はたとえどんな人間だろうが人間以外だろうが結局は受けるというなら、これからあなたはどうするつもりですか？」
　問いに、ラルクは微笑みで返した。
　そして、世間話をするような気軽さで、

『【この世に存在する神々の全てを、滅ぼし尽す】』

　あまりにも堂々と告げられた言葉にシールは言葉を失った。
　神を殺す
　理には、適っている。神が存在する限り力が振るえないなら神を排除するまで。
　彼の結論はそれだけの事。
　だがそれは、
「神は精霊以上の世界のバランサーだ！　そんなものを滅ぼしたら、天変地異ど

ころの騒ぎじゃないぞ！」
　以前、シールは排斥された湖の精霊を保護したことがある。結果として安定した気候を保っていたその周囲の環境は、それを維持していた聖霊の喪失によって激変した。
湖の精霊を排斥していた村人たちはその報いを受けるようにして異常気象に襲われ、シールはそれを救うのに必死だった。
　精霊、そしてその上位にいる神々は、人のことなどさほど気にもかけない。彼らは身勝手に世界を支配した。だが、彼等は自分たちのために、周囲の環境を居心地の良い空間に整える。
　その、整えられた空間の下にあるのがこの世界だ。
　ラルクが言っていることはつまり、この世界そのものを滅ぼすといっているようなものだ。弱きを救うなどとんでもない。もし彼がそれを実行すれば、弱いも強いもありはしない、人類はおろか、この神の庭に生きるすべての生命が滅びかねない。
『【確かにその通り】』
　ラルクは頷く。シールに指摘されたことなど、とうに理解しているといった顔をして、けれども
『【この手に入れた力を制御すれば世界の悲しみを今までよりずっと多く救えるはずだ。これから生まれてくる悲しみの多くを減らせるはずだ。世界平和なんていう言葉だって夢では無くなる』】
「その平和が多くの死体の山の上に築かれたとしても？」
『【ああ。僕は目の前の幾万の死体を踏み越えてその先の幾億の人間を救おう】』
　彼の声に、揺らぎは一切無い。迷いもまた、無い。
　シールはそのあまりにもな在り方に、言葉にならず、呻いた。狂っているとしかいいようがない。だが狂っていない。目の前のこの男は、全てを救うための手段として、すべてを滅ぼそうとしている。ただただタガが外れている。
　これが、英雄の成れの果てが行き着いた結論。
　全ての、ありとあらゆる人類を余さず救う方法を獲得するために得た結論。狂わぬまま、破綻せぬまま、ただただ行き過ぎてしまった男の果て。

これはもうダメだ。
　シールは理解した。この男は、神は、最早相容れない。人類の敵だ。
「貴方を殺します。英雄の成れの果てよ」
「…………」
　シールは構える、その横でリーンが並ぶ。彼女の表情にも迷いはない。純粋に目の前の男を排除しなければならないてきであると認識しているらしい。
『【勇者ベルレインの魂を継ぐ者が新たな神を討たんとす、か】』
「勇者なんて御免なんですけどね。そんな柄じゃない」
『【けれども僕を倒そうとしてるんだろう？ 君は】』
「ええ、まあ」
　状況どうあれ、目の前の男は潰さなければならない。唐突ながらも決定的に世界の危機だ。そしてそれはいつものことで、慣れている。
『【なら、そうしてみるといい。神々の期待を応える為に】』
　ラルクが身体をこちらに向ける。先ほどから放たれていた、人とは隔絶した力の波動の全てがこちらに向けられる。殺意とすら呼びがたい、破壊という意思の塊がシールとリーンを撫でた。
　この場所に立っているのすら恐ろしい。だが、それでも
「【顕現】」
　崩壊物を討った時を思い出す。あの時、彼は内にある魔王の力の一端を放った。本来あれを利用すれば即座に神のちょっかいが来る。だが今回はその束縛が途中から、逆に薄れていった。
　魔王の時の勇者のように、自分が目の前の男を討てと神々が支持しているのだろう。
「いいように扱われるのは気に食わないけれど、仕方ない、か」
　シールはぼやきながら、掌を自分身体に当てる。自分の力を引き出すため、自分の内側にある魔王の魂に手をかける為に。
「【不可侵の白王】」
　リーンの結界、神々の目を眩ます結界はもはや必要ない。胸奥へと腕を突っ込むと、ままに白光の剣は取り出せた。魔王の力。かつて恐れ戦かれた拒絶の魔王の力の結晶。本来なら、人に向けるはおろか存在するだけでも危険な武器。まま

に振るうことは決して許されない、下手すれば国一つが容易に滅ぶ、禁忌の兵器。
　魔王の力を引き抜くことで、自分自身に同化させられた勇者の力もまた活発化している。黒く何もかもを飲み込む封絶の勇者、そしてその対極の拒絶の剣。
　──子供たちが喜びそうな設定だなあ
　なんて、場違いな事をシールは思った。それくらい思わないとやっていられないくらい、今の自分からは悍ましい程の力を感じる。神の制限があったから、未だかつてじぶんの力をここまで完璧に引き出したことは無かった。正直、指一本でも動かすのも恐ろしい程だ。
　だが、今目の前には、この力で持っても打ち倒せるかわからないバケモノがいる。
『【全く、本当、厄日だ』】
　そう言って、シールは躊躇いなく剣を振るった。
　剣そのものは、ラルク自身に届くことは無かったが、そんなことは問題ではなかった。剣から放たれた【拒絶】の波動は一瞬でラルクは愚かそのはるか先に至るまで徹底的な破壊を巻き起こす。拒絶する、ただそれだけの力が大地を破壊しつくした。
『【ハハ！】』
　だが、その攻撃に晒されてもラルクは死んではいない。
　肉体を〝歪め〟衝撃を流し、そのままの姿勢で笑いながら此方へと突っ込んでくるシールは剣を構え、リーンは詠唱を開始した。
　世界の命運をかける戦いが始まった。

第百四十四話 神々の戦い 前編

　空が裂ける。大地が砕ける。空気が焼ける。
『【穿て!!』】
『【氷山よ】』
　二つの人外が荒廃した大地の上で天上の力を振るう。その度に世界は別の形に姿を変え、ソレも間もなくしてまた崩れていく。大地が数千年の時を経て形成した姿の、何もかもが砕かれた。
『【ッッ!!』】
　そんな大地の破滅の一端、シールは歯を食いしばる。己の力を制御すべく全ての神経を握り締める【剣】へと集中させる。一瞬でも気を抜けばそれは自分の肉体も粉々に砕いてしまいそうだった。
『【貫けぇええ!!!』】
　咆哮と共に白光の剣を突き出す。瞬間大地は穿たれ、捲り上がり、爆散する。破壊の光が柱のように地面に叩き付けられ、更にそれが地面を薙ぎ払い、白銀の神へと向かう。
『【喰らえ〝つちくれ〟】』
　だが同時に、白銀の神の一言で捲り砕けた大地が更に歪む。それは刃となり形となり獣の牙のようになってシールへと直進した。土塊の牙は力に包まれており、白の刃の力すら噛み砕き直進する。
『【封黒!!』】
　だがそれはシールの肉体に触れるや否や、全てが彼の身体に飲み込まれ消えた。
　常識を覆すと呼ばれる魔術の、その常識すら粉微塵に砕いて潰す光景が広がる。それもたった二人、否、二神によって引き起こされていた。
『【いやあ、まだ慣れないね。元の力と馴染み易いように、〈創造〉の属性に調

整したんだけど、力の桁が違いすぎて、引き出しきれていない】』
　君はどうだい？　と白銀の神が、もう一体の神に尋ねる。白光の剣を握り、全身を黒の勇者の力で纏い、近寄る全てを切り裂き、同時に取り込む姿となった彼は、ため息混じりに、
『【自分が危なっかしくてたまりませんよ』】
　そんな風に苦い顔をして、そのまま剣を振るう。
　即座に地平線まで大地に亀裂が走る。視界にすら止まらぬ速度で振り下ろされた剣の波動は万物を破壊する。だがその波動はラルクを破壊する事は、ない。彼の身体は波動が届くその前に揺らぎ震える。まるでスライムかなにかのように蠢いて、破壊の波動をいなしている。
『【……本当に貴方元人間ですか？』】
『【この力を得たときの事を想定し、訓練したからね――紅蓮】』
　攻撃をいなしきると、再びラルクの攻撃が飛ぶ。空間を食らう様にして赤黒い炎が生まれ、舞う。単純な魔術のソレとは比較にならない力、そして意思。まるで生物のように炎は唸り、そしてシールへと莫大なエネルギーを孕み突き進む。
『【……こっの』】
　再び、シールは掌を広げ封印を試みる。シールへと直進した焔はシールに触れた瞬間，
蠢く。逃れるように僅かに揺らぎ暴れ、その体で大地を焼くが、その数瞬後にはシールの掌に吸い込まれ、消えた。
　だが、シール自身は僅かに息を荒げる。
　封印、勇者の力は神と同じくして、制限は存在しない筈なのだが、
『【君と僕とでは在り方が違う。僕は肉体の作り、魂の根本から組み替えた。君は〈勇者〉の魂と同化し、その力の内に〈魔王〉という神を内包したに過ぎない。心底まで人間を辞めたわけではない】』
　限界は無い。マナの完全に失われたこの大地でも自在に力を引き出すことは問題なくできている。だが、その力のコントロールが難しい。自分の身体に見合わない巨大な岩を無理やり振り回しているような気分になる。
『【っ』】
　息を切らす。その隙に近づいてくるラルクの気配に、シールは息をのむ。

軋む身体を無理やり起こし顔を上げ、剣を再び構えようとした。が、その前に、
「【黒剣】」
リーンが、転移しその間際にラルクを背中から貫いた。
白銀の身体の中心に突き立った黒く黒い剣はガイディア城でリーンが振るったマナの凝縮剣、シールの肉体にも宿る複数の属性が凝縮した【勇者の剣】の模倣だ。
シールのように封印の属性は無いが、全てを喰らい破壊する程度の力はある。
〝本来なら〟
『【なるほど、勇者の模倣か。確かに勇者はその手段でもって魔王を討った。けど】』
「……!!」
腹に突き刺さった剣をそのまま掴み取り、ラルクは背後のエレナへと向き直る。
『【残念。マナが不足した大地ではその効力は半減以下だ】』
以前、あれほどの破壊の絶対性を見せていた黒の剣は、ラルクに小指で弾くようにされるだけで揺らぎ、弾け、砕けた。突き刺さった場所には傷すらない。
『【リーン!!』】
シールが彼女の名を叫ぶ。白銀が今までより更に揺らめく。荒廃した大地が歪み、乾ききった空が唸りを上げ、彼を取り巻く全てが彼に従い動き出す。
たった一人の女を捕らえるために、世界が歪んでいく。
「っ……！」
リーンが砕けた黒の剣を手放し飛び上がる。だが今この場所は、ラルクによって徹底的にマナが奪い尽くされている。魔術を一つの発動するにも一苦労だ。その隙をラルクが見逃すはずもない。
リーンへと獣の牙のような姿をした土塊が襲いくる。
「っぐ！」
『【君が逃げてなくてほっとしたよ。彼の急所は君だ。】』
迫る土塊に合わせ結界の術式をリーンが発動する。だがそれも僅かに攻撃を弾く間もなく砕け散る。極限まで極められた彼女の魔術が、まるで歯が立たなかっ

た。人と神とでは、そもそも戦いにならない。蟻一匹と人とでは話にもならないように、
『【ッ!!』】
　彼女の窮地にシールが跳ぶ、このままではリーンが殺される。
『【うん。君ならそうするね】』
　当然、その行動は、ラルクの思惑通りになる。
　ラルクはリーンへの攻撃を重ねながらも、その手を背後のシールへと向けた。リーンへの攻撃は囮。本命はシールだ。それはシール自身、理解していた。理解したうえでの行動だ。避けられない。
　だが覚悟と対処は出来る。
『【雷火】』
　爆音、そして刃のように振るわれた雷火が奔る。人など優に飲み込むほどの火力、それに合わせ、シールは封印術式を、勇者の権能を解放する。
『【ッガ!?』】
　それでも衝撃は全身を貫く。痛みは無い。人を超越した力の宿ったこの身体は痛みを排除してる。むしろこの極限の戦闘状況において、ダメージを負った事への失態に、シールは歯噛みした。
　だがその代償に、目的は達する。
『【ッ拒絶せよッ!!』】
　剣を構え拒絶の白光を放つ。ラルクの身体がその場から弾かれ、吹っ飛ぶ。地面に叩き付けられ抉り飛ばし、彼方にあった岩山に身体を直撃させそれを砕いてなお更に吹っ飛んでいった。
　ダメージは無い。シールがしたのは彼を弾き飛ばしただけだ。いくら地面に叩き付けられようと単純な物理的な衝撃では彼の身体は傷つかない。そんなことは承知の上だ。
　今は、彼女を逃がす事を優先する。
『【リーン、引け！ ミストとエレナを連れて逃げろ!!』】
「それは……」
『【邪魔だ!!』】
　食い下がるリーンへと、シールは鋭く罵声を飛ばした。気遣う余裕は無い。

「……！」
　シールの罵声にリーンは、本当に珍しいくらいに顔を歪め、そして親の仇とでもいうようにシールを憎悪に満ちた瞳で睨み付けた。焼ききれるようなその感情を今しがた自分を殺そうとした相手ではなく、自分を救おうとする男へと叩き付ける彼女の理不尽さに、そうしてくれる事の喜びにシールは笑った。
　だが、今は
『【行け!!』】
　追撃の一声に応じるように、リーンは転移を発動した。彼女とて自分が足手まといとなる事など望むわけが無いのだ。少なくともこれで、リーンを狙われるような事は無いだろう。
『【……とはいえなあ』】
　拒絶の力でどこまでも吹っ飛ばした筈の彼が、ゆらりと立ち上がる姿が此処からでも見える。白銀の肉体を持つ彼はこちらを見て、笑っていた。そして次の瞬間には、瞬きする間もなく、彼は距離を無視して目の前に現れた。
『【あそこで取ったと思ったんだけど。鈍ったなあ】』
　笑うラルクを前に、シールはうんざりとした気持ちを感じていた。これは、久しぶりに、勝機が全く見えない戦いだった。技量も経験も才能も、根本的な戦力も、尽く相手が上回っている。
　ただ、他人の為、それだけで練磨の果てに行きついた男。
　そんな男をどうやったら倒せる？
『【しかし、君もよくわからないなあ。】』
　そんな此方の懸念をよそに、ラルクはシールを見て未だ若々しいその顔を傾げた。
『【君くらいの実力者なら、一応戦力差ってのは理解できていると思うけれど、それなのに君からは未だ萎えない戦意を感じる。どうしてそこまで戦おうという気になれるんだい？】』
　問い、何かしらの仕掛ける布石とも思ったが、表裏は感じない。そのままの言葉のとおり、疑問だったらしい。シールは呼吸を整えため息をついて、
『【世界を滅ぼすなどという狂人を放置できないでしょう』】
『【世界中に危険をばら撒くのは否定しない。でもその後に幸福な世界を生み出

す】』
　神の力、人の魔術も何も通用しない、万物を癒すも壊すも自在にする万能にして圧倒の力ならば、なるほど、世界を支配し皆を〝幸せ〟にするのも可能かもしれない。今目の前でこうして彼の力に触れていると、それが夢物語でもなんでもない、現実的な案と感じてしまう。
　しかしそれは、
『【身勝手が過ぎませんか。貴方の幸福の尺度を他人に押し付けるなんて』】
『【コレがエゴだって、当に承知してるさ。そんな説教はとうに飽いたよ】』
　だろうな、とシールは内心で舌打ちする。この男は確信犯だ。この程度、とっくに考え悩んで結論を得ている。今更口先でどうこういったところで何か変わるわけがない。
『【君こそどうして戦うんだい？】』
『【さっきも言いましたが？』】
『【君自身の動機さ。何故戦う。その萎えない闘志の源は？】』
　何のため？
　問われ、考えるが不明瞭だった。そもそも今ここにいるのはミストからの指示だったからだ。そのまま流されるようにしてこんな世界の危機に立ち向かっている。言ってしまえば状況に流されただけだ。
　だが、何のために戦うか？　意識したことは無い。オルフェス学院、初等部の子供たち、先生たち、エレナ、守るべき人々の姿は思い浮かぶ。彼らを守る、そんなのは当然だ。
　当たり前の事を当たり前のようにする。それだけの事だ。
　が、これが闘志の理由かと言うと、そうでもない気がする。何しろこれは当たり前のことだ。当然すべきこと。義務と言っても変わりない。己の望み、欲望とはまた違う気がする。
『【ま、なんでもいいですよ。戦う理由なんて』】
　闘志が萎えないというならそれでいい。闘志は大切なのだから
『【貴方を殺す。数百年だかの野望、踏みつぶして上げますよ。神様』】
『【はは、やってみるといい。勇者クン】』
　互い、そんな風に笑いながら、再び激突した。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　──僕はただ、悲しみに泣く人を、笑顔にしたいんだ
　彼は最初そう言っていた。事実彼はそうして何人もの人を笑顔にしていった。様々な問題に苦しむ人を、その人と一緒に悩み、答えを探り、そして彼ら自身が立ち上がれるように後押しして、何度となく救ってきた。
　安易に力を振る舞う事を彼は好まなかった。それが根本的な解決にならないと知っていたからだ。それでも力づくで解決を求められたとき、彼は何度も悩んだ。自分が正しい事をしているのか、と。
　かつての彼の姿、ミストは混迷する意識の中で思い出す。
　彼はそんな男だった。否、今もきっと変わらない。彼は変われなかった。自分は彼とは別れた。彼には最後まで付き合いきれなかったからだ。
　だから彼とは別れ、自分の力で、自分の為に、自分の居場所を獲得した。今までミストがしてきたことは善意でも何でもない。彼には遠く及ばぬものの、得てしまった自分の力が周囲と軋轢を生まないための調整でしかない。
　だが、それも結局はそれは逃げでしかなかった。かつて憧れた彼が、今なお覚える彼への焦がれが壊れてしまう事を恐れただけの。
　ああ、なんて醜く、愚かしい──
「起きてんなら自分で立ってくださいこの耄碌ジジイ」
「ごふぅ!?」
　などと、感傷に浸っていたら地面に叩き落とされた。
　痛みよりもまず衝撃で目が覚め、まどろみから解放されたミストは混乱する頭で周囲を確認する。見覚えがある場所、此処は王城、ガイディア王都だ。そして目の前には、ついさっきまで自分を担いでいたリーンが、もう片方の手でエレナを担ぎ、此方を見下ろしている。
「さっきから耳元でぐちぐちぐちぐち後悔を垂れ流して耳障りな」
「あ、あれ、漏れてた声？」
「気配がしました」

「カンで君は人を投げ捨てたのかい」
　そのカン自体は当たってはいるが、しかし酷い。
「まあ……連れ出してくれたことに感謝するよ。でもこんなところに逃げた所で、まあ、ラルクの力が及ばないところなんてないだろうしー」
　無意味だろう、その言葉を口にすることだけはミストは避けた。しかし事実は変わらない。彼が神となって何をする気か、ミストは直接聞かずとも既に察していた。だからこそ逃れようがない。
　彼が〝ああなった〟原因の一旦は自分にもある。
　ならばこの後の自分の末路はまさしく罪なのかもしれない。
　そんなことをミストが考えていた。
　の、だが
「誰が避難するといいました」
「え？」
　ソレだけ言うとリーンはミストを置きざるようにして歩き始めた。あわててミストが後を追うが、既に彼女はミストの事など意にも留めない。彼女はエレナを担いだままズカズカと王城の廊下を突き進む。あわててミストは彼女の後を追い、その顔を覗き見てみると──
　あ、これブチ切れてる
　顔に出さずとも全身から放たれる怒気のオーラに、ミストは賭ける言葉を失った。こうなった彼女をなだめられるのはシールぐらいのものだった。リーンは、その怒りを纏ったまま歩みを進める。
　複雑な地形の牢獄城の中で唯一どの道からも真っ直ぐ迎える場所、医務室へ。
「【開錠】」
　既に夜中、カギのかかった扉をリーンは魔術によって開錠する。半ば強引に扉は開き、その音でベットで眠っていた兵士たちは飛び起きる。だが驚き竦む兵士たちもリーンは無視してズカズカと部屋の奥へと足を踏み入れた。
　部屋の奥、つまり、ヴェインが眠っている部屋へ。
「ちょ、貴方なんなんですか！」
「待ってリーンちゃん落ち着いておちつ「【起きろ陰険根暗男】」
　騒動に駆けつけた看護師たち、そして流石に抑えようと慌てたミスト、その全

てをまるで無視して、リーンは爆裂魔術を発動させた。
　ベットで眠っていたヴェインの身体は宙を舞い、そして地面に堕ちた。
　最早暴挙と表現しても言葉が足りないだろう。怪我をし心身弱る兵士たちには恐らくリーンが悪鬼に見えているに違いない。あまりに衝撃的な光景に誰もが口を噤んだ。リーンもまた爆発し崩れたベットを無言で眺めるだけだ。
　だが間もなくして、その崩壊したベットの下から、蠢くようにして手が飛び出した。その腕はへし折れたベットを無理やり体から引きはがし、そのままリーンの襟首を掴んだ。
「……なにしやがる、超絶鉄面皮」
　ずっと昏睡状態だったヴェインが目を覚ました。起こされたと言う方が正しいが。
　顔色は最悪、声は明らかに不調を訴えていた。当然だ。強烈なダメージを受け、更に片目を抉り取られたのだ。普通に死んでいてもおかしくは無い。好調な訳が無い。それを爆発でたたき起こしたのだから、これで健康な者がいたらソイツは人間ではない。
　リーンは、ヴェインに襟首を掴まれたまま、
「貴方の目を抉った男が神になってハッスルしてます」
　その瞬間、ヴェインの残されたもう片方の瞳が強い輝きを見せた。それは憎悪であり殺意でもある、純然たる意思の焔だ。それを確認しリーンは頷き、彼の手に何かを落した。
　それはラルクによって奪われた彼の魔眼だ。ヴェインはそれを確認し、握った。
「手伝いなさい」
「いいだろう」
　それだけ言葉を交わすと、二人は周囲が止めようとするのも振り切って、転移術でその場から姿を消した。
「……」
　その一連の流れを、ミストは呆然と眺めるだけだった。ラルクのあの姿を見て平然と次の行動に移れるリーンも、つい先日まで生死の狭間を彷徨っていたのに即座に起き上がって行動するヴェインも、二人とも、ミストにはあまりにも

「……若いなあ」
　しみじみと語れるような立場ではないが、そう思う。とても追いかける気にもなれなかった。気力も何も萎えきってしまった自分には。情けない、とは思う。彼らの行いが例え無駄だとしても、彼らのように駆け回るべき動機が自分の中にはあるはずなのだ。
　だが、それはできない。自分には最早それだけのエネルギーが無いのだ。
　だから、どうか、どうか頑張ってくれ、皆。最後の責任だけは払うから。
　無能で無責任な自分の代わりにそんな風に胸中で呟きながら、ミストはその場で項垂れた。疲れ果てた体を休めるようにして。

「ねえちょっと」
「はい？」
　直後、彼の頭は何者かによって思い切り引っ叩かれた。

第百四十五話 神々の戦い 中編

　再び、〝元〟平原
　今や元の平原がどんなものだったかも思い出せなくなった、崩壊した大地の上で
『【慣れてきたね。創造というのは、思ったよりもずっと自在なようだ】』
　ラルクはそう語りながら、シールへと微笑みを向ける。
　そして人であったときは失われていた右手を広げる。そこからは白銀色の光があふれ、その光は僅かに揺らぐと地面へと堕ちた。地面に堕ちた光は揺らぎ、際限なく膨らみ、そして形を変える。それは、
『【……魔物』】
　正確に言えば、神獣などとよばれる、古代の魔物たち。ここ最近たびたび封印から開放され、その度にシールとリーンが排除に回っていたので、その造形は記憶に新しかった。それが、ラルクの掌から次々に〝生まれていた〟
　神獣、その存在自体は問題ない。今の状態のシールなら、一薙ぎで滅ぼせる。
　問題なのは、それを、まるでモノの試しのように生み出している、ラルク自身。
『【マナの力をただ利用する魔術とは違う、創造という力そのものであるが故に、最早世界の制限にとらわれない。魔力の総量もマナの制限も無為なものだ】』
　魔術に存在するあらゆる制限、どころかこの世を司る物理現象からも開放されている。あの男の魂は、既にこの世界の理の一つ上にあるからだ。
　ではシールはどうか。
　この身はかつて勇者の魂に汚染された。勇者の属性、封印の力の一端に触れられる。更に勇者の魂に閉じられた魔王の力を取り出せる。だが、それはあくまで借り物だ。自分の力ではない。

根本的にスペックが違う
理解した。理解したが関係ない。打ち倒さなければならない。殺さなければならない。それだけはシールの中で決定していた。それだけは絶対に成しとげなければならないと。
故に、剣を握る。魔王の力を。
莫大な力が呼応する。ずっと疎ましいとともに恐ろしいと感じていた力だが、今この時ばかりは頼もしさを感じる。その力に応じるべく、シールは再び、神となったラルクへと剣を構え、踏み込んだ。
呻き声が彼方此方から響く。元は平原であり、血の海に変わり、何もかも失った荒野に変わったこの大地は、今は化け物たちの巣窟と化している。瞳の無い盲目の龍たちが蠢き唸り声を上げげる。
三つ頭の獣が互いの頭を食い合い殺しあう。
『【拒絶せよ！』】
生物としての倫理から外れた獣たちを、胴体を焼き切られ、頭だけになったけだもの達がそのままシールへと突撃する。
『【不可侵領域』】
拒絶の属性を司る不可侵の剣でもってその総てを弾く。魔術ではない、拒絶と言う概念そのものから生み出された〝壁〟は、弾くに飽き足らず突撃したその首を粉々に粉砕せしめた。
『【絶ち斬れ!!』】
それを確認した直後、シールは剣を構え、振りぬく。それだけで膨大な量の拒絶の波動は刃と化して、ラルクのいる空間を世界ごと両断する。
『【コワイね】』
だが、その波動に断ち割られる前にラルクはその体を別の場所へ転移した。応じるようにシールは体をひねり、確認しないままに自身の背後へと刃を振りぬく。予測通り、ラルクの姿はそこにあった。
とらえた、シールは思った。
『【おっと】』
しかし、刃は届かない。届く前に、彼の姿は再び消えた。
シールは舌打ちした。

動きが読まれている？　それもあるだろう、だが、自分も、この力を使いこなせていない。

魔王の剣、そして肉体に宿る勇者の属性、これ等を使いこなせていない。例えばこの【不可侵の白王】、剣の形をとっているがこれは拒絶と言う概念そのもの。それを刃のように振り回しては意味がない。神に届く力を、人の枠に押し込んで、振るっている。

元より今まで厳重に封印され、今になって解放された力

使いこなせないのは当然だ。

だが、そんな言い訳が通用する状況ではない。言い訳をしたところで誰が聞き届けてくれるわけも無く、無様に惨めに自分が死ぬだけだ。ならばこの場で完全に使いこなす。

『【白王・黒心』】

自分のうちにある、自分のものではない力。かつての伝説を生み出した敵対者二人の力。双方の力は相反する。勇者が魔王の力に合わせ、その反対の力を神々の加護を練って生み出したからだ。

拒絶と受容。この二つの力を同時に、完全に使いこなす。難易度は高い、が、

『【……まあ、なんとかしないとねえ』】

不可侵の剣を前へ、ただ突き出す。まるで銃を構えるように。そして、

『【不可侵領域』】

瞬間、全てを拒絶する白の壁か、〝全て〟に広がった

その空間にある全てが拒絶され、逃げ場をなくし存在を崩壊させる。この世に残るあらゆる物質は例外なく砕け散り、空間の外に粉みじんになって押し出された。

だが白で埋め尽くされた領域にラルクの姿はない。転移で既にその場から離脱している。再び背後をとるか、更にその裏を突くか、様々な推測が頭をよぎるが、シールはその場から動かない。

ただ待った。攻撃が来るのを。

そして、間もなくそれは来た。

『【□□□』】

マナの揺らぎと共に背後に迫る絡みつくような、殺意。研ぎ澄まされすぎて、

殺意自体に相手を切り裂く力を持っているかと錯覚してしまう程のそれが背中から来た。
『【焔──】』
『【黒穴』】
　攻撃が着た瞬間、勇者の権能を発動する。総べてを捉えその身の内に閉じる力。
『【圧潰』】
　拒絶する。空間を圧縮する。直接ラルクを弾き潰すでなく、その周辺の空間を弾きラルクを中心として凝縮し圧縮する。
『【お、ご……】』
　転移は、たとえどれだけ強大な存在でもその原理は変わりない。空間と空間の間を跳躍している訳ではない。マナの流れに肉体を乗せている。だが、空間そのものを圧縮し一点方向へと向ければ、その転移は封じられる。
　動きを封じ、転移を止める。そしてその
『【首を刈り取れば神も死ぬかな？』】
　ラルクの首を、シールは切り裂いた。〝切り裂こうとした〟
　剣が、ラルクを貫く前に、そのラルクの肉体が泡のように消えてなくなった。
『【──っ?!』】
『【エレナちゃんの真似】』
　マナの分身。神の御技、などではない。基本的な魔術の応用、以前城にやってきたあの暗殺者と同じような技、神の力、なんて言葉に盲目になっていた──
『【巨神】』
　声が響いたのは上空。見上げるとそこにいたのは、光り輝く、巨大な、巨大な、巨大な、あまりにもて大きすぎて視界に映りきらないほどの、ヒトガタ
『【っ!!』】
『【鉄腕】』
　ソレは動いた。まるで動かぬ山が動くように暴風を巻き起こしながらすさまじい速度で、
『【拒絶せよ!!』】
　剣を振りぬく。眼前に全てを拒絶する白の壁が生まれ、たたきつけるような暴

風と、そしてそれらを巻き起こす鉄腕二直撃する。
『【……！！！？』】
　二つの力の激突は爆発を生みだした。破壊のダメージの全てはその身に封印するが、それでも視界の全ては風と光の圧に奪われ、身体は空間ごと吹き飛ばされ、地面にたたきつけられた。
『【っがぁ!!』】
　地面に身体を幾らかめり込ませた後、シールの身体は停止した。ダメージは無い。ただ衝撃に身体が驚いただけだ。自分の意識が、神の力のみに行っていた、という反省も得られた。
　収穫だ。相応の痛みは伴ったが。
『【……うんざりする、なあ』】
　地面にめり込んだ自分の身体をゆっくりと起こして、地上に這い出る。土を払い上を見ると、ラルクはこちらを悠然と眺め、微笑んでいた。
『【やるね。自分が何故戦うか、理解できていないのに、良い闘志だ】』
『【貴方こそ、見ず知らずの他人のために、良くそこまで戦えますね』】
　シールからすれば疑問だ。もちろん、見ず知らずの誰かが死ぬなんて、〝良くは無い〟。ソレくらいの当たり前の良心が働くのは当然だ。だが、他人のために自分を捨て、神になってまで何かを成そうなどと、尋常ではない。
　シールには理解ができない。
　ラルクは、その疑問に、浮かべていた微笑を消した。
『【別に、難しい話じゃない。僕の方がずっと単純なのさ】』
　口調は軽い。だが、その言葉の一つ一つに、重さがあった。数百年、自分が生まれるより遥かに前から彼を突き動かした原動力、単純にして純粋な思いの、その全てが言葉に積み重なっているように、シールには思えた。
　彼は、語る
『【全身に病の膿に覆われて、泣きながら殺すよう懇願してくる老人がいた】』
『【あるいは戦場で両親を失って、生きる術も無く飢え死ぬ子供がいた】』
『【救いようのない悪意に攫われ、惨たらしく嬲られ殺される女がいた】』
　その声は、憎悪だった。嘆きを産む世界への憎悪。ただ、当たり前の幸福すら許さない世界の残酷さへ送られた、濃く、深く、凝縮された、憎悪。

『【世界からは嘆きは消えない。救う傍から、新たな嘆きが世界に生まれ落ちる】』
　だから
『【僕が救う。この両手では届かないのなら、取りこぼしてしまうのなら】』
　言葉と共に、突き破る音がする。彼の背から、新たな彼の生まれた腕が伸びてくる。天を掴むように、あるいは地を撫でるように、幾本もの腕が、彼の背から伸び、そして
『【手を増やそう。幾万の手で、幾億の救いの御手で、全ての人々を救おう】』
　最早巨大な翼のような、あるいは日輪のように伸びた腕、その手のひらの総てが、シールへと向く。一つ一つがその指で別々の印を結ぶ。それは魔術師の扱う術式とは違う、世界そのものへと命令を下す言葉だ。
　全ての手のひらが、ありとあらゆる形で、一つの意味をシールへと向けた。
　死ね、と
『【ああ、本当、最悪だ』】
　シールの嘆きは、放たれた破壊の光に飲まれ消えた。

第百四十六話 神々の戦い 後編

『【……何度地面に埋まるんだ、今日は』】
　その声は、深い穴の底から響いた。
　巨大な大穴、ラルクの攻撃によって生まれた大穴の底で、シールは呻く。見上げれば空は遥か遠い、自分ひとりの為にこんな有様が生み出された事実は少し笑えた。
　身体を起こし、自分の身体を確認する。
『【……うわ』】
　部分部分、砕けていた。
　血は流れていない。ただ身体が欠けているように見える。自分の身体は既に、人間から外れているらしい。まあ、それはあまり問題ではない。むしろ血が流れない分、体力は通常よりも持つだろう。
　だがラルクに対して未だ有効な一撃を与えられていないのは問題だ。
　握り締めた剣は、一撃を与えさえすれば確実に相手を殺せるだけの破壊力はある。あるのだ。だが、その一撃が遥かに遠い。倒すべき相手を倒すための算段がまるで見つけられていない。
『【……やれやれ』】
　改めて仰ぎ空を見ると、神々しさすら見えそうな、救いの御手を背負うラルクの姿がある。こちらを見下ろす彼は、優位な立場にありながらも油断を宿すことは無い。背中から伸びた【救いの御手】は、隙も油断もなくシールを睨んでいる。
　ああ、全く、面倒すぎる相手だ。せめて慢心の一つでもしていればいいのに、ひと時もそんな所は見せない辺りが特に。
『【おや、まだ立つかい？】』

『【無論』】
　一息、そして再び剣を構える。全域の破壊攻撃では、〝カン〟で読まれ、転移で呆気なく避けられる。更には自分の視界は自分の攻撃で避けられてしまう。それはよくない。
『【のたうち這いずれ拒絶の渦』】
　不可侵領域を収束した光の渦がラルクへと向かう。まるで蛇のように。目に負えぬほどの速さで、それも異様に蠢きながら破壊をまき散らす。
『【変化球かな？】』
　それは、しかしあっけなく避けられる。避けられるのは分かっていた。避けてもらうのが目的だった。転移と違い単純な回避は目に追える。自身の攻撃で視界を潰される事もない。
　ただし、当然反撃も来る。ソレをどう凌ぎ切るか。
『【焼き尽くせ神竜】』
　ラルクの声が天から響く。彼の前に、〈創造〉の力によって巨大な竜の頭が生まれる。凶悪な牙を剥き大きく口を開いた竜の頭は、万物を蒸発させる灼熱を生み出す。
　そしてそれ間もなく、吐き出された。範囲は、目に見える視界の全て。
　この何もかもを一瞬で封印するほどにシールは力をコントロールできていない。一部を吸収している間に、この身体が焼き切られる。故に、
『【──ッ転移！』】
　右手に持つ、膨大過ぎるエネルギーの塊を必死にならし跳躍する。
『【……!!』】
　身体がひび割れ砕けそうな感覚に閉口し、歯を食いしばる。今この空間に流れ込んでいる荒れ狂うマナに乗り、ラルクの背後へと回る。転移が完了したと同時に、武器に殺意を乗せ、新たに力を生み出し、放つ──
『【──いない?!』」
『【牙】』
　背後から響く男の声、
『【ッ黒輪!!』】
　振り向きざまにに封印の盾を放つ。

『【遅い】』
　だが反応が、遅すぎた。牙は既に、黒色の盾を掻い潜り、
『【っぐ……！』】
　シールの肉体を食らう。胴体がえぐられる感覚。痛みは無く、ただ確実に自分の肉体が穿たれ削れる感覚は寒気がした。だが怯めば、そのまま食われるのは必定、故に、
『【封印！』】
　黒き勇者の封印術。物質を喰らうと言う特性で持って、自身に突き刺さった牙そのものを封印する。抉り潰された部分をそのまま補うようにして牙を奪い取り、肉体とする。
　更にそのまま、竜を伝い、ラルクの肉体へと侵食する。
『【器用な真似をするなあ】』
　だが、その手前に竜の頭はラルクから切り離された。創造主から切り離されたその首はしばらくもがいたが、そのままシールの肉体に封印された。砕けていた肉体が確実に補填されていく。
　そして、更に、
『【封印開放／神竜』】
　その手から、今取り込んだ神竜を生み出す。
『【噛み千切れ!!』】
　悲鳴のような咆哮が響く。
　獲物を見つけた獣のように、竜は、さっきまでの主へと牙を向けた。
『【流石に自分が生み出した竜に──】』
　直進した竜は、ラルクに食らい着くその前に、砕け崩壊する。それはシールも予見していた。故にその崩壊を隠れ蓑とし、ラルクの背に回る。無防備、にも見える。シールは剣を振り下ろす。
『【安易すぎないかい？】』
　剣は、千手の一つに掴み取られる。
　当然だ。
　この人外に死角など存在しない。無数の手が無くとも確実に避けられただろう。腕ごと薙ぎ払おうとするも、掴み取った腕自体ラルクの肉体から、剣に絡ま

るようにして引き千切れた。

　千切れた腕は、瞬き、膨らみ、そして、

『【――ッ!!』】

　爆発した。絡みつかれたシールの右腕が弾け飛ぶ。衝撃で砕ける。わかっていた。この程度の反撃はわかりきっていた。だが、その程度の犠牲は最早承知の上だ。だから、

「……!?」

　爆発によって肉体が破壊されるのを覚悟し、そのまま直進する。

『【強引に……！】』

『【があああああああああああ!!!』】

　爆発を突き抜けて、更に突っ込む。千手の破壊の光を更にくぐり、構えるは拒絶の概念。その剣を一直線に、ラルクの背中に、突き立てた。

『【拒絶せよ!!』】

　剣を中心とした斥力をラルクの肉体の中で発生させる。一瞬にして莫大な力が剣の外へと向けられ、その中心で貫かれたラルクの肉体は――

『【□□□!!】』

　瞬時に、爆ぜ飛んだ。

　両手両足も千切れ飛び、砲弾のように四方へと飛び散った。一瞬、ラルクの顔がこちらを見て顔をゆがめたようにも見えたが、その頭部すら粉々に砕け散る。荒れ狂う天候に風は強く吹き、その微塵になった肉体すら次の瞬間には風にさらわれ消えた。

　一瞬、ほんの一瞬でラルクの肉体は消え去った。

『【ッぐ、……っは』】

　シールは心臓を掻き毟るようにして、息をついた。

　届いた。半ば捨て身の特攻、右腕を失い尚も突き進んだ特攻で、一撃を喰らわせ、殺した。神を破壊したことを殺した、なんていう風に言って良いものなのか

わからなかったが、ともかく、その肉体は破壊しつくした。
　コレで終わったのか、簡単に判断はできいなかった。だが、先の幻影のように、身代わりを倒したとは思えない。巻き起こったエネルギーの拡散は、紛れも無くラルクのソレだった。同等に近い力を持つシールにはソレを感じられた。
　殺した、殺したのだ。あの神に成り果てた英雄を。
『【……、く、っは』】
　息を吐く。だが精神の緊張は解けない。今、残った左手で握る剣を、緩んだ精神でもっているわけには行かない。下手すればこの地域一体が消えてなくなる。
『【……、ああ、くそ、子供たちが見たら怖がるな。これは』】
　完全に砕け散った右腕を見て苦々しい顔になった。いきなり自分の教師の腕が無くなったりするなんて子供達の心に悪すぎる。誤魔化すためにも魔術で義手、のようなものでもつくれるだろうか。
　そんてことを考えた自分に、シールは苦笑した。今更になって帰ってからの心配をしている。生きて帰れると、ようやく思えたらしい。しかし仕方も無い。久しぶりに、死ぬと確信させられるような敵だったのだから
　ああ、だけれど、生き残った。これから皆の下へ──

『【──、あ？』】

　帰れる、と、そうシールが思ったときだった。〝油断した〟ときだった。
　自分の腹に、〝腕〟が突き立っているのに気がついたのは
『【……な、に？』】
　腕は、強力な力でシールの腹にめり込んでいた。それを封印しようと反応することもシールはできず、そのまま腕はシールの肉体を抉り取った。
『【……ッ!!』】
　そうなってからようやくシールはこの事態に反応できた。自分の身体を抉ったその腕に剣を振るい拒絶の力を飛ばす。それだけでその〝腕〟は粉みじんに消え去った。
　シールは混乱していた。ラルクの肉体は徹底的に破壊した。彼の意思の残りそうな存在は何もかも砕いて潰した。その筈だ。なのに何故？　いや、そもそも腕

だけとはどういう意味だ？
　疑問のまま周囲に視線をめぐらせる。そして気づく。
　目の前の先、何も無い、何も無いはずの空間の中心、
　――創造
　声がした。聞き覚えのある、おぞましい声。やはり肉体は無い。先ほどのように腕だけがあるわけでもない。本当に、何一つ存在しない。だが、〝目に見えないもの〟はそこに存在していた。
　瞳には移らない、だが確かに感じる膨大な、マナの塊
「……冗談だろう？」
　信じがたい、というよりも、信じたくないと言ったふうに、シールは呻いた。
　目の前の歪み、マナの中心から、眼球が産まれた、鼻が、口が、手が腕が身体が足が、次々に生まれ、蠢き、そして人の形を成した。産まれた〝ソレ〟はしばらく調子を確かめるように身体を動かして伸びをした後に、こちらを見て微笑した。
『【やあ、シール】』
　ラルクは復活した。至極当たり前のように。
『【どうやら強大な魂は、肉体を失っても再生できるらしい。創造という特性があったからこそ、とも言えるけれど……】』
『【……』】
『【神と実際対峙した時は注意が必要だね。教えてくれてありがとう】』
　流石に、シールにその言葉に応じるだけの気力は無かった。
　これは、死ぬな。
　最早憶測などする必要は無い。ありありと、実感として、自分の敗北と、死が間近にあった。大きく犠牲を払って与えた一撃を、あっさりと凌がれた。それのみならず、今までの攻防がほぼ無駄であったと気づかされたからだ。
『【……』】
　身体が動かない。
　戦意を失ったわけではない。絶望したわけでもない。単純に今食らった不意の一撃のダメージに身体が限界に到達していた。今の状況はシンプルだ。ただ、勝てないという結果だけが、シールの前に立ちふさがっていた。

『【さて、それじゃあ不安要素を排除させてもらおうか】』

　ラルクガ此方へと近づいてくる。死が目と鼻の先へと近づいてきていた。【救いの御手】は迷い無く此方に向けられる。身動ぎすらできない自分に対して、油断も一切無い構えだ。せめて、身体が動かせられたなら──

　──動かせたら？

　シールは自分の考えに疑問を持った。

　どうやら自分はまだ戦うつもりだったようだ。腕を失い、身体を削られ、なおかつ肉体を失ってたの死なない化け物を相手にしていながら、未だに自分の闘志は萎えていない。

　ああ、そもそもなんでこんなにも戦っているんだっけ？

　ラルクの問いかけを思い返した。何故自分がこうまでして戦っているのか。自分で言ってなんだが、少々この闘志は異常だった。諦めが悪いにも程がある。あがくにも限度がある。そうまでして戦う理由が、自分の中にあっただろうか？

　身体が動かせず、目の前の死に抗えないからだろうか。そんな疑問ばかりが頭を渦巻く。自分自身の内側の、闘争の源泉。自分自身の渇望へと。

『【……ッハ』】

　そして気が付いて、シールは吹き出した。

　自分の中の、その望み、ソレがあまりにもシンプルだったからだ。世界を滅ぼし救うなどと言う常人には及びもつかないような発想へと到達した男の前に抗う理由としてそれは、あまりにも、小さすぎた。

　あの鮮烈な蒼を、もう一度──

　たったそれだけの願いだった。世界を、学院の皆を守りたいと願うのは、シールにとっては当たり前の事。守るべきものを守る、当然の事に過ぎない。だが、ソレだけは特別だった。ソレだけは、彼が唯一、自ら手を伸ばし欲するものだった。

　もう一度、もう一度だけ。

　だがその願いもかなわない。避けられぬ死は、最早眼前だ。

『【君の死を糧としよう。そして世界を救うと約束しよう】』

『【いりませんよ、そんなの』】
　最後にそんな負け惜しみを口にするのが限界だった。【救いの御手】が放つ白金の閃光が更に強くなる。死に際に見るには美しい光だったが、シールにとっては疎ましかった。彼が見たかったのはこの色ではなかったのだから。だから、
『【ああ、畜生……』】
　そんな風に、無念の言葉をつぶやいた。それでおしまいだった。最早立ち上がる気力はなく、そしてこの敵に立ち向かえる人間はもういない。だからお終いだ。

〝鮮烈な蒼の閃光〃が、ラルクの右腕を弾き飛ばしたりさえしなければ、

『【……は？』】
『【……!!】』
　自分の命を奪おうとした白銀が突如として蒼に食い破られた光景にシールは呆然とし、対しラルクの反応は迅速だ。即座にシールから距離を取り、【救いの御手】を全方位に構えた。今自分自身を切り裂いたのがなんだったのか、彼をもってしても全く理解はできなかった。
　だが、シールには分かる。何が起きたのかを知ることは出来なくても
　それが誰によって行われたのかは分かった。
「成程、有効ですね」
　その冷徹に見えて、激烈な感情の秘めた声は、上空から響いた。
　蒼く、ひたすら蒼い髪の女は、神の力を持つ二人を悠然と見下ろしていた。
「〈〈〈蒼〉〉〉」
　短く呟かれた一言から姿を見せたのは、〝剣〃だ。ほんの一瞬その切っ先が触れるだけで、世界が揺らめき、切り裂かれるような錯覚を覚えるほどの鮮烈な、蒼。
『【世界を呑む蛇よ!!】』
　ラルクが瞬時にその創造の力を繰り出す。竜と見紛うばかりの巨大な蛇、例の如く神獣に類する蛇は意思を持って蠢き、〝蒼〃へと一直線に突撃した。蛇は、この世に存在するあらゆる物質を飲み込んでこの世から消し去るくらいの力は当

然のように、備わっていた。
　だが今彼女が従えてるその剣は、その神の盾をまるで意に介する事なく
「〈穿て〉」
　蛇の肉体を中央から引き裂き、そして爆散せしめた。
　ラルクも、流石にその結果に驚きに目を見開き、しかし流石と言うべきか、二度目ともなると彼の反応は早かった。
『【距離を取ろうか】』
　自らの肉体を即座にその場から転移し、その謎の攻撃から一瞬で距離を取った。
『【……】』
　結果、シールは眼前の死から離れる事になった。が、残念ながら、呑気に安堵するには無理があった。
『【……えーっと』】
「……」
　ラルクの代わりに、顔には出さないが、明らかに怒り狂った彼女の姿があるのだから。その瞳にはメラメラと激しい焔が渦巻いているのがシールには見えた。ただ単に彼女を助ける為に頑張ってきたのになんという理不尽だろうかと言う気もしないでもないが、もともと彼女はそういう存在なので納得するしかなかった。
　正直ラルクに殺されそうになるより遥かに恐ろしい。シールはこれから自分に降りかかる災厄を予想し、覚悟し、口を開いた。
『【あの、リーン──』】
　何かしら、シールは言い訳を口にしようとした。が、その前に下あごに強烈なアッパーカットが入ったため、その言い訳は強制的にシャットアウトされた。
　……ああ、久しぶりだな。この理不尽系暴力
　教師の仕事を得てから時々はあったものの、ここまで直接的に彼女が暴力を振るったのは久しぶりである。勇者の力を使えばダメージは即座に吸収くらいできるが、それはしてはならないと思ったので甘んじて受け入れた。
『【そ、そのですね、リー』】
　直後にボディに拳が入った。胴体部分はそこそこの範囲をラルクの攻撃でもっ

ていかれているのだが、全くもって、情け容赦くその抉れた部分に拳を叩きこんだ。いっそ清々しい程に。
『【ちょ、ちょっと死に』】
　そこへ頬に凄まじいビンタが直撃した。否、これは最早ビンタではない。張り手だ。手のひらの一番硬いところで的確にこちらの頬を捉えた。一体彼女はどこでそんなことを覚えたのだ。
『【いやあのリーン落ち着いてってかちょっとひど』】
　しかし殴られ続けるわけにもいかず、シールはリーンを落ち着かせようと言葉を続けた。無論彼女がその言葉で落ち着くはずもなく、シールの首根っこを掴み取り、そのまま
『【――んぐ』】
　そのまま、唇を重ねられた。
　奪うという表現が最もふさわしいような暴力的な口付けは、しかし彼女の暴力の中で最も彼の芯に響いた。触れた唇から、彼女の明確な怒りと、そして怯えが伝わってきたからだ。
　恐ろしかったのだ。彼女は。自分が失われてしまうのが。
　かつて牢獄城の後、彼女を失うことを恐れた自分のように、彼女もまた自分を失うことを恐れた。消えてしまうことを恐れていた。それが伝わった。
　唇を離した後に彼女の頬を流れた涙が何よりそれを証明していた 。
『【……ごめん、リー、ん?!』】
　だが、その直後にこちらにヘッドバッドをかましてくるあたり彼女のたくましさったらなかった。それだけ思い切りやれば自分だって痛いだろうに。
　痛みに悶えるシールを、表面上冷静さを取り戻したリーンは、首をかしげ
「助けてあげたのにお礼の一つもないのですか貴方は」
『【ありがとうございます。で、なんなんですか、その剣』】
　頭をさすりながらシールが指差すのは今も彼女の周りを飛び回るようにしている、一本の剣だ。莫大な蒼のマナを放ち、まるで獣のように動き回る姿を「剣」と表現していいものなのかは怪しかったが
　神の領域に到達し、生半可な力では傷をつけることすらままならないラルクの肉体を引き裂いた剣、とてもまともな代物とは思えないが、

「ようは、そこのクズは神に到達するだけのマナで自分の身体を再構築しただけなのだろう？」
　その声はリーンの背後から聞こえてきた。ヴェイン、彼は病室で寝込んでいた姿と同じ格好のままで、未だ悪い顔色のまま、淡々と言葉を続けた。
「ならば簡単だ。こちらも同じことをすればいい」
　彼が手のひらに握るのは、引きちぎられ奪われた自身の魔眼。その脈動にあわせ、リーンの剣は光を放つ。
「　此方も同レベルのマナを凝縮し圧縮し武器を生み出せば、それは神と同レベルの武器となる。つまり、神殺しの武器だ」
　シールが魔王のマナを利用し剣を生み出しているのと同じ理論だ。神、などという言葉でどれだけ彩られようと、結局は力の規模の大小でしかない。　二人がしたことはまったくもってシンプルだった。
　だが、〝神への到達〟がそれほど簡単な話であるわけが無い。
『【それだけのマナ、何処から持って来たんだい？】』
　いつの間にか、ラルクが声の届く距離まで近づいていた、リーンの剣への最大限の警戒を怠る様子はなく、一定の距離以上は近づいてはこなかったが。
『【これでも僕がコレになるまで結構な手間をかけてる。マナの収集を悟られないように、霊地から少しずつ奪ったり、古代獣の封印を解いて、保有してるマナを回収したり、あるいは無限に膨張しマナを蓄える崩壊物を利用したりね】』
　実際、彼がかき集めたマナの総量は膨大であり、一朝一夜で集められるようなものではない。国に悟られないように慎重に、かつ確実に大量のマナを集めるのには相当な時間を有したのだろう。
　だが、リーン達は、ラルクが神の力を得てから、僅かな一夜も明ける前に、ラルクに届く剣を生み出した。総量自体はおそらくラルクの集めたマナには遠く及ばない。魔眼の力を使い、剣という形に凝縮した結果、ラルクの肉体に届くレベルまで到達させることができたのだろう。
　だが、それでも、
『【広範囲の土地の環境の要ともなりうるマナスポットを、一つ二つ潰すだけでは効かないと思うけれど？】』」
　それがわずかに責めるかのような口調だったのはこちらの精神を揺さぶる為の

ものなのかもしれない。しかしシールには反論のしようがなかった。
　もし実際に巨大なマナスポットからマナを奪えばどうなるか、わかりやすい例がこの場所だ。死の大地。生物の一切が失われた地獄のような光景。こんななにもない世界をリーンとヴェインが生み出したのだとしたら、しかもそれが自分を助けるためなのだとしたら、シールにはラルクに反論する言葉を見つけられなかった。
　そして、その言葉を向けられたヴェインは、
「さて……俺はもう帰るぞ」
『【え？】』
　そう言って、さっさと転移術式を刻み始めた。
「当たり前だろう。俺のコンディションは最悪だ。撫でられただけで死ぬ自信がある。ここに居残り続けても足手まといだ」
　自分自身の仇を前にしてヴェインは冷静だった。自分自身の復讐心と現実との折り合いがきちんとなされている彼らしいといえばらしいが、しかし、結局ラルクの問いに答えていない。
「疑問ならそこの超絶鉄面皮に聞け。その女の発案だ。俺はそれに乗っただけだ」
「誰が鉄面皮ですか根暗」
「氷の女の方が良いかクソ女……ああそれと」
　と、彼が何かをリーンに投げつける。仄かに光を纏ったそれは、シールが回収したヴェインの魔眼。それをリーンは手のひらに収め、〝蒼の剣〟を掌握した。ソレを確認し、ヴェインは頷くと、未だ距離を維持するラルクを指差し、
「あの神気取りを、可能な限り苦しむように殺してくれ」
　それだけ言って彼は転移した。そして残されたのはシールとリーン、そしてラルク。リーンは、ラルクへと視線を向けると
「この剣のマナに関して、でしたか？」
　と確認し、
「ご安心ください」
　といって、何故だか彼女は自信満々に頷き

「あとで かえします」

　真顔で、なんら気負う事もなく、真っ直ぐに言い放った。
『【□□□……】』
　流石に、ラルクも絶句した。
　そうだろうな。と、シールは思った。身内でさえも言葉が無いのだから。
　あまりにも、あんまりなセリフだった。そういう問題じゃないだろう。どう考えても違うだろう。というかその自信満々な表情はなんなのだろう。ひょっとして本気で問題ないと思っているのだろうか。思っているのだろうな、間違いなく。
「緊急事態です。仕方有りません」
『【凄い。真顔だ】』
　ラルクは感心したような声を上げた。そこには裏も表も無い。
　神に心底までに衝撃を与える女が此処にいた。
『【リーンは凄いなあ……』】
「何がですか？」
『【本気でわかってないあたりが特に……』】
　シールは気が抜けたようにため息をついて、そして少しおかしくなって笑った。
　神が産まれようが、その神がほかの神々を滅ぼそうとしようが、世界の危機になろうが、彼女は彼女のままだった。全くぶれない。変わらない。ソレが良いか悪いかは全く別にして、彼女はいつまでもありのままだ。
　そんな彼女が、あまりにも、大好きだった。
「なんですかいきなり、狂ったんですか」
『【いいえ、少しスッキリしたもので』】
　何故、自分が死を覚悟してまで戦おうとしていたのか、その答えが今この時なによりも明確になった。彼女の為だ。徹頭徹尾彼女の為だ。彼女が好きで、彼女がいるこの世界が好きで、だから自分は戦うのだ。それでいい。それがいい。
『【さて、それじゃあ戦いますか』】
「ええ、早く帰って甘いケーキを食べたいです」

『【生きて帰れたらいくらでも奢りますよ』】
　そういって、二人は並んだ。リーンは作り出した〈蒼の剣〉を操り触れぬままに構え、シールは僅かな時間に繋ぎ止めた身体で立ち上がって。
『【素晴らしい。最後の決着と行こうか】』
　ラルクは笑い。【救いの御手】を全て此方へと向けた。油断も慢心も何も無い神を殺す救世の神は、悠然と二人の前に立ちふさがる。
　今の世界が続くか、世界が殺され救われるか、そのどちらか
　決着が近づいていた。
『【ああ、そうだ。言い忘れていた。リーン』】
「なんですか？」
『【愛しています』】
「そうですか」
　それだけ言うと、二人は神を討つべく駆け出した。

第百四十七話 むかしのはなし ラルクの場合

首都ガイディアはその夜、全ての住民が南の空を見上げていた。
その日は丸一日穏やかなものだった。男たちは仕事に精を出し、女たちも家の仕事を立ち回り、子供たちは外を駆け回り遊びはしゃぐ。天候も穏やかでまさしく平和な日々だった。精々普段と違う事と言えば、南の平原への街道が騎士団によって封鎖されている事くらいだが、普段何もないその方角に足を運ぶ者もそうおらず、やはりその異常には誰も気が付かなかった。
その異常が平和な街に伝わったのは、夜になってからだった。
星の瞬く夜の空、仕事を終えた人々が帰路に付く頃、誰かがそれを見た。
「……ありゃあ、なんだ？」
南の空、街の防壁の上から見えるその空に、異様な暗雲が巻き起こっていた。まるで唸るかのように一点を中心に渦巻く暗雲は時折雷を放ち、竜巻を巻き起こしていく。見るものを不安に駆り立てるようなおどろおどろしい空の蠢き。
それだけではない。更にその空を時折、〝真っ白な光〟が地上から現れ、切り裂いていく。蒼の輝きが巨大な雷を弾き飛ばし、更に白銀の〝御手〟が全方へと光を叩き込む。それがどういう意味なのか理解できるものはいなかった。だが、それが、明らかな異常である事は誰の目にもわかった。そしてそれがなにか、恐ろしいものであるという事も。
誰かは自分を抱き、誰かは隣の者の手を握り、ただただその恐ろしい光景を見守っていた。運命を受け入れるしかない無力な人々は、ただ、世界の行く末を決めるその光景を見つめていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

ガイディアの住民たちが見上げる空の下では、異常な空の荒れ模様よりも遥か

にまして尋常ならざる有様になっていた。平たな草原であった大地は隆起し高い山が生まれたり、それとは逆に奈落まで続いていそうな谷が大地を割っていた。しかも無秩序に幾つも。
　そんな災禍の中心である三人は、そんな大地を更に歪めるような圧倒的な攻防を繰り返していた。彼等の一挙一動が大地を更に割り、歪め、打ち上げ、ひっくり返す。
　まさに神話の大戦と呼ぶのが相応しいような戦いだった。その事実を認識しながら、シールとリーン、二人から猛撃を受けるラルクは、感動していた。
　素晴らしい、なんて素晴らしいんだろう。
　その賞賛は目の前の二人に向けられたものだ。
　勇者と魔王の力を、勝手な人間たちの都合によって押し付けられながらも、力に溺れず奢らず真っ直ぐに振るうシール、そして寡黙に、しかしその内に燃え盛る激情を持って立ち向かうリーン、この二人は素晴らしい。
　二人の力も、意思も、それらを育んだ経験もなにもかも、ラルクには眩く思えていた。なぜなら今、二人がラルクに見せつけてくる強さこそ、彼がこの世で最も尊く、大切なものだと感じているからだ。
　愛、誰かを思う、愛おしく思う心
　それこそが、ラルクが誰よりも守らなければならないと感じていたことだ。誰かが誰かを愛しく思い、守ろうとすること。時には危うく、己も皆も傷つけてしまいかねない程に強力な力。
　そんな力があるからこそ、ラルクは人を守ろうとした。皆を救おうとした。悲しみにくれる人を、そしてその悲しみから救おうともがきあらがおうとする人がいるからこそ、だ。
　そう、だからこそこの世界を破壊しなければならない。
　愛の尊さを誰よりも理解しているが故に彼は世界を破壊しなければならない。そうしなければ気が済まないのだ。それが実行に移された暁には彼は恐らく今まで味わったことの無いような絶望と己への憎悪の感情に包まれることだろう。
　ラルクは、自分がやろうとしていることを誰よりも理解し、そして憎悪していた。そんな選択肢しか見出せない自分を嫌った。
　それでも、世界のすべてを救うための方法はこれ以上に思いつかない。全て

の、この世のありとあらゆるすべてを一切合切余さず救うには、世界の根本的なつくりから変えるしかない。そしてそれを成すための力を得るには、神を殺すしかない。

　確固たる意思を持ってこの世界を破壊しなければならない。

　炎に焼かれ、剣に削がれ、全身に衝撃が加わる。絶えまなく連続だ。ラルクが絶賛するように、シールとリーンの攻撃は最早比肩するところのない程に高度で、洗練されている。あらゆる攻撃に隙はなく、正確で、重い。恐らく一瞬、ほんの一瞬でも隙をラルクが見せればその瞬間、戦いは決着するだろう。

　だが、ラルクはその隙を見せることはなかった。少なくともこの戦いが始まってからというものの、一度たりともそれをシールたちの前でさらしたことはない。

　神の肉体に、魂に、疲労などという概念は存在しない。つまりこの調子で戦えば、限界がくるのは目の前の二人だ。その瞬間には決着がつくだろう。

　今日、この日のためにラルクは研究を積み重ね、鍛錬を積み重ね続けてきた。

　神の身となり戦うのは初めてだったが、しかしその身になった後どうやって戦うか、そのシュミレーションは飽きるくらいに続けた。

　全ては見知らぬ誰かのために。自分自身も預かり知らぬこの世で悲しむ何処かの誰かのために。

　私欲などカケラもなかった。あえてそれがあるとすれば、巨大犠牲を強いてでもすべてを救いたいと願うその願い自体であって、彼が、彼のために想う事はほんの僅かほども存在しなかった。

　しかし、何時からだっただろうか？

　自分がここまで、誰かの為に戦うようになったのは、いつからだっただろうか。今まさに刃を交える二人の愛に揺らされたのか、あるいはシールに戦う意義を問いかけた時、無意識に自分にもそれを返していたのか、肉体が、意識が、魂が、目の前の戦いに全力で向かう中、その裏側で、ラルクは己が過去に無意識を沈めて行った。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

：　：

：　：　：　：　：　：　：　：　：　：　：　：　：　：　：　：

：　：　：　：　：　：　：　：　：　：　：

：　：　：　：　：　：　：

：　：　：　：

：　：

：

　英雄の過去に特別なものなど存在しない。

　きっかけは、あまりにも平凡だった。

　そもそも彼はミストが思っていたような英雄でもなければ聖人でもなかった。村に住んでいた同い年の少女、花の様に笑う彼女の事が好きだった。慈善の心なんてとんでもない。その頃の彼にあったのは恋心だ。

　彼はその時から既にして己が才能に気づき、そしてそれを人のためにと役立てていたが、別にそれだって、誰がためにとしたことではなかった。彼女の前で、良い所を見せてやろう、なんていう、浅ましくも微笑ましい恋心からのものだった。

　だが、そんな彼の行いを彼女は見抜いていた。彼女は聡かった。

　彼女はそっと、彼をたしなめた。

　困った人を、自分の為に利用するものではない、と。

　そのものズバリ、己の内にあった浅ましい部分を言い当てられたその時の彼のショックと羞恥は、言葉では言い表せないだろう。才能溢れ、大人たちからも一目置かれる存在だった彼は、自分よりも遥かにか弱い少女の前で赤面し、縮こまってしまった。

　そんな彼を見て、少女は困った風に笑みを零し、そして彼の頭を撫でた。

　そして、けれど、誰かのために何かをしたあなたの行為はとても素晴らしいことだわ。そう声をかけた。

　それがもし彼を憐れんで口にした言葉だったなら、いよいよ彼は耐えきれずその場から逃げ出していただろう。だが彼女の言葉に嘘偽りは感じなかった。言葉

に込められた感情は、純真な彼の心を不用意に傷つけた自分への悔いと、そんな風に恥じ入って小さくなってしまう彼に対する微笑ましさだけだった。
　彼女は貧しい村の人間で、学を得ていたわけではなかった。
　だが人の営みと自然の中で、人にとって何が大切なのかを学び取り、それを大切にできる人だった。
　彼は、ますます彼女のことが好きになった。そして、彼女が喜ぶ姿を見たくて、彼女が花の様に微笑む姿が見たくて、彼は一層、働くようになった。
　今度は良いところを見せよう、などという見栄ではない。村の役に立ち、困った人が微笑みに変わる事が、少女にとって最も喜ばしい事であると知ったから、彼はそうするようになったのだ。
　すべては彼女のために。
　それは紛れもなく恋であり、愛だった。
　彼にとってこの世のすべては彼女であり、彼女のためならば己の命を投げ打ったところでなんら惜しくはないと本気でそう思っていた。この時が永遠であればいい。そんな愚かしい願いを本気で願う程に彼は彼女のために生きてきた。無論、そんな願いをは叶うわけもなかった。
　終わりは訪れた。
　彼女の死によって、それは終わった。
　流行り病だった。近場の街から医者を連れるため彼が奔走したが、たどり着いた時には最早手遅れだった。彼は悲しみにくれ、怒りに震え、連れてきた医者に掴みかかり彼女を救うようにと脅迫した。
　そういうことをしてはいけないわ。
　それを止めたのは、呼吸をするのも辛そうな彼女だった。
　あなたは優しいもの。
　それは彼女が彼に伝えた最後の愛だった。
　それを言ったっきり、彼女の身体からは力が抜けて、そのままだ。
　彼女は彼を残し、大地へと還った。残された彼は悲しみにくれ、しかし悲しみと怒りを周囲にぶつけることだけはしなかった。彼女の最後に残した言葉をないがしろにしたくは無かったから。
　そして、残された彼は、真の意味での〝善人〟となった。聖人ではない。ただ

悲しむ人を救い、絶望に沈む人へと手を差し伸べる、そんな善人。彼女の想いを守るために、彼女の最後の言葉を嘘にしてしまわないために、彼は自らの心を、真に善人とした。
　これが彼の原点だ。
　特別な事なんて一つもない。愛しき人との別れなんて世界中の誰だって経験することだ。彼は恵まれた才能があっただけで、決して、特別なんかではなかったのだ。
　そう、彼女が

　彼女が

　彼女の

　彼女は――

　　　　　　ア　　　　　　レ　　　？

　　　彼　女　の　　　名　　　前　　　は　　　　な ん ダッ　　　ケ？

　それは、極々当たり前のように起こる、忘却だった。神になるまでの長い長い長い長い道のりの果てを歩み続けてきた男だ。力を得るために己を切り捨て続けたのだ。
　忘却は必然だ。茨の道を歩み続けるための必然だった。
　だが、彼にとってその忘却はあまりにも致命的だった。無意識下でおこなわれていた回顧と自覚、それが身体に、ほんの僅かだけ伝わった、その瞬間だった。
　彼の肉体に、衝撃が走ったのは

第百四十八話 世界に平和をもたらそうとした英雄の末路

　それはほんの一瞬の隙だった。

　圧倒的な破壊と魔術の狭間、リーンと二人でその攻撃を凌ぎ切ったその後。本来ならその後隙無く更なる連激がやってくる、筈だった。

　□□□……？

　だがその瞬間、ほんの僅かに、〝間〟が空いた。攻撃でもない、次の一打を放つための呼吸でもない。そうであるならシールもリーンも即座に察することができる。だがそれですらない。ただ空白の間が空いたのだ。

　意図は不明だった。理解もできない。罠である可能性も全く否定できない。だが、それは永遠と続いた攻防の中で唯一生まれた隙だった。たとえ罠であったとしても、飛び込まなければその後ジリ貧になるのは必定。

　故に、

『【――――ッ!!】』

「【【【【　　強　　化　　！！　　】】】】」

　シールは瞬時にラルクの懐に飛び込み、更にリーンが神速詠唱でシールの肉体を強化、防護する。そして片手に持つ【不可侵の白王】を〝手放し〟、自由になった手を構える

『【封印偽剣!!』】

　赤紅の術式に染まった腕で、ラルクの肉体を突き貫いた。

『【……お】』

　ラルクは何処か間の抜けた声だ。だがそれも一瞬で、再び人を喰ったような、余裕のある笑みに表情が戻っていった。

『【成程、殺せないなら封印、か。確かにこれは君の得意技だ。そしてかつての魔王は勇者によって封印された。有効な攻撃だ】』

　更に、シールの腕を悠然と掴みながら「しかし」、と言葉を続けた。

『【残念ながら、勇者が魔王を封印したのは、魔王その物を殲滅した後だ。直接その力を封じる、なんてことは本物の勇者であっても出来やしない】』

『【……!!』】

『【僕の肉体を砕いた時、あのときなら可能だったんだけどね？】』

　シールがラルクの肉体を弾き飛ばしたあの時、シールは勝利を確信した。最初はラルクの魂のマナも何もかも検知できなかったからだ。だがあれは、無防備になった自身の魂をラルクがシールの前から隠したからに他ならない。

　シールは既に絶好の機会を一度失っていたのだ。

　メキメキと、掴まれた腕が握りしめられる。強烈な痛みにシール歯を食いしばる。掴まれた腕を封じようにも、胴体を貫いた部分に意識を集中しているためにままならない。

　白王の剣を振るう余裕もない。相手も同じく、此方の封印術式に集中している為にそのほかの攻撃はままなっていない。【救いの御手】も沈黙したままだ。

　間違いなく、このシールの封印術は、ラルクの心臓を握っている。

　だが心臓を握ったまま、その先が続かない。封印を完了しきれていないまま、ラルクの腕がゆっくりと、シールの腕を破壊しようと強く握りしめてゆく。状況は拮抗にすら到達できてはいなかった。

『【っぐ……がぁ』】

「【……!!】」

　徐々に押されて行くシールの背中から、リーンが体を抱きとめる。彼女が生み出した蒼の剣の力がシールの肉体を伝い、えぐられる腕を癒し、更に強化術式が全身を重ねていく。白王と勇者の力を解放し、人から離れてしまったこの身には伝わりづらいが、それでも力となる。

　だが、それでも、力の劣位は変化しない。徐々に確実に、貫いた封印術式は解かれ、更に掴まれた腕は深く食い込み肉体を潰していく。余裕が生まれたラルクの背中から、【救いの御手】がシールたちを睨み、破滅の光を形成していく。

　最後の、最後の隙を見ての特攻は、失敗だった。ラルクは、最早僅か程の隙も表情に写すことはしない。ただ此方を見て、微笑みを湛え、

『【健闘したよ。君たちは、だがここまでだ】』

　ああ、その通りだ。

シールは内心で苦々しく同意した。失敗した。最早万に一つも勝機は無い。だが、それでも、もう抗いを辞めることはしない。背中を押す彼女がいる限りは。
　だから、最後まで――
「――え？」
　その声は、その場の三人全員が上げた声だったのかもしれない。

〝ソレ〟は、シールが抗う事を決意したその次の瞬間に現れた。
〝ソレ〟は、ラルクが隙を見せたその瞬間以上に、唐突だった。
〝ソレ〟は―

『【……ッガ？】』

　ラルクの肉体を、反対側から貫いていた。
　シールが貫いたラルクの身体から、新たにもう一本、別の腕が生えてきた。否、逆側から貫いて、シールの顔を掠めたのだ。【救いの御手】と錯覚したが、その腕はラルクのそれとは違う。
　眩いばかりの、金色
『死にさえすればいいの？』
　浸透する魔の声、身体、流れる金の髪に瞳。マナと人、そして生と死の狭間で揺れる人でありながら精霊と成った少女は、悠然とした姿でそこにいた。
『【エ、レ『殺すと約束したわよね』
　宣言と共にラルクの身体が震える。
　生誕の神の巫女から力を奪い、それをトリガーとして創造の神となった彼だが、それ故に死という概念に近しい彼女の与える一撃は、ラルクの肉体を縛り、蝕み、そして殺す。
　殺すのだ。それはつまり、
『シール!!!』
『【おぉおおおおお!!』】
　シールの封印術への、決定的な後押しを与えるということだ。
　凄まじい力の奔流が自分の中に流れ込んでくるその感覚にシールは身悶えし

た。神、そのものを封印するなんて無茶は、思った以上に肉体に負荷がかかった。
　勇者の権能を完全に解放している現在、自分の中の封印の容量に限界は存在しない。が、それでもまるで体が炸裂しそうな感覚は言葉にし難い圧迫感を催した。元々封印の力はシールのものでは無いが為に齟齬が起こっているのだ。
　だが、その猛烈な感覚は紛れもなく、相手の力を奪いとったという証だ。

『【封　　印!!』】

　咆哮、そして腕を引き抜くと同時にラルクのマナを、その魂を構築する莫大なマナの全てを、勇者の力によって封印し尽した。
「……が、ぁ」
　腕を引き抜くとラルクは体を地面に倒した。
　あれほどまでに力と輝きに満ちていた彼の肉体は、今はまるで燃え尽きた灰のように白く色を失っている。一瞬、再び再生を始めるのではという悪寒もしたが、ラルクは動かない。〝再生するだけの神の力ごと封印する〟という、言ってみればかなり強引な力技は、通ったのだ。
「……終わったのですか」
　成せたのは背中を支え続けてくれたリーンの力、そして、
「エレナ」
『…………』
　精霊の姿になって現れたエレナのおかげだった。怪我はないのか、何故ここにいるのか、その姿はいったい何があったのか、様々な疑問を問いたいところだったが、その前に
『……つ、かれた」
　それだけ言って、エレナは倒れてしまった。シールが慌てて彼女の体を支えると、既に彼女の肉体は精霊から元の普通の少女の姿に戻っていた。目を閉じたまま、幼い寝息をたてている。
「休ませて、あげなよ。彼女、かなり無理したみたいだからさ」
「学院長」

そして、その背後から、ミストが姿を現した。穿たれた腹の傷は治療されているが、それを除けばほとんどリーンが彼を連れ去った時と変わりない。碌に休息もとっていない内にトンボ返りしてきたようだ。
「いやね？　僕としてはもう投げっぱちになっていたんだけどね。でもリーン先生に投げ捨てられるわその後エレナちゃんに背後からどつかれて『私も連れてけ！』ってどやされるわで」
「身内から出たサビなのにあなたがさぼっていいわけないでしょうが爺」
「もうちょっと年寄りをいたわって」
「黙れ妖怪」
　リーンは言葉で一刀両断し、ミストは撃沈した。
「……うん、まあこんな感じでエレナちゃんにもボッコボコに」
「……苦労があった事は察します」
　同情しつつも笑いが零れた。
　リーンにしろエレナにしろ、シールやミストと比べてずっと男前だ。だからこそ今生きているのだから感謝しなければならない。生き残った。これですべて終わったのだから──

「……が、」

　地面からの声、乾き切った人の声がした。
　反射的にシールが身構える。ラルクが、力を失った身体を引きずって、地面を掻いたのだ。シールは反射的にエレナを遠ざけ、トドメを刺すべく封印剣を構えようとした。
「いや、いいよ。大丈夫さ」
　ミストがそれを制する。見れば確かに、ラルクの肉体は今にも崩れかけ、わずかな動作をするたびに肉体がこぼれ落ちていく。最早その身体が崩れ去るまでわずかほどの猶予も残されていないのが見て取れた。それでも彼は足掻くようにして、真っ直ぐに、ミストの方へと這いずって行った。
「……ラルク」
　ミストもまた、彼に歩み寄り、身体をかがめる。何か言葉にしようとして

「……な…………ま…………え…………」
　ラルクは、目の前のミストを確認すると、崩れた唇を歪めて、言葉を紡いだ。
「……あ…………の……こ……」
　その問いの意味を、シールもリーンも理解はできなかった。正しい言葉かすら怪しかった。だが、ミストは彼の声に、ただ悲しそうな顔をしてた。
「エレンだ。あの子の名は」
　それだけを口にした。告げられた名の意味を理解できる者は
「……□□□」
　問いの答えに対して、ラルクは何かしらの言葉を残すことはなかった。そうする前にその肉体は完全に砕け散ってしまったからだ。ただ、その苦しげな顔が、わずかな安堵を得ていたから、満足だけは得られたのだろうと、理解はできた。
　マナの枯渇で荒れ狂う気流が風を生み出し、ラルクの破片を運んで行く。世界を幾度となく救い、様々な人々の悲しみを払い続けた男の成れの果ては、跡形も残さず、大地から消滅した。
『【……お疲れ様でした』】
　シールの内に様々な言葉が胸を過ぎり、最後にのこったのがこの言葉だった。あらゆる善行をなし、そのためにあらゆる悪行にすら手を染めようとして、挙句に世界を滅ぼさなくてはいられなくなってしまった男に、向ける言葉はこれくらいだ。
　お疲れ様。次生まれることがあるならば、凡人であれますように。
　無論、そんな言葉を告げるのは自己満足以外ではないけれども、そうであれ、と願うことは自由だから、彼はそう願った。
　かくして
　ガイディアはおろか世界崩壊の危機であった今回の事件は、閉幕を迎えた

第百四十九話 崩壊物暴走事件および南方平原消滅事件、その結末

　事件から数日後
　オルフェス学院、中等クラス校舎前に、二つの人影があった。
「……」
　きめ細やかな白い肌、見る者を魅了する端麗な容姿、陽の光を返し輝く金色の髪を持った紛うことなき美少女、つい最近神殿に連れ去られた少女、エレナが再び学院へと戻ってきていた。
「……」
　そしてその隣には、神殿の手からエレナが守り通した少女、セフィも無事にそこにいた。世界の危機ですらあった混沌の地獄の底から、二人は日常へと回帰したのだ。
　ところが、懐かしくすら感じる学び舎を前に、エレナの表情は冴えない。
　どうやら、なんか、世界を救ったらしい。
　と、ミストやシールから教えられたのだが正直実感は全くない。世界などと、そもそも学院の中ですら自分の中に引きこもっていたような自分には、計り知れるものではなかった。故にそこに誇りやらなにやらは得る事は無かった。
　むしろその結果として、ラルクを殺したのがエレナにとっては問題だった。
　彼を殺した事実はエレナの中で正しくある。記憶こそ曖昧だが感触は生々しさと共にエレナは覚えていた。嘘も偽りも無く、だ。そしてその事実を酷く冷め切った視点で眺めている自分がいる。
　随分と身勝手だことに。
　後悔は無い。今、手を握る少女の熱を守れた事を後悔などする筈もない。彼女の為に人を辞め、上位者に自分の身体を変えた事すら、彼女にとって後悔足りえ

ない。苦しむことだってない。

　ただ、そんな自分が日常に戻る事には、違和感を感じずにはいられなかった。

　学院はエレナにとってそこまでいい思い出の多い場所ではない。〝暖かなもの〟を獲得できるようになったのはつい最近だ。それまではこの学院にいる事自体、苦痛でならなかったのは紛れもない事実。

　だが、それでも此処は、エレナにとっての日常そのものだ。

　そこに、人を殺し、人を辞めた自分が戻っていいのだろうか？

「……エレナ？ 平気？」

　と、エレナと同じく、しかし悪意によって人を辞めさせられた少女が、心配そうに見上げてくる。セフィは神殿の一件以降、その心を真っ直ぐにエレナに向けてくれるようになった。それはエレナにとって素直にうれしい。

「大丈夫よ。心配かけてごめんね」

　セフィを撫でて、エレナは微笑む。

　自分の問題で、セフィに心配をかけるなんて馬鹿馬鹿しかった。これは自分の問題なのだ。自分の中でちゃんと折り合いをつけてるべき――

「なぁああああああああああにたそがれてんのよぉおおお!!!!!!」

　なんてことを思った直後、何者かの蹴りが、エレナの後頭部を直撃した。

「ぶわばあぁあああああ!?」

「きゃぁああ?!」

　とっても乙女ではない声を上げながら、エレナは受け身を取れず頭を地面に叩きつけられ、隣のセフィは自分の恩人が地面にめり込む姿に悲鳴を上げた。何が起きたのかと混乱するエレナをよそに、

「きゃあああああ!? 何をしてるんですかリドさん!?」

「うっさいミフィール！ 帰ってきたのに顔出さないコイツが悪いのよ！」

「心配した相手への第一声がドロップキック……?!」

「うっさいヒノ！ アンタだって心配してたくせに！」

「何で私が貴族の心配なんて！」
　声が次々に
「おーおー元気だ事……俺を睨むな、ジーン」
「お前の友人なんだろ、キース」
「背後からドロップキックをかます知り合いなんて俺は知らん」
　彼女の周りに集まってきた。
「……な、なに？」
「エレナ様！ 大丈夫でしたか!?」
　と、エレナが泥まみれの顔を上げて状況を把握する前に、いつの間にか目の前に来ていたミフィールがハンカチをもってエレナの顔を拭っていく。下手すればラルクの起こした騒動よか衝撃的だったためかされるがままで、
「ちょっと、えっと、私」
「まあ、お前の冒険譚は後で聞くとしてだ」
　色々と言いたい事が言葉にならないでいると、彼女の背後であきれ顔をしていたキースが、言葉をかぶせた。彼は此方をみて笑みを浮かべ、
「まず、俺らに何かいう事は？」
　そう言われて、ようやくエレナは皆の顔を見た。
　ミフィールやリドやヒノ、キースやジーン、神殿に出る前自分に協力してくれた数少ない友人たち。彼らは皆違う表情を浮かべながら、どこか安心したようにしてエレナを見つめていた。ただ、良かったと、その瞳が語っていた。
　エレナは、だから、少しだけ、泣きそうになりながら、それを口にした。
「……ただいま」
　おかえり！　と、バラバラな五人組はこの時ばかりは声を揃えて、彼女を迎えた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　オルフェス学院学院長室
「さて、なんとか落ち着いたね」
　ミストが資料を置き息を吐き、シールとリーン、そしてその近くで椅子に座ら

ず佇むヴェインへと笑みを浮かべた。シールは身体にいくつか封印術式が刻まれた、上更に右腕は他の身体よりも青白い肌、ホムンクルスなる技術からの転用で完成した生体義手であったり、ヴェインがその片側の目に仰々しい眼帯をしていることを除けば全員が普段どおりゆったりとしていた。

　ラルクの事件が終結してから数日が経過し、様々な問題が終結した。

　正確に言えば未だ【ラグナ】が引き起こした問題は収まりきってはおらず、ラグナの本拠〝跡地〟から出てきた資料の中に、ガイディアが把握していない古代獣の封印開放が行われていたり、あるいは別の場所で非道な実験が行われているとわかり調査に向かったり、そもそもの問題であった【崩壊物】の起こした破壊痕の問題もある。

　そこにシールが破壊しつくした平原の問題や、リーンとヴェインの二人でマナを奪いつくした霊地の問題なども重なって、ここ数日この場にいる全員はそれらの問題を解決するために駆け回る羽目になった。

　それでも幾分か〝マシ〟になったのが最近だ。

　少なくとも今はこうして皆で並んで座っていられるくらいには。

「まあ疲れましたけど。マナを逃すのにも苦労しましたし」

「私は楽でしたけれど、自分の身体に取り込んだわけではないですし」

「その分俺が駆け回る羽目になったがな」

　ヴェインが目頭をもむようにしてため息をついた。

「疲れた。こちとら病み上がりだぞ」

「そもそもあなたが魔眼を奪われたりしなければこうはならなかったんですから反省してください」

「ねぎらうは愚か追撃かけるとか鬼か貴様」

「目は返して上げたじゃないですか」

「引き千切られた眼球が簡単に戻るわけあるかボケ」

　リーンとヴェイン二人で収集したマナの剣はヴェインの魔眼によって強制的に凝縮した武器である以上、ヴェインでしか解放できない。その為にヴェインはその責任を取ってずっと駆り出されていた。

　ちなみに、ヴェインの失われた瞳を隠す彼の眼帯は治癒の魔装具だ。メアリにまず眼球の状態を復元してもらい、さらに神経をつなぎ、そこをその魔装具で保

管することで治めている。
　それでも完全に治癒されることはないらしいが、本人はそこまで気にしていない。
「在れば便利ではあるが、そこまで頼り切ってもいない。それに」
「それに？」
「もう、自分から死地に飛び込む理由も無くなった」
　彼が過去に決着をつける為に戦ってきたことはこの場の全員が知っている。ラルクがその犯人であったという事も彼の口から語られた。
「これからどうするんだ？」
　シールが問うと、ヴェインは別に、肩を竦め
「ギルドの連中を放ってもおけん。今まで通りするさ」
「自分の手で復讐出来なかったのはいいのですか？」
「ズカズカと人の過去に踏み込むな鉄面皮」
「貴方がそんなもの気にする玉ではないでしょう」
　ヴェインはあからさまにげんなりした顔をしたが、リーンは気にするそぶりも無い。このやりとりも昔は見慣れたものなので、シールもミストも気にしはしないが。
「俺は過去に決着さえ付けばいい。復讐心はあるがこだわるつもりは元よりない」
「なら、これからは？」
「ギルドに尽すさ。元よりそのための過去との決着だ」
　と、それだけ言って、ヴェインは椅子から立ち上がった。
「もう行くのかい？」
「今回の霊地のマナライン修繕の資料を届けに来ただけだ。それ以上の用は無い」
　と、ミストの机にその通りの書類を置いて、そのままヴェインは部屋からでていこうとした。しかし扉に手をかけるその前に振り返り、
「……今回、仇を討ってくれたことには感謝している。シール、リーン」
「別に気にすることは無いさ」
「素直に感謝するとかキモイです」

「大概にしろ糞アマ」
　なんてやり取りを最後に残して、ヴェインは去っていた。残されたのはいつもの三人だ。
「さて、二人もお疲れ様だね。今回は僕の元身内が迷惑をかけたね」
「「全くだ」」
「そこは貴方のせいじゃないとでもいうべきじゃないかな？」
　なんてことを言いながらもミストは安堵の表情を隠さない。今回はよっぽど疲れたらしい。実際シールにとってもリーンにとっても、今回の事件は相当に疲労したし、命の危機だった。久しぶりに本気で、終わりを意識した。
　何よりもラルクと言う存在が、思った以上に大きかった。
　強大な力を持ち、それ故に道を外れた者。思うところが無いと言えば嘘になる。
「単なる善意だけであそこまで暴走してしまうものなんですかね」
「彼は良くも悪くも特別だったからね。天才で鬼才だった。感性は善人のそれなのに、能力だけがとびぬけすぎていた。だからああなってしまった」
　誰かの幸せを当たり前のように想う事が、想えたことが彼の心をとことんまで追いつめてしまった。自分が何とかしなければならない。そしてその大部分が何とかできてしまったがために。
　そういう意味では自分たちは幸運だ。シールもリーンもヴェインもエレナもミストも、各々が特別な力を保有している。保有しているが、しかし限界は見えているから、自分の領分が分かっているのだ。
「だけど彼には限界が無かった。世界は彼についていけなかったのに」
　そう言うと、ミストはやはり寂しげに顔を伏せた。
　彼の青春、とも呼べる存在がラルクなのだろう。それ故に彼の今の胸中は察せれる。だが、いつまでも引きずり続けるべき過去ではない。
「エレナとセフィ、あの二人はどうなりましたか。神殿の彼女の扱いは」
　シールが話を切り替えるようにして話題を口にした。
　ラルクの巻き起こした大問題でほぼなし崩しのような形になってしまっているが、エレナとセフィの神殿に関わる問題はいまだ解決しきってはいない。彼女らの処遇はいまだ神殿側が握っている。

だが、ミストは気楽そうに笑みを浮かべ、
「安心しなよ。こんな手紙が届いたから」
　と、ミストが一通の手紙を差し出してきた。促されるままに中を見てみると、それは神殿から送られてきたもので、その内容は、
「……エレナ、及びセフィの監視をガイディア国、ミストに一任する？」
「突っ返されたってことさ。二人とも」
「一体なぜ？」
「怖くなったんじゃないのかな。精霊っていう存在が」
　ラルクが本性を見せてから、エレナは自らを精霊に改変して、そしてセフィは己の封印を解放してラルクと戦った。その結果、被害者こそいなかったものの、神殿そのものはラルクと精霊に二人の戦いの余波を十二分に受けたらしい。
　そして、その被害を目の当たりにして、神官の上層部たちは、ビビった。今まで近しいが故に軽視してきた巫女という存在、そして精霊という存在に対して心底に震え上がった。
「だから、もう関わり合いになりたくないって、そう思ったんだろうさ」
「……まあ、わかりやすい理由ではありますね」
　自分からその災厄を招いた以上は自業自得と言えなくもないが。
　そもそものセフィの問題がかなりのグレーであったこともあって、そうそう大きなことも言えない。神殿内部に潜む悪徳は存在するものの、少なくともセフィに関してだけいえば悪行とはいいがたいのだから。
　無論、シールにとっては彼女たちは身内であり、この結果は喜ばしい。セフィの危険性には注意を払う必要性は当然ある。手紙の〝命令〟通り、注意深く彼女たちを監視し続ける事だろう。彼女たちの未来の為に。
「そうそう、その当のエレナちゃんは元気かい？」
「まあ色々と思うところはあったみたいですが……」
　と、そう言いながら、シールは窓の外を見る。
　最も高い場所にある学院長室からは学院が隅々まで見える。今は授業中で人気のないはずの中庭に、学生服を着た子供たちが集まっているのが見えた。中心にはエレナとセフィの姿もある。彼らが何を言っているのかは流石に分からなかったが、彼らは皆、ただ楽しそうに、笑っていた。だから、

「ええ、きっと、大丈夫ですよ。彼女なら」
　シールは確信をもって、そう答えた。
「なるほどね……それなら後は」
　と、そう言ってミストはシールを見つめてきた。シールとリーン、二人の処遇だ。
「と、言っても、君たちに関してはそれほど問題が起こってるわけじゃない。いや。リーンちゃんが大問題を起こしたことには代わりはないんだけどね？」
「ちゃんと返しましたよ」
「そんな自信満々に言われたら僕はどうしたらいいんだろう」
「笑えばいいんじゃないですか」
「アッハッハ」
「何を唐突に笑い出しているんですか気持ち悪い」
「君は鬼か」
　などとコントをしつつ、
「いやね。二人とも結局神様と化したラルクと戦って大暴れしたじゃない？」
「ええ、まあ。やはり問題でしたか？　　『次は彼らが脅威になるから殺せ』とか？」
　普通にあり得る話だ。元々シールもリーンも、ガイディアにとっては強大な戦力の一つではあったが、しかし同時に意思を持った人間でもある。望むままに震える兵器とは違う。その危険性は度々問題視されてきた。ミストの加護があるから今まではどうにか誤魔化してきた、が、今回の騒動次第では、という懸念もあった。
　ところが、ミストはいやいやと、手を振って
「問題と言うか、君たちがあまりにもあんまり過ぎた結果、国のお偉方が恐怖を通り越して戦慄して、もう『何かお望みのものがあれば聞いてきてください』ってさ」
　どうやら脅威を排除する、なんて段階は通り過ぎてしまったらしい。扱い的に考えれば正体不明の存在を神と崇め生贄をささげる事で静めようとした心理に近い事になっているらしい。
「それガイディア王はなんか言ってるんですか？」

「『彼らの事は信頼しているが、それとは別にこの国は愚か世界を救った英雄に何かしらの恩賞はあってしかるべきだ』って事で放置」
「成程」
　まあ結局、何時も通りって事だよ、とミストは笑い、
「で、何か欲しいものある？　多分国土の一部をよこせっつっても通ると思うけど」
「別にいりません。今までと特に変わりも無し」
　リーンは即答した。と言うか今までだってこれに近い機会はあった。が、結局は今までも特にこの教師という立場を変えた事は無かった。今回とて特に何かしら要求するつもりは彼女にはなかった。
　そう、彼女には
「あ、僕欲しいものあります」
　と、リーンの隣でシールが爽やかに挙手をした。ミストは意外そうにへえ、と笑い、リーンは極めて怪訝そうに顔をゆがめた。
「いきなりどうしました？ 頭おかしくなりました？」
「速攻で酷いですねリーン先生。まあいいですけど」
　そんな風にシールは爽やかに流すと、自然な動作で隣のリーンの手を取り、なんだか改まったように笑みを浮かべ、
「リーン」
「はい」
「結婚しよう」
　唐突なプロポーズは平和な昼空に良く響いた。

終章

最終話 明日への歩み

　アスファルト大陸の中心に位置するガイディア王国。
　首都ガイディア
　その日もいつもと変わらない穏やかな朝が訪れた。人々は寝床から身体を起こし、窓を開け外の空気を取り込んで、お日様が変わらず空に輝く姿に安堵する。そして、人々はそれぞれのその日の営みを始める為に動き出す。
　当たり前のように起こる当たり前の日常。
　人はこれを平和と呼んだ。
　かつての重く苦しい過去から抜け出し、平和を得たこの国に、その平和を心より愛する一人の男がいた。否、正確にいうならば、平和は愛しているのだが、平和の方からは比較的嫌われている一人の男が、いた。
　名はシール、オルフェス学院の教師にしてこの国の守り手、かつては平和主義者などと揶揄されもした、この物語の主人公。
　その日の朝、彼もまた他の住民たちと共に平和な朝を満喫しようとした。しようとした。しようと、もがいていた。
「なん、で、平和、な朝に、首を絞められてるんですかねぇ……」
　より正確に言えば、自分の首にしっかと極まっているチョークホールドを解こうと、もがいていた。彼は首を絞められていた。目の前の蒼髪の、折れてしまいそうなくらい細い身体と白い肌を無防備に晒す女の、その腕に、
「と、いうか起きて！　リーン起きてお願いだから！」
　シールが僅かに空いた隙間から空気を取り込んで必死に呼びかけると、しばらくののち、彼女がもぞもぞと身体を起こした。首に腕はかけたままだが、安らかな眠りを邪魔されて極めて不機嫌な彼女は、自分と同じベットで自分と同じく全

裸の、腕の中でもがく男を見つめ、首を傾げた。
「……なんでここにいるの」
「一緒に暮らすようになったからだね」
「……そうだったっけ？」
「うん、そう。ちなみに三回目その質問。そして、手を、離し、苦し、死ぬ」
　彼女が正しく寝ぼけた状態から覚醒を果たしたのは、シールがキッチリと落ちたあとの事だった。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　ラルクが起こした〈偽神事件〉はから数ヶ月が経過した。
　あれからというものの、この国も、そしてシールたちの日常も、平和な日々が続いている。【ラグナ】が今までこの国の影で行ってきた活動も一気に収束したのが大きいのだろう。残存する【ラグナ】の者達もイングラムらの指揮の下、キチンと処理されている。
　結果として、シールとリーンは元の、魔術学院の教師という、二人にとって望ましいポジションに今も落ち着いている。時折ミストからお呼びもかかるが、今までと比べるとその頻度も内容も穏便だ。
　つまり、平和だった。
「さて、今日の授業はここまで」
　初等クラスでの授業を終え、シールが宣言すると子供たちが笑い立ち上がる。外へと駆け出す者。友達の元へと向かう者、様々だが皆楽しげだ。穏やかなこの日にふさわしい笑顔だった。
　嗚呼、平和だ。
　シールは笑う。平和。平穏だった。様々な事があった。多くの死地を経験してきた。幾度となく絶望を繰り返してきた。しかしそれでも、今、こうして平和な日々を経験できる自分は幸運なのだと、そう思う。
「シール先生」
「おや、リーン先生」
　教室を出て廊下を歩いているとリーンと出くわした。

プロポーズから数か月が経過し、二人は一緒に暮らすようになった。といっ て、まだ結婚をしたわけではない。色々と整理すべき問題や、二人を危険視を通り越して恐怖している国のお偉方にいらぬ刺激を与えぬため、という事もあり、ひとまずは同居と言う形で落ち着けている。

と言うわけで、ひとまず数か月前の【偽神事件】の折、そこそこの金をもらい、学院に近い場所に家を設け二人でそこで暮らしている。ミストからは「もっとお金をせびってそのまま自堕落に遊んで暮らしてもいいんだよ？」とは言われているが、正直遊んで暮らすイメージも湧かなかったのでそれは断った。

「まあ、生活リズムは大して変わってないですけどね」

「暮らす場所変わっただけですね」

基本的に、二人の生活基準は魔術学院であるため、生活リズムは大して変わらない。今までと何も変わらないと言えばその通りだろう。

だが、彼女と接する機会が多くなった、というのは単純に喜ばしい事でもある。彼女の態度も、まあ中々にセメントな所に変化はないが、それでも時折、柔らかな表情を見せる事が多くなった……寝相の悪さは最悪だが

「ま、ぼちぼちやっていくとしましょうか」

だけど、そんな彼女とこれから先の未来を歩むのは悪くは無い。

過去は変わらない。未来もどうなるかわからない。これから先、今の平穏がいつまでも続く保証なんて一つも無い。ラルク以上の災厄がやってこない保証もない。だが、だからこそ、彼女と共にありたいと思う。

未来の平和の確約なんていらない。

ただ、平和であれと願い、そうあろうと彼女と共に歩める道があるなら、それでいい。

「どうしたんですか？」

「これからの毎日の事を少し」

「なに意味不明な事を言ってるんですか」

「そういうところは全く変わりませんねえ、リーン先生」

なんて、いつも通りの話をした後、リーンは次の授業へと、シールは資料を集める為に、二人は別れた。互いに、こんな穏やかな日々はこれからも続くだろうという確信を得ながら。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

　宿舎、元自分の部屋へは新しく新居を構えてからも何度か足を運んでいる。
　代わりに入って来る教師もいなかったので、部屋に置いてあった資料をそのままにしていたからだ。この部屋に立ち寄る度に懐かしさを覚えるのは、長く暮らしてきた場所だからなのか、それとも、思い出の数が多いからなのか。彼自身にはわからなかった。
　だが、懐かしさを感じるというのも悪くは無い。かつて、碌でもない過去を背負ってきた彼にとって、喜びの感情と共に懐かしむという事自体が、喜ばしいものだからだ。
「……おや」
　ふと見ると、旧自室の扉が開いていた。
　そして部屋の中から覚えのある魔力を感じる。だからシールは躊躇わず、笑みを浮かべてそのまま戸を開いた。
「やあ、エレナ、どうしたんだい？」
　部屋の中には彼女がいた。金色の髪を靡かせる、美しい少女。エレナだ。神殿の件でも決着を付け、自らの力で自分と一人の少女の自由を勝ち取った彼女は、今も学院で様々な事を学んでいる最中だ。
「ちょっと時間があいたから。面白そうな本を探しに来たの」
「此処は宝部屋かなにかかい？」
「そうしたのは貴方じゃない。まるで物置みたいにして」
　エレナがくすくすと表情を綻ばせる。その仕草は少女のソレではなく、一人の女性のように見えた。この数か月で、彼女は更に成長した。ほんの少し前までは、彼女は授業をさぼってしょっちゅうこの部屋に入り浸っていたが、空き部屋となったこの部屋に、既に彼女は依存していない。
　彼女にはもう、こんな狭い部屋に閉じこもっている暇はないのだ。
　最早シールと二人きりの閉じた関係に満足した彼女はいない。それは嬉しくも

あり、少しだけ寂しくもあった。
「ああ、そうだ。シール、報告する事があったの」
「勿論、なんだい？」
「私、夢が決まったの」
　夢、将来の展望、確かに彼女からは前に、その件で話を聞いた事はあった。その時は、自分の将来がまるで見えなくて、どうしたらいいのかわからないと嘆いていたが、その夢が決まったという。
「私ね、学校を創るわ」
「学校？」
　その答えにシールは僅かに目を丸くした。流石にその答えは予想できていなかった。
「でもここと同じ、魔術学院を創るってんじゃないんだろう？」
「うん、魔術師の学院、じゃなくて、魔術の才のない子供の為の学び舎。この国じゃあ、そういうのは少ないから」
　この国において魔術と言う素養のある子供への勉学の機会は与えられているが、そうでない者達に対してはそういった機会を与えられる場所は極めて少ない。神殿の配備する教会である程度の勉学は施されるが、やはり、資金や資材の関係上、その規模は小さい。
　そういう意味では彼女の試みはこの国でも、他国でも未だ行われたことの無いものと言える。それを、彼女はやるという。自分の夢として、それを語った。
「リドに話したら面白そうだとは言ってくれたわ。協力はしてくれなさそうだったけれど、でも代わりにミフィールやヒノも賛同してくれそう。セフィも手伝うなんて言ってくれたのよ？」
「成程、キース達は？」
「彼は騎士の道を探っているみたい。ジーンと一緒に今は勉強中。でも手助けはしてくれると言ってはくれたわ。後はミスト学院長や、家に帰って父上の話なんかもちゃんと聞かなきゃね」
　これから先の未来とやるべきこと、それらを語る彼女はどこまでも輝いていて、美しかった。迷い、過ちを犯し、悔い、そしていろんな困難に立ち向かいながらも前へと歩む彼女は、まさしく平和なこの日常の象徴だ。

「どうしたの？ 変な事でもあった？」

「ああ、いやいや」

自然と顔が緩んでいたらしい。

不思議そうなエレナに手を振って、シールは咳を払い、

「君の夢は、とても難しい事だとは思うよ。例え友人たちがどれだけ協力してくれたとしても、君の家がどれだけ力を持っていたとしてもね」

だけれど

「もしも、それが成し遂げられるのだとしたら、それはとても素晴らしい事だ」

そう言うと、エレナは誇らしげに笑った。

それは気高く咲き誇る花の様な、とても、素敵な笑顔だった。

魔術学院の平和主義者・完
と、言うわけで、此処まで見てくださった皆さん
本当に、本当にありがとございました！
改まった挨拶はあとがきにて‼

あとがきらしきなにか

最終話と同時投下、お気をつけて

　と言うわけで改めまして。
　此処まで読んでくれた皆さん。
　感想をくださった皆さん。
　評価をくださった皆さん。
　ありがとうございました！
　魔術学院の平和主義者、投下を初めて気が付けば、なんとまあ三年経過しておりました此処まで随分と長く険しい道のりでしたが、ヘッロヘロになりながらも最後まで完走できたのは皆さんのおかげに他なりません。

・今作の反省

　もともと今作は「何時でも追われるサザエさんみたいな感じで……」なんて事を考えていたのですが、当たり前ですが、物語と言う者は『始まり』と『終わり』があって初めて成立するわけで……
　そんな曖昧な　『終わり』を設けた結果、物凄い大変な目に遇いました……！
　辛かった。何が辛いって、漠然とした目標すらない分、道行く先に光が無く、ただ暗闇を足元を這いつくばりながら進むという、非情にアレな有様で、そして本当の『終わり』に辿り着くときは、暗闇を進み曲がりくねった道のりの全てを回収しなければならなくなり、更なる苦労が……

書き始める前に、最低限のプロットは構成しよう（今更

　他にも〝テーマ性の欠落〟〝知識の貧困っぷり〟等々、あらゆる方面で反省すべきことが山のように出てきて、辛く思う反面、改善点が多くあるという事をありがたいとも思っております。

・今後の予定

　しばらくは悲しいくらいに乏しい自分の知識を埋める為に、インプット作業に徹しようかと。そしてその後は、ひとまず完全に停滞している【びんぼー錬金術師】のプロットからの再構築を始めようと思います。新作に関しても色々考えているのですが、まだアイデアの段階を超えていないので、やはり、じっくりとプロットづくりをしていこうかと。

・最後に

　まあそんな感じで、暫くは距離を置きます。ひょっとしたら早く戻ってくるかもしれませんが、予定は予定なので分かりません。ただまた、みなさんに楽しんでもらえるような話を書ければと思っています。

　と、言うわけで、それでは皆様またいずれ。

　次に機会があれば、その時も皆さんに読んでいただければ幸いです。ではでは

（本を読み終わりました）